PL 775 S5 1936

Sasagawa, Taneo
Sharebon kusazoshi shu

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

文學博士　笹川種郎著

洒落本草雙紙集

大日本雄辯會講談社版

LIBRARY
MAY 15 1969
UNIVERSITY OF TORONTO

PL
775
S6
1936

はしがき

浮世草子に上方の優婉と奇警とがあれば、黄表紙・洒落本に江戸の輕快と洒脫とがある。輕快・洒脫は通を生命とし、穿ちを身上とすれば、流行語もあれば、場當りもある。花明柳暗の巷よりして演劇雜伎に及び、其のしなさま〴〵にして捕捉し難いものが多い。之が解釋の如きは談容易ならんやと云はねばならない。

本書收むるところの黃表紙・洒落本は其數多くはないが、成るべく代表作を取り、黃表紙は原本其まゝとして一字を苟くもせず、洒落本は原本に依りて嚴密に校訂し、出版部の方の少からざる援助を得て、出來るだけ精細に註釋を加へた。然し間々不明の點あるものは獨斷を避けて、江湖博雅の士の是正を待つ。

昭和十一年冬

評釋者識

洒落本草雙紙集

目次

黄表紙

概説……三

解題……一九

金々先生榮花夢……三七

夫ハ楠木是ハ嘘木 無益委記……四九

長生見度記……六五

右通慥而嘘多雁取帳……八一

御手料理御知而已大悲千祿本……九九

順廻能名題家莫切自根金生木……一〇五

江戸生艶氣樺燒……一二一

文武二道万石通……一三七

〔參考〕鸚鵡返文武二道……一五三

孔子縞于時藍染……一五五

大極上請合賣心學早染艸……一七一

卽席耳學問……一八七

榮花夢後日話金々先生造化夢……二〇七

又焼直鉢冠姫（またやきなほすはちかつぎひめ）稗史億說年代記（くさざうしこじつけねんだいき）……二三三

合巻本

概說……二四三
解題……二四四
偐紫田舎源氏（にせむらさきゐなかげんじ）……二四七

洒落本

概說……四二一
解題……四二七

坐遊廓……四四一
遊子方言……四五九
辰巳之園……四八三
南閨雜話……五〇九
大抵御覧……五三三
通言總籬……五五一
［參考］傾城䚡……五八三
古契三娼……五八五
手段詰物娼妓絹籭……六一三
青樓昔の世界錦之裏……六三七

辰巳婦言……六五九
〔参考〕小紋雅話……六九七
〔参考〕異素六帖……六九八
〔参考〕客衆肝照子……六九九

人情本

概説……七〇三
解題……七〇六
小さん金五郎　假名文章娘節用……七〇七

題簽　安田靫彦
装幀　小村雪岱

黄表紙

黄表紙概説

一

赤本に源を發して、黒本となり、青本（黄表紙）となり、次第に卷數を增して、遂に合卷物となつたものを總括して草雙紙と云ふ。『近世物之本江戸作者部類』に「この冊子は表紙に至るまで薄様の返魂紙にして、惡墨のにほひある故に、臭草紙の名を負はしたり」とあるが、草雙紙のくさは臭ではなくして、輕少の意味で、輕い草紙と云ふ義に外ならない。

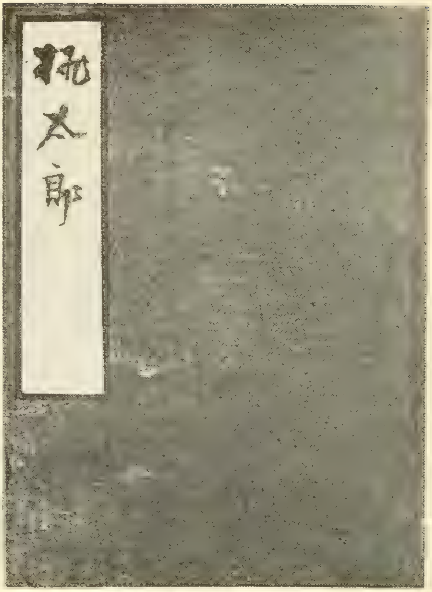
赤本と云ひ、黒本、青本と云ふのは、表紙の色から名を負うたもので、繪本に行成表紙があるが如く、表紙から名を負ふものが、當時には相當にあつたのである。赤本は古くは延寶の頃から初めて、享保より寶暦頃まで頻りに刊行せられ、猶後年にまで及んでゐる。上方にては天和、貞享、元祿の間に井原西鶴が浮世草子を著作し、都の錦、錦文流、西澤一風、北條團水、青木鷺水、林文會堂、月尋堂が相ついで此種の作に筆を染め、江島屋其磧、八文字舍自笑がいはゆる八文字屋本を出して、文運甚だ隆盛であつたのに、江戸は猶搖籃時代で、八文字屋本の盛んであつた頃に、僅に赤本を出す體たらくであつた。赤本は子供のおもちや繪本で、繪を主にして、文章は之を說明した、極めて簡單なものに過ぎなかつた。其の說明も畫家自ら書いたもので、文章としては何等の取得がない。畫家としては、近藤清春、鳥居清滿、羽川珍重、奥村政信、西村重長、鳥居清信、山本重信などの名が見えてゐる。半紙半截本のものと、猶一層小形のものと、豆本との三種類あるが、小本豆本の方が半紙半截本よりも古いらしい。小本には延寶板の『大福長者富貴物語』があり、畫は菱川師宣の筆に成つてゐるが『花咲爺』と同じものである。豆本の『桃太郎』は、一寸七分に一寸二分の小さな本で、近藤清春の畫、享保八年正月の出版、大傳馬町三丁目丸屋九左衞門の發行に

かゝる。同じ豆本の『おぐりの判官』『四天王の始』など、いづれも享保九年正月の版で、書肆は山本九左衛門とあるが、山本はも異の姓である。此等の赤本は多くお伽噺や物盡しの類で、『桃太郎』『舌きれ雀』『枯木に花咲せ親仁』『猿蟹合戰』『文福茶釜』『鼠の花見』『日下開山名人そろへ』『日本馬揃』『船づくし』の如きものであるが『初春のいわひ』『五百八十七曲』『俳諧一字題地口』のやうな變り種もある。一冊の紙數は五枚であるが、間々二冊本三冊本もないではない。延享、寶暦の頃からして、赤本は進んで黒本となつた。然し青本と云ひ、黒本と云ひ、唯表紙の色を異にするのみで、其初に於ては内容を異にしない。青本にて出版したものを黒本にて出すが如く、兩者は共通してゐた。唯赤本と異つて、進歩したところは、文と繪と相待らて一篇を構成したのにある。作者としては丈阿、和祥、富川吟雪、山本義信、米山鼎我、鳥居清滿、睦酒亭老人などの名が見えてゐて、作者又畫者を兼ねてゐたものが多い。『今昔浦島咄』『山入桃太郎』『雪中竹の子』『獅子大王』『王子長者』『大野長者』『金の長者』『鼠の縁組』『堅田の龜』『秀郷龍宮廻』『山姥』『狐と猿と間違噺』のやうなお伽噺もあれば『化物とんだ茶釜』『化物一家琵女』『化物三目大ほうい』『妖怪雪濃段』『化物車引』の如き怪談物、『殺生石水晶物語』『雨請小町名歌榮』『傾城嵯峨物語』『中將姫』『小夜中山』『佐用姫望夫石』『源氏重代友切丸』『坂田金平』『臼井貞光』『鎌田又八』の如き傳說物、『妻戀稻荷由來』『大磯地藏咄』『義興矢口渡』の如き緣起物、『武田信玄初軍』『增補甲陽軍』『名將智勇鉾』『百合若軍記』の如き軍記物、『實盛一代記』『義經一代記』『景淸一代記』『鎌倉三代記』『大塔宮物語』『繪本太平記』『通俗三國志』の如き歷史物、『仇敵打出小槌』『敵討垣衣摺』『敵討美女窟』の如き敵討物、『島原傾城枕軍談』『男色鑑』『於萬紅』『男色太平記』『執着胸緋櫻』の如き艷物などがあつて、其の範圍は相當に廣い。

二

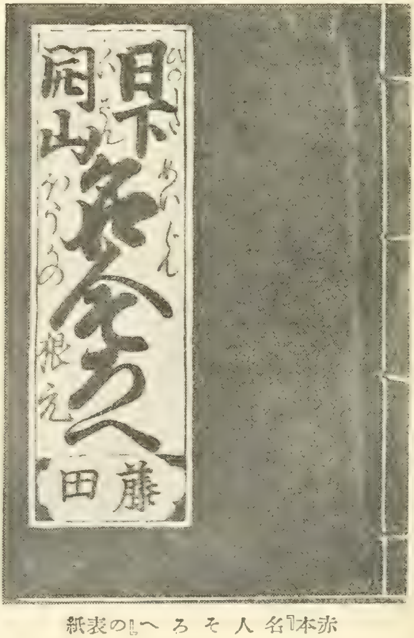
青本と黒本とは表紙の色を異にするだけで、別種のものではない。どちらが先へ出たものかも確に分らない。青本で出したものを再版する時に黒本にしたと說く人もあるが、これも當にならない。黒本にて出したものを更に青本にし、青本にて出したも

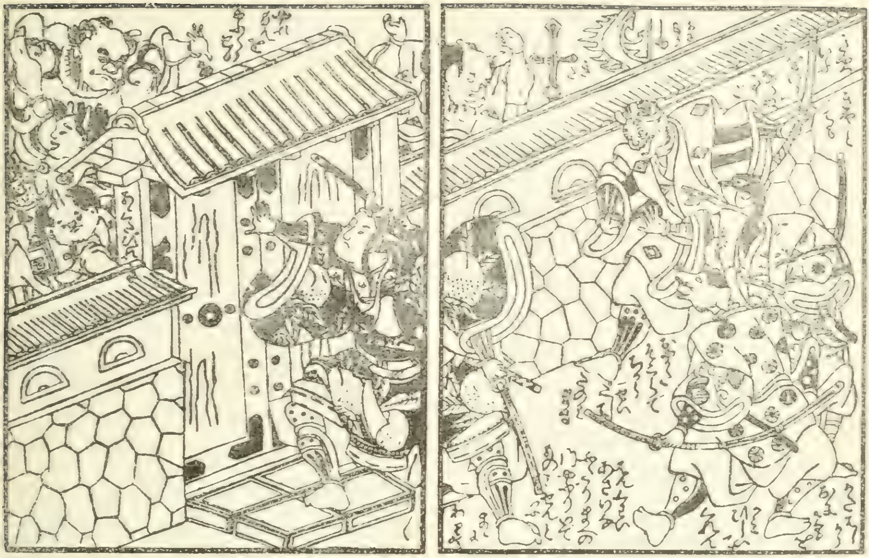
黒本「狐と猿と間違噺」の表紙



赤本「桃　太　郎」の表紙

黒本「丹　波　爺　打　栗」の表紙


赤本「名　人　そ　ろ　へ」の表紙



赤本『桃太郎』の挿繪

黒本『狐と猿と間違噺』の挿繪

のを黒本にて出したものもある。黒本の起原も青本の起原も、甚だ朧氣で、明確な證據とてはない。此の青本を一名黄表紙と稱するのは、其の初めの色は青勝ちであつたが、後に青の色が減じて黄が勝つて來たからであらう。要するに子供本位の赤本が次第に大人向きになり、黒本若しくは青本になつて來たのである。此等赤本、黒本、青本よりして冊數の多くなつた合卷物に至つたのである。

青本即ち黄表紙は安永四年、戀川春町が『金々先生榮花夢』を著して、初めて其の面目を一新して、文學的作品になつたのであるが、此作とて、實は大したものではなく、李泌の『枕中記』にある邯鄲夢を當世風に書きなしたと云ふに過ぎない。邯鄲夢は謠曲に『邯鄲』あり、淨瑠璃にも種々用ひられたもので、珍らしいものでもないが、此趣向を燒直した『榮花夢』が黄表紙の一紀元を劃したと云はれるほどに、江戸の文學は幼稚であつたのである。式亭三馬は其の『稗史億說年代記』に於て黄表紙の二十三部の名を擧げてゐるが『金々先生榮花夢』を其の首めに置いてゐる。二十三部の數は御伽草紙二十三部に倣つたもので、此の以外に名作のないではなく、山東京傳の作は一つも其の中に加へてゐない。又三馬の二十三部は作者の名も誤つたものがあるから、之を訂正して、此に其の名を擧げて置く。

金々先生榮花夢　春町（安永四年板）
高慢齋行脚日記　同上（同五年）
桃太郎後日噺　喜三二（同六年）
鼻峰高慢男　同上（同上）
親敵打腹鼓　同上（同上）
三升增鱗祖　春町（同上）
三幅對紫曾我　同上（同七年）
夫ハ楠木是ハ嘘木無益委記　春町（安永八年）
虛言八百萬八傳　四方屋本太郎（同九年）
鐘入七人化粧　喜三二（同上）
大違寶船　芝全交（天明元年）
長生見度記　喜三二（同三年）
嘘多雁取帳　馬乎人（同上）
從夫以來記　竹杖爲輕（同四年）

大悲千祿本　全交（天明五年）
莫切自根金生木　唐來三和（同　上）
悦贔負蝦夷押領　春町（同八年）
文武二道萬石通　喜三二（同　上）
鸚鵡返文武二道　春町（寛政元年）
拜壽仁王參　全交（寛政元年）
女郎誠心玉子の角文字　同　上（同二年）
鼻下長物語　同　上（同四年）
十四傾城腹の内　同　上（同五年）

黄表紙は片々たる小冊子で、一冊五枚のものが、一冊、二冊若しくは三冊で一篇を構成してゐる。繪と文章と相待つて、そこに小話を作つてゐるが、江戸人でなくしては出來ない洒落があり、通があり、穿ちがあつた。其の初は人生の機微を穿つを主としてゐたが、やがて時勢の諷刺となり、或は當時の流行を主題とし、既にして教訓を寓することゝなり、遂には敵討物といふたわいもないものゝ流行を來すに至つた。

江戸人の特性は深刻でなく、好んで輕い諧謔と機智とを以て人生或は社會をひやかすところにあつた。俳も狂歌や落首など見えるものゝと同じ淺い諷意を弄するところにあつた。黄表紙は最も善く之を現はしてゐる。諷刺にしても、頗る罪のない輕口のものであつた。

黄表紙の流行は、天明元年、四方山人大田南畝が其の評判記として『菊壽草』を著はし、其の翌年には『岡目八目』を作つたのを見ても知るべきである。

名作二十三部の作著として、最も其の多くを著作したものは、春町七部、喜三二六部、全交六部、竹杖爲輕、四方屋本太郎、唐來三和、馬平人各〻一部づつである。戀川春町は倉橋氏、名は格、通稱は壽平、別に壽山人、春町坊と號し、狂名は酒上不埒。松平安房守の家臣にして、小石川春日町に住したので、略して戀川春町と號した。もとは、こひしかははるまちと呼んだのであらうが、後には人の稱ふるまゝに、こひかははるまちと云ふやうになつたと思はれる。鳥山石燕に從ひて畫を學び、後には

勝川春章の門に入つたから、其の作は多く白畫である。『鸚鵡返文武二道』の作にて、時勢を諷刺したがために、主家の壓迫を受けたのみならず、一身にも累を及ぼさんとしたが、偶々寛政元年七月七日を以て歿した、享年四十六。四谷新宿淨覺寺に葬り、法謚を寂靜院廓譽湛水居士と云つた。「生涯苦樂、四十六年、即今脫却、浩然歸レ天」とは其の辭世の偈である。一說には自殺したとも云はれてゐる。或は眞實であらう。喜三二は朋誠堂と號し、平澤氏、名は常富、通稱は平格又は平角、後に平荷と改めた。龜山人、又は齡山人と號し、狂名は手柄岡持、俳名は月成、狂詩名は韓長齡、天壽、道蛇樓麻阿、虎耳窟等の別號がある。享保二十年に生れ、秋田侯の留守居をつとめ、戲作を好みて、喜三二を作名とする。天明八年、『文武二道萬石通』を著して、時勢を諷刺したので、主家より壓迫を受け、遂に筆を青本に絕ち、號を其門人芍藥亭に讓つた。二世喜三二は、菅原氏、通稱本阿彌次郎右衞門、潛亭と號す。下谷三橋に住したので、三橋山人又は三橋亭と號し、喜三二の門に入りて蓬萊山人と號し、狂名を芍藥亭長根と稱し、狂歌の判者であつた。又喜三二の別の狂名淺黃裏成を讓られ、花咲乙女、猿猴坊月成等の別號があつた。芝全交は山本氏、通稱藤十郎、交遊と號す。芝神谷町に住し、大藏流の狂言師で、赤羽の觀世座に出勤した。作名を芝全交、又は司馬全交と號した。

四方屋本太郎は狂歌を以て名の高い大田南畝即ち蜀山人の假號。竹杖爲軽は、中原中良のことで、森羅亭萬象、萬象亭、月池老人、築地善好等の別號があり、馬平人は畫家喜多川歌麿のことである。唐來三和は、加藤氏、通稱を和泉屋源藏、伊豆亭と號し、狂名を質草少々と云ひ、本所松井町の娼家に入夫して、其の業を營んだ。

三

戀川春町の『夫ハ楠木是ハ嘘木 無益委記』（安永八年板）は、楠木正成が天王寺にて閱したと云はれる聖德太子の未來記なるものが、『太平記』に載つてゐるが、それに名を假りて、世事の變遷を滑稽的に豫言したものであるが、其のうちには的中したものがな

かくにある

四つ手車出来る、急ぐ時油代をはづむ。

とあるは、後世の人力車を豫言したものであるが、自轉車や、オートバイ、自動車までにはまだ想像がつかない。

坊主天下晴れて女郎を買ひ云々。

女犯の罪は罪でなくなつて、坊さんも斬髪頭で公然狭斜の巷に出入することになつたのは、もう久しい前からのことである。

猫も杓子も藝者となる。

「杓子さんは一本足で、さぞちよつ〳〵ところびなさらうの。」

子守の子のやうなのも、おさんどんのやうなのも藝者となつて、おもちや箱をひつくり返したやうな手合の多い世の中、不見轉繁昌なのも無理がない。之に倣つて作られたものに喜三二の『長生見度記』（天明三年板）二冊がある。其の序文に云ふ、

友人戀川春町が作りし『楠無益委記』を讀みつゝ、とろ〳〵とまどろみし夢のうちに、彼人皇百萬三千三百三十三代にあたりて、いやましに治れる御代のさまを見侍りしが、『無益委記』の趣に少しも違ふ事なし。而してかの巻に漏れたる事をひろひあげて、又小冊とし、あはれ長生して、かゝる事をまさに見たしと思ふより、とりあへず『長生見度記』と題して。

とあるが如く、『無益委記』の補闕を以て自ら任じてゐるが、『無益委記』に比すると、又其の穿ちが細かになつてゐる。

角力があると、とかく雨が降る故、雨の漏らぬやうに芝居を立て、雨天三十日興行する。「角力は入梅の内の事さ。」「今度の地藏が猿は投小さな男だが轉ばぬ奴だ。」

回向院時代の角力場は鐵傘下の國技館となつたのを、まさしく豫言してゐるではないか。

幟を座敷へ飾る。

「柏餅でも黒酒でも上りませ。」

「妹めがいぢりたがるには困ります。」

五月幟は外飾であつたが、幕末に近づいて、内飾となつた。此一節は之を豫言して、美事的中してゐる。しかし五月幟は外飾に復舊すべきものだと思ふ。

高輪の海手、新地出來て、高輪の茶屋兩側となり、向ふが閊へて暑がる。

芝浦から品川へかけての埋立は竣成して、如何にも作者が豫言した如くになつてしまつた。

此二書に倣つて作られたものに、竹杖爲輕の『從夫以來記』三冊（天明四年板）がある。

葛西へ肥取の迎に舟で行く。冬大根何百本、其外取賃何程と運上を出して頼まねば、むさい物をいやで御坐るとて、中々取らず。所々の大屋は肥取にとられる運上に大難義なり。さればとて取らずに置けば、店子がやかましくいふ。是につけても昔はどうした理屈で、肥取から運上を出した事やら、ほんに面倒くさい目にあふと、大屋の述懐絶間なし。

當時の人は之を見て、こんなことがあらうか、馬鹿々々しいと一笑したであらうが、事實は現時の狀態で、其の先見の明に敬服せざるを得ない。

四

白河侯松平定信がいはゆる寛政の改革をすると、之を諷刺する黄表紙が頻々として世に出た。唐來三和の『天下一面鏡梅鉢』喜三二の『文武二道萬石通』、春町の『鸚鵡返文武二道』、山東京傳の『孔子縞于時藍染』『玉磨青砥錢』等が著作せられ、『文武二道萬石通』は市中の評判がすばらしく、其の發行部數は前古無比と稱せられた。『近世物之本江戸作者部類』に「古今未曾有の大流行にて、早春より袋入にして市中を賣りあるきたり。赤本の作ありて以來かばかり行はれしもの前代未聞の事なりといふ」とあるほどであつた。しかし『鸚鵡返文武二道』も之に讓らず、同じ『作者部類』に、「これも亦大半紙摺りの袋入りにして、二

三月頃まで市中を賣りあるきたり。流行此前後二編に勝るものなし。當時世の風聞に、右の草紙の事に就いて、白河侯へ召されしに、春町病臥にて辭して參らず、此年寛政元年己酉七月七日歿」と見えてゐる。喜三二も亦筆禍に罹つたことは前に述べた通りである。寛政二年十一月、幕府は令を發して、戲作に對する出版法を布達した。

三馬の名作二十三部中には京傳の作を一部も載せてゐないが、京傳の作中には名作多く、寧ろ他の作家を凌駕してゐる。天明二年、『手前勝手御存商賣物』三冊を出版したが、青本の爲めに氣焔を揚げた作である。趣向は八文字屋本と行成表紙本とが青本の流行に壓倒されたので、赤本、黑本を招き、之を教唆して、青本を傷けんとするといふに始まつてゐる。

青本は貴賤の別ちなく、人の目を喜ばす、世辭に賢く、いきを專らとして當世の穴を搜し、俳氣も少しあつて、毛筋程も拔目はなく、雨中の徒然には豆煎と肩を並べ、女中様方、御子様方の御贔負強く、新板の工夫に新規を凝らす、然れども其の身驕る心なく、矢張すき返しの紙にて月並會を催ほし、洒落本袋ざし一枚摺、其外の當世本を集め、趣向の相談をする。

此にある行成表紙本とは、さや形、萬字つなぎ、毘沙門龜甲などの、いはゆる行成表紙をつけたもので、金平本又は御伽草子などに關する繪解本を云ふのである。

赤本黑本などの悪だくみは遂に露顯することゝなる。

赤本黑本が此の度の惡巧は、一體ざつなもの故、本の仕立が悪いから根性に泌みがあると、定木にかけて裁ち直し、千枚どほしで打ち拔いて、こんぢやうを綴ぢ直される忙しさ、暮の仕込みの如くなり。さて此度の騷動の起りは、八文字のよみ本、行成表紙の下り繪本が陰謀といふ事現はれ、こんな古風なものは引つほどいて腰張にされ、下り繪本みんな顏へ無駄書きをされ、綴目を鼠に食ひ切られ、屏風の下張になる。

黑本赤本は根性を綴ぢ直されてより元の如く繁昌する。

赤はぢを書くといふこと、此赤本が始まりなり。

是れより草紙問屋の商賣物伸睦しく、行末萬々年も繁昌と榮え、切つたりはつたりの草双紙のすたりしも、實に太平の御代の有難さと思ふうち、表を商人が一枚繪、草双紙、寶船、道中双六と呼んで通る、聲に驚ろき、起き上らんとする所へ、鶴屋喜左衛門御慶申し入れます。

鶴屋喜左衛門とは、通油町の板元で、此書の出版書肆である。

此作大に當り、四方山人は其の『岡目八目』に於て、之を青本總巻軸に選び、

畫なら作なら、お繪にかなぼん、わるい地口で申すもおそれありがてへ、手前勝手の草紙の評判百二十八册の惣卷軸、外題に見へしからくりの夜分の景色に引替へて、實に青陽の春の青本、先の方はおかはり／＼

と評して、之を讃めてゐる。これよりして、京傳の北尾政演といふ作名は書名とともに高くなつた。斯くて天明五年、京傳は『江戸生艶氣樺燒』三册を出して、非常の大當りを取つた。

五

官憲の取締がやかましくなると、黄表紙も新しい領土を開拓して、別の方面に向かはなければならなかつた。此に早くも着眼したのが、京傳である。寛政二年、京傳は『心學早染艸』三册を著した。心學は江戸時代に於ける民衆道德の啓發者で、維持者であつた。京傳は之を黄表紙に取扱つて、分り易くしたのである。心學は石田梅巖を初めとして、柴田鳩翁、松翁等有名な先生があつたが、京傳は中澤道二翁を捉らへて、此作中に道理先生として出してゐる。

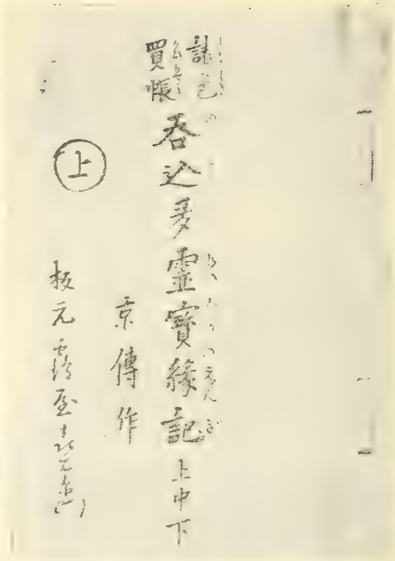
此書は善玉惡玉を以て人間の正邪是非を象徴し、とゞ善玉の勝に歸してゐるが、繪と文と相待ちて趣向が面白かつたがために、非常の喝采を博し、翌三年には『人間一生胸算用』同五年には『堪忍袋緒〆善玉』を出し、猶此趣向を應用して種々の作をなしてゐる。寛政五年板の『四人詰南片傀儡』三册にては、善玉を佛、惡玉を鬼としてゐるが如きである。寛政八年には曲亭馬琴が『心學早染艸』の四篇として、『四遍摺心學草紙』二册を出してゐる。

京傳は心學の流行よおいして思ひついて『心學早染艸』を出したのであるが、黄表紙の作者は當時の流行物を當込んで趣向を凝らしたものが少くない。碑文谷の仁王尊が流行り出すと、芝全交は『拜壽仁王參』二冊（寛政元年板）を出し、京傳は『碑文谷利生四竹節』二冊（同上）を著はし、深川永代寺の境内に壬生狂言が興行されると、大榮山人(曲亭馬琴)は『廿日餘四十兩 盡用而二分狂言』二冊（寛政三年板）を作り、櫻川慈悲成は『壬生踊戯作面目』二冊（寛政三年板）を著し、芝全交は『壬生狂言 唐本寢言 直讀見臺荻』三冊(同上)を出し、内田新好は『壬生里 華色 名代の振袖』二冊（同上）を述作した。獨り此等社寺の流行物のみに止らず、或は名代の輕業、流行の女師匠などをも題材として輕妙な滑稽を弄してゐる。此點になると、錦繪が看板娘や人氣ある水茶屋女を其の畫題としたのと能く似てゐる。

京傳は黄表紙作家として、天明寛政の交に多くの作を出してゐる。天明八年には九部、寛政元年には十二部、同二年には十部、同三年には七部、同四年には六部、同五年には十一部、同六年には七部を刊行した。寛政元年は彼れ方に二十九歳であつた。享和二年、彼が四十二歳の折、春夏秋冬に準じて、(春)『通氣智之錢光記』三冊、(夏)『呑込多霊寶縁記』三冊、(秋)『賢愚湊錢湯新話』三冊、(冬)『枯木迺花大悲利益』三冊を同時に出版した。此等の書には二種ありて、一は上紙摺にて、厚表紙を附して合巻となし、他の一種は並摺にて、黄表紙の表紙に本年の干支に因みて、親狗と子狗とを薄墨摺にし、「小札便用」の貼符を現はしてゐる。

六

天明三年、岸田杜芳は『草雙紙年代記』を著したが、享和二年、式亭三馬は之に倣つて、『又焼直 鉢冠姫 稗史億説年代記』三冊を自畫自作した。三馬は烏亭焉馬の門人であつたが、最も芝全交を慕ひ、寛政六年、彼が二十歳の折に『天道浮世出星操』及『人間一心覗替繰』を著したが、寛政十一年『夫楠木 是嘘氣 俠太平記向鉢巻』三冊を著し、前年鳶人足の間に喧嘩のあつたのを題材としたが、よ

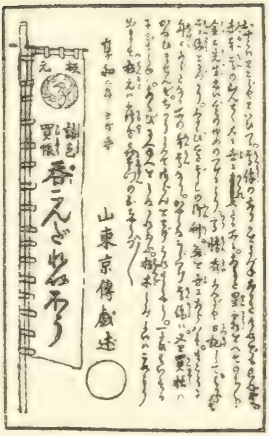


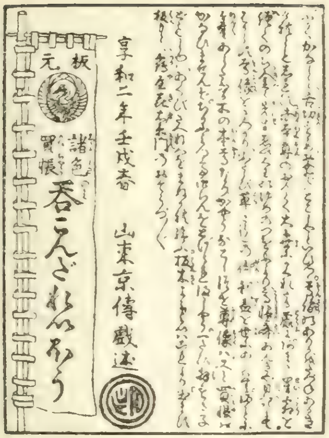
『呑込多靈寶縁記』稿本表紙

同上刊本表紙

組の鳶人足之を卿み、その年正月五日、三馬及書肆西村新六の家を破壊したので公事沙汰となり、鳶人足數名は獄に投ぜられ、新六は過料、三馬は手鎖五十日の刑に處せられた。此こと評判になりて、三馬の名が廣く知らるゝに至つた。『稗史億說年代記』は、一々諸家の畫風や文章の特徴を摸擬したもので、中々に念入りのものである。それにも似ず、名作二十三部の作者を二三誤つてゐるなどは、穿鑿が足らなさ過ぎる。地本問屋目印、戯作者名寄、畫家の名盡、草双紙體裁の變遷、名作靑本略記卽ち名作二十三部を擧げてゐる。作者の名寄には、和祥、丈阿、喜三二、萬象亭、市場通笑、三橋喜三二、蓬萊山人龜遊、文子、戀川春町、唐來三和、伊庭可笑、錄山人信普、芝全交、田中益信、通交、岸田杜芳、七珍萬寶、芝甘交、拾遺として戀川好町、龜遊女、若松萬載門、畑芋輔、千差萬別、壁前亭九年坊、竹塚翁東子、南陀伽紫蘭の名を擧げ、「當時出作する御存じの作者は新古によらず、こゝに略す」とあれば、京傳の名が見えないのも亦當然である。畫家には鳥居清經、鳥居清長、勝川春章、勝川春潮、勝川春好、勝川春常、勝川春旭、勝川春童、戀川春町、北尾政演、磯田湖龍齋、鳥山豐章(喜多川歌麿)、北尾重政、勝春朗(葛飾北齋)、歌川豐國、細田榮之、喜多川行麿等の名が見え、

呑込多靈寶緣記





（右側）稿本の一部
（左側）刊本の一部

板元には鶴屋喜右衛門、鱗形屋孫兵衛、伊勢屋次介、山本九右衛門、丸屋小兵衛、芳屋太兵衛、岩戸屋源八、奥村源六、蔦屋本店、蔦屋重三郎、村田屋治郎兵衛、松村彌兵衛、西村與八、伊勢幸、江崎屋、榎本吉兵衛、西宮新六、秩父屋、大和田安兵衛、和泉屋市兵衛、山口屋忠介、寶屋大吉などがあつた。

黄表紙の價は、其初め、新板紙數五枚にて八文、二冊物十六文、三冊物二十四文の割合で、再板物は一冊七文、寶暦明和の頃は新板物一冊六文の割合であつたといふ。其後袋入物が行はれ、天明の頃は袋入にて一部五十文乃至六十四文といふことであるから、大分騰貴したのである。

黄表紙の趣向も再變し三變して、時々流行を異にした。『心學早染艸』が世評を博してから、黄表紙も理窟に陥つて、教訓めくやうになつたので、久しからぬうちに飽きられること〻なつた。然るに寛政七年に至り、南仙笑楚滿人が『敵討義女の英』三冊を著はして、非常の大當りを取り、敵討は此に中興せられ、教訓物と化物話との平凡な黄表紙界に波瀾を起し、寛政九年には『敵討姥捨山』三冊、同十年には『敵討柳下貞婦』三冊、同十一年には『敵討沖津白浪』三冊、同十二年には『娘敵討扇銀面』三冊、享和元年には『敵討梅の接』三冊、同二年には『虚空太郎武者修業咄』三冊、『虚空太郎舎弟之讐討』三冊、『敵討松寄生』六冊を出し、遂に享和三年以後には敵討物の全盛時代を現出した。楚滿人は通稱楠彦太郎、志符房と號し、別號は柚人、又待名齋今也と稱し、芝宇田川町に住して、手跡指南を業としてゐた。又書肆とか板木師とか醫師とかいろ〳〵の説があつて詳かでない。寛延二年の生れで、專ら敵討物の著作を以て得意としてゐた。敵討物の流行は、遂に曲亭馬琴をして『敵討二人長兵衛』三冊の卷末に、「金々先生榮花夢より草双紙に滑稽を盡したること二十餘年、中頃一變して不洒落となり、今又一變してまじめとなる、黒繻子の帶がすたると思へば又流行り、長羽織が流行と思へば又すたる、草双紙の流行も又其如し、是から後は大昔の金時化物にならふも知れぬ、御油斷なさるな」と云はしむるに至つた。馬琴の此作は文化元年のことにして、此歳には京傳も『江戸沙子娘敵討』三冊を著はし、此後、楚滿人は固よりのこと、諸家競つて敵討物を述作し、式亭三馬は『親讐内助膏藥』三冊に於て敵討物に對し

て嘲罵を逞しうしたが、彼自らも、文化三年には、『敵討安達太郎山』を著はし、遂に『雷太郎强惡物語』十冊を出し、世の好評を博し、合巻物の初めとされてゐる。

然し久しからずして、敵討物も漸く飽かれて實錄物となつたが、一方には又世話物が次第に歡迎され著作されること〻なつた。三馬の『岸柳島物語』六冊、一九の『昔語玉菊草紙』五冊は實錄物の例で、柳亭種彦の『吾妻花双蝶々』十二冊、一九の『常磐松』二十四冊の如きは、世話物の例である。種彦は頻りに『正本製』なるものを著述してゐたが、文政十二年に至りて、始めて『偐紫田舍源氏』初編桐壺の巻四冊を著はし、之よりして天保十三年に至るまで十四年間の久しきに渉り、毎編四冊づつ三十八編を出し、しかも未完成に畢つた。合巻物の最長編で、艶麗なる歌川國貞の表紙畫と相待つて非常の好評を博した。しかし天保改革の餘波は此書にまで及んで絶版を命せられ、種彦も亦是歳（天保十三年）八月十九日病歿した。爲永春水の人情本も亦發賣禁止に遭ひて、作者は手鎖の刑に處せられ、原稿檢閲令も發布せられ、江戸文學に多大の打擊を與へた。斯くして江戸文學は大作名篇の出づるものなく、僅に縷々たる命脈を維持しながら、幕末の變を經て明治に及んだのである。

黄表紙解題

金々先生榮花夢

五丁二冊、戀川春町畫作。安永四年、鶴屋喜右衛門板。後に寛政六年蔦屋重三郎之を再版する。

春町の略歴は概說の中に述べて置いたから、之を略する。戀川春町は、こひかは、はるまちと訓してゐるが、其の初めはこひしかはと小石川を洒落れてつけたものであらう。然し後には人の訓讀するに任せて、自づとこひかはと呼ぶやうになつたと思はれる。

此書は盧生の邯鄲夢に依りて趣向を立てたものであるが、邯鄲夢は唐の李泌の「枕中記」が其の根本である。之に依ると、唐の開元十九年に道士呂翁なるものが、邯鄲の道中にて、或る邸舍中に榻を設け、席を作り、嚢を擔つたまゝそこに坐つてゐた。そこへ此町の若者で盧生と云ふのが短い着物で青駒に乘つて來て、これから田を耕しに行く途中、此へ立寄つて、呂翁と喋舌つてゐたが、我身の見すぼらしいのをつく〴〵見ながら出世の出來ないことを嘆息する。翁はそれほど出世をしたければ、此枕で一睡せよと、嚢の中から一つの枕を取出した。其の枕とは陶製のもので、兩端に穴がある。恰ど此時此家の主人は黄粱を煮てゐた。盧生は其の枕をして寢ると、枕の穴が次第に大きくなり明るくなつて來たので、其の中へ入り、清河の崔氏の娘と結婚した。此娘の容貌は美しく、此家は非常の財産家であつた。美しい衣服は着られる、進士には及第する。とん〱拍子に出世する。陝西から八十里の運河を開いて、頌德碑を立てられることになる。玄宗皇帝の勅を奉じ、河西隴右節度使となりて大に邊功を立てる。しかしさういつまでも善い事は出ず、讒せられて獄に投ぜられる。それでも又好運が到來して、中書令に封ぜられ、趙國公

に封ぜられ、五人の子はいづれも榮位に陞り、孫は十餘人、臺閣に列すること三十餘年、一時に輝いて、榮耀榮華を極め、多くの美人を侍らして、此世の歡樂を一人で背負つて立つたが、寄る年波で遂に病死したと思ふ間もなく、目が覺めて、これなん一場の大夢であつたが、黃粱はまだ熟して居なく、極めて短時間の夢であつた。「今のは夢でしたか、」「人生のことは皆さうぢや、」「榮枯盛衰の理、生死の情は、すつかり分りました、有難うございました」と、盧生は厚く禮拜してそこを去つた。

我邦で此說話を移したのは、『太平記』卷二十五、「黃粱夢事」で、謠曲では此の『太平記』の記事に依りて『邯鄲』が作られた。古くは『邯鄲枕』とも稱し、『二百十番謠目錄』には世阿彌の作としてゐる。後世、河東節では謠曲に依りて『邯鄲』上下を作つてゐるが、殆んど謠曲の文章そのまゝを用ひてゐる。

此書の典據は無論謠曲であつて、それを世話に碎いたところが飽くまでも江戶式である。黑本靑本のために新生面を開いたと云はれてゐるが、固より片々たるもので、之を見ても、江戶の文學が上方のそれに比して如何に幼稚であつたかが思ひやられる。唯其の現代の風俗を描き、當世を諷刺するところに、從來の黃表紙と行方が違ひ、將來の境地を拓いてゐる。

昔の姿は引かへて、今は頭も中剃を鬢のあたりまで剃り、髮の毛をば鼠の尻尾位にして本田に結ひ、着物は黑羽二重づくめ、帶は天鵞絨または博多織、風通、回々織などと出かけ、あらゆる當世の洒落を盡せば云々。

金々先生の打扮、八丈八端の羽織、縞縮緬の小袖、役者染の下着、龜屋頭巾に目ばかり出し、人目を少し忍びけり云々。

と、當世の通人、遊冶郎の風俗を寫し、又

「今度の若旦那は、とんと雷子が物草と云ふ恰好だ」

と初代嵐三五郎（京屋雷子）の物草太郎の役を當て込んでゐるなど、流石に新味がある。又所々に通言だの、洒落だのを挿んでゐる。

夫ハ楠木 是ハ嘘木 無益委記

戀川春町作。安永八年板。

名作二十三部の一。春町は安永四年『金々先生榮花夢』を著はして、黄表紙に一新紀元を劃したが、翌年は『高慢齋行脚日記』を作り、安永六年には『三升増鱗祖』を著はし、其の翌年には『三幅對紫曾我』を作り、いづれも後に名作二十三部の中に加へられたが、此年には更に趣向をかへて滑稽なる未來記と云ふ新機軸を出し、世人をしてあつと云はしめたのである。

四つ手車出來る、急ぐ時油代をはづむ。

などは、四つ手駕籠が遊廓通ひの交通機關であつた世の中では、そんなものが出來るものかと思つたであらうが、明治に入りて人力車となり、自轉車となり、自動車となつては、馬鹿々々しいほど可笑な氣がするであらう。

猫も杓子も藝者となる。

お三どんや子守のやうな藝者が出來、不見轉流行の時代となつては、概說にも述べた通り豫言がざく／＼と的中してゐる。

江戸ぶしもまだ／＼ひくしと、高くとまつて神樂さいばらをうたう。

江戸節は河東節のことであるが、享保年間に始まつた河東は、明和、安永、天明頃は其の全盛期で、十八大通の一人大和屋文魚の如きは、出入するものに必ず之を稽古させたと云ふほどであつた。此節は江戸淨瑠璃の大成者であつたが、高尚で澁いために「河東裃外記袴、半太羽織に義太股引、豐後可愛や丸裸」といはれ「河東節親類までに二段聞き」と云ふ川柳まであるやうになつた。然し『遊子方言』に「唄を習ふげなが、同じ事なら、唄はよさつしやい、今やぼな侍が唄をうたう。河東節を習はしやい。おらが内には雅十はじめ、段次も筆次郎も來るもんだから、誰に習をうもすきだ」ときいた風なことを云つてるのを見ても、安永頃は河東が流行してゐた。いやに澁がつた當時の風俗を冷嘲して、「神樂催馬樂を歌ふ」と其の上を行つたのである。然

し此豫言は反對の結果を現はして、豐後節等の全盛を來し、河東節の衰微を將來したのである。

此書一たび出でて、之に倣ふもの多く、喜三二の「長生見度記」となり、竹杖爲輕の「從夫以來記」となりて、此に三未來記が出來上つたのである。

長生見度記

五丁三冊、朋誠堂喜三二作、春町畫、天明三年板。

戀川春町が作つた、「無益委記」（三冊）の趣向を借りて、滑稽的に書いた豫言記で、此書が更に豫言を細かく穿つたものとしてゐることは、概說に述べた通りである。角力場、端午の節句、高輪の新地などの豫言が美事的中してゐるのは、作者も氣がつくまい。然し萩寺だの、芭蕉塚だの、陳皮買だのと、穿ちは細かくなつて、遂には正月の三つある歳だの、彼岸の話だのに至つては、大分こじつけに墮してゐる。「從夫以來記」になると、猶一層穿ちの纖細なのが目につく。

右通慥而　啌多雁取帳

三冊、奈蒔野馬乎人作、忍岡歌鷹書、天明三年蔦屋板。

作者は通稱を鈴木庄之助と云ひ、根津に住してゐた。作名を志水燕十と云ひ、鳥山石燕の門人である。天明元年板に「化物二世物語」二冊の作がある。

遊蕩に身を持崩した質屋の番頭金十郎はお拂箱となりて主家を退轉したが、揚屋町の伊勢屋喜八の肝煎にて篭屋となり、やが

て筑紫の果の雁國に雁の捕獲に出かけて、氷に凍てついた多數の雁を腰にしたが、朝日の光にて雁の氷次第に溶けて忽ち虚空の人となり、遂に大人國へ落下し、此にて手盥の箍をかけんとして、胴箍がはじけ、跳ね飛ばされて、もとの古巣に落ち下り、淺草市にて卯妓歌菊と喜八との情けに依り多數の手桶を賣りて、末は目出度し〳〵にて畢つたといふ趣向。

新古の說話を取混ぜて、洒落のめしたところに此書の新味がある。特に「どうせう寺」の一段の如き、最も作者の働きを見せて、黄表紙の本色を善く發揮してゐる。子供だましのやうなところもあれど、肩の凝らぬところが此書の身上である。

御手料理御知而已 大悲千祿本

芝全交作。天明五年板。挿畫は北尾政演卽ち京傳が描いてゐる。五枚一冊の片々たるものであるが、黄表紙中での最も傑れたものであると云ふ批評に對しては異存がない。此書一たび世に出ると、非常の好評を博し、後には容易に手に入ることがかなはなかつた。嘉永年間に某なるものが關宿の商人某が秘藏せる由を聞いて、赴いて頻りに讓受けんとしたが、容易に肯じなかつたので、遂に自慢の煙草入につけてあつた緒締の玉と交換したと云ふ說が傳はつてゐる。尤もこれに就いては、他に同工異曲の說もあつて、どちらが眞實か分らないが、其の頃に稀覯本であつたことは確らしい。嘉永年間に蔦屋重三郎が之を再版してゐる。名作二十三部中での逸品である。

全交の略歷は概說中にも一寸述べて置いたが、全交は此作以前に、安永九年に『時花兮鵜茶曾我』三冊を著はし、天明元年には名作二十三部の一なる「大違寶船」三冊、「十七人一代記 吉原傳授仕習鑑」三冊、「富士屋淺間屋 煙競蕎麥屋槙」三冊、『當世大通佛開帳』三冊、「雀敵討 冷水灰毛猫」二冊、「通一聲女暫」三冊、「交古賢昔咄」二冊を出し、天明二年には「風雷神天狗落種」二冊、「金涌物千歳」を作り、天明三年には「通人いろは短歌」一冊、「難波の通者江戸の野暮 鶴の者の雄」二冊、「混雜武者愚者咄」三冊、「伽茶羅毛通人」三冊を公け

にし、天明四年には『親動性桃太郎』三冊、『閻羅三茶替』三冊を述作してゐる。天明五年は唐來三和の『順廻能名題家莫切自根金生木』三冊、京傳の『江戸生艶氣樺燒』の出版されて世評の高かつた歳である。

此書は謠曲「田村」から思ひついた趣向で、千手觀音が御手を損料貸にすると云ふ奇想天外より落つる結構である。薩摩守平忠度、茨木童子、人形芝居の捕手、手のない女郎、てんぽう正宗、無筆、三味線の彈き習ひ等が我勝ちにと御手を借りに來る。田村麿が「一度放せば千の矢先」と、觀音の千手を借りに來るので、今まで貸して置いた御手を回收する。女郎に貸したは手指がなくなり、握りこぶしで歸るは喧嘩の手傷、鹽屋へ貸したは鹽辛く、紺屋へ貸したは青くなり、下女に貸したは糠味噌臭し、飴屋のはねば〳〵する、飯炊のは凍瘡だらけ、搗屋に貸したはまめだらけ」。こゝで「人差指と中指が」の際どいところもあり、又篇中に神田の與吉といふ人形師の女房のことが點じてある。此女房は名うての女で、鳥居清長の畫作に『神田與吉一代咄』三冊（安永七年板）と云ふ黄表紙さへある。末段「て、て、て、手手……」と手の字を多く書いて、「ハテ此ての字がめの字だと藥師どのへ進ぜたい」と云ふ落になつてゐる。まことに氣のきいた、奇想だらけの書である。

順廻能名題家　莫切自根金生木

五枚三冊、唐來三和作。天明五年板。

名作二十三部の一で、外題の廻文なので名高い。喜多川歌麿の門人喜多川千代女が挿畫を描いてゐる。「四百四病のやまひより、金ほどつらいものはない」と、金銀が有り餘つて困つてゐるといふ、世間反對の事を可笑しく脚色したもので、其の奇想天外の趣向が當時の人々に受けたのであらう。

江戸生艶氣樺燒

山東京傳畫作、五枚三冊、天明五年、通油町蔦屋板。

百萬兩分限の一人息子艶二郎なるもの、其の容貌醜悪なるにも似ず、大の自惚屋で、世間に其の名の廣まらんことを願ひ、さまん〴〵の狂態を盡し、事毎に失敗して笑の種を蒔く。艶二郎、芝居を見て、とかく色男といふものは、ぶたれるものと思ひ、頻りにぶたれたくなり、地廻りのきおひを一人前三兩づつにて四五人頼み、仲の町の人目繁きところにてぶたれるつもりにて、茶屋の二階には藤兵衛を雇ひ置き、めりやすを唄はせ、亂れ髪を抱妓浮名に梳かせるつもりにて、月代には青黛を塗り、揚屋町の銀出しにて、さつと水髪を結ひ、髪を摑むと、すぐにばら〳〵にほどけるやうにして、ぶたれたが、ついぶち所が悪く、片息になつて髪梳きどころではなく、氣附薬よ、鍼よとの騒ぎで、やう〳〵氣がついた。此時餘程馬鹿なものだといふ浮名が少し立つたと云ふが如きは其の一例である。とゞ浮名と嘘心中を企てる。親から差向けられた僞泥棒の爲めに眞裸に追剝される。之より『仇氣屋艶二郎浮名屋うきな道行興鮫肌』と題する滑稽の道行があり、親の意見で艶二郎も心を入れ替へ、浮名と夫婦となり、「もとより身代に不足もなく、末繁昌に榮へ、しかし一生の浮名の立ち納めに、今までのことを草双紙にして、世間へ弘めたく、京傳を頼みて、世上の浮氣人を教訓しける」とありて、目出度し〳〵にて終つてゐる。これより艶二郎の名は自惚男の代名詞となり、其の畫ける鼻は京傳鼻として知られることゝなつた。艶二郎のモデルは江戸時代の賣名家として知られてゐる太申であるとも云ひ、又は朝田榮二郎とも云はれてゐる。

太申は和泉屋甚助と云ひて、三十間堀の材木屋である。或時烏石に千字文を書かせて、之に太申書と落款して、之を板行した。又俳諧の評をしたるが、五點のところへ五匁銀、十點の所へ十匁銀、十五點へは金一分、かきぬきへは小判一面を貼りつけ

て景物としたと云ふ。又淺草の觀世音境内へ、あまたの櫻を植ゑて太申櫻と唱へ、芝居へ頼みて太申櫻といふ淨瑠璃を作らせ、又道中の雲介に金を與へて、「お江戸のよ太申さまは、腰がおすき」といふ歌を唄はせた。又或醫者に傳月扶持米を送りて、門の表札に太申内何某と書き、それといへば、此醫師心得て、太申内の三字を篆書にて書き、己が名ばかり楷書にて書き出したなどの說がある。此等の逸話は手柄岡持の著せる『後はむかし物語』や曲亭馬琴の補記に載つてゐるところであるが、猶其の補記には、「此外、茅場町の藥師などへ額を奉納せし事もあり、如此虛名を求めしが、名の爲に産を破りて家頽退す、しかれども今太申を知るもの稀なり。彼龜戶の鬼の褌も、近頃修復の時、褌を虎の皮にしかえたれば、誰かは太申が寄進と知るべき。おのれ此春『敵討仇名物數奇』といふ三冊ものゝ草紙を作れり、是れひそかに太申が事を擬したり、出版の時一覽をたまへかし」とある。龜戶の鬼の褌のことは、猶同書に次の如く記してゐる。

巴やの豐里に馴染て、此形（太申染の模様）を豐里に着せ、一枚繪にも豐里が此染の小袖を着たる所をかゝせて出す。芝居にては中村傳九郞が衣裳に、是を作りて與ふ。其後龜井戶の天神に參詣せしに、翁と姥との人形のうしろに、鬼二つ立たる、其鬼の褌虎の皮の場を太申染にしたり。是も寄進なるべし。又松平西福寺の本堂のうちに、高く掛たる太鼓あり。その撥面に太申の二字を漆に書きたり。寄進せし上にて、常におのれが名を撥にて打たるゝもおかしと笑ひき。

又石川雅望の補記に、「太申、龜戶天神に連歌堂を造立し、高辻中納言額を給ふ事、『江戶砂子』に見えたり、太申著すところの『江島大草紙』『太申夜話』等の二書は刊本にして、今もたま〳〵見あたることと侍り」と見えてゐる。此太申染に就いての笑話は、同書に、「太申染もはや世上に廣まりたる頃ならんと、ゆかしくて吳服やに行き、太申染を見せよといふに、吳服やの手代知らず、いかなる形ぞと問ふ、太申かやうの形なりとて書いて見するに、手代夫は傳九郞染と申すなりといひしとなん。望の如くいかにも相應に名は弘まりたれど、馬鹿ものとて、人の物笑ひの爲に弘まりたれば、かゝるむだ書きも書く事にはなりぬ。とてもかうばしき名は取難ければ、臭き名にても、金なくては取がたき事なり」とある。

果して艶二郎のモデルが此人であつたかは明かでないが、他に朝田榮二郎といふ同じやうな賣名家の癡漢があつたので、寧ろこれなるべしとの説がある。榮二郎と艶二郎とは似てゐるから、恐らくはこれを摸本として太申などの愚癡な話を取交ぜて、作り上げたものであらう。

此書は非常の大當りであつたから、京傳は其の續編として『碑文谷利生四竹節』を著はし、又艶二郎の名を用ひて洒落本の『通言總籬』を作つた。其他、此趣向を踏襲した黄表紙も世に現はるゝほど、世間の好評を博したのであつた。

『手前勝手御存商賣物』(天明二年板)の著作にて、一躍名聲を博した山東京傳は、天明五年此の『江戸生艶氣樺燒』にて嘖々たる世評を得、これより黄表紙の述作少からずあつたが、此年には更に洒落本に筆を執り、矢つぎ早に幾多の名篇を著はし、黄表紙、洒落本界の第一人者であつたのみでなく、文壇の覇王となつた。江戸に於ける軟文學の文士は少くないが、京傳以前に京傳なく、京傳以後に京傳なく、江戸文學史は一京傳を得て、九鼎大呂よりも重かつた。

京傳、名は醒、初の名は田臧、字は酉星、本姓は灰田(拜田にも作る)氏、又岩瀬氏、俗稱は傳藏、幼名は甚太郎といふ。父は傳左衞門信明、老後に髪を剃りて椿壽齋と號す。伊勢一志の人にして、幼時父に携られて江戸に來り、深川木場なる質屋伊勢屋に奉公し、其の後主家の養子となり、大森氏を娶りて京傳等數子を生んだ。安永二年故ありて養家を離別し、京橋銀座二丁目の町役人となつた。京傳の號は京橋の傳藏と云ふ義に採つたのである。紅葉山の東にゐたと云ふところから山東又山東庵とも號し、別號甘谷、又菊亭、菊花亭、菊軒とも號したのは寛政二年二月、吉原江戸町扇屋花扇の番頭新造菊園を娶つて妻としたからで、同五年其の妻歿して後は此號を廢した。後に支那清の覺世道人の人となりを慕つて醒齋又は醒々老人と號した。京傳若き時は日々堺町に赴き、長唄の師匠松永某に就いて唄三味線を稽古したが、久しからずして之を廢め、北尾重政に從ひて浮世繪を習ひ、北尾政演と號した。畫も巧にして版畫もあり、肉筆畫もあり、『吉原傾城美人合自筆鑑』の著もあつたが、專ら著述に筆を執るやうになつて、殆んど畫筆を擲つた。

若き時より花柳の巷に出入し、藏前札差として十八大通の一人であつた大和屋文魚に從ひて、密に折花攀柳の遊興に耽り、遂に之に依りて洒落本に多くの名作を殘すに至つた。

天明七年六月、奧州白河の城主松平定信入りて幕府の老中となりて諸政を改革し、風俗を正し、出版物に對しても嚴重の制裁を加へたが、寛政二年十月二十七日、地本問屋行事共に對して左の申渡があつた。

書物之儀毎々より嚴敷申渡候處、いつとなく猥に相成候、何に不レ寄行事改候而繪本繪草紙類迄も風俗之爲に不二相成一猥り間敷事等勿論無用に候、一枚繪類は繪而已に候はゞ、大概は不レ苦、尤言葉書等有レ之候はゞ、能々是を改、如何成品は板行爲レ致申間敷候、右に付行事改を不レ用者も候はゞ、早々訴可レ申候、又改方行屆兼候儀候はゞ行事共越度可レ爲候、

右之通相心得可レ申候、尤享保年中申渡候趣も猶又書付にて可二相渡一候間此度申渡候儀等相含改可レ申候。

偶〻京傳は、『仕懸文庫』『錦之裏』『娼妓絹籭』の三冊を述作し、蔦屋は之を出版せんとしてゐた際であつたから、急に袋の上に「教訓讀本」と題して出版したが法に觸れて處刑せられた。京傳に對する『吟味始末書』は次の如くである。

吟味始末書

新両替町一丁目家主傳左衞門悴傳藏亥三十一歳

右之者儀親傳左衞門手前に罷在、浮世繪と申習し候繪を認め本屋共へ賣渡渡世仕候處、五六年以前より不レ計草双紙讀本の類作り出し、右本屋共へ相對仕、作料取て賣渡來候に付、當春も新板の品賣出可レ申と、去年春頃より追々作り置候『仕懸文庫』と申外題の讀本、其外『錦之裏』『娼妓絹籭』と申讀本、右三部の内『仕懸文庫』と申は、御當地深川遊料理茶屋にて遊興致候體を合合、並、古來より歌舞伎芝居にて狂言仕候曾我物語の趣向に、當地の風俗を古今に準へ書つゞり、『錦之裏』と申は、前々より淨瑠璃本に有之攝州神崎の夕霧と申遊女、伊左衞門と申町人と相馴染る趣並に『娼妓絹籭』の儀は是以淨瑠璃本に有レ之候大阪新町の梅川と申遊女、忠兵衞と申町人に相馴染候趣を、御當代新吉原町の體に準へ相綴り、同七月中右三部共前々取引仕候草双紙問屋通油町重三郎（蔦屋）方へ賣遣候對談にて相渡、作料筆工共紙一枚に

付代銀一匁づゝの割合にて三部代百四十六匁、金に直し金二両三分銀十一匁の内、其節爲ニ内金ー金一両銀五匁請求候處、同十月の町觸に（前にある沙汰書）申渡有レ之承知致罷在候上は、其以前重三郎方へ渡置候讀本も同人より行事改更へ可レ仕儀差圖候得共、右三部は遊女放埒の體を書綴り候本に候得ば、行事共へ改爲レ請候に不レ及、右の段早速重三郎と申談じ、賣買爲レ致間敷儀に候處、重三郎儀は前書町觸以前右本の版木出來致候に付摺取、同十二月廿日草双紙問屋行事共方へ持參り改吏候處、賣捌候ても不レ苦候旨差圖致候由にて、三部共可ニ賣出ー段共砌重三郎申聞、右に付當春巳來右本重三郎方より賣出候處、此度呼出有レ之吟味に相成候旨申候、此者去年中重三郎より受取候作料殘金の儀は、右三部共當春より重三郎方にて賣捌の賣高の多少に寄り代金増減仕、追々受取の積り兼ての對談に付、右殘金は未請取不レ申罷在候旨右の外去年より當年に至り讀本等作出賣渡候儀無レ之、畢竟餘分賣捌の儀専ー心掛候故、寓言而已を重に致書綴り候儀有レ之旨申候に付書物の類の儀前々より嚴敷申渡候趣も有レ之、殊に去年猶又町觸も有レ之候處等閑に相心得、放埒の讀本作出候て重三郎へ賣捌の段不埒の旨吟味受無ニ申譯ー誤入候間、五十日手鎖可ニ申付ー候。

亥三月　　初鹿野河内守

これより後、京傳は專ら『實語敎幼稚講釋』『三歳圖繪稚講釋』の如き兒童教訓やうな又は無邪氣な趣向の黄表紙を著作してゐたが、寛政十一年には『忠臣水滸傳』に筆を執り、これよりして讀本を述作した。享和三年の『復讐奇談安積沼』、文化元年の『優曇華物語』、同二年の『櫻姬全傳曙草紙』、同三年の『梅花氷裂』『昔語稻妻表紙』、同四年の『善知安方忠義傳』、同六年の『本朝醉菩提』、同年の『小說浮牡丹全傳』、同七年の『夕霧物語』、同十年の『雙蝶記』は其の重なる讀本である。又文化元年には『近世奇跡考』、同十二年には『骨董集』を著はし、博引旁證、微を穿ち精を究め、裨益するところが頗る多かつた。

寛政五年の春より京橋銀座一丁目の橋の方なる木戸際に借家して煙草入、煙管などを工夫して之を鬻ぎ、又讀書丸、奇應丸、小兒無病丸などの藥を製して之を賣つた。京傳は商才あり、又善く始末して金錢を蓄へた。妻菊園歿して後、同十二年新吉原玉

屋の新造玉の井を娶り、百合と云ふ。先妻菊園は實直にして善く舅姑に事へたが、百合も亦誠實にして、夫を助けて、家業を勵んだ。文化十三年九月七日急に病んで歿す、年五十六。南國回向院無緣寺に葬る。法諡を智譽京傳信士と云ふ。子なし、其の弟京山の子筆吉を二世傳藏となし、京山其の後見となつた。京傳の妻百合は京山と和せず、京山兄の遺財を横領したるが如く、これよりして百合は狂病を發し、文化十五年正月二十二日歿した。亡夫の墓に合葬した。

文武二道萬石通

三冊、朋誠堂喜三二作、喜多川行麿畫、天明八年蔦屋板。名作二十三部の內。

黄表紙も時事を諷刺するものが此頃から多く出た。戀川春町の『悅贔屓蝦夷押領』、京傳の『時代世話二挺鼓』の如きそれであつて、其の中でも此書が寛政の改革を諷刺したので、非常の好評を博し、空前の賣行であつたと云はれ、喜三二は主家より迫害を受けて筆を青本に絕つに至つた。此作の當つたのを見て、常に筆端諷刺の風霜を帶びてゐた春町は翌年『鸚鵡返文武二道』三冊を著し、石部琴好は『世直大明神金塚之由來黑白水鏡』二冊を作り、伐木丁々は『太平權現鎭坐始』三冊を出し、京傳は『孔子縞于時藍染』三冊を著し、唐來三和は『天下一面鏡梅鉢』を作り、『黑白水鏡』と『天下一面鏡梅鉢』とは絕版の厄に遭ひ、春町は主家の壓迫を蒙りて自殺の噂までも殘してゐる。

源賴朝が四相をさとる畠山重忠の計に從ひ、大小名を試みて、文武二道にふるひ分ち、ぬらくら武士を箱根七湯に入浴させ、猶大磯にて遊興させて遂に之を訓誨すると云ふ趣向であるが、隨分こじつけが多い。時事諷刺と云はんよりも、寧ろ時事を茶化したものである。

孔子縞于時藍染

三冊、山東京傳畫作。寛政元年大和田板。

金の置場に困るのは、『莫切自根金生木』の趣向であつたが、此書も亦時勢が善くなつて、人々金の處置に難儀するといふ案じである。無論寛政の改革を當込んだものであるが、別段諷刺したといふものでもないから、一向咎は受けなかつたのである。「男女交り坐せず、みづから授けを受けず」、男棧敷女棧敷と言ふが出來る。此時入込みの湯屋へは一向はいり手がなし」は一種の豫言と見れば見られよう。

此書大當りにて、翌年後篇として『藍返行義霰』三冊が出版され、竹塚東子もまた『孔子縞三篇 淺草の繪馬 磨光世中魂』三冊を同年公にしてゐる。猶京傳には同じ寛政の改革を當込んだ『太平記 吾妻鏡 玉磨青砥錢』三冊を同じ年に出版してゐる。

大極上請合賣 心學早染艸

五丁三冊。山東京傳作、北尾政美畫。寛政二年板。

時勢諷刺の黄表紙が頻出したので、幕府は之を禁止し、彈壓を加へた。黄表紙も此形勢につれて其の趣向を一變しなければならなかつた。斯くと見たる京傳は先づ其の機先を制して、當時日本橋茅場町に講筵を開いて、民衆道德を訓話してゐた心學の大家で、『道二翁道話』の著を以て知られてゐた中澤道二翁を假りて、此著を公けにした。書中にある道理先生とは實に此翁の俤である。

繪双紙は理窟臭きを嫌ふといへども、今その理窟臭きをもて、一と趣向となし、三冊に述べて幼童に授く。もし其理を得ることあらば、天

竺の親分も方便を實にして退き、魯國の伯父も天命を袖にして去るべし、然らば我國の姉子なんども、清く淨とし給はんか。

と、序文にあるが如く、神儒佛の道を平易に分り易く說いたのである。

人間に魂といふものあり、如何なるものぞといふに、男の魂は劍なるべし、女の魂は鏡に極りたり。又芝居の魂は鋼に赤き紙を張るものなりと。そんな魂は皆脇へ退けて置くがよし。劍と鏡なりといふは皆嘘なり。又年代記の端を見るに、魂を知る歌とて、「木丸からに火三つの山に土一つ、七つは金と五水りやうあれ」とあれども、これはこじつけなり。意より外はなきものなり。これを生ける時は精氣と云ひ、死す時は魂魄と云ふ。又心神とも云うて人間の大切なるはこれに過ぐるものなし。その魂といふものゝいづくより來るぞと思へば天より授かるなり。

善玉と惡玉とを以て人間の心中にある善惡の性に象り、繪解きをして、惡玉一たび勝てるも、道理先生の力に依りて、遂に善玉の勝利に到るといふのが、本篇の趣旨である。

本篇の主人公理太郎は惡玉の囚はれとなりて放縱の生活に入り、日に荒み行き、遊女に迷ひ、茶屋酒に親み、遂に金の工面に窮して、我家の土藏に忍び込めるを手始めとして、追剝强盜となり、道理先生を途に要して却て捕へられ、其の宿所に同道せられて、さんぐ道理を以て意見せられ、迷夢一朝にして覺める。惡玉の爲めに夫や親を切殺された上に放逐せられた善玉の女房子は惡玉を討取つて夫の復讎をし、他の惡玉は皆ちりぐに退散する。

理太郎は道理先生に命を助けられし上、儒佛神の尊き道を聽き、今は前非を悔い、本心に立歸る。

「人間萬事大切なるは一心なり、皆おのれか心より出て、おのれが身を苦しむる、今の心は卽ち魂なれ、こゝの道理をとくと合點せねばならぬ。」

「此序に此本の作者をもきめねばならぬ、大分不埒ぢやさうな。」

と、末段作者自ら責めざるを得なかつたのは、笑止千萬である。

此書は繪と話と相待ちて趣向が面白かつたがために、非常の好評を博し、二篇三篇が出で、又此趣向をいろ〳〵と替へたものが著作されてゐる。

卽席耳學問

市場通笑作、北尾重政畫、寛政二年蔦屋板。

作者通笑は名を寧一、字を子彥、通稱を小平次と云ふ。俳名は橘雫、教訓亭と稱し、元文四年江戸に生れ、鹽町に住し、表具屋を業とした。安永八年、『嘘言彌二郎傾城誠』三冊、『懸直なし正直噺』三冊、『かごめ〳〵籠中鳥』三冊、『日明仙人醬仙人』二冊、『其數々酒の癖』三冊、『桃太郎元服姿』二冊、『大通人穴扒』三冊を著してより、年々黃表紙に筆を染めた。通笑の作は專ら教訓を主として、他の黃表紙とは其の趣を異にしてゐる。『心學早染艸』以前既に彼は教訓物を物してゐた。

此書の如きも其の一つにして特に全篇心學の教義を本としてゐる。心學は石田梅巖に創り、其の弟子に手島堵庵あり、堵庵の門人中澤道二、京都より江戸に來り、茅場町なる醫師前田一貫の宅にて講筵を開き、後に神田相生町向の片町に參前舍を設け、非常に繁昌した。其の教義は神儒佛を打つて一團となし、平易に通俗に市民道德を教へたのである。其の著に『道二翁道話』がある。「道とは何ぞ。雀はちう〳〵、烏はかあ〳〵、鳶は鳶の道、鳩は鳩の道。君子その位に素して行ふ、外に願ひ求めはない。その形の通り勤めて居るを、天地和合の道といふ。柹の木に柹の出來るもあい〳〵、栗の木に栗の出來るもあい〳〵、と口舌言はず、たゞ素直に和合の道、この外に道はない、それが神道、それが佛道じや」と、以て其の一斑を知るに足りる。

「教訓の通笑」とまで云はれて、通笑のものは寧ろ面白がられなかつたので、遂に天明三年、『教訓不仕候』と云ふ書を著はすに至つたが、心學が流行し、京傳までが心學物を扱ふ時勢となつたから、通笑は大つぴらに、此書の自序に「蓼くふ蟲もすき〳〵

のみちは馬鹿〴〵しいと、二三年やめた所へ、蔦重がたのみに、例の敎訓異見のうつとうしいも、隨分承知之助と、板元の方かちしやれかけたを、どつこいそこを虎の皮、千里も走る大ぼやむきの趣向にせず、意地にかゝつてしやつきばり、いつもの癖の十割まし、たつた一つの心當、第一の得意はお子樣方へ、おぢいさん、おばあさん、お土産に持ちよい」と云ふほどに、敎訓の看板を眞ッ向にふりかざしての心學講話の引延ばしである。

榮花夢後日話 金々先生造化夢

三冊、山東京傳作、北尾重政畫　寬政六年蔦屋板。

『金々先生榮花夢』一たび出でてより、春町は又『金々先生再寢夢』三冊を著はし、喜三二は『見徳一炊夢』を作り、京傳は『盧生夢魂其前日』を述作したが、更に此書を著して、金々先生に茶漬飯一椀の有難味を悟らせ、勤勞の眞味を說いたのである。贅澤を戒め、粒々辛苦の實相を知らせるところは、敎訓物として多大の効果がある

物を粗末にするな、勿體ないことを知れと敎へても、者には長じ易いもの。道學先生が口を酸つぱくして云つたところで聞手の方では欠伸をするのがおちである。しかし斯くまで微細に渡りて茶漬飯の由來を說いて來ると、成るほどと首肯く人も多からう。盧生が黃粱一炊の夢とは全然其の行方を異にして人間生活の唯ならぬを說明したのは、善い工夫である。此書の評判が高かつたのも決して無理でない。

又燒直鉢冠姬 稗史億說年代記

三冊、式亭三馬畫作。享和二年西宮板。

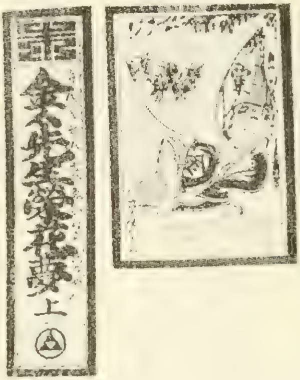
是より先、天明三年板に岸田杜芳の『草雙紙年代記』がある。三馬は之に倣ひて、本書を著したので、或は諸家の繪を摸し、又は其の文章に擬すなど、頗る工夫を凝らしたものである。然し杜芳に倣つたことは、題して『又燒直』と稱し、鉢かつぎを題材として一篇を作つたのである、鉢かつぎはお伽草子として既に知られてゐるから、人の耳に入り易い。

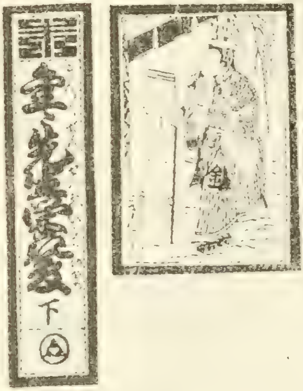
先づ地本問屋の目印を擧げ、戲作者名寄を列記し、倭畫巧名盡を地圖のやうに顯はし、草双紙の變遷を述べ、終に作者名寄拾遺を載せ、畫工名盡、名人戲作者六家撰などおいて、名作青本略記と題して、いはゆる名作二十三部の名を擧げてゐるが、所々誤がある。

三馬が黃表紙に筆を染めたのは、寛政六年のことで、彼の二十歲の時である。『天道浮世出星操』及『人間一心覗替繰』は、當時の作である。彼は烏亭焉馬の門に出てゐるが、其の私淑したのは、芝全交であつた。寛政十一年に出版した『大楠木是嘘氣俠太平記向鉢卷』三冊は去年鳶人足の間に喧嘩のあつたのを題材としたものであるが、よ組の鳶は己を誹謗したりとなして、正月五日三馬及書肆西宮新六の家を破壞し、裁判沙汰となりて、人足數名は入牢し、新六は過料、三馬は手鎖五十日の刑を科せられたが、三馬の名は却つて世間に廣まりて、思はぬ宣傳となつたのである。

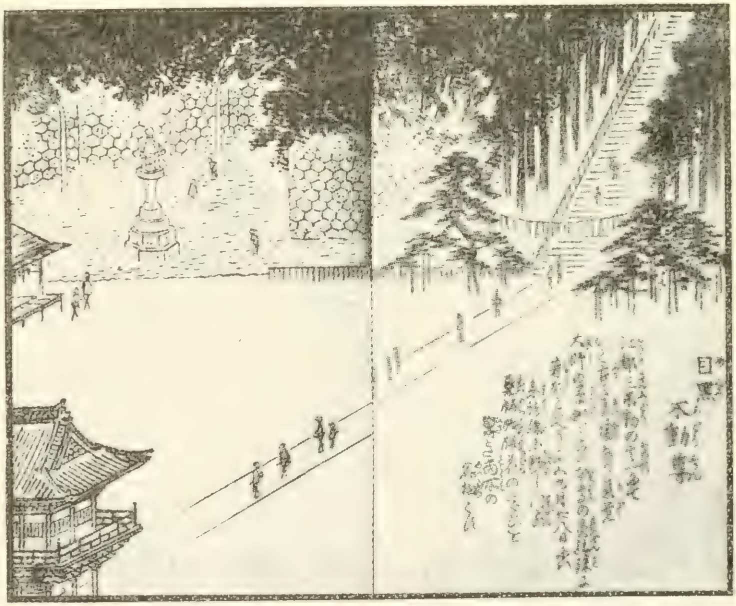
本書は多少の杜撰はあるにせよ、作者の凝つた工夫に敬意を拂ふとともに、後の草双紙研究に取りて又なき便利の書なるを感謝しなければならない。

金々先生榮花夢





戀川春町作畫

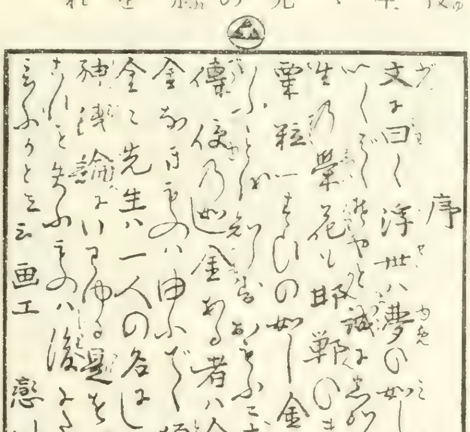


（三十九頁參照）

序

文に曰く、浮世は夢の如し、歡をなす事いくばくぞやと。誠に然り。金々先生の一生の榮花も邯鄲の枕の夢も、ともに粟粒一炊の如し。金々先生は何人といふことを知らず。おもふに古今三鳥の傳授の如し。金ある者は金々先生となり、金なき者はゆふで、頓直となる。さすれば金々先生は一人の名にして、壹人の名にあらず。神錢論に所謂是を得る者は前に立ち、これを失ふ者は後に立つと。それ是、これを言ふかと云々。

畫工　戀川春町戲作㊞



○浮世は夢の如し　唐の李白の「春夜宴二桃李園一序」にある詞。「浮生若レ夢、爲レ歡幾何、古人秉レ燭夜遊、良有レ以也」

○邯鄲の枕の夢云々　盧生が道士呂翁の枕を借りて假寢した間に富貴榮華の夢を見たが、さめて見ると黄粱がまだ煮えない短い間の事だつたといふ故事。黄粱一炊の夢とも言ふ。李泌の「枕中記」に「開元十九年道者呂翁經二邯鄲道上一、邸舍中、値二少年盧生一、自歎其困、翁授二之枕一曰、枕レ此當レ令二子榮適如一レ意、生夢中娶二清河崔氏女一、舉二進士一登二甲科一、中略、出將入相、大政十年、封二趙國公一、三十餘年出入中外、崇盛無レ比、中略、欠伸而寤、初主人蒸二黄粱一、爲レ饌、時尚未レ熟也、呂翁笑曰、人世之事、亦猶レ是矣」。

○古今三鳥の傳授　『古今集』の解釋に關する秘傳の傳授の中、三木三鳥の秘事がある。三木とは普通に、をがたまの木、めどのけづり花、かはな草の三つ、三鳥は、稻おほせ鳥、百千鳥、呼子鳥の三である。此處では單に不可解な事の意味に用ひてゐる。

○頓直（とんちき）　頓痴氣。役に立たぬ者、とんま。間抜け。

○神錢論　正しくは錢神論。魯褒の著はすところ。

今は昔、片田舎に金村屋金兵衛といふ者ありけり。生れつき心優にして浮世の楽を盡さんと思へども、至つて貧しくして心に任せず。よつて熟と思ひつき、繁華の都へ出て奉公を稼ぎ、世に出で、思ふ儘に浮世の楽を極めんと思ひ立ち、まづ江戸の方へと志しけるが、名に高き目黒不動尊は運の神なれば、これへ參詣して運の程を祈らんと詣でけるが、早日も夕方になり、いと空腹になりければ、名代の粟餅を食んと立寄りけり。

抑も目黒不動尊は靈驗著しく、遍く諸人の知る處なり。本尊は慈覺大師の作にして、寺號を龍泉寺といふ。此處の名産粟餅並に餅花といふものあり。竹を割りて華鬘の如くに結び、これに赤・白・黄の餅を花の如くに附る也。よつて餅花といふ。

（金兵衛） 何でも江戸へ出で、番頭株とこぎつけ、十露盤の玉はづれおしこため山と出かけて奢お窮めましやう。

もし〳〵、も早何時で御座りましやうの。一せんちよと頼みます。

（粟餅屋の女） あい、大方晝過で御座りましやう。奥へお通りなさりませ。

○目黒不動尊 [illegible]東京市目黒區下目黒にある。天台宗。寺傳によれば、大同三年圓仁の建立に係り、徳川家光の頃には堂宇五十餘成り、殷盛をきはめ、門前に粟餅、餅花等を賣る店があつた。[illegible]

○慈覺大師 圓仁。天台宗延暦寺第三世の座主。貞觀六年寂、年七十一。

○華鬘 佛像の頭の飾りに用ひるもの。[illegible]

○十露盤の玉はづれ [illegible]

○しこため山 しこたまに貯めをかけた洒落。しこたまは澤山のこと。

金兵衛空腹に餘り、粟餅屋の奥座敷へ通りけるに、折しも粟餅はまだ出來合せず、しばし待ち居るそのうちに、旅の疲れにや、すこし睡氣兆しけるまゝ、側に在り合ふ枕引寄せ、すや〳〵思はずま

どろみける夢に、何處ともなく、ほうせん寺の御免駕籠を釣らせ、黒鴨仕立の草履取、十壹二の小僧、其外手代、番頭夥しく召連れ、先に進みたる年配の男、上下の褶を正し、威儀をつくろい申けるは、「抑ゝ我々は、神田の八丁堀に年久しく住い致す和泉屋清三と申者の家來なり。然るに主人清三段々老衰致し候所、いまだ一子なし。殊に今年剃髪致し、名を文ずいと改め候。よつて跡式譲るべき人もがなと尋ね候所に、幸ひ此度君出世を望み給ひ、是まで來り給ふ由、主人年頃信心致す所の、萬八幡大菩薩の告にまかせ、これまで我々來りたり。願わくは、主人文ずいの望にまかせ給へ」と、無理かのほうせん寺駕籠に打乗せ、何處ともなく伴い行くこそ不思議なる。金兵衛思いも寄らざる事、いと不審に思ひけれども、これ幸福徳の三年目、開いた口へ餅、天へも上る心地して、則駕籠にうち乗りて、いづくを當ともなく出ゆきける。

〇ほうせん寺の御免駕籠　[illegible]に云ふ、[illegible]の字か、[illegible]、此より門下は町かご[illegible]民間に用ふ、[illegible]す、上下貴賤着用にて、是に乗ずるは乗る[illegible]、[illegible]富有の町民之を用ふ、又武家にも用ひざるにあらず、大名の小身は之を用ふ。墨のところ黒或は春慶塗、[illegible]（下圖参照）

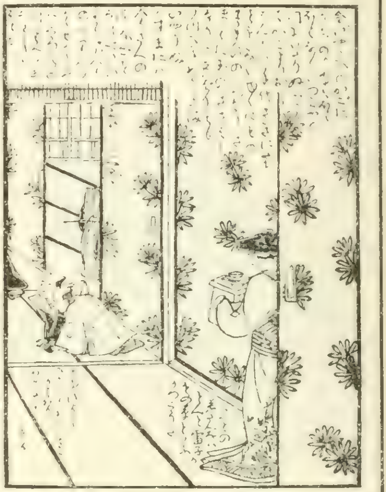
〇黒鴨仕立　黒づくめのいでたちをしてゐること。

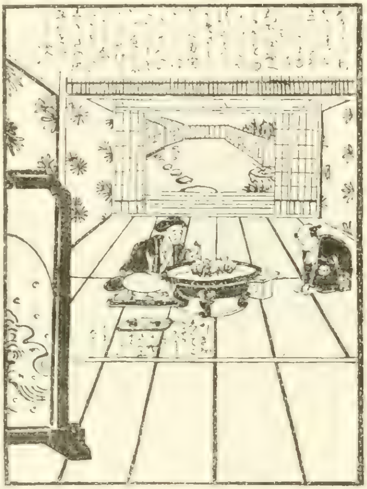
〇抑ゝ我々は云々　[illegible]ひ廻しを用ふ。

〇跡式　あとめに同じ。あとつぎ。

〇萬八幡　萬は八萬とつゞくために用ひたの[illegible]。

〇開いた口へ餅　「棚から牡丹餅」に同じ。





（迎の者の一）　嬉しや〱、漸く若旦那を探し出したぞ。

（迎の者の二）　うつちやつて置け、煤掃に出よふといつたは、この事たあろう。

○

金兵衛かの駕籠にうち乘り行く程に、程なく和泉屋の門に至りぬ。やがて駕籠より出し、番頭・手代前に立ち作い行くに、其の住居の結構さ、誠に玉の階、瑠璃の帷とも謂つべき有樣、屏風・襖には金銀の砂子を竝べ、衝立に黄金の日輪をかゝせ、唐紙に白金の月輪を現わしたり。程なく主の老翁清三立出で、喜びの眉を開き、則ち金兵衛に我が名を讓り、和泉屋清三と改めさせ、七珍萬寶悉く讓り、天の濃漿とも言ふべき程の酒を出し、親子主從の祝儀の酒宴をぞはじめける。

（女ずい）　不思議な縁で御座る。これから隨分と身上大事にしましやう。

（番頭・手代）　首尾よく御家督相濟み、いかばかり目出度ふ存じまする。

（女中）　今度の若旦那は、とんと雷子が物草といふ恰好だ。

○煤掃に出よふ　紛失したものも歳晩煤掃のときは出てくる。

○玉の階、瑠璃の帷　謡曲「鶴亀」に「庭の砂は金銀の、玉を連ねて敷妙の、五百重の錦や瑠璃の樞」。

○衝立に黄金の日輪をかゝせ　此邊の文句は謡曲「邯鄲」による。「東に三十餘丈に、白金の山を築かせては、黄金の日輪を出されたり。西に三十餘丈に、こかねの山を築かせては、しろかねの月輪を出されたり」。

○濃漿　こみづ、濃水の義、米を煮た汁。おもゆ。「さる程に天の漿や流霞の盃、これまで持ちて參りたり。そも天の漿とは、これ仙家の酒の名なり」（「邯鄲」）

○家督相濟み　家督相續の儀が濟み

○雷子　初代嵐三五郎の號、大阪の歌舞伎役者。始名善之助といひ、はじめ勘四郎の弟子となり、後に嵐三右衛門の弟子となる。元文四年（一七三九）五十三歳で歿した。

○物草　物草太郎の役。

金兵衞家督お嗣ぎてより、なにに不足も無ければ、段々奢に長じ、日夜酒宴をのみ事となし、昔の姿は引かへて、今は頭ら中剃を鬢のあたりまで剃り、髮の毛をば鼠の尾程にして本田に結い、着物は黒羽二重づくめ、帯は天鵞絨または博多織、風通、莫臥爾など〻出かけ、あらゆる當世の洒落を盡せば、類は友を以て集るならいにて、手代の源四郎、幇間の萬八、座頭の五市なぞ心を合わせ、こゝを先途と唆しける。その昔金村屋金兵衞なれば、その名をとりて、諸人金々先生ともて囃しける。手代源四郎、藝者を呼び集めて金々先生を唆す。

（源四郎）何と旦那、内でばかりの騒は、とんとさへませぬ。明日は※北國へ※いき山とお出かけなさりませ。

（萬八）※四谷ア、、、エ、、、引　新宿、馬糞の中によ、女郎あるとはつゆしらず。※きたくきたさぬきの金毘羅。

（集者）出ますところが嵐雷子、たしかかよふにか申ました。

○本田　[illegible]
○風通　[illegible]物の名、[illegible]色の[illegible]を用ひ、各々一色づつで織物のおもてを[illegible]文様を現はした一種の織物。
○莫臥爾　[illegible]
○そ〻なかし　[illegible]
○北國　新吉原。
○いき山　行くといふ洒落詞。
○四谷ア……新宿、馬糞の中によ　四谷新宿馬糞の中に菖蒲くさはしほらしや」。
○きたく きたさぬきの金毘羅　流行唄の拍子に用ふる語。讃岐の金毘羅は、香川縣琴平町にある國幣中社金刀比羅宮、祭神大物主神、相殿に崇徳天皇を配し、もとは象頭山金毘羅大權現といひ、今も嶺朝野の崇敬が篤い。
○役者染の下着　市松格子、傳九郎染など役者好みの染物。
○龜屋頭巾　『守貞漫稿』に云ふ、[illegible]、大坂頭巾、是を世俗竹田頭巾と云、又龜屋頭巾とも云ふ、浪華の[illegible]場に[illegible]しによって云爾。

○

金々先生喚され、ふと吉原へ行きけるが、それよりかけ野と言ふ女郎に馴染み、親の意見も何のその、一寸先は闇の夜も、かの手代源四郎・萬八をつれて、ひたと歩みを運びけり。金々先生の出たち、八丈八端の羽織、縞縮緬の小袖、役者染の下着、龜屋頭巾に目ばかり出し、人目を少し忍びけり。

（萬八）旦那のお姿どうも言へませぬ。凄いひやうく。

金々先生傾城かけ野にのぼり詰め、今年も早、年の暮、折節年越しの夜なりけれ（ば）、かの源四郎がすゝめにて豆は古しと、金銀を桝に入、節分の祝儀を祝いける。

（金々先生）福は内鬼は外、く。

（五市）これは有難山のとんび烏、これを持つて検校になり山と出かけやう。

（萬八）これはさびしい薩摩やの源五兵衛と來て居る。とんと梅が枝もどき、ありがたく。

○年越しの夜　この夜追儺（おにやらひ）及び豆打を行ふ。後世は立春の前夜に行ふやうになつた。

○有難山のとんび烏　一種[illegible]［illegible］年代記に「有[illegible]山の寒烏、此頃はつほど新らしゝ」とある、それのもぢりか。

○検校になり山　検校と[illegible]校の意で中世以後寺務を[illegible]する僧を言つたが、室町時代から盲人の階級中最高の官名となつた。徳川期にはその検校の位を金で贖ふことが出来たので、この金で検校になりに出かけうと云ふのである。

○薩摩やの源五兵衛　さつま源五兵衛の心中は流行唄に歌はれ、「松の落葉」に収められ、西鶴作「好色五人女」、近松作「源五兵衛おまん薩摩歌」となつてゐる。

○梅が枝もどき　[illegible]州小夜の中山無間山観音寺の梵鐘を[illegible]、現世では無量の財宝を得るが、来世は無間地獄に堕ちるといふ伝説を歌舞伎に仕組んだのは、元禄[illegible]年であるが、其後享保十三年手水鉢を鐘に擬したこうした趣向の所作事があり、元文四年浄瑠璃「ひらかな盛衰記」に「梅が枝が手水鉢を叩いて金の出る」趣向で有名となつた。「梅が枝の手水鉢、叩いてお金が出るならば」と歌にも唄はれてゐる。

金々先生北國の遊び盡しければ、これより辰巳の里と出かけ、あらゆる才を盡しけり。されども俄の洒落なれば、さしたるおちの來る事もなし。たゞ※阿彌陀の光も金ほどにて、山吹色を播き散す故、皆金々先生ともて囃しける。

（金々先生）※あゝ降つたる雪かな。世になき人はさぞ寒からん。雪は鵞毛に似て飛んで散亂し、人わ紙衣を着て川へはまらうと、ア、まゝよ。

（宮本の男）この大雪にお駕籠にも召しませず、※加賀蓑の御服裝は、ソレヨ※辰巳の里に猪牙はあれど、君を思へばかちはだしと言ふ御趣向、おそろ〳〵。

○

先生辰巳の里のおまづと言ふ色にはまり、毎日歩みを運び、金銀を多く遣いけれども、おまづはもとより勤の習にて、表向は深く金々先生にはまりたる氣色に見せかけ、内證にては源四郎と色にて、金々先生の目を忍びて樂しみける。

○辰巳の里　深川。

○俄の洒落なれば云々　俄狂言は享保元文頃から起つた大道即興藝であつた。それがやがて遊里に流行し、幇間藝となり座敷俄の形に變じた。後には落ちで結んだが落語の場合の如く發達してはゐない。下文は俄の趣向だから大した落ちはないといふのと、金々先生の即成の洒落だからさほどの結果は來さないといふのと、兩方を含めてゐるのであらう。

○阿彌陀の光も金ほど　諺に「阿彌陀の光も錢次第」。

○あゝ降つたる雪かな云々　謡曲「鉢の木」をもぢつた洒落。「あゝ降つたる雪かな。如何に世にある人の面白う候ふらん。それ雪は鵞毛に似て飛んで散亂し、人は鶴氅を着て立て徘徊す」。

○加賀蓑　加賀の國産。貞享頃より行はれ、元祿以後頗る流行した。菅の細く白きを用ひ、上に、もえぎ絲で編んだ網をかけて着る。

○辰巳の里に猪牙はあれど云々　『拾遺集』柿本人麿の歌「山科の木幡の里に馬はあれど、かちよりぞくる君を思へば」を原歌として、「山科の木幡の里に馬はあれど君を思へばかちはだし」とあるのをもぢつたもの。

猪牙舟は進み方の早い小船で細長く舳尖る。櫓の數により二挺立、三挺立などがある。

○唐言　わからない言葉。

○げコンカシコロウ云々　源四郎さんが來なさいと。

○イキマカニイケ云々　今にいくから待ちなと云つてくんな。

○いざ　いざこざ。

茶屋の女、唐言にて相圖をし、金々先生を茶にするところ。

（茶屋の女）げコンカシコロウサコンケガキコナカサカイコト、よしかへ。

（おまづ）イキマカニイケククコカクラマコチケナコトイキツケテクコンケナ、よく言つてくんねへ。

金々先生今までは委細を知らず、一筋に眞實と思ひはまりけるが、今夜のおまづが仕打、兎角合點ゆかずと思ひ、大きにいざを起し、おまづとも切れてしまひけり。

（茶屋の女）おまづさん、お前はまあ構わずと、彼方へ行きねへ。ほんに呆れたとんちきだね。

（金々先生）どうしやうが、斯うしやうが、うつちやつて置け。煤掃にや出やう。

（萬八）マア旦那お急きなさりますな。どういふいきさつで御座ります。

金々先生所〱にて大きくはめられ、今は最早光も失せ果て、日頃遣い屈みし者も知らぬ振にて寄附かず。無念至極に思いけれども、詮方なく、今は四つ手にて押させる力もなく、漸くばつち尻端折に桐の柾下駄と出かけ、心細くもたゞ一人、夜な〱品川へ通ひける。

（金々先生）昨日までは金々先生と持て囃され、猪牙や四つ手に乗りし身が、今ははつちに日和下駄、變れば變る世の中じやな引ア、いま〱しい。

（通行の一）駕籠の衆、こひかけて早めましやうぞ。

（通行の二）ぎやうにお江戸は賑かだ。

〇

金々先生日〱に奢長じ、今は身代も斯うよと見へければ、父文ずい大きに怒り、手代源四郎が勸にまかせ、金々先生が衣類を剝ぎ、昔の姿のまゝにて追出しける。

○四つ手　四つ手駕籠
○ばつち　袴襠。（朝鮮語）絹布にて仕立てた股引。
○ぎやうに　大へんに。

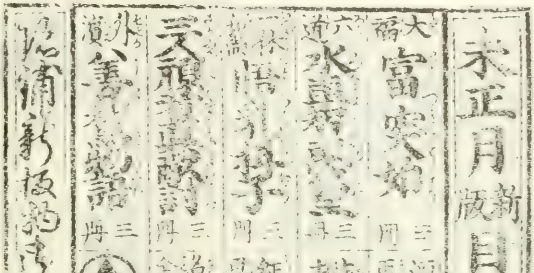
○くすねける　ひそかに盗んだ。

手代源四郎はじめは金々先生を唆し、多く金銀お遣わせ、その餘りは皆我が手へくすねける。よつて物を盗むことお源四郎とは申也。

（源四郎）ア、よい樣だ。

金々先生追出され、今は立寄るべき方もなく、いかゞはせんと呆れ果て、途方に暮れて歎き居けるが、粟餅の杵の音に驚き、起き上つて見れば一炊の夢にして、誂への粟餅いまだ出來あがらず。よつて金兵衛横手うち、我夢に文ずいの子となりて、榮華を極めしも既に三十年、さすれば人間一生の樂みも、僅に粟餅一臼の内の如しと、はじめて悟り、これより直に在所へ引込みける。

（粟餅屋の女）もし〳〵餅が出來ました。



未正月新版目録

繪師 鳥居清満
鳥居清経

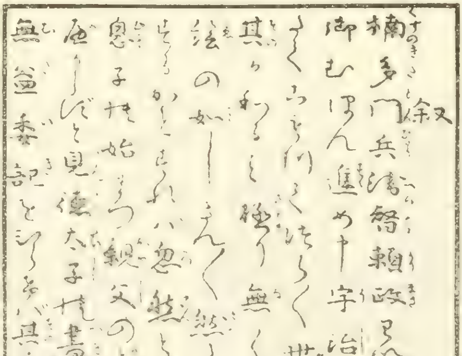
板元
大傳馬三町目
鱗形屋
孫兵衛

夫ハ楠木 是ハ嘘木 無益委記

戀川春町作畫

叙

楠多門兵衛督頼政わい〳〵天皇によしなき御むほん進め申、宇治の正燈寺に九年が間たてこもつて、つら〳〵世間のありさまを見るに其かわること極り無く、阿蘭佗細工のかげ繪の如し。きん〳〵然たるはかたの帶むねにするかとすれば、忽然として尻こけになる。息子の始まつ、親父のどうらく、猶更休期あるべからずと、見德太子の書置給へる行末はやりの無益委記をひらけば其文に曰く

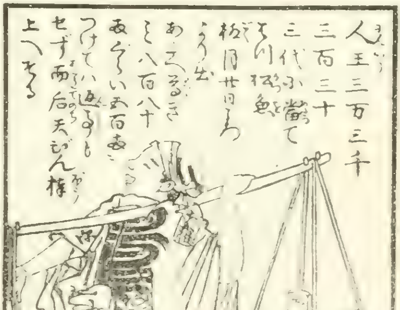


○わい〳〵天皇　わい〳〵は神輿をかつぐ時のかけ聲。天皇は樗天王などゝ云ふ如く神輿のこと。
○宇治の正燈寺　宇治に正燈寺なし、平等院を平等寺としてもぢつたものか。江戸下谷に正燈寺ありて、紅葉の名所として知られてゐる。正燈寺の紅葉見物から吉原にくり込むものが相當にあつた。
○九年が間　達磨の九年面壁に喩へる。
○阿蘭佗細工　硝子細工。
○かげ繪　走馬燈、廻り燈籠。
○きん〳〵然たる　きらびやかな。
○始まつ　儉約。
○見德太子　見德は富國のこと、こゝでは聖德太子をもぢつて云ふ。

人王※三萬三千三百三十三代に當てはつ松魚極※月廿日ころより出、あたへ尊きこと八百八十兩ぐらい、五百兩につけては返事もせず、而后天びん棒上へそる。

かつを引〱〱かつを、よぶとこ※ばかも百兩がものはあるのさ。

大通※の羽※おり長きこと三尺八寸五六分、紐はかゝとへとゞき、うらゐり白く、はけ※は釣竿のごとく、帶※は居風呂※のたがのごとし。



○三萬三千三百三十三代　三は別に意味はない。單に遠き將來の御代をさすのである。

○極月　十二月。初松魚は初夏の候であることは言ふ迄もない。

○とこばかも　ところばかりでもの義。

○大通　大通人。

○羽おり　長短時に異るも、二尺五分若くは一寸を普通とし、武士醫者は一寸ほど長い。長羽織と稱するものも二尺四五寸ぐらゐであつた。

○はけ　頭の刷毛先。

○帶　男帶は長さ一丈幅一寸八九分を普通とし、二寸を廣しとし、一寸七分を狹しとする。据風呂のたがは餘程これより廣い。

○居風呂　「すゑふろ」と訓む。

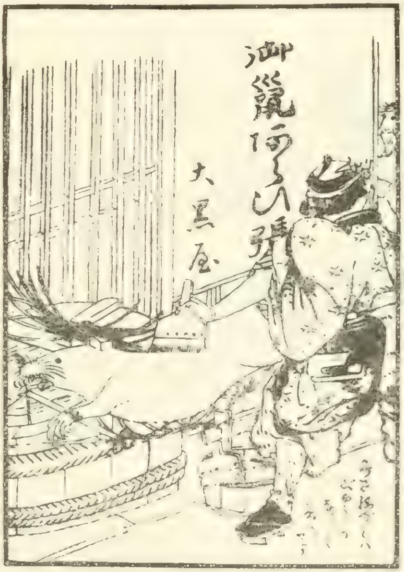
とてものことにちややからやど引をだしておけばよい。

○

ひわ茶※とび茶むらさき小もん其外かわりじま立じまよこじまのねずみ出る。

おせわながら此ねずみ✣をちよつとあさぎにつつこんでくんな。

かづさねずみはじ※やうがなくてこまりやす。



○ひわ茶　「ひわいろ」ともいふ。もえぎの黄味の多いもの。

○此ねずみを云々　鼠色の衣服を動物の鼠に轉化させてゐる。

○じやう　火。情の意を含めてゐる。

○四ツ手車　四つ手駕籠を變へて用ひたもの。四つ手駕籠は江戸庶民の常用した粗末なもので、四方に蓆が垂れ下つてゐる。道中籠、辻駕籠に多く用ひらる。

○ぼうぐみ　相手の車力。

○細見の繪圖　遊廓に於ける女郎の格式、揚代等を記した明細圖。

※四ツ手車できる。いそぐ時あぶら代をはづむ。

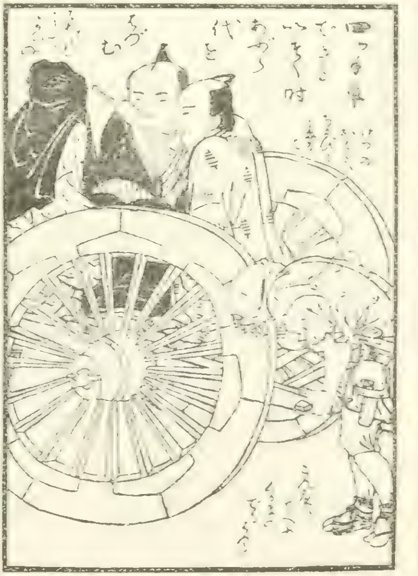
はれ〴〵としてよいの。

けつのおどるはちよびとこまるて。

こんな夜はでへぶくるまのでるばんだ。

※ぼうぐみナントかおがなげへじやアねへか。

※細見の繪圖高札になる。



○大かん入　大寒の入り。大寒は二十四氣の一つで十二月の節（陽暦では一月二十日頃）。
○にうめん　いろ〳〵の具（ぐ）を入れた素麵。
○しもげる　霜にいためられて、萎れ腐る。

○

六月大※かん入で汗（あせ）つらゝとなる。冷（ひや）にうめん※を喰ふ。

かゝあどのや、ことしはさむくあつい夏だの。

そして此そうめんはだいぶしもげ※た。のびはしないでだいぶちゞみました。

○陰馬　蔭間。男色。

○だるま大酒　達磨大師の洒落、

○おしうし　御宗旨。

○醫者にばけるなど丶は　僧侶は遊里への足踏は堅き法度であるから、密かに通ふ者は黑羽織、一本差の醫者になり濟まして通つたものである、

○出口の松　出口の柳の反對。京都島原にある。『一目千軒』に云ふ、「抑入口に柳を植る事は唐土のくるはにも柳陌とて柳をうゆるなり、今日本にも此故實を以て萬里小路の冷泉に廓開けし時も萬里小路の上に柳のはやしありしを伐開きしなり。扨又出口といへる事は廓は一方口にて又此ところへ戻らねばならぬ故の名と聞ゆ。中興西口開きたり、これ人目を深く忍び通ふ人の爲に開しと見へたり。さあれば東口を出口といふ事あたらず、柳も入口柳といふべきものをや」。

ぼう主天下はれて女郎を買ひ、俗は
かぶつて※陰馬を買ふ。

ヲヤ〳〵大きなさかづきでさ。どふ
でも※だるま大酒の※おしうしほどあり
んす。

※醫者にばけるなど丶はむかしのこと
さ、やぼらしい。

大門に※出口の松をうへる。

儉約にてゝうちんを松明にする。

だいぶくらい、※しんをへしおりや。

○

ぼんと正月一チ度に來て、※三河より
とき萬歳いづる。

※とくわかにごなむざいとは、お家も
さかへてましにます。

しんぱんかわりましたおしゆかう
し。

※寶せんかううりいづる。

○しんをへしおりや　蠟燭ならば心「しん」をつまむのであるが、松明故しんを折取つてしまへ。

○三河よりとき萬歳　三河の國幡豆郡西野町から出る萬歳で、春の祈禱のため江戸に巡り來るのを常とする「とき」は齋、法事をつとむること。

○とくわかに云々　「德若に御萬歳とは」の洒落。坊主故「ごなむ」(御南無)と云つたのである。

○おしゆかう　御趣向を五種香に通ず。

○寶せんかう　寶船賣の洒落、坊主故「せんかう」(線香)と云ふ。

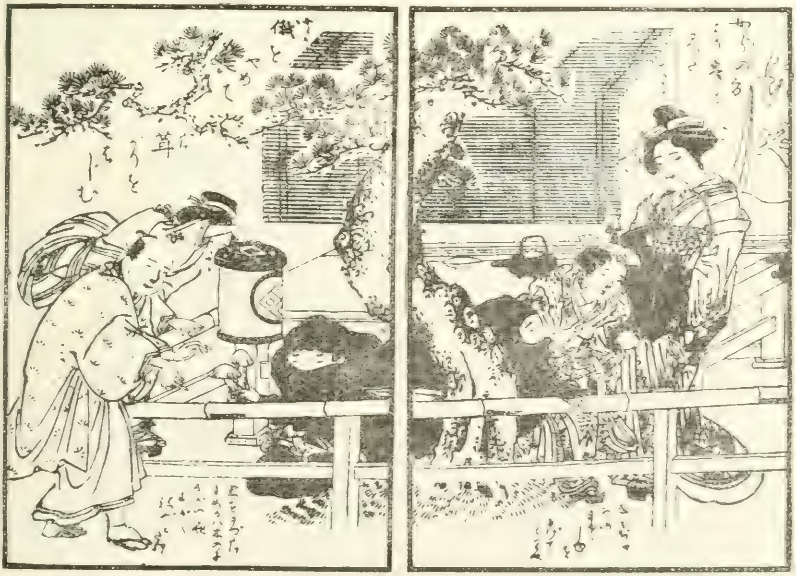
女郎の方より客を見たてる。

※なみぢやあのきやくしゆをあげてくりや（

※俄（にわか）をやめて茸（たけ）がりをはじむ。

※君をまづたけ、もめるは、木の子、ながい夜すがらねづみたけ。

※江戸ぶしもまだ〳〵ひくしと、高くとまつて※神樂（かぐら）※さいばらをうたう。



○なみぢ　淡路太夫の名。

○俄　八月一日より晦日まで三十日間吉原に一遊女の武藝を賑くするものに俄踊を演じさせた。明和四年眞崎稲荷に奉納するために催したのを初めとする。其の後遊女の俄踊に代ふるに藝者の手踊、幇間の茶番などを以てした。安永の頃おいらんと云へる藝者が木遣り音頭に巧みであつたから獅子の練物を出して大當を取つてから年々の例となる。

○君をまづたけ云々　まづ（待つ）木（氣）ねづみ（寢ずみ）。

○江戸ぶし　河東節を云ふ。

江戸肥前椽―江戸半太夫

―十寸見河東

肥前椽は肥前節、半太夫は半太夫節、河東は河東節を創めたが、江戸と稱してゐたので、此等總てのものを江戸節と稱した。此頃には肥前節も半太夫節も衰微して河東が全盛であつたから、江戸節と云ふと河東節のことになつた。

○神樂　神樂歌。

○さいばら　催馬樂。雅樂の一。

○ほうじ　法事。佛事。法會。

○屋根のはそんあまもり、さるだ彦　屋根破損雨漏、猿田彦、ともに狂歌名。

○ひうとく　表德。號のこと。

なんだか御ほうじにあうよふでありんす。

いよ／＼ねむいこと。

しよじ萬葉の時代をしたい、屋根のはそんあまもり、あるひはさるだ彦とひうとくをつく。

○遊藝云々　寛政改革の豫言となつたのも可笑しい。

○竹ぐそく　竹具足。

○後生ごゝろ　後生を願ふ心、慈悲心。遣手はやかましいもの、かうした後生ごころはないものとされてゐた。

○しんぞう夜ねむることなし　遣手が後生心が出て一向花魁の監督や注意をしなくなつたので、新造が多忙となつて、夜も寢るひまのない義であらう。

※遊藝ことごとくかたりちらして武げいとなる。

しげみや、それをしまつたら、かさねだんすの引だしの竹ぐそく※をだしてきや。

遣り手後生ご※ゝろ出、しんぞう※夜ねむることなし。

あみだぶ〳〵〳〵、ア、あの子もくたびれよふ。

○ころび　轉びは賣色を意味する。

○きり見世　ちよん／＼格子。また局見世とも稱し、細長い家を長屋のやうに數軒にしきり、その仕切りには襖を用ふ。きり見世の奥は腰高障子を立て、局女郎の一緒に住ふ内證と稱する所になつてゐる。

○こうぼう　弘法　俗說に大師は此道の元祖と傳へられてゐる。方々を洒落て云ふ。

猫（ねこ）もしやくしもげいしやとなる。

○

しやくしさんは一ッぽん足で、さぞちよつ／＼ところびなさろうの。

わるじやれをいひなはるな。

陰馬（かげま）のきり見世できる。としのよつたをはげ馬とよぶ。

コレよつていきなはれ。

よつても大じなけれどもまだこうぼういくとこがある。

地震そらでゆつて雷地の底でなる。よつてばら桑蔵まんらくと言ふ。

七夕いはふせはしばしよどむとも、ゆられてつらきちぎりなりけり。

さてなるは〳〵、そこらへお上りなされねばよいが。

○

どうらくむすめ惡はらへかよひ、母おやのかんどうをうける。

○ばら桑　落雷を避ける呪語、くはばらの反對。
○蔵まんらく　まんざいらく(萬歳樂)の反對。
○はふせ　逢ふ瀬の逆目。
○ゆられて　地震のために。
○お上り　雷がさがるのを逆に云ふ。
○惡はら　吉原をもぢる。

○大木や　扇屋のもぢり。吉原江戸町一丁目扇屋宇右衛門。
○鼻大き　花扇のもぢり。花扇は扇屋の抱女郎で書に堪能であつた。
○さぞおもひやられやす　鼻の大きいのは道具も立派だと云ふ俗説から云つたものである。
○地まわり　土地つ子の意より轉じて、その界隈を根城として歩き廻る無頼の徒の意。
○男郎　女郎の反對。
○もらいて　やりての反對。

アレガ大木※やの鼻大き※かの、さぞお※もひやられやす。

地※まわりくめんわるくふまわりとなる。

新悪(しんあし)はらをひらいて男郎(なんろう)※をいだす。

やりて婆々(はゝ)アもらいて※爺々(ちゝい)となり、かぶろをぶろかとよぶ。

ぶろか長松、同じく長吉。

女郎かゐつてきやくにふられ、手こずること三百六十餘ケ日。

※武サきやく大通となり、※あさぎうらふたゝび世にいづる。

きやくにふられて歸※一ばい一のつらさでありんす。

國やしきでいかにいやしいつとめ※のおいらだとてもあんまりだぞ。

○

※親父けつくにどうらくをつくし、お

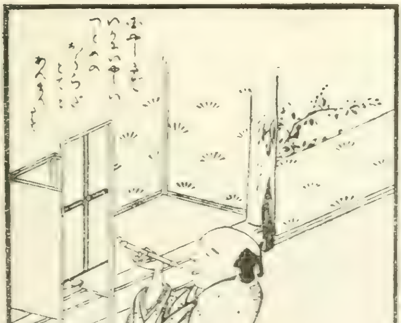
○武サきやく　武左衛門。田舍侍の野暮なのゝ譯名。

○あさぎうら　田舍侍は衣物の裏が淺黃であつたから、あさぎうらは田舍の野暮天の通稱となつた。

○歸一ばい一　加一倍一と同じ。數理の計算、一を原數として倍加して行くこと。此では一層倍の義。

○いかにいやしいつとめ　女郎の云ふ詞に倣ふ。

○親父けつくにどうらくをつくし　息子の道樂するのが通例である事言ふ迄もない。



ゞい婆々の藝しやはやる。※若もの行儀正しく※臺の物目錄にてひろうし、※紙花※二季の通ひとなる。

ちよひ／＼もらつてはためになるまい。ためてやつたらちつとは※きおいにならふ。

だいのものも御らうじたばかりで、御しうぎを※おはづみなさるは、※きつひおむだと、※目六にいたしました。下されますは御心もちしだいサ。

※座敷持の床の間、湯どのの雪ちんのないばかり、ふる道具やの見世のごとし。

○若もの　遊廓の若い衆。
○臺の物　料理。
○紙花　祝儀を現金で與へないで金高を書いて渡すもの。
○二季の通ひ　春秋二季に決算すること。
○きおい　張合ひ。
○おはづみ　奮發する。
○きつひおむだ　大變な冗費。
○目六　目錄。
○座敷持　自分専用の部屋を持つてゐる遊女。

むす子けつして夜あるきをせず、佛いぢりに朝おき朝ぢやのんでござるは、おとなしけれども、またちやによわぬ御用心をと、見徳太子つゝしんで白(もうす)、穴賢。

ナンヂヤ、子曰く、じゆがくのみでもまよひやすきはいろの道。

○ちやによわぬ　一種の訓戒。

◇[illegible]

○じゆがく　儒學。

○いろの道　『論語』に曰く「血氣未レ定、戒レ之在レ色」。「賢レ賢易レ色」。

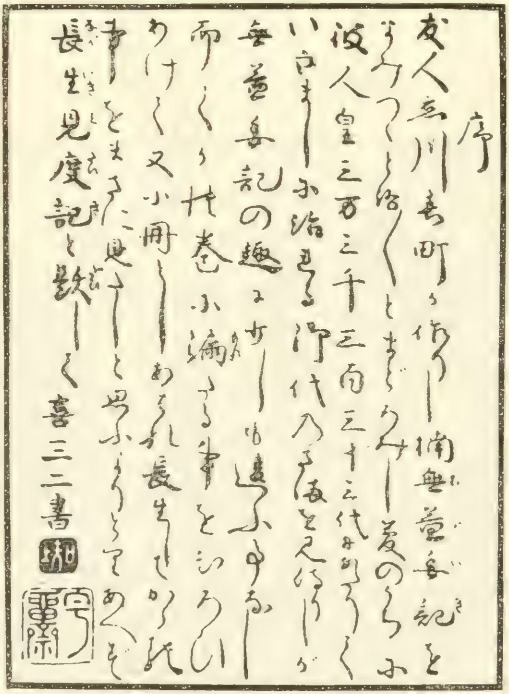
長生見度記

朋誠堂喜三二作
戀川春町畫

序

友人戀川春町が作りし楠無益委記をよみつゝ、とろ〳〵とまどろみし夢のうちに、彼人皇三萬三千三百三十三代にあたりて、いやましに治れる御代のさまを見侍りしが、無益委記の趣に少しも違ふ事なし。而てかの巻に漏たる事をひろひあげて、又小冊とし、あはれ長生してかゝる事をまさに見たしと思ふより、とりあへず長生見度記と題して。

喜三二書 印


序
友人恋川春町が作りし楠無益委記をよみつゝとろ〳〵とまどろみし夢のうちに彼人皇三万三千三百三十三代にあたりていやましに治れる御代のさまを見侍りしが無益委記の趣に少しも違ふ事なし而てかの巻に漏たる事をひろひあげて又小冊としあはれ長生してかゝる事をまさに見たしと思ふよりとりあへず長生見度記と題して 喜三二書

○正月の三つある歳　極めてのんきな、長閑かな、ゆつくりした歳の義。

○未進　未進米。また納めない米の催促。此では今まで約束して實行してゐないことがら。

○氣上りがする　のぼせる。上氣する。

○三年のうちに彼岸に當る者　彼岸は一年に二度あるが、こゝでは彼岸が時ならずに來るといふので、命日が三年のうちで彼岸の時に當るものゝ義。

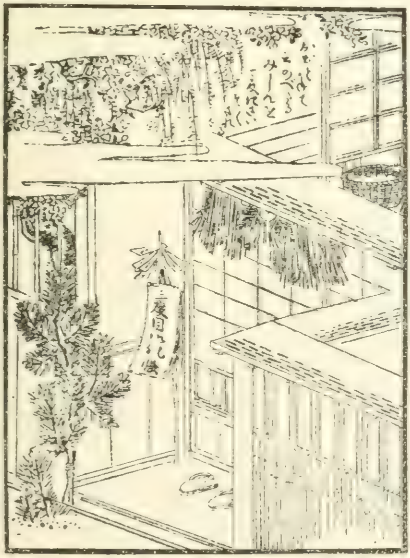
○與一兵衛、勘平　何れも「假名手本忠臣藏」に出て來る人物で、非業の死を遂げてゐる。

正月の三つある歳にて娘の子は「ねゝ様のべゞを五ツ縫て下され」といびれば、息子は「かゝ様長い話をして聞かせな」とせがむ。剰へ隣の子迄來て「おばさん摘草に連れてお出」と、かねて云のべたる未進を一度に催促される。

（娘の子）　それでも正月の三つある時といふ約束だものを。

（母）　アゝもう氣上りがするやうだ。正月の五つある時まで待ちや。

三年のうちに彼岸に當る者は定業、當らぬは非業の死といへ共、與一兵衛も勘



年も其年の八月彼岸に當りければ、これも嘘に極まりしが、今では大きに心得ちがへて、三年の内に當る人は上戸、當らぬは下戸と定たるもおかし。彼岸には必ず天氣悪しく、別て中日荒れとて大に荒れる、其時米の相場狂ふ。
（主人）　明日が中日ならばおらが内も勾張でもかはずばなるまい。
（僧の一）　雨やめたい佛南無雨たい屆。
（僧の二）　此降にはひがんとも致し方が御座りませぬ。
（手代）　どうでも彼岸のしるしで悪いお日和で御座ります。

○勾張　甲張とも書く。家の傾きかけたのを支へる材。支柱
○ひがんとも　如何ともの洒落。

○切米　一年を數回に分けて受ける扶持米。こゝは一回分として受けた切米を女子に與へるのであらう。
○おはりかへし　針仕事。
○折介　折助。武家に使はれてゐる下部。仲間。

女の奉公人、切米男より高し。

（女の奉公人）おはりかへし物は御指南を得ませう。お切米は五兩三分戴きたう御座ります。

（主人）去年から居た所には子供衆でも有たのか。

（女の奉公人）若旦那樣とお孃樣が御座りました。

（折介）おらが五六兩も切米をとればとうに折介も止て仕廻ふ。さりとは女中衆は羨しい。

○

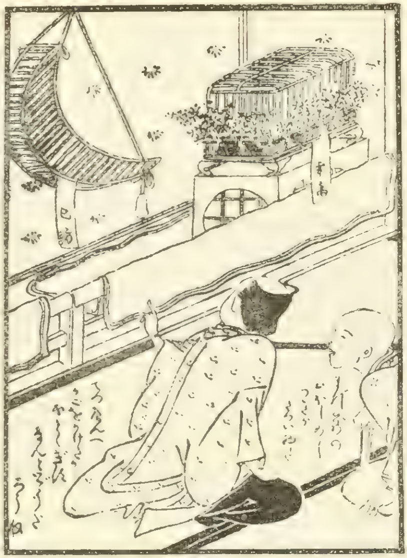
ほとゝぎすの會あり。

（烟管を啣へた男）　昔は時鳥といふものは山にばかり有た物と見へて、古歌にはとかく山時鳥と詠んで御座ります。山では食物に困りそふな事の。

（杯を手にする男）　そふ飲んではへどとぎすさ。

（坊主頭の男）　まづ籠の※思召附がきつい物だ。

（本田髪の男）　※天邊へ籠をかけたか時鳥、なんとどうだろうね。



○思召附　思附といふのを丁寧にいふ。考案。着想。

○天邊　「てつぺん、けたか」は時鳥の啼聲。本田頭は刷毛先を細長くしてゐるから斯く云ふ。

角力があると兎角雨が降る故、雨のもらぬ樣に芝居をたて、雨天三十日興行する。

（碁を打つ男の一）　角力は入梅の内の事さ。

（碁を打つ男の二）　今度の地藏が嶽は扨小さな男だが轉ばぬ奴だ。

幟を座敷へ飾る。

（母親）　柏餅でも黑酒でも上りませ。

妹めがいじりたがるには困ります。

（客）　昔は粽といふものが有たげに御座りますが、話を聞ては野暮なものさ。

○幟を座敷へ飾る　幟は外飾であつたのだが、座敷の内飾りにする。

○黑酒　白酒の反對。

○粽　糯米を水にひたし、又はこめの粉をこねて芋子のやうにし、菰や笹葉に三角形に卷いて煮たもの。今でも端午の節句に用ひる。

○

涼の頃大川へ見番舟とて、大館船を繋ぎ置、藝者を段々出してやる。

（船の一）　恵比須屋のお舟はこれかな。

（船の二）　ふる富とお直はないか、つんぼう。

（船の二の中で）　おてつにしろ〱。

（船の三にて人々）　おぎんにお仲ではこそ〱話があり過ぎてうるさい。

けんばんたる後朝中流にとゞまる。何か堅い事を云出した、艾屋がどうして見番舟にいるものだ。

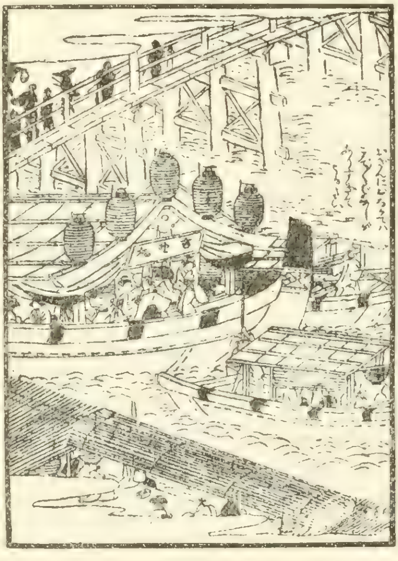
○見番舟　藝者の見番で、注文に應じて藝者を舟から出す。

○大館船　大屋形船。屋形のある遊山船で、舟子は屋形の上を歩んで棹をさし船を操る。

○ふる富、お直、おてつ、おぎん、お仲　いづれも藝者の名。

○けんばんたる云々　「綿蠻たる黄鳥」の洒落。「詩經」小雅篇に「綿蠻黄鳥、止于丘隅」とあり、「大學」にも引用してゐる。

○艾屋　灸點師。灸をすゑて病を治療するもの。此ではやかましい小父さんのことで、學者を指す。



高輪の海手、新地出來て高輪の茶屋兩側となり、向ふが閊へて暑がる。

（客の一）　高輪茶屋の歸るさにどうだ有難いか。

（客の二）　※椎の木三本と付けねば請取られぬ。

（藝者）　※廿六夜樣を拜みに今年は神奈川の臺へ行ませう。

○

女の※石尊參り男より多し。

石尊樣のお山も段々木を切すかし、道幅廣く家建ち込みければ、天狗の棲む所

○椎の木三本と付けねば　『曾我物語』（卷一、第十三）の八幡三郎等が、河津三郎を討たんと、その歸路に待伏せしてゐる條に「椎の木三本小楯にとり」とあるから、河津を買はずにもぢつて、買はずにたゞで馳走をしてくれるのでなければ、の意味にとつたのではあるまいか。

○廿六夜樣　陰曆七月の廿六日に行ふ月祭り。品川とか海岸などで月の出るを拜する。高輪が名所。下文は高輪がつかへて來たから神奈川にしようとの義。

○石尊參り　大山參りともいふ。相模國大山の阿夫利神社に參詣すること。盛夏の頃木太刀を擔いで登山し、それを納めて祈願した。これを納太刀といふ。七月十四日より十七日に至る間に登るを盆山といふ。

もなき程の事にて美なる參詣數多なれば、※脛の白きに通を失ひ、杉の木末より落て鼻を打折、又は※羽節を打折り、是非なく只の山伏となりて紛かせば、山伏は我が株を天狗に渡して素人となる。

（子供）あのほんやま／＼※が食いたい。

（母親）此やうな物を擔いで行は全體大※無理村の無理藁細工だ。

（娘）かゝさん肩が痛い。
吉原同者が見へるぞ。

（禿）おいらんいつそ草臥れんした。

（花魁）此子は馬鹿らしいの。

○脛の白きに通を失ひ　久米の仙人の傳説による。久米の仙人が空中に飛行し、下の川で洗濯する婦人の脛の白きに見とれて墜落したといふ。

○羽節　鳥の羽の關節。

○ほんやま　盆山か。（石尊參り參照）子供が盆山といふを聞いて食物と誤つたのではあるまいか。

○大無理村云々　大森村。麥藁細工は大森の名物。

〇七夕の短册　七月七日の夕、牽牛、織女の二星が年に一度、天の河を渡って會するといふを祭る。民間に竹を据ゑて供物をなし、五色の紙を色紙、短册などの形に切って歌を記し、葉のついた竹に結びつけて立てるのである。

七夕の短册を百枚十文づゝにて書て渡す。紙捻を添へて穴も開けてよこすのを、紙捻を通して渡すのが三百枚通して五文づゝ。短册竹へ色〳〵の帋へ歌まで書て結つけ繩迄添へて賣り歩く。

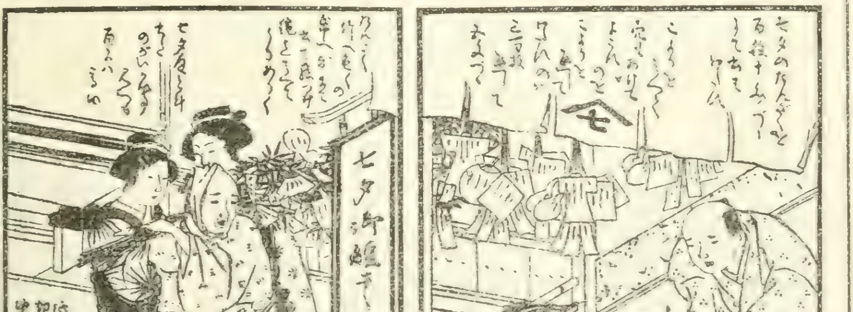
此短册のたち屑は漉返しの半切になれども、白い紙と違ひ、値にならぬ故、白い紙を澤山混ぜて「簡略紙や、白ッ帋や。」

（娘）　二三枚書かぬのを混ぜてくんな。

（番頭）　とてもの事に皆書かぬのにしな。

（内儀）　七夕樣と斗書たのがいかい事見へる、百には高い。

（商人）　わたくしの上ますのは、手跡が能御座りますから。



○荻寺　本所の萩寺龍眼寺から思ひついた洒落。

○鹿寺　萩寺があり、荻寺があるから鹿寺さいうて洒落たのに過ぎない。

○

八月になれば月見といふ物をして、吉原へ客の來る事なし。十一日頃より廿日過迄は、見世を引て休み也。

(遊女の一)　月見といふ物は何故喰ひ物のないものだね。

(遊女の二)　かう暇で居て、酒や肴がいつものやうに有なら、さぞよかろふね。

深川邊の寺に荻を植へ、荻寺と名づけ、客は座敷へ來、障子をたて込め、荻の上は風を聞て樂しむ。

(住持)　あの水にさかだち、ざは〳〵〳〵といふ所がどうもいへぬ。

(客)　此間に鹿寺へ鹿を聞に參ませう。

江戸芭蕉の塚三十三所程に殖へて、俳人參詣する、※御發句といふ物に節をつけ、唱へながら歩く。

一番ンに※牛ィ嶋ァのヲ雪ィ見ィ塚、
いざさらば、雪ィ見にィころぶヲ、
とヲこヲろヲまアで。

三圍には※其角塚といふが出來て、餘り照續きて作のために惡い時は、百姓此塚に雨を祈れば、忽ち雨降る。枕四つにて拍子をとりながら、二人にて祈る。其祝詞に曰、

※夕立や田をみめぐりの神ならば、降らしやんせぬは怨みじやと、あけくれに思ふてくらすへ。

（參詣者の一）三十三所歩くは※ちつとうちやす。※秩父の開帳のやうに芭蕉塚を一つ所へ片付たいね。

（參詣者の二）※金通を誘つた所が一昨日※片瀬へ立たと云て來やした。日蓮の御難へ

○御發句　前文に三十三所と觀音の靈場あいたことを言つたので、それに對する御詠歌をもぢつて言つたのである。

○牛嶋　向島の牛島」弘經寺のあるところ。

○其角塚　今東京市本所區小梅、三圍神社境内にある　なほ「俳諧名作集」一九六頁參照。

○夕立や田をみめぐりの云々　其角の句。「五元集」に「牛島三遶の神前に雨乞するものにかはりて……翌日雨ふる」とあり。

○ちつとうちやす　一寸應へる。

○秩父の開帳　武藏國秩父郡大宮にある知々夫神社の秩父妙見の例祭は毎年十一月一日より六日までの間。秩父大宮の市は一六の日であるから特に此十一月は例祭を兼ねて繁昌する。此では一ケ所にすると便利であることと、例祭と市日とが同一であると同じとの義。

○金通　仲間の名であらう。

○片瀬　神奈川縣鎌倉郡片瀬町字片瀬。附近に日蓮宗の本山龍口寺があり、日蓮上人法難の地といふ。

○顔見世　毎年十月江戸三座（中村座、市村座、河原崎座）では役者の

行位なら、今日江戸を歩けばゑゝ。さりとは俗な奴だ。

○

※顔見世前紋看板出ル。

江戸　若女形　※中嶋三甫右衛門。
　　　娘形
江戸　敵役　※岩井半四郎。

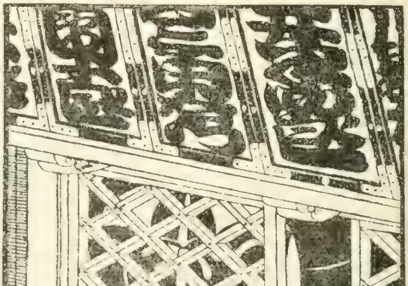
（見物人の一）天幸が※揚巻に※介六は篠塚浦右衛門、※意休は半四郎だといふ沙汰さ。此奴はきつと宜かろう。

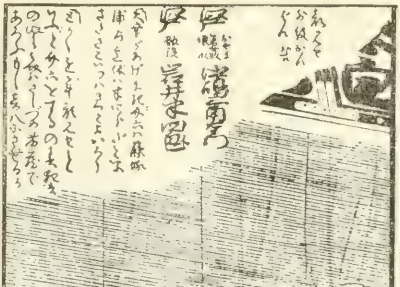
（見物人の二）兎角近年顔見世といふと介六をするの。春狂言の由良之介はさしづめ※藤蔵であろふ。もし音八にさせるか。

（見物人の三）市川紋之介といふ道外は※下りか。

（見物人の四）あれは江戸から行た※大谷廣右衛門と云た若衆方の事さ。

（見物人の五）あの火で干して居るのは※土手だの、うらは※波さ。





人替りをなし、十一月朔日、初興行の初日を期して客に目見えをする。これを顔見世といひ、十一月興行を顔見世興行と稱す。
◇以下本文の俳優の持役は皆反對。
○中島三甫右衛門　寛延の末より出勤、初の名は三甫蔵、寶暦十二年の顔見世より三甫右衛門に改む、實悪として名高かつた。天幸と號す。
○岩井半四郎　初代から八代まであるが、こゝでは四代を指すのであらう。女役として頗る成功し、岩井家はこれより女形専門となつた。杜若と號す。寛政十二年歿、年五十六。
○揚卷、介六、意休　歌舞伎十八番の一『助六』中の人名。吉原の三浦屋揚卷とその愛人侠客花川戸助六、及び客の髭の意休。
○藤蔵　吾妻藤蔵。若女形。生島大吉、後に穂川林彌、寶暦十年の顔見世よりもとの吾妻藤蔵に改む。園枝と號す。
○下りか　上方から江戸へ下つたのか。
○大谷廣右衛門　二代が名高い。滑稽を兼ねた敵役に名があつた。延享四年に歿す。廣右衛門は八代位まであるが下文のは何代目か詳かでない。
○土手、波　舞臺装置用具。

（お年玉屋の番頭）　春※興入りを上ますが、いくら位の所がお望みで御座ります。

（客の一）　こゝへ大※小を百枚下され、思ひ附は悪くても廉いのがよい。大小をかねて兩節は値段が難しかろふの。

（客の二）　名※開の刷物は新板だの。人のかへぬ内、おらも名を替やうか知らぬ。

○

顔見世切※落しを陳※皮買歩く。尻※尾をつけて投げるなどはとんと無い事。

（物賣り）　おこし、蜜柑。

○春興入り　春になると行ふ、絵や俳句などを摺物にした配り物。

○大小　暦のこと。春興入りには暦をも取入れて摺物にする。

○名開　名披露め。

○切落し　おちま。芝居の追込場。京都、大阪の芝居にあつた見物所の名。桟敷より一段低いところ。

○陳皮　柑子の皮の乾したるを薬品としたもの。但し、普通には、蜜柑の皮を以て、これに代用す。こゝでは蜜柑の皮を云ふ。

○尻尾をつけて投げる　蜜柑の皮に紙などをつけて客席へ投げる。

○あて事もねえ　とんでもない。

○お半長右衛門　お半と長右衛門が桂川に情死した事件を扱ったもので、菅專助作『桂川連理柵』(安永五年大阪北堀江座初演)、櫻田治助作『道行瀬川の仇浪』(天明元年江戸市村座初演)等がある。なほ本叢書『傑作淨瑠璃集』下參照。

(見物の一) これ陳皮よ、此處にもあるぞ。

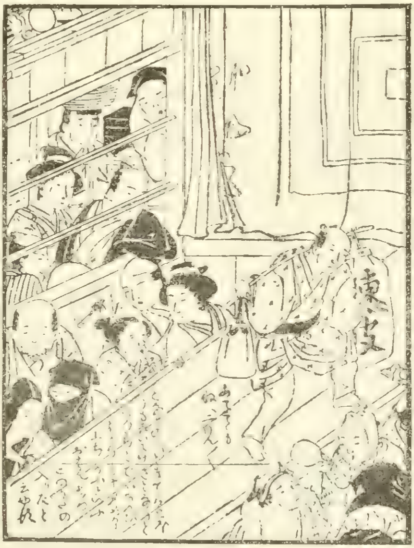
(見物の二) 今此皮も賣るぞ。

(見物の三) 蒟蒻の殘も買手があるとゑゝ。

(見物の四) 五文よこせ。

(陳皮賣) ※あて事もねへ、二文〳〵。

(見物の五) 隣の入りと來ては途方もない事さ。隣とこつちとでは、陳皮ばかりも十貫目から上違ふと言ふ。※お半長右衛門この方の入りだと云やす。



○破魔弓　玩具の一種、二張立の弓に矢を添へて裝飾を施したもので男兒の初正月の祝儀に用ひた。

○喰積　正月の重物

○新造買　新造とは花魁に附隨して世話を燒く者で、振袖新造、留袖新造、番頭新造の三つがあるが、貴色をなしたのは番頭新造である。

○ぐい寐　ぐいと寐る。ぐつと寐る。一氣に寐る。

○とかまり印　とかまる、とつかまるの洒落。

師走鏡餅五寸六寸乃至壹尺。それ〳〵に飾り物・鹽物・※破魔弓・羽子板そへていくら、ごまめ斗二ッ添へていくらと、注文次第に取にやる。但し十二月朔日より歳暮の使を出し、廿日比は※喰積迄拵へ、廿一日比より年忘れの女郎買初る。

（餅屋の客）今年から惣領の破魔弓はやめて先度生れたのへ斗遣るとさ。

（嫖客の一）此比はとんともう年忘れ〳〵で、ろくに寐ぬから睡たくつてならねへ。今夜は※新造買の明日迄※ぐい寐にせう。貴公は例のであろう。所詮正月は※とかまり印ゑ、腹だ。

○雁が飛べば、石龜のじだんだ 諺。身の程を知らずに、妄に他人のする所を學ばうとするをいふ。「じだんだ」はぢだんだをふむ、足をはたはたしてくやしがること。

○蔦十 蔦重、蔦屋重三郎。書肆耕書堂。

○雁みんなみ 漢武帝の『秋風辭』に「雁南回」とあるのを洒落て、雁みんなみと云ひ、更に皆見をかけてゐるのである。

○跡の雁が先へ行ば云々 江戸の童謠に「雁々三ツ口、後の雁が先になつて、笄とらしよ」とあり。

○雁〳〵の三つもの 雁々三つ。前の民謠から洒落て書いたのである。

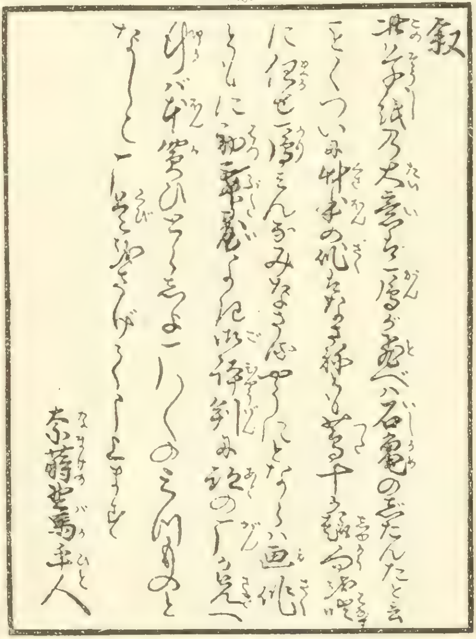
右通慥而 唫多雁取帳

奈蒔野馬乎人作
忍岡歌麿畫

叙

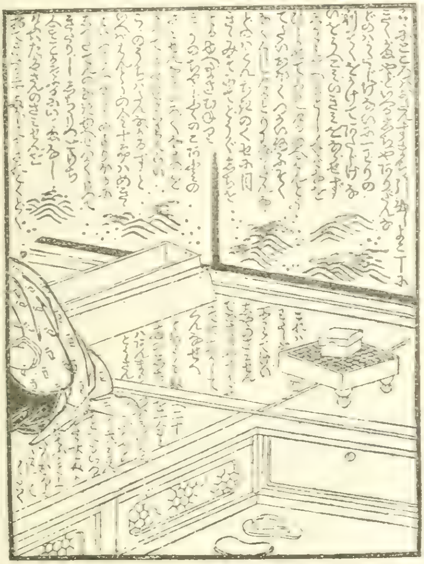
此草紙の大意は、雁が飛べば、石龜のじだんだと言ふ如く、ついに艸本の作はなさねども、蔦十が趣向を咄に任せ雁みんなみなさるやうにとならば、畫作ともに初舞臺、よき御評判に跡の雁が先へ行ば本買ひとらしよ、雁〳〵の三つものとなして、雁首を下げて申上ます。

奈蒔野馬乎人



○[illegible]
○あたじけない　[illegible]
○手洟　紙を用ひずして手先で洟をかみ捨てること。
○とんちき　[illegible]、間抜け、[illegible]
○目利味噌　[illegible]
○正宗　相模國鎌倉の刀工。五郎入道と稱し、當世の名工。康永二年歿、八十歳。こゝは[illegible]
○利休　千宗易。千家流茶道の祖。初め信長に仕へ、後、秀吉に仕へた。天正十九年、七十一歳で歿す。
○古近江　近江[illegible]は三味線製作者。代々あり、其の古代のものを古近江の作と稱する。
○流目　女に横目をつかふこと。
○鐵刀木　[illegible]に屬する[illegible]。黒褐色で、木理に花紋に似て紋多く堅くて重い。諸器具を作るに用ふ。

此邊に處はお寄留町、引出し横丁に、きくがま屋と言へる質屋あり。旦那殿は吝けないに一割の利息をかけて、あたじけないを植へこみ、意氣みをならせず吝みを主とし、手洟をひゞかせて暮しける故、番頭・手代多く使い、何不足なく暮しける。とりわけ旦那殿は、とんちきの性に目利味噌にて、道具質をとる故、正宗・利休の茶杓の、古近江の三味線など、いろ〳〵な物を持つて來りしが、元來こゝのうちは、旦那が留守といへば、番頭の金十郎は目利といふ事は、流目より他に知つた點のなき故、折角持つて來りし質物を持ち歸すこと數ふるに暇なし。今日は鐵刀木の三味線を持て來り、二十兩貸して下されと口說く。



（客）これは私が所柄で、藝者の三味線でござりやす。どふぞ廿兩貸してくんなせへ。

（金十郎）なんぼ、鐵刀木だと言いなす

○米櫃を噛る　忠實な番頭を白鼠と言ふより思ひついたのであらう。
○ずりやす　ちつとはごまかしをしますの義。
○二日ばかりに二十兩云々　近松作「冥途の飛脚」の「忠兵衛梅川相合駕籠」の中に「二十日餘りに四十兩、使ひ果して二歩殘る」。
○丈は古いから才三さん　丈は丈八にて、「戀娘昔八丈」にあるお駒に横戀慕した番頭。才三はお駒の情人。
○かみ駒　三味線の胴の皮の上に据ゑて絃の枕とする柱「ぢ」をこまといひ、棹の糸倉に接する所にあるのを上駒といふ
○あら面白の春景色　長唄「初咲法樂舞」に「あゝ面白の春景色、魚と水とはさんさ仲よい筈よ。それ何故にいつも離れぬ仲ぢやもの」。
○魚と水とも云々　君臣の親しき、また夫婦の相睦むを水魚の交といふ。

つても、旦那殿は留守なり、私はちつとばかり米櫃を噛る位はずりやすが、道具の方はお先眞暗、旦那の歸るまで壹分持つていきな。二日ばかりに二十兩遣い果して一分殘るといふ文句さ。せん度の袷羽織も返しなせへ。但、附け更へかの。

（客）途方もねへ。二十兩の質を一分とは餘りつれない番頭さん。丈は古いから才三さんとでも言つたら、廿兩貸そふか。

と上たり下ろしたりして口說く。

（手代）何ふやらかみ駒のあたりに暇が有るやうだ。堅い糸卷だぞ。チヽンツ、チトおい、あら面白の春景色、口で言ふには手が廻らず、そして魚と水とも久しいもんだ。

（金十郎）小僧、挾み將棋もゑへ加減にしまふて、お茶を持つて來い。

金十郎は、ちよびと蒟蒻の摘み食い、または山谷くらの遊びの面白味より、土橋中町は錢だけうつくしく、二軒茶屋は何もかもせんにうち。銀杏屋・桝屋は江戸前の根元と覺へてより、ちと北の遊びへ誘われ、揚屋丁の伊勢屋といふ茶屋にて樂しみ、竹屋の歌菊といへる突出しに馴染み、初會うらのお定りより、いつ來なんすが數重なり、互に末の事を話し合しが、此伊勢屋の喜八と言ふ者も頼もしき奴にて、

（喜八）　たとへ主がかぶりなすつたら、其時は糸屋の娘ではねへが、店請は私で、御新造樣は歌樣さ。

（金十郎）　これ／＼喜印、此棲をこふ取つて、外八文字のくり出し歩み、初會の客にしこなしは、ぶろかが先へぼこたぼん、すいと甘いの實くらべ、起請誓（紙を）背中に書き、どふだ鶴市もはだしで逃げまきの介六、あんけら門平はどふだろう。

（歌菊）　もし旦那へ。二階で歌の介さん

○蒟蒻　蒟蒻島。霊岸島のことを云ふ。蒟蒻島藝者。
○山谷　山谷堀。堀の藝者。
○土橋仲町　深川。
○錢だけうつくしく　値段だけの美しさを持つ。
○二軒茶屋　天明頃から深川八幡の境内にあつた茶屋、松本・伊勢屋。
○せんにうち　先入地か。既に承知してゐる意であらう。
○北　吉原。
○突出し　女郎に賣られて始めて店を張り、客に接することを云ふ。
○うら　再會。
○かぶる　被るで、受ける意味より身請けすることに用ひたのであらう。
○糸屋の娘　手鞠唄に「本町二丁目の絲屋の娘、姉は廿一妹は廿歳、妹欲しさに御祈願かけて、伊勢へ七度熊野へ三度、愛宕様へは月參り」と。
○新造　新造の宅に居らしめる處から婦を言ふ。遊里の新造とは異る。
○外八文字のくり出し歩み　遊女が揚屋入りの道中に、外八文字に足を繰り出して歩むこと。
○ぶろか　かぶろを反對に云ふ。
○ぼこたぼん　煙草盆を逆に云ふ。
○起請誓紙　起請文、誓文とも。神佛に誓を立て、背けば罰を蒙らんと請ひ奉る、その旨を記したもの。
○逃げまきの介六　揚卷の助六の洒落。

○あんけら門平　かんぺら門兵衛の洒落。助六劇に出る人物。
○引け時分　吉原の夜の時限は四つ時、亥の上刻、午後十時頃で太鼓を打廻るのを合圖に大門を閉鎖する。
○袖の梅　酔ざましの藥。正徳年間吉原伏見町の天渓といふ隠者が製す。
○おそろが池の大蛇　おそろしいをかけた語。おそろが池の地不明。
○一瓢や麥斗　一瓢は明和頃の名高い幇間。江戸方言にも其名が見えてゐる。麥斗は向島武藏屋の麥斗庵の主人であらう。麥飯をのみ食はすので麥計との義であつたのが、計の字に斗と似てゐるので麥斗を用ひ讀むことゝなつた。
○富士太郎　常磐津の「花吹雪富士菅笠」を普通に「富士太郎」と云ふ。「コヽに此役をかう取つて外八文字のくり出し歩み」云々と道中のところがある。其の所作事の眞似をしたのか、順序に狂ひがあつたのを指摘したのである。
○松葉屋言葉　松葉屋半左衛門は江戸町一丁目の角にあつた。娼戸のいはゆる大藩では其家に通用する流行語があつた。松葉屋のは松葉屋言葉と云ふ。例へば「おす」（ござります）「さつしておくんなんし」「わつちといへばかたつきし」「つかはす」（かうしてつかはす、あゝしてつかはす）「これ〳〵」（萬事、物を指して「これ、〳〵でおすなの類」）「きいした〳〵」（來た〳〵）「出しきつて」（うぬぼれを出しきつての類）「しのびをこめる」（ひそかにの義）「じれつたうす」（じれつたうござります）。

の言いなんすには、いつそ、むら様は酔い潰れて寝て居なんすから、今宵けへし申して心許無ふありいす。留め申そうと言いなんすが、そふしても良かろふかね。金様、ゑゝ加減に騒ぎなんし。

（喜八）二階の客人は※引け時分に歸し申せば良い。※袖の梅でも買つて來てあげたが良い。金さんの道中は、※おそろが池の大蛇、※一瓢や麥斗が昔を思い出します。

（歌菊）ヲヤ〳〵馬鹿らしいよ。道中の眞似かへ。※富士太郎が跡先になりいしたよ。二階に外の客人もありいす。ちつと靜かにしなんし。歌野や、又眠るじやアねへか。

（禿）喜八さんよしなんし。重たくつてなりいせんよ。

（喜八）だまつて居ろ。おしつけおもたいものを――載せにやアならねへ。

（禿）花魁も歌の介さんと此處へ度々落ち合ゑなんすから、※松葉屋言葉がうつりなんしたよ。

（喜八）そふ手前もなんしたと言ふも良いてんだの。

○ずい歸り　ずつと歸る。
○内の工面を十面つくつて　内の工面を[illegible]つくつて九、十、十一、と數を讀みこんだもの。
○十一面觀音　六觀音の一。大光普照觀音とも云ふ。頭上に更に十面の觀音があり、十一面觀世音と稱へる。
○なげやり三寶　單になげやりといふことであるが、[illegible]の上から言葉の尻へ添へたもの。
○冷飯　[illegible]、三男の息子を言ふ。
○赤いべゝが云々　新造は[illegible]、新造が[illegible]ることを云つたものか。
○一ぽん鐘　[illegible]時の合圖。
○引けが見へねへ　まだ一向に見世を引かない。引け四つが報ぜらるゝ、夜見世の遊女は店頭を去りて自分の部屋に歸る。
○名代　遊女が貰ひなどで部屋に出られぬ際に、その代りとして新造などが相手に出るをいふ。
○達引　意氣地を張ること。
○六藝　支那に於ける士分以上の者の學修すべき六種の藝、禮、樂、射、御、書、數。

金十は旦那の金で奢りちらし、中の丁は人目多しと揚屋丁でしやれしが、最有にのぼり詰め、鶏を無性に憎がり、鐘つき坊主を親の敵の様に言いしが、朝の歸りのずい歸りには、大門で、必ずへの一聲が耳に殘り、圍ひしてある井戸のきはの路の悪い處へ來た時分、もしへ何ぞ忘れやアしなんせんかと言われ、かぶりを振るら人目を恥おれども、心の中では内の工面を十面つくつて案じ、十一面觀音へ願も掛けられず、七面どうなりとなげやり三寶になりけるも、皆女郎買の御冷飯なり。

（嫖客）こゝの家にも赤いべゝがいける事ある。もふ一ほん鐘だぜへ、今夜はなぜか引けが見へねへの。
（禿）むかふに人〳〵。早く來さつせへよ。
（金十郎）あすの晩は、茶漬を食いのずい歸りにだぜへ。今夜は大方萮園お萮の井といふ名代らしい晩だ。
（喜八）悪推ばかりおつせんす。行燈に無駄がき、もう歸るも古いやつね。
（若い者）もふ歌の介様は、とんだお志の良い達引も御座ります。手は良し、歌はなさる、ほんに六藝とやら、やつかいとやらが揃いやした。
（嫖客）またはあそこの格子先、面白そふに話しして、居さしやんしたと聞く時は、しみ〴〵腹もたつた山。

○

○腹もたつた山　腹を立つた龍田山と洒落て言つた。龍田山は奈良縣生駒郡三郷村にあり。麓に官幣大社龍田神社を祭る。

○大のもふせん　毛氈、敷物。しきものが轉じてひきもの、つまり親方に損害をかける義。

○やぢお　おやぢを逆に云ふ。

○古わんぼう　古褞袍、古いどてら。

○たのしき　たのもしい。

○君傾城　色を以て人を溺らせ國を傾けるといふより出でた語。遊女の上等なものゝ稱。

○金きん　當世仕立の意、現代式。モダーンな振り。

○大通　遊興の道に最もよく通じたもの。

○どんつう　普通にて、通ならざる人。

○雪駄直し　賤民のなす業であつた。

○頼風　『小野道風青柳硯』の狂言に出て來る道風の弟、女御の御付女郎花と不義をしたので勘當される

○ひてうの別れ　飛鳥の別れ。行方も知らず、どこともなしに行つてしまふこと。

金十は流連けなどが度重なり、親方の大のもふせんとなり、親方のやぢお甚だ腹を立ち、古わんぼうに寢蓙一枚にて、お拂箱の身となりしが、いつぞや喜八が、まさかの時はどふともと言いし言葉に任せ、料理番でもして見る氣になりしが、世にありし時、質に取りし鐵刀木といふ三味線は高い物なる由、これから箍屋をはじめけるが、初手の内は釣瓶の底のぬけたのや、四斗樽を切つて水桶にする位の事をして裏店住居して居るうち、揚屋丁の喜八、たのしき奴にて、淺草竹丁に表店を借りて手桶を夥しく仕込みける。

（主人）おのれ不屆な奴、君傾城に心を奪はれ、憎い奴じや出て行け。

（手代）ア、氣の毒な事だ。今迄二の膳を食つた代りにこれからは御冷飯の段だ、あんまり金きんが過ぎたから、あの通り大通のしまいはどんつうには劣つたものだ。

（雪駄直し）あの人も、どふやらおらが仲間になりそふな人だ。

（金十郎）久しいものだが頼風といふ身だね。蓙一つでひてうの別れ、おのれを責むるおのが家、出で、行くこそ悲しけれ。

○啌を筑紫の果　啌をつくといふのを筑紫の果にかけた。
○函谷關　支那河南省の西部にある關門。谷深く崖高く、險要を以て名高い。
○安針丁　日本橋安針町。もと三浦安針＝英國人アダムスの邸はつた地であつたからこれが町名となつた。安針とは船の航海長の義である。此町には鳥商が多かつたから此にては商か云つたのである。
○有馬山　攝州有馬にひつかけて「あり」と云ふ意に用ふ。
○根つからさへやせん　大して冴えもしない。
○手間取　臨時に手間賃を貰つて仕事に傭はれる人。
○萬八のおつかぶせ　「嘘八百萬八傳」にある萬八にだまされたやうな。
○がんといふ咄　何と云ふ咄のもぢり。

それより喜八が店請になり、竹丁邊に店借して桶屋をはじめしが、今日は長屋振舞をはじめしが、一つ長屋の左次兵衛が咄に、おらは啌を筑紫の果で御座るが、とほうもない寒い國で、雁や鴨が大きな池に氷り付いて居るのを、頸をねぢつては取り〳〵、腰へ付けて出ます。これを通いで取りに行故に、雁取帳といふを拵へ、函谷關で其帳面を改めます。金十これを聞いて肝をつぶし、何とそれは取つて來て安針丁へ賣つてやるといふ所はどふだあらふ。そりやアいゝ點さ。どふぞ路銀を拵へて金儲けに行たいものだ。

（金十郎）今時の傾城に誠なしとは啌さ。誠も少しは有馬山、又、喜八が諸事世話をしてくれの鐘としやれるも根つからさへやせん。

（左次兵衛）どうや〳〵。

（金十郎）モウお一つお過し〳〵。

毎日箍屋殿は、昔の奢りに引きかへて、がたりびしりして憂きを送りしが、いつぞや雁の氷り付いて居る咄を聞き、内へは市に賣出す手桶を萬と拵ゑんと※手間取を多く入れて、其身は雁の國へと赴きしは、話の種とぞなりけるは、どふやら※萬八のおつかぶせらしい仕打を一肌ぬ

○雁がまや　「がん」は雁と贋を掛けた。贋は、にせ、いかさま、まやかしで、次の「まや」に同じい。
○奈良晒　大和國奈良から製出される麻布。本讀むこともならぬに言ひ掛けた
○黄帷子は高く思へども　晒らさない晒布「さらし」。近江國犬上郡高宮の産。高宮布といふので高く思へども續けたのである。
○雁木鑢　目の粗き鑢を云ふ。がりがり擦るより無暗にせつく意にこつた。
○樂雁をせん志　樂雁は落雁と云ふべき所を、樂をするといふに掛けたのであらう。雁が列をなして地上に下りようとするのを落雁といふ。
○大盥　大違ひの語呂を通ぜしめた。
○人の手桶をかり箍に、つるべた錢　人の手をかりて釣り上げた金錢。手桶、箍、釣瓶と續けた。
○猿頰　片手桶、猿みたいな馬鹿はたれし。
○中田圃　吉原土手に近い田圃。
○頼光巖に腰をかけ　中世「頼光衣洗の段」に頼光巖に腰をかけ、是より末は道もなし云々とある。

けて參ります。
（金十郎）此の箍かけて仕舞つたら、柳行李を買つて來て、雁をしよしめに行ませう。若し取れぬ時はがんといふ咄だ。

金十雁國の道行

へがんと打つ、鐘に恨は多けれど、雁金といふ名に惚れて、噓をつくしの雪國へ、雁取帳を取りに行く、心の中の慾心の、利口に口はしやべれ共、一體雁がまやなれば、本讀む事も奈良晒。黄帷子は高く思へども、諸方のかり金雁木鑢とせつかれて、どふぞ今度は雁をいくらも捉まへて、樂雁をせん志、内へは手間を入れ仕事、當所もなしに旅へ出るとは大盥、人の手桶をかり箍に、つるべた錢を儲け溜め、世間の奴を猿頰と、眺めて見んと思いつゝ、旅の衣裳を磨き箍、笠傾けて出でゝ行く慾の程こそうたてけれ。

（金十郎）何だかとんだ處へ來た。中田圃と言ふ處だ。これより先に道もなく、頼光巖に腰をかけ、といふ風景だ。

○がんと言ふ目にあふ　ぐわんと擲られたやうなひどい目に逢ふ。

雁國へ行ついて見た處が、左次兵衛が咄に違はず、雁はみんな氷り附いて居る故、雪の中を押分け／＼、頸をねぢつては腰へはさめば、其重たき事は挽臼を腰へ附けた様なり。雁どもは人を見ても飛ぶ事もならず、みんな※がんと言ふ目にあいしは、此の國よりぞはじまりける。

（金十郎）コレハ／＼すさまじい雁だ。みんなぢつとして居るが、どふやら狐先生の化かすと言ふ仕打では無いか。あひるなれば來い／＼、豆食はせうとも言わふが。雁來い／＼、小豆を食はせう。

○

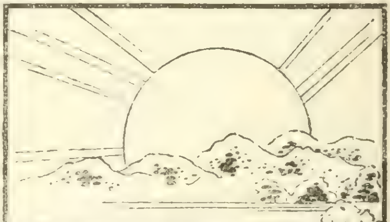
○松若　「隅田川」にある梅若の兄で、幼時天狗にさらはれたと云ふ。

○鶴に乘つた仙人　支那晉の王子喬などのこと。

○しつぽんの地團駄　「雁が飛べば石亀も地團駄」の諺。（既出）

思入れ雁を腰につけて、背負つて立たんとする時、東方しののめの景色あかく、朝日たち登りしかば、腰に挟みし雁の氷次第々々に解けて、うそ八百羽程の雁が羽根ばたきをする音は、鐵砲玉に帆をかけたるが如し。金十郎も一時に雁と一緒に飛行く有様は、其の昔松若は天狗にさらはれ、金十は雁にさらわれ、見ぬ國々を見下し歩くこそ可笑しけれ。

（金十郎）　※鶴に乘つた仙人は見たが、雁に乘つたは是がはじめて、さぞ内では駈落でもしたと思ふであろふ。ほんの雁が飛べば※しつぽんの地團駄。



○意氣ちよん國　いきちよんちよんの國。花柳界のこと。
○きやんこくかん　函谷關の訛。「うんつく」[illegible]、愚鈍、とんまの意。
○大通國　通人のゐる世界。
○似た山のうぬ櫻　次項「鞍馬の山の雲珠「うず」櫻」のもぢり。
○文の使は來たりぶらまの山　謡曲「鞍馬天狗」にある「山里の使は來たり馬に鞍、鞍馬の山の雲珠櫻」。
○中居　遊女屋などで、客に應接し、その用をたす女中。
○太鼓　太鼓持の略。幇間。[illegible]客人に附き從ひ、一座の取持をする者。
○罰利生ある國々　罰も利生もある國々。利生は衆生に對する利益。
○雲をつかむ　何が何だか分らぬをいふ。
○扇屋の五明亭　吉原江戸町一丁目扇屋宇右衛門、別號を五明樓といふ。
○通を失ふ通を知らず　久米の仙人は美女を見て飛行の通力を失ひたが、自分はその通力を知らないので、墜落も出來ない。
○比翼の鳥　翼を竝べて飛ぶ鳥。白居易の「長恨歌」に「在天願作比翼鳥」。
○久米の平内　徳川初世の武人で

見おろせば※意氣ちよん國の有樣は、内に錢少く、※きやんこくかんは其の昔、こりやまたといふうんつくが、とほうもないを植へしとかや。※大通國には大樣に、錢金萬とまき散らし、※似た山のうぬ櫻、※文の使は來たりぶらまの山、女護の島には男無く、むかふ嶋の如くなる舟着きよろしき所にて、舟から客のあがる時、棧橋へ迎ひに出るが茶屋の役、※中居と言ふとも中に居ず、※太鼓といふとも音もなし。金次第にて※罰利生ある國々を、雁と一緒に飛行、とまりも知らぬ雲の上、※雲をつかむといふ事も、かゝる事をや言ふなるべし。

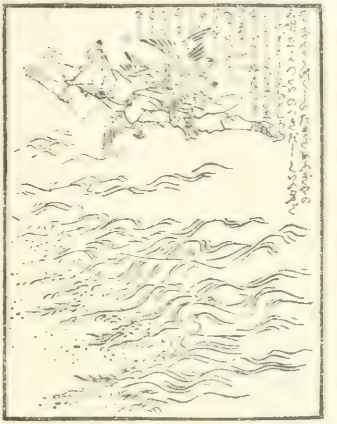
（金十郎）目が舞ふが美しい玉だ。※扇屋の五明亭か、蔦屋の突出しと言ふ身だ。どふぞもし、こんな處へ落ちて見たいものだ。自由にならぬものだ。ア、久米の仙人になりたいものだ。※通を失ふ通を知らず、仙人氣にもならぬ。

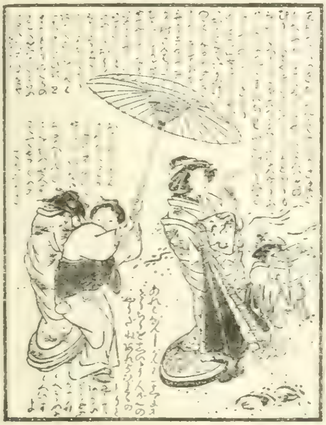
（花魁）あれ見なんし、雁と一緒に道中をしいす。人間の樣だね。あれが※比翼の鳥とやらでありいせう。どふか助兵衛そふに見へいすよ。

（女）お崎どん見さつせへ。アレが※久米の平内とやらいふ仙人かの。

（新造）お前飛んだ事をおつせへす。そりやア久米の天人さ。

○





金十も物を食はずに飛歩きし故、※むしづも走りしまひ、腹が背へつく程ひだるくなりし故、帯は段々ゆるくなるに隨い、雁は殘らずがや／＼で、※いつ來なんすと言ふ捨言葉の暇乞もせず飛行く故、金十は羽なき鳥の如くに て、伯良が羽衣を質に入れた如く、大人國へ眞逆様に、稻光りどろ／＼の世話もなく、雲の破れから落ちかゝりしは、久米の仙人二代の後胤ともいふべし。

（金十郎）さて大きな頭の國だ。久米の仙人はもゝの白いを見て通を失ふが、おれは頭の通を失ふとは、世が末になれば、股と頭程違ふものだ。

大人國の名主殿の引窓から茶釜の上、藥罐の蓋の上に落ちしを、娘や母親寄り合、弄びにする。

（娘）良くごらうじまし、※豆人形とは大方此事で御座りやせう。

（母親）あんまりいぢり廻して潰さねへ様にしやれ。たゞしは奈良の大佛の娘か、※釋迦が嶽が花魁と※ねぶにしたる酸漿の如くとり扱いけり。

（金十郎）さても大きな女だ、仁王の嫁御だあろふ。といふやうな事か。

（娘）あれ何か言いやすよ。

本姓は長瀬、久米は其の姓である。頗る强勇であつたと傳へられる。今、東京淺草寺境内にその祠がある。こゝは久米仙人を久米平内と誤つたのである。

○むしづも走りしまひ　讒い唾液、それさへも出て了つて口がからからになる。

○いつ來なんす　別れの際に遊女が客に對して言ふ詞。

○羽なき鳥の如くにて　謠曲『羽衣』に「今はさながら天人も羽なき鳥の如くにて」。

○伯良が羽衣　謠曲『羽衣』の說話。三保の松原に伯良といふ漁夫あり。天人の羽衣を奪ひ隱し、天人に東遊「あづまあそび」の駿河舞を舞はせる、後天人羽衣を得て天上に歸る

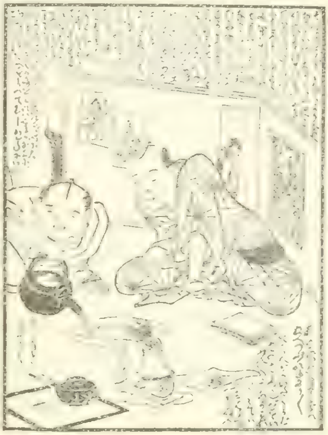
○稻光りどろ／＼　芝居用語。どろ／＼は變化、妖術、幽靈等の出滅の場面に大太鼓をどろ／＼と打つを云ふ

○豆人形　芥子人形とも。極く小さい木彫の人形で、絹布の衣裳を着附けたもの。

○ねぶ　酸漿の音がうまく出ないのを云ふ。

○釋迦が嶽　寛政頃の相撲取で極めて丈の高かつたので有名である。それで奈良縣大峰山脈中の一高峰を名としたのである。

それより大人共皆々寄合、汝は何人なりと言ふ故、我は大日本江戸の生れなるが、雁國へ來りし譯、並に懷より歌菊が文など出して見せければ、其方が商賣は何なりと問し時、私は篭屋なりと挨拶する。そんなら手間に瓶をかけてくれろと頼む故、まづ飯の種にありつき、珍らしき人なりとて、大盃に酒を振舞ふ。金十はその盃を両手取り、からだ中の力を出してやう〱持上、半盞飲みしが、其酒凡そ三升ばかり、肴は何か知らね共、挟んでさしたるを、両手にて俵を持つ様に肩へ上て腰をのし、横の方から、ちつとづゝ食いける。時に大人どもは歌菊が文を見れば、細かな上に小さくして見へず、よつて蟲眼鏡に入れてこれを讀む。



(金十郎) あい、こぼれますではねへ、つぶれます〱。花さんが描いた浮瀬の盃が随分大きいが、これから見ては小原でもねへ。

(大人の一) しつかりと持て〱。

(大人の二) おれが所の手盥も、ちと小さいから、大きくして貰わふ。直徑八尺位あればいゝ。

(大人の三) 何だ「※ようも〱せんじはこふしに御すゝませなされ、さみしく夜をあかしな[illegible]」いやな奴だが良い手だ。歌菊といふはどんな女だか見たいものだ。

(大人の四) さあ、おれにも見せたが良い。手前ばかり

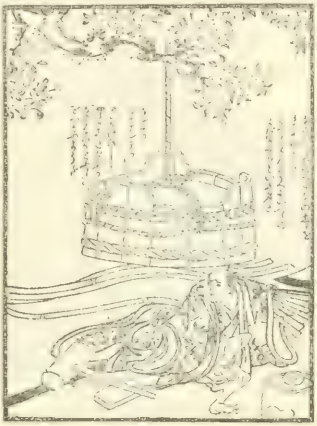
○花さんが描いた浮瀬の大[illegible] 大阪に[illegible]といふ[illegible]ありて、こゝに白菊、君不知などといふ大[illegible]があつた。花さんは[illegible]（[illegible]）のことであらう。

○小原 『事物異名』酒盃の條に「叵羅[illegible]の名に[illegible]ふといふものと見ゆ」とある。五山の僧などが酒盃を叵羅といひしより、小盞ををばらと云つたと思はれる。

○ようも〱云々 よくも〱 先日は格子(見世格子)に涼ませたので(お茶を挽かせ[illegible]ので)、昨夜は淋しく一夜を明しました。

○見せこよみ 見せ[illegible]を洒落て云ふ。

○大人の上着をしばし假り



見ずともちつと見せこよみ。※

○

手盥の箍を懸けて見る所に、江戸の井戸側より十層倍大きし。よつて色々にして櫻の木に吊し上、段々と箍を懸けしが、縁の組箍一つに色々と工夫すれども懸らず、其上酒はまはつて來る。そろ〳〵と泣き出す故、大人共はどつと笑ふ。其時金十そばにありける※大人の上着をしばし假りに着て、既に拍子をはじめける。

（金十郎）　どうせう寺※雁に恨みは數々ござる。初手に雁をとる時は、諸行無常性につかむなり、後に羽をのす時は、世上滅多に飛びあるき、※天上のゑい腹も寂滅爲樂となり、大人國へどつたり落ちるぞはかなける。

（大人の一）　何の事はねへ、俄の獅子を舞ふやうだ。

（大人の二）　※三つ蒲團の上に五つの夜着かぶりと言ふ身だ。

（三味線の音）　チンチツツンテンテツトン。

（大人の三）　アレが※慶子とやらがした身振りかの。※蠅が燈心をつかふようだ。

に着こ云々　[illegible]道成寺」の「あれにまします宮人の、烏帽子をしばしかりに着て、既に拍子をすゝめけり」を洒落る。

○雁に恨みは數々ござる　長唄「京鹿子娘道成寺」の文句取り。「鐘に恨は數々ござる、初夜の鐘を撞く時は、諸行無常と響くなり、晨朝の響は生滅々已、入相は寂滅爲樂と響くなり、聞いて驚く人もなし」。

○天上のゑい腹も云々　腹も減るといふをもぢる。「えい」は間投詞。「寂滅爲樂」は[illegible]の現れ[illegible]佛の國の眞の樂しみ、といふ意。

○俄の獅子を舞ふ　「俄」はもと祭禮の[illegible]道」、後江戸吉原等に[illegible]座敷で演ずるやうになつた一種の狂言で、滑稽、洒落の動作と問答とをなす。なほ長唄に「俄獅子」がある。

○三つ蒲團の上に云々　金十郎が大人の上着を着た姿が、丁度三つ蒲團の上に夜着を五枚も重ねて被つたやうに見えるといふのである。「三つ蒲團」は遊女の敷く三つ重ねの蒲團で、紋日などに馴染の大盡から贈られるものである。

○慶子　俳優中村慶子。

○蠅が燈心をつかふよう　[illegible]力なく[illegible]のさま。

どふしても中箍が懸らぬ故、名主殿へ持參して旦那寺を頼み詫びをしている時、不思議なるかな、胴箍がみり〳〵いふが最後、其の跳ねたる音は玉屋が仕掛の如くなりしが、其の跳ねる先に金十郎は居合わせて、其の跳ねた箍の勢に、いづくともなく跳ねとばされ、又どんな處へ※とび八丈島へでも行けばいゝがと、むだを言いながら、天道樣次第におつこちる工面をする。

（大人の一）　あれ〳〵、褌の下りが見へます。どこもかも恰好より大きそふだ。

（大人の二）　※一文凧の緒の切れたやうだ。

（大人の三）　とんだ事とは大方こんな事だあろう。

○

金十郎は跳ねられたる勢に、いづくともなく飛びあるき、淺草藏前通へ飛んで來て、やう〳〵おのれが家の前の手桶の積み上げたる上に落ちかゝりし故、家内の手間とり共、何事やらんと見てあれば、旦那殿なり。これ

○玉屋が仕掛　其の當時花火を取扱ふ店として鍵屋、玉屋があつた。仕掛は仕掛花火。

○とび八丈島　飛八丈と八丈島とを掛けた洒落。飛八丈は八丈島に産する八丈紬の一種で、梓色がかつたもの。[illegible]。八丈島は東京府に屬し、伊豆七島中最南の大島。

○一文凧　安凧。

○達引き狂言　意地づくで打った芝居。

○天道人殺さず　諺。天の慈悲の廣大無邊たるを云ふ。

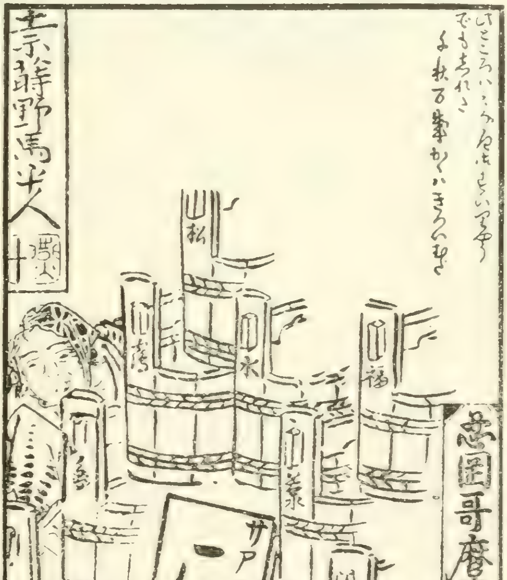
○ある圖な奴　よくあるやつ。

はく丁度よい時お歸り、明日は淺草の市なれば、留守に拵へためし、手桶を殘らず賣出さんと言われて、金十郎も件の樣子を話し、大笑いをして、夜も明ければ、手桶を運び出し、奥山狹しと積み竝べしに、吉原より來りしとて、只一口に十二萬三千四百五十六の手桶を買い上げしは、膽の潰れし事なれども、金十は金儲けした後で、良く聞けば、歌菊が喜八と言い合せ、主に金も送られまいしと、遣つてのけたる※達引き狂言。

（金十郎）犬の糞や馬の糞のねへ所へ落ちればいゝが、※天道人殺さずだ。あんまり行過ぎて、海へでものめり込み、青海苔にでもなつて、年玉になるも良いところだあろう。

その間に金十は先主より呼び戻され、もとの如く番頭株となられ、歌菊が年があいたら女房になろうほどに、廓へちよつとなりとも御出は御無用、御身の爲惡しといふも※ある圖な奴と、目出度を祝しけれ。

此處は皆様御推量でも知れた千秋萬歲、書くはきつい無駄。



御手料理御知而已

大悲千祿本

芝全交作
北尾政演畫

※千手觀音とも言ふべき佛も、不景氣には是非もなし。痛わしや千本の御手を、安く損料貸にせんとの御誓願、※面の皮屋千兵衛といふ※山師、大悲の御手を一本一兩づゝに※仕切り、金子千兩、※手切金を出し、手前で損料貸せんと切拂ふ。

（觀世音）※皮切三本堪へたら、モウ痛くもなひ。悪ひ手があつても撒き直しはなし。

（てれめんてい兵衞）※せんじゆつめた事だ。こちらの方は大方手古摺りました。

※ばら〳〵〳〵。

てきり金、千兩箱。

○千手觀音　六觀音の一。千臂を有し、各手掌に一眼を具する菩薩で、詳しくは千手千眼觀音といふ。千は數の滿ちたるを表し、大悲・化用の無限なることを意味する。
○面の皮屋千兵衛　「面の皮千枚張り」のもぢり。
○山師　投機師。
○仕切り　定め。
○手切金　手切りの代金に手切れ金を洒落る。
○皮切三本　桃栗三年。てはじめの三本。
○せんじゆつめた　詮じつめたの地口。
○ばら〳〵　手を切去る音。

○薩摩守忠度　平忠度は岡部六彌太と戰ひて片手を切られた。
○茨木童子　渡邊綱に片腕を切られる。
○手のない女郎　手腕なき女郎。
○てんぼう正宗　刀劍鍛工。正宗は片手がないと云ふので、てんぼう正宗と云ふ。
○てなし貸　日濟(ひなし)貸といつて、借金を、毎日少しづつ返させる方法の洒落
○てれめんてい兵衛　テレビン油の主成分で、塗料として用ひられる「てれめんていな(葡萄牙語 'Terebinthina')」を人名として用ふ。
○千手觀音御つぶし　面をつぶす事。
○御にぎり結　にぎり睾丸。
○指人形五人組　わざと省略する。
○御心中云々　情人に誓ひを立てる爲に指を切りなどして、若し五本の指が揃つてゐない樣であつたらば、手を返濟に來ても受取らない事。
○十七屋講中　七つ屋は質屋。手の指は十本故十七屋と云つたのであらう。
○桝掛筋　手のひらの眞中を、横に貫いた筋。良いとされた手の筋である。
○一よがた　一餘がた。一割分程。

千手の御手を損料貸にするときくより、先づ※薩摩守忠度を先として、※茨木童子、人形芝居の捕手、手のない女郎、※てんぼう正宗、無筆、三味線の彈き習ひ、その他手の入用の者、貴賤群集して借りに來る。

※てなし貸の手代※てれめんてい兵衛、帳を付る。

(店にかけてある規定書)

定

一　一鳥渡がし　代三十貳文
一　一日一夜　代銀三匁
一　一ケ月　代金二兩
一　一年切　金拾兩
一　千じゆの御手に御座候間※千手觀音御つぶし御用捨の事
一　御懷中御にぎり結※幷指人形五人組御用捨の事
※御心中御用ひ指無御座候而者受取不申候
右之通御座候　以上

月　日　※十七屋講中　㊞

(面の皮屋千兵衞)　※桝掛筋のあるは、※一よがた高うござる。

大悲の御手、澤庵漬の大根の御手の樣也。

(籃)　モシお足のお餘りがあらば下さりませ。

(忠度)　拙者事は御存じの通り、借人知らずと御誌し下だされ。

(觀世音)　※痿びて落ちたは誰にやろ、かにやろ、いとしい

○借人知らず　讀人不レ知の洒落。忠度の歌を『千載集』に入れた時、讀人不レ知とした。
○瘦びて落ちたは云々　當時の童謡であらう。
○毛のない腕は云々　鬼であるから毛のない腕は用ひられない。
○神田の臺の與吉　神田で三寶其の他の臺の物を販賣してゐた與吉。
○切物　品切れ。
○猪の毛なれば愛宕山　山城の愛宕山は猪が多いので名高くあつた。今でも雲ケ畑の御獵として知られる。
○鹿の毛なれば春日やんま　春日の神鹿。狂言『末廣がり』に「かさをさすなら春日やんま云々」。
○與吉が女房　與吉の女房は美人であつたが、有るべきところに無かつたので當時有名であつた。
○氣が無い　いやだよ。
○淺間山から云々　天明三年信州淺間山噴火、七月六日の夜から關東筋毛灰を降らすこと夥しくあつた。
○漣やの短冊　『千載集』に讀人知らず「さゞなみや志賀の都はあれにしを昔ながらのやま櫻かな」。
○西にもかまわず　謠曲『忠度』に「左の御手にて六彌太をとつて投のけ、今は叶はじと思召して、そこのき給へ人々よ、西拜まんとのたまひて」。

もんのに、やりまんしよ。との御誓願。

○

茨木、觀音の腕を借りけれども、※毛のない腕は用いられず、※神田の臺の與吉を賴み、毛を生して貰ふ。
（與吉）　此節猪の毛は※切物でござるから、鹿の毛でつけました。
※猪の毛なれば愛宕山、※鹿の毛なれば春日やんまへ御出なさい。
※與吉が女房――茨木さんじや、※氣が無い〳〵よ。
（與吉）　私が妻などは唯今では、むじや〳〵と――ました。
（茨木）　※淺間山から降つたのではないか。
忠度の打落されたは右の腕。忠度少し急き込み給ひ、餘りの嬉しさ、矢つ張り左の手を借りて來給ひ、※漣やの短冊も左文字に出來、これはどうだと右の手を借りにやり給へば、最早貸切りて無いとのこと、忠度今はかなはじとや思し召し、左の御手にて無駄書をし給ひ、※西にもかまわずこれは仕舞つた、南無阿彌陀佛々々と念佛を稱へ給ふ。
（忠度）　これに就いても、六彌太奴に切られた腕はモウ瘦びたか知らぬ。外聞が惡い、讀人知らずとやらかしておこう。

手の無い傾城共、千手の御手にて客をだましたれども、損料借の御手なれば、間に取に來るには度々困る。

（花魁）禿と言ふ者は、お手が鳴るなら銚子と悟るもんだ。客人はお手が無いなら笑止と悟んなんし。

この子は客人の見ていさつしやるに、氣のつかねへ。早く持つて行きやな。

（禿）それでも取りに來んしたものを。

（客）怖しく手のあるいとだての※たての様だ。

無筆な奴、千手の御手を借り、高慢に手紙證文などを書けども、佛の手なれば、梵字ばかり出來て居て、一つも通用せず、嗇い奴の料簡は格別、只返すのも損なりと、爪へ火を燈し蠟燭の代りにする。これ手燭のはじまりなりと言うも久しい奴さ。

（一人の男）※梵字と書狀と取違へ、今にも用事と言ふならば、梵字で書狀が書かりようか。へんちき〱よ。

（手燭）熱いよふ〱。

○お手が無いなら笑止　前文「お手が鳴るなら銚子」に語呂を合せた洒落。お客は腕のない働きのない遊女に對しては氣の毒だと悟つて貰ひたい。

○いとだて　麻糸を經「たて」とし、藁を緯として織つた席。經の麻布がこまかくあるのを怖しく手のあると云つたのであらう。

○梵字　印度の文字中にて最も重要なるもの。此の文字によつて成る文章をサンスクリツトと言ひ、原始佛教の經典は此の梵字にて書かれた。

○爪へ火を燈す　諺。蠟燭の代りに爪に火を點ずるほど吝嗇なのをいふ。

○梵字と書狀と云々　當時の俗諺のもぢりであらう。「文武二道萬石通」に「今にも軍があるならば、ころんで軍がなるものか、文こも武ツこも言つてみろ」とあるも同様のものであらう。

（無筆の男）　はてやかましい蠟燭だ。

○

其頃、勢州鈴鹿山に鬼神棲みて、國土の民を惱しければ、田村麿に宣旨ありて、退治せよとの勅なれども、千手のお手が無くては、一度放せば千の矢先と言ふ狂言が出來ねば借りに來給ふ。

（觀世音）　貸出して手は一本もござらぬが、とり集めてお貸し申さふ。

（田村麿）　一本南位でお貸しなさらぬか。

觀音千兵衛と通屈し給ひ、貸出したる御手を取り集め田村麿に貸して又儲ける。

千兵衛御手を改める。女郎に貸したは手指がなくなり、握こぶしで歸るは喧嘩の手傷、鹽屋へ貸したは鹽辛く、紺屋へ貸したは靑くなり、下女に貸したは糠味噌臭し。飴屋のはねばくする、飯炊のは凍瘡だらけ、搗屋に貸したは肉刺だらけ。

（面の皮屋千兵衛）　人差指と中指が――がする。こいつはすこ合點が行かぬわへ。

○勢州鈴鹿山に鬼神棲みて　謠曲「田村」による。「然るに君の宣旨には、勢州鈴鹿の惡魔を鎭め、都鄙安全になすべしとの仰によつて軍兵を調へ」。

○田村麿　坂上田村麻呂。平安朝初期の武將で諸賊を平げ、征夷大將軍を拜す。弘仁二年歿、年五十四。

○一度放せば千の矢先　「味方の軍兵の旗の上に、千手觀音の、光をはなつて虚空に飛行し、千の御手ごとに、大悲の弓には、智惠の矢をはめて、一度放せば千の矢先、雨あられと降りかゝつて鬼神の上に亂れおつれは、悉く矢先にかゝつて、鬼神は殘らず討たれにけり」。「田村」因に本書「大悲千祿本」は、此の田村麿の說話からヒントを得たものであらう。

○南　南鐐。二朱銀のこと。一兩の八分一に當る。

○通屈　計算。勘定。

○女郎に貸したは手指がなくなり　客に心中立をする爲に、指を切る　眞心を示すのである。

（觀世音）そんならナニ田村麿殿、鬼神を首尾よく退治めされたなら、損料をつけて千本の手を、※九つの鐘を合圖に待つて居るよ。

（田村麿）言ふにや及ぶ、大望成就した上で、※雨に八本の損料を以て、手を千本お返し申さん。

（觀世音）なにそれまでは田村どの。

（田村麿）觀音樣。

（雨人）さらばア※手手てん〱〱〱〱てゝてゝてゝ手手手手手手手手手手手手手手手てて。

ハテ此ての字が※めの字だと藥師殿へ進ぜたい。

○九つの鐘　十二時の鐘。こゝは午前零時であらうか。

○雨に八本　一本が二朱銀一つだから、一雨には八本となる。

○手手てん〱〱〱〱　三味線の撥音に擬したのである。

○めの字だと藥師殿へ　藥師さまにはめと書いた繪馬などを上げて眼病の平癒を祈る。

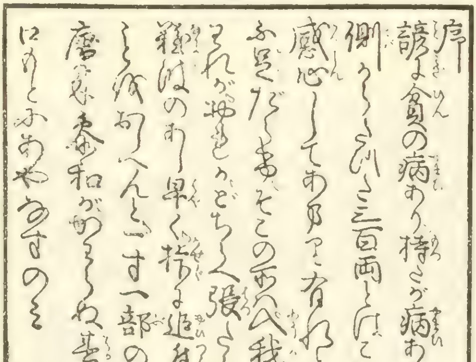
順廻能名題家　莫切自根金生木

唐來參和作
喜多川千代女畫

序

諺に貧の病あり。持たが病あり。※金が敵といふ側から、たつた三百兩とは、こいつは有難いと感心して餘り有れども、算用しては不足だらけ、そこの所は、入我、我入、おれが、われか、われが、おれか、おれか、どちらへ張たら※與かん平、何か※難波のあし早く、※拤に追付貧乏者に、足る事を教へんと、一寸一部の此雙紙は、友人※唐來參和が、變らぬ春の、出放題なる事を、口もとにあやなすのみ。

和光同人※　印



○金が敵・　金は中々溜らず、金錢の爲には身をも亡す事があるので、かく言ふ。
○與かん平　良かんべいの洒落。
○難波のあし　難波の葦。足に引きかける。
○拤に追付貧乏者　稼ぐに追附く貧乏なし」の諺の逆。
○唐來參和　「和唐珍解」の作者。通稱和泉屋源藏。他に唐來山人、質草少々などの別名あり。文化七年歿、六十七歲。
○和光同人　「老子」に「和二其光一、同二其塵一」の和光同塵のもぢり。

爰に御存じの※金々先生の又隣に萬々先生といふ者あり。※七珍萬寶倉に充ち滿ちて、代々榮耀に暮しけるが、物事自由に手の廻るがしきりに煩さく、三日ない共貧乏せば今の思ひはあるまいと、家に傳る名作の大黑を引きづり退けて、貧乏神の繪像を調へ、暦の内の大の惡日を※緣日として信心なしける。

（萬々先生の妻）　旦那のお顏も此頃は貧相におなりなされた。

（客の一）　さればでござります。これでは御家御衰微の基、お目出度うござります。

（客の二）　捨てられる神あれば助けられる神も有がてへか。

（萬々先生）　※をんぼろ〳〵、貧乏なりたやそわか。

（下女）　一昨日來い〳〵。

○

○金々先生　前出。

○七珍　七つの珍重すべき寶。一には金・銀・瑠璃・頗梨・琥珀・硨磲・瑪瑙を云ふと。

○緣日　お祭りする日。

○をんぼろ〳〵云々　呪文の詞。密教の陀羅尼などからもぢつたもの。例へば藥師如來の眞言に「唵呼盧呼盧戰駄利摩登祇莎訶（をんころころせんだりまとうぎそわか）」などあり。「そわか」は呪文の末文に云ふ語で、諸佛を驚覺し加持を願ふなどの心持である

○世上の人に無沙汰をさせる　金を借りた者は仲々返せないので自然に無沙汰になり勝ちである。

◇其の言ふ處は、實際の社會の貸借の逆である。

○きつとした　しつかりした。れきとした。

○人外　人でなし。

○小鰭の鮨云々　鮨賣の呼聲を眞似る。

萬々は信心の奇特も見へねば、いろ〳〵と工夫をめぐらし、何でも矢鱈に貸しかけて、世上の人に無沙汰をさせたならば、金藏も寬ぐべしと、貸金接待の高札を門口にかけて委細かまわず來る人每に貸し出す。

(萬々先生)　御返濟の御あて事がござつては御借用は御無用で御座る。

(借人の一)　私は女で御座りますから、證人をつれて參りませうか。

(萬々先生)　きつとした證人があつては、お貸し申されませぬ。

(借人の二)　隨分申し觸らしまして、横着な借手をあげませふ。

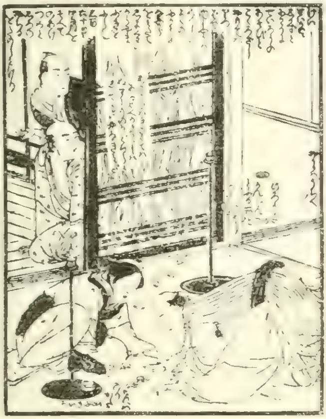
(借人の三)　かやうに申ますからは御返し申といふやうな人外な義に致しませぬ。

(下女)　これで今朝から八百廿八までは數へたが、あとは覺へぬ。

(雇人)　小鰭の鮨、鯵の鮨、なんときついか。

○切落　芝居の追込場、滑稽本名作集六四〇頁參照。
○落ちけれども　減つたけれど。
○紙衣姿　紙衣を着る貧乏姿
○山吹　山吹色の小判。
○城の落ちる　身代の傾く。傾城といふことをふまへた洒落。
○金山さん　遊女の名であらう。
○福は外　節分の夜の豆打ちの逆。
○かんじん　勸進所、肝心を含む。
○所化　僧家で弟子の僧をいふ。
○初會の入目　初めて遊女に會ふ時に要する費用。
○裏約束　二回目に會つた時の遊女との約束。
○三會目の床花　三會目に始めて遊女に祝儀をやるのが通例であつた。
○觀音のあげ物　淺草觀音への

煤掃時分の切落の如く借手の入りは落ちけれども、金藏は百分一もあかず、これではならぬと又々工夫をめぐらしけるが、昔より金持の紙衣姿になるは傾城買いに若かずと、俄に青樓の遊と志し、表は立派で內證は苦しい慾の深そふな女郎を見立て、初會から山吹を降らし、三百六十日に閏月を添へての揚詰と、城の落ちるを樂しみけり。



（遊女）ヱ何とへ、金山さんが一寸來いとへ、アイ行きいしやう。

（萬々先生）福は外へ撒きちらしの、鬼は內へ〳〵。

（拾ふ者共）拾うたがかんじんへ通る所化の僧。

（見てゐる嫖客）あの金は木の葉ではあるめへか、但しは盜み物か、どちらにしてもいやな氣味だ。

（拾ふ者共）これは有難山吹色。

初會の入目、裏約束、三會目の床花、觀音のあげ物、桃の節句や菖蒲葺く軒の燈籠、二度の月と語りながら、是では餘程息つきそふなものと思ひの外、並に外れて大金をつかう故、尻でも來ようかと內證から差圖して、撒きちらした金をとりあつめ、譯もないことぐしく〳〵いつて殘らず返す。

供物、
○桃の節句　三月三日。
○菖蒲葺く　五月五日より仲の町に菖蒲を植ゑ、軒には菖蒲を葺く。
○軒の燈籠　菖蒲葺くとあるが、此の軒の燈籠は六月晦日より七月中に於ける仲の町の盆燈籠を云ふ。
○二度の月　八月十四五六日には仲秋観月の式があり、九月十二三四日の三日は同じく月見を催す。片見月を忌み、前月の月見に来た客は必ず此月の月見を約す。
○内證　女郎屋の亭主の居るところ。又その亭主をいふ。
○ぐし〳〵　つべこべ。
○くゝり付られん　無理に押附けられるであらう。
○荒錢　荒っぽい稼ぎ高く
○棒組　相手の駕籠舁。

（遊女屋の主人）　ソレ御前様もソレ通とか何とか、ソレよしかへ、ところをずつとね、ソレかへる金。ソレよしかへ、へ、、、、、、、、。
（萬々先生）　手前のいふ通り、おれもソレナソレ、ずつとソレだによつて歸りは歸らふが、金は難澁だの。
（遊女屋の内儀）　わつち共も戴きたうはござりやすがこんなに御貰ひ申しやしても内證でやかましうござりやす。

女郎屋の仕打にぐつとふさいで夜の明けるを待ちかね、歸る途中より駕籠に乗れば、先に乗りし人の忘れて落せしと見へて、四五百兩も財布に金が有けるが、滅多な口をきいたら又こいつもくゝり付られんと知らぬ顔して、
（駕籠屋）　私共は荒錢をとりますから、そのやうに戴きますと冥利が惡ふござります。御慈悲でござりますからモウ酒代は御免なされまし。
（萬々先生）　ソレでも手前、乗る時、酒代は遣り次第ときめたから、何といつてもやらねばならねへ。
（駕籠屋）　棒組、下さらぬやうにお願ひ申しやれ。

○江戸節　河東節のこと。

○細い奴　太い奴の逆。金を卷上けるは太い奴。金をおし附けるのであるから細い奴。

○しやつ面　面と云ふのを强めて云ふ。

○けつかる　ゐやあがる、

○水あるまじり　水氣のある善くない米。

○雨に五升　非常に桁はづれの高値である。

○美濃や尾張　美濃米、尾張米は質がずつと善い。

萬々はさだめの場より降りて江戸節など語りながら行き、うしろから以前の駕籠舁、駕籠の中に落ちてありし金を持つて追つかけ、無理無體におつ付る故いろ〳〵いゝわけをすれどもきゝ入れず、後には喧嘩となる。

（萬々先生）知りもせぬものを人に言いかけをする細い奴等だ。

（駕籠舁の一）入らねへといふならしやつ面へぶつ付て歸れ。

（駕籠舁の二）正直なことをいへば人が恐がると思つてけつかるか。

今年は世の中も穩かなれば、澤山米の買置をして、下りを見て賣拂ひ損をせんと思ひ付、手代共へ言い付、諸國の米を買置きをする。

（手代）常陸や磐城の水あるまじりを雨に五升で買置きました。

（萬々先生）その相場なら、美濃や尾張は二三升位の事だろう。何でも働いて高く買つて呉りやれ。

〇せき 咳。減ることを云ふ。

〇鐵火打 荒つぽい博徒。

〇胴 胴は雙六の骰子を入れた筒を振る所から、賭博の親元を胴元、胴取、胴親などといひ、略して胴ともいふ。此では賭者がめい〱胴元を兼ねて廻り壺(筒)でやる。ところが丁に張つても半に張つても、いつでも偏つて、相手の反對へ〱と出るので、自分が胴元となつたところへ澤山にころげこんで、大儲けをした。

〇臺が一でひつきり 「臺」はわざ、基礎。「ぴん」は采の目の一の面。「ひつきり」は結局の所、つまる所の意。

〇よとう博奕 夜盗博奕か、不明。

(萬々先生) これで金藏もちつとせきが出來やう。嬉しや〱。

博奕を打つと身が持てぬといふことを聞いてこれ屈强と大勢鐵火打を集め、四割八分を七割ぐらいにして、胴をとりはらひかけけれども、因果と張りがかたつつりになつて、空目へ〱と出でければ、したゝか胴へひるて存じの外儲ける。

(萬々先生の妻) 旦那はどうだ、よさそふか、それでは又御機嫌が惡からう。

(萬々先生) ちつとうけつこと云つて、誰ぞ手を出さへせへ、氣のきかねへ。

(博徒の一) 臺が一で、ひつきりがソレ六だ。よしか。

(博徒の二) このやうな忌ましいよとう博奕はねへ。

(博徒の三) この博奕は一から六まで張れば損はねへが、そふいふ張はみんな嫌いだ。

(博徒の四) 一番もかけねへ。

○富　一枚幾らと云ふ値で富札を賣り、日を期して寺社の境内に於て神官僧侶が番號札の入つた箱の中を長い錐にて突き、其の當り番號を發表する。之を富を突くと云ふ。其の當つた番號札を有つてゐるものがそれ〴〵定まつた金を貰ふ。最後の高額の札を止めの札と云ふ。斯くして當つたものから、其の幾分を他に施與せしむる定めであつた。
○見德の惡い夢を　おみくじで凶と出てゐるのを。
○明神、天神、感應寺　江戸、神田明神、湯島天神、谷中感應寺。時代で相違あるが、この三つを江戸の三富といつたこともある。
○つめ　つの上に一字あるやうだ。本所の一日、二日、三日、四日あたりの寺院で行つた富ではあるまいか。
○止　富籤の最後に當る最も多き金高のものを云ふ。
○はな　小さな割戻し。
○家尻　家の後壁。
○金藏の途々　まるで、雀か鼠でも捕へるやうである。
○匂を嗅ぎ〳〵　此樣子を探りながら。

する程の事が間違ひければ、世の中には富で身代をしまふもあるから、さらばこれからつけてみんと、その身は勿論、手代どもまでにいゝ付、見德の惡い夢をいくらも買い、無性に札をとゝのへる。
（手代）　明神の百枚ら、天神の五十枚ら、つめの七十枚ら、感應寺の五十枚が五十番ながら皆當りました。一から止まであいたけ出ました。一枚もむだはございませぬ。

（萬々先生）　ほんに當る因果なら、はなばかりでおけばいゝに、一までとるとはあんまりだ。
（手代）　私共が不働き、申上やうもございませぬ。
　此上は盜人にとらせるより外はなしと、藏より金を取り出し、家を開けばなしにして、夫婦は勿論、手代下女はしたまで、いづくへか出行く。
（萬々先生）　出入の不自由のないやうに、家尻をば大きく切りやれ。そして金は取りよいやうに纏めておくがいゝ。
（手代）　これをしまつたら、盜賊除の守りを引つぱなしておこふ。
（萬々先生）　まんまと盜人が來ればいゝが。
（手代）　金藏の途々へは撒きちらし置きました。
（萬々先生）　アヽ、間があるなら荷拵へをして、擔ぐやうにするといゝ。
（手代）　匂を嗅ぎ〳〵盜みにはいるでござろふ。

〇足をはかりに　足のつゞく限り。

〇長者のはぎへ味噌をつける　「長者の脛に味噌をぬる」といふ諺。有り餘つてゐる所へ更に物の加はるのを言ふ。

〇金川　今の神奈川。

〇日高でも　まだ日は高いが。

〇御きとう　御祈禱、縁起のよいこと。御奇特ではあるまい。

〇

案の如く盗人大勢はいりは入りしが、あまりの大金ゆへ、持出す工夫や荷拵へに手間どり、夜もほの〴〵と明けければ、取ることはおゐて、他所にて盗みし金箱、衣類、道具まで持つて出難くなりしや、夫婦が歸りし聲を聞くと、その身ばかり足をはかりに逃げてゆく。

（萬々先生の妻）よもやモウ盗んで歸りましたろう。御歸りなさりませ。

（萬々先生）それだからマアちつとばかりでも取ればよかつたものを、脇で盗んだのまでおいて行くとは、長者のはぎへ味噌をつけた詮議た。

兎角思ふやうに金も減らねば、また〳〵思案し、京大坂から大和巡りと志し、道〳〵も費へを考へ、一日に二三里位づゝ、ぶら〳〵と行きける。

（手代）丁度金川泊りでようございませう。

（萬々先生）かな川は金の縁がうるさいから、日高でも川崎へ泊ろふ。

（馬子）□□お金をつけると申は、馬の爲に御きとうになりまする。四五十里も只御負わせなされてくださりませ。

○江の島　神奈川縣鎌倉郡の南部海岸にある島。
○地引き　地引き網。引き網の中で最も大きなもので、網船で魚群を包圍しつゝ網を投げ入れるもの。

○江の島かねくら　江の島・鎌倉の洒落。
○日本だ　此頃の流行語で、立派とか、極上とかの義に用ひられた。つまり日本一といふこと。
○ゐて物　傍の物か。
○あびかつせへ　網を引きなさい。海の中へもつと先へ出て、網を引いて來いとの義。
○こらつ貝にばちばらつた　こらつ貝は子良貝、乙女の貝の義で、はちはらつたは、其貝を打破る義ではなからうか。識者の是正を待つ。

萬々先生はよき序なりと、※江の島へ參詣し、また金のいる慰みを思ひつき、漁師ども一樣の揃ひの浴衣を染めて着せ、※地引きをさせしに、案の外海川へ廢れる金銀、魚にまじりて夥しくあがりし故、心ならずもまた金が殖へて困りける。

（手代）モシあれが金なら、※江の島かねくらと名づけて、藏を建つて入れておくがようござります

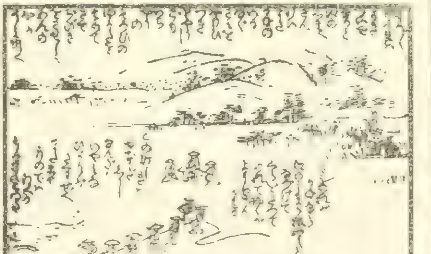
（萬々先生）この景色は※日本だ。しかし何だか嫌みな光がさすぜへ。また※ゐて物ではねへか。うるさへこつた。

（網を引く者の一）先からちつとづつつと※あびかつせへ。

（網を引く者の二）ヤイ〱、※こらつ貝にばちばらつた。

○

此頃、大雨降りつゞき川〱も閊へければ、暫く旅宿に逗留のうち、この大荒に買いおゐた



○こばんだものだ　小判と困つたとを掛けた洒落。

○入れ札　入札。仕事を請負ふ場合に、請負人が、請負金額を書いた札を差出すこと。

○つがもなく　わけもなく。

る米一度に値があがつて、儲けたる由、書状着きける。

（萬々先生）これはまたとんだ事だ。騰り目が見へたなら賣らずにおけばヱ、に。またおれに鬱がせる。

（手代）御尤もでござりますれども、先々から金に致して突きつけますから致しやうが御座りませぬ。

（萬々先生）こばんだものだ。困つたものだと、聞へるか。

所詮一通りでは身代もまわるまじと、ぐつと智慧をめぐらし、三保の松原の松を掘らせ江戸までの運賃かれこれ、この入用ではよもや金もなくなりそふなものと、先づ大勢請負人を集め入れ札をさせる。

（萬々先生）なんでも高い方へ落すから、技倆一倍、つがもなく高く積りやれ。

（請負人）入札の儀でござりますから、随分儲けるやうに積りました。

○唐櫃　「からうど」の訛で「からびつ」の音便。脚のある櫃で被せ蓋がある。

○首のあるには劣つたことだ　首の無いにはの逆の洒落。

○四百四病云々　「四百四病の病より貧ほどつらいものはない」の反對。

翌日早朝より、金にあかして地を買い、人夫を集め、あまたの松を掘らせければ、中より石の唐櫃を掘出し、開けて見ければ、また金ゆへ、膽を潰して腰がぬける。

（人夫共）石の唐櫃で百萬兩とつたやうな面をして意ばすと、手前も行つてあとを搔いで來やれ。

（手代）ホンニ金のあるのは※首のあるには劣つたことだ。

（萬々先生）※四百四病の病より金ほどつらいものはない。おれはマアどうした因果で、このやうに金に縁があるかあやまり入つた。

（人夫）まだ〳〵こんな唐櫃が二三百もござります。

○

萬々は腰が抜けてより勿怪の幸い、ものをいれて養生せんと思ひの外、けろ〳〵と治りければ、もはや我が運もこれまでなりと觀念して我が家へたち歸り、ちと古けれど、金々先生の先覺の通り、藏の金銀を殘らず取り出し、海中へ棄てさせる。

（手代）　まだ奧の藏の三十戸前が、手がつかぬ。みんな稼ひで棄てたく〳〵。

（萬々先生）　今まで金に恨みが數々あつたが、のふ〳〵とした。

（萬々先生の妻）　殘らず棄てたら、あとへ鹽花を振らせませふ。

（萬々先生）　コレ〳〵、そこらへ零れぬやうに棄てさつせへ。

○ものをいれ　費用をかけ。

○けろ〳〵　全く忘れたやうに。

○先覺　學問や知識を先に覺つたこと。またその人をも指す。

○金に恨みが數々　『京鹿子娘道成寺』の文句「鐘に恨みは數々ござる」。

○のふ〳〵　のんびりと。

○鹽花を振らせ　縁起の惡い金が澤山有つたのを清める爲である。

おいたけの金銀殘らず棄て、今は心にかゝる雲晴れたり、と喜ぶ折から、棄てたる金銀一塊になりて空中へ飛びあがれば、この勢にひかれて世界中の金銀一緒に集り、萬々が金藏さして飛び來るは、目もあてられぬ次第にて、家内のものどもを金藏の屋根へあげて金だまを防がせる。

（手代の一）　金の唸る聲をはじめて聞いたが、なるほど、ウン〳〵といふの

（手代の二）　黄金がまじつて來るは。旦那は大※ごんまりだろう。

（手代の三）　無性に燒味噌をやかせるがいゝ。

（金の唸る聲）　ウン〳〵。ウン〳〵。ウン〳〵。ウン〳〵。ウン〳〵。ウン〳〵。ウン〳〵。

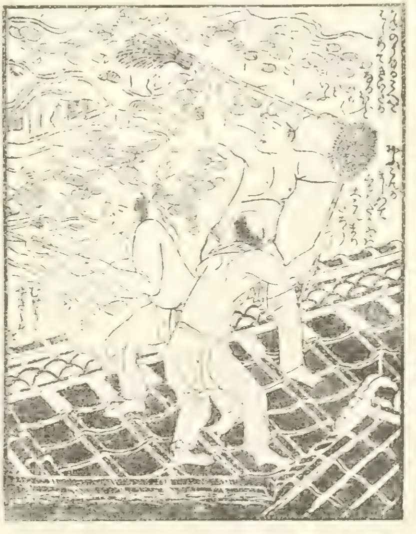
〇

棄てたる金銀、世間の金と一塊になりて、倍增しになりて、飛び歸りければ、今はうちに

〇金だま　それは全く火事の時の、火事・火の付を防ぐ身振である。

〇大ごんまり　大困りの洒落。

〇燒味噌をやかせる　俗に燒味噌を燒くと金が逃げると云はれてゐた。



○立ちきり難く　住居する事が出來ず。

○辰巳上り　言語擧動の荒々しきこと。

○置所のない金は云々　ない金は逆さに振るつても無いの逆。

○高辯　聲高に論じて。

も立ちきり難く、夫婦諸共出奔して、野山もわかず歩きしところへ、さきに借りたる人々、今は金持となり、借りたる金に利に利を添へて持ち來り、無理無體に返濟せんとて辰巳上りになり金をおつ付ける。

(金を借りた人の一）なんでもうちへ引きずつて行つて、金を皆括し付るがいゝ。

(萬々先生の妻）ホンニ金持の女房には何がなるか。

(萬々先生）置所のない金は逆さにして振つても置所はござらぬ。

(金を借りた人の二）元利揃へて御宿へ返濟に參つたら、ちやんと留守をつかわつしやるから、これまで追つ掛けて參つた。

(金を借りた人の三）わしは御蔭で金持になりました、その恩を忘れさせうとは、太い人だ。御受取なされずば、高辯に致して御返濟申す。

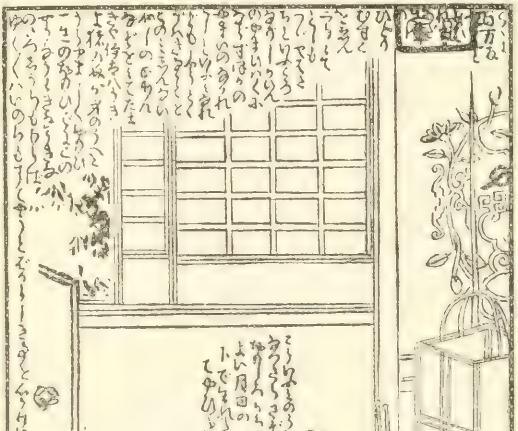
其後、夫婦は心を改め我が家へ歸りは歸りたれど、金で居どころのなきほど目出度く迎ふ春の、悪い趣向も御笑ひ草雙紙と御はづもじ。

江戸生艶氣樺焼

山東京傳畫作

爰に百萬兩分限と呼ばれたる仇氣屋の獨息子を艶二郎とて、年も十九や二十といふ頃なりしが、貧の病は苦にならず、他の病のなかれかしといふ身なれども、生得浮氣な事を好み、新内節の正本なぞを見て、玉木屋伊太八、浮世猪之介が身の上を羨しく思ひ、一生の思ひ出に、此のやうな浮氣な浮名の立つ仕打もあらば、行々は命も捨てやうと、馬鹿らしき事を心がけ、命懸の思付をしける。

（艶二郎）こういふ身の上になつたらさぞ面白かろう。よい月日の下で生れたてやひだ。



○分限　富める分際。長者。

○貧の病は苦にならず　河東節「灸すゑ襲の曙夜着」の文句「貧の病は苦にならず、外の病のなかれかし」を取る。

○新内節　宮古路豊後掾の門人富士松薩摩掾が創めた浄瑠璃。薩摩掾より鶴賀若狭掾出で、若狭掾より鶴賀新内出づ。

○玉木屋伊太八　新内節「帰咲名残の命毛」中の主人公。

○浮世猪之介　新内節「帰咲名残の命毛」中の人物。堀の喜作のこと。

艶二郎は近所の道樂息子※北利喜之介、※輪留井思庵といふ太鼓醫者などと心安くして、いよく浮氣な事を工夫する。

（艶二郎）とんでもなく浮名の立つ仕打があれそふなものだ。

（喜之介）まづめりやすといふ奴が浮氣にする奴さ。こいつを知らねばなりやせん。凡そ人の知つたゞ口近ひめりやすの分、小口の所を申やしやう。まづ※雉子・無間・盃・時酒・ゆかりの月・三つの鳥・三つ布團・二つ紋・四つの袖・禿立・沖の石・花の雲・朝顔・六歌仙・小丁・遍昭・黑主・業平・康秀・白糸・獨心中・指切・入黑子・起請・昔草・萬年草・十三鐘・水鏡・稲舟・待宵・別れ・名殘の紅葉・假枕・夏衣・春の夜・秋の夜・十寸鏡・夜半の鐘・朧月・春霞・亂れ鳥・思ひ川・女參宮・元服・萬菊・九月幮・吉野草・夏の月・明烏・むら烏・扇・花の香・花の宴・殘る暑さ・さし櫛・相の山・とけす・染糸・冥土の鳥・戀櫻・秋の七草・二つ文字・左文字・我心・江戸浴衣・疊算・一つみぞ・戀話、まだいつくらも有れど、一寸した所が此位なものさ。ア、口が酸くなつた。文の文句には大分傳授のあることさ。封じ目をつけぬと縁が切れると申やす。文の末へ※稚名を書くやう

○北利喜之介　北里喜之介の意味で、吉原へ行くのを喜ぶ男、吉原好の男の意味を人名にしたもの。

○輪留井思庵　悪い思案の意味を人名にしたもの。

○めりやす　長唄より短く、小唄より長きもの。『三養雜記』に、「或人の說には、手覆にめりやすと名づくるものあり。一名は莫大小と云。そは手の太き細きによらず、孰れにも程よしといふことゝぞ。めりやすの唄は、淨瑠璃長唄の所作にこまかなりて、俳優のしうちにより、長くも短くも歌へば、かの手覆の、めりやすの大小となく、心のまゝにかなふといふ意にて、名づけたり云々」。

○雉子……　以下めりやすの外題、

○稚名を書くやうになると　藝名でなく本名を書くやうになると、一通りの情交でなく、大へんな深間であるから、事がむつかしい。

○地者　素人。

○枕胼胝　遊女には耳のわきに、枕の爲めにたこが出來るのが普通であつた。

○此處が命だ　此處が身上だ。こゝが最の掛麗だ、

○灸を据へる　刺青の上に灸を据ゑると刺青が消える。

○駈込む　妻にしてもらひたいとて、戀人の家へ駈込むことは、當時行はれた。

になるとむづかしいね。

（思庵）引裂目に口紅の附いてるのは、何時でも地者の文ではねへのさ。どねへに地味でも、耳のわきに枕胼胝のあるので商賣上りはソレじきに知れやす。

○

艶二郎は先づ刺青が浮氣の始りなりと、兩方の腕・指の股まで二三十程あてもなき刺青をし、痛いのを堪へて、此處が命だと喜びけり。

（艶二郎）色男になるもとんだ辛いものだ。

（刺青師）中にちと消へたのもなくては悪いから、あとで又灸を据へやせう。

艶二郎は役者のうちへ美しき娘などの駈込むを、浮氣なことゝ羨しく思ひ、近所の評判の藝者お艶といふ踊子を、五十兩にて雇い、駈込ませるつもりにて、惡留井思庵頼み來る。

（思庵）これが頼みの、兎も角も、おあやかり申て、ちと出世の筋さ。

（お艶）駈込むばかりなら隨分承知さ。

○千家、古流、遠州　茶の流儀。

○茶人　物數寄。

○みづからと申すは云々　河東節『道成寺』に「みづからと申すは、そもよるべさだめぬ忍び妻、紀の路の奥によみ馴れて、人の心をなやますむる白拍子の鼓革」とある。

○茅場丁の夕薬師　日本橋區茅場町にあつた智泉院の薬師。

○植木　茅場町の夕薬師には植木の露店が澤山出てゐた。

家内の下女共覗き見て、おらが若旦那に惚れるとは、千家か古流か遠州か知らぬが、飛んだ茶人だとさゝやく。

（お艶）みづからと申すは、抑寄邊定めぬ轉び妻、この新道に住馴れて、人の心を浮氣にする白拍子でござんす。茅場丁の夕薬師で、こちの艶二郎さんを植木の蔭から見そめました。女房にすることがならずば、おまんまを炊いても居りたいのさ。それもならぬとおつしやれば、死ぬ覺悟でござります。

など〻註文通りの臺詞を並べたてる。

番頭候兵衞――若旦那のお顔では、よもやこふいふ事はあるまいと思つたに。コレお女中、門違いではないかの。

（艶二郎）ハテ色男といふ者は、どんな事で難儀をしよふか知れぬものだぞ。もふ十兩やらふから、もちつと大きな聲で隣りあたりへ聞へるやう頼む〱。

艶二郎が親、彌二右衞門、頼んだ事は知らず、氣の毒に思ひ、いろ〱と意見して歸しける。

○

この噂、さぞ世間でするだろうと思ひの外、隣でさへ知

○讀賣　當時は、世の中の珍らしい出來事を印刷して、高聲に讀みながら、一枚いくらと言ふ値で賣りあるいた。

○噎をする　噂をすると當人が噎をすると云ふ俗間の云ひ習はし。

○中の丁　新吉原仲の町。

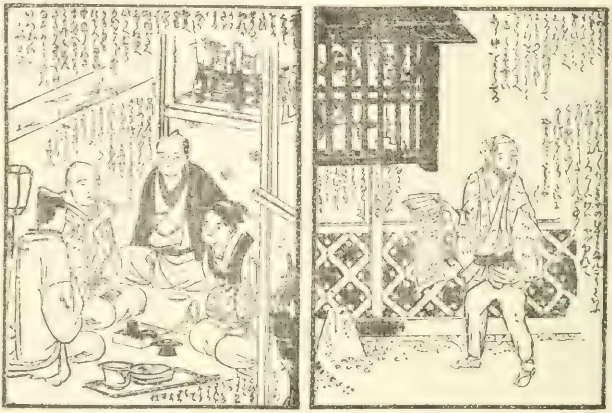
○かみにつれ　艶二郎が洒落る通り、見やう見眞似にの義か。

○このも　歌姬の禿の名か。

○木挽丁　今の京橋區木挽町。劇場のある處。

○高麗屋　四代目松本幸四郎。

○墨河　吉原江戸町扇屋の亭主。通人で、交友が多かつた。嘗て墨河が素人芝居で工藤をやつた事が有るので、「墨河さんをする」とは、工藤の役を勤める意味。



らぬ故、張合拔けがして、※讀賣を賴み此譯を板行に起して一人前一兩づゝにて雇い、江戸中を賣らせる。

（讀賣）　評判々々、仇氣屋の息子艶二郎といふ色男に、美しい藝者が惚れて駈込みました。とんだ事〳〵。事明細々々、紙代板行代に及ばず、只じや〳〵。

（女）　何さ、かたも無い事だのさ。みんな拵へ事さ。只でも讀むが面倒でござんす。

艶二郎※噎をするたび、世間でおれが噂をするだろうと思へども、一向に町内でさへ知らぬ故、此上は女郎買を始めて、浮名をたてんと思い、※中の丁浮氣まゝ屋へ來い、輪留井思庵、北利喜之介など、※かみにつれ一杯に洒落る。

（女）　瀬川さんと歌姬さんのうわさを聞きに遣しましたが、さつき小松屋で※このもを見かけましたから、歌姬さんはてつきりお惡うござりませふ。

※木挽丁で※高麗屋が※墨河さんをするそうでござりますね。

艶二郎は浮名屋の浮名といふ手のある女郎にきめて、十が十ながら惚れられるつもりにて、一杯に見得をし、襦袢の半襟ばかりいぢつて居て、色男もさて〳〵氣の詰る事なりと思ふ。

(喜之介)　大黒屋じやアねへか、何でも女郎衆の總錄だね。

(思庵)　モシ花魁、お前をば世間で、とんだ手のある女郎だと申ます。

(浮名)　茶をいゝなんすな、拜みんす。

艶二郎女郎買に出てもうちへ歸つて妬ものをやく者がなければ、張合がないと肝入を頼み、やきもちさへよく妬けば、容貌は望まぬといふ註文にて、四十近い女を、したくが金二百兩にて妾に抱ゐる。

(艶二郎)　小便組など、いふところは御免だよ、去年の春中洲で買つた地獄ではねへか知らん。

(女)　わたしをお抱へなされましても、大方女郎買や色事で、わたしをお構いはなされますまい。

○手のある女郎　働きのある女郎。

○襦袢の半襟　襦袢の半襟をいぢるのは氣取ることなり。當時では、襦袢の襟をいぢることを氣障な事とした。

○總錄　盲人の官名、檢校の上に位す。こゝは女郎の最上位の意に用ひた。

○茶をいゝなんすな　馬鹿な事を仰言いますな。茶は人を茶化すの茶である。

○肝入　肝煎にて、取持つ、周旋すること。またその人を指す。

○小便組　支度金を取つて妾となり、故意に寢小便をして離され、支度金を儲ける事は、當時流行の手であつた。

○中洲で買つた地獄　中洲は新大橋の川下、淺草川と箱崎の間の流れが分岐する所にある洲。其處で買つた淫賣女。

と、もふ少し手見せに妬きかける。

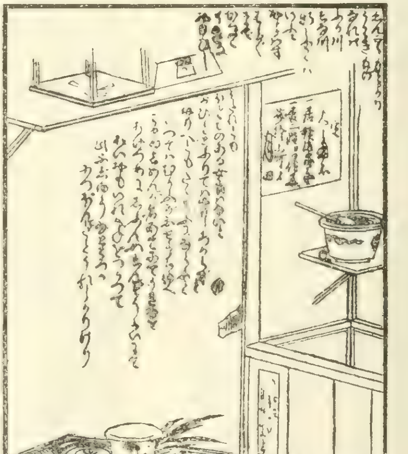
○

艶二郎もとより浮気者なれば、深川・品川・新宿はいふに及ばず、端々まで買つてみたれども、浮名ほど手のある女郎はないと思ひしが、一通では面白からずと思へども、たゞ間夫にならふと言つては、向ふが不承知故、輪留井思庵が※名宛にて浮名を上げ詰めに、自分は新造買にてあい、おもいれ金を遣つて此不自由なところが※日本だと嬉しがりけり。

（思庵）おれが役もつらい役だ。座敷のうちは大盡で、床がおさまると蒔繪の煙草盆とおればかり。これも渡世だと思へば腹も立たぬが、※五つ蒲團錦の夜着で寝るだけぢにならねへ。

（浮名）ほんに主は醉興な人でござりんす。

（艶二郎）手前がおれの所へ來ると、あつちの大盡が、やけを起して、※遣手や※まわしを呼んで小言をいふうちの心持のよさは、どうやすく踏んでも、五六百兩がものはあるのさ。



○名宛にて浮名を云々　思庵に浮名をずつと上げさせ、艶二郎は新造を買つてゐる。さうして思庵の眼をぬすんで浮名に情夫のつもりで會ひ、馬鹿馬鹿しい借金を遣つて、この情夫の形を眞似た不自由さを喜ぶのである。

○日本だ　日本一といふこと。（一一四頁）

○五つ蒲團云々　五つ幅の蒲團に錦の夜着をかけて寝るのでは痵が起らない。

○遣手　また鴇母、鴇婦などとも書く。遊女や禿の躾や監督をなし、又揚屋の取持ちをする女。赤前垂で腰に鍵・巾着を付ける。遊女の成下つたものが多く、意地の悪いものとされてゐた。

○まわし　座敷廻し。座敷々々を廻つて、遊女や客の用をするもの。

艶二郎は家櫻を思ひ出し「かへるさつける犬櫻、口舌の蕾綻びし、袖を禿が力草、ひかれて行くや後髮、心殘くら桐が谷」といふ文句より、外の客人の捉まるを羨しきことに思ひ、何の事もないに、新造や禿を賴み、こつちから大門につけて居て捉り、羽織位はひつ裂けても、大事ないといふ約束にて、引きづられて行く。

（艶二郎）これさ、まア放して呉れろ。こう引きずられて行所は、とんだ外聞がいゝ。

新造。禿は、人形を貰ふ約束にて、むだを言い〳〵、引きずつて行く。

艶二郎五六日振りにて、うちへ歸りければ、待ちまうけたる妾、此處ぞ奉公の仕どころと、かねて服して置ゐた存分をやきかける。

（妾）ほんに男といふ者は、何故そんなに氣強いもんだねへ。それほどに惚れられるが嫌なら、そんないゝ男に生れつかねへがいゝのさ。また女郎も女郎だ、人の大事の男を留めて置きくさつて。又、お前さんもお前さんだ。愛想なすつたが良いのさと、先づ此處ぎりに仕やせう。

○家櫻　河東節の一節六宗の家櫻に、

○犬櫻　薔薇科の落葉喬木。幹、葉ともに櫻に似て高山地方に野生す。春の末、三寸許の穗が出て、小白花が垂れ群り開く。夏の末實を結ぶ。

○口舌　言ひ爭ひ。いさかひ。

○禿　遊女に仕へてその見習をなし、將來は遊女となるもの。

○桐が谷　櫻の一種。相模國三浦郡材木座桐ケ谷の産といはれる。こゝは心殘りと言ひ掛けてある。

○捉まる　一人の遊女の馴染の客が他にも馴染の遊女が出來て、そちらに通ふ時には、先に馴染んだ遊女が、客をつかまへて一種の制裁を加へる事が吉原の習慣であつた。

○新造　新艘から來たといふ。吉原の花魁に從つてその世話をする者。番頭新造、留袖新造、振袖新造などがある。

○外聞がいゝ　「外聞が惡い」と云ふ所に、いゝと云ふところに艶二郎の得意さが現はれてゐる。

○服して置ゐた　練習して置いた。

○愛想なすつたが良い　情をかけてやつたがいゝと裏を云つたのである。

○役者・女郎　役者や女郎衆は、社寺に自分の紋、或は客の紋と比翼にした紋を附けた提燈を奉納する事が行はれた。
○回向院道了の開帳　回向院での道了權現の開帳。天明四年三月十五日より五月五日迄、回向院にて相州關本最勝寺道了權現開帳。
○手水手拭　社寺の御手洗「みたらし」の傍にぶらさげる手拭。
○痛事　出費。
○しげ骨　骨をあらく無く、細かに多くすること。
○吉原の櫻　吉原の遊廓内には毎年三月中旬に櫻の植附を行ひ、植ゑれば直ぐ開くやうにして、夜櫻見物をする。四月上旬花が散れば、直ちに之を取り除くのである。有名な花魁道中は多く此の頃に行はれる。その櫻の木の間に吊るす提灯をこしらへてゐたと云ふのである。

（艶二郎）恥しいこつたが、生れてから初めて燒餅を燒かれて見る。どふも言へねへ心持だ。もちつとやいてくれたら、手前がねだつた八丈と縞縮緬を買つてやらふ。もちつと頼む〳〵。
（妾）この後は八丈と縞縮が來ての事さ。

○

艶二郎は※役者・女郎などの心意氣にて、※回向院道了の開帳へ、提灯を奉納せんと思ひ、浮名と手前の紋を比翼紋に附けさせる註文にて、北利喜之介請合いて、田町の提灯屋へ誂へける。中屋へは※手水手拭を誂へ、これも比翼紋にて、所々の流行神へ、隨分目に立つやうに奉納する。これも※餘程の※痛事也。勿論何の願もなけれども、このやうに奉納物は、成程浮氣な沙汰なり。
（喜之介）とんだ急ぐね。骨は※しげ骨にして、側わ本塗に眞鍮の金物、いくらかゝつても良いから隨分立派にしてへの。
（提灯屋）ちと急には出來かねます。この間は※吉原の櫻の提灯を致して居ります。

艶二郎芝居を見て、とかく色男といふものは、ぶたれるものと思ひ、頻りにぶたれたくなり、※地廻のきおひを一人前三兩宛にて四五人頼み、※中の丁の※人高い所にてぶたれる積りで、茶屋の二階には※藤兵衛を雇るおきて、めりやすを唄わせ、亂れた髮を浮名に梳かせる積りにて、※月代へは※青黛を塗り、揚屋町の※銀出しにてさつと水髮に結ひ、髻を握むと直にばら〳〵とほどけるよふにして打たれけるが、つい打ち處惡く、片息になつて、※髮梳所ではなく、氣附よ、鍼よと騷ぎて、よふ〳〵氣が附きけり。此時餘程馬鹿者だといふ浮名少しばかり立ちけり。

(地廻の一)うぬがやふな良い男がちらつくと、女郎衆が※あたついてならぬ故、おいらもちつと燒餅の筋だ。

と言ふ臺詞は、こつちから註文で言わせるのなり。

(地廻の二)※切落から罰が當るといふ場だ。

(艶二郎)その握拳が三分宛について居る。ちと痛くてもよいから、隨分見へのよいやうに頼む〳〵。

艶二郎世間の噂するを聞くに、金持故皆慾でするといふ事を聞き、急に金持が嫌になり、どふぞ勘當を受けたく思ひ、兩親に願いけれども、一人息子の事故、決してならねども、よふ〳〵母のとりなしにて、※七十五日が間の勘當にて、日限が切レると、早く〳〵うちへ引取るとの事也。

○地廻のきおひ　「地廻」は土地ッ子の事であるが、一般には其の土地を根城として暴威をふるふ無頼漢の意に用ひる。「きおひ」はきほひ肌の人で、市人の氣概を衒ふものゝ稱。

○中の丁　吉原の大門から一直線に秋葉常燈明のある水道尻までの目拔きの場所。兩側に中宿即ち引手茶屋軒を列べ、此の中の丁を經として左右に吉原の各町筋が引かれてゐる。

○人高い所　人の出盛りの所。

○藤兵衛　長唄の師匠。

○月代　また額月〔ひたひつき〕ともいふ。男子の額髮の生際を、半月形に拔きあげたもの。

○青黛　月代を青くするのに用ひる顏料である。

○銀出し　水油の名。

○髮梳所ではなく　髮をすくごころか。

○あたつく　いちやつく。

○切落から罰が當る　芝居の追込場所から惡く云はれる。

○七十五日が間　人のうはさも七十五日などいふより來るか。

(父) 望みとあるから是非がない。早く出て失せろ。

(番頭) これは若旦那の思召然るべう存じませぬ。

(艶二郎) 願いの通り御勘當とや有難や〳〵。※四百四病の病より、金持程辛いものはないのさ。※可愛い男は何故金持じややら。

○

※藥研堀の名ある藝者七八人、艶二郎に雇われ、勘當の赦りるよふにと、淺草の觀音へ※裸足参をする。成程裸足参といふ奴が、大方は浮氣なもの也。

(藝者の一) 十度參り位でいゝのさ。

(藝者の二) ふゝ加減に※なぐつて、早くしまわをねへ。

艶二郎は望みの通り、勘當を受けれども、母の方より金は入用次第に送る故、何不足なけれども、何ぞ浮氣な商賣をして見たく、色男のする商賣は※地紙賣だろうとまだ夏も來ぬに地紙賣と出掛け、一日歩いて大キに足へ※豆を出かし、これには懲り〴〵とする。此時大きな醉興者だと餘程浮名立けり。

(艶二郎) 外を歩くと日に燒けるで、あやまる。困つたものだ。

(茶屋女) チヤ※鳥羽繪のやうな顔の人が通る。みんな來て見なせい。

(艶二郎) また惚れたそふだ。色男もうるさいぞ。

○四百四病の病より云々 「四百四病より貧病つらし」(諺)の逆。

○可愛い男は云々 川柳に「色男金と力はなかりけり」。

○藥研堀 両國藥研堀。

○裸足参 跣足で神佛に祈願すること。多くはお百度參りをする。

○なぐつて 手をぬいて。ごまかして簡單にすまして。

○地紙賣 扇の地紙賣。

○豆 肉刺(まめ)。

○鳥羽繪 鳥羽僧正覺猷からはじまつたと言ふ滑稽な繪。艶二郎の顔の醜く滑稽である事を言ふ。

○のりが來て　乘り氣になること。調子づく。
○うちかた　普通は内室、内儀などの事であるが、此處は艶二郎の家のもの位の意であらう。
○身請てをし　身請をしの誤。
○質に置ゐても流れの身　「肩に金てこ、裾には碇、質に置いても流りやせぬ」といふ歌による。
○中屋と山崎　中屋や山崎。いづれも吳服・袋物等の店であらう。
○箔置　銀箔を置くこと。
○花藍　浮世繪畫家北尾重政、花藍と號す。
○から摺　墨も色も出さずに、浮き出たやうに摺ること。

艶二郎愈とのりが來て、かれこれとする中、七十五日の日限が切れ、うちかたよりは勘當を許さんと、毎日の催促なれども、未だ浮氣をし足りねば、親類中のとりなしにて、廿日の日延を願ひ、どふしても心中程浮氣なものはあるまいと、手前は命も捨てる氣なれども、それでは浮名が不承知故、嘘心中の積りにて、先へ喜之介と思庵をやつておき、浮名南無阿彌陀佛といふを相圖に留めさせる註文にてまづ浮名を千五百兩にて身請てをし、心中の道具立を買い集める。對の小袖の模樣には、肩に金挺、裾には碇、質に置ゐても流れの身といふ古歌の心を學ばれたり。これも中屋と山崎の備ものなり。

（喜之介）脇差は箔置に誂へました。
（思庵）花藍が書いた蓮の繪を大奉書へから摺とは、良い思召し附きだ。
二人が辭世の發句は、摺物にして、中の丁へ配らせる。

○

浮名はたとへ噓心中にても、外聞悪いと、とんだ不承知なりしが、此案じを首尾よく勤めたあとでは、すいた男と添わせてやろうと、※由良之助がいふやうな臺辭にてよふく得心させ、此秋狂言には、艶二郎が無利足にて※金元をする約束にて※座元を頼み、※櫻田にい〻つけて、此事を浄瑠璃につくらせ、※立方は※門之介と※路考にて舞臺でさせる積り、※はたきそうな芝居なり。もとより素直に身請しては色男でないと、駈落の分にて※櫺子を毀して、梯子を掛け、二階から身請する。※内證ではどふで身請なされた女郎故、お心まかせになさるがい〻が、櫺子の繕い代は二百兩で負けてあげませうと、慾心をぞ申ける。

（艶二郎）※二階から目薬とは聞いたが、身請とはこれがはじめてじや。

（若者の一）おあぶなふ御座ります。御靜にお逃げなさりませ。

（若者の二）花魁御機嫌よふお駈落なされまし。

若い者共は、御祝儀を※着服して、逃げたあとで方々へ言い觸らせとの言いつけ也。

○由良之助がいふやうな臺辭　浄瑠璃『假名手本忠臣藏』第七に「お輕請出そふ、……情夫があるなら添はしてやろ……侍冥利、三日なりとも圍ふたらそれからは勝手次第」とある。これを指したものであらう。

○金元・座元　芝居小屋の金主と興行主。

○櫻田　櫻田治助、狂言作者。

○立方　踊手。

○門之介　市川門之助。

○路考　瀬川路考。

○はたきそうな芝居　財布の底をはたきそうな、まうからずに損をしさうな芝居。

○櫺子　窓に取り附けた格子。

○内證　内所にて、妓樓の主人の居る所、またその主人を指す。

○二階から目薬　諺。

○着服　金などをごまかすことであるが、こゝは内密に貰ふ意に用ひてゐる。

最期の場も意氣なぱつとした所との事にて、※三圍の土手ときめ、夜が更けては氣味が悪いから、宵のうちのつもりにて、艶二郎に勤めたる茶屋・船宿・幇間・末社・藝者共、太々講の送りのやふに、袴羽織にて※大川橋まで送り申、※多田の藥師のあたりにて皆々に別れ、艶二郎は日頃の願かないしと、心嬉しく道行をして行き、此處こそよき最期場と、銷置の脇差をぬいて、すでに斯ふよと見へ、南無阿彌陀佛といふを合圖に、※稲村の蔭より、黒裝束の泥棒二人現われ出で、二人をば眞裸にして剝ぎとる。

（追剝の一）　わいらは、どふで死ぬ者だから、おいらが介錯してやろう。

（艶二郎）　これ〳〵、早まるまい。われ〳〵は死ぬための心中ではない。こゝへ留手が出る筈だが、どふ間違つたか知らん。着物はみんな上げましやうから、命はお助け〳〵。もうこれに懲りぬ事は御座りません。

（追剝の二）　此以後こんな思附はせまいか〳〵。

（浮名）　どふでこんな事と思いんした。

○

仇氣屋艶二郎
浮名屋うきな　道行興鮫肌

※朝に色をして夕に死すとも可なり、とはさても浮氣な言の葉ぞ。それは論語の堅い文字、是は※豐後のやわらかな、肌とはだかの※二人して、結びし紐を一人して、解くに解かれ

○三圍　向島三圍神社。
○太々講　伊勢講ともいふ。講中を立て、醵金し、鬮引にて當籤者が伊勢に參詣、太々神樂を奉る。
○大川橋　吾妻橋。「江戸名所圖會」に、「大川橋、吾妻橋とも名づく」。
○多田の藥師　大川橋に[illegible]。島山開星院東江寺と云ふ。[illegible]多田滿仲の念持佛と云へり。
○稲村　刈つた稲を積み[illegible]そのまゝいなむらは[illegible]
○朝に色をして　「朝聞レ道夕死可也」は「論語」里仁篇のことば。
○豐後　豐後節、[illegible]豐後節[illegible]出た常磐津を云ふ。
○二人して、結びし紐を云々　「二人して結びし紐を一人して吾は解き見じただにあふまでは」（萬葉集巻十二）
○ふしんの土手　土手普請してあるところを疑ひの不審に引きかけたる
○とんと落ちなば名や立たん云々　河東節「二松の内」の文句。「さりとは落ちなば名は立たん、ただこの女郎衆の下紐を、結ぶの神の下心」。
○しらみ紐　何處の女郎衆か知らねど、しらみ紐を言ひ掛く。しらみ紐は虱よけの紐。
○ひぞる　焼餅の乾いて反りかへる

のこ、腹を立てゝすねる意とを掛く。
○外八文字　遊女の道中に爪先を外に開いて歩く。（八四頁参照）
○鳥肌　粟を生ずる肌。
○薄墨に書く玉章　端唄の文句「薄墨に書く玉章の思ひして、雁啼き渡る云々」
○雁に便聞かんと云々　手紙を「雁の便り」といふのは、支那の前漢の蘇武が匈奴國に囚はれ、雁の脚に書翰を繋いで放ち、故國に通信したといふ故事から出てゐる。
○かな梃　鐵で造つた梃。
○ゆかりの色　綠色。紫色をいふ。
○七つ屋　質屋。
○五百崎　庵崎。隅田川の名所
○四ツ目や長命寺　兩國四ツ目屋にて賣る長命丸にかけての遊戯文字。
○四つ過　午前十時過の意から、まだ新らしい様子をいふ。
○日高の寺にあらずして　謠曲「道成寺」に「急ぐ心かまだ暮れぬ、日高の寺にぞ着きにけり」とあり。日高の寺は紀州日高郡道成寺を指す。
○三重　歌はなくして三味線の手だけあるを云ふ。
○牛は願から鼻を通す　自ら望んで却て災を受けるのをいふ。諺。
○うらはら　うらうへに同じく、あべこべの意。

ぬ疑は、ふしんの土手の高見から、どんと落ちなば名や立たん。どこの女郎衆かしらみ紐、結ぶの神もあちら向かさんしよ醤油の焼鯣、ぴんとひぞるも今は早、昔となりし中の丁、外八文字も斯ふなれば、内七文字にたどり行く、涙にまじる水洟に、ぬらさん袖は持たぬ故、下たの帯をぞ絞りける。身にしみわたる東風かぜに、鳥肌だちし此素肌、殿御の顔は薄墨に、書く玉章と見る雁に、便聞かんと書く文の、假名でかな梃摺模樣、ゆかりの色も七つ屋の、名に流れたる隅田川、互に無理を五百崎の、鐘は四ッ目や長命寺、君には胸をあくる日の、まだ四つ過の緋縮緬、褌長き春の日の、日高の寺にあらずして、裸の手合急ぎ行引三重。

　牛は願から鼻を通すと、艶二郎が悪案じの心中、此時世上へぱつと浮名立ち、澁團扇の繪にまで畫いて出しけり。

（艶二郎）　おれはほんの酔興でした事だから是非がないが、そちはさぞ寒かろう。世間の道行は着物を着て最期の場へ行が、こつちのは裸でうちへ道行とは、大きなうらはらだ。緋縮緬の褌がこゝで栄へたもおかしい〱。

（浮名）　ほんの巻添で難儀さ。

○男の惡いも不承して　浮名も、艶二郎の男振の惡いのも我慢して。

○若き時は云々　「論語」に「少之時、血氣未ㇾ定、戒ㇾ之在ㇾ色」とあるによる。

艶二郎は丁度勘當の日延切れければ、懲々として、うちへ歸りて見れば、衣桁に三圍にて剝がれたる小袖掛けてある故、不思議に思う折柄、一間より親彌二右衛門、番頭候兵衛立出で意見する。艶二郎ははじめて世の中を諦め、本當の人となり、浮名も男の惡いも不承して、外へ行く氣もなく夫婦となり、もとより身代に不足もなく、末磐石に榮へ、しかし一生の浮名の立ちおさめに、今までの事を草雙紙にして世間へ弘めたく、京傳を頼みて、世上の浮氣人を教訓しける。

（彌二右衛門）　若き時は血氣いまだ定らず、誡むる事いろ〳〵ありといふ事を知らぬか。すべて案じが高ずると、皆斯うしたものだ。恐ろしき泥棒とまで身を窶せし我々が工夫の狂言、以後はきつと嗜み居れ。喜之介や輪留井思庵とも、まう附合ふまいか。そればかりではない。世の中に大分かういふ心意氣の者があるて。

（艶二郎）　こゝで燒餅をやかれては大難儀だから、妾も何處ぞへかたつけませう。

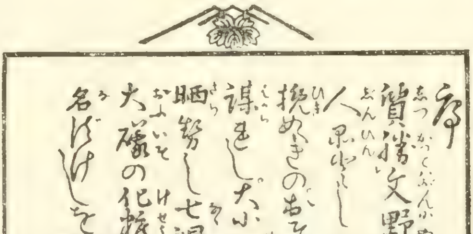
（浮名）　わたしは大きに風邪をひきました。

文武二道万石通

朋誠堂喜三二作
喜多川行麿畫

序

質、勝文野暮也。文、勝質高慢也。文質元結人品として、月額青き君子國。五穀の外に挽ぬきの、おそば去らずの重忠が、智恵の斗枡に謀れし、大小名の不知の山、三ン國一斗一生の耻を晒せし七温泉の垢、とけて流れて三嶋にあらぬ大磯の化粧水に、しらげすませし文武二道、萬石通と名づけしを富士の裾野の蔦十が需に應じて。亀山人作ス。


序
質勝文野暮也。文勝質高慢也。文質元結人品にして月額青き君子國五穀のほかに挽ぬきのおそば去らずの重忠が智恵の斗枡にはかりし大小名の不知の山三國一斗一生の耻を晒し七温泉の垢とけて流れて三嶋にあらぬ大磯の化粧水にしらげすませし文武二道萬石通と名づけしを富士の裾野の蔦十が需に應じて　亀山人作

○文質元結人品として　『論語』雍也篇に「子曰、質勝ㇾ文則野、文勝ㇾ質則史、文質彬彬、然後君子」とあるをもぢる。文質元結は文七元結のもぢりで、文七と稱する杉原紙の極く白い光澤あるもので製した上品な元結である。

○おそば去らずの重忠　頼朝の忠臣、武蔵の人、畠山荘司二郎重忠のこと。頼朝に信任され忠誠を盡す。

○不知の山　富士の山。

○三國一斗一生　三國一の富士の山から一斗一升とつゞけ、一生の恥に掛けた。

○七温泉　箱根七湯。

○とけて流れて　端唄に「富士の白雪朝日でとける。とけて流れて、三島女郎衆の化粧水」。

○しらげすます　米を搗き、糠を去つて精白する。

○萬石通　千石通より大にして搗いた米と糠とをわくるもの。（西鶴名作集［追考七三二頁参照］）

頼朝公御前の人を退けて仰せけるは、

（頼朝）如何に重忠われ四海を治めしより、日本の大名・小名安堵の思ひをなすと雖も、武備に怠る心生ずべし。治世といへども文ばかりにては治め難し。今鎌倉の大小名、文に傾く者何程、武にはやる者何程といふ事を、汝が智慧を以てはかるべし。

（重忠）所詮文武兼備したる武士は無ければ、どちらへか片寄り申べし。又、文でも無く武でも無きぬらくら武士多かるべし、三ツに分けてお目にかけませふ。

「御人拂ひの御用は何であらふ。何か文福※茶釜で剣菱を飲むと言ふやふな聲が聞へた。」

「秩父殿は※四相を悟ると言ふが、お寺から

○文福茶釜で剣菱を飲む　「文武兼備したる」をもぢつたのであらう。「文福茶釜」は群馬縣館林町茂林寺什寶の茶釜。剣菱は銘酒の名。

○四相　我相・人相・衆生相・壽者相を識境の四相と云ふ。近松作『出世景清』に「景清は、一相を悟り候へども重忠は四相を悟る」。此處は死相にかけてゐる。

○雙六の賽の目　双六の賽の目の四を四相に引きかけて云つたのであらう。

○富士山の中に不老不死の藥あり　謡曲「富士山」に「昔唐土の方士といつし者、此富士山に登り、不死の藥を求め得たる例あり……昔鶯のかひご化して少女となりしを、時の帝皇女に召されしに、時至りけるか天に上り給ひし時、形見の鏡に不死藥を添へて置き給ひしを、後日に富士の嶺にして、此藥を焼きしより、富士の烟は立ちしなり」。

○禰宜　神官の名で、職掌は宮司又は神主に次ぐ、また、ただ神に仕ふる人の稱。

○人穴三文／＼　人穴を見世物に見立てゝ、木戸錢三文といふ積りなのであらう。

○先知らぬ穴は富士の根　新古今和歌集、業平朝臣の歌「時しらぬ山はふじのねいつとてか鹿の子斑に雪のふるらむ」をもぢつたもの。後文に「選りのけられし糠武士」とあるから、その意味で「小糠もどき」といつたのであらう。

使の來る事を悟るのかね。」

「さればもし雙六の賽の目の事か。」

○

かくて重忠謀にて、富士山の中に不老不死の藥あり、鎌倉の大小名人穴より入り、此藥を求むべし。と仰せ渡されければ、不老不死の藥と聞き、皆々富士の人穴にぞ入りにける。

重忠神樂堂の禰宜の身振にて下知する。

「見合て／＼。」是で大概一番の桝は仕舞ふた。」

「人穴三文／＼。」

先知らぬ穴は富士の根いつとてか
　小糠もどきに武士の降るらん。

○穴の内の體　下圖の插繪で見れば、穴の内部が更に、文雅洞、長生不老門、妖怪窟の三つになつてゐて、此の三つの穴の孰れかに入ることによつて、文と武と慊武士との三つが自づと判るやうにしたのであらう。

○百人いかさまにかゝる云々　石川丈山「富士山」の詩に「白扇倒懸東海天」とあるを洒落たもの。

○此穴　下圖插繪に「文雅後洞」とある、これであらう。

○拔穴　「長生不老門ぬけうら」とある處。こゝへ出たものはぬらくら武士なのである。

富士の山穴の内の體。

「俗物の行かれぬ所だ。」

「何だか乙な所だの。」

「きつい こたアねへ。はいれ／＼。」

文武二道の外に選りのけられし慊武士の分は、恥をかくとも知らず、重忠が謀にて、百人いかさまにかゝる東海の天なるべし。

文道に心ある人皆此穴へ出る

拔穴の口へとろゝ汁をこぼし置ける故、

○長命の場　秘藥長命丸を用ひたる場合。

皆々辷り落ちる。これぬらくらぶしへの當りなり。

「おいた／＼。モウ山はいや／＼。」

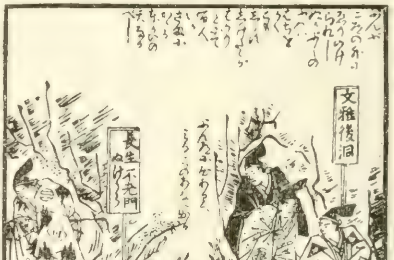
「このねばるのが不老不死の藥かの、怪しからぬ潤いだ。※長命の場だろう。」

「體が大ぬら／＼だ。どうも足が踏み止められぬ。アヽどうも／＼。」

「是がぼんの穴へはまつたといふのだ。あな憎や／＼。」

「妖怪がおらが手合を恐れたかして、一ッ疋も出なんだ。」

「ねつから張合が無かつたの。」



○千石通　また千石簁。斜なる篩の上に大きな匣があり、その匣に籾すりをした穀粒を入れると、此の篩を通つて下から米が出る。そして籾と米とが分れるやうになつてゐる。

○三廻り　三七・二十一日間。

○宇佐美の三郎　近松作「曾我會稽山」に「宇佐美の左衛門」とあるのがそれか。

○伊藤九郎祐清　曾我兄弟の父河津三郎の弟。

「文人より武勇の人が餘計でござります。然しぬらくらの方がしたゝかにござります。扨かくの如く仕分けましたは、米搗の※千石通からの存じ付でござります。」

「文より武の勝つたるは、珍重々々。長く世の靜なほど、自然と文は勝つものだ。己が世話を燒くは其處の事だ。」

ぬらくらの大小名を見分け、文武兩道の内に勸め込むべき由仰せを受け、箱根の七湯へ御暇賜はる条、諸司の別當工藤左衛門へ申渡す。

一、此度長生不老門に入し輩、山氣に中り不快之由、其上山より落候面々も多有レ之段被レ及ニ聞召一、箱根之七湯へ日數※三廻り之御暇被レ下候間、申合込合不レ申樣七ヶ所へ可レ有ニ入湯一旨被ニ仰出一條可レ被レ得ニ貴意一候者也。

月　日　重忠奉レ之

「長生不老の拔穴より出たる面々ばかり申渡すでござろふ。」

「小名へは私より申渡しませふ。」

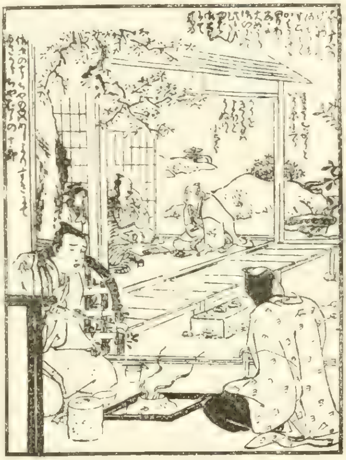
○蟻の思ひも天に登る　諺。力の弱い者も遂には一念を達することがあるといふこと。

○愛からの三郎　拳を打つとき勝負のないのを「あひこのしよ」と云ふから、それをもぢつたもの。『曾我物語』巻第九、十番斬の事の條に「二番に是寶（大藁の平馬の助）が姉聟、横山黨愛甲「あいきやう」の三郎と名乘つて押し寄せたり」とある。

○原小二郎　『曾我物語』巻第九、十番斬の事の條に「四番に遠江の國の住人、原の小次郎斬られて引き退く」とあり。下文は原に腹を掛けたに過ぎない。

○うぬ野の小太郎　『曾我物語』（同前）に「八番に信濃の國の住人、海野小太郎行氏と名乘りて、五郎に渡り合ひ、暫く戰ひけるが、膝を割られて犬居に伏す」。下文はうぬを「自惚れ」のうぬに掛けての洒落であらう。

○佐原の十郎　『義經記』巻第六關東よりくわんじゆ坊を召さるゝ事の條に「佐原の十郎申しけるは、あはれよき序にて候ふ物かな。大御堂の別當になし參らせ給へかしと申されたりければ、いしく申したりとて、佐原の十郎初めて奉行を承りて、大御堂の造營を仕り云々」。



○湯元の體。

數多の大小名七湯に別れ、三廻りの間、好な事をして樂しむ。

重忠のはからひにて、鎌倉の女藝者を七湯へ間配り置き、飽きの來ぬ様に仕掛ける。

宇佐美の三郎―　垣の内に居る所は、兎の三郎じやアねへか。

伊藤九郎祐清―　蟻の思ひも天に登るとは鞠の事じやアねへか。

(宇佐美・伊藤)　あり〳〵。

愛からの三郎―　拳をしては勝負のつかぬ男さ。

石臼屋の藝助とて、何もかも少しづゝ嚙み分けた男あり。諸大名の御意に入り、此度湯場へ御供にて來る。

皆きゝをせうと言う原小二郎。

香を聞く事は、餘程うぬ野の小太郎。

佐原の十郎―　茶の湯は飯より好にて朝から茶腹の十郎。

塔の澤の體。

「影法師で見ては皆黒彌五だ。」

「金屋金五郎の風呂屋の段を御語り。」

「黒彌五さんだから御所望申やす。」

「おれが語ると風呂屋の段ではない、黒彌五段だ。」

茨左衛門、手みきん〱。

たいらくの平馬の丞、將棊をさす時は桂馬の丞さ。

うすぎの八郎、寒そふな身で居る。

「いばらく待ち給へ。飛車手、王手をかけられて、竹の下のまごつき左衛門だ。」

「先祖御厨の三郎より傳はりしめくりさ。」

「けいづはさる處からもらいのすじさの。」

「おらが先祖はよみの宿禰。」

土井の彌太郎、やたらに句を吐く。

お厩のとく齋――とく場なら致しませふ。

「うへ物が近いで謝る。」

○金屋金五郎の風呂屋の段　大坂角の芝居利茂八のしば座抱への歌舞伎役者金屋金五郎と大阪蜆屋町の額風呂の湯女で後に嶋の内綿屋の抱へ女となつた小さんとが情死をした。『松の葉』にそれを歌つた小唄がある。

○黒彌五さんだから云々　『曾我物語』巻第九、十番斬の事の條に「一五番に御所の黒彌五と名乘り」とあり。御所の黒彌五から御所望と洒落た。

○手みきん〱　「てみせきん」に同じく、碁・將棋・雙六などに於て、待つ手なしといふこと。從つてこゝは待つてゐられない、直ぐに〱の意。

○たいらくの平馬の丞　『曾我物語』巻第九に「是は武藏國の住人、大樂の平馬の助と名乘る」。また近松作『曾我會稽山』には「大樂の平馬之丞頼先浮蔵」とあり。

○うすぎの八郎　『曾我物語』（同前）に「十番に日向の國の住人、臼杵の八郎押し寄せ」。

○竹の下のまごつき左衛門　『曾我物語』巻第一、おなじく角觝の事の條に「駿河の國の住人、竹の下の孫八出でて云々」。また『曾我會稽山』には竹下孫八左衛門とある。

○御厨の三郎　八幡太郎義家に從つて奥州へ下向した源氏の武士。みく

「人倫よし戀よし平山の馬所だ。」

○

堂ケ嶋の體。

「おれがかけ聲は紋所の矢ア羽アだ。」

「らんぶも少しおはむきのすじだ。」

安西の彌七郎太鼓の役。

「小鼓の時は萬歳の彌七郎さ。」

土肥の千二郎喜多流を舞ふ。

「苗字が三浦だから、獵は得手ものだ。」

伊豆の二郎——今日はすつきりでづの次郎だ。

「おれが名の龜甲龜は御免だ。」

りに歌留多のめくりの音を通ず。

○よみの宿禰　野見宿禰の音通。よみはよみがるた（「博戯犀照」に「むかしはよみといひて此戯をなし、後にめくりといへり」とありて、天正かるたと云ふものである。井原西鶴の「男色大鑑」に「小者あつまりて一文四文によみ打つなど」とある）

○土井の彌太郎　「曾我物語」卷第一、伊東次郎と祐經が爭論の事の條に「伊東に祐經は猶まさる本意を忘れ、祐經が妻をとり返し、相模の國の住人、土肥次郎實平が嫡子、彌太郎遠平に合せけり。國には父伊東が聟なくぞ見えけり」。

○お麗のとく齋　『曾我會稽山』に「御馬屋の德竹大將上、物のあいろも見へざるに、松岡出せと呼はれは」。

○とく堤、らへ物、人倫よし戀よし平山の馬所　これは三笑閣の略傳の言と思はれるが未詳。

○紋所の矢ア羽ア　矢羽の紋所から、其のかけ聲をさしに用ひ。

○安西の彌七郎　「曾我物語」卷第九、十番切の事の條に「安房の國の住人、安西の彌七郎」。

○土肥の千二郎　土肥實平の次子惟平、先二郎と稱す。左衛門尉に任ぜられ、建暦中、和田義盛の亂に與し、軍敗れて誅せらる。

○三浦だから云々　三浦半島は漁場だからである。

○伊豆の二郎　工藤祐經の弟伊豆の次郎祐兼の事か。（「曾我物語」卷第十、五郎が斬らるゝ事及び伊豆次郎が流されし事）

○龜甲龜　龜井六郎重清のことか。

○新開のわらはせ郎　相模國の住人新開荒四郎實光のもぢり　新開のわらはせといふ語尾はわざと省略する。
○太鼓斗り成景様　不詳。
○豐後の次郎　豐後節のもぢりか。
○ふるや五郎　不詳。
○小四郎義時　北條時政の子、江間小四郎と稱す。執權を以て名がある。
○しやんと小褄　河東節「[illegible]夜の編笠」に「しやんと小褄を鳥羽[illegible]」とある。
○犬坊さんなら云々　犬坊は工藤左衛門尉祐經の嫡子、曾我物語[illegible]第十四に見ゆ。その場を想起して言つたのである。
○箱根は駒のよい所　駒鳥の産地。
○土屋三郎　土肥實平の弟宗遠、相州土屋に居たので、土屋三郎と稱した。
○杉曉　坂田半五郎といふ和事師の歌舞伎役者。もと仙國彦十郎と云ふ。寛延二年の顔見世より坂田の名跡を相續した。

宮の下の體。
「新開のわらはせ郎はどふだ。」

「是はあやまる〳〵。」
「的はすつきりお音がない。太鼓斗り成景様。」
豐後の次郎で義太夫も氣まぐれだ。
弾きながら首をふるや五郎。

木賀の躰
小四郎義時――しやんと小褄を。
「おつと皆までかくに及ばず。うけとり兜だ。」
「犬坊さんなら、わんと小褄はどうだ」。
梶原三郎。
「箱根は駒のよい所だから、買つて行きだ。」
「私は鶉が欲しい。」

○

底倉の躰。
土屋三郎――杉曉が身振はどうだ。
（三味線をひく女）まづ紋所がきついい。身は無茶じや

○小山　女形の洒落。

○りうさい　拳のかけ聲。

○とつことな　相撲の掛聲。

○色子　歌舞伎子の、男色を賣る者かげま。

○楊弓　長さ二尺八寸の小弓にて、坐して射る遊具

○めくり　はなあはせ（賭博の一種）

○本拳　支那傳來のもので、雙方開指して勝敗を決する。一をイー、二をリヤン、三をサン、四をスウ、五をゴウ、六をリウ、七をチェイ、八をハマ、九をカイ、十をトウ、イとかけ聲すこと、双方ともに指を出さないときはムテと云ふ。

○唐拳　藤八拳いことである。藤八五文奇妙とかけ聲したので拳の名となる。同時藤八が藥を賣り歩いたが、價が五文、奇妙に利くより、通人が之を取りて掛聲としたのである。

わひの。

（小山）そちが若衆なら、おれは小山だ。

（拳をする女）りうさい。

（狩野）それ勝つたぞ。

（拳をする女）口惜しひ、滅相に負けるの。

（相撲をとる女）とつことな。

（相撲をとる武士）こんな色子もねへもんだ。

（重忠）茶、香、生花、鞠、俳諧は文道へ引込まれろ。碁、將棊、亂舞、釣、網は無理に武へこぢ付るがよい。同じ上瑠璃でも義太夫は武の方へ引込み、豐後と河東は文へ入ずばなるまい。楊弓、小鳥、めくりの三つは何と片を付たものだ。

（榛澤）楊弓は弓の字故、差詰武に誌し、小鳥は不風流ながら文に致しませふ。めくりは行司の貰ひか、

（本田）底倉遊びの方々は身振、聲色、相撲、拳、皆武邊の内へ誌しませう。

「同じ拳でも本拳は文の場かござります。唐拳は武の事さ」

重忠の廻者石門藝助、ぬらくらと次第一々帳面書留め來る。

○榛澤六郎　[illegible]

○本田の二郎　本田の次郎親經。[illegible]の身内で、[illegible]兄弟を工藤祐經の寢所へ案内した。

○古代の定九郎由おか　[illegible]

○地獄　[illegible]女。

○中洲の氣取　[illegible]

○馬入の川　相模川の[illegible]

○酒匂　[illegible]富士山東麓に源を發し、[illegible]で海に[illegible]

○めりやす一つに云々　藝者はめりやす一つを歌ふのに、その一人に對して三所から逢ひが來る。

○千疋　[illegible]で一疋とする。

芦の湯の體。

※榛澤六郎、本田の二郎、古代の定九郎由おかと言ふ身にて三人を試す。

(本田)　金があらば此處へ出せ。

「褌ばかりは御免下さりませ。」

(榛澤)　脛くじたばたすると芋ざしだぞ、

「命と下帶はお助けだんのう。袖乞だんのう。」

流石大名の事なれば駕かきは一人もなく、芦の湯へは誰も來ぬといへども、箱根に※地獄ありと聞きて、※中洲の氣取にて芦の湯の邊りを尋ね歩き、大きに凹む。

(重保)　女と侮つて無禮の働き、御人體にも似合いませぬ、お相手になりませふか。

一介の[illegible]に言つたのはほんの座興と言ふもの。嫌なら嫌で濟んだ事だ。氣のみじけへ。」

「地獄と見たがこつちのあやまりさ。」

大磯の體。

扨數多の大小名、湯場を立ち大磯へ宿りし折柄、重

○最中の月　吉原江戸町竹村伊勢屋忠次郎で賣って居る菓子。
○甘露梅　青梅の實を、紫蘇で巻きにして砂糖に漬けたもので新吉原水道尻山口や半四郎方にて賣る。又仲の町茶屋どもにては自家にて製造する。
○山屋豆腐　新吉原揚屋町の豆腐屋山屋市左衛門の製するもの。
○南一　南は南鐐で、二朱銀のこと。一は一片で、銀一朱である。
○無間の鐘　既出。
○生爪に火を燈す　爪に火をともすは吝嗇な事、ここでは、金を惜しんで倹約に溜めて行く人のあるの意。
○假粧坂　神奈川縣鎌倉扇ヶ谷から西、深澤の原に出る坂路。遊女が居たといはれてゐる。
○少将　手越の少将のこと。工藤左衛門の宴席に侍った際、五郎の兄曽我十郎のために敵討の便宜を與へた。後剃髪し、修行に専念した。（曽我物語）又第九、五郎を化粧坂に[illegible]事の條に、化粧坂の麓に遊君あり、時致時々かけ云云とあり、「[illegible]」の中にも「朝なゆふなのけはい坂むざんやなしやう／＼は五郎にふかくあいおひの云々」とある。

忠のはからひにて、馬人の川上川下に堤を築かせ、川上の水を切て落しければ酒匂滿水となり、渡る事かなはず、皆々大磯に十四五日逗留して現を拔かして樂しむ。大磯にては此處こそ金の儲け所と思ひ、傾城は晝夜三分を一時三分と値を上げ、藝者はめりやす一つに迎いが三つ程かゝり、平澤が蕎麥は安い所が千疋、最中の月八片を以て小判一兩にかへ、甘露梅一つが壹匁づゝ、山屋豆腐は一つ丁で南一など、、滅相界な事ども也。

かくて大磯の大おごりに、百人の背中にて三萬兩の下りが出來、川が開いても立たれぬ仕儀になり、せんかたつきて百人云ひ合せ無間の鐘をつく事になる。

「何ぞ氣の變つた遊がありそふなものだ。」

「阿波太夫を呼びにやれ。」

「諸事富本でなければ聞かれねへ。」

「生爪に火を燈す人もあるに、揚詰に日を暮すとは有がてへ。」

「是から假粧坂へ押して行かふか。」

「それがよかろふ。少将でも買いませふ。」

「大にお世話。」

○纎子立　すごろくの一種。黒白の石を[illegible]、敵[illegible]にて[illegible]るゝをとつてゆくもの。

○三萬兩の金が欲しいなあ　[illegible]無間の鐘に[illegible]何ぞいうても三百兩の金が欲しいなあ」。

○路銀にはどうした穴の云々　「女[illegible]無間の鐘に「思にはどうした花の咲く事と身にぞ知らるゝ憂やつらや」。

○不思議や池の内よりも　淨瑠璃「ひらかな盛衰記」四段目、無間の鐘の條に「既に打たんと振上ぐる、二階の障子の内よりも、[illegible]三百兩、はらり〳〵と[illegible]山吹の花吹散す如くにて」とあり。

大名の撞く無間の事なれば、各〻揃いの浴衣にて、大磯の揚屋の池を手水鉢と擬へ、百人にておつ取卷きしは、※纎子立に異らず。※三萬兩の金が欲しいなあと云ふ聲は、百千の雷の如く、振上たる柄杓は水車の化物かと怪まる。大磯中の女藝者めりやすの爲に惣仕舞にして同音に歌はせしははな〳〵しき貧乏也。

※路銀にはどうした穴のあく事と、身にぞ知らるゝ、湯場つらや。下畧。

めりやすも事終り、一イ二ウ三イの掛聲にて、既に打んと振上る。※不思議や池の内よりも、現はれいでの山吹色三十箱にて、三萬兩ざぶり〳〵と持ち出る。これも重忠の謀事なるべし。

「黒ん坊なら枝珊瑚樹と言ふ場だ。」

○三つ重ねて云々　瑠璃樹の香から来たる洒落。

○重忠の嫡子六郎重保　曾我物語巻八、源太と重保が鹿苛の事の条に、鹿一頭を射止めたことについて源太と重保との間に争論起りたる際の事として「源太は……小聲に言ふ様、経路に迷ふ隠し文やる者こそ主候ふと」重保聞いて、優しく宣ふかたし思ひの色の数夜まで、空しく返すには、返し得たるぞ主となる」などとある所から、か洒落たり、衣類・脇差を返したりする着想が得たのであらうか。

「三つ重ねて三五十五だ。」

○

重忠の嫡子六郎重保――地獄かと御目違いの女はそれがしさ。この衣類・脇差お覚へがござろふ。以来柔弱の心を改め武を励み給へ。

「以来はきつと改めますでござりませふ。」

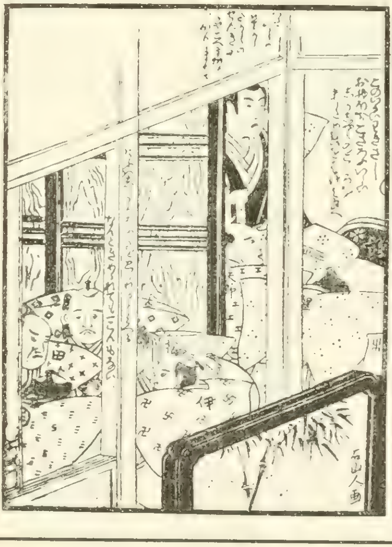
「其節の追剝は我々両人でござる。」

「芦の湯にての振舞、主命なれば御免下されませ。」

「穴をくわしく探しましたれど、見物にはいち〳〵分りかねます。」

「今日はしたゝか膏を取られると見へる。何ときめられても一言もない。」

「私は是から寶の詮議に都へまかり登ります。」



頼朝公ぬらくらの大小名を召して仰せけるは、

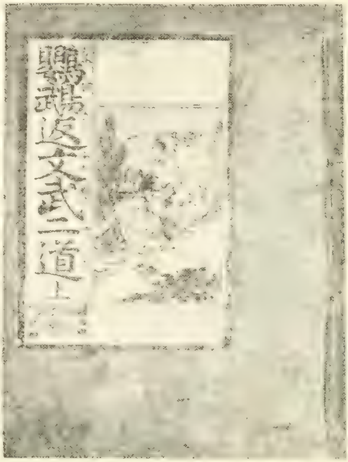
「さきに重忠にはからせ、文武の性をふるひ分け、ぬらくらの面々は上湯にて晒し、大儀にて身上をふるはせ、文武二道に導かしむ。自今以後それぐに文武の道を學ぶべし。必ずしもぬらくらの心を持つべからず。今にも軍があるならば、とろゝで軍がなるものか。文とも武ッとも言つて見ろ。」

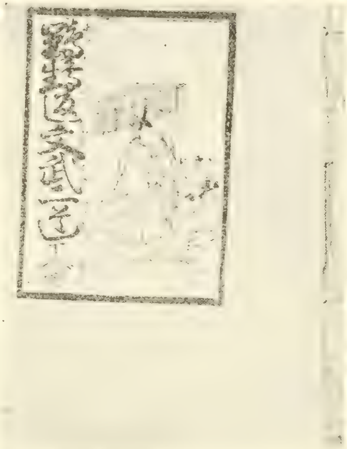
「いづれも有難ふ存じ奉ります。」

○とろゝで軍が云々　とろゝの事は本書第一四〇頁にも出てゐる。

○文とも武ッとも　「佛とも法とも知らず」をもぢるか。

（参考）鸚鵡返文武二道





○きぬ〴〵　後朝。男女が相會して翌朝別れる時をいふ。

○史記　漢の司馬遷の撰。支那正史の初めにて、本紀、表、書、世家、列傳から成り、上は黄帝から下は前漢武帝に至る歴代の實錄。

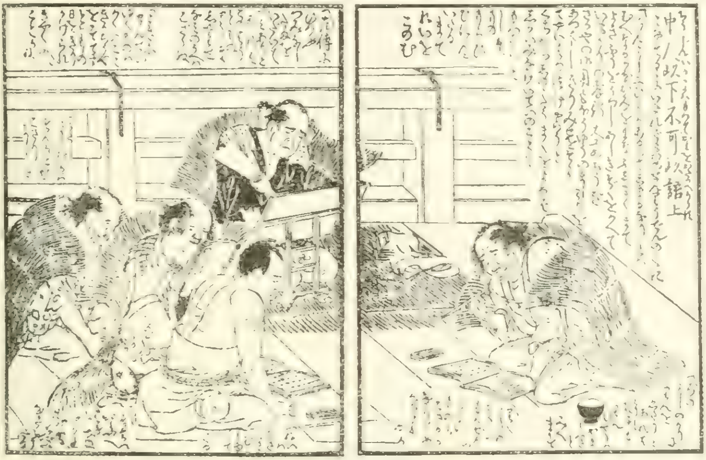
孔子縞于時藍染

山東京傳作畫

鳳凰時をつくらねば、※きぬ〴〵の愁もなく、麒麟人を吠ねば、夜道する邪魔にもならず、鳳も出よ、麟も出よ。麟鳳をつけるが武藏坊辨慶さんの力でも微塵も動ぬ。君が代の紅粉屋八百屋は、※史記にうたはれ。二六は入麪先生の會日じやが、拒障があつて、止ましたとは、大通家の天窓にひとしく。聖代の時いたれるかな。

山東京傳述

○中人以下不可以語上　『論語』雍也篇にあり。上の下に也字あり。
○切見世　吉原のちよん〳〵格子。下級な遊女屋。
○魯の西の狩に云々　『春秋』の最後の記事。『春秋』は「獲麟」で筆を止めてある。即ち哀公篇に「十有四年、春、西狩獲レ麟」。
○六臣註　李善、呂延済、劉良、張銑、呂向、李周翰の注。
○文選　支那梁の昭明太子蕭統の著。秦、漢、三国以下、梁に到る文章詩賦を撰録したもの。
○左傳　詳しくは『春秋左氏伝』。『春秋』を魯の左丘明が注したもの。三十巻。
○匹夫罪無し云々　「匹夫無レ罪、懐レ璧其罪」。(『左傳』桓公篇)もと罪のない者も、財を持つとそれが禍の種を招くのであるの意。
○逝く物は斯くの如きか　「逝者如レ斯夫不レ舎二昼夜一」(『論語』子罕篇)孔子が川のほとりに立つて述懐せるくだり。
○物日を切りかけられた　晝夜を分かたず通ふやうな客は紋日(五節句其他の祝儀の日)の祝物を切り出されるのである。



中人以下不可以語上

と怖ろゝに至れども、かの川柳點の句に「褌に紐があるのでしまるなり」とは宜なるかな。上を學ぶ下々まで、善き風を移し、悪しき俗を易へて、芋賣りの孝行、大工の忠義、酒屋の御用も朋友の交りを厚くし、※切見世をそゝりて、やい礫野郎と、口から子の曰くを讀めば、四海皆兄弟の如く、專らとして物貰ひ非人に至るまで禮を好む。

(非人の一)　「※魯の西の狩に麟を得たり」とあれば、孔子も淋病は疾ましつたと見へます。※六臣註の※文選の拂い物がござるがお求めなされぬか。

(非人の二)　左傳に「匹夫罪無し、玉を懐いて罪あり」とあれば、此方共の樣な幸福な身の上はござらぬ。

(非人の三)　時に先生、「逝く物は斯くの如きか、晝夜を舍てず」とは、物日を切りかけられた客の事かね。

(非人の四)　私共も昔はそんな事もございました。

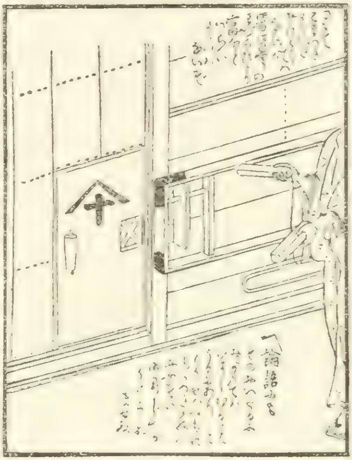
(非人の五)　※不佞は淺草無宿でござる。足下は昨夜、

○不佞　拙者。私。
○有徳　財産のある。
○不義にして富みまた貴きは云々　「論語」述而篇「不義而富且貴、於我如浮雲」。
○富貴天に在り　「論語」顔淵篇に「富貴在レ天」。
○鬼王　曾我兄弟の譜代の臣
○四百四病　人間の體は四大の和合より成り、四大調はざれば四大各々百一の病を生ず、合せて四百四病ありと云ふ。
○富ほど辛い　貧ほど辛いを逆に云ふ。
○其老いたるに及んでは云々　「論語」季氏篇「君子有三戒…及其老也、血氣既衰、戒之在得」。

掃き溜の中にお寝みなされたか。

○

茲に通り丁筋に有徳なる町人ありしが、「不義にして富みまた貴きは、我に於て、浮める雲の如し」と悟り、仁徳の最上は金銀を施すよりは無しと思ひ、蓄への金銀を惜しけもなく、人に與れんと思へども、また先の人も、富貴天に在り、天理に應れぬ金銀は受けられぬと、誰一人貰つてくれる者なければ、殆んど困り、丁内の番人は何ふか慾の深そうな親爺と思ひ、先づ百兩ばかり施さんと呼びかける。



（有徳な町人）　はて困つたものだ。鬼王ではないが、四百四病の患ひより、富ほど辛いものはないぞ。

これあの人、近頃無心の至りじやが、見掛けて頼む。俺を助けると思つて、何卒此金錢を貰つてくれぬか。

（番人）　論語にも、「其老いたるに及んでは戒むる事得るにあり」と申せば、道に違つた金錢は、お安い御用じやが受けられませぬ。

○列子　支那の列禦寇の哲學説を、その門人が記述したもので、天瑞・黄帝・周穆王・仲尼・湯問・力命・楊朱・説符の八篇に分かれてゐる。

○財を以つて人に分つ、是を通と言ふ　「列子」力命篇に「以財分人、謂之賢人」とあり。

○枕探し　寝てから他人の懐中物を奪ふこと。

○縞の財布に入れて五十兩　「假名手本忠臣藏」山崎街道の段で定九郎の臺詞に「こゝな親仁が懐中に金なら四五十兩の嵩、縞の財布にあるのをとつくりと見付けて來たのじや、貸して下されい。」

○酒を買わせて尻を切られる　「酒買つて尻切らるる」の通、此の意は人の爲に好意をつくして、反つて禍をうける事をいふ。

列子に財を以つて人に分つ、是を通と言へるの語を思ひ、傾城買いも女郎に引かれて遊ぶを色男なりとし、女郎は旅人の客なぞと見ると忽ち襟元についてかけのめし、兎角大金をおつつけたがる、油斷のならぬ世の中なり。無心の文の文句に曰く

またぞやしめしまゐらせ候。扨〳〵此方事も色々と仕合せかね、御察し下されかし。その中へ、此程も枕探しの客に上り、縞の財布に入れて五十兩、蒲團の下へ押附けられまゐらせ候。それより段々と都合宜しき事のみにて、節句前も呉服屋より是非々々百兩ばかり請取り費ひくれ候樣に申し、兎角押附けたがりまゐらせ候まゝ、やう〳〵と遣手衆に受合せ、盆前までと申しのべまゐらせ候。ぬし樣へは此樣な事は申し上げまじと存じかへしかど、どふぞ〳〵盆前には御都合遊ばし、せめて七十兩ばかりも御費ひ下されかし。くどふも〳〵御頼み申上げまゐらせ候、かしこ。

（嫖客）　こんな謝ることはない。何ふも俺も此頃は都合がよくてならぬものを、酒を買わせて、尻を切られるやうなものだ。

（茶屋の女房）　せめて三十兩は受取つておやんなさら

ずば振りますまい。何れまんざらな事さね、

○

斯くて世の中の人、正直を專らとすれば、人として愼むべきは慾の皮なり。その慾も多くは金銀より起る所なれば、金銀ほど穢わしき物はなしと、兎角金銀を忌み嫌ひければ、貧乏人ほど尊く、福人ほど卑しめられ、中にも女郎買ひに身をうちて、多くの金銀を押附けられたる息子手合は、金錢の棄て場に困り、座頭に※ひど金錢をやる。其の證文に曰く、

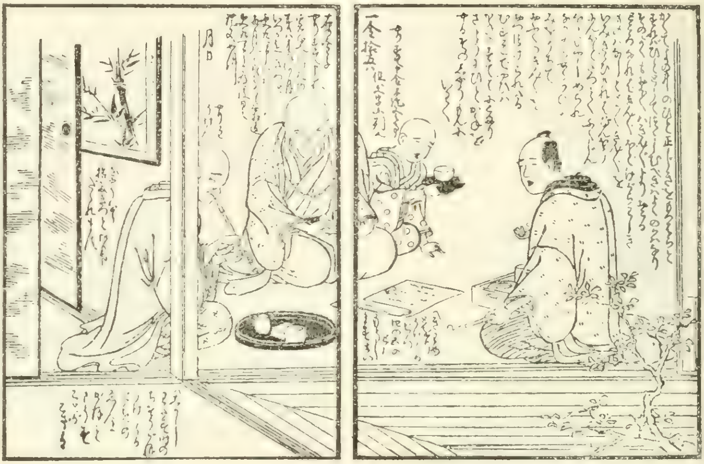
やり棄て申金子證文之事

一金拾兩　但シ文字小判也

右の金子やり棄て申所實正也。引取の義は來ル何月何日迄にきつと受取可申候。利足は毎月金貳分つゝ無相違受取可申候。爲後日之證文如件。

月　日　　やり主

うけ人



（金をやり棄てる人）　極め通り受取る節、四の五のとは申しますまい

（座頭の一）　さやうなら拾兩きつと御用立たれます。

（座頭の二）　しかし※渡す時の地藏顏、受取る時の閻魔顏と申す事が御座る。

○ひどい　非道であらう、無理やりの。

○渡す時の地藏顏　「借りる時の地藏顏、濟す時の閻魔面」（諺）の反対を云つたもの。

○五刑　支那の古代では黥、劓、刖、宮、大辟を五刑とする。其後、笞・杖・徒・流・死を五刑とする。『孝經』五刑章に「五刑之屬三千、而罪莫ㇾ大ㇾ於不孝ㇾ」。
○過つて改むるに憚る事なし　『論語』學而篇に「過則勿ㇾ憚ㇾ改」。
○七生　七度生れ變ること。その間勘當されるのである。こゝでは生を升に掛けた。
○人の父としては慈にとゞまる　『大學』に「爲二人父一止二於慈一」。
○楚國には以て寶とせず　『大學』に「楚書曰、楚國無二以爲一ㇾ寶、惟善以爲ㇾ寶」。
○燒味噌を燒くと云々　前出。（一一八頁）

若き手合は女郎買いにて多くの金銀を背負い込み、親の厄介にかけるは不孝の至りなり。※五刑の罪不孝より大いなるは無し、と孝經にもあるものをと正し、せめては罪を滅するため、弟に家督を讓り、大金を背負つて勘當をうけ、立退かんと願へば、親はまた※過つて改むるに憚る事なしと一向に不承知なり。

（息子）何卒御勘當なされて下されませ。※七生がならずば二升五合でもようござります。

（父親）大學にも※一人の父としては慈にとゞまると言ふを知らぬか。勘當する事はならぬぞよ。

俺が身代は有難い事には一年に二百や三百は手輕く喰込む身上だが、これしきの金をおつ附けられても苦しくないぞ。

※楚國には以て寶とせず。唯善以て寶とすと言ふ文言を守り、段々世の中にて金銀を忌み嫌い、中にも才覺なる男、案じて曰く、※燒味噌を燒くと金が逃げると言へば、さらば燒味噌を燒かんと大火鉢にて燒きかける。

○竹藪と溝　蚊の發生地。かね（金）からか（蚊）に轉じた。また竹藪や溝に金を捨てることも含めてゐるのであらう。

○日なし借　金を借りる時、日毎に幾許かづつ返す約束で借りること。

○酢の蒟蒻の　「四の五の」といふ諺を洒落て用ひたもの。

○下馬　大手の下馬先。供待のゐるところ。

○何處のこに　ごはところの義であらう。

○もの忌めへ　物忌み。謹慎して不淨を忌んでゐること。

（焼味噌を焼く男）　どふもおらが近所はかねが多くてならぬ。竹藪と溝かたんとあるせいだろう。

○

※日なし借と言ふ者出でき、裏店などの錢を借りて歩き、返す定め時に受取らぬと大屋へ屆ける。

（日なし借の男）　お前はお家主様でござりますか。別の事でもござりませぬが、お店の孫介殿に三貫文借りうけまして、毎月二七の日に二百文づゝ返す約束でござりますが、兎角、酢の蒟蒻のと言つて受取りませぬ。よく申付て下さりませ。

（家主）　成程、聞屆けました。きつと申付ましやう。然し酢の蒟蒻のと言ふ筈でござる。あの孫介が下馬へ出る、旨い物屋でござるから。

（店子の女房）　もしへ、大家さんへ。此裏の子供衆か何處のこに打ち込む物もあろうに、私共の店へ小判を打ちこみやした。わつちらがうちじやア、もの忌めへだから、いつそ氣にかけて居りやす。どふぞお叱りなはつて下はりやし。ばか〳〵しい。

呉服屋も福神の名を家名については縁起が悪いとて、丁の恵比須屋も貧乏神屋と名をかへ、隨分地合の悪い代物を、大高賣りにしければ、殊の外流行り、買手山の如く、市をなしけり。

（手拭の行商）　手拭の高賣り、三十八匁く。おきやアがれ。矢張り無益委記の型だと言いっこなし。作者もそれは承知さ。

（客）　もふ五匁高く賣って下さい。この木綿は地合が良すぎる。

（呉服屋の番頭）　ナニサ、六百匁なら隨分高ふござります。此のやうに見へても、とつともふ二三度お召しなさると、おきに破れます代物じやさかい、これより高くは上げられませぬ。

古語にも千金の裘あつて千金の布なしと申ます。されば堺丁の福山も損山と改名し、深川の八幡も富が岡を改め貧が岡と唱へ、人々遣手と言ふ名を羨みにける。

○地合　布帛の地質。
○おきやアがれ　「よせやい」と云ふに同じ。
○無益委記の型　恋川春町の作。『無益委記』は未來の事を豫言して現代には全然無いことを云つてゐるから「手拭の安賣り」を「高賣り」と云ふ時代となつたと云ふやうに言ふ、その型の義。
○千金の裘あつて云々　「千金之裘非一狐之皮」（説苑）を變む。
○福山　蕎麥の屋。

○

※君子は爭ふ所なしと言へば、博奕諸勝負事は決して弄ばねども、中に物好きな者は、※嘘事にてめくりを始めても、互いに勝を人に讓り、禮儀を正しくする故、一番のめくりに烏が鳴き、睡い目をして、面白くも何ともなし。

（めくりをする人の一）拙者がひよつと八をめくると、※赤藏が出來ますから、平に八をお踏みなされ。

（めくりをする人の二）イヤ、それでは貴公樣のお爲に惡く、殊に拙者は※大引で御座れば、踏みますと八が上つて、この方へ仲藏が出來ます。此儀は御用捨なされ。

（めくりをする人の三）イヤサ、それでは拙者の志が無になります。

（めくりをする人の四）※合つて呉れろ。

（女）御火を入れましやうか。

○君子は爭ふ所なしと　『論語』八佾篇に「君子無所爭」。

○嘘事にてめくりを始めても　正式な勝負をしないで花札をめくつても。めくりは骨牌四十八枚、一より十二まで銘々四枚ある。

○赤藏　二の四枚の内一枚に海老を赤く畫いたのを海老二と云ふ。一の四枚の内一枚をあざと云ひ、十の四枚を釋迦十と云ふ。あざ、海老二、釋迦十、此三枚を取るを海老藏と唱ふ。

○大引　手合三人の節、親、胴二、大引といふことがある。親とは勝つたものが之になりて外の札を蒔き渡す、親の次を胴二、最後を大引と云ふ。

○仲藏　青七、同八、同九の三枚を取るを仲藏と云ふ。

○合つて呉れろ　一枚々々引きめくりて手に持つた札と合ふのを云ふ。

○折介　江戸時代、武家に使はれたる下部。上方にて[illegible]六。

○擔ぎ　出前持。

○矢尻を切る　家や藏の壁などを穿つて盗みに入るのを云ふ。

中にも別して徳のある人は所々へ施行の蕎麥店を出し、無代にて往き來の人に振舞ふ。或日、折介體の者この蕎麥を三杯食いしが、代もやらずに振舞われるは、餘り道に缺けた事と思ひ、人の見ぬ間を覗ひ、錢を五十文膳の上え置いて逃げ出でしが、是を擔ぎが見つけ、後より大勢追かけて引きずり戻し、この樣な陰德のある人を、唯おいては此の方の道が缺けると、無殘やな、かの折介を大勢寄つて、握拳で頭をおもいれさすつて突放す。

(捕へた人の一)　何でも禮を盡して歸すがいゝ。

(折介體の者)　赦して下され、そんな陰德のある者では全くない。拜みます／＼。

(捕へた人の二)　さやうに卑下なさるほど猶尊く存ずる。

(蕎麥屋の擔ぎ)　お怪我のない樣におさすり申さう。

(蕎麥屋の主人)　昨日も向ふ新道の倉の矢尻を切つて千兩箱を投げて、その上、壁の繕い代に金十兩おいて行つたといふ事だ。大方其人だも知れねへ。

○

○列女傳　支那の婦女傳で、七卷に分れ、西漢の劉向の撰。

○陰德ある者は云々　『列女傳』卷三仁智傳に「夫有二陰德一者陽報レ之」。

○山下の廣小路　上野の廣小路。

○胴亂　革で作つた方形の袋。印形、藥などを入れて腰に下げる。

○叔敖が兩頭の蛇を云々　叔敖は楚の令尹孫叔敖の事。『列女傳』によれば幼兒の折、兩頭の蛇を見て殺して之を埋めたが、そのために自分は死ぬであらうとなげいた。前述の「陰德ある者は云々」の語は、此の時叔敖の母の言つたものである。

○莊子　支那莊周の撰。道家の學說を布衍したもの。

○うるし木綿　不詳。

列女傳に陰德ある者は陽に是を報づと聞く。陰德を施さんと、兩國或は山下の廣小路なぞには、巾着切られ徘徊して、うつかりひよんとして居る油斷を見すまし、袂へ胴亂や紙入を押し込まる丶。用心すべし。

(巾着切られ)　叔敖が兩頭の蛇を埋めたよりも、是が陰德の早道だ。

先づ今日も餘程陰德を施した。

(通行人)　是から山下へ出て、奴が莊子の講釋でも聞こふ。

儉なるは固し。寧ろ固しけれど當世を盡す。通人は粗服を伊達として、上總木綿の着物に地荒き麁の羽織なぞを好む。

(通行人の一)　向ふの新道はうつかりと通ると、金を踏んづけてならぬ。忌々しい。

(通行人の二)　あれもどこのか通人だそうな。木綿揃はまた格別意氣だぞ。とかくうるし木綿の事だ。

○切落　當時の芝居小屋の、舞臺や棧敷のやうに屋根のついてゐる所でない、雨天の屋根もなく、平らたい平場になつた土間をいふ。

○三百兩の金が云々　前出。（一五〇頁）

○男女交り坐せず　『禮記』曲禮上に「男女不雜坐、不同椸枷、不同巾櫛、不親授」。

○曲禮　『禮記』の中にある篇の名。

○裳をかゝぐる事勿れ　『禮記』曲禮篇に「暑毋褰裳」。

○左交　櫻田左交。

芝居なぞは百三十二文づゝ札錢をやつて見物を入るれば、貴き人は切落へ入り、賤しき者は棧敷で見る。狂言の筋も曾我の貧乏を取組み、明六ツの鐘を合圖に、三百兩の金をさへと受取りましやうと、團三郎が臺辭をやんや〳〵と嬉しがり、對面の幕にも、五郎が臺辭に、寶の山とはいわず貧乏の山へ入りながら、手を空しく歸るが口惜しいわいと言へば、見物その氣取をほむる。

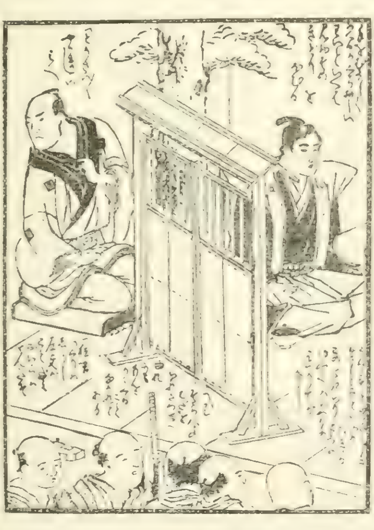
（梅が枝になつた役者）　三百兩の金が欲しくも何ともないナア。

男女交り坐せず、みづから授けを受けずと、男棧敷女棧敷と言ふが出來る。此時入込の湯屋へは一向はいり手がなし。

（頭取）　東西々々。やかましいわへ。

（見物の一）　コレそこら八殿、肌を入れさつせへ。曲禮にも裳をかゝぐる事勿れとある

（見物の二）　狂言作りは諸事左交がことだよ。



おいらは、てんだぞ。※

○

大音寺前なぞは物騒になり、夜更になると、追剝がれといふ者出でゝ、往き來の人を待ち受け、取摑まへて、おのれは眞裸になり、衣服大小金銀を括しつけて逃げる。

（追剝がれ）　追剝がれといふ者は扨〳〵張合のないものだ。斯ふした所が別アねへ、丁半のくづれか、斬込み訴訟に行くやうだ。

褌は此方の例刻が見へるから堪忍してやらう。おさらば〳〵。

ヲヽ、寒い〳〵。斯ふしてはみたが、さぞ貴樣は溫かだらう。羨しい〳〵。

（しばられた人）　金銀は申受けましやうが、せめて衣服大小は御免なさりまし。悲しや〳〵、申し〳〵。

おれがないは手習ひ子が留められたやうだ。

○てんだぞ　「てん」は「ひつてん」にて、錢の無い事を言へるか。

○大音寺前　吉原へ行く道。

○丁半　丁半博奕のこと。采の目を丁、半と呼び、賭けて中てるのである。

○例刻　例の一件の物の意か。

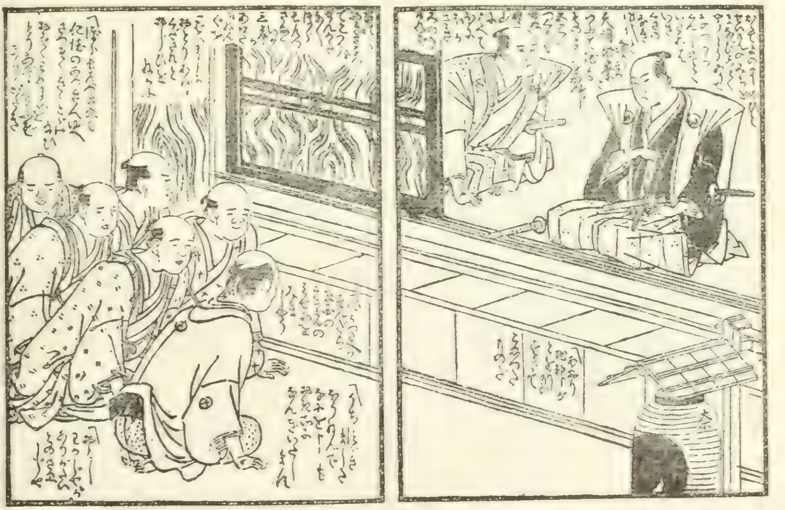
○手習ひ子が云々　手習ひ子が處罰を受けたやうだ。

斯くて世の中の人、聖賢の道を學び、至德要道ありておのづから君子の德至れば、紛爭のなき御代となり、天明地察と言ふて、地もその德を感じ、五穀作りもせぬ野山に生へて、穗に穗が咲き實りければ、百姓も置き所に手古摺り、爲方なく、ぼら長左衞門樣へ出で、三年が間御年貢を一倍增しにお取り上げ下されと、御慈悲を願ふ。ぼら長左衞門樣も仁德の厚き人故、早速聽屆け給ひ、お救われ米を取りあけ給ふぞ有難き。

（ぼら長左衞門） あまり地神が通りもの過ぎて困つたものだ。

（訴人の一） 御訴へがすんだら、兩國の麒麟の見世物を見ましやう。

（訴人の二） うち續きました豐年で、何を申も置所に難儀致します。



（訴人の三）　お年若じやが有難い殿様じや。

○

天もまた其徳を感じ、御料簡違ひにて空より金を降らせ給ひ、初手のうちは、此處に三兩、かしこに五兩位の事なりしが、段々大降りとなり、深山嵐に山吹の、花吹きちらす如くにて、人々大きに難儀する。

（人々の一）　是は何でも大變でござります。天上で無間の鐘を撞くそふだ。

（人々の二）　紀文大盡の年越の趣向といふもんだ。

（人々の三）　金の降る夜はナアひとしほ床し。三味線の手は人の知る所なればこゝに略す。

（人々の四）　とんだ悪い天氣だの。もふ上りそふなもんだの。

○深山嵐に山吹の云々　『ひらかな盛衰記』第四、無間の鐘の條に「其金爰にも三百兩、ばらり〳〵と投出す。深山嵐に山吹の花吹散す如くにて、爰に三兩かしこに五兩、是は夢か現かや」。

○紀文大盡の年越の趣向　紀國屋文左衞門が節分に豆を撒く代りに金銀を撒いたといふ。

○金の降る夜は　長唄『那郭園菊蝶』の秋の部「小夜衣」に「雨の降る夜は一人ゆかし。待つ身は一人やるせなや」。

○天道人殺さず　諺。天の慈悲の廣大なのをいふ。
○黒　芝居の俳優位附に黒字と白字とがある。極上々吉も俳優の位附である。
○上州の灰　淺間山噴火の灰。
○てん違ひ　てんは點か。位が違ふの義であらう。

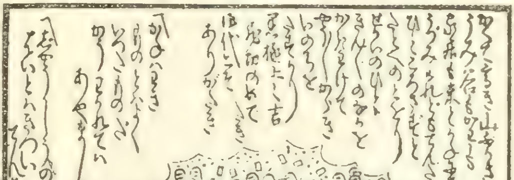
斯くて高き山深き海、谷も川も家居も、米と金にて埋みけれども、※天道人殺さずと喩の通り、世界の人、金銀の中をかき分けてやう〳〵辛き命を助かり、※黒極上々吉飛切の芽出度き御代こそ有難き。

(金に苦しむ人の一)　金は涌きものとは、よくいつたものだ。かう涌かれては謝る。

(金に苦しむ人の二)　上州の灰とは強いて※てん違ひだの。

(金に苦しむ人の三)　芽出度いにも程があつたものだ。こふまた芽出度い事もないものだ。ばか〳〵しい。

そりや出た〳〵。金の子が出たよのう。親もむぐれば子もむぐる。

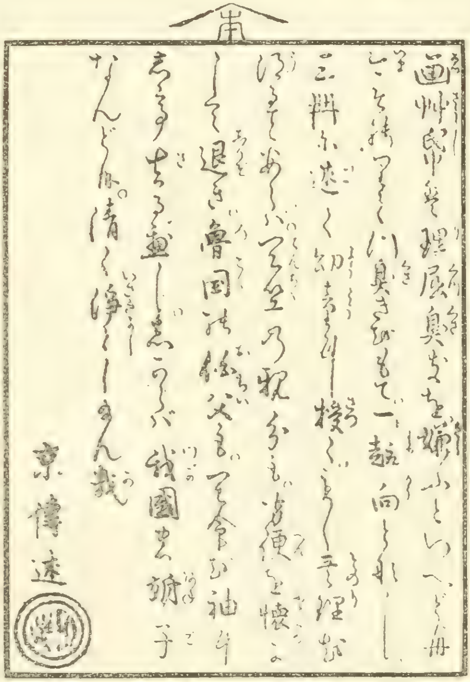


大極上請合賣　**心學早染艸**

山東京傳作
北尾政美畫

画艸帋は、理窟臭きを嫌ふといへども、今その理窟臭きをもて、一ト趣向となし、三冊に述て幼童に授く。もし其理を得る事あらば、※天竺の親分も、※方便を懐にして退き、※魯國の伯父も、※天命を袖にして去るべし。しからば我國の姉子なんども、清く淨とし給ん哉。

京傳述㊞



○天竺の親分　釋迦。
○方便　善智の佛が、巧に工夫を凝らして、下根の衆生を化益し、惑ひを斷って、竟に妙理に歸せしめることをいふ。
○魯國の伯父　孔子。
○天命　『論語』爲政篇に「五十而知天命」。

○姫小松の淨瑠璃　「鶊（ひばり）山姫捨松」。通常「雪責山」と略称する。中將姫の淨瑠璃。
○年代記　古い由來を書いた書物。
○木九からに云々　「聞くからに秘密の山に土一つ七つは金と御推量あれ」。陰陽五行をこじつけた歌。
○天帝　天地を主宰する神。造化の神。
○理方　理窟。かうなるべき道理。

人間に魂といふものあり。如何なるものぞといふに、男の魂は劍なるべし、又、※姫小松の淨瑠璃、俊寛が云分をきけば、女の魂は鏡に極りたり。又、芝居の魂は銅に赤き紙を張るものなりと。そんな論は皆脇へ退けて置くがよし。劍と鏡なりと言ふは皆譬なり。又、※年代記の端を見るに、魂を知る歌とて、

※木九からに火三つの山に土一つ七つは金と五水りやうあれ

とあれども、これは牽強なり。壹つより外はなきものなり。これを生ける時は精氣と言ひ、死す時は魂魄と言ふ。又、心神とも言ふて人間の大切なるはこれに過ぐるものなし。その魂と言ふもの何處より來るぞと思へば、天より授かるなり。

「おれがなりには畫工も困るだらう。今日のなりは日本に限る※天帝だ。他の國へは沙汰なし〳〵。評判〳〵。」

そも〳〵天上に天帝と申す尊き神在しまして、常に茶碗のやふなものへ椋の實の皮のやふな物を水にて溶き、竹の管を浸して魂を吹き出し給ふ。その※理方子供の弄ぶシャボンの如し。吹き出し給ふ時は、悉く丸く全き魂なれども、妄念妄想の風に

○拍子幕　芝居用語にて、幕を閉める時に用ふる拍子木の打ち方。(『歌舞伎名作集』上、五五頁參照)

吹かれて中にはいびつになり、或は三ン角四角になつて飛び行くもあるなり。

○

爰に江戸日本橋の邊りに、目前屋理兵衛といふ有徳なる商人ありけるが、妻妊いて當る十月目と言ふに出產して、玉の如くの男子を儲けければ、家内祝詞を述べてさゞめきける。

幼きは白き糸の如く、如何樣にも染るものなりとは宜なるかな。理兵衛が悴出生すると等しく、彼のいびつなる惡魂皮肉へ分け入らんとする所を、天帝現はれ出給ひ、惡魂が手を捻ぢ上給い、全く丸きよき魂を入給ふ。これ親理兵衛が常に一心の修めよき故、天帝惠を垂れ給ふ故なり。されども、凡夫の目には少しも見えざるこそあさましけれ。

「コヽ構はずと行け。」

「ハア。」

「チヨン〱〱。」

と拍子幕といふ所なり。

理兵衛は悴を理太郎と呼び育てしが、よき魂日く附添い守り居ければ、成長に從い利發にて行儀よく、その上器用にて外々の子供とは事變りければ、兩親掌中の玉の如くいとおしみ育てけるにぞ、三つ子の魂百迄と、末頼もしく見へけり。

「これは見事だ。おれが子ながら後世恐るべしだ。餘り不思議だの、誰ぞに書いて貰いはせぬか。」

「ほんに御器用な御子様でござります。」

「お師匠さんがこれからは國盡しを書いてやると言ひなさつたよ。」

「坊はおとつさんや、おかゝさんが大事だよ。

穴一や寳引はしねへもんだねへ。」

魂後に鬚撫でゝ居る。

「ちつとそうもござるめへ。」

〇國盡し　日本の國名を歌にした往來物。

〇穴一　地に穴を明けて、錢を打ち入れて勝負を爭ふ小兒の遊戯。穴を掘りて其前へ一を引いてなす故穴一だと云ふ說もあるし、又は穴印地の略語とも云はれてゐる。

〇寳引　長い紐の先に、品物をつけ、引いて得る正月の遊戯。井原西鶴の「日本永代藏」に「さる大名がたに御吉例とて、正月三日の夜、大書院にて家久しき者ばかり召寄せられ寳引を仰付けられける。ふすま障子の内より五色の長緒を數百筋なげ出して、手毎に一筋づゝ引取り、此緒の末に付け置かれしものを下されける。小姓引出す綱に、桑の木の撞木杖をかけ、家老職の人引出す綱に銀錢一貫文或は唐織の卷物を引出すもあり云々」。しかし賭博行爲に類するものもあつたので、享保十六年に「輕き賭之寳引、よみかるた打候者三十日手鎖」と達してゐる。

○

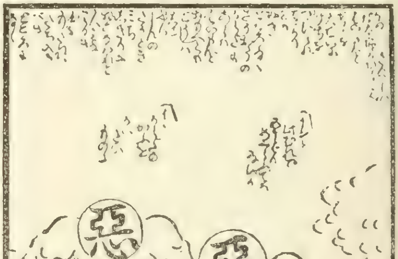
かの惡魂、理太郎が體へ入らんとせしを、天帝にけちをつけられてより、身の置所なく、相應の體もあらば入らんと思へども、當時は儒佛神の尊き道、しきりに行はれて人皆惡き心を持たねば、立入るべき所もなく宙にぶら〳〵して居たりけるが、折もあらば理太郎が體のよき魂を亡きものにして、我々長く理太郎が皮肉の中を住家にせんと工みける。

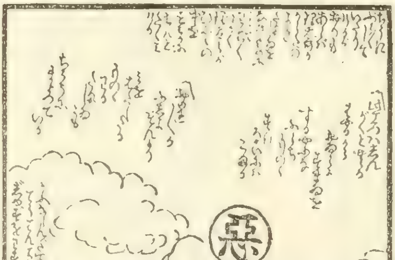
「ナント此群で※五十番めくらふではないか。」

「イヤ、體の株を買いたいものだ。」

「此頃は※心學とやらがはやるから、おゐらが住ゐをするやふな不埒者の少ないには困る。」

おのれ〳〵が不所存より身を果したる者の惡魂共、※中有に迷つて居る。かふ並んだ所は、※今丁半でも始るやふだ。珠數を忘れた※百萬遍の場もある。





○五十番　めくりにて五十番打續けるを云ふ。めくりとは手に持つ札と場にある札とを合せ取るのである。

○心學　道話ともいひ、宋儒の說を本とし、神佛の說も取入れて、それを通俗的にわかり易く說いたもの。石田梅巖及びその門人手嶋堵庵、中澤道二などが弘めた。

○中有　現世と冥途との間にある暗い世界で、まだ未來世に生きないうちをいふ。

○丁半　博奕の一種。

○百萬遍　佛敎の語。彌陀の名號を百萬遍唱へて極樂往生を願ふのである。「珠數を忘れた百萬遍」といふのは百萬遍には數取の珠數が必要だが、此では念佛もしないで百萬遍のやうに居並んでゐるから、さう云つたのである。

◇これより中巻

○額は拔かぬがよい　額の毛を拔いて丸く又は四角などにすることは人柄が惡くなるといふのである。

今は早や理太郎十六才となりければ、元服をさせけるに、生れ付もよく、好い男となり、さて店の商賣向あらまし預けてさせければ、型の如く律義者故、朝も早く起き夕邊も遲く寐ねて、隨分萬事に心を配り、儉約を元として、親に孝をつくし家來に憐みをかけ、算盤を常に離さず内外を守りければ、その近邊に評判の息子となりけり。

「※額は拔かぬがよい。人柄が惡ひぞや。」

「ハイ〳〵。」

「よくお似合いなされます。」

人の寢たる時は魂が遊びに出ると云ふ事違いなし。理太郎十八の年、ある日帳合に疲れて轉寢しける。かの魂日〳〵惡き魂を近づけまじと守り居る事故、少し草臥れて、理太郎が轉寢を幸い、其處らへ遊びに出しが、例の惡魂はよき折柄と仲間を語らひ來り、よき魂を縛りおき後の體へ入りける。

「よい氣味〳〵。」

「エ、殘念な。」

○素見　ひやかし。

○土手八丁　吉原の外廓にある日本堤八丁。

○きな粉餅〱　「來な」に「黄粉餅」を云ひかけた洒落。

○追剝に會つた宿引　裸體で理太郎を引つぱつて行くゆゑ、追剝に逢つて裸にされながら客を連れて行く宿引の如きものであると云つたのだ。

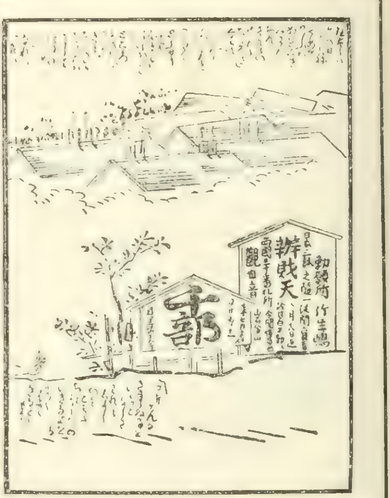
○

理太郎はその日轉寢覺めて、今日は淺草觀音へ參詣せんと志し、觀音へ詣り歸らんとせしが、つく〲思ふ様、我今迄は吉原と言ふ所振り向いて見る氣もなかりしが、※素見はさして錢も入らぬ事なれば、一度は見ても苦しかるまじと思ひ、うか〱と※土手八丁へさしかゝりける。これ惡き魂の皮肉に分け入りし故なり。

「イヤ〱行ふとは思つたが、内で案じるであらふが。然しとても此處まで來たから一寸見て行ふか。但、歸らふか。」

と色々迷つて土手を行つ戻りつする。これ惡魂の所爲なり。

「コレサそんなきまらぬ事を言いつこなしさ。我等諸事呑込だ。ちと吉原の意氣な所を見な。サア〱早く※きな粉餅〱。」



「※おれは追剝に會つた宿引といふ身だ。」

「ウ、〱〱。〆たぞ〱。ウ、〱〱其處だへ〱。おいらが身は人間の車を引くやふだ。」

理太郎は悪き魂に誘はれ吉原へ来り、素見物にて歸らんと思ひしが、※中の丁の夕景色を見てより、いよ〳〵悪魂に氣を奪はれ、とある茶屋を頼みて、三浦屋の怪野といふ女郎を揚げて遊びけるが、忽ち魂天上へ飛んで歸る事を忘れ、更に正氣はなかりけり。

魂宙に飛んで、踊をおどる。

「そつこでせい。」

「よい〳〵。」

「アリヤ〳〵。」

「ア、い、匂がする。※岡本の乙女香といふ匂だ。」

「酒に明かさぬ夜半もなし、それが高じた物狂ひ。」

「ア、面白い〳〵。こんな面白い事を、今迄知らずに居たが残念。」

○

○中の丁　仲の町である。

○岡本の乙女香　匂ひ油。

かくて床おさまり、程なく女郎來たりければ、かの惡魂共は、女郎の手を取つて理太郎が――――。

「もつとこつちへおよんなんし。ヲ、つめてへ。」

「うちをかぶつたらどうする、するもんだ。」

「合點だ〱。」

「マヅ今晩はこれきり、ドン〱〱〱。」

年久しく理太郎が體を住家として、忠義を盡したる善き魂、この度不慮に惡魂が爲に縛められ、理太郎が身の上如何と案じけれども、誰あつて縛を解きて呉れる者もなければ、一人氣を焦る。

此所、忠五郎か伊三郎が、獨吟のめりやすあつて然るべし。

「おれは矢口の兵庫が女房、信仰記の雪姫と云ふものだ。」

○うちをかぶつたら　さし込みが起つたらは。

○忠五郎、伊三郎　長唄の歌うたひ、松永忠五郎、芳村伊三郎。

○矢口の兵庫が女房　淨瑠璃『神靈矢口渡』の由良兵庫助の妻湊をさす。湊は上野の新田義興の居城が落城の際、義興の室を守護して落ち延びた。但し途中にて駕籠舁の爲に暴行されようとして逃れたなどの事はあるが、縛されたやうな所は見當らない。

○信仰記の雪姫　淨瑠璃『祇園祭禮信仰記』中の狩野將監の女雪姫。雪姫は夫狩野信直と共に逆賊松永大膳に捕へられ、その意に從はないので縛される。姫は爪先で櫻の花を集めて鼠を描き、その鼠の爲に助けられる。

悪魂は宵から踊り草臥れて、女郎の懐へ入り、すや〳〵寝入るとひとしく、理太郎はしきりに内の事が氣にかゝり、おれはどうして此處へは來た事ぞ、なぜこんな氣にはなつた事ぞと、夢の覺めたる心地して、物も言はず立歸らんとせしが、此騒ぎに悪魂目を覺して、歸してはならじと早速理太郎が體へ飛び込みければ、又心がわり、遂に流連と極めし處へ、かのよき魂、縛の繩をやう〳〵引切り、一散に驅け來り、手をとつて連歸らんとする。悪魂は歸すまじと引とめる。

理太郎左りへ引かるゝ時は、アヽいつそ流連けやふ」といひ、右へ引ツ張られる時は「イヤ〳〵早く歸らふ」といふて、廊下を行つ歸りつ思案まち〳〵なり。魂の姿凡夫の目には一向見へぬ故、茶屋の男は、

「怪しからぬ身振をする客人だ。」

「お歸りなんすとも居なんすともしなんしな。馬鹿らしいよ。」

「※井戸替といふ身だ。コレ屁をひらつしやんな。」

「ヨイサア〳〵〳〵〳〵。」

○

○ちやの男　ちの次にやの字を脱したのであらう。

○井戸替といふ身　井戸替の時の綱引きのやうに、後へ〳〵とつながつてゐるから云つたのである。

○魂膽の文　魂膽は考へ、思慮。工夫を廻らした誘ひの文。

◇これより下の巻

○死ねば錢六文　死ねば棺の中へ六文錢を入れる。三途の川の渡賃と云ふ。

○何ぞ燭を秉て遊ばざる　『文選』の古詩十九首中に「晝短苦夜長、何不秉燭遊」。

理太郎は元の如く善き魂、又、入りける故、此間の女郎買の事は夢の様な心にて、思ひ出すも穢しく、帳合ばかりして居たりしが、かの怪野が所から魂膽の文來りしを、何心なく開きければ、又惡魂此文の中へ入り來り取つく。

茶屋男――初會からお文の參ると申事は、神代にもない事でござります。

善き魂、文を見せじと氣を揉む。

理太郎は怪野が手を盡したる魂膽の文を見しより、又々心迷ひ、おれが身上で一年に三百や四百の金遣ふたとて、さのみ痛みにもならぬ事、千年萬年生きる身ではなし、死ねば錢六文より外はいらぬものを、今までは無益の儉約をした事ぞ、何ぞ燭を秉て遊ばざると、古詩を以て手前勝手な例に引き、惡念しきりに萠しける。

理太郎惡念萠しければ、此時を得て惡魂善き魂を切り殺し、日頃の念をたちける。

「覺悟ひろげ。」
「無念々々。」

〇年久しく住み馴れし　「年久しく住み馴れし九重の帝都をば……心の中ぞ哀れなる」といふ『太平記』の文章を思はせる。
〇奥山もどき　浅草の奥山にて講釈することを云ふのであらう。もどきは擬きである。
〇いやだの鮨　こはだの鮨の洒落。
〇神がつて　敬遠する意か。

悪魂共途に理太郎が皮肉へ分入、よき魂の女房二人の男子を追出しければ、三人手を引合つて、※年久しく住み馴れし體を立ち退くこそ哀れなり。これより理太郎は大の放蕩者となり、四五日づゝ流連する。

理太郎が番頭迎いに來て、※奥山もどきで理窟をいふ。

「左様に御料簡のないお前様ではなかりしが、天魔の見入れか是非もねへ。」

「コレサそんな野暮を言ふな。どんな事があつても歸る事は※いやだの鮨だ。」

女郎も理太郎が餘り長く居る故、※神がつて言葉を濁す。

「ほんにお父さん、お母さんがお案じなんすだらふねへ。わつちやアどうも歸し申たくねへが、どうしたもんだのふ。」

「是からはおいらが世界だ。」

「ア、えい態だ。」

魂割竹にて追い出す。

○家尻を切る　盗賊が蔵の後「しり」を穿つを家尻切りといふ。

○山科の隠家　「忠臣蔵」大石由良助の山科の閑居。嘗ご赤穂城代家老であつた由良助が今は身分を捨てゝの遊興にふけつてゐる。それを言つたのであらう。

○荒神様の吠へるな　「荒神棚の布袋」といふ諺がある。それをもぢつたものか。

「きり〳〵立つて失しやアがれエ〳〵。」

「今に思い知らせん。」

「悲しや〳〵。」

「かゝ様いのふ。」

○

理太郎は段々悪魂ふへて、女郎買の上に大酒を飲んで暴れ、博奕をうち、騙りをし、親にも不孝に当りければ、遂に勘当の身となり、今は身の置所さへなきやふになり、あまつさへある夜親の内の土蔵の※家尻を切る。

悪魂共多く集り、つき纏つて色々悪事を勧むる。恐しき事也。慎むべし〳〵。

犬曰「※山科の隠家じやアねへが、昔の旦那今の泥、吠へねばわたしが役目が缺ける。わん〳〵〳〵。」

「斑犬よ、おれだは。吠へるな〳〵。※荒神様の吠へるな〳〵はどうだ。」

○道理先生　寛政の頃中澤道二といふ心學の大家があつた。それを匂はしてゐる。

理太郎は遂に宿無しとなり、尚更悪魂増長して今は盗賊となり、人家離れし所へ出て、追剝を致しけるこそうたてけれ。

然るに又爰に博識秀才仁徳の世に著き道理先生と聞へたる尊き人在しけるが、或夜講釋より歸りがけ此所にて盗賊に出合い、豫て手に覺へあれば、早速引捉へ、不愍の事に思ひ給ひ、如何にも教訓して善心に導かんと其罪を許し、同道して宿所へ歸り給ふ。

「憎い奴の。」

悪魂共、おのれらが業にて、今この身にして仕舞いながら、皆々指さして、どつと笑ひけるぞ憎らしき。

○

爰に又善き魂の女房、二人の忰は、如何にもして親の敵を討たんと附狙へども、悪魂は多く方人ある故力に及ばず、無念の月日を送り

○物前の金　物日より兩三日ほど前に、祝ひの入用物などを調へる爲に要する金。

○きめねばならぬ　きめつけねばならぬ。懲らしめねばならぬ。

しが、本心に歸りし時を得て、難無く本望を遂げければ、その外の惡魂は皆々逃げ失せけるぞ心地よき。

「夫の敵、勝負々々。」

「思い知つたか。」

「親の敵、觀念しろ。」

理太郎は道理先生に命を助けられし上、儒、佛、神の尊き道を聽き、今は前非を悔い、本心に立歸る。

「道理のないはわし一人、可愛と言ふてくれの鐘も、※物前の金も、今はもう穢しやく〳〵。」

「人間萬事大切なるは一ッ心なり。皆おのれが心より出て、おのれが身を苦しむる。今の心は卽ち魂じや。こゝの道理をとくと合點せねばならぬ。」

「此序に此本の作者をも※きめねばならぬ。大分不埒じやさふな。」

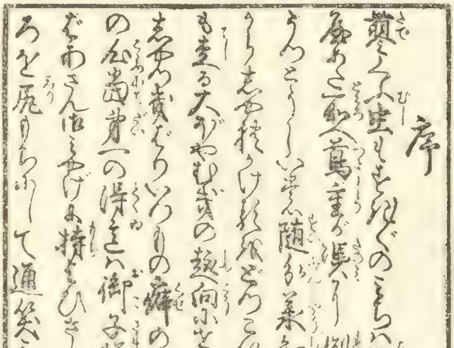
道理先生悉く教訓して後、目前屋の兩親に勘當の詫をし給ひければ、兩親も大に喜び、早速呼び返しければ、理太郎是より道をあきらめ、親に孝を盡し眷族を憐み、大君子とぞなり、家富み榮へける。是皆道理先生の仁德なりと、世に言ひもてはやしける。かの善き魂の悴兩人は、親の後目を繼ぎ、長く理太郎が體を住いとして、母をも育み、怠らず守りけり。これより魂が据つて再び立つ事なし。

即席耳學問

序

市場通笑作
北尾重政畫

※蓼くふ虫もすき〳〵のみちは馬鹿〳〵しいと二三年やめた所へ、蔦重が憑に例の教訓異見のうつとうしいも、隨分承知之助と板元のほうからしやれかけるを、どつこいそこを虎※の皮千里も走る大※ぼやむきの趣向にせず、意地にかゝつて※しやつきばり、いつもの轆の十割まし、たつた一ツの心當、第一の得意は御子様方へ、御祖父さん、御ばあさん、御※みやげに持よひさし合きん物のないところを尻もちにして通笑自ら述る。



○蓼くふ虫もすき〳〵のみち　は「蓼くふ虫もすき〳〵」の諺に「好きな道」を掛けた。

○虎の皮千里も走る　虎の皮の褌から氣を引き緊める義の「褌を緊める」意にとり、更に虎から千里を走ると續けたのである。

○大ぼやむき　ぼやはやぼではあるまいか。虎から大やぶと洒落れてやぶをやぼに轉化したのかと思ふ。

○しやつきばり　鯱張りか。鯱のやうに硬くかまへること。

○御みやげに持よひさし合云々　お土産として持ち良く、支障、禁物のない所を尻餅（小兒の立つを祝ふ善哉餅）にして云々。

○ぐつすり　熟睡することであるが、こゝでは、すつかり、一切等の意に用ひてゐる。

○耳近く　聞きなれて解し易いやうに。

○父の恩は富士山を目の下に云々　諺に「父の恩は山よりも高く母の德は海よりも深し」。また「童子敎」に「父恩者高ㇾ山。須彌山尙下ㇾ母德者深ㇾ海。滄溟海還淺」。

○四世の契り　夫婦は二世、親子は一世、主從は三世といふのが通例。

○マヽ　ときどき。

○早業八人前の學問　「早業八人藝」をもぢる。八人藝は見世物の一種で鳴物などの八人の役を一人で演じたものであつた。萬治年間駿河安倍川のほとりの洒樂と云へる座頭江戶に來り、紙帳の中にて一身八色の鳴器を合奏す。其後天明年間川島歙府、寬政年中歙府の門人歙遊八人藝を興行した。

○大極上々吉の人　この上もなく善い人。俳優の位づけより出づ。

○實語敎　書名。一卷。著者不詳。經傳中の格言を抄錄し、誦讀に便にしてある。

爰に島屋仙右衛門と云し正直一遍に商ひを心掛け、其身六十にあまる比は、人も知る金持となりしを、ぐつすり息子に讓り、名を學心と改め樂な身となれば、あたりの子供を集め、忠孝の道と一生の心掛を耳近く話しける。先父の恩は富士山を目の下に見る程高く、母は恩龍宮の掘抜より深く、主從の緣は四世の契り、何と諫にはなるまいかと、やはく\と敎ゆる其上、男は家を保ち、女は夫を

始め舅姑のつかへやうまで、マヽ贅を以てこれを導きける故、子供の行儀も目立つ程によくなれば、後々には、子供より親爺をふくろが我もく\と詰めかけ、有難いを口の酸くなる程にいゝて、日く\に聽く事が面白く、少しの懈怠もならぬやうになりしも、元來此隱居、商人といふ者なれば、向ふの心持を承知して二十に賣るものは十九文、四十のものは三十八文と賣りかける心地の所へかゝつては、釋迦でも孔子でも及ばぬこと、卽座卽效の敎へ方、早業八人前の學問の上を行つた手廻し、早業千人前なり。これをきゝて後、道ある事を知りて學問を始めて大極上々吉の人となりたる者、その數を知らず、隱居の悅び限りなければ、又そのもとは隱居の蔭と悅ぶ。

「聞けばきく程身に沁み渡るぞ。」

「實語敎より面白くて覺へよい。又明日も聞きに來

○御公儀様　政府。

○野中の一本杉　子供が親の肩に乘つた姿が野原の一本杉のやうだと云ふこと。

○坊さん、これ團十郎　坊主頭の小兒が、團十郎ばりに荒事をする容を眞似ながら、かく云つたものか。

やう。」

○

又島屋の一軒おいて隣に、徳田屋新右衛門といふ者あり、これもそこらでの身上なれば、何不足なく、其上六ツになる一人息子寵愛限りなし。有る習ひ、我一人可愛がれば近所で憎む事を母親は氣の毒に思ひ島屋の隱居様の前も面目もなしと、段々亭主に意見すれど、つんぼう程も聞かず、

「うつちやつておかつせへ、子供は皆こんなもんだ、何のあの隱居がいふ事なれば、聞いた事はねへが忠孝の道じやとて、それを知らぬものがあるものか、※御公儀様の掟を用ひれば忠孝の道はいふに及ばず、きくにもおよばず。こんな又知れた事もねへもんだ。よもやあの隱居もそんな事を珍しさふにいひもせまい。何ぞほかに面白い話でもするであらふから、それで聞きに行くであろう。

小僧も來年から師匠様へ行くとおとなしくなります。ナア坊。」

※野中の一本杉、どつと褒めたり。

「坊さん、これ團十郎。」

「さあ婆とおいでよ。」

○甲子　甲子待をいひ、十一月の子の日に大黒天を祭る。商人は鼠の子の蕃殖するやうに利を得んと祈り、鼠の好物なる黒豆を飯にたいて供へるのである。

○九ツ　午前の十二時。又午後十二時。こゝでは勿論後者の意。

○ぜんざい〳〵　善哉々々。

○打出の小槌　種々の財寶を心のまゝに打出すことが出来る小槌で、大黒天が常に持つてゐると言はれてゐる。

○立引　意地を張ること。

○隠蓑、隠笠　寶盡しの繪にある。これを被れば、身を隠すことが出来るといふ。

新右衛門は型の如く律義者にて、尤も、商人なれば大黒天を信じ、甲子は怠りなく御神酒供へに黒豆の御飯のみにて、九ツまでわれひとり起きてゐて、

悴息災延命、猶成長の上野呂間でもござらぬやうに、今の内は洟を垂らしても後々は洟つたらしでござりませぬやうに偏に御願ひ申上ます。

と繰り返し〳〵お頼み申上ければ、不思議なるかな、大黒天現はれ出ぜんざい〳〵われはこれなど〻しかつべらしきことなく、とんと御こゝろやすく、新公さてお主が望は世間の者とは事變り、かの物を欲しいともいはず、唯息子の事ばかりかれこれ言やるが、打出の小槌の方よりおれが料簡にはむづかしい。然しながら頼むとあれば立引ではないが、殊にお主が事は、持前の額の皺に皺をよせた隠蓑隠笠此二品をお主に進上、ではない暫く貸すから、これを着て見やれとお貸しなされけり。

大黒様も何といつても、お年寄だけで重さふなる御趣向なり。

「此御禮には何でもおねだりなさりませ。」

「食物の事をいふは勿體なひが、黒豆の飯は強ひと御免だ。神酒徳利もよく振つてくりやれ。」

○

授かりし蓑と笠をそつと二階へ上りて着てみた所が、隠れたか隠れぬか手前には知れねど、窓から屋根を覗ひて見れば、近所の猫三匹日向ぼこをして居れ共、見て居

ても逃げも騷ぎもせず、さては此姿、猫の眼にも見へぬさふだ、これは面白いと息を殺して覗ひければ、一匹の猫がいふ。

「虎、手前は鼻の先をどうした。」

といへば虎がいふ。

「鰹を一切引いたら、おさんめが途方もなく擦りあがつた。かみ様が飯を入てやれといはしつても、面倒がつて入てくれず、ひだるいから引のだ。」

「チ、おらが内でも昨日此畜生奴は一日伏さつてけつかる。おいらも今度は猫に生れたい、好きな鼠を食つて一日寢てゐる。こんな樂なものはないといふから大笑ひじやアねへか。をれはもふ鼠は嫌いだが、あいつがうせて飯つぎを嚙つたと言われては濟まねへ。内の者が寢るとおらあまんぢりともしねへ。晝睡くなくつてどうするもんだ。鼠も山椒醤油の附燒か、又食卓のやうにでもしたら食へもしやうが、その儘食つて喰われるものか。さりとは人間といふものはものを知らぬもんだ。」

と話せば、新右衛門は初めてかやうな事を聞き、呆れ果て、、膽をくる／＼でんぐりかへす。

「狆と云ものはよく物を知つて人を見知るが、猫はいけまじ／＼として嬉しい事も知らぬもんだといふが、狆のやうに輕薄らしい事はおいらは嫌だ。」

「おらがかみさんはこいつは化けもしやうといふが、手前の振袖を着た事は棚へ上げて。」

○食卓　しつぽく料理。支那料理が長崎に傳來して日本化したもの。

○猫はいけまじ／＼云々　猫はいけ圖々しくして嬉しい事など知らない奴だと他の者は言つてゐるが。

○手前の振袖を着た事は云々　狆がちやん／＼を着たことは知らぬ顔して猫が化けるのを彼是云ふ。

猫の話に我折り果て、又犬の心意氣を聞かんと覗へば、これも同じく夜番の話、

「昨夜胡亂な奴が見へたから、まんじりともしねい、横丁の方でも時々飯の一杯づゝも食はせるから、此處も行き過つて見たり、肴屋は一得意だから粗末にはならず、鳥の鳴くまで聲を枯らした故、草臥れて通り中に他愛なく寢て居たら、何處のべら坊か、したゝか踏みやあがつた。おれが考へて見るに、咎もねへ者を責めるといふ痴もあればあるものだ。此處での事だが、おいらは世間の狹ひ者だから、旦那衆の氣に背いてはならねへ。子供衆が手をくれろといわつしやると幾度でも進ぜる。兎角可愛がられるが得だ。」

と話せば、新右衛門聞きておそろ感心々々。

「早く伯母様でも降ればいゝ。」

犬の口からこういへば、雪は犬の伯母なること明けし。

「伊勢屋の御用も坊主はいゝ奴だが一人のに困る。」

新右衛門はかの蓑笠の威德を知りて、少し料簡ありて、江の島鎌倉大山の邊、箱根邊りへぶらつかんと、たゞ一人にて出かけ、此蓑笠さへ着ると箱根も手形は入らねど、其處が大黑様なか〳〵天下の御關所、こゝでは隱れといふ字は御嫌ひ、その他品川で酒落ても笠をかぶり三軒屋でおごり、濱川で生きた鱸をしてやり、神奈川泊り藤澤泊りも蓑さへ着やうものなら、むまいもの〳〵親玉なれど、こゝが新右衛門、大黑の氣に入正直者、それでなければ大事の物を貸しはなされぬ筈、神は其處が見通しで大の御承知さ。

「何時だのと聞くもお定まり。」

○胡亂な奴　怪しく、疑はしい奴。ウロンは宋音にて、支那の俗語を傳へたもの。

○江の島　相模國鎌倉郡の南部海岸の孤島。腰越町に屬す。

○鎌倉　相模國鎌倉郡鎌倉町。

○大山　相模國中郡にある。雨降山、阿夫利山などとも云ひ、山上に阿夫利神社がある。

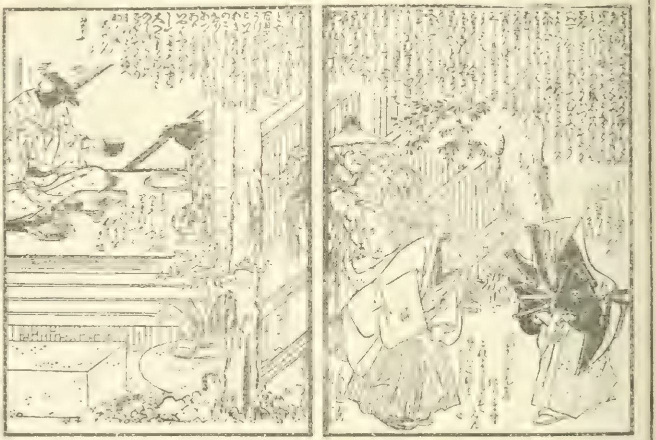
○箱根も手形は云々　箱根には關所があり、旅行手形なしでは通過が出來ぬ。簑笠を着れば隱れて通れるが、それは大黑様がお嫌ひだ。

○これよりも　私方よりも。
○最明寺殿云々　[illegible]旅姿を云ふ。最明寺殿は[illegible]姿。備後三郎（兒島高德）は蓑笠の風、明智光秀は身をやつして眞柴久吉を伺ふ。
○烏に反哺の孝　烏は成長の後、親烏の口に餌を含ませ、養育の恩に報ゆるといふ俗諺。「鳩に三枝の禮あり、烏に反哺の孝あり」。
○枇杷葉湯　[illegible]いふ薬で、枇杷の葉、肉桂、その他數種を[illegible]。

「お茶上れ、お休みなく〳〵〳〵。」

○

それより御殿山の方へ行く程に、烏の一群ちやちやくちやと鳴き行く故、こいつも面白さうな事と、かの蓑笠引かけ後を慕ひければ、森々たる森の打續いて、覗へば一ツの庵ありて向ふの方より來るものを見れば鳩なりけり。大小上下にてこなたの鳩は袴羽織、はたと行き逢ひしが、其禮儀正しく慇懃なること人も恥づべきなり。實、鳩に三枝の禮あると、親より三枝下りて止る由、他人すらかやうなれば親にはさあるべしと、又烏類にも恥入りける。



「さて〳〵御無沙汰、まづ御壯健、どれへ御越でござります。」

「八幡へ參詣仕ります、これよりも御疎遠、お噂のみ申しました。」

最明寺殿、備後三郎、明智光秀、三役一體にて覗ふ。又かの庵をさし覗けば、老人の烏に息子らしき烏が給仕して食をすゝめける。「何ぞ御氣に入ましたら、お替下されませ」といへば、「いや〳〵皆々むまき故十分なり」といふ。これらをや烏に反哺の孝とやいふべくと思へば、百日親の養ひを受け、百日親を養ふといふ。それでは元値商ひで損得なしの孝行じやと思たが、なか〳〵老人への扱ひ、百年の孝ありとも見ゆる。いやはや、人間として鳥類にも大凹みだ。息子の烏今日は御番でござりますといふ故後を慕はんと思ふ。

「今朝はお風邪はよろしふござりますか、もちつと枇杷葉湯を上りませ。」

○油揚を盜む　鳶が油揚を凌ふといふ俗說。

烏の後につき來りて見れば、鳥類の御役所と見へて、さまぐの願ひ手あり、鷄の喧嘩出入雙方御叱り、稲穂に雀、粟に鶉、いづれも零れたるより外一向取るまじき由仰せつけられける。先立つて雁鴨にも申つけたる通り、百姓の骨を折りたるものを只食ふでは相濟まぬ。零れたる分は大切の雑穀すたる故、此分は勝手に食すべし。又啄木鳥は枯木の外は一切禁制、櫻に遊ぶ鶯に御不審のお尋ありと評定の中へ鳶の繩付を引据へ、御吟味の條は、その方前々より嚴しく申付しにいかゞ相心得、豆腐油揚を盜み居る。それを食はねばならぬといふこともあるまい。畢竟おのれが奢りの沙汰、その他肴賣の魚を凌ふつもりであらふが、四文錢一本凌ふたる咎、油揚と思つて煙草入を凌ふのみならず、小僧が手を引掻きし咎、又三百が蒲焼をしよしめたる事まで一々露見しけるが、大膽不敵

○晝鳶　人の不在を窺ひてかつぱらひをするもの。

○大山の……不動へ　神奈川縣大山町の阿夫利神社は俗に大山不動といふ。

○腹のきたのけ　「腹が北野の天神」といふことあり。腹がすいて來たといふ地口。

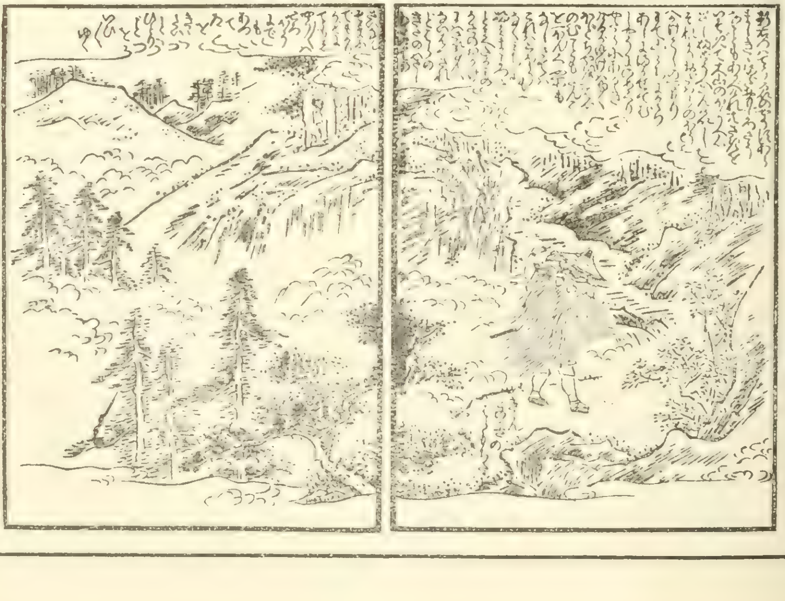
一々舊惡御吟味の上、蜜柑籠に入られ非人に下され、家々の前に晒さるゝに極る。

一「何事も私共のやうに思召しますが、晝鳶と申ものは人だそうでござります。」

○

新右衛門は鳥類の樣子あらまし聞き、まだ面白さうな事もあるべけれ共、先を急ぎて大山の方へ心ざし、不動へ參詣し、それより小田原の方へかけ越しのつもりにて山道にかゝり、足にまかせて無性にのめくり、やたらに歩きけるが、行けば行く程茶を一杯のむことも、團子を一本食ふ所もなし。さてはこれは途方もなく途に踏み迷つたと見へたが蓑笠のお蔭には災難はない筈、されど腹のきたのは差當つての災難、柚にでも獵人にでも、少々は泥坊にでも逢つて道をきゝたいと獨り言をいひ〳〵行く。

一「飢饉この方の腹持だ。」



○つがもねへ　ばかばかしい。

※蟻を塗り付たる　熊が掌に蟻をつけて舐める事俗説にあり。

さてまだ行く程に〳〵大きなる岩を越へ、谷を飛びても道らしき所はなく、一ツの岩窟有、凄じく熊笹がある故、覗いて見れば大きな倉作りのやうなる洞穴なり。奥の方に二ツぴかり〳〵と光るをよく〳〵見れば、大熊の目玉を怒らし煙草をのんで居る故びつくりし、此所はさしづめ蓑笠を着る所なれど、道が知れねばつまらぬ故怖々ながら、「ちとお頼み申ます。私は道に踏迷ひたる者でござります。小田原の方へはどう参じます。」と、無性に慇懃にいへば、

「それはつがもねへ間違ひだ。今日は貴公は廿里ばかり山を歩いた。どうで今日は歸られねへ、まあこちらへ這入らせへ。さぞ腹も減つたであらふが、飯などはない事なればこれを嘗め給へ。」と手を出しけるは、かの※蟻を塗り付たるなり。これは冬中の蓄へなれど進せるといふを嘗めて見た所が、

○二ツ膳つき　鄭重なる饗應の膳にて、本膳の外に二の膳のつくもの。其他三の膳などもあり。

中々二ツ膳つきの御振舞よりむまい事どうもいへぬ腹鹽梅なり。世の人いふ通り蟻は熊食物と聞きしに嘗めるは今が初めなり。

「これは珍物でございます。」

「わしが所は他に馳走もならず、そして面白くもない所なれば、明日は道まで送らせてやりましやう。」

と田舎の親類より深切に世話をするは奇特な事なり。

猿と亀は熊の使ひに狼を呼びにゆく。

なんぼ深切にしてくれても、其夜はまんじり共せず、はや夜も明けゝれば狼にいひつけ道の知れる所まで送らせける。

新右衛門も※送り狼とは聞傳へて承知なれば後生大事に足元に氣をつけ道々話しながら歩きければ、顔つきとは違いにて、「私共は兎角人間程怖ひものはござりませぬ。人が怖ひから威してみたり、張込んでみたり、先からさへ構はねばこつちからどうしてさ。」と話せば、「いかさまお前達の氣象ではさうであろふ、昨夜からのみんなのお世話は大抵なこつちやあねへ。」と※空輕薄をいゝながら、狼は近道を知つてゐる故、昨日の廿里を半日かゝらず本街道まで出でけり。

「熊が道に迷つて來ても、一晩でも泊める人間は日本國にはあるまい、おれもその仲間だ、氣恥しい。」

「そこらの岩でお休みなさりませ。」

新右は獸世界の厄介になりても、禮に

○送り狼　山中で人の後について行く狼をいひ、轉じて人が他の人の後をつけ狙ふをいふ。

○空輕薄　そら〴〵しいお世辭。

○惘れ　心配。
○花になく鶯、水に棲む蛙　「花に啼く鶯、水に棲むかはづの聲を聞けば、生きとし生けるもの、孰れか歌を詠まざりける」＝古今集序
○住吉明神白樂天を張込み　謠曲「白樂天」を云つたもの。此の曲は、唐の白樂天が日本の智慧を試みに來たのを、住吉明神が漁翁の姿で海上に現れ、日本には漢詩に劣らない大和歌のあることを教へて追ひ歸したといふのである。
○勸學院　平安朝の頃、藤原冬嗣が藤家一門の教育のために建てたもの。
○蒙求　書名、唐の李瀚の撰。三巻より成り、古人の事蹟を選んで童蒙の教科としたもの。
○雀……海中に入て蛤となる　俗說。
○蜃氣樓　靜かな海面の空中などに、城市の風景などが現れる現象。蛤が蜃氣樓を吹くといふことは俗說。
○龍宮　想像上の仙宮で、支那及び日本にはこれに關する傳說が多い。
○おつりき　おつ（乙）に同じ、普通とは異なり風がはりなこと。
○葺屋丁の河岸　見世物小屋のあるところ。

行く惘れもなく江の島も參り、七里が濱にかゝりしに、大蛤を見てつく〴〵思ひけるは、※花になく鶯、水に棲む蛙も歌を詠むは日本だと、※住吉明神白樂天を張込み、又※勸學院の雀は※蒙求を囀つたといふ。※雀も四角な文字をひねくりしその上りに、海中に入て蛤となりしが、さりながら斤ではかる奴等まで雀であろうものなら、人の食ふ稻穗はない筈、此大蛤は元が學者故、※蜃氣樓といふ唐の屋作りを吹いて樂しみけるを、新右も面白き故、ふわりとその蛤に乗りければ、だん〴〵と底へ沈みける。新右思ふは、蓑笠の德あれば水も濡らすまじ、さらばよきついでなれば、※龍宮を見て來んとの出來心、ぐつと目口をふさいで蛤任せに行きにける。さりとは大黒樣は※おつりきなものを御貸しなされたと心で樂しむも可笑し。

「慾心には、この蜃氣樓を※葺屋丁の河岸で見せたい。」

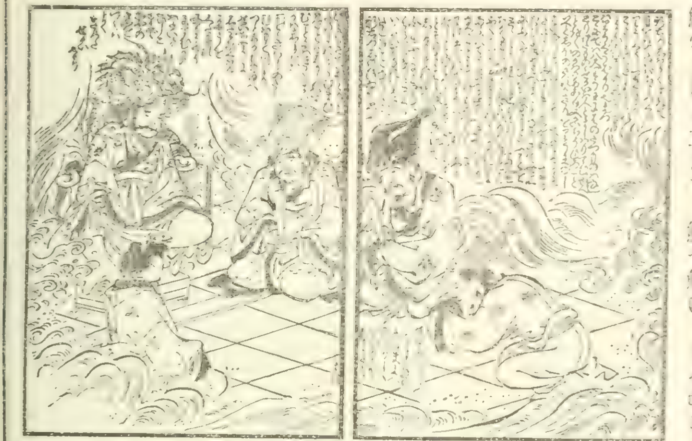
○八大龍王　佛家の語、八ッの龍王。難陀、跋難陀、娑伽羅、和修吉、德叉迦、阿那婆達多、摩那斯、優鉢羅の稱。

○鯔や鱸は、名を改める度に云々　鯔は幼魚の時を「おぼこ」といひ、やゝ長じて「いな」といひ、「ぼら」から「とど」となる。鱸は幼名を「せいご」、やゝ長じて「ふつこ」といふ。由つて俗に出世魚とされてゐる。

○淡海公　藤原不比等。下文のこと謠曲『海人』にある。

○鯷　「ひしこいわし」ともいひ「せぐろいわし」の幼魚。これを素乾にしたのが「ごまめ」である。

新右衛門暫く過ぎて目を開けば、ちよつくり龍宮に着きけるが、此處も葭簀にて隠れ見るに、大昔の通りなれば龍宮ばかり也。まづ此處にては八大龍王に歯の立つものはなし。鳥獣の世界は人と交り住む故、時々の變り目あり、又海中廣しといへど潮のさす限りを龍王の支配なり。それ故鯨が鯛の上にも立たず、鯔や鱸は、名を改めん度に御目見得する事なり。さて世上に鰒が人の命を取るといふ事を聞き、龍王これを改めんと近く召され、此事を問ひ給ひければ、鰒申やう、其儀われ〳〵のなす所にあらず、てうといへる虫のつきて人を失へる事にて候と、明白に申譯立けれ共、龍宮へ惡名付し事の恥かしさと、我家へ歸ると、其儘腹を掻切て死しけり。それ故か今も鰒に限りて腸なし。この位堅い所なれば王法の正しき事なりける。新右衛門忍び居て思ふやう、淡海公の時分、此葭簀で玉取りに頼まれたら、むまひ仕事だ。然し盗む事には利くまいかは知らず。



「鱸鯔の類はもと川より勤めるもの故、成長に從ひ、官名を下され、又龍宮に棲むものは鯛より鯷まで親の名を繼ぐはよくきめた世界なり。」

「せいごの古より鱸の只今に經上りしは、家の面目有難うござります。」

○昔、彦火々出見尊云々　有名な海幸山幸の傳説で、「古事記」に見ゆ。「彦火々出見尊」は天津日高彦穂々出見命といひ、神代第三の尊で、瓊々杵尊の第三子に當る。

○湯治場　病を治する爲の温泉場。

○腰張　壁や襖などの下部に紙を張つた所をいふ。下の「鏝で塗る」は壁土を塗る事。

○私が親は芋で云々　章魚が陸に上つて芋となると云ふ傳説から云つたもの。

○

新右衛門、龍宮もあらまし見けるが、食わぬまでも精進日には日の暮と歸るつもりに出立て、とある格子作りの家を覗ひて見れば、醫者の由、大勢療治に來る。病は十人か九人は口中を痛めたるが多く見へける。これは皆釣られはぐりし輩なり。※昔、彦火々出見尊あかめといふ魚に釣鈎をとられ給ひしを、此所に尋ね來り、取り返して歸られたる事を今は早や知る者なきと見へたり。それか知れて居れば一匹も釣れる筈はなし。とかく、刺のある食物にあてられしとばかり思ふも理なり。又鱏に突かれたる鯨は膏薬を貼る事繪の如し。さて小魚の怪我は、淺草川の邊養生しける。さすれば川水は龍宮の湯治場なるか、鯨などは湯治とは事むづかしければ膏薬で直すも理なり

「膏薬か腰張か知れぬ。いつそ鏝で塗るのがよささうな理窟だ。」

「鯷と鰕は氣をつけて上げれ、然し私が親は芋で故人になりました。」

「おれが嫁へもふとぬりたい。」

○權田坂　武蔵国橘樹郡、保土ケ谷の西にあり、武相の境に當る。屈曲した長い坂があり、難所とされてゐた。
○げんこ　馬方、駕籠舁などの符牒で五をいふ。こゝは五十文の意。
○やみはん　「やみ」は三の數だから三十五文。
○ぢば　二の數で二十文。
○のたまくめ　我儘勝手なことを言つて威張り散らす奴の意で、人を嘲つて言ふ言葉。
○ばんどう　八をいふ。こゝは八十文。
○一本　錢緡一本、百文。

思ひの外に遊び過し、大黒様も内の者も案じるであらふと心附き、馬にて急ぎしに、※權田坂へかゝれば、仲間の馬子が一服してゐる故、又そこへ繋ぎて馬子は煙草にしかけると、さきに休みゐる馬、新右が乗りし馬に、御早いのと挨拶するに、新右もびつくりして眠りを覺せば、馬同士の附合ひ、

「さて昨日は途方もなく草臥れた。宿から川端まで※げんこといふ仕事をして又戻りを臺まで酒代ぐるみ※やみはんとつて、又※ぢばで宿迄乗せて、それからの※のたまくめが内まで乗つて歸りをるにがつかり弱り切つた。」と云へば、新右が馬、「そいつはよかつたの、おいらは角の酒屋の前にあぶれて、子供等には太鼓を打ての何のと遊ばれ、おらが生醉もお觸が厳しいから、かの事もならず、のつつそつつしてやう〳〵拜むやうにして、たつた※ばんどう取つて歸ると、親方は二疋でこれは何の態だと機嫌が悪ひも尤も、※一本づゝも取らねば勘定に合ふも

○のめくり落ちて　前へのめり落ちる。

んじやあねへ、一本にもなればまづよしと思へばそのうちをくらう、氣が痛んでなるもんじやあねへ。いつそ植付時分には骨を折るけれど何とも思はぬが、駄賃を取りに出ると氣が痛む。先づ乘つた人を落すまいと思つて氣をつけるをば知らずに、心持がいゝからこく〳〵眠りして

は※のめくり落ちて、盲馬の跛奴のといはれ、こんな父割の弱ひ事もねへもんだ。今度の世には殿樣の馬に生れて、むまひ物を食つて猿の踊でも見て樂しみたい。」と話せば新右衛門は耳をすまして聞けども、他の者にはひん〳〵とばかり聞へる。これも蓑笠の徳なるべし。

「お主が旦那は眠るさうだ。ひんといつて起せ。」

「親方安くやろふ。」

○味噌を上げる　手前味噌に云、己が自慢をすること。

新右衛門すた〳〵家に歸れば、家内の喜び大方ならず。扨湯に入飯を食ひ仕舞ふと。大黒天少しお待兼と見へて、いさ〳〵座敷へ現れ出給ひ、「さて新右衛門、お主は今度は味な心術になる事を見聞しやつたが、何でも同じ理窟だ。話して聞かせやう。遠慮なしに家内の者にも聞かせろさ。扨ちと高慢くさいが、それ、人は天が下の御靈物とあれば、天地の靈物じや。よつて生を保つもの、惣御頭だが、悪くするとそいつに鳥獸より遙に劣つた奴がある。神仲間でも不思議には思へども、おのれが心の置所が違ふた故。護るべき道理なし。その中にお主などはよく天下の掟を守り家を大切にして先祖の功を立るはよい事に違ひなき故。我々もかく心安くするじや、よく考へて見やれ。鳥獸に横着者はなし。いづれも正直我が生を愛するのみなれば、口に食ふ事にばかり馳け巡りける。これ彼等が道といふもの、人はやゝもすればおれは正直でござるといふ。正直といふは人の持前、何の味噌を上げる事があるものだ。不正直とくらべ物にするから道を取ちがへる。お主はあまり物を讀まぬさうだが、正直一遍ですんだからい、

〔一〕詮　甲斐、効驗。

仔細らしい　ややこしい。

○どうともは　何とも。はい〳〵さか、はいの意。

が、鳥獸も今いふ通り正直、それでは人間の詮がない。兎角、息子には讀ませて人の道ある事を教へやれ。よくいふ事だが、本を讀むと高慢だの仔細らしいのといふが、そのやうなものは口元ばかりの學問。然しながら物を讀んでその先ばかり穿鑿するはせぬに劣る。とかくに身の行ひをよくするが一冊でも讀んだ詮といふものだ。人には上下の差別はありといへど心に上下はなし。下々の者供らもよく道を守るを人の人といふもの。身の行ひ惡い奴は、わん〳〵にやあ〳〵といふと同じ事だ。これはまあ大概の話。兎角學ばねば知れぬ事だ。おれは遂にこんな事をいふた事はないが、お主が倅をよくせんとおれを賴みやる志、親たる者の道にかなふ故、據なく口不調法ながら長言をいふたが、必ず〳〵世間へは沙汰なし〳〵。」

「重ね〳〵有難ふ存じます。どうともは又有難ふござります。」

「兎角讀ませやれ。讀むに越へた寶はおれも持たぬ。錢金は湧物、ちつと湧きかねるがまづ湧物よ。もし湧かずばその時はどうともしやうはさ。」

○孝經・大學　『孝經』は孔子が其の門人曾參のために孝道を説いたものを收めた一卷。『大學』は四書の一で、もと『禮記』中の一篇で、修己治人の道を説く。
○竈の下の用心　家財を減らさないやうに用心することをいふ。
○太神宮樣　神さま。
○たからさかつて入る時は　悪錢身につかず。『大學』に云々「貨悖而入者亦悖而出」。
○唐詩選　支那唐代の詩を錄したもの。七卷。明の李攀龍の撰と云ふが、實に僞撰で、書賈のしわざである。

大黑天の仰に任せ、息子七才より※孝經大學を讀ませ、手前も側にて招伴の學問、今までは我ばかりよかれと思ひしを、我より人をよかれと思ふ。今まで金銀でなければ世は渡られぬものと思ひ、兎角錢を儲けて〳〵と、うぬが※竈の下の用心ばかりして居るを得のやうに思ふたが、それは一旦の利潤にて遂には亡ぶるぞと※太神宮樣も御誡みなされ又聖人も※たからさかつて入る時はさかつて出ると教へをかれた。何と結構な事か。新右衞門は息子の餘學問なれば、※唐詩選とやらを書た扇などは讀む事もならねど、手前の身を修むる事は呑込み、其上犬猫鳶烏の心意氣まで承知しければ、島屋の隱居の跡繼と世間でも用ひられける程に、息子は學問する上にそれを見習ひ、上々の人となりさうなれば夫婦の喜び、これも大黑樣の御蔭といつ〳〵よりも又目出度く春を迎へけり。

「御れいからかへつたら、くさざうしをかつてやりましやふ。」

○李紳　唐の人。字は公垂、短李と號す。穆宗に仕へ詩を良くした。

○水漬の飯　水飯ともいひ、炊いだ飯を水にひたして食するもの。

○須彌　佛説に所謂須彌山、妙高山と譯す。至極大きい山で、大海の中にあり、高さ十六萬八千由旬、日月は横に回つて地に出沒しないといふ。

○稗史　支那の古代に稗官なるものがあつて、閭巷の風俗を探り記して之を王者の政の參考に資した。その稗官の記したものを稗史と云ふ。轉じて小說の意となり、草雙紙などを云ふのである。

○孟陬　陰曆正月の異稱。

榮花夢後日話

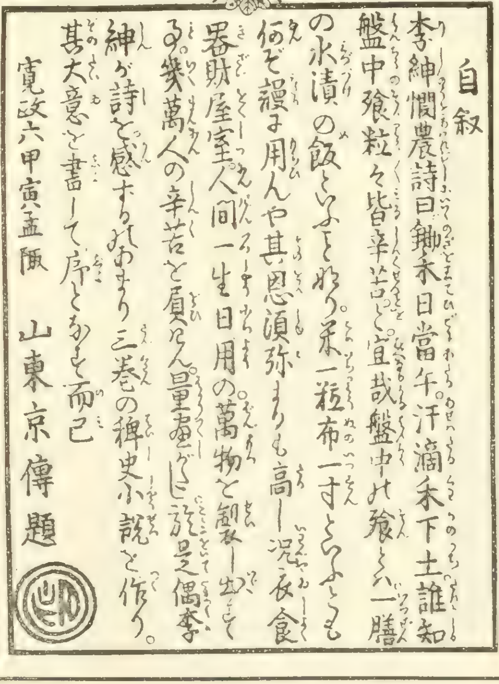
金々先生造化夢

山東京傳作
北尾重政畫

自叙

※李紳憫農詩曰、鋤禾日當午、汗滴禾下土、誰知盤中飧、粒々皆辛苦、と。宜哉盤中の飧とは、一膳の※水漬の飯といふことなり。米一粒布一寸といふとも何ぞ漫に用んや。其恩※須彌よりも高し。況衣食器財屋室、人間一生日用の、萬物を製し出す事、幾萬人の辛苦を負けん、量盡がたし。於是偶李紳が詩を感ずるのあまり三卷の※稗史小說を作り、其大意を書して、序となす而已。

寛政六甲寅※孟陬　山東京傳題㊞


自叙
李紳憫農詩曰鋤禾日當午。汗滴禾下土誰知盤中飧粒々皆辛苦と。宜哉盤中の飧とハ一膳の水漬の飯といふ事なり。米一粒布一寸といふとも何ぞ漫に用んや其恩須弥よりも高し況衣食器財屋室人間一生日用の萬物を製し出す事幾萬人の辛苦を負けん。量盡がたし於是偶李紳が詩を感ずるのあまり三巻の稗史小說を作り。其大意を書して序となす而已
寛政六甲寅孟陬　山東京傳題

昔々赤本元年、かち〳〵山の兎のとしの頃、金々先生といふ者あり。その身貧にして人の富貴を羨しく思ひ、あけ暮此事をのみ惟み居たりしが、盧生もどきの榮華の夢を見てより、浮世は夢の如しと悟り、これも夢これも夢、寢ては夢、起きては夢、明けては夢、暮れては夢、牡丹餅を見て、ア、夢じやナア、茄子の香の物を見ては、ア、夢じやナアと何もかも夢にしてしまひ、あまり物を悟り過ぎて、これぞといふ商賣も渡世もせず、浮世を綿屋の盤臺の如く見なして、たゞ明暮ぬるゝくらゐと暮しけるが、或時ひもじくなりける故、茶漬を一膳してやらんと手づから煮花を仕かけ、その茶の出來るうち、とろ〳〵とやらかしける。

傳へ聞く、近松門左衛門淨瑠璃作者の名人なれども、寢言の文句には困りしとかや、われ等も寢言の文句には大困り、たゞ鼾の音コウ〳〵〳〵〳〵、口嘗めづり、ムニヤ〳〵〳〵、此外にもし寢言の文句御案じ御座候はゞ、御知らせ下さるべく候。早速書き入申候。

金々先生の夢の見やう、飴細工の鶯の尻尾の如し。

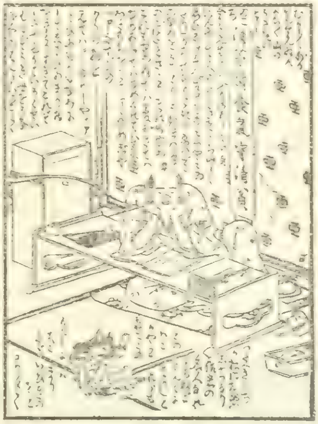
「小人閑居して不善をなし、貧人閑居して手せんをなすとは、まさにこれ此事ならん。」

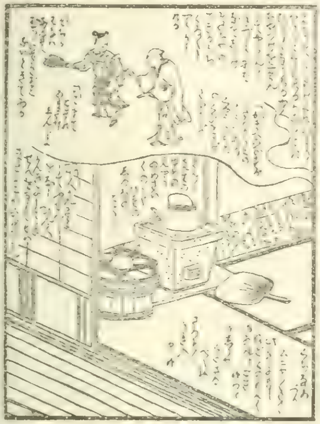
「お前のお姿は唐兒の胴へ練供養の稚兒の首をすげたやうだ。」

「そちが鼻は南京おこしの出來損ひときてゐる。」

「コヽまで御座れ、甘酒進上。」

○





○赤本元年、かち〳〵山の兎のとし　「焙烙元年薬罐の年の鍋の三月」などいふことがある。
○盧生もどきの榮華の夢　盧生の夢、また邯鄲の夢、黄粱一炊の夢等と云ふ。[illegible]
○綿屋の盤臺　[illegible]
○煮花　煎茶の出ばな、茶の湯の最も香の高い頃合ひ。
○近松門左衛門　江戸中期の有名な淨瑠璃作者。[illegible]參照。
○飴細工の鶯の尻尾　細く消えて行くやうなさま。
○小人閑居して不善をなす　『大學』に「小人閑居爲二不善一。無レ所レ不レ至」とあり。
○手せん　手なぐさみ。
○唐兒　繪にある唐土の衣裳を着けた稚兒。
○練供養　寺院の供養のとき稚兒が行列して練つて行くこと。
○そちが鼻　いはゆる[illegible]、
○コヽまで御座れ云々　童謡に[illegible]、「こゝまでおいで、甘酒進上」といふのがある。

○恒の産なきは恒の心なし　「無二恒産一者無二恒心一」。『孟子』梁惠王篇に「若レ民則無二恒産一、因無二恒心一」。

○吉田の兼好　兼好法師。下文のこと不明。

○仙人は玉の屑を食い云々　『眞誥』に云ふ、「服二玉脂一升一、得二千歳一、服二玄眞一其命不レ極、玄眞、玉別名」。

○胴人形　張子の看板人形。

○錐　霧の聞き損ひ。

○手妻つかい　手品使ひ。

金々先生夢の中に一人の童子に誘はれ、何處ともわかぬ深山に來り、と見てあれば、四季の草花咲き亂れ、異香四方に薫じければ、又榮華の夢の二番目ではないか、ちと鬱陶しいぞと思ふ折柄、一人の仙人現はれ、金々先生に示して曰く「汝さきに榮華の夢を見てより、浮世の事は皆夢なりと悟り、これといふ世渡りの業をせず、これ大のいき過にて、悟らぬ時には劣りなり。なんぼ悟つても飯を食はねば生きて居られず、すでに古語にも恒の産なきは恒の心なしといへり。吉田の兼好も、みづから蓆を織りて世渡とせしなり。まづしばらく此山に逗留すべし。汝が生悟りのあやまちみづから合點ゆくべし。」と仙人長口上のうち金々先生はひだるくてどうもならず「どうぞ御茶漬をさら〳〵とやらかしてからお示しなされましたう御座ります。」とぞ申ける。仙人曰「汝飢に臨みたるよし、何ぞ食物を與ふべきなれど、仙人は玉の屑を食い、霞や霧を飲んで食物となす故、人間に食はする物なし。暫く待て、おしつけ茶漬を振舞ふべし。」とさて〳〵仙人は氣の長き者なり。

金々先生が腹の加減思ひやられてあはれなり。

「さてはあなたはお仙人樣で御座りますか、わたくしは又賣藥見世の胴人形かと存じました。これは慥に夢で御座りませう。何故と申に、あなたのお顔が、ぶしつけながら牡丹餅のやうだからさ。アハヽヽ、〳〵〳〵必ず御氣にさへられますな。」

「玉や錐を呑むとおつしやれば、どうか手妻つかいのやうだ。」

○木の葉仙人　下級の仙人ども。天狗にも木の葉天狗なるその類である。
○泥棒を見つけて縄を綯う　「盗人捕へて縄綯ふ」の諺は時機の既に後れたのをいふ。
○野郎の啄木鳥　野郎が木に登り木を伐る風情が啄木鳥が木をつゝくやうである義。
○ずいから　木を挽く音。
○ずい行は云々　『史記』「項羽本紀」に「大行不レ顧二細謹一」とあるを地口る。

※かくてかの仙人のお頭、多くの木の葉仙人に申つけ、金々先生に食はする茶漬飯の支度をする。※泥棒を見つけて縄を綯うよりもちつとじれつてへよウと申次第なり。仙人のお頭、金々先生を同道して此態を見せる

「ひだるいも通り抜けるとよいものかして、どうか耐へよくなりました。」

杣の仙人山へ入り、茶漬の膳にこしらへる木を伐り出す。

「おいらが商賣は野郎の啄木鳥ときてゐる。」

「まだ飯と茶をしかける水をくむ井戸側になる木と、釣瓶と、手桶になる木と、香の物を切る俎板、釜の蓋と、竈の側、庖丁の柄になる木、附木になる木まで切らねばならぬ。」

炭焼の仙人茶漬の煮花を煮る炭をこしらへんと、中にてからぽき枝を集める。

木挽の仙人、杣の仙人が伐り出せし大木をひき割り、板にして膳をこしらへる仙人に渡す。

ずいかう〳〵、ずい行は細謹の顧みず、此位悪い地口は人間の方にはなし。

樵夫の仙人、茶漬の飯を焚く薪を集める。

○

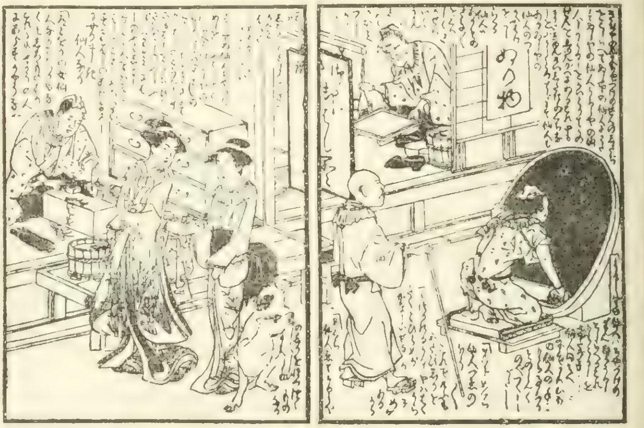
木地屋の仙人茶漬の膳の下地をこしらへて塗師屋の仙人

に渡す。塗師屋の仙人漆屋の仙人より漆を買いとりてかの膳を春慶に塗る。これにもまだ春慶下地の梔子を山からとつて出す仙人もあり、塗師屋の仙人の使ふ刷毛をこしらへる仙人もあり。そのさき〴〵を悉しく探せば幾萬人の辛苦か、數へ盡し難し。

「早く仕事をしまつて、熱燗を一ッ杯せしめ漆と出かけたい。」

漆屋の仙人は、茶漬の膳へ塗る漆をこしらへる。これも山から漆を採り來り、漆の仙人の手へ渡るまでには、多くの仙人の手にかゝる事なり。その辛苦述べ盡し難し。

「チット盲仙人、杖の方〳〵これで今日も五度尻を突つかれる。漆屋は白澤と比目魚がうらやましい。背中に目があるから。」



盲仙人得て漆屋の尻をつつくものなり。

箸屋の仙人、茶漬飯を食ふ箸をこしらへる。此箸屋の仙人、懐中箸の如く短き氣にて、角箸の轉んだ事にも腹を立ち、引裂箸の夫婦喧嘩、雜煮箸の太印などゝ人をば雜箸の如く追ひつかい、杉箸のあげ下しに、やかましき仙人なり。

道通りの女仙人、中にはつがもなく上代物あり。これ等も不屈の人に非ず、かやうな美しき仙女を天から見下して通りすがりにも此様な骨を折る職人の目を悦ばせ給ふなり。

○春慶　塗物の一種。後龜山天皇の朝に泉州堺の人春慶の創むるところ。其の後諸國に之を傳ふ。漆を透して木目の見ゆるやうに塗るもの。

○梔子　茜草科の常緑灌木。暖國産で庭園に用ひらる。夏には枝頭に白色六形の花を開き、實を結ぶ。果實は染料、藥用として用ふ。

○せしめ漆　漆の木の細い枝から掻き取つたまゝの漆。

○白澤　『黄帝内傳』に「帝巡狩東至レ海。登二桓山一得二白澤神獸一能言達二萬物之情一」。異獸である。眼が横腹にもあると云ふ。

○角箸の轉んだ事にも云々　「箸の倒れたにも驚く」と同じ言ひ方で此細な事にも腹を立てる。

○杉箸のあげ下しにやかましき　食事の間もかまはず、常に口やかましい。

○つがもなく　途方もなく。

燒物師の仙人、茶漬の茶碗と香の物の鉢と、※手鹽皿と、茶を煮る土瓶をこしらへる。これも土拵から藥の下地、ぴいどろを粉にして藥をかける。その辛苦いふに言葉なし。

金々先生ちいさい兒が竈へ薩摩藷を燻べて置いたやうに、早く／＼とついて居てせがむ。はて、かうひもじくては茶碗も絲瓜もいるものか、早く頼む／＼。腹の皮がぴいどろの※ぽこぽんの尻を見

るやうにへこ／＼／＼／＼するはな。

「さて／＼人間といふ者は氣の短い者だ。もう二三百年たつたら茶漬を食ふやうにならふ。もちつとだ。辭へさつせへ。」

丁稚の仙人へお茶を汲む。茶腹も一時だ、お茶をあがれ。」

鍛冶屋の仙人は、金々先生に食はする茶漬の菜の香の物を切る庖丁、或は火箸、七輪の網などをこしらへる。これも鑛山から鐵を掘り出し、鍛冶屋の仙人の手へ渡るまでの辛苦をいはゞ、いかばかりなるか、はかり知り難し。

鍛冶屋の丁稚仙人は早く仕事をしまつて、※屋臺見世を※そゝり、眞鍮の薩摩藷、鉛の葡萄に、銅の蜜柑、鐵の銅鑼燒をしてやらんと、それ／＼の望みは仙人も人間も同じ事なり。

釜屋の仙人は茶漬の飯を炊く釜をこしらへる。

※かま磨かざれば光なしだ。精出して磨かふ、アハ／＼

○手鹽皿　小皿のこと。
○ぴいどろ　硝子。
○ぽこぽん　薄い硝子でこしらへ子供が吹いて遊ぶ玩具。
○水も茶も無い仙人世界　後文參照に此一段が不思議がられても、作者は異存あるまい。
○屋臺見世　大道に屋臺を出して賣る菓子屋などを指す。
○そゝる　ひやかす。
○かま磨かざれば光なし　「玉磨かざれば光なし」の地口。

○おかまの前で笑ふのだ 「おかめの前で笑ふのだ」の地口。

○うなふ 畑の土をよくこなす。

○なむから堪能 禪宗の大悲圓滿無礙神呪』に南無喝囉怛那「ナムカラタンノー」。哆囉夜耶「トラヤヤー」。

○思はず茶の木に抱きついた 『助六』の狂言で、かんぺら門兵衞が「思はず木の根につまづいた」と云つたのを地口る。

○わが庵は 喜撰法師の歌「我庵は都のたつみしかぞすむ世を宇治山と人は云ふなり」をもぢる。喜撰といふ名の茶があるので、都の茶摘と言つたのであらう。

○豆藏 おどけを云つて客集めをしてゐるもので、笊を持つて見物人から錢を集める、

／＼／＼。何の可笑しくもねへに、これがほんのおかまの前で笑ふのだ。」

○

百姓の仙人は茶漬飯の菜になる香の物の大根を作らんと、まづ大根の種を播く。此種を播くまでにも、畑をうない、肥料をかけ、大根になるまでの辛苦は更に譬へ難し。

「種から大根をとらやア／＼、なむから堪能と人間に聞へがいゝが。」

又茶摘の仙女は茶漬の煮花になる茶を摘む。これも茶になるまでの辛苦いかばかりか知れず。

茶摘の女中に見とれつゝ、思はず茶の木に抱きついた。粗相な人さんじや。チンツチャン／＼など、茶摘の仙女豪勢に浮く。

「早くこつちへ喜撰法師、わが庵は都の茶摘しかぞすむようだ／＼と埒のあかぬ子だぞ。じれつてへござよウ。」

「おさかさん、見物の散つた豆藏を見るやうに、笊を持つてまご／＼しなさんな。」

○序開　發端、はじめ。

○魚樂　俳優中村助五郎。寶暦十二年市村座へ初舞臺、同十三年顔見世より中村魚樂と號す、敵役。此人の紋は丸に仙の字。

○此種蒔はすぎし頃　河東節「助六由縁江戸櫻」に「此鉢卷は過ぎし頃」とあるを地口る。

○超波　江戸の俳人、氏は清水、獨歩庵と云ふ。桑岡貞佐の門人。「落葉合」「紙合」の著がある。元文五年七月二十一日歿す。年三十六。

金々先生に食はすべき茶漬の道具、まづ大抵揃いけれども、まだ第一の米がなければ、百姓の仙人まづ田へ種をおろす。これ米を作る幕開の序開なり。

「仙人の親方には魚樂が紋のやうなしるしをつけておかねば、たゞの仙人と間違ふ奴さ。」

仙人の親方金々先生を伴い、この態を見せる。

「此種蒔はすぎし頃と百姓が河東節でもあるまい。」

「あれが貴樣に食はせる茶漬の飯になるのだ。」

金々先生曰、

「最早わたくしもお前方の氣の長さには呆れかへつて腹が減り通して、もう平氣でござります。しかしまだひもじい氣の所爲かして、わたしが眼にはお前の衣が木の葉煎餅のやうに見へます。」

それより女房仙人、かゝあ仙人、よめ仙人、ばばア仙人うちまじり田を植へる。これまでの辛苦中〱筆紙に述べ難し。

俳諧師超波といへるが句に、

「早乙女の夜も揃ふて鼾かな」

といへるも、晝のくたびれし樣見えて、まことにその辛苦思ひやらるゝなり。

○十日の雨、五日の風　五風十雨。これ天候の最も順なるもの。

○俊寛のおやす　「俊寛」は[illegible]の[illegible]俊寛の家臣[illegible]で、小督局の不在の時に甲斐々々しく介抱した。村里に侘住居をしてゐたから見るかげもない服裝をしてゐたのである。

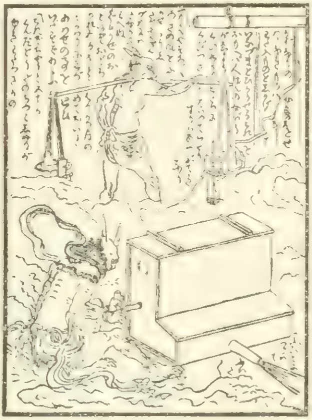
○目にはさやかに見へねども　「古今集」卷第四、藤原敏行朝臣、朝立つ日よめる「秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」。

○初鰹の身代り　江戸にて初鰹は最も賞美せられ、高價なものであつた。そのため秋まで必要のない袷を質にいれてこれを購つたといふのである。

○しづめる　質に入れる。

○

百姓の仙人、稲を植ゑつけ、だん〳〵育つに従い、天竺にても、雷、風の神、十日の雨、五日の風を吹かせて、稲に實を入れんと骨を折る。これ皆金々先生に食はするただ一膳の茶漬飯のために、天竺までが大騒ぎ、その辛苦またいかならんや。



これは雨を降らせる仕掛なり。斯う叮嚀にかいておかねへと、しめ縄とみる奴さ。

「わたしが身なりは俊寛のおやすときて居やす。」

雷の女房ほどせはしき者はなし。綿入物をしかけて稲妻を光らせる。これを思へば人間の女房が榮耀食したい、炬燵に首つきり入つて居たりするはあつ不敵なり。

「これで丁度五十荷汲んだ。どうだのちつとしめりがゆき渡つたかの。」

「太鼓につゞいて吹いたく〳〵。」

「最早そろ〳〵秋の風を吹かせよう。したが人間が目にはさやかに見へねども、風の音にぞ驚かれるなど、、初鰹の身代りにしづめておいた袷の事を思ひ出すであらふ。」

○蒼朮　菊科の多年生草本で、其の根を藥用とし、濕氣を拂ふに用ふ。
○そうじつの御祝儀　「當日の御祝儀」の地口。
○竹田の芝居　竹田出雲の芝居。からくりを用ふ。竹田の大からくりと云ふ。緣の下に囃方の詰められる所。[?]
○どこぞの達磨　このところ竹田の「どこぞの達磨」と語呂合が似てゐるからで、「どこぞの達磨」といふ言葉があつたものと見える。
○連枷　「れんか」ともいふ。六尺程の柄の先に自由に廻轉できる丸太などをつけ、穀類の穗を撃つて粒を脱するに用ふる農具。圖の如し。
○なりのぼり　出來榮えを見に行く。
○錫むね　櫛の上部を錫で縁を取つたのを云ふ。
○はづんだ　奮發した。
○もの前にぶさ　もの前にあぶさか。局部と乳房との義か。

地の下は濕氣が多いから、朔日、十五日、廿八日には蒼朮を焚くなり。それだから地神達は朔日、十五日の禮にもそうじつの御祝儀申上ますといふ。

天竺でばかり骨を折るかと思へば、地の下にても地神といふもののありて、多くの手下の地神を集め、稲に花を咲かせたり、實をいらせたりするからくりの絲をひき給ふ。

「此所竹田の芝居の緣の下の如し、どこぞの達磨の地口のようだ。」

「まづ早稲の絲か(ら)さきへひきやれ。」

これ又金々先生に食はする茶漬飯の爲にかく辛苦し給ふなり。されば、かゝる天地の恩を仇に思ふ者は、目前に罰も當る筈なり。

天地の惠みにて稲に實いりければ、百姓の仙人これを苅りとりて、籾を臼でひいたり、連枷で打つたり、何やかやして、やうやう米になる。これまでの辛苦いかばかりならんや。よくよく考へ思ふべきなり。

金々先生在所へなりのぼりに行つたやうに、此態を見て出來秋の實いりをほめる。

田舍育の仙女、錫むねの柘植の櫛に銀流しのかんざし、手織木綿の柳に蹴鞠、ぐつとはづんだ出立と見へる。

「連枷を打つはいゝが、もの前にぶさをうたぬやうに精出したがいゝ。」

○松風村雨などゝて云々　長唄『七枚續花の姿繪』汐汲の條に「暇申して歸る波の音の、須磨の浦かけて村雨と聞きし」今朝見れば松風ばかりや、殘るらん」云々。謡曲『松風』の句を其のまゝ取ったものである。

○村雨・松風　菓子の名にある。

○きいた風　氣の利いたやうな。

○行平　在原行平。須磨に流されて居て、姉妹の海女を戀人にしたと云ふ。狂言綺語、近松門左衛門の『松風村雨東帶鑑』に初めて見えてゐる。

○据膳　女から男に情交をせまること。

○しほや　得手勝手のこと。

○仰向いて云々　搗屋は常に腰を延ばして屈み得ざるため。

○

汐汲の仙女は、かの茶漬飯の菜になる香の物を漬ける鹽を汲む。此汐汲といふもの、踊や狂言で見ては松風村雨などゝて至極樂そうに見ゆれども、正寫しの汐汲は殊の外骨の折れるものにて、鹽になるまでは、なまやさしき事にあらず。その辛苦憐れむべし。

「昔は村雨だの松風だのとて、駄菓子屋の代物を見るやうな、きいた風な名をつけて高慢な顔したと聞いたが、なんとしてこち等がやうな美しい汐汲があるものか、今時行平さんが居さんしよなら、あつちから据膳で御座んしやう」などゝ、汐汲だけつがもなくしほやをいふ。

百姓の仙人辛苦して香の物にする大根を作り、汐汲の仙女鹽をこしらへて渡しければ、糠屋の仙人糠を賣りに來たり、樽買いの仙人樽を賣りに來たりければ、何もかも揃いて、漬物屋の仙人、かの大根を澤庵につける。これ皆金々先生に食はする茶漬飯のためなり。香の物ばかりも大抵や大方の辛苦にはあらず。搗屋の仙人、茶漬飯になる米を搗く。これら搗屋の茶漬飯の菜になる秋刀魚の干物から、道を聞かれた時、汗を拭く手拭まで、それ〴〵に入用の品をつくり出すこと、そのさき〴〵は數へ盡し難し。

「仰向いて搗屋秋刀魚をぶつり食ひ、とは川柳の名句であつた。」

○米かし桶　米淅桶。米をとぐ桶。
○顔見世　毎年十一月の顔見世狂言を云ふ。一座の役者が勢揃ひして見物に目見得する芝居を演ずる。昔時は小道具方が無く、小道具は芝居にて作つたものである。
○七輪　焜爐。
○玄翁　石を割る鐵槌。
○ましだの齒入　足駄の齒入の地口。

桶屋の仙人、井戸側をこしらへる。これは飯を焚いたり、茶を煮たりする水の用意にて、別に井戸を掘るつもりなり。その木の餘りにて、手桶、※米かし桶などをこしらへる。

仙人のお頭、帳面につけて一々種數を揃へる。まだ香の物を切る俎板と米上笊、火吹竹と火打箱が出來ない、薪と炭は大抵出來上りだなど、※顔見世前の芝居の如く大騷ぎなり。

石屋の仙人茶漬の煮花を煮る石の※七輪をこしらへる。

「ひもじい所爲か、わしがには石屋の※玄翁が薩摩藷のやうに見へる奴さ。」

左官屋の仙人竈を塗る。

「竈の上塗は恥の上塗をするより※ましだの齒入でござる。」

團扇屋の仙人、七輪の下を煽ぐ澁團扇をこしらへる。これも、藪より竹を切り出して骨となし、紙を漉きて團扇に張り、山より澁をとり來りて上にひく。團扇ばかりも、そのさき／＼を思へば幾萬人の手にかゝる事やら知れぬなり。

○

○鱗類　魚類。

○水は方圓の器物に隨ふ　人は、その交はる善惡の友によつて、何れへも感化せられるといふ喩の語。

○法印　元來第一等の僧位であるが、こゝは山伏の俗稱に用ふ。

かくて、金々先生に食はする茶漬飯の道具立あらまし出來上りけれども、いまだ飯を炊き、煮花を煮る肝腎の水がなし。それ故仙人のお頭井戸掘の仙人にいひつけ急に井戸を掘らせる。これも井戸掘足代か、鋤鍬の類の道具をこしらへ、その辛苦幾萬人の骨折か、そのさき〲は數へ盡し難し。

女仙人、井戸を掘るを見に來る。これは何のために見に來るか氣が知れず。したが、一體此本に女が少き故、繪組の愛嬌に見に來たと見へる。

龍宮にては此度井戸を掘ると聞き、水を授けんと、龍王自ら立ち出で、多くの鱗類にその用意を申しつける。これ又金々先生一人のために、龍宮までの骨折述べ難し。

龍王の水を授ける所、冠が反吐を吐く様なり。諺に、水は方圓の器物に隨ふと申事あり。法印の器物は、さしづめ法螺の貝なり。それ故、龍宮でも水を授ける手傳は法螺の貝が勤めるなり。

一今度の茶漬飯の菜が干物でなくて仕合せ、そうだとおいらもかうしては居られぬ。」

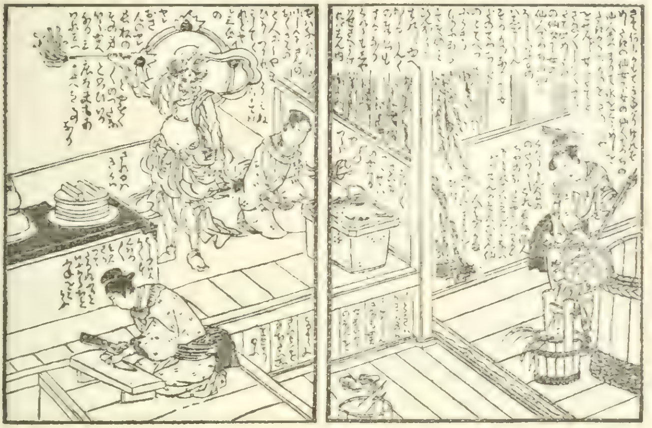
○新内ではないが、御新造さんの、奥さんのと云々　新内節『歸咲名殘の命毛』に「たとへ私が請出され御新造様のかみ様のと人にかしづき敬はれ上見ぬ鷲と暮しても、いやな男に添寢して朝夕苦勞するよりもやつぱり二人が手鍋さげ手づから私が飯焚いて内の者よこちの人明日はどうして斯うしてと言ふが樂しみわしや嬉しい」。

○三庄太夫　又山椒太夫とも書く。丹後の國由良湊の長者で、判官正氏の子安壽姫と對王丸とを購ひて之を虐待し、後に對王丸出世して三庄太夫父子を誅戮した。說經節の浄瑠璃其の他に三庄太夫として云ふのがある。此にては酷使者の意。

○荒神様　三寶荒神をいひ、我が上古の荒魂（あらみたま）の神格化されたもの。不淨を最も忌む神であるといふので、竈神として祀られる。

○苑香　茶の香ばしいかをり。

○はじめちよろ／＼云々　謎の言葉。「始ざん／＼中ちよろ／＼、ぐつ／＼煮えて火を引いて三尺去つて猿眼り親が死ぬとも蓋とるな」、また、「始ちよろ／＼中くわつ／＼親に死ぬるとも蓋とるな」と共に飯を炊く法。



さて何もかも出來上りければ、飯炊の仙女、下女の仙人、丁稚の仙人集りて水を汲み、飯を炊き、香の物を切り、茶を煎じ、膳立をし、さま／＼辛苦するゆゑ、さて此飯炊の仙女、下女の仙人、丁稚の仙人などゝいふものは、至極辛苦するものなり。下女だの丁稚だのとて、別に生るゝ者にあらず、その身貧乏に生れし故、かゝる辛苦の奉公をするなり。これ等も仕合さへよければ、※新内ではないが、御新造さんの、奥さんのと人に敬ひかしづかれ、上見ぬわしで暮すけれど、ヤレ三介の、ヤレおさんの、ヤレ長松のと、やすくされるは、その身／＼の拙き果報故と思ひ、いかなる※三庄太夫も憐れみ使ふべき事なり。

※荒神様ののたまはく、「これ長松仙人、茶の焙じやうが悪いぞ。それでは※苑香がない。合點か。それおさん仙人早く釜の下の薪をひけ。焦げ臭いぞ。ア、世話のやける奴等だ。」此時は竈の神荒神様も男女相性の本を見るやうに采配をもつて臺所を守り給ふ。

「※はじめちよろ／＼、中くはつ／＼三尺下つてさる睡といふから、ちと舟を漕がふ。」

○

かくてやう／＼一膳の茶漬飯出來上りければ、仙人のお頭これを金々先生に食はする。金々先生は此茶漬飯をこし

○いぼ相持　「鷸蚌相持。漁翁得利」から出た語といふ。これは徒らに相對峙することであるが、こゝは反對に互ひに相持つ意味に使つてゐる。

らへる多くの人の辛勞を目前に見たる事なれば、膳に坐りて熟々思ひけるは、わづかに茶漬飯一膳、たつた二タ切れの香の物といへども、幾萬人の手にかゝりけるか數へ盡し難し。まして況んや美をつくし(た)料理なんどは、幾億萬人の辛苦なるか量り知るべからず。これを思へば、家を作り、着物を着、人間一生入用の品々は皆これ幾萬人の辛苦を積めり。然る時は紙一枚、箸一膳も我が物にて我が物にあらず。皆天地より惠み給ふ所なり。米一粒も、遊んで居て食うは勿體なき事なり。ア、さうじやナアと感心の餘り、膝の上へ白き涙をこぼしければ、お給仕の童子がめつけて、もし飯粒がこぼれましたもいゝく。

「いかに金々先生、汝生物識にして、定まる渡世もせず、暖かに着、飽くまで食ひ、千萬人の辛苦を費して、ぶらついて居たるは大きなる誤なり。浮世は※いぼ相持、なんとこれで茶漬飯を食ふやうにさらく〳〵と悟りが開けたであらふ。」

「只今までは茶漬飯などは何の氣もつかず、不承々々食べましたが、段々多くの人の辛勞する所を見ましては咽喉へ閊へて食べられませぬ。今まで榮耀食に食好み致したは大きな誤り、ひもじい時にまづいものなしと申すがよいたとへで御座ります。」

○分限　身代。

と思ひしは夢にて、あたりを見れば、やう／＼煮花が煮へ立ちければ、手をはたとうつて、ア、奇なる哉妙でござへす、盧生は粟飯炊ぐうちに五十年の夢を見、われは煮花の出來るうちに千萬人の辛苦を知れり。われ浮世を夢と思ひなして、たゞうか／＼と暮したるが、今日より心を改め、天地へ恩を報づるため、一ツの渡世をはじめんと、これより無上に稼ぎければ、四五年經たぬうち百萬兩の分限となり、後は夢にあらぬ本間の榮華の身となりけるぞ御誂へ飛び切りの、めでたし／＼。

「ア、久しぶりで草双紙のしまいが夢だ。」

口上

此度山東京傳儀、紙煙草入新店出し、いろ／＼新形仕入仕、下直の品にて、きれ煙草入同樣御用ひに相成候樣工夫仕候、何卒御贔負御取立ニ重奉希上候　以上

江戸京橋銀座一丁目

京屋傳藏

「こればつかりが眞面目だ。」

又焼直鉢冠姫

稗史億說年代記

式亭三馬畫作

稗史家不重寶記

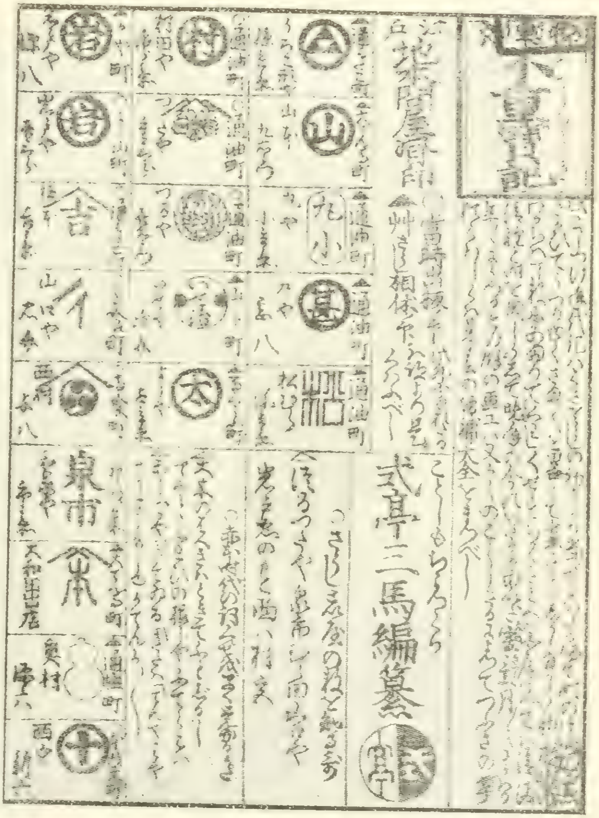
此億説年代記は草雙紙の初りより、當世に至るまで、時の流行に從ひて、移り行くさま〴〵を略して集たる也。然りながら、勿論繪の別ちは丁數に限り一冊に十丁づゝ、近世は、北尾重政は清滿・春章と時を同じくし、晩年の今に至る中間、鳥居清長等に變り年々に移る。その餘の畫工は又かくの如し。猶詳しくさるは一、二の事、來春の増補大全を待つべし。

江戸地本問屋の目印

○當時出板ノ印
▲草雙紙相休ノ印
此外に洩れたるは後より是に知ふべし。

▲通旅籠町　鱗形屋孫兵衛
▲大傳馬町　山本九右衛門
▲通油町　丸屋小兵衛
▲通油町　丸屋甚八
▲通油町　松村彌兵衛
○通油町　村田屋治郎兵衛
○通油町　蔦屋重三郎
○通油町　鶴屋喜右衛門
▲山下町　伊勢屋次介
▲馬喰町　よし屋太兵衛
▲茅　町　岩戸屋源八
○横山町　岩戸屋喜三郎
○通旅籠町　榎本吉兵衛
○馬喰町　山口屋忠介

○馬喰町　西村與八
○神明前　和泉屋市兵衛
▲大傳馬町　大和田出店
▲通鹽町　奥村源六
○本材木町　西宮新六



今年もちよつくら
式亭三馬編纂

○草紙問屋の數を知る歌
△鶴・蔦屋・泉市・村田・山口屋
岩戸・榎本、西は村・宮

○赤本時代の詞癖を早く覺ゆる歌
△大木の生え際ここに太郎
てんとふさひの根じやふてらこい
△あらふかや「來て居る「來たは「てんやわや
ナント子供衆がてんか〳〵

くさざうし

戯作者名寄（けさくしやなよせ）

○休の印　●故人の印

當時出作する御存の作者は新古によらず此處に略す

●和　祥　●蓬萊山人龜遊
●田中舎信　●文　阿
●文　子　●通　交
○喜三二　●戀川春町
●芝全交　○万象亭
○唐來三和　●櫻川岸田杜芳
○通　笑　●可　笑
○七珍万寶　○三橋喜三二
○錄山人信普　●芝甘交

喜三二）朋誠堂龜山人　又云 手柄岡持

戀川春町　又云 酒上不埒

森羅万象　後號 万象亭　又云 竹杖爲輕　今改 風來山人 桂林舍

唐來三和　又云 東來亭

錄山人

芝全交

七珍万寶　後號 森羅亭　今云 二代目万象亭

中古の作者、此外に數多あり。作者の印圖は目近き分ヲ誌す。

又曉在鉢冠姬稗史億說年代記

草雙紙の畫工に限らず、一枚繪の名ある畫工、新古ともに載する。尤當時の人は直弟（またでし）又一流あるを出して、末流の分はこゝに省く○

但シ次第不同也。

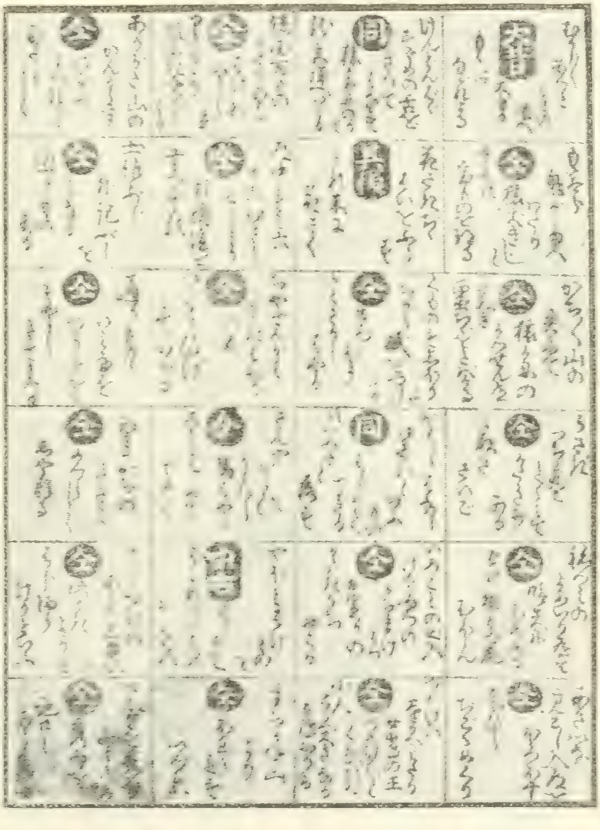
但シ西川祐信は京都の部ゆへ追て後編に詳しくすべし。

倭畫巧名盡（やまとゑしのなづくし）

昔繪は奥村・鈴木・富川や湖龍・石川・鳥居繪まで。

清長に北尾・勝川・歌川と麿に北斎これは當世。

（大吉）[illegible]る桃一つ流れくる。
（全）[illegible]
（全）かちかち山の奥にて、狸蟹の合戦あり。狸、正直爺をたばかる。
（全）[illegible]
（全）[illegible]
（全）[illegible]
（同）慳貪婆、雀の舌を切つて放す。[illegible]
（其後）花咲翁、灰を蒔らす。枯木に花咲く。
（全）蜘蛛の巣絞りに力紙をつけたる泥棒、おどかしはやる。
（同）落し咄、口合（あい）と言ふもの、初めて出来る。「トいふたと落す。」
（全）色子との出入、[illegible]の勝負よ[illegible]
（全）[illegible]と首引。小人国へ大きなる鶴下りる。
（全）[illegible]
（全）[illegible]



（全）[illegible]
（全）[illegible]ぞめく。
（中古）野暮と化物を初めて箱根の先へ追[illegible]る。

（全）[illegible]
（全）[illegible]
（全）[illegible]
（全）通り者の[illegible]を通人とそやし奉る。
（全）[illegible]

（全）[illegible]といふ。
（全）口合を秀句と改め、秀句を地口と改まる。

▽圖版の年代記

（本）此頃は草雙紙かつてなし。
（同）物語と名づけたる本、松會より出る。
（畫）菱川吉兵衞の繪本はやる。傾城高尾を始として一枚繪に出る。
（同）一枚繪、繪本、彩色摺は紅を用ひず、丹か又は蘇芳にて彩る。
是は此頃の板元なり　即ち奥書をこゝに記す。

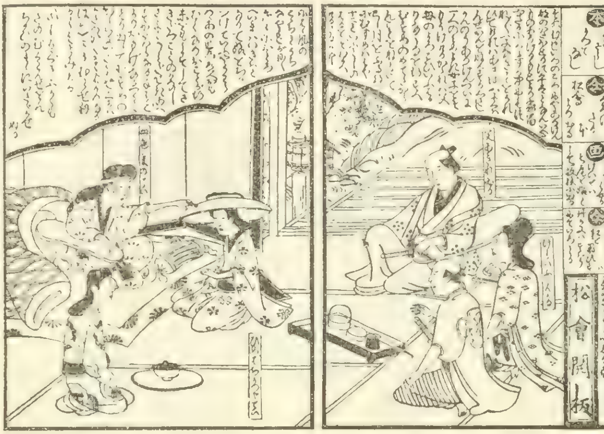
松會開板

○おこと　御事。相手の婦人を指してよぶ語。おもと。そなた。

○さしも草　艾の異名。こゝは觀世音の佛力を灸の効能あるに寄せて用ひたるか。此の歌、紀伊國粉河寺（十一面觀世音）の詠歌「父母の惠も深き粉河寺佛のちかひ頼もしきかな」などが想起せらる。

その昔、何時の頃にやありけん、都の片邊に平太となんいへる者ありける。元より家富豐に暮すが中にも、常々一子なき事を憂ひてければ朝夕に觀世音を念ずる志、感應ありけん、遂に一人の眉目よき女子をぞ儲けける。かゝれば父母の喜びいふばかりなく、尙行末娘のめでたからん事を祈して年月を經る程に、娘は早十二といふ年の春をぞ迎へける。さるが中に母、風の心地と打惱みしが、日々夜々に衰へ、今はの際となりて娘を近づけて言ふやう、「妾はあの世の道へ赴くなり。おことが行末をも見ずして先立つ事の悲しさよ」と涙堰きあへず、傍なる手箱より重げなる包取出して娘の頭に戴かせ、上には肩の隱るゝばかりなる鉢を冠らせ、母、かくぞ詠みける。

さしも草深くも頼む觀世音誓のまゝに戴かせぬる。



○家來不審がる。

○母病氣の態。

○姫鉢かつぐ態。

○父呆れゐる。

○兵太　前には「平太」とある。

○のふまくさまんだ　不動明王の眞言である。曰「曩莫三曼多縛日羅赦」（なうまくさんまんだばざらだん）云々。

さて一首の歌を詠みて、母は空しくなりければ、家内の歎きいはん方なく、娘はかけて別れを悲しみ、前後を知らず歎きけるが、やう〳〵に心を鎭めて、悲しくも野邊の煙となしにける。※兵太は形見の品々を改めんと、娘に着せおいたる鉢をとらんとしけれども、頭に吸いつきて更に取れず、父大きに驚き、近しき人を集めてさま〴〵手を盡せども離れざれば、娘の歎きいや增り、母に別るゝのみならず、今かく片輪となりたる果敢なさよと、口說きたてゝぞ泣きければ、聞くにつけ見るにつけ、歎かぬ者はなかりける。

(山伏)　法力の奇特を見せふぞ。※のふまくさまんだ、ばさらだ、おのれその鉢をとらいで、おかうか。

(平太)　これはかたひは、不思議なことの。

姫歎く。

(姫)　悲しや〳〵。

○

かくて年月を過すにつき親しき人〴〵の寄集り、何時

○圖版の年代記　赤本、初めて出來る　表紙一面の表題に繪を書かず、紙を黃色に染める。

（同）赤紙の外題に白紙の表題をはる。此時、表題に繪を書入るゝ事はじまる。

畫工　鳥居庄兵衛といふ者大きにはやる。つゞいて淸倍行はるゝ。

黑本、黑表紙に靑赤の外題をはりて黑本と稱ス。外題表題の紙を俗一色紙短册と云はじむ。

（作者）地本屋の筆者丈阿といふ人、赤本を作り、作者の名を出さず。ナント子供衆、合點か〳〵の書入、此人より起る。

○うとましいあま　きらひな、いやな尼、あまは尼で、轉じて女をののしりていふ稱。

○穀潰し　米を食べるだけの無用の長物。

○打据へてこます　「こます」は「來ます」で、打据ゑてやらうの意で

○興がる事じや　興がるは面白いの義であるが、此では物狂はしいなどの意味であらう。

○頓生菩提　機緣に際會して頓に迷妄を去り、佛果を得んと希ふこと。

迄男の獨り住にても濟むまじとて、勸めに任せ後の妻をぞ迎へけり。それには變りて、姫は生れもつかぬ片輪を恨み、明暮歎き悲しみけるが、繼母はつく〴〵と姫が片輪なるを疎み憎みて、夫の手前ばかり深切に見せかけ、留守になればいろ〳〵の咎を拵へ折檻するぞあさましき。

（繼母）※うとましいあまではある。※穀潰しとはおのれが事じや。この棒で打据へてこますぞ、けちいまく〳〵しい。

近所の人、とり支ゆる。

（近所の人）いやも※興がる事じや。それでは堪忍がなり申まい。先づ平に〳〵。

（姫）のふ、かゝさま許して下され。

姫は餘りの悲しさに亡き母の墓詣りしてわが身の不運を託ち、もはや此世に甲斐なき命なればとく〳〵迎へとりてたべと、打臥してぞ歎きける。

（姫）南無※頓生菩提、南無阿彌々々。

父も妻(の)言葉を誠として、姫を憎みければあるにもあられず、宿を立退きしが、道にて盗賊に出合、難儀する。

(盗賊の一)　やつちやしてこい。大分甘いもさじや。

(盗賊の二)　てんと嵐富之介が舞臺顔と來ている。これ姉さん待たしやれ、おおが悪くはせまいぞ。

(姫)　のふ、恐や、怖ろしや。命ばかりは助けてたべ。

○

鉢冠姫、盗賊に勾引されて色里へ賣らるゝ。

(盗賊の一)　これはわしが妹に違ひござらぬ。早く五十兩貸して下され。ちと様子がある故、笠を着て居まする。はてさて何處からもてんやわんやな事はいわせますまい。

鉢冠姫、この場の様子を不審がる。

(遊女屋の女房)　そなた、いくつになりやるぞ。ても良い子の。

(姫)　あいく十六でござんす。

○やつちやしてこい　これはお出でなすつた。

○甘いもさじや　[illegible]を[illegible]い[illegible]じ[illegible]田舎者[illegible]、いゝ鴨がかゝつたなどと云ふのと同じ意義。

○てんと　すつかり。全く。

▽圖版の年代記

青本　[illegible]黄表紙をかけたるなり[illegible]是を青本といふ。

[illegible]出さずして、上中下の分ちなく、ゆ[illegible]

(畫工)鳥居清秀、清重、富川吟雪、富川房信、田中益信、江戸[illegible]諸國にはやる。

同[illegible]村重長、[illegible]

田中益信は草雙紙の畫作を著す。

作者　[illegible]ら雙紙を作ル。雙紙の終に作者の名を出す事は[illegible]

○てんやわんや　われがちに競ひてさわぐさまにいふ。うるさいことの意。

○遣手婆　遊廓にて遊女の取締などをする老女。又料理屋、女郎屋の主婦をも遣手といふ。

○ぼい出す　追ひ出すの訛。

▽闔版の年代記

(青本　鱗形屋山本の本、おびたゞしく賣れる。一代記敵討武者繪本等にたまさかに序文有。

(同)赤本、青本、黒本、三いろの雙紙ならび行わる〻。

(畫工)富川が繪の風は鳥居に似て少しかわる。

(同)豆繪といふもの、富川、鳥居より始まる。

作者　玉屋新兵衛、桶伏の本、草雙紙の大當り。

亭主いぶかる。

(亭主)　好い器量の娘じや、合點の行かぬ。五十兩なりやこちの抱へにしても大事ない。笠をとりやいの。親のため勤めするか、かわいや〳〵。

※遣手婆、話する。

(遣手婆)　あれは菅笠ではござらぬ。皿鉢の類じやさふな。

(女房)　不思議なことの。早うぼい※出すがようござんす。

○

鉢かつぎは片輪なること現はれて、大磯にも住家ならず追出されければ、當所もなしに迷い出ルに、百姓共、姫が姿を見て、化物なりとて驚く。

(姫)　こわいものではござらぬ。これ〳〵。

(百姓の一)　やれ恐ろしや。

(百姓の二)　逃げろ〳〵。

○圖版の年代記

(青本)赤本は此節絶ゆる。青本を新板として黒本は古板と稱す。

(同)青本に彩色摺の外題をはりて、鱗形屋より始めて新板。

畫工ハ鳥居清滿、同清經、同清長、北尾重政、何レも同じ繪風にて、少しづゝの變りあり。

(同)鳥居家の風、清經よりはじめて、少し當世に移る。此頃の書人レ文句に野暮なる洒落混る。

作者　喜三二、通笑つくる。戀川春町ハ流の書を書出して、是より當世にうつる。

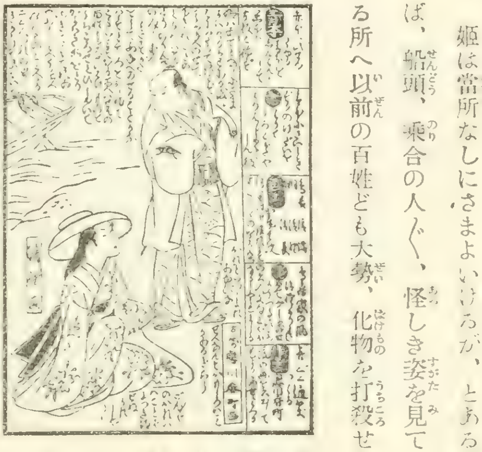
○王子路考　二代瀨川菊之丞、江戸近郊王子に生れ、初代の養子となり、若女形として器量よく、舞臺華やかさ殆ど一代の人氣を一身にあつめ、安永二年、三十三歳で江戸に歿した。當り藝「石橋」「八百屋お七」「無間の鐘」等。

○所作ごと　振事。舞踊。

○すとんだおむく　非常にいゝ娘。

○あやしゝに牡丹　唐獅子に牡丹の地口。怪しにかけていふ。

姫は當所なしにさまよいけるが、とある渡シ場に至りて、何卒某舟へ乗せて下されッと頼みければ、船頭、乗合の人〴〵、怪しき姿を見て、舟へ乗せること叶はずとて、艪を押切て漕出す。かゝる所へ以前の百姓ども大勢、化物を打殺せとひしめいて、か弱き姫を取巻きて、既に危く見へたる



所へ、江戸者と見へたる二三人づれの男來かゝりて、此體を見るより、不憫にや思ひけん、大勢の百姓をなだめて歸し、先づこなたへ來るべしとて姫を伴ない、江戸の方へぞいでにけり。

（江戸者の一）おれと一緒に歩びなせへ。何ぞ面白い事があるだらう

（姫）だん〴〵の御禮は言葉につきませぬ。嬉しやく。

（江戸者の二）王子路考※にそのまゝの風俗だ。田舎娘の所作※ごとが見たい。

（江戸者の三）なんと吉公、すとんだ※おむくではないか。［此時代の通言也］

（船頭）何でもあやしゝ※に牡丹だ。

○毛氈かぶる　遊女は見世に出てゐる際、毛氈を布いてゐたので、遊女買をなして、金銀を費すを毛氈をかぶるといつたのである。もと劇場語より出づといふ。當時の川柳に「息子のかぶる毛氈は三分なり」などあり。

○こりやそれちかばかりかなんちかや　そんなに少いのかえ、何にならうぜ。

○お聲の便りは御尤も　「お腹の立つのは御尤も」の地口か。

▽圖版の年代記

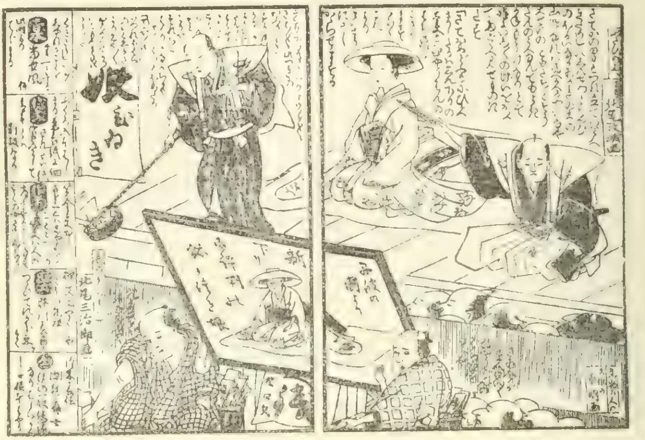
（青本）草雙紙いよ〳〵洒落る事を第一とする。當世風體此時より始まる。

（袋入）袋入本始まる。茶表紙に細き外題。紙袋入にして青本とは別板なり。

（作者）芝全交出る。喜三二は洒落たる事を作り、通笑は人の常にすることをなす事の穴探し妙也。

（畫工）柳文調役者似顏の元祖。勝川春章續ひて似顏繪ヲ書く。

（同）鈴木春信、湖龍齋、女繪の一枚繪一流なり。杜隱ノ女繪本はやる。



○

さて彼の男と連立て江戶へ來りしに、深切とは思ひのほか、田舍步きの大の山師なれば、內へ歸るや否や大勢の友達と相談の上、何でもよき金儲なりとて、娘にいろ〳〵の藝を敎へて兩國へ見世物に出す。

（口上）さてお目通りに控へましたるは、新下りの太夫、御評判の鉢娘にござります。いよ〳〵これより藝當にさしかゝらせまする。

テンカラ〳〵〳〵〳〵ハリトウ〳〵〳〵。

さて〳〵此次のかぶり業。擂鉢かぶるが夜討の段、ソレ毛氈かぶるが放蕩息子。※こりやそれちかばかりかなんちかや、イヤ〳〵どつと褒めたり。

ヤンヤ〳〵。いづれも樣のお聲が便りじや〳〵。※お聲の便りは御尤もはどうだ。

（木戸番の一）さあ今が前藝々々。評判の鉢娘じや。

（木戸番の二）札買つて〳〵評判〳〵。

○ためになるお客　たよりになるお客。
○瀨戸物燒接　陶器の碎けたのを、藥にてつぎあはすこと、又それをなりはひとする人。
○ずい行きの、ぐひ上り云々　靑樓に上る有樣を示す。ずいはずいと、ずんと。ぐひはぐいと、ぐつと。
○ぶつぱらつたから　金を出してしまつたから。
○すとんだこと　飛んでもないこと。

▽圖版の年代記

靑本　草雙紙は大人の見るものと極まる。
（畫工）北尾、勝川の浮世繪はやる。春章を俗につぼといふ。
（同）歌川豐春、浮世繪に名あり。鳥居淸長、當世風の女繪一流を書出す。世に淸長風といふ。
（同）一流ある畫工、おの〳〵畫のかき方當世にかはる。
（作者）芝全交が社中萬象亭、雙紙を作る。戀川春町畫作、萬象亭、全交、可笑味をおもにとる。
○張り　射落さうとする。
○す、一こやるのは云々　河東節「炙すゑ巖の雪夜音」の文句と一風の裸

鉢冠姫を見世物に出した所が、一向評判もなくまづざつと二百兩ばかりの損をしければ、これではいかぬと、此度は幸ひ三味線なども敎へたる事故、藝者にして押出した所が、今度はとんだ大評判にて、鉢かつぎだから轉ばしたら割りやうもあらうかと、ためになるお客大勢出來て、見世物の損はさつそく儲け出しけり。或時心易くする客大勢にて相談をつけけるは、何卒して頭の鉢をとつてやりたいものとて、色々すれどもはなれぬ故、此頃はやりの瀨戸物燒接に賴んだら、ひよつとして取りやうもあらうかと、大勢にて友達の燒接へ連れ來り賴みかける。

○萬印――早く步び給へ。是からずつと、これずい行きの、ぐひ上りのずい洒落の、ぐい歸りといふ所はどうだ。
（客の一）　此頃は皆無ぶつぱらつたから、靑樓も面白からすさ。すとんだことね。
（客の二）　其の鉢がとれたら頭は直に燒接にして貰いやしやう。
（燒つぎ）　瀨戸物燒接なら出來るが、鉢をとつて頭の燒接は、とても出來ねへ。
燒接のかみ樣さご燒餠が上手だらう。

いづれも此時代の通言なり

○

燒接の手際にも、鉢冠ばかりはいかぬ事と斷りけるに

をさしも草、さしも習はぬ竹箸の、紙にかゝれは取直し、節のないのは我二人、すゑて遣るのは恩ならず、すゑさするのを恩にして、男心の浴いのも、うれしきほどの野暮となり」。

▽闘版の年代記

一青本　青本、大當りを婦人に直す表紙の白半丁に口のりをつけぬ事起る。

一繪工　春好補い、似顔繪を書出く、俗にこれを小つぼと稱ズ。但シ役者、角力也。

一同　蘭徳齋、春道、など繪の姿を

一同　春朗同斷。其頃の畫號は重政、清長、政美、政演、春町など

一同　政美、政演、繪の姿、娘すじ、勝春英、役者、角力の似顔繪をかく。

一作者　通笑、全交、喜三二、三和、春町、萬象、杜芳いづれも大當りある。

○手足をつけたがる　我物にしたがるとは、我物としようとする。

○入れ札　入札にふすつ　物の値段をつけ、又は物事を選擇しようとする時、各人がその見込を記し、祕して一所ごとに入れ、これを同時に開いて、價の多寡をきめること。

○有德　金持。

○誘ふ水あらば　「古今和歌集」巻十八、小野小町「侘ぬれは身を浮草の根を絶えて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ」。

○錦木　女のもとへ通ひ、毎日錦木を立てゝ、末で我が思ひを通さうとする。錦木は斑に色どつた一尺ばかりの木片、陸奥にて、男女相逢はんとする時、これをその家の戸口に立てゝ、文を通はす代りにしたといふ。「詞花和歌集」巻七、大藏卿匡房の歌に「思ひかね今日たてそむる錦木の千束もまたで逢ふ由もがな」。

ぞ、もはや鉢の事は思ひ切つて、藝者を(よ)して稽古所を出し、親方がゝりにて暮しけるが、頭の恰好は悪けれど、器量は美しき生れ故、※張りに來る人多く、姫も萬更でもなければ、面白く憂さを晴らして暮しけり。

(弟子の一)　一段さらつてくんねへ。

(姫)　※すへてやるのは恩ならず、すへさせるのを恩にしてかへ。

(弟子の二)　おらあお前にすへてやりてへ。

鉢かつぎの稽(古)所大きに評判よく、何處の浦でも、女の子の稽古屋は淨瑠璃附いにて、大概は連中の多きものなるが、此娘にも※手足をつけたがる者大勢ありて、日毎に入込むのらつき連中、てんでに※入れ札の心持にて居る。中にも※有徳なる町人の息子株、獨り住の徒然に、慰みながらの稽古に來りしが、鉢かつぎが心ばへ優しきに心を寄すれば、姫も流石に萬更でもなく、※誘ふ水あらばの折節なれば、※錦木の面倒もなく、こつそりさし向ひの、互に――――とぞしやれかけけり。

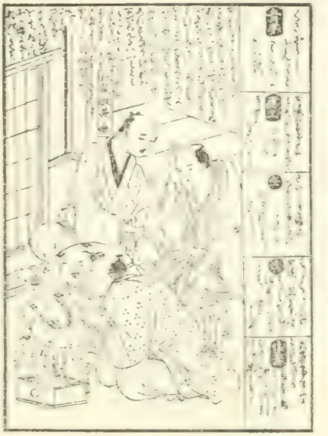
彼の息子株と姫が戀中今は互に寄り合いて、二世も三世も變らぬ女夫など、、とれたかわかしき譯となりしが、所謂親方の手前といひ、又二親の心底を恥ぢて、二人連立ち行方知れずなりければ、一家。親類。從兄弟。再從兄弟。伯父伯母。店請。親分。子分。大屋樣までの大騷ぎとなり、やうやうに尋ね出して親里へ連歸り、二人の胸を尋ぬるに、夫婦にならねば生きては居ぬとの相惚にて、意見も絲瓜も聞入れねば、兩親を始め親類も呆れ返り、あのやうな片輪者を嫁にとつては、嫂姉婿大勢に對しても外聞惡し。何卒して片輪者を思ひきらせんとて、大勢賺りつ賺しつ教訓する。

（親類の者の一）　頭に皿があるからべたやアねへ、河童の樣だ。ハテお前の料簡、かつぱ一つだによ。何だかかつぱわ分らねへぞ。

（親類の者の二）　コレ地口をいふならおれがやうにいふもんだ。

（娘たち）　お前の皿じやアねへが、どうしても離れねへ氣で居なさるか。すやあつかましいのふ。

○



○圖版の年代記

青本　草雙紙だんだんと理窟におちる。

繪本　女繪の姿は、昔女に始まつて春潮に至り、當世に變化する。

同　彩色繪のへんかは中古に倚す。

江戸繪、さまざまに崇し。

同　柱かくしの女繪は、湖龍齋よりはやり出し清長に至つてますます世に用ゆ。

作者　森羅亭萬寶、雙紙を作る。烏亭焉馬久しく廢れたる落噺を再興す、談洲樓と號ス。

○店請　借家人の、身元引受に立つこと。此處ではその人。

○べちやアねへ　別はない。外ならぬ。違はない。

○かつぱ一つ　たつた一つと河童をかけた地口。

○かつぱり　さつぱりの地口。

○お前の皿じやアねへが　お前の頭にある皿ぢやないが、その皿と同じやうに二人がどうしても離れない氣で居なさるか。

▽圖版の年代記

（青本）青本の連中甚だ高慢になる。袋人のあごを青本にすることはやる。

（畫工）繪のかき方、又〳〵當世に移る。北尾、勝川、歌川、おの〳〵その名高し。

（同）歌麿當時の女繪を新たに工夫する。北齋獨流の一派をたつる。

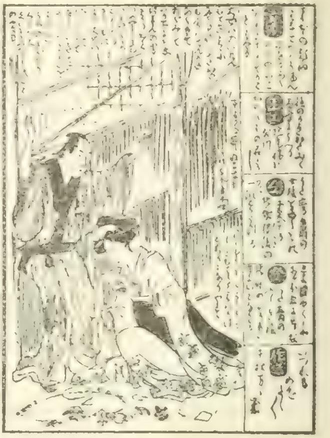
（同）豐國役者似顏繪の名譽、歌麿の畫樣、北齋の畫樣[illegible]

（作者）いづれもめでたし〳〵。千秋萬々歳。

○馬の耳に風　李白の文に「世人聞之皆掉頭、有如東風射馬耳」。聞いても氣にとめぬことを云ふ。

（定日）[illegible]約束して定めたる日。

○はちかけ　足掛けの洒落。



大勢の意見も馬の耳に風なれば、兩親も今はせん方なく、もて倦みて居る所に、智惠自慢の男罷り出て言ふやう、是はよき謀あり。まづ嫂大勢を美しく粧りて並べ置き、其中へ鉢かつぎを呼出し、嫁の器量競べをし給ふべし。此事の定日定まらば、鉢かつぎも恥を思ひて己より身を引く事疑なしと言いければ、皆々尤もと同じけり。又鉢かつぎは器量競べの噂を聞くより、我身片輪のことなれば、嫁競べの座敷へ出ては、いとしき人に恥を與ふるに等しければ、何處へなりと身を忍ばんと、息子にも忍びやかに語り聞かせ、互に名殘の涙堰きあへず、其夜も明けければ泣く〳〵立出んとする折柄、不思議や戴きたる鉢、がばと落ちて、中より數の寶物自然と湧出ければ、二人は喜び限りなく、嫁競べの定日をぞ待ち居たる。

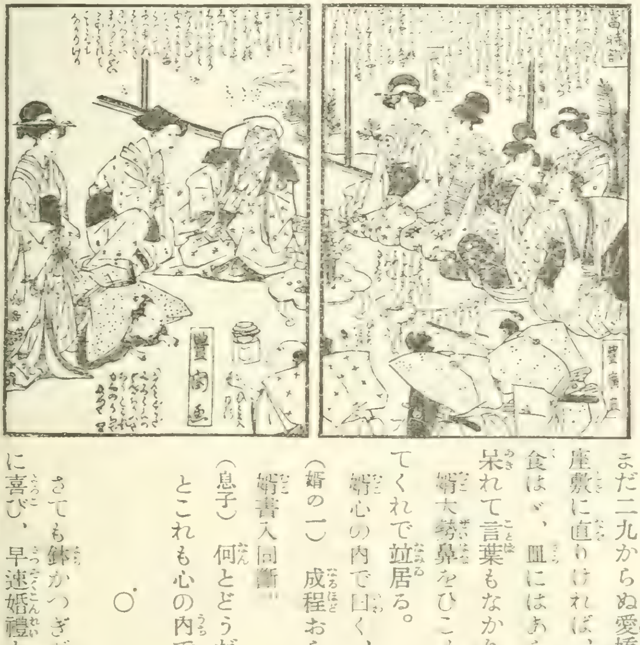
（姫）ほんに私が苦勞をしたも丁度はちかけ二年になりやす。

（息子）鉢が缺けたら寶が出た。飴が嫌なら凧やろとう。

コレ何をいはつしやる。

○打掛　裲襠。
○嬋娟　姿態のしなやかに美しいさま。
○芙蓉　蓮花。

かくとも知らず嫁競べの定日となりければ、嫂大勢こゝを晴ぞと着飾りて、白粉べつたり油こてく〳〵なすりつけて、※打掛捌きに蹴躓くやら大騒ぎにて、今や出ルと斜に構へければ、もし鉢かつぎ出たらば、一度にどつと笑はん、とさゞめきたつて居る所へ、一間の内より鉢冠姫しとやかに立出ル。その有様、嬋娟たる容貌、桃李芙蓉の花の顔、實にも氣高き粧ひにて、年は二八を過すとも



まだ二九からぬ愛嬌に、色ある小袖を襲ね着て、しづ〳〵座敷に直りければ、並居る姉婿嫂ち、おのが手盛の毒食はゞ、皿にはあらぬ鉢かつぎに、一杯參つた大勢が、呆れて言葉もなかりけり。

婿大勢鼻をひこ〳〵して、何れも、嚊ア自慢、これ見てくれで並居る。

婿心の内で曰く、

(婿の一)　成程おらが嚊ア奴は、どう見ても美しいわへ。

婿書入同斷

(息子)　何とどうだ。又美しいの段が違ふだらう。

とこれも心の内で思つて居る。

○

さても鉢かつぎが眉目よき姿を見て、兩親はじめ大きに喜び、早速婚禮も首尾よく調ひ、夫婦睦しく榮へけ

○是おや　これをこそ。おやは親の洒落。

○大慈大悲の妙智力　「大慈大悲」は佛菩薩の廣大な慈悲を指す。「妙智力」は不思議な智慧の力をいふ。

○筆意をかねたる　作意を弄したる。

○穴を穿つ　これは當時盛んに用ひられた言葉で、他作の矛盾や缺陷を捉へて責めたてることである。

り。

爰に又鉢かつぎが實の兩親は、かの繼母の邪より娘を追出したる報にて、忽ち巡りて二人とも乞食と成下り、やう〱其日を送りけるが、或時姫夫婦大勢の供を連れて、かの過ぎ去りし母が信心したる觀世音へ詣でけるが、かの門前にて不思議にも巡り合いけるが、姫は一ト目見るより、わが父上とは思へども、數多の家來を憚りて、せき來る涙をおしゞめ、一先づ我家へ歸りける。兎角して夫にもかくと告げ知らせければ、其後乞食を取上げて、一生安樂に過しける。是おや仇を以て恩に報ずるとや言いつべし。偏に大慈大悲の妙智力、行末目出度榮へけり。

(乞食の妻)　アイ下さりやし。

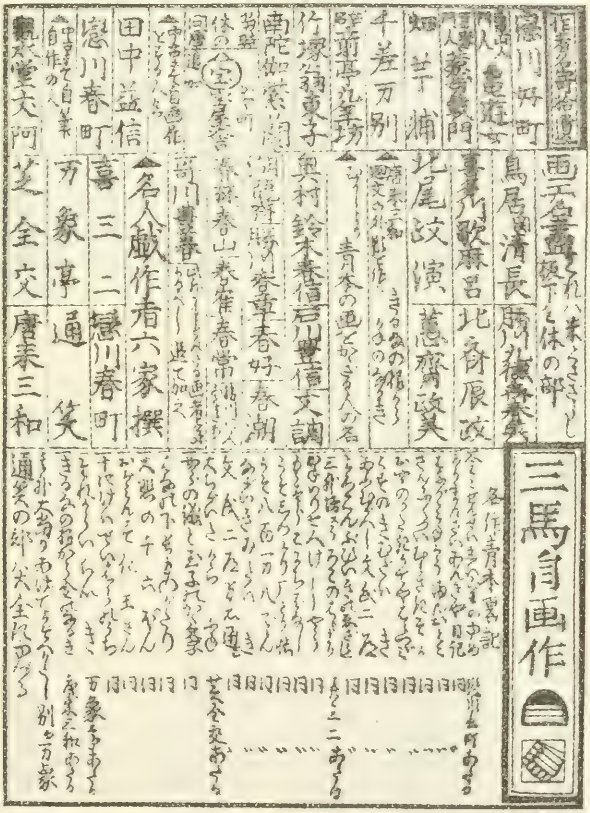
(乞食の夫)　どうやらおらが娘に似て居るやうだ。

此書は鉢かつぎの本文をかりて、古代より十年前の文法に從ふ。之に依て當時の青本とは口調大に違あり。すべて此十五丁の圖は一流の形を眞似て、青本通のお慰みに備ふるなり。必ず筆意をかねたると思ひ給ふな。各〻流儀の癖と穴とを穿ちたるに非ず、たゞ畫の形を似せたるのみにして、近くたとへば役者の聲色をつかふが如し。

▽名作青本畧記

一金々先生榮花夢　戀川春町當る　同
一高慢齋行脚日記　同　同
一鼻峰高慢男　同　同
一三幅對紫曾我　同　同
一親敵打腹鞁　同　同
一𤅢無益委記　同　同
一鸚鵡返文武二道　同　同
一悦贔屓蝦夷押領　同　同
一三升増鱗祖　喜三二當る
一鐘入七人化粧　同　同
一桃太郎後日噺　同　同
一啌多雁取帳　同　同
一虚言八百万八傳　同　同
一長生見度記　同　同
一文武二道万石通　同　同
一大違寶船　芝全交當る
一女郎の誠ご王子の角文字　同　同
一鼻下長物語　同　同
一大悲の千禄本　同　同
一拜壽仁王參　同　同
一十四傾城腹之内　同　同
一從夫以來記　萬象亭當る
一莫切自根金生木　唐來三和當る

其外大當り擧げて數へ難し。別して萬象、通笑の部は大全にゆづる。


作者名寄拾遺　戀川好町
画工名寄　鳥居清長　勝川春章
北尾政演　北尾重政
千差万別
竹塚東子　奥村　鈴木春信　石川豊信　文調
田中益信　戀川春町　喜三二
名人戯作者六家撰
万象亭　通笑　芝全交　唐来三和
三馬自画作
名作青本畧記

合巻本

合巻本概説

子供のおもちや本であつた赤本から進んで黒本となり、青本となると、もう子供物ではなくなつて、大人の讀物となり、年々趣向を凝らし、洒落たもの、諷刺するものとなり、滑稽を專らとしたが、それがいつしか教訓物となり、理窟つぽいものとなつて、新奇を競はなくては、世上の喝采を得ること能はず、敵討物となり、實錄物が歡迎されること丶なり、二冊・三冊物では物足らなくなつて來た。作者も亦其名を署するに當りて戯作の戯字を省きて唯作と記すこと丶なつた。敵討物の流行も數年ならずして飽きられ、一方には世話物に向ひ、一方には實錄物が一時の流行となつた。文化三年、式亭三馬は『浅草觀音 利益仇討 雷太郎強惡物語』十冊物を著して之を合卷とし、世の好評を博した。之より先、五冊・六冊物は出版せられ、楚滿人の『敵討三組盃』は九冊であつたが、『雷太郎』は十冊物の合卷本であつた。文化五年には、三馬は『三浦兵庫髷 山本勝山結 雨禿對仇討』十二冊、『金鋼名犬 正宗名刀 敵討宿六始』十冊を著はし、文化六年には、山東京傳『八百屋 お七傳 松梅竹取物語』十五冊を公けにするなど、長篇物は時々出版されることとなり、遂に文政十二年に至り、柳亭種彦は『偐紫田舎源氏』初篇「桐壺の卷」四冊を出し、これよりして、天保十三年まで十四年間に亙り、毎篇四冊づつ三十八篇を出版し、未完成に終つてゐるが、蓋し合卷物の最長篇にして、草雙紙の巨擘である。此後『釋迦八相倭文庫』『白縫譚』『北雪美談 時代加賀見』『兒雷也豪傑譚』等諸種の長篇物が出たが、到底『偐紫田舎源氏』の右に出づるものとてはなかつた。

解題

偐紫田舍源氏

柳亭種彦作。

『源氏物語』は我國に於ける古代の一大小說であり、あの時代に世界を通じてあれだけの傑れた長篇小說はなかつたほどの名著である。しかもそれが女性の手に依つて成つたと云ふことは、他に類例のないことで、我が文學史の最も誇るべきものである。これほど註釋書の多いことも、又他に見ないことで、又其の影響の甚大にして、獨り文學のみならず、美術工藝にまで大波瀾か及んでゐる。江戶時代になりて『おさな源氏』『紅白源氏物語』等、源語に擬した書もいろ〳〵出たが、源氏の飜案を試みたものに、都の錦の『風流源氏物語』がありて、桐壺の巻より帚木の巻までを收めてゐる。井原西鶴の『好色一代男』は源語を世話化した好色本と見れば見られよう。

種彦の『偐紫田舍源氏』は忠實なる源語の飜案で、舞臺を東山時代に取りて、巧みに當時の史實を織交せて、山名・細川の確執を取入れてゐる。但し其の主人公光氏は、陽に好色と見せかけて陰には政略の懸引をしてゐるなど、皆作者の獨創に出てゐる。けれども種彦は『正本製』の諸書を刊行するだけ芝居氣のあつた人であるから、趣向には芝居がかつたところが多かつた。合巻物の次第に冊數を增加するのを見た彼は、此に未曾有の草双紙を編述して之を刊行することを試みたのである。『源氏物語』と云ふ長丁場は最も善い題材であつたが、源語と不卽不離の關係をつゞけながら、其の巻々に依據して行かうとするのには相當の苦心を要する。特に源語の長丁場中には相當のだれ氣分がないではない。必ずしも山と水ばかりでなく、風と波ばかりでなく

して、漫々とつゞく平地もあれば、春日駘蕩として馬上眠氣を催すところも少からずある。草双紙が平地や春日では讀者の倦怠を來す恐れがあるから、此間に於て倦怠を生じさせないやうにするには、作者は並々ならぬ工夫を用ひなければならない。隨つて趣向の上に相當の無理やこじつけがあるのも、また已むを得まい。

「源氏物語」は王朝に於ける貴族生活の裏面史であらう。無論それにはモデルもあつたらうし、寫實もあつたらう。「田舍源氏」は之を武家時代とした。しかも歴史上の時代としたのであるから、恐らくはモデルもなければ寫實もなかつたらう。之を江戸城大奥の裏面史と見るのは、贔負の引倒しか、買被りである。但し全然縁はなかつたにせよ、物に依りては場當りを取るやうな、くすぐりのないでもなかつたらう。源語の歌を俳句に代へたなどは、流石に俳趣味のあつた作者のことゝて、こゝにも相當の苦心が偲ばれる。

既に草双紙であるから、讀本とは其の性質が違ふ。從つて畫と文と竝び備はらねばならない。作者は國貞を捉へ來つて、其の艷筆を振はせたのみならず、毎冊の表紙に國貞の色摺繪を出して艷麗限りないものとした。

國貞は初代豐國の門人中殊に勝れた腕前を持つて居た。通稱角田庄藏、後に庄五郎と改め、天明六年本所五つ目にて生まれ、初め一雄齋と號し、文化の初、山東京山の「妹脊山」に畫きてより名高くなり、五渡亭、香蝶樓、一陽齋等の諸號があり、三代豐國となつた。其うち彼の傑作は五渡亭時代の中期に多い。元治元年十二月十五日、七十九歳を以て歿した。

馬琴と北齋が仲違ひしたやうなことは往々作家と畫家との間に見えるが、旗下の士で小普請組に屬して二百俵の祿を食んでゐた種彦と國貞とは善く提携してゐた。種彦は通稱高屋彦四郎、名を知久と稱し、まことに人柄な、穩やかな人物であつた。少時癇癪持であつたから、父は「風に大窓はられて睡る柳かな」の一句を與へて之を戒めたので、深く之を體得して、柳亭と號し、狂歌名を柳風成、川柳名を木卯と號した。彼は綿密家であつたから、考證に長じ、「用捨箱」「還魂紙料」の好著があり、山東京傳の「近世奇跡考」「骨董集」とともに貴重すべき風俗資料である。猶此他にも數種の書目があり、又世間に多くの考證した草稿

を殘してゐる。

種彥は文化四年、彼の二十五歳の折、初めて讀本に筆を執りて「阿波之鳴門」五卷「奴の小万物語」「江戸紫三人兄弟」八卷を著した。これより後も「淺間嶽面影草紙」前篇三卷などを作つてゐるが、草双紙を述作したのは、文化八年で、「鱸庖丁青砥切味」七卷で、「京一番娘羽子板」六卷が之についでゐる。其の後「正本製」を出すこと十二篇に及び、其間に、「浮世形六枚屛風」六卷（文政四年）を著はし、「邯鄲諸國物語」初篇四卷（天保五年）を出し、二篇・三篇と續々刊行してゐる。

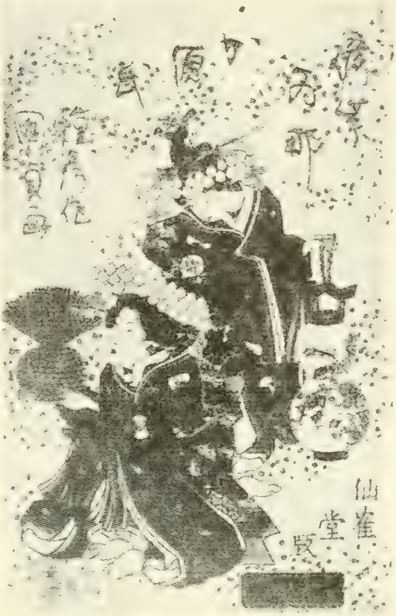
「偐紫田舍源氏」初篇（桐壺）を文政十二年に出版し、二篇（桐壺、帚木、葵）三篇（空蟬）を同十三年に、四篇（夕顏の上）五篇（同下）を天保二年に、六篇（若紫）七篇（末摘花）を同三年に、八篇（紅葉の賀）を同四年に、と云ふが如く、每篇四冊づつ出して、三十八篇（藤袴、眞木柱）を同十三年に刊行した。三十九篇も稿了し四十篇の續稿も其の緒に就いた頃、天保年間の水野越前守が斷行した改革の餘波は此にも及んで、十三年の夏、種彥は組頭よりの召喚を受け、板元鶴屋は板木を召上げられ、種彥は謹愼すること〻なり、尋いで再度の召喚を受けたので、もと〱細心翼々の種彥は憂悶措く能はず、「散るものに定る秋の柳かな」源氏の人々のうせたまひしも大かた秋なり、我も秋六十帖の名殘かなの二句を辭世として、八月十九日、悶々の裡に歿した。或は自殺なりとも云ひ傳へられてゐる。赤坂一ッ木淨土寺に葬り、法謚を芳寬院勇譽心禪居士と云つた。享年六十歲。

洒落本としては「山あらし」一冊（文化五六年頃出板。出東庵作とある）があるのみである。

源氏繪で評判を取つた國貞は獨立した多くの源氏錦繪を畫いた。縱繪もあれば横繪もある。「田舍源氏」は當時の人氣を博したこと〻て、歌舞伎狂言に幾多の資料を提供してゐる。

偐紫田舎源氏

柳亭種彦



○阿藤となんいへりける　『源氏物語湖月抄』によれば、紫式部は始め藤式部と稱した。

○初元結　元服のときには髪の髻を結ぶのを初元結といつた。

○二上り三下り　三味線の調子で、本調子よりも二の絲の音を一音高くしたものを二上りといひ、三の絲の音を低くしたものを三下りといふ。

○旋頭歌　和歌の一體。上下とも五七七の句より成る。

○よしこの　よしこの節。都々逸に似た小唄の一種で、七、七、七、五の四句より成り、「よしこの」はその囃し聲である。

○どゝいつ　俗謠の一種で、潮來節、よしこの節などから轉化し、その曲調をかへたもの。都々逸坊扇歌の創始になる。

○紅筆をだに云々　紅筆とは口紅を付けるに用ひる筆。『井筒業平河内通』の淨瑠璃に「思ひをそむる紅粉筆や、千々の心を三十一字」などから和歌をつくることに云つたのか。

○河海　『源氏物語河海抄』。源氏物語の註釋書。

○湖月　『源氏物語湖月抄』。『源語』の註釋書にて、北村季吟の著せるもの。

偐紫田舎源氏初編序

大江戸の眞中、日本橋に近き、式部小路といふ所に、甚媚きたる女あり。其名を阿藤となんいへりける。初元結のそれならで、紫の髻紐を、常に結びければ、人々お藤とはよばず。浮名して紫式部とぞいひける。自もいつか是を聞知り、さらば我名に因ある、源氏物語に似たる双紙を、作らんと旦夕心にかけけれど、書は草双紙のほかを讀まず、歌は二上り三下り、旋頭歌ならで字あまりよしこの、どゝいつを知るのみなれば、紅筆をだに嚙ざりしが、或人女にいひけるは、河海のふかき、湖月のひろき、それには眼の及ばずとも、要を摘だる若草あり。紅白・雛鶴・鬢鏡・小鏡なんどを照合さば、微は意を解す便とならん、まづ十帖源氏より讀み給ひねとすゝめられ、左言交の註文がき、書房もほと／＼讀得難く、雛鶴とは是ならんと、所千代まで翁草、これ間違の三番叟、若草とは新内節、十帖源氏は淨瑠璃本、物草太郎と推量して、木に竹本の葵の上、後妻討のうち混じ、引書も略揃ひければ、さて物語を作り出んと、そのところを案ずるに、邊ちかき近江店は、名に縁はありながら、大路をきしる車のおと、米つき臼のごほ／＼は、夕貌の宿めきて、月を見るにたよりあし、爰に幸空言にも、當るといふにも因ある、鐵砲洲に知音あり、觀

音井はおはさねど、※人丸の祠に詣し、※石屋の二階に假住して、※をりふし八月十五日、月海ばらにうつるをながめ、※明石町に筆をとり、※延の紙五十四帖、蚯蚓書して目も鼻も、わからぬ草紙をあらはしぬ。そもそも昔の紫式部は、天台の深理を極め、法華經の裏とやらんに、※六道流轉の因縁を、心にこめて書たりと歎く※僞紫の今の式部は、性質の艶ものにて、目元で殺して罪は作れど、佛の道に疎ければ。※三觀※四門※一部八卷、錢の相場と思ひたがへ。心も賤く詞も賤く、源氏のすぐれていやしきは、田舍といふ字に知られたりと、貴賤上下を押なべて、笑はぬ人こそなかりけれ。

文政十二年己丑正月發販
十三年庚寅二月再版

柳亭種彦記

○若草、紅白以下　皆『源氏物語』に關する書物。『若草源氏』『紅白源氏』『雛鶴源氏』『源氏鬘鏡』『源氏小鏡』等。
○十帖源氏　『源氏物語』五十四帖の梗概を記したもので、野々口立圃の著、萬治四年刊、十卷。
○所千代まで翁草　翁草は松の異名。千代までも榮える松の意。
○三番叟　能狂の翁の式三番の曲に於て、その第三番目に出て舞ふ者をいひ、老人である。翁草の翁に因んで三番叟と云つたのである。
○若草　『若木仇名草』、即ち[illegible]
○物草太郎　無性者。『十帖源氏』を淨瑠璃本に見立て、而も源氏をかい摘んだものであるから、物草太郎と云つたのであらう。物草太郎はお伽物語の主人公。
○木に竹本の葵の上　「木に竹をつぐ」の意に義太夫語りの名である竹本を言ひ掛け、更に淨瑠璃の「葵の上」につゞけた。「葵の上」は近松門左衛門の作と推定される。
○後妻　嫡妻「こなみ」が嫉んで次妻「うはなり」をうつこと。
○近江店　『源氏物語』は紫式部が近江の石山寺に參籠して綴つたといふ言傳へから來たものであらう。
○夕貌の宿　京の五條。
○突言にも當るといふにも云々　そら言の縁語でもあり、當ることいふ意味もある鐵砲、その名のある鐵砲洲。
○鐵砲洲　築地にある地名。
○人丸の祠　明石町裏にある。
○石屋の二階　紫式部は石山寺
○をりふし八月十五日云々　『河海抄』によれば上東門院の仰を承はりて石山寺に詣でて、通夜して此の事を祈り申すに、折しも八月十五夜の月湖水にうつりて心の澄渡るまゝに、物語の風情心に浮びければ、先づ須磨明石の兩卷を書きとめたといふ。
○明石町　築地にあり。『源氏』明石の卷より案す。
○延の紙五十四帖　『源氏物語』五十四帖を利かす。
○六道　地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人間、天上。
○三觀　空觀、假觀、中道觀を三觀といふ。
○四門　有門、空門、亦有亦空門、非有非空門。
○一部八卷　『法華經』一部八卷廿八品をいふ。

偐紫田舍源氏初編

發端

花の都の室町に、花を飾りし一と構へ、花の御所とて時めきつ、旭の登る勢にて、文字も縁ある東山、義政公の北の方、富徵の前と聞えしは、九國四國に隠れなき、大内爲滿が女兒にて、去る年御產の紐安らかに解玉ひ、男子設け玉ひしかば、昔しに彌增人々の、尊敬大方ならざりけり。頃は睦月の下旬、ついまつ・十種香・貝おほひ、種々遊びを仕盡して、月はなけれど、黄昏の空の景色を詠めんと、腰元の童女のみ二人三人を供に連れ、庭の外方を打廻り、暫しイみ居給ひけり。「もうし／＼内君樣、お庭の中とは申し乍ら、碌々お供の女中もなく、殊に夕暮お浮雲。」トいふに驚き振返り、「さう云やるは晝顏か。眞にまア御所樣のお目懸らるゝ女子共も多い中で、其方程妾を勞る者はない。」ト仰せに、猶もすり寄て、「御意の通り妾始め、御所樣のお寢間の端を穢しまする女子共は、尙々貴孃を大切に致さねばならぬが道、陰言を言ふやうなれど、夫を知ぬは那花桐、就中て御所樣の御寵愛を鼻にかけ、人を人とも思はぬ顏色、何ぞと言ふと、病氣々々と里へ下つて出養生。眞に遠い

○花の御所　足利義滿の營める館。
○文字も縁ある東山　旭と東と文字に縁あるをいふ。
○義政公　『源氏物語』にては桐壺の帝。
○富徵の前　『源語』にては右大臣の娘弘徽殿に當る。因りて大内爲滿は弘徽殿の父右大臣の積りである。
○睦月　正月。
○ついまつ　毬杖の異名。
○十種香　栴檀、沈水、蘇合、薫陸、鬱金、白膠、青木、零陵、甘松、雞舌の十種の香料の稱。此等の香を持ち寄つて香合をする。
○貝おほひ　後には貝あはせと云つた。三百六十の蛤殼を、左貝と右貝とに分けて、左右ともに貝の裏に金箔を置き同一の彩色繪を施す。右貝を地貝と稱し、場の中央に空所を明けてその周圍に仰けて並べる。次に左貝（出貝）を一個づつ出して、此の空所にまた仰けて並べ、各々出貝と地貝と合ふべきものを認めて覆ひ合はせる。合はせたものの多い方を勝ちとする。
○花桐　『源語』にては、光源氏の母桐壺更衣に當る。
○遠いが花の香　諺。「遠きは花の香」にて、遠方にあるものはゆかし

く思はれる喩。

○古暦でも云々　傷口を古暦にて治すと云ふ俗の信仰がある。

○繰掛ても　たぐり引いても。

○唐山玄宗皇帝は云々　玄宗皇帝が楊貴妃を寵し、そのために安祿山の亂が起つたことをいふ。「源氏物語」桐壺の巻には、此の處のことを「もろこしにもかゝる事の起りにこそ世も亂れ惡しかりけれと、やう〳〵天の下にもあぢきなう、人のもて惱みぐさになりて、楊貴妃のためしも引出でつべうなり行くに、いとはしたなき事多かれど、辱けなき御心ばへのたぐひなきことを頼みにて交らひ給ふ」と叙してゐる。

○旦那様　御殿女中に召使はるゝものは主人の御殿女中を呼ぶに、旦那様と云ふのが常法。

が花の香と俚諺に言通り、お側に居るが偶〳〵ゆゑ、猶御不便が重なつて、お胤をも宿した様子。わが病身をば棚へ上げ、勿體ない貴孃様や妾し共が妬み猜て、呪咀でも致す様に讒言を申す取沙汰。毎夜々々花桐が召れて通る度々に、妾が部屋の前尻目にかけて肩で風。旋風より恐敷あの風で切れたら、古暦でも愈るまい。ト口の劒刃磨立て、鴛鴦の中さく言葉の綾。胸のもつれを繰掛ても、よらず觸らぬ富徽の前。「成程其方のいやる通り、人目に立つ程花桐は我君様のお愛妾。唐山玄宗皇帝は楊貴妃を寵愛し。夫より國の亂れしと古き書にもみえたれば、其事さへ思合せ、恐れ乍ら御異見を申さうかとも思うたれど、一つの頼みは花桐は心柔しき性質。あれに限りて讒言を言様な事はない。人を人とも思はぬい、尻目に懸けて通るのとは、其は其方の心のひがみ。「否々左様被仰ますな。花桐の懐胎が男子でござります。と夫に誇つて彌々我儘。「はて味な先繰して其方は大分苦勞性。足利の跡取は妾が産だ若子許り。夫では彌々心强い。誰が産だお子にもせよ、御所様のお血筋で家を繼のが妾が願ひ。其方も早うお胤を宿しや。ト片頬に莞爾と打笑ひ、見返りもせず入給へば、晝顔は茫然と返さん言葉も投首して、案じに暮る後方より、「モシ旦那様々々何へおいで遊ばした、とお迎ひには參つたれど、妾し共はお目通へ出る事ならぬ、お聲故さし控へて居ました。最う日も入て暗いのに、サアお歸り。ト進められ晝顔は何げなう、「ヲヽ小菊、桔梗よう氣が付た供しや。ト部屋へ歸れど、心のもや〳〵。二人の女子を

側へ近附ニ先刻樣子は聞たであらう、邪魔になる花桐を遠ざけるには、富徽樣のお心を動かすが近道、と思ふから言葉を巧みに言上たが、返つて御意に背いた樣子。こりや何したらよからう。ト聞いて小菊が直と出ニ成程聞て居ました。明ても花桐暮ても花桐。貴孃を始め他の女中は眞に／＼有甲斐なし。無お腹が立ませう。花桐樣は此前の廊架を通つていつもお上り。慥か先程お迎ひの女子も行た樣子なれば、最程は有まいに、何ぞ道へ惡戯して、恥をかゝせて笑草、桔梗のちゑを振つて見や。トせな打叩けば飲込顏ニヲヽ丁度よい物がある拵へ溜た魚の腸、那を廊架へ散布し花桐樣の着物の裾。暗闇でひかせたら後では猫が飛付て、何も彼も掻むしり。旦那樣の意趣返は※斑や虎がして呉よう。コレ小菊此盤臺を手傳てださうでは有まいか。ト立騷ぐを押靜めニアヽ是高い、靜にしや。成程御前へ出るには、此※わたどのより外にはない。彼首は※杉戸、此首は※唐戸、序のことに斯して。ト密々聲に晝顏が、言含めるを、二人の女は莞爾顏に打點頭。其用意をぞしたりける。斯とは夢にも白小袖、肌着上着を結りて、花桐は徐々と通ふ廊架の唐戸口。供の女子の杉生が立止りて、手に持し※雪洞の火に四下を見廻し、「マアお待遊ばしませ。何やら否な匂がする、ヱヽ汚穢、旦那樣のお※絓どりや、お小袖のお裾に糢糊着たのは慥か魚の腸さうな。何してこゝに溢れてゐた。ト立騷げ共、花桐は、さまで驚く氣色もなく、「汚惡句がした故に、鼻をば袖で覆うたれど、裾の穢れは氣が付ぬ。此儘では上られまい。ト立戻るを押止め、彼々御覽

○斑や虎　猫。
○わたどの　渡殿。廊下。
○杉戸　杉の材木で作つた戸。
○唐戸　縦の眞中に一本、横に數本の棧をして、其の間に人子板を張つた戸。
○雪洞　燈火の覆ひの小さい行燈。
○絓どり　打掛。
◇廊下へ魚の腸を撒き散らしたる條は『源氏物語』に桐壺更衣の參殿の有樣を述べてゐるのを基としてゐる。「まう上り給にも、餘りうち頻る折々は、うちはし渡殿、此處彼處の道に、怪しきわ

ざをしつゝ、御送り迎への人のきぬの裾堪へがたう、まさなき事どもあり。又或時は、えさらぬめだうの戸をさしこめ、此方彼方心を合せて、はしたなめ煩はせ給時も多かり。事に觸れて、數知らず苦しき事のみまされば、いと痛う思ひわびたるを、いとゞ哀れと御覽じて、後涼殿に、もとより侍ひ給更衣の曹司を、外に移させ給て、上つぼねに賜はす。その恨ましてやらん方なし」。桐壺

遊ばしませ。お廓架は一面に譯もなう穢れてゐる。お服換は妾しが直に取て參ませう。「ヲヽ夫なら大儀乍ら然してたも。ト半分聞ず行んと倣を呼止め、「コレ杉生最裾の穢れたに氣が付ては、少しの間も着てゐるは汚穢てならぬ。之をば持て歸つてたも。ト帶引解けば、杉生は小袖の褄を打返し、「濡たのはお下服とお袿の裾計り。お上服は清淨なればお寒からうが少しの間、是を服て。トかひ／＼敷小袖を肩に打懸つ、火光に透して爪立足。飛越々々立戻る。花桐は唐戸を開け内にて待んと立寄て、押共々々開かばこそ。こは心えずと躊躇折、立戻つたる杉生が、「旦那樣々々夫にお在遊ばすか。妾しが戻らぬうち誰やらが、こゝのお杉戸へ錠を下して這入れぬ。ト言に、偖はと花桐は裳かゝげて氣味惡々々此方へ立寄聲を密め、「是はしたり其樣に仂なう叩きやんな。お唐戸も誰やらが内から鎖て、彼方へも通られぬ樣にしたは、妾しを嬲る惡戲であらう。ト聞て。杉生胸もやもや。「御所樣の御寵愛を猜みをつて、何ぞと言と、旦那樣を困らす惡戲。一體貴孃が大人敷お性質故、何事も控目に被成から好事と思ひをつて、エヽマア何したら腹が癒よう。内端に被成も事による。斯言時には以後の龜鑑。御所樣へ聞える程大きな聲を被成ませ。トおせる程尚大人敷、「同じ奉公する中にも皆貴紳の息女達。尤とも妾も丹波の郡司間嶋知義が娘なれど、不幸にして父樣は世を早くなし玉ひ、母樣計りを力草。夫さへ今は知ての通り、嵯峨の邊りに微なお住居。其中にも妾へは心附て下され共、世に時めける親を持つ朋輩の心では、此花桐

を人がましう思はれぬのは皆道理。此身を恥て退かぬ夫が憎さにすどの憂目。先から心附た故、折節毎の畢仕居。其儘にお暇を願はうとは思うたれど、賤い妾に御不便かけ、勿體ない我君樣のお心に羈されて、又二つには母樣の妾が流浪の身と成らば、尚お力が有まいと思ひ直して宮仕へ。假令此上何樣な憂恥を晒しても人に恨みは少もない。コレ杉生仂なう聲立やんな。此花桐を御寵愛。夫に誇て召使ふ女子迄が我儘な、と妾が名迄だしやんな。ト言教るも杉戸越。「夫なそゝと言て貴孃樣。さうなさつて何時迄も。」はて夜が明たら誰ぞ見附て開て呉る。夫迄は今度の御會の兼題の、歌でも案じてみよう哩な。「マア滅相な事を被仰りまし。春の夜寒にお小袖一つ。」イヤ寒うはない。其樣に氣を揉ずとも歸つて休みや。最物いやんな。若し人が聞咎めては妾らの、耻をしらする樣なもの。合點がいたか。ト又元の唐戸の傍へ立戻り、再び言葉もあらざれば、杉生力投首し、是も隔の杉戸にもたれ、内の樣子を窺ひゐる。次第に更る鐘の聲鏗々として物淒く、折節其夜は嵐して、唐戸やり戸の透間漏、風は袷より裳より肌に通り身も冷て、しぼめる姿花桐は茫然として居たりしが、早丑滿と覺敷頃、油盡てか臺架の燈籠殘らず消失て、綾色も更にみえ分ず、女の細き心より是や冥途に有と聞、暗穴道に迷ひしかと思へば、最ど怖氣立、口の中にて觀音の唱名を唱へて居折柄、彼首に撲地と物音して、開く唐戸に漏くる灯光、嬉しや誰ぞとよらんと做ば、晃りと閃めく白刄の光、あつと計りに花桐の魂ぎる聲を聞よりも、南無三主人の身の

○人がましう　一人前の人間らしく。

○兼題　豫め出して置く歌の題。

○やり戸　引戸。

○丑滿　丑三つである。午前二時半。

○綾色　文(あや)色の約。あやめと同じく、もの〻區別の意。

○暗穴道　罪の重い人を果羅といふ國へ遣る、その途中の暗黑な道をいふ。

○又者　陪臣もの。
○青菜にしほ〳〵　「青菜に鹽」といふ俚諺が、にはかに元氣の衰へることを云ふので、その鹽にしほ〳〵と立去るを掛けたのである。

上と驚く杉生一生懸命、碎けよ破よと打叩けば、敷居外れて轉かゝる杉戶と共に轉入る。「やれ驚く事勿れト宣ふ聲は義政公。左に手燭右の手に枕刀を携へて、悠然として立玉へば、「輕々敷此御有樣何故有て。ト花桐ははつと計りに飛退り、敬ひ申せば、杉生も隱る隈なく漭々と只身を震はし蹲まる。義政莞爾と打笑玉ひ、「今宵に限り夜更れ共、其方の來ぬが不審く忍び來りし唐戶口。中より深紅の紐にてこま結び、解んと做ど紙縷にて八重九重に繰みたれば、最むづか敷に心焦れ刀を拔て切たりしが、其光にて驚きつらん。又冴え返る此夜寒に肌薄な其姿。故こそあらめと言玉へば、はつトお請は仕乍らも、人に罪をや負せんと口籠りつゝ、花桐が躊躇後方に杉生は耐へ兼てや、徐々這出で、「憚り乍ら申し上ます。主人の通ふ此廊架へ、此通り魚の腸や汚穢を布散し、夫に衣服の穢れたを、取換に妾しが歸りました其內に、兩方の戶を閉切て、難儀を懸た惡戲者、屹度御詮議遊ばして。ト言を花桐打消て、「是はしたり又者の身も顧みず、恐れ多い。申し上て宜事なら妾が言ふ。退つてゐや。ト叱り付られ、諾々ト青菜にしほ〳〵立去るを、義政聽て呼止め、「アヽ大事ないそこに居よ、扈從も連ず只一人、爰へ來たのは予も私し。常とは違ふ花桐も其樣に叱りやんな。コレ誰かある、晝顏に言聞す可事の有り、早う是へ連てこいト呼はり玉ふ。物陰に隱れ忍びし桔梗が聞付、驚き狼狽て部屋へ歸り、「もうし〳〵晝顏樣。貴孃の被仰る通りにして、お杉戶へ錠を下し、杉生が漭つくを小菊と二人で、好氣味と笑うてゐた

○文車　又「ふみぐるま」ともいひ、書棚の類。下に車輪があつて牽ける樣になつてゐる。

折、思ひ懸ない御所樣のおいで被成、貴孃に御用が有との事。ト聞て轟く胸押靜め、さあらぬ體にて晝顏は、衣服改め嫋々に彼首へ立出末座に着。「お召の御用は何事ト手をつかふれば、義政公機嫌よげなる顏色にて「用と言て外でもない。夫にゐる花桐の部屋は遙の廊架傳ひ。今宵も何やら汚物を散布したるのみならず、通路の戸を閉切て、我亂を宿せし女に難儀を懸しは聞捨難し。和女の部屋は唐戸の內。寢殿へ近ければ、花桐に今より讓り、花桐が今迄の部屋に和女は住がよい。ト宣ふを聞終り。晝顏少し膝を進め「仰せを返すは恐れ乍ら、通路の唐戸を閉切、花桐に妾しが難儀を懸し覺えは更々「はて惡い合點な、夫を和女がしたとはいはぬ。部屋を換よと吩咐たは、同じ妾の中ながら亂を宿した花桐故、身近う置度我儘から、今夜の惡戲をした者も知てはゐれど、些細な事に人の名は出たうない。コレ晝顏いつぞや汝にとらせたる※文車には、今もつて其儘紐は付てゐるか。「ヱ。「唐戸を結びし其紐が、何やら夫に似た樣な。ト目先へ直と突附られ、顏も深紅の色なして、はつと計りに平伏晝顏。傍に聞ゐる花桐も、共に氣の毒背向くる顏。杉生一人小氣味よく莞爾笑ふ、山笑ふ春の朝日の華やかに、さつと欄間に輝けば。閨の儘なるしどけなき姿を人に見られじと、義政公は花桐を連て奧へぞ入玉ふ。寛仁大度の仰せには、心僻める晝顏も、重ねて返さん詞なく、夫より直に花桐が部屋に移りて。病氣と披露し、流石に我身を耻らひてや、其日は人に面を合せず、日の暮るを待侘つゝ。宵よりして打臥せしが、夜半許り

のことなりけん、誰とも知ず曲者一人。壁を毀つて忍入り、晝顏が夜着の上より白刃を持てぞ刺たりける。何かはもつて耐るべき、一ト聲魂ぎりつゝ倩は妾が奸計洩れ、先を越て花桐めが忍びを入て害さすよな。殺さば殺せ女の一念、今に思ひしらさん。ト言が此世の餘波にて、墓なく息の絶ければ、後を晦まし曲者は飛が如くに迯去けり。次に臥たる下女桔梗小菊は、晝顏が叫びし聲に驚かされ、目は覺乍らおぢ怖れ、彼曲者を追も留めず。夜着引被いで蹐跼をり、夜明て後に訴へければ、流石不便と義政公。家臣に命じて曲者の詮議嚴敷なし給へど、更に行衛のしれざり鳧。

作者曰、晝顏は後涼殿の更衣によりて綴りたれど、曲者に殺されし事は、全く己れが戯作なり。

花桐。晝顏が部屋に移りて後は、奥殿へ近き故に通路の憂ひもなく、安堵の思ひをなしけるが、彼杉生が主人に仕ふるの信實なるを義政も殆んど感じ、是より腰元の女と倣、今迄の如く花桐が傅きと仕玉ひぬ。程なく花桐は月滿て、最安らかに男子をぞ生たりける。義政最心許なくて、産所近く到り玉ひければ杉生は心得て、急ぎ若君を抱きて見せ參らすに、淸き事玉の如く、世に珍らかなる形なりければ、義政の喜び大方ならず。猶花桐の心地を尋ね玉ひけるにぞ。杉生謹ンで畏まりつ御血心露斗りも候はず、斯てはすが／＼と日立玉ふべきの間、御心安らかに在すべし。御産の後密に仰せある樣は、君の御情を蒙りし

○後涼殿　内裏の陰明門内にあり、清涼殿の西に當る。

○更衣　女御の次の位の人で、此の局にて天子が御衣を召代へ給ふ故に云ふ。四位以下に多く、上臈などの類である。

○程なく花桐は月滿て云々　『源氏物語』には「先の世にも御契や深かりけん、世に無く淸らなる、玉のをのこ御子さへ生れ給ひぬ。何時しかと心許なからせ給ひて、急ぎ參らせて御覧ずるに、珍かなるちごの御かたちなり」（桐壺）とある。

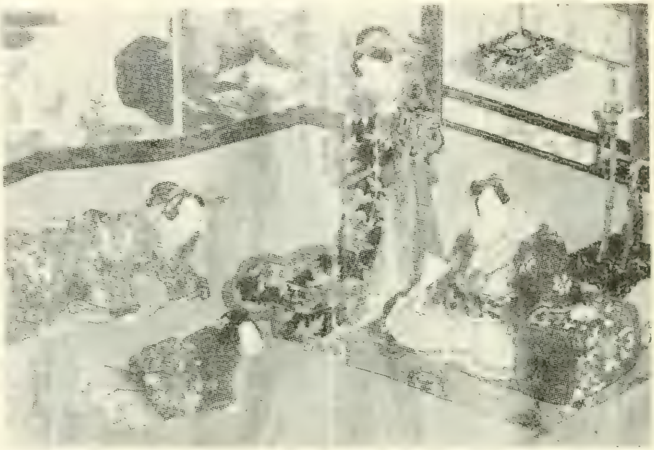
○心許なくて　心配で。

○血心　血の道。

○袴着　又着袴「ちやくこ」。男兒七歲の時に、始めて袴を着る儀。（或は三歲又は五歲、）通常十一月十五日產土神に參詣する。此の趣『源氏物語』には「此の御子三になり給年、御袴着の事、一の宮の奉りしに劣らず、くらづかさ、おさめ殿の物を盡して、いみじうせさせ給。それにつけても世の譏のみ多かれど、この御子のをよずけもておはする、御かたち心ばへ有難く珍らしきまで見え給をえ嫉みあへ給はず」（桐壺）とある。

女も數多候ふ中に、斯目出度男兒を設けしは、先の世よりの契りや深かりけん。嬉敷時の涙は猶止め兼る者ぞとて、御袖も朽る斗りなりト申しければ、義政は打笑ませ玉ひ、「既に家を讓る可き男子は富徽が產たる有。幼けれ共嫡子なれば、我一字を讓り義尙と名乘らす。然れ共彼一人にて最心細く思ひしに、今僥倖に此子を得たり。名は追てさたすべきの間、夫迄家臣の面々は只次郎の君と申すべしとぞ宣ひける。是よりして義政此子を愛する事大方ならざるに、今迄は花桐を輕しめたる家隷郎等に到迄、俄に花桐を敬ふ事宛然內君に齊し。斯ては嫡子義尙を乘越、足利の家は此次郎の君や繼玉はんかと、眉を顰る者少なからず。義政も其意無にしもあらず見え玉へば、內君富徽の前は胸最安からず。心の中に思す樣、死たる畫顏妾に對ひ、君の寵愛他に異る花桐の懷胎が、若し男子なる時は大事ならんと言懸しを、只讒言とのみ思ひ其儘に言消したるが、今こそ思ひ當つたれ。あら心憂や。とて折に觸物によそへて義政を屢諫め玉ひければ、道理に責られ義政は、心苦しさ限りなし。花桐は取分て心柔弱性れなれば、其うさ辛さいはん方なく、君の寵愛蒙らずばと結句なる物思ひをぞしたりける。斯て月日に關守なく、次郎の君は早五歲にぞ成玉ひ、年よりは大人敷、其清麗事は白き玉に匂ひを留たるが如く、日頃花桐を憎し妬しと思ひたる女迄も、此君を見る時は思はずも打笑まれ、我抱き進らせん、否我社と爭ふ程愛ら敷成長給ひぬ。御袴着の祝儀は、霜降月になし玉ふが世の常の習慣なれど、義政公は斯る事に

こと急ぎの性なれば、彌生中旬に急がし立て其儀式を行ひ玉ふ。衣服調度の美を盡したる、



總ての結構義尙の袴着の禮にも優りてみえければ、こは道ならぬ事なりと、世に譏る者多かり鳬。富徽の前は聞くに忍びず、今は無是非明々地に君を諫め申さんとて、御前へ渡り玉ふ。御側に侍ひける花桐は、斯と見るよりも遙かに退ぞき敬ひ申せば、次郎の君も席を下り、幼氣したる手を仕へ、頭を下て在するにぞ、富徽の前機嫌よく、「是は〳〵大人しう。サア手つかずと爰へおぢや。花桐も息災でト言流して御前に對ひ、「御酒宴酣も顧みず、妾が推て參りしは密かに申上る仔細。暫の間此若諸共皆の者は次へ立休息しや。ト人を避け近くすり寄、懷中より一ッ通の狀取出し、「是御覽遊ばせト差置玉へば、義政は不審乍ら押開き、

「兼々賴み進らせし通り、御兄義尙君を不具なる身とも做、我子次郎の君を以て家を繼せ玉はる樣、御呪法賴み進らせ候。宛名は破れて院の字斗り、わざと名書の處も割、我子と有

のに花桐が、狀としらせて疑ひを引出す爲の全く僞筆。「然ば其事にて侍る也。申し出すは始めてなれど、去年文月上旬手飼の狆が其狀に戲そばゆるを、思はずも取上て心に驚き熟〻閲れば、花桐が手跡には似も付ず。偖は彼に意趣ある者此狀を作へて、菓子樣の物に包み、狆に與へて妾が目に觸、花桐を冤罪に落さん謀と心付、再び三度繰返しよく其手風を考ふれば晝顏が手跡ににたり、されど其彼は世に無人、若や彼に手本を乞、夫を習ひし者やある。と先此ことを押包み、館に有とあらゆる女婢水仕に至る迄、七夕へ奉つる歌を書てえさせよ、と一人も漏さず取集め、其文と照し合せ、夫か是かと能みれば、桔梗と云へる婢女が書たる歌と同じ筆。偖こそと其者の素性を密かに尋ぬれば、元晝顏に仕し女。晝顏果敢無なりて後朋輩小菊と諸共にただ此館に在と聞、先小菊を先へ招き、一間の中へ押込置、重ねて桔梗を呼出し、此狀は其の方が書たる事は、早小菊を騙し尋ねて聞置たり。そちが古主晝顏を人知ず殺せしは花桐が所業と思ひ、其花桐を罪に落し、主の恨みを晴さんとは賴母敷心ざし、妾とても寵を奪はれ男子をさへ設けし花桐、何とて心よかる可き、愈そちに晝顏の仇を報はん心あらば、迂遠なる僞筆より妾に力を添て呉、花桐に憂目を見する工風は兼て做置たり。と密やかに囁けば、女心に誠と思ひ、斯顯はれし上からは、何かは包み侍るべき。賴み聞えし晝顏は枯て、咲でる花桐が日頃よりの妬ましさ。小菊が申し上たる通り妾しの所業ぞ。とこと細やかにかたるを聞、妾は少し氣色を損じ、

○水仕　水仕事をする下女。
○七夕へ奉つる歌　牽牛、織女の二星が七月七日の夜を期して一年にただ一度相逢ふ。その戀を祝福する意味から轉じて、平安朝時代から、自分の認めた戀を歌に記して、この夜梶の葉に結びつけるとその願が成就すると信ぜられてゐた。

○織女　織女星。

そちが手跡と小菊より聞しと言しは皆詐り、其以前より朋輩なれば彼には密事を語りつらん。と先試に問ける也。誠は織女へ奉つる此歌と比べ見て大方は推したれど、確乎なること知ざる故、妾も共に花桐に恨みある體に見せしを眞と思ひて自ら白狀。主人の仇を報ぜんと心ざしは殊勝けれど、花桐は其性心正しく道を守り、斯る非道を做者ならず、晝顏が最期には必ず深き故有て。敵は外に有べき也。其方達を舘に置ば又何事をか仕出さんと叱りつ宥めつ、其夜の中に桔梗小菊の兩人は密かに暇を出したれば、妾より外知人なし。是等の事は婢女の思ひ違へと言乍ら。其元は我君の花桐のみを御寵愛、夫より引き出怨妬み、抑花桐あの次郎を姙身てより、何事も妾に勝りて傅き玉ひ、產のまかなひ宮詣今袴着の祝ぶきまで。兄義尙にも立越えて華麗に做玉へば、或ひは怨み或ひは疑がひ、家臣郎黨兄弟と二つに分るその時は、家の亂れは國の禍ひ、そこに御心付ざるか。斯く申せばとて努尠か妾が妬みにあらざる證しは、其僞狀の主を糺し、花桐に無名を負せず、心一つに納めしにて知せ玉へ。ト席を打、涙と共に諫むるにぞ、義政後悔面に顯はれ、「花桐は父を亡ひ世に便り無者なれば、不便と思ふ心より人の恨み世の譏に心付ざる我愚さ、御身に面を對難し。兄義尙を差置て彼に家を繼すべき結構有との風說は、全く人の讒言也。心にな懸玉ひそ。トしめ〴〵と仰せければ、富徽の前も疑ひ解て、人々を呼集ひ盃を上玉ひ畢。斯ての後も義政花桐を愛すること猶思ひ止まらず、人の恨み譏りをも憚らせ玉は

ねば、遂には富徽の前と妹脊の交情疎々敷なり、重ねては諫の詞をも入ず、吁人に物思はする女哉とて、是より花桐を富徽の前も大方ならず妬き者にぞ思しける。其年の夏、花桐ふと風の心地と打臥せしが、一日腰元の女に助けられ、漸ゝ御前に出て申けるは、「去頃よりの妾が病氣里へ下りて寛々と保養をなさんと願うたれど、夫程の病氣は汝には常に有ことなれば、先暫時心みよと仰せに從ひ留まりしが、日々に重りて五六日以前よりは身も弱り、最早本復思ひもよらず、嵯峨の母も部屋迄は度々參りてお暇を少しも早う願ふ樣呉々申し置ましたれば、お聞分遊ばして嵯峨野へお戻し下さらば、此上もなき御惠み一重に願ひ上ます。ト言さへも※いと苦しげに嫋々とせし其姿。譬へていはゞ※太液の芙蓉の花の日に凋み、※びやうの柳秋風に痛める樣に似通ひて涙勝なる物思ひ。目元ははれて面瘦て尙艶麗に美しゝ。義政も胸塞がり、「終に逝べき冥途の道。夫さへ後れ先だたじと契りしことも仇となり、成行果を見屆けぬは心苦敷思へ共、然程に願はゞ無是非、今日より名有る※驗者に吩咐、病氣快氣の呪法をさせん、心確かに養生せよ。又奥富徽の外許さゞる乘物を、今より汝にとらする間、せめては夫を古鄕へ飾る錦と思ひなし、徐かに嵯峨へ赴むくべし。速々次郎を呼出し花桐に逢せよ。ト仰せに傳き※おち乳人誘ひ申せば、花桐は少し御前に出、恐れ乍らと抱き上げ是を名殘と思ふより暫しが程は御顏を守り詰て、吐息と共に、（撫子に振返りけり別れ道）と俳諧の句を小聲に吟じ、言度ことは有乍ら人目を憚り詞なく、息も絶つゝ

○いと苦しげに嫋々とせし其姿云々　「源氏物語」に、まみなどもいとたゆげにて、いとゞなよ／＼とわれかの氣色にて臥したれば、いかさまにかと思し召しまどはる。てぐるまの宣旨など宣はせても、又入らせ給ては更に許させ給はず、限りあらん道にも、後れ先立たじと契らせ給けるを、さりとも打捨てゝはえ行きやらじと宣はするを云々」（桐壺）

○太液の芙蓉、びやうの柳　白樂天の「長恨歌」に「太液芙蓉未央柳、芙蓉如面柳如眉」この詩句に楊貴妃の容貌よきを評したものである。太液の池に咲く蓮の如き面ざし、未央宮の側に植ゑ立てる柳の如き眉といふ意。

○驗者　修驗者

○おち乳人（めのと）　おちはおちのひと（御乳人）で貴人の乳母の稱。めのとも乳母のことであるが、轉じて幼主を守り育てる男子の守り役の稱とする。

嘆きしが、斯ては果じ。と若君を御座に直して顔を上、「君が情の下かげに露の命の消やらずば、又こそ御目に懸らめ。ト見返り勝に立出れば、義政は胸苦敷其夜は更に睡眠まず。「斯迄病に疲れし體。乘物の裡だにも心元なく思ふ也。嵯峨に歸りし其後はいかなる樣子か見て參れ。ト近習の武士を早馬にて急がせ玉ふと引違へ、腰元杉生遽敷嵯峨より歸りて御前へ出、義政公を見るよりも物も得言ず伏轉べば、「こは氣遣はし哭かずと仔細を語れ。ト義政公の仰せに漸〱心付「夜半を過る頃よりして俄に病疾重り玉ひ、御藥祈禱の効もなく早くも消果玉ひし。ト聲の限りに泣叫べば、義政はつと心迷ひ夢共思ひ辨へず。茫然として任せしが、稍あつて泪を拂ひ、「アヽ過失し花桐が最期は哭きて返らぬこと。汝は次郎を嵯峨へ伴ひ、死顔なりと今一度名殘に彼に見せて後暫し其家に留置べし。我勅命を蒙りて※蟇目の式を禁裏にて勤むること近きにあれば、我子乍らも忌服ある次郎は館に置難し。尤も七歲未滿の者今は佛忌のさたなけれど、是舊禮に寄也。ト供人に命じて次郎の君を嵯峨野へ送り玉ひ鳧。さらでも秋の夕暮は淋敷嵯峨の片邊り、千草に啣く蟲ならで泣つゝ明す、花桐が母は丹波の郡領たる間嶋知義が※後室なり、知義早く世を去て丹波の住居を爰に移し、室町御所の女兒のみ力と做つゝ暮せしが、僥倖にして義政の寵を蒙り、胤を宿し喜ぶかひも夏の野の、草葉の露と消果て早夢の間に七七日、露けき秋となりにける。次郎の君は此家の腰元※苅萱誘ひ立出玉ひ、後室に打向ひ、「母樣の忌も明日限り、夫故に父上

○蟇目の式　木製の鏃に數個の孔ありて之を射るとき音を發する。其の鏃を射て妖怪變化を調伏する式典。

○後室　身分ある人の未亡人。

○苅萱　もと大内にて朝顔の侍女であつた桔梗。

○野邊送りする時も云々「空しき御からを見つゝ、猶おはするものと思ふが、いと甲斐なければ、灰になり給はんを見奉りて、今は亡き人とひたふるに思ひなりなんと、さかしう宣つれど、車より落ちぬべうまろび給へば、さは思ひつかしと人々もてわづらひ聞ゆ」。（『源氏物語』桐壺）
○鳥邊野　茶毘するところ、京都淸水の下にある。鳥邊野の煙とは、はかない、悲しい、生者必滅の例に引かれる。

より館へ戻れと昨日御使者。お側に居るも今宵斗りお名殘惜う存じます。ト從容に述給へば、後室はつと恐れ入り、「コハ難有いお詞なれど、下世話に申す腹は借物、義政公の若君が郡領輩の妻や子を母上の婆樣のと必ずともに被仰な。「否否夫ぢやに依て館から附の者をば皆歸し、爰には誰も聞てはない。己や何日迄も祖母樣に抱れて寢度。ト泣玉へば、其儘膝に抱上げ、「幼氣な事被仰る程娘のことが思出されて悲しうてなりませぬ。※野邊送りする時も棺へ納めて仕舞ても矢張死だと思はれず、灰に成たを見るならば斷念ることもや。と鳥邊野まで送つたれど、乘物から落さうなと人々に留められ、歸つて今に花桐が其邊に笑うて居樣な。同じ煙となりもせず何の因果で生ながらへ。此悲しみは爲ことぞ。ト嘆き玉へば、若君も言葉はなくて諸袖を顏に押當ないじやくり。後室漸氣を取直し、「ア、ひよんな事言出して、貴君を循々泣せました。御所樣の仰せにて內君樣同樣なお位を法名へ下さつたれば、死でも滿足。サア御機嫌直し遊ばしませ、もう妾しも泣ませぬ。是苅萱今和子樣の被仰通り御所よりのお附の者は僉な彼方がお戻しなされ、お側に女子が少いから其方は抱へた新參り、漸く四五日ゐやる故何にも樣子は知まいが、和子を產だ妾の娘は御所樣のお愛妾、妬み猜みで惡う言た朋輩も有たれど、死での後は彼樣な氣立のよい者は無。と今では結句褒るといふこと。其方も若いが人は只心從順に持がよい。ア、妾とした事が、馴染もない其方に意見。老人の癖ぢやと思ひ腹立て呉やるな。ト言に苅萱手を仕へ、「何の腹を

立ませう有難うござります。左樣なら若君樣あすは愈室町へ。「ヲヽお歸り被成夫に附妾は種々用もあり、大儀乍ら娘の墓へ名代に參つてたも。「あの花桐樣とやらの。「おいの鳥邊野の蓮臺寺。供に附てやる男が處在地は能知てゐる。提灯持せて早うゆきや。「ハイ」とは云へど躊躇と座を立兼しが、何やらん心に點頭、左樣なら是から直にト抱へ帶しめつゝ供の男を呼、思案し乍ら出て行く。後室空を打あふぎ「アヽ秋の日の短かさ。最暮るに間も有まい。※和子樣はお眠氣さうな。お床には未早からう。コレ女子共々々彼邊の※寐衣採てきて、假におねかし申して置や。ト膝より移す折柄に、※鉦鼓の音も澄渡り、諸國を廻る修行者の門に彳み回向なす。ヲヽ僥倖と後室は女共して呼入させ「今日は娘の四十九日。※庵末の非時を進らせん。苦しからずば爰に一夜明させ玉へ。トありければ修行者は打喜び「佛事を營み玉ふ日に參り合すもふしぎの奇縁。然らば仰せに從がひて、一夜の惠み蒙らん。ト座に打通れば後室は「先お茶菓子を持ておぢや。夕暮から野別立肌寒いのに其縁の障子をば閉たがよい。ト心づけて修行者の邊り近く座を構へ「餘念もなう是爰に寐て居は妾が孫、何した事か四五日此かた毎夜々々物に魘はれ、わつと聲立起上り暫しが間氣もつかねば、一方ならぬ私が苦勞。靈佛靈社を拜まれた其數珠を頂だかせ、※加持してとらせて下さりませ。ト頼めば、修行者打點頭「夫は何より易いこと。ト言つゝ口に呪文を唱へ數珠さらさらと擦鳴し、※若君の顏打見やり「はツて氣高き性質、我高麗國の相人に口傳を請し

○和子　小童の美稱。
○寐衣　搔卷、夜着の綿が薄く入つてゐるもの。
○鉦鼓　叩きがね。
○庵末の非時　粗末な午後の食事。
○加持　眞言密教で印相を結び、陀羅尼を唱へながら、觀想を以て佛力の加護を祈る呪法。
○若君の顏打見やり云々　「源氏物語」桐壺の卷に、光君が鴻臚館に行き、其頃入朝した高麗人の人相見に占つて貰ふ所がある。曰く、「相人驚きて、あまたたび傾ぶき、あやしぶ。國の親と成て、帝王のかみなき位にのぼるべき相おはします人の、そなたにて見れば、亂れ憂ふる事やあらん。おほやけのかためとなりて、天下を輔くるかたにて見れば、またその相たがふべしといふ」。

○逆柱　さかばしら。木の根本の方を上にして立てた柱。逆柱を用ひた家には不祥があるとて忌む。

○御睡　ぎよしん（御寢）の轉訛。

は三年以前、未だ斯る相を見ず。まさしく、此兒天が下しるべき德は備へながら、然する時は世の妬み人の恨みに、家國の亂れを遂に引出さん。只、其位に卽人の後見となり主はたゞ德隱れなく、名の秀で榮え玉ふに疑ひなし。斯程の兒の輕々敷此所邊に在するは心得難し。ト問ければ後室は押包み「何のたかで私が採世を治むるの、位のとは思ひも寄ぬ事乍ら、今言玉ひし百分一、運が有ても此子の幸福。マア／＼夫は差置て、今もお話申した通り、此頃からの夜毎のふしぎ、夕べ迄此婆が抱て寢たのは、那彼處の、佛壇の次の小座敷。逆柱のある家や、楝木の下に臥時は、大人もおびゆる者ぢやとやら。今宵は私しが納戶の裡へ、寢間を變てふさせませう。修行者殿には今迄の、此子の寢間へ試みに、今宵睡んで下さりませ。「イヤ最逆さ柱が千本有ても、野に伏山に寢た身體、些も厭ひは致しませぬ。けふも十里餘りの路、意外勞れました。「御回向濟だら次の間で、寬々お休息被成ませ。ソレ女子共御案內。「斯おいで被成ませ。ト襖閉て切入にけり。表の方に人の來樣子は誰ぞと後室は、月の光に透見て、「ヤ、杉生ではないか。「ハイ後室樣是においで遊しますか。嘸お淋しうござりませう。私は此方に居て御介抱も致たいけれど、若君樣が、手前達は歸れ／＼と被仰る故、詮方なく室町樣へ、上ると何やら御用も繁く、お見舞も申しませぬ。ヲヽ和子樣は御機嫌よう御睡なつてゞござりますの。偖御所樣には夕月夜の、面白き景色を眺めて御在せしが、私をお呼なされ、かういふ時は花桐と、琴彈合せ歌を詠。遊びしこ

とも思出され、一層彼がなつかしい。又義尚を見るにつけ、次郎は如何したるぞと、戀しさも彌まさる。明日は早々貴孃と共に、上るやうにと其外に、仰せられたき數々は、四下の人めを思召す、お顏を猜して精敷は。承はらずに參りました。ト御狀を差出せば、後室は押頂き、「※嘆き暮して目も疎く讀えんことも覺束なし。然共君の御威光の、光に照して拜さん。ト徐やかに繰開き、『程經らば紛もせんとまち過す。月日に添て最忘れ難きは無理わざになん。幼き人はいかにか。遺物と思へば彌々見まくほし。』抔細々と書せ玉ひて、※(宮城野の小萩はいかに秋の風)讀も果ずに涙に哽び、暫く詞もなかりしが、稍あつて顏を上、「夫知義世を去ても、娘の耻と思ふ故、見苦しからず住なしゝが、※日數重なる物思ひに、庭の塵だにとらせねば、草は高く生上り、月影斗り八重葎に、さはらで差入此伏屋に、若君を永々と置進らせんは無勿體、夜も明果なばお迎への人をば早く賜はるべし。仰を背くに似たれども、子を先だてゝ、憂目をみる、妾は御前へ恐れあり。只朝夕に持佛へ對ひ、涙ぞ老の友なる。ト鼻打かめば杉生も、目を擦赤め聲曇り、「御所樣にも其如く、一間處に籠らせ玉ひ、今迄我身の行ひに、曲れる事はせざりしが、花桐故には世の人の、怨みを請しも宿世の縁。片時側を放すのも、懶かりしも斯斗り、短き契の故かとて、御膳も進まず奥殿へ、絶て渡らせ玉はねば、死ての後迄人々の、胸を痛ます女ぞと、富徽の方は思すよし。イヤ右や左申スうち、夜も早更し樣子なれば、速お返事を遊ばせと、進められて

○嘆き暮して目も疎く云々
『源氏物語』には「目も見え侍らぬに、かく畏き仰事を、光にてなんとて見給ふ。程經ば、少し打紛るゝこともやと、待ち過ぐす月日に添へて、いと忍び難きは、わりなきわざになん。いはけなき人も如何にと思ひやりつゝ、諸共にはぐくまぬ覺束なさを、今は猶昔のかたみになずらへて、ものし給へなど、細やかに書かせ給へり。
　みやぎのゝつゆふきむすぶ風のをとに小萩がもとを思ひこそやれ、とあれど、え見給ひはてず云々」　桐壺

○宮城野　仙臺市の東郊、廣瀬川畔の原野で、薄、女郎花、萩、桔梗が咲き亂れ、歌の名所である。

○日數重なる物思ひに云々
『源氏物語』に「命婦かしこにまかんで着きて、かどひき入るゝより、けはひ哀れなり。寡住みなれど人ひとりの御かしづきに、とかくつくろひ立てゝめやすき程にて過ぐし給へるを、やみにくれて伏ししづみ給へる程に、草も高くなり、野分にいとゞ荒れたる心地して、月影ばかりぞ八重葎にもさはらずさし入たる」　桐壺

涙を拂ひ、御返事さら／＼と書認めて差出せば、杉生は受取て、※暇乞つゝ下立ば、早くも月は山の端に、入方の空澄渡り、涼しき風の音信て、蟲の聲々鳴盡し、いとゞ哀を催され、離れ難くて杉生は、暫し軒端に彳めり。後室は直立上り、※御厨子に殘る花桐が、櫛笄を取出し「せめては是を遺物とも見做よかしト差出し、（鈴蟲の猶ふり添つ袖の露）打吟じつゝ背くる顔、心を察して杉生も、差俯き言葉なく、涙に絞る袖袂、記念の品々請納め、しほ／＼として歸り鳬。後室は後見送り「召使うた女の中に、しほら敷はあの杉生。ヲ、女と云へば苅萱は、何故戻らぬことぢややら。斯して待ても居られまい」※鉦ごの音の止だのは、回向が果て修行者も、最休まれた者であらう。どれ妾も納戸へいて、和子樣のお添臥。コレ女子輩彼方のお目の覺ぬやう、お布團でもおかけ申や。ト言捨納戸へ入に鳬。

暫くあつて修行者の、臥たる一間に魂ぎる聲、襖障子の倒るゝ音。只事ならずと後室は、用意の長刀抱込で、窺ひ給へど燈火は、消て黑白も見えば社「ヤア盜賊の入たるぞ。手燭手燭ト呼はり給ふ。聲に驚き各自に、掲出たる燈火に、能々見れば新參の、腰元苅萱修行者の、臥たる上に乘かゝり、咽をぐさと懐劔にて、突貫いてぞ居たりける。驚破曲者よと犇く人々、苅萱然迄周章ず、火影に熟くと修行者の、顔を見やりて始て驚き、ニ思ひ掛なきコリヤ兄上。ト發と叫りに差俯く。氣丈の後室飛かゝり、長刀杖に苅萱が、髪を押へて動かせず「僥倖吭は外れた樣子。負傷を撫恤とらすべし。サア苅萱、心得難き此有樣、包まず語

○暇乞つゝ下立ば、早くも月は云々　「泣く／＼夜いたう更けぬれば、今宵過ぐさず御かへり奏せんと急ぎ参る。月は入方の空清う澄み渡れるに、風いと涼しく吹て、叢の蟲の聲催し顔なるも、いと立ち離れにくき草のもとなり。

すゞ蟲のこゑの限りをつくしてもながき夜あかずふるなみだかな、えも乘りやらず。

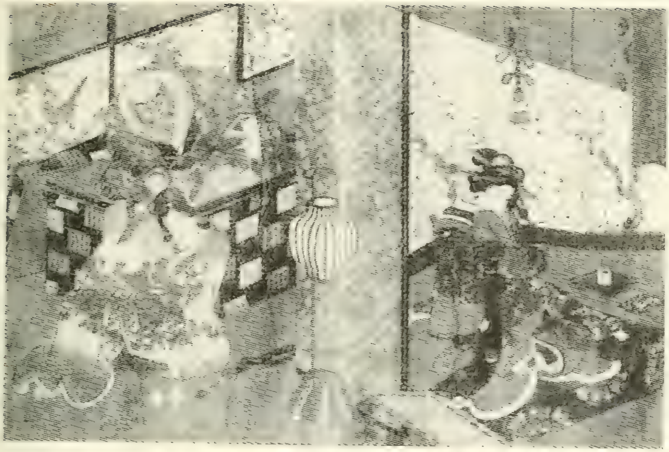
いとゞしく蟲のねしげきあさぢふに露をきそふる雲のうへ人、かごとも聞えつべくなんといはせ給ふ。おかしき御贈物などあるべき折にもあらねば、たゞかの御形見にとて、かゝる用もやと殘し給へりける御装束ひとくだり、御ぐし上げの調度めく物添へ給ふ」。（源語、桐壺）

○厨子　戸棚の一種。袋戸棚に似て持運びの出來るやうになつてゐる。壺厨子、二階厨子、置物厨子などがある。

○鉦ご　鉦鼓。叩きがね。

ト懷劍を。拂ひ落して突放され。よろめく處を杉生が。走り入て捕て押へ「此女は晝顏殿の召使はれし桔梗と言者。其昔し花桐樣を廊下へ閉籠御難儀を。懸たも確乎に是が仕業。今私しがお暇頂き駕にて歸る向ふから。此桔梗が懷劍を。袖に隱して此お家を。目懸て來は心得ず。と駕より下てとつて返し。後を跟て障子越樣子は聞て居ました。サア明々地に樣子をいやト問詰られて顏を上「最何をか包みませう。杉生殿の言た通り。元は桔梗と申した者。主人晝顏非業の死は。日頃から交情惡き。花桐が仕業也と人も言ば我も思ひ。主人の敵花桐を。安泰置が口惜さ。罪に陷さん計略も。事成ずして館を拂はれ。五年以來跟狙へど。偶の物詣も。同勢數多從へば。近寄事も情なや。遂には此世に亡人と。なりては討ん敵もなし。寧ては其母其子たりと。討て未來の御主人へ。手向んものと此家へ奉公。其夜よりして此劍を懷中に。お寢間を密と窺へば。聰明叡智の若君の。御心にや徹しけん。呀と言ては魘え給ふ。其聲に驚きて。本意を達せぬ其中に。翌は館へ御歸りと。聞て愈心急。右思左考の思案最中。後室樣は夫とも知らず。己が代りに花桐が。墓へ參れと被仰付。石に成ても主人の敵。足を向るも穢らは敷。供の僕は是よりして。逐電なせと金を與へ。路にて一人夜を更し。勝手はしれた此寢間へ。燈火吹消忍び入。撈る手先に當つた切髮。貴孃と思うて只一突。火影に見れば五年以前。別れし兄の泥藏殿。敵はうたで現在の。兄を殺せし此身不運。サア御存分に遊ばせ。ト惡卑劣もせず控へ鳧。

第二編梗概



刺客泥藏は畫顏に頼まれて花桐を刺さんとして、室の變じたのを知らずに、畫顏を殺したので、一念發起して、諸國行脚の修行者となり、此家に泊つて妹の手にかかるのも因緣と懺悔して落命する。苅萱も自殺せんとするのを後室が推止めて、苅萱の持つたる懷劍で髮を切り放ち、赦して女ひじりとして諸國行脚に出立させる。若君は容顏淸く、光り輝くばかりであるから、人之を稱して光君と云ひ、十三の時、元服して光氏と名乘る。尼苅萱は九年の間廻國して、後室ともども光氏に謁見し、晉川（細川）勝元の妹猪名野谷が花桐にそつくり生寫しのことを語るので、光氏は勝元を招きて父の側女に差出せよと云ふ。此女まことは勝元の妹でなく、將軍義教の妹眞弓が花滿中將に嫁して生んだ子である。然るに山名持豐入道宗全が年甲斐もなく、兼々妻にくれと懇望してゐるので、勝元は困じ果てる。富徽の前の腰元白糸、まことは畫顏の侍女であつた小菊が此話を立聞きしてゐた。光氏は猪名野谷を富徽の前と同列に置かん、其人は既に死去したと披露して宗全を欺くべしとの策を授けて勝元を納得させる。此女の名を藤の方と改めて義政の寵愛一方ならず、富徽の前は之を不快に感じ、光氏をまで憎んだ。二三年過ぎてから加茂の社家より獻上の雷避の御符を藤の方より義政に差上げんと、杉生其の使に立つたが、廊下にて富徽の前から義政に獻上する雷避御符の使者

小糸と先を爭ふ條は『源氏物語』の車爭の段を換骨奪胎したのである。

白糸きつと打見やり、「杉生が裲襠の縫の模樣は御所車、推して通ると、轅も榻も、打折り引裂き、かなぐり捨て、憂目を見やらぬ其先に、あやまりましたと、ひいて行きや。」「ホヽヽ、さう云やる白糸が、模樣も恰ど花車、落花微塵にされぬ先、側寄つてゐやるがよい。」「コリヤ可笑い。理を非に曲げる口車。」「イヤそなたのが横車。」「此打掛は君より拜領。」「よしむば網代の綾の裏。
「過ちあつたら容赦はせぬ。

車爭ひを模樣にて現はすところに作者の働きが見える。

山名宗全は白糸より藤の方が、かねて戀慕してゐた猪名野谷と聞いて、之を奪ひ取らんと、唐櫃の中に隱れて忍び込む。光氏はそれを知つて、藤の方に無體の橫戀慕と見せかけて、宗全を追退け、密通の惡名を受けんとする。これより浮世を氣隨氣まゝに立廻り、一生此身は好色者の浮名を取つて、義理ある富徽の前を安堵させん所存。義政は「やれ待て光氏、身を放蕩に持崩して、此義政に疎んぜさせ、兄義尙に家國を讓らすべき心であらうがな」と、光氏の本心を觀破する。

第三編梗概

光氏は赤松左衛門正則の娘二葉と結婚する。光氏は十七歳、二葉は二十一で、姉女房である。二葉は愼み深く、愛嬌薄く、情無しに見えるので、光氏は少しも心にそまず、二葉を其のまゝ赤松の館に据ゑ置いて迎へ取らない。花桐の母後室は病死する。其の菩提のために、五月雨の降る夜に讀經してゐるところへ、二葉の兄高直が推參し、此にて女の品定めをする。「源氏物語」帚木の卷にある雨夜の品定の作り替へである。明石の浦にゐる山名宗全の弟宗入の娘朝霧に就いての物語を初める。そこへ石堂馬之

丞が罷り出たので、祇園祭禮の時に見初めた女の話をせよとの仰せがある。馬之丞が見初めて一たび割なき仲となつた女は、富徽の前の妹で、青葉琵琶之助の妻となつた司の娘で桂樹と云ふものである。

此夜寶藏へ曲者が忍び入り、名劍小鳥丸を奪ひ取る。今夜の番をつとめる仁木喜代之助之を捕へんとしたが、曲者は着たる帷子の片袖だけを殘して逃げ去つた。摺箔した帷子を見ても、此曲者は女であつた。仁木は其の曲者詮議のために廻國に出る。光氏は嵯峨の新館へ移らんとして、方違のために一夜を仁木の館に明さんとして來たが、娘の村荻が清水へ參籠した後であるから、繼母客衣が、僞つて村荻と名乘つてお茶の通ひをする。光氏は之を見染めて、其の室へ忍び寄る。とは知らず、仁木の子川次郎は繼母客衣に戀想して言ひ寄らうとして、光氏の手を執りて事露顯する。客衣は光氏の言葉に隨はないので、つれない人よと、光氏は本意なく歸る。

偐紫田舎源氏第四編序

源氏物語に數本あり。※俊房本を黄表紙ととなへ、※定家本を青表紙といふ。黄とはかかる草双子を、今おしなべて如此よべり。ふるくは赤本黒本ありて、其因なきにあらず。桐壺の發語に曰く、いづれのおほん時にか。※花咲せの書だしに、昔々あつたとさ。頗る其意の似かよひたり。こかアどウこだ。かち〳〵山、火打に緣の石山にて、式部が書し昔ばなし、※今に殘るは湖水にうつる、※月の兎の大手がら。※それは土船此は浮舟。鼠の娶入は廿日の前、猫の仲人は女三の宮。いぬきが逃し、舌切雀。末摘花の古葛籠。化物の出る御物怪、見越入道明石の入道、慳貪ば、ア惡后。桃園式部桃太郎。横に行くのが蟹合戰、横におすのが※車あらそひ、牛の屎にて辷りやせん。されば彼物語を、大綱となし、今様の繪双子にうつさばなどかうつらざらん。と近江の君の口拍子、舌とくしやべりて予獨り日本一の黍團子、いつぱい喰せた狸汁、うまい趣向とおもへども、折櫃ものはさておきて、※頓食の

○俊房本　堀河左大臣俊房の校本で、この系統は河内本に傳はつてゐる。

○定家本　藤原定家の校訂したもの、河内本に對する。室町時代以後河内本に代つて青表紙本が大いに流行することになつた。

○花咲せ　赤本の「花咲かせ爺」

○今に殘るは湖水　式部が石山寺にこもつたといふ言ひ傳へから、琵琶の湖水を今に殘ると書いたのである。

○月の兎　月の中に兎が住むといふ傳説からカチ〳〵山の兎のはなしを持つて來たのである。

○それは土船此は云々　以下すべて童話傳説に引つかけて云ふ。鼠の娶入、舌切雀、桃太郎、猿蟹合戰等。土船は狸の乘つた舟。浮舟は「源氏物語」「東屋」の卷に宇治に住み、「浮舟」の卷に匂兵部卿の宮との關係より世を憂きものにし身を捨てゝ横川僧都の妹の尼に養はれ、小野にて尼となる。廿日の前は二十日鼠の名があるから此う呼んだのである。女三の宮は二品内親王で、「若菜」の卷にて柏木衞門督とかたらひ、「柏木」の卷にて薫大將を生み、後尼となる。小猫が大猫に逐はれて御簾を引捲くつたので、柏木衞門督が女三の宮を垣間見て戀心を起した。いぬきは紫の上の召仕の童女、誤りて雀の子を籠より逃がしたことが「若紫」の卷に見えてゐる。「末摘花」の卷に衣箱のことがある。それを舌切雀の古葛籠に喩へたのである。御物怪は死靈生靈の事。見越入道は化物の大入道。明石入道は入道播磨守で、久しく明石に住んでゐた明石の上の父。

○車あらそひ　「源氏物語」「葵」の卷に葵上と六條御息所との車爭ひがある。

○頓食　下司下賤に賜はる握飯、强飯の類。

○灰は虚空に散しても云々　『花咲爺』のお伽話。
○殿様の御目にはいつて　『花咲爺』にある。
○雲がくれ　『源氏』に「雲隠」の巻と云ふ名ばかりで文のない一篇がある。
○一期　それから「市が栄える」と云ふお伽噺の結末、即ちめでたし／＼に引きかけて、結末の義に用ひたのである。

味もなく、夜延仕事に埋火の※灰は虚空に散らしても、更に詞の花も咲かず。わるい處が※殿様の御目にはいつて叱られても、しやうこりもなく是で四編目。矢鱈闇くも※雲がくれ。それで※一期さかえるまで、年々春毎編を次べし。

文政十四年辛卯孟春

柳亭種彦記

○二葉の上　赤松左衞門正則の女。光氏の正妻。

○中川の宿り　仁木喜代之助の宅。

偐紫田舍源氏第四編

それよりも光氏は、嵯峨の館へ移りしが、二葉の上より此程は、絶て渡り給はぬ由を、文にて恨み聞えければ、心には染ねども、父の許せし妻なれば、流石に捨ても置難く、又赤松の館へ赴き、四五日此處におはせしが、中川の宿りにて、村荻と思ひ違へ、既に閨迄忍び行し、空衣が事をのみ、思ひ忘るゝ暇もなく、人しらず胸を痛め、言傳やらん便なきを、恨み嘆て居給ふ處へ、仁木川次郎は君吉を、誘ひて御前へ出で、「嵯峨の御館へ參りし處、君は是にと承まはり、直さま推參致せしは、是に居る幼き者を、差上たき故にてあり。父喜代之助は今もつて、歸宅致さず候らへ共、有難き仰せの趣き、母空衣が承まはり、彼には實の弟の事、夫に申す迄もなく、直さまお側へ差置れ、お役には立たず共、せめてはお茶の通ひなりと、勤めさせたき願ひの段、呉々申し聞たり。」ト事細やかに空衣が心の程を聞えければ、是僥倖の媒妁と、光氏密に打喜び、川次郎には暇を賜り、かの君吉は是よりして、傍らを放ち給はず、我子の如くいたはりつゝ、光氏密に宣ふやう、「汝に言ふのも耻かしけれど、予方違に宿りし其夜、村荻を思初め、閨迄忍び行たれども、只強面のみ欵待され、今に思ひ絕がたし。此文を密に渡し、返事を乞うて來るべし、努々人にな

漏しそ。ト仰に君吉訝しく〽其村荻と言ふは、喜代之助が娘なるが、如何なる暇にか御目にとまり。ト言懸るを打消て〽いかに年が行ぬ迚、はや汝は忘れしか。盃代りに與へし枇杷は、村荻が予にえさせしにて、其時姉と呼びたる故、始めの程は汝をも、喜代之助が末の子と、思ひ違へを村荻が、言解きしにあらざるや。ト仰を聞て、君吉は其夜姉の空衣が、村荻なりと詐りしを、思ひ出しは出し乍ら、明々地にも言ひ難く、詮方なげ首御前をたち、仁木の舘へ立歸り、姉空衣の部屋に入り、有し事ども詳く語り、件の御文さし出せば、空衣は淺ましさに、涙溢れて君吉が、思はん事も恥か敷、我身のかげに御章を、打開げて讀終り、元の如くに卷納め〽斯る章は見る人なし。ト申上て、はや再び、舘へ歸る事なかれ。ト言捨て立んとする、姉の袂を引留め〽現在夫のある御身へ、道ならぬお文使は、何ぼうか苦しけれど、方違へにおいでの夜、村荻と名を詐りし、夫を眞と思食す、君に御無理は少しもない。とは云へ貞女の道を背き、お返事あれとの事には非ず。何卒君の是限に、思食きり給ふ、御思案なされて下されかし。年も行ぬ私しを、召入られて光氏君、いと懷敷語らひ給ひ、仰を受たる此お文、見る人なし迚返せとは、夫は貴孃が御無體な。ト泣ぬ斗りに言ひければ、道理に責められ、空衣は、何と返さん詞もなく、奥の一間へ逃入るを、急にせいて追ゆく君吉〽やれ待給ト村荻が、障子閉きり立塞がり〽いつにない顔赧めて、母樣となに諍ひ、樣子を聞せて下さんせ。ト言ひつゝ、落散文取りあげ〽此文體は

慥に艶書。幼い人が斯な事、取次する者ではない。ト押宥むる村荻の、詞も更に耳へ入らず「様子あつて姉上へ、光氏君より下さる御文、それ返してたまはれ。ト取んとするを村荻は、袖に隠して莞爾と笑ひ「母上のお返事は、私が貰うてあげる程に、おまへは先づ小座敷に、其迄待てござんせ。ト言ふのは合點ゆかねども、押返して問はれもせず、吐息と共に君吉は、其座を立て次へゆく。村荻あたり見廻して、料紙硯を取出し、墨すり流す其處へ、何心なく来かゝる夏野「お暑いのに何への玉章、もう黄昏でお暗からう、お手燭を上ませう。ト聲かけられて振返り「久しう居やる其方には、何も隠す事はない。君吉様が此玉章を持てござつて、母様へ。あげよう否や取るまいと、爭うてござる様子を、遠目に見た故、お二人のおつしやる事は聞えねど、何した譯かとおとめ申し、取上げて熟〻見れば、あて名の處へ散し書、風に靡かぬ村荻の許へとあるは、光氏様より私の處へきた玉章、年の行ぬあのお子が取違へて、母様へ持ておいで成されたれど、否それは娘ぢやと、有繋に彼方も仰せ兼ねられ、ひよんな事で遣つ返しつ、私が目に懸らぬと、とんと果はつかぬ處。ト言ひつゝ又も文繰返し「何も合點のゆかぬのは、何日ぞやつれなうもてなしたと、お恨みの數〻は、此身に覺えは無い事ながら、村荻と言ふ名のあれば、紛るゝ事はよもあらじ、光る君と世に歌ふ、若君よりの御文とは、身の冥加に叶ひし事ト御返事筆ばやに、書認むれば、夏野は驚き、さりし夜すがら空衣が、寐やの事ども微聞けば、そ

れは正しく人違ひと、思へど目の前村荻が、喜ぶ様に斯ることは、言出難く、躊躇ふうち、御返事書き終り、君吉呼びて手に渡せば、姉の文ぞと心得て、急がはしげに赤松の舘へこそは歸りけれ。

光氏の元服の儀式は、さる年既に濟ぬ。さるゆゑに此度は、人にも知らさず前髪を、密に拂はせ姿容も、下士の様に打扮、一時かの君吉を、傍近く招き給ひ、「いつぞや汝の持歸りし、村荻が返事には、兄川次郎が室町へ宿直の不在に忍びこよ。後には女どちなれば、語らふに最易しと、言おこせし故いつぞはと、待わたりしが、今宵こそ、彼川次郎が室町に侍ふ由を聞置たれ。汝が常の乘物へ、予をも乘て忍せよ。早前髪をも取りたれば、さまで人めに立はせじ。ト仰にはつと君吉は、心の底に打驚き、姉空衣が返事には、若君の是限に、思切り給ふやう、事を分け理を盡し、書れしならんと思ひし故、喜びて歸りしが、さては操を捨たまふや。然ある時には今迄の、恩を仇にて喜代之助へ、此身もひとしく義理立ずと、思案に暮るを、光氏は夫とも更に心附ず、早速々と夕闇の、道たどたど敷其紛れ、君吉來れと乘物へ、手をとり無理に押入て、其身も共に乘移り、門抔鎖ぬ其先にと、急し立て行程なく、仁木の舘に至しかば、「姉上へ用有て、罷通り候。ト君吉に乘物の裡より言はせ給ふにぞ、幼き者の事なれば、門番は禮儀もせず、咎めもやらで容易と、庭口より忍入り、軈て駕籠より下り立たまひ、「予は是にて報知をまたん。汝は密に

○彼川次郎が室町に侍ふ由云々　『源氏物語』空蟬の巻に「幼き心地に、如何ならん折にかと待ち渡るに、紀伊の守國に下りなどして、女どちのどやかなる夕闇の、道たどたどしげなる紛れに、我車にてゐて奉る。この子も幼きを、いかならんと思せど、さのみもえ思しのどむまじかりければ、さりげなき姿にて、門などさゝぬ先に、急ぎおはす。人見ぬかたより引き入れて、下ろし奉る。童なれば、とのゐ人などゝ殊に見つけ、ついそうせず心安し。ひんがしの妻戸に立て奉りて、我は南の隅のまより、格子敲き罵りて入りぬ」。

○碁をうつ態を見ばやと思し云々「さて對ひゐたらんを見ばやと思ひて、やをら歩み出でゝ、簾のはざまに入り給ひぬ。この入りつる格子はまださゝねば、ひま見ゆるによりて、西ざまに見とほし給へば、この際に立てたる屛風も、端のかた、おし疊まれたるに、まぎるべき木丁なども、暑ければ

計らへ。ト仰に君吉詮方なく、切戸を叩けば、夏野は内より「誰ぞト答へて立出るに、此方はさらぬ風情して「此暑いのに縁先の、障子は何故に閉たのぢや。トいふ顔夏野は打眺め「是は／＼君吉様、思ひ懸ない處からお出、姉君様が過刻より、碁をお開遊ばすに、燈火へ風が當ると、夫で爰をば閉ました。ト言ひつゝ手にもつ燈籠に、道を照せば、君吉は直に座敷へ打通り、覘ひ見れば空衣と村荻二人盤に對ひ、餘念もなげなる其風情。光氏君のおいでの様子。夫としらさん便もなく、折こそあらめと次の間に、身を隠してぞ居たりける。光氏は今夏野が、言ひつる事を仄にきゝ、碁をうつ態を見ばやと思し、切戸は其儘鎖ざれば、やをら内に忍入り、塀にかけたる簾より、彼方の座敷を見通せば、屏風も側邊に押疊み、火を近う點したり。柱の方に寄添は、かの人ならんと熟見るに、水色の帷子ならん、紅梅練の裏つけしを、前深く打合せ、髮のかかりも華美ならず、手は痩々と姿容、じんじやうにして差對ふ。人にも顔はつゝましげに、腮を衿に差入て、俯きがちに欵待たり。今一人は東にむきて、殘る處もなく見えたり。桔梗染の薄衣を、さもしどけなく引纒ひ、腰引結へる紅も、ちらめくばかりに乳の下まで、胸も露に押寛げ、色いと白う肥太り、髮ふさやかに結ひ上げて、額衿元清らに見え、目元口元愛敬づき、最華やかなる容にて、惡き處はあらざれど、心靜に持なさば、猶も懐しく見ゆべきと、是を眞の村荻とは、夢にもしらず光氏は、心の裡に思しけり。碁をうち果て爰はだめ、そこにも二日と言ふさへ

はにや打ち懸けて、いとよく見入れらる。火近うともしたり。もやの中柱にそはめる人や、我が心かくると先づ目とゞめ給へば、濃き綾のひとへ襲なめり。何にかあらんうへに着て、かしらつき細やかに小さき人の、ものげなき姿ぞしたる。顔などは差對ひたらん人などにも、わざと見ゆまじうもてなしたり。手つき痩々として、いたうひき隠したンめり。いま一人は、ひんがし向にて、殘る所なく見ゆ。白きうすもののひとへ襲、二藍の小うちきだつものないがしろに着なして、くれなゐの腰引き結へるきはまで、胸あらはに、はうぞくなるもてなし也。いと白うおかしげにつぶ／＼と肥えて、そゞろかなる人の、かしらつき額つきもの鮮やかに、まみ口つきいとあいぎやうづき、花やかなるかたちなり。髮はいと房やかにて、長くはあらねどさがりは、肩の程、いと清げに、すべていとねぢけたる所なく、おかしげなる人と見えたり。むべこそ親の世になくは思ふらめとおかしく見給ふ。心地ぞなほ靜かなるけを添へはやと、ふと見ゆる。かどなきにはあるまじ」。(源氏物語「空蟬」)此の文中、前者が空蟬、後者が軒端荻にて、下文では空衣と村荻に當る。

○だめ　駄目。圍碁にて兩方の境界にあつて、何れの所有でもない目。

○劫　圍碁に一劫と稱する手。

○村荻は賑はしく云々　賑はゝしう、あいぎやうづき、そぼるれば、にほひ多く見えて、さる方にいとをかしき人ざまなり。あはつけしとは思しながら、まめならぬ御心は、これもえ思し放つまじかりけり。見給ふ限りの人は、打解けたるよなく、ひきつくろひそばめたる上べをのみこそ見給へ、かく打解けたる人の有樣、かいまみなどはまだし給はざりつることなれば、何心もなうさやかなるはいとほしながら、久しう見給はまほしきに、小君出でくる心ちすれば、やをら出給ひぬ。（源氏物語　空蟬）

○はま　圍碁の語、あげいし。

○聲　聲の目をいふ。

○ときめき　尋ねこと云ふを略ては、あまた、梅の香を尋ねると云ふことに用ふ。鬧紅は梅の異花、その芳はしい香がはつと匂ふ。

も村荻はせはしなく、こぼす碁石を空衣は、取上げて押靜め、先待給へそこは禮手、爰のわたりは劫にこそ。ト言ふをも更に聞入れず、否々今度も妾が負、此隅の地が貴讓は大き

い。一、二、三、四、五、六ト指を折りつゝ數ふる樣、手鞠の唄に異らず。蓮葉に見えて吾が戀る、鮮明ならぬ姿こそ、却て床しと、光氏は、一人心に打笑まれ、猶目を留めて見たまひぬ。村荻は賑はしく、愛敬づきたる笑顏を、已れも佳と思へる樣に、聲を放ちて打笑ひ、是まだ爰にもはまが四五目。夫なら左近の負はない。まだあるか尋ねてみん。トつと立上つて打ふるふ、裳に梅の來鬧紅、ときめきの香焚とこり、浮世に騷し立舉動。浮きたる心のある男子は、是をも佳と思ふらんと、かく女どち打解し有樣なんどの垣間見は、まだし給はねば珍しくも、又をかしくも思しけん、猶身を潜めておはせしが、内より人の出くるけはひ、見附られじと光氏は、立去らんとし給ふ處へ、君吉急ぎ走り來り、一人目繁くて御いでの、

○しど無くて　しどけなくて。締りなし。

○みじろぎ　身動きする。

けはひはまだ申し出ず。又こそ折も候はめ、今宵は御歸舘遊ばせ。トすゝめを光氏聞入ず、左右する間に彼方には、碁をうち果しと覺しくて、笑ざよめき人々の、立別るゝ様子して、「君吉様々々、どれにお出なされます。此お切戸は閉まする。ト扉をならす夏野が聲。君吉驚き振返る、袖を光氏引留め、「折戸を鎖たる體にもてなし、汝は早く内に入り、よく計らへ。ト宣ふを、聞くと其まゝ緣に上り、姉に様子を語んと、行くを夏野が押隔て、「村荻様と諸共に、姉君様は既お寐み。御用があらば翌の朝お早うお逢遊ばしませ。和郎のお床は風の入るお窓の下へとりました。ト誘ひ行けば、詮方なく暫が間虚寢して、其後事を計らんと、心は確乎に持なせど、幼き者のしど※無くて、枕をとるより逸早く、眠こけつゝたあいなし。光氏は最敏く、先に夏野が呼つる折、かの君吉が後に附、座敷の内へ忍入り、轡寄たる屏風の蔭へ、這ひ隱るとは誰あつて、知る者更に無り鳬。偖空衣は先刻より、君吉の聲をきゝ、又若君の御文を、もて來しならんと胸轟き、夫の歸りし其上にて、事の仔細を包まず語り、詐り申せし言譯には、左やせん右やと氣を痛め、いと寢苦しく目も合ず、何心なく村荻が、熟睡みしが羨ま敷、顏をもたげて打見やれば、皆靜まりし小夜半に、怪しやさら／＼衣の音、よしの障子に隔りて、火は微暗くて見え別ねど、此方へみじ※ろぎよる人影、若や夫かと淺ましく、其夜は殊に暑かりければ、上にかけたる練絹の、袷を徐々ぬぎ捨つ。肌着のすゞし單衣にて、裳の方へ辷り出、壁に身をよせ息もせず。光氏

〇冥加ない　冥加を蒙ること甚しい。（ないは甚しいの意）かたじけない。勿體ない。

〇打出て　言葉に出して。

は捜寄り、只一人臥たるを心安しと寄添へば、有し氣色に引變て、手も膨かに顏も肥え、枕は傍邊に搔遣りて、謹愼なき寐姿を、怪しや是は變りしと、見返る此方に空衣が、さし足しつゝ逊出んと、開くる障子に差込む火影、互に見交す顏と顏。「ヤア村荻。かねを含みて眉毛を拂ひ〻君にもいつか御元服〻さては夫を持たるか。ト訝かる光氏其間に、影を隱して空衣は、何地へ行けん見えずなりぬ。今光氏が村荻と、呼びつる聲の寢耳に入り、女兒は漸日を醒し、呆れたる氣色なりしが、熟〻御顏打まもり、夫と推量したりけん、俄に裳かき合せ、衣紋整ひ手をつかへ〻御目に懸し事はなけれど、貴君は正しく光氏君。此村荻をばいつの間に、お目に留りて有難い、御章に賤妾が稚い筆で返事。夫を御覽遊ばして、今宵は兄の不在なれば、お越ありしは冥加ない。爰にねて居給ひたる母樣のお不在は、おいでの樣子を夫ぞと悟り、母樣の此枕を、貴君へ上よと仰やらぬ計りについと氣を通し。ト言さして顏打赤め、袖打おほふ其姿、世の中をまだ能もみぬ、娘の樣には戲謔たり。光氏心に思ふ樣、さては曩日村荻と言ひし女は空衣にて、夫とも知らず宵の程、垣間見たりし此娘が、村荻にて在しよな。何の故にか予を詐り、其身は屢次憂目を見、予にも物を思はせし。吁心得ずと思せども、打出て村荻に、斯と言んも憐愍く〻御身を見ん迚去し頃、方違へに來つれども、何處にかはひ隱れ、影をだに見せざりし、其恨みを言ん迚、今宵忍びて來りし。抔いひ紛らし給ひければ、いと若やかなる心には、眞と思ひし風情に

○老たる女が起き合せ云々
「源氏物語」空蟬の卷に「戸をやをら押し明くるに、老いたるご達の聲にて、あれはたそとおどろ〳〵しく問ふ。煩はしくて、まろぞといらふ。夜中にこはなぞありかせ給ふとさかしがりてとさまへく。にくゝて、あらず、こゝもとへ出るぞとて、君を押出で奉るに、曉近き月隈なくさし出でゝ、ふと人の影見えければ、またおはするはたそと問ふ。民部のおもとなゝめり、けしうはあらぬおもとのたけだちかなと言ふ。たけ高き人の常に笑はるゝをいふなりけり。おい人これをつらねてありきけると思ひて、今たゞ今立ち竝び給ひなんといふ〳〵、われも此戸より出でゝく。わびしけれど、えはた押しかへさで、渡殿の口にかひ添ひて隱れ立ち給へれば、此のおもとさし寄りて、おもとは今宵は上にや侍らひ給つる。おとゝひより腹を病みて、いとわりなければ、しもに侍つるを、人ずくなゝりとて召ししかば、よべまう上りしかど、なをえ堪ふまじくなんと憂ふ。いらへも聞かであな腹〳〵、今聞こえんとて過ぎぬるに、からうじて出給ふ」。

て、猾恥かしげの立添て、差俯いて居たりけり。

君吉ふつと目を覺し、虚寐なさんと思ひの外、眞に眠りし愚さよ。君はいかになし給ふか。先姉上へ此事を告知んものと急がはしく、彼處へ來れば村荻と、思ひも懸ぬ光氏君、さては姉の詐僞の、漏たるならんと悲しくて、逡巡すれば光氏は、夫には更に目も懸ず、「今言つる事共を、必ず人に沙汰するな。さらぬ風情に欵待よ。ト何にかあらん村荻に、呉々も言知せ、君吉連て庭口より立出給へば、目の疎き老たる女が起き合せ、「そこへ御在は誰なる。ト驚愕聲に咎られ、物難しと君吉が、「夜半なれ共用有て、表へ出るはわれなり。ト言ひつゝ君をまづ先へ出し申せば、曉近き月は隈なくさし出でて、彼光氏の影さすを、以前の老女が透し見て、「まだ一人おはするは、ヲゝ夏野殿にて有けるか。此頃迄は子供なりしが、丈の高くなられた事は。君吉樣も今のまに、彼樣に成人遊ばさう。アゝ夫迄は生られまい。夏野殿は空衣樣のお部屋に今迄ござつてか。此四五日は腹をやみ、下へ行のが近い故、年寄ては猾難儀。あら腹痛や〳〵。ト吾目の疎きに光氏を夏野と思ひ違へてや、一人私語行過れば、其間に辛うじて逃れ出させ給ひけり。

それよりも光氏は、嵯峨の館へ歸り給ひ、君吉を近くよび、「方違の其夜より、村荻と詐りしは、姉空衣にて有ならん。一方ならずいとほしむ、汝迄が包み隱し、吾に不義の行ひをせさせんと做たるは、いかに幼ければとて心附ざる事どもぞ。ト言懲し給ひければ、道

理につまりて君吉は、返答も更に聞え上ず。光氏は空衣が、閨に殘せし薄衣を、袖に隱して歸りしを、取出して打眺め、「返すがへすも何故に、娘と欺り昨夕迄、仇に心を盡させし、あら心根の憎さよ」と爪弾きを做給ひ、寝られぬまゝに硯を取寄せ、文にはあらで鼻紙へ、手習ふ樣に書すさみ、(蟬の空其身はどこに鳴てゐる)。打捨給ふを君吉は、懷中にひき入て、御前を退けども、いかなる故にか村荻には御言づけも無りしとぞ。夫より直に君吉は中川の館へ赴き、奥の一ト間へ打通れば、姉空衣は待つけて、夫と見るより側へ召寄せ、「妾にも知せず君吉を、何迚誘ひ進らせし。人の思はん手前もあり。斯迄幼き心ばへ、君もよしとは思すまじ」と恥かしめられ、君吉は、右に左に苦しけれど、事の破れし其上は、言譯せんも無益なりと、差俯いて答もせず。彼御筆すさみ取出せば、有繫に取て打吟じ、いせをのあまの捨衣と、とり隱し給ひしかと思へば、心恥かしく、かのたゝう紙の端つかたへ、(空蟬の羽も斯やらん袖の露)と書つけるを、村荻は物の蔭より見たりしかど、何處の文と問ひもせず、遊び狂うて居たりけり。是にも深き故由あり、尚末々に物語るべし。

空蟬の卷終り。是よりは夕顔の卷のおもかげに綴れり。

光氏は只管に、浮世狂ひに假託けて、寶の劍を詮議せんと、心を千々に碎けども、それと思へる事もなし。猶も人の繁き處へ、立入らんには如べからずと、六條三筋町といへる廓

○爪弾き 自分の心に叶はなかつたり、又は疑しみ嫌ふ時に、指の爪を拇指の腹にかけて弾くをいふ。

○寝られぬまゝに硯を取寄せ云々 『源氏物語』空蟬の卷に「暫しうち休み給へど、寝られ給はず。御硯急ぎ召して、さしはへたる御文にはあらで、たゞ手習のやうに書きすさみ給ふ。

うつ蟬の身をかへてけるこのもとになほ人がらの懐しき哉、と書き給へるを、懐に引入れてもたり。かの人も如何に思ふらんといとおしけれど、かたがた思ほしかへして、御言傳もなし。かの薄衣は、小袿のいとなつかしき人香にしめるを、身近くならしつゝ見居給へり」。

○右に左に苦しけれど云々 『源氏物語』空蟬に「ひだり右に苦しく思へど、かの御手習取り出でたり。さすがにとりて見給ふ。かのもぬけを、如何にいせをの海士のしほなれてやなど思ふもたゞならずいとようづに亂れたり。……つれなき人も、さこそしづむれど、いとあさはかにもあらぬ御氣色を、有しながらの我身ならばと、取りかへすものならねど、忍びかたければ、この御疊紙の片つかたに

うつせみのはにおく露のこがくれて

しのび／＼にぬるゝ袖かな」、
○いせをのあま云々　海濱に住む海女。「後撰集」に「鈴鹿山伊勢をの海人の捨て衣しほなれたりと人や見るらむ」光氏が空蟬の捨てゝ置いた衣を拾つた事を含めてゐる。
○たゝう紙　たゝみ紙の音便。はな紙。ふところ紙。光氏から來たはな紙である。
○浮世狂ひ　面白可笑しく遊び狂ふこと。
○六條三筋町　京都の島原はもと萬里小路冷泉に創めて立てられた。天正十七年より慶長六年まで十三年間である。慶長七年、六條に移つたが、廓の內に小路三筋があつたので、三筋町と云つた。今の室町新町西洞院の間、五條通下る二町四方の構である。寬永十八年、朱雀野に移されたが、偶々肥前島原に切支丹の一揆が起つたときなので、此廓をも島原と稱した。古名は新屋敷又は傾城町と云ふ。
○いやとよ　人の言を打消すに言ふ感動詞。
○物はかなき住居にて云々　物はかなきはつまらない、憐れつぽい。「源氏物語」夕顏の卷に「かどは蔀のやうなるを押しあげたる見入れの程なく、

へ、忍び歩きの頃なりしが、彼の惟吉が母強く病ひ、尼になりける由を聞き、さらば彼を訪ねんと、五條の家に赴きて、門前に駕をとめ、人して斯くと言せ給へば、惟吉狼狽て出迎へ「此程母の病氣につき、暫しお暇蒙りて、御舘へも罷出ず、思ひ懸なき御來駕。ト頭を大地にすり付れば「いやとよ、汝が母の乳房を含みて予は成長せり。病に臥すと聞きながら、打捨置くは本意にあらず、案内せよ。ト仰すれば「然らばお駕籠の儘乍ら、と潜を入て門の戸を開んとすれど、門に錠を下してありけるにぞ、急がはしげに惟吉は、鍵もてこんと走り行く。光氏は駕籠の簾打かけて、大路の樣を見渡し給ふに、此家の傍らに、板垣を疎にしなして、縁先の障子はくわらりと押開き、蒲の簾最白う涼しげなるに、女のすき影、笑ふ聲など聞えければ、如何なる者の集まるならん。予とは見知者あらじと、駕籠より下て差覗けば、座敷も二階も奥深からず、物はかなき住居にて、古帷子の解分を、板戸へ張りしを立よせたる、垣根も折戸も青やかに、心地よげに這かかれる蔓に、白き花

物はかなき住居を、哀に、何處かさしてと思ほしなせば、玉のうてなも同じことなり。きりかけだつ物に、いと青やかなるかづらの、心地よげにはひかゝれるに、白き花ぞ、おのれひとり笑みの眉開けたる。をちかた人に物申すとひとりごち給ふを、御隨身つい居て、かの白く咲けるをなん夕顏と申侍る。花の名は人めきて、かうあやしき垣根になん咲き侍ける。と申す。げにいと小家がちに、むつかしげなるわたりの、此面彼面あやしう打よろぼひて、むね／＼しからぬ軒のつまなどにはひまつはれるを、口惜しの花の契りや、一房折りて參れ、との給へば、此の押上たる門に入りて折る。流石にされたる遣戸口に、黄なるすゞしのひとへ袴、長く着なしたる童の、おかしげなる出來て、打ち招く。白き扇のいたうこがしたるを、これに置きて參らせよ。枝も情なげなめる花をとて取らせたれば、かど開けて惟光の朝臣の出來る、して奉らす。

○己れ獨りが笑みの眉　家が貧窮であるのに、此の花のみ獨り得意げに笑ひを含んでゐる。

○よろぼひし　荒れ果てた。

いみぞ、己れ獨りが笑の眉、「開きしは何なるかト問せ給へば、駕舁男、「那こそは烏瓜。其名は黒き鳥めきて、花は白く實は赤く、斯るいぶせき垣根にのみ、咲候。ト答ふるにぞ、「實に此邊りは小家がち、打よろぼひし軒のつま、這蔓縁れるはくちをしの、花の契りや、一房を折て參れ。ト宣へば、彼男は心得て、此おし上たる網戸の裡へ立入ば、年紀二十に足ぬ顏よき娘、黄なる凉しの前掛し、花にも優る雪の肌、白き團扇に打招き、「是に載て上げ給へ。花は露けくとが／＼敷蔓の茨が、美しい彼方のお手にさはらう。トさも含耻げに立出る。折柄隣の門の戸を、開いて惟吉罷出、夫と見るより立よつて、娘の持し團扇の儘、花を受とり、御前へ持ち、「門の鍵を置失ひ、斯騒しき街中へ置まゐらせし不禮の段。然しあなたを光氏君と存せし者は候まじ。いざ御供。ト門の內、駕舁入るれば、此方の娘、心有げに見送りつ、只うつかりと彳めり。光氏內に入給へば、病に勞れし惟吉の母は

○五戒　偸盜・邪婬・妄語・殺生・飲酒の五惡行を制すること。

○君の光を月かと思ひ云々　『源氏物語』夕顏の歌は「心あてにそれかとぞみる白露の光そへたる夕がほの花」といふのである。

○なげ節　投節。小唄の一種。明暦の頃島原かしはや又十郎方の抱のたいこ女郎河内これを歌ひ初めて世に行はる。其後正德の頃、三文字屋又左衞門の抱のたいこ女郎よし松此歌に名あり、益々盛となる。山本屋の抱女小倉といふたいこ女郎又此歌の上手であつた。寛保頃のことである。島原の投節、吉原の繼節、新町の雛節といづれも廓の名物であつた。

○かけ香　絹の袋に入れて身に帶びて置く香。

漸起上り、「髮をおろし容をかへ、憚りあれば御舘へ參らず。絶えてお顏を拜まざりしが、※五戒を保ちし德顯れ、伏屋に到らせ給ひしは、阿彌陀佛の來迎ぞや。是を此世の思ひでに、黄泉へ赴き侍らん。」トさも嬉げに言ひければ、光氏は涙にくれ、「其有樣をつら〳〵視るに、左迄重き病にあらず。心確乎にもちなして、養生加へ本復なし、まだ年若き惟吉が、世に出るをも見はつべし。心に障ある時は、佛の國へ到り難し。病のおこたる加持祈禱は、我祈願所にてせさせん。なんど最懇切に力をそへ、病床を立出給ひ、惟吉に紙燭を點させ、隣の娘が與へたる團扇を取て見給へば、(※君の光を月かと思ひ浮れ出たる烏瓜)※なげ節の唱歌を一トうた、面白う書たるが、思ひの外に美しき筆のすさみに心動き、「此西隣に住なすは、いかなる者ぞ。」ト問給へば、惟吉答へて云へるやう、「君の知食す如く、久ぶりにて某しが此家へ罷り歸りしは、母の病氣の故にして、其事にのみ取紛れ、隣の事は能くも存ぜず、折節若き女子ども出入いたす樣子にて、其團扇をさゝげしは、確乎娘に候。」ト聞てほくほく點頭き給ひ、人の手馴て※かけ香の匂ひ染たるかの團扇を懷敷げに打ながめ、月の小唄の一節に、御心や留りけん。「此團扇には尋ぬべき仔細のあれば、此邊の樣子を悉く知者を、とく呼びまゐれ。」ト宣ふが、端近なれば御聲の表に漏れて聞えけん、「其樣子は賤妾が直に申上ませう。御免遊ばし下されまし。」トいと馴々敷年紀四十許と思しき女、會釋なしつゝ、打通り、「私しは四月頃、お隣家へ轉住ました凌晨

○三味線　三絃が我邦に傳はつたのはいつの頃か。或は永祿とも云ひ、或は文祿とも云ふ。文祿說は信ず可らず[illegible]、[illegible]永祿と定めることも[illegible]な資料がない。永祿[illegible]の時で、義政時代よりはずつと後れてゐる。

○戶張帳　とばりと[illegible]を[illegible]暖[illegible]をいひ、室内に布帛を張つて垂れたもの。凌晨のいふ戶張[illegible]を張つたの[illegible]であるが、光氏がこれを帳の意にとつたのである。

○催馬樂　神樂歌の類。[illegible]行はれた歌謠の名。[illegible]俚謠を貴人の採り[illegible]である。『我家』はその一曲。

と申す者。貴方へ團扇を上たのは、黃昏といふ一人娘。むだ書の其小唄が、お目に留つて、那が僥倖。お名は聞いて居ますれど、惟吉樣には染々と、お目に懸るは今宵初めて。私しは女子供へ、舞の指南が憂き生計。娘は近來琉球より傳をうけた三味線と言ふ者を教ますれば、貴紳はお耳馴ず。拙い業が反却てお慰にもなりませう。夫は既に世を去りて、只今では寡ずみ、お氣遣ひな者はない、穢けれどもお客樣をお連申して參る樣、娘も兒々申ました。ト聞いて光氏うち微笑み、「夫こそは一興なれ。直に御身の家へ行ん。サア凌晨とやら案內。ト立出給へば、惟吉は、こは輕々しき御有樣と思へど、若き身の程を顧みつゝも詞に出さず、件の女の後につき、光氏は先に見し、あげ戶を潜り立入れば、二階の簾は皆下して、間を漏くる火の影は、螢よりげに哀れなり。黃昏も出迎へ、簾の陰に誘ひ申し、親子種々歎待にぞ、光氏は目馴ざる住居の樣も珍しく、彼方此方を打眺め、「過刻表に憩ふをり。板戶を二ッ組合せ、上より衣を張たるが、あれ〳〵表に今もあり。那は何ぞ。ト問給へば。凌晨は二階より表の方を透し見て、「黃昏があなたに浮れ、忘れて夜干にしたさうな。秋も近いに夜露に濡し、だいなしに成たであらう。那は妾の古帷子。戶張と言うて下賤では致す事でござります。ト打笑へば、光氏は扇を以て拍子取、「我家は戶張帳をも垂れたれば。ト謠ふを、凌晨引取て「ソリヤ催馬樂の謠もの。其戶張とは綾錦の、たれ衣の事なれば、那戶張ではなけれども、我家とは我家の事おやと云へ

ば唄ひ變へて、「我家は戸張てふをも干たれば、大君來ませ聟にせん。御肴には何よけん、鮑螺かかせよけん。私が唄ますると、小唄の節になりまする。聟にせんとは前兆よし。御肴には娘が三味線、磯馴小唄の貝盡し、鮑螺かせかけて、騒でお聞せ申すばかり、御馳走はなけれども、今宵は一ト夜ナア黄昏、「夫ぢやと言うて見苦しい。妾が臥房へ勿體ない。ト物恥かしげに言樣子、未世を知ぬ樣ならねど、いと若々敷愛らしゝ。折から表に咳きして、「若君是に御在るよし、喜代之助只今歸洛。ト直に二階へ打通れば、凌晨はためつすがめつ、喜代之助をまもり詰、「慌忙しげなお面もち、何ぞ彼方へ急の御用。お側にゐてはお談のお妨にならう。黄昏は忘れた戸張剝してたゝみや。私は美酒をとつて參つて上げませう。ト二人は其座を立去けり。

喜代之助近くすり寄、「仰に從ひ湯治と披露し、京近なる田舍々々を、尋ね廻り候へども、かつもつて手懸りなく、詮方盡て今日歸洛。直樣御舘へ參りし處、惟吉が母の病氣、御尋ねの由承はり、即ち隣家へ罷越し、父ぞろ是まで御蹤を、慕ひて推參致せしは、豫て御內意うけたる如く、病氣と言ひたてお暇賜はり、足手纒ひの村荻は、婦妻におこせと言入し、山名の一子三郎統清の許へ嫁入せ、妻空衣が父にて候土橋政長と謂ひし者は、既にみまかり家も絶え、戻す親戚も候はねば、彼をば本國伊豫まで引具し、拙者はそれより國々を遍歴なして、寶劍の。ト言ふを光氏扇で抑へ、囁き給へば、喜代之助聞く事毎に

○我家は戸張てふをも云々　催馬樂「我家」の曲、「我家〔わいへん〕は、帷帳をも、垂れたるを、大君來ませ、聟にせむ、御肴に何可けむ、鮑榮螺かかせ可けむ。」

○螺　さざえ（榮螺）。

○かせ　甲羸。雲丹〔うに〕の介〔かひ〕。

○磯馴小唄　海濱地方の民謠。

○かせかけて　かせをも加へて。

○喜代之助　空衣の夫。村荻の父。

○まもり詰　目守り詰めにて、見詰めること。

○かつもつて　全くもつて。

○此後さたする事勿れ　今後はこれについて何も云つてはならぬ。

○千夜を一夜のかね言　『續古今集』讀人しらずの歌に「秋の夜の千夜を一夜になせりとも言葉殘りて鳥や鳴きなむ」といふのがある。「かね言」はかねて言つて置いた言葉の意であるが、こゝは「千番に一番のかね合ひ」などいふを下に踏まへてゐるやうである。

○碓　臼を地に掘りすゑ、杵の柄を足で踏み上げては、また下し、米などを搗くやうに仕掛けたもの。

打驚き「夫こそ疑ふ處はなし。直に某引捕へ。ト立つを引とめ、四下を見給ひ、「急ては事を仕損ずる。コレ斯々。ト密々聲。「然らば若君お一人にて、今宵は是に御一宿。「汝は隣家で明くるをまて。「委細承知仕つる。夫にはつかざる事乍ら、某が不在の中、君方達にお入の由、其夜御茶の通ひには、村荻を差出せと仰有しが、折悪く清水寺へ參籠の、娘の代に妻空衣、其名を詐り出たるが、事顯れて君に對し、面目なき由吾に告げ、自害もなさんず樣子なれば、大事の前の小事ぞと、屹と止めて參りしが、いかなる事ぞト問ひければ、光氏は口籠り「夫らは一時の戯れにて、强ひて咎めん所以はなし。某當て恨みはせずと、是々も言聞けて、妻空衣に安堵させ、※此後さたする事勿れ、早々。ト宣へば、喜代之助は惟吉の住家へこそは立去けれ。

　心なき山賤も、花の蔭には憩はん事を思ふは世の常なり。黄昏は思ひも懸けぬ君の情の下ぶしに、※千夜を一夜のかね言も、まだ盡なくに鷄鳴きて、己が營み多忙なき、隣の家々起出て、壁を隔し物語り、耳かしましく※碓を、踏鳴す音こほ/\と、なる雷の心地して、何かは知ねど、光氏は寐れぬ儘に起上り、斯端近き臥床の樣珍しければ、黄昏諸共簾を引上げ見給へば、僅の庭に竹を植ゑ、垣根に白く咲たりし、花は哀れに凋みはて、大路を往來の人さへも、殘る隈なく見えけるが、向ふの方より尼と覺しく、墨の衣を引まとひ、同じ打扮の幼きは弟子にやあらん、包みを負せ、門を過るを、光氏は、何心な

○苅萱　もと御殿にて晝顏に仕へた桔梗が、蜻蛉の後室の情にて尼となれるもの。（二六九頁本文參照

○うち敷　布帛で作つた敷物で、佛に供するものの下に敷く物。机掛の類。

く見給へば、絶て久しき※苅萱なり。「何處へ行いて歸るやらん。那呼とめよ。ト宜へば、黄昏は二階より手を打叩き、小手招き。此方の尼は振返り、さも心えぬ顏色にて、近々と歩みより。夫と認めて大きに驚き。座敷へ通れば。光氏は黄昏つれて二階をおり、「珍しや苅萱尼。是へ〳〵。ト宜へば、畏れ多げににじり寄り、「思ひ懸ない若君さま。大事の御身にありながら。此處邊に輕々しい。ト言ひかゝるを打消して、「予よりは其方も昨夕から泊がけ。面白い夢でも見たか。ト宜ふ顏を打まもり、「此頃から二葉樣は、御病氣にいらせられるを、貴君樣には御存じなく、毎夜々々のお忍び歩き。二葉の上は悋氣深い。年上の女房を持つものでは無などと、お戯れにも仰せらるれど。人の譏のお耳に入れば、お諫も遊ばす筈。二葉樣のが皆お道理。私しを召れまして一昨日からお加持を上げ、お心よう成た故、今朝お暇を下されて。只今庵へ歸る處。※うち敷に縫直せと、美しいお裲襠を、二葉樣に戴いて。あの弟子の小比丘尼に包んで負せて參りました。歸りには乘て行けと、駕籠迄もお心ぞへ。有難い事乍ら、賤う育つた私は歩く方が却て勝手と、御辭退申して弟子と二人。私しは御所樣のお指揮で、彼方へは近頃から上りまするか。夫は〳〵お柔順、難のないお性質。夫をお嫌ひ遊ばして。ト涙まじりに言ひければ。黄昏は氣の毒の、立も立れず手をもぢ〳〵。光氏打笑ひ、「加持祈禱に偶ゆく。汝等に心の底を打明さう道理はない。陽計りはうつく敷、胸に炎の絶ざる性。此曉も枕上に、怪しき女の現

れて、我を捨おき素性も知れぬ、女と語らひ給ふこそ、恨めしけれ。と裾をはたと睨むと思えしが、身は冷汗にしとゝ濡れ、夢覺めて後熟〻思ふに、是も二葉が一念なるべし。あら顏見るも恐ろしけれど、病氣と聞て其儘に、打捨おかんも本意ならず。いで赤松へ赴かん。ト帶しめ直し立上れば、荷萱は不審顏、「徒にお供も見えぬ様子。」「否〻隣の惟吉が所へ駕もまたせて置いた。黄昏さらば此頃に。」ト立出で給へば、障子の陰、様子を立聞く母凌晨、立出て手をつかへ、「せめて娘が不束な手前で薄茶一服。」ト言つゝ熟〻荷萱の、顏を眺めて打驚き、「お前はたしか桔梗様。」ト思ひ懸なき昔の名を言かけられて、此方も吃驚「然云お前は凌晨様。」「まづまづ思ひがけない。」ト二人手に手を取交し、涙に暮るは故こそ有らめと思へど、光氏問ひもせず。夫より直に赤松の、館に到り見給ひしが、二葉の上の病惱は、させる事にもあらざれば、又其所彼所と浮れ歩き、折節毎に愛の宿も、訪音づれ給ひければ、黄昏彌思ひを通はせ、兎角する間に秋にもなりぬ。其程の事は冗長ければ書き漏しつ。此頃六條三筋町に、其名を阿古木と呼びて、最時榮し遊女あり。年は二十を三ツ四ツ越、盛は少し過ぎたれども、今も昔の色香うせず、訪よる客は數多なり。其中に年紀二十許りの侍にて、夜深に來り朝とく歸り、人目を忍ぶ様に見え、其名を人の問ふ時は、只「統」とのみ呼ぶべしと、明々地に名乘ねば、統の殿〳〵と、廓にて呼慣らはし、黄金を多くまき散し、誇顏なる者ありしが、彌生の末より繁々に、阿古木を揚

○阿古木　光氏の姨渦浪こと寂寞阿闍梨この間に出來たる子で、初め石巻の前齋に嫁し伊勢といふ。「源語」の六條御息所に比してゐる。六條三筋町は前出（二八五頁）。

○連理　男女の契の深きに譬ふる語。比翼も同じ。

○浦に引くてふ網ならねど　「古今和歌六帖」に「逢ふことを阿漕の島に引く網の度重ならば人も知りなん」。

○引船　「引舟といふは太夫につきて行くものなり。太夫は大船に表し、繋げる舟のこゝちにて、引船の名あり。これ客のつかひものなり。客附の取捌き皆此引舟の役なり」と「[illegible]千軒」に。上方にての名稱。江戸の新造の如きもの。

○忘草　「萱草（くわんざう）」の古名。之を食すると人は憂ひを忘れると言ふ。

屋へ招きしが、如何なる事か、此客には睦しく詞も交さず、強顔のみ款待ければ、此方は更にとけ難き、阿古木が樣に思ひ亂れ、心を盡して通ひつゝ、いつも比翼に比へたる、莚の上には臥乍ら、連理と契りは交しもやらず、只一人のみ閨に捨おき、何地行けん、阿古木は見えず、浦に引くてふ網ならねど、度重なれば顯れて、人の諫めも聞入ず、客は猶しも思ひ捨ず、又も彼處に訪音づれ、秋の夜永を只一人、明すと知らず引船と廓言葉に言習はす、若き遊女片貝は、寢惚顏にて走來つ、窓の格子を一ト間あけ、「何の間にやら東も白み、今朝の霧の下た事は。ト私語して、閨の屛風引やりて差覗き、「太夫さんは何處へやら。ト尋ねに立つを、寢ぶたげなる氣色にて客は押とめ、「人めを包む廓通ひ、顏を見せじと夜深になり、人を靜めて來る故に、昔話の化物と、予を太夫は思うてか、來る夜も〳〵寄つかねど、心の解る夫迄は、一人り寢るのも豫ての覺悟、ただ此儘に打捨て。ト立歸らんとなしければ、物のかげより窺ふ阿古木、最疎ましく思へども、せめては門迄送らん。ト出來るを、件の客は手を取て彼處に引すゑ、「今片貝にも言ひし如く、恨とは思はねど、心に染ぬ人なりとも、打解語るは遊女の慣ひ。斯まで難面もてなすには、必ず深き故あるべし。包まず語りて聞せよ。ト言葉に角の顯れければ、阿古木は少し膝を進め、「仁木喜代之助の最愛の娘、村荻と言ふ者に御心をかけ給ひ、娶んとし給へど、其事未だ調はず、此阿古木が村荻殿に面容の似る故、忘草にもならんかと、通ひ給ふと言

ふ事は、とくに知て侍るなり。今にも庭へ村荻を、移し植ゑ給ひなば、取捨られて忘草、枯々になりゆく時、打歎きてもかひ無と、思ば添臥心はなし。トさら〱と言流され、客は返さん詞なく「身に覺えなき虛事を、誰が造りて漏しけん。ト言紛らして歸りしかば、片貝暫し思案なし「眞の名さへも包める人の、身の上を斯迄も知らせ給ひし訝しさよ。ト問へば、阿古木は莞爾と打笑み、「始めて逢ひし其時より、身を驕慢て人を卑め、憎さげなる男ぞと、思へば強顏もてなしても、又懲ずまに通ひくる。一夜の酒の醉紛れ、かの村荻へ送らんとて、あの客が書置し、文を臥房へ落せしを、取上げて密に見れば、「御身に顏の似かよひし、阿古木の許へ通ふにて、深き思ひは知よ」抔と、始め婦妻になさん迚、言ひ入し事迄も、細々と書いてあり。又友人より那客の許へおこせし狀の上に、統清殿へと書きたるにぞ、偖こそかれは山名の三郎、心曲める宗全が子と知よりも猶五月蠅、面を合すも胸惡し。此世におはせぬ母樣の、家來筋なる其上に、惡逆無道の山名の忰、身は遊君になり下れど、いかで枕を交すべき。ト腹立つまゝに聲高く、涙に暮れば、片貝も、深き樣子は知ねども、諸共に打凋れ「其山名と宣は、室町樣の確か御家來、眞に其室町で思出したは、何日ぞやより此揚屋へ通ひ給ふ光樣とかお名を呼びて、御容貌のよい若殿樣。いかなる譯か敵妓を、定てお呼も遊ばさず。偶お呼なされても、閨へお入なされる時は、皆歸して只御一人、酒も飲まずに多くの人を集めて、己が樣々の物語をお聞

○宗全　俗名山名持豐、室町時代の武將で、性兇暴、嘉吉の亂に赤松氏を敗つて家を再興す。後、將軍義尚を奉じ畠山義就を援けて同政長を破り、遂に應仁の大亂を起したが、その半にして卒す。

○清水詣　京都松原通清水坂にある清水寺に參詣すること。清水寺は法相宗の寺で、西國三十三所第十六番の札所、所謂清水の舞臺と稱する堂がある。

○禿の裾の露けゞに　庭を行き來する禿などの裾も露つぽく。

なさるがお慰みだやと被仰る由。彼方もたしか室町の、所緣のお方といふ取沙汰。あなたはお逢遊ばしてか。ト問はれて阿古木は吐息をつき、「明々地にまだお目に、懸し事はなけれども、※清水詣の下向道、五條の邊りで見初まゐらせ、妾は年も長過て、似合しからず思へども、其面影が目の前に、今も顯然現にも、夢にも更に忘れず。ト涙ぐむ顏、片貝は差覗いて、聲を密め、「然云ふ噂を聞いた故、今の樣に申たは、お心をひき見るため。僥倖に光樣は、隣座敷に只お一人。くよ〳〵思食さうより、丁度好間ぢや、サア早う。ト進められて胸轟き、衣桁の衣を引下し、寐亂れ姿取つくろひ、樣子を窺ひ居たりけり。

光氏は只一人、此方の緣に肘枕、廓は狹き處なれど、有繋揚屋は夫にも似ず、樹立前栽ののどかに住なし、※禿の裾の露けゞに、庭に咲たつ秋草の、花に混れる其樣は、※菱川が繪にか〻ま欲と、打眺めたりしが、隣座敷の物語り、村荻と言つる名の、ふと耳に留りしより、障子へ近く身をよせて、ありし事ども聞終り、山名親子を亡母の、家來筋と打嘆し、遊君の素性をも、問まほしきのみならず、室町の所緣ぞと、予を言ひしも心にく〻思せど、言寄便もなく「手水手水ト呼給へど、答る者の無りしを、好僥倖と片貝が、盥注湯子をまゐらすれば、阿古木は最ど含羞げに、手拭とつて差出すを、光氏熟々見給ふに、折に合たる七草を、縫ものしたる袷を着なし、締扱の帶鮮かに、引ゆひたる腰つきは、爽かに媚いたる。かの手拭に朝顏を染たりければ、「(朝顏や折で過うき離かな)。「如何すべき。ト

○菱川　浮世繪師菱川師宣及其の畫系のもの。

○朝顔や折で過うき云々　『源氏物語』夕顔の卷に「霧のいと深きあした、いたくそゞのかされ給ひて、ねぶたげなる氣色に、うち嘆きつゝ出給ふを、中將のおもとみ格子一間あげて、見奉り送り給へとおぼしく、御几帳引きやりたれば、御ぐしもたげて見出し給へり。前栽の色々亂れたるを、過がてに休らひ給へるさま、げに類ひなし。廊のかたへおはするに、中將の君御供に參る。紫苑色の、折に合ひたる、薄物のも、鮮やかに引きゆひたる腰つき、たをやかになまめきたり。見かへり給ひて、隅の間の勾欄に、暫し引き据へ給へり。うち解けたらぬもてなし、髮のさがりは、めざましくもと見給ふ。

さく花にうつるてふ名はつゝめども折らで過うき今朝の朝顔、いかゞすべきとて、手をとらへ給へれば、いと馴れて疾く

朝霧のはれまも待たぬけしきにて花に心をとめぬとぞ見る、と、おほやけごとにぞ聞えなす。をかしげなる侍童の姿好ましう、ことさらめきたる、指貫の裾、露けゞに、花の中にまじりて、朝顔折りて參る程など、繪に書かまほしげなり」。

手をとれば、阿古木も馴て口早く、（朝霧の晴間をまてよ花を見ば）。夜も明はなれければ、御迎へに惟吉が馬を奉つり、其日は歸らせたまひけり。

○朧月夜の内侍　源氏物語湖月抄系圖によれば、南殿の花の宴に、御遊はてゝ淵醉の後、源氏ノ中將醉のまぎれに、弘徽殿のほそ殿にたゝずみ給へるに、三の戸あきたるより朧月夜に似る物ぞなきとて歩み來る人を、朧氣ならぬ契とぞ思ふとてかき抱きて語らひ聞しぬ。明ぬれば扇をかたみに取換へておき別給ふに、草の原をばとはじとや思ふといひし人也。葵の卷に朱雀院に參りて、みくしげ殿と聞ゆ。榊卷に二月に内侍のかみになり、若菜の卷に尼になる　源氏大將須磨の浦に沈み給しも此人故也。二條の内侍のかみともいふとある。

○葵上　本書に於いて葵の上といふのが此の人に當る。葵上は桐壺の帝の妹君を母とし、左大臣を父に持つ。源氏十二歳の折、葵上十六歳にして婚を結ぶ。後夕霧の大將を生み程なく死す。

○末摘花　「源氏物語」末摘花の卷に出づ。常陸の太守の宮の姫君で、父宮に死別して心細く暮してゐ給ふ。源氏十七歳の朧月夜の頃、此の姫の琴の音を聞き、八月二十日始めて見參する。本書に稲舟と言ふのがこれに當る。

○六條の御息所　本書では六條三筋町の遊女阿古木に比す。「源氏物語」夕顔の卷では、もと前坊の北の方であつたが、前坊かくれ給うて後、源氏が通つたのである。源氏十六歳の頃で、夏に此の六條の御息所に通ふ次でに大貳の乳母の違例を問ひ、夕顔の宿を見つけるのである。この御息所、後に秋好中宮の母となる。

偐紫田舎源氏第五編序

源氏物語に出る人、四百九十餘人ありとぞ。原來はかなき繪草紙に、斯くまで多き人數を、漏さず編んは最難く、用なきは悉略つ。しかのみならず二役三役を、一人で勤むる事多し。先づ義教は一院と先帝との事を兼ね、蒜喰指くひ朧月夜の内侍を一人の事となす。此類あまたあり。又葵上、末摘花、六條の御息所にたとへたる三人を、源氏に比したる光氏の、從父兄弟につくるの類は、予一時の戲れにて、源氏の系圖と大きに異なり。さればとて今新に系圖をつくるも最もの憂く、よ

○一文人形　土偶にて一個が錢一文の價のもの。

し作りしとて視る人なし。昔ある淨瑠璃作者、一文人形といふ物にて、手摺へかけての木偶數を、工風なししを思ひ出し、机の上を假舞臺。彼土人形を系圖のかはりに、並べたてしは三人四人、從父弟の混雜に、倦じ果たる目安にて、こゝへ寫し出しゝは。學者の眞似を更になさざる。樂屋の體をあらはすにて、嗚呼三文が智惠もなき、一文系圖と是を謂はん歟。

文政十四年辛卯春發販

柳亭種彥誌

○折しも八月十五夜にて 「源氏物語」夕顔の巻に「八月十五夜、隈なき月影ひま多かる板屋殘りなく漏り來て、見ならひ給はぬ住居のさまも珍らしきに云々」。又同じ巻に「程なき庭に、されたる呉竹、前栽の露は、なをかかる所も同じごときらめきたり。虫の聲々亂りがはしく、壁の中の蟋蟀だに、間遠に聞ならひ給へる御耳に、さしあてたるやうに鳴き亂るゝを、中々さまかへて思さるゝも云々」とある。

○摺箔 布帛に、金や銀の箔を摺りつけて模様にしたもの。

○よりてこそ夫かとも見め烏瓜 「よりてこそそれかとも見めたそがれにほの〴〵見つる花の夕顔」（「源氏物語」夕顔）の歌のもじり。

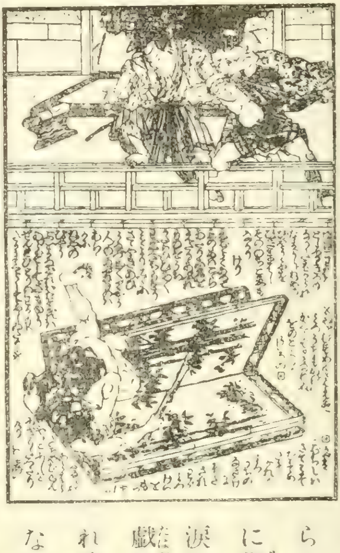
偐紫田舎源氏第五編

白く哀れに咲たりし垣根の花を、光氏は忘れ難くて、五條の家に、又宿りしが、黄昏は、物思はしき氣色にて、差俯きてしか〴〵に、物も言えず、目の中に涙を含み居たりけり。屢通ひし上なれば、最々無遠慮語らひしが、今更彼が款待を、光氏不審に思へども、打出ても問ひやらず。凌晨は常に變らず、愛敬づきて物打いひ、娘に臥房をしつらはせ、其傍らの燈火にて、己が寐衣の給衣、つゞれを刺てぞ居たりける。折しも八月十五夜にて、隈なき月は、疎なる板屋の透に影もれて、常には遠く聞給ひし、壁のなかなる蟋蟀も、枕の邊りに喧しく、寢られぬ儘に光氏はふつと彼處を打見やり「凌晨が側にある、其帷子の解わけは、始めて是へ宿りし時、板戸に張てありしならん。」ト問給へば、打笑ひ、「私も若い時は、大内方に輕い奉公。其時分の是でも晴衣。帷子も諸共に、年がよつて片袖は、破れて仕舞て小夜衣の、裏にやせんの心あて、娘に張らせて置ました。」ト何心なく答ふれば、光氏は起出て、「檜扇の大形を、摺箔したる昔帷子。破れてしまうた片袖は、是でおらう。」ト懐中より取出して投げやれば、凌晨は訝しげに、取上げて熟々見、「眞に是に違はない。」檜扇の模様の上に、何やら書いてト火影にすかし、「よりて社夫

○金の御嶽　金峰山である、古歌に「朝ぼらけよひきの河上を今朝みれば金のみたけに雪降りにけり」といふのがある。
○彌勒講　彌勒は菩薩の號、南天竺の波羅門の家に生れ徳が高かつた。佛に先だつて入滅し、後世兜率天の内院に生じ、五十六億七千萬年を經て、人間に下生し、一切の人天を敎化するといふ。講は佛敎講義の會である。
○南無當來の導師　彌勒菩薩を過去釋迦、現在觀音に對して當來（未來）彌勒となす。導師は菩薩の通稱。
○彌勒の世　釋尊の入滅後五十六億七千萬年を經て、彌勒が人間に下生する、その世をいふ。

かとも見め烏瓜）ト打吟じつゝ、はつと計り、打愕きしが、思ひ直し、さあらぬ體に笑ひに紛らし、「嚢に破れて仕舞た袖が、あらう筈はなけれども、此の戴いた似たきれを、縫合せて置いたなら、時代物の帷子と、金だして買ふ人もあらう。ヲヽ其金で思出した。金の御嶽の彌勒講、今宵は行かねばならぬ約束。夜半には戻ります。寛とお寢なされませ。南無當來の導師」トぞ拜み乍らに出でてゆく。娘は母の後影、見送り乍らはらはらと、涙おとせば、光氏は、やをら近く差寄て、「今淩晨が唱へしは、大和の國金峯山に、いますといふ佛の御名。某と御身の中は、此世計りの事には非ず、未來をかけて見捨はせじ、彌勒の世まで契るべし。斯迄人を思ひしむ事は今迄なかりしが、能々深き緣ならん。人目を憚り隔おく、其夜はいねても眠られず。今宵は和女を誘ひて、人しれず此家を立退き、心安き處にて、長閑に二人暮さんと、豫て準備もなし置きたり。何をか怨みて其涙」ト尋ねたまへば、黄昏は、漸に顔をあげ、「其名を明させ給はぬ故、御歸るさに人を添へ、御在家を見極んと思へど、君は其處彼處と路を紛らし給ふ故、夫と知らじと思せども、人の樣子手搜りにも、尋常ならぬお方とは、とくに猜せし其上に、私は幼い時なれば、つゆ見知ねど、苅萱は、もと母上の親類の人、那こそ光氏樣なりと、語聞せ給ひし由、此頃私へ母樣の、被仰らぬ其前は、隣で問うても惟吉へ、口がためして置給へば、よもや貴方を室町の、若君樣とは思ひもかけず、聞いた時の勿體なさ、斯る伏屋へ折毎に、訪音づれて給

はるは、疎ならぬ御情と思へば、御身が尚大切、親の悪事を明々地に告げんは道にあ



らねども、君の御名の、母上に漏れて此家に御住ては、物恐ろしき事のあり。トなほも涙にくれければ、光氏實にもと微笑まれ、打戯れて言ひけるは「予は年ふる狐なり、誑られ給へかし。ト閨の屏風を引廻し、其後聲もなかりけり。

暫くあつて凌晨は、此處邊りに名をえたる無頼漢を打語らひ、密々わが家へ立戻り、耳より耳に密語あひ、點頭々々兩人の無頼漢は荒らかに、寢所の屏風をかなぐれば、黄昏はあらずして、さも悠然と一人の若者高枕して臥居たり。「ヤア娘も見えず、光氏も影を隠して、見馴ぬ男。フウ後方の壁を毀ちしは、さ

てこそ娘黄昏が光氏の情にほだされ、わが密計を漏せしならめ。あら腹立や無念や。ト拳を握り立たりけり。無頼漢も興を覺し、「生捕て賞譽の金と採だして來た力瘤、をさめる思

○赤松太郎高直　赤松左衛門正則の一子にて、二葉の上の兄。

案は、這奴めをしめあげて。光氏の落行先を白狀させん。斯る騷ぎに高鼾。沈着顔をはり曲ん。ト打つてかゝれば、勃然と起き、身をかはして筋斗をうたせ。二人りを遙に投退て、つと立上りて聲勵ませ、ニヤア凌晨とやらん確乎に聞け、我こそ足利恩顧の侍。赤松太郎高直なれ。光氏君が輕々敷、こゝらへ一人御在べきか。家臣の面々人知れず。家を圍んで宿直の番、心え難き汝の體。詮義をなせとの仰をうけ、多勢を以て遠卷したれば、迯隱れん道はなし。其上娘黃昏は、人質として、光氏君誘ひて出給へば、所詮かなはぬ其身の素性。包まず語れ。ト言ひまに、投附られたる惡者輩、又起上つて挑脊く。打放さんは易けれど。夫も無益と差込む手さき、高直とつて捻伏捻伏、膝にひつしき動かせず。凌晨怒り面に顯はれ、「今戻りくる路すがら。顏を隱せし二人り連、合點ゆかずと思ひしかど、折しも月の雲隱れ、夫と見とめず打過ぎしが、彼こそ娘と光氏ならめ、田圃づたひの一筋路、落行先は野中の古寺。夫よく\ト私語ち、納戸の内へ駈入て、一つの包を小脇に抱へ、宙を飛でぞ走出ける。

光氏は凌晨が家に在らぬを僥倖と、寢所の後方の壁を毀ち、立去らんとなしけるが、身はいたう窶したれど、黃金造りの刀劍、月の光に晃めきて、人めにや懸らんと、軒の簾を引下し、手早く是を身に纏ひ、松の梢を踏しめ\く、最輕らかに黃昏を、抱き下して、手に手をとり、足に任せて行たりしが、向の方より凌晨が獰惡き男を誘ひ、歸くるを早くも

○同行二人　巡禮者は觀世音菩薩と二人で歩くといふ意で笠に同行二人と書くのであるが、こゝでは光氏、黄昏兩人のことに假りたのである。

見とめ、折しも月は村雲に影薄暗きを僥倖と、傍邊に忍びてやり過し、猶も人無き野中の細道、芒萱原押分々々、爰は何處と白妙の、衣擣らん砧の聲、微に聞えて雁も、遠く雲井に鳴交し、風少しうち吹たるに、月皎々と照乍ら、村雨さつと降出れば、路の傍に安置せし、地藏菩薩のめしたる笠を、是も奇縁と、光氏は押取て打被ぎ、「是れ此笠に二世安樂、※同行二人。と書いてあり。此世のみかは後の世も、二人り樂しく暮さなん。心細くな思しそ。」ト力を添へつゝ、宣ども、斯る徒歩を光氏は、つひに習はせ給はねば、如何はせんと心迷ひ、黄昏は就中て越方のこと行末を、思ひ續けて降來る、雨にも勝る袖の露、絞り兼つゝイめり。光氏は向ふの方、ちらめく灯光に目を留め、「ヲヽ、那こそは某の院と聞えし大寺なり。予と親しき住持の僧は、既に果て住者なく、荒果しと聞つるが、なほ預りの法師はあらん、一先づ今宵は彼處へ宿り、明なば嵯峨へ伴ふべし。」ト彼淩晨が推量に違はず、他に路なければ二人り彼處に辿りつき、荒たる門の忍草、露けき庭を分け入りて、黄金造りの二タ腰は、蒲の簾に押くるみ、爰を守れる者やあると、呼出て宣ふやう、「某は室町へ出入をなす町人なるが、負債を請れ、姉を誘ひ、今宵家を出たるが、遷化し給ふ住僧に親しかりしを思ひいで、一夜の宿を乞はんため、爰へ尋ねて來れり。」ト詞を飾り宣へど、今此寺を預りもつ僧は、先年住持と共に、室町の御所に出、よく光氏を見知たれば、飛退りて敬ひまゐらせ、思ひ懸ざる御光來、座敷へ請じ奉つらんが、屋根も疎になりたれ

ば、過刻の村雨の、なほ強くや降出んと、疊を殘らず上置たり。さりながら雨もやみ、最早降るべき體ならねば、御座を構ふる夫迄は、暫し是にて待たせ給へと、本堂の傍らなる小暗き處へ誘ひて、其身は急ぎ立去ぬ。黄昏は心弱く、物おぢをなす性なれば、あら恐ろしの處やと、光氏につと寄添て、「あれ誰やらん足音をひし〳〵と踏鳴し、後方のかたより來なり。ト物も思えず戰々きをる。光氏は打笑ひ、「夫ぞ心の迷ひなる。庫裏の方こそ人は住め。爰へは誰か來たるべき。予に確と寄添るよ。さて御身に問ふべきは、斯迄無隔意かたらひ乍ら、「今迄夫と素性を明さず。父は何とか言たる。ト問給へば、吐息をつき、「宿も定めぬあまの子の、名乘出んも恥かし。ト仄に言ひて猶屢々、後面の方を見返るにぞ、光氏立て雨戸を開き、「暗きを凄く思ひなば、此方へ來よト諸共に、端の方へ出給へば、月皎々と照まさり、庭の草木は物古て、見處もなく生茂り、池も水草にうづもれて、垣根は嵐に倒れふし、只遙々と秋の野面、いと疎ましき處ぞと、立切障子の透間もる、風に燈火屢またゝき、屏風の破れに閃く紙は、尾花ならねど何とやらん、我を招く心地して、最しんしんたる折に、不思議や影の如くに※一人の女、忽然として姿を現し、光氏をきつと見やり、「君が假寐の五條の夢、其折も言ひつる如く、妾を捨おき、素性もしれぬ、女を誘ひ給ふこそ、恨めしけれ。ト言聲は、耳に殘りて消失ぬ。※昔々の物語に、斯るたぐひは聞きたれど、目の前にみる事は、いと珍かに怪しくて、黄昏はいかにぞと、見返り給へば、傍ら

○一人の女、忽然として姿を現し云々　「源氏物語」夕顔に宵過ぐるほどに、少し寐入り給へるに、御枕がみに、いとをかしげなる女ゐて、をのがいとめでたしと見奉るをば尋ねも思ほさで、かく異なる事なき人をゐておはして、時めかし給ふこそいと目覺しくつらけれとて、此の御傍の人をかき起さんとすと見給ふ。ものに襲はるゝ心地して、驚き給へれば、火も消えにけり。うたてと思さるれば、太刀を引拔きて打置給ひて右近を起し給ふ。これも怖しと思ひたるさまにて參り寄れり。渡殿なるとのゐ人起して、紙燭さして參れと言へと宣へば、いかでかまからん、暗うてといへば、あな若々しと打笑ひ給ひて、手を叩き給へば、山彦の答ふる聲いとうとまし。人はえ聞つけで參らぬに、此の女君いみじくわなゝき惑ひて、如何さまにせんと思へり。汗もしとゞになりて、われかの氣色なり」。又、同條に「歸り入りて探り給へは、女君はさながら伏して、右近は傍にうつぶし臥したり。こはなぞ、あな物狂おしの物をぢや。荒れたる所は、狐なぞやうのもの、人おびやかさんとて、け恐しう思はするならん。麿あればさやうの物には威されじとて引起し給ふ。いとうたて亂れ心地の惡しう侍

に俯しに臥ゐたり。何とかしけんと心騷ぎ、かき起さんと仕給へば、柔々として息もせず、さては今の怪しき姿、彼が目にも見えたる故、氣を失ひしと覺えたり。是は何とせん何とせんと、心惑て立つ居つ、軒に懸たる燈籠の、火も消えたれば黒白も知れず、「誰かある燈火もて。ト手を叩き給へども、木精の答ふるばかりなれば、障子雨戸を蹴開きて、月の光を便りにて掻搜り給ひつゝ、位牌に供へし茶を取下し、顏にそゝぎて呼活給へば、黄昏漸心づき、「光氏君にて在すか。誰とは知れど幻しに、見えたる女の姿が方を、きつと尻目に見おこせたる、其顏の恐ろしさ、氣を取失ひしが、其後の事をば更に覺えず。ト戰き伏せば、光氏は力を添ん、と聲をはげませ、「斯る荒たる處には、狐などいふ獸類の、人を劫さんとて、斯るふしぎをなす事あり。某し爰に在なれば、御身に過失あらせはせじ、あの廊下より灯火の、此方へ來るは、預りの僧が迎に來れるなるべし。彼の僧奴を光氏と、能知樣にあるなれば、連添ふ和女がふがひなき體をみせて笑はれな。ト言はげまされ、黄昏は漸に力をえて、胸撫下す其處へ、件の僧は出來り、「何の間にかは火も消て、嘸侘しくこそ思すらめ、座敷の塵を拂はせたれば、此方へ來らせ給ふべし。ト先へ立て案内なし、客殿と思しき處へ、二人りをやがて誘ひたり。今迄ありし處と引かへ、清げには整頓たれど、雨の漏は幾條か、繪襖に染通り、布引の瀧の如く、引手は落て、月影の其處彼處へ映るさまは、かの姨捨の田毎に似たり。僧はとかく取まかなひ、急ぎ御粥菓物など

れはうつぶし臥して侍るなり。お前にこそわりなく思さるらめと言へば、そよなど斯うはとて、かい探り給ふに、息もせず。引動かし給へど、なよ／＼として我にもあらぬさまなれば、いといたく若びたる人にて、物に氣どられぬるなめりとせん方なき心地し給ふ。紙燭もて參れり」

○昔々の物語に云々 「源氏物語河海抄」によれば、むかし寛平法皇京極の御息所と同車して、河原の院に渡りまし／＼た時に、源の融公の靈がたゝりをなして、御息所が氣絶をした。後に淨藏加持をして蘇生されたといふことである。此の處夕顔の卷には「ただ此の枕かみに、夢に見えつる形したる女、面影に見えて、ふと消え失せぬ。昔物語などにこそかゝる事は聞けといと珍らかにむくつけけれど、先づ此の人は如何に成ぬるぞと思はす心騷ぎに、身の上も知られ給はず添ひ伏してやゝと驚かし給へど、たゞ冷えに冷え入りて、息はとく絶えはてにけり。言はん方なし」とある。

○布引の瀧 攝津にあり。

○姨捨の田毎 信濃國にあり。田毎に月影の映れるより田毎の月と云ふ。

を進らせつゝ何れより上らせ給ふや、御履物の見えざるは。ト立騒ぐ樣子なれど、徒跣にて來たりしと、聞えんも恥かしく、言紛らし給へども、僧は彌心をこへ、「先づ御笠は是に置候はん。ト持出仵に、書たる文字を訝しげに打眺め、黄昏が足の泥を、拭ひ捨たる前垂まで、取揃へつゝ、屏風にて、一間處を構ふるにぞ、光氏は額に汗し、「今宵は殊なう勞たり、日の闌てのち起出ん、夫迄は寛々と、先づやすみ候べし。ト漸く僧を退けゝり。

光氏は黄昏を諫こしらへ玉ひつゝ、物荒涼き客殿に、只二人りおはせしが、※既に夜半も過ぎにけん、風荒々しく吹すさび、松の響き木深く聞え、梟の嗄びたる聲に鳴きへ物寥し。折柄又も襖に畫く、御所車を蹴破りて、鬼女の姿ぞ現れける。枯木に等き角を振立、鐵杖とつてはつたと睨み、「※三ツの車に法の道、火宅の門を出ると云ふ、佛の教に引かへて、襖の紙も破れ車、やる方無こそ悲けれ。倶に眺めし花の春、二人り遊びし月の秋、比翼と語らひ連理と契りし、其言の葉も仇となり、摘人もなき早蕨の、もえ出でそめし思ひの露、斯る怨みを晴さんとて、是まで現れ出たるを、いかなる者とか思召す。君の寵愛衰へし、二葉の上の怨靈なり。ト長なる髪を振亂し、つッくと立ば、光氏は呵々と打笑ひ、「遙か昔し某の大臣とやらんを、南殿の鬼の出て劫せし、例は傳へ聞たれとも、心得難き其打扮、身に打着たるは、某が物好したる二葉の上が小袖の模樣に紛れは非じ。さては二葉に意趣ある者、其衣を得たるをさいはひ、鬼女の容に打扮て、此光氏を愕かせ、

○既に夜半も過ぎにけん　『源氏物語』夕顔の巻には「夜中も過ぎにけんかし、風やゝ荒々しう吹たるは。まして松の響き木深く聞えて、氣色ある鳥のから聲に鳴きたるも、梟はこれにやと覺ゆ。打思ひめぐらすに、此方彼方氣遠く疎ましきに、人聲せず、などてかくはかなき宿りは取りつるぞと、くやしさもやらん方なし」と見えてゐる。

○三ツの車……火宅の門を出る　三界の火宅に彷徨して居る衆生を、涅槃の樂土に導くの意である。「三車」は羊車・鹿車・牛車の三つ。『法華經』に長者の宅に火災のあつた時の事、小兒等が遊ぶに夢中でその火宅を出ようとしない。そこで長者は、門外に美麗な三つの車があるから出でよと云ふ。小兒等は之に乘つて漸く火宅を逃れたとある。ト文は謡曲「葵の上」に「三つの車にのりの道、火宅の門をや出でぬらん、夕顔の宿の破車、やる方なきこそ悲しけれ」云々とあるのに由つたのである。

嫉妬深き女ぞと疎ません手段よな。但しは予に怨み有てか、包まず語れト宣へば、怪しの女は頭をふり、さな宜ひそ、月日にそひ、浮れ心の君故に、身は朝顔の日影まつ、有様よりも猶はかなし。昨日の花は今日の夢、悟りえぬのは女の常、浮世はうしの小車の、旋る報いを知やしれ。ト手にもつ鐵杖投捨て、懐劍閃然と拔かざし、光氏目がけ突懸る。黄昏は宵の程怪みを見て其儘に、氣を取失ひし氣色に引かへ、恐げもなく有あふ菅笠、おつ取上て光氏を、後方に圍うて立隔たる。鬼女は彌氣をいらち、「妨げせそ」ト引のくる。折しも彼處の疊を刎のけ、現れ出たる一人の山伏、胎金兩部の峰をわけ、七峰の露を拂し、篠懸を身に打纏ひ、不淨をへだつる忍辱の袈裟を肩に引かけつ、手には赤木の稜高數珠、爪繰り〳〵立寄て。鬼女のよわ腰確乎ととらへ、「婆娑電光の境には恨むべき人もなく、悲しむべき身も非ざるに、悟や悟れト引すゆる、其手を早くも拂ひのけ「否や悟らじ身のうさに、人の恨みの猶添て忘れもやらぬ吾思ひ、晴すは今宵の中にあり。せめては敵の枝葉をさり、父の妄執はらさん。ト又駈よれば「是待て。ト身をも厭はず留むる黄昏。山伏はつつとより、「嫐うちの擧動と、思ひの外に我君に、仇する曲者そこのけ。トじり〳〵とつけ廻し、討せじ討たんと爭ふ三人。光氏は傍らに敢て愕く氣色もなく、只悠然とまもり居る。

山伏は目を配り、彼曲者の隙間を窺ひ、突とつけ入小腕を、取より早く捻伏て、膝に引

○浮世はうしの小車の　憂しさ牛とを掛けた。浮世の中は憂き事が丁度牛の車の廻るやうに輪廻するといふこと。

○胎金兩部　胎藏界、金剛界の兩部。謠曲「葵の上」の「胎金兩部の峯を分け、七峰の露を拂ひし篠懸に」に依る。

○篠懸　山伏の衣の上に肩よりかける麻の着物で、襟頭の所を菊綴の紋をつける。

○忍辱の袈裟　袈裟を着れば能く忍辱を持することが出來る所からいふ。忍辱とは心の内能く安んじて、外所のはづかしめを忍び、害惡を加へられても怨み報いないことである。

○赤木の稜高數珠　赤木は黑木に對し皮を削つた木。稜高數珠とは珠の角だち平たいもので丸數珠に對する。

○婆娑電光の境　此現世卽ち婆娑は短くして電光石火の如きものである。謠曲「葵の上」に「夫婆娑電光の境には恨むべき人もなく、悲しむべき身もあらざるに、いつさてうかれそめつらむ」とあるに依る。

○嫐うち　後妻打。前妻「こなみ」が次妻「うはなり」を嫉んで打擲すること。

○吭のくさり　咽喉の管のつながり。

しき動かせず。「噫悲や。」ト黄昏が寄かと見れば、然も無くて、呀と一聲たま斷つ、前へ撲破と伏たりけり。「又物おちを做つるならん。さる恐ろしき物には非ず、心柔弱な女ぞ。」ト言ひつゝ光氏立寄て、はつと斗に打驚き、「ヤア黄昏は剃刀にて、吭のくさりを掻切て、はや息も絶々なり。」ト宣ふ聲に、此方の山伏、「南無さん大事の人質を。エヽ失錯たり〳〵。」ト手元緩めば、曲者は刎返して鬼女の面、掻捽捨つれば凌晨なり。其儘娘を抱きあげ、「是此樣な恐ろしい謀をするも、何卒して其方に出世をさせたさ故。誰を恨みて此生害、情ない事してくれた。」ト騷ぎ惑へば、光氏は急がはしく進みより、「ヤア凌晨能ツく聞け、容は鬼女に扮しても、紛の足どり備へしは、汝ならんと思ひしかど、爰へ來こそ僥倖なれ、捕へて詮義をなさんずと、躊躇中に、思ひも懸ぬ黄昏が此自殺、しさいも尋ね問ひたけれど、先差當つて室町の寶藏へ忍入り、小烏丸の寶劍を奪取たる盜賊は、必定汝に極つたり。證據と言ふは戸張の帷子、檜扇の大模樣、片袖足ぬを、惟吉の母の病氣を問ひつる折、確乎にみとめて此家へ宿り、詳く事を糺さんと思ふに、僥倖汝のむかへ、娘に馴れて今宵迄心をつけて窺へども、はや寶劍は人に渡し、家にひめ置體ならず。もと何者に頼まれしぞ、語れ聞かん。」ト詰よする。彼の山伏も進み出、「我は仁木喜代之助秋定と言ふ者なり、かの寶藏を守護の役、汝か忍び入たる夜は、目ざすも知らぬ五月闇、挑み爭ふ其中に、月は出ても微暗き、影に透して其姿、女と知れど手拭にて頬を深く隱したれば、面體

○突棒　罪人などを捕へるに用ひる器具。木の柄の先が撞木の如くなつて、鐵の歯を多數に附す。
○板畠　北畠。
○金臺寺の城　河内の國南河内郡金胎寺城。
○青侍　公卿の家に祗候し奉仕する六位の侍。
○糺　京都下加茂糺の森。

をば見極めず、※突棒肩に打かけて、袖をちぎりし斗りにて、遂にやみ〳〵取逃し、證據となるべき片袖は、我君にさゝげ置き、猶遠近を尋ね廻り、其盗賊の家とも知らず、汝が許へ至りし時、戸張なしたる帷子の模様も合ひし御物語。油斷なせそ、と仰せをうけ、斯樣々々と姿をかへ、汝が樣子を窺へば、面體こそは見知ねど、其風俗には記憶あり、夫のみならず我君を殺害なさんず其結構。必ず深き故あらん。不包白狀なすべし。ト主從左右に詰寄れば。凌晨は懷劍をおつ取上て我とわが腹へぐさと突貫き、吻と斗りに吐息をつきゝ斯なる上は何をか包まん。此身の因果物語り、事長けれども聞給へ。妾はもと横雲とて、伊勢の國司※板畠則知の娘なり。父則知謀叛を企て、※金臺寺の城に籠り、義政公に亡され。生殘りしは妾斗り、乳母一人を頼みにて、大内方へ宮仕へ、二十歳斗の年なりけん、滋坂破門と名呼はる※青侍と密通なし、身ごもりたるは此黄昏。重る月に人目だち、詮方なさに大内を二人連立出奔し、※糺の邊に微な住居。夫は破門と言ふ名を包み、泥藏と改めつ、義政公の側室、晝顔殿に奉公する妹の桔梗の緣により、晝顔殿の里使ひ總ての用に雇はれて、後には家來同然に目を懸て給はりしが、此黄昏が二ッの年、夫泥藏妾に向ひ、板畠の家に傳はる稀代の忍びの術ある由、傳へ聞たる事あらば、教へくれよと望みし故、父の遺物と守りと共に、昔し乳人がえさせたる、忍びの術の一卷を、取出して見せければ、夫は是を讀終り、今こそ望みは足りたれと、喜ぶ樣の訝しく、治れる世に無

用の術、何にかせさせ玉ふぞと問ひつる時に聲を密め、義政公の側室數多ある其中に、花桐と聞えしは、世に類なき美人にて、晝顏殿は此女に君の寵を奪はれて、今では有か無かの御身。何卒して花桐を、殺害なして呉よとある。豫ての頼みは聞置乍ら、忍び入べき手段なく、今迄延引したりしが、ふと御身の家板留に忍の術を傳へし事を思ひ出して、此秘書の手に入るからは今宵の中に、必ず事を仕おほせん。ト聞いて彼と打驚き、身貧に迫つて斯迄も淺ましい氣になり給ふか。御身に仇もなき人を殺さうとは何事ぞ。其上に花桐殿は懷胎して居給ふ由、一人りと思へば二人の命、平に思ひ留まつてと、諫めも更に聞き入ず、妹のみかはわれ迄も恩を受たる晝顏殿の仇は即ち此身の仇と、遂に其夜忍び入り、人違へにて晝顏殿を、むざむざと殺害し、妾が前も面目なくてや、家へも戻らず諸國修行、五年程經て妹の桔梗が手に懸て果られしは、今更委く申さず共、光氏君には能御存じ。泥藏殿の最期の折、妻子ありとは言れぬ由、此子を連てはや他へ二度の嫁入もした樣に、思れての故なるかと、後で聞ての怨めしさ。舞の指南を世渡りに、彌後家はたて通せど、身貧に迫つて黄昏が、十五の年の夏の頃、忍び妻にし度と云ふ人の有るのを僥倖に、可愛やあの子が氣にそまぬ人を宿して添臥させ、女子一人擧けしかど、通ひし人の本妻の、悋氣強くて、二人りが中を裂れて後は、初孫も養育兼て人にやり、世の生計も成難き、折柄ある人訪ね來り、汝ふしぎの忍の術を傳へ受たる由をきけり。室町へ忍び入り、

○打敷　布巾にて作つた敷物。佛に供するものゝ臺に敷く物。

小烏丸の短刀を奪ひ取てえさせなば、褒美に是をとらせんと、目先へ黃金を突つけられ、アヽ此金だにあるならば、娘が望みの衣裳も調へ、今迄辛苦をさせたる代り、氣にそむ男をもたせんと、子の可愛さに眼くらみ、先年夫泥藏を諫めたる身が遂に又、惡に染みつゝ寶劍を、奪ひ取て直に渡し、五條の家を造りかへ、親子の者が身のまはり、肌を包も皆其金。いつぞや我君惟吉の家に至らせ給ふ道。垣根に花咲烏瓜。手折せ給ふ御姿を、黃昏が思ひ初め、物案じげな有樣を、それと推量したる故、隣の樣子窺ひて、宅へ誘ひ參らせつ、未其折は光氏君といふ事は知らざれど、尋常ならぬ御方なれば、娘が爲にも惡からじと、歡待申す其處へ。是にござる仁木殿。御跡したひ來られしを。はて見た樣なと考ふれば、小烏丸を奪ひし夜、わが片袖をちぎりし人、我は顏を包みし故、其方は見知給はねども微に照す月光に、此方はよく覺えあり、其座に在も何とやら、物恐しき心地して酒に假託立出でつ、其次の朝、黃昏に呼入させ給ひたる尼ごぜの顏打見れば、絕て久しき夫の妹、桔梗殿か凌晨かと、君の歸らせ給ひし後、昔の事ども言出し、互ひに嘆き悲みしが、其時始めて桔梗より君の御事委く聞、また此小袖は打敷にと、二葉の上より給はりしが、運にかなひて黃昏が、世に出る事も有ならば、晴着にせよと其儘に妾にとらせて歸りしぞや、其後當月上旬、小烏丸を奪はせし彼者密に我家へ來り、汝が娘黃昏が許へ光氏通ふ由、彼は未だ若年ながら、聰明叡智の性にて、我大望の妨げなり、密に殺害なすならば、

先に倍して褒美を與せん。此事承引なさゞる時は、多勢を以て光氏始め、汝ら親子も討取らんと、言捨て歸りしかば、熟〻思ふに黄昏は、君の御母花桐樣を殺害なさんと謀だる泥藏の娘なり、其事成就はせざれども、若桔梗より聞き給はゞ、御添臥は叶まじ、然れば未の遂ざる緣。君は我父則知を打亡し給ひたる義政公の公達なり。妾が爲にも當の敵、討て本意を達せし上、彼人より金をえて、娘は他へ嫁入さんと、其事頻に謀だる樣子を娘黄昏より告奉つりし者なるべし、其上今宵帷子の袖に書て見せ給し、※君が發句の烏瓜。小烏丸を奪ひし事、はや顯れしと心に愕き、いつぞや桔梗へ御夢の御物語有し時、二葉の上は嫉妬深しと、宣ひしを思出、彼御方の小袖を打掛、斯の如の姿に打扮、怪み給ふ隙を窺ひ、討奉つらん心なりしが、娘が自害に我慢の角も折て、はかなき此生害、樣子は斯の次第なり。ト重傷に屈せず物語る。娘は苦き息を吐ご、然いふ深い若君のお心なりとは努〻知ず、賤い此身に御不便かけ、通ひ給ふと思ふから、日にまし彼方が可愛うなり、母樣の恐しい企を悟て、此寺迄落延たるが宵の程、怪き女に驚かされ、氣を失うての御介抱。又も襖を押破り、現れ出たる鬼女の姿。恐ろし乍も打見れば、※袿の衣は尼上より貰うた覺えの縫模樣、お聲は正しく母樣と、聞き知るからに、若君を討んと爰迄來ませしかと、思へば身もよもあられぬ悲さ。妾が自害をしたならば、お心も折ようかと、豫て用意の剃刀にて、此身を捨たかひもなく、母樣にも其御生害。思へば宵の村雨を凌いだ笠に書いた文字。同行二

○君が發句の烏瓜　「よりてこそそれかとも見め烏瓜」。（既出二九九頁）

○袿　昔の貴婦人の服にて、下着の上へ著る上衣である。三領、五領、七領と重ねて著く、禮裝の時は之に唐衣を著、裳をつける。

○呵責　叱り責むること。せめさいなむこと。
○昔の契　前世の因縁を云ふ。
○智識　智と識とを具へたる僧。道俗に知られた高徳者で、人を佛道に導くもの。
○髮も直さず齒も染ぬ　女は夫を持ては島田髷の髮を勝山に改め、齒を黑く染めたのである。

人は親子して冥途の旅に赴くしらせ。何の甚か二世安樂、鬼女の形は此世から地獄の體相顯はして、未來の呵責も想やられ、妾や悲しい〳〵トよゝと斗りに泣沈めば、光氏も目を屢瞬き「いかなる昔の契か有けん、暫しの程に心を盡し、いたはり呉たる和女の深切、何とて憎う思ふべき。母の懺悔に罪もきえ、未來は一つ蓮に生れん。半座を分けて待てゐよ。ト仰せに黄昏莞爾と打笑「其お言葉が智識の引導。嬉しう成佛致します。トいふ息もはや絶々なり。光氏重ねて凌晨に打對ひて言ひけるは「今汝が言つる如く、我苅萱を呼入し其の時、桔梗と昔の名を呼び、打驚いたる和女の樣、訝しくみえたる故、其後に苅萱を招きて樣子を尋んと、思ひしかども「其昔予を討と企たれば。苅萱迚も鳥滸の者で、もし寶劍の詮義の爲通ふなんどと言ふ事の、漏もやせんと其儘に打捨置ば、泥眞の妻子なりとは知ざりし。汝が父の滅亡は、道に背きし合戰を起せし故の自業自得。予を恨まん樣はなけれど、女心に敵の血統とねらひしも、又道理なり。殊に生害なしたれば、此方に恨みは更々殘らず。娘は殊更仔細をしらず。予に只管心を盡し、思ひ迫つて此自害、不便と言ふも餘りあり。せめては彼が産みたる子を、予養ひて生立ん。今は何處の家にかある。ト問せ給へば黄昏が「アヽ母樣の由ない事、君に聞えて給はりし。髮も直さず齒も染ぬ、私に何の子があらう。必ず言て給はるな。ト臨終の際迄身を耻おて氣を揉あせれば、逆る鮮血にむせて伏轉び、其後物も言ひやらず。母は漸々膝行より、娘の手をとり涙にくれ「妾た

婦は君の仇、其子は遂に命をかけ君と契るも宿世の業、果は童子の口號になりなん事の恥かしや。今一度こゑを聞せてくれ。ト前後正體なき惑ふ。此時仁木は次へたち、人目なければ光氏は、徐々立より黄昏を抱き上げて見給に、只冷に冷入て息はとくに絶果たり。短かりける契ぞと、袖を顔に押當て、忍び涙にくれ給ふ。折柄仁木喜代之助隱し置たる大小手挾み、形を改め出來れば、光氏は立退てさらぬ體にてお在ます。仁木はきつと手をつかへ「無用の問答あらんより、何とて女に寶劍の行方は問せ給はぬぞ。ト伺ひ申せば、笑はせ給ひ「男優りの丈夫の魂、一旦いはじと誓ひたる其人の名を問うたり共、明々地に答ふべきや。夫こそ却て無益の問答。ヤア凌晨、其心を察せし故、予も問はじ汝もいはじ。只よそ乍ら告知よ。ト呼かけ給へば、手負は微笑み「娘をいたはり孫までの所在を問せ玉ひたる其御心にほだされて、申し度は山々ながら、宣ふ如くに誓をたて、其恩賞の黄金にて、親子が命をつなぎし恩人、其名は明して言難し、是にて知食されよや。トかの富士山を透したる蒲の簾を逆にとり引立るを、光氏は打見やつて小首を傾げ「富士は三國無双の名山、其名山を逆に讀ば、ヲヽ然もあらん〳〵。ト宣ふ間に凌晨も吭掻切て死たりけり。無慘の最期と、光氏は、有合ふ菅の小笠を取上げ、打被せながら背る顔。此方には又黄昏が眠れる如き顔色にて、過し夜すがら睦言に君に添臥す心ぞと、取交したる光氏の肌着は今に纏へども、鮮血に染しむら紅葉、散ば錦も芥川、誘ひ出せし事迄も、思ひ續けて茫然

○錦も芥川　錦も塵芥の如しと云ふ義、芥川は攝津にある地名。

○綠の髮もこぼれ出云々　「源氏物語」夕顔「[?]此の人をえ抱きたまふまじければ、上むしろに押しくくみて、惟光乘せ奉る。いとさゝやかにてうとましげもなく臈たげなり。したたかにしも得せねば、髮はこぼれ出でたるも、目くれ惑ひてあさましう悲しと思せば云々」。

○魚盤　板木を魚の形に彫り造つたもの。寺院に時刻の相圖などに用ひる。

たる心を察して喜代之助、蒲簾にて黄昏が死骸を其儘押くるめば、※綠の髮もこぼれ出、纏

すかしの不二のねや、年も十九かはたち山、不死の藥も甲斐なくて、其峯よりも立登る煙となさんが愍然さ、目もくれ惑ひ淺ましう、暫しイみおはせしが、鉦鼓の聲の耳に入、頭を回らし見給へば、向の板屋の傍らなる。堂に御燈明微にすき、態と聲をば立ずして、念佛するのは預りの法師ならんと呼出し、二人が遺骸懇切に、埋葬べき由宣ふうち、遙に鷄の聲聞ゆ。喜代之助かしこまり、「夜は明方と早なりぬ。歸らせ給へ。ト聞ゆれば、光氏は點頭給ひ、「今宵の中に凌晨を捕へて詮議をなさんず準備、人數は爰を遠卷せり。合圖はあれなる※魚盤の響き。こゝへ彼らを呼集へ、卒歸らん。ト悠々と庭へ下たち、夫々と指揮に、仁木心得て、軒の魚盤を打鳴せば、早入方の月影に、晃き渡る飾馬、赤松音川初めとし、供の大勢群草を押別々々廣庭へ、星の如くに列

なりて、君のお立と觸流せば、光氏馬に閃然と跨り、乗出す道の露けさに、朝霧深く立こめて惑ふ心は※輪廻の紲、手綱かいくり明はなるゝ、程の紛れに嵯峨の館へ、馬を早めて歸りけり。

此日よりして光氏は、※心地惡とて引籠り、人に對面し給はず、漸く九月廿日の程に、全快の由聞えけり。ある夕暮の靜なるに、空の景色も哀れに見え、庭の千草と諸共に、蟲の音迄も鳴かれて、紅葉漸く色づくを、一人見渡し居給へば、竹の中に※鵂といふ鳥の太聲に、鳴音も折から耳に留り、彼古寺にて黄昏が、梟の聲をきゝ、最恐しと思ひたる有樣たんどを思し出、眺めがちに居給ふ處へ、苅萱の尼參れり。側近く招よせ「惟吉が家の者には、凌晨が問つるとも、必ず答ふる事勿れ、と口がためして置たるに、何迚わが名は漏せし。」ト言懲し給ひて後「かの泥藏のわが母を、殺害なさんと企たる其時に黄昏は、三歳なる由凌晨が、臨終の際に物語れり。其頃未だ某は胎内に在しなれば、黄昏今年は十九なるべし。由なき者に彼が母黨せし故に非業の死、最々不便に思ふなり。さて黄昏は女子を擧けし由も其時聞けり。予に密にえさすべし、養ひてとらせん。」ト仰せに、苅萱頭をさげ「ハ冥加なき事ながら、妾とても當夏迄は、凌晨の在所も知ず、年月疎く過ゆきて。此頃四五度行通ひ、一昨年の冬黄昏も女子を平産したりしが、西の京へ預しと、聞たる計りに其在所詳細は知侍らず、親子の者の生害はかゝい寺を預りもつ法師の具に物語れ

○輪廻の紲　輪廻は衆生が無始以來、六道の生死に旋轉して、恰も車輪が廻轉して窮りないやうであるのを言ふ。紲は離れ難い心、情の斷ち難いことをいふ。

○心地惡とて引籠り　『源氏物語』に光君が夕顔に死別して後、病氣に罹着された時の條を見るに「人々何處よりおはしますにか、惱ましげに見えさせ給ふなど言へど、み帳の内に入り給ひて、胸を押さへて思ふにいといみじければ、などて乗添ひて行かざりつらん。生返りたらん時、如何なる心地せん。見捨てて行別れにけりと、つらくや思はんと心惑ひの中にも覺すに御胸せき上ぐる心地し給ふ。御ぐしも痛く身もあつき心地していと苦しく惑はれ給へば、かくはかなくて我も徒に成ぬるなめりと思す。日高くなれど起上り給はねば、人々あやしがりて、御粥などそゝのかし聞ゆれど、苦しくて、いと心細く思さるゝに、内より御使あり」と。

○鵂　大きさ八九寸、頭短く、胸高く尾短く、羽色種々なれども灰色なるを常とする。此の所『源氏物語』夕顔に、夕暮の靜かなるに、空の景色いと哀に、お前の前栽かれがれに蟲の音も鳴きがれて、紅葉やうやう色づく程、繪に書きたるやうに面白きを見渡して

り。それも如何なれば妾が親族は一人りならず二人まで、君に敵對奉つりし罪恐ろしく候。ト恐れ入てこそ蹲踞る。斯る處へ君吉は、御前へ罷出、「喜代之助事姉空衣、私しをも引具して、彌十月朔日頃、本國伊豫へ赴くよし、告來たり候。ト申上れば、打笑み給ひ、「姉空衣に餞別せん。ト挿櫛扇に打交て、わざとがましく曩日持歸り給ひたる袷の衣を取出たまひ、「又村荻は山名の三郎統清へ嫁する由。喜代之助に聞置たり。彼には是をとらすべしト、高やかなる荻を手折せ、狀をつけてぞ賜はりぬ。是村荻はせい高く且は其名に因みてなるべし。君吉、仁木の館へ至り、かの品々を差出せば、村荻ふみを押戴き、繰開く其奥に、(夫としらば灰に告よをぎの風)。吟じ終りて、御返りは、只口早き計りぞと、書き認むるを、君吉は受納めて、又元の嵯峨の御館へ立戻り、さゝげ申せば、光氏は其儘とつて見給ふに、(した荻のくづる思ひや秋の暮)。手は悪げなるを戯ばみ書たり。去し頃の文の違ひを思し出らるゝなるべし。斯てのち村荻は、統清の妻になりぬ。是又操を捨るにあらず。後々に物語るべし。

心よりほかにおかしきを交へひかなさ、かの夕顔の宿りを思出るもはづかし。竹の中に家鳩といふ鳥の、ふつゝかに鳴くを聞き給ひて、かのありし院に、此の鳥の鳴きしを、いと恐ろしと思ひたりしさまの、面影に臈たく思ほし出でらるれば云々」とあるを取入れたものである。

○夫としらば灰に告よをぎの風　此の句、次の「した荻のくづる思ひや秋の暮」の句と共に、「源氏物語」「夕顔」の軒端荻が藏人の少將と贈答した歌を脱化させたものであらう。「源氏物語」の文に「かの片つ方は、藏人の少將をなん通はすと聞き給ふ、あやしや如何に思ふらんと、少將の心の内もいとおしう、又かの人の氣色もゆかしければ、小君して、死にかへり思ふ心は知り給へりやと言ひつかはす。

ほのかにも軒端の荻をむすばずば露のかごとを何にかけまし、高やかなる荻につけて、忍びてと宣へれど、……少將の無き折に見すれば、心憂しと思へど、かく思し出たるも流石にて、御返り、口ときばかりをかごとにて取らす。

ほのめかす風につけても下荻のなかばは霜にむすぼれつゝ、手は惡しげなるを紛はし、ざれはみて書いたるさま品なし。火影に見し顔思し出らる。打解けて向ひ居たる人は、え疎みはつまじき様もしたりしかな。何の心ばせありげもなくさうどき誇りたりしよと思し出るに、憎からず。

第六編梗概

光氏は瘧を病みて、鞍馬寺の麓なる野中の里にある六條三筋町の娼家二タ見屋の別莊に瘧を加持する貴き守を所有する遊女が病氣保養のためにありと聞いて、加持を乞はんとて出かける。此遊女はかねて光氏に懸想してゐた阿古木で、其の貴い守とは、足利の重寶で早く失はれた御製の短冊である。阿古木は之を餌にして光氏と添臥するが、光氏は茨と寢たやうで心が安くない。此あたりに同じ六條の遊女の長の別莊惣屋と云ふのがありて、此に十二ばかりの美しい女の子の、名は紫と呼ぶのがある。花滿中將と假の契をした小玉の娘澤菊と遊佐河原之進國助との間にまうけた女の子である。藤の方の姪に當つてゐる。光氏は之を垣間見て、祖母小玉に懇望し、數多の黄金を取らせて之を京へ伴ひ歸る。

偐紫田舍源氏第七編序

他人の猿似の※猿源氏鰯煮鍋にはあらねど、此卷を書きさして、初より繰かへすに、それかれ似たる事多し。先づ花桐と杉生は、※尾上お初の仕打に似たり。藤の方と光氏の忍逢ふ一條は、※鎗の權三の趣あり。空衣と村荻の閨房の違ひは、※大經師お三茂兵衞に髣髴たり。阿古木が魂の古寺にて、黄昏を驚かすは、近年流行の怪談狂言、※燒酎火より明く無い、源氏を飜して繪草紙とは、湖水に浮むだ月とすつぽん、眞暗になる仕掛の燭臺。闇に礫の七編續き。彼猿源氏が商ひし鰯の異名にゆかりある※若紫の燒直し。嗚呼辨慶にさしすてて、棚守となりてや廢らむ。

天保三年壬辰孟陽

柳亭種彥誌

○猿源氏　浮世草紙『猿源氏色芝居』作者鱗長二、享保三年版「猿源氏のむかし、小鰯うりのいやしき身なれど云々」。

○尾上お初　『加賀見山舊錦繪』の狂言。

○鎗の權三　近松門左衞門の『鑓の權三重帷子』。

○大經師お三茂兵衞　井原西鶴の『好色五人女』、近松の『大經師昔暦』。

○燒酎火　燒酎に火を點じて、どろどろと幽靈の現はす趣向

○若紫の燒直し　「猿源氏色芝居」に「おぼろこといはれ、むらさきとこめされつる、大内ことばのやさしきには云々」とある。

○暁方になりければ　『源氏物語』若紫の巻を引用してある。その文に曰く「暁方に成にければ、法花三昧行ふ堂の懺法の聲、山おろしにつきて聞えくる、いと尊く瀧の音に響き合ひたり。

吹きまよふみ山おろしに夢さめて涙もよほす瀧の音かな

さしぐみに袖ぬらしける山水にすめる心は騒ぎやはする、耳馴れ侍りにけりやと聞え給ふ。明行く空はいといたう霞みて、山の鳥共そこはかとなく囀り合ひたり。名も知らぬ木草の花ども色々に散りまじり、錦を敷けると見ゆるに、鹿のたゝずみ歩りくも珍らしく見給ふに、悩ましさも紛れはてぬ」

○惹屋　第六編　挿絵参照　に出づ。光氏はこゝにて遣手小柱の孫娘紫こそその後見の新造吉の葉の二人を引出して夜明方に立出でたのである。

○五葉の松に結び添へたる玉章　源氏が病の爲に北山の某寺を訪うた若紫の谷の有様を移したものである。阿古木が、その某寺の僧都に當るのである。『源氏』の文は左の如し、

「御迎への人々參りて、怠り給へるよろこび聞え、うちよりも御使あり。僧都世に見えぬさまの御くだもの何くれと、谷の底まで掘出で、いとなみ聞え

偐紫田舎源氏第七編

暁方になりければ、彼方の堂の内ならん、經讀聲のいと尊く、山嵐につきて聞え、瀧の音に響き合ひたり。光氏姿引繕ひ、惹屋を立出つ、遙々と見渡すに、明けゆく空は霞渡り、山の小鳥の囀りあひ、名も知ぬ木草の花ども、種々に散混り、錦を布けるに異らず。遙向ふの山の上に、鹿のたゝずみ歩くなど、珍しく見給ふに、身の惱ましさも紛れ果ぬ。

斯る折柄二タ見屋の阿古木は、片貝を始めとし、新造禿引連て、群々と走り來つ「あれより直にお館へ歸らせ給ふと詐りて、惹屋におはせし由、其お恨みを長々と書續けたる此状を、密に人の見ぬ處で御覧なされて、お返事を。松の小枝に附たるは、浮氣な時雨が濡かけても、操を變ず色變ぬ妾が心」ト五葉の松に、結び添へたる玉章を差出せば、片貝は光氏の傍へより「今を盛の花の蔭、暫は爰で御酒一獻、夫々爰へ」ト言ひければ、準備させたる提重に、谷の底迄尋ねけん、いと珍しき菓物を取添て持運び、爰こそ好けれと。落來る水も風情ありげの瀧のもと、巖に隠れて緑せし苔の上に並居つゝ、盃を廻らす處へ、かの石堂馬之丞、太郎高直さきに進み、御迎の人々參り「不思議の呪ひ受させられ、御病氣の速かに愈らせ給ひし由。ト各自に喜びを聞え上げれば、馬之丞少し御前に進み出「いと

珍しき御遊山、斯樣なお供に是しを召連させ給はぬは、何過失の候やらん。ト恨み顔に言ひけれど、光氏は答もなく、悩める樣にて、傍らなる岩に肘を打凭せ、倚居給へる其姿、實に類ひなく艶麗なり。阿古木は瑠璃の壺めきし高脚盃とかいふ杯を、光氏に進らせて、「思懸なく※優曇華の花まちえたる昨日の逢瀬、再び何日か開かん。ト寄添へば、微笑みて、「山の姿水の流、心とまりて此邊りは、いと立うくは思へども、何處へ行共知らさずして、館をまよひ出たれば、父君斯と聞れんには、覺束なくや思ひ給はん、其事恐れ多ければ、今歸る共、此花の盛過さず音信れん。(※風よりは先に來て見ん山櫻)ト宣ふ風情聲づかひ、目もあやなるに、阿古木は了得留むるにも留め難く、(櫻には目こそ移らね花の顔)ト打泣くを、片貝が人に見せじと、光氏の扇を取て打鳴らし、「人の心と花の露、濡にぞ濡し※びん水の。ト小唄うたうて紛らすにぞ、阿古木も漸心づき、袖に涙を掻拂ひ、持たせ來りし※枕琴、自ら取て光氏が膝の元に押直し、「是を一手遊して、同じくは山の鳥をも驚かし給へかし。ト勸められて額をうち、「快方とは言ひながら、思はぬ事に關係て、熟睡もせず夜を明し、いと耐難き心地なり。ト言ひつゝ強て否まんも憎かるべきとや思ひけん、

給ふ。今年ばかりの誓深う侍て、御送りにもえ参り侍るまじきこと、中々にも思ひ給へらるべきかなど聞え給て、おほみき参り給ふ。……聖御守に、獨鈷奉る見給て僧都聖德太子の百濟より得給へりける、金剛子の數珠の玉の裝束したる、やがてその國より入れたる筥の唐めいたるを、透きたる袋に入れて、五葉の枝につけて、紺瑠璃の壺共に、御薬ども入れて、藤櫻などにつけて、所につけたる御贈物ども捧げ奉り給ふ」。

○優曇華の花まちえたる　優曇華は三千年に一度花が咲く、その時に金輪王が世に現れるといふ。永い間待ちに待つて漸く逢瀬を得たことにたとへてゐる。

○風よりは先に來て見ん　此の句、次の句と共に『源語』(若紫)の和歌を取入れたものである。即ち前註(前頁の「おほみき参り給」の文に次いで「山水に心とまり侍ぬれど、内よりも覺束ながらせ給へるも畏ければなん。今この花の折過ぐさず参り來ん。

宮人に行きてかたらん山櫻かぜよりさきに來ても見るべく、と宣ふ御もてなし聲づかひさへ目もあやなるに

優曇華の花まちえたる心地してみやま櫻に目こそうつらね、と聞え給へば、ほゝゑみて、時ありて、一度開くなるは雖かゝなるものをと宣ふ。聖御かはらけ給はりて

おく山の松のとぼそを稀にあけてまだ見ぬ花のかほを見るかな、と、うち泣きて見奉る」。

○枕琴　短い琴。

○びん水　鬢水。頭髮をなでつけるに用ひる水。

暫が間かき鳴し「いざ歸らんト立上り、阿古木は更なり忍屋の家内の者への送り物、都へ取に遣しければ、高直に心得させ、庭はく男子に至るまで、各自に物をとらせ、立出給ふ背後影、阿古木は倦ず口惜と、涙落して見送りけり。

光氏は先づ室町へ赴き、父義政の前に出で、「鞍馬の寺にいと尊き聖僧のすむ由承まはり、彼處へ密に尋ね行き、彼の加持をうけたる處、瘧の病倏忽に全快いたし候。ト阿古木のことは押包み、此頃よりの物語を聞え給へば、義政は光氏の顔貌衰へたるを打見やり、安からずは思ひながら、心清しくなりしを喜び、「そは有難き事にこそ。大内にも聞えなば、※七高山の阿闍梨にもなるべき者にあんなれ。ト露詐りと知ざれば、尊がりてぞ居給ひける。此時赤松正則も御前に在けるが、光氏の前に手をつき、「悴太郎高直諸共お迎へに参らんと、既に支度は調へたれど、忍びやかの御出駕故、さし控て是にあり。是よりは又珍しく我方に至らせ玉ひ、一ト日二タ日は長閑にやすませらるゝが然るべし。恐れながら。ト我が駕に光氏を乗まゐらせ、其身は高直諸共に乗物の左右につき、室町御所を立出ぬ。光氏は睦ましからぬ、二葉の上の許なれば、然迄心は進まねども、又正則の深切を捨べきにも非ざれば、否もやらず御在けるが、久敷見ぬ間に赤松の館は新に造りかへ、玉の臺に磨き整理ひ、手道具なんどに至るまで、清らかなるをぞ調へたる。二葉の上は又※例の物耻をなす性なれば、部屋の裡に隠れゐて、直に對面し給はず、正則、妻の小毬共々、「早く彼處

○鞍馬　京都府愛宕郡鞍馬村にある山。京都市の北に近く、山腹に牛若丸の傳説で有名な鞍馬寺がある。

○七高山の阿闍梨　比叡山（近江）、比良山（近江）、伊吹山（美濃）、愛宕（山城）、神峯寺（攝津）、金峯山（大和）、葛城山（大和）の七つの山に於て、天下の五穀豊穣を祈ることを勅命をうけたる高僧をいふ。

○例の物耻をなす性　『源氏物語』「若紫」に此の上の事を左の如く云つてゐる。「女君例のはひ隠れて、頓にも出で給はぬを、大臣せちに聞え給ひて、辛うしてわたり給へり。たゞ繪に書きたるものゝ姫君のやうにし据ゑられて、うちみじろき給ふことも難く、麗しうてものしたまへば、思ふ事もうちかすめ、山みちの物語をも聞えんに、言ふ甲斐ありておかしううちいらへ給はゞこそ哀ならめ。世には心も解けず疎く恥かしきものに思ほして、年のかさなるに添へて、御心の隔もまさるを、いと苦しく、思はずに、時々は世の常なる御氣色を見ばや。堪へ難うわづらひ侍しをも、如何とだに問ひ給はぬこそ珍らしからぬ事なれど、猶うらめしうと聞え給ふ。辛うして「問はぬはつらきものにやあらん」と、しり目に見をこせ給へるまみいと恥かしげに、けたか

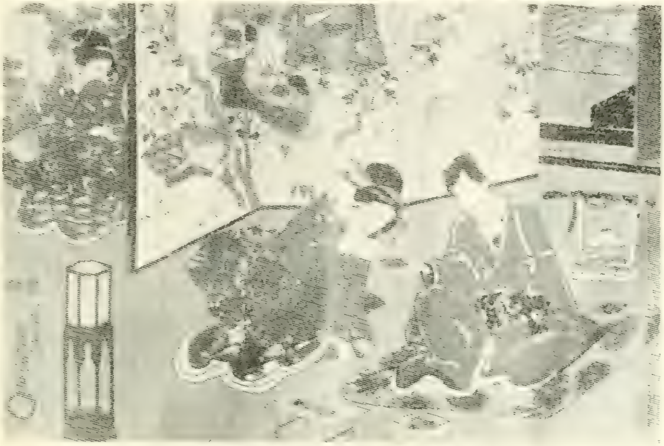
うつくしげなる劍見たり」。

○高麗笛　高麗樂に用ひる横笛。指孔六穴。

へ行給へ、光氏君の御來駕なり。ト勸められて、漸々と其席には列なりながら、褥の上に容を正し、只繪にかきたる女の如く、身瞬もせず笑ひもせず、麗敷のみ款待ければ、光氏心の裡に思ふ。昨日見たりし山路の、物語をなしたりとて、心よくは返答もなすまじ。など年月の重なる程、心の隔のまさるならん。と態と莞爾と打笑ひ、「など折々は打解し樣をも見せて賜はらぬ。予堪難う病ひしを、如何とだにも問ひもせず、其疎々しき擧動は、常のことにて珍しからねど、猶怨しう思ふなれ。ト聞え給へば、二葉の上暫くあつて顔を上げ、「野山の花をかり暮し、妾は如何になりしかと、問せ給ひし事もなし。問はぬは辛き物ぞとは、夫にて思し知り給へ。ト目尻にじつと見やりたる、顔最氣高う美しゝ。光氏は吐息をつき、「アヽ稀々に言出る詞も、夫は角々し。問はぬは辛しと恨むるは、遊君舞子さては又、忍び〳〵に通ふなる女の云へる事にてあり。親と〳〵が許したる夫婦の中には、似合しからず。年頃日頃隔てある御身の心を思ひ直させ、睦しく語らんと、種々心を盡せども、もと予を疎むより出たることは詮方なし。ト座を立上りし其處へ、太郎高直敬々しく、杯をもて出つ、「御病氣の餘波なく癒らせ給ひし御祝ひ、先づ一獻きこしめせ。ト山を尋ね海を求め、珍しき物の限り、御前に列ねければ、是を便りに光氏は、又元の座に直り、暫しが間酒酌交し、先に思はず言過し、しらけし座敷をくろめんと、※高麗笛を取寄させ、元來上手にありければ、いと面白吹けるが、笛を留めて四下を見廻し、「二葉が側で召使ふ琵

○中空　作者種彦自ら「中空は中務の君になぞらへ、末摘花の巻をひきあげてつくれり」と、その挿繪中に斷つてゐる。『源氏物語』末摘花の巻に「中務の君、わざと琵琶は彈けど、頭の君心かけたるを、もて離れて、たゞこのたまさかなる御氣色のなつかしきをば、え背き聞えぬに、おのづから隠れなくて、大宮などもよろしからず思しなりたれば、物思はしくはしたなき心地してすさまじげに寄りふしたり。絶えて見奉らぬ所にかけ離れなんも、流石に心細く思ひ乱れたり」。

琶能く彈ける何とか言ふ女有しが、爰には居らず、如何なせしト問ひければ、太郎高直にじり出で、「夫こそは※中空と申す女に候なれ、呼出し申さん」とて、座を退きしが、程ありて彼中空は出來り、遙末座に手をついて、「御用もや。ト伺へば、「是へ〳〵。ト光氏は膝元へ近く呼び、先づ杯を賜ひければ、はつと計りに中空は、さも嬉げに一つほし、立んとするを引留め、「汝が琵琶を彈きたるを、此如月の上旬、物の陰にて聞きたるが、中々をかしき手つきなり。何ぞ一句語りて聞せよ。予も高麗笛吹合はさん。ト仰せは恐入ながら、辭するも不興と思ひけん、頓て琵琶をもて來り、「お笑ひを催す爲。ト笑を含んで秘曲を盡し、搔鳴して居たりしが、折々毎に光氏を見やる目元の只ならず、媚く姿を居ながれたる腰元どもは早くも見とめ、指さししつゝ打笑へば、光氏は眠たげに佯して立上り、「大儀にありし。明日又聞ん。休め〳〵。ト言ひ捨て、臥房に入らせ給ひけり。



中空は琵琶押やり、辷り出んとなしたる處へ、奥方小毬立出て「中空には問ふ事あり、此方へ來。ト小座敷の、人なき處へ誘ひ行「過刻座敷へ出る時、和女の袖より溢れし章、誰にやるとて書きたるぞ。ト目先へ直と突付られ、中空さつと顔打赤め、返答なければ、小毬は少し聲を荒らげて「親の口より言出ん詞には非ざれど、去年倅高直和女に心を懸たる由、密に告る者のあり。まだ其頃は高直も、一人住にてあるなれば、是僥倖と汝をよび、今宵よりして高直の側近く仕へよと、言聞かせたら喜ばんと、思ひの外に、私しは立願ありて男の肌は一生ふらじと、潔よく言ひたるをはや忘れしか。知つての通り去年の春、青葉琵琶之助の末の妹を高直の嫁に迎へ、夫婦の交情の睦しく、はや妊身て産月に、程近ければ、和女なんどの事は思ひも出すまいが、光氏君と語らひしと、高直が漏聞かば、心よくは思ふまじ。二葉の上は猶の事、主の主たる光氏君を、唆かしたる淫奔者、言譯あらば言てみよ。ト道理を盡して耻しむる。背後の方に思ひも懸ぬ、主人正則始終を聞き、直と寄て件の狀、さら／＼と押開き「焦るゝ心を知食せと、始めて送る此文章。君の御目にふれぬ間に取落せしは、主人の罰、明なば屋敷を追拂はん。ト一間の裡に押込められ、中空悲しさやる方なく、愁ひの事仕出して、君のお顔を餘所ながら、見る事さへもならぬかと、打嘆きてぞ臥たりける。光氏は寐もやらず、夜衣に凭れて居たりしが、二葉の上は顔だに見せず、一人種々思ひ亂れ、遊佐河原之進國助は、醜からざる男ながら、清麗なりと

言ふにもあらぬに、其娘の紫は、叔母藤の方に好も似て、美しうは生れしや。夫も彼も※眞弓の前の面影をや受繼ぎけん。ア、阿古木より何とかして、彼勅筆の短冊を取戻さんと、心の中に深くも案じ入ながら、今朝阿古木より五葉の松に附て送りし狀取出し、繰返し見て小首を傾け、浮たる事と思ひの外、艶書によそへて予への告知、是も故ある事ならんと、懷中に押入つ、枕を取らんとしたりしが、屛風の外に窃足して、枕刀を拔者あり、素破曲者よと寐ぶりたる風情に佯し窺へば、琵琶彈せたる中空なり。何をかすると息をもせず、猶も樣子をみるぞとは、心も附ず中空は、上衣の小袖行燈へ、閃然と打かけ小暗くなし、盗みし刀に袖押卷き、自害せんとしたりしかば、光氏やをら夜衣はねのけ、直と寄て押留れば、此方ははつと打驚き、「御刀を汚すのは、恐れ多き事ながら、御手に懸りし心にて、是で死なせて給はれ。ト言ふまにもぎとり鞘に納め、「死なで叶はぬ事なれば、介錯もしてとらすべし。心を落つけ某に樣子を語れ。いざ聞かん。ト言れて、漸〱涙を止め、四下の聞えを憚りて、すり寄〱聲を潜め、打密語ば、光氏は聞事毎に打笑ひ、「心狹きは女の常と、世の諺にも言ふなれど、餘りに※あど無事にてあり。※父義政の御胤を宿せし女の所緣とあれば、彌もつて聞捨ならず。先々予に任せよ。ト何か密々宣へば、萎れし花に打水の、うつて變りて中空が、嬉しき顏に現れけり。倘此事は八編目に說分るを見給へかし。

※小玉が住居は六條の京極の邊りなり。光氏屢次章を通はせ、紫を嵯峨の館へ呼迎へん

○眞弓の前　足利義教の妹で、花満中將との間に葵の方を生む。而して花満中將と小玉との間に出來た娘が澤菊で、澤菊と遊佐國助との子が紫である。

○あど無き　あどけない。たわいない。

○父義政の御胤を云々　中空の姉は千景の方とて、義政との間に四郎正尚を生む。

○小玉　紫の祖母にて、花満中將との間に紫の母澤菊を生む。

○言の葉　紫のお守役。『源語』にては少納言の乳母に當る。

○卯花腐し　陰曆四五月頃に降る雨。

となしけれ共、小玉が病日に增重り、年のたらはぬ紫を一人は進らせ難しとて、とにもかくにも承引ず。然らばせめて紫の返事なりとも見まく欲しと、惟吉をして言送れど、いろはの假名もはか〴〵敷續けて書きえぬ幼き筆を、見せ申さんも恥かしと、※言の葉よりして言ひおこし、是も言葉に從はねば、光氏もてあぐみ、卯月も中旬になりけるが、此頃阿古木は三筋町に歸り住む由噂に聞き、彼をも其儘捨置ては、彼勅筆の短冊の、かへる期更になかるべしと、一時月のをかしき夜、思ひ立て出たるに、俄に村雲覆ひ重なり、時雨めきて※卯花腐し、打そゝぐも最侘しく、行べき邊りは六條にて、嵯峨よりなれば程遠き心地せられて、乘物の簾を卷て、見給ふに、荒たる家の物古し、木立の暗き處あり。例のお供に離れぬ惟吉、「是こそ小玉が住居なれ。此頃お章をもて參り、寐間まで至り候が、かの小玉甚う弱り、筆さへ取ず、と御返事は言の葉に書せたり。全快すべき體には見えず。」ト聞いて、光氏眉を顰め、「哀れの事や、など其時某しには告ざるぞ。さほどの事と知るならば、とくにも訪ねてとらせんに、是へ態と來りたる體に伴し案内せよ。」ト仰せに、惟吉畏まり、斯と内へ言ひ入るれば、言の葉は驚きて、「小玉樣は此日頃賴み少くなり給へば、君の來たらせ給ひても、御對面は叶ふまじ。さは言ひながら此儘に歸し申も恐れあり、見苦けれど。」ト南の座敷引整へば、光氏は靜やかに打通り、「常に心に絶えねども、幼なしとて紫を送るを厭ひ給ふ故、度々音信なさんのも、いと五月蠅や思はんかと、疎々しく過行て、さほどに

○迎への雲　佛工より紫雲たなびい」聖衆來迎すと云ふ。

○せめては彼が稚なき一聲なりと　『源氏物語』は次の如し。「甲斐無き心地のみし侍を、かのいはけなうもの」給ふ御一聲、いかでかと宣へば、いでやよろづ思ほし知らぬさまに大殿籠り入りてなど聞ゆる折しも、あなたより來る音して、上こそ此の寺にありし源氏の君こそおはしたンなれ。など見給はぬと宣ふを、人々いとかたはらいたしと思ひて、あなかまと聞ゆ。いと見しかば心地の惡しき慰めきと宣ひしかばぞかしと、かしこき事聞き得たりと思して宣ふ。いとおかしと聞給へど、人々の苦しと思ひたれば聞かぬやうにて、まめやかなる御訪らひを聞え置き給ひ歸り給ひぬ。げに言ふかひなのけはひや。さりともいとよう教へてんと思す。又の日もいとまめやかに訪らひ聞え給。例の小さくて

いはけなきたづの一聲聞きしより葦間になづむ舟ぞえならぬ、同じ人にやと、殊更幼く書きなし給へるも、いみじうおかしげなれば、やがて御手本にと人々聞ゆ」。（若紫）

病の重りしとは、努々予は知ざりし。覺束なさよ。ト宣へば、襖を隔てゝ、小玉の聲、「此月の上旬、胸苦しさも打忘れ、嬉しと思ふ間もなく、又打返して枕だに上難き程弱り行き、賴み少くなり侍る。斯て妾が亡後は、今宣ひし幼き人、外に賴まん蔭はなし。其若草の生出る、程を待ちつゝ手に摘て、お側使ひの女子の數に、召加へて給はれかし。お禮は草葉の蔭よりして、寬々其時聞え上げん。迎への雲の　紫　といふ名にも似ず、佛の國にゆく妨げはあの子一人、勿體なくも光氏君、自ら訪せ給ひたる、忝けなさを妾に代り、お禮をあの子が言ふ程なら、心殘りはあるまじ。ト此方へ知する獨語。もとより狹き住居なれば、いと絶々に苦しげなる聲さへ聞えて哀れなり。光氏そゞろに涙を浮め、「何とて未だ幼き人を、斯戀ふるかと、我心を予と不審に思ふなり。弓矢の神を誓にたて、行末長く見捨はせじ。せめては彼が稚なき一聲なりと聞かんには、態ゝ來るかひもあり。何處にゐるぞ。ト言の葉に問はせ給へば、打微笑み、「何日ぞやも鞍馬にて、小玉樣が仰の如く、背丈は延て見え給へど、お年よりは幼きお性、晝の遊びにお草臥、初夜の鐘も聞くや聞かず、前後も知ず御寢なつて、翌朝までお目は覺ませぬ。ト若し光氏に逢はせなば、其儘誘ひ行かんか。ト言躊む折、彼方より人の駈來る足音して、「婆樣よ、鞍馬にて逢奉つりし光氏君、座敷へ來てお在るを、など見給はぬ。ト紫が言ふを、小玉に附添ふ女、はつと驚き袖を引き、目にて知せつ　紫　が言葉を留ても留まらず、「いや光氏君のお顏を見ると、心地惡

きも忘ると、婆様の宣ひし、夫故おしらせ申すのぢや。此頃も言の葉が、貴孃の父上國助様も、お色白にて清麗なれど、光氏様は夫よりも遙に勝た御器量と、褒たは皆も聞いたであらう。あの障子から透見しや。ト賢き事を言ひたりと、我は思へる顔ばせにて、立寄るところを、女輩漸に抱とめ、「然あらば今より光氏君の御子にならせ給ふべし。ト密語かれて、紫は顔打赧めて返答なし。此方の間には光氏がいと可笑とは聞き給へど、言の葉始め人々の苦しと思へる様なれば、聞ぬ様にもてなしつ、「返す〴〵も小玉が病氣、いたはるべし。ト懇切に言の葉へ言置きて、立出ながら、去にても彼らが言ふに違ひなく、いと幼げなる紫が、舉動にはあんなれど、心の儘に敎へなば、生怜悧には勝らんと、心の裡に思ひつゝ、乘物へ乘移り、硯の墨を摺流し、(雛鶴の聲は何處ぞ八重霞)と、殊更幼く書きなして、些やかに引結び、直に彼處へ送りければ、言の葉が受取て、「貴孃のお目にとまる爲め、可愛らしきお結び文、讀よき様に一字づつ。拾ひ書の美しさ。翌から是をお手本に、お手習遊ばしませ。ト紫にこそ渡しけれ。

※藤の方悩み給ふ事ありて、音川の下館に、此頃移り住しかば、義政公の苦慮おほ方ならず、庭に咲たる花なんど使にもたせて、其病氣を訪ひ給ふ事日毎なり。光氏も此體をみて、心ならずは思ふ物から、藤の方に逢んには、折こそ好けれと熟と、晝は館に詠め暮し、暮れば、彼處へ立入て、「藤の方に予を逢せよ、密に語らふ事あり。ト※杉生を彼處此處

○藤の方悩み給ふ事あり　「藤壺の宮、悩み給ふことありてまかで給へり。上の覺束ながり嘆き聞え給ふ御氣色も、いといとおしう見奉りながら、かゝる折だにと心もあくがれ惑ひて、いづくにも〳〵参うで給はず、内にても里にても、晝はつく〴〵と眺め暮して、暮るれば王命婦を責めありき給ふ。如何たばかりけん、いとわりなくて見奉る程さへ、うつゝとは覺えぬぞわびしきや」。(『源氏物語』若紫)

○杉生　もと花桐の侍女にて、後に義政に仕ふ。(既出)

○宗全　山名宗全。（二九四頁參照）

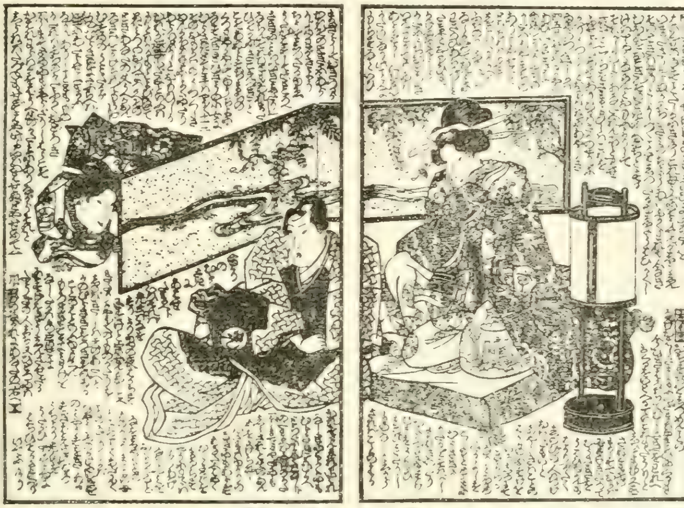
○苅萱　もと晝顔の侍女桔梗。第二六九頁の苅萱の自白の項參照。

せめ歩き給へども、既に去年宗全に見すべき手段にありながら、猥褻しき擧動のありし御身が今更に、彼方へ近付き給ひなば、宜からぬ御名の立もやせんと、更に承引なさゞれば、光氏は心悶え、或夜空も打曇り、月なき頃の暗きを僥倖、庭口の門番を如何にしてか詐僞けん、築山の植込まで漸忍び入たりしが、枝折戸あけて杉生は、お泉水にて鳴たる蛙、聲を止しは誹しと、手燭携へ出來たれば、光氏は其袂をひかへ、「今宵は是非にト言ひけるにぞ、杉生は呆れ果て、「誰が許していつの間に爰迄忍來給ひしぞ。御病氣のお加持の爲、尼苅萱が毎夜々々お側に參つて居まする。目に掛らぬ中少しも早く歸らせ給へ。ト言ふのも聞かず、「何苅萱が來て居とや、夫こそは僥倖なれ。此頃も我夢を占はせたる事のあり。汝が予を疑はゞ、彼を頼みて母上のお目に掛らん、そこ退。ト駈入給ふを留むる杉生、「左様ならば此事を申上げて彼方にも、逢んと仰あつた上、先々お待遊ばせ。ト爭ふ物音聞付て、立出る尼苅萱、「然程に思食す事なら、逢せまして上ませう。杉生殿は御所樣の重き仰せを受られて、藤の方のお介添。若もの事がある時はと、苦慮らるゝも道理ながら、お心正しい光氏君、假令貴郎と御寝なつても、猥の無いのは知てある。若し此事が顯れて、お咎のある其時は、妾が命を差上げます。今宵の事は杉生殿、此苅萱に打任せ、知らぬ振して部屋へ下り憩んでござれ。ト勸られ、杉生はもぢ／＼と、心許なく思へども、强て留めん言葉もなく、思案しつゝも入りければ、光氏は打喜び、「少しも早く。ト急くのを止

ど、宜からぬ事と知ながら、思し亂れし其樣も、いと道理と見ゆる故、命を捨てのお媒妁、人目に懸らぬ其爲に、お身のまはりは言ふにおよばず、お太刀劔も賤妾へお渡しなされて姿を紛し、是斯々ト密語ば、夫こそ心安けれと、下着に帶を引しめて、渡せば苅萱心得て、光氏の羽織袴、かき集めもて先にたち、案内知りし緣傳ひ、光氏は暗闇を辿る辿るも、苅萱に導きせられて漸と、一間に至れば、折よくも藤の方は只一人り憂身を嘆く風情して、机にもたれ居給ひしが、光氏を見るよりも、宛然夢の心地しつゝ、覺悟の上とは言ひながら、彼の宗全に見咎められ、淺ましかりし事なんど思ひ出して、恐ろ敷も、又嬉敷も心地惑ひ、更に言ふべき事も知らず、只恥かしげに待遇たり。光氏も藤の方の、世の女には似もつかず、艶美なるを見るにつけ、母花桐も斯ありしや、今までおはさば紫の如き妹もあらんなど、かひなき事を思ひ續け、涙に暮て居たりしかば、苅萱何か打點頭、其場を靜かに立去ぬ。暫くあつて藤の方、「御笛の音を物蔭にもれ聞事は常乍ら、お目に懸るは三年越、去頃よりの御煩ひ、瘧病にて身も強く衰へさせ給ひしと、杉生が物語。如何と苦慮暮せしが、斯壯健になり給ひ、喜ばしさ。」ト懷しう物云ながら打解ず。光氏は手をつかへ、「我身の疾は僅の事、此程よりの御患み、心ならず思ひしが、疲れ給はぬ御顏を拜して漸く安堵せり。偖何よりや語り出ん、先室町より此館へ移らせ給ひし其夜より、宗全の臣輩忍び〳〵に此四邊を徘徊なす事確乎に聞り。是母上に宗全が執心未だ去やらぬか、又父君

○忘八や　遊女屋。

の寵愛深く、子も人なき其時は、母の如く傅く事を知たる故に奪ひ隱し、異圖を起さん其



時に、人質とする計略ならんと思ふよりして、某が彌母堂へ戀慕と見せ、夜毎此邊をさまよひしは、是を防がんためにてあり。晝は嵯峨の館に歸り、昏々と思ひ寢に怪しき夢の續きしかば、四五日以前苅萱に逢たる時に夢を語り、藤の方に過失の有もやせんと問ひければ、彼暫く考へて、藤の方には恙なし、却て御身に災禍あらん、謹み給へ、と思ひも懸ぬ夢占方に打驚き、否予夢には非ずかし、人の夢を語りしなり、此事人に漏すなと、言紛らして置きつるが、彼其時に豫じめ我胸中を知たる故、疑はずして、此處へ先に導き做りしならん。夫はともあれ、又密に聞えべき事こそあれ、三筋町の※忘八やが、頓て遊女に爲べきと、秘藏の小女に紫とて、年は漸く十一二、其面影の美しさ、御顏容に能似たり。あら不審と思ひしが、彼が祖母

○國助　遊佐河原之進國助。澤菊との間に紫を生む。

小玉といふは、もとは苅藻と呼びなして、花滿のお家に仕へ、其時母堂の父上が、御情を懸けられて、儲けし娘の産たるが、かの紫に候へば、姪に當らせ給ふなり。トありし事共物語れば、藤の方深く驚き、「今迄夢にも知らざりし。胞こそかはれ、妾が姉上、父の遺物にありながら、夫と知ねば尋ねもせず、早此世には在せぬとや。せめて所緣の紫に逢はせ給へ。ト言ひければ、光氏は倚すり寄り、「其夜不圖國助と宗全が彼處へ來り、箇樣々々の物語を忍び聞しは天の與と、彼紫に附添ひゐる、言の葉といふ遊君諸共、直に身請をなしたるは、彼宗全に國助を同心させざる當座の人質、又一つには川竹の流れに義母のお血統を沈めん事の歎かはしさ。然るに小玉は病に苦み、今引放して紫を予へ送るを厭へる體、是も道理と强ひても迎へず。然共其儘捨置かば、國助來たつて紫を奪ひ行かんも計り難く、忍の人は附置け共、いと怪敷は言の葉が彼國助を色白にて、淸らかなりと褒たる由を、腰元輩に紫が語るを在下洩れ聞きたり。思ふに國助の隙を窺ひ、忍び來りし者ならん、然らざれば言の葉が、彼を見知る所謂なし。左にも右にも紫を迎へ取らんに如はなし。ト宣へば、藤の方、「今迄名だにも知らざれど、父の御目を懸られし小玉は所緣の無きにもあらず、貴方へ早く紫を進らす樣に妾より明なば文を送らん。など、猶蕭々との物語り。眞の母と子の如く、仇めく事のなかりしかば、屛風の蔭に息をのみ、樣子を聞ゐる杉生は、此頃中より光氏を、疑ひたるを心に恥、密に辷り出にけり。

○比の山　暗ぶの山にて暗夜の山。夜の明けることなき所といふ心持である。古歌にも「今宵だにくらぶの山にやどもがな、曉知らぬ夢やさめぬど」などがある。

○唐綾　唐織の綾。唐織は初め唐から渡つた織物の称であるが、又我國にて唐風に作つたものをも云ふ。地は生絲で、五色の練絲、金絲などを交へて浮織にしたものである。

○高直　赤松太郎高直。

※比の山に宿るとも、いかでか語り盡すべき。生憎なる短夜にて、早くも響く曉の鐘に、光氏うち驚き、編笠被りて只一人見咎められじと、忍路の小門を開き立出る。此方に一人の大男、手拭にて面を隱し、窺ひ寄て光氏の肩先下りに肋へかけ、二ツになれとぞ切下ける。吽とも云はず仆るゝを、足にて蹈しめ、嘲笑ひ、「世の噂には似もつかず、偖言甲斐なき者にてあり。只一刀に果敢なき最期、心安し」ト懷中より取出す一品傍へ捨おき、留めを刺んとする折柄、忍び姿の武士兩人、小蔭を立出、聲を密め「もし手に餘らば助太刀せんと、樣子を窺ひゐたりしが、驚き入たる汝の働き、最早息も絶たる樣子、とゞめを刺にも及ぶまじ。向ふより來るあの火光、人眼に懸らぬ其中に、早立退かんト密語きあひ、何處ともなく立去りぬ。恁る處へ提灯照させ、來かゝる石堂馬之丞、件の死骸に躓く僕、火光にすかして大いに驚き、「羽織は※唐綾、大小は金造へに桐の紋、疑ひもなく光氏君、爰にあへなき御死骸。ト云へども、騷がぬ馬之丞「予々始め數多の御家臣、人に知さず忍びの御供、其御迎へも待ずして、いかでか歸り給ふべき。是には樣子のある事ならん。先靜まれ。トする／＼と立寄て、笠取退け「思ひ懸なき尼苅萱、何ゆゑ君の御姿に似せたるならん。ト目を配り、落たる印籠拾ひあげ、「柏の若葉は若君の御好みにて調せし蒔繪。此印籠は過頃、※高直へ下されしが、何とて爰には落散けん。高直は四五日さき妻が平産したりとて、今宵のお供に加はらず。コリヤ／＼家來其方は赤松の館へゆき、高直殿を若君の、急

のお召と言入て、同道なして立歸れ。予は此場の事どもを、申上ん。ト立折から、「ヤレ其使しばし待て。いふ事あり。ト聲を懸、長刀かい込立出る光氏、「さては始終の事共を聞食されて候か。ト遙下つて馬之丞、手をつかふれば、點頭たまひ、「鞍馬山より歸るさに、五葉の松に結添へ、阿古木が送りし玉章を徒然の夜にうち見れば、此光氏が乘物を、彼處へかきて行たる男、赤松太郎が印籠を盜み取て打笑みたる其容貌の凡ならねば、必ず心を附給へ、此事委く片貝が見たり、と密に言おこせり。思ふにかく言ふ光氏を失はんと計る者、是らの品を盜ませ置き、證據に落して心を惑はせ、同士打なさせん抔とは、小兒童の戲れ同然、太郎を疑ふ事なかれ。夫よりは先差當り不便なるは尼苅萱、いま石堂も言ひつる如く、何の故にか予に代り果敢なき最期は遂げたるぞ。ト吐息と共に打見やる、向ふの方より太郎高直、鮮血瀝る首引提げ、頓て御前に跪づき、「產の穢を憚りて御身近くはつかへねども、今宵も遠く守護なせしが、忍び姿の三人連、怪しと見とめて後につき、聞くとも知ず一人が、光氏君を打留しと廣言吐は虛事と、思ひ乍らも忌々しく、刀背うちに打据て、搦めとらんと思ひの外、手元狂ひて首うち落し、剩さへ其暇に、殘りの二人は迯失せたり。今に始めぬ粗忽の事ども、申し開かん詞もなし。ト言つゝ、ふつと苅萱が死骸を見やりて、再び驚き、「是は〳〵いかにト立寄れば、苅萱漸〻目を開き、霜に痛める蟲よりも、最最細き聲をはり、「先から物が言ひたうても、舌もこばりて聲もでず、心で唱し念佛の、其

功力にや苦痛も薄らぎ、やれ〳〵嬉や若君樣、樣子が申上られます。ト顏上げたげに蠢けば、石堂は聲を激まし、「深き手疵と言ふにも非ず、心を確に持給へ。ト抱き起され吐息をつき、「此尼を宗全の館へ去頃招き寄せ、其座にゐたは晝顏殿に仕へし時の朋輩小菊、今の名は白糸とて、富徽の前のお腰元。偖宗全が言出すは、藤の方病氣につき、保養の爲とて音川の下邸に此頃住めり。然する時は高直が所業に極り、赤松の家は忽地滅亡せん。其虛に乘じ此印籠を捨置べし。されば光氏好隙ぞと、彼處へ忍び來らん時、汝密に彼を殺して事を計り、我望を達しなば、褒美に黃金を與へん。と聞いて始は驚きながら、言ひがひもなき此尼を賴まんよりは、手の者をなど差向て光氏を討玉はぬと何げなく云へば、宗全頭をふり、彼には忍びの供人あり、殊には怜悧性といひ、迂濶に手だしは成難しと、言かけるを引取る白糸、此方は眞の善心に立歸りしと、光氏君心をゆるして居給へば、お庭の隅か座敷の暗闇、忍びのお供も入難き隙を窺ひだまし討、事を計るに便りよし、夫故彼方のお賴みと、取持ち顏は私しにまだ邪曲な志殘つて居ようと、白糸が推量しての皆計らひ、否といはゞ、と目を配り、二人は詰寄る絕體絕命、爰で暗々死なんより、仕樣もあらんと當座のがれ、仰せに從ひ若君を打取て上げませう、と云へ共更に心を許さず、汝が口より光氏へ若し此事を漏しなば、忽地地獄へ墮べしと、あらゆる佛を誓ひに立て、誓紙を書けよと詞詰め、夫も是非なく望みに任せ、其場は脫れ出たれども、君の幼き御時に殺害せん

○兄泥藏が敵對まゐらせ　泥藏は澁坂破門といひ、その昔花桐を害めんとして誤つて妹桔梗の主人たる晝顏を討つた、それである。

○兄嫁の凌晨も云々　桔梗の兄たる泥藏の妻凌晨が、その子黄昏と共に古寺に連れ出た光氏を害さんとした事をいふ。

となしたる御罰、忽地廻つて兄を殺し、あゝ恐ろしと心を改め、後世を願ふの其外は、憂世の事は耳にも留ず、行ひすまし、尼の身が、黄金を山に積たりとて、非道に組する心はなし。然さり乍ら此事を君に告げんも誓ひたる佛の御罰も恐ろしく、案じにくれたる折に僥倖、宵に貴公が杉生に宜ふ事をもれ聞て、藤の方の御前に直に誘ひまゐらせ置き、妾は其場を立去て、山名の館へ走りゆき、今夜七つの鐘をあひづ。云云の小門より光氏を只一人、騙して歸さん其時に、討取り玉へと預りし印籠を返せしかば。宗全は大いに喜び。誰をかやらんと暫く案じ。彼三人を呼出し吩咐るゝを見終りて。又もや爰へ立歸り、君の姿に打扮て御身代りに立たるは、我口づから言ずして君を討んと計る者あるを知せん爲にてあり。されば佛に誓ひも破らず、此世に劍の呵責をうけ、未來は極樂往生せん。アヽまだ君は花桐様のお腹に宿りておはせし頃、兄泥藏が敵對まゐらせ、妾は今も言ひたる如く、お五つの時うたんと計り、又兄嫁の凌晨も、古寺にての正なき擧動ひ、親族の者が三人まで、君に及對ひまゐらせし、夫らの罪は御身に代り、妾が死にて宥させ給へ。命を捨てのお媒人と、宵に言ひしも斯くなる覺悟、委き事は書置に書認めてお羽織の袂に入れて置きたれば、後にて御覽遊ばせ。ト言息もはや絶々なり。高直耳に口をよせ「御身を討ちし這奴めは、いかなる者ぞ。ト彼首をさし附れば、瞠乎と見やり「名は知らねども山名の悴三郎の草履取。鞍馬へ君のおいでの時、お供の中へ紛れゆき、其印籠を盗みし男。逃去た

りし二人りの者は、犬嶽猫山なんどとて、近頃山名へ抱へし浪人。とゞめを刺ず歸りし故、是らの事まで聞え置き、彌思ひおく事なし。ノウ若君、妾が告知を眞と思ひ、笠をもとらず面をも見極めざれば宗全へ、君を討しと告るは必定。されば暫く御身を隱し、世の成行を見玉へ。トいへば光氏涙を拂ひ「夢ト筮を開ひし時、轟の方には恙なし、御身に災禍あらんとは、山名が予をねらふ由を、よそながら告げたるならん。さては山名の家臣輩、此四下を徘徊するは、轟の方を奪取らん企と思ひの外、予をうたん手段よな。あら事をかし。ト打笑ひ「ヤヨ苅萱、惡に强き其者は、必ず善にも强しと聞く。其身計か、兄嫂の前非を悔いて予に代り、爰に討れて死せんとは、アヽ有難き心ざし。思ひ違へといひながら、現在兄を殺せし其方、非命に死ぬるが則ち天道。此世に遺りし罪を果さば、未來は淨土に生るべし。假令いか程計るとも、宗全如きに晴々と討るべき在下ならず。心殘さず成佛せよ。ト腰より笛を取出し、吹すさみ給ひければ、爰の隅々彼處の隈々、數多の同勢立出で、先に進みし惟吉が「はや御歸館。ト促したり。「アヽ勇しし。ト苅萱は莞爾と笑ふが此世の名殘、敢なく息は絶果たり。光氏不便と見やりながら、件の印籠取上げて、高直に打對ひ「阿古木がしらせ、苅萱の物語にて汚名をうけず、目出度返る此印籠、蒔繪にかきしは柏の若葉、汝男子を擧けし由、柏之助と名づくべし。ト仰せにはつと、高直は印籠受取り押頂き、頭を砂にすり附たり。猶光氏は苅萱が野邊の送りの事なんど、細々と命

○稲舟姫　「源語」の末摘花に擬す。

じて後、杉生を呼出し、藤の方に此事を密に聞え上べしとて、ありし事共語り聞せ、かの苅萱が書置を捜し求めて渡しつゝ、殘る事なく取まかなひ、館へ歸りけるとなん。

夜も程なく明ければ、藤の方に、杉生はありし事共物語るに、大方ならず愕き給ひ、不便の事にてありけるとて、かの書置は涙にくれ繰返せども見も分らず、其儘泣寢にふし暮しつ。此嘆きにや惱ましさも、次第にまさる心地して、室町よりは疾館へ立歸れよと、御使ひ頻りなれども、思ひも起ず、早月も過ぎて水無月の暑き程には起も上らず。され共重き病にあらねば、湯をひき髪は取上れど、左に右心うき立ず、心地の常と異れば、如何なるかと人知ず、思ひ惱みて居たりしが、湯殿抔に親くつかふる腰元輩が氣色を見咎め、はや三月にもなり玉はん、最しるき程なりと、密めき言を聞附て、杉生は夫となく心をつけて窺ふに、彌紛れのなかりしかば、室町の御所へ赴き、「藤の方は御心地惱ましき其上に、苅萱が果たるを聞食されて、彌々重り、打臥してのみ在すると思ひの外に、御胤を宿し玉ひし御氣色ぞ。」トいふに義政大に喜び、猶も使を日に日にはせ、御所へ迎へ玉へども、藤の方は心進まず、今迄だにも寵愛の深しと妬む富徽の前、斯と聞なば又如何なる憂目を見んと思ひ侘、わづらはしさも彌増り、御所へ歸り給はねば、義政は心許なく自ら文を送り給へど、心地あし迚一條の返事さへし玉はず、只鬱々と過しけり。

爰に又稲舟姫と言ふありけり、是は義政の兄義勝の嫡女なり。義勝世をとる事僅三年、

〇糺の森　京都市左京區下鴨にある森。今は賀茂御祖(みおや)神社の境域をなしてゐる。郭公の歌枕として名を得てゐる。

いと若くして物故ぬ。これ稲舟が生れし年なり。義勝は此娘のみ、外に男子のなかりしかば、弟義政世を治め、花の御所迚ときめくを見るに附ても、稲舟は父義勝の世に在さば、あの如くならん者をと戀しさ悲しさやる方なく、世を憂物に思ひきり、尼にならんと願へども、義政さすがに夫をば許さず、されど何處へ緣邊を取結ばんの沙汰もなく、只埋木となり行て、糺の森の邊りとやらんに空しく月日を送りけり。此處は義勝が將軍たりし其時に、遊興の爲にとて造り磨きし館ながら、荒れたき儘に荒まさり、物凄さいはん方なく、附從ふ者共も、義勝に仕へたる、古人輩にあんなれば、頭は白く腰屈り、物の用に立べくも見えず、只紅とていと若き腰元一人あるのみなり。此稲舟がいと尊き座の守りを持てる由、藤の方聞及ばれ、是を受けんと杉生を彼處へ使にやりたるが、杉生はかの荒果て人少なる館の體を始めて見て心に驚き、哀れに住せ給ふ由を、藤の方に物語り、義政へも聞え上げ、まづ御側にて召使ふ女をまゐらせ玉ふべし。是れ藤の方の願ひなりと、遂に其事取繕ひ、都の町を尋ね求め、綾渚早百合なんど言ふ腰元づかひに似合しき容姿よく若き女を集め、稲舟姫へぞ送りけり。

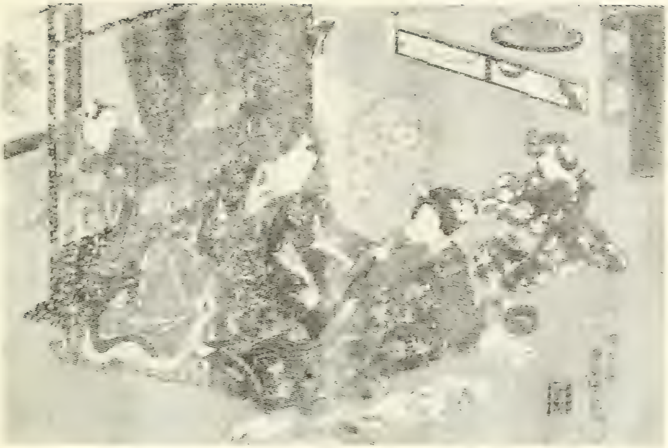
第八編梗概

八月十五日は、彼の自害した黄昏の一周忌になるので、十七日清水觀音に詣でて讀經回向殘る所なく頼みての歸るさに、もと唐衣に仕へた夏野の、今は稻舟の許に奉公して、名を早百合と改めてゐる女に逢つた。此女に切に手引を頼み、糺の森の館に忍び入り、稻舟の琴かき鳴らすを聞き、つと立上り、隔ての障子を引開けて内に入り、夜の物を打被ぎて稻舟姫に添臥した。そこへ思ひがけず杉生が現れて、「こは何事」と威丈高になつて其の振舞を詰る。「これ見よ姫かあらぬか、そこへ出て杉生に安心させよ」と夜着を取つて、つき出した女は姫と思ひきや、二葉の上にかしづいてゐた中空の、今は綾汗と云ふ女であつた。

常日頃愛されてゐた小玉が歿したので、紫は淋しく暮らしてゐた。まことの父なる遊佐河原之進國助は紫の住居を訪れて、近きに館に迎へ入れんと告げる。しかし遊佐の館に本妻がゐるので、妾腹の紫に取りて繼しき母ではあり、何かにつけて輕んぜられるは必定であるから、紫の侍女菅の葉も慰めかねてゐた。小玉の死んだことを知つた光氏は不便な事よと紫の住家を尋ねに行くと、すれ違ひに乘物が行き過ぎた。惟吉にその跡追へと目印の扇を渡し、霰降り出た物凄き一夜を紫の家にて明した。歸るさに六條へ忍び行く、或家の門に竿の上に扇を結びつけてあつたのがあつたので合圖すると惟吉が出た。此家は菅の葉の妹小辨が經營してゐる廓通ひの人が休む茶屋であつた。惟吉の語るところに依ると、彼の行過ぎた乘物の主は果して國助であつたが、彼も光氏來れりと見て、取つて返し、光氏が紫へ物語るのを聞くと、山名宗全が謀反を企て國助を味方にせんとする形勢を見て、紫を國助の娘と知つて人質にせんとすると思つたのは誤りにて、まことは紫を愛する心からと知つたので「あら勿體なや有難や、如何にもして娘をお渡し申さう」と喜んでゐたとのことであつた。

十月十日過ぎには東福寺の通天橋にて今を眞盛りなる紅葉見物の宴が將軍義政に依つて開かれる。

第九編梗概



紅葉の宴にてさま〴〵の催があつたが、其のうちの出色は光氏が靑海波を舞つたのであつた。最後に義尙と光氏とが紅葉狩の能を舞ふと、警固の中から鬼の假面をした曲者二人飛び出でて、義尙光氏に斬つてかゝつた。光氏少しも騷がず、一人の曲者を斬つて棄て、一人を捕へ、悠然として舞ひ納めた。斬殺された曲者は犬嶽むく平で、捕へられたのは猫山三毛藏であつた。光氏は紫を迎へ取らんと、夜更けて後出で立たうとすると、早百合が來て告ぐるを聞くと、國助の家來だと云ふ片攪調太夫が夜明頃に迎ひに來るとのことであつた。光氏は「其の調太夫は山名のまはしもので、山名が奪ひ取らうとするのであらう」と、石堂馬之丞に命じ「調太夫が迎ひに來たらば、紫の代りに其の乘物に乘りて、山名の屋敷へ舁いで行くと見たら其の迎ひの奴原を斬捨てよ、但しまこと國助の家來ならば遊佐の館へ行つて、我が本心を語り聞かせよ」と命じた。光氏は手早く紫を迎へ嵯峨の館へ歸る。調太夫が迎の乘物もまた夜明けて後、此館に到着して、替玉の石堂馬之丞は悄然として下りた。此調太夫まことは山名の家來で、紫を人質に奪ふべき使命を山名から受けたのであるが、綾汗の父であるから、光氏に恩返しせうとて、紫と思ひ込んで石堂を此館に連れ來たのであつた。

光氏は音川の下館に住まつてゐる藤の方に忍んで逢ひに行く、藤の方と思つて逢つたのは綾泙で、訪つて來たのは杉生であつたので、光氏は呆れてゐる。後に藤の方もそつと忍んでゐたので、此で久振に逢つて、明方近くまで立話をして、あかぬ別れをした。

偐紫田舎源氏第十編序

熱湯好、湯番にいへらく、湯は熱くして置くこそよけれ、うめれば何時でも温くなる。温湯好、湯番にいへらく、湯は温くして置くこそよけれ、沸せば何時でも熱くなる。是に似たりし事のあり。初めて此の田舎源氏を作いでんとなしたる刻、老たる友人予に曰、いかにも源氏の條をくづさず、なるべき程は詞をも其儘用ひて書き給へ。源氏を讀まざる童子の些しは助となる事あらん。若き友人予に曰、源氏の條を翻案して、歌舞伎狂言淨瑠璃の趣きに綴り給へ。源氏を讀まざる者やはある。予思ふに源氏の如く書と教へし老人は熱湯好なり。狂言歌舞伎の樣に綴れとすゝめし人は温湯好なり。是にまどひて初編の草稿、幾度か書なほし、先づ若き人の意見につき、泥藏の物語、人丸堂の無言場、温く仕込で置たれど、標題の源氏がさめて、水にならうと※卷々の詞をそろ〳〵折くべて、去年今年と沸しかけ、既に十編に及びしが、此の湯の加減未分らず。赤本にはうつらぬ詞が多くて、熱くて讀み憂く覺ぼさば、※仙鶴堂を※叩き給へ。次の編より狂言の水をうめて温くせん。板元は湯屋の亭主、作者は湯番に異ならず。どうでもかうでも這入人が多ければよいまでにして、一家の作と見識ぶつても、※戸棚ががらりと空てゐては。眠氣がさして居たゝまれず。※十能

○卷々の云々　卷に、薪木（マキ、關東の方言）をかけていふ。
○仙鶴堂　書肆鶴屋喜右衞門。
○叩き給へ　湯が熱いとき、壁板たゝご叩いて水をうめる樣に合圖する。
○戸棚ががらりと空てゐては　戸棚は風呂の衣類など入れておく戸棚。即ち、お客がなかつたら、といふ意。
○十能で運ぶ消炭に云々　湯番が眠氣さゝずに、絕えず十能で消炭を運んで其火に當つて番をしてゐる。

で運ぶ消炭に當りつゞけにしたいが願ひ、されば御客様方の御意にかなふやうにと。※井戸ならねども彫をあらため、※竹の簀で板の間の摺仕立を奇麗にして、※新米糠の袋入、随分出精つかまつり、※明年休の札を掛けず、紙拂底に付直あげといふ場をこたへた代りに、現金湯は御承知のうへ御買入可被下候。

天保癸巳初春

柳亭種彦 敬白

○井戸ならねども云々 井戸を浚ふ如く彫刻を新規によくする。

○竹の簀で板の間の云々 風呂場の床が板であつた時代には、その仕舞に竹の簀で板の間を磨り洗つたものである。

○新米糠の袋入 古は石鹸が無いので糠袋を使つた。

○明年休 湯屋が明日休の札をかけるが如く明年は出版を停止すること。

○日の朝　元日。
○湯をひきて　入浴して。湯引は浴あみすること。
○元日の祝きに、先づ室町へ　云々　「源氏物語」葵巻に「男君は、朝拝に参り給ふとて、さし覗き給へり。今日よりは大人しく成り給へりやとて、打笑み給へる、いとめでたう愛敬づき給へり。いつしか雛をし据ゑて、そゝき居給へり。三尺の御厨子一よろひに、品々しつらひ据ゑて、又小さき屋共作り集めて奉り給へるを、所せき迄遊び廣げ給へり。儺やらふとて、犬きがこれを毀ち侍りにければ、繕ひ侍るぞとて、いと大事とおぼいたり。げにいとも心なき人の仕業にも侍るなるかな。今繕はせ侍らん。今日は言忌みして、な泣い給ひそとて出で給ふけしきいと所せきを、人人端に出でゝ見奉れば、姫君も立出でて見奉り給ひて、雛の中の源氏の君つくろひたてて、内に参らせなどし給ふ。」
○服　喪に籠つてゐる間を言ふ。此の間喪服を着てゐるが、三月の服が明けたので衣服を改めたといふのである。母方の服を三月といふことについては、「令義解」喪葬の部によれば、祖父母に服五月、外祖父母に服三月となつてゐる。

偐紫田舎源氏第十編

其年も既に暮れて、日の朝とぞなりにける。未だ暁の頃よりも光氏は起出つ、梳り湯をひきて、装束華麗に改め、元日の祝きに、先室町へ赴かんと、立出ながら紫を住ませ置きたる西の邸を差覗いて見給ふに、紫が祖母小玉の服も、母方故に三月を限り、早くも昨日晦日に其事の果たれば、紅山吹己が名の、所縁の色の紫なんど、色々の衣打重ね、姿をかしう引装ひ、三尺の御厨子一揃に、何時か雛を押並べ、又、些く座敷書院のかゝりを、造り集めし雛の舍と云ふ物を飾り立て、犬吉小辨其外の童子を相手に處狹く、遊び弘げて居たりけり。光氏は打笑て、「一ツ年をとりたれば、今日よりは大人敷なりたるならん。ト愛敬づき云へども答へず、涙ぐみ、「犬吉が鬼は外、福は内の眞似をして、是程大事にして置いた雛の家を毀しをつた。今繕うて居るところ。アレ犬張子が瞠乎と私しの顔を見るやうな。犬吉の犬の字と思へば是も憎らしい。ト咎なき者へやつ當り、取つて投ぐれば蓋と實と破る中より溢れ出る、狀を光氏手に取上げ、「光氏君御内覽。それがしとは心得難し。そも此密書をこめたる犬箱、何れよりか送りし。ト言の葉に問給へば、すり寄て手をつかへ、「雛の座敷は綾浮の父が造らせ候とて、其犬張子諸共に、何日ぞや糺のお館より、

紫様のお手遊びと、綾浒が進らせたれど、中に手紙のある事は今まで心付かざりし。ト答ふる中に、光氏は件の密書を徐やかに讀終りて打點頭き、懐中へ確と收め、紫の背を掻撫て「心なしの犬吉が惡い事しをつたの、今に近習へ吩咐て、元の通りに繕はせん。今日は目出度き日にてあり、泣者ではない、機嫌直しや。ト言捨て表へ立出給へば、待設けたる數多の供人、前後左右を打圍み、行列美々敷行給ふを、人々諸共紫も、はし迄出て見送しが、元の處へ立歸り。光氏君と名づけたる、彼人形を取下し、雛道具の乘物へ乘せて、相手の童子を呼び「犬吉はお挾箱、お長柄傘は小辨が持や。サア室町へ光氏様のおいで遊ばす處ぢや。ト立騷げば、言の葉は興さめ顔に押止め「若君の仰せの通り、一つお年もめしたれば、※少しは大人びさせ玉へ。十に餘れば雛遊びは、せざる者とか世にも云ふ。貴孃は夫の早ある御身、行儀正しく遊ばす筈。夫にマア其樣に遊びにばかり打掛り、お髪を上る中さへも、ちやんとなされず身動きばかり。ちとお嗜み遊ばせ。ト耻かしめられ、紫は袖の振を顔にあて、只戯れと思ひしが、さては眞に光氏君は、我夫にて有けるか。常々出入る女子ども、我男とて傅くは、多くは見にくき顔貌。我は若くて美しき夫

○所縁の色　紫色。紫草は武藏野に多くあつて、其の草の四方三尺許りの間は、土の色が紫色になり、其の邊りに生ふる草も亦、總て紫色を帶びるといふのから起る。『古今集』に「紫のひともとゆゑに武藏野の、草はみながらあはれとぞ見る」の歌より出てゐる。

○御廚子　袋戸棚の如きもので、持運ばれるやうに出來てゐる。（既出二六八頁）

○鬼は外、福は内　追儺を行ふ時の聲。追儺は又鬼やらひともいひ、十二月晦日に行ふ。

○綾浒　紀の森の稲舟姫の侍女。もと中空とて二葉の上に仕へた。綾浒の父は調太夫である。

○挾箱　中に衣服などを入れ、棒で擔つて行く箱。

○少しは大人びさせ玉へ　前條の『源氏物語』（紅葉賀）の「内に參らせたまひし給」とあるに次いで、侍女少納言の言葉として「今年だに少し大人びさせ給へ。十に餘りぬる人は、雛遊びは忌み侍るものを、かく御男など儲け奉り給ひては、あるべかしうしめやかにてこそ見え奉らせ給はめ。御ぐし參る程をだに、物憂くせさせ給などゝ少納言聞ゆ。御あそびにのみ心入れ給へれば、恥かしと思はせ奉らんと言へば、心のうちに、我はさは男儲けてけり。此人々の男とてあるは、醜くこそあれ、我は斯くをかしげに若き人をも持たりけるかなと、今ぞ思し知りける。さは言へど、御年の數添ふしるしなめりかし。斯く幼き御けはひの、事にふれてしるければ、殿のうちの人々も、怪しと思ひけれど、いとかう世づかぬ御添臥ならんとは思はざりけり」とある。

○陀羅尼　例へば「唵阿鼻羅吽欠娑縛訶(オン・アビラウンケン・ソハカ)」の如く、佛、菩薩の説いた密語である。如來眞實の語であるから眞言といひ、萬德を包藏する。

を持てりと、心の裡に始めて思ひ知りたるは、幼き樣でも一つづつ年の數添ふしるしなめり。頓て雛は差置て、褥に戻れば、言の葉は眉刷紅筆取出し、涙に洗ひし紫の顔を再び粧ひつ。熟々と打まもり、をかしき世をも見つるかな。元國司の御胤ながら、一日苦界に陷りて、末には多くの客を迎へ、肌を穢さん身なりしを、上なき人に思はれて、榮華に過させ給へるは、小玉のぬしが明暮に、御身の上を苦にし給ひ、絶ず念佛經陀羅尼。信心されし御佛のしるしを現はす者なるか。然はさりながら赤松の二葉の上を始めとし、其處や彼處のお忍び歩き。頓て大人び給ひなば、夫や彼やにむつかしき事の起りて、お心の揉る種とや成もせん。されど幼き此程をわりなく思ひ給へるは、最賴もしげなりしかと。心の裡に言の葉も樣々案じ居たりけり。

光氏は室町の御所より、直に赤松の館へ退出給ひけり。二葉の上は例の如く、表向のみ麗しく、心の底は美しき氣色もなきが苦しければ、人なき間に光氏は、二葉の上の袖を捕へ、「年も既に改まれり。御身も心を改めて、今年は打解給ひなば、如何に嬉しからん。など樣々聞え給へども、嵯峨の館へ女を迎へ傅き玉ふと聞きしより、我をば捨て本妻に夫を仕玉ふなるべしと、心置れてありしより、疎々しげの有樣を、光氏夫とは猜しながら、知らぬ樣にもてなして、浮世語りに打紛らし、戲れ言など宣へば、有繫に心强からず、只よき程に回答などし給ふ樣は、尋常の人には遙に立優り、光氏よりも四つ計り年上なれば、殘り

なく開きし花の盛りにて、何に足はぬ事のなき姿をつく〴〵打まもり、世の亂れんとなすを防ぐ、計策なりと知らざれば、餘りに予がけしからぬ。すき心と思ふより、斯恨むるも道理ぞと、心の底に思ひ知り、種々に言慰め、其夜は爰に宿りけり。

赤松左衞門正則も、娘二葉と光氏と其の交情の睦しからず賴もしげなき御心を、強顏と常には思ひながら、打對ひて光氏の顏容を見る時は、忽地に恨みも忘れ、心を盡して傅きけるが、明れば二日の朝未明に、光氏は起出て、伏籠にかけし小袖を取寄せ、着替んとなす時に、正則は物蔭より此體を差覗き、西陣の名高き織屋が、手を盡したる綾の袴を、手づからに持て來り、光氏の衣紋を直し、小袖の後方引繕ひ、たぶやかに着せ進らせ、只履物をとらぬばかりに信やかに仕ふるも、主を敬ふのみならず、子にひかさるゝ、親の心は、最哀れなるものなりけり。光氏は彼袴を見やり「是は美しき綾にてあり、去頃紅葉の賀莚の折、斯る袴を調せんと尋ねたれども遂に得ず、此後も又左樣の催しあらん時に用ひん。」ト打置玉へば、正則笑ひて「然る折には此綾より遙に勝る物もあるべし。是は只目馴ぬ樣の模樣なれば。」ト言ひつゝも強て穿せ進らすれば、光氏は我姿を見返り「兄義尚も此の如くの袴の模樣を好まれたれば、一ト領進らせたし。何れに求められたるか。」ト問せ玉へば、謹んで「是は有難き御意にてあり。義尚君にも此の如く調じて近きに奉つらん。又其綾の模樣を寫せし扇も作らせ置たり。」ト正則頓て取出し、光氏の腰にさゝせ、出行き給ふ後影

○恨みも忘れ心を盡して云々　『源氏物語』に「大臣も、斯く賴もしげ無き御心を、つらしと思ひ聞え給ながら、見奉り給ふ時は、怨みも忘れて、かしづきいとなみ聞え給ふ。つとめて出給ふところに、さし覗き給て、御裝束し給ふに、名高き御帶、手づから持たせて渡給て、御ぞの御後引きつくろひなど、御沓を取らぬばかりにし給ふ、いと哀なり」（紅葉賀）

○伏籠　籠の中に火を入れて香を焚き、其上に衣をかけて、香を移すもの。

を熟々と打詠め、偶さかにもあれ、斯許り優に艶しき若君を、いはゞ婿ぞと我館へ出入させて見奉つるは、人と生れし甲斐こそあれと、心の裡に思ひけり。

嵯峨の館へ藤なみの所縁の色の紫を迎へ取玉ひてより、其愛らしさに光氏は心曳れて、六條の阿古木をだにも久しく問はず、況て糺の荒館は、思ひ捨ると言ふには非ねど、只其儘にすぎ行きしが、正月七日の夕さり方、「糺よりの御使が、是持て參り候。ト惟吉が文箱の紐を解ほどきて差出せば、光氏取て打開くに、是れ綾浮が狀にてあり。「此頃は猶繁々に、三郎統清狀を通はせ、姫君に言寄る樣の、心得ぬ事もあれば、今宵忍びておはせよかしと、妾より僞りて返事をしたるに、拆細々と書誌し、去年より絕て音づれの無き恨みをも、返すぐ取混せて聞えければ、光氏半讀みさして、打笑ひつゝ膝をうち、「教へし如くに綾浮が、統清を釣寄るとな。彼より先に予も行き、事のやうを窺はん。返事に及ばず、使は歸せ。ト直に供の準備を調へ、糺へこそは赴きけれ。道の程にて日は暮れぬ。空の景色物凄く、雪かきたれて夥多降りけり。例の如く表立て、案内も乞はず庭口より徐ら内に入給へど、夫とは誰も心づかず、打解たる女輩の眠りこけたる枕許を打またぎて、唐紙の間より差覗けど、稻舟は能くも見えず、御簾屏風の竹も折れ、糸もほつれて損ねし物から、亂りがは敷押やらず、昔の儘に立繞らし、紅早百合四五人の腰元輩がつい居たり。不圖此方を見返れば、彼昔より此館に久しく仕へし女輩、煤けたる白無垢に、幅いとせばく穢げなる

○藤なみの所縁の色の紫　藤の方のゆかりの者、さいふのさ、ゆかりの色の紫といふのを掛けてゐる。

○糺の荒館　糺の森にある、義勝の息女稲舟姫の館。

○三郎統清　山名三郎統清。「源語」の頭中將に比す。以下三郎統清が稲舟と通じたやうにしてゐるが、「源語」に於ては源氏其人である。つまり綾浮が光氏に統清の動靜を報告して、光氏に來るやうにとの文を寄越したさあるのは、「源語」にては源氏その人が末摘花に通じるために、大輔の命婦から誘致の手紙を得るのである。郎ち末摘花の有樣を述べた所に、「八月廿よ日、宵過るまで、待たるゝ月の心許なきに、星の光ばかりさやけく、松の木末吹く風の音、心細くて、古の事語出て、打泣きなどし給ふ、いとよき折かなと思ひて、御消息や聞えつらん、例のいと忍びて、おはしたり」（末摘花）

○亂りがはしく押やらず　御簾や屏風は損じてはゐるが、矢鱈に押し片づけてもしまはず。此の處「源語」には「几帳などいたく損はれたるものから、年經にけるたちど變らず、をしやりなど亂れねば、心許なくて、御達四五人居たり」（末摘花）と言つてゐる。

帶の兩端押垂れて、吉彌風に結びたる、腰つきの頑なしく、流石に櫛を押立て、可咲さしたる額つき、田舍の祭に神子抔が、練出したる姿に似たり。各々立て懸盤折敷取出して打向ひ、天目茶椀皿の類ひは、皆唐土の物なれども、ひゞ破缺て見處なく、數々のそへも置ず、飯打喰ひつゝ物語る。斯果敢なげなる有樣を親しく見るは、始めてなれば、興醒めながら、光氏は猶も窺ひ居るとは知らず、就中老たる女がいふ「如何なる事か、去年より姬君樣の御前へでる事を止められ、遠く離れて宿直ばかり。用が無いので足腰が猶怠惰うて堪へにくい。哀れに寒き年なる哉。なまなか命長ければ、斯る世にも逢ふなり。」ト潸々と打泣けば、其傍らより差出しは、今降雪を頭につみ、猶老屈りし女が答へて「其事よ〳〵。義勝公の在せし時より、此御館に勤めたれど、室町御所とは事變り、常には人の出入もなく淋しき事ぞと嘆きしが、斯くても過れば過るものを。嘆きし昔日の戀しさよ」ト飛立ぬべき身震ひするを、一人りの女が押止め「光氏樣が姬君を哀れみ給ひて、彼の樣に若き女子を抱へられ、お側へ付て置るれば、お前や私しの身の勤めは樂に成たを喜ばず、御前へ出るを止られたと、嘆くのは冥加ない。謹愼だが宜さそうな」ト言ふのも聞かず老たる女、火鉢引寄せ、吐息をつき、「羨ましいは水原殿。前度からして爰の勤め私どもと同じ年頃はや六十に近けれど男の髮を結ふ事が上手な故に、御所樣のお髮を上げに、去年から室町へ上られて、今程はよい身の上、夫に引かへ浮々と、爰に居るほど老人と、若き者には蔑

○吉彌風　俳優玉村吉彌の帶の結方。だらりと下げた帶。
○懸盤　食器をのせる臺。
○折敷　へぎ製の角盆。飯器をのせるもの。
○天目茶椀　茶道に用ふる茶椀なるが普通の茶椀をも稱よる。
○そへ　副食物。
○哀れに寒き年なる哉　「哀れさも寒き年かな。命長ければ、かゝる世にも會ふものなりけりとて、打泣くもあり。故宮おはしましゝ世を、などてからしと思ひけん、かく頼みなくても過ぐる物成けりとて、飛立ちぬべく震ふもあり。さまぐ\に人わろき事どもを、愛へあへるを聞給ふも、片腹痛ければ、立ちのきて、たゞ今おはするやうにて、打敲き給ふ」。（源氏物語「末摘花」）
○義勝公　當館の主稲舟の父。義政の兄にして光氏には伯父に當る。

られ、花も咲ざる枯木の枝、焚木となるこそ増ならめ。ト憂へあへるを聞給ふも、※片腹いたしと立退いて、今來る樣に光氏は打咳きつ、唐紙をほと〳〵と打叩けば、誰やと咎むる彼女の聲を、綾浮早くも聞きつけ、夫と猜して火を取直し、直に唐紙押開て、入奉つれば、光氏は今物語りし女を、近々と打見るに、※鄙だる限りにて、※白灰がちになりたる火桶を、貧窶しげに打まとひ、風吹荒て灯火の消にけるを點しもつけず、不斗黄昏が古寺にておそはれたりし事共を、思ひ出て見廻らすに、荒たる樣は劣らねど、彼處よりは座敷も狹く、此家には人げのあるに、少し心は慰めながら、何とやらん物凄く、氣色も長閑ならざるを、綾浮は心得て、屏風に圍ひし一間處に、光氏を伴ひつゝ過刻狀にて聞え上し山名統清、是非共に今宵は忍びて來たるべし。爰に隱れて事の樣を密に窺ひ給へかし。ト言程もなく、紅が慌忙しく走來つゝ如何してか此館の案内を知たりけん、庭の折戸を音づるゝを、誰なるらんと立出れば、一人りの男が佇み居て、予は山名統清なり、密に姬に逢せよと、物馴顏に言寄るが、可咲けれども笑ひを隱し、姬君樣は物恥を深く仕玉ふお性質、言葉少に御寢なれと、暗きお寐間へ連れて行き、押入て立退けば、有繫に男もつぎほなく、もぢ〳〵として居る樣子、密に御覽遊ばせ。ト勸められても、光氏は點頭計り、動きもせず、彼方よりは我方の見えぬ樣に襖を閉切り、明の朝彼が歸りを透見して慰まん。ト頓て寐屋を設けさせ、枕はとれども、始めにも記すが如きの荒館、柱の曲み戸の※ひずみ、稍ともすれば風

〇片腹いたし　傍痛（かたはらいたし）に見て、笑止なり、といふのが元來の意。此處では氣の毒だの意。

〇鄙たる限りにて　「侍従は、齋院に參り通ふ若人にて、此頃は無かりけり。いとゞしう、みやびかう鄙びたる限りにて、見ならはぬ心地ぞする。いとゞ憂ふなりつる。雪かきたれいみじう降りけり。空の氣色烈しう風吹き荒れて、大殿油消えにけるを、ともしつくる人も無し。かの物に襲はれし折思し出られて、荒れたるさまは劣らざめるを、ほどのせばう、人氣の少しあるなどに慰めたれど、凄うたて、いざとき心地する夜のさまなり。」（源氏物語、末摘花）

〇白灰　[illegible]書き、炭火がたつて白い灰を生じたものをいふ。

〇ひずみ　歪。

○踏あけたる跡もなく　雪を踏んで道を開いた跡もなく、即ち行く人もなくの意。此條は源語に見るに、辛うじて明ぬる氣色なれば、格子手づから上げ給て、前の前栽の雪を見給ふ。踏開けたる跡もなく、遙々と荒れ渡りて、いみじう淋しげなるに、ふり出て行かん事も哀にて、をかしき程の空も見給へ。盡きせぬ御心の隔こそわりなけれと、恨み聞え給ふ。まだほの暗けれど、雪の光に、いとゞ清らに若う見え給ふを、老人ども笑みさかえて見奉る。はや出させ給へ。味氣なし。心美しきこそなど教へ聞ゆれば、流石に人の聞ゆる事をえ否び給はぬ御心にて、とかう引繕ひてゐざり出給へり」（末摘花）

を吹入れ、降間に解る春の雪、軒端漏來る滴の音の、耳について眠られず。代をも治めん姫なるを、斯く埋れて過行くは、是非なき事にあんなれと、頻りに哀れを催して、人知れず袖を濡し、偶の逢瀬と、綾浮が繭々と物語るも、只夫なりに聞流し、春とは云へど、未だ永き夜すがら嘆き居たりけり。

辛うじて夜も明ぬる氣色なれば、起出つ、手づから雨戸を押開けて、庭の雪を見渡すに、踏あけたる跡もなく、遙々と荒渡り、最淋しげなる有樣にて、夜は未だ全く明やらず、微晴けれど、降積る雪の光にいとゞ猶、清らに見ゆる光氏が、姿を障子の隙間より、彼の古くより仕へたる、老人輩は差覗き、身の憂事も忘れ果、打笑つゝ詠め居たり。此時に綾浮は、御手水の湯をもて參り、今統清がお寢間より、アレ〳〵あれへ。ト敎ゆれば、光氏も身を起し、此方の一と間を窺ふに、統清は斯共知らず、今は本意を遂げたりと、喜ばしき有樣にて、緣の端まで立出つ、あら面白の雪景色、此儘歸るも心なし、姬も諸共愛へ來て、をかしき空をも見給へや。一夜にもせよ、添臥たる中に心の隔はあらじ。ト暗にて逢ひたる手探の、心得難き事あれば、見顯はさんとや思ひけん、恨み顏に言ひければ、閨の屛風を、紅が押疊んで、「姫君樣早々あれへ出させ給へ。女は心美しく、人の敎へ聞ゆる事は、辭み給はぬ者とやら。耻かしと思食すも、折にこそよれ、山名の殿が待ておいで遊ばす。ト勸められて、稻舟は小袖の衣紋引裝ひ、膝行出れば、統清は外の方を打詠む

る風情にもてなし、唯ならぬ見目づかひによく見れば、※先居丈高うして、背の長き事譬へ難し。手探りの怪しかりしが、然ればよと、胸塞り、ふと目の留るに、是について不具と見ゆるは鼻なりけり。※普賢菩薩の乗給ふ大白象の鼻の色は、赤き蓮華の如くなりと、佛經に見えたるも、斯くやと思ふばかりにて、淺聞敷迄高やかにて、先の方少し垂れ、色付たるは、笑破し柘榴の實によく似たり。面の色は降積る雪恥かしき樣ながら、餘りに白くて青みを含み。額大きく腫れたるに、夫にも勝りて下は膨み、恐ろしきまで面長なり。姿貌は痩※さらぼひ、小袖の上より、肩の骨は痛々しげに顯れて、最ほしげなる風情なれば、統淸は呆れに呆れ、何の爲めにか殘りなく、見顯しけん目惜さよ。通宵のさこの事も、今となりては胸惡き心地はしながら、珍しき有樣なるに、猶つく〴〵※髮のかゝりを打見れば、世に愛らるゝ女にも劣るまじ敷緑なるを、房やかに結上たり。着給へる衣をさへ言立るは、物云ひのさがなき樣に聞ゆれども、總て※昔の物語に、先人の裝束を記し留むる慣ひなれば、其樣を跡々云はんに、紅の綾にやあらん、緋の色さめて黄ばみたるが、猶年經て白みたるに、打重ねしは紫の是も幾年經しやらん、黒き色とも紛へるを、しどけなげに補襠りたり。又其上に虎の皮の、胴着と云へる物を着做つ、實に此皮は淸かにて、かうばしき迄美しければ、太刀のしり鞘敷皮には作りて、人の愛玩せど、まだ若やかなる嬋娟の裝ひにはいと似氣なし。然れども此皮なかりせば、寒げに見ゆる顏ばせを、心苦敷見るか

○先居丈高うして云々　「見ぬやうにて、この方を眺め給へれど、しり目はたゞならず、如何にぞ、打とけまさりの聊かもあらば、嬉しからんと思すも、あながちなる御心なりや。先づ居丈の高う、を背長に見え給ふに、さればよと胸つぶれぬ。打次ぎて、あな片輪と見ゆるものは御鼻成けり。ふと目ぞとまる。普賢菩薩の乗物と覺ゆ。あさましう高うのびらかに、先の方少し垂りて色づきたる事、殊の外にうたてあり。色は、雪恥づかしく白うて、さをに、額つきこよなうはれたるに、猶下がちなる面やうは、大かたおどろ〳〵しく長き成べし。痩給へること、いとおしげにさらぼひて、肩の程などは、痛げなるまで、きぬの上まで見ゆ。何に殘りなう見現しつらんと思ふものから、珍しき樣のしたれば、さすがに打見やられ給ふ。かしらつき、髮のかゝりはしも、美しげにて、めでたしと思聞ゆる人々にも、をさ〳〵劣るまじう、袿の裾にたまりて曳かれたる程一尺ばかりあまりたらんと見ゆ」（『源氏物語』末摘花）

○普賢菩薩の乗給ふ云々　「普賢菩薩乘二大白象一鼻如二赤蓮華色一」（觀普賢經）。普賢菩薩は文殊と共に釋迦の二脇士にてその右方に侍す。德利用[illegible]、仁慈[illegible]の菩薩。

○さらぼひ　おどろふ。

○さゝめ事　さゝめきごと(私語)にて、小聲でさゝやくこと。

○髪のかゝり　髪のかゝへ、

○着給へる衣をさへ　「着給へる物共をさへ、言ひたつるも、物言ひさがなきやうなれど、昔物語にも、人の御装束をこそは先づ言ひたてめれ。ゆるし色のわりなう、上じらみたる一襲、名殘なう黒き袿重ねて、上衣には、ふるきの皮、いと清らにかうばしきを着給へり。古代のゆへづきたる御装束なれど、なを若やかなる女の、御装ひには、似げなう、おどろ〳〵しき事、いともてはやされたり。されど、げに此の皮なうては寒からましと見ゆる御顔ざまなるを、心苦しと見給ふ。何事も言はれ給はず、我さへ口閉ぢたる心地し給へど、例のしゞまも試みんと、とかう聞え給ふに、いたう恥ぢらひて、口覆ひし給へるさへ、鄙び古めかしう、事々しく、儀式官の練出たる臂もち覺えて、流石に打笑み給へる氣色、はしたなうすゞろびたり。いとをしく哀にて、いとゞ急ぎ出給ふ」源氏物語末摘花

○さがなき　よくない。わるい。こゝはさり立てゝ言ふのはわるい樣に見えようがの意。

○からばしき　香「かぐは」しきの音便。善い香りのする樣だ。

○浮世又平　岩佐又兵衛勝以のこと。之を浮世又平と云つたことは、其[illegible]に見えてゐる。又兵衛は[illegible]土佐派を學んで多くの作風の畫を描いてゐるが、浮世の風俗畫をも描いたところから世に浮世又平とも稱したと見える。[illegible]京にゐて、後、越前の福井に移り、其後將軍家光の召に應じて江戸に下つた。

らに、統清左右の言葉もなく、暫しが程は茫然と佇て居たりしが、今更捨ても置難く、傍らに押直り、物言懸けて心見れば、只いたう恥らひつ、袖をもて口元を覆ひ隠すも古めかしく。彼浮世又平が畫たる屏風の女畫に魂入て立出なば、斯もあらんと思ひ合せ、重ねて通はん心も失はて、口に任せて戯事を種々に言懸くれば、流石に打笑給へる氣色、いと仂なく、姫君と人の敬ひ冊ける人品には似合しからず、室町殿にて捨置かるゝも道理なりと、統清は心の裡に興を醒し、急ぎて其處を立出けるが、宵に駕を舁入させし門は、まだ開ざりければ、鍵預りの者やあると、統清が家來輩、そこらを尋ね廻りければ、雪を重げに積なして、今や倒れんとする小家より、老さらぼひて海老の如く腰屈りたる一人の男、顔も肌も煤けたるが、寒しと思へる氣色深く、箱めきて怪しき物に、火を微に入たるを、袖ぐくみに持、「アラ冷たや。ト足をつまだて、漸々に出來たり、「門の番は予にて候。いで開て進らせん。ト言ひつゝ、鍵を取出せど、手は屈り目は疎く、錠の開ぬに氣を焦ち、「娘が家に在ける中は、箇樣の時は力とも、助け共なりたるが、去年より姫君のお側使ひに召呼ばれ、世にいふ有難迷惑とは、斯る事にやあらん。など一人り言に打私語き、果しなき有樣な

るを、山名の供人もどかしがり、立寄て門引開け、舁出す乘物の簾を上げて統清も、何心なく門番の翁の顏を打見るに、其鼻いと赤かりければ、寒しと見えつる稻舟の面影をふと思ひ出し、打微笑つゝ歸りけり。

紅此方へ走り來たり「今統清が姫君の御顏容を始めて見やり、常も圓くて大きな目を、猶見張たる其可咲さ、漸堪へて居ました。ト袖を口に押當て、笑ひ轉びつ、光氏に樣子を語れば、つと座を立ち「予も襖の蔭よりして、始終の事共よく聞けり。先づ稻舟に對面せん。ト襖押開け、彼處に入り「統清との新枕、如何なる事を語りしか、聞かせ給へ。ト寄添へど、姫は顏を打赧め、左右の返事もなき處へ、屛風の蔭より杉生は、早百合を誘ひ、徐に立出で「二度ある事は三度目に、又若君のお胸の裡、承はりに參りました。御物思ひのお紛れに、綾泙を爰に据置き、通ひ給ふは聞えながら、其綾泙に姫君の御返事を認めさせ、山名三郎統清を、此お館へ招きよせ、貴公さへ大切に思食して、御添臥を遊ばさぬ稻舟樣に、逢せ給ふと云ふ事を、是なる早百合が常の通り、知せを聞きて、宵より是へ上りまして、何かの樣子は承まはつて居ました。御用意深い貴公の事、よもや眞の姫君では、彼者は御座りますまい。何卒眞の稻舟樣の、御在家を承はり「ヲヽ安堵したいと言ふのであらう。綾泙早百合其外の腰元輩も必ずとも、此事人に漏すな。ト口堅めしつゝ、紅が手を取て上座へ直し「早くも世を去給ひたる、義勝公の御嫡女、稻舟姫にお目見え致

せ」ト聞いて、杉生始めとし、在合人々うち驚き、「左様なら只今まで、紅殿と、朋輩の懇接にした貴娘が眞の、「ウヽ其譯を語つて聞せん」杉生には先つ頃も、心腹を告げつる如く、男子ならば世を取るべき血筋にて有ながら、此處に埋れて、賴もしき人も無き有樣を見るに堪へかね、人目を包み、吾儕は疎からず問寄りしが、宗全が事よりして、思ひ捨ては止難き事のみ彌出來れり」其仔細は彼統清、常に窺ひ來る有樣。是れあながちに稻舟に心を懸る計りに非ず。隙を窺ひ奪ひ隱し、此姫を護立る樣にもてなし、謀反を企て、主に乃向ふ無道者と、世に譏る人口を、且つは阻ぎ且つは又人質とする計策と、思ひ計りて、古くより爰に仕へて姫の面體、見知たる女輩は、悉く前を遠ざけ、側仕への女輩を、新に爰へ進らせよと、杉生に吩咐つ、早稻舟の年の程は、※立待居待も過ぎたれども、猶若やかに見ゆるをさいはひ、まだ幼げなる腰元の姿にやつさせ。夫ぞとは内外の者に包み置き、さて姫の代りには、誰をかせんと案ぜしが、尋常の女にては、統清が盗み出し、其後詮議もむづかしと、思案を廻らし、あの如く不具に近き女を見出し、傅かせて置きたるが、思ふに違はず、繁々に統清狀を送りしかば、引入れて逢せしに、人々も見し如く、興醒顏に歸りし樣子。思ひ絶たんは必定なり。假令ば戀慕の事は差置き、かの人質のために山名の館へ盜み行くとも、あの女は、顏の可咲のみならず、心も愚鈍の性質。何を問うても※生度なく、持てあぐみて返すならん。返す／＼も此事は、深く隱して茲に列なる、其餘の者には沙汰す

〇立待居待　立待は立待月の略、十七日の月。居待は居待月、十八日の月。依つて、十七、十八の歳の意に云ふ。

〇生度なく　宛字か。しやうどは行きつくべき先の所、目的とするところで、要領を得ないこと。つきとめたところのないこと。

るな。ト說諭し給ひければ、杉生掌侍と打笑ひ、「紅殿を姬君とは、承はりしが始めてなれど、其樣な事であらうと、大方は推量し、お尋ね申して彌安堵して今迄姬君になつて居たあの女子は、「アリヤ統淸が歸る時、鍵を持て開けに出た門番の親父の娘。併し年が若過れば、孫かも知ぬが、何にせよ、去年まであの小家に一つに住でゐた女。鼻の先が赤いとて、誰言ふとなく紅と仇名に呼だを、稻舟の名にして、是から姬君に、手前は成て居るのぢやと、言聞せたら喜んで、行儀つくつて居る可咲さ。併し心は※ずんど正直、己が素性を詰したとて、手前達が蔑つて、彼を阿房にしてはならぬ。今までよりも大切に、仕へて居るが家の爲。始めて彼を稻舟の、姿につくつた其時から、隨分顏は隱して居ろと、吩附ては置きたれど、朝夕側に居る早百合、見ぬ事もあるまいが、去年の秋淸水で、姬の器量の何樣ぢやと、己が問うた其時に、種瓢に目鼻とやら、取るべき方なき御有樣と、明々地にも答へ難く、隱潜みておはすれば、其顏容は能も知ずと、言紛らして居る可咲さ。山名を計る其餘りが、思ひ懸なき人へかかり、心苦敷ありつらん。ト言ひつゝ光氏四下を見廻し、「益もなき長談話。前より仕へし老人に、見付られては詮方なし。又々席を改めて、稻舟殿は腰元紅。門番の紅は、元の如くに稻舟姬。ト褥の上に押直せば、愚なる身の淺ましさ、然迄恥らふ氣色もなく、臙息引寄せ面杖つき、扇を手だまに打かへし、餘念もなげに遊び居たり。光氏は近くより、「愛の館へ吾儕が、通ふと人に知らするため、折々は

○ずんど正直　ずんどはずつとの音便。素に抽き出でゐることに依つて馬鹿正直位の意。

○男めきて書きたるは　「源氏物語」には「日々に黄ばみたるに、紫の紙の年經にければ、灰をくれ古めいたるに、御手は流石に文字强う、中さだのすぢにて、上下ひさしく書い給へり。見る甲斐無ふ打置き給ふ」（末摘花）とある。

○直直と　すぐぢかに。うちつけに。

○さすや朝日軒の氷柱は解ながら　「ゆるしなき御氣色なれば、

汝よりも、書を送りて音づれよ。足らはぬ筆も又興あり、綾浮必ず教ゆるな。ト宣へば、綾浮が被布を、光氏に引きかけて進らせながら、「何日ぞや早百合がもて參りし、姫君の御狀も、御代筆は致しませず、お一人りでお認め。」ヲヽ然もあらん、強々しく上下をきつと揃へ、※男めきて書きたるは、鍵預りの彼親父が手本を、姫は習ひつらん。若し統淸が又來たらば、※直直と打解けず、猶ゆるしなき氣色にもてなし、無情など男に嘆たせ、氣をもたするが戀の秘事。心得たるか稻舟。ト左右聞え給へども、例の無言に物云はねば、可咲も哀れにも、打見やりつゝ、光氏が、（※さすや朝日軒の氷柱は解ながら）ト打解ざりし心をこめ、口ずさみ給ひければ、只ムヽと笑ふのみ、口重げなる風情なれば、其儘に捨置つ。

紅の事懇切に、綾浮早百合に賴み置き、杉生にも暇を告げ、そこを立出給ひけるが、宵に駕を寄せさせし、※庭口の門なんどは、危きまでにいたう曲み、扉は朽ちて倒れたり。大方の有樣は、夜目にもしるく見ゆれども、猶隱れたる事も多かり。今朝は雪も降止て、日は高う差昇り、殘りなく見渡さるゝに、哀れに淋しう荒まさり、只松の雪のみ暖和に降積り、山里の心地して、葎の門とは箇樣なる處をこそ言ふべけれ。去年よりふと心づき、己れが密に貢ぎしも、姫を哀れと思したる、義勝君の魂魄の導き給ふものならんと、心の裡に思ひつゝ、※橘の木の枝重げに、降り積雪に埋れたるを、早百合を召して拂はせ給へば、拂はぬ松も羨み顏に、己れと一人り起返り、梢よりさと溢るゝ雪も、※なにたつ末の松山か。

辛うなごことつけて

朝日さす軒のたるひは解けながらなどかつらゝの結ぼほるらん」と宣へど、たゞむゝと、打笑ひて、いと口重げなるもいとおしければ、出給ひぬ」。（『源氏物語』末摘花）

○庭口の門なんどは云々　『源語』末摘花の卷に「御車寄せたる中門の、いといたうゆがみよろぼひて、夜目にこそしるきながらも、よろづ隱ろへたること多かりけれ。いと哀に淋しう荒惑へるに、松の雪のみ暖げに降積める、山里の心地して、物哀なるを、かの人々の言ひし、葎のかどは、かやうなる所也けんかし」とある。

○橘の木の枝重げに云々　此處、『源氏物語』をそつくり意譯してゐる　近松門左衛門が擬人法の例證として用ひたる名文である。「橘の木の埋もれたる、御隨身召して拂はせ給ふ。羨み顏に松の木のをのれ起返りて、ざとこぼるゝ雪も名に立つ末のと見ゆるなどを、いと深からず共、なだらかなる程にあへしらはん人もがなと見給ふ」。（末摘花）

○なにたつ末　『後撰和歌集』卷十に、「男のもとに遣はしける、土佐、我袖はなにたつ末の松山か空よりなみのこえぬ日はなし」

空より浪の越ぬ日ぞなき。と云へる歌の心も思ひ合され、立返りて見給へば、戀ならねども我袖は、濡さじものと早百合は飛退き、打ふるひてぞ居たりける。光氏館へ歸りて後、惟吉に宣ふやう、「去年より屢次稲舟を音づれたれど、何日とても夜のみ通ひて、明ぬ中忍びて歸るは知る如し。今日は偶統清を遣過さんと思ふから、日の差出づるも厭ひなく、態ひて立出つ、東の雨戸を押開くに、向方なる長廊下は、家根もなく荒破たれば、日のあし程なく差入て、宵より積りし塵の光、定かに見れば、なか〳〵に哀れさまさりて覺ゆるなり。姫を始め、人々の衣も古びて見苦しゝ。ト假に姫と册きおく、鍵預りの彼娘へは、彼虎の皮ならぬ、※純子三本紅絹五疋、綿迄も取揃へ、宵に寒さを打嘆きし、古くより仕へたる女輩へは、帯小袖、門を守る翁のたゞまで、思ひやりつゝ、上下の程々を能分ち、いづれもいづれも悦ぶべき物を數多送り遣はし、人に包みて、稲舟の後見なして養まんと、心を盡すを、夫と知らぬ、二葉の上の傅きなんどは、又例の若君の、打解わざをし給ふと、密々語合ひたりけり。

常の一ト間に光氏は、長閑に詠めて居る處へ、紫を仕せ置たる、※西の亭より言の葉參れり。彼は元來添臥をしたる中にはあらざれど、※鞍馬山より物言馴れ、腰元の女よりも、心安き心地して、召仕ひなどし給ひつ。此頃はとりわけて男の髪を結ひ覺え、夫らの事にて、光氏の呼ざる時も、折々に御前へ出しかば、此方にも心を置かず、彼方も左迄憚らず、近

○純子三本　大黒屋の暖簾の文句を洒落に用ひたのである。其の暖簾に云ふ、「純子大黒、襲合に、一揃の虎皮を身請けする。純子三本紅絹五疋、綿の代まで相添へて、揚屋半四へ贈らるる云々」。

○西の亭より言の葉参れり　此の頃「源語」にては大輔の命婦来りて、常陸宮からの手紙を源氏に渡す事になつてゐる。「内の御とのゐ所におはしますに、大輔の命婦参れり。御けづり櫛などには、懸想だつ筋なう心安きものゝ、流石に宣ひ戯れなどして使ひならし給へれば、召しなき時も聞ゆべきことある折は、まうのぼりけり。怪しき事の侍るを、聞えさせざらんも僻々しう思ひ給へ煩ひてこ、ほほゑみて聞えやらぬを、何ざまの事ぞ、我には包む事あらじとなん思ふと宣へば、如何は。みづからの愁へはかしこくとも、先づこそは。これはいと聞えさせにくくなんといたうこと籠めたれば、例のえんなりと憎み給ふ。かの宮より侍る御文とて取出でたり。ましてこれは取隠すべき事かはとて、取給ふも胸つぶる。陸奥紙の厚ごえたるに、匂ひばかりは深うしめ給へり。いとよう書きおほせたり。歌も
から衣きみが心のつらければ袂は

かくぞそぼちつゝのみ、心得ず打傾き給へるに、つゝみに衣筥の重りかに、古代なる打置きて押出たり」。（末摘花）

○鞍馬山より物言馴れ　北山の鞍馬寺の麓の野中の里に紫の住家があつた。言の葉が、此の紫の侍女として野中の里に居つた頃からといふのである。

○沈香　又ぢんとも略稱する。熱地に産する香木の一。

○丁子　丁香「ちやうかう」ともいふ熱帯産の木の實。香料、薬材とする。

く寄て手をつかへ「可咲き事の侍るを、申し上ぬも如何なれど、又聞えんも恥かし。ト微笑て言やらねば「夫は如何なる事にかあらん。三筋町に在し時、言かはしたる男より、是非に此方へ來たれよと、人に言傳け言寄たるや。予には包む事はあらじ。物言ひかけて詞をこめ、恥らふも年によれ、何れ仇めく事なるを、然あらぬ顔の憎さよ。ト言はれて、言の葉差俯き「わが身の事に侍らば、お輕蔑遊ばすまでも申し上げも致しませうが、是は夫には引かへて。ト尙打笑ひて「稲舟樣より貴方樣への御狀。ト懷中より取出たり「さまで是は取隱す物にもあらぬを、事ありさうに云たるは、却て可笑。ト打開いて見玉ふに、陸奥にてや漉たりけん、紙の肌も美しからず、厚く肥えて白からぬに、※沈香丁子の類ならん、懷しからざる匂ひを焚しめ、彼強々しき艶なき手にて、漸に書き果せたれば、發句も又夫に次いで、（から衣つらくと君が砧かな）「アラ心得ざる發句なり。ト打かたぶき給ひければ、言の葉は妹の小辨に持せ來りし最重き、帛紗包みを取出させ、御前に差置くを、光氏頓て開き見るに、今は世に用ひざる衣箱といふ物なり。から衣とは此事ならんと、一人笑して居給へば、言の葉は聲を密め「紫樣へ綾汗より、御手遊の類の物を、屢次に進らすれど、私は未だ綾汗に、一度も逢たる事はなし。其禮がてら稲舟樣へお目見えも願ひたく、昨日紀の御殿へ、始めて上り侍りしが、興の醒たる事と言ふは、先づ姫君の御前へ出、御有樣を見上げるに、扇を額に翳させ給ひし、其外れより溢れ出し、髮のかかりの美し

さに引變て、御鼻の色付きたるは見るも不快く、夢かと思ひて御次へ辷り出れば、其お狀と、此箱を中に置き、お腰元が取圍み、是を何して若君へ上げられるものかいなと、紅とか云ふ若き女子が、顏を赤めて打笑へば、然ばとて光氏君の御裝ひにと姫君が態々とお取寄せ、此儘に捨置かば、お心ざしも空からんと、綾浮が云うてなれど、其お使ひには私かといふ者もなく逡巡ばかり、早百合がふつと心づき、此頃までは一つに住み、親しい中の言の葉殿、爰に居るのはよいついで、歸り給ふ其時にと、言づけられて詮方なう、持て參りは參りながら、稻舟樣へは一方ならず、君の御不便かけ給ふと、世の噂とは大きな違ひ、三筋町の局にも、彼樣のはない御顏容、葛籠ならねど此箱も、見懸よりは重さ／＼、化物が出ようも知れぬ、皆の者が讓合ひ、お使ひを厭がつたは、何ぞ譯のある事と、夫故御目に懸ぬうち、可笑き事の侍ると、申したに違ひなく、お狀をお讀遊ばすと、何か莞爾お一人笑み、少しお見せ遊ばしませと、差覗けば、光氏は態と我身を嘆ち事、「一人轉寢の夜每夜每、濡たる袖をまき乾さん。人もなき身を此の如く、訪るゝ事の嬉しさよ」此儘にして捨置かば、姫も悲しく思はんに、能ぞ言の葉持て來る。さりながら繰返し吟ずれば吟ずるほど、あら淺ましの發句やな。呆れて物も云難し、くちなし色のはな紅葉と、物陰にて答へしは、綾浮が執成ならんが、此から衣は姫の手織、筆も字太に強々し、然は云へ己れが心には是を砧に打柔らげ、心を盡して仕立しものを、眞にたまの言の葉とは、是をこそ

「濡たる袖をまき乾さん　「源氏物語」末摘の文の後に大輔の命婦が、これをいかでかは、片腹痛く思ひ給へざらんとて、元日の御裝束と、わざと侍めるを、はしたなうはえ返し侍らず。ひとりひきこめ侍らんも、人の御心たがひ侍べければ、御覽ぜさせてこそはと云々。といふに對し、實長の歌を詠して之に續け「引こめられなんはからかりなまし。袖まき干さん人もなき身に、いとうれしき志にこそはと宣ひて、ここに物言はれ給はず。……淺ましの口つきや、これこそは手づからの御事の限りなめれ。侍從こそは取直すべかめれ。……と言ふ甲斐なく思す。心を盡し讀出給へらん程を思すに、いともかしこき方とは、これをも言ふべかりけりと、ほゝ笑みて見給ふを、命婦面赤みて見奉る。今樣色のえ許すまじく、つやなう古めきたる、直衣の裏うへひとしうこまやかなる、いとなをなをしう、つまづまぞ見えたる。淺ましと思すに、此文をひろげながら、端に、手習ひすさび給を、そばめに見れは　なつかしき色ともなしに何にこの末つむ花を袖にふれけん、色濃き花と見しかども　など、書けがし給ふ。花のとがめを、なほあるやうあらんと思ひ合する折々の月影などをいとおしき物から、をかしう思ひなりぬ」。（末摘花。

云ふべけれ。去頃一度おこせし狀は、筆尻を紅が、持添てや書せけん、是よりは宜かりし。ト微笑みて見給ひつ。彼箱を打開けば、絹の光澤なう古めきて、二百年計り前に、世に流行たる※結柴小紋の、就中細かなるを、※黑紅に染めなして、鹿の角と山蜂を、五寸許の大きさの紋につけたる羽織なり。淺ましと傍に投やり、彼狀を廣げながら、手習ふ樣に其端へ書付るを、言の葉が傍らより打見れば、「〽統淸に代りて、(袖に觸て思へばくやし紅の花)色濃はなと見しかども」と書汚し給ひけり。言の葉は其故をよくも知らねど、彼鼻の咎めならんと心に可笑く、投やり給ひし羽織を取つて、つく〴〵と打詠め、包の裡を開かねば如何なる品か知ざれど、斯る物を若君の御目に觸しは、われまでも、心なしとや覺さんかと、いと耻かしく、人々の參るに驚き取隱し、「斯淺ましく古たる衣を送り給ひし、姫君の御心根の不審さよ。ト打かすめつゝ小聲に云ひ、御前を立たんと做ければ、「予も事に打紛れ、昨日よりして紫の許を一度も音づれず、いざ諸共に行かん。とて言の葉を引連つ、頓て西の亭へ赴き、紫の體を見るに、眉鮮明に額を造り、顏いと白く、頰の邊り少し紅の色を含むは、彼稻舟が鼻の赤く匂はしきには引かへて、未だ※かたおひの大人とは見えねど艶に美しう、倘年立て鐵漿を附なば、然こそと思ひやる、口元のいと愛らしく、※留奇南は梅が香を散す。縫の櫻も嫋々に、振の袂へ枝垂れて、柳の腰に着なしゝは、てしかなと云ふ三つの願ひも、宛然揃ふ思ひしつ、心苦しき事どもも、これにぞ少し忘れける。言の

○くちなし色のはぢ紅葉　口から出る詞がなく、山梔色に掛く、恥ぢて顏が紅葉するといふ意であらう。本書第八編に、光氏が始めて稻舟の許に忍んだ時の事、光氏が障子の外から色々と稻舟に言ひよつたが、答へがない。打嘆いて「蝶々のしゞまに負けて秋の蟬」と讀めば、「稻舟は是にさへ、更に答へをし給はねば、綾淸側よりさし寄りて、「入相やくちなし色のはぢ紅葉」と若やかにはすはなる聲して姫にはあらぬやうに、吟じあぐれば……光氏は綾淸なりとは心付かず云々」と言つてゐる。

○結柴小紋　柴垣のやうな模樣をつけた小紋、

○黑紅　下地を紅にして黑色に染めたるもの。

○かたおひ　片生。幼少の意。

○留奇南　香木を焼きて、衣服に薰ゆらすること。又其の匂を襲又は小袖等に留むること。

○亂箱　衣類をたたみて入れるもの。

○後れ　後れ毛。

○鼻の處に紅をつけ「……繪など書きて色どり給ふ、萬づにおかしうすさび散らし給けり。我も書添へ給ふ。髮いと長き女を書き給ひて、鼻に紅をつけて見給ふに、かたに書きても見ま憂きさましたる、わが御影の、鏡臺に寫れるが、いと清らなるを見給ひて、手づから此末鼻を書きつけ、匂はして見給ふに、かくよき顔だに、さて交れらんは見苦しかるべかりけり。姫君見ていみじく笑ひ給。まろが斯くかたわに成なん時如何ならんと宣へば、うたてこそあらめとて、さもや、しみ着かむとあやうく思ひ給へり。空のごひをして、更にこそ白まね。ようなきすさびなりや、内に如何に宣はんとすらんと、いとまめやかに宣ふを、いといとおしと思して、寄りてのごひ給へば、平仲がやうに、色どり添へ給な。赤からんはあへなんと戯ぶれ給さま、いとおかしき妹背と見え給へり」。(『源氏物語』末摘花)

葉は小辨をよび、御鏡臺から櫛笥、亂箱等取寄せさせ、光氏の御背方へ立廻れば、振返り、一髮は昨日結ひたれば、今日は後れを搔上げて、撫付て置べし。ト宣ふを、心得て、御鬢ぐきの亂雜なきを理ひなどする傍らに、紫は例の如く、雛遊びに餘念なく、畫などかきて色どるにぞ、予もともにと、光氏もすり寄りて筆をとり、背丈は高く瘦たる女の姿畫をかきなして、鼻の處に紅をつけ、打置いて見給ふに、畫にかきてさへをかしげなれば、ひとり心に微笑まれ、己れが影の鏡臺にうつれるにふと目を留め、手づから鼻を赤く染め、稻舟に比べなば、予も少しは好顏ならん。夫だにもこの鼻の先を、匂はしたるは見苦敷を、況て色は靑白く、長き面廣き額、親しく見るより、統淸が興を醒して歸りしも道理なりと思ひつゝ、つく〴〵と眺むれば、言の葉は彼姬君の姿を畫き、鼻を染め、御戲れにその眞似をさせ給ふと、心はつけど、打出しては言難く、可笑さ堪へ、袖をもて口に覆ひて物云はず。紫は其故を知ねば、背方に延上り、鏡にうつる光氏の顏をつら〳〵差覗き、「何の眞似をか仕給ふ。ト聲打揚げて笑ひければ、光氏は此方を見返り、「若吾儕が此樣に不具にならば如何ならん。ト問はせ給ふに、紫は眉を顰めて吐息をつき、「夫こそ悲しく侍らめ。若し染付て脫ぬとわるい、其樣な事は廢にして。ト危く思ふ氣色なれば、光氏態と紙をもて、落ぬ程に押拭ひ、「如何にも其方の云ふ通り、元の樣には白くならぬ。益なき事をなしてけり。室町の父君に何と言譯なすべき。ト眞しやかに云ひければ、紫は憂しき事と思ひて、振袖へ

鬢水入の水をつけ、立寄て押拭へば、光氏は莞爾と笑み「昔し平仲と言ひし者、泣眞似をして女に見せんと、硯水をつけたるを、女が夫と心づき、密と墨をすりたるを知ずに、尚も目へ摺付け、顔を黒く染めたるは、墨塗と云ふ狂言にまなびて今もする事なり。其様に押拭ひ、尚々紅を散すまい。赤き物はあやかると、諺にも言ふなれば、我顔中を紅に染なす時は、平仲が墨にも増して見苦し」ト戯れ給ふを、言の葉は可笑き妹脊の御交情と、思ひなしつゝ立上り、「今日は空も晴れたるに、かく垂籠ておはしなば、御心も結ぼれなん」トやをら障子を押開れば、※日は麗かに風も絶え、いつしか花は咲出んと、心もとなき梢々に引渡したる霞の中にも、梅は早氣色ばみ、微笑みたるもよく見えぬ。籬の許の紅梅は、いと早く咲花にて、色付しを光氏見やりて、(紅の花は見憂きぞ梅ながら) トひとり言して何やらん、打うめきてぞ居給ひける。彼腰元の紅と、身をやつしたる眞の稻舟、假に姫と傅きゐる、門守の翁の娘。斯る人の末々は如何なりけんか蓬生の巻に至りて委細云ふべし。

末摘花の巻全く畢んぬ。

(是より紅葉の賀の巻の說殘したる事へ移れり)

藤の方の御懷胎、既に師走も過ぎにしかば、此月はと杉生始め、附々は待聞え、室町にても其設け頻りなりしが、氣色もなく、睦月もつれなく經行ぬ。物の祟りにおはするか

○平仲　平安朝時代の歌物語に「平仲物語」といふのがある。その說話物語の主人公は在原業平と好一對の好色風流の歌人と考へられた人物。多く失戀の話で、多少滑稽的に扱つてある。

○墨塗と云ふ狂言　「墨塗女」。或大名の思ひ者が別れを惜しみ、猪口の水を目につけて空涙を流す。從者これを知つて猪口へ墨を入れると、女は之を知らずに墨を塗つて黑々となるといふ筋。

○日は麗かに風も絶え　「日のいと麗かなるに、何時しかと霞み渡れる梢どもの、心許なき中にも、梅は氣色ばみほゝ笑み渡れる、取分きて見ゆ。はしがくしのもとの紅梅いと疾く咲く花にて、色づきにけり、

くれなゐの花ぞあやなくうとまるゝ梅の立枝は懷かしけれど、いでやとあいなく打うめかれ給ふ。かゝる人々の末々いかなりけむ」。(『源氏物語』末摘花)

と、人々の言騒ぐに、藤の方は猶侘しう、最苦敷て惱みまさり、室町へは歸りやらず、彼音川の下館に引籠りて居たりしかば、義政の苦慮大方ならず、光氏も夫とはなしに、加持祈禱抔せさせけるが、其驗にや如月の十日餘りに、安々と男御子をぞ産給ひぬ。此所の館に附添る人々は、言ふも更なり、御所に仕ふる面々も、悦び聞えて、其所此所より、使者は門に市をなし、騒が敷まで賑ひければ、光氏は其人の絶間を窺ひ、彼處へゆき、杉生に對面し、先づ平産の喜びを仔細と述べて後、「如何なる樣かと父公の、覺束ながり給ふ事、昨日に今日は猶勝れり。いで其御子を予に見せよ、樣子を直に言上せん。」ト言ふのを聞きて、杉生は少し進みて面を上げ、「生れ給ひてお日數も經ざる中は、清からぬ御顏容を御目近く見せ奉つるは憚りあり。夫のみならず若君の是へお來なされし樣子、若や藤の御方が知らせ給はゞ、御産後の御惱みの障とならん。早々御歸り遊ばせ。」トいとはしたなく差放ちて聞え上げれば、不興げに「夫は如何なる故なるぞ。」ト問はれて聲を打密め、「然も無事をも言續け、譏を附くるは人の口。殊に貴方は怪しかりし御過失を世に知らせ、浮名を漏すが御望み。藤の方も其事は、能御合點を被成てなれど、女の果敢ないお心では、いと憂事と思し續け、早身二ツになる上は、浮世に思ふ事もなし、寧その事に此疾が重つて、妾は死たいと、おむづかるのが惘然く、私が申すには、光氏君の御事さへ、呪ふ樣に富徽樣が仰せありしと、紅葉見よりお歸りの後御物語り。然すれば貴孃が此儘に果敢なく過行給ひ

なば、内君始め其附々いと好事と笑ひやせん。夫口惜しと思食し、早御本復遊ばせと、お力を附てより、お心もさわやいで、お案事遊ばす程ではない。室町へお歸りも、最遠からぬ中の事。お出生なされた和子樣をば、其時御覽遊ばせ。トすげなき體に、光氏は言葉を盡し言ふとても甲斐はあらじと、暇を告げ、立上れば、杉生が後方に控へし腰元司、「御誕生の若樣と、光氏君の御顏ばせ。珍敷程似申して。トまだ若やかなる心から、辨へもなく云出づるに、はつと思ひて杉生は袖を引いて押止むるを、光氏は見ず聞かぬ風情にもてなし歸りけり。四月になりて、藤の方室町へ歸り給へり。義政始めて其子を見るに、誕生ありて未だ漸く三月目なれど、其程に較ては體も大きく、智慧附のいと早くて、起返り抔もしつ。顏の樣子は光氏が生れ出し其時の有樣に露違はず、同じ光に見えければ、疵無き玉の思ひして、其喜び面に現れ、眞は花滿中將の遺子の藤の方、其腹に生たれば、母の素性も耻かしからじと、寵愛する事大方ならず。光氏此由聞くよりも、直樣に御所へ赴き、藤の方の産後の惱み餘波なくさわやぎ給ひ歸られたる祝詞を、表立ちて杉生の許迄狀にて言遣りけるが、折よく義政彼處に在りて彼幼子を傅きの女に抱かせ立出給ひ、「ヲヽ光氏か能こそ能こそ。我數多の子は持ちしかど、産所を離れて日を經らず、斯る程より明暮に見たるは御身のみにてあり。思ひなしにや、此子の顏最よく汝に似たる故、猶寵愛しく思ふなり。幼少中は何の兒も、斯るものや有らんとて、只管愛し給ひければ、光氏ははつと

○恐ろ敷も忝けなくも云々　「例の中將の君此方にて御遊などし給に、抱き出で奉らせ給て、皇子たち數多あれど、そこをのみなん、かゝる程より明暮見し。されば、思ひ渡さるゝにやあらん、いとよくこそ覺えたれ。小さき程は、皆かくのみあるわざにやあらむとて、いみじく美しと思ひ聞えさせ給へり。中將の君面の色も變る心地して、恐ろしう、忝けなく、嬉しくも哀れにも、かたがたうつろふ心地して、涙落ちぬべし。物語などして打笑み給へるが、いとゆゝしう美しきに、我身ながらこれに似たらんは、いみじう痛はしう覺ゆるぞあながちなるや。宮はわりなくかたはら痛きに、汗も流れてぞおはしける。中將は中々なる心地の、かき亂るやうなれば、まかで給ひぬ」（源氏物語紅葉賀）
○白糸　かこ書頭の侍女小間

計り恐ろ敷も忝けなくも、嬉しくも哀れにも、種々に思ひ亂れ、落る涙を押隱し、手遊びの振鼓を差翳して、熟〻見れば、彼幼子は夫に月の移りやすらん、莞爾と笑へる顏の美しきに、我身ながらも此兒に似たらんには惜からぬ、幼だちにてありしならんと、心奢のするにつけ、母花桐の事をさへ思ひ出して、見上ぐれば、義政は猶彼兒と光氏の面を見比べ、餘念もなげの有樣なれば、愚なる身を斯迄も愛し給はる父君の、其御心に背かんと、態と浮名を世に流すは、如何なる因果にあるやらんと、心地も宛然かき亂る樣なれば、御前をたち、常に通はぬ長廊下へ、ふと行懸りて何氣なく、差覗いて見給ふに、此處は富徽の前の傅きの女輩が、集る部屋と覺しくて、彼白糸が眞中に押直りて、指折數へ、藤の方の今度の御産、一ト月延たにしたところが、四月からで無れば合ぬ。御添臥は二月限、もう其頃は古川の館へ歸りて住み給へば、怪敷事ぢや。ト打笑へば、ひとりの女が差出て、一噂に違はず。光氏樣のお子に彼は極つた。紛れの無御顏容、あれ程似申したを。思ひ懸ない事なれば、御所樣はお氣が附ず。何でもよい子は此樣な者と思うておいでの樣子。他目に見るも齒痒。ト口々語るを、光氏は、漏聞くからに豫てより覺悟の上にはありながら、今更に最苦しく、面の色も變るべき、心地なしつゝ、忍びてゐる。

又彼方には藤の方、積る思ひのやる方なき胸の裡を、光氏に密に語聞せんとや、後より密々來たりしが、是も襖に立隱れ、我身の上を聞くせつなさ。汗も流れて戻るにも、戻り

○花が咲かしイヨ八重梅が云々　この唄に就ての考證は、次の第十一編の序に「梅が咲かしイヨ八重梅か枝を手折ふりしてかならずござせトサさまをまねく夢になりとも逢たや見たや浮世おやさまれに逢夜に現か夢かかたる間もなきサンサ短夜やよしなの思ひ浮世おやさ、「松の葉」元禄十六年印本に載たる八重梅といふ曲子なり云々」と記してある。

難くて佇立けり。夫とは更に白糸が、打點頭て、片頰に笑み「夫や言いでも知た事。光氏君をも彼の様に、幼少時から御寵愛。兄公をさへ差超て、世を譲らんと遊ばしたれど、富徽様を始とし、人々も其事は承引せぬ故是非もなく、嵯峨の館に置き申すを、今もつて御所様は心苦しく思食す。其折から今度又、夫に似た子が御誕生。御成人の其後は、又お館の騒がしい事が大方起るであらう。ト四下を更に憚らぬ高聲を、光氏は有繋憎しと思ひければ、予漏聞しと彼らに知せ、物懲させんと聲打揚げ「花が咲かしイヨ八重梅が。ト唄ひすさびて出給ふを、をかしき聲ぞと女輩皆立出て見送りけり。

第十一編より第十八編に至るまでの略筋

糺にある稲舟姫の許に久しく仕へてゐた水原と云ふ老女、まことは片掻調太夫の妻で、娘綾浮を生んだが、先妻の子で、今は義政の側室となり、四郎正尚を生んで時めいてゐる千景の方を憎んだので、調太夫に離別されてゐたが、此女が小烏丸・刺筆の短冊とともに三つの寶となつてゐる玉兎の鏡を持つてゐて、之を綾浮の手から光氏に返上した。石堂馬之丞は光氏の密命を受けて、糺の館へ急ぐ途中、横死を遂ぐると見せかけたのは、まことは、山名の間者岸高頓五郎と馬刀助二人を計らんための光氏の計略であつた。此馬之丞の妻で青葉琵琶之助の娘桂樹へ光氏は陽に情を寄せるが如くしかけた。琵琶之助の妻は富徽の前の實の妹であつた。桂樹は「源氏物語」にある朧月夜内侍に擬したのである。

義政は東山の銀閣に移り、職を其子義尚に讓つたが、藤の方の寵愛は今も昔とかはらず、銀閣にてお側離れず侍つてゐた。加茂の祭の日に、二葉の上の乗物の先驅と二タ見屋の阿古木の駕籠舁との間に爭起り、阿古木の駕籠は打砕かれたので、阿古木は遺恨やる方なく、其の生靈が二葉の上を苦める。名高き驗者なども流石に持惱んでゐたが、二葉の上は男子を安産して遂に身まかつた。六條御息所と葵の上とのいきさつに擬したのである。此男子を夕霧丸と云ふ。光氏と紫の上とは夫婦の語ら

ひをする。
阿古木が近々に伊勢に下るので、光氏は野の宮の火焚家に住める仁木喜代之助の妻空衣の許に身を寄せてゐる彼女を尋ねた。空衣の繼子で母に道ならぬ戀をしてゐる川次郎が光氏とも知らで言ひ寄つて、狼狽する。老女岩根がさま〴〵と惡智恵をつける。光氏のはからひにて桂樹はもはや此世にない人と覺悟してゐた大石堂馬之丞に邂逅して喜ぶこと限りがない。然し光氏は馬之丞にも桂樹にも云ひ聞かせて、猶桂樹に意のあるやうに見せかけて、一夜富徽の前に仕へてゐる桂樹の許を音づれる。折しも雷雨烈しく、桂樹の父琵琶之助に怪まれて富徽の前へ光氏の亂行を訴へ出たが、まことは之も光氏から、琵琶之助へそれとなく命じたのであつた。富徽の前は東山へ讒訴する。光氏は自ら須磨へ隱退して、此にて山名宗全の一味明石の宗入などを喰止めんと計畫する。

光氏は亡き母花桐の墓に暇乞せんとて鳥邊野の蓮臺寺に詣でる。道芝の露を踏み分けて、奥都城を伏拜むと、花桐の亡靈が現はれて、「須磨へおはせば、明石の宗入入道に奇瑞を示して御身を迎へさせん。其時明石へ移らば何事も御心のまゝにならう」と說き聞かせる。二葉の上、黄昏の墓などに暇乞ひし、翌日人々に別れを告げて都を立ち出で、東寺を左に、四塚より戀塚、鳥羽畷、奈良大路へさしかゝり、淀川近くなれば、川次郎早舟にて追ひかけ來り、舟中より光氏に切腹せよと呼ばはる。光氏山名の奸計を冷笑ひ、其計を悉く裏掻きしたことを語つたので、川次郎は恐れをなして漕ぎ去らんとする。こゝの茶店の老女がお茶一服をすゝめたるに、光氏物をも云はず、持つたる扇子にて茶碗を打落せば、あたりの若草は急に色を變へる。彼の川次郎の實母であつた老女岩根が毒茶をすゝめたのである。川次郎が光氏目がけて射た矢が岩根に中つて其まゝ息は絶える。川次郎は驚いて、舟から水中に落ちる。

これより光氏は須磨に侘住居の月日を送ることゝなつたが、惟吉に命じて、雨夜の品定めの折、高直が物語つた宗入の娘朝霧へ高直よりの艶書を届けさせる。宗入は夢にてやんごとなき上臈が「宗全都に謀叛を企て、汝をも語らふべし、それに與せば家

は絶えなん、身を愼みて居る時は、よき孫數多まうくべし」と諭すを聞いて、光氏を我が聟にして迎へ申さんと、其の用意にいそしんでゐた。

○たゞ這ひわたる程　すぐ近くを云ふ
○あがための石山　吾が爲の石山。これが自分にとつては紫式部の籠つた石山にたとふべきもの
○角ふりわけよ蝸牛　芭蕉「蝸牛角ふりわけよ須磨明石」（猿蓑）に見ゆ。
○秋のたのみ　秋に稔る稻の意をいふ。
○藏前　淺草藏前に幕府の年貢米を藏した米藏があつた。
○雨降山　相模大山、一名を雨降山といふ
○湯嶋の宮居　本郷湯島天神
○榧寺の佛閣　淺草黑船町にあつた。淨土宗で増上寺の末寺である。池中山正覺寺と號す。往古榧の大木があつたので此名がある。江戸名所圖會に卷二
○紫の一本　戸田茂睡の著。茂睡の碑は待乳山聖天にあつた。聖天の山號を金龍山と云ふ。

偐紫田舎源氏第十九編序

此編十葉稿なりし刻予故ありて源氏の巻の數に齊しく、五十餘年住なれし下谷を離れ、淺草に居を卜す。須磨より明石に光氏の移る條に當りしも、頗る奇遇といふべき歟。たゞ這ひわたる程なれど、上野のひときは隔りしも、彼こしかたの山は、霞遙にてと、書る詞を目前に、古郷ゆかしくは思ひながら、此所には樓めく物ありて、月を見るに宜しければ、池水に映つる影を詠め、是あがための石山と、後十葉を綴り添しが、角ふりわけよ蝸牛の舍には、秋のたのみを納むる藏前なんどもあらばこそ。唯年頃の住ひよりは、こよなく明なるばかりは、巻の詞に似通ひたり。まづ南は馬場へいづる小路を隔て、竹の林の緑なるはづれより、富士の高根の彌白く、雨降山は靑やかなり。湯嶋の宮居は右に遠く、榧寺の佛閣は左に近しといひつゞくれば、樓上の詠めの自讃のやうなれど、偐紫が紫の一本の茂睡が墓ある、金龍寺の門の竝び森の下道南の方、丁字街へ乙未の秋の末移りたる、所書のかはりに記す。

天保丙申孟春發行　柳亭種彦

偐紫田舎源氏第十九編

年還りて日永く、徒然なるに植ゑし、若木の櫻はのかに咲初めて、空の氣色朗晴なるにつけても心は長閑ならず。其歳の春京をわかれ、出立時に咲初め、名殘を惜みて人々の心苦しかりし樣杯、戀しき遣ん方も無く、嗚呼今頃は室町の櫻も盛りに爲ぬらん。一歳の花の宴に、東山の御景色、兄義尚に可明が參らせし、最清らなる褄を、予と一對に引懸結ひし其姿、萬の事を思ひ出され、吐息つくづく、四方の景色を打眺めて居たりけるが、風に煙りの最近く、時々に靡き來るを、是や彼須磨の浦に、蜑の汐燒くなるらんと、思ひ遣るに、さにては無し、我が住む後の山の端に、柴を燻る煙りなり。其儘屢々に見も知らぬ賤民の上の形狀を間近く見るも、珍奇しき心地せられて、緣の端へ猶立出て在すれば、前の海にて漁撈し、折に逢ひたる櫻鯛、鯵松魚は夫を戀ふ名に似たれ共、片思ひ鮑栄螺や、海松若布、種々の海の物、籠にて提げ、桶にて頂き、皆其大勢打連立ち、恰度御膳の御支度頃、間に合ふ樣にと一走り、今日三月お朔日、日出度日なれば取分けて、御召成されて下さりませ。ト口々叫きて入り來るを、此方へこよ。ト光氏は近々と召出て、光怪し氣なる容貌を見渡し、活るが如き海の魚を料らせて喰ふ輿は、華洛も是所には及び難し。網曳・

○鯵松魚　「あじがつを」にて、路[illegible]とも言ふ。[illegible]東海道にあるのに、もと[illegible]といふ。[illegible]に[illegible]古歌に多く詠まれし所。

○片思ひ鮑　「鮑は貝の片思ひ」。鮑は身が片方よりない所からいふ。

○網曳　引網（ひきあみ）を引くこと。『萬葉集』三に「大宮のうちまできこゆ網引すとあごととのふる海人の呼聲」。

潜水・漁獵抔、常常歌にはよみつれど、蜑のさる※技を直接に、其樣子見たることはなし。ト此等の物は如何にして、和女等はとるものぞ。ト問せ給へば、打笑ひ、「京の人は妾等が身の上を面白さうに、歌とやらに作れども、もう／＼蜑の境界ほど。苦しい物は外になし。華洛の女中は姿容貌と嗜むのに、荒くれしい※繩を卷くやら、蓑着るやら、衣紋が少し亂れても、肌膚の見ゆるが耻かしさ、繕ふが婦女の性。夫を素裸で海の底。腰に浮桶、手には鎌、岩に吸つく此鮑を獲る中、鯛が餌と間違へ、乳を吸ふやら、腋の下へ烏賊が潜つてこそぐるやら、お臀を抓つり蟹が抓る。※生度も浪のうき沈み、風が荒くて舟休み、内に寢まつてゐる暇にも、網を綴くる。繩を索ふ、日ざしと言へる此籠を下げては。濱に※磯菜つむ。蜑の※までかた右

左、汲取る桶の汐よりも、最々辛きよわたりに侍べるなり。ト種々に安き暇なき身の憂さを、底果敢となく囀れば、光氏は傍らの筑紫琴を掻鳴らし、「※予許り憂を身に積柴舟の、

○さる技を　その樣な技術を。
○繩を卷くやら　海女の姿を卑下して云ふ。
○生度も浪のうき沈み　生度、[illegible]わないを浪に引きかくる
○磯菜　磯に生えた食用草類を言ふ、「古今集」二十、東歌、小よろぎの磯たちならし磯菜つむ、目ざしぬらすな沖にをれ浪」。
○までかた　までは諸手で兩方の手、諸手。かたは片手。
○予許り憂を身に積む云々　「予許り憂き事を身に積み重ねる」、「柴を積んだ柴舟の漕れ〳〵て」、「我身が焦れ〳〵て」と掛詞を以てつないだものである。

漕れ〳〵て行末は、定めなき身と思ひしが、※世の憂き事は白浪に、住むも心の行末は」ト琴弾きさして、「嗚呼同じ事なるかな、哀れの身や。それ惟吉、魚も貝も皆取入れ、何ぞ彼等がよろこぶべき代りを遣れ。」ト宣へば、はつと立て、惟吉が反物卷物取出し、夫々配り與ふる時、光氏は聲を懸け、「遙か後に引下り、恥らふ樣子に面も上らぬ、未だ最若き彼蜑には、別に取する物有り。」ト自ら上に羽織たる小袖を取つて、投遣れば、彼蜑ハツと押戴き、眞實に生ける甲斐ありと、喜悦る色面に顯れ、皆打連れて行く影を、惟吉熟々打眺め、「今御琴を遊ばしたる其節に、蜑共は只うつかりと口を開き、心にしめて聞入れる者とては無かりしに、只御小袖を被けさせ給ひたる女一人、感に絶えて膝を打つ、其拍子更に違はず、差俯向いて居たりしかは、面は確乎に見認ねども、※爪外れ最清く、中々卑賤きさまに非ず、御心注れしや。」ト申し上ぐれば、ほく〳〵と打點頭きて居給ふ際、※仁木良清罷り出で、「拙者は未だ見馴ぬ浪内とか申す下僕申し上げ候ふは、命に任せ、此國に陰陽師の候ふ歟と、種々尋ね探せども、然る者は絶えてなく、只鬼得院と名乘る山伏、陰陽道に委しき由承まはつて、彼を召連れ罷り歸り候と、遙彼方に控へて在り。如何處置申さん。」ト聞いて光氏心づき、「其浪内は當國にて近頃抱へし者なるが、所の事は委曲からんと、豫て吩咐置たるが、蜑の囀り珍らしく聞とれて忘れたり。其山伏を是へ召べ。」ト仰に、良清心得て、誘引出る鬼得院の有樣を見給ふに、※兜巾を頂き、※鈴懸の露を結んで肩に懸け、手に※最多稜の數珠を持

○世の憂き事は白浪に　知らぬに白をかけ、なほ、白浪に住むこともその海士の安からぬ心の行末は予等と同じであると言つたのである。『源氏物語』には「海士どもあさりして、貝つ物もて參れるを、召出でて御覽ず。浦に年經るさまなど問はせ給に、さまざま安からぬ身の憂へを申す。そこはかとなくさへづるも、心の行方は同じことなるかなと哀れに見給ふ。御衣ども被けさせ給を、生ける甲斐ありと思へり」。（須磨）

○爪外れ　指のさばき方の義で、身のこなし。振舞。

○仁木良清　村濱の兒。奉行職らすして父喜代之助の勘當を受けてゐたが、光氏の西下の際に隨從して來る。

○兜巾　古くは修驗者の被る頭巾。後に、小さな圓形の固いものを額の上に載せ、顋で紐を結ぶやうになつた。

○鈴懸の露　山伏が衣の上に肩からかける麻の着物（篠懸）の、その袖についてゐる紐をいふ。

○最多稜の數珠　苛高數珠。數珠の顆の、扁くして、稜角を高く製したもの。

○御祓の祓ひ　みそぎはらへ。水邊に出て、水を身にそそぎ、罪・穢れを清める故、はらへといふ行事。

ち、凛々し氣に扮装て、先づ恭敷禮をなし、「遙往昔安倍道滿、播磨に居住なしたる時、播僣が遠祖、彼法師より傳授を請け、今の世に至りても、其法を守りて捨てず、御用の條は何事かくと謹んで問ひければ、光氏は莞爾と打笑み、「御祓の祓ひは押なべて今は六月晦日なれども、往古は三月の初めの巳の日を用ひしとか。今日は則ち其日なり。身に思ひある者抔は、必ず御祓し給へと、生賢き人の言へり。長閑に霞渡りたる海の面も床敷くて、然ば祓へに出立んと、船の準備も整へさせ、人形も作りて置きつ。いざ諸共に」とありければ、畏まつて御供し。皆々浦邊へ立出づるに、さまで大きからざる船に、只幕計りを引廻らし、雨覆ひの屋根もなく、疎かなる設けなるが、五六艘繫ぎてあり。三五人宛引分れ、件の舟へ乘移り、鬼得院は光氏と同船なして、胴の間に威嚴く座を構へ、笹に幣を切懸けて、數珠を鳴し、祓を讀み、こと〴〵しき人形を、浪に打入れ流すを見つゝ、艀に肱を凭せ、悠然たる光氏の顏ばせは凪渡る海よりも猶晴朗なり。されども心に人知らぬ辛苦を疊めば、過來し方後先思ひ續けられて、(罪なきを神も憫れめ我巳の日)と、吟じながらに、殘りたる彼人形を取揚げて、破落々々と打流せば、不思議や俄に風吹き荒れ、空も見る／＼かきく

○人形　また形代とも。陰陽師がみそぎに用ふるもので、紙で人形を作り、之で身を撫でさすつて、諸々の災を之に移し、我身の代りとして水に流してやるのである。『源氏物語』(須磨)には「彌生の朔日に出で來たる巳の日、今日なんかく思すことある人は、御禊し給ふべきと、なま賢しき人の聞ゆれば、海づらもゆかしくて出給ふ。いとおろそかに、ぜんじやうばかりを引廻らして、此國に通ひける陰陽師召して、祓せさせ給ふ。舟にことごとしき人形載せて流すを見給ふにも、よそへられて

知らざりし大海の原に流れきてひとかたにやはものはかなしき、とてゐ給へるさま、さる晴に出でて言ふ由なく見え給ふ」。

○幣　注連などに垂らしてかけるもので、木綿(ゆふ)四手、紙四手がある。

○不思議や俄に風吹き荒れ　此の邊り、『源語』の文章は引續き第一の名文と稱せらるべく、前行、さる晴に出でて言ふ由なく見え給ふ」に續ける一連の如く描寫してゐる。「海の面はうらうらと凪ぎ渡りて、行衞も知らぬに、來し方行く先思し續けられて

やをよろづ神も哀と思ふらん犯せるつみのそれとなければ」と宣ふに、俄に風吹出て、空もかき暮れぬ。御祓もしはてず立騒ぎたり。肱笠雨とか降來て、いとあわたゞしければ、皆歸り給はんとするに、笠も取敢ず。さる心も無きに、とかう吹散らし、又なき風なり。波いといかめしう立來て、人々の足をそらなり。海の面は衾を張りたらんやうに光り滿ちて、神鳴りひらめく。落かゝる心地して、辛うじて辿り來て、かゝる目は見ずもあるかな、風などは吹けど、景色づきてこそあれ。淺ましう珍かなりと惑ふに、なほ止まず鳴りみちて、雨の脚あたる所、通りぬべくはらめき落つ。かくて世は盡きぬるにやと心細く思ひ惑ふに、君はのどやかに經打誦して在す。暮れぬれば雷少し鳴止みて、風ぞ夜も吹く。多く立てつる願の力なるべし。今暫しかくあらば、波に引かれて入りぬべかりけり。高潮といふものになん取敢ず、人損はるゝとは聞けど、いとかゝる事はまだ知らずといひあへり」

れて、袖笠雨の急遽く降出るに驚かれ、未だ祓は仕果ねど、船を岸に漕返し、御歸りを催せども、今まで晴朗なりしかば、御傘杯の準備もなし。世に類ひなき大風なれば、萬の物を吹散らし、浪嚴めしう立來るにぞ、人々の足を空なり。海の面は金襖を張りたる樣に光り滿ち、雷鳴閃き、頭の上に落懸る心地して、言甲斐なき供人なんど、狼狽ふ其處へ、片攪の調大夫、御迎に來りければ、辛うじて御供し、皆々家に辿り着き、良清惟吉其他も、物々しき武士は更に動ずる風情もなく、御機嫌を伺ひて、御次の間に控ゆれど、言甲斐なき者共は、色青ざめて打慄き、「不思議なる日を見る物かな。風抔吹くには其景色、必ず前に知るれども、是は俄の事にてあり。今暫時彼所に在らば、浪に引かれて入りぬ可し。高潮とか、逆濤とか云ふ物の寄來れば、人損ふとは聞しかど、斯る事は未だ知らず。」ト打集りて言合へり。風彌々吹き増さり、雨の足の當る所は、打徹りぬべく破落聞きて、斯くては世も盡きぬる哉と、心細く思ひ惑ふに、光氏は何共思はず、長閑に經文を打誦じて居る程に暮ぬれば、雷の音も漸次に遠離り、すこし靜に爲りながら、猶風は夜も吹く。拂曉方に漸々と宿直の者も休みけん、物音もせずなりければ、光氏も枕を取り、聊か寐入ると覺えしが、其樣確かならざれど、唐めきたる衣を着たる艶麗き上﨟來り、「君は御祓に擬へて、宗全親子を調伏し、世を靜めんとし給へども、天變の爲す處は、神力にも及び難し。それらの事は捨置きて、龍の宮より召るれば、はや疾く來りて自分と伉儷と爲り

(一)袖笠雨　[illegible]のぐ急雨。『源氏物語』(須磨)にては[illegible]

(一)足を空　足を[illegible]る。

(一)片攪の調太夫　[illegible]景の方、及その妹綾汁の父に當る。

(一)上﨟　二位、三位の[illegible]る[illegible]、一般に身分の[illegible]る。[illegible]の物語[illegible]にては[illegible]る。「曉方皆打休みたり。君もいさゝか寝入り給へれば、そのさまとも見えぬ人來て、など宮より召あるには參り給はぬとて、辿りありくと見るに、驚きて、さは海の中の龍王のいといたう物めでするものにて、見入れたるなりけりと思すに、いとものむつかしう、此の住居、堪へ難く思しなりぬ」(須磨)

○物むつかしき　煩しき。

○火降りしと云往古は知ず　「ひ」は霰、雹などの意、「日本書紀」第二十二、推古天皇の二十六年秋八月、霹靂木（かむとき のき）を伐ると「火雨雷電（ひさめふりいかづちなり）」とある、これ等を指したものであらう。

て限りなき壽きを保ち給へ。ト跳り歩行くを見るに驚き、目を開けば、幽に殘る燈火のみにて影もなく、夢かと思へど次の間の宿直の武士の見たりけん、「海の中の龍王は、太う物愛する物なれば、色美き衣を着し者なんどは、船には乘らざるものといふ。偖は今の怪しき姿は、龍女とか云ふ者にて、我君の淸らなるに見入れて、迎ひに來りしなる可し。俄に浪風騷がしく、危ふかりしも此故ならん。ト語り合ふを聞こし召、※物むつかしき此住居も、はや堪難く思し成りぬ。（須磨の卷をはり）

（明石の卷）猶雨風止ず、雷鳴靜らで雲間もなく、明暮る日數を重ぬるに、いと侘敷事限り無し。斯しつゝ、世は盡ぬるにやと思ふに、次の日の曉より、殊に風一層吹き、潮高う滿て、浪の音荒きこと巖も打碎いて、殘るまじき氣色なれば、仁木良淸御前に罷り出で、「地の底まで通る計り、※火降りしと云往古は知ず、又類ひなき今度の天變、夏の炎暑の烈しき時だに、斯雷霆の日を重ねて鳴轟く事はなし。雨は漸次に降增さる空の亂れに、華洛より出立參る人もなく、是方の者も打屈り、只目を送るのみにして、頭差出す可くもあらず、然れば斯くて在しなば、音川山名の合戰の有樣を知る由なく、又高潮の打揚げて過ちあらんも測り難し。たとへば數萬の大敵が攻來るとも、御武略にて防ぐには易かる可けれど、怒れる濤の寄來るは、更に詮方無かる可し。一先づ京へ歸らせ給ひ、然るべく候はん。ト謹みて述べければ、光氏は打點頭き、聞も馴れざる濤の音に、夜も解けて眠られず、心細さは彌增れど、父の

不興を請けたる身が其許可もなき中に、華洛へ歸らば彌〻人に笑はるゝ事こそ増らめ。猶是よりも山深き奥を求めて跡を晦し、住居を轉へんと思ふにも、武士たる者が浪風に騒がれてなど、世の人の語り傳へて後の世まで輕々敷名や流さん。と思ひ亂れて、言辭に出さず。只此渚に命を捨てんと、今は心を定めたれば、此後諫むる事なかれ。ト讀かけし書に打向ひ、悠然として居たりしかば、良清は詮方なく、御前を退きしが、其日は殊に騒がしく、彼高潮は漸次々々に家の間近く打寄せて、雨は盆を傾くるが如く、雷鳴霹靂時も止ず。空は墨を磨りたるやうにて、永き日も最早暮にけり。彼の言甲斐なき者どもは、一所に打集り、「鬼得院こそ怪敷奴なれ。彼が祓を爲してより、俄に風立雨降出で、十日餘り降止まず、何地へ往しか、其後は姿を隱して見せざるは、是れ世に所謂天狗なるべし。一昨日より昨日は強く、昨日より今日は烈し、ノウ恐怖の雷や、アラ物凄の濤の音や。吾は如何なる罪を犯し、斯くは悲しき目を見るらん。父にも母にも引離れ、可愛と思ふ妻や子の顔をも見ずして死ぬ事か。ト歎くには引替り良清惟吉は更にもいはず、些少物も覺ゆる限りは、我命をば回顧ず、御身一つを救はんと、船路を守り給ふなれば、先づ住吉の神を拜し、「我君は室町の御所にて生長給ひ、義政公の御寵愛深きに依つて、種々の樂み奢り給ふに似たれど、實は世の爲め人の爲め、此御蔭にて命を助かり、世を送る者鮮少からず。然るに何の報にて、此横さまなる浪風に溺れて、此所に果給ふか、抑も天道は有りや無しや。

○其日は殊に騒がしく　「斯くしつゝ世は尽きぬべきにやと思さるゝに、其次の日の暁より風いみじう吹き、潮高う満ちて、浪の音荒きこと、巖も山も殘るまじき氣色なり。雷の鳴りひらめくさま、更に言はん方なくて、落ちかゝりぬと覺ゆるに、ある限りさかしき人なし。我は如何なる罪を犯して、かく悲しき目を見るらん。父母にもあひ見ず、悲しき妻子の顔をも見で死ぬべき事と歎く。君は御心を靜めて、何ばかりの過ちにてか、この渚に命をば極めんと、強う思しなせど、いと物騒がしければ、色々の幣帛捧げさせ給ひて、住吉の神近き境を鎮め守り給ふ。誠に跡を垂れ給ふ神ならば助け給へと、多くの大願を立て給ふ」。(源氏物語「明石」)

○御身一つを救はん　「各々自らの命をば更なる物にて、かゝる御身のまたなき例に沈み給ひぬべき事のいみじう悲しきに、心を起して、少し物覺ゆる限りは、身を代へて此の御身一つを救ひ奉らんととよみて、諸聲に佛神を念じ奉る。帝王の深き宮に養はれ給ひて、色々の樂しみに驕り給ひしかど、深き御うつくしみ、大八洲に普く、沈める輩をこそ多く浮べ給ひしか。今何の報ひにか、こゝら横さまなる波風には溺ほれ給はん。天地ことはり給へ。罪なくて罪に

當り、つかさ位を取られ家を離れ、境を去りて、明暮安き空なく嘆き給ふに、かく悲しき目をさへ見、命盡きなんとするは、前の世の報ひか、此世の犯しか、神佛明らかにましまさば、此の憂へやめ給へと、御社の方に向きて樣々の願を立て、又海の中の龍王萬の神たちに願立てさせ給に、いよ／＼鳴轟きて、在しますに續きたる廊に落ちかゝりぬ。炎燃上りて、廊は燒けぬ。心魂なくて、ある限惑ふ。後の方なる大炊殿と思しき屋に移奉りて、上下となく立込みて、いとらうがはしく泣とよむ聲、雷にも劣らず、空は墨を摺りたるやうにて、日も暮れにけり」。（源氏物語明石）

ト思はず動搖みて諸聲に神佛を念ずるに、光氏も洩聞いて、寔に彼等が言ふ如く、世を平かに治めんと、罪なくて罪に沈み、官位に望みも懸けず、家を離れ境を去りて、旦暮安き空もなく、心を千々に碎く身が、前世の業か、此世にて思はず犯せる罪故歟、予のみならず隨ひ來たる者さへ悲く恐怖しき目を見て、命も盡んとす。神佛さへ明らかに在まさば、此憂ひ止給へと、種々に願を立給へども。雨風彌々烈しくて、軒端へ礫を打つが如し。破落めく音に打紛れ、定かには聞えねど。雨戸の外に何やらん、打語合は女の聲なり。不審さに不圖耳へ入り、扉の隙間より差覗けば、思ひも懸けぬ富徵の前、今一人は白糸なり。篠突雨に濡るも厭はず、「仰畏こみ候」ト懷劍を拔そばめ、忍び寄るまで電光の影に隈なく見えければ、華洛に在りし其際も、稍ともすれば予を讒し、擯斥けんと爲したるが、猶飽足ず富徵の前を申し勸めて、遙々と此所まで下りて、吾儕を害せんと爲るならんと、覗り詰て在する中に、雷霆轟き白糸が頭の上に落ちかゝり、五體微塵に碎けたり。猶其火災燃上り、富徵の前の袖に移り、御身も危く見えけるにぞ、光氏驚き走り出、消さんとするに消やらねば、其袖を引きちぎり、助け勦り參らすると、思ふは假寢の夢なれど、光氏が居間續きに、雷は正しく落ちたる、其響きにて驚き覺め、彼方を回顧れば、火炎燃えて廊下は燒けぬ。彼の言甲斐なき例の者は、心魂ひ更になく、耳を塞ぎ臍を押へ、打轉んで起きも上らず。忠義無二の武士は、君の四邊を打圍み、甲斐々々しく立廻り、兎角して後

○擂木　れいき、れんげさも言ひ、「すりこぎ」のこと。

の方の厨房へ移し進らせ、上下となく立込みて。何事を言ふやらん。鳴り動揺む聲雷聲にも劣らず。斯て漸々風直り、雨の足の音もなく、星の光も見ゆるに、人々の心落付き、此移し參らせたる所々を熟々見渡すに、御後ろには竈あり。御上には引窓あり。薪を積み俵を重ね、擂木擂鉢盆何やかや取散らしてありければ。最珍奇かに見給ふらんと、恐れ多くて舊の所へ還し移し申さんと思へど。今の騒ぎにて。燒殘りたる四邊さへ、人々の踏轟かし、襖も破れ、簾杯も皆吹散して、汚穢氣なれば、整理はんと犇めくを、今宵は是にて明さんと、光氏は制し止め。柴の扉を押開て。遙に向ふを眺れば。月の影隈なく照し、近く潮の滿たるが、今は遠く引きたるならん。諸の砂礫晃きて猶其名殘の浪はあらし。彼怪し氣なる蜑共は、尊き方の此所に在します由豫て聞き、常に來慣れし事なれば、今の騒ぎは如何にぞと、尋ね參りて「此風の暫時今ふき止まずば、高潮上りて家も人も、殘る所は無からまし。雷は落ちたれど、其儘風の直りしは、神の冥助にありける。など聞きも知り給はぬ事を、囀り合も珍奇かにて、打聞きて居給ひければ、御前近く來たれども、武士共が追ひも拂はず。斯く騒がしく汚穢き所にてあんなれば、深更たれども眠れず、脇息に倚懸り、心を鎭め居たる際しも、彼前の夜に宿直の武士が、龍女ならんと云ひたるに同じ様子なる怪しの女、光氏の側に寄來、「此頃濤立騒がしきは、和田津海の底なる都へ君を迎へん爲なるを、など神々に願を懸け、風をば鎭め給ひたる。卒諸共に。ト手を取て、引立て

○須磨寺　上野山福祥寺の俗稱。眞言宗高野派、神戸市須磨區にある。仁和年中開鏡の開創で、本尊は聖觀世音菩薩。附近は源平時代の遺跡に富み、平敦盛の遺物といふ青葉笛を傳へる。

○ひようふつ　ひようもふつも共に矢音。

○蟇目　鏑の一種で木製、鏑矢の鏃に似て長く、凡そ四寸許り、孔が五、或は六ある。射る物に傷つけぬ爲であるが、又、空氣が孔に觸れると高く響くので能く妖魔を伏すと云ふ。

○篦深に　矢を深く射こんでの「の」は篦で矢幹「やがら」、矢の幹である。

んと爲しければ、光氏其手を振拂ひ熟々と打視るに、年は二八のほどなるべし、此方に向ひて打笑たる其面の美麗さ、花とも月とも紅楓とも、比喩て言ふ可き言辭もなし。尋常の人ならば、心亂れて其儘に浮かれも出ん風情なれど、眞實は色に溺れざる光氏の性質なれば、目を押眠りて居る程に、拂曉近き須磨寺の鐘の幽に響く頃、彼女は見えずなりぬ。夫よりして夜毎々々光氏の枕の邊りへ、此々つと寄來附纏ひて、卒々と同じ事のみ打言ひて、片時も去りやらねば、宿直の武士ども大に怪しみ。良清密に言ひけるは、「龍の都に迎へんと。君を誘ひに來たるこそ、心得難き女なれ。浦島太郎の冊子には、龍王の乙の姫と契りし由を記したれど、夫は跡なき昔語り、眼前見るは初めてなり、何樣仔細のある事なる可し、今宵は手配なし置きて、彼女を引捕へ、樣子を尋問ふべし。」ト聞いて光氏打笑ひ、「元來變化の事なれば、力を以ては容易は捕ふる事は難かるべし。予仕樣こそあるなれ。」ト人々に囁き置き、其夜はわざと宿直を遠ざけ、常より殊に打解けし風情にもてなし、只一人熟睡してありければ、例の如くに紙門をさらさらと押開き、側近く彼女歩寄る其處を、光氏岸破と起上り、屏風の後ろに隱し置きし弓に箭。手早く打番ひ、ひようふつと射たりしかば、蟇目の法に幻術破れ、彼女は肩先を篦深に射られて堪り得ず、其儘かつぱと倒れ伏す。豫て合圖の弦音に、遠く控へし武士共一時に走集り、手手に手燭を指付て、火影に屹度打視り、今まではさしも愛らしき女なりしが、忽ちに變じて怪の男の姿。「夫よ〳〵此者

は、君が御蔵の其時に。風を起し雨を降らせ、踪跡を晦し、山伏の鬼得院とか云ひし者。偖は此奴も敵の餘類。ト立騒ぐを、光氏は「あら仰々し。ト押止め「此者は元山名の領地に、久く住る山伏なるが、何者よりか傳へ受けゝん、幻術に妙を得たるを、宗全聞いて召上せ、密に予を殺さんと、去る頃當地へ下しゝなり。一箭ながらも急所を射たれば、最早身體は自由ならず、捨置いて皆休め。ト弓立寄せて座に直れば、鬼得院は目を開き、苦し氣なる息を吐き「命の如く宗全に一味の者に候ふが、何とて斯迄拙僧が素性を知ろし召れけん。トいと不審氣に問ひける時、恐る懼る下僕の浪内、次の間より末座に這出、「其事は審らかに自己が言上したりと云はゞ、有繋下郎の淺間敷心なりと蔑視れんかと、光氏君を害せんとはとても及ばぬ事なりと、思ひ切て身の上の懺悔の序に殘らず白状。良清樣にも何れにも御聞の爲に繰返す自己が素性の物語りと、云ふ程もなき元來下司。昔日の名は馬刀助とて、統清が草履取。稻舟姫へ通はれし、雪の夜さりも氷を踏み、供に隨ひ參りし者、扨其後に頓五郎と云ふ武士と我と二人、內意を受て光氏君へ近付ために石堂へ奉公なして謀る謀ると、思ひの外に謀られて、奪ひし玉兎の鏡は贋物。馬之丞は何者にか、討れたりとしたり顔に、山名へ注進爲したるが、其石堂も淀川にて、舟より見れば壯健なり、川次郎は水に陷入、漸々に我一人遁げて歸りは歸りながら、旁々言譯無き故に、此上は須磨へ赴き、光氏を討取らんと、言出し其際に、山名親子言辭を揃へ、なか／＼汝一人の力には及ぶま

○雪の夜明の寒椿　本書第十八編の下に『明けぬと告ぐる須磨寺の、鐘の響きに枕を欹て、次の一間を差覗けど、未だ起きたる人もなし、驚かさんも心無しと、自ら雨戸を押開き、手を清めんとて手水鉢の、氷を碎き給ふを聞付け、御看經に供けず、清き水を奉らん』と、庭の柴垣打廻り、水もて來るは須内とて、此頃抱へし下部なり。『よくこそ心づきたれ』と、光氏嗽ひ手水して、『ついでに汝に用のあり。雪をいとはぬ寒椿、潔く咲いたるを、御佛に捧ぐべし。爾に指したる一枝を、是にて切つて參れよ』ト、枕刀を須内に、渡して其方へ背差向け、朝日を拜して居給ふうち、件の枝を切取つて、雪に手をつき差出だせば、『ヲヽよし〳〵』と瓶に挿し、座敷へ戻りて經文を、靜に讀誦し給ふ……」とある。それを云つたのである。

じ、彼が指揮を受けよとて、添られたるが鬼得院、共に當地へ下りしが、先づ我一人の手柄を顯し、彼奴めには鼻を明せんと、去年の秋の雨上り、月はあれども叢雲に影ほの闇き夜半に紛れ、此所へ忍び込み、琴を彈きて在したる御油斷を篤と窺ひ、只一討と思ひしに、御姿の優方に見えさせ給ふに引換へて、光氏君の御力、殊に御手練敵し難く、やみ〳〵と生捕れ、惟吉殿に命じ給ひ、調太夫とか云ふ人に預けられて、早首を刎られんと思ひの外、繩をも懸けず御前に召れ、問はずと知れし山名の間者、予を討んと謀るのも、其身を立てんためなるべし。今より心を改めて、此光氏に隨ひなば、飢ざる程は祿をも取せん、如何に〳〵と、寛仁大度の命に歸伏の體にもてなし、心の底は際を見合せ、討止めて山名より恩賞を請くべしと、初めの程は思ひしが、※雪の夜明の寒椿、是にて切れと御佩刀を、我に渡して置きながら、背差向けて、悠然と旭に向ひて何やら御祈念。我に害心有るか無きか、試させ給ふ物ならん、あら恐怖と、心の角を其際折て、眞實に歸伏。鬼得院と呼びなして怪しき法を行ふ山伏、予と共に來りし由も、密に申上げしかば、何事をかするならん、其幻術も試し見ん、連來れとの御内意故、御祓にことよせ、御前へ同道、夫共知ず龍女と化し、色情を以て御心を蕩かさんとは愚鈍なり。汝も心を改めて、仁あり德ある我君に仕へんと思ひなば、疾々申せ、共々に願うて見ん。ト言ひければ、鬼得院莞爾と笑ひ、「邪は正道に勝ずとやら、宗全に一味して、行ひ正しき光氏君を亡はんと爲したるは過

○ふえ　吭。のどぶえの略。

りなりと知りながら、汝とは事變り、我は山名の知行所にて生長たる者なれば、奸邪にもせよ今更に、それを捨ては道立ず。機會あらば事を仕損じ、此所にて果しと告げ給へ。さらば。ト言捨箭を拔取り、ふえ掻斬てぞ失せにける。光氏は涙を浮め、「惡にもせよ領主の恩を知つて命を捨てたるは、感ずべき事にこそ。須磨寺へ死骸を送り、葬りてとらせよ。ト取片付させ給ふ程に、夜は白々と明離れ、又村雨の降出て、風さへ殊に騷がしゝ。斯る處へ破れたる笠、亂れたる蓑を纏ひ、人か案山子か見分くべくもあらず、最々怪き姿にて、雨にそぼちて來る者あり。光氏折節緣先に外面を見遣て居たりしが、何心なく笠の中を差覗けば、女なり。あら不審と暫時考へ、「和女は夫よ、桂樹の側に仕へし糸路ならずや。眉を拂ひし故ならん、年も老けて見違へし。何とて是へ來たりし。ト仰の中に、惟吉が傍らより走り出で、「あら見苦き姿にて、御前をも憚らず。疾歸らずや。ト追歸へすを、光氏は押止め、「假令卑しき賤の男なりとも、睦ましう思へるは、斯る閑居の習慣なり。然なせそ。ト宣ふを、惟吉猶も聞入ず、「此女は手卷とて、拙者が妻にてあり。女の便もすべからずと、出立の節呉々も申し聞せて置きつるに、女の身づから是まで下り、若朋輩の目に懸り、それと知る者ある際は、御供先へ我儘に女房を呼下すは、道に外れし行ひと、笑はれんは必定なり。物に狂ふか痴愚者。ト擊ちも毆かん有樣なれば、光氏は彌々制し、自ら庭に下立て、「此方へ來よ。ト恐怖る手卷の袂を取て、身近く召寄せ、「偖は糸路が姉なりし歟。亂

○子の刻　夜半の九ツから九ツ半の時、今では十二時、一時に當る。一晝夜を十二支に因んで區分し、子を午後と午前の境に跨つておく。

○さがなき人　善くないもの。

○水原　片撥調太夫の妻。千景の方、綾竹の母　稲舟姫の侍女で後に義政に侍つてゐる

し髪も其儘に、化粧も爲ず、姿さへ窶々しくて下りしは、良人を慕ふのみにはあるまじ」と語れ、聞かん」の御諚に、はつと砂に手をつき、顔振上げ、「四日以前夕暮より雷鳴事夥多敷、夜に入て猶ほ烈かりしが、子の刻計りに室町の廊下へ落候。其様子火炎の柱の如し。物に動ぜぬ富徽の前、香を嗅て居給ふ御前に、立出んとせし白糸が、襟元へ彼雷、眞一文字に迸走り、身の中總て燻り返り、白糸變じて黒糸と成て果敢なく失たりけり。猶其火炎燃廣がり、富徽の前の御袖に移りて、御身も危かりしが、自からに其御袖引ちぎれて舞揚り、西の空へ飛行て、御身に恙はなけれども、夫よりして富徽の前、底果敢となく煩ひ給ひて、程經ば衰弱給はん御有様なるに、義尙君御心に思し嘆き、御枕の邊りに近付、弟ながら光氏は、信義正き者にてあり、眞實に犯す罪なきを、さがなき人の言ひたるを用ひ給ひて、見も知らぬ浦邊に沈め置くならば、必ず報いあるべきに、早呼歸し給ひてん」と度々仰有りけれど、富徽の前は聞入給ふ御景色更になく、罪に落て華洛を去る者、三歳をだにも過さずして、許されん例なし。さする時には輕忽しき處置なりと、世の人の言傳へん事疑ひなし。其上に光氏は、我過ちを我と知り、身退きしにあるなれば、予を怨恨ん道理はなしと言放ち給ふにぞ、義尙君も思し憚り、斯くて月日の重ならば、御惱ども漸次々々に重り勝らせ給はんと、口の中にて宣ひながら、御前を退らせられし由。是等の事は水原が親く見奉つり聞き奉り、紫の上まで密に申し送りたりしかば、此事君に聞えんと、種々思し廻ら

〔淺間敷小歇なき此頃の氣色〕云々　[illegible]
[illegible]眺めやる方なくなん
浦風や[illegible]思ひやる[illegible]

せども、御筆にては落散て、人の目にも懸られんか、且つ此頃は山名と細川合戰彌〻止む時なく、兎にも角にも宗全親子、君を恐怖て此浦に細川よりの注進を、あらせじものと、其所此所へ關を構へて、津の國の方へは、畏に人を通さず。是に殆々御當惑と、聞くより嵯峨の御殿へ上り、紫様の御目に懸り、妾は女の事なれば、合戰の早打とは、山名の家來も思ふまじ。關所へ懸らば口に任せ、言抜けて、お文は確乎に君へ屆け參らせんと、申し上げたりしかば、正室は御喜悦の御容子にて仰の樣、然あらば雷霆の落てより、大正室の惱ませ給ふ事共は我背へ、御目通の上、其方より密に申上げて呉れ。妾が文には此頃中、雨風の烈しければ、夫れの〻尋ね奉つらんと、お筆を染められ、さら〳〵さつと降來る雨をも厭はばこそ、此菅笠に顏を隱し、下男の姿に扮裝、夫より直に下りしは、仰の如く良人を慕ふ未練の心に侍べらず。惟吉の叱らぬ樣、能く仰せ給はれ。ト包む帛紗も紫の文取出せば、光氏も心急れて取手も遲しと、直に披いて打見れば、〽淺間敷小歇なき此頃の氣色には、最ど空さへ我胸さへ閉る心地に、眺めやる方も無くなん。(浦風や如何に袖さへ浪の寄る)ㇳ。哀れに悲歎事共を、書集め給ひしかば、披閲るより御目にも潮滿來れば、御心を察して手卷は顏を背け、〽道すがらに聞侍べれば、此所には高潮上り、海も渚も荒ける由。華洛にも此雨風、最最怪き事なりと、社に寺に仰を給ひ、祈念をせさせ給へども、麗かなる日は今に無く、猶其上に合戰止ず、道行人の絶る計り。花の都の樣子はなし。稲舟姫を初めとし、

○をちこち　遠近、雷の落つるに引きかけて云ふ。

御痛しき方々。ト云出るを、惟吉は打驚いて袖を曳、「正室の仰の趣き申上たら夫れで宜い。退つて居よ。ト隔つれば、光氏は打笑ひ、「何事を歟言出んと、心配ひも道理ながら、果敢々々敷もあらぬ使ひが、頑固敷語りなすさへ、京の方の事と思へば、懐かしうて召出し、夫れ彼れ問ふも度々なり。ましてや女の事と言ひ、何かは苦しかるべきぞ。滞留置て緩々聞かん。倩斯言へば自身の孝を誇るに似たれど、是を見よ。ト綾の袖の半計り、火に焦たるを取出給ひ、「富徽の前の某を憎み給ふは、眞實の母花桐を、父上の餘りに寵愛されたる名殘。夫につけ入り白糸初め、心曲める者共の讒言ゆゑにてあんなれば、何日ぞは曇り無き旨を申し開きて、舊の如く御側に仕へんと、朝夕思ひて、聊かも此方に恨むる心は無し。指屈見れば四日以前、此假寓にも雷霆落ぬ。其夜の夢に和女が今語りし如く、白糸が雷に打たれし其火炎、富徽の前の袖に移るに、あはやと驚き走り寄、引裂切しと、思ひ寤の夢は覺めても、其袖は正敷予手に殘りてあり。雷も眞實に※をちこちの人集れば、見られじと、手匣に袖は押隱し、今日まで近習の武士にも語らず。倩は眞實に予魂、華洛に通ひて、富徽の前の危急を助け進らせし歟。よし御腹に宿らずとも、母と頼みし其人を、子として疎んじ申さんやと、此所に言うても屆かぬ愚癡。惟吉笑ふな、手卷も華洛へ歸りて人に語るなよ。早日も暮ぬ、紫への返辭は、天明てのちに書かん。今宵は緩々打休み、疲労を療せ。ト兩人に、暇を取らせ給ひけり。

其夜さり光氏は、紫への返しの發句打案じて只一人、机案に倚り居給へるに、障子を開く音もせず、影の如くに氣高き女、目の前に彳めり。昨夜蟇目の法を施こし、妖術を破りしに、如何なる渚の來たりし歟と、灯を掲げて熟々見れば、思ひ懸なや逝去し母花桐の、※只此世に在しまし〻様子ながら、悠然と立給ひて、「など斯怪敷所には、住せ給ふ物ならん。住吉の御神の御導せ給ふ儘に、早船出して此浦を疾々去りね。」ト手を取て、引立給ふに、最嬉しく、「母君に最幼稚時別れ奉つりしより以來、生長るに隨ひて、種々悲敷事のみ多く、安き暇も侍べらねば、今は此渚に身を捨てんと覺悟極めし。」ト聞え給へば頭を振り、「一大事の御身を輕々しく、最有間敷事にこそ。抑々君が今迄の辛苦は妾が世に在りし其昔日、※晝顔初め義政君の御寵愛を嫉む渚最多かりし恨みの數々其子に罹り、女の念の爲す事にて、末は通らぬ聊かな物の報いに依てなれば、世も治まりて御心の儘に爲るのも近きに在り。去歳の春も言ひつる如く、妾が追善供養を營み、怠惰給はぬ功德により、花の臺に悠に坐し、此世を回顧ざりつれど、華洛は修羅の街となり、又此所に雷霆の火に、高潮の水嵩增り、※二河白道も目の前なれば、武勇智謀に逞しき君も、此頃著じき憂愁に沈むを見るに堪難くて、紫の雲を離れ、海に入り渚に上り、遙々此所へ來たりしは、此須磨を去り給ふ時既に來りしを告參らせん爲なるぞ。」ト又手を取りて引立られ、光氏は不審しく、「此四邊には予に親しき人とては侍べらず。偶々あるも富徽の前に聞えん歟」とて、音信ぬに、

○只此世に在しまし〻様子　「日ねもすにいりもみつる風の騒ぎに、さこそいへいたうごうじ給にければ、心にもあらず打まどろみ給。かたじけなきまし所なれば、たゞ寄居給へるに、故院たゞ在しまし〻様ながら立給て、など斯くあやしき所には物するぞとて、御手を取りて引立て給。住吉の神の導き給ま〻に、はや船出して、此の浦を去りねと宣はす。いと嬉しくて、畏き御影に別れ奉りにしこなた、さまざま悲しき事のみ多く侍れば、今は此の渚に身をや捨侍なましと聞え給へば、いとあるまじき事。これはただいさ〻かなるものゝ報ひなり。我は位に在りし時、過つことは無かりしかど、おのづから犯しありければ、その罪を終ふる程いとまなくて此世を顧みざりつれど、いみじき愁へに沈むを見るに堪へ難くて、海に入り渚にのぼり、いたくごうじにたれど、か〻る序に内裏に奏すべき事あるによりてなん、急ぎのぼりぬるとて、立さり給ぬ」。(『源氏物語』明石)

○晝顔　花桐と同じく義政公の側室であったが、花桐を嫉みて陥れんとし、反って己れが失脚したことは初編に出てゐる。

○二河白道　火の河、水の河の間

に在りて、貪欲、瞋恚を遁かれ、淨土往生を得る一筋の道。

○蓮臺寺にて詳細に告し　光氏愈々須磨へ出立といふ際に鳥邊野の蓮臺寺に花桐の墓を弔つたことが見えてゐる。その折、ありしに變らぬ花桐の面影さやかに見え給うて、「君まづ須磨へおはして後、程を圖りて宗入に、奇瑞を妾が見すべきなり、彼徳いと御身を迎へん。其時明石へ移らせ給はゞ、たゞ何事も御心の、まゝになりなんなほ末々、目出たく榮え行き給へば、外には聞えん事もなし」と言ふ聲ばかり、雲霞、姿は消えて見えずなつたといふ。（十七編上）

○明石の宗入　山名宗全の弟にて明石にあり。兄の招きにも應ぜず、專ら娘朝霧を眺めつゝ暮してゐる。

○奇瑞　不思議にめで度き徴（しるし）。此の花桐の言ひし事は宗入の詞にもある。十八編上に「さる頃夢に美しき、御所風の上臈一人、枕の邊に歩み寄り、宗全都に謀叛を企て、汝をも語らふべし、それに與せば家は絶えなん、身を愼み居る時は、よき孫多數まうくべし、と宣ふ……」と。

○月の顏のみ晃々と云々　『源氏物語』明石の卷に「飽かず悲しくて、御供に參りなんと泣入り給て、見上げ給へれば、人も無くて、月の顏のみきら〳〵として、夢の心地もせず。御けはひとまれる心地して、空の雲哀にたなびけり。年比夢の中にも見奉らで、戀しう覺束なき御樣を、只かたれど、さだかに見奉りつるのみ面影に覺え給て、我斯く悲みを極め、命盡きなんとしつるを助けに翔り給へると哀れに思すに、よくぞかゝる騒ぎも有けると、名殘頼もしう、嬉しと覺え給こと限なし。胸つとふたがりて、中々なる御心惑ひにうつゝの悲しき事も打忘れて、夢にも御いらへを今少し聞えずなりぬることゝいぶせさに、又や見え給ふと、殊更に寝入り給へど、更に御目も合はで曉がたに成にけり。渚に小さやかなる船寄せて、人二三人ばかり、此度の御宿りをさして來。何人ならんと問へば、明石の浦より先のかみ新發意の、御船装ひて參れるなりし

何國へ誘引給へる歟。ト問はれて、花桐莞爾と打笑み、「蓮臺寺にて詳細に告しを忘却給ひしや。彼明石の宗入に度々奇瑞を見せしかば、去りし頃より佛道を深く尊とみ、宗全に黨す可き心は無く、只娘のみ寵愛して、直なる人と爲りたれば、御身を是へ委せ給へ。其娘の朝霧が、君に深く。ト言懸て、袖を以て口を覆ひ、「彼所に移り給ひなば、磯山櫻咲き初めて、御心の慰めに、些少は爲ん。あれ〳〵見給へ、君を迎へに明石より。ト指す方を眺むれば、眞實に母の言ふ如く帆を十分に引揚げて、此方を目がけて來る船あり。光氏は小膝を打ち、「夫よ〳〵去年の春、御目に懸りし其時に、宗入が迎へを待ち、明石へ移らば、何事も心の儘に成りなんと、仰ありしを、事に紛れ、今日までは思ひも出さず、さあらば彼所へ赴かん。ト立上れば、花桐も、褄搔寄せて容貌を改め、「甚く道には疲勞たれど、斯る序に東山へ申さんことのある間、急ぎ上らん、去ばや。ト言捨て立去給ひぬ。飽ず悲しく御供に參りなんと泣入る我聲、予耳に入るに驚き、夢打覺て見上れば、月の顏のみ晃々と、四方に人の影もなし。迎へ船と見えたるは、釣花活の櫻花、枝も撓わに散掛るは、磯打波

の風情を殘し、屛風に畫く山吹も、只御姿の其儘に是に止れる心地して、更にゆめとも思はれず。振仰向ば、空の雲最哀れに靉靆けり。年頃はゆめの中にも、お顏を見奉らで、戀しう思ひし御有樣を、仄なれども今定かに、見上げたりしも、斯る浦邊へ漂流來りて、雨風烈く、高濤寄なば我身を捨てんと、既に心を定めしを、助け給はん故なれば、今はなか※なか危き目を見たるも、此身の幸ひなり。深き恩に比喩たる海をも磯をも厭ひなく、駈りて來せし勿體なさ。果敢なきゆめの中なれば、御返答だに云々聞えず、申し上ぐ可き事共は、殊更多きを、御顏を見し嬉しさに打紛れ、只一言も云ひ出でず、殘り惜や口惜やと、思ひ焦れて胸閉塞、又もやゆめに見えさせ給ふことも有んと、枕を取寢入らんと思ふ程、生憎に目も合はず、拂曉方になりにけり。斯る折から向ふの渚に、些やかなる船寄せて、二三人計りの武士、光氏が此假寓を指して急ぎ來るを、此方の侍士、怪みて出で迎へ、「何者なるか。」ト糺むるに、彼武士共小腰を屈め、「我々は宗人が家隷共にて候ふが、明石の浦より潮路の御船、艤ひて參りしなり。仁木藏人良清殿の侍ひ給はゞ對面して、事の由を申すべし。」ト言入て乘來りし舟に皆々立歸れば、此方の侍士、良清に此段を告げけるが、何事ならんと良清は意の中に驚き怪み、光氏が前に立出、「今云々の事のあり。其昔は父にて候ふ喜代之助も播磨を領し、某も彼入道とは、年頃相識中なりしが、境界論より私しに相怨恨る事候ひしを、東山殿聞し召れ、伊豫の國にて德分の付可き知行を、父に賜り、彼所へ移

○なか〱　此處は「かへつて」の意味である。

○德分　ようけ。利分。

○去る朔日の午睡の夢に云々
いぬる朔日の日の夢に、様異るものゝ告知らすることゝ侍しかは、信じ難き事と思給へしかど、十三日にあらたなるしるし見せん、舟を装ひ設けて、必雨風止まは此浦に寄せよと、重ねてしめすことの侍しかは、試みに船の装ひを設けて待侍しに、厳しき雨風雷のおどろかし侍りつれは、人のみかどにも夢を信じて國を助くる類多う侍けるを用ゐさせ給はぬまでも、此の戒の日を過ぐさず、此由を告申侍らんとて、舟出し侍つるに、怪しき風細う吹きて、此浦に着き侍こと、誠に神のしるべ違はずなん。此處にも若し知ろし召すことや侍つらんとてなん、いとも憚多く侍れど、此由申給へといふ」と『源氏物語』明石。

し其後は文通もせず、久しく成ぬ。此日頃雨風烈き波の紛れに船を寄せ、如何なる謀計を爲るやらん。ト眉に皺寄せ云ひければ、光氏は彼ゆめの告思ひ合せて、「其使者に疾逢へ」ト宣ふにぞ、良清急ぎ渚に至り、先づ其體を打視やり、去る頃程にはあらざれど、昨日も今日も尚烈しき此波風の厭ひなく、彼者共は何の間に舟出しつらん、怪しやと、意の底に思ひながら、舟に往きて逢ひたり。使者の武士も禮をなし、「主人宗入去る頃よりゆめの中に其様子見馴ぬ嬋娟き上臈來り、光氏君を迎へ申せ、必ず行末幸福あらんと、告知する事度度なり。此日頃御入を心に願ひて居る故に、思ふ事を夢見ならん。爭でか鬱悒き茅屋へ、招きたり共渡らせ給ふいはれは無しと思ひ諦め、其儘に過ぎ去りしが、又去る朔日の午睡の夢に、彼上臈常よりも親し氣に、入道の側に寄り、十三日にはあらたなる驗を見せん、船を艤ひ、必ず雨風靜まらば、此浦に漕寄せよと、重て告のありしに依り、夢覺て後試みに船を艤ひ設けし處、苛酷き風吹立ち、雨降出て雷の驚かしも有りしかば、根無事のゆめにもあらじと、指を屈て待程に、今日十三日に雨風の些少靜になりたる體、彼示現に聊か違はず、唐土にもゆめを信じ、國を輔けし類も多し。光氏君には用ひさせ給はぬ迄も、此告の日を過さずして、件の由を聞え上げ候はんと、船を出し侍つるに、怪敷風細う吹て、此浦に着きたるは、眞實に神の嚮導なるべし。光氏君にも倘思ひ合せ給ふ事もあらんか。最も憚り多けれど、此由申し給へ。ト云ふ。良清歸つて忍びやかに傳へ申せば、光氏も

熟〻思ひ合するに、此頃よりして夢現種〻に靜ならず、浪に恐怖て遁たりと、世の人の聞傳へ、後の誹も安からねど、母の教を背きなば、是より優りて猶人に笑はるゝ、目をや見ん。宗入ははや宗全に黨する心の絶たれば、捨置たりとも害とはならず。求めて行くにも及ばずながら、彼は齢も長たる者、身を任せんに恥辱ならず。退きて咎なしと、昔の人も言ひ置きたれば、一と先づ此所を去るに如じ。間者を入れて聞置たるに、割符を合すゆめの告。何事をか疑はんと、思ひ定めて、「如何に良清、汝再び船に行き、迎への武士に面會し、去年の春より光氏は知らぬ世界に彷徨て、風に浪に珍ら敷憂の限り見つれども、絶て華洛の方よりは、事問越す人もなく、只行衛なき空の月日の光ばかりを、故郷の友と、眺めて暮しゝに、濡たる袖を漁火に干せよと、蜑の釣舟を寄られたるぞ最嬉き。明石の浦には靜やかに隱るゝ隈も侍るやと、言ひしと告げよ。」着換の衣服、惟吉持、ト裝ひを改むれば、良清は御受も爲さず、座も立たず、最心得ぬ顏色にて、少し前に進み出で、「拙者所領の遺恨より、宗入を惡狀に申すには有らねども、當時音川勝元と合戰なして、其實は室町をも傾けんと邪智深き宗全が弟にて候へば、彼にも心は放し難し。其館へ輕〻しく御座を遷し給はん御心、何共愚意に解け難し。」ト云ふに、惟吉言辭を添へ、「去頃赤松高直より入道の娘へ、艶書を送りし時も何とやらん、嘲弄したる宗入が、言辭にも顯然たる、人を人と思はぬ白痴漢。今良清が申す如く、迂濶に膚は免し難し。何の故にか慌忙しう彼所へ遷らせ給ふ

○夜る〳〵毎に云々 「金葉和歌集」源兼昌、關路千鳥といへる事をよめる、「淡路島かよふ千鳥のなく聲にいくよねざめぬ須磨の關守」。

ぞ。ト窺ふ間に光氏は衣紋を改め、靜に坐し、「良清は始末を知らず、惟吉が若き心に然思ふも道理ながら、宗入は宗全に一味すべきけしきなく、度々加勢の催促にも從はずして、去る頃より佛道を深く尊み、佛を拜し娘に侍く夫より外に所爲もなければ、彼が膝を枕として、眠るとも心安く、夫を又如何にして知りしと疑ひ思はんが、朝霧が腰元女千鳥と云ふは、其昔六條の遊女にて、片貝と言ひし者。當時に惟吉は逢ひたる事もあらんなれど、姿貌の變りし故見忘れたるか。何日ぞや是へ來りし蜑の其中に、打交りてありしかど、彼が事をば言はずして、予琴に拍子を合せ、膝を打て居たりし女、人品能きのみ咎めしが、爾が不審したるも道理。彼こそ卽ち宗入が秘藏娘の朝霧なり。扨片貝も播磨の生れ、國に老たる母ありて、甚く煩ふ由を聞き、予根引して看病の爲にと、國へ下しゝ處、程無く母の疾病も全快。夫より彼に密事の趣き文にて細々言送り、千鳥と名を更へ、山名の館へ仕へさせて置つる故、朝霧を勸め拵へ、蜑の容貌に扮り爲し、我許へ誘ひしと推量なして、彼へは別に表着の小袖を取らせしが、差俯いて居たりしかば、予も顏をば定かに見ず。彼宗入が行ひは、人目の關の隙を窺ひ、夜る〳〵毎に須磨の浦に、通ふ千鳥の文にて知る。遊女ながらも、彼は元來心正く怜悧き性質。人質として我母を、調太夫が許へ送り、今も彼所へ留置けば、よも詐僞は言越すまじ。尙其上に宗入が、予を慕ひて、二心無き、確乎な證據も有んなれど、其事は故ありて、明白には言ひ難し。良清は供致せ、惟吉は是に止

り、明石よりして、紫への返辭を某認めて送り越なば、手卷へ渡し、人を添へて華洛へ歸し、其後來よことゝ宣へば、兩人はつと恐れ入り、良淸は先づ御前より船に馳行、仰の趣き、箇樣々々と述べけるにぞ、迎ひの武士は大に喜悅、然あらば兎角取急ぎ、天明ぬ前に御船に乘奉つれと、犇めく處へ、光氏は睦しき武士四五人引連て、悠然と來たりければ、宗入よりの迎への武士、砂に頭を摺付て、設けの御座へ案内に、連て皆々乘移るこ時に不思議や風直り、彼怪き追風吹出。御船は宛然飛ぶやうに、明石の浦に着き給ひぬ。

○勘平はやまりしの　浄瑠璃『假名手本忠臣藏』第六に「彌五郎すたご立上り、死骸引上げ打返し、ウムウさ傷口改め、「郷右衛門殿これ見られよ、鐵砲傷に似たれども、是は刀で抉つた疵、エ、勘平早まりし」……郷右衛門心付き、『イヤコレ千崎殿、ア、これにて思ひ當つたり、御自分も見られし通り、これへ來る路端に、鐵砲受けたる旅人の死骸、立寄り見れば斧定九郎、强慾な親九太夫さへ、見限りて勘當したる惡黨者、身の行ひなき故に、山賊すると聞きしが疑ひもなく勘平が舅を討つたは彼奴が業」『傑作浄瑠璃集』下二七一頁参照）

○白木綿かけし　知らずにかけた詞。

○山伏の祈りの段　山伏鬼得院の幻術、白糸の横死、手巻の注進等第十九編参照。すべて『源語』にはなく、作者種彦の創意である。

○打通りぬべく鐵砲雨　彈雨のやうに全身に通るばかり横降りに吹きつける雨。淨瑠璃『假名手本忠臣藏』第五に「この山中の鹿猿を撃つて商ふ種子島も、用意に持つや袂まで鐵砲雨のしだらでん、誰水無月といふ立の、晴間をこゝに松の蔭」（『傑作浄瑠璃集』下二五一頁参照）

偐紫田舎源氏第二十編序

忠臣蔵の五段目は、猪におそれて定九郎が迯こむとたんに、鐵砲の響ばかりで幕となし、はゝア勘平はやまりしの。郷右衛門が詞まで、定九郎がうたれしは、隱趣向にありしかど、腹切が重なりて、見物の氣がめいるが故、惡の報を目前に、こゝちよくこそ見せしとなん。須磨明石も繪冊子になほすと眠氣のさす事多し。是はならぬと、巳の日の秡、果は我身にかゝるとも、白木綿かけし山伏の祈りの段の冷みに移り、打通りぬべく鐵砲雨、落かゝりぬべく震動電。あはやと見送る白糸が、ふすぶりかへつて死たるは、鐵砲疵に似たらんかと、彼の定九郎が例により、見給ふ人を飽せじと、又此編も手巻が早うち、筆へ乗地のくる間もなく、近づく暮の門神樂、獅子より先へいつさんに、賣出しを急がれて、最倉卒に稿を脱す。

○震動電　震動雷電の訛。風雨を伴ふ電光雷鳴。

○ふすぶり　煤の訛。

○筆へ乗地のくる間もなく　筆の調子が出るほどもなく。「乗地」は謡曲などの雨垂拍手にて謡ふところ、又物事の調子に乗つて、氣の進むこと。

此おうまやがしの渡し場を左りへとつて馬場をよこ切りさつそく相知れまをすべき新宅に

柳亭種彦記

偐紫田舍源氏第二十編

須磨より明石の其間は、只這渡る程なれば、常も舟にて通ふには、片時の間に往なれど、是は猶怪きまで見ゆる風の心なり。彼所へ着て眺望るに、※磯馴松の風姿可笑く、砂は珠を散らすに似て、濱の樣子最異なり。須磨の浦より人繁く見ゆるのみなん、閑靜なる所を願ひし、光氏の心には背きける。此邊りは入道の總て領する所なれば、海に連る磯邊の邊、此少隔たる山隱れ、其所にも此所にも春秋の時々につけ、興を催す事を旨とし、渚の※苫屋の侘たる抔も風雅に爲なし、山より傳ふ眞清水の淸き流に、いかめしき堂を建しは、佛を置き※三昧を行ひて、後の世は※安樂世界に生れんの準備にて、林隱れに稻の藏幾棟か見えたるは、秋の田の實を刈收め、齡と共に積重ね、此世を安く樂まん準備なる可く思はれて、折折につけ所につけ、見所ありて爲集めたり。此時に宗入は御船着しと報知を聞き、御乘物を奉つれど、斯く見所ある四邊なれば、歩にて往かんと、光氏は彼方此方を遊びありき、既に館へ近づき給へば、衣服を改め入道は御迎に出る程、日漸々差昇り、彼淸らなる御容姿を仄に見奉るより、老も忘れて我齡も延る心地に打笑れ、諸人の靡き隨ふも道理なるかな、比類無く天然柔和の御顏、是に及向ふ兄宗全、爭でか其身の安穩ならん。自己も一

○磯馴松　磯や山に吹く風の爲に梢を挫られて、自然に枝が蟠曲し、奇妙な姿をなしてゐる松。

○苫屋　苫にて葺ける家屋。苫は菅、茅などを編んで作り、船舶の雨露を防ぐなどにも用ひる。

○三昧を行ふ　念佛三昧を行ふの謂。念佛を稱へて、專心にその妙理を觀念するのである。三昧は三摩地等の略で、心を一つ所にとゞめて、動かないことをいふ。源氏物語明石の卷に「濱のさまげにいと心異り。人繁う見ゆるのみなん御願ひに背きける。入道のらうじ占めたる所々、海のつらにも山隱れにも、時々につけて興を探すべき渚の苫屋、行をして後の世のことを思すましつべき、山水のつらに、嚴き堂を立て、三昧行ひ、此世のまうけに、秋の田の實を刈り納め殘りの齢積むべき稻の倉町共など、折々所につけたる見所ありてしあつめたり」。

○安樂世界　生死、寒暑、憂惱等の苦がなく、至極樂しい淸淨なる國土の義で、西方十萬億佛土の所にあるといふ。極樂淨土といふも同じ。

○住吉の御神　官幣大社。表筒男命（うはつつのをのみこと）、中筒男命、底筒男命、息長帶（おきながたらし）姫命（神功皇后）の四神を祭り海上守護の神として崇敬さる。大阪市住吉區住吉町にあり。

○得ならぬ物　云ふに云はれぬもの、立派なもの。「源氏物語」に「所のさまをば更にもいはず、作りなしたる心ばへ、木立たて石、前栽などの有樣、えも言はぬ入江の水など、繪に書かば、心のいたり少からむ繪師は、書及ぶまじと見ゆ。月頃の御住居よりは、こよなく明かに懐かし。御しつらひなどえならずして、住ゐけるさまなど、げに都のやんごとなき所々に異らず。艶にまばゆきさまはまさりざまにぞ見ゆる」（明石）。

○彼の嵯峨　紫の上。

○命に換へてと宣ひし　第十七編上に光氏[illegible]、出立に臨んでの紫の

味する時は、法師首を梟さるべきを、不思議の靈夢を蒙りて、此所へ迎へ參らするは、是れ住吉の御神の助けなりと、心の中に數々拜み奉り、月日の光を手に得たる心地して、御先に立ち、設けの一室に請じ參らせ、先有難き御入の事共懇切に述終り、「偖此頃の高潮に恐怖れて、娘抔は岡部の宿と呼慣はす、些少離れて小高き家へ移し住せ候へば、此濱館に居る者は、拙僧が召仕ふ男ばかりに侍れば、御心安く在しませ。」ト酒御菓物數々を盡して饗應大方ならず。既に前にも記したれば、山の姿の可笑氣なる、渚の隈なく打晴れたる所の樣子は更にも言ず、館の造作もそれに劣らず、深く心を用ひけん、立石木立物古たる庭に、入江の水清き、其有樣を書くとも、心の至らぬ畫師抔は、寫し得ん共思はれず。彼の須磨の假寓より、此所は此上なく明かにて、屛風襖障子道具抔、得ならぬ物を取揃へ、御座所の整頓、設けの結構、實に華洛の高貴き所々に異ならず。美麗く目映き樣子は、音に聞えし館にも、却つて優る計りなれば、侘しかりし須磨に引かへ、光氏は我が住居へ戻りし樣に思ひなされ、打寛いで日を重ね、彌〻心鎭まりて、京へ文を送らんと、机案に凭れ硯を馴し、藤の方へは珍しく蘇生る樣など聞え、其外に睦しき人々へも此程の有樣委敷言遣らんと、大方認め給ひしが、彼の嵯峨よりして哀れなりし文の返事は、果敢々々敷書きもやらずに打置々々、目を押拭ひて躊躇ふを、人も怪しと見咎めんと、漸〻心を取直し、「華洛さへも烈き雨風、尚此四邊は高潮の、辛き目を見盡して、抑〻何の報いに歟、

上の發句にある詞である。「葉に泣沈み、暫しが程は打臥して、身動きもせず居たりしが、やう〳〵膝行「ゐざり」出で給ふ。髮も亂れ、白粉は、涙に洗ひて繕はぬ、姿も月のおぼろげに、見えて常よりなまめかし。……」藤浪や春のわかれを知らで咲く」其花房の延びやかに、心を用ひて待ち給へど、思ひたゞらす淺はかに言ひかけ給へば紫が、前にもかへし止めたし行く春をけに。—ここそ思はめこ、見給ふ雖く、たのらひしが、夜も明けはてなは人の目に、かゝるも悅し、思ひきり、館を急ぎ出で給ひぬ」。

○春を知らじ云々　源氏物語

明石の卷に「おもへ〳〵いみじき目の限を見盡しはてつる有様なれば、今はと世を思ひ離るゝ心のみまさり侍れど、鏡を見てもと宣ひし面影の離るゝ世なきを、かく覺束ながらやと、こゝら悲しきさま、様々の愁はしさはさし措かれて

はるかにも思ひやるかな知らざりし浦よりをちに浦づたひして、夢の中なる心地のみして、覺めはてぬほど、如何に僻事多からんと、そこはかとなく書き亂り給へるしも、いと見まほしきそは目なるを、いとこよなき御志の程と、人々見奉る」。

今は世を思ひ離れ、此儘影を隱さんかと。度々思ひ侍べれど、命に換へてと宣ひし其俤の離るゝ際無く、覺束なくも存生へて、(春を知らじ浦より遠の浦傳ひ)。ゆめの中なる心地して、尙覺めやらぬ程なれば、如何に僻言多からん』と、底果敢となく書亂り給へる處へ、良清は慌忙氣に來りしが、御淚を浮めさせられ、何事をか書給ふと、最見ま欲く差覗き、御志ざし最深き御文章は、確乎に嵯峨の正室への御返事ならん。思し出す事共の嘸多からんと推量り、倶に淚に暮んとして、氣を取直して手を支へ、「須磨へ殘し置かれたる御近習の武士共、仰に隨ひ召寄たる姓名是に。」ト一葉の書附を差出せば、光氏取て瞥然と見、「此者共は雷に恐れ、高潮揚ると云ふ噂を聞怖なして憂ひ悶え、抑も我々は如何なれば、父にも母にも遠く離れ、最愛と思ふ妻や子の顏をも見ずして死るかと、嘯きたる臆病者。ありても用に立ざれば、無くても更に事缺ず、夫故に召寄たり。疾々是へ。」ト目通へ呼出して、甲乙への御文を渡し給ひ、「汝等は是を持ち、早々華洛へ歸るべし、重ねて來たるに及ばず。」ト物多く賜りければ、彼者共は大いに喜び、三拜なして立歸る。跡に良清聲を潛め、「其御机案に見えたるは、正室への御返事なるべし。嘸待兼ねて在すべきに、何迚夫のみ殘し置き給へるならん。」ト尋ぬれば、光氏は打微笑み、「彼等に是を屆けなば、手卷が遙々降りたる甲斐はあらじと歎くべし。然れば手卷も諸共に歸しやらんと思へども、絕て久しき本夫に逢ひ、物語る事ある可しと、心を察してしばしの猶豫。皆夫々に故鄉へ言傳

○便り　手だて。手段。方法。

○見越の松　塀などの上を高く越して、前を俯して見るやうな姿をした松。

○烏帽子　黑色にて紗、帛、紙で作つた帽子。

○素襖　六位の武士の儀式服で布地にて家紋をつけ、胸紐、菊綴は革緒を用ひる。

○上下　同じ染色の肩衣と袴とを紋服小袖の上に着る。麻上下が正服。

あらば、暇を取らせし武士共に言遣れ」ト宣ひながら立上り、向ふを遙々見渡せば、小歇なかりし空の氣色名殘なく澄渡り、網を下し釣する蜑共、心地能氣に漕廻る船も、手に取る計りに見ゆ。光氏は後に控へし良清が方を振向き、「須磨は最心細く、蜑の岩家も稀なりしが、是處はたにには引換へて、人の繁きは五月蠅けれど、眺は彼所に遙に優り、哀れなる事可笑事多くて、萬事思ひ慰む便りは有り」など宣ふ折節、庭先へ群集來たる蜑の中に打交り「御注進」ト喚はるは、思ひ懸けなき手卷なり。そも何事の報知ぞと問せ給へば、手を支へ「夜もほの〳〵と明行く頃、須磨の浦邊へ獵船とも見えざる船を數多漕寄せ、苫反退て立出るは、所に似合ぬ鎧武者、隱し持ちし旗押立、陣鐘太鼓は打浪の音に擬へて吶と押寄、抑も我々は宗全が羽翼と賴める兵者なり、光氏君に申すべき事のありて向うたり。疾々對面あられよと、大音揚げて喚はるにぞ、御不在に侍ひたる片攬の調太夫、見越の松ヶ枝踏占めて、其身輕氣に塀の屋根迄立上つて遙に見下し、君に御目見願ひなば、烏帽子素襖、或は上下、身の程々に隨ひて、衣服を改め謹愼て申し入れ可き事なるに、仰々敷其打扮、禮を知らざる蠅虫共、泥膳御門へ踏込みなば、一人にても活ては歸さじ。光氏君は早疾に明石へ移らせ給ひしかど、敵寄來らば斯くなせと、豫ての御下知、手配備へ、早疾來つて刀の斬味試よと、打笑へば、寄手は小首打傾け、道々風說に聞きしに違はず、はや宗入が光氏を迎へ取りしと覺えたり。彼は主人の弟ながら、兄の心に背ける白癡漢、容易

は光氏を渡すまじとは思へ共、打捨ても置難し。一先づ明石へ赴かんと、取て返す其處へ、高潮吶と打揚げて、寄手の大勢浪に漂よひ、底の水屑と爲り往くを、惟吉遥に打見やり、去りし朔日御祓に假託、怨敵退散成しめ給へと、君が手づから形代を、海に打入給ひしに、其樣子違はぬ彼等の身の果、元來直なる御心にて御祈念ありしを、神の感應、あれ海上は舊の如く凪渡りしも不思議の一つと、言へば、片攬調太夫、扇を開いて立上り、「花を流すは芳野川、紅楓を流すは立田川。鎧の※縅は韓紅、風に散行木の葉武者、流すは須磨の浦浪」と、謠ひ奏て颯々の聲治まりし松の風浪の音さへ靜まりて、はや用心には及ばねども、勝つて兜の緒を締めよと、俚諺にも云ふなれば、惟吉は御不在を離れ難く候ふ間、妾が本夫の名代、此事御報知申さんと、身裝ひする折よくも、君より度々下賜物、其外御恩を請けたる蜑共、來懸りて樣子を聞き、然あらば船にて送らんと、云ふを幸ひ、彼者等の姿に打扮て一走り、此勢ひにて華洛へ戻り、嵯峨への御返事奉つらん。ト伺ひ申せば、光氏は前に認め置たりし紫への文渡し給ひ「しばしの名殘を惜ませんと、今日迄須磨に留置きしが、歸りの遲きを、華洛にて心元なく思ふべし。」予も惟吉引連れて、遠からぬ中歸洛せん。それを賴みに日を送れ。良清は心利たる人を撰んで、此手卷を京の住居へ送らせよ。ト此所へ來たりし蜑共には反物卷絹種々に例の祿を賜はりければ、打喜びて聲を揃へ「海の事なら此方が得意、僥倖に追風は好し、大船に乗換へて、※大江の岸まで送

○縅 「緒通し」の略。鎧のさね甲葉を綴つた、絲や革をいふ。

○大江の岸 今の大阪八軒屋。「攝津名所圖會」に云ふ、「むかしは大江の岸大江の浦といひしも、今は京橋筋三丁目四丁目といふ。又八軒の旅舍あれば、土俗八軒屋と地名す」。

つて進じよ。姉公ござれ。ト手を取るを力に、手巻は立上り、君を初め人々に、別れを告げて回顧り／＼、名殘惜氣に歸りけり。

光氏豫て聞きしに違はず、此家の主個は佛のみ朝夕拜みて、兄の非道に黨する躰も見えざれば、彌〻心を安んじて、又三五日送りつゝ、或夕暮の寂寥に、庭へ立出で池を廻り山へ登りて、思はずも三昧堂へ入りて見るに、宗入は今行ひを仕果て退く體なりしが、光氏の來たりしを見るより、大いに打驚き、席を讓りて引下り、先づ恭しく禮を述べ、「闇の內とは申しながら、御近習も連れられず、此所へ來せし勿體無さ。偖朝暮に御顏を見上度は候へど、老たる者が御前へ出なば、御氣詰と存ずる故、物懸隔たる下の家に引下りてある間、繁々には御機嫌を伺はざるも怠惰ならず。ト恐れ入て手をつくを、熟〻と視給ふに、歲は六十計りながら、最清氣に汚穢からず、彼御佛を深く信じ、行ひに窶れしか、肥太りしと聞きたるに、然も無くて、人品の打上りて、宗全よりも氣高く見ゆるは、氏ある母の血統に依れる物ならんと、心に思ひて、光氏も最〻親敷言辭を懸け、「言はるゝ如く此程より、對面はせざれ共、此所にて經文を讀誦の聲は朝夕聞く。法師も及ばぬ常の行ひ、微妙思ひ澄されたる心の中の床しさよ。ト仰に、些少面を揚げ、「執權の望みを失ひ、引籠りたる我儘者と、御征伐もある可き處、義政公の寬仁大度、先祖は武功の家なりとて、其儘所領を下し給ひ、何不足なく世を送れど、讓り與へん男子無し。是も前世の宿業と思ひ諦め、御

○水の月　諺。古本「酒呑童子」に「金銀は寶物ながら水の月、目に見るはかり、手には取られず」。

佛に仕へて餘念はあらざれど、只々絆は娘一人、持て煩ひたる樣子を見て、他人は笑ひ候へど、田舍に住ふ悲しさは、聟に取るべき者のなし。土民は扨置、氏も無き諸士に配せんより、寡婦でおくのが我望み、娘も同じ心にて、今日迄も緣邊の事をば嘗て言出でず。偶〻聟にと思ふ人無きにもあらねど、水の月目に見る計り手に取られず。思ふ心を協へんと、佛神を彌〻念じ奉つれ共、效驗も無く、嗚呼儘ならざるこそ浮世なれ。ト聞惡きまで好機會と洩し憂へ聞ゆるに、君も去歳高直に可笑と聞置給ひし人、先日蜑に打交り、須磨の浦へは來たりしが、其際は羞らひて差俯向て居たりしかば、姿は見れど顏をば知らず、思ひ懸なく今此所へ廻り〳〵て來たりしも、然る可き契りのあるにやと、思ひながらに罪を受け、「予は流され人なれば、世の靜謐を祈るより外に心はよも移さじ。且つは嵯峨に殘りし人の思はん事も耻かしう、氣色立ちて其返辭は爲さず。老人なれば往昔の事をも見識て有んかと、談話を外へ散しつゝ、種々昔日の物語爲させて、熟〻聞き給ふに、思の外に徒然の紛れともなり、且は又浮世の事に暇なく、さしも聞置給はざる世の古事共遠慮もなく打摧いて聞ゆるにぞ、斯る所へ漂流來て、斯る人にも近付かずば、是等の事をば聞くまじと、最興ありと思す事まで、打交せて言續け、最早黄昏となりければ、光氏は立上り、「御物語の珍奇さに、今日のみ永き日と覺えず、用もあらんに心なく引留置し。ト宣へば、宗入彌〻恐れ入り、「老の僻言御耳に觸れ、君こそ嘸かし御退屈。然あらば御暇給はらん。ト引退

きて、夫より直樣家内の者の移り住む岡部の宿に急ぎ行、妻の眞柴を側へ近付け「今日は取分光氏君の御懇切の仰を受け、昔今の御物語、馴々し氣なる事迄も申し上げしが、最氣高う、位備はる御有樣、近く見上申す程、自然と心の改まり、初めに言ひたる事さへも、後には反つて耻かしく、豫てよりして我思ふ娘の事も、水中の月に比喩てほのめきながら、心の儘に打出て聞え上ぬが、今となり口惜」ト相語ひて密々歎くを洩聞く朝霧、田舍に育つ果敢なさは、尋常の人だにも、顏やかたちの打揃ひ、醜からぬは見ぬものが、花の華洛の御所櫻種の蘗れて咲出し君が若木の御姿を、餘所に眺望し其日より、枕を取れば夢見草。覺めても現幻しの影身に添ひて親逹の、もしや推して其樣に、心に懸けて給はる歟、世に有難き事ながら、嵯峨に聞えし殿造り、明石の浦に果敢なき苫屋、似合ぬ緣は是非なしと、心に悔みつゝくりと、物哀れ氣にイみしが、思ひ餘りて、「是れ千鳥、妾は其方が怨めしい」ト突轉されて喫驚し、「見れば御目に淚を浮め、後先も仰しやらず、あの妾には何お怨みと、言はねばならぬところなれど、大概は知れてゐる。殿樣と奧樣の今小聲での御物語は、光氏君の確か御噂」妾が御勸申し、蜑の姿に扮させまして貴孃の御目にかけた故、彼樣云ふ事を聞く度々、氣が揉るのは、是れ千鳥、其方が皆した事ぢや」と其御怨で御座りませう。夫程までに思召す貴孃の優い御心ばせ、御有樣も尋常ならぬ事迄も、誰が告げしか、彼方へ疾に洩聞え、君にもゆかしう思されぬ事はなけれど、見懸とは違うて堅い

○千鳥　もと六條の遊女片貝。今は朝霧に侍してゐる。

○卯花月　陰暦四月。

○更衣　陰暦四月朔日、冬衣を改めて袷を着るをいふ。

○小袖　下着の服、袖口を狹くし、袖下を丸く縫つたもの、無地の帛を用ふ。

○夜の鶴　燒野の雉子、夜の鶴。子を思ふこと。

○千代も　いつまでも。

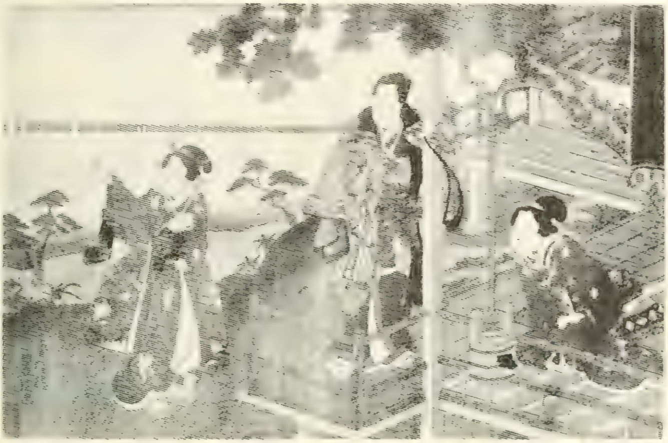
○行ひ　勤行。

御性質。處を妾が才覺で、ト聲を潜むる此方より、「娘は何處に何して。ト言ひつゝ出る母眞柴。千鳥は驚愕口に袖、目交で別れ物言はぬ、山吹散りて咲きかゝる、※卯花月と程なくなりぬ。

朔日の朝の程※更衣に候へば、御心には協はずとも、御着用願ふ由を、入道御前に申し述べ、御羽織御袷種々を取揃へ、※小袖の臺に堆高く積重ねて、持出づれば、光氏其體を見遣、「此頃よりして某に宗入が傅く樣子、昵近譜代の家臣の如く、差控へずに事を計ひ、剰さへ今取次の武士をも頼まずして、更衣の此衣服打つけに持出しは、餘りに予を輕しめたる擧動なりと思ひしが、不圖此頃も言出し朝霧の事胸に浮み、寔に是れも※夜の鶴、※千代も明石の松ヶ枝に巢を結べよと、子を思ふ心よりなすことならん。ト思ひ許して近く取寄せ、「よしある樣子に爲出たる、色といひ綾といひ、華洛も及ばぬ此物好。いざ脱更て若やがん。ト仰を聞いて笑を含み、「若き時より武骨の拙僧。年老たれば猶更に、如何なる物を、此頃は召せらるゝか心も注ず。斯る田舍に育ちても、女こそは知るらめと、娘に萬事打任せ、人手を借ず朝霧が縫しとやらん承まはる。御召惡く候はん。ト言ひつゝ時辰の響きに驚き、「六時の勤行のはや時刻、※行ひ果なば緩々と又御目見を願はん。ト立往く跡に、光氏は件の衣服を脱更へて、手本もなしに縫ひたるが、我身に行丈能合しは、何ぞや須磨にて朝霧に送りし小袖に競べけんと、心に可笑、突揃ふる袂の中に縫付けて、密書と書いたる

○心も消る淡路嶋云々　消る泡に淡路嶋をかけたり。戀しさに心も泡の如く消えるばかりに見えるといふのであらう。「源氏物語」に「のどやかなる夕月夜に、海の上曇なく見え渡れるも、住馴れ給ひし故里の池水に、思ひまがへられ給ふに、言はん方なく戀しきこと、いづ方ともなく行衞なき心地して、たゞ目の前に見やらるゝは、淡路嶋なりけり。あはと遙になど宣ひて
あはと見る淡路の嶋のあはれさへ殘るくまなくすめる夜の月、久しう手も觸れ給はぬ琴を、袋より取出給て、はかなく搔鳴し給へる御樣を、見奉る人もやすからず哀に悲しう思合へり。廣陵といふ手を、ある限り彈きすまし給へるに、かの岡邊の家も松の響波の音にあひて、心ばせある若き人は、身にしみて思ふべかンめり。何とも聞分くまじき此のもかのものしはふる人ども、すゞろはしくて、濱風をひきありく。入道もえ堪へで、供養法たゆみて、急ぎ參れり」と明石。

一通あり。披き見れば、名も宛名も記さざれども、千鳥の手跡。何事の報知かと、口の中にて讀畢り、ふつと後を顧みて、「夫に居るのは惟吉ならずや。何時の間に來たりし。ト問



せ給へば、頭を下げ、「手巻が申し上たる如く、山名の寄手は一名も殘らず波に取られて、重ねて寄する體もなければ、調太夫と申し談じて、御留守には彼を殘して、私は御遊びの具御手道具、夫彼を船に積み、只今罷り越したり。ト申し上ぐれば、「夫こそよけれ。此家の主個の心遣ひ、調度に不足はなけれ共、手馴し物は懷かし。皆此座敷へ取寄せよ。ト言捨て只一人樓へ上り、欄干に肱を凭せて眺望れば、今日は殊更長閑に、海の面の陰りなく見え渡れるも、住馴し彼嵯峨の池水に、思ひ擬へて戀しさに、※心も消る淡路嶋、只目の前にぞ見やらるゝ。此時に惟吉は、持たせ來りし種種の御遊の具を運びければ、久敷手も觸れ給はぬ琴を、光氏手づからに袋より取出し、先試みにいと果敢なく搔鳴し給ひけるが、御側の人

人も、哀れに思へる樣子なれば、氣を引立てんと調子を直し※花美なる手の有る限り、彈澄し給ふ程に岡部の家にも聞付けて朝霧が腰元ども、耳を澄して餘念もなく、「松の響きや浪の音、夫に打會ふ糸の音色。面白うて悲しうて、思はず涙の零るは、確乎に君の御爪音。あのマア御聲の美しさ。ト未だうら若く※心ある者は取別身に染みて聞居る。館の構への外面、通り懸りし柴賣る老父、琴と云ふ名も知ざれど、立止まりて振返り、「何やら奇な音がする、襟元から慄然して、嗚呼濱風を引いた樣な、くさめ〳〵。ト打過る。入道は三昧堂に、心を澄し居たりしが、不圖琴の音の耳に入り、佛を供養し奉つる法も撓みて、慌忙しく、再び御前に罷り出で、「浮世を離れし身ながらも、最珍しき御手弄み承まはつて、其昔華洛に住みて、月花に遊びし事を思ひ出で、且我願ふ極樂の※歌舞の菩薩の音樂も、斯やとばかり感に堪へ、老の涙は止あへず。ト泣々申せば、琴を押遣り、「物の音は折に寄、所に寄りて、然も無きに、可笑聞ゆる物にてあり。所はあれ〳〵遙々と滯ほり無き海面なり。折は中々春の花、秋の紅楓の盛りより、其所はかとなう繁れる蔭も、何となう婀娜しう、※夜は水鷄の打敲き、誰が門閉てと哀氣に、覺ゆる際に有なれば、最々幼きわが調も、心凄く聞えしならん。ト物語り給ふ中に、岡部の家に人を走らせ、此所に見えざる御遊びの道具共を取りに遣り、勸め申せば、光氏は※一節切をすこし吹き、「際と所は前に云ひつ。又糸竹も人の程に、似合ふあり、似合ぬあり。先づ琵琶は法師なるべし、一節切は若衆に能き

○花美なる手　華美な曲。

○心ある　數寄心のある。風流氣のある。

○歌舞の菩薩　極樂世界に於ける管絃歌舞を行ふ菩薩。

○夜は水鷄の打敲き、誰が門閉て云々　古歌に「また宵に打來てたゝく水鷄かな誰が門さして入れぬなるらん」とあり。水鷄は水禽の一種、鷄の雛を大きくした如き形で、脚は長大である。夏から秋にかけて、夜、田澤に鳴く。その聲恰も人が戸を叩くやうであるから、水鷄の鳴くを「たゝく」といふのである。「源語」(明石)に「箏(さう)の御琴參りたれば、少し彈き給ふも、樣々いみじうのみ思ひ聞えたり。いとさしも聞えぬ物の音だに、折からこそは増さるものなるを、はるばると物の滯りなき海面なるに、中々春秋の花紅葉の盛りなるよりは、たゞそこはかとなう繁れる蔭どもなまめかしきに、水鷄の打叩きたるは、誰が門さしてと哀れに覺ゆ」。

○一節切　尺八に似て細く短かい樂器。竹の節一つを籠めて切るより名づく。曲尺で一尺八分。

○しどけ無う　無雜作に。
○延喜帝　醍醐天皇。
○間嶋知義　光氏の母花桐の父。從つて光氏には祖父に當る。後に出づ。
○糸竹の道　糸は絃、竹は管。管絃の道、音樂の道である。

か。琴は女の懐かしき體にて、深く心を用ひず、只しどけ無う彈くこそ宜けれ。ト宣へば、宗入はもし朝霧が琴を能く調ぶる由を知し召し、斯く宣ふかと、打笑みて、一君が遊ばす御姿より、猶懷かしき體なる女は、絕えて世界に在べからず。一節切を吹くべき若衆は、此所らに見えず候間、此入道が琵琶法師になりて、御目に懸く可し。ト最可笑う珍しき手を、二ツ三ツ彈出たり。光氏は興に入り、貴僧は文武の道のみならず、遊藝にも賢しと、豫て噂に聞たるが、果して世にも稀なる巧手。尋常の琵琶法師の及ぶ可きところにあらず。ト賞し給へば、琵琶を彈止、物の音は折により所に寄るとの仰なれど、一ツは器の善惡に依て、上手も下手と聞え、下手も上手と聞ゆべし。今彈じたる此琵琶は、延喜帝の御手に觸れ、宇多法師と號けし名器、傳へ〳〵て丹波の郡領間嶋知義が寶となる。彼は元來糸竹の道に委しき者なる故、宇多法師の名器を得てより、猶旦暮に心を凝し、自然と妙を極めたりしが、彼知義は我母の伯父なりし緣に依り、琴琵琶笛の弟子と爲り、年月學びて終に此秘藏の琵琶まで讓り受けぬ。今は年老い、其上に描き我身を回顧て、華洛を離れ、世の事は皆捨果て何事も忘れ果ては候へど、餘りに心鬱結し、其折々は搔鳴し侍べりぬるを聞取て、怪う學ぶ者のあり。不思議や彼が調る手遣ひ、自然と間嶋知義に、能く似通ひしと思へるも、濱松風のみ常に聞く、我僻耳にや侍べらん、忍びて君の御聞に入たし。なんど云ひつつも、打わなゝきて涙ぐむ宗入の顏色を、光氏見遣て心に點頭こ左程に琴を好

る人ありとも知らで、我儘に調べたりしぞ恥かしき。扨最前も言ふ如く、琴は女の彈くこそ宜けれ。然ば往昔は大内の官女を初め、遊女迄も、上手に彈きしものありしが、其筋を取立て、傳ふる人の無くなりて、唯今の世に名を取る人々、心は至りて手は廻らず、搔撫るのみにてあり。其知義は必定往昔の傳へを受し人ならん。殊に我母花桐の父にてあれば、名を聞くさへ床しき人に、手遣の似通ひしとは最興あり。定めし夫は女ならん。如何にしてかは聞くべき。ト宣へば、打笑ひ「君が聞し召れんには、御前に召されても、何の憚り候ふ可き。白樂天が江州へ流されし其時に、商人の女房が彈せし琵琶を聞いたる例ひくのは恐れ多けれど、昔も申さば御漂泊、賤しき女の糸竹を、聞し召のも御心慰め。琵琶は取分眞實の手を彈洗むる人往昔も難き事に言ひたるが、彼は好める道故か、滯ほる事もなく、最懷かしき手抔を、人に違ひて彈ずるが、彼荒き浪の聲に交るは悲しう思ひながら、又嘆かしき折々の、物紛れにはなり候。ト琴のみならず、琵琶にまで、朝霧が達したる由を言はんと、樂天が古事をさへ言出しを、可笑と思して、琵琶と琴を取換へて、宗入が前に押遣り給ひければ、躊躇ふ色なく、搔彈手遣ひ、最太う古めきて、押す色の音からびて艶なし。「伊勢の海には有ねども、淸き渚に下立て、拾ふ貝は何々ぞ。ト惟吉に謠はせて、光氏も拍子を取り、時々聲を添へ給ふを、琴彈さしつゝ宗入は、感に堪へて聞居たり。此日は殊に晴渡り、暑からず、寒からず、程よき風の松にあたり、日は麗々と南に廻り、人の

○白樂天が江州へ云々　唐の人白樂天の長詩「琵琶行」の事。白樂天が江州の司馬に左遷されてゐる時、潯陽江上で夜半に船中で琵琶を彈ずる者がある。それは長安の遊女で、今は年長じて容色衰へ商人の妻となつてゐる者であつた。白樂天は此の琵琶の音を聞いて、仙人の樂を聽くが如くであると嘆賞した。

○からびて　ひからびて。

○伊勢の海には有ねども　催馬樂「伊勢海」に「伊勢の海のきよき渚に、しほがひに、なのりそや摘まむ、貝やひろはん、玉やひろはん」とあるのを轉用したのである。從つて「伊勢の海には有ねども」といふ言葉を添へた譯である。

○朝霧が身の上を、問はず語りに云々　「御くだ物など珍らしきさまにて參らせ、人々に酒强ゐそしなどして、をのづから物忘れもしぬべき夜の樣なり。いたく更け行まゝに、松風涼しうて、月も入方になるまゝに澄みまさりて、靜かなる程に、御物語殘りなく聞えて、此の浦に住み始めし程の心遣ひ、後の世をつとむる樣、かきくづし聞えて、此のむすめの有樣問はず語りに聞ゆ。おかしきものゝ流石に哀と聞給ふ節々も有。いとゝり申難き事なれど、我君かうおぼえなき世界に、假にても移ろひおはしましたるは、若し年頃老法師の祈申侍る、神佛の憐びおはしまして暫しの程御心をも惱まし奉るにやとなん思ふ給ふる。その故は住吉の神を賴み始め奉りて、此十八年になり侍ぬ。女の童のいときなう侍しより思ふ心侍りて、年頃の春秋毎に、かの御社に參る事なん侍る。晝夜の六時のつとめに、みづからの蓮の上の願をばさるものにて、たゞ此人を高き本意かなへ給へとなん念じ侍る。先の世の契拙くこそかく口惜しき山がつとなり侍けめ、親大臣の位を保ち給へりき。みづからかく田舍の民となりて侍り。次々さのみ劣りまからんは何の身にかなり侍らんと、悲しく思ひ侍を、これ

心も延やかに憂を忘るゝほどなれば、何をがなとて珍しき御果物を奉つり、御側の人々にも、酒を太く強ひ抔して、又宗入は席を進み、先づ此浦に住初めし心遣ひを初めとして、將た後の世を勤る樣子の物語共殘りなく聞ゆる果は、又例の朝霧が身の上を、問はず語りに移り行き、憚り多き事なれど、我君の斯く覺えなき、浦邊に彷徨したるは、もし年頃老法師の祈禱し神や佛の憐み、暫時の中御心を惱したる乎と覺え候ふ。其故は住吉の神を賴み初めしより、十八年になり侍りぬ。娘が未だ幼少き其頃よりして、拙僧が思ふ仔細のある間、年々の春秋毎に、彼御社へ朝霧を參詣せて今に絕えず。晝夜六時の勤にも、我後の世に蓮の上に生れん願ひは捨置きて、只此人を位高く爲しめ給へと念じ候。斯口惜き山賤となり下れるは、前の世の契り拙き故にこそ。父は華洛に住居して、人に知れし者なるに、予は田舍の民となる。斯の如くに孫彥と、漸次々々に劣りなば、如何なる身に歟なるべきと、悲しく思ひ侍べるを、娘は生れし其際より、奇瑞の事共ありしかば、夫を賴みに如何にもして、華洛の高き御方に、奉つらんと思ふ心、深きに依て、入道が身分に應ずる人よりして、聟にならん娶らんと、言ふを承引なさざるゆゑ、數多の人の嫉妬を受け、其意趣に寄り、辛き目を見せらるゝ折々の、多くあれ共、苦しみと更に思はず打過ぎて、此老法師が命の限りは、狹き袖にも育くみ置ん。本意を達せぬ其中に、見捨て果なば、海の底にも沈んで沒よと、豫てより娘に言ひ聞置たる。抔。※總て雙紙の文章には、學ぶ可く

もあらぬ事共、打泣〳〵聞えたり。光氏も初めの程は、餘りに娘の藝能を、打慢ずるをいと可笑と、耳にもとめず居たりしが、有繫に憫然と聞きなす節々なきにもあらず。予とても、物思はしき折なれば、人の歎きも身に染みて、終には覺えず涙ぐみ、「斯の如く某が知らぬ世界に漂泊は、心からなす事ながら、夫だに何の報い歟と、思へる時もいと多し。まして貴僧は華洛にて榮んと云ふ望みを失ひ、詮方渚に身退き、風姿可笑氣の※姫松を養ひ立てても、浦邊には、眺望る人のなきとの述懷、言辭の端に顯れて、いとも憫然の物語。此光氏が漂泊を、神の惠みと斯く明白に思ひ知りなば、其事をなど今までは告げ給はぬ。華洛を離れし時より猶常なき浮世を予も知り、經を讀み珠數を繰るより外の事なく月日を經るに、心も太く頽折し、斯る秘藏の人ありとは、ほの聞ながら、予が如き放蕩人をば忌々敷者とて、見捨給はんと、思ひ屈して居たりしが、さあらば導き給ふべきや。心細き獨寢の慰めに。など言ひさして、扇を顏へ當給へば、入道は限りなく嬉き樣に、膝を進め、「※思ひ明石のうら寂寥さを、御獨寢に知し食とや。況て年月此渚に友とてもなき寡婦鳥、心の裡の鬱憂を、推量せ給ひね。」ト聞え上ぐる其樣子、打わなゝけど、人品のさすがに卑く見なされず。光氏赧らむ顏を上げ、「されども此所の浦馴たる人は慰む方も有ん。予は遙々旅衣、うら哀しさに明しかね、夢も結ばぬ草枕。」ト※投節めきたる小唄を謠ひ、打亂れ給へる樣、愛敬づきてなまめかず。櫻に梅の香ひとは、斯る姿をいふなる可し。宗人は多年の願、今は

は生れし時より賴む所なん侍る如何にして都の高き人に奉らんと思ふ心深きにより程々につけて、數多の人のそねみを負ひ、身の爲からき目を見る折々も多く侍れど、更に苦しみと思ひ給へず。命の限はせばき袖にもはぐくみ侍なん。かくながら見捨侍なば、海の中にもまじり失せねとなんおきて侍るなど、總てまねぶべくもあらぬ事ごもを、うち泣きゝ聞ゆ」、「源氏物語」明石」

○總て雙紙の文章云々　草雙紙の文章などでは、知ることを得べくもない事共を泣く〳〵申し上げた。

○姫松　朝霧のこと。

○思ひ明石のうら寂寥さを　この事「源氏物語」明石の卷の入道の歌に見える。「ひとり寢は君も知りぬやつれ〴〵と思ひあかしの浦さびしさを、まして年月思給へ渡るいぶせさを、押量らせ給へと聞ゆる氣配、うちわななきたれど、流石に故なからず。されどうらなれたらん人はさて

旅衣うら悲しさに明かしかね草の枕は夢も結ばず、と打亂れ給へる御さまは、いとど愛敬づき言ふ由なき御氣配なる」。

○投節　明暦の頃京都島原から起り、貞享・元祿の頃全國に行はれた小唄の一種。

數々叶ひしと、心地も清しう思ひ居たるに、光氏も其儘に打捨置ば、反つて主個の思はくも如何ぞと、父の日の晝つかた、岡部の家に文を遣はす。なか／＼斯る浦里の、人の知らざる邊にこそ、手書き歌詠み心悧き人もあらめと、殊更に心遣ひし給ひて、高麗より渡りたる、※胡桃色の紙に得ならず引整ひて、「(眺め佗梢をぞ訪ふ若葉時)思ふには」と其端に書き給ひしは、古歌に※忍ぶる事ぞ負にける、色には出でじと思ひし物を。ト言るを含めし文章なるべし。惟吉件の文を持て彼住居へ往て見るに、入道も君よりの御音信のあらん歟と人知れず待つにやあらん、彼所に居たるもしるけれど、もとより彼が願ひにて、是は包み隠すべき御文にもあらざれば、云々の由言ひ入るゝに、宗入は大きに喜び、豫て準備の酒肴、何くれと持て出て、惟吉を種々もてなし、最眩き迄醉しつゝ、頓て娘の室に入り、御返事の遅なはらば、御使の待侘ん、早疾々と、教唆せど、娘は更に聞入れず。「人の御程我身の程、先づ比ても見給へかし。此方は蜑の※汐馴衣、彼方は花の香に匂ふ、錦の袖の麗はしき、御文の體に差出て、書くべき言辭も侍べらず。ト身を回顧て耻かしう、心地悪しとて枕に倚伏、重ねて物も言はざれば、宗入は言佗びて、詮方なさに御文を繰返して筆を取り、「最辱けなき御文なれば、田舎模様の振袖の、袂の裡に嬉しさを、包み餘りし故ならん、更に見分も侍べらぬが、恐れ多さに斯となん。(眺むらん同じ思ひの若葉時)とも言ん歟、最すき／＼しやと書きたるを、惟吉はとり持歸り、御前に差出せば、打披いて見給ふ

○胡桃色　胡桃の皮の色、紙の色は裏白く表の薄香色なのをいふ。

○忍ぶる事ぞ負にける　「古今集」巻第十一、讀人知らずの歌に「思ふには忍ぶることぞ負けにける色には出じと思ひしものを」。

以下「源氏明石」の文章。「又の日の晝つかた、岡部に御文遣はす。心恥かしき様なめるも、中々かゝるものゝ隈にぞ、思の外なる事も籠るべかンめると、心遣ひし給て、高麗の胡桃色の紙に、えならず引つくろひて

をちこちも知らぬ雲井に眺めわびかすめし宿の木末をぞとふ、思ふにはとばかりやありけん、入道も人知れず待聞ゆとて、かの家に来居たりけるもしるければ、御使いとまばゆきまで醉〔る〕はす。御返りいと久し。内に入りてそゝのかせど、むすめは更に聞かず、いと恥かしげなる御文のさまに、差出でん手つきも恥かしうつゝましう人の御程我身の程、思ふにこよなくて、心地悪しとて寄り臥しぬ。言ひ侘て入道ぞ書く。いともかしこきは田舎びて侍る袂につゝみ餘りぬるにや、更に見給へも及び侍らぬかしこさになん。さるは眺むらんおなじ雲井を眺むるは思ひも同じ思ひなるらん、となん、見給ふ

に、陸奥紙に最太う。古めきたれど、書體の拙からず思はるゝは、宗入が筆にてあり。娘に代りし此發句。予と同じ思ひとは、實にすき／＼しき云ひ樣かなと、目覺しう見給ひながら、不圖惟吉が女の小袖を肩に懸しに、目をとゞめ、「夫は何ぞ。」ト問給へば、すこし前へ進み出で「されば候。其御返事受取りて立んとする時、腰元女と思しき者、之を持出で御使にたまもを祿け侍らんと、言ひつゝ、肩に投懸たり。」ト申し上ぐれば、點頭給ひ、「沖の玉藻をかづく海人、歌にも詠ば、其身を賤しき類に比喩て、賜物の、の字を省きて云ひたるも、海邊にはいと便りあり。華洛歸りの其際に、手卷へ土産にせよかし。」ト打戯れて、其日は暮し、次の日に此度は、いと美麗き薄樣に、文の言辭は多からず、「只仰書は見るに甲斐なし」と記して、其奥に、「(杜鵑心に物を惱むかな)終夜に鳴き明せど、やよや如何にと、訪ふ人も浪の音のみ鬱憂くて、棋を枕の獨寢を、思遣給ひね」と、最麗はしく書いて送れり。朝霧も御文に見惚て、心は動悸めけど、比較甲斐なき身の程を、且つは悔み、且つは久果敢なき者を世にありと、知し召されて、戯れにも尋ね給ひし嬉しさに、涙ぐまれて身を顫はし、泣く心根を推してや、腰元千鳥が差出て、「總じて戀路と云ふものは、親の目

泪ぐまれて、更に例のどうなきを責めて言はれて、淺からずしめたる紫の紙に、墨附濃く薄く紛らはして

　思ふらん心の程ややよいかに未だ見ぬ人の聞きかなやまん、手のさま

書きたるさまなど、やんごとなき人にいたう劣るまじう上手めきたり。京の事覺えて、おかしと見給へど、打頻りて遣はさむも人目つゝましければ、二三日へだてつゝ、徒々なる夕暮、若しはもの哀なる曙などやうに紛らはして、折々人も同じ心に見知りぬべき程、推量りて書交し給に似げなからず」。（明石の卷）

る。いとすき／＼しやと聞えたり。陸奥紙に、いたう古めきたれど、書ざまよしばみたり。げにもすきたるかなと、目ざましう見給」。（明石）

○汐馴衣　潮じみた衣。

○すき／＼しや　自分勝手の趣味でせうか。

○陸奥紙　檀紙。奥州にて眞弓といふ木の皮を用ひてすく。

○玉藻　藻の美稱。「後撰集」卷第十五雜在の歌に「何せむにへたのみるめを思ひけむ沖つ玉藻を潜く身にして」とある。

○薄樣　紙の名。薄くすいた雁皮紙、又鳥の子紙を云ふ。

○仰書は見るに甲斐なし　人に仰せて書かせた代筆では見ても仕方がないと光氏が言ひ遣るのである。「源氏物語」に「父の日宣旨書は見知らずなんとて

　いぶせくも心にものを惱むかなやよや如何にと問ふ人もなみ、言ひ難みと、此度は、いといたうなよびたる薄樣に、いと美しげに書給へり。若き人のめでざらんも、いと餘りむもれいたからん。めでたしとは見れど、なずらひならぬ身の程の、いみじう甲斐なければ、中中世にあるものと尋ね知り給につけて、

○くすみ　地味。
○ちやつと　急に。早く。
○田長鳥　杜鵑の異名。

顔を忍ぶが常。夫に引換へ光氏君と縁を結んで、此家へ止ましたいは、豫てより入道樣のお願ひなれば、先づ押晴ての御夫婦同然。卑下遊ばすも程がある。心を御籠遊ばした此御文を只に見捨て、御返事も成されずば、若いに似合ぬいと餝りにくすみ過ぎた性質ぢやと、却つて人の笑の種。ちやつと御書き遊ばせ。ト料紙硯を持出て、疾う〳〵と責言はれて、朝霧やう〳〵筆を執り、香の薫りを焚籠たる、紫の紙に墨附濃く薄く紛はして、(聞惱む人はあらじな田長鳥)とは我身を田舍人なりと、例の卑下して云ひたるなるべし。使歸りて光氏は、是を披いて見給ふに、手のさまも、書きざまも、やん事なき人にも劣らず、館の上﨟めきたれば京の事を思ひ出で、いと可笑とは思ひながら、猶打繼續りて文を遣んも、父の許の中にもせよ、さすがに人目の包ましく、二三日隔てつゝ、徒然なる夕間暮、物哀れなる曙抔に、人知れず書換し試み給ふに、文に應じ、似げなからざる返答。心意深く思ひ上り、都人にも恥ざる氣色を、見まく欲とは思へども、もし高直が漏聞いて、中空のみかは、朝霧まで、我が心着け居たりしをと、心の底に恨やせんと、種々思し廻らされて、父宗入が娘を勸め、此方へ送らば、高直に假令聞えても言紛らす方もあらんと思せども、女は前にも言ふ如く、中々に高貴き際の人より思ひあがり、輕々しくは出立ず、此方へ忍びて在するか、我許より送るかと、疾視競べに打過ぎけり。

其年に京にては、山名の合戰のみにもあらず、物騷ケしき事多かり。先室町へ雷落ち、

○義倘公も御眼を煩ひ 『源氏物語』(明石の卷)に「其年おほやけに、物のさとし頻りて、物騒しきこと多かり。三月十三日、かみ鳴りひらめき、雨風騒がしき夜、御門の御夢に院の御門、御前の御階の許に立たせ給て、御氣色いと惡しうて、睨み聞えさせ給を畏りておはします。聞えさせ給事ども多かり。源氏の御事どもなりけんかし。いとど恐ろしういとおしと覺して、后に聞えさせ給ければ、雨など降、空亂れたる夜は、思ひなしたる事はさぞ侍る。輕々しきやうに思し驚くまじき事と聞え給。睨み給しに、見合せ給ふと見しけにや、御目煩ひ給て、堪へがたう惱み給。御愼みうちにも宮にも限なくせさせ給云々」。

富徽の前の御患み、義倘公も御眼を煩ひ、痛み堪難う惱み給へど、其身の疾病は何とも思さず、母の病氣の日にそひて、重り増らせ給ふを歎き、父義政に此程より、夢の裡に花桐を、度々見ると宣ひしを思ひ出て、富徽の前の臥給ふ枕に近付き、僞りて宣まふやう、「過ぎつる彌生に雷閃き、雨風烈しき其夜の夢に、艶麗き女の近く我傍らへ歩行寄るを誰やと問へば、彼女見忘給ふ歟。妾こそ此世を逝し花桐なれ。義理ある弟の光氏君を、何とて放ち遣り給ふと、ハタと白眼に、予も亦負けじと目と目を見合せしと、思ふ際しも、拂曉の鐘に目覺めて、次の日より此眼を煩ひ、今に治せず。父君に聞え上げ、何卒彼を召戻し給ひてんや。」ト宣へば、富徽の前は打笑ひ、「妾が思はず、雷の火に觸れてより惱るは、光氏が咎を言立て、華洛を退けたりし故、彼が母の花桐が怨恨ならんと推量り、去る頃も夫となく、和殿が諫めたりしかど、用ひぬ故に、眼病を僥倖としてわが心を宥めんとての僞りならん。假令僞りに無きにもせよ、雨強く降、空亂れ、物恐しき夜抔は、思ひなしにて種々の夢を見るのは有る習ひ。必ず共に輕々しく、驚ろくまじき事なり。ト聞え給へば、重ねて言はん言辭も無くて、義倘公、悄々退き給ひけり。

洒落本

洒落本概説

一

洒落本といふ名は、其の書の性質から云つた名稱で、形からは、蒟蒻本と云ふ名がある。多くは花柳界の通と穿ちとを生命としてゐたもので、寫生的であり、スケッチであり、人情の機微に觸れてゐるところに其の價値がある。中には往々變り種のものもある。一體に文章を主としてゐるから、挿畫は少いが、又挿圖を主とし、洒落滑稽に人の肺腑を衝かんとするものもある。『小紋雅話』『新造圖彙』『傾城觿』『奇妙圖彙』の如きものがそれで、洒落のめした地圖を挿んで説明した『滸都洒美選』『娼妃地理記』の如きものもあり、毎丁又は二三丁毎に繪を入れて之が解説を試みてゐる『客衆肝照子』の如きものもある。大きさは半紙半截本であるが、間々もう少し大形のものもある。要するに江戸太平の餘澤が斯る文學を作らせたのであるが、花柳界は劇場とともに江戸文藝の源泉であつたのであるから、這種の文學が盛行したのも亦當然であると云はなければならない。

江戸時代の花柳界としては京都に島原あり、大阪に新町あり、江戸に吉原があつて、三ヶ津に於ける本場であつた。島原以外の、祇園・先斗町・宮川町は白人の世界であり、新町以外、島の内は風呂屋女、曾根崎新地は白人の遊廓であり、吉原以外の深川・品川・新宿其の他は岡場所であつた。此の他、伏見の撞木町、長崎の丸山、伊勢の古市を初め、全國到るところに數知れず多くの悪場所が存在したのであつた。

洒落本は獨り江戸に於て作られたのみならず、大阪にても著述されて居り、其の寫した花柳界は三ヶの津の本場・場違ひを初めとして、長崎の丸山などにまで及んでゐる。

『艶詞南巴匠言』『史林殘花』『百花評林』『本朝色鑑』の類は一種の遊戯文學で、漢文を以て花街の地理、遊女の種類などを書いたもので、一種の花街志に過ぎなかつた。

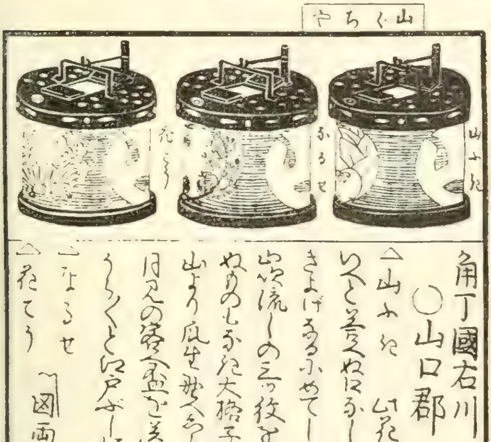
揚屋町　王者之都也、人物不レ野不レ文、外無二曠夫一、内無二怨女一、聖王仁者之遺風餘流乎、客衆爭レ色、女繭鬪レ美、風流花陣之戰場有二不レ戰相挑者一、有下以二口舌一遊説者上、有下一夜下二四五城一者上、太平樂事也。　（『史林殘花』）

素人一名呂州　白人者在二南嶋及北濱之新地一、其花桐壺牡丹也、不二唯花之富貴一、一段風流姿夸二太夫之妖態一、一等之艶色驕二天職之妖冶一、益淸彌美、四方之雜花無二敵レ之者一、古人賞レ之爲二花王一、誠不レ虚矣、傳云一枝白牡丹費二四五日刻一、人不二敢知一レ之、其斯之謂歟。

さきしよりちりはつるまで見しほどに花のもとにと二十日へにけり

南風評して云、此君を物にたとへて見る時は、三井富山の土用干を見る心地ならん。至極見事なる中に、ぽつとりめきてじみなる模樣もまじわり、端手なる中に、くすみたる色もあり、品めきたる所に、地道なる氣色もあり。郭の君達と、地女をつき交にしたるなり。

採花子が云、上々の白米のごとし。上つかたも召あげられ、地下人も食す。上下おしなべて賞翫するものゆへ、白米にたとへたり。なんといづれもそうでは有まいか。（『百花評林』）



『洒都美選』本文

澤田東江の『北州異素六帖』一冊（寶曆七年板）の如きも、『唐詩選』の句や、『小倉百人一首』の歌に挿圖を加へて、洒落た註釋をしたものである。

くめんの出來ぬ女郎

妾心正斷絕

君懐那得レ知

ものや思ふと人の問ふまで

（下に屛風にしごきをかけ、其の横に鏡臺が置いてある畫を添へてある）

御茶挽女郎

彈レ琴復長嘯

なが〳〵し夜をひとりかもねん

（上に雲間の月、下に琴を描く）

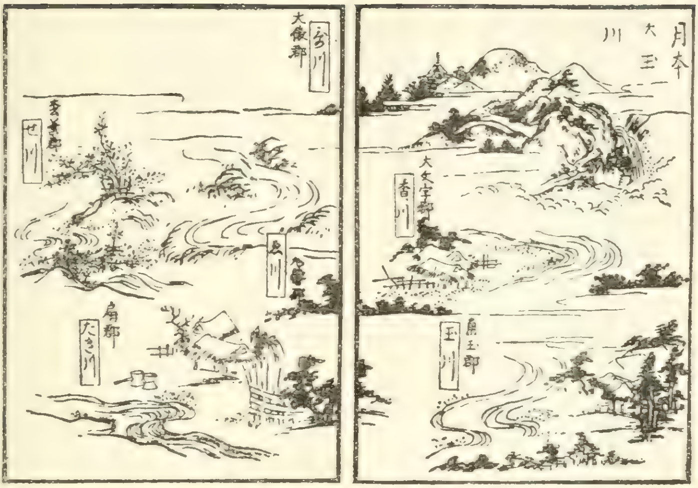
嘯とは嘘の皮をむくといふ事なり。我うそいまだ誠のうそをつとむる事ならぬゆへ、かゝる隙なる時、うそのかはをむきて、眞實のうそをみがき出す心なり。

寳曆七年、大阪板の『聖遊廓』は始めて洒落本らしい洒落本の傑れた作で、後に改題して『雪月花』と云ひ、其の二篇に寳曆十三年板の『列仙傳』がある。『遊子方言』は後世洒落本の祖と稱せらるゝほどに這種の名作で、一種の型を創めてゐる。明和七年頃の作であらう。地の文も巧みに、對話は極めて妙を得てゐる。明和七年板の『辰巳之園』もまた名作の一つで、三馬の『船頭深話』に「辰巳の洒落本は、『美地の蠣殼』『辰巳の園』にはじまり」とあるが如く、深川の岡場所を寫したものである。

二

洒落本の作家としては、喜三二・蓬萊山人歸橋・朱樂菅江・島田金谷・四方山人・唐來三和・田螺金魚・萬象亭・内田新好・

振鷺亭等を初め、本名の知れないものも多く、當時の文士が變名を用ひて述作したのも少からずあるが、其の最も傑れてゐたのは山東京傳であつた。天明五年「令子洞房」を著はしてから、頻りに洒落本を公けにし、殆んど獨歩の觀があつた。寛政二年十



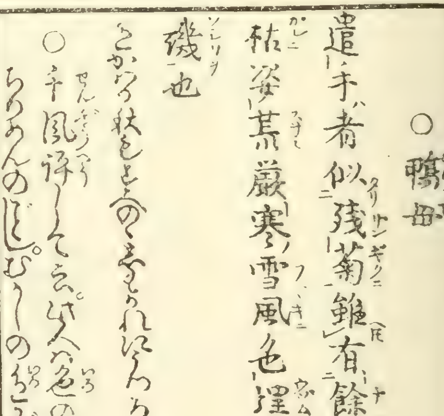
「遊都酒美選」の挿繪

一月の洒落本禁止の祟は遂に翌年の處刑となり、筆を這種のものに絶つことになつたが、流石に「洒落本の總本寺、通言山總籬寺、京傳主開基にて、山東第一の靈場」と稱せらるるほどに、洒落本界の覇王であつた。蓬萊山人歸橋は上州高崎藩の家臣で、河野某と稱し、狂歌にては大の鈍金無と云つた。寛政の初に主君からの命で戯作の筆を絶つたが、洒落本には「美地の蠣殼」「富賀川拜見」などの名作がある。狂歌師として高名なる朱樂菅江には、内藤新宿の花街を描いたものに「賣花新驛」があり、中洲の繁華を寫したものに「大抵御覽」がある。四方山人(蜀山人)も山手馬鹿人の戯名を以て「粋町甲閨」(翠帳紅閨の字をもぢつたもの)「世説新語茶」(新五左をもぢつた名稱)がある。唐來三和には長崎丸山の遊里を寫し、唐音を用ひて對話させるなど、頗る趣向を凝らした「和唐珍解」(天明五年板)がある。此作家は黄表紙に「莫切自根金生木」「天下一面鏡梅鉢」の作があり、洒落本に猶「通神孔釋三教色」の作がある。

若者あまり辭義をする拍子に、袂より蔵中褌のまるめたるを落す、李踏天手早くとり上げて、李「什麼了（シモヲリヤウ／なんぞ）禿「オヤ見なんし、此人はいもじを落さつしたよ、青「けしからねへ　若「是はとんだ物をおとした、と赤面する。

李「先生是什麼了（エンソンスウシモヲリヤウ／かうせいこれはなんだ）　呉「我世不知（ゴウエ、プツチー／おれはしらぬ）

李「藤内是什麼東西（テンスイズシモトンスイー）
藤「なんだ〳〵とつて聞くには、おれもくたびれたぞ、日本頭巾（イペンテウキン）はな、
新「アレ見なんし、紐の結び目を口でくわへて解なんすはな、
若「是はどふもたまらぬ、穴へも入り度なつてきた、
李「好道一頂新頭巾（ハウタエ・イテンシンテウキン）、
とあたまへかぶりて紐を頤の下で結ぶ、
青「オヤどうせうのふ、かぶんなんした、
藤「おれも言やうがないから、日本の頭巾だといつたによつてさ、
若「もし藤さま、をがみます、お返しなさるやうにおつしやつてくださりまし、
禿「いつそおかしくつて、腹がいたくなつた


○鴨母
遣手者似残菊有余波色而三冬霜枯姿甚厳寒雪風色埋又不見鬼薊之幾也

『百花評林』の本文

これより此褌を唐人が購つて明帝へ献上せんと云ふくだりなど、人をして抱腹絶倒せしめる。蓋し『和唐珍解』は洒落本中で異彩を放つものである。

京傳が筆を絶つた後には十返舎一九、式亭三馬などが筆を執つてゐるが、梅暮里谷峨が中本形のものを出すことゝなり、『傾城買二筋道』（寛政十年板）を著し、其の第二編として寛政十一年に『廓の癖』、其の第三編として、寛政十二年に『宵の程』を出した。三馬も『石場妓談辰巳婦言』（寛政十年板）其の後編『船頭深話』を著し、一九も『起承轉合』（享和二年板）後編『遊冶郎』『吉原談語』（享和二年板）後編『夜郭行燈』を著した。谷峨に至りては『五甲任侠甲子夜話』（享和元年板）後編『啼意妃思』（翌年

板）「傾城買中夢盗汗」（享和元年板）後編「妓情返夢解」（翌年板）「契情買言告鳥」（享和元年板）後編「廓の櫻」（同年板）を出すなど、洒落本も次第に長編の形を取ることゝなり、遂に人情本に移らんとする過程を踏むやうになつた。柳亭種彦も時勢の影響を受けて文化五六年頃「山あらし」といへる洒落本に筆を執つたが、種彦は此畑ではなかつた。

洒落本解題

聖遊廓

後に『雪月花』と改題した。「寶暦七年丑六月吉日、大阪高麗橋筋四軒町、書肆堺屋市右衛門梓」と奥附にあるが如く、大阪の洒落本であるが、洒落本の型を作つた最初のものと云つて善い。

三聖吸酢圖は古くからの畫題であつたが、三聖の廓遊びは奇想天外より落ちてゐる。揚屋の亭主は李白で、女房は瀧、客に陶淵明あり、其の相方が菊、周茂叔の相方は蓮で、費長房の相方は鶴、其間に白樂天、鐵拐あり、韓退之と蘇東坡とは若道好みにて、退之に影子の孟東野があり、東坡に舞臺子の李節推がある。其の他、騷ぎ客に目連、阿難、文殊、賓頭盧がある。三聖の相方はいづれも奇拔で、孔子大盡に大道太夫、老子大盡に大空太夫、釋迦大盡に假世太夫があり、尾生の信に就いて、三人の女の批評に、めいめいの氣質を說いてゐるなど、中々に振つてゐる。末段、釋迦と假世との駈落、梵字の書置に趣向を凝らし、「道行妹脊の送り火」と云ふ淨瑠璃を載せるなど、まことに非凡の技倆がある。白樂天が枚方にてくらはんか舟にて拳酒に負けたことを述べてゐる緣故で、拳のかけ辭を載せ、「くるは唐韻」を附載してゐる。洒落本中での名作である。

作者は明かでないが、相當に名ある漢學者であらう。序文も誰の作であるか、これも亦明かでない。

此書の續編として、寶暦十三年板の『列仙傳』があり、此書の趣向を取つて老子に代ふるに我國の大神を以てした、唐來三和作、天明三年板の『通神孔釋三教色』がある。

其の書き出しは次の如くである。

前庫三聖遅迈

四季衆華曰、孔子名丘、仮名通、其先通人、父者行了簡、母者俠氏、以二其女郎二十二歳年明之歳十一月庚子一、生二孔子於此昌平橋水道一、爲レ兒嬉戯、常唱二河東一、參二青樓一及レ長成二意氣一、浪浪度度也　などとこじつけたは嘘にして、髭長の骨長夢にも歯にもあはぬ堅屋の石部金吉郎も兜をぬひで降參すべき文宣王も近年世上に大通の道隆盛んなりしかば、少しうかれの色見へて移ふものは人心、つら〳〵浮世をおもひ給ふに、今は昔と違ひ、物事行過滑稽たる世の中に息勢はつて、仁義禮智信の五常、青表紙の反古を自業自得にしばられんより、意氣の一寸〳〵慕學んで時〳〵巧言令色の通道をやつて見んと、先大日本華の東都昌平橋の出店に引越し、風流美麗を盡して、二階三階に家居を立て、邦君樹塞レ門といふに習ひ、庭には冬木を植込、其物好利休宗且に指を咋させ、門には東江流で大通亭と云へる額を挂、子路臺人を召仕ひ、六藝も何處へやら、禮には初買裏三會紋日物日の遊びの所分、樂は轉じて藏前河東節となれば、射は變じて楊弓と和らぎ、御は浮雲から四つ手に乘れば、書は細見滑稽本に眼をさらし、數は遣ひちらす無他金のメくゝりとなし、惣髪天窓を本田に結はせ、着物たけ長く、身幅廣きを不レ厭、綿半の衣紋首に巻つけ、帯刀細うして髮のごとく、扇ぱち〳〵銀煙管脂さがり、天生二通於予一と高慢の鼻、初松魚より高く、欣々然として專此道を好み給へば、通石レ孤必有レ隣、

末に孔子が怒つて悪態をつき、肴を蹴散らかす拍子に間の襖外れて、隣室にゐた老子とひよつくり出遇ふ。

[釋]ナニサ獨樂さ、そりやそふと三人ながらすれ〳〵だつたが中がよくなつたの。[孔]仮世恐べし、中がいゝ所か鼎足の如しだ。[老]通の通とすべきは常の道にあらず四人一所に大道を歸ふ。[釋]弘誓の船としよふではないか。[太]堀の二見やの重三に猪牙を二挺出せと命して置た。[三人]きついもんだ。長崎や迯こいふ所へ、[若]ハイ御迎に參ました。

で一篇を終つてゐる。神儒佛一體の酒落である。

遊子方言

序文に田舍老人多田爺と署してあるから、著者は此人であらう。明和七年板と覺しい。

多田爺は多田屋利兵衛と稱して、江戸堀江町四丁目に住んで、酒落本などを發售してゐた書肆の主人である。後世の酒落本の型を作つたもので、酒落本の祖と稱せらるゝも當然である。對話は極めて妙であるのみならず、地の文も中々に巧みである。

此書の名は『揚子法言』をもぢつたものであるが、酒落本には此種の名稱が多い。『大抵御覽』が『太平御覽』をもぢり、『契三娼』が虎溪三笑をもぢり、『和唐珍解』が和銅珍開をもぢり、『異素六帖』が『義楚六帖』をもぢり、『彙軌本紀』が『史記本紀』をもぢり、『驛舍三友』が益者三友をもぢり、『格子戯語』が『孔子家語』をもぢり、『猝町甲閨』が翠帳紅閨をもぢるが如き類である。

辰巳之園

明和七年六月の刊行で、夢中散人寢言先生著とある。

憎閑街紫樓と署名した漢文の序があり、自序に吉原深川の比較論を載せてゐる。江戸の巽（東南）なる深川は岡場所隨一のところで、此書の他に『美地の蠣殼』があり、『深川新話』があり、後に式亭三馬の『船頭部屋』『船頭深話』などがあるが、此書は最も早く述作されてゐる。

深川の惡所に就いては、『寬天見聞記』に次の如く說いてゐる。

深川土橋の娼婦は、價晝夜十二匁づゝ五つに切る、ゐいき横町の子供屋より呼出し土橋にあそぶ。仲町も價同じく、中裏の子供屋より呼出し、仲町の茶屋に遊ぶ。表櫓、裏やぐら、裾つぎともに價晝一歩二朱、夜一歩、ひと切は二朱なり。表矢倉は裏に子供屋有て、爰を大裏といふ。裏やぐら、裾繼は、子供内にあり、いづれも藝者は別にあり。また仲町の西北に、松村町といふ處を網打場と唱ふ、爰に切見世あり、吉原にて

つぼう見世といふ。是より六新地には六漢樓、五明樓、百歩樓とて三軒の揚屋あり、いづれも大川より船付きにて、二階見晴し普請美なり。娼女は裏に子供屋あつて呼出す。價仲町と同じ。此六新地と土橋仲町は、藝者奉公人請狀にて子供をかゝへ置事故、名も何吉、何次などとよぶ。其外は前取奉公人請狀にて抱るとぞ。小新地は晝夜金一分、後に五六となる。娼家四五軒有て、裏やぐら、裾つぎと同じ。仲町を初め、其外の娼婦、客の迎ひとて屋根船にのり、舟宿まで行くことあり、又おくりとて客とともに舟に乘行くあり、皆衣類髮の飾り、美を盡し、時花ものを專らとして、高金の品を用ゆ、かることといひて中居の女付そひ行く、是も縮緬の前垂をして、頭の飾り高金の品を用ゆ。此舟春夏の頃は、兩國川あたりに、納涼花火などに遊ぶ事有、前に云三味線藝者を伴ひし舟ともに、橋間につなぎて猥がはしき事もありしより、屋根船のすだれは雨雪の時、または波立たる時の外は卷上おくべし、橋間につなぎ置くべからずと、此年四月に令ありける。又深川八幡の向なる佃町、松代町代地をあひると名づけて、此所河岸通り裏町とも、娼家軒をならべ、娼婦の衣裳はさらさ木綿に太織の縞がのこなど、すこし肯入れして、帶まはしは黑木綿を用ひ、皆見にくき姿なり。價晝六百文、夜四百文なる故四六見世といふ。此處今は盛りなれども、昔は河岸通りに茅葺の家僅二三軒にして、賤しき者をのみ客とす。其頃爰に遊ぶ人、價を惜みて、百文のさしの内にて、十六文計りを殘して渡せしかば、娼家の僕是を受けて、此お足は少し短うござりますといひしかば、客人答へて、何、家鴨ではあるまいしといひしとぞ。一説にこの佃町は、昔佃島の獵師どもが網の干場とせし處故に佃町の名あり、故に網ひるといふを、俗謬てあひる〳〵といひならはせしと、ある翁の物語なりし。此所にもきり見世あり、皆賤しき限りなるべし。

本書は專ら仲町の遊びを敍し、半可通と田舍侍と對照するに通人の遊を以てし、篇末に通言と流行の挾み言葉とを以てしてゐる。「遊子方言」でもさうであるが、篇中に出て來る客には半可通ありて、馬脚を露はすを落とし、之に對して、通客を以てするのが、洒落本に於ける一種の型となつて來た。

南閨雜話

「辰巳之園」と同じ作者の夢中散人寢言先生の作に成つてゐる。(安永二年板)

此作者は岡場所通と見え、好んで深川や品川を寫してゐる。品川は江戸四宿の隨一で、本宿、新宿あり、南品川あり、品川三丁目あり、最も下つて鈴森があつたが、普通に品川と云ふと、本宿新宿のことである。「婦美車紫鹿子」に上品中生之部に載せ、「此淨土は大てい吉原をまなぶ、しかし及ばざる事は、外八文字、客を一人り寢させる事、茶屋を御亭さんと云はざる事、人がら尤も次なり。其外なんす、りんすの言葉遣ひは、大かた違はず、八つ山に大門をたてたし」とある。同じ書の「品川宵の景色」に、

南山阻レ雲、遠帆點レ雨、と詠めしもむべなるかな。高輪より見晴す空は精々と、東は上總、下總の、安房につゞける山々に、深川・洲崎まで、波にうつろふ沖津浪、西は羽田・平間まで、見へ渡りたる満々に、網引つりする蜑のいさり火は、星辰おちて浪に入かとうたがはれ、八つ山より涼しささそふ風には、あたら酒の醉をさまし、松風の音は信濃五郎にきゝ並木、五郎だんなア竹蔵にあしませんかと、ひつらつこく聞三五五郎の輿は、岸野五郎九郎助ならぬ俤のいなり、幾千代もかはらで客のおいでをと、うつ拍(七匁五分、十匁、かうし、大みせ)手も佐渡や(七匁五分、十匁、かうし、大みせ)ざしき、客は竹虎にゆらる御五郎ごし、これや此山崎(七匁五分、十匁、かうし、大みせ)寺の實おどり、待蔵し田(七匁五分、十匁、かうし、大みせ)ゐるも、湊七郎と、一座を駿河(七匁五分、十匁、かうし、大みせ)是は實にやすみ世、吉妻あそびをけふやあす、またいつきなんすと、通ひくるはを松坂や、(七匁五分、十匁、かうし、大みせ)黑々多き紋日をば、どふやかうやと信濃(七匁五分、十匁、かうし、大みせ)なる、淺間々々にうすけぶり、ちどに心は村田屋(七匁五分、十匁、かうし、大みせ)の、和泉(七匁五分、十匁、かうし、大みせ)きとてか戀しかろ、客は伊豆藏(七匁五分、かうし、大みせ)しいつとてか、又の御げんを松本や、(七郎、かみせ、四十匁)みすへの契りを若松や、(七郎、かみせ、四十匁)山城(七郎、かみせ、四十匁)しろともれいづる、鎮の月は富山(十五匁、七郎、四十匁)か、おぼあけなき品川御殿山、後表前(十匁、七匁五分、四十匁)の永手寺、それは越路や、これは又、武さしあぶみの東海寺、香のけむりか女郎たちの、そこだきかほる丁子花(七匁五分、かうし、大みせ)の香に、客は攝津の國(十匁、七匁五分、かうし、大みせ)、難波津のよしあしいわぬ心をば、いわでおもひを新叶(七匁五分、七郎、大みせ)、初夜の鐘のひゞきにぞ、賑々々ならぶ家々に、てらすともし火鰹草盆、津川(十匁、七匁五分、かうし、大みせ)、となみぶは花あやめ、梅か櫻か杜若、いづれ花とぞ引わづらふ、客はほうろく宗十郎、かん蓋頭巾や縮頭巾、くちくそめきのほうかむり、あんまはりありやらじ、蛤々大蛤と、けしからぬ大聲も、さとからぬいて面白し。云々

とあるは、品川遊廓の光景を思ふべきである。

此書は江戸詰の作事役人、請負方の總元締、材木屋の息子、大工の棟梁などが、國許より來た重役人を取卷いての遊興を敍し、息子のもてるのと棟梁の痴話狂ひとが異彩を放つてゐる。流石に宿場女郎だけありて、下卑てゐるのは已むを得まい。

大抵御覽

朱樂菅江作。安永八年板。

『太平御覽』をもぢつた名稱。作者は狂歌師として名高い。此書は他の洒落本とは行方が違つて、一種の風俗志とも見るべきものである。一篇を三部に分ち、初は今戸の三橋亭、次は中洲、終は高田の富士で、いづれも當時評判の高かつたところを紹介してゐるのである。機織の實演を見せる料理屋は物見高い江戸人の好奇心を唆つたことであらうし、箱根、伊香保の湯治がさう易易と出來ない其の頃では中洲の藥湯が物珍らしく繁昌したのも尤もである。駒込の富士、富ケ岡の富士、目黑の富士と相並んで、富士勸請の流行つた時代であるから、高田の富士が築造せられ、都人士の遊山かた〴〵の信仰を煽つたことは、此書に依りても知られる。一種の風俗志と見ると興味が深い。

通言總籬

山東京傳作。天明七年蔦屋板。

京傳は黃表紙の『江戸生艶氣樺燒』で世評を博し、艶二郎の京傳鼻が名高くなつたから、又此自惚男と、同じ黃表紙に見えた

喜之介と志庵とを用ひて、吉原の天地を寫した。喜之介の家の段で、先づ吉原の穿ちを說き、ついで吉原での大籬松葉屋を松田屋として、そこの名妓であつた瀨川をおす川として、遊女の手管手練懸引を巨細に寫してゐる。總て寫實であるから、當時の讀者は一々合點して、破顏微笑したことゝ思はれる。

おす川の座敷の體を述べてゐる條は、松の位の太夫の品位を偲ぶに足りる。京傳には『傾城䚷』の作ありて、松葉屋（松葉館）丁子屋（鷄舌樓）玉屋（玉樓）扇屋（五明樓）大菱亭（大菱屋）鶴樓（鶴屋）の遊女に就いて巨細に記してゐる。彼此參考すべきである。其の凡例に「此書にしるしたる遊君は予常にともに遊びてよく其氣質を知り、好むものきらふもの、或は諸藝幼名等までを詳しく記して、未だ馴染淺き遊客の一助とす」とあるが如く、京傳の最も精通した世界であつたから、其の寫實の精細なのも亦當然である。

古契三娼

作者は山東京傳、天明七年の刊行にかゝる。本文三十四丁、卷頭に作者の自序あり、次にかふ哦の序、北尾政演（京傳）畫くところの三遊女の圖がある。猶卷尾には京傳の跋文を添へてある。

此書が虎溪三笑をもぢつたことは云ふまでもない。三娼とは吉原・深川・品川にもとつとめてゐた遊女どもの、今は素人となつて、向ふ隣に住つてゐるのが、徒然のまゝに寄集つて、めい〳〵もとの廓の物語をしあふと云ふ趣向で、作者が此三惡所に就いての該博なる知識と透徹せる通とを竝べ立てたものである。古契の二文字は古い契情卽ち遊女といふ意味である。竝べ立てた各所の通は今日では耳遠い話であるが、當時は相當に敬服してゐた讀者を持つたことであらう。然し今日から見ても、各遊廓の風俗志でもあり、評判記でもあるところに、此書の價値がある。特に品川の野風、深川のおてふ、吉原のはつ島が手管手練、意地と

張との達引は、まことに面白く、三ヶ所の遊女の特色を發揮して、言ひ知れぬ妙味がある　斯くの如き魂膽を描寫する手腕は、蓋し此作者の獨擅場である。

手段詰物　娼妓絹籭

山東京傳作、寛政三年、蔦屋板。

「義理と情の二ッ道には間棊子もならぬ梅川が飛車手王手」と第一回の目次に云つてゐる如く、將棋の飛車手、王手を假りて、義理と人情とを說いたもので、しかも吉原の世界を大坂新町の名に替へ、梅川忠兵衞の名で、遊女の實意を描いたものである。梅川が遊女屋槌屋治右衞門の別業、しかも新町附近ではなく、吉原に近き箕輪にある別業で、戀の病のぶら〳〵わづらひを養生してゐると云ふ、哀れっぽいところから始まつて、洒落本の型とは全然異つてゐる。人情本の先驅と稱してい〻。二回目には吉原情調を寫して、忠兵衞を出し、梅川の番頭新造梅春のはたらきで、そつと下座敷へ忠兵衞を忍ばせる、第三回は梅春の好意で梅川をば忠兵衞諸共忠兵衞の故鄕二の口村へ落延びさせようとするところで、夢が覺め、身は箕輪の別業で寢そびれてゐたと云ふのが大詰となつてゐる。

京傳は安永九年、『娘敵討古鄕の錦』(三冊)に初めて京傳戲作の印を用ひてゐるが、これより前にも一二の著作はあつた。安永九年は彼が二十歲の時である。其後專ら黃表紙に筆を執り、天明二年板の『手前勝手御存商賣物』は黃表紙百二十八冊の總卷軸と、『岡目八目』に推稱され、天明五年板の『江戸生艶氣樺燒』は艶二郎の京傳鼻とともに名高く、天明の末から寛政の初めへかけて盛んに黃表紙を著作した。天明五年『令子洞房』を著はしてから、又頻りに洒落本の述作に從事し、洒落本界の覇王として、文壇に獨步の觀があつた。其の著した洒落本には、

當世妛かしこ　小紋裁　令子洞房
入込浴室情流理　當世雛形小紋新法　客衆肝照子
指面草　古契三娼　通言總籬
吉原楊枝　通氣粋語傳　傾城買四十八手
洞房妓談繁千話　京傳予誌　小紋雅話
傾城觽　夜半の茶漬　志羅川夜船
廓の大帳　新造圖彙　百人一首馬鹿講釋始衣抄
青樓晝の世界錦之裏　大磯風俗仕懸文庫　手段詰物娼妓絹籭

等がある。

然るに風紀取締のためから、寛政二年十月二十七日、洒落本禁止令が發布せられたが、京傳は板元蔦屋重三郎と謀り、袋入として、袋に「教訓讀本」と題し、翌三年の春出版したのが、『絹籭』『仕懸文庫』『錦之裏』の三種であつたが、固より官憲の眼を遁るゝに由なく、出版とともに世間にもてはやされた三書は絶版を命ぜられ、京傳は手鎖五十日、板元蔦重は身上半減の闕所に處せられ、地本問屋行事兩人も商賣お構ひの上に追放せられた。之よりして京傳は筆を洒落本に絕つたのは、まことに惜むべきことで、若し彼をして猶此種のものに筆を執らしめたならば、『絹籭』や『仕懸文庫』に於て既に人情本の傾向を帶びて來たのであつたから、必ずや人情本を創作し、幾多の傑作を殘し得たことであらう。爲永春水輩をして人情本の大家と云はしめるやうなことは無かつたと思はれる。返すゞゝも殘念なことである。

青樓晝の世界　錦之裏

山東京傳作、寛政三年、蔦屋板。

遊廓の夜の情調を描いたものは多々あるが、晝の世界を書いたところに新しい趣向があり、作者が通の通たるところを現はしてゐる。朝から夕刻まで、卽ち五つ時より始まりて四つ、九つ、八つ、七つ時まで、刻々に分ちて移り變る景色を描いたのである。これほど克明に遊女生活の内部を描き出したものは殆んど他になからう。夕霧と伊左衛門の名に托して、遊女と客との情事を寫して微細を極め、末段めでたし／＼に終つてゐる。「予屢々妄りの著述をなして、淫蕩を傳ふるに似たれども、必ず其戒を忘れず、喜怒哀樂の人情を述べて勸善懲悪の微意あり」と說いて、寛政二年の取締令を潜り拔けんとしたが、官憲は之を寛假せずして、遂に作者も版元も、行事までもそれ／＼處刑せられたのである。

辰巳婦言

式亭三馬作。寛政十年板。

深川古石場の世界を描いたもので、遊女おとまに配するに、番頭藤兵衛、息子喜之助、親分長五郎の三人を以てし、おとまの凄い手練手管を書き分けたものである。其の間にふられ客の悪騷ぎなどを描いて、此廓の光景を示してゐる。

『守貞漫稿』に「稻光舍隨筆」を引いて云ふ、「深川盛の時分は、土橋の娼女價晝夜十二匁づゝ五つなり、榮喜横町の子供屋より呼出し、土橋の茶屋に遊ぶ、仲町も價同じく、中裏の子供屋より呼出し、仲町の茶屋に遊ぶ、表やぐら、裏櫓、裾繼とも娼女の價晝夜金一分二朱、夜一分なり、一ときりと云ふは、金二朱なり。表櫓は裏に子供屋あるを呼出す、裏櫓、裾繼は子供内にあ

り、何れも別に藝者あり、仲町の西北に網打場と云ふ、爰に局見世あり、切見世と云ふ、大新地に大漢樓、五明樓、百歩樓三軒の揚屋あり、何れも大河より舟着にて二階見通し、仲町と同じく普請美し、娼女は裏に子供屋ありて呼出す、價仲町に同じく、此大新地、土橋、仲町は藝者奉公人受狀にして抱へ置く、故に名を何吉何次など呼ぶ、娼家四五軒ありて、內に子供あり、新石場、古石場は裏櫓、裾繼などと同じ」とあり、以て古石場の格を知るに足りる。

其の後、文化三年に作者は此書の後篇として、『船頭深話』を著はし、翌年更に續篇として、『船頭部屋』を出版した。おとまを廻る三人の嫖客の後日物語で、長五郞の女房となるべき筈であつたおとまが結局喜之助と夫婦になると云ふ筋で、人情本への過渡期を現はしてゐる。

戲作評判花折紙の評語

聖遊廓　無名作

頭取「寶曆の丑水無月の五日、御當地はじめての御めみへにて、その節ははなやかでござりました。則初舞臺の節、釋尊の役をつとめられ、道行いもせ送り火といへる、淨瑠璃にて、宮古路連中で語り、假世太夫との所作事、大入大繁昌つかまつりました。ひいき「頭取の云はるゝ通り、其の昔は華やかでござつた。頭取「只今にては、別しての仕內もござりませぬが、御老功故、何をさせても、儒佛老おしへ方がきついものでござります。そのうへ當世の洒落本に箱をかきまするも、この本の▲の印がござるからのおもひ付でござれば、洒落本の先達でござります。當時のきゝもの三教色丈なども、この藝はだを學ばれましての仕うち、先づは此道にをきましては大慶々々。

まことや「聖遊廓」は洒落本の先達にして、しかも奇趣横生、「三教色」の如きは其の轍に倣つて、遂に其上に加ふることを得なかつた。

總卷軸

遊子方言　田舍老人作

頭取「總卷軸、小書いしやうつけの開山、遊子方言丈の藝當を、評判仕りませう。學者「もつとも揚子が論語に倣つて、著述ましたが、法言とかきまし、のりほうげんと申、また萬國のことばをしるしましたを、かた方言と申まする。その揚子がかたほうげんにならひましての遊子方言と見へます。老人「とうせいの小冊子も、皆このしうちを、みならひましたと見へます。頭取「くろ仕立八たんはちじやう、第一番目、傾城買の通り者の役にて船中からの樣子、土手の惡洒落、大門までの自惚、中の町の茶屋にての大臆屋、大てれぼうの面白味、卒氣な顏の可笑味、大當り〳〵。次にひら大盡となられてのしうち、大切まづ今日はこれぎりと言はれまするまで、大出來〳〵。方言丈の卷頭の御祝儀、ひとつしめませう、シヤン〳〵もひとつ、シヤン〳〵。

「遊子方言」は洒落本の爲めに範を貽したもの。其の開山を以て稱せらるゝは宜なりと謂ふべきである。

辰巳之園　寢言先生作

頭取「初幕に志厚の役にて茅場町の水茶屋にて、ゆききを見てはなしの内、何もさしてのことなく、次の幕の筋ばかりと見へます。それより富ケ岡小花屋にてのしうち。惡口「どうも面白さうな趣向だと思つたら、饑饉年の屁のやうだ。頭取「此度はとつどいふこともございませぬゆへ、このかはりの評判〳〵。

「辰巳之園」は深川の穿ちであるが、十分に其通を發揮し得なかつた憾のあるのは此評の通りである。

卷軸

通言總籬　京傳作

頭取「洒落本の總本寺、通言山總籬寺は、京傳主の開基にて、山東第一山の靈場でござります。見料はわづか十六銅にて、結緣の結ばれませう。ひいき「さあさあやくにもたゝぬ無駄を言はずと、待兼てゐる、總籬丈の評判はどうするのだ。頭取「三通文殊の智惠鑑、第一番目江戸かみ來り、喜之助の役にてのしうち、大きにうけとりました。わるい思案艶二郎との應對、格別でござりまする。見功者「いつたい此人は、舞臺を輕くいたされまするによつて、幾度とてもあきはござりませぬ。頭取「それより仲の町へ參りましての洒落、また出來ました。夫より喜之助がおいらんとの濡事、影にていたされまする狂言、きれいごとにて、御見物がたを、嗚呼々々と思はせまするあんばい、きつとうけ取ました。それより大詰今樣の藝事にて、遊びの魂膽のしうち、ふられた客、もてた客、其の外河岸店の客のこなしまで、みさはにいたされまするしうち、古今獨歩の名人でござりますれば、それゆへ位は大上々吉、立役の卷軸にすへましてござりまする。

流石に京傳は洒落本作家の棟梁。趣向と云ひ一字一句にゆるみのないところは、他人の追隨を容るさぬ獨得の天地である。

卷軸 古契三娼　京傳戯作

頭取「ある附合の句に、夫婦と現じ燈籠見にくるとは、きつい穿ちでございまする。芝邊「品川の世界にやア、大きにまだだろふといふ所がありやす。ひいき「だまつてけつかれ、三人を三いろに、女形でげいをしわけることが、外のやくしやにできるものか。頭取「まことに地藝の達人でございまして、惡口「そこでもふ一つ云ひやしやう。女といふ字を三つ書けば、姦しいとやらいふ字で、どれもおしやべりには困る。ひいき「またはごとをぬかすか。うぬがでる幕じやねへ、消へてなくなれ〳〵。頭取「穴探しとか申まして、女郎買の穴を穿ちまするところが、三こうれい八條目でござりますが、この人こそ、まことに上手とこそ申べけれと、さる有職がたのおほめことばでござりました。それ故黑の上々吉、女形の卷軸〳〵。

三婦の詞を假りて三花街の巨細を語らしむる趣向は、通と云ひ穿ちと云ひ、京傳の大通なる所を發揮して餘蘊がない。

辰巳婦言

三馬作

頭取「第一番目、新川の番頭、藤兵衛となつての手代形氣、江戸氣象のにくみよし〱。つぎに喜之助となつての、色男のしうち。長五郎といふ仕事師となつてのこなし。見物がうけとりました。ひいき「三朝かこん吉よりはぐつとよいぞ。頭取「さればだん〱御出世でござります。おてがら〱。

續篇々々にて別々の情態を寫し、讀者の意外なところに落ち付かせたのが作者の工夫である。

聖遊廓

序

天窒し地臺する所、物一等と雖も、又物の等しからざる遊彊とて婦の市あり。此の地を踏めば粋と成る。是れ全く地理の所爲所以の法なり。纔かを隔てて江南の樹を江北に移せば、乍ちその轉變すること、宛も御月樣と泥龜と準ふに等し。されば此の書を覧るに、孔老釋の三聖彼の遊彊に遊び、日轉じ夜に叫びて欠をしらず、二人枕のねはんより黄泉の道行、はては漢土の言語に腹を抱へし、寔に靈鷲山一代の說經にも、則ち妙法と說き、法とは則ち乘るの訓聲、妙の字は女の傍に少の字を從へ、女に少し乘の心を示し、後世此の道を知らざれば、人粋なく愛なく土氣に成る則んば、自ら五常を失ふ事を考へ、三聖一致に家々の斯果に、釋氏は三界猶如火宅の斷に假世太夫に涎し、孔子は

○遊彊　遊境。遊場所。

○江南の樹を云々　江南の橘を江北に移せば枳となる。『爾雅』に「江南種ㇾ橘、江北爲ㇾ枳」又『淮南子』に「故橘樹ニ之江北一、則化而爲ㇾ枳」。

○孔老釋の三聖　孔は孔子にて、名は丘、字を仲尼といひ、支那春秋時代の人。儒教の祖にして、その思想は『大學』『中庸』『論語』に録さる。老は老子を云ひ、字を伯陽、諡して聃といふ。楚の人にて孔子より稍々先輩である。『老子道徳經』の著がある。釋は釋迦牟尼にて、略して釋尊ともいふ。佛教の祖として孔子・基督・ソクラテスと共に四聖人の一。

○二人枕のねはん　二人枕を交して寝るといふのに、佛語の涅槃をかけた。涅槃は諸煩惱を滅して功德を圓成し、不生不滅の法身の眞證を成就することである。

○靈鷲山一代の說經　靈鷲山は靈山、又わしのみやま、わしのたかねともいふ。印度摩掲陀國、王舍城の東北にあつて、佛の說法せし場所なりといふ。

○土氣　もさ言葉を使ふといふ所から閑東者の嘲稱となり、轉じて田舍者を稱するに至る。

○五常　人の常に守るべき五つの道で、君臣、父子、夫婦、長幼、朋友の道。又仁、義、禮、智、信をも云ふ。

○三聖一致　孔子、老子、釋迦の三聖人の敎卽ち儒、道、佛の三教が究極にては一致するといふこと。此の事に就ては本叢書、『滑稽本名作集』に概說參照。

○斯果　主として押立てゝゐる趣意。

○三界猶如火宅　『法華經』に「三界無ㇾ安、猶如ニ火宅一」。三界は欲界、色界、無色界。

○假世太夫　釋迦は此の世を火宅の如き假の世と說く所から、釋迦の敵方の遊女の名とした。

※明徳の大道太夫に※信鼻毛し、※諸分手管に入るの門なりの謀計奇哉々々。※里仁爲美、擇不處仁、焉得知とあれば、早媫妃ある遊彊の里を擇んで、諸分手管を學び明らめたまへかし。これ時寶暦丑水無月、娘に宿る五日、燈下に※俛焉して是れが端書して、諸君に訴ふるものならん。

揚屋亭主 李白　女房 瀧	中居 なつ もん	孔子大盡　合方 大道太夫
老子大盡　合方 大空太夫	釋迦大盡　合方 假世太夫	右之外客名寄せ
客 五柳先生陶淵明　合方女郎 菊	費長房　合方女郎 鶴	周茂叔　女郎 蓮
東坡　合方舞臺子 李節推	韓退子　影子 孟東野	さわぎ 客　文殊
さわぎ 客　目連	同　賓頭盧	同　阿難
たいこもち　白樂天	同　鐵拐仙人	其外略之
書置の事	同辭世	釋かりの世尊 道行
風流酒花	くるわ唐韻	目録終

○明徳の大道太夫　『大學』に「大學之道、在明明徳」とありて、大道を説くを以て名とす。
○信鼻毛し　女に迷ひ溺れるのを鼻毛を延ばすといふ。
○諸分手管に入るの門　初學徳に入るの門をもぢる。諸分は粋の道、手管は相手を籠す手段。
○里仁爲美云々　『論語』里仁第四、章頭の句。
○俛焉　ベンエン。勤勞する貌。

※緡蠻たる黄鳥丘隅に止まる、止まる處に止まらざれば、鳥にだも如かじといふ、四角な文字の廉取りて、※鳥は木に住む魚は水に住む、人は情の下にすむと、臼つき歌にうたはすは、これも和國の道ならめ。※郭の歌は客の浮氣をたねとして萬のはうたとぞなれり。長歌、短歌、せんどう馬かた、たけき悪者の心を和ぐるも、ゆかりのつきの一節ぞかし。さればこそ※銀猫は拋てども、※江口の君のなげぶしには、腰をぬかせし例もあり。爰に聖人の通ひたまへる郭あり。揚屋の亭主は※李白とかや。中にも孔子は郭にて、※するといはれて端手ならず、※ゑちご縮の帷子に、※もんろの羽織すそ長く、深編笠に※あは草履、古金買の目利にも、太夫かひとは見えざりし。李白が方へ御入りあれば、▲亭主李白、是れは※仁さまお珍らしい。サア／＼奥へ。ともてはやす。▲孔子、ナント※李ス、この中は久しいの。無事で珍重珍重。と座敷へ行。▲李白女房※瀧、是はお珍らしいおかほ。お噂ばつかり申てをりました。▲中居なつ、もし仁さま、この中※横堀で御見うけ申しました故、大方お寄りなさるであらうと存じましたに、よう待たせなさつたの。▲孔子、ヲヽ寄りたかつたけれども、※行時に徑によらず。そちをちらりと見たゆゑ、太夫にことづてしたかつたけれど、※十

○緡蠻たる黄鳥云々　『詩經』小雅篇「緡蠻黄鳥、止二于丘隅一」。緡蠻は鶯の鳴聲を示す。

○鳥は木に住む魚は水に住む、人は情の下にすむ　古い歌謠の文句。『落葉集』卷四の「こんぎやら踊」といふに、「鮎は瀬にすむ鳥や木にとまる、……人は情の……下にすむ」とある。

○郭の歌は云々　『古今集』の序をもぢる。序に曰く「やまと歌は人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。……猛き武士の心をも慰むるは歌なり」。

○銀猫　西行法師が源頼朝より貰つた銀猫を門前の兒童に與へたといふ故事。

○江口の君　淀川の畔なる江口の遊君。腰をぬかせし云々はやはり西行のこと。

○李白　唐代の詩聖。字は太白。性酒を嗜み、終日醉ふ。玄宗に仕ふ。その詩は高妙清逸で、杜甫と竝び稱される。

○する　粹。いき。

○ゑちご縮　越後の魚沼郡、刈羽郡、頸城郡から出す縮。からむしにて織つたもの。質が甚强い。

○もんろ　紋絽。

○あは草履　藁草履のこと。

○仁さま　孔子は仁を説く故、仁さまと云つたのだ。

○李ス　スは公と云はんが如し。李公。李子。

○瀧　李白觀瀑の圖から思ひついた名。

○横堀　大阪西横堀川。

○行時に徑によらず　『論語』雍也篇に「有二澹臺滅明者一、行不レ由レ徑、非二公事一、未三嘗至二於偃之室一也」。

○十目所レ視云々　『大學』に「十目所レ視、十手所レ指、其嚴乎」。

目所レ視十手所レ指、其時馬喰町の方へ人が走つたが、何事ぢやと思うたれども、君子は危に近づかずと、すぐに戻つたが何であつたや。▲中居なつ、その時は馬やがちとやけましたげな。▲孔子曰、人は怪我はせなんだか。というて、馬をとはず。▲中居、イエイエけがはござりませなんだ。▲孔子、ヲヽそれは可也〳〵。久しう來ぬうち、ざしきがきれいになつた。富は屋を潤さん。どうでも李白出來たの〳〵。▲亭主李白、おまへ樣がたの御ひいきゆゑ、だん〳〵仕合つかまつりまして、よろこびます。▲孔子、ヲヽよい事ぢや。シタガ瀧、親父にずゐぶん酒をとめたがよいぞや。酒ははかりなけれども亂に及さず。過ぎぬやうにしたがよい。▲李白、イヤモ朝からばんまで、酒の絶ゆるまがござりませぬ。▲孔子、イヤサ座敷は勤めにやならねども、終日百盃すれども三盃に過ぎずで、心でひかへるがよいぞや。▲亭主、どうでなる口でござりますれば、一杯一杯又一杯、どうでも過ぎます。▲孔子、イヤそれが座敷ばかりではない。内證でもたきが顔を見てはのみ、瀧を見てはのむゆゑ、瀧見の李白というて、よう繪に書くぞや。▲亭主、ハテわるじやれな。と笑ひの最中、裏口から廣袖のゆかたに、丸ぐけの帶じだらくに、前にはさんでくるを見れば老子なり。▲瀧、是れは老子さま、裏口からおこしはお珍らしい、仁さまもお待ちなされてでござります。▲老子、ヤアおやぢはさきへ來たか。と云ふを聞いて、▲孔子、玄子これへこれへ。なんとして裏口からおいでぞ。▲老子、イヤ藏の間の切戸があい

○馬喰町　大阪の博労町、心斎橋の北にある。

○人は怪我はせなんだか云々　『論語』郷黨「廐焚、子退レ朝曰、傷レ人乎、不レ問レ馬」。

○富は屋を潤さん　『大學』に「富潤屋、徳潤身」。

○酒ははかりなけれども云々　『論語』の語。「惟酒無量、不及亂」。

○なる口　いける口、呑める口。

○丸ぐけの帶　圓く長い心を、堅に布帛で包み、其兩端をくけたる帶。

○玄子　老子は玄の又玄を說いたから玄子と云つたのだ。「玄之又玄、衆妙之門」。(『老子』第一章)

てあつたゆゑ、是はさいはひの道があると、裏から仕かけたれば、こゝの久助めが、闇がりから牛の出たやうなと、おれを牛にしをつた。※人我を牛といふ時は、我に牛の性ある事を知ると、腹をたてぬぞ一德なり。かかる所へ釋迦は、かりの世といふ太夫と相合駕籠にて、臺所まで舁きこませ、▲李白見るより、コレハ釋迦大盡の御來迎、太夫さまとのあひごし。コリヤムマイありがたい。まづ〳〵是へ。と、かごの※だれあぐれば、釋迦は紋紗のかたびら給に、※りんばうの紋所、金襴の帯に異香くゆらせ立出で給ひ、ナント李白まめなの。▲主、アイお前さまにもお變りなく、いつとても御二人づれ、比翼の中。とそやすれば、▲釋迦、ハテ何を云やるぞいの。今このやうにつれ立ても、※會者定離臨命終時不隨者ぞいの。▲太夫かりの世、あれ李白さん聞て下んせ。あのやうに無常な事ばつかり云うてでござんすわいな。▲亭主、ハテわけもない。仁さまも玄さまもお待ちかね。サアサア奥へ。と伴ひゆく。▲孔子老子一時に、釋迦ス是へ。とあいさつあれば、▲釋迦、コレハ御兩所お待ちかね。瀧、ナント久しいの。▲たき、ホンニ今日は、マアお揃ひなされて、ようお越し遊ばしました。孔子さま、大道さまを※かりましにあげました。老子さま、大空さまを※見せましに人遣はしました。といふ内に、▲大みち太夫來る。釋迦ス、老子ス、御出遊ばしませ。孔子ス、今日はよう御越しなされた。李白瀧へもそれぞれのあいさつは、さすが孔子のあひかたとは、かたくろしいで知られけり。かかる所へ大空は座敷へ來り、

○牛　老子青牛に騎つて關を出づの故事。『關中記』に「關令尹喜勅二門吏一曰、若有二老公從レ東來、乘二青牛薄板車一勿レ聽レ度レ關、其日老子至、吏白レ之、喜曰、道今來矣、乃留レ之撰二道德經五千言一」。
○人我を牛といふ時は　『莊子』天道篇に、「昔者子呼二我牛也一而謂二之牛。……苟有二其實一人與二之名一而弗レ受、再受二其殃一」とあるを轉用したるか。
○たれ　駕籠に垂れたる簾。
○りんばう　輪寶。又輪鋒。佛具の輪寶を象つた紋所の名。輪寶は金銅で作り、車輪の形をなして、八方に鋒端を出す。但し紋所の場合は鋒の數により、五輪鋒、六輪鋒、八輪鋒などがある。
○會者定離臨命終時不隨者　「會者定離」は『遺教經』に「世皆無常、會必有レ離」とある如く、世の常として、會ふものは必ず離れるといふ意。「臨命終時不隨者」は『大集經』に「妻子珍寶及王位、臨二命終一時不隨者、唯戒及施不放逸、今世後世爲二伴侶一」とあり、妻子珍寶王位の如き最愛、最貴のものも、人の死ぬ時には、一つもその人に伴はずといふ意である。
○かりまし、見せまし　借り申し、見せ申しである。大道様を借りに、又、大空様を見せにやり申したといふのである。

何の挨拶もなく、老子ス、けふはこち風が吹たさうな。といへば、▲老子、けふは少し南風が吹きつけた。▲太夫、ホンニどうでそんな事でござんしよ。おまへの所にさかづきがあるさうな。ちと廻しなんせんか。▲老子、イヤ今日もまはしはせずにきた。▲太夫、エヽわるざれな人さんぢや。と、諂もなきあいさつは、老子の好ふうならん。▲主李白は鯉のさしみを、さう〳〵けふはあなたがたのお入りと承り、琴高が方から、鯉をさし上たいと申して、私が方へ持せてこしました。と、小皿に入て前におく。是れは琴高が、志、過分々々。と賞翫あれば、▲主李白、折節此方に酢をきらしましたゆゑ、となりへ貰ひにやりましたが、酢がききますればようござりますが。▲孔子、やはり鯉はこくしやうがよいに、此酢はきぶい酢ぢや。▲釋迦は、コレハあまたるい。▲老子は苦い顔して居給へば、▲李白は氣の毒がり、是れは不加減にござりますか。▲孔子曰く、イヤイヤ酢はすいが酢の味ぢや。釋迦の甘いといはるゝは方便なり。苦イ。トあるは老子のすねなり。心ここにあらざれば、喰へども其の味をしらず。酢はすいにきはまつたものぢや。くるわですいもあまいも知つたものをすゐと云ふは此時よりぞ始まりけり。▲老子、けふは莊子が來る筈ぢやが、ナゼおそいぞ。▲大道、莊子さんはお前のおつれかえ、ホンニおきしつがよう似なさつた。なんぢややら、夢に蝶になつてくるわへ來たとやら、よう寓言らしい事をいふお方でござんす。▲中居文出て、勝手へ白樂天どのが來てゐられますが、酒のお相手に座敷へ、お呼びなされぬか。といへば、是は

○こち風　東風。此方の意を含めたるか。
○まはし　こゝは褌の意であらう。
○琴高　琴高仙人は鯉に乗る。
○となりへ貰ひに云々　或人酢を請ふの『論語』の語を取る。『論語』公冶長「子曰、孰謂微生高直、或乞レ醯焉、乞二諸其隣一而與レ之」。
○酢　こゝ[illegible]から思ひ付いた洒落。
○きぶい　きは生、ぶいは澁つぽいとか、甘酢つぽいのぽい、ぽいと同じく、此では十分なれてゐないで、生のまゝで強い義。
○心こゝにあらざれば云々　『大學』「心不レ在レ焉、視而不レ見、聽而不レ聞、食而不レ知二其味一」。
○莊子　名は周。支那戰國時代の哲學者。著書に『莊子』がある。善惡・邪正・是非等の相對的觀念を否定し、自然の狀態に歸るべきことを說いてゐる。楚の威王は其賢を慕ひ、相に迎へんとしたが辭して受けず。
○夢に蝶になつて　莊周夢に胡蝶となるの物化說は『莊子』に見ゆ。「昔者莊周夢爲二胡蝶一、栩々然胡蝶也、自喩適レ志與、不レ知レ周也、俄然覺則蘧蘧然周也、不レ知三周之夢爲二胡蝶一與、胡

蝶之夢爲レ周與、周與二蝴蝶一則必有レ分矣、此之謂二物化一

〇白樂天　白居易の字。支那唐代の大詩人で、その詩は流麗にして平易、汎く愛誦され、我平安朝の文學にも多大の影響を及ぼす。『白氏文集』がある。

〇國太夫節　宮古路國太夫、後の宮古路豐後掾の音曲。豐後節の前名。

〇島原　京都朱雀野の遊廓。

〇枚方　大阪市と伏見との中間に位し、淀川の左岸にある町。

〇八幡山　山城國男山。

〇白雲帶に似て山の腰をめぐる　謠曲「白樂天」に「いでさらば目前の景色を詩に作つて聞かせう。青苔衣をおびて巖の肩にかゝり、白雲帶に似て山の腰をめぐる、心得たるか漁翁」とある。此の謠の内容については『即席耳學問』(一九九頁)に述べた。

〇牛蒡くらへ云々　枚方名物のくらはんか舟の呼聲。

〇拳酒　拳を打つて負けると罰杯を飲む座興。

〇むかひ酒　前日の酒氣が拂ひ切れず體が常態に復しない、所謂二日酔の時に、再び酒を飲むと反つて常態に復すると言ふ。これをむかへ酒、訛つてむかひ酒といふ。

〇費長房　後漢汝南の人、壺公に從つて仙を學ぶ。

〇京のすゞみ　京都鴨川の納涼。

さいはひ、樂天が國太夫節久しうきかぬ。これい〳〵といふよりも、白樂ざしきへ出、何れもさま久しうお目に懸りませぬ。御きげんようござります。▲皆々、久しう見えなんだがどうぢや。▲樂天、さればでござります。私も一生の思でに、島原へいてのんで見たいと存じまして、この中夜舟で枚方あたりまで出かけましたれば、何が夜のほの〴〵明に、八幡山に雲のかゝりし氣色、その面白さ。白雲帶に似て山の腰をめぐると、口ずさんで、一ぱいのみかけましたれば、何處ともなく白髮老人一人小舟に乘つて、わたくしが舟を目がけこぎ付、牛蒡くらへ、酒くらはぬか。と申しましたが、中々叶ふものではござりませぬ。伏見までいかぬうちに、拳酒にまけて、道から逃て歸りました。其の酒にあてられて、此中は寢てをりました。▲太夫大道、そんならむかひ酒に、一つよかろ。とさす。▲樂天、お杯は頂きますが、御酒は今のぢやお許し〳〵。したが此の間珍らしい話を、乘合で聞いてまゐりました。費長房は御存じでござりますか。といへば、▲客、それは鶴と懇懃して居た費長房か。といへば、ナルホドその鶴をつれて、かけおちせられましたが、京のすずみで、長崎壺わりといふ菓子を仕出し、唐人姿で、ぼりぼり齒もろうてあまい。と、京中賣られましたげにござります。▲中居文、さうであらうと思うたてや。どの繪本を見て

〇長崎壺わり　おこしの一種類。

〇齒もろうて　齒に柔かくもろくて。

も、鶴に乘つて飛あるいて、たいていいやらしいお方ではなかつた。▲孔子曰、幾ばくの人愛において平生を誤ると、朱子が胡丹安をしかりしも無理でない。周茂叔は蓮をうけ出したといふがほんかや。▲樂天、イエ〳〵、茂叔さんは、蓮を愛してはござれども、遠く見るべし、馴れ翫ぶべからず。とやらいうてござつて、中々手いけにして見る御心はないさうにござります。柳子はご存じなさつてござるか。といへば、▲孔子曰、柳とは陶淵明が事か。▲樂天、アイ五柳樣の事でござります。あなたは菊にきつい打こみで、この中も絃もない琴を彈く眞似して、騒いでござりました。▲太夫大ぞら、樂天ス、此中身なげ心中が有つたといふが、ぢやうかえ。▲樂天、イエ〳〵、心中ではござりませぬ、美生といふ男が近所の娘と、漑流橋にて出合ふ約束いたしまして、橋の上で待てゐました所に、なにか此中の大白雨で、にはか水が出て來たに、爰をさつては心中が立ぬというて、やつぱり橋の上にゐたげにござります。其うちに上の堤が切れて、水が一時にすさまじう出て、橋が落て流れて死んだげにござります。それを娘が聞て、そのやうなおろかな男なら、逢はいでよかつたというてゐますげな。▲太夫大道、義によつて命をはたすは、人たるものの道なり。美生も約束を變ぜずして、義のために命を失ひしは、かはいらしい心ぢやナア。▲太夫かりの世、サウトモそれはみな先世からの約束事、過去の業因でござんす。ノウ大ぞらス。▲大空、ナンノイナア、その美生とやらが、せまいさゝの葉のよな心から、その

○たいていいやらしいお方ではなかつた　並大抵でないいやらしい人だ。
○朱子　字は元晦、又一に仲晦。宋時代の道學者にて孔孟の學を祖述す。
○周茂叔　周濂溪、名は敦頤、茂叔はその字。宋代の大學者。
○蓮をうけ出す　周茂叔は蓮はすを最も愛し、「愛蓮說」を記す。
○遠く見るべし云々　周茂叔の「愛蓮說」の一句。
○五柳樣　陶淵明は五株の柳を植ゑて自ら五柳先生と號した。淵明に「五柳先生傳」がある。
○菊　陶淵明は甚だ菊を愛したといふ。其の詩に「採菊東籬下、悠然見南山」。
○絃もない琴　淵明は無絃琴を彈ず。
○ぢやうかえ　定かえ。ほんとかえ。
○美生　尾生。尾生の信と云ふ名高い話。尾生の信とは約束を守つて變らざるをいふ。『史記』蘇秦傳に「信如尾生、與女子期於梁下、女子不來、水至不去、抱柱而死」。
○くろ舟　黒船忠右衞門の狂言の

女子壹人におもひついるといふがちがひ、其ばんにやゝそくがちがうて、いやといふなら、ひろいせかいにたくさんな女子、どれなりと合點する女を、女房にしたがよいわいな。

三人の評判は、孔子、老子、釋迦三聖の氣うつりとしられけり。▲樂天、其美生が河流れを、風流求女塚といふ狂言に、女伊達を取組、明日から角の芝居でいたします。▲くろ舟には誰がなるぞ。▲忠右衛門には竹林の阮籍でござるげな。阮籍が青眼、海老藏が目より凄まじいと申す評判、蝦蟆仙人の非人かたき打、きつい當りでござります。東坡さまは李節推といふ、若衆方にきつい打込で、花道から李節推が、馬に乘て出られましたれば、馬に乘る少人勝美なりといふ聲のことばは、東坡さまでござつたげな。馬を繋いで岸に花落るを知るといふ詩を、其時つくりて遣はされしとて、それをやはらげて、駒がいさめば花が散るといふ小歌が、只今大分はやります。韓退子樣は孟東野といふ影子に強い打込みで韓雲孟龍のちかひといふことがあると申して御名が立ます▲釋迦聞きたまひ、漢の裏帝が御衣のたもとを斷しも、男色の心中なり。此の道はふかいものさうな。老子スこそうら道を好かれさうなものぢや。と笑ひになりぬ。▲太夫大空、コレ樂天ス。南に珍らしい大こ衆が出るといふが、付合ひなんした

主人公。

○阮籍　支那晋の人。竹林七賢の一人。

○青眼　親しく見る眼。『晉書』に、「阮籍、禮教に拘はれず、能く青白眼をなす。禮俗の人を見れば、白眼を以て之に對す。嵆康酒を齎らし琴を挾んでいたる。籍大に悦び、乃ち青眼を見はす」とある。

○海老藏　市川海老藏。

○蝦蟆仙人　本名を侯先生といひ、宋の大中の間、嘗て京師に[illegible]といふ。

○馬に乘る少人云々　『東坡集』の「往富陽新城李[illegible]先行三日留風水洞見待」の詩句に「[illegible]人誰若君未遠、騎馬少年清且[illegible]、[illegible]花[illegible]」（『西鶴名作集』六七一頁參照）

○駒がいさめば花が散る　「[illegible]、なぜ駒繋ぐ、駒がいさめば花が散る」。[illegible]『[illegible]』の中にも出てゐる。

○韓退子　韓愈字は退之、[illegible]人、文章を以て名がある。[illegible]した。

○孟東野　孟郊字は東野、韓愈の門人。愈之を推重す。『孟東野を送るの序』がある。

○影子　蔭間。

○韓雲孟龍のちかひ　韓愈孟郊の交の誓のもじり。[illegible]心力、[illegible]大悲力及び法力で、此の[illegible]ることの爲の誓。

○漢の裏帝　前漢の哀帝（皇哀皇帝）のこと。

○大こ衆　太鼓持衆の略、幇間衆。

○鐵拐　支那の仙人の名。姓を李といひ、その肖像は道術に長じ、氣を吐いて自分の魂魄を分身して空に遊ぶことが出來た。近松作「傾城島原蛙合戰」に「形を吹出す」といふ個所があるのもこれで、なほここで大空が鐵拐だといふことにしたのである。

○花の高尾と傳七　高尾は吉原の遊女高尾。傳七は[illegible]。されど、それは關和以後のもので時代が合はない。未詳。

○善導大師　支那唐時代の高僧で、淨土教の大成者。淨土往生を願つて念佛三昧に専修し、長安の光明寺に住して法を說き、念佛一聲する毎に一道の光明がその口より出づるとなし、頗りに稱名念佛を勸め[illegible]。

○氣がつきる　他人に遠慮する。

○日がらの事　日の約束をすること。

○しつぽりと　しつとりと。

○ねはんに入つて　前出「二人枕のねはん」を見よ。

○寂滅已樂　寂滅爲樂で、涅槃經にあり、寂滅は涅槃で、これに到達して始めて眞の樂みがあるといふこと。

○男女席を同じうせず　禮記に「七年男女不レ同レ席、不レ共レ食」。

か。といへば、▲樂天、もうしそれは誰が事ぢやな。▲大空、イヱ名はきかぬが、口からいろ〳〵のかげ繪をふき出すげな。▲樂天、エヽそれは鐵拐が事でござりましよ。といへば、▲瀧聞て、是れ、なる程それは、この中此方のお客が手前へつれて見えてでござりました。其時花の高尾と傳七とを、吹てでござりました。それは〳〵面白い事いな。▲大空は、なんとそれは、しやぼんでしたら成りさうなものではないかいな。▲釋迦はかぶりふり、中々そのやうな事ではない。此方の善導大師が三尊を吹た時、きつうむづかしい事ぢやなかつた。紙を玉子にしたり、鼻へ釘を入たりするが、合點のゆかぬものぢや。と、話かしゐば老子は大欠。▲瀧は氣をつけ、是れは老子さま、お氣がつきたさうな。あちらに床もとらして置きました　大空さん、つれましておいでなされませ。▲大空、イヤさつきにから、こちらで日がらの事をいへば、あのやうにあくびして、まぎらかしてござんすわいな。▲瀧、日がらの事は、あちらでしつぽりとお約束あそばせ。と、二人を奥へすゝめやれば、▲樂天は氣を利かし、わたくしも勝手に用がござります、皆さま後ほどおめにかゝりましよ。と、勝手の方へ立てゆく。▲亭主李白、此のおさかづき、まづわたくしがあづかりましよ。と、とさん持ちそへ入ル。▲瀧はざしきを取りつくろひ、かりの世さま、釋迦さまをちと奥へつれましておこし遊ばせ。▲孔子曰、コレ釋迦ス、ねはんに入つて、寂滅已樂たのしみ給へ。▲釋迦、コレ大みちス、又おやぢが、男女席を同じうせず。などと

いうて、ひぞりかけたらつめつておかしやれ。と悪口いうて、次のざしきへ入ル。跡には孔子と大道さしむかひ、何ぢやいな、かたくろしい。その羽織もぬぎなんせんか。ちとお休みなされぬか。△孔子、寝るにそばだたず、ドレ〳〵其の枕おこし給へ。と、東枕にね給ふ。△大道、お前はこちら枕にしなんすかえ。孔子も東首し給ふ。禿よ、予が手をさすれ、足をさすれよ。△太夫、さすれなりや、わしがさする。コレお前に見せる物がある。コレ見さんせ。わたしが心底は此通りでござんす。と肩をぬげば、孔子命といふ入れ黒子。△孔子、ハテわけもない。身體髪膚父母に受たり。損ひ破ざるをば孝のはじめといふに、いかに辨へ知らぬとて、やくたいもない事をしやる。△太夫、なんぼう不孝になつても、おまへゆゑなら大事ない。△孔子、イヤ孝弟忠信、其道わきまへざるは人にあらず。と、口説のさいちうに、△瀧あわたゞしく走り出で、もうし釋迦さまのねやより、御手のなるやうに存じましたゆゑ参じたれば、釋迦さまもかりのよ様も見えませぬ。御二人の枕もとに、こんなものが、とばかりといき。△孔子驚きドレ。△亭主李白びつくりしてとんで出る。▲老子、越中褌ひきずりて出る。▲みな〳〵何事と、書いたものくりかへし〳〵見る。ナンヂヤ、是は九重のまもり見るやうな文字ばかり、どうもよめん。いかがせん。と互に顔を見合、氣をもみあせる。かかる所へ、△ちやんのはのよな白イ氣を持ちやんな、黒イばいたらばの氣を持ちやれ。トンチリチンテンチヤンホラホ。すひつく、取

○ひぞる　ひねくれる。

○寝るにそばだたず　『論語』郷黨篇「寝不レ尸、居不レ容云々」。

○東枕　東首。『論語』郷黨篇「疾、君視レ之東首加二朝服一拖レ紳」。

○予が手をさすれ云々　『論語』泰伯篇「曾子有レ疾。召二門弟子一曰、啓二予足一啓二予手一云々」とあるをもぢる。

○孔子命といふ入れ黒子　腕などに入墨をなす時、自分の情人の名を入れて「××命」と書いたものである。

○身體髪膚云々　『孝經』に「身體髪膚受二之父母一不二敢毀傷一、孝之始也」。

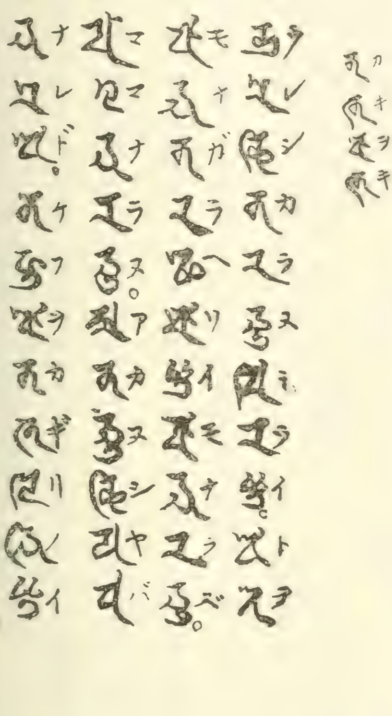
○やくたいもない　無益なこと。

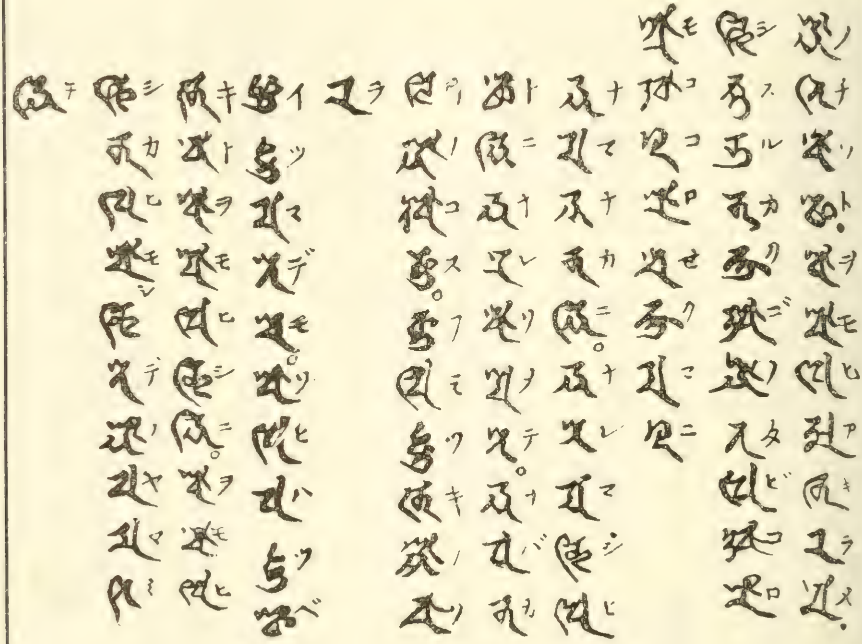
○ちやんのは　父の歯の鄙語。母のは鐵漿で黒く染めてゐるので、特に父の歯と言つたのである。

○ばいたらば　貝多羅葉。ばいたらともいふ。天竺に産する多羅樹の葉。此の葉は紙の用に使ひ、經文を刻する。茶褐色で光澤がある。樹は棕櫚に似て八九丈に達する。

○阿難　釋迦の弟子。釋迦の從兄弟。常に釋迦の隨侍。弟子と諸經を結集して世に傳へた。
○文殊　菩薩の一。智慧の佛とし、普賢と共に釋迦の二脇士で、常に獅子に騎れる所を圖す。
○目連　佛十大弟子の一。目犍連、目犍夜那、目伽略子、沒特伽羅子などともいふ。婆羅門の子で、佛門に入り、釋尊を援けて上足の弟子となり、神通第一の稱號があつた。
○賓頭盧　十六羅漢中の第一尊者。永く南天の摩利山に住して、佛滅後の衆生を度したといふ。
○北のかた　正室を云ふ。
○ぞめく　さわいで、浮れあそぶ。さんざめく。

りつく、すつてん〳〵、いしふしゐんれんきりふくりんとんな、チリンテトンしやん〳〵、よい〳〵のよい、をどりさわいで、※阿難、※文殊、△※目連、※賓頭盧つれだち來る。どうぢや〳〵李白はうちにか、※北のかたはどこにぞ。今夜も※ぞめきに出たが、道からしゆかうが付た。と、どや〳〵とわめき立る。△李白、たき、是は〳〵よい所へ來てくんなんした。趣向どこゐぢや御ざりませぬ。釋迦さんがかりの世さんつれまして、欠落ちなんした。大ていのことではござりません。皆ちやつと奥へ來ておくれ。▲四人のらかん、これは凄まじい。と驚き、ざしきへゆく。▲瀧、先づ此のかきおきを讀んで見ておくれなされませ。と、あなんにわたす。▲あなんよむ。





ノナソトヲモヒアキラメ
シスルカリゴノタビコロ
モココロセクニニ
ナマナカニナレマシヒ
トニナレリノテナバカ
ヲノコスフミツキノノ
ラ
イツマデモリヒハツベ
キトヲモヒシニヲモヒ
シカヒモシデノヤマミ
チ

南無三寶、欠落所ではない、死ぬる覺悟ののこしぶみ。二人の辭世。サア大事〳〵。といへば、▲老子はあせ手ぬぐひで頭からげる。▲亭主、うろたへ、是はマアなんとせう。▲孔子、なんと所か。サア〳〵文殊、どうぞ是れにはよきちゑはないか。文殊〳〵、是はしたり文じゆが見えぬ。もんじゆ〳〵。イヤ是に居ります。さうあらうとおもうて、釋迦子の寢間を見に行きしが、まだ蒲團のあたゝかさ。片時もはやく手配して、おつ手おつ手。たづぬるより外に分別なし。といひつゝコレ李白。▲李白、ハイなんでござります。▲もんじゆ、その錢十二文持つておぢや。▲李白、かしこまりました。ソレなつよ、小遣錢もつてこい。▲なつ、小遣せに持て來る。▲李白とつて十二文よむ。其間に、▲文殊ふところより、はな紙一枚とり出し、十二文のせにつゝみ、これ目連、貴樣は神通の名人なり。こんな時の重寶、急ぎ清明の師匠の白道のかたへ行、方角の八卦たのんできたまへ。と渡せば、▲目連せに受取つて、飛ぶがごとくに走り行ク。▲座中みな〳〵よこ手をうつて、さてもぬからぬ〳〵。さすが文殊の分別。と、てん手に追手の用意の提灯ごしらへするやら、わらんづのひもすげる內、▲瀧がさいかく、賓頭盧の兩足のふし〳〵、こむらおさゆるやら、うへを下へともてかへす。

道行妹脊の送り火

○南無三寶　しまつた。
○神通の名人　神通は何事でも自由に行ふ力を得ることが出來る名人。
○清明　安倍晴明。陰陽師。
○白道　淨瑠璃「蘆屋道滿大内鑑」に「私の父保憲、天文の名を揚げしも、唐土の伯道仙人より、金烏玉兎集といふ書を傳へ」とある。
○文殊の分別　文殊師利は智慧門を司る菩薩。頂に五髻を結ぶは大日の五智を表し、右手に劍を持つは智慧を示し、乘つた獅子は智慧の威猛を現す。
○賓頭盧の兩足　よく歩けるやうに賓頭盧の兩足をさする。
○こむら　脛。脛の背の方のふくれた部分。
○十萬億　十萬億土。この世から彌陀の淨土に至るには、西方十萬億の距離ある佛土を經るといふ。
○愛別離苦　佛經の語。八苦の一。親しきものと別るゝ悲しみ。
○天上天下唯一人　釋迦が生れた時、「天上天下唯我獨尊」と稱したといふ。
○六道　地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上道の六世界。
○文月の中の六日云々　舊暦七月十六日。この日は盂蘭盆會に迎へた佛たちを再び冥途へ送る。その時焚く火

されば にや釋尊は、かりの契りもかりの世と、深きいもせの中となり、くるわをぬけて只二人、越路の空を跡に見て、※十萬億へと心ざす、道はどこやら後前も、涙の雨の晴間なく、ぬれてかわかぬ沖の石、つれびきにしたその時に、わたしがばちを持ちそへて、いとしいぞやといはしやんした、その一ことがえんのはし、※愛別離苦の世のならひ。あふは別れと口ぐせに、味氣ないことといはしやんす、それでわたしが此のつかへ。※天上天下唯一人、おまへならでと思ひつめ、此の世はおろか後の世も、かはるまいぞと※六道の、ちまたに迷ふ戀のやみ。こゝろしもけふは※文月の、中の六日はなき魂を、しやばへ迎へておくり火の、おくれさきだつ死出の道、往來の人の繁ければ、草葉のかげに身をひそめ、立たずみたまふぞいたはしき。かりのよ涙にくれながら、必ずつま子のある人と、すゑの約束せぬものと、我が身の上に聞く辛さ。※やしゆたらさんのさぞやさぞ、わたしを恨みてござんしよ。と、袂にすがり泣きければ、アヽおろかな人のくりごとや。※色即是空ときくときは、自他平等にへだてなく、共に※一蓮たくしやうぞや。アレ〳〵あれを見や。※ぐぜいの舟の乘合に、思ひなき身の女夫づれ、二世の契りのうらやまし。※一むらそびえし深山こそ、つたへ聞きつる※劒の山、地ごくの里はあれかとよ。※經帷子のなが袖も、※偏袒右肩此のまゝに、是れぞ※即身成佛の、法のちかひのたのもしく、夫婦は二世の契りぞ。と、手に手を取りてゆく程に、※三津の川の舟よばひ、※如渡得船のさをさして、彼岸にこそ著きたまふ。

をおくり火といふ。

○やしゆたら　耶輸陀羅。釋尊の妻室。

○色即是空　物質はそのまゝ空無なりとの意。『般若心經』「色不レ異レ空、空不レ異レ色、色即是空、空即是色」。

○一蓮たくしやう　一蓮托生。極樂淨土に往生して、身を同一蓮華の座上に托することをいふ。

○ぐぜい　弘誓。衆生濟度の大慈悲の誓。

○一むらそびえし　一群聳えた

○劒の山　地獄にて劒を立ててあるといふ山。

○經帷子　死者を葬る時着せる麻衣。縫目の縫をとゝめず、端縫せず。六字の名號などを書く。

○偏袒右肩　佛敎の語。片はだぬぎになること。『金剛經』註に「偏二袒右肩一、右膝著レ地」。

○即身成佛　現世に享けたる肉躰そのまゝ、直ぐに佛となること。妄念を打破して、佛性を發現し悟道すること。

○三津の川　冥土の入口にありといふ川の名。こゝを渡ると、地獄道、餓鬼道、畜生道の三惡道に分れるといふ。

○如渡得船　謠曲「稚著」に「妙法蓮華經藥王菩薩品、如子得母如渡得船。こは渡に舟を得たりとや」とあり。

白樂天船中之灘

一を　つうヤといふ　　二を　かくヤといふ　　三を　たつヤといふ
四を　ますヤといふ　　五を　てんヤといふ　　六を　ずいヤといふ
七を　しんヤといふ　　八を　はいヤといふ　　九を　もうこといふ
十を　かんなといふ

三聖廓中之戲言

廓そうじて遊所の事をなんくわんといふ
女郎を　にいくんと云　若衆を　れんつう　娘を　にいつう
女を　にいしん　尼を　にいすゐん　亭主を　じうてい
仲居を　にいとう　引舟を　にいはん　火車を　にいくわん
禿を　ぢよてい　客を　きや　大じんを　くうてき
するを　そうちん　色を　きん　ぶするを　ほうちん
うそを　へんな　つとめを　すいこ　ほれたを　ていら
交合を　すてき　のいたを　はん　寐るを　すん

○白樂天船中之灘　四四七頁に枚方にて拳酒にまけた件がある。その時に用ひた拳の符帳といふところである。

○火車　又花車とも書く。茶屋の女房又は仲居の頭。

おきるを　とう　　銀子を　ばんつう　　金子を　らんつう
たばこを　ちやうこ　　きせるを　すとん　　酒を　ちう
肴を　こん　　吸物を　しゆせん　　杯を　ちうはん
青を　せた　　黄を　ぬく　　赤を　めんる
白を　ほう　　黒を　こう　　歌を　かん
三味線を　てんきん　　琴を　りきん　　こきうを　ちよきん
尺八を　げん　　うつくしいを　ほう　　好いたを　れん
わるいを　しう　　すかんを　けまな　　杯さしたを　めんとん
間を　ちよん　　おさへを　りやん　　助けるを　ごうてん

此の外委しくは記しがたし、有増をとゞむ。

寶暦七年丑六月吉日

大阪高麗橋筋四軒町
書肆　堺屋市右衛門梓

遊子方言

田舍老人多田爺

敍

※花之美多則多矣。不レ若二花街花之美且情一。桃李雖二然美一、不レ言不レ語。牡丹海棠雖二然艷一、不レ笑不レ歌。此花也、不二唯能言語笑歌一。其色一過レ目、則奪レ精蕩レ魂。其香一觸レ鼻、則飛レ心斷レ膓。加旃霜露不レ凋、風雨不レ摧。※取レ之無レ禁、用レ之不レ盡。春秋晝夜、莫レ時不二芳菲一。奚爲與二艸木花一同二榮枯一哉。艸木花猶且賞レ之。況於二此花一乎。北州之遊、嗚呼樂夫。因以序。

田舍老人多田爺謹書

◇花の美なる、多きことは則ち多し、花街花の美にして且つ情あるにしかず。桃李然かく美なりといへども、言はず語らず、牡丹、海棠然かく艶なりといへども、笑はず歌はず。此花や唯能く言語し笑歌するのみにあらず、其色一たび目を過ぐれば、則ち精を奪ひ魂を蕩かし、其香一たび鼻に觸るれば、則ち心を飛ばし膓を斷つ。しかのみならず霜露にも凋まず、風雨にも摧けず、之を取れども禁ずることなく、之を用ふれども盡きず、春秋晝夜時として芳菲ならずといふことなし。なんぞ艸木の花と榮枯を同じうせんや。艸木の花すら猶且之を賞す、況や此花に於てをや。北州の遊び嗚呼樂しいかな、因て以て序す。

○取レ之無レ禁、用レ之不レ盡　蘇東坡『前赤壁賦』中の語句。

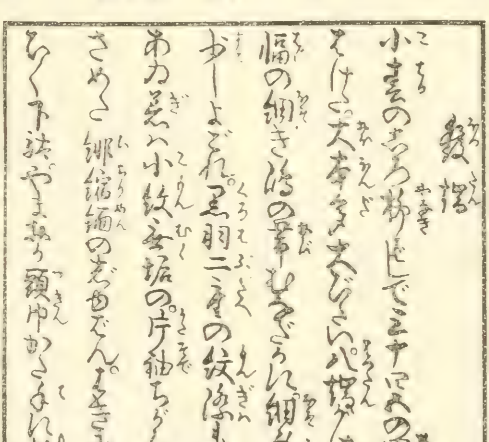
目錄

發端 附り 女の出會、舟の中、堀の樣子、土手、大門口。
中の町
夜のけしき
宵の程
更ての體
しのゝめのころ

畢

發端

小春のころ、柳ばしで三十四五の男、すこし頭のはげた、大本多大びたひ、八端がけと見える羽織に、幅の細き縞の帯胸高に、細身のわきざし柄まへ少し汚れ、黒羽二重の紋際もちと汚れし小袖、あひ著は小紋無垢の、片袖ちがひのやうに見え、色のさめた緋縮緬の繻袢、はきにくさうな、幅びろのひく下駄、やまをか頭巾かた手に持ち、鼻紙袋はなしと見え、小菊の四つ折すこし出しかけ、我より外に色男はなしと、高慢にあたりをきろきろと見まはして、あてどなしにぶら〳〵と行く向ふより、二十歳ばかりの、人柄よき柔和さうな子息、わきざし立派に黒縮緬の綿入羽織、五つ紋しろ〳〵と、丹後縞の小袖、した著は御納戸茶縮緬の南め


發端
小春のころ柳ばしで三十四五の男すこし頭のはげた大本多大びたひ八端がけと見へる羽織に幅の細き縞の帯むなだかに細身のわきざし柄まへ少しよごれ黒羽二重の紋ぎはもちとよごれし小袖あひぎは小紋無垢の片袖ちがひのやうに見へいろのさめし緋縮緬のじゆばんはきにくさうな幅びろのひく下駄やまをか頭巾かた手に持ち鼻紙袋はなしと

○小春　初冬の氣候温暖で春の如き時をいふ。又十月の異名とす。
○大本多　髷の名。
○八端がけ　八端に同じ。地が厚く、縦横の縞が黄褐色の織物。
○柄まへ　柄の先。
○紋際　紋のふち。
○あひ著　下着。
○小紋無垢　白地に小紋の浮織にしたもの。
○片袖ちがひ　袖が片方違つてゐる。
○やまをか頭巾　をくそづきん（苧屑頭巾）の異稱。からむし頭巾と同じ形をなす。

○小菊　紙の名。
○あてど　目的。
○丹後縞　丹後國與謝郡地方より産出する絹織物。多くは縞である。
○御納戸茶縮緬の南めん　御納戸色は藍色の鼠を帶びたもの。それを其まゝ表と裏とし、縮緬といふのであらう。

ん、琥珀じまの袴、なかぬき草履をはき、供にかひきの風呂敷づつみと生花をもたせ、扇子かざして來る。　通り者「これ／＼色男／＼。　むすこ「いやこれは／＼どうでござります、此の間先生と御噂申しました。　通り者「先生はさえねえ／＼。お前どこへ行きなさる。むすこ「私は本所邊へ參ります。　通り者「行かねばならぬ事か。何しに行かつしやる。むすこ「伯父きが病氣でをりまして、見舞にさんじます。　通り者「伯父病氣ならば、ぐつとながしたいわい。　むすこ「なぜでござります。　通り者「あんまりつがもないよい天氣だやによつて、正燈寺とくらはせようと思ふ。　むすこ「なるほど私も正燈寺へは參りたう御ざりますが、行つて來て本所へ參られませうか。　通り者「行かれます／＼。そして本所は大流しにながしてもよしさ。　むすこ「なんにもせよ參りましよ。　通り者「そんならぐつと供を歸しがよからう。あれが行つたとても、紅葉が面白くもなんともないわさ。それよりは内へ歸つてゐた方がらくだ。角平なすとんだ通り者か。これ色男はかまはう／＼。　供角平「それとも御用がござらばまゐりませうか。　むすこ「いや行かずともえい。歸つて云はうには、あなたに道で御目に懸つて、御同道申し正燈寺へまゐるによつて、角平をば歸します。必ず御あんじなされますな。　供　かへる。　通り者「あゝえい。これで大きにえい。船中にてだん／＼つもる物語がある。をしい色男が埋木となるによつて、だん／＼おれが傳授で、善二坊のやうな色男を、揚卷の助六がやうにつくり直さにやならぬ。こゝはみんな

○琥珀じま　琥珀織の縞もの。絹布の名。之は舶來にて唐ちやうといふ。後には京都西陣から産出するやうになつた。
○なかぬき草履　藁の心（しん）にて作り、緒には藁に白紙を巻き綯へて作りつけた草履。略してなかぬきともいふ。
○かひき　海氣。絹の名。
○通り者　通人。
○ながしたい　此處では他へそれて行く意か。
○つがもない　途方もない。
○正燈寺　東陽山と號し、下谷龍泉寺町にある。妙心寺派臨濟宗、承應三年愚堂和尚の草創にかゝる。後園に楓樹多く、晩秋の頃には遊覧するものが多い。
○くらはせよう　出かけて見ようといふのを野卑に稱へた詞。
○大流しにながす　急速に端折ること。
○すとんだ通り者　案外な通人、思ひの外の通人。おだてたのである。
○かまはう　構はうにて、追拂はう、追放しようの意。江戸御構などいふの類である。
○揚卷の助六　芝居にやる花川戸

い助六のこと。揚卷といふ情婦がある から揚卷の助六ともいふ。
○猪牙舟　輕快な早舟の名。細長い形の屋根のない川船。單にちよきともいふ。
○ちよつきりぐいづくり　猪牙から思ひついた駄洒落。ちよつきりはちよつくり、ちよいと。ぐいづくりは速に仕度をすること。
○も一艘　ちよつきりぐいづくりを解し兼ねて舟の名称と思つたのである。
○堀　山谷堀。
○松さき　眞崎。
○上下を二ど　上り下りを二回。
○二はいあげて　二艘こしらへた。二度漕いで。
○汐時　こゝでは上潮。
○おもいれ　思入れにて、容子をして容態を作りて。

が乗る伊豆屋といふ舟宿だ。毎日おれも乗るところだ。こつから乗らう。かみさん※猪牙舟。※ちよつきりぐいづくり、はやく出しとしたいわい。舟宿の女房「はい御出でなされませ。猪牙舟はござりますが、※も一艘なんとやらおつしやる舟がござりませぬ。通り者「いやさ猪牙舟ばかりでよしさ。女房「どつちまででござります。通り者「どことはどうだ。※堀さ／＼。女房かしへいづる、船頭は今かへりて、やすまうとおもうて、舟をかしへ付けてゐる。女房「これ五郎どん。大儀ながらも一艘こいで下さりよ。これさどうぞさしつたか。五郎「どうも仕やせんが、腹がへりやした。腹もへる筈でござりやす。※松さきへ※上下を二どこいで、堀へも※二はいあげて来やんした。女房「そんなら茶づけ一ぱいかきこんで、早く行つてください。急がつしやる。通り者むすこ二人舟宿のみせより、もう舟はできたかと、くはへぎせるにていづる。女房きのどくさうなかほ。「ちとおまち成されてくだされませ。船頭がみんな出拂ひまして、やう／＼只今かへりました船頭が参りますが、大ぶ腹がへつたと申して、茶漬をたべて参ります。通り者「そりやとんだ事ツた。女房「さやうで御座りますけれど、※汐時がよう御座りますから、舟は忽ちで御座ります　通り者「そんならま一ぷくのみましよ。○といふて待つうちに、まへの河岸へをどり子二三人のりたるやね舟がつき、男三四人あがれば、通り者はたばこの呑みやうに※おもいれありて、其の舟からあがる人は、みなしつた顔のやうな見えをして、物をいひかけられたさうな顔にてゐる。其の中に年ごろなぢゝいが黙禮して行く。通り者「どいつもみんな俺が知らない奴だ。あん中に知つた顔なやつは、たつた二人ばつちやない。むすこ「今おまへにじぎしていつた達者さうなぢゝいは、折ふしこゝらで見る人ぢやが。通り者「あれはおれが久しいちかづ

○跡のにた山本多　にた山は本多髷の名。本田髷の一種。

○それ身をする一瓢が内だ　それ身はそれ身、[illegible]は徳利一反の[illegible]のある一派。一瓢は明和頃の幇間で高名であつた。

○掘つても　どうしても。

○轡の通り者　轡は亡八。遊女屋の主人。通り者は其仲間で人に知られてゐるものども。

きだ。野暮なぢゝいさ。ありや鎌地屋本次郎といふぢぢいだ。跡のにた山本多のいきに見えるやつは、翌助といふやつだ。あいつはおれを知つた顔していつたが、おらつひどあつた事ない。兎角おらを知つた顔したがる人の、あがるを見るにつけても、はやく行きたい。どうだ。○河岸から　船頭「さあお召しなはりやせ。○二人はさあといふて舟に乘り、船頭「舟をおし出しておくんなはりやせ。○女房二人をおくり、ふねおしいだす。女房「御きげんようおいし成されませ。○舟は大川へ出る。船頭「おたひらにお召しなはりやせ。通り者「これ色男、猪牙舟の乘りやうから傳授しませう。猪牙舟といふものは、あぐらをひッかき、うしろへひぢかけの、首うなだれの、たばこばくとくらはせねば、舟が漕ぎにくい。先づ船頭が嬉しがる。これ〳〵此のをかのむかふが、それ身をする一瓢が内だ。いやかれこれゆつてゐる内に、肝腎の相談を忘れた。正燈寺へはしよせん行かれないによ。貴樣ほんに正燈寺へ行くと思つてゐたか。むすこ「あい〳〵。正燈寺へはいかさまもうおそう御座りましよ。通り者「さあ其の事ッた。しよせん正燈寺とはかりの名。よし原へ行かうといふ、かねてたくんだ腹だ。吉原へ行つてもよからうが。むすこ「あい早く歸りさへすれば、よう御座ります。通り者「行くからにや、早いの遲いのといふこつちやない。おれと行くといふと、掘つても早く歸られぬ。野暮なやつらと行ッたとちがつて、格別面白い。其のはずだ。吉原中の太鼓持はもちろん、其の外みんな轡の通り者やなにかが、おれが行くといふと來る。この中もきかつしやい。來る者に

事かいて、釣瓶そばのむすこまで來てしやれる。こりや大ぶ舟がおそいわ。やう〳〵首尾の松ぢやないかの。船頭「首尾の松はよつぽど跡に通り過ぎやした。通り者「なるほどよつぽど來た。あこゝは此君山ぶしが河岸だ。むすこ「此君山ぶしとはなんの事ツて御座ります。通り者「これに段々講釋のある事た。吉原は男ぶりよりも、魂膽がかんじんだといふ事がある。此の河岸に八十ばかりになるなで付けがあるが、これが此君と大きに色事だ。それゆゑに此君が客は、みんな皆無ぶつぱらツて、きれた程のこんたんしだ。それをおれが向ふへまはして、たび〳〵色事をしたが、おれも惡くすると、叶はない事がある。それに付けてもあつたら色男が、形や作りがどうもさえぬ。吉原へはいる形ぢやない。とかく吉原は黑仕立がよい。髮がとんだ野暮だ。どうぞもう五ぶほど根をあげて、はけさきをすつとひつこきとしたい。額をもう多くの事ツちやないが、もう五六ぶぬきあげて、どうぞ形や何かを粹にさつしやい。そして會へちツと出るやうにしたい。むすこ「あい新交が會の時に、ちよとまゐりやした。通り者「新が會の時にや、おら行かなんだ。すべて此ごろは、通り者が會をながす。それでおれがせんども藏前の辨魚に、川崎屋の雷同が所で、みんなが居たによつて、辨魚にさうゆツた。是れからは會をみんなが流さない筈だ。何をいふもみんなが、ぜにのないしよゐだ。錢がないといへば、おれが丸角へあつらへておいた、鼻がん袋がある。とんだいきなきれだ。小はぜ計り二分ほどに當つてゐる。きれ

○首尾の松　大川端藏前附近にあつた名木。
○此君山ぶし　此君は女郎の名。それを情婦に持つてゐる山伏。
○魂膽　かんがへ。はかりごと。
○なで付け　頭髮を撫でつけにしてゐる老人のこと。
○はけさき　頭髮を結つた先。
○ひつこき　下向きにする。
○會　お浚ひの會。
○新交が會　新交が催主であつた會。
○會をながす　會を缺席する。
○丸角　袋物屋の名。
○小はぜ　袋物の合せ目の端につけた釦。

は阿蘭陀の※むしろおり、貴様見るとふるへ付くほどなきれだ。おれが錢のある時にあつらへて置いた。丸角の亭主が、おれと心やすいによつて、いつでも亭主に逢つてあつらへる。亭主も如才はなけれど、いそがしいによつて、とかく丸角はながい。されども十日ほどの内に、こしらへてやらうとゆつた。其の内に皆無錢がなくなつたによつて、三十日ほどに成るが、今に取りにいかん。貴さまいつそ買はないか。出來てゐようから。むすこ「そりやどうぞ私が買ひたう御座ります。どうぞお前つれ立つて行つておくん成されますまいか。通り者「おゝつれ立つていこ〳〵、貴樣たばこ呑みえないの。むすこ「あい、さやうで御座ります。どうもたばこを呑まんは、わるいもので御座ります。それで此の間ずゐぶん、煙草呑みならはうと存じます。煙草入もこしらへたう御座りますから、どうぞつれ立つて御出で成されて下されませ。通り者「煙草入は堀安で見て置いた。飛んだ、いや良い※さらさがある。それをこしらへさつしやれ。堀安めもおれと一しよに行くと、すとんだ掛値はいひえない。煙管はどうしても※住吉屋がえいによ。とんだ能いかたがある。むすこ「せんど※折太夫にあひやした。とんだ大そうなきせるを見やした。それに※小田原町とやら、※新場の人とやら來てゐやした。夫れもとんだ大そうなで御座りやした。通り者「折太夫といふはなんだ。むすこ「義太夫をかたる。通り者「うゝ、なるほど、いや俺かものずきは又違ふ。なんでも住吉屋を呼んで、まあ是れからは何でも、おらが内へ來さつしやい。そつちへ手

○むしろおり　蓆のやうに縦横に糸を織つたもの。

○さらさ　更紗。もと暹羅から渡來したので沙室染とも云つた。摺込もあれは捺染もあり、又描いたかきざらさもある。

○住吉屋　住吉屋と村田とが煙管屋としては名高い。「嬉遊笑覧」卷一に「きせるは池の端の住吉屋清兵衞が田沼はりとも出世張とも云るがはやりしとあり。

○折太夫　義太夫語りの太夫。

○小田原町　日本橋小田原町。

○新場　日本橋新場。

紙がやりたい事があつても、どうもやりにくい。若い者をそゝなかすやうで、名にし負ふおれが事たから、どうもし憎い。貴様※表とくがあるか。むすこ「あい、どうぞおまへの字を取つて、お付け成されてくだされませ。通り者「そんなら俺が番町の番の字を取つて、番景とつけよ。後にや俺がやうに、方々から番景さん番景さんといふやうになろ。夫れについて話がある。この中も中の町の松屋の店で、おれが※どんできれいな形で、勿論ふとぎせるで、煙草を呑んでゐると、その傍に淨瑠璃を語る※東洲が來て、話してゐると、さる内の奥座敷の女郎が、東洲に※あだついた。おれにあだつきたいけれど、俺にはおそれて居て、おれは此の位な浮氣なものだといふ事を知らせたがつて、何が色々な事をして、其の上で東洲に、※ぬしの名はなんとゆッ。と、そつときいて、すると東洲が、ぬしの名をお知りなんせんか。番町さんと申しやす。といふと番町さんといひたさうな顔でつんとして、これに御出でなんせえ。というて、立つていつた。客が來たさうで、そこで今夜そこの内へいつて、※新造かひとして、夜ふけ人しづまつて、其の女郎が所へ忍びこみの、口說かずとも、ぢきにさういふ調子だによつて、直に出來る。出來るといふと、しよての新造に引きかへて、※三ツぶとんのうへ、ひそかに※茶づつたり何かして、腹一ツぱいに女郎ぶち殺しの、※しのゝめさつと明けわたる時分までゐて歸る。なんときつい色男の筋ぢやねいか。おらが吉原は、みんなさうした事だ。これは※埒のあかない舟だぞ。いや〱やう〱著くさ

○表とく　表徳と書く。號のこと。
○どんできれいな形　いつそ、とても奇麗な姿。
○東洲　河東節の淨瑠璃語り、十寸見東洲。
○あだついた　いちやつく。
○ぬし　あの方。
○新造　新造の身の義より出づ。振袖新造（略して振新）・留袖新造（略して留袖又は留新・番頭新造（略して番新）の三種がある。振新のやゝ年長じたものが留新となる。此二者の任務は姉女郎に從ひ一用を辨ずることもに其の薫育を受けるにある。けれどもこれには遊女の候補者たるものと既に遊女となつてゐるものとの二種がある。番新は純然たる遊女で、よき遊女に附屬して傍ら色を賣つてゐた。遊女の相談役であつたから茶屋に赴いて遊客と應對し、又案内役をもつとめる。
○三ツぶとん　三つ重ねの布團。紋日などに客の贈るもの。
○茶づつたり　ふざけたり。
○しのゝめ　東雲、夜の明方。
○埒のあかない舟　さつさと進行しない舟。

〇大臣　大盡。金をつかふる客。

〇そゝけはせぬか　舟の上り下りに[illegible]

〇こゝのうちにも云々　土手の通行にも上手なのと下手なのと。

〇小鼻のさきへつばきをつける　惡臭除けのまじなひ。

うたな。舩頭「どこへ、お上りなされやす。通り者「ほんにさうだつけ。一川屋には勿論かりかあり、吉野やのきやつらは、うぬぼれでいまし／＼し。どこにしような、それ／＼此の頃進つた山本は、まだおれを※大臣と思つてゐる舟宿がある。舩頭「どこへつけます。こゑ申し。通り者「そんなら山本のさん橋へつけろ。舩頭「山本屋なく。山本屋「はあ、どなたかお出でなさつたさうな。ときんばしへ出むかふ。これはお珍らしいお出でで御座ります。おあがり成されませ。あゝ、こツちらへ付ければよいに。通り者むすこ「いや／＼こちらでもよし／＼。とずつとあがる。山本屋「一ぷくまづおあがり成されませ。〇通り者、むすこ二人ともに顔をかける。山本屋女房「よう御出で成されました。山本屋「あなたは番町さんといふおかただ、せんど朝水道橋までめしたお客だ。通り者「これからは心やすく来やんしよ。かみさん、はけさきが※そゝけはせぬか。見て下んせ。山本屋女房「いえなんとも御座りません。通り者「手のごひをちよと熱い湯でしぼつて、下さい。山本屋女房「はい。通り者「手のごひおれがやろ。とあさぎの手のごひを出し、ゆにぬれたるを取り、しぼりて顔をふく。髪ぎはを大事にふく。くつとこれで心持がよくなる。拭かしやらんか。どうもやぼな形だぞ。むすこ「さあ、参りましよ。とふたりは出てはやく。通り者「さあ／＼急ぎましよ／＼。山本屋同女房「申し明あさおより成されませ。通り者「さあ／＼まあ土手へ来た。これ／＼此方だよ。※こゝのうちにも巧者と不巧者がある。こちらを通ると格別ちかい。これは土手が大ぶ寂しいわい。※小鼻のさきへ、つばきをつけさつしやい／＼。むすこ「なせえ。通り者

○死人をやく匂ひ　日暮里火葬場の煙が來るのであらう。
○しやんと小づまをとりかぶと　河東節『亂髮夜の編笠』の一句。（既出一四六頁）
○河東節　江戸淨瑠璃。江戸半太夫から分れて天滿屋藤十郎が手品節廣瀬節を交へて作つたもの。藤十郎本氏は伊藤、母方の氏河邊の河を取り藤十郎の藤と合せ、藤の字を東に改めて河東と云ふ。
○會のたくみ　お浚をする計畫。
○摺物　お浚ひの案内狀などを木板で摺つたもの。
○衣紋坂　吉原の土手から大門に入る坂。此で衣紋をつくろふと云ふ故から此名がある。
○のうれん　略してのれん（暖簾）。商家で家號などを記し、日除けをかねて目標とする布帛の帳。

「いやなぜでもつけさつしやい。今に思ひしる事がある。それ〳〵もう來たぞ。むすこ「ほんにをかしな匂ひで御座ります。　通り者「こりや死人をやく匂ひだ。ぢやが土手でかげば、死人の匂ひもえいものぢやないか。今夜は大ぶ土手が長いやうだ。　というて、しやんと小づまをとりかぶと、上るりを巧者らしき聲にてかたる。　まだいけんを云ひ殘した事がある。うたを習ふげなが、同じ事なら唄はよさつしやい。今野暮な侍がうたを唄ふ。河東節を習はしやい。おらが内へは雅十はじめ、段次も筆次郎も來るもんだから、誰に習はうもすきだ。それに河東が、此のごろは聲がかれて、おらが内へ來てねてゐる。それに筆次郎は辨四郎と改名した。これも會のたくみがあるから、毎日來る。いや通り者になると、此の會ばかりもうるさいものだ。摺物ばかりも大ぶたまつてゐるぞ。さうかういふうちに是れは衣紋坂、やつぱりこゝは古風に、こゝでずゐぶん衣紋をつくろふがえい。時にこゝから靜かにして行かう。どうも人が見るとみんなが來て、あんまり騷々しくなる。今夜はしつぽりと手まへとおれと、たつた二人で遊ぶ事にしよ。　といふうちに、大門をはいりて、　はてかう寂しくては、どうもならぬわい。茶屋はどこにしよう。あんまり知つた所が澤山だから、どこへいかうも目うつりがする。それにおれは茶屋を定めて行くがきらひだ。そこは何屋だ。のうれんを見さツしやい。　むすこ「小田原屋といたして御座ります。　通り者「あゝ又が所か。えゝあいつはおれが行つたら嬉しがろ、さあ〳〵はいりましよ〳〵。　とずつとはいれば、茶屋は女房ひとり座敷にゐる。　かみさん如何でござい

○江戸　深川邊から下町方面を言つたものゝ如し。

○すゞりぶた　硯蓋の類で口取肴などを盛る器。

○きのどくさう　心苦しさう。他人の事にも云ふが、此處の如く自己の心についても言ふ。

す。　茶や女房「あゝお出でなんし、おあがりなんし。　通り者「上りましよ／＼。とずつとあがり、見せのまん中へ大あぐらにてすわる。大ぶ今夜は靜かだの。　女房「否まだ二階にお客が御座ります。　通り者「いつでも賑やかでえい事だの。久振りでこゝの内へは來たぞ。といへども女房は、何かしじうわからぬ顏にて、　女房「ぶしつけながらお前さまは、お見忘れ申しいんして御座りますが、貴方はどなた樣で御座りましたね。　通り者「これはどうだ。これは／＼いかに久しくこないとて、見忘れた顏はねいわ。しかしさうだあろ、久振りだから。御亭主には、折ふし途中で逢ふが、成るほど内へは久しぶりだ。そして亭主はどつちへで御座います。　女房「今日は※江戸へ參りました。　通り者「あゝ今こゝを出ていつた人はだれだ。　女房「あれは筆次郎樣ンで御座ります。　通り者「あゝ筆か、なぜおれを見て、見ない顏して行くしらん。成るほど／＼、ゆうべおらが所へ來るはずで、こないによつてそれで見ない顏したさうな。　女房「えゝゆうべあなたへ參るはずで御座りましたか。　通り者「此のごろは河東が來てゐるによつて、話にこうとゆつたに筆がこないによつて、ゆうべは龍干が來て、俳諧で夜をあかした。○此の間杯※すずりぶた酒出でて女房がさし圖にて吸物出る。今日も河東が來てねていつたから、吉原へ行く、あゆばないかとゆつたれば、ぶしやうな奴、吉原よりはどうぞ寢てゐたいとゆつてゐつたけ。　女房「河東樣ンはゆうべから、こつちへ來てで御座ります。　通り者「河東が。ときもをつぶし、※きのどくさうな顏にて、はてそれはいやな事、魂魄ぢやないか。○女房はあいそをつかして勝手へ立ち、つんとしてかまはぬ。○臺所には男どもが、茶や男「おかゐ

○つとめの請合引き　業務の上の約束事。

○合びん　あはせびん。髮の一種。男子の左右の鬢の毛を髻の下に合せ、髻を太元結で引つめて結ぶ樣風。

○來のめ田樂　來れと云ふのを木の芽田樂と洒落る。

○御内しよう　こゝの女房のこと。

さま、あれは何かをかしなもので御座りますぞえ。大がいに挨拶をして、おかへし成されませぬか。女房「おゝさおれもさう思ふよ。何にしろ旦那が歸らしやつたら、えいやうにさつしやろ。まあそれまでは構はずにおかつしやい。もし又※つとめの請合引きなら、必ずさつしやるな。おらは二階の客人の方へ行くから、平さんと川さんが御座つたら、あの二人をば中の間へ置いて、おれへ早く知らさつしやい。といふて二かいへあがる。むすこ「こゝの女房は、あまり愛想がよくないぢやござりませぬか。通り者「されば其の事ッた。ぜんたいつきのわるい内だ。何か知つても知らないやうな顏してゐる。こゝへ今よい女郎が來ればよいに。かうしてゐる内にしやれてやらうもの。と見えをいろ／＼いうたりしてたばこぱく／＼とのみゐる。客平くる。男ぶり大きく人柄よく、合びんにて黒羽二重のあたらしき小袖、黒縮緬五所紋内々と、鼠縮緬のあひぎきれいに、大きな聲にて、御亭主はもう歸られたか。○臺所より若イ者かけ出て、かの通り者むすこにもかまはず、とんで出るひやうしに通り者の足に、わかい者の足がさはる。通り者「ぞんざいな野郎めだ。○わかい者はごめんなされませともいはず客人平にむかひ、わかい者「御出であそばしました。平「おゝ二階へ通らうか。わかい者「ちとおまち成されませ。と通り者と、むすこにむかひ、お前樣がたは、中の間へ御出で成され下さりませ。通り者「どこでも吉野木々々。これ色男、こつちへ※來のめ田樂／＼。としやれをいふ。わかい者杯もち出で、客人平のまへへ出して、大分お遲う御座りました。平「御亭主はまだか、※御内しようは。わかい者「只今二階にをります。おまち申してをりました。早くさやう申しましよ。平「大分忙がしさうだな。通り者「これ色男。みせの客を見さつしやい。あいらがふられずば、ふらるゝ者はあるまいぢやないか。あゝ

○呑みかけ山　酒を呑むこと云ふ洒落。

○ふり付ける　嫉妬でふりつける。

○山さん　相手の抑妓の名。

いふものを見ておいらを見たら、女郎の心でも惚れるはずだ。と高慢をいうて、むすこに見えをいふ。女房二階よりおり見せ、いで、大ぶおそう御座りました。平「さうであつたであろ。今日同役の所で少し祝儀事で、※呑みかけ山としてゐたらば、亭主の見えられてあつた。女房「左樣で御座りましよ。今日のは急な御用のお文さうで御座りましたによつて、外の者では間違ふ。と申して、自身に持つて參りました。それでもお目にかゝりましてよう御座りました。川樣は御出で成されませぬか。平「これも大かた見えようが、御亭主ももう歸られさうなものぢや。尤もこれは虎の門の方へよるといふ事であつた。女房「はい左樣で御座ります。いつでも虎の門へよりますと、永う御座ります。せんども寄りまして、虎の門の御客樣は、此方へ御出でなんしたのに、歸りませんで、直に品川へ參りまして、其の朝ゆるりと歸りました。しかも其のばんは、忙がしい晩で御座りましたのに、歸りませんから、歸りますと、大きに※ふり付けてやりんした。平「んまいな〳〵。さうした實な女郎にあひたいものぢや。女房「※山さんがあらほど實なうへに、其のやうになんに成されます。平「されば其の事ぢや。あいつも氣の知れぬやつぢや。ずんど實なやうでもあり、又何やらをかしなものぢや。いや此のやうな事いはずと、一ぱい呑みましよ。女房「一つおあんなんせ。というてはじめる。平「これはきつい小杯な。今日一日醉つてはゐるけれど、此のやうな小杯では、少しくすぐつたいやうぢや。例の大物を〳〵。女房「さやういたしませうか。というて女房は勝手へ杯取りに立ち、すひものをいひ付ける。客人平

大分醉うた風情にて扇子ぱち〳〵ならしゐる。通り者、むすこにさゝやきて、袂の内より何かとりて、「これかみさん〳〵、ちよつぴらあひたい〳〵。女房「はい、なんで御座ります。取込みまして碌におかまひも申しませぬ。通り者「かまはずとも※吉野葛、これは※せ左衛門なれど、久しぶりで來たしるし、とかなんとか云ふやうなもの、そつちへしまつて※翁草。女房「はいこれは。とばかりにて立たんとする。通り者「これ〳〵まだ用がある。※松葉屋の粂之介をきゝにやつて下さい。女房呑込まぬかほ付にて、「はい。といふて思案し、はい粂之介さんは、おわるう御座ります。さつき向ふの内に御出でなんした。通り者「はてどこにしような。※丁子屋にしようか。女房「※角町に新店が御座りますが、お出でなんしてごらうじませんか。通り者「角町はさえまい〳〵。むすこにむかひて、かの色事の所へいかうか。あゝしんざう買ひでは氣がつまるぞ。女房「まあどこぞ御相談成されて御らうじませ。通り者「なんにもしろ、提灯付けさしてくんなさい。女房「はいどれぞおともしやれ。といふうちみせの客人杯をまつ。平「大物はどうぢや〳〵。女房「あい只今もつて參ります。といふて大杯もちきたる。平「さあ〳〵これぢや〳〵。とぐつと引きうけのむ。通り者「行くべし〳〵。とむすこをつれふたり庭へおりる。女房「明朝およりなんし。通り者「あい、あすも、若し降らば※ぶんながしの、久しぶりで※ゐつゞけうも知れやせん。諸事は今夜の女郎の腹にある事。といひながらむすこを少し先にたてて行く、平は此の始終を見てゐて、女房にむかひ、「ても大そうな髮ぢや。所謂本多ふうぢやの。女房「あいさ、さやうで御座ります。何か知れぬ事ばつかりおつしいんすから挨拶がし憎う御ざりんす。平「いや時によひは、氣をかへて見るつもりぢやぞえ。女房「なぜで御座り

○吉野葛　よいと云ふのを駄洒落ての詞。吉野葛は葛粉の上等なもの。
○せ左衛門なれど　しなくてもよいものだがの駄洒落。
○翁草　おいてくれとの駄洒落。
○松葉屋　江戸町一丁目の角にあつた。
○丁子屋　江戸町二丁目。別號を雛舌樓といふ。
○角町　大門口を入つて仲の町を中央に、その左側の筋が伏見町、江戸町二丁目、堺町、角町、京町二丁目の順。因みに右側は江戸町一丁目、揚屋町、京町一丁目となつてゐる。
○ぶんながしの　其儘滯在して。
○ゐつゞけ　流連。

ます。平「いや、ちつと新町邊に見そめたのがある。これへ今夜はいて、ちつとたまには、もたせるも面白からうではないか。女房「なんさ、それはおよしなんし、私共が大ていな難儀いたす事ぢや御座りません。せんどもちよつと江戸町まで、お付合で御出でなんしたのさへ、大ていやかましかつた事では御座りません。あれ／＼さういふ内、新ざう衆がお迎ひに御出でなんしたさうで御座ります。平「おれはかくれるぞ／＼。新ざう「申し／＼、わつちを見てなぜ逃げなんすえ。平「いや、にげはいたさん。公のお迎ひに出たのぢや。さあ／＼あがり給へ／＼。新ざう「あ、も、せはしなうおざんすわ。といふて、こしを椽に半分かけておちさうにしておて、おかさんに、おいらんでおつしやりんす。晝程はゆるりとお目にかゝりんして、お嬉しうおざんす。平樣、お出でなんしたさうでおざんすのに、なぜ早くおよこし申しなんせん。お恨みでおざんす。と口上いひしまひ、なぜ人をよこしなんせんえ。女房「あいさ、どうでさはつて御出でなんす事を存じてをりんすから、まあゆるりとさう申してあぎんしよと、思うてをりんした。それについてお話が御座りんす。さツきね、平さんのおつしやりんすによ。と客人の顏を見ていはうとする、平は最前よりも酒よほどまはり、大げんきとなりうたひ聲にて、平「左樣な事は、船中にては申さぬ事にて候。新ざう「ても大きな聲だぞよ。平「聲が大きいかな。うた「大きなものを持ちながら、新ぞ買をとははは、。これは／＼さし合ひぢやの／＼。とやかくいはうよりは早く行かうではないか。今宵は名代ぢやによつて、早く行きたい。新ざう「ぬしや大ぶ氣がなほりなん

○もたせる　氣を持たせる。

○おかさん　おかみさん。

○さはつて　支障があつて。後文「更けての體」の條に「女郎さし合」とあるから、他の座敷へ出てゐるのである。

○左樣な事は船中にては申さぬ事にて候　謠曲「船辨慶」の文句。

○さし合ひ　新造の前で斯う云ふことは禁句といふ意。

○名代　前に「さはつて御出でなんす」とある、その爲の名代である。

○いつのまに峯の松風云々　『拾遺集』に「琴の音に峯の松風通ふらし何れのをより調べそめけむ」とあるを借用したるか。

○すががき　清搔。日暮、神燈の鈴を鳴らすを合圖に、遊女は店頭にて三味線を彈く。「春の日に糸遊かけて御手折るは誰々ぞ、白き馬にめしたる殿御よ」の歌などを唄ふ。其後普通の小唄などを唄ふ。後に至りては歌を唄はなかつた。新造が毎夜交代して之をつとめる。之をつとめ三味線といふ。

○ひく舟　ひくと云ふところから舟とかけ、滑り定めぬとつゞけ、洞、

したね。平「いや名代には深い意味のある事ぢや。早ういかう〳〵。女房「お吸物をお吸ひなんしてお出でなんし。御膳のしたくも致しておきんした。平「いや〳〵、中々飯所ではない。はやく參りたい。といふて草履を片ちんばにはき、かけだしさうにする拍子に、大きな鼻紙ぶくろおちかゝり、背の紋所も肩先へ廻り、挾み帶のとけたを結びながらにてかけ出る。新ざう袖を引きとめ、新ざう「いつでもいひ出さつしやるとせはしない。まあ待ちなんし。女房「早くおちやうちんを付けろ。申しおざうりが違ひはいたしませんか。平「草履どころではない。はやく行きたい。ととかくかけ出す。新ざう「まちなんし〳〵。といふてひつそひ行く。わかい者「此の提灯はわるい。とみせまで持つて來た提灯を、又おくへ持つてゆきさうにする。女房はら立顏にて、「早く行かッしやいな。

夜のけしき

※いつのまに峯の松風かよひ來て、いづれの緒よりしらべ初めけん※すがゝきの、軒をならべてひく※船よ。泊りさだめぬ河竹の、流れても身はすみだ川。むかふの人〳〵、※尾張屋に人、こんな〳〵、二帖の紙を持つて來さつしやいな。※いツけずるい。早く來さつしやいな。※綠どう〳〵といふは、友よぶ愛らしき※禿の聲。※わいら※狂うて許りゐずと、座敷へうせあがらないか。※すかないがきどもだぞよ引は、やり手なるらん。猶もすがゝきの音にうかれて、※五ツの町を廻り、※いづれあやめと見れば、昔を友とする顏に歌書を讀めば、後の月見に逢ひそめ見そめと聲高くよむ。※箒は立てゝ、まじなへば、※疊算に待ち侘び、來れる文を卷

流れ、隅田川と連ねたのである。
○尾張屋　京町二丁目にあり。
○いツけずるい　いけずるいを強めて云ふ。いけは甚しい義。甚しく狡猾な。
○綠　禿の名。
○禿　姉女郎に仕へてひたすら其命を奉ずる少女。其の姿色ありて名妓となるべき資格ある者は振袖新造となり遊女となる。太夫には二人若くは三人の禿、格子女郎にも二人を普通とする。
○わいら　汝等。
○狂うて許りゐず　ふざけてゐないで。
○すかないがき　いやな子供ども。遣手の罵る言葉。
○五ツの町　仲の町、京町、江戸町、角町、揚屋町、之を五町「ごのまち」といふ。
○いづれあやめ　いづれあやめと引きぞわづらふ。いづれも美しい。
○箒　箒を立てるのは長居の客をかへすまじなひ。
○疊算　簪を疊の上に投げ出して、其の落ちたところから疊の縁まで目を數へ、丁半に依りて待人の來るか否やを占ふ。

○そゞろなる　そゞろあるきしてたのし。
○けしからぬ　頓狂な。途方もない。
○すう　鮓の略言。
○江戸ぶしは行儀に行く　河東節はちやんと行儀よく語るといふこと。
○キの字屋　臺の物屋の名。小田原屋喜右衞門と云ふ。依りて略してキの字屋と呼ぶ。
○鵲の橋　「かさゝぎの渡せる橋におく霜のしろきを見れは夜ぞふけにける」の歌を下に「白きを」と言はんが爲に用ひた。
○山屋　豆腐屋。山屋豆腐と云ふ。
○四ツの拍子木　午後十時。夜の張見世は日暮から四つまでと定む。然し實際は九つ（午後十二時）までであつた。昔し吉原大門口の番人は九つになると四つの拍子木を打ち、それから廓内を一巡して歸つて九つを打つを例とした。

きかへせば、送る文を封じ、こなたより視ればかなたより覗く。白眼あれば笑ふあり。物や思ふと見れば、さゝやきて悦ぶ。緑の柳腰、紅の下緒、いろ／＼行きかふ人そゞろなる中に、けしからぬ聲の按摩はり。鮓賣が鯵のすう鯖のすうと、呼ぶもしやれとやいはん。義太夫ぶしは頬を押へてかたり、江戸ぶしは行儀に行く。二人三人友どち左右へ別れ、さぞや嘸々さぞ今頃はと謳ひ、卷舌にてこツちらへ廻りやれ／＼と睦まじきは、其の邊の人かと見ゆ。饂飩、蕎麥切、汁子餅、雜煮のあんばいよき、キの字屋の名も高く、彼の鵲の橋ならず、白きを見する名物は、山屋の軒の水にすむ、ゆかりの月やすがゞきを、まだひく四ツの拍子木も、それかあらぬか駒下駄の、音に色めくありさまは、實に夜の錦なりけり。

宵の程

大勢つきそひ、提灯三張にてはしごを上る。新ざう客の後に付き、　新ざう「はしごをば靜かにおあがりなんせ。　客よほど醉つてゐる。「心得ました。　新ざう「こは馬鹿らしうおざんす。人の座敷でおざんす。こツちらへお出でなんし。　客「又せまい所へ入るのか。　新ざう「なにせまい所ぢやおざんせん。せんどおまへの醉ひなんした所でおざんす。　客「あの奥のか。　新ざう「あい、おくのでおざんす。早くお出でなんし。　と廊下を行くと、方々の座敷より名をよび、さん／＼といふ、客うれしさうな顔見ゆる。　誰　舟宿、茶屋「これでまづお目出たう

御座ります。御座敷も定りました。客「全體こよひはおれひとりぢやによつて、此の座敷がよいではないか。舟茶「さやうで御座ります。此のうちに杯、てうし、硯ぶた、吸ひものや、菓子や煙草盃いづる。女郎やの若い者「日那一つ召しあがられませ。客「さあ〳〵座が〆つて面白くないではないか。なんと此のふたでまはさうではないか。みな〳〵「よう御座りませう。客「とかくおればかりがいつも吞かぶだ。おみよやお秀を呼びにやらんか。茶屋「只今參る筈で御ざります。客「今夜は後には大ぶ賑やかに成らうぞ。さツき道で呂州に逢うた。これも來ようというた、それで今夜は藤兵衞を呼ばん。こゝが俺が粹ぢや。呂州が來てゐるに、藤兵衞にうたはせるは、たがひに面白くないよつて呼ばん。茶屋「成る程萬事におのやうにお心がお付きなさる。舟宿「あい、左樣さ。茶屋「私はちよつと行つてさんじましよ。客「ままそんなら一杯のんで行きやれ。今の杯を返しもせいで。茶屋「また私はふせります。客「はてねたがよい。しかし其のやうな事で、酒は吞める物ではない。さあ〳〵わしも吞まうぞ。新ざう「もしえ。もうそれ切りで、かならず吞みなんすなえ。客「これはつれない事ぢや。新ざう「おいらんでいひなんすには、『必ず上げ申すな』といひなんしたによつて、留め申さにや成りんせん。客「はて困つた物ぢや。といふ内に、五六人ざわ〳〵と來て、すわりながら口々に、新ざう「御亭さん御出でなんし。兄さんどうなんした。客「これは〳〵美しいぞ。これはいかい事、客ひとりに婿八人ぢや。賑やかでどうもいへぬ。面白う成つた。さあ〳〵君たち、ちと吞み給へ。お

○座が〆つて　几帳面になつて。

○吞かぶ　吞株、吞み仲間。

○おみよやお秀　女藝者の名。

○呂州　淨瑠璃語りの名。

○藤兵衞　長唄うたひ。

○ふせります　醉つて寢てしまふ。

○つれない　薄情、無情。

○御亭さん　御亭主さんの義。多く茶屋船宿の主人に用ふ。

○兄さん　茶屋船宿の息子を云ふ。

○客ひとりに婿八人　娘一人に婿八人のもぢり。

○やりて　樓内の監督をする老女。祝儀を貪り、殘忍なる者として知らる。

○臺の物　料理を盛つたもの。

○おさへます　盃を押さへます。自分にさした盃を受けずに止めて、再び相手にのませるをいふ。

○さし合　外の座敷へ出てゐる。

○名だい廻し部屋　廻し部屋のこと。名代部屋とも云ふ。本部屋ではない。

どれへさし上げようやら。新ざう「わつちに差しなんせ。と引きうけうまさうにのむ所へ、※やりて來る。「いや呑みなんすの。といふて客にむかひて、御出であそばしましたか。すつきと御足が御遠く成りなんしたの。客「いや、これは〳〵、か、樣どうぢや〳〵。一つ呑み給へ〳〵。茶屋をよびひそゝいふ　茶屋「これ申し、御しうぎが御ざりましたぞえ。やりて「はははゝお有りがたう御座りんす。私はまあ行ツて參りましよ。新ざう「今のお杯あぎんしよ。○此所へ臺の物、菓子、重箱のふたをとれば、あたゝかさうなもの、方々より持ち來る。客「さあ〳〵、これほど御肴が出た。※おさへます〳〵。いや、おみよお秀、いやあ呂州丈、さあ、御出で〳〵。なに今の杯はかうおまはし〳〵。かぶろ「兄さん、其の三味線箱、あちらへ上げてくんなんし。あれ御亭さん、くるひなんすな。あれ呼びんす。おう〳〵。みな〳〵「旦那は大ぶお醉ひなさつた。休ませ申したらよからう。

更けての體

女郎さし合、名だい廻し部屋、平「あゝ今夜も又此のやうなせまい所へとう〳〵入れられた。いつその事ねようぞ。あゝ醉もさめる。あぢな心持に成つた。と夜著半ぶん程著てねころび、ね入りもせずにね入つたやうにしてゐる。新ざうけちな三味線にてぽちぽちとひく、客目のさめた顏。平「ううう、これ〳〵三味線をひかずと、こゝへ這入つてね給へ。新ざう「いいえ、かうして置いておくんなんし。又叱られんす。平「其のやうな大きな聲をするから惡い。こそ〳〵とちよつと。といふて手を取つて引つぱる。新ざう「をがみんすにえ引。とむきになつていふ。しかたなく手を放し、

○いびりなんす　いぢめなさる。

○七つ半　七つは午前四時。七つ半は五時。

暫く腹のたつ思入有り、すつと立つて帶をメなほし、かしこまり思案をして居る。平「これ、さつきの、どこへか持つていつてしまつた鼻がん袋と羽織を持つて來てくれろ。新ざう「どうなんすえ。平「歸る。新ざう「今ごろつひど歸りなんせんに、なぜ歸りなんす。平「いやもう七つ過ぎでもあろ。新ざう「いや、まだそら程ではおざんせん。今においらんでお出でなんす。主のいひなんすには、『必ず一寸でも、ぬしをいごかせ申すな』と、いひなんしたから、いごかせ申す事は成りいせん。じつとしてゐなんし。平「今に來るか。新ざう「たつた今お出でなんす。氣を短くせずと、もちいとゐなんし。平「でもあまり面白ないぞ。今來るか。とまたよこになる。

［鄰座敷］客は田舍座頭女郎は新ざう、たわいなくねてゐる、手を打つてもたれも來ず。ひとりごとに、あゝおもしろくない事だと、たばこ盆をいぢりゐて、七つを打つてよほど過ぐるに、さきからおこすがとかく埒があかんと、いひ〳〵枕をぼちぼちはじきながら、座頭「これ〳〵、おきなさい〳〵。大事がある〳〵。枕もとへ火をこぼした。おきなさい〳〵。新ざう「こはなんだえ。とねむたさうな聲。座頭「なんにもせ、ちよつとおきなさい。新ざう起きて、「よくいびりなんす。座頭「宵から大抵おこしたこつちやない。もう七つ半でもあろ。新ざう屏風をおしあけ、方々のやうすを見るふりあり。「もう夜が明たさうな。座頭「いやいや、まだ夜は明けん、七ツを打つて半時ほどだ。新ざう「おまへは見なんせんからでおざんす。とうにからりと明けんした。座頭「でもまだ烏がなかん。新ざう座頭のあたまくらはすまねをして、口のうちにて、「えゝすかん。といふ。座頭聞きつけて、「何がすかぬえ。新ざう「隣座敷の客人の事ツておざんす。いつそもしやれてどうもすきんせん。

○大たば　大束、新なごと安つぽく。
○さえない　はつきりしない。
○茶づらせろ　茶漬飯にせよ。
○その新が　その新と云ふ言葉が。

〔座敷〕通り者「これ新や、どこへいつてゐる。これ新／＼。新ざう「なんでおざんす。あんまり其のやうに、大たばに云つておくんなんすな。通り者「あのさつきの息子を、起して來てくれろ。新ざう「今來なんす。〔むすこねむたさうな顏で來る。〕通り者「色男どうだ、とんださえないぢやないか。〔むすこはづかしさうな顏で、〕「どうもねかさないで、何かねむう御座ります。通り者「そりやとんだ仕合だ。此のしんなんざ、宵にちよつきり頬をつん出したまゝ、やう／＼今に成つて來た。もう吉原も再びないわい／＼。むすこ「又あさつてお出でなさんせんかい。通り者「なぜ。むすこ「わたしやあさつて約束致しました。通り者「すとんだ事ツたの、恐ろしいわい／＼。こゝの内はとんだ悪い内だによ。〔○むすこが女郎は部屋持にて、よほど人がらよき女郎にて、ねむたさうにしんざうとならびゐて、〕部屋持としんざう「すかん。〔といふてにらめる。〕通り者「これ新や茶づらせろ。新ざう「何けづらせろとかえ。通り者「これさそんなにしやれずと、早く持つて來やな。のう色男。ちつくり茶づつていこぢやないか。むすこ「あいよう御座りましよ。部屋持「もうお歸りなんすのかえ。むすこ「あい。部屋持「もちつとゐなんせ。まだ早うおざんす。通り者「もし、私をばなぜとめなさんせん。部屋持「おまへをばぬしが留めなんしよから、私がとめ申さずとようおざんす。新ざう「なに、すかないぬしのやうなものを、とめ申すもんでおざんすか。早く出ていきなんせ、夜があけんす。通り者「此の新は、おれをば人間ぢやないと思ふさうな。新ざう「その新が、宵からすかなくてなりんせん。通り者「それはさうと、奥

○廊下座敷の女郎衆　廊下に面して並んだ座敷を持つてゐる女郎衆。

座敷の女郎衆に、傳言をしてくれたか。（新ざう）「あい、さう申しんしたなれば、ぬしや、『そんなお方は知らん』といひなんした。（通り者）「はて、にくするの、それでも廊下座敷の女郎衆は、よもやおれを忘れはせまい。（新ざう）「あいこれもさつき、さう申しんしたなれば、おまへの小用にいきなんす時、あとから見てゐなんして、さういひなんした。『どうも思ひ出されない』と、いひなんした。（通り者）「さすれば爺に成つたか。何事もさえぬ〳〵。只々歸りましよ〳〵。（新ざう）「はてさてもちいとお出でなんし。おまへが歸りなんすと、わつちや死にんす。（といひながら廊下へ送り出る。むすこ。部屋
持あとへ殘り、ぼち〳〵はなしをしてゐる。）（通り者）「色男きたないぞえ〳〵。（新ざう）「人の事にかまはずと、早く階子を下りなんし〳〵。

しのゝめのころ

〔爺〕平「あゝやかましい、宵からの口きゝが、やう〳〵出て行くさうな。さつきからもくぐりのあく音で、大ぶのぼせた。（名代の新ざう入れかはり、馴染の女郎、）「おしつけ奧座敷に障りんすと、此のやかましいがよくなりんす。夫れまでが大抵の苦勞ぢやおざんせん。（平）「はて扨宵からあらほど、俺がゆつて聞かせる通り、其の樣に氣がよわくつて成るものか、新ざうを出すはうは、どう成りともおれがしてやらう。今の座敷の方の事ばかりぢや。これもおれが樣子しだいで、どうともしてやろ。（女郎）「さりとはお嬉しうおざんす。（といふていろ〳〵おもしろき事有り。）お

前のやうな客人が、もう一人あると、わたしや大抵えいこつちやおざんせん。平「はて、氣の多いやつの。（とつおりてあをな身振有り。）女郎「ほんにわつちや此のごろは、夜も晝もねられんせんが、今宵は宵の客人が歸つてから、お前の所へ來んしてから、心がとけてよく寢んした。それでも宵におまへの機嫌のわるうおざんした時には、いつそ怖うおざんした。今度からどうぞ腹を立ててくんなんすなえ。平「もう腹は立てん／＼。お許し／＼。時にもうおれは歸らう／＼。女郎「まあ、もちつとゐなんし。平「いや、もう夜は明けよう。そこをちよつと明けて見てくれな。（女郎れんじを明ける。夜は明けはなれたり。きもをつぶし、）南無三寶さつきから烏がないたらうが、ちつとも氣がつかなんだ。（高い聲にて、）若い者／＼。早くはきものを下へやつてくれ。扨も／＼あの茶屋めが、七ツにむかひをよこせというて置いたものを、今にむかひをよこさいで。（女郎やの若い者「さきほどおむかひに參りました。平「扨々これはと帶しめるうちに、（又もからす一どきにかあ／＼。）女郎「必ず後に、晝まつてゐいんすにえ。平「いやどうもかへりがおそいから、がつてんがいかん。さりながらどうぞこよう。女郎「そんならわつちや、中の町までは參りんすまい。平「そこ所ではない。あゝ、おそく成つた／＼。女郎「必ずお出でなんせえ。（またからすかあ／＼。）心しらずや明の鐘。

○れんじ　窓に設けた格子。古いものは細い材を横に少し透間ある様にならべたものだが、新しいものは大抵竪の格子。

○がつてんがいかん　承知していゝかどうか分らない。

辰巳之園（たつみのその）

夢中散人寐言先生

叙

京都辰巳鹿社住、江都辰巳有二遊樂一、夫者宇治山、是者深川、富賀岡之邊、遊情婦之郷也、勤悉々書集、吉原ニ北國之名有レ之、學レ之辰巳之園題、昔肆何某任レ望、北國之美君嘲不レ顧、如二井之內蛙一、吉原雀閉レ嘴、深川参人述レ之。

明和七庚寅林鐘撰レ之

檐閑街　紫　樓　[印]

◇京都の辰巳は鹿ぞ住む、江都の辰巳は遊樂あり。夫は宇治山、是は深川、富賀岡のほとり、遊情婦の郷たり。勤めて悉く書き集む。吉原に北國の名あれば、之を學んで辰巳之園と題す。昔肆何某の望に任せ、北國の美君の嘲ちも顧みず、井の内の蛙の如し、吉原雀も嘴を閉ぢん。深川参人之を述ぶ。

明和七庚寅林鐘之を撰む

檐閑街　紫　樓　[印]

自序

富賀岡八幡宮は、鎌倉鶴ケ岡を移し奉り、貴賤老若の信心日々に彌まし、四季折々の賑か、二軒茶屋其外、楊枝みせ葭笛茶屋とうの美婦は、紅粉を粧ひ、品形の美しきを見れば、樂みは外にあらじとおぼゆる。さるにより此の土地に、樂遊民は、北國の面白きを知らず。美國の吉原にくらぶれば、九牛が一毛とやいはむ。去ながら餅好酒の酔事をそねみ、酒好は餅の風味をにくむ。吉原の位あつて靜かなる遊びを、知らずして、此所の素人らしき娘風を悦び、又此の土地のわつさりとしたる樂を、吉原好は知らずと、深川好北國をにくむ。吉原客は深川は下卑なりと笑ふ。いかであらそふ時は水掛論とやいはむ。吉原に晝三あれば仲丁土橋あり。打附あればやぐら下佃島あり。一分二人六寸には、新地入船石場三間堂を譬へて爰にたのしむ。姉女郎あれば年廻あり、禿あれば小女子と云ふあり。花車あれば送迎男あり、牽頭持は藝者といふ。淺草觀音にくらぶれば、八幡大菩薩を信ずる。聖天は則永代寺の寺中に有り。九郎助稲荷に仲丁のいなりをたとへ、松田いなりは黒江町のいなりをいはん。又朝日如來には、永代寺の本尊をなぞらへん。大うんじ前あれば永代寺門前あり。大門あれば大鳥居あり。土手あれば永代橋あり。衣紋坂には櫓下の火の見をたとへん。此の火の見を見て衣紋を作る。櫻の代りに山開といふ有り。燈籠の賑か

○富賀岡八幡宮　富岡八幡宮にて、東京市深川區にあり、又深川八幡宮とも稱し、帝都に於ける名社の一。府社。譽田別天皇を主神とし、天照大神、天兒屋根命ほか四神を配祀する。深川全町は勿論、日本橋、京橋の一部を氏子區域とし、一般の信仰を蒐めた。

○二軒茶屋　富岡八幡の境内にあつた松本と伊勢屋の二軒の茶屋。天明頃からあつたといふ。

○楊枝みせ・葭笛茶屋　共に簡單な出見世にて、楊枝や葭笛なりを賣る傍ら賣色をなしたものである。

○北國　吉原。

○九牛が一毛　極多數の中の一部分をいひ、物の數に入らぬ程の量。

○餅好酒の酔事をそねみ　餅を好む者と酒呑とが互に相手の嗜好を嫌ふ如く、酒を好む者も餅の風味を快しとしない。吉原好と深川好の心持に例へた。

○わつさり　淡白　あつさりに同じ。

○晝三　吉原では太夫・格子・散茶・梅茶・局見世女郎等の品目があつたが、梅茶が漸次に増し、太夫・格子が衰へて、散茶が之に代り、其うちに呼出しなるものが起り、太夫・格子の地位に代り、散茶のうちに晝三と附廻しの二

あれば、※八幡の祭りあり。船宿を呼は、むかふの人をよぶにひとしく、※引け四ツの静あれば、※四ツさきなど卜云事有り。吉原に、意氣地あれば、此土地に逢引あり。※丁に振と云事あれば、爰に照すと云事有。※照と降との事にや。姉女郎御亭樣ンの替名あれば、茶屋の女房を一流に伯母樣ンと呼。其外お針隱居さんなどの通言あり。爰に略して末にこと〴〵くあらはす。誠に落れば同じ谷川の水のごとく、若衆好も吉原好も深川好も、遊びにかはる事はあらじ。諺に云、※立臼も二階に登るの、道理なり。さりながら此所の疵には、晴たる

等が生じ、晝三の揚代は一晝夜三分、附廻しは二分、之に對して呼出しの[illegible]は一兩二分、[illegible]は一兩であつた。仲の町を道中するものは、呼出しと晝三とで、附廻しは仲の町に出なかつた。然し他の女郎がする張見世も附廻しはしなかつた。

○仲丁・土橋　富岡八幡の門前を南に行けば右(西)へ折れて永代寺門前仲町あり、左(東)に土橋あり。仲町・土橋共に高等の遊女の居る所。吉原で云へば晝三女郎の居る五丁町に匹敵する。

○打附　切見世のこと。

○やぐら下・佃島　櫓下は永代寺門前通山本町の火の見櫓の邊り。佃島は佃町にて永代寺門前町の南に離れて蓬萊橋を渡つた所。

○一分二人六寸　一晝夜金一分(銀十五匁)を二分して二朱づつとした揚代の女郎。

○新地　深川の西南隅にて大川に沿ふ。

○入船　深川の洲崎に近いところ。門前町・三十三間堂の東、木場の西一帶の地。

○石場　新石場、古石場あり、新地の東。

○三間堂　深川八幡の東方なる三十三間堂。俗に堂前といふ。

○花車　既出。(四七八頁參照)

○送迎男　客を送迎する男。

○聖天　歡喜天ともいひ大聖歡喜大自在天神の略。此の天の呪を誦誦する時は、病除退散、夫婦和合、壽命長遠を得るといふ。吉原にては馬道から山谷堀に出て日本堤にかゝらうとする東、卽ち待乳山の本龍院がそれである。

○永代寺　富岡八幡宮の別當。大榮山金剛神院永代寺。眞言宗。

○九郎助稻荷　吉原京町二丁目の南隅おはぐろどぶに添ふ。

○黑江町　仲町より西へ大川の方向に向ひ火の見櫓を右に見て黑江町に至る。

○朝日如來　下谷大通にある朝日山永昌寺の本尊阿彌陀如來。

○大うんじ前　大音寺前。下谷龍泉寺より新吉原へ行く途中。

○大門　吉原入口の大門。

○大鳥居　黑江町より東へ表櫓に向つて行く途中に一の鳥居あり。

○衣紋坂　既出。(四六九頁參照)

○山開　毎年三月二十一日より同二十八日まで永代寺の林泉を開き諸人の見物を許す。之を山開と云ふ。因に櫻は吉原仲の町の夜櫻。

○燈籠　六月三十日より七月中は吉原仲の町の茶屋に盆燈籠を點ず。

○八幡の祭り　八月十五日。

○引け四ツ　四つは今の十時。午後十時になると、張見世を引き上げた。

○四ツさき　深川では、午後十時から翌朝の六つ、卽ち六時迄を一區限りとした。

○丁　吉原をいふ。

○照と降　客を振るといふことを降るといひ、また逆に照ると言つたのである。

○立臼も二階に登る　立臼は地上に据ゑた大臼であるが、それさへ二階へ上るといふのだから、誰も彼も登樓するの意にとつたのではあるまいか。

遊里あらざれば、北國より禁ずるときは、勤皙休と云、百日餘りの大紋日あり。されど丁より禁ずるとも、深川客、吉原へはゆかず。井に水なきときは、川水のたすけ有。既に慈童は菊の露に長壽をたもちしと、聞傳しなれど、此の草紙は深川のくはしきを書集たれば、吉原の目をしのぶ已而。穴賢々々。

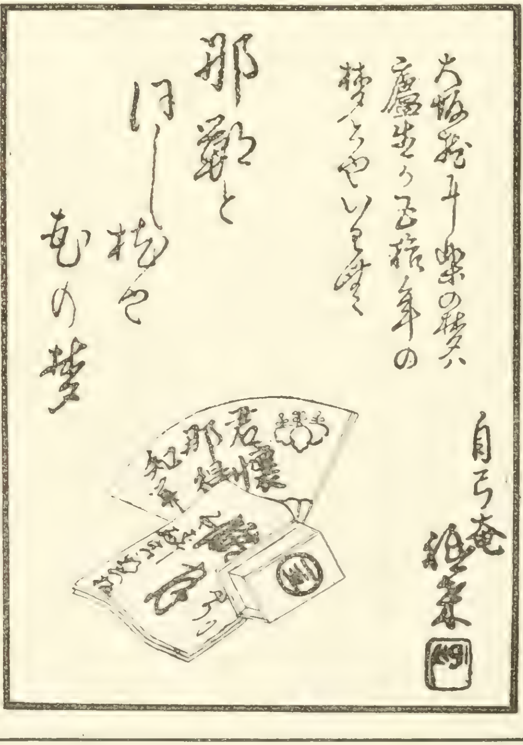
○北國より禁するときは　吉原から岡場所の私娼を禁ずる請願をして岡場所の禁ぜらるゝこと。

○勤皙休　咎を受くること。

○大紋日　紋日は物日にて、祝の日を言ふが、こゝでは單に休日といふ意にとつたのであらう。

○慈童　菊慈童、又は慈童とも云ふ。謡曲。ワキ魏文帝臣下、ワキツレ從者二人、シテ慈童。周の穆王に仕へた慈童といふ者、人の讒言に依り流されたが、君より形見の二句の偈を菊の葉に書附けて毎日誦すれば七百年の長壽を保ち、その葉を流した谷の水は不老長壽の靈水となる由、魏の文帝に奏聞あり、遂に君に七百歳の壽を捧げるといふ筋。また歌舞伎の所作事にも脚色されてゐる。

大坂枕に樂の夢は盧生
が五拾年の夢とやいはむ
邯鄲と同じ枕や花の夢
自弓庵
祇桑［印］



春風は花のあたりを除て吹、心づからやうつろふと見む。上野飛鳥の花盛り、日暮里の風景、所々賑なる折から、如月半の頃、茅場丁、藥師如來の參詣、おびたゞしき群集の中に、藝者八丈の羽織に、黑縞の小袖、八丈代り縞の下着、八反掛の立横縞の帶、鼻紙袋小菊三ツ折、丸角やが骨折の利久形、髮は本田にあらず、茶洗坊にあらず出ず入らずの男女好と結、雪駄は鼠綾の下り皮、細身の脇指をさして、伊勢やが床机に腰を懸る。〔伊勢や女房〕志厚さん、きついお見限りでござりやす。〔志厚〕此の間は石燕が花の會に、屋敷に鞠がありやして散々にわか氣づめでぶら〱心、これではいかんとおや玉隱れの、ちよんの間と出かけやした。〔女房〕それはきつい御心勞。今日もおさへかえ。〔志厚〕久しぶりだに、鳥渡參らうかと思ひやす。〔女房〕おはやうお歸りなさりやせ。咄しの內に、髮を大本田に結、飛八丈の、小袖の少しよごれたるに、黑繻子の袖口に、幅せまの帶に、小短大小を落指しにさして、山岡頭巾を横丁にかむり、日和下駄をはき、大キなる顔にて來る。〔志厚〕かみさん見ねエ、凄い男だ。〔女房〕まだぬしを、知りなんせんか。如雷様とか云て、てエ〱やかましのぢや、ござりやせん。裏門の方より御國衆と見えて、花色小袖に淺黃裏を付、洗ひはげたる黃むくの下著、黑紗綾の帶に、郡內縞の袷羽織に、海黃の裏をつけ、袖頭巾をひら〱とかむり、尻をちん〱ばしよりにして、き木綿の足袋にわら草履をはき、大小を閂指にさして、もえ黃羅紗の柄袋を掛けて、楊枝屋の娘の美しきに氣をとられ、傘の澤山なるにきようをさま

○春風は云々　『古今集』卷二、藤原好風の歌。
○如月　二月。
○茅場丁、藥師如來　茅場町の山王御旅所。
○藝者　前文に「藝者持に藝者といふ」とあり。
○八丈　八丈島なる織物の略稱。絹の上等なるもので、八丈島より織り出す。黃八丈、黑八丈の二種あり。
○八反掛　八反織に同じ。八丈に似て地の厚い、縱横の縞織の絹布。多くは黑褐色である。
○小菊　粗惡な楮皮で製する下等な紙の名。竪七寸許、横四寸五分許、鼻紙に用ひられる。美濃、土佐等を主産地とす。
○丸角や　袋物屋の名稱。
○利久形　利休好みの形。
○本田　『當世風俗通』に、兄様本田、めくり本田、藏前本田、五分下げ本田、丸曲本田、疫病本田、金魚本田の七通りあることを記してゐる。本田髷の古風は前七分後三分を定めとする。
○茶洗坊　茶筅髪のこと。『鹽尻』に云ふ、「髪末を茶筅の如くにし、或は人髪して揉縮め、花房のやうにするなど茶筅髪なり」。

し、猪牙船の早きにおどろき、金魚のかずに呆れ、植木の青々としたるに目をさまし、※楊弓のカッチリちりゝんに胸をびくつかせ、※からくりの太鼓に氣をぬかれて、大きなる鼻紙袋の落ちさうなも知らず、うか／＼と來掛り、如雷が顏を見ると、きよろ／＼顏にて、袖頭巾を取て、貴公にはいづ方へお越しなさる。如雷 こりやアめづらしい、ぬしやア獨りか。新九左衛門 イヤ下拙もはつの出府ゆゑ、方角もぞんせず、藥師とやらが、今日は賑かぢやと、福才老のすすめにまかせ、賑な町を、通りぬけて、漸々尋て參りました。如雷 そんな事なら連立つて來ようものを。どうだ、此の賑な事は※おそろか。新九左衛門 いやはや、とつぴやうしもねエ、こんだアむし。如雷 主はなんと深川へいくきはなしか。新九左衛門 どこへなりと行ますべい。如雷 そんならもつと、※身重をして來ようものを。イヽ知つたやつらに逢たら、※ず

○出ず入らずの男女好 餘り人目につくやうな派手でない洒落た風。

○下り皮 くだり皮にて上方より下つた皮の意であらう。『我衣』『地雪踏』の條に「上方より下る革は皆上品なり」とある。

○鞠 蹴鞠。

○わか氣づめで 若氣にまかせて根をつめて。

○おや玉隠れの、ちよんの間 親玉――親分にかくれてのちよつとの間の仕事。

○飛八丈 又鳶八丈ともかく。武藏、八王子附近より産する太織紬の一種。鳶色と黄色との縞で、縱横に黄八丈縞に擬へて織つたもの。

○山岡頭巾 多く八丈絹にて製する。色は黒若くは納戸茶にて袷である。又黒天鵞絨單の表、毛ある方を内に裏を表に出して用ふるもある。(四六一頁參照)

○大キなる顏 横柄な様子。

○花色 はなだいろと同じく、藍色の薄いもの。淺葱色ともいふ。

○淺黄裏 國侍はきつさと云ひ合はしたやうに淺黄裏をつける。されば國侍を嘲るには淺黄裏との渾名をつける。川柳にも多い。

○黒紗綾 紗綾はさあや、さあいともいひ光澤ある絹織物の名。稲妻、菱垣などの文を浮織にし、地合は綸子よりも薄い。もと舶來のものだつたが、西陣にて模製することゝなつた。

○郡内縞 かいきに似て地やゝ薄く縞織である。

○袖頭巾 多く女の用ふるもの。江戸にては男子は之を用ひない。御高祖頭巾の一種。

○ぢん／＼ばしより 爺端折の音便。衣の脊縫の、裾から七八寸上の處を摘み揚げて、帶の結目の下へ挿み端折ること。

○閂指 刀を帶に差す時、閂の如く前後高低なく横に一文字に差すこと。おとしざしなどに對していふ。

○楊弓 楊弓場(矢場)で遊戯として行ふもので、長さ二尺八寸程の小弓を用ひる。一寸八分の的に矢がカッチリと音して當ると、ちりちりゝんと音のする仕掛になつてゐる。

○からくり のぞきからくり。五六の眼鏡を竝べて、一人々々そこから覗くと、仕掛けによりて畫が變つて行く。箇面白く囃し立て、說明する。鈴木主水、八百屋お七、佐倉宗五郎の類である。

○おそろか 恐ろしいかの略。

○身重 みえ。外目の飾。みつき。みば。

○ずい ひた押しに。

い隠れのずいにげにしよう。ちつと用もあれど、用事流しのちよんの間遊びと出よう。船に乗うか。日本橋へは遠し、江戸橋の田村やにしようか。但し西村のおさよが所で乗うか。いや〳〵、此間大和やの息子と乗た渡場の中村屋にしよう。新さんこつちへきなこ餅〳〵。〔新五〕そつちへ行のかえ。〔如雷〕何の事た。船か〳〵、と他人がましくするな。（是より如雷新五左衛門を連て、鎧の渡しの方へ行、中村やにて、）〔せんどう次郎〕船か〳〵。（次郎、つひぞ來ぬ客なれ〳〵しくするを、上手ものなればなじみ顔に、）これはお見違ひまをしました。おつやどん、お茶を上ねエ。〔せんどう長吉〕そんならおれはいつて來よう。イヤ稲荷堀は何番が出たな。〔次郎〕七百二十一とでた。〔長吉〕なむさん、藥師のもがきを喰ふ。此の頃は七百六百が、いいはえ。〔次郎〕今日はどこへ行。〔長吉〕九十九里の旅人のしまひが有。〔次郎〕早くしまうたらめくりをうたう。〔長吉〕後に〳〵。〔如雷〕あいつはどこの船印だや。〔次郎〕横丁の西村にをりやす。〔如雷〕西村の船頭か。あいつも見わすれたさうな。きつく年寄になつたさうな。（女つや茶を持てくる。）〔如雷〕イヤ美しくなつた。久しく見ぬが、とんだ茶がまになりをつた。どうだ、地色でもできたか。（知らぬ客ゆゑ氣味をわるがり、勝手へ行ば、引替女房出る。）〔女房〕ようお出遊しました。先御上り遊しませ。次郎どん船をはやく拵さつしやい。（如雷たばこ呑附ける。女房火入へ手をあて、）お火がござりますかな。〔如雷〕ありやす〳〵。〔次郎〕かみさん仲丁の亀山への文がありやせう。〔女房〕今見てやらう。船を早く拵へな。（船頭次郎火縄箱など手にもつて、くはへ煙管にて船ばの方へ行く。）〔女房〕是れ次郎どん、くはへぎせるはあぶないによ。〔次郎〕アイ。（女房この間に勝手へ行つて狀指を尋ねる。如雷手拭を出して顔をふく。）〔如雷〕新五左、かならず、

○用事流し　用事はやめにして。

○ちよんの間　一寸の間。

○きなこ餅　黄な粉の意か。

○鎧の渡し　茅場町から小網町への舟渡。俗傳に云ふ「源義家奥州下向の時此所より下總に渡らんとするに風波烈しく、舟覆沒せんとしたので、鎧一領を水中に投じ、風波の鎮まるを祈つて下總に着岸したので、鎧の渡しと云ふ。往古は大江であつた」と。又一説に平將門此處に兜鎧を埋め、上に塚に築いた。海賊橋の東詰、牧野侯の邸中にありと。又此兜塚は義家が日本武尊の古例に倣ひて塚に埋めたとも云ふ。要するに俗間の傳説である。

○稲荷堀　『江戸名所圖會』卷之一「稲荷堀…の傍に…新道橋より淺草橋へ續く。其間長凡そ十町ばかりあり。…堤の外は神田川なり。又此堤の下に、稲森稲荷と稱する靈祠あり。故に此地を稲荷河岸と呼べり」。

○もがきを喰ふ　未詳。

○七百六百　舟の番の番數かと思はれるが未詳。

○九十九里の旅人のしまひ　最後に九十九里濱から來た旅人を乘せる事になつてゐる船が一つあるといふ意か。

※つきなことを云ふまいぞ。〔新五左衛門〕何サ、おれらもゐなかぢやお女郎買だ。今度も※輕井澤であそんだら、峠までおくつてなむし、お歸りにやア、かならずよらしやりませ。と、くれ〴〵云て大もてであつただ。〔如雷〕何の事た、人が聞く、そんなことは御免だ〱。〔次郎〕船が出來やした。〔女房〕（かつてより）ふねが出來ました。お出遊しますか。〔如雷〕サア新さんめエりやせう。イヤかみさん、女に西宮が所の、※長唄を買にやつてくんねエ。〔女房〕ハイ、つや、新六さんの所へいつて、※めりやすを買うてきや。〔如雷〕（ふところより錢をだし）早く買つて來くれ木川岸〱。（つやはめり買に行。女房先に立て、如雷、新五左衛門船へ行。）〔次郎〕さアめしませ。〔如雷〕（船へ乘る）新さん乘りやすぞ。〔新五左衛門〕（猪牙は初て乘ばやうやうとりつき〱）アヽこりやア※不細工なもんだ。〔如雷〕ころびでもせまいぞ。※獨りでころんでぬれるやつと、出まいぞ。〔次郎〕うそはねエ。もしかみさん、船繩をといておくんなんせ。〔女〕※朧月と※五色丹前を買て參りやした。〔女房〕先づちつと待ちな。めりやすがくる。（下女つやめりやすを買、いそがしさうかけて來る。）〔如雷〕す、※きまり。※するめ。重さんどうでも※はだしぢや〱。〔女房〕（船のへさきを持て押出ス。）お歸りにおより遊せ。〔如雷〕アイいつてめエりやせう。〔女房〕イヤ次郎どん、白木やの清助さんのふみを。〔次郎〕それ〱、そつからなげておくんなんし。〔女房〕そんならなげるによ。そりや。〔次郎〕おつと來やした。（ふみをふところへ入れ、船はよほど出る。）〔次郎〕とりかぢ〱、やんはりと〱。エヽべらぼう、跡先、見てこげ。〔如雷〕新ばう、此の新川筋の藏どもを見やれ、是が皆酒だによ。〔新五左衛門〕大けなものぢや。〔如雷〕是より又、油堀の孫兵衛が貸藏が見せた

○めくり　めくり札の略。賭博の花札。（四九三頁に詳説した）
○船印　船頭と云ふこと。
○茶がま　此篇の終に作者の註がある。
○地色　色男。
○火繩箱　船中にて煙草を呑む爲に火繩に火を點じて箱へ納めたもの。
○つきな　へんな。
○輕井澤　信州。輕井澤の野趣情緒を書いたものに洒落本「輕井茶話道中粋語録」がある。
○長唄　長唄本。
○めりやす　小唄より長く、長唄より短い端唄。（既出一二二頁）
○獨りでころんで　卷末の作者の註參照。なほ「ぬれる」は情事を云ふ。
○朧月　「めりやす琴の段、朧月」に。明和四年正月、中村座初演　鯨通與三兵衛作、富士田吉治、杵屋六三郎の作曲になる。
○五色丹前　正しくは「冬牡丹五色丹前」で、明和五年十一月市村座初演、富士田吉治、杵屋作十郎の作曲。
○きまり　旨い。
○するゐ　粋。
○はだし　重さんとても及ばない。

い。〔新五左衛門〕孫兵衛とは。〔如雷〕國でも知つて居る親和がことさ。※三ツ井孫兵衛と云つては、手跡はよし、金は澤山あり。孫兵衛さんの事だ。船は永代橋の近所へ行く。〔次郎〕もし旦那お頭巾。〔如雷〕頭巾取て、新さん頭巾をとりねえ。〔新五左衛門〕頭巾をなぜ取。〔如雷〕爰は船改の番所だ。見ねえ、暮方からは是に火を燈す。此橋が永代橋と云のだ。橋下から見えるが仙臺川岸、こちらの火の見の下を這入と八幡の裏、二軒茶屋、櫓下などへ行て。〔新五左衛門〕櫓下とやらは、國元での咄には、燒たと聞いたが。〔如雷〕燒たとて、出來ねヱで、なるものか。仲丁も燒たが、立派に建た。櫓下などは前かたは※隱し窗で、あつたが、總格子になつて、※すとんだもんだ。土橋斗り燒けなんだが、又燒たから※燒けぼこりとやらで、又、立派に出來よう。〔新五左衛門〕此の※ちよぴりとした所はなんぢやえ。〔如雷〕是は※八右衞門島と云。此向ふが※佃島。〔新五左衛門〕こゝにも有か。〔如雷〕イヤ爰は獵師斗居る。女郎の有は、※八幡の向のさ。※新地も近し※石場もちかけれど、新地などは下卑ぢやて。のう船しう。〔次郎〕イヤ其やうにきたなくもござりやせん。しんちの播磨やなどは、よくいたしますよ。子供は揃うて居るなり、女共も能いたします。ちとお出なんし。〔如雷〕こいつは播磨やに色が有な。※まうせんでも、かぶるな。〔次郎〕※つがもねヱ。そんな事するのぢやござりやせん。旦那どこへお出でなんす。〔如雷〕さればどこがよからう。仲丁にしようか。土橋にしようか。河邊の娘が、※半四郎をまねるも久しいもんだ。山本にしようか。山本は腹がちひさいから、尾花屋

〇三井親和　書家。親和染などと云ふ染物もある。中々の宣傳家らしい。此も一種の宣傳である。
〇隱し窗　窗かな格子などにて外からは内が見えず、内からは外が見えるやうに造つた窗。
〇すとんだもの　大したもの。
〇燒けぼこり　燒けぶとり。
〇ちよぴりとした所　ちよつぴりした、小さいところ。
〇八右衞門島　今の石川島。舊名森島、一名鎧島。將軍家光の時、石川氏の祖先、此島を拜領す。寛政四年石川氏永田町へ屋敷替となりてより、炭置場人足寄場となる。
〇佃島　『江戸名所圖會』に云ふ、「鐵砲洲に傍ひたる孤島をいふ。（舟松町より舟渡ありてこゝに至る）文龜年間江戸の御圖に向島とあり、天正年間東照大神宮遠州濱松の御城にまし〳〵皇都へ上り給ふ頃、攝津國多田の御廟及住吉大神に詣で給ふとき、神崎川御船なかりしに、佃村の漁父獵船を漕ぎ出して渡し奉りしかば、伏見御城にまします時も、御膳の魚を奉るべき旨台命あり、又西國へ御使などの折からは、必ず漁船を以て仕へ奉るべき旨命ありしかば、大坂兩度の御陣にも軍事の密

使我は御膳の魚儀等の事日々怠なく仕へ奉りしかは其後漁人三十四人江戸へ召され、慶長年間淺草川御遊猟の時網を引せ給ひ、同十八年八月十日海川漁獵すべき旨免許なし給へり。然るに寛永年間鐵砲洲の東の干潟百間四方の地を賜はり、正保元年二月漁家を立並べて本國佃村の名を採りて即ち佃島と名づく。又白魚を取りて奉るべき旨台命に依りて、毎年十一月より三月迄怠らず奉る。其間は他の獵を堅く禁め給へり。猶其後深川八幡宮の前にて空地三千坪を賜はりて佃町と名づけられ、御菜魚をも奉れることゝなれり」。

○八幡の向・新地・石場　八幡の向は仲町、土橋、表櫓、裏櫓をいふ。仲町は晝夜四つ切、一切り十二匁、土橋之に同じく、表櫓、裏櫓は晝夜四つ切、一切り七匁五分。石場、新地は晝夜四つ切、引はりとある。

○まうせんでもかぶる　篇末の註釋に芝居から出た詞とあり。金錢が消え失せてしまふ。

○つがもねエ　途方もない。

○半四郎　四世岩井半四郎。四世市川團十郎の門下で、後に岩井を襲ぎ、女形として頗る成功した。岩井家が女形專門となつたのは此の人の時からである。寛政十二年歿。五十六歲。

にしよう。〔次郎〕いつそ龜山へ御出なんせ。〔如雷〕イヽヤ小花屋々々。〔次郎〕稻葉や、おなじみなら、先へ御出でなんし。〔如雷〕さ新さんあがんねエ。〔新五左衞門〕早いもんだ。夢のやうにきた。〔如雷〕そんなら先へ行ぞ。新さんこつちへきねえ。（如雷と新五左衞門新道より小花やへ行く。又猪牙來り川岸へ付く。）〔せんごう忠五〕龜山々々。エヽふけえきな。龜山々々。（やう〳〵龜山にて聞付て女來る。）〔女〕忠五どん御苦勞。蝶郷さん、お出なんした。〔蝶郷〕此の間は御世話。〔女〕お影でおもしろう、芝居を、見やした。〔蝶郷〕これはお禮で※伊丹、諸白。（蝶郷は女と連立て龜山へ行。忠五船をしまひて、）〔忠五〕是れ〳〵次郎、そしらぬ顏をするな。〔次郎〕どうだ忠五久しいの。いい事でもあるか。〔忠五〕とんといけねエ。ゆうべも屋形に※いいのが有から※いたりや、※手ぶりあみ笠になつた。〔次郎〕おいらも※裾つぎの丁子やで、※めくりを打つて六七百まけて、それから※おもての春岡で※こまがあるから廻したら、半分斗※まけはかへつた。〔忠五〕そりやアまづよかつた。なんとそつちの吉はどこにゐるの。〔次郎〕此間聞ば、※のぶと船を、乘ると聞たが、つひぞ見掛ねエ。〔忠五〕あいつもいけねエ、唐

○伊丹、諸白　伊丹は酒の釀造地。諸白は酒。痛み入るの洒落。

○いいのが有から　いゝ賭場。

○いたりや　行つたら。

○手ぶりあみ笠　元も子も無くして無一文になつた。

○裾つぎ　深川七場所の一つ。

○めくり　めくり札の略。又花骨牌ともいふ。植物（花）の繪を十二ケ月に因んで十二種選び、更に各種とも天象、動物、短冊等を配して四枚づつ作り、計四十八枚の札にて勝負をなす戯。これに金錢を賭ければ一種の博奕となる。

○おもて　表櫓。

○こまがあるから　獨樂を廻はす賭博。

○まけはかへつた　前の敗を取返した。

○のぶと船　未詳。

○雨落のきしやご　雨水の落るところにある[illegible]このやうに[illegible]れる。
○きついものだね　ひどいね。
○勝手用人　會計のことを掌る職の者。勘定方。
○ぱちさせ　ぱち／＼させ。
○合はせびん　既出。(四七一頁)
○宗十郎頭巾　[illegible]宗十郎が[illegible]之を用ひ、依りて名とす。[illegible]頭巾の[illegible]である。

○上田縞　上田紬とも稱し、信濃國小縣郡上田に產する縞織の紬である。
○棧留　唐棧。もと印度のセントトーマス島から舶載したので、その地名を訛りてサントメと云ふ。
○小伯縞　琥珀織のこと。又唐ちやうとも云ひ、もとは舶來であつたが、天和以降西陣から織出した。[illegible]り、など[illegible]に似た織目である。羽織地、帶地に用ふ。
○海黃縞　縞がいきともいひかいきの[illegible]に縞を織り出したもの。かいき

茄子だよ。[次郎]たうなすだか、茶がまだかわからねエやらうだよ。客が、まつてゐるよう。後に來やれ。[忠五]どのやうな客だや。[次郎]なんだか雨落のきしやご見たやうに、しやれのめすよ。[忠五]こんな奴もくがい三年と附合つて見たがいい。[次郎]めちに／＼。(次郎は新道より小花やへ行く。)忠五は船を[illegible]しまふ。[忠五]どうだ次郎どん、きついものだねエ。前のお松どんが居ねエけりや、龜山へ斗りいきなさるな。[次郎]こりやアむいわく。客衆さへ來ようと云ば、いつでも參りやす。[忠五]うそヲつきねエ。(暫しの内に、奥より女來り、)[illegible]お中さん、志厚さんの、鳥渡きねえと。[お中]横座敷でか。(お中は座敷へ行く、次郎も茄子の火にまたがつてあたる。料理番も[illegible]いそがしさうに、)[料理番]八助どん、水を賴やすぞ。[八助]アイ水汲もてエ／＼ではねエ。[料理番]おまつどん硯蓋持て行ねエ。奥へまだ吸物がでるによ。(客四五人來る。)[illegible]お中さん、お松どん、お客があるに。[女]これは五郎兵衞さん、ようお出なんした。[illegible]今日は御屋敷から、御出遊ばした。隨分麁末の、ないやうに。[女]アイ／＼、さあ、こつちへ御出なんし。[illegible]旦那お上り遊せ。(客はのこらず奥座敷へ行く。)客の風體は、御大名の勝手用人とも、云かつかうにて、お納戸茶、羽二重の小袖に、淺葱、むくの下著、茶色の帶、立派なる大小にて、京扇を、ぱちさせ、髮を合はせびんにて、元結を、四角に卷、宗十郎頭巾を持ち來る。跡につゞいて二人來る。是れは勝手用人の、下役手代といふなりの男ぶりにて、郡内縞の綿入羽織に、小紋の秩父絹の小袖、獨は、太織の羽織に、上田縞の小袖、はるか跡より、棧留の布子に、小伯縞の帶、手に海黃縞の、風呂敷を

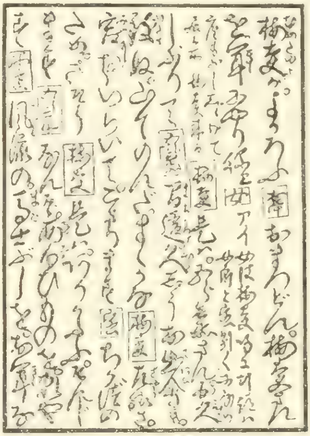
は舶來したものを、寛文年中甲斐の郡内から産するやうになつた。厚く密に、諸染色を用ひた糸で織る。

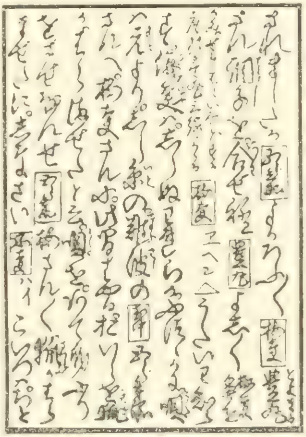
○さし　遊里の語にて、さしあひあつて、逢ひ難きをいふ。

○ざんねんびんしけん　顏淵、閔子騫の追口。此の兩者共に孔門十哲の一人にて、その德行高く、竝び稱せられた。

○堂前　三十三間堂前。

持、勝手に居ようとするを、客 これこれ長助、酒でものみやれ。長助 ハイ。跡について行く。是れは勝手用人の小づかひ手附中間なるべし。五人ながら座敷へ行く。客 さあみんな平らに〳〵。四人 ハイ〳〵。此の間にたばこぼんなど出る。客 是々、屋敷はやしき、爰はこゝ、おや、平にし給へ。四人 ハイ。女鉢肴硯ぶた出る。娘お中てうし持來る。五郎兵衛 旦那一ツ召上られませう。客 しからば初て。一ツ盃のみて次の男へさす。次の男 傳六殿お先へ。酒を吞所へ女來り、女 五郎兵衛さん、お百さんはさして居なさり、やせん。五郎兵衛 アヽたれこれはねエ。美しいのを、揃へてたのみやす。客 これはざんねんびんしけん。五郎兵衛がお馴染を見ようと思うたら。五郎兵衛 又旦那惡口斗。吸物出る。女郎あね來る。障子のかげより小聲に、女郎 お中さん。お中 サアきねエ。女郎四人來りて並ぶ。客一盃吞んで女に渡す。女盃を上座の女郎にわたす。女郎盃を横にまげて、ちつと斗吞んで女に渡す。女は次の男へ盃を持行。次の男吞で小聲になりて、三人目へと云うて女に渡す。三人目へ持行。女郎吞で女に渡す。又女三人目の男に盃渡す。三人目の男吞で女に渡す。女二人目の女郎に盃差す。女郎吞で五郎兵衛へ盃來る。五郎兵衛はさしづめ四人目の新造にきまる。客 長助々々、どこへなと、いつて樂め〳〵。長助





イエ御酒戴たで、ようござります。五郎兵衛 西宮の船頭と、堂前の、あぶらやへいか

○羽織　女藝者。深川の女藝者は羽織を著て出たので、羽織藝者、略して羽織といふ。

○山　永代寺山内。

○馬士ぶし　『人倫訓蒙圖彙』に、馬方節とあるのは、當世は小室節なりと云つてゐるが、こゝのとは異るやうである。

○あて身ぶり　あてぶりか。あてぶりは踊の所作に因らず推當てに振事をする意。

○おいらを狐がはらませて　やだおう節。明和七年頃に流行した俗謠。

○やです　厭です。

んせ。〔女郎〕イエモ、〔客〕いけ〳〵。〔五郎兵衞〕サア〳〵。（無理に長助をひつたて、頭と一緒に堂前へやる。）〔客〕〔五郎兵衞〕賑に藝者を、呼ませう。これおまつどん、たれぞ頼やす。〔女〕羽織にしやせうか。男藝者に、しやせうか。〔五郎兵衞〕梅太夫がよからう。〔お中〕おまつどん、梅太夫さんを聞にやりねエ。〔女〕アイ。（女は梅太夫呼に行。跡は女郎と客別々になり、座も少ししらけて居る所へ梅太夫來る。）〔梅太夫〕是は五郎兵衞さん、お久しぶりで。〔五郎兵衞〕間違つて、久しうお出會も致ぬ。山で呑んだ、まゝかな。〔梅太夫〕左樣さ。宮本いらいでございます。〔客〕ちかづきのため、さゝう。〔梅太夫〕是はありがたうぞんじます。〔五郎兵衞〕なんぞ、面白いものを、頼みやす。〔梅太夫〕風流の馬士ぶしをお聞なされましたか。〔五郎兵衞〕よからう〳〵。〔梅太夫〕豐丸さん、調子を合せねエ。〔豐丸〕よし〳〵。（梅太夫鼻をかみせきばらひなどする。座頭豐丸三線にかゝる。）〔梅太夫〕エヘン、〽うたひは知らず義太夫は、しらぬわれらが、ふつゝかに、唄は元よりしら糸の、難波の。〔お中〕五郎兵衞さんえ。梅太夫さんに、此間はやる、おいらを狐が、はらませたと云ふ唄を、あて身ぶりを、させなんせ。〔五郎兵衞〕梅さん〳〵、狐がはらませたに、しなさい。〔梅太夫〕ハイ、こいつは、ちとつらいねエ。〔客〕しよう〳〵。（梅太夫ぜひなく狐の身ぶりをする。）〔梅太夫〕豐丸さんうたひねエ。ツヽテン〳〵。〽おいらを狐が、はらませて、御亭になろとは、わしや、やです。やです〳〵、やでもです。しんじつやあでは、なけれども、人目はづかしけりや、わしややです。やですと云事は、いはねエもんです。〔大勢〕ハヽア。〔客〕是れは一ツ興〳〵。一ツ盃のみ給へ。〔梅太夫〕これは〳〵。（盃をいたゞく。お中酒をつぐ。）おつとござんす、〳〵。

〔お中〕梅太夫さんの※久しいもんだ。〔梅太夫〕いやもう、とんと、酒が、いけやせん。ゆうべも、二見やで※拳酒の、相手をしたりや、聲は臺エなしに、なりやした。〔五郎兵衛〕一ツ斗はよからう。〔梅太夫〕イエ一ツござります。〔女〕五郎兵衛さん、ちとあちらへ、お出なんし。〔五郎兵衛〕なるほど〳〵。旦那ちと、お休遊ばせ。（客すこし※めれんのていに見えて、）ウヽ先々。（お中お松梅太夫口揃へて、）ち※とげしなりませ。（五郎兵衛始め客はみな〳〵床へ行。）〔女郎〕梅太夫さん、※つき出しの子と一チ座しなさつたか。〔梅太夫〕イヽエ、一チ座はいたしやせんが、此間中川で後から見掛やした。〔女郎〕すかねエ、子だがねエ。〔お中〕まだなれねえからさ。〔女郎〕※いけるのぢやねエ。〔梅太夫〕おかんさんの、くさすも、久しいもんだ。（大勢口をそろへて、）アヽ※らつちもねエ。（みな〳〵床へ行。客床にて小聲に、）〔客〕※此さゝら、さつと捨て、ささふらへば、アヽプウ。（女郎来り、客そらねいる。）〔女郎〕もし〳〵。〔客〕アヽきつく酔うた。（女郎たばこのみて、客にのみ付て出ス。）〔客〕これは〳〵。（たばこのむ。一チ座の女郎三人ながら来。）あなたお休なんし。おかんさんお休なんし。〔女郎〕アイお休なんし。（みな〳〵床へ行。おかんびやうぶ引きまはして、）まだ、お寒うござりやすねエ。〔客〕されば、朝晩ははだ寒い。（などといひて色々おもしろき仕打有。）〔隣座敷〕〔如雷〕新ばう面白イか。〔新五左衛門〕ゐなかとはちがつたものだ。（といひながらやま半紙を出して鼻をかむ。）〔如雷〕是々、主の紙は※そでねエ。※小菊にしねエ。小菊を買ふなら、馬喰丁の上總や五郎兵衛が所がいゝ。たばこも兩に四斤ぐらゐの、國府がいゝによ。※匂袋の、やうなものはな、室町の桐山三了が、所からとりねエ。又きせる張せるなら、※池の端より※米澤丁の村田が、所がいゝ。主は誹諧もすこヽ、やらかしたな。〔新五左衛門〕國で、ちつと斗

○久しいもんだ　おつとござ〳〵は、梅太夫の常言とある義。
○拳酒　拳をして負けると酒を呑まされるもの。
○めれん　酩酊。
○げしなる　御寢なる。寢る。
○つき出し　突出し。今度店へ出た女郎。
○いけるのぢやねエ　いけぬの反がいける。良けるのぢやねエで、結局悪いといふことになる。
○らつちもねエ　埒もない。くだらない。
○此さゝらさつと捨て　狂言の詞。
○そでねエ　「ソは其也。其通にあらざるなり」。（『俚言集覧』）
○小菊　粗悪な楮皮で製し鼻紙として用ひる半紙。（四八八頁参照）
○匂袋　丁子、麝香、龍脳、白檀などの種々の香料を袋に包んだもので身に携へ、物に懸ける。たがそで、はなぶくろなどあり。
○池の端　住吉屋。
○米澤丁の村田　池の端の住吉屋と共に江戸の煙管屋として有名。米澤丁は今の日本橋區内。

して見たが。〔如雷〕そんなら宗匠へ、弟子入をしねエ。※存義でも※金羅でも、※祇徳、※左轉なりと、※湖十などもよし、※菊堂なりと氣の有にしねエ。みなおいらが、心安するから、つい、出來るこつた。朱肉や、唐墨の、やうなものは、※古梅園が所から※通ひでとつてやらう。買ねエ、筆も思恭が流なら、御成小路のせんちんしと云が有。〔新五左衛門〕そんな事より三味線が習ひたいものだ。〔如雷〕そりやア、なほ〳〵安いこつた。義太夫三味線なら、五八でも富八でも、※豐後なら、※文字豐でも、※文字久なりと、芳丁の竹澤園も、よし。〔新五左衛門〕文字清とやらは、どうしたの。〔如雷〕何文字清か。今では中村秀松が女房になつて、子を持てかみさんかぶだ。〔新五左衛門〕どこに居るの。〔如雷〕川岸の富田屋と云のがそだ。〔新五左衛門〕役者が、茶やをするかの。〔如雷〕するの段か。高麗藏が内はかうらいやといふ。芳丁に西川重三郎と云、人形遣ひ、ざうしがへやと云て有。其外に中村や嶋五郎、萬屋、新萬屋、竹伊勢と云は伊勢太夫が内だや。※鹿の子餅は又太郎が見世、向の角の八百屋は大谷廣右衛門、いつくらもこんな類がある。しつたじまんに色々の事咄す所へ女郎來る。〔お長〕是おとよさん、ゆうべはねエ。〔お豐〕面白かつた、ねエ。〔如雷〕どこで。〔お豐〕梅本でさ。〔如雷〕梅本は、がうせいな、もんだ。櫓下などは、のこらず、梅本の地だ。根津にも店があり、芳町では子供屋なり。〔お長〕豐國さんの、内だねエ。〔如雷〕豐國を、どうして知つて、居る。〔お長〕いつぞや、※拳角力の時、出なさつたねエ。〔お豐〕それ〳〵、梅

○存義　馬場存義。
○金羅　東金羅。
○祇徳　仲祇徳。
○左轉　北左轉。
○湖十　貴花庵湖十。
○菊堂　雨夜庵、隅田氏。
○古梅園　奈良の古梅園といへば墨の随一である。江戸の店は宝暦頃からのことで、此の本の出來た頃は今の日本橋通二丁目にあつたやうである。現在もやはり住所こそ變れ東京に現存してゐる。
○通ひ　現金拂ひでなく、通帳で。
○四日市　今、日本橋區。
○親父橋　今、日本橋區。芳町から照降町へ通ずる橋であつた。
○豐後　豐後節。『竹豐故事』に「宮古路國太夫は一中の弟子成故、始の名半中と云たり。後に國太夫又豐後と改せり。是一中節を又々取直し、一流を語り出し、三ケの津は勿論、諸國の隅隅迄流布したり」。
○文字豐、文字久　共に豐後節の歌ひ手。
◇再板本には、「川岸の富田屋と云のがそだ」の下に、「いまはわきへ越しやした」の詞を加へてゐる。

の紋を付て。〔如雷〕豐國が、拳ときては、凄いもんだ。〔新五左衞門〕日が暮たやねエか。〔お雪〕まだ七つ過でござりやせう。（障子引たて屏風引廻はし、）お長さん、お休なんし。（廊下ばたばたと。）〔女〕お長さん／＼、ちよつと、きねエ。〔お長〕何ンだエ。（お長はしごきのなりにて出る。）〔女〕志厚様が、きなさつたに。〔お長〕見通しにか。〔女〕イヽエ、横座舗で。（お長横座舗へ行。如雷は氣を廻し、廊下に立聞きする。）〔お長〕お前は、さつき、來なさつたぢやねエか。〔志厚〕裏の關口に、清兵衞や、忠公が、居るゆゑ、付合に今まで居た。〔お長〕又おいかさんを、呼なさつたか。〔志厚〕おいかは、脇へ出た。〔お長〕聞きにやるやつさ。〔志厚〕歸りさうもねエか。〔お長〕武サだから泊りは、しやせん。〔志厚〕そんならまた裏へでも、いつて來よう。〔お長〕何サ、かみさんの部やにでも寢て居なさりやせ。〔志厚〕それも、久しいもんだ。〔お長〕なんでも、まつて居ねエ。（お長は出て行、如雷は廊下にぶら／＼して居。）〔お長〕なぜそこに、居なさりやす。〔如雷〕酒に醉たから。（寢所へ行。すめぬ顔つきにて唄ふ。）△かあい男に、逢ふ時は、すかぬ、こちらが、しこなしに。（また女來りて障子ごしに、）〔女〕お長さん、あけてもよしか。〔お長〕なんだねエ、明ねエ。〔女〕セケントコノオコヒキノカヽ子ケヲトコリキニキツタ。〔お長〕イキマカニシキココウクサカンカヾモコツテクヽルクカヽラカソコレケマカテケトイキウクテクヽレケナカサカイキ。〔女〕さう云やすよ。（女障子引立て歸る。又間もなく來り、）〔女〕お長さん、鳥渡きねエ。〔お長〕なんだの。（お長は出て行く、如雷てうしの口より酒をのむ。）

◇此邊は再板本と多少の出入、相違がある。
○鹿の子餅　餅を餡にてくるみ、更にその上へ小豆を附けた菓子。
◇再板本には「大谷廣右衞門」の下に「今では人形と錦繪を賣りやす」とある。
○拳角力　長崎拳又は本拳ともいひ支那人の長崎に傳へたもの。酒宴の席上等で二人が對坐し、互に五指を屈伸し、指の數を呼びつゝ出し、其双方の出した指數を合算して、呼びたる數に中つたものを勝とする。負けたものには酒を飲ますのである。
○しごき　扱帶「しごきおび」の略。帶をした上へ更に締めるもので、かゝへおびともいふ。一幅の布帛をそのまま扱いて帶とするのである。
○見通し　見通し座敷。
○武サ　江戸時代、遊里の語で、武士をあざけりて云ふ。武は不粹のぶと、武士のぶとをかねたものと云ふ。なほ「新五左」もこれと同意である。
○すめぬ顔　滿足しない顔。
○しこなし　振舞。
○セケントコノ云々　換へ言葉、「先度の帶の金を取りに來た」。「今に志厚さんが持つて來るからそれまでと言うてくれなさい」。

〔お長〕オヽ能呼事だ。と云てお長床へ入る。如雷まじめになりてすゝめぬ顔にて居る。お長心付ていろ〳〵とつとめる。〔お長〕たばこ、のみなさり、やせんか。如雷返事もせずにらみ付けて居る。〔お長〕お前の顔にやア、何かきつく出來やしたねエ。是にやア、和國橋の、實路孝を、付なさりやアい〳〵。〔如雷〕そりやア、色男の、する事だ。お長ゆびにて如雷が顔をつきながら、〔お長〕お前ほど色男なりやアい〳〵。〔如雷〕なんの事た。此のふんばりめは、いゝかと、おもつて、喰のめすな。といひながら手を打。〔お中〕あいイ。〔如雷〕是お中さんとやら、此賣買女さげて、くんねエ。〔お中〕どうなされます。〔如雷〕あんまり、心いいとおもつて、なんのかのと、茶にしやアがる。其上野郎の、根づけを、見るやうに、蒲團と、おれ斗置て、廊下斗そゝりやアがる。〔お中〕お長さん、おまへもどこへ行なさつた。〔お長〕どつこへも、行はしやせんが、隣座敷で煙草のんだ斗さ。〔如雷〕何ンだ、こいつは、うぬがいいやうな事斗、ぶち殺されんな。硯ぶたをふり上る。〔お中〕お長さん、お前はあつちへ、いきねエ。お長は勝手へ行。女共來る。新五左衛門帯取りはだかにて出る。〔新五左衛門〕どうだ〳〵。〔如雷〕マアききねエ。ぬしも知つてる通りだ。其上、今も、隣で煙草のんだの、馬を呑だのと、おれが目をば、こんぺいたうの附目、太鼓二だと思ふさうな、人を附にした。皆口を揃へて、何さ、あの子も、其のやうに、惡敷する氣もねエけれど。〔如雷〕なんだうぬらまで上ゲ下ゲを取な。次郎勝手より聞付け飛んで來る。〔お名〕どうで、ござります。あの子が、氣にいらざア、外の子でも、お呼なんし。先氣直シに一ツお上りなんし。〔如雷〕爰の、どぶ酒が、くらはれるものか。といひながら大ざらをはふり出す。新五左衛門やう〳〵だきとめければ、次郎、〔如雷〕留るな〳〵。次郎新五左衛

○ふんばり　ふりはりの轉で種々のいやしき渡世を經て來た女をいふ。はくれん女。

○喰のめす　無暗に人を喰つた仕業をする。

○賣買女　賣女にて夜發とか夜鷹などに同じく賣淫の女をいふ。こゝは女の卑稱。

○茶にする　おちやらかす。なぶる。

○野郎の根づけを云々　根付は煙草入・印籠等を腰に挂げるために、其の緒に附けて帶の間に挾みこむもの。こゝの意は帶を布團に見立て、根づけを自身の體に見立てゝ言つたのではあるまいか。

○そゝりやアがる　そゝるは素見して歩くこと。うき〳〵と落ちつかないこと。

○こんぺいたうの附目　兩眼の代りに金平糖を附けた目。太鼓二つも同じ。形だけあつて役に立たない目の謂である。金平糖は砂糖を以て製した、周圍に疣のある大豆大の乾菓子。太鼓はいぼ太鼓。

○上ゲ下ゲを取る　褒めたり貶したりする。冷遇したりおだてたりする意につかつてゐる。

○門がやかましい　こゝは主家の門限の意。
○煤掃には出る　註釋は篇末にある。
○とんちき　頓痴氣。とんま。まぬけ。役に立たぬ人を罵る語。
○ひやうたくれ　瓢たくれの意、呑んだくれも同趣。ばかもの。
○ゆふでく　木綿木偶より出たる語か。後出作者の解説にあり。
○つひぞ　今までに。
○さえて　非常に手際よく隙もない様なのを云ふ。

門やら〳〵とだまして、むりにかたにかけて連行。〔如雷〕ぬし達は、どこへ連て行。此の分ぢや、男がたたねエ。〔次郎〕そんな事いはずと、佃のひがしやへでも行ませう。〔新五左衛門〕いやもう直に歸らう。※門がやかましい。〔如雷〕門がどうするもんだ。喰付はしよまい。〔次郎〕それでも、主が、氣をつかひ、なさりやす。〔如雷〕氣を、つかつても、いゝ。打捨ておけ。※煤掃には出る。〔次郎〕マアなんでもお出なんし。漸々とだまし、二人して船場の方へ行。〔若イ者〕どうもいけねエ、客だ。〔志厚〕とんだ賑かな客ぢや。〔お中〕いえもう、いけるのぢや、ござりやせん。サア二階へ、お出なんし。お長お中志厚三人二階へ行。〔お長〕お中さん揃た、※とんちきだねエ。〔お中〕お前が、何のかのと云なさるからわたしや、そばで氣をもみやした。〔志厚〕野郎買と、見える。おまつ來りて、〔女〕わたしも、芳町の、俵屋にも、居やす。新道の二文字やにも、三四年居やしたが、あのやうな若衆買は、見やせん。〔志厚〕※ひやうたくれ、※ゆふでくの揃ひだ。お長お中、口を揃へて、※つひぞねエ。〔お中お松〕志厚さん、お長さん、お休なんし。〔志厚〕もちつと、咄しねエ。〔お中お松〕後にめエりやせう。お中お松勝手へ行。お長障子を引立て、〔お長〕忠兵衞様ン清兵衞様ンは、まだ關口にかエ。〔志厚〕今日はおかるとおりゑと、一チ座して、梅太夫で、※さえて居た。〔お長〕お前は、誰を呼なんした。〔志厚〕誰を呼ものだ。お長、志厚がひざをしたゝかつねりながら、〔お長〕サアいひねエ〳〵。〔志厚〕アヽいはう〳〵。〔お長〕誰を呼なんした。〔志厚〕爰からいつた大坂女郎さ。〔お長〕あの子はどこに居るねエ。〔志厚〕何屋に、居るか。〔お長〕名は何と云ねエ。〔志厚〕お鶴とか云た。〔お長〕何名をわすれるものだ。などといひて色々面白きしうちことごとく有。折から廊下ばた〳〵と。〔客〕どうだ、又

※さしかな〳〵。〔お中〕アイ晝から出て、居なさりやす。〔客〕又、出ものか。〔お中〕おまへは又今までどこに、居なさりやした。〔客〕表櫓に、居やした。〔お中〕表は永樂屋にかエ。〔客〕何サあのやうな、變化物屋敷へ行ものだ。〔お中〕何、今だや出やしねエ。〔客〕尾張やで、珍しいものを呼やした。〔お中〕誰をエ。〔客〕このごろ名代の、六部女郎さ。〔お中〕おつな子だねエ。そしてつれ衆はエ。〔客〕外の者は、土橋の鶴やへ、いつたから、おれ獨り來やした。〔お中〕そんなら誰ぞ呼なんし。〔客〕藝者を、十人斗呼んでくんねエ。〔女〕とんだ事云なさる。よし〳〵わたしがいいやうにしよう。〔客〕おまつどんで、なけりや、ならねエ。おまつはげいしやを呼に行。〔客〕おいせさんはどうしたねエ。〔お中〕あの子はねエ、七さんと色をしてねエ、※かぶつて居なさりやす。

女お松來る。〔女〕七兵衛さん、かう呼にやりやした。利中さんと繁さんと梅太夫さんが來なさりやす。〔客〕よし〳〵。〔梅太夫〕豐丸さん、こつちだ〳〵。こりや七兵衛さんお出なさりました。

利中、ざしきへ行と、獨り角力のまねをする。〔利中〕すまふとらう、※ならこう。〔繁太夫〕かなひ〳〵かなひません。めく〳〵らに。〔客〕とんだ事だ。※とんだ、茶釜。〔梅太夫〕茶釜茶釜、※がまがまたりの大臣。〔繁太夫〕大臣々々、※大臣の所へ毛がはえた。〔利中〕はえた〳〵はえたとは物ぐさ太郎が娘かえ。〔大勢〕ハハア。〔梅太夫〕お肴に一トツ出ます所が※中村の、仲藏。〔大勢〕よからう〳〵。〔梅太夫〕皆様の御ひいきにて、一※チ郎別當と、たいにんしたる、左衞門祐經。〔大勢〕いよ〳〵。〔お中〕※秀鶴さんとは、おそろしい。〔客〕繁さん一トツ頼やす。〔利中〕私が出ませう。△藤兵衛さんがお花さん〳〵。

○さし　さしあひ。

○かぶる　後に作者の解說あり。

○こう　來い。

○とんだ茶釜　後出の作者の解說にあり。

○がまがまたりの大臣　茶釜の釜をうけて鎌足の大臣に續けた。鎌足は大織冠藤原鎌足、天智天皇の聖業に奉仕した忠臣である。

○大臣の所へ　大事の所へ。此の所尻取りの形をなしてゐる。

○中村の仲藏　初代。屋號を榮屋といひ、俳名は秀鶴、寬保二年二代中村傳九郎の門下となり、延享二年十一月、中村座の『奴丹前』が初舞臺。明和二年頃より色惡を得意とし、翌三年市村座の『忠臣藏』に定九郎に扮して大喝采を得。此の時初めて黑羽二重の小袖を用ひ、これが出世役となつた。天明八年『戾駕』を中村座に演じて至極上々吉に上せられ、寬政二年歿、享年五十五歲。

と云なさつても、お花さんは、やですくと、云なさります。客 きつしく 客 聞かく
エヘン。 へこいつはく、これでやぼなら、せう事がねエ。粂太夫 旦那の、又八は、利中さんのより凄いはエ。客 もし七兵衞さん、誰ぞお呼なんし。客 今夜は、さへ一通りにしよう。利中 さへ一通りの名方、ホヽホヲ。女 呼やすよ。梅太夫 お呼なさるのさ。粂太夫 呼ねエく。客 さわぎねエく。女は女郎呼に行、利中豊丸粂太夫、梅太夫、連ぶしにてうたふ。△たうなすほどの血のなみだ、落て、かぼちやにやアなりやしよまい。キタきたく、きたさのさのく讃岐の金ぴら。女郎來り障子の外より女郎 お中さん。利中 サアくきねエく。女郎來る。七兵衞酒を呑でさす。女郎 ちとお上ゲ申や、せう。客 まづく。利中 おこうさんには、まだ私は、間違て。女郎 ハイお頼申やす。利中 是はく。客 利中さん一ツ拳まゐらう。利中 サアめエり、やせう。客 ゴウサイ。利 ロマデエ。客 パマ。利 ロマとつてエ。客 キウヤア。利 トウライとつてエ。客 かなはぬく。お長小便に行て、隣座敷販なれば、そつと見ければ馴染の七兵衞なり。名代の女郎居る故に、客は知らぬふりにて座敷へ行。お長 おゆるしなんし。お中 お長さん、のみねエ。おこう烟草のみ付てお長にやる。客杯をもつて居ければ、客 一トツあげようか。お長 ハイ。粂太夫 お長さん、中川では、ひどい目にあはせなさつたねエ。梅太夫 何拳か。お長烟草のみながら、手でひげをなでるまねしながら、お長 何さうもねエのさ。お中きせるをふりあげて、お長をたゝくまねして、お中 髭なでの、きんくか。にくいの。お長 イヤいつてめエりやせう。あなたゆるりと。おこうさん、お中さん、皆さんこれに。お長は床へ行。利中 問ひませう。梅太夫 とはしやれく。利中 刀は。梅 正宗。利 小袖は。梅 羽二重。利 羽

○一チ郎別當とたいにんしたる云々　曾我の對面の狂言に、工藤祐經が頼朝公より一﨟職を賜り、巻狩の總奉行を仰せつかる事がある。それを云つたのであらうか。
○秀鶴　仲藏の俳名。
○連ぶし　相共に謠ふこと。合唱
又元祿頃流行せし小唄をも云ふ。
○たうなすほどの血のなみだ云々　「酸漿ほどの血の涙、落ちて松露となりやせん」をもぢつたもの。
○讃岐の金ぴら　讃岐國琴平町、國幣中社琴平宮。此處は「きたさの」に語呂を合せて出したまでゝある。
○間違て　まだかけ違つてお逢ひ申したことがない。
○ゴウサイ、ロマデエ云々　拳を打つ時の指數の呼聲で唐音である。一、イイ。二、ルウ。三、サン。四、スウ。五、ゴウ。六、ロマ。七、チエ。八、パマ。九、キウ。十、トウライ等。
○髭なでのきんく　きんくは當世風　既出八七頁。髭を撫でたり襟を合はせたりするのは氣取やの仕ぐさ。
○とはしやれ　問ひなさい。

○歸ろひよこ〳〵　「蛙は三つ〳〵三ぴよこ〳〵」と云ふ童謠をもぢる。
○しよんがエ　謠の文句。端唄にも「小田原ははなの小田原ほし月夜しよんがへ」などあり。
○此間に　近いうちに。

織は。〔梅〕ちりめん。〔利〕男は。〔梅〕權左衞門。〔利〕女は。〔梅〕權助、ハヽアまた負けた。〔利中〕どうだ、凄ものか。〔繁太夫〕變化るで、まゐらう。〔利中〕來給へ〳〵。〔繁〕ばけるハ〳〵。〔利〕茶釜は。〔繁〕やくわんと。〔利〕むすこは。〔繁〕とつさま。〔利〕かぼちやは。〔繁〕たうなす。〔利〕娘は。〔繁〕かゝさん。〔利〕ハヽアおそろ〳〵。〔繁〕どうだ〳〵。鐘なる。ゴン〳〵。〔客〕明るさうな。歸う〳〵。女郎お中口を揃て、まだ〳〵、もちつとお出なんし。〔梅太夫〕歸ろひよこ〳〵。豐丸三味線引掛、繁太夫、利中、梅太夫、三ぴよこ〳〵。

△六ぴよこ、七ぴよこ、八ぴよこ〳〵、九のぴよこ〳〵、十ぴよこ〳〵、しよんがエ引。〔客〕歸う〳〵。繁太夫、梅太夫、利中もとも〴〵まだ、おそくはござりません。〔客〕いや〳〵、歸りやせう。どや〳〵と勝手へ行。お中は先へ行てせん頭をおこす。〔船頭〕船はとうに、きて居やす。〔客〕サア〳〵そんなら、此間に。〔ねこう お中〕此間に。〔利中、繁太夫、梅太夫〕ハイよう、お召なさりませ。客は舟にのり歸る。げいしやはのこらず勝手に咄して居る。〔隣座舗〕客手をうつ。〔女〕ハイヽ。〔客〕歸るから、五郎兵衞を呼でたもれ。〔女〕ハイ、五郎兵衞さん〳〵。〔五郎兵衞〕オイ〳〵。〔女〕お歸りなされ、ますと。〔五郎兵衞〕よし〳〵、駕籠は來て居るかの。〔女〕アイとうから、待て居やす。〔五郎兵衞〕サア傳六さん、新介さん、歸りやすぞ。客羽織など着て座敷へ出、傳六、新介、目を揩ながら、〔客〕ねむさうな顏ぢや。〔五郎兵衞〕お中さん、お酒を持て、來てくれねエ。〔客〕酒より歸らう〳〵。客先に立て行。跡より女郎不殘送る。〔女〕お腰のものを。銘々脇差などさし駕籠にのる五郎兵衞あとへ立ち歸り、〔五郎兵衞〕是おまつどん、長助さんが來なさつた、なら靜に跡からきねエ、と云ておくれ。〔女〕アイ〳〵。〔女郎四人〕アイおはゞかり申しやした。〔お中お松〕ようお出、遊しませ。客はみな〳〵歸る。よこ座敷にて志厚も目を覺す。もう夜が明けた。〔志厚〕け

○邯鄲　邯鄲の夢のこと既出。（三八頁）

ふは居てもよからう。〔志厚〕歸らにや、ならねヱ。（お長帶しめて志厚に羽織など著せて、二人小廊下へ出る。）〔お中〕お歸り、なんすか。〔志厚〕此間にめヱりやせう。〔お中〕そんなら、船を云付けやせう。〔志厚〕船ぢやア目立から歩行がようござりやす。〔女〕お歸りなんすか。（ざうりをなほす。）〔志厚〕是ははゞかり〳〵。（志厚出て行ければ、お長何か用有げに、）〔お長〕志厚さん〳〵。〔志厚〕何々。（志厚立歸る。お長及びごしになりて、耳に口を當て、）ナヽ。〔志厚〕よし〳〵。（烏啼。）カア〳〵、烏の聲に目はさめて、殘るは枕斗なり。※邯鄲は五十年、是は一チ日一チ夜の樂みもきえて、跡なき夢と成りにけり。

通言

○ばからしい。　○うそはねヱ。　○ようあてなさつた。
○どうせうのう。　○けしからねヱ。　○ほんにか。
○あゝらつちもねヱ。　○きいてあきれる。　○よくいふものだ。
○よしか。　○つひぞねヱ。　○お氣の毒蠅のあたま。

上總木綿（しやうのなき客をいふ。）　ひやうたくれ（惡敷客をいふ。）　とんちき（右同斷。）
ゆふでく（田舍者をいふ。）　本所の穴藏（しつぶかをいふ。）　長竿（惡敷すると云事なり。）
出もの（右同斷。）　ちよゝら（辯口にてあやなす人をいふ。）　ちやら（うそつく人になぞらへて云ふ。）

かぶる　まうせんかぶる事なり。芝居より出たる言なり。

いきな男　男にかぎらずするだといふ事。

大吉　しやうわるト云事なり。

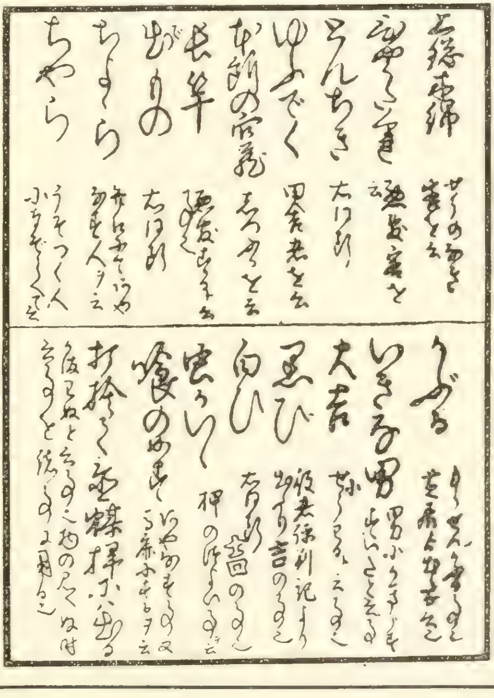
黒い　役者評判記より出たり、吉の事なり。

白い　右同斷。凶の事なり。

虫がいゝ　押のつよい事をいふ。

喰のめす　あやなす事又ばかにするをいふ。

打捨つて置煠掃には出る　かまはぬと云ふ事なり。物の見えぬ時云ふ事を諸事に用るなり。



右の類專ら(もっぱら)に用る外に、唐言(からこと)と、名付て、五音(といん)を以て、云事人の知る所なれど、爰(こゝ)にあらはす。

アカサタナハマヤラワ　此の通りへ　カ

イキシチニヒミイリヰ　此の通りへ　キ

ウクスツヌフムユルウ　此の通りへ　ク

エケセテ子ヘメエレヱ　此の通りへ　ケ

○おせん　谷中笠森稲荷の水茶屋かぎ屋の娘。

オコソトノホモヨロヲ　此の通りへ　コ

右の如く、カキクケコの五音の字を付云なり。譬ば客と云時は、キキヤカクク、又、をんななどとはねる時は、付字にてはねるなり。女はヲコンナと、ヲの字へつく、コの字をはねるなり。清濁は本字に、直に濁るなり。此外に、し付、き付、などと云て、其時におうじて、一チ字置に付るなり。知れざる事を、云ふ時、はやく此の事を考ふべし。又此の通じ言葉も口付けて云時は、いかやうにも、はやくいはるゝなり。諸人知る所なれども、知らざるものの便にと爰にあらはす。

右の通じふ。有る和に唐言と名付く。五音をもつて云ふ人の知る詞なるべし。字ふ、つゝけ記

○アカサタナハマヤラワ　此通りへ　カ
○イキシチニヒミヰリイ　此通りへ　キ
○ウクスツヌフムユルウ　此通りへ　ク
○エケセテ子ヘメエレヱ　此通りへ　ケ
○ヲコソトノホモヨロオ　此通りへ　コ

右の如く。カキクケコの。五音の字を

○とんだ茶釜の辯

是れは、谷中笠森に有りし、おせんが美しきを見て、顔と、顔と、見合、能女とも譽られず、茶釜に、なぞらへて、とんだ茶釜と云出したるとなり。

〇同じくやくわんとばける辯

おせん引きのいて後、山下に水茶屋出る。又此美しき女に、譬、とんだ、茶釜がやくわんと變化たと云なり。

〇獨りでころんで啼と云辯

是は丑の顏見世、狂言に、坂田佐十郎、云し事なり。是を今専云は、女藝者、又茶屋、船宿の、女房娘、女郎の眼を忍びてころぶといふ、通言有。なくと云は、淚を出すと云ふ事にや、くはしく、あらはす時は、下懸りとなる。仍てりやくして、あらましを記す。

夢中散人

寢言先生著 印

〇丑の顏見世狂言　丑は明和六年である。此の年の顏見世狂言には「六花（むつのはな）梅顏見世」と云ふのがあり、それには佐十郎が戸櫻左衞門の役にて勤めてゐる。

南閨雜話

夢中散人寢言先生

序

八文字が作意せる、豆右衛門にはあらねども、我夢中に一つの樓に登り、閨中を遊行するに、人見て怪しまず、心の欲するに任せて、耳に聞き眼に見るまゝに、愚毫に書記して、南閨雜話と題して、諸君子の一笑に呈す而已。

于時安永二ツの暦巳の卯月吉辰

東都芝濱　夢中山人撰

○豆右衛門　八文字屋本の『魂膽色遊懐男』にある主人公。小さきこと豆の如くありて閨中を見歩く趣向の作である。後に之に倣ふもの少からず、鈴木春信畫に『きれ右衛門』と云ふが如きは其の一例である。

○愚毫　毫は毛筆のこと。

入相の鐘も響き渡れば、※そゝりぞめきのどや〳〵と、馴染のあるは足早に、駕の通路せはしなく、行くも歸るも戀路の闇、茶屋が提灯道しるべ、五人の者共打連れて、大じ〳〵なんと、※そつちの酒は、大ぶんよい酒だ。〔茶屋〕隨分吟味を仕ります。〔忠治、幸治〕口廣い申し上げやうでござりますが、大方高輪中では、一番でござります。〔澤井〕さうであらう。〔茶〕あり難う存じます。扨今晩はどこに遊ばします。〔大、澤〕何方なりとも、宜しき内へ御案内。〔幸〕左樣なら※忠公が御本陣が宜うござりませう。〔大〕それは何やだ。〔幸〕※山瀧やでござります。〔大、澤〕よからう〳〵。〔忠〕あんまり、能うもござりませぬ。夫より幸治が※ゆかりの※岡松が宜うござりませう。〔幸〕いつその事に※桝坂では、どうでござりませう。〔澤〕イヤ〳〵。ちつとも近い、獨りも馴染のある所がよからう。〔幸、茶〕左樣なら、山瀧が宜うござりませう。〔大〕サア〳〵、その山瀧々々。〔茶〕ハイモウ是れでござります。〔大、澤〕まづ〳〵、忠治御案内々々。といひながら、みな〳〵打連れ、※影見せを尻目にかけ、廊下をどろ〳〵、見通しへ行く。〔大〕その日の出立は、白むくに淺葱のえり、袖口、※花色羽二重に、萌黄裏の小袖、茶どんすの袷羽織、※つゐ朱の印籠、※いんでんの巾著、※上野の仁王の眼玉程な緒じめをつけ、扇子ぱち〳〵ならしながら、床の懸物を見て、「なんと澤井氏、此の比は御當地で、大ぶん※花がはやるとの噂だが、いよ〳〵さうかの。〔澤〕きつい事でござります。といふ所へ忠治がなじみの女郎里來る。〔里〕どなたさんも、能うお出でねんした。いせやさん、※お遠々しうありい

○そゝりぞめき　素見して歩く人人。
○そつち　お前のところ。
○忠公が御本陣　本陣は諸大名が參覲交替の際の宿驛に於ける公認の旅舍であるが、こゝでは忠治が行きつけの妓樓といふを大袈裟に言つたのである。
○山瀧や　山崎屋か。山崎屋は『婦美車紫鹿子』に「七匁五分、十匁。かうし、大みせ」とある。
○ゆかり　緣故のある。なじみの。
○岡松　若松屋か。これは「七印。小みせ、黑門前」とあり。
○桝坂　桝坂屋か。「七匁五分、十匁。かうし、大みせ」。
○影見せ　表通りへ張らないで家の中で張つてゐる女郎の見世。
○花色　花色は縹色「はなだいろ」に同じ。薄き藍色。
○つゐ朱の印籠　堆朱でこしらへた印籠。堆朱楊成の作が名高い。
○いんでん　印傳皮。これはなめし皮の一種。
○上野の仁王　上野寛永寺吉祥閣にある仁王尊。
○花　花札。又花骨牌とも。

すねイ。〔茶〕※久しい物サ。ゆうべばつかり、お目に懸りませぬに。〔里〕さうでありしたかの。ホヽヽ。里は忠治が傍へすわり、「ぬし達はネエ。〔忠〕御初會だ。〔里〕どうせうの。〔茶〕※お見たてが能うございませう。〔大ぜい〕それがよからう。サア〱。〔大、澤〕しからば。と頭巾ま深に、影見せの前へゆき、端からはしまで、ためつすがめつ。〔大〕あの三番めの、赤イ著物のは。〔若い者〕菊様と申します。〔澤〕それから、こつちへ五人めは。〔若〕秀様と申します。〔茶〕さやうなら、あのお二人。〔大、澤〕サア〱、お身達も見立て〱。〔幸、長七〕私共はどうでも。〔大〕ハテサテ、入らぬ※じぎだや。能イのを極めよ〱。〔幸〕こつちの方から、六人めの※こび茶の。〔若〕アイ琴浦様でございます。〔長〕その次のは。〔若〕どれでございます。〔長〕エヽあの淺葱もくめのよ。〔若〕ヘエヽ、歌様と申します。〔長〕サア〱極り〱。子供衆お茶ヲよ。

座鋪の體

程なくてうし硯ぶた、※鉢肴、煙草盆ども持ちきたる。〔若〕サア皆様お出でなさりまし。

〔里〕こつちへおはいりねんし。女郎共ずらりとならび、忠治を見てにつこり、〔忠〕ヤア是れは、いづれも様方おそろひ。

〔里〕杯をはじめて大じんへさす。それより段々杯もすみて、〔茶〕ちと、お燗を致させませう。〔大ぜい〕よからう。〔茶〕あの子おかんをして。〔禿〕アイ。それより亂酒になりて、〔琴〕モシいせやさん、お近づきのために上げやせう。〔茶〕ハヽ〱、こん晩のおちかづきの爲にかえ。〔琴〕よう※すきな事を、いひねんすの

○きつい事　大層なこと。
○お遠々しう　遠々しは、うとうとし、疎遠なりの義。お久しぶりですねの意。
○久しい物　いつも同じやうなことを云ふとの義。
○お見たて　首實檢すること。
○じぎ　辭儀。遠慮。
○こび茶　媚茶。黑味のある濃い茶色。こいちや。
○鉢肴　燒肴などを鉢に盛つて出すもの。
○すきなこと　勝手なこと。

○きつい物　かなはない。
○あたる　酒にあたる。惡醉する。
○國ぶし　國振。地方唄。
○一ッけん　拳を打つこと。
○らちはあきませぬ　上手でないから、相手にたれぬ義。
○藝者　此所では男藝人。
○きつい物　此では大變なこと。
○北野清水　『太平記忠臣講釋』の「道行人目の重縫」に「新造の時から逢なれて、北野清水祇園樣、戀の願ひに願かけて、歩みをはこびし甲斐もなく」とあり。
○忠臣からしやく　近松半二の『太平記忠臣講釋』明和三年。

オ。一ッあがりいし。〔茶〕そんなら、ちと上げ申しやせう。〔琴〕許しねんし。もう〳〵此のごろは、※きつい物サ。〔茶〕なせえ。〔琴〕なんだか呑むとだきに※あたりいすよ。〔大、澤〕この内、何やらわからぬ國※ぶしなど唄ふ。〔因〕なんと澤井氏、※一ッけん參らうか。〔澤〕イエ〳〵、モウ貴公には、閉口〳〵。〔大〕そんなら、誰なりと。〔忠、幸〕イエモウ、ねつからちらちは※あきませぬ。〔忠〕ちとお慰みに、※藝者を申し付けませう。〔大、澤〕よからうが、何藝者ぢや。〔幸〕何に致しませう。〔澤〕義太夫がよからう。〔茶〕左樣なら、何太夫が宜うござりませう。〔大ぜい〕それ〳〵、それがよからう。〔茶〕かつてへゆきて、何やらいひ付ける。やがて藝者ども來る。〔藝〕これはどなたさまも、能うお出で遊ばしました。〔女郎共〕太夫さん來ねんしたか。昨夜は御くらうでありいした。〔太夫〕ヘエいつもながら大きに醉ひまして、何ぢややら、いつかうつまらぬ事のみでござりました。忠樣せん比いらいで御座りました。〔忠〕さうだつけかの。〔太夫〕幸樣きつい物※でござりますの。〔幸〕何が。〔太夫〕何ぢややか存じませぬが。といふ内、三絃、調子あはせる。〔太夫〕何に致しませう。〔大ぜい〕何成とも、面白さうな事が能からう。〔里〕太夫さんの※北野清水が。〔女郎共〕久しい。里さんのおすきよ。〔皆々〕それがよからう。〔太夫〕※忠臣からしやくの道行をかたり出す。〔大、澤〕こそ〳〵話に、なんぼでも義太夫は、こちらで聞いてはなまるなどとのはなし。〔幸〕このやうすを聞き付けて、さらばとおもひ付きにて、こわ色遣ひをいひ付ける。まもなくこわいろ藝者京治來る。〔大〕是れは〳〵段々の趣向。〔幸〕イヤモウ、何ぞと存じましたが、是れは又私が獻上。〔澤〕サア〳〵、是れは又よからう。〔京治〕モシエ、あなた樣方へ。〔忠、幸〕是れは、京治と申しまして。〔さみせん引〕モシエ、とんだいひ立御口上、出來やした。

大、澤 どれも初めて逢ひました。皆 おめを懸けられまして下さりまし 女郎共 太夫さん、一ツ呑みねんし。大、 もう〳〵、ゆうべからさつぱり禁酒致しました。忠 なせ 大、 あんまりすぎますさかいで。女郎共 そんなら、又過ぎない程に呑みねんし。へ此の内聲色 忠、幸 ウ々始まる。深山に咲きし花のみの、合 チ、チンチン〳〵〳〵ツン。へ惡七兵衛景清ともあらう者が。幸、忠、長 イヨ〳〵親玉ア。大 あれは、誰がまねぢやの。澤 團十郎さうでござります。忠、幸 何やらこそ〳〵いつて、茶やへ何とかいひつける。茶や サア〳〵、モウ大分お座がふけました。藝者 皆々三味線ばこへ仕舞ひ、左様なら、どなた様も御機嫌よう。女郎共 も一ツ呑んでいきねんし。忠、幸 御大儀〳〵。大、澤 どれも、又その内。藝者 あり難う存じます。女郎共 御苦勞でありいした。茶 左様なら私も、もう是れでおいとま申し上げます。御迎へは。大 六ツまへ〳〵。團 も一ツ呑んで行き給はぬか。澤 イエ〳〵大きに過ぎました。又山の神めが、大ていのおこりではござりますまい。團 そんなら今夜は。澤 南といふ所だらう。團 是れもさつぱり、大のへんちきでござります。扨まづ左様ならおゆるりと、どなた様も御頼み申します。女郎共 そんならいきねんすか。おかさんへも、よオく申してくんなんし。といひながらちちらかまで送り出る。茶 もしエ、あの御方は、新下りの御方でござりますから、御たのみ申します。有、秀 アイおさらばえ。お世話でありいしたニエ。

○惡七兵衛景清　平氏の臣。豪勇を以て聞ゆ。伯父を殺したので惡七兵衛と呼ばれた。

○團十郎　五代目市川團十郎。寶暦四年初舞臺。晩年に蝦藏と改む。文化三年歿。

○六ツ　午前六時。

○山の神　山の神は奧に鎭座するといふ意から女房をいふ。

○南　南品川遊廓。

○へんちき　變痴氣。へんてこ。

○新下り　新しく品川へ下つて來た。品川で始めて登樓した。

○高尾君　江戸吉原の名妓。京町一丁目三浦屋四郎左衛門抱への遊女。初代から十代まであり、その中、二代萬治高尾、五代西條高尾、十代榊原高尾が名高い。
○むすこ　幸吉郎のこと。
○手に入れ顏のすまし　自分一人で良いものを手に入れたといふやうな顏ですましてゐる。
○あやかり者　果報者。
○こんたん　魂膽。たくらみ。くはだて。

部屋の體

とやかくする内膳も濟みて、〔若〕もし、ちとあちらへ御出で遊ばしまし。子供や、お部屋へおつれ申せ。〔大、澤〕どこだ。〔禿〕下でありいす。〔大、澤〕扨と、小便所は。〔禿〕こゝでありいすヨ。竹のすだれざら〳〵、てうづ鉢をがらつかせ、それより手をふきながら方々見て行。〔禿〕爰でありいすよ。〔大〕爰は、たが所ぢや。〔禿〕菊さんのお部やサ。〔大〕菊とは。〔澤〕ハテ貴公の奥方サ。〔大〕サア〳〵そんならまづはいり給へ。〔大〕澤井氏のは、何か美しい物ぢや。時にあいらはどうしたな。といふ所へ〔忠、幸、長〕みな〳〵來る。〔澤〕イエ〳〵、貴公のは、餘程すさまじい。〔忠〕あれこそ此の家の※高尾君で。〔澤〕さうだらう。〔大〕※むすこがのは、何とかいつた。〔忠〕あれは琴浦と申します。〔大〕是れがまた見事な物ぢや。〔幸〕何サ、さやうぢやアございませぬ。〔長〕コレ〳〵、あんまり※手に入れ顏のすましは、止しやアれな。大ぜいに されば〳〵大の※あやかり者め。〔忠〕ちと、お燗を致させませう。も一ツ召しあがりませ。〔大、澤〕インニヤ、モウ〳〵大きに醉つた。ちと休まう。皆もまづ休みやれ。又忠治が定めて※こんたんをやるだらう。〔幸、長〕勿論、左樣でございませう。といふ所へ、〔里、琴〕二人來る。もう、お休みねんすかえ。〔大〕イエ〳〵まだぢや。サア先づこれへ。〔忠〕菊さんは。〔里〕今に來ねんせう。〔幸〕何は、歌樣とやらは。〔琴〕今おゆしをたべて、ゐねんすよ。〔大〕今に來よう。サア〳〵後に〳〵。〔忠、幸、長〕さやうなら、御機嫌よう。〔里、琴〕お休みねんしよ。〔大〕な

○すつきり　さつぱり。

○そのかんざしを取つてなげ　簪を取つて投げ、そこから疊のへり迄の編目を數へて、その丁半によつて吉凶を占ふ。これを疊算といふ。それが吉であつたのでにつこりしてチユウチユウと鼠啼きをしたのである。鼠鳴きは遊里等にて相思の男女の逢瀨を喜ぶ時などに行ふもので、口をすぼめて鼠の啼き聲を眞似るのである。

○翠帳紅閨に　「翠帳紅閨に枕ならぶる床の上、なれし衾の夜すがらも同穴の跡夢もなし」。（謡曲『班女』）

んと澤井氏、さつき來た藝者とやらは、なんだかすつきり※、面白うもないものだの。〔澤〕それでも、あれは忠治や幸治が、よつ程勤めましたのサ。〔大〕それにしては、ア、たいくつな物ぢやつけ。〔澤〕扨この女郎共は、どうしたか。〔大〕ハテ待つも樂しみサ。先づ〳〵貴公も、しばらく休みたまへ。〔澤〕しからば後程。と別れて行く。〔菊〕はやう〳〵來りて、「モウ御休みねんしたかえ。と（いひながら蒲團のそとへ坐る）〔大〕君をまつまの待ち久しさ。と（たはむれかゝる。）〔菊〕は（につこりともせずに、かんざしにて髮をやたらかきにかきちらかし、※そのかんざしを取つてなげ、何かにつこりとして口でチウ〳〵。）千鳥や、水を一ツの、持つて來や。そしてあの若浦さんの所へいつての、おことづけを申しやす。あした錦糸さんへ文をやりねんすなら、わつちも文を上げいすから、いつしよにやつておくんねんし。そして先刻お預け申しいした物を、よこしておくんねんし。と、早くいつてきやア。〔大〕コレ〳〵、あの子、わしに茶を一つ。〔禿〕アイ、いま持つて來てあげいせう。〔菊〕モシエ、ちつと文をかきいすよ。〔大〕隨分ゆるりと。〔菊〕は（硯箱を出し墨をする。）〔禿〕若浦さんのおつしえんす。能うおことづけでござりいす。またあすの朝は、はやアく人をやりいすから、こんにやア文をよこしておきねんし。そして。と（耳へ口をよせて、何やらこそ〳〵いふ。）〔菊〕エ、モウばからしいの。と（いひながらなが〳〵とした文のぶんしやう。）〔菊〕そして、さつきの物の事は。〔禿〕そりやア、染治さんへ、預けておきいした。と。〔菊〕めしつぶを、一ツ持つてきや。〔大〕（この内てれて、）ウタヒ〽※翠帳紅閨に。と（謡ひながらから紙の繪をつく〴〵と見て居る。）〔禿〕（水とめしつぶをもち來る。）〔大〕コレあの子、秀丈とやらの所は。〔禿〕お出でねんすかえ。〔大〕いかうかと思ふ。〔菊〕連れ申していきや

○目付　若年寄の支配に屬し、旗下諸士の非違を糺察する役。こゝは單に見張り役といふ程度。
○どうで初會では　初會には必ず女は飲食せず、又客を振つて寢ないことも多かつた。
○もめ　紛紜。
○取持つ　周旋する。
○國ふうな　田舎風。

ア。禿サアお出でねんし。因（まへ帯にして羽おりもきずに、きせるたばこ入を持ちながらゆく。）禿サア爰でありいす。因いかゞ

いかゞ。參つても苦しからずかの。書少しも苦しからず。今もつて獨りずまひサ。天是れは、どうした物だや。書客でも來た樣な樣子に見えます。時に貴公のは。因是れは又、何だやらしつかい、書役部やの目付に、いひ付けられた樣な事サ。閑※どうで初會では、何れそんな物で、お互の事。コレあの子、酒でも持つておぢやれ。禿酒を呑みねんせずと、もうお出でねんし。因なぜに。禿なぜでもないけれど、早くいきねんしよ。禿あの子、名は何といふ。禿（笑つてゐる。）太かはいい子だやの。書サレバこの子が見せへ出たらば、きつと參らうなア。あの子。禿知りいしないよ。そんな事を云はずともういきねんし。天扨もやかましくせつくは。然らばゆるりと御まち候へ。書左樣なら、後程〳〵。

閨の體

太（部やへ歸れば、文もやう〳〵出來上り、）禿千鳥や、この文を若浦さんの所へ持つて行つての、そんなら御頼み申しやすから、やつておくんねんし。といつて來や。そして、そこらをも片づけての、屛風をもちと立てていきやア。天あの文をやられた客衆は、大じの客しゆか。禿イヽエありやア外の女郎衆の、客しゆの所へ、ちつと此の比※もめが有つたから、それで※取持つ文サ。天そんなら定メて、面白い客衆だらう。わしらが樣な、※國ふうな人とは、違ふであらうの

○作事役人　作事奉行の下にあつて營繕・修理の事に當る

○ずんど　ずつと。目立つて。衆にぬきんでて。

オヽ〔菊〕なんだか知りいしない。といひながら夜着を引きかけしが、跡はいかゞなりしや。

怖勤の體

夫れは扨置き、澤井は面白からぬ上役との一座、その上女郎もやつと來りけれども、しやくけとやらにて、さえぬ遊びなれば、座敷あるきをして、歌が所へ來る。歌が客は、此の度やしきの普請を請合ひたる、大工の棟りやうなり。菊が客は、御國元より登られし重役人、それを御機嫌とりのため、けふの催し。忠治は請負方の總元締、幸治郎は、材木やのむすこにて、澤井は、江戸詰の※作事役人なれば、かねてより心安く、樣々に手入れをして、右の御頭をさそひ出して、忠治、幸治郎、大工の長七もろともに、勤めの遊びなり。

〔澤〕どうだ／＼。〔園〕エ、是れは、澤樣かえ。〔澤〕お邪魔かの。〔園〕何サもう、馬鹿らしい。おはいりねんし。秀さんは、どうしねんしたエ。〔澤〕何か、こん夜はしやく氣とやらさ。〔園〕ハアそれは、ひよんな事で。〔澤〕どうで今夜は御頭への勤めだから、どうしてもいいが。夫れはさうと、あの表門の事がよつぽどむづかしい。〔園〕さやうでござります。とかくに御賴み申すは、あなた樣でござります。〔澤〕なんぼおれがひいきに思つても、かんじんのあの御頭次第だが、これもよつぽど、氣がなほつた。其の上あの忠治と幸治郎めは、※ずんど能く氣に入つてるから、是れでいいといふ物だ。〔園〕サそれがせめての事でござります。

あのむすこも、大ていな利口なもんぢやアございませぬ。その替りに、とかく遊びに身が入りまして、おやぢ殿の世話をやかれます事でございます。〔歌〕たばこをすひ付けて、「もしエ、あがりいし」〔長〕何ぞ、ちと取りに遣はしませう。〔客〕イヤ〳〵もう〳〵、何にもいや。大分夜も更けた。一ト寢入りしよう。〔長〕マア〳〵能うございます。〔客〕それとも、此の上隨分々々氣を付けて。〔長〕それは畏まりました。左樣なら御休み遊ばしまし。〔客〕緩りと〳〵。〔歌〕もうお出でねんすかえ。〔客〕おじやまをするが、氣の毒さに。〔歌〕エヽモウ、お許しねんし。〔歌〕もしエ、今のはお役人かえ。〔長〕あの人はいい人だが、どうもあつちの。〔歌〕菊さんの客しゆかえ。〔長〕ムヽヨ、あの人がよつ程な、歌右衛門に仲藏だから、それで樂屋がもめるといふ腹さ。そりやアいいが、主やア先刻、客しゆが來たぢやアなかつたか。〔客〕來は來たけれども、かはりを出したから、いいのサ。〔長〕なぜ、代りを出さずとも、おいらは高で初會だから、勤めるが大のむだ。そして又どうされたとつて、やしき衆ぢやアあるまいし、何のかのといざをいふ野郎でもなし。それだから代りを出しても、それつきりぢやア惡いから、ちつと行つてやつたがいい。〔歌〕いいはな。うつちやアつておきねんし。〔長〕なんと、酒はあるか。〔歌〕こゝへは、てうしが來ないよ。〔長〕アヽ一杯吞みたいがのオ。〔客〕モウよしねんし。〔長〕酒でも吞まないで、何をたのしみに。〔歌〕モシぬしやア、八町堀の市さんを、知つてゐねんすか。〔長〕ムヽ、大工のか。〔歌〕アイ。〔長〕知つてゐるは。あの野郎も、こつちへくる

○大ていな　普通の。

○歌右衛門に仲藏　共に初代。中村歌右衛門は加賀の人、大阪、京都方面に活躍し、寶曆七年より江戶に下り居ること五年。實惡の隨一と謳はる。寛政三年歿七十八歳。中村仲藏は江戶の人、中村座にて初舞臺、所作事の名人といはれ色惡、敵役、立役、實事、女方等を兼ね、戯曲に通じたるなむ。歌右衛門の江戶にある時仲藏と顔合せをしてゐる。

○いざ　いざこざ。ぐづ〳〵。

○八町堀　京橋八丁堀。京橋川を挾んで北に本八丁堀、南に南八丁堀あり。西は日本橋の本材木町より東は三ツ又川を以て靈岸島と相對する細長き町筋、

か。〔歌〕インニエ、今は來ねんせんが。〔長〕ぬしの所へ來たか。〔歌〕イヽエ、外の女郎衆の所へ、來ねんしたよ。〔長〕そんなら吉らも來たらう。〔歌〕吉さんとはえ。〔長〕あいつがつれでの、※いきすぎた口を利く奴よ。〔歌〕エヽ引そんならあの鼻すぢの通つた、中ぜいのちつとやせた方の、色の白イ男かえ。〔長〕それよ〳〵。〔歌〕そんなら來ねんした。しかも染さんといふ女郎衆の所へ、來ねんしたが、能う口を利きねんすとサ。〔長〕能く知つてゐるの、そんなら主もあいつらが、一座へ出たか。〔歌〕イヽエ、わつちやア出はしいせんが、時さんと言つた客しゆが、よつぽど久しく、わつちが所へ來ねんしたが、一座ぢやアなかつたが、ぬし達をも知つて、ゐねんしたが、是れも去年から來ねんせん。〔長〕フウ時か〳〵、來ないぢやアあるまい。やつぱり來るだらう。〔歌〕ナアニサ、ほんに今ぢやア來ねんせぬよ。〔長〕夫れはいいが、どうぞして※飯を一ぱい働山は、出來まいかの。〔歌〕持つて來てあげいせう。と かつてへゆき、茶漬ぢやわんへ飯を盛りつゝ、茶椀に茶をくみて來る。〔歌〕モシエ、なんにもござりいしないヨ。そして茶も、いつそぬるくなりいした。〔長〕よし〳〵、是れは※有難山のほうちんたん。と 茶づけにしてさら〳〵〔歌〕もつと持つて來てあげいせう。〔長〕インニヤ、もうよしにしよう。※腹も身の内とやら親類とやらだ。〔歌〕よういろ〳〵な事を云ひねんすぞ。〔長〕アイ似てサ。〔歌〕だれにえ。〔長〕※豆藏にサ。〔歌〕ぬしも、さう思ひねんすかえ。〔長〕モウおつ付け※八ツだらう。寢る事にしよう。〔歌〕能うねたがりねんすのオ。〔長〕ついでに、小便をしてこよう。〔歌〕知つてゐねんすか。〔長〕すこしはおぼえ山。と いひなか

○いきすぎた口　馬鹿に尖がつたわざとらしい口の利き方。
○飯を一ぱい働山　飯を一杯欲しいから働いてもらひたいが出來まいか。山は遊里の通言。
○有難山のほうちんたん　北山の豐心丹のもぢり。豐心丹は京都の北山、卽ち大和國添下郡西大寺村の西大寺より製出せるもので、「雍州府志」には「爲救諸人之疾苦製斯藥」とあり。
○腹も身の内　腹も自分の身の一部分であるから大食をつゝしめといふ意の諺。
○豆藏　見世物に出て滑稽役をするもの。
○八ツ　午前二時。

○こはもてに勤める　手强く仕向けられては恐ろしいから氣に入るやうに勤める。
○さまよオー　目出度、目出度の、若松樣よ、枝も榮ゆる葉もしげる」
○七分過ぎ　一刻を十分した七分。依つて、七分過ぎといふと約一時間半過ぎで、此處で八ツ七分過ぎとすると、午前三時半といふ事になる。
○橋でまひ　橋手前の訛。橋は境橋今の品川橋にて、その手前北は甚だ吉、向ふ(南)は次なりといふ。
○ざつ　立居振舞の粗野なもの。自分を卑下して云ふ。
○地犬がざしきへ出た樣で　野良犬がちやんとした座敷へ出たやうなもので、相應しない
○おききさま　直樣。すぐさま
○神明・宿　神明は芝飯倉神明宮地内。宿は本宿、新宿。
○青梅さんとめ　青梅で出來る機留まがひの着物。

ら、大きなあしへらは草履をはく。歌は鼻緒がのびて、めいわくな事とはおもへども、さらもいはれず、そのうへさのみおもしろからぬ客なれども、忠治が達といひ、殊にわるくしたらば、やかましかあんと、こはもてに勤める。
女 小便所から歸りながら、ウタ「※さまよオ引、さまよがどうした。と唄ひながら、「こつちの内は、とんだい、普請だ。そりやアよかつたが、小便所のあかりが、いつそ暗く、なつてゐたから、ついころばうとした。そしてもう※七分過ぎだ。とんだ時分までおきて居た。又あすが辛いぞ。客 ぬしやア能く方々を、歩きねんすさうだねエ。女 なアにサ。客 それでも先刻、忠治さんと噺しねんしたを聞きいした。藤ひろやとやら、ぴんしうやとやらへ馴染んで、いきねんすさうだの。その内はどこだえ。客 ※橋でまひサ。ひつきやうやしきの衆がござつたから、こゝらへ來た樣なものの、おいらはじたい職人だから、とんだ※ざつだによつて、しよせん大見せへ揚つちやア、ほんの事だけれども、※地犬がざしきへ出た樣で、むまがあはず。夫れでも女郎衆がたかぶられると、何だか※おききさま、胸糞がわいて來てから、一チがいにたゝきこはしたくなるから、やつぱりうしやア牛づれ、南か新地か五町めへ行くと、むかふでもてうしがあふといふ奴だから、こつちも面白く遊ばれるといふやつよ。歌 モシエ、大がいに人をもあてねんし。いかに私らが樣な、ざつな者だとつて。女 そりやアない。ほんの事ツたが、どうしても※神明だの※宿だのといつては、女郎衆のけんしきが、一ツたい高くつての、おいらがやうな、※青梅さんとめ野郎の玉蟲といふ客のあがるにやア、どうでおよびがない。そりやアさうと、ちつと寐よう。歌 そんなら寐なんし。客 早くおこしてくんな

んし。〔歌〕どうか、わつちもねると知らねいよ。

結ぶえにしの體

夫れにはあらぬ、幸治郎が床のありさま。〔琴〕モシエ、お氣にやア入りいすまいが、どうぞ御ふしようながら、こつちへ寄つておよつておくんねんし。ぬしの様なじやけんな客衆をとると、いつそもう風を引きいすよ。〔幸〕そんなら、かうするのかえ。〔琴〕どうでありいすか。〔幸〕扨もむづかしいは。〔琴〕そんならもつと、むづかしくしいせうかえ。〔幸〕どうえ。〔琴〕爰へ手をやつて、えりの所のあかない様にして、おくんねんし。〔幸〕アイさやうなら、かう致しやすかえ。〔琴〕モシエ、ぬしやア見申した様でありいすが、たしか前にこつちへ來ねんしたねイ。〔幸〕とんだ事ばつかり。〔琴〕どうだか知れねい。しやうわるだから。〔幸〕コリヤアきつい迷惑。いつ性悪を致しいしたえ。〔琴〕だらうといふ事サ。きついお氣に懸りやうだね。すねにきずをもつて、さゝはらを走るとやら。〔幸〕アイおかたじけ。能くいい名を付けておくんねした。〔琴〕アノ菊さんの客しゆは、どこのやしきだえ。〔幸〕丸の内サ。〔琴〕なンだかむづかしさうだね。〔幸〕何サ、あれでも女に懸けては、ばんばの忠左サ。しかし菊さんとやらが、能くしてやつて、くんなんせばいいが。〔琴〕あの子は、どうもちつと。〔幸〕どうした。〔琴〕ちつとだから。〔幸〕とは。〔琴〕ちつとうぬぼれだから。〔幸〕ム、さうらしいよ。〔琴〕夫れでどう

○御ふしようながら　御不承。おいやでもありませうが。

○すねにきずをもつて　身に後暗いことがあると、風に鳴る笹葉の音にも心臆して走り出すといふ意。

○おかたじけ　有難う。

○ばんばの忠左　番場忠太であらう。「ひらかな盛衰記」によれば、元暦元年源義經が木曽義仲討伐の際、義仲の側室山吹御前は幼兒駒若と共に京都の桂の里に逃れた。その隱家を襲うたのが梶原景時の郎等番場の忠太である。その後も山吹御前を追つて大津までも行つてゐる。こゝは女を追ふと云ふ所から女好きの意にとつて言つたのではあるまいか。

○ちよく／＼ら　お座なりの口の旨いこと。
○おりは　おりる機會、
○どうでこんにやア云々　どうせ今夜はねんごろなもてなしにはあひますまいが。ごしんは御深にて御深文字の略。ねんごろなことをいふ女詞である。
○おいため　いためつけ。やりこめ。
○ちい／＼もゝんぐわア　子供を脅す詞。傀儡師が人形を遣した後、箱の中から山猫と稱する獸の皮を取り出し、かう云ふ詞で見物の子供を威すのである。此では獸めがの義。

だらうか。【幸】困つたもんだ。どうもあの衆を連にすると、そんなことが氣に成つて、おもしろくない。【琴】ハアそれで、こんにやア面白くないのかえ。お氣の毒や。夫れでも所に寄つて、面白い所もあらうけれども。【幸】そりやアない所サ。この上に何が不足で。【琴】モシエお氣に入らずば、いらない。と、ぢきに言つておくんねんし。おなぶりはお許しよ。主のちよく／＼らにのつたら、※おりはがあるまい。※どうでこんにやア、御しんにやアあひすまいが、どこぞの女郎衆の名代と思ひねんして、御ふしようなすつてお遊びねんしておくんねんし。【幸】是れはきつい※おいため。【琴】そしてネ、今度お馴染の所へお出でねんしてネ、このおうつきあひで、山瀧やへいつたが、あすこのすべた女郎が、かういつた。あアいつた。と、お噺しねんして、お笑ひはお許しねんし。【幸】ヨウロがまはる事ツさネ。私どもは、寧そしよしんな者だから、その樣にいひねんすと。【琴】どうしねんすえ。【幸】いつそほれるといふことサ。【琴】なンでありいすえ。たいがいにしなんし。といひさまきせるをふり上げる。【幸】ア、／＼あやまりました。そんなら今度からほれますまい。【琴】なンでありいすのオ。馬鹿らしうありいす。もう靜かにしねんし。【幸】だれが騷がせる。【琴】あの※ちい／＼もゝんぐわアが。【幸】べらぼうではないさまよ。【琴】アイわつちやアべらぼうサ。べらぼうの女郎を、能く見立てねんして、いいおてがらサ。【幸】おてがらだから、もう／＼むだをいはずに、ア、／＼ねむい／＼。【琴】寐かし申す事は、なりいしない。【幸】なせえ。【琴】主やア寐に來ねんしたかえ。【幸】知れたことサ。

○いけ　あつかましいを一層强める詞。いけぞんざい、いけづう／＼しいの如し。

○しげりやう　ひそ／＼睦しくすること。共寝すること。

○睫の御用心　睫までぬかれてしまふから、警戒せよとの義。

○山だしの猿　田舍から奉公に出たばかりの者。

〔琴〕ハアをかしいのオ。わつちやア又遊びに來ねんしたかと思ひした。〔幸〕モウ能いかげん遊んだから、ねるのサ。〔琴〕ハア遊びにも、加減があるかねイ。〔幸〕なくつちやアさ。〔琴〕なンでも、爰へ寝かし申す事は、なりいしないから、ねたくば、らうかへでも出て寝なんし。〔幸〕そんなら、さうしやせう。といひながら、おき返る。〔琴〕ム、、※いけあつかましい。起きてどうしねんすのだえ。〔幸〕らうかへ出て寝るのサ。〔琴〕寝かしさうな物サ。さあ行つて見なんし。とのしかゝりて枕をふり上げる。〔幸〕嘘だ／＼。どこへもいきやアしないが、旦那衆の所へ、些と勧めて來よう。〔琴〕勧めもいいかげんにしねんしヨ。もういつだと思ひねんす。どこでもみんな寝んしたよ。〔幸〕夫れでもいかざあ、又やかましからう。〔琴〕まゝにしねんし。さつきから能くねてゐねんしたよ。〔幸〕そんならよしにして、おいらも寝よう。〔琴〕人がねれば寝る物かえ。〔幸〕寝るものサ。〔琴〕そんなら人が死ねば、死ぬのかえ。〔幸〕生きらばもろとも、死ぬはてん／＼サ。〔琴〕すきなことを、云ひねんすぞ。〔幸〕アノ歌さんとやらは、面白さうな女郎衆だのオ。〔琴〕アイ、面白い女郎衆サ。取持つてあげいせうかえ。ほんに性悪だのう。〔幸〕それだとつて、ほめまいもんでもないのサ。あの長七といふやつは、とんだ自惚の、いきすぎな奴だが、こん夜は、※とんだしげりやうをしやがつた。〔琴〕歌さんは、わつちらとは違つて、上手な女郎衆だから。〔幸〕オヽ、コハ、まだぬしの上に上手かえ。ほんに恐ろしい。※睫の御用心／＼。〔琴〕アイ、わつちらは、きのふ爰へきいした、※山だしの猿だから。〔幸〕夫れで人を、ひつかく

○烏が……月夜だから　[illegible]の「[illegible]集」に一夜の夜泉に共に逢ふ夜[illegible]、下夜鳥を[illegible]、[illegible]いな、月おやごんせぬしら〳〵と明の鐘」。

のか。琴なンにも知りいせんから、ぬしのやうな、上手なおかたさんの、しこみに逢ひいしたら、よつ程能くなりいせう。もしえ、人にばつかり口を利かせて、寐なんすいかえ。といひながら鼻紙を引きさきてこよりをこしらへ、幸が鼻へクス〳〵。幸クヽ、ムヽ〳〵、エヽわるい事ばつかり。もう〳〵かんにん〳〵。どうもねむくツて。琴その筈さ。とこぞへいきねんしたら、夜の明けるまでも、ねむくはありいすまいけれども。幸アレ〳〵、もう烏が。琴なアにサ。ありやア月夜だからサ。幸とんだことを、けふは晦日だものを。琴それでも女郎に誠があるから。幸ないが聞イて呆れる。琴そりやアおたがひサ。とやかくする内しばらく噺もしづまりしが、その内のわけはしらず。やがて表のくゞりぐわら〳〵、幸そりやアこそ、いせやの迎へだらう。琴よう早く皈りたがりねんすぞ。幸それはさうと、いつ来ようと言つて、来たためしが。幸有つたらどうする。琴とうしいせうか。その時の事サ。幸そんなら、あすの晩は。琴しばらくかんがへて　一いいは。幸サア〳〵いかう。琴待ちねんし、まだやしきの客しゆも、起きもしなんせぬに。といひながら、たばこすひ付けて出す。幸ハテその少し早イ所が勤めだけ。あすの晩はまた、おれが気儘の遊びにしよう。琴ほんに、どうぞお出でねんしよ。幸されば。琴そんなら、皈さないよ。幸うそ〳〵、眞に来る〳〵、これがマアどうして、来ずに居られよう。琴エヽ。といひさま、幸がせなかを、幸園あいたタ。

○しこなし姿　何やら振舞ふ樣子。

○山吹　茶。

○煮花　煎茶のいれはなにて、初の中の香味の最も好い頃のもの。

馴染の體

〔里〕はなにやらしこなし姿、夜著引つかけて、〔里〕みどりや、モウ湯はわいたか。〔禿〕よオうく湧きいした。〔里〕そんならノ、その山吹を、よオうくはうじて入レや。〔禿〕どれえ。〔里〕エ、モウこの子は。それナ昨日、道さんの所から來た茶よ。〔禿〕エ、是れかえ。とたんすの引出より出す。〔里〕ム、それよ、それをよオうく焙じて入れやヨ。忠治は座敷々々を勸めて來たり〔忠〕オ、寒い〳〵、是れみどり、酒を熱く燗をしてくりや。〔里〕よしにしや。〔忠〕よしぢやアない。早くもつてこうよ。〔里〕それ程醉ツて居て、まだ呑みねんすか。みどりや、てうしをそつちへ持つていきやア。そして茶は出來たか。〔禿〕もう出來いした。サアあがりいし。〔忠〕まだ茶を嬉しがる年でもないのサ。〔里〕アレ聞きやア。茶をせんじねいけりやア、せんじねいとつてこごとをいふ。煎じればまた何のかのと。そんなアにも人が嗜りたいものかのオ。〔忠〕おいてくれろ。やい人達とだらう。道とやらが來た時にやア、茶でも煎じて呑ませたがいい。おいらにやア煮花までいかずとも、出來合のお茶でも、ちつとつよ過ぎる位だ。〔里〕コレおまへも、あんまりなことを云ひねんすぞ。いかにこつちで、自由にされて居るとつても、そして又、そこに寢ずとも、こゝへ寢ておくんねんし。と手を取つて引きずる。〔忠〕アイ〳〵、まだ腰ぬけにもなりやアしせぬ。あがつても能くば、布團の上へでもやねの上へでも、あがりいせう。〔里〕みどりや、

あんどうをそつちへやつて、こんろへすみをついで、いつて寢や。〔忠〕コレ〳〵みどり、茶を一つくりやア。〔禿〕コヽ、モウ、先刻に年寄ぢやアなし、茶は厭だと云ひねんしたから、なりいしない。〔里〕能ク言ツた能ク言ツた。さうだぞ。〔忠〕その時はその時よ。をがむから、たんと汲んでくれろよ。〔禿〕そんなら、あやまりねんしたか。〔忠〕あやまつたよ。〔禿〕なンでも、おいらんを、またいぢめねんすまいか。そんなら汲んで、あげいせう。〔忠〕やかましく※きたへずとも、はやく汲んでくれろよ。〔禿〕茶を汲んで來て、「そんならおやすみねんし」と、障子をたててゆく。〔里〕コレ忠さん。なぜマア此のごろォ、久しく來ねんせぬ。そして又こんにやア、なぜあんなアに、大勢つれて來ねんした。〔忠〕しげ〳〵通へばお客のじやま、つれを連れて歩くはしやうばいづくサ。それでお氣に入らずば、來ない許り。よしやきたとつて、※おさきに許り遣はれて、さのみなさえもないものサ。〔里〕なンと云ひねんす。いつぬしをおさきに遣ひいした。サアいひねんし。〔忠〕いつだか、そつちにも覺えが有りさうな物サ。〔里〕※せんどの晩の事か。〔忠〕夫れ許りでも有ルまい。〔里〕その外にやアないはずだが。その晩の事は、腹をたちねんすが、もつともの様だけれども、能く※つもつて見ねんしよ。〔忠〕つもるのつもらないのと、雪ぢやア有るまいし。どうで御しやうばいづくだから隨分錢のある人を大じして、あきなひをたんとなすつて、※御部やの御機嫌の能イやうに、なすつたがいいのサ。〔里〕コレマア能ク聞きねんしよ。わつちが身にも、ちつとはなつて見ねんし。〔忠〕お安い御用だが、今ぢやア生れ替ら

○きたへる　鍛へるにて、いぢめる意にとる。
○おさき　先棒の意。人の手先に使はれる。
○せんど　先度。さきだつて。さきごろ。
○つもる　心に積る。とつくりと考へる。
○御部や　内所のこと。樓主。

れまい。〔里〕道さんは面白クなくつて、わつちがいやで逢ふ事は知ツて居ながら。〔思〕ハアおいらは、逢つて見ないから、面白いか、悲しいか、いやだかおうだか知ツたかサ。〔里〕それでも、あの道さんが來レばこそ、マアかうして、※部やをもどうやらかうやら、持つて居られるやうな物ノ、外にといつちやアひツとりも客衆のない樣に、それもみんな、おまへがしねんした事で、おかげでネ、此のやうにつまらねい身にまでなりいした。まだその上に、道さんでもしくじつたら、どうするもんでありいせう。せめて道さんが來ればこそ、どうなれかうなれ、おまへの名あてにして、紋日の一チ日も仕舞ツたり、若い者へもときどき心付けも、なるやうなもンだに、わつちだとつて、どうしてそんなアに、金が出來るもんだえ。折角二三度も來て、どうかためにもなりさうな客しゆだと思へば、なンのかのと言ツて、みんな切レさせて、人にやアせつない目をさせて。〔思〕さうもいふな。なんぼ出來ない金でもナ、うぬが買ひたい人をば買ふぢやないか。〔里〕いつだれを買ひいしたえ。〔思〕だまりやアがれ、知るまいと思ツてか、このぢうもナ、藤とやらいふ色男を。〔里〕コレあんまりな事を言ひねんし、その日は雨が降ツて、どうも歸られねいから、それでおいたのサ。居たとつても、なンにもこつちの世話になる客衆でもなしノ、何しに又あんな男を醉狂に、買フもんだえ。好きもしない。客ひでりはしまいし。〔思〕ハアひでりがしないから、おいらを※ふるのか。〔里〕おどけぢやアない。人をやかましくいふのも、大がいにしねんし。

○部やをも……持つて　女郎が自分の專用の部屋を有してゐること。かういふ女郎を部屋持女郎また單に部屋持といふ。

○ふる　ひでりにつけての洒落。

てまへの事は棚へあげて置いて。〔忠〕何ヲ。〔里〕何をそらッたばけねんすな。をとゝひの晩は、なぜ他へいきねんした。〔忠〕どこへ。〔里〕のめ〳〵とした顔で、どこへとサ。喰ひ隠しをしねんすか。といひさまつめり上げられて、〔忠〕アイタ〳〵〳〵。いつたよ〳〵。〔里〕サアなぜいきねんした。〔忠〕その晩は麻布のやしきから、附合でどの國やへ、ちよつといつた許りだ。〔里〕ちよつとあがつたものが、あしたの朝歸るものか。〔忠〕おきに歸ツたよ。〔里〕そんなら、なぜ寄りねんせん。人をふみ付ケて、なぜすぐ通りをしねんした。〔忠〕あんまり遅く成つて、こつちの見せも仕舞つたから、それでおきに歸ツたよ。〔里〕かへらないが聞いて呆れらア。〔忠〕やかましいはえ。〔里〕そのやうに、人ばツかりいぢめて、やかましく言つて、手まへはしやうわるをして、とんだ蟲のいい仕方だのオ。なにを喰ひねんしてもあたりやアしまい。〔忠〕能くあてた。夫れだから、富を附ケても、紋付をしても、ねつからあたらない。〔里〕それまだ口を利きねんすか。とまくらをふり上げる。〔忠〕コレよせやい。なンにもたゝかれる覺えはない。〔里〕是れがないものか。なぜどの國やへいきねんした。〔忠〕イイツ一ど許りは、いくまい物かサ。とけんくわのさいちうへ菊來り、〔菊〕里さん、久しいもンだの。あけてもいいかえ。〔忠〕誰だ。〔菊〕おれだよ。〔里〕ふざけたのオ、俺だとヨ。〔菊〕ふざけてもいいよ、本に〳〵いつでも來ると、やかましいのオ。どつちもどつちだよ。なンのたいもない事をいひやつて、腹を立チやつたもンだのオ。〔里〕茶を呑みねんし。〔忠〕茶よりやア酒を。〔菊〕おれも飲みたいが、みどりめが、てうしをもつ

○どの國や　津「つ」の國やか。[illegible]に「[illegible]津の國[illegible]」とあり。

○富　富を。

○たいもない　他愛もない。やくたいもない。

て行ッてよこさない。【菊】みどりぢやアあるまい。ひさしい。又からかひだらう。【忠】それはさうと、こんにやアの客しゆは、やかましからうが、どうぞ能クしてやつてくんなよ。【菊】なンだか馬鹿らしいのオ。今度から、もうあのやうな連衆は、よしにしなんし。いつそ人をば寐かしもしないで、しんざうしゆでもあげたかなンぞのやうに。【忠】そこがおたのみだ。よしさんだとおもッて能クしてやりなんし。【菊】ハアまゝにもしやせう。よしさんのこつた。【里】アレ見ねんし、舌を出して笑つて居るよ。【丁】ドレ、大ぶン長い舌だのオ。ちつとやけぎせるを。【忠】拜ム／＼。おまへを笑ふのぢやアない。※べかつかうのまねをして見たのだよ。【菊】イイノサ。人にやアあんな人をつれて來ていいおあそビさ。【忠】おどけぢやアない。御賴みだよ。【菊】知りいせん／＼。なんぼお賴みでもいや／＼。こんな所に居て、人の中のいいを見るのもいやだから、はやクいつて、かはいい色男を抱いて寐よう。はやく夜が明けりやアいいのオ。【里】アヽよしてくんなよ。【菊】※ちくるゐめら。しげりくされ／＼。【里】マアいいはな。一ツぷく吞みねんし。【菊】※かいだうゆづけの、義理一ツぺんの御ちそうは、よしにもしやせう。おさらばよ。お望みのとほり、まだ夜は隨分ながイから、ノ、※よつぴといくせつをしての、またあした一日、※かげ見せでの、ゐねむりをして、新造衆やみんなになぶられての、せつながつて※身あがりでもしねんしよオ。と しやらじをびつちやりとたてつけてゆく。【里】菊さんが、氣の毒だのオ。【忠】ひさしい。あいつがうぬぼれだから、たま／＼はそんな事もいい。【里】アノ琴さ

○べかつかう　指で目の下の皮を引いて目の内の赤い部分を見せること。べかかう。あかんべ。

○ちくるゐ　畜生ども。

○かいだうゆづけ　海道湯漬。又海道茶漬ともいふ。通り一ぺんの意より來る。

○よつぴとい　夜ひと夜か。

○かげ見せ　五一〇頁參照。

○身あがり　自分で玉代をつけること。

んの客しゆは、何屋だえ。〔忠〕材木やだ。〔中〕おとなしさうな人だのオ。〔忠〕オヽおとなしいの段か、月に三度程づつの勘當で、いひわけをも、通ひでする。と いふ所へ、幸治郎小用のついでに立ち寄る。〔幸〕どうだ忠公、きついもんだの。〔忠〕だれだ。むす子か來や。〔幸〕寒くつて、ねむくつて。〔忠〕だがそんなゐをしろとよ。〔中〕モシおはいりねんし。〔中〕お茶でも汲ンであげいせうか。〔中〕おかたじけ、おゆるしねんし。〔忠〕コレ幸や、澤様はどうさしつた。〔幸〕大のえて〳〵。〔忠〕なせだか、さつきもおれがざしきへごごつたが、女郎衆がしやくとやらせん氣とやらが、おこつたとよ。〔中〕困つたもんだのオ。あの子は惡くする氣ぢやアないが、ほんにけふは、癪がおこつて居たよ。〔忠〕ぬしやアこれでも、おとなしいからいいが。〔幸〕親玉のは。〔忠〕是れも同じく、いつもながらだが、こんにやア菊さんを、あつた賴みに賴ンだから。〔幸〕よし〳〵、オす寒い。行つて寐よう。〔忠〕いくか。〔幸〕さばよ。〔中〕お休みねんし。 幸治郎はかへる。〔忠〕どうもあいつも、色男が身のあだで、どこへいつても、さうおうにされるから。〔中〕琴さんが、いつそ の、ほれて居るよ。〔忠〕さうだらう。うぬもいやぢやアあるまい。〔中〕そんな事は知らないし〳〵。ばかをいはずと、マア能ク聞キなよ。〔忠〕何ヲウ。〔中〕おどけぢやアないがの、せんどの晩、部やでノ。〔忠〕どうした。〔中〕若イしゆを呼ンでの、お前の事を聞イたとよ。〔忠〕おれが何の事を。〔中〕せんたいかのしよにんがノ。〔忠〕だれが事つた。〔中〕エヽモウ知レたことサ。〔忠〕ムヽ〳〵、かの女郎めか。〔中〕ウヽヨ、あいつがな二のかのと、ざんそうをしたといふ奴サ。

○だが　誰だ。

○えて〳〵　えてとは得手勝手の略。言ひはなうまいか。

○しよにん　訴人のなまり。人を卑しめて云ふ。

○ざんそう　讒訴。人の事を言ひけなすをいふ。

○御門がむづかしい　門限がきびしいとの意。（既出五〇一頁）

○ほん　本當。

それで部屋で、權八に聞イたものサ。それでもあの人が、いつそおまへの事をひいきにして、ようオく思つて居るから、旦那のまへでの、あの客しゆは、茶屋衆も能ク呑込ンで、なンにも氣づかひな人ぢやアござりません。といつたよ。夫れで内でも、構はないさうだ。それだからちつと、足をも遠くしての、おとなしくしねんしよ。〔恩〕エヽ何をならべる。やい、だがナ、そんな事をいふものだ。〔里〕ほんだよ〳〵。謔ならば誰にでも聞いて見ねんし。きくさんも歌さんも知ツてゐねんすよ。又こつちの内のやうに客をやかましく氣を附ける内はないよ。〔恩〕アヽとんだむづかしい事つたの。もう〳〵そんなら、來ないい〳〵。こんにやアぎりだ。〔里〕そりやアなンの事ツたえ。〔恩〕來るからやかましい。〔里〕だが、來るなといつたえ。〔恩〕イイツ、もう〳〵大概にしろ。アレ迎へがきた。たうとうゆうべも寐かさない。〔里〕まだ早イはの。〔恩〕俺がようぢやアない。おやしきは御門がむづかしい。〔里〕そんならいつ來る。〔恩〕知れる物か。〔里〕それぢやアいや〳〵。なんでも歸しやアしない。〔恩〕馬鹿をいふな。ヤイしげ〳〵來レば、惡いといふ。どうするといいのだ。〔里〕そんなら、あさつての晩に來ねんし。〔恩〕どうでもしよう。〔里〕ほんだよ。〔恩〕ウヽ〳〵。

大抵御覽

朱樂菅江

序

東西々々是なるは當世花のお江戸の三景、大抵御覽あられませう。最初書き置ましたるは、三橋亭と名に高き、今を盛りの今戸の織殿、次なるは中洲の景色、見世物、芝居、あづま風呂、すみ屋、四季庵、水茶屋の掛行燈に火を點じますれば、夜分の態と變りまする。次なるは高田水稻荷に落髪をうづめて築たる三千丈の新富士山ちやうど合て三箇の勝地、相違あらざる自筆の實景、首尾ようまゐりますならば、作者は喜悦の思ひをのべ、本屋は多くの金をのべ、おばゝ氣をのべ、腰をのべ、ヨウイのばしてにならしやんしよと、口三味線にのするは誰ぞ。朱樂館公の御館にて味噌鹽の世話までやく四方赤良お釜の前にどつさりと序す。

【四】

家莊 雨國

○四方赤良　大田蜀山人の狂名。寛延二年江戸に生れ、狂歌の中興の祖といはる。文政六年歿。享年七十五。

似山往來

日來避レ暑河湖一侍之刻、浮ニ舟三叉江上一、曳ニ杖待乳山頭一。藥湯掛湯瀧十尺、織殿高樓庭二坪、是彼相考西郊新富士今度無レ出ニ來焉一。貴下翔ニ翔書肆際一、滅多爲レ忙拙者、爲ニ貴下一敢憂之有ニ大抵御覽一而可レ洗ニ濯焉一。仍遂ニ吹噓一侍。頓首謹言。

麺侍　朱樂宿寐

進上　書林某兵衛殿

返翰しばらくこゝに略す

○似山往來　不可通の義。

○河湖　隅田川の北。

○麺侍　野武士の意であらうか。

こゝに漢張軒博望といへる俳諧の宗匠あり。このんで諸國行脚をなし、こゝと住居はもとより定めず、此頃江戸へと志して、穀腹抱へてはる〴〵と下つふさの國庵崎にいたる。時分もよしと葛西太郎、暫こゝにやすらひて、鯉の羮飽までくらひ、一盃のんだる機嫌にまかせ、鬢があつたら四五日は、髪ゆふ世話もあるまいと、つぶやきながら都鳥、眞赤に成て宵と見、いざことゝ椀をつき出して、河原の方へぞ立出る。藜の杖に笠木計、こゝぞ晋子が雩を思ひ出して遙拜し、此里人を呼かけて名所々々を尋れば、こゝは牛島牛の御前、あちらに白髭こちらの森、岸へそひしは梅若なりと、時刻うつせばわたし守り、もしその様にぶらついては、早日も暮る舟にのれ。サアとく〳〵とせたぐれば、さらばと乗てむかふへあがり、又河づらをふりかへりて、水にうかべるあの鳥の、名をば何ぞと尋れば、面倒さうに渡守、何であらうとうつちやつて、沖の鷗で候と、言捨にして漕もどせば、これさ〳〵と呼もどす。よし鷗とも千鳥足、蹴つまづいたる河原の小石、これ

○漢張軒博望　前漢の博望侯張騫の名をもぢつての作名。張騫は武帝の命を受け、大月氏に使して、匈奴を挟撃せんとしたが、途にして匈奴のために捕へられ、居ること多年、遁れて大月氏に使したが、大月氏は匈奴を撃つの意がなかつた。古代に於ける大旅行家として知られてゐる。

○殼腹　空腹。

○下つふさ　下總。

○庵崎　もとは紀州の隅田川附近にあつた茅生崎、約して庵崎と云ふ。武藏の隅田川が名高くなつてから、紀州の名所多く此に移され、待乳山、庵崎等の地名を生じたと。然し庵崎の名は後世多く『隅田川の道行』に用ひられてゐるがために、江戸の庵崎はいづくと判定しない。或は云ふ秋葉權現附近と。此では其の說に從つてゐるらしい。

○葛西太郎　向島秋葉へ行く土手の下り口にあつた川魚料理屋。もと村中の番人にて、土手下にゐて鯉を賣りしが、やがてこれを料理して客に供した。江戸にて番太郎と云ふものだとの說がある。小唄に「葛西太郎の洗鯉」とまで云ひはやされ、『江戸名所圖會』には此あたりの圖が出てゐる。

○鬢があつたら四五日は云々　鯉汁は髪を黒くすると云ふをかける。宗匠は坊主頭となつたから、若し鬢があつたらはと云ふ意。

○眞赤に成て宵と見　都鳥の嘴と足とが赤色なると、宵の色の赤いのこと。

○いざことゝ椀　在原業平の「名にしおはゞいざこととはん都鳥わが思ふ人はありやなしや」を椀に引きかけた駄洒落。

○笠木計　藜の杖に笠をかぶるべきを、三圍神社の鳥居の笠木へつゞけたので、此の鳥居は土手から見ると、笠木ばかり見えるからである。

○こゝぞ晋子が雩を　晋子は寶晋齋寶井其角。其角の雨乞の句「夕立や田を見めぐりの神ならば」

○牛島牛の御前　古へ此邊入海なりしかば其間に寺島・牛島等の島々あり。牛の御前社は本所及牛島の鎮守にして、祭神は素盞嗚尊。

○白髭　寺島村の鎮守。神體は慈覺大師の作と云ひ傳ふ。

○梅若　木母寺、梅若塚があるので知られてゐる。

○せたぐれば　身を立つれば。

○沖の鷗　都鳥は鷗のこと。

を取上つくづくと見れば、是にぞ足を縛石、青石にして白き筋、くるりとめぐる二筋は、奇異な石ぢや此石を、硯にしたらばよからうと、捻り廻せば側より、最前一所に乘合ひ、何様山伏ちよつとさつ首さし出して、乾兌離震巽かんがへれば、博望大きによろこびて、これはゆゑある石、御考へ下さるべしと、頭陀より出す十二銅、首ひねつてぞ居たりける。しばらくあつてかの修驗者、横手をうつてこれは不思議、こゝらの近所に織殿の、まさしく有と覺えて候、石をとつくり見ますれば、河東美人天帝女、機のおもしに置たる石也、機織女に賜らんと、天より是を落し給に、けんたう違て此河原に、落たる物と覺えたりと、當りも有また見通しの法印、いとまごひしてわかれゆく。博望跡にて思ふ樣、長の旅行に持歩行も、さりとは厄介捨てようより、七夕つめのはむきもよし、これを織殿へ屆んと、あつちこつちと尋ねつゝ、待乳の山へ至りければ、夕こえくればあやはとり、きりはたり／＼と音する家を、立寄てうかゞひ見れば、門たかく高樓かけはしはなれ座敷、玄關構の眞正面、三橋亭といふ額を、たかくかけしはゆゑあるさま。おづ／＼のぞいて案内をこへば、御上りなさいと内からいふに、ずつと二階へ通りければ、これへ／＼と案内し、跡から出るは浴衣に前垂、菓子など出してにこ／＼とお茶をと出す素手の白きは、翁心にもすこし心をうごかせば、御吸物でも御膳でも、何でもかでもよりどつて、十九ばかりのぼつとりもの、あたりを見れば天人の、おとしだれやらうるはしき、娘と一所に三絃

○山伏　修験者。山に臥す者の意で云ふ。
○さつ首　素首。
○乾兌離震巽　易の卦の算木の面に現れる兆象で、乾、兌、離、震、巽、坎、艮、坤の八つがある。ここではこれを助数詞として用ひたのである。
○頭陀　頭陀袋、首にかける袋。
○十二銅　十二文。
○河東美人天帝女　天の河の東にある美人で、上帝の女、牽牛星の妻。「牽牛星在天河東、織女在天河西」と見えてゐて河東とはない。織女、一名天女、又天孫と名づく。
○見通し　見當へ引きかけての洒落。
○七夕つめ　七夕姫。
○はむき　歯向き。七夕姫にかけても。
○待乳の山　もと紀伊國にある山の名を淺草の東北にある小山の名とす。隅田川に臨み、上に聖天を祀る。
○夕こえくれば　辨基法師の歌「待乳山夕越えゆきて廬前の角田河原にひとりかもねん」これは紀州の隅田川にての詠なれど、待乳山と云ふ名から、待乳山夕越えゆきてと云ふ「夕こえくれば」とつけることになつた。
○あやはとり　漢織、呉織と共に古、漢土より渡來せる織女の名。

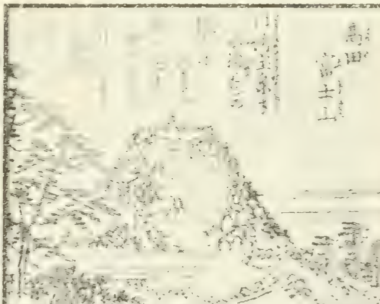
箱、あそこに豊後こゝにめりやす、空に花ふり音樂きこゆ、段々座鋪を見物すれば、げに物干でも有さうな所に、庭とは思ひもよらず、左りへゆけば大きな洞穴、千尋の底に人聲あり、聲をしるべに下りゆけば、漸あかるき所へいづる。こゝは御勝手大取込、お縫の道行みるやうなと、獨語して見あるけば、池の邊にたて出せし、座敷の數々滿座の客、江戸の豪華を感心して、表の方へ立出れば、最初這入し玄關にあらず、五百機たてゝ、織なすおりもの、七夕つめもそこのけと、いはまほしげの風情なり。仰げば上にあやはとり、くれはとる手も手際な手つき、げに手もたゆくぞ見えにける。博望こゝぞと懷より、最前の石とうでて、これ天帝の御女、七夕つめの支機石とて、はたをさゝふる石なるぞや、我諸國行脚の砌、槎に乘て吹流され、天の川原へいたりしが、天帝此土のことを聞食んと、いろ／＼とはせ給ふにより、此織殿のことまでも委く申上ければ、御感のあまり此石を、重重と故郷へ持歸り、三橋亭へ屆けよと、石よりおもき仰を蒙り、則これを屆るなり。石のかたちは人間にひとしく、めぐりし筋は帯に似たり、筋ある帯地を織出して、三橋織と名づけなば、目あらずして巨萬を積ん、努め／＼うたがひめさるゝなと、辯舌盡してかたりければ、此家のあづかりなるべしと見えける男罷出て、ねんごろに一禮なし、いろ／＼もてなし、種々いたはり、今夜一宿あるべしと、ひたすらいへど博望は、かたく辭退に及ければ、それより舟にうちのせて、中洲のわたりへ送りける。それより段々三叉の涼み、

○きりはたり　異織に引きかけて機織る音を云ふ。
○浴衣に前垂　酌婦のさま。
○翁心にも　老人の心でも。
○御吸物でも御膳でも　接吻でも抱擁でも。
○ぼつとりもの　ぼつちやりとした女。
○あそこに豊後こゝにめりやす　豊後は豊後節ではあるが、此頃では常磐津節を云ふ。めりやすは小唄より長く、長唄より短き唄。
○空に花ふり音樂きこゆ　謡曲「羽衣」に「虚空に花降り音樂聞こゆ」。
○御勝手　料理する臺所。
○お縫の道行　「太平記忠臣講釋」の「道行人目の重縫」。石堂右馬之丞の子息造之助、大星力彌、遊女浮橋等が宴席にて道行を踊り、夜討曾我の狂言を演じ、觀劇氣騒ぎをなす。文中にも「今宵は縫大臣様の御趣向で、歌舞伎やら狂言やら、たまつた物かやござりませぬ」とある。
○五百機　澤山の織機。
○手もたゆく　手が疲れて。
○とうでて　取出して。
○あづかり　支配するもの。
○中洲・三叉の涼み　後出。

○吾妻風呂（後出）
○高田の富士（後出）
○千早ぶる　いちはやぶるにて、神の枕詞。勇ましく強い義。
○朝和波・夕波尊　伊弉諾、伊弉冊尊のもじり。
○新大橋　『江戸名所圖會』に云ふ、「兩國橋より川下の方、濱町より深川六間堀へ渡す。長さ百八間あり。此橋は元祿六年癸酉始て是をかけ給ふ。兩國橋の舊名を大橋と云ふ。故に其名によつて新大橋と號けらるゝとなり」。また『風羅袖日記』に「元祿五申年の冬、深川大橋なかばかゝりけるとき、初雪やかけかゝりたる橋の上、芭蕉。同じく橋成就せし時、ありがたやいただいて踏む橋の霜、同」とある。
○鍋のぞき　鍋の中に煮てゐるものをのぞき見る。
○三叉江の川上　新大橋の下今云ふのところを云ふ。淺草川と箱崎の間の流との分れ流るゝ所である。明和八年中流を埋めて人家とし、中洲と稱す。夏時納涼の地として繁昌し、兩國は火の消えた如くなつたが、寛政元年洪水の時に便惡しゝとて又もとの如くの川に掘立てられて、此地の繁榮は又兩國に復つた。此の所は其の繁榮時の中洲を寫したものである。

吾妻風呂の有樣迄、くはしく歴覽なしければ、次に高田の富士の緣起、一見なしける兩所の由來、日記にとめたる趣を、則末にしるすにこそ。

千早ぶる神代のことにやありけん、朝和波・夕波尊、新大橋の上より、鍋のぞきの樣にのぞき給へば、淺草川の川下、三叉江の川上に一ツの洲あり、則こゝを中洲といふ。その洲雞卵のふは〳〵のごとし。尊大きなる銅杓子にて、これを掻廻し給へば、忽ふは〳〵凝て新地となる。扨うまさうなる地面かなと、朝和波の尊の給ひければ、夕波の尊曰、所の地祇に命じて、種々の食物を仕込せて、たかまの腹の



へつた時は、四季折々に天くだらんとの給ひしより、四季庵の生簀魚みちて躍り、すみやの乙女袖を飜してまねく、きん〳〵たる衆中は河洲にあがり、ぶき〳〵せぬ麥飯は丸屋でしこむ、唐和の卓子臺は四ッ足の數に入らず、魚飯の臺所は三まいにおろして料る、藤よしへ這入ば松源で迯る、あちらが四こくの讃岐屋なれば、こちらは武藏川越屋、樂庵の座敷ふさがれば、福壽は門さして賣切たり、今を日の出屋だん〳〵福富、松は葉かへぬ常盤屋に、夢に見てさへ三茄子や、丹波やかみ様いそがしく、常陸や大酒どや〳〵來る、その足もとはよろ萬屋、どんぶり大鉢臺の物、大盡舞を見さいなと、松が門のどつさくさ、いく萬年屋家々の、榮えはてしも奈良茶見世、定て神慮に叶ふべし、さればよ夏も半過、此二ッまたの三ッはぐみし、白髮たる老翁あり、汀に暑さを凌んと、釣をたれてぞ居たりける。尊御夫婦、この翁をつく〴〵と見給に、白髮亂ておごのごとし、たゞ口計むぐ〳〵と生て居るとはしられける。尊翁の膝もとへよらせ給ひ、翁の年はいくつぞと、問せ給へばふりかへり、されば候此翁、あんまりの長生に、年もいくつか忘て候、しかし蒼海變じて桑田となり、中洲變じて新地となること、凡十四五度迄は覺えたりと申ければ、尊又々背中

○雛卵のふは〳〵　『日本書紀』に「混沌として雛子の如し」。
○四季庵　以下の固有名詞は料理茶屋の名稱。
○魚みちて躍り　『孟子』卷之一に「王在㆓靈沼㆒、於〔ア、〕物〔ミチテ〕魚躍」。
○きん〳〵　洒落者。
○河洲にあがり　『詩經』國風篇「關關雎鳩、在㆓河之洲㆒、窈窕淑女、君子好逑」をもぢる。
○卓子臺　『倭訓栞』に「しつぽく――蠻語なるべし……高三尺餘、幅四尺餘、四方朱漆にて塗て、緣に斑竹を打、四隅に獅子の形の脚あり。廻りに紅白の紗綾を垂る」とあり。
○三まいにおろし　魚を三枚に割いて料理する。
○三茄子　吉夢に「一富士二鷹三茄子」。
○丹波やかみ様・常陸や大酒　丹波守、常陸太守を駄洒落たるか。
○よろ萬屋　足もとがよろ〳〵するところへ引つかけて云ふ。
○臺の物　大きな臺に載せて出す料理。
○大盡舞を見さいな　古い大盡舞の終の句に「大盡舞を見さいな」とあるのを取る。

○奈良茶見世　はてしもないに引つかける。奈良茶飯屋。茶飯あんかけ豆腐一流の安飯屋。『嬉遊笑覽』卷十に「『事跡合』（考明曆大火の後淺草金龍山待乳山なり）門前の茶屋に始て茶飯・豆腐汁・煮染・豆等をととのへて奈良茶と名付て出せしを、江戸中はしばしよりも是をくひにゆかんとて殊の外めづらしき事に興じたり」。

○三ツはぐみし　三つに結んだ。
○おご　おごのりといふ海草。
○蒼海變じて桑田となる　蒼海は滄海。時勢の甚だしく移り變ることをいふ。『神仙傳』に「麻姑謂㆓王方平㆒曰、自㆓接待㆒以來、見㆔東海三變爲㆓桑田㆒」。

をたゝき、いつの神代の生れぞととはせ給へば、翁がいふ、亂髮七代老爺五代、是皆翁が出生後なり、翁もとより夏まけすれば、此江の邊に數萬年、住居をなして候と、口をむぐむぐいひければ、成程夏は川邊のこと、こつちで計涼ますと、八百萬の神々も、年々こゝですゞしめんと、神樂の歌をぞつくり給。

神樂うた

春はうたゝね氣をのべ紙で、――木枕氣をつけてさせてやろ、ヨヲヽイさせてにならしやんせよ、

夏は涼みにやかたをつけて、――棹でつきや、櫓をとりや、ヨヲヽイとりてにならしやんせよ、

秋は月見に約束しても、人にまたせてまだ〳〵と、うそをつく、ヨヲヽイつきてにならしやんせよ、

冬はゆきの夜さぞさむかろと、いくど火鉢を氣をつけて出しかける、ヨヲヽイ出してにならしやんせよ。

とうたひかなでしより、年々ふえし乙女子は、

千代吉　歌吉　若吉　おぬひ　おてる　佐野吉　おかの　鶴次

しげ吉　豐吉　吉次　政吉　伊勢吉　美濃吉　おぎん　菊次

○亂髮七代老爺五代　天神七代地神五代の地口。
○夏まけ　夏に弱る。
○神樂の歌　神前に於て、琴・笛。歌舞等に合せて歌ふもので古來三十七曲あり。主に榊・幣・杖・篠等を題材とす。
○春はうたゝね　春はうたゝねするからのべ紙で木枕を拭つてそれに寢せてやらう。のべ紙は小形の松原紙で鼻紙として用ふ。文字は卑猥のやうに聞えるが意味はさうではない。
○夏は涼みにやかた　やかたはやかた船。之も船を棹で漕ぐことを云つたばかりで、意味はそれだけで別段のことはない。
○ぼつとり娘　前出（五三七頁）。
○常磐津文字繼　此娘の常磐津に於ける名取りの名。
○ゆかり　常磐の松に緣あるところから。
○舟か〳〵と呼かけるは　船に向つてお寄んなさいと呼び立てるのであらう。
○五月二十八日　兩國の納涼も此日に始る。
○吉野、兵庫、川一、高尾、

かね吉　大吉　宮吉　おます　おたみ　富吉　おゆき　小吉
此吉　梅吉　初吉なり　藤本堂　十寸見堂

これ天乙女の世話やくなり、ますみを號して辰公といふ。されども神慮に叶ひしは、ぼつとり娘のお幸也、これなん常磐津文字繼といふ、神樂を奏す乙女子の親玉といひ、常磐津のゆかりによつて、玉松亭といふ。角か／＼と呼かけるは、

玉松亭　布袋屋　八幡屋　海老屋　銚子屋　夷屋　富岡屋　大黒屋
西宮　嶋屋　三升屋　相撲屋　藤本屋　丁子屋

それより五月二十八日、川邊に出茶屋建並て、此川づらを見おろせば、吉野、兵庫に川一、高尾、夷、一川漕並て、淨瑠璃、長うた、こわいろ、をどり、人形づかひ、猿廻し、數萬の挑灯綺羅星のごとし、玉屋、鍵屋の玉火、流星天をも衝ぬく風情也、でんがく、しぎやき、かば燒、酒、西瓜の立うり、瓜、夏桃、あなたこなたへ漕ちがふ。さて又陸には砂場そば、にしき團子に大佛餅、いくよ餅に蛇目鮓、ゆで枝大豆に唐もろこし、錐のたてどもなかりけり。うしろに見ゆる大のぼりは大坂下り早崎京之助、蜜柑といへる人間か鳥かわからぬ上竿奴あり。こなたは鶴一身ぶりこわいろ、小供狂言、硝子細工、其外種々の見物に、諸人の足をぞとゞめける。汀の出茶屋は九十三軒、

伏見屋　小松屋　山吹　夷屋　備後屋　二葉　太田屋　若松屋

夷、一川　皆屋形船の名。
○綺羅星　月無き夜に煌めく無數の星をいふ。
○玉屋、鍵屋　幕府の用をつとめた火藥商で、花火屋。玉屋は後に將軍家日光社參の折に火を失して江戸追放となりて衰滅したが、花火を賞するときには今猶玉屋鍵屋と連呼するを常とする。
○しぎやき　料理の名。茄子に油を塗り、これを火に炙つて味噌をつけたもの。
○砂場そば　深川砂場蕎麥。
○大佛餅　淺草並木町の兩國屋にて京名物の大佛餅を眞似て賣つたのである。京都のは、京極通誓願寺門前で賣つてゐたが、後に東山の方廣寺大佛殿の前でも賣るやうになつた。
○いくよ餅　兩國にあつた餅。幾代は其店の主婦の名と云ふ。
○蛇目鮓　東兩國常盤町にあり。又日本橋魚河岸にはその屋臺が出てゐた。
○錐のたてどもなし　立錐の餘地もない。
○早崎京之助。蜜柑。鶴一　孰れも輕業師の名。鶴一は身振聲色を以て名があつた。

丁子屋　いせ屋　奥州屋　桐屋　松よし　大和屋　若葉屋　上總屋
長崎　藤よし　扇屋　成瀨屋　升屋　伊豆屋　相摸屋　さゞ波
松坂屋　鶴川屋　明石や　笹屋　湊屋　三河屋　桔梗屋　大村屋
蔦屋　菊本屋　千年屋　大和屋　福富屋　宮城野　市川や　駿河屋
丸屋　小島屋　高麗屋　紀伊國や　丁子屋　武藏や　幾田屋　若菜や
相摸や　龜甲屋　さゞ波　扇屋　鶴屋　松よし　大和屋　若菜や
若松屋　いせや　増見屋　八ツ藤　越前屋　奥州屋　桐屋　森川屋
上總屋　今村屋　山本屋　平野屋　相摸や　おじまや　豊竹屋　金井屋
龜屋　中村屋　いせや　かし浦や　いね田屋　ことぶき　八橋　伊豆屋
松村　梅松　松枝　小川屋　岡田屋　藤屋

毎日毎夜此所であつさをさくる、諸人の往來は盡ぬ此繁花。さて又こゝに藥湯あり、名づけてあづま湯治といふ。これは此頃此所で※陰神陽神、※庭たゝきといふ鳥に、※ひよんなることを習ひ給ひ、陰神大きくあつくなり、無性にのぼせ給ひければ、御のぼせを引下んと、藥湯を以て御洗足つかひ給ひしことよりして、終に此湯ぞ始りける。そも／＼此藥湯のはじまりは、先祖は樂調經といふ唐人醫者、此湯をやたらに浴びければ、百四十九歳をたもつたり、今又※長崎梅見まで、段々家に傳來して、これを朝晩あびければ、ことしで九十八

○陰神陽神、庭たゝきといふ鳥に云々 「日本書紀」卷一、神代第五一書に、「陰神先唱曰、美哉善少男、時以陰神先言故爲不祥、更復改巡、則陽神先唱曰、美哉善少女、遂將合交、而不知其術、時有鶺鴒、飛來搖其首尾、二神見而學之、卽得交道」と

○庭たゝき 鶺鴒。

○ひよんなること 怪體なこと。

○長崎梅見 當時の湯屋の主人であらう。

○ゑんじゆ 槐。荳科に屬する落葉喬木で、垂直に數丈に榮える。葉は藤に似て長さ一寸位の葉を結ぶ。きふぢ、ゑにすのきともいふ。

○にれ 楡。寒地に產し、春に花を開き、莢を生じ、而して後に葉を生ずる。樹の內皮を藥用とする。

○黄帝 傳說上の支那開國の君主で、漢方醫學の祖といはれてゐる。

○藿香 くわくかう。植物の葉で、大きく、厚く、毛茸があり、五つのきれめがあり、邊は鋸齒狀になつてゐる。香氣のある葉で香料、藥料として用ひられるが、舶來のものである。

○大黄 だいわう。支那原產の多年生草本で、高さ六七尺に達し、夏時、中心より丸い葉を出す。葉は根の上に叢

蔵也、これを世上へ廣めんと、とう/\こゝに風呂をしつらふ。保養湯は三夂、つぼ風呂といひ、又清淨湯共いふ。藥方は、

ゑんじゆの枝　にれの枝　くはの枝　もゝの枝　やなぎの枝

又痛所持病には、吾妻風呂にて浴するなり、一名黄帝のうり家風呂ともいふは、上り湯なし、その藥方は

藿香　大黄　芍藥　縮砂　川芎　甘草　當歸　輕粉

莪朮　薫陸　升麻　茯苓　木香　良姜　滑石　沈香

防風　檳榔子　丁子　紅花　肉桂　人参小

生じ、根を胃腸の薬とする。

○縮砂　縮砂蔤（しゆくしやみかくじ）の略。阿蘭陀より到來せる植物にて、下痢止に用ふ。

○川芎　せんきう。高さ一二尺の草で、葉は夏の芹葉に似て、枝が多く、淺緑色で香氣が高く薬用とする。

○甘草　かんざう。荳科の草で、高さ二三尺。花は豆の花に似て、淡紫色。莢を結ぶ。根を薬用とする。その内部は黄色にて甘味を有す。

○當歸　たうき。芹の一種。高さ二三尺。夏季枝の頭に小白花簇り開いて傘の如し。根を薬用とする。

○輕粉　甘汞、又は、はらやといふ。鹽素と水銀との化合物。飲薬とす。

○莪朮　がじゆつ。印度地方に產する薑科の植物で、根莖を乾燥して製する。健胃薬、矯臭劑に用ふ。

○薫陸　くんろく。くんりく。熱帯樹の脂で、盛夏に沙上に流れて凝り固つたものといふ。印度、波斯等より輸來する。南蠻松脂とも云ひ外科の薬用とする。味苦し。

○升麻　しようま。あはぼとも云ひ、春の草で、葉の形蕎の如く宿根より叢生する。秋の末、長き穗をなして花を開く。根が薬用となる。

○茯苓　ぶくりやう。黒松・赤松に寓生する植物。利尿、水腫に効があるといふ。

○木香　もくかう。阿蘭陀国から渡來した薬。薔薇科の蔓性植物である木香の根を乾したもの。

○良姜　りやうがであらう。

○滑石　くわつせき。白色の鑛石。

○沈香　ぢんかう、一名伽羅（きやら）。熱地産の香木で香料とする。

○防風　ばうふう。高さ三尺許り、芹に似て、夏秋の交に、小白花を開く。根は牛蒡に似て薬用とし、頭痛、霍亂を治す。

○檳榔子　びんらうじ。檳榔樹の實にて澁味のある甘さを持ち、生食、又は薬用とす。

○丁子　ちやうじ。熱帯樹の丁香の實。肉桂に似た高さ二三丈の樹にて、その枝端に花が簇り開く。香極めて高く、蕾むとそのまゝ赤く固まつて實と變ずる。丁子は小さい釘の如き形にて、香料、薬料となる。

○紅花　べにはな。古名をくれなゐなどいひ、又は摘花ともいふ。菊科に屬する草にて、葉葉に薊の如き刺があり、仲夏、枝の末毎に花を生ずる。薊の花に似て紅黄。その蕊を摘んで紅を製す。又薬用ともする。

○肉桂　にくけい。熱帯産の桂の根幹の皮を取つて薬用としたもの。

○人參　にんじん。根を薬用とす。朝鮮產を貴とし、古來萬病の靈薬とせらる。こゝは小人參（ひげ人参の俗稱）の如し。

それより按摩導引八ッ子の瀧、これ則上り湯也、又みたらしの瀧といふあり、これは神風や御裳濯川の流を汲みて、筧を以て是を落す、これにて湯あがりの口をそゝぐ。又香をきかせてのぼせを下げ、又若き女四五人居て、浴する人のとりあつかひをして、此湯の講釋くはしくする也。尤俗へ通ずるため、しかた噺にさせるがよし、いはれをきけば有がたしと、諸人此湯をしんずるもの多し。よし又不慮に穢るゝとも、跡にて此清淨湯にて清めるとは、さて氣のついたることども也。此湯いく風呂はいらうが、晝の四つからくるゝまで、勝手次第のことなれば、その引附の案内の茶屋、それ吸物よ肴よと、座敷へはこびつ下げつすれば、つい取落す吸物わん、三ッ椀菓子わんわんわん／＼といふのは、これやゑのころ島、ひたものさはる手にあし原、枝もさはらば落附の、吸物好なたのしみも、秋津すき／＼蓼くふ蟲、蟲養ひの御保養には、こゝにまさつたことぞなき。げにやむかしもかかるためし、唐の帝の溫泉宮、ちつとはそれにも似た物烏、烏のぎやうずゐする樣に、ちよつと入てはきゝめが見えず、湯めぐりならぬ水のほとり、めぐりめぐれる群客は、又とたぐひは夏の遊、偏に此地にとゞめける。

東武城西高田のうま場の側に、長四郎といへる隱士あり、みづから郭橐駝に比して、種い樹ことを以て業とす。少時より富士淺間を信じ奉りて、年ごとに夏秋兩度づつ詣侍り

○導引　揉療治。按摩に同じい。
○みたらし　御手洗水「みてあらひし」の略。神前の、手を洗ひ口を嗽ぐ水の意。
○神風や御裳濯川　伊勢の五十鈴川。神風は伊勢の枕詞。こゝは湯水を形容した詞。
○しかた噺　身振をしながら話す、
○不慮に穢るゝとも　飛んだ出來心に思ひがけなく身體を汚すとも。
○晝の四つ　午前十時。
○ゑのころ島　おのころ島の地口。ゑのころは犬の子。わん／＼に引つかけて云ふ。
○ひたもの　ひたすら。
○枝もさはらば落附の　枝もさはらば落ちん。
○秋津すき／＼　秋津は蜻蛉、蓼食ふ虫もすき／＼に。
○唐の帝の溫泉宮　唐の玄宗皇帝の驪山宮、楊貴妃と遊浴したところ。
○烏のぎやうずゐ　入浴時間の短きこと、烏の行水するが如しと云ふこと。
○湯めぐり　三圍の地口。本所小梅に三圍神社がある。
○高田のうま場　寛永十三年此

しが、既にして大先達と稱す。春秋つもりてこゝに七十、古來稀なる信者也。年來此山に攀ること五十五度、山の中腹をめぐるを中道といふ。なべての先達中道をするもの稀なり、長四郎中道をすること三十餘度、時にふれて山の上おどろ〳〵しうあれて、あらゆる行者ふるへをのゝくの刻も、大先達長四郎侍と、たからかに名乘れば、忽山おだやかに晴れわたりて、一點の雲なし、まことに淺間大ぼさちの、これや妙慮にかなへるなるべし。今や志千里にありといへども心のほつする所のりをこえず、たゞ鉢植を扣て伏櫪をうたふ。さすれば杖をひくとも莽蒼に過ぎず。ことし安永八己亥のとし、近きわたり戸塚村稲荷山の別當寶善寺の境内に、淺間大菩薩を勸請せんと思ひたち、諸人の脱髪をこゝにうづみて、二月三日より富士行者何がしをはじめて、かたはらの山をきりたひらげ、その土を以て新規に山のかたちをきづく、それより老若男女を論ぜず、うぶごはふこにいたるまで、われも〳〵と土をはこぶ、力すぐれし壯士は、十人前も一人ではこび、或は一もつこう或二もつこう、又やごとなき姫御前も、紙につゝみてそれ〴〵に、多少を論ぜず土持し

に馬場を築き弓馬調練の處となすと云ふ。將軍襲職の初には嘉例として此地に流鏑馬を興行す。

○郭槖駝　唐の柳宗元に郭槖駝傳あり、郭氏と云へるものせむしにて、駱駝の如く背中が曲つて高くなつてゐる。此の人植木の術に長じてゐた。此では植木屋を洒落て稱したのである。

○富士淺間　淺間神社は現在は靜岡縣大宮町にある。祭神木花咲耶姫命。もと社殿を作らないで、富士山を神體とし、淺間大明神と號したが、大同年間初めて今の地に鎭座された。

○大先達　登山の時先行する案内。其うちでも最も經驗を積んでゐたから大先達。

○古來稀なる　人生七十古來稀れなりに引つかけて云ふ。

○おどろ〳〵しう　騷がしく。

○志千里にあり　魏武帝の詩に、「老驥伏レ櫪、志在二千里一」。

○心のほつする所　『論語』爲政篇「七十而從二心所一レ欲、不レ踰レ矩」。

○鉢植　盆栽。

○伏櫪　馬が厩の中に伏すをいふ。櫪は飼料の入つてゐる桶。こゝは前述の武帝の伏櫪の詩を誦したといふこと。

○莽蒼　草原の色で「荘子」逍遥遊第一に「適二莽蒼一者、三飡而反」。

○戸塚村稲荷山　淀橋區内戸塚の水稲荷のあるところ。

○寶善寺　禪英山寶泉寺、天台宗。

○淺間大菩薩を勸請云々　『江戸名所圖會』に云ふ「高田富士山　稲荷の宮の後にあり、巖石を疊んで、其容を摸擬す、安永九年庚子に至り成就せしとなり。此地に住める富士山の大先達藤四郎（此書と異る）といへる者これを企てたりといふ。毎歳六月十五日より同十八日まで山を開きて參詣をゆるす、山下に淺間宮を勸請してあり」。

○うぶごはふこ　產子（生れ立ての子）、這兒（まだ立てないで這つてゐる子）。

○やごとなき　やんごとなき。身分の貴き。

て、だん／＼つもる一簣の功、終に九仞の山となれり。山は八葉洞のごとし、駿河の富士に正寫し、山をなづけて賽芙蓉といふ。それより大江戸四里四方、われおとらじと寄進するは、石の鳥居に黑木の鳥居、石壇、垢離場、手洗鉢、其外何くれそれ／＼に、みな人たのみをかけ。念佛聲のたえまはあらざりけり。麓中腹絶頂の社境の經營、日あらずして既に成就なしければ、扨こそ五月二十八日、何がし院法印くれがし院の阿闍利、あまたの權者打よりて、山の開眼を終れば、新たにたてたる神樂堂、天津乙女もいそがしく、目のまひ足のふみ所も、しらゆふかげにくれ殘る。あかいはかまの栁ごし、神樂の太鼓度拍子は、いつもどんどとなるがよし。諸人の信心、菩薩の妙慮、長四郎が本意とげさせ給ふ、ありがたしなどもいふばかりなし。山を領する御神には、中腹に小御嶽石尊大權現、麓に淺間大菩薩也。そも／＼淺間大ぼさつと申奉るは、大山祇命の箱入御娘、よい子の木華開耶媛、こゝに跡たれ給ふこと、みな人しれる所なり。まことや孝靈天皇五年、近江國琵琶の湖、つい一夜子をはらみしより、駿河の國の富士山、ひよつくりひよつと誕生せしも、今度の富士の出來事も、思ひまうけぬこと成かし。扨頂上は乾の峯、かゞやく日尊ふしをがみ、米勒が嶽の烏帽子岩、南無當來導師、どし／＼／＼巖をふみならし、いさむ心の駒がたけ、聖德太子を安置せり。こなたの峯には毘盧舍那佛、旭の大黑藥師が嶽、心の塵も打拂ふ、不淨が嶽の不動堂、さいの河原の地藏尊、六道のつけに反程な、嶮しきみねを踏わ

○一簣の功云々　『書經』旅獒「夙夜罔或不勤、不矜細行、終累大德、爲山九仞、功虧一簣」。之を逆にして用ひたのである。

○八葉洞　富士の形容。八葉の蓮華の開くが如きを云ふ。

○黑木　切り出したまゝの木。

○垢離場　水垢離をする所。水にて身體を清める場所。

○社境　[illegible]境内の事であるが、こゝはその社殿位の意味ではない。

○阿闍利　阿闍梨。僧の官名。

○權者　修驗者。

○開眼　佛家にて佛像落成の時に行ふ式である。此處では少し用法が變である。

○目のまひ　手の舞ひであるが、いそがしいから目がはまると言つたのである。

○しらゆふ　白木綿。しら手に引つかける。

○くれ殘る　紅に引つかける。

○小御嶽石尊大權現　御嶽神社は武藏御嶽山上にあり、大己貴（おほなむちの）命、少彦名（すくなひこなの）命を祀る。小御嶽とは東京府御嶽

けたる、※役の行者の跡を尋ね、わけゆく山の其かたちも、妙法蓮華經が嶽、その儘うつして富士詣、貴賤男女の差別なく、行かふ袖はみな月の、もちにふり袖つゞら笠、※九折より嶮し山、汗をかく※袖廣袖の、ひろい世界と申せども、こゝにや足のとまるそで、こなたにつらなる山のうへ、※毘沙門堂の側に、床几竝べし※大和茶は、幾代ふる木の松のもと、枝は茂れど麥藁の、邪魔にはならぬ日よけなり。見渡せばむかふに目白、早稲田村、※ながるゝ水は猪のかしら、末せきかねし關口の、瀧のしら糸音たえず、こゝに簀の子を汲たての、※ひやつこく吹凉風に、ばつたり暑を忘るゝなり。さて十五日より十八日まで、日夜をわかず群集なし、みな人ねんずる※ねぎごとの、偏に丹誠こり場より、落て流るゝ水茶やは

山にある御嶽神社を言へるか。同社は櫛眞知命、大己貴命、少彦名命を祀り、僧行基が社殿を興して御嶽大權現と稱した。石尊權現は神奈川縣大山町の阿夫利神社をいふ。祭神は大山祇「おほやまつみの」命。

○近江國琵琶の湖　孝靈天皇の御宇に富士山現出し、琵琶湖を生ずと云ふ傳說。

○乾　戌亥、卽ち西北の間。

○當來導師　當に來るべき世、卽來世を說く佛菩薩。

○駒がたけ　聖德太子黑駒に騎して、登遐し給ふと云ふ。

○毘盧舍那佛　大日如來のこと。眞言密敎の根本本尊。

○不動堂　不動は不動尊、又不動明王ともいひ、佛經の五大明王の主尊で、一切の障魅、諸障を降伏するといふ。

○さいの河原の地藏尊　さいの河原は小兒の死後に赴くといふ地獄のこと。早く親に別れた子供たちがこゝに來て石の塔を組上げておくと、惡風が出てこれを吹散し、それを集めて組まんとすれば、傍から火焰いでて、石も河原も焰につゝまれ、子供等も燒かれて白骨となる。地藏菩薩白杖を以て灰をかき寄せ乍ら經文を唱へると元の形になり、此の苦患を受けること九千歲に及ぶといふ說話がある。富士山頂にも賽の河原といふ所がある。

○六道のつけ　六道能化の地口。

○役の行者　修驗者の開祖。大和の人。苦行の末、鬼神を役する術を修得したといはる。寬政十一年光格天皇の勅號を賜つた。

○みな月の　「ふじの嶺にふり置ける雪はみな月のもちにけぬればその夜ふりけり」（萬葉集卷三）の古歌を引用す。

○つゞら笠　葛籠笠。市女笠に似て中の峯の低い笠。若い女の被つたもの。

○九折　九十九折の誤。

○かく袖　角袖。

○毘沙門堂　毘沙門天は佛經の四天王の一で、多聞天ともいふ。左手には寶塔を捧げて六道の貧民に財福を與へ、右の寶棒は十方の怨敵を摧く意であるといふ。

○大和茶　大和茶屋であらう。

○ながるゝ水は猪のかしら　承應年間井頭の池水を通じ、此地に堰を築く。天明六年の洪水にて堰崩れたので、再び之を築き其の高さを舊より一尺減ずと云ふ。

○ひやつこく　冷こく。つめたく。

○ねぎごと　願ひごと。

○守宮が娘でも云々　毘沙門堂の前に[illegible]、水中に石もり多し。[illegible]の黒焼は媚藥として知られてゐる。
○柳のかげならねど　「新古今集」の西行の歌に「道の邊に清水ながるゝ柳蔭しばしとてこそ立止まりつれ」。
○口で岩が根目でしら歯　口[illegible]目[illegible]の地口。
○しぎ焼　茄子に味噌を塗つて焼いたもの。「此場の仕儀」に掛けた。
○おさん五田樂　子供の遊ぶ戲に「おしやりこ傳兵衞」と云ふ語があるので、こゝでは茄子のしぎ焼に引きかけて田樂と云つたのではあるまいか。また「嬉遊笑覽」卷十に「田樂は田樂の曲に、高足とて竹馬の如きものを一本立て乘ることあり。その形に似たるをもて名とすることは誰もしれり。されども田樂の豆腐のきりかた、昔は今の如くにはあらず、古圖をみるに丸く切たるなり。今の茄子のしぎ焼の形に似たり。但一切づつ串にさすなり」。
○としも二八　娘ざかり。二八そばからの洒落。二八そばは「嬉遊笑覽」卷十に「衣食住記」に享保の頃還飩・蕎麥切、菓子屋へ誂へ、麺切にしてとりよせたり。其後麹町へうたんやたご

守宮が娘でもふりかけたやら、衆人愛敬これぞ柳のかげならねど、しばしと人のたちどまるは、口で岩が根目でしら歯、此場のしぎ焼やきたてを、持てくる間に手をとれば、にくいおさん五田樂ぢやと、それから段々團子のくし、櫛の銀むねおかさんと、げに鄙人の洒落さへも、所替ればしなのそば、としも二八としられける。池の汀のかけ行燈、蜘手にならべし腰かけは、心の駒下駄ふみならす、茶汲女の立姿、みれば三河の八橋なり。隣は大ていひえの山、二十チ許の中年增、鹽尻つきのしほらしく、名さへおふじといふなるべし。こんなおふじが唐土にもあろかと、はるばる來ぬる毛唐人は、徐福にあらぬ茶一ツぷく、これなん不老富士の藥、茶がまの下にて燒そめしは、誠や狂言かぐや姬、父の翁にのませしより、かの郭橐駝に比したる翁、千萬年の齡をたもち、かの蓬萊を背負てゐる、龜の甲より年の功、おいずしなずの藥をば、居ながら持藥にのむ了簡、是をたゞとりの翁といふ。

此冊子は借金の山が住ひの老翁の畠水練、水邊の見たこともないよしなしごと、嘘言は八百八百萬の神代の遊びのこと迄も、口にまかせしあて仕廻、ゆめ〳〵ほんにし給ふことなかれ。

四國の去多彥しるす

いふけんどんや出來、蕎麥切ゆでて、紅がら塗の桶に入、汁を徳利に入て添來る。其後、享保半頃、神田邊にて二八郎座けんどんやといふ看板を出す。（かゝれば、そばをもうどん桶に入れたり。二八そばといふこと此時始なるべし）」。

○蜘手に　蜘蛛の足の様に、四方八方に。

○三河の八橋　杜若の名所。腰掛の間の女の姿を杜若に見立てたのである。

○ひえの山　冷えと比叡山と。

○二十チ許　比叡山を二十も積み重ねたと云ふ富士の高さ。濤元「梅の春」にも「二十はかりも積み重ね、蓬萊山と視ふなる、富士を背中に家がための鹽尻長く居すわれば云々」とある。

○鹽尻　鹽浜で沙を圓く高く積み上げて、塚のやうにし、それに潮の水を汲みかけて、日に晒す。その圓い形を尻つきに見做したのである。

○徐福　秦の始皇帝の使として仙山に赴かんとして日本の熊野へ來たと云ふ傳説がある。

○一ッぷく　徐福のふくにかけた地口。

○不老富士　不老不死の洒落。

○かくや姫　狂言を書くから地口つて、竹取翁が竹の中から得た赫夜姫の名を用ふ。

○蓬萊を背負てゐる龜　繪圖などにある。

○龜の甲より年の功　俚言。

○たどとりの翁　竹取の翁の地口。

○畠水練　畠の中で行ふ水練の義。空理空論にて、實際の役に立たぬ議論。

○よしなしごと　くだらぬ言葉。つまらぬこと。

○去多彦　猿田彦のもぢり。猿田毘古とも書き、天孫降臨を天の八衢に奉迎先導した異相の神。又祭禮の時赤い天狗の面を被つて山車の前に立つて行く男をもいふ。

通言總籬

山東京傳作

敍

※彥國佳言を吐くこと、鋸木屑の如く、霏々として絕えず。粤に京傳※青樓の※通言を酸痟に呑こんで、頓に茶表紙の一冊を吐。是れ※鐵拐が仙術にあらず、※放下師の小刀にあらず。闇に引き出す※牛臺のこれを聞るに、※象牒中に顯れ、これを聽くに、言文面にとゞまる。實にも籬といへば、※朝顏の泣き腫らし囁廷り、中街に驛る駒下駄の音耳にちかし。※二十七明の長を慷慨ては花の蔫を愁ず。逢夜の短きを恨たる淸楊に昨夜の續癧を殘し、望ては穖久しき花を羨む。日々の笑顏、晚々の泣顏も、色無垢の衣領にさし入たる容に、鼓子花の閃屣も葡萄の色白なるも纏ひ咲く。總籬は善花街に通じて然も花實相對し、眞に腸を斷。我かの籬の下に店三絃の一チを打つて、※番新の萬を知るに至ずといへども、二と三ンの緖を肇、※猿人卿と共に京傳を愛の一曲を唱て、糸卷をチトひねること爾。

※文きやう自書

印 印

○彥國 不明。

○青樓 妓樓、遊女屋。

○通言を酸痟に呑こんで 酸いの實、思ははあはれに思ひ傷むの意であるが、こゝは頭腦くらゐの心持にて、通言を頭の中へすつかり呑込んでさいふのであらう。

○鐵拐 鐵拐仙人。

○放下師 手品師。

○象牒中に顯れ 有様、情景が書中に顯れ、

○牛臺 土臺に「牛」ぎうこの居るこころ、

○朝顏の泣き腫らしたる 遊女から花の朝顏を出し、朝起きの顏に轉じた。以下花といへるも花と人とを兼ねてゐる。

○二十七明 二十七歳の年限が來て廓を出ること。

○番新 番頭新造。

○猿人卿 狂歌師。

○文きやう 櫻川又は櫻井文橋。時鳥館主人と號し浮世繪師。

自序

我嘗いへること有、青樓は我爲の雪隱なりと。夫如何なれば、持たが病の腹痛に惱ミ、金屎をひらんが爲、尻をぼつ立て、此の鄙に通ふこと繁きが故なり。若貧客我が屎を喰ば驀黄金の蟯蜋とならん。一日例の長屎ニ退屈の餘り、此安作書をなして、かた屎の堅をして、びり屎のずるきに和らげ、世に其屎の撤樣を傳ふ。通客といふとも我が胯を覗ずして、何ぞ尻の穴の廣ことをしらん。吁屎が惘るにあらずや。于時天明七年丁未孟陬。

山東屋のひとりむすこ
京ばしの傳述 印

○尻の穴の廣き　尻の穴がせまいと言へば心の狹いことである。
○丁未孟陬　ひのとひつじ、正月。
○山東屋のひとりむすこ云々　山東京傳

○論語　ロンゴをリンギヨと訓するのは、足利時代の抄本に多い。
○損者三友　『論語』季氏篇「孔子曰、益者三友、損者三友、友レ直、友レ諒、友二多聞一益矣、友二便辟一、友二善柔一、友二便佞一損矣」。
○艶治郎　艶二郎は同じく京傳作の黄表紙『江戸生艶氣樺燒』（一二一頁）の主人公。

通言總籬凡例

○此書ハ論語ニ所謂損者三友ヲ以テ大意トス。蓋シ總籬ト題セルハ、流行ニ後レタル古句ノ雜无キヲ以ツテ也リ。
○艶治郎ハ青樓ノ通句也。予去々春、江戸生艶氣樺燒ト云、冊子ヲ著シテヨリ、已恍惚ナル客ヲ指テ云爾。因テ以ツテ此ノ書ニ假テ名トス。氣之介、志菴共ニ彼冊子ニ出ヅル所ノ名也リ。
○妹妓及雛妓少妓ノ言、其儘ヲ記ガ故ニ、訛ヲ不レ改、假名違ヲ正ザルハ、其音ノ訛ヲ知シメンガ爲ナリ。

京傳作
樓上奇談　吉原楊枝　全一冊
來春出版

其一

金の魚虎を睨んで、水道の水を、産湯に浴て、御膝元に生れ出ては、拜搗の米を喰つて乳母日傘にて長り、金銀の細螺はじきに、陸奥山も卑きとし、吉原本田の髮筆の間に、安房上總も近しとす。隅水の鮊も中落を喰ず。本町の角屋敷をなげて大門を打つは、人の心の花にぞありける。江戸ッ子の根性骨、萬事に渡る日本橋の眞中から、ふりさけ見れば神風や、伊勢町の新道に奉公人口入所といふ簡板のすぢむかふ、いつでも黒格子に、らんのはち植の出してあるは、芝蘭の友を旦那と稱ず。江戸がみの北里喜之介が住居、鮑魚のいちぐらに同じ門口、くだすだれの外に、仇氣屋のひとりむすこ〔えん次郎〕黄の無地八丈に、けんばふにてとめがたの小紋をおいた上著。三ツつゐに鳥かんたうの下著。紺縮緬のらせんしぼりのじゆばん。下著はみな黒なゝこのうらえり。うらは花色ちりめんのすそ廻し。胴らは白羽二重。身はゞひろき仕立。あはせばおりくろの無地八丈、まへ下りながき仕立。五丁ひももあやまるとかいつて、黒のひらうちのちよんがけ、帯はおなん戸茶どんすの小もやう。づきんをえりまきにして、中の町ざうり。八はたぐろのくつたび。花かいらぎのわきざし。かみはよし原ほんだ。すは町のおやぢがぬいたひたひ。二日めのさかやき。をしやう先へはいらつせえ。えん次郎かたへ出いりのたいこいしや、〔わるゐしあん〕黒ちりめんの小袖。おなんど茶なゝこのはおり。酒さびにてはなのさきあかく、ちかめなり。あさがほのあふぎにて、くだすだれかたむけ、喜のばうお宿か。えんさんが來さしつたよ。トうちへはいりみれば、あがりはなに女ばうのさしづをうけながら、あをちやのはげた布子に、もん所のついてゐるきれではんえりをかけたやつをきた小女、しもやけだらけな手で、たゝきつちのながしの上で狗に湯をあびせてゐる。〔小女〕かうしてゐるもんだよ。ぢつとしてゐや。アレごらうじまし。いつ

○金の魚虎・水道の水　江戸城天主閣。玉川・千川兩水道。但し金の魚虎は江戸城には無い。
○拜搗　米を搗く時に腰を曲げて丁寧に搗くこと。
○乳母日傘　乳母に抱かれ日傘をさしかけらるゝ意。裕福な家の子が大事に育てられること。
○細螺はじき　細螺の殼をはじく遊戯。
○陸奥山　陸奥に黄金花咲くと云ふより、金銀のふんだんにある譬に用ゆ。
○吉原本田の髮筆　吉原本田は髮の一種の結方。はけは、その毛の束ねた先である。
○安房上總　助六狂言のせりふにも「はけさきから安房上總が見える」とある。
○中落　骨のあるところ。
○本町の角屋敷　本町通りの角の屋敷は地權が高價である。
○大門を打つ　多額のお錢を費つて吉原の大門を閉める。
○ふりさけ見れば神風や　ふりさけ見るは振り仰ぎて遠く望む。神風は伊勢の枕詞である。
○伊勢町　日本橋。米・鹽の河岸で

そ嬉しがります。[女房おはせ] つやなしうへだ、あぶらじみた小そで、くろなゝこの幅のひろいはんえり、こびちやなゝこの帯。わきのはうへまはし、まへだれのかはりに、さらさのふろしきをおびゝはさみ、かみはいなぎむすび、おはぐろをおとして白歯、これはばんに、おはぐろをつけようといふ下地なり。まだ左衛門といふ字のつかぬかゝあ、此の女房むかしは松ばやのさるおいらんの、せわしんざうなりしが、年あけのゝち、かねて久しいいろきやくにて、喜之介が女ばうになりしなり。かみの毛のうすい所と、みゝのわきのまくらだこにて、あらそはれず。まだ里の言葉がやまず。そのまんま二かいの日あたりへつれて行つてほさせや。ヲヤ志庵さん、よくお出でなんしたね。えんさんかえ。此の間はお早々でござりやした。うちでござりやすは。ト仕かけた仕事をかたよせる。[えん] こゝのうちのながしは、松ばやの湯殿といふもんだの。[しあん] 本町の棚したもありやす。喜之助は中じきりのはしらによりかゝつてゐて、さみせんをしのびごまでひいてゐる。なりはつむぎじまのそで口のちときた、うらえりの小そで、もえぎさなだの、下タじめを帯にしてゐる。三味せんを下に置き、[喜之介] これはおそろひなすつて、さあこちらへ。[えん] でえぶねむさうな顔の。[しあん] 客をにがした新

ある。

○芝蘭の友　芝（靈芝）と蘭とは共にかをりの好い草。善良の友と交はれは善良な感化をうけることを芝蘭の化といふ。『孔子家語』に「與ニ善人一居、如レ入ニ芝蘭之室一。久而不レ聞ニ其香一、即與レ之化矣」とある。

○江戸がみ　江戸のたいこもち、末社。

○北里喜之介　前出。（一二二頁）

○鮑魚のいちぐら　鱐魚の惡臭あるを鮑魚といふ。いちぐらは商家の店頭に商品をならべておくところ。

○くだすだれ　又くだのれん。極めて細き竹を、二三寸に切り、その數箇に絲を貫きつゞりたるものを、數條並べたれて簾としたもの。

○けんばふ　憲法染。明暦年間京都から染め出したものにて、黒茶色に小紋を染出す型附染である。よつてとめ型の小紋と言つた。

○島かんたう　間道縞。

○らせんしぼり　羅紗絞り。絞り染の一種にて、絞糸を以て布を卷き絞る法。

○ちよんがけ　チヨツト間に合せにかける紐。

○八はたぐろ　八幡黒で八幡黒革の略。もみ革を黒く染めて、甚だ柔かにしたもの。山城國の八幡の地から産する故この名がある。

○花かいらぎ　鮫鞘にしたる鮫皮の地粒の中に、梅花の形の様な大粒のあるもの。

○すは町　淺草。町内に諏訪明神社あり。

○たいこいしや　幇間醫者。醫術は下手だが、たゞ人にへつらつて歡心を求め、世渡りをする醫者。

○あをちや　青色を帯びた茶色。

○たゝきつち　叩土。略してたゝき、又あはせつちともいふ。砂利、赤土、石灰に、にがしほをこね合せて作る。今のセメントを加へたものと同種。

○うへだ　上田縞（既出四九四頁）。

○こびちやなゝこ　こびちやは黒色を帯びた濃い茶色。その色のなゝこ織。

○いなぎむすび　『古契三娼』に「稲城むすびは、扇屋のおかねさんが、いひはじめた風ゥさ」。

○左衛門　嬶左衛門。

○松ばや　江戸町一丁目の角にあり（既出四七三頁）

○本町の棚した　日本橋本町、薬種店並ぶ。

○しのびごま　三味線の駒に物を挟んで、音を高くならぬやうにするのである。

○ちときた　ちと來た。ちと參つた。少々痛んだ。

○もえぎさなだ　もえぎは黄と青との間色。さなだは眞田紐で扁く織つた木綿の紐。

造といふ顔だせ。※丁子屋だと帳場でしかられたといふ顔だ。〔喜の〕ゆうべはつまさんの※茶ばんで、升屋へゐえりやした。※けさ八ツにけえりやして今おきやした。〔えん〕つまさんはやつぱり、深川のせかいかの。〔しあん〕おみなもが※うてきなやつだよ。このごろもどこかの番頭にかゝへを仕て、もらつたさうだ。（深川にて、かゝへをしてもらふは、吉原でしんざうを出すに、ひとしきことなり。）〔喜の〕此間も御供で尾多喜屋の、およふ、五介、鶴太夫、長二、おんす、仲吉、なぞといふ、※うざうむざうを引つれて、向島がござりやした。〔えん〕ときやうさんや、ぶんきやうさんと違つて、青ろうへはとんとござらねえの。俳諧と義太夫はきついもんださうだの。（トいひながらこしから※ゑち川屋が仕立の、※あんぺらの内ぬひ、りうさの※ねづけのついた、さげのたばこ入からきせるを出し、すひ付る。女房は※せんとくの火ばちにかかつてゐる。ひろしまやくわんの茶をついで両人へ出す。喜の介はよりかゝつてゐる。※たはらや宗理がかいた、きくのはん戸だなから、豆のはいつたこんぺいたうをいだし、）〔喜の〕これでもあがりやし。（トえん次郎が前へおく。）〔しあん〕えんさんが酒を飲まつしやらねえは、玉にきずだよ。〔喜の〕※めいよう、今の通は下戸さ。（トうれしがらせる。）しあんさんにやあいゝものがある。きのふ長崎屋のこはんが所から、※隅田川をもらつた。おちせ燗をさせや。併しさかなが何も、あんめえす。〔しあん〕※かん見まひのこぶ巻はなしか。あの鍋のは何んだ。〔えん〕よくげびをいふ奴だ。〔おちせ〕おいしい物ではなしさ。けさのおつけでござりやすは。〔しあん〕（ずつと立て、なべのふたをあけ、）おきやあがれ。とうふ汁がかじけてゐる。きつい※松葉屋の晦日どうふだ。こいつア冷くちやいかぬやつだ。〔喜の〕お疑ひは晴れやしたか。〔しあん〕う

○丁子屋　妓楼。
○茶ばん　一種の道化芝居。仕方、身振をもつて、軽口の事をする。立ち茶番、口上茶番などがある。
○けさ八ツ　午前二時から四時の間。
○がうてき　强敵。すぐれたること。偉い。
○うざうむざう　有象無象にて種種雑多な人物といふやうな意味で、侮つていふのである。
○ゑち川屋　袋物屋。上野池の端仲町、越後屋。
○あんぺら　『倭訓栞』に「本、席の蛮名たるを、妄に、ひめがまと云ふ小蒲の名とす」とあり。
○ねづけ　印籠・巾著の緒の端につけ、帯に挟み、腰に垂らす用をなすもの。
○せんとく　支那の明の宣徳年間に製した銅器・陶器などで、作品の名がある。銅器は黄色のからかね製である。
○たはらや宗理　葛飾北斎。
○めいよう　奇妙、奇佐、かはつたこと、不思議なこと等の意。
○隅田川　この当時の銘酒の名。寛政の川柳に「ありやなしやと、振つて

なぎを取りにやりは。〔えん〕どうだらうといふ事か。もういぢめるの。※ト金唐革のまへさげからなんれらを一片はふりいだす。〔喜の〕青か、白か。〔しあん〕やつぱり、すぢを、長がやぎの事さ。あを、白、すぢ、みなうなぎの名なり。うなぎくひのつう言也。女ばうは小女にいひつけて堀江町へ取りにやる。〔おちせ〕早くよ。〔喜の〕ときに、えんさん。京町の新造けえの色事も、※見だしになつたぢやあござりやせんか。〔えん〕それでふさいでゐるのさ。※二階のうちに、こゝのわりい女郎があるからよ。ト※住よし屋がはつた※青きんとやきがねのぬめざらがんの、のべの煙管で胸をたゝいて見せる。〔しあん〕せんてえ※萬ぎくにしよさをつけて、※とつしが相手にするからはいらねえはな。トちやかすやうにうれしがらせる。

〔えん〕けさも尾張屋の男が文を持てきたが、けいせいも※内しようと※達引になつて、引込んでゐるさうよ。何か哀れな※草笛入のうしろで讀まうといふ、文だつけ。トふたへづるの兩口の引きかけのかみ入れから、※やけばのゑづをみるやうに、みよしへべにずりの※半切へ書いた、文をはふり出す。喜の介はとつてひらき、として書た所からさきをよんでみる。何かいろ／＼な※てんとりを書、しよせん中の丁でのあひびきも氣をつけるだらうし、わたくしもたて引だから、江戸丁のかたをつけて、いつそ晴れて來てくれろと云ふ文てい。末にぜひ／＼といふ事が十斗かいてある。じつは番新とのなれ合で、えん次郎をいろじかけでよぶ狂言、此のごろはやる手也と、

みる隅田川」。

○かん見まひのこぶ巻 「実鋼のこぶ巻」に引つかけていふ。

○松葉屋の晦日どうふ 「傾城[illegible]」松葉屋瀬川の條に「三十日ヲウフノリヤウリ」とあり。

○金唐革 薄き獣皮に、種々の文様を押し出し、金泥で印したもの。もとは和蘭から渡つたものであるが和製が多い。

○なんれら 南鐐と二朱銀のこと。

○堀江町 日本橋。

○見だしになる 発見される。

○二階 高級の女郎の揚げ部屋は二階にある。從つて二階の女郎といへば高級の女郎。

○住よし屋 芝居茶屋の住吉屋。

○青きんとやきがねの云々 青金（金約六六％、銀約三三％の割に混じたもの、青味をおびてゐる）とやきがね（焼金、吹き分けて、混物なくした純金）とで毎日のやうに模様を出し象嵌。

○萬ぎく 山下萬菊。天明元年江戸山村座上演の「操歌舞妓扇」には、[illegible]子の稲川に對し女房おさはで顔を合はせてゐる。

○とつし 澤村訥子。澤村宗十郎の俳名で、初代から四代まで襲うてゐる。此處は三代目にて、大訥子と言はれたる人。寛政九年、中村座が初舞臺、享和元年三月沒。時代・世話共に適し、その長所は和事にあつた。特に大星由良助の役は古今無比といはれた。

○内しよう 内所。妓樓にて主人の居るところ。轉じて主人の意とする。

○達引 意氣地をはる事。

○草笛入のうしろで讀まうといふ文 草笛はしのぶえともいひ、横笛の七孔あるもので、芝居で哀れな場面の時に用ひられたもの。うしろとは舞臺で役者の所作をする間、唄ふのをいふ。

○やけばのゑづ 燒場の繪圖。火事になつたところを赤く塗つたのをいふか。

○半切 はんきれ。半切紙ともいひ、杉原紙を横に半分に切つたもので、書狀に用ひる。後には他の紙も用ふ。

○てんとり 歌・俳諧などで、點數の多寡によつて勝負・優劣を定めることをいふ。

さとつてゐれば、きのすけはふと い女郎と思ひ、よんでしまひ、【喜の】出戀のすゐせん、何かありがてえ句ね。あの女郎はたしかに半殺しに仕て置きなさると、仇をしやすにえ。【えん】やりてが云ふにやあ、はれてお出でなさるとも、二かいを御遠慮なさるともと、皮羽おりのひもを見るやうに、兩方へくゞらせていふから。どうもならねえ。かうなつて見れば、不便だよ。きつい事をきりかけもしめえから、江戸町のかたを付けて、いつそ表むいていつてやらうかとも思ふよ。【喜の】さうなされば、きついくどくさ。【しゆん】戀つれてむまい所、アヽ色男には何かなる。トそばにある三味せんを取つて、爪のさきでめりやすをひく。唄へ水無月も流れはたえぬ浮世のきしに、夜舟こぐてふふり袖のかほにまがきのあとつく程に、はでな浮名の手習も。くさめ〳〵のやるせなく。ゑちせ モシそのめりやすが此の頃ひゐめの有つたすがほとやらかえ。そのあとはどうだえ。【しゆん】泰琳が、めうに節をつけたよ。唄へ文のきさめの口ぐにも、ほかへ移さぬ心とは、神々さんもどこやらも、とうに承知であゐけれど、合方 ほれた證據をいつ見しよと、思やかたきし忘られぬ。忘られぬ身は思ひ出しもせぬほどに、思うてゐるぞえわしやほんに、察して下んせ。私が名に、おのじを付けて、いつかさて、つくろひのなき夏のふじ。【喜の】京傳がいつはいに、穿つた文句だ。【えん】かなやの白妙が、つゐせんのめりやすは、なにとかいつたつけの。【しゆん】それはなつ衣さ。【ゑちせ】花ぐもりは四代目の瀬川さんの、追善ださうだねえ。【えん】前の瀬川はどうしたの。【喜の】くわんのんの地内にゐやしたが、圍はれたさうでご

○出戀のすゐせん　[illegible]に通信で、[illegible]の句を一句出たことをいふ。その戀から揚屋ともつて來たので、女の方から男を呼んだことである。

○二かいを御遠慮なさるとも　二階の間である二階を遠慮して、下の廻し部屋などでお會ひになるとも。

○皮羽おり　なめし皮で作つた羽織。褐色、鼠色などに染めてある。

○戀つれてむまい所　[illegible]に鐘をかけて戀釣れてと云へるか。

○めりやす　一二二頁參照。

○かほにまがきのあとつく程に　まがきは、新吉原で店と揚屋との間に立てる格子、その格子に顔をあてて格子の跡がつく程押付けて、待ち佗び焦るゝ形容。

○くさめ〳〵　くさめをした時に唱ふるまじなひの呪文。この呪文を唱へなければ死ぬといふ言ひ傳へがある。命長かれといふ意味。

○思やかたきし忘られぬ　「おかたきし」は「からきし」にて、少しも、少しばかりもの意。……と思へば少しも忘られぬといふこと。

○つくろひのなき夏のふじ　つくろひは粧ひで、夏は富士の雪も消えて、地のまゝの形で見えるからかく云ふ。

ざりやす。［おちせ］玉の井さんはやつぱり仲町にゐるかね。あの子も不仕合だねえ。［しあん］さうださうさ。じめえださうだから、相應な所をみたてに出て居るのだらう。此中いくよしのおいさに、言傳をしてよこしたつけ。［おちせ］せんてえ、浮氣からおこつたことさ。［しあん］おめえのやうに喜のさんに情を盡した人も、あるにノウ。［おちせ］オヤばからしい。［しあん］吉原以來ばからしいを、久しぶりで聞いたはえ。ト　わらふ、女房ははごいたの茶はうじで、志庵をしたゝかたゝく。此のうちえん二郎は京町のいろ事のうはさればなし、喜の介は、ウ、ありがてえ、ウ、さうさと、いゝかげんに挨拶してゐる所へ下女はうなぎをかつてくる。女房はかんをする。［喜の］御心安いからそのまんまだしや。［おちせ］ヲヤそれでも。［えん］いゝはな／＼。ト　いふゆゑはかまのないちろりのまゝ出す。［しあん］こいつア箸ながしのちろりだの。しやれたもんだ。此あひだ、酒になり、うなぎもあらかたたひらげてしまふ。［喜の］ホンニ住よし町の川治から、茶入を持て來ておきやした。ごらうじやし。ト戸棚から、茶入を二ッだして見せる。土いろ、糸ぎり、くすりのかゝりあんばいをみて、［えん］こいつあ、京がまだはえ。新兵衞か萬右衞門だらう。金一枚位かの。こつちはいつかうなものだ。とんだねきものだ。この中數寄屋川岸の伏見から、瀬戸の玉川と瀧波を見せによこしたが、尤も遠州の書付があつたが四十兩だいだ。目がでるの。袋は白地

○京傳がいつぱいに云々　此めりやすは京傳の作と見える。

○瀬川　新吉原松葉屋半右衞門抱への名妓。初代から九代まである中にも三代、四代、五代が名高い。就中四代目瀬川は名妓の譽最も高かつた。下總の農家に生れたが、才色雙絶、三味線、淨瑠璃、鼓太鼓、舞踊等の遊藝はもとより、茶の湯、和歌、俳諧、其他に達し、手跡、易學の造詣まであつたといふ。寶暦五年江戸屋宗助に落籍され、年齒廿八にて歿す。

○じめえ　自前。藝娼妓の獨立して營業すること。

○相應な所　相應なところへ片づかうとそれを物色するために出勤してゐる。

○はごいたの茶はうじ　羽子板型の、葉茶を火にかけて焙じる道具。

○ちろり　酒の燗をする器。

○箸ながし　袴がないといふ義。

○住よし町の川治　住吉町は日本橋。川治は茶道具屋であらう。

○糸ぎり　絲底ともいひ、陶器の底をいふ。

○新兵衞　新兵衞燒で、天正時代の茶器の一種。新兵衞は瀬戸六作中の一人。呂宋の風を倣ひ茶人などに燒いた。

○萬右衞門　萬右衞門燒。京都の陶器で、瀬戸系のもの。萬右衞門の茶人としては落穗、田面、振鼓など有名である。

○ねきもの　ねかしもの。滯貨。久しく賣れずに、店に積み置いた貨物。

○數寄屋川岸　京橋數寄屋町の堀端に面せる河岸。

○遠州　小堀遠江守政一。

○目がでる　目が飛出るほど高價の義。

○白地の小ぼたん　古渡りの金襴に白地で牡丹の文樣あるもの。此文樣に大中小の三樣があるから、こゝでは小文樣のもの。

○権太夫　裂織りの古裂で、明から舶来したもの。もと奈良の代官で小堀遠州に茶道を學んで、長崎堂といふ茶堂を作つてゐたと云へる権太夫が所持してゐたといふところから此名がある。茶色に錦の文様がある。

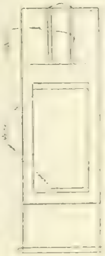
○はくさき　錦の摺り上げ。布帛に金銀の箔を摺りつけて、文様をあらはしたもの。その類に云合ひいふ。

○橋場　「江戸名所圖會」巻之六に「今戸明神の辺より南の方今戸を限り、橋場と称す」とあり。

○江月　江月和尚。江月宗玩をいふ。京都紫野大徳寺百五十六世の住僧で、父は伸子文覚。遠州流の茶を善くす。寛永二十年十月一日、七十歳にて寂す。

○ふとじけ　しけは繭の外面から繰り取つた絹糸の粗なるもので、それで織つた絹布をしけぎぬといふ。細じけ、太じけなどの別があり、多く表具などに用ひる。

○風帯・一文字



○あんらく〳〵あん　由緒りの金襴で、安楽庵策伝が所持したと云ふ裂である。

の小ぼたん。一つは権太夫だつけ。どれもはくさきはよかつた。［しあん］此の間橋場で江月の横一行をみやした。一片の雲自西自東といふ語さ。表具もようござりやした。天地はやつぱりふとじけだが、風帯一文字はあんらくあんさ。［えん］おれにゆづつてくれめえかの。［りやう］はなしやすめえよ。［喜の］角町の惣六が高麗の御所丸きんかいをもつてゐやしたつけ。品川の万千がもつてゐる松花堂の布袋はとんだ出来のいゝものさ。万千といへば、モシまだおめえさんに話さねえが、柳郊さんが村田屋で大いろ事さ。何とかいふ女郎でござりやした。此比は村田屋の部屋は扇屋といふもので、万千もおつまも、うたをよみやす。［えん］あそこのその哥といふ女郎をおれがかつたよ。新宿からこした橋本は又あつちへ歸つたさうだの。おいろといふいゝ女郎があつたつけ。妙國寺の仁王に挑灯があがつてゐたつけ。［喜の］たゞ朝のけしきばかりの所だよ。問屋ばで馬のいなゝくには、あやまるて。［えん］大木戸の石がきに、せきだの金のはさんであるのは、なんだの。［しあん］あれは何ンの願をかけるのさ。［えん］おいらは、あの土地においては不通だよ。ちつと旅もしてみようす。湯治にいつた時、賀達が所へいつたまゝだ。［喜の］御存じなくつてもな所さ。［しあん］しかし夷狄だもきみありだよ。吉原ならつけとゞけの文を遣らうといふ所へ、臺の物をおくりやす。［喜の］いやもう臺の物がきちやあ大騒ぎさ。こはがるものはお鷹匠の御留り、いやがるものは五ツがはりに正めんをはるの、にぎやかなのは夷講さ。みこしをこしらへて、

二階中をかつぐ内もあり、めしたき男をえびすにこしらへて囃したてゝ、おりく内もおりやす。ぜんてえ、しろうと芝居のはやる所さ。[おちせ] モシまへかたは松ばやでも度々狂言がござりやしたねえ。[しあん] 丸ゑびやなぞにもよくあつたよ。[おちせ] ぼくがさんが工藤で、玉屋の山三さんが五郎で、大門の四郎兵衛さんがすけ成で、をかしい事がござりやしたつけ。[喜の] 狂言といへば、宗十郎松が六けんのおさくをきれて、ふる石のとよくらへこつていくさうさ。をかしいぢやあねえか子エ。[えん] あいつが中洲でめつかちの地ごくをかつたときほど、をかしいことはなかつた。[おちせ] モシ大分きなつくさいよ。さんや、そこぢやあねえか [えん] ほんに芝居のゆきが、らふそくへふつたといふ匂だ。それをしやう、ぬしのはおりださうだ。[しあん] さあ〳〵こいツア大さわぎだ。かゝあに叱られることを仕だした。[喜の] もちつとの事で、もろせをたのみにいく所だ。[しあん] しやれ所では子エはな。[えん] やけぼこりでいゝのさ。

此の間女房の手れうりにて、たまごのあつやきにわさびじやうゆ、古なすにもり口のかくや、梅ざけのあんばい、えん二郎しあんへ茶づけをいだす。

ら起つた名で、[illegible]は京都[illegible]の安楽庵に遺し[illegible]る。これを基として中興の[illegible]をなして安楽庵と称す。

○御所丸 茶碗の名。

○きんかい 金海。キンパイともいふ。高麗焼の茶碗の一種。

○松花堂 松花堂昭乗、山城男山の[illegible]坊に居る。書画を善くし、書は本阿弥光悦、近衛三藐院と当時の三筆と称せらる。寛永十六年九月十八日、五十六歳にして寂す。

○扇屋といふもので 吉原なら扇屋とでもいふやうなもので。扇屋に[illegible]多かつた。

○妙円寺 [illegible]にある顕本法華宗の寺。開祖は日進の弟子天目。

○挑灯があかる [illegible]の名を記した提灯が寄進してある。

○たゞ朝の云々 新宿のことを云ふ。

○問屋は 昔、宿場で人馬及び駕籠等の継立をした所。新宿は甲州街道の宿場である。

○荒狄だもきみあり [illegible]八犬伝第二に「荒狄之有[illegible]亡也」。

○五ツがはりに正めんをはる 午後八時に交替して、女郎が店を張ること。

○恵比須講 恵比須をまつる祭。陰暦十月二十日に商家で行ふもの。

○ぼくが 墨河。吉原青楼の主人、扇屋宇右衛門、加藤千蔭の門に入りて和歌を修め、又俳諧を学び、雅号を墨河と称す。[illegible]

○ふる石 深川の古石場。深川七場所の一。

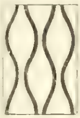
○芝居のゆき 芝居で降らせる雪片は紙である。

○もろせ 六七四頁に「ろせもにでもかけずば行めえ」とあり。ろせ漆（漆の一種）の汁をかけて、漆器の修繕をするものを云ふか。可考。

○やけぼこり 焼太りに同じ。火事の後は反つて繁栄すること。

○かくや 香の物を細かくきざみて醤油につけたるもの。東照公の料理人岩下覚弥が始めて調理したもの故、この名があるといふ。

○つけめ　乗ずべきところ。目當。
○てふあしのぜん　銀杏脚の膳の略。膳の脚が、末廣く先を外にそらしたもので、銀杏の葉の形をしてゐる。上部の食器を置く所は、四面に銀杏の縁を取る。他の部分はすべて黒漆である。
○ゑましむぎ　麥を水漬けにしてふやけさせたもの
○きかうさん　聞きません。
○おやあおつせんか　ではござりませんか
○しらアん　知らん。
○日てんさん　日天樣。太陽。お天道樣。
○さかこと　逆詞。
○しつたか　馬鹿らしいといふ意味に用ふ。文化頃の諺に「私扇屋しつたか扇屋、きんす丁子屋お松葉屋」とある。
○花たてわき　たてわきは立涌（たちわき）で織模樣の名、中がふくれて兩端窄つた線をつないだもの。花たてわきは花を畫き出したたてわき。



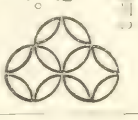
○若松に額　若松の紋模樣で、四角に縁を取つた模樣。

［えん］なるほど和尙はよくくふぞ。ぬす人には極つた。［しあん］もし、松ばやちやあ、小梅の靑いのを出すノウ。［喜の］あれはつけめさ。扇屋のせんべいの、丁子やのてふあしのぜん、四ツ目屋のかすていら、竹屋の水貝、しづか玉屋のゑましむぎ。こいらはつけめさ。［りう］丁子屋ぢやあねえが、はてなといひてえ所だ。［喜の］はやり言葉も味なものだ。ちよつといひだすと、むしやうにはやるよ。此ごろのはやりは、扇屋のきかうさん、丁子やがはてな、ぶしやれまいぞ、おたのしみざんす、松ばやが、おやあおつせんか、玉やのおにのくび、大文字やのしらアんもよくいふよ。さまといふ事を、せといひやす。越前屋は、しんにと云ふ事を、たんといふね。［えん］丁子やの日てんさんと、きれいでざんすよと、松ばやの山寺と、さかことは、いつの間にかすたつたの。［喜の］今でもはう〳〵でいふものは、しつたかさ。［しあん］おちさん、おめえはよく知つてるだらう。大かなやの正月の仕著はなんだつけの。［おちせ］たしか地が黑で色入の花たてわき、角のつたやが鷹のもやうさ。わかなやが若松にかすみ、中あふみやが花がうしでござりやす。鶴屋は牡丹の裾模樣の時もあり、ひぢりめんの無地の事もござりやす。角の玉屋はぼたんさ。松がねやがさくら川さ。松ばやのくじやくしぼりと大ゑびやの鳳凰がよくまちがひやしたつけ。［えん］あふぎやの十二ひとへ、丁子屋の若松に額はよく人が知つてる。［おちせ］瀨川さんのつき出しの時は、いつでも佳例で、八ツはしにかきつばたの模樣でござりやす。大文字屋のつき出しはいつで

○つき出しの時云々　初めて遊女となつて店へ出るのをつき出しと云ふ。其時廓内を廻るに、あすこの娼樓では部屋持女郎だけが附いて行かないのはどう云ふわけだらう。
○れい日　禮日。紋日と同じ。
○中座　中央の所。
○つるし　軒燈。
○半七　二階廻しの男の名と見える。それが床をしく時、合羽を着てゐるを云ふ。
○こんぢう　此間。
○水かゞみのめりやす　文政十一年六月、河原崎座所演、「とにかくに男の胸の解くに解かれぬ元結も、結うてかけたる解き櫛に、びんのほつれのはら〳〵と、袂に夏の雨もよひ、曇る鏡にうつしてみたき心のうちを、誰に晴れなんはてしなき、涙の露のおくれ毛もくど〳〵としてしをる夕顔」。
○梅をたち　梅干を食べないこと。

も、とかくさかなの模様さ。【えん】正月元日に禮にでるのは、大びしやばかりだの。【ゑちせ】さやうさ。【喜の】※つき出しの時部屋持ばかり、うちへ殘るはどうしたわけだ知らん。【ゑちせ】あれはさ、わかりやせんよ。松ばやはせんてえかてえ内でござりやす。女郎衆に上草履をはかせやせん。今でもはくものは、瀬川さん、松人さん、部屋もちで二人許りござりやせう。そして※れい日にはみんなざうりさ。櫛かうがいも※中座まで象牙まきゑでござりやす。【しあん】さんや、でえぶいぶるによ。ちつとさしくべればいゝ。【しあん】丁子屋もかてえ内だよ。客のまへはうはざうりを手にもつてとほるの。客のこねえ女郎は※つるしがとぼると、中の町へだされえね。二かいに小便所の二ところ有と、はしごを庭からあがるやうに付てあるは丁子やばかりだ。【喜の】まるゑびやにははしごが二所あるによ。扇屋の小便所ほど遠いのはあるめえ。寒い時分なぞはてえぎだよ。※半七がかつぱを著て、床をまはすも久しいだらけだ。玉屋もかてえうちさ。そして早く見せをひかせる内だよ。松ばやぢやあ、あね女郎の事をわつちらんといふね。扇屋ぢやあざしきでといひやす。丁子やぢやあ、あね女郎のその姉女郎の事を大きいおいらんといひやす。【えん】玉屋といへば、紫夕が（小むらさきがことなり。）將棊はあがつたかの。【喜の】※こんぢう、我物が香角のまぜで、二ばんまけたさうさ。【えん】琴棊書畫をやるきだの。傾城にも色々なくせがあるものだ。きさかたが、※水かゞみのめりやすが好き、瀬川が茶のゆ、哥ぎくが地ぐちのてんとり、すがはらが※梅をたち、わかづるが俳諧、

○三ツ七寶　〔紋所の名〕下圖。



○今でのうがち　近頃での突込んだやり方だ。
○墨賀　三河・前出
○いづつ屋のせつぺい云々　これは茶屋の名とその主人とを讀み上げたのであらう。
○梅枝　[illegible]七條大宮東へ入つたとなす。
○源氏の書入　〔源氏物語〕へ句讀などを書き入れること。
○いつ梅とやうじやのおいく　遊女のいつ梅と楊枝屋の女のおいくといふのであらう。此の二人の顏をすつかり取入れたやうな顏。
○うすいも　薄あばた。
○ひめぢがはの紋がら　[illegible]に小紋を捺したもので、凸凹した意味。
○晝みせのおみきどつくり　晝見世を張つて並んでゐる女郎。
○あいばつせえ　歩きなさい。

ひなづるが團十郎びいき、松人がどうしたのだえ、丁山がちよつとみな、たき川が三ツ七寶の紋所をかへず、九重がかぶろの外に男の子をかゝへて置くことなどは、今でのうがちだ。〔しあん〕こんおう今戸の墨賀が寮へおえりやしたら、いづつ屋のせつぺい、くわれき松屋のぎよみん、いづみやのこゑん、いの字いせ屋のせいら、長崎屋のこはん、をはりやせつ久、かんぼくといふ醫者、宗匠のとりう、なぞが來てゐて、梅枝點の（はいしとはすがはらが事なり。）俳諧をしてゐやした。いなぎも源氏の書入にこつてゐやすよ。地内のおたみが死んで力おとしさ。ぼくがもつりにばかりかゝつてゐやす。〔えん〕けふは二十六日だの。あさつては三河じまの不動へいかうせえ。喜のばう。〔喜の〕おえりやせう。〔えん〕後月の不動ほど傾城のでたことは覺えねえ。ノウ喜のばう。まづきさかたか、たはらやのよしの、にしき戸の若づるが出るし、七こしがでるし、七里が出るし、扇屋のうたかたが出る。〔喜の〕岩越も出やした。からことも確か見かけやした。げいしやも大分見かけやした。あさをに駒次、おりせ。〔えん〕ひやうごやのおくにも來たつけ。成程げいしやは繁昌だ。見番にそばがたえぬはずだ。（ざしきへ十ウでると、けんばんで一分がそばをかふなり。）〔しあん〕もし羅月が妹は、いつ梅と、やうじやのおいくを、そうじめにしたといふかほだねえ。あれでうすいもが無えといゝ娘さ。〔えん〕何、いゝものか。うすいも所か、ひめぢがはの紋がらといふつらだ。時にちよつとよつて、おほばなしになつた。ちやうどいゝ時分だの。もう晝みせのおみきどつくりもひけたらう。喜のばう、あ

いばつせえ。こんやは一町目のつもりだ、ノウをしやう。〔しあん〕おちさん、喜のさんをあづかるによ。おれといつちやあ振新のいちやつきでもさせるこつちやあねえ。いろ男のていしを持と心づかひだよ。〔おちせ〕大事のもんだが、お貸し申しやせう。（トはいへども、此のごろよしはらから來た文を、ちらと見たゆゑ、喜の介がいろ事のできた事をしようちでゐる。）〔喜の〕お供をいたしやせう。おちせ、着物を出してくりや。（ト喜のは一町目ときいてあいた口へもちなり。女房は通ゆゑいろ目にもださず、立つて戸棚のかさねだんすのひき出しから、ゆふき縞の上着※孔雀絞りに、※石竹あられのへりをとつた下着、ひおりめんのじゆばん、※くろ上田のはおり、これはえん二郎に貰つたのゆゑ、女ばうのつらにて※おはむきにきせてやる。喜の介は着てしまひ、かみ入をふところへ入レ、）〔喜の〕ちよつと鬢をなでつけてくりや。（女ばうは、さしてゐる、二分ほどするつげのくしでなでつけ、松ばかんざしで、びんの所をまきこむ。）〔しあん〕哥へ※むすぼれし、千すぢをわけてみだれがみ、手にとりどりのもの思ひ。〔喜の〕おきやあがれ。〔おちせ〕サアようございやす。あれせはしない。〔えん〕こゝのうちの戸だなは、※丁山がつぎの間といふもんだの。（喜の介は、衣桁屛風にかゝつてゐる、若松屋のわかづるが出したもちつきのてぬぐひをとつてたもとへいれ、）〔喜の〕サアお出でなさりやし。（えん二郎、しあん、立つてかつてへいづる。）〔おちせ〕ヲヤしあんさん、やけあなが、目に立ちやせんは。モシ頭巾はよしかえ。〔喜の〕こうと、もし四蝶さんの所から人が來たら、※龍の口へでもいつたといつておきや。それもよし、これもよし。（トそこらを見廻しながらかつてへいで、）何か忘れたやうだはえ。（ト少しかんがへて）ヲヽそれそれ、ふくゐ町の豐國が所から人が來たら、忘れずに此中のやしきのを二分やるのだよ。（トだんばしごの小引だしから、※うら付を出し、）〔しあん〕こいつも※はかなくなつたす。（トはいて出る。狗が跡について出さうにする。小女はだきながら、えん二郎としあんがざうりをなほす。）〔えん〕ちかめがとんだ物をみつけ出した。おちさんいつてきやす。〔おちせ〕さやう

○振新　振袖新造の略。（四六七頁參照）
○孔雀絞り　孔雀の羽紋の圖の形に絞つた模樣。
○石竹あられ　石竹（撫子屬の草花）を霰の如く散りばめた模樣。
○くろ上田　黒い上田縞。上田縞は信濃國上田地方から産出するつむぎ縞。
○おはむき　御齒向。へつらふ事。御世辭をつかふ事。
○むすぼれし千すぢをわけて云々　結れにもつれた千筋の毛を解き分けて、はらはらとこぼれる亂髮を手に取つて其髮の如くいろいろさまざまの物思ひをする。
○丁山　丁子屋の遊女をいふ。
○龍の口　『江戸名所圖會』に「和田倉御門の東、御溝の餘水を落す。此所迄潮さし入あり。……同所南の角、松平右京兆第宅の内に平田明神の社あり」とあり。
○うら付　裏つきの草履。
○はかなくなつた　大分ひどくなつた。

なら、ごきげんよう。ヲツトおつむりがあぶねえ。〔客の一〕サアおさきへ。

此の間、柳ばしより大さんばしまで、船中のしやれ、吉原楊枝のふさならで、餘りながながしければこゝにもらす。

其　二

けふ此の比は潮來や輕井澤ではやる時分、きうへ田ぞろひにゆかたを下タ著、こい茶ざやの袖くち、もえぎさなだのうら付で、とんだあやまるなり、西の窪の我善坊谷や、本所の割下水あたりで見かける手合、くら宿でいやがられるなま通ども二三人、南方へ別れて土手の端を通りながら、一人の二本ざし、くはへ煙管をはたいて、〔甲風〕アレ／＼みさつせえ。田中の方から、三まいの早かごが來るが、いま時分なぜあねえに急がせるだらうの。〔花蝶〕ほんに何者だらうの。こいつは解せねえはえ。トいふうち、早かごは土手のきはまでき たり、また田中のはうへかつぎもどす。〔友次郎〕あれ見さつせえ。かつぎ戻すぜ。へゝきこえた、あれはたしか、駕籠をかき習ふのだ。〔甲〕なるほどさういへば、中にへんな奴がのつてゐる。〔花〕何になつても、習ひのいることだの。これ公が所に、孔方は少々なしか。小ぎくを一帖かひてえ。〔友〕おれは頗る秋風だて。〔友〕青樓の客が、そんなげびなものを持ものか。きんならいつくらもある。傾城のわるがみを、かすりがうしとさつせえな。〔花〕それでも紙がねえと、何かふところがひねえやうだ。〔甲〕コレかみ

○柳ばし　『江戸名所圖會』巻之一に「淺草橋・茅町より淺草への出口にして、千住への官道なり。此東の大川口にかゝるを柳橋と云ふ。柳原堤の末にある故に名とするとぞ。この所諸方への貸船あり」とある。深川、新吉原の南遊廓に通ふ舟宿が多くあつた。

○大さんばし　山谷堀の船宿附近にかゝれる棧橋か。

○吉原楊枝　吉原で用ひた總楊枝。總楊枝は箸のやうな形で、一端を叩いて總狀になし、齒を掃除するに用ひる。

○潮來　今、茨城縣行方郡。當時は常陸から江戸への通路として殷盛を極め、繁華な遊里として有名であつた。

○輕井澤　今、長野縣北佐久郡。淺間山南麓の高原で、追分・沓掛と共に淺間三宿といはれた。

○きうへ田　生上田の反物。

○こい茶ざや　濃い茶の紗綾。さやは外來語サアヤより來り、光澤ある絹織物である。

○さなだ　眞田帶・眞田紐等の略。こゝは太き木綿糸で織つた男帶を指すのであらう。

○西の窪　麻布飯倉の北部にあり。

○我善坊谷　飯倉の北谷にて、六丁目の裏にあり。

〇本所の割下水　『江戸名所圖會』に「割下水、北・南兩所にあり。昔は田地の用水堀なりといへり」。

〇くら宿　ふださしのこと。旗本や御家人の廩米を廩米受取方から受取り其の賣買を請負ふ商人の稱。淺草藏前に住んでゐたので藏宿といはれた。

〇土手　吉原土手、日本堤と云ふ。もと荒川の氾濫を防ぐために築いたもので聖天町から山谷橋の方へ一筋、大川から箕輪へ一筋あつたので二本堤と稱したが、後に山谷の堤が無くなり、一本堤になつた。此堤の築かれたのは新吉原移轉以前、元和六年のことである。聖天町まで堤上の榜示杭から三百八十五間餘、箕輪まで四百間餘ある。

〇三まいの早かご　三枚肩の早打ちの駕籠。三まいは三枚肩の略で、駕籠一丁に舁夫三人附くものをいふ。

〇あねえに　あんなに。

〇公が所　貴公のところ。

〇孔方　錢。

〇小ぎく　紙の名。

〇秋風　懐の寒いこと。錢なし。

〇かすりがらし　女郎の持つてゐる延紙を掠め取る「格子の拋出し」。

〇ふところがひねえ　懐らしくない。

を結ふなら、こゝの髪結床がいゝぜ。こつちらの髪結床は、下手だせ。囨此の高札場は、よく出來たノウ。八十兩かゝつたといふことだ。どういふもんだらうの。花※廣徳寺の門ぢやあねえか。トしやれながら來る。跡よりわるゐしあん、きたり喜之助、まんなかにはさまれてえん二郎、※きたりうのでんがく扇にて夕日をよけながら、きれいごとにていう／＼と來る。なまつうどもは、跡をふりかへり／＼見て、えもん坂をおり、中ゆびとくすりゆびで、ひたひをくるりとなでてみて、鼻をちんとかみ、うはまへのえり先を一ッひつぱり行きすぐる。〇※川竹の流れはたえずして、しかも元の客にあらず。さとに浮かるゝむだ人は、且きれ且なじみて、久しく來る事なしといへども、つき出しからなじみて、年のあくるまで來る客もまた少なからず。何がどうだか解らねど、たゞ人の氣をつりあぐる※大よせ小よせのくるわの名とりが、ずらりとお竝びなされて、よい仲の町の夕景色、左の※竹村に比して、右側の※七けん軒をならぶ。※はでな遊びを駿河屋がまへ、此時まじめなるらんとしやれながら、門口より、しあん 此間はおせわでござえした。えん二郎 をしやう、向ふの兵庫やに居るのが、丁子屋のつき出しだ。よつぽど瀬川といふばがあるによ。喜の かほるとは先名が美しい。トいひながら、三人あがる。下女は手をふきながらいで、下女 これはお揃ひなすつて。ようお出なさりました。モシえ

〇高札場　日本堤から衣紋坂を下ると、右手高札番屋の前に廓内禁制の條々を記した制札が立つてゐた。

〇廣徳寺　下谷にある。其門の大きいので名高い。

〇きたりうのでんがく扇　喜多流の能樂にて用ふる扇。

〇川竹の流れ云々　『方丈記』の文をもぢる。「行く川のながれは絕えずして、しかもとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとゞまることなし」云々」。

〇大よせ小よせ　客を大勢・小勢寄せる廓といふ意。

〇竹村　吉原仲の町の菓子屋。竹村伊勢大掾。

〇七けん　吉原の入口を七軒と云ひ、七軒の茶屋が並んでゐる。

〇はでな遊びを云々　謡曲「羽衣」の「東遊びの駿河舞、此時やはじめなるらん」をもぢつたもの。

○京ぐる　吉原遊女の髪風の一つで、年増が結つたものである。
○何かお世界がお出來なすつた　なんだか好いところ、面白い遊び場所が出來たか。
○おせけえ　お世話。[illegible]は江戸町の[illegible]ふこと。
○いのじいせや　茶屋の名。
○扇屋の扇の　江戸町一丁目扇屋宇右衛門抱の遊女扇野。
○鶴屋の在原　鶴屋（別號鶴樓）の遊女菅原か。
○丁子屋の名山　[illegible]に曰く「ことその春より久々病に伏し給ひしが、日々に心よく、同じき秋めでたく出勤し給ひければ、その容別して清らかに、芙蓉に雨をおびし如く、風俗のしなやかなるは、土手の柳も見かへりて己を恥づ。萬客出勤のことぶき萬々歳を祝して、一日も中の町を欠く事なく、全盛帳場の看札にいちじるし。」顯作ニ綺羅ニ著ニ細腰ニ。
○みさ山　御射山。江戸町二丁目、別號雜居樓の抱妓。
○むかふ通るは藤兵衛おやね

んさんがお出なさりましたよ。（女房おふぢかつてより出る。おなんど茶つむぎのふとで、黒七子の帯、かみは京ぐる。）〔女房〕ようお出なされました。〔えん〕主人はどこだ。〔女はう〕只今お座敷へまゐりました。ホンニ江戸町から度々お人でござりました。よほどお久しぶりでござりますね。〔えん〕久しぶりもてえそうだ。〔しあん〕吉原おやか、四五日これえと、久しぶりのやうださうさ。〔女房〕モシえんさん、京町に※何かお世界が、お出來なすつたさうでござりますね。あんまりお浮氣をなされますな。それでお久しぶりだと申ますのさ。（ト主人がこしの物を取つて中ごしになつてゐて、）ねえ喜のさん。〔えん〕いんにやよ。これにもわけのある事。どうでしまひはろくな事には、なるめえと思つて、こつちへは沙汰なしにした。〔女房〕これはようござりますが、もし江戸丁へでも知れましては。（ト少しまじめでいふ。）〔喜の〕その※おせけえもすんだ事ださうだ。もうこゝ、切りの事さ。〔女房〕さやうなら、ようござりますけども。（ト立て神だなのよこ手、かたなかけへわきざしをかけ、しよくだいをともし、手あぶりをかたよせて、盃だいをまん中へ出ス。）〔喜の〕※いのじいせやの二かいに、後方を向いてゐるのは誰だ。〔女房〕※扇屋の扇のさんで御ざります。〔喜の〕ぶたいは馴れたものさ。〔しあん〕つたやのさんしう、※鶴屋の在原。此春のつき出しはどれもあたりだ。※丁子屋の名山を此中向島で見かけやしたが、七越といふきみがござりやす。〔えん〕丁子やといへば、※みさ山もとんだ美しくなつた。〔女房〕松ばやのをはやく見たうござります。（此の内吸物すずりぶたどんぶりいろいろ出る。）ちつとおすひなされまし。〔しあん〕サアはじめなさえ。〔女房〕さやうなら。（ト酒になる。とゞえん二郎へ又盃まはる。女房へさし祝儀をする。みな一通り盃すみ、此の間に松田屋をしまひにやる。）〔えん〕※むかふ通るは藤兵衛おやねえか。〔しあん〕藤兵

えか　向ふ通るに[illegible]でないか、[illegible]。

○まゝの紅葉　まゝは下[illegible]の弘法寺、紅葉の名所。

○松藏、藤二、三味子、我物　幇間の名であらう。

○とらけん　三すくみより出でたる拳にて、和藤内は虎に勝ち、虎は母に勝ち、母は和藤内に勝つ。此の三態を三人で身振りをして勝負をなすのである。

○耳のわきへ黑い糸　禿が頭巾をかぶり、その兩わきへ黑い絹糸を下げたのである。

○かもせんば　鴨の肉を細く刻んだもの。

衛さゝが三人通る。〔喜の〕おきやあがれ。〔[illegible]〕コレ／＼藤兵衛さゝ。〔[illegible]〕でたがねえ藤兵衛さゝ。〔喜の〕藤兵衛ます藤兵衛はまゝの紅葉かな。〔えん〕これちつと默らねえか。藤兵衛はいゝじいせやの前あたりできゝつけかけてくる。〔藤兵衛〕これはどなたかと存じました。ごきげんようござりますか。〔えん〕どこぞへ行のか。〔藤〕ひなづるさんのおざしきへ參ります。〔えん〕ざしきでなくば話さうと思つてさ。〔藤〕これは殘念でござります。松藏、藤二、三味子や、我物がまゐつてをりますからぬけ憎うござります。今晩はやはり一町目でござりますか。モシきの樣とらけんはどうでござります。〔喜の〕又まかさうと思つて。いそぐならいつて來ねえ。〔藤〕さやうなら御めんなされまし。ト何かせはしく、又かけて二丁目へはいる。二町目より竹屋の哥ぎぬ出てくる。跡より哥菊出てくる。〔えん〕和尚むかふからくるのは誰だと思ふ。〔しあん〕竹屋の哥衣さ。〔喜の〕こいつはきつい。それでは近眼とは思はれねえはえ。〔しあん〕顏も提燈の紋所もわからねえが禿が耳のわきへ黑い糸をさげてゐるのは哥衣と、大文字やのはた卷ばかりさ。〔えん〕おかしな所にゐきゝがあるの。〔女はう〕お二人ながら竹屋の千兩箱でござります。〔しあん〕哥菊が地口はどうだの。〔女房〕もう一ツあがりませんか。えんさん、お茶づけはえ。〔えん〕腹中まん／＼さ。しあん銚子をいぢつて見て、〔しあん〕もちつと熱くしてくんなさえ。鰯ときすのはうろくやき、かはりの吸物出る。ふたをとつてみて、〔喜の〕イヤアかもせんば、葉付大根、ありがてえはえ。〔しあん〕料るもんだよ。ト云ふ所へ瀧川がかぶろ來る。〔めなみ〕若しえ、お藤さんに、おいらんでおつせえす。あのけさの文を屆けておくんなんしたかと。のれんをひツぱりながらいふ。〔女房〕ムゝ、さう申てくりや。けさ

程三保藏にもたせて遣しましたが、おるすだと申して御返事は參りません。と申してくりや。トかつての方をむき、ノウ三保藏、御返事はこなんだのう。勝手より〔三保藏〕まゐりません〳〵。〔めなみ〕そんならあの、さう申しいせう。〔女房〕ちつと遊んでいかねえか。〔めなみ〕叱られんすよ。〔えん〕コレあの子や。〔女房〕めなみ、あなたがなんとかおつしやるよ。〔めなみ〕なんでおざりいすえ。〔えん〕おいらんと、とうじさんによくいつてくりや。〔めなみ〕アイさう申しいせう。ト出てゆく。〔女房〕とんだ利口な子でござります。三保藏や、其送り物は、玉やのたが袖さんのおざしきへ行のだよ。そしてみつさんは七ツに歸らつしやるさうだから、かごやが來たら三ちやうだよ。

そつちこつちするうち、えん二郎があひかた松田屋のおいらんおすかはむかひに來る。眉如二翠羽一肌如二白雪一腰如二練素一歯如二含貝一嫣然一笑、惑二陽城一迷二下蔡一其のふぜい。田丁のかたばみや久兵衞が縫つた、からいとの總ぬひに、だてもんのうちかけ、白じゆすのへりとりむく。かみは手がらわげ、かみのうへは小間物屋の見せの如く、禿のかみ一人ははりうち、一人はやつこしまだ、うつくしくかみゆひの長二が手際をみせ、ふり袖しんざう川波、せわしんざう玉夕、つきそひきたる。ばんしん玉夕おいらんのえもんをなほし、打かけの下りたるをなほし、えんさきへこしをかける。おす川につこりとわらひ、〔おす川〕おふぢさん、どうなんしたえ。トいつたばかり。〔女房〕さあおいらん、お上りなされまし。〔おす川〕こゝがようすよ。〔玉夕〕えんさん、よくお出なんしたね。〔喜の〕いつもうるはしいおかはつきね。〔しあん〕何かむしやうにきれえでござりやす。〔玉夕〕嬲つておくんなんすな、をがみんすにえ引。

トいふうち、松田屋わかい者清二、ちやうちんをけし、おたのみ申ますと出て行。玉夕は茶地のろきんの長づつから、きせるを出し、たばこをつけておいらんにわたす。又つけてえん二郎みな〳〵へやる。おす川禿のみゝへ口をつけて、何かいひつけてやる。〔おす川〕いの字いせ屋に、ときやうさんがゐさつしやるから、おれが言ふと

○松田屋のおいらんおすかは　松葉屋の花魁瀨川の積りである。せわしんざう玉夕とあるのは川ゆうの假名。
○だてもん　紋の一種。花鳥・山水又は文字を巧みに按排して描きまとめたもの。
○手がらわげ　吉原に於ける結髮の一種。
○はりうち　根掛けとして用ひる髮飾の一つ。主に唐人髷、天人髷に用ひる。
○やつこしまだ　島田髷の一種。
○ろきん　絽金。絽に金糸を織り込んだ裂地。

つて、よくお出なんしたといつてきや。禿はむかふへ行く。あげえんの下から犬がのびをして出る。〔川波〕ヲヤアわつちといへば、吃驚しいしたよ。〔女房〕此のお盃はわたくしがおあづかり申しませう。お雪や、すぐにつれ申しや。〔えん〕五町の萬里と、おしづ八百吉を呼びにやつてくだせえ。〔女房〕かしこまりました。下女てうちんをともし先へ出る。けいせいも立ちみな〳〵いづる。〔女房〕さやうならおいらん。〔おす川 玉夕〕おやかましうござりいした。〔女房〕どなたも御きげんよう。みな〳〵一町目へまがりさきへ行く。喜のはちよつと松田屋のみせ先へより、〔喜〕〔喜の〕井川さん、夏里さん。どうなすつた。何かしんに成ツてかきなさるね。〔井川 なつ里〕でえぶ道がちかうおすね。〔喜の〕こんやはえんさんのつきやひさ。ト云所へぢ廻り二三人みせさきへ来り、〔地廻り〕ナンだ、あかいべゝに青いべゝに、白いべゝを着て、こゝの見せはなんの事はねえ、げくわの薬箱といふもんだ。ト悪言をはき行過ぎる。〔夏里〕エ、すかねえぞよウ引。〔喜の〕後程お目に懸りやせう。ト松田屋へはいる。みなみなのうれんのそばを行。うちはどん〳〵とにぎやかにて、ともべやの前に、おいらんたちのてうちん並べてあり、ながえはかべにおひをかけてならべ、廻しかたはたき火にあたり、大がまのうへの、十二のとうみやうはけんびし、山十、五とびやうの山をてらす。〔はや女〕源兵衛どん〳〵。トいひながら、みな〳〵のはきものをそろへ上ル。そう花の札のはつてある下の、帳ばに番頭伊平治いで、〔伊平治〕源兵衛〳〵。お客人だぞよ。みな〳〵はしごを上る。跡じりにて女郎四五人のころで、えんさんよくおいでなんしたとくち〳〵にいふ。〔源兵衛〕直に座敷へいれ申さう。ト先へ立つてゆく。だれぞ禿大ふうじの文を、ひやうし木にうちながら、〔禿〕たのもどウ引、そつちでさきつから呼ばつしやるぞよ。ひとりの〔禿〕こんたあどけえ行く。〔禿〕長崎屋へ行は。〔禿〕さがりい引す。おす川はいつの間にかどこへかなくなり、ばんしん玉夕、ふりしん川波つきそひざしきへはいる。かぶろはおいらんと、しんざうとじぶんのこま下駄をもち、梅鉢を書いた天水桶のうへへおく。

○しんに成ツて云々　一心になつて手紙を書いてるね。
○道がちから　道が近いは、繁々通ふ、頻繁に行く意。
○ぢ廻り　吉原中をぞめきあるく連中。
○ながえ　長柄。長柄の傘の略。遊女の後ろから差掛けるのである。おひは蓋ひであらう。
○けんびし云々　劍菱。酒の名。こゝではその酒樽。山十は醤油の名、こゝではその醤油樽。五とびやうは五斗俵、米俵。
○そう花　惣花。客から樓中一統へ祝儀を出すを惣花と云ふ。
○大ふうじの文を云々　封じ文は糊にて封をした文で、これを一通づつ両手にもつて、拍子木を打つやうな恰好をしたのではあるまいか。
○たのもどウ　お頼み申す。人の門を訪ふ時の聲色。

○こゝもおす川が座敷の好み、中の間の飾り夜具は錦の山の如く、一面の琴は遥かに見る瀧に似たり。圍の常釜は松風の音かと驚き、ゆかうの小袖は楓の紅葉したるが如し。本間の天井には四季の艸いろ〳〵、おの〳〵花の手柄をみせ、はりつけには朱簾を畫て雲上に近し。沈金彫の机に、義之の墨帖をちらし、湖月萬葉のさうしを並べ、異香四方にくんじて大盡の紙花こゝにつき、龍のくびなる玉、つばくらめの子やす貝も、こゝに持來るべしと思ふばかり。座敷の眞中に銀しよくをてらし、朱蒔繪のたばこぼん、さんばうの盃臺、懸盤なほしてある。

〔しあん〕家名は松をもつてし、紋所は柏をもつてし、床柱は栗をもつてす。〔喜の〕サアむづかしい事をいひだした。此からかみは誰が書いた。〔玉夕〕辨州さんがお書きなんしたよ。〔えん〕もうとまりは知れたから、大のみにするがいゝ。（此のうち廻し方盃てうし持ち來り、らふそくのしんを切つて行く所お定まりの通り、なかゐ吸物持來る。茶やの女てうちんを消し、はき物と一所にらうかへおく。喜の介にあがるふりそで。）〔夏菊〕政さんよしなんし。いつつツて階子へ札をはらせんすにえゝ引。（ト息をきつてかけ來る。）〔しあん〕休日の湯屋を見るやうにでえぶはしやぐの。〔喜の〕そんなに騒いだら又、やりてがみせ三味線の一といふ聲で、りくつを云はうが。〔夏菊〕それでもからかひんさアナ。えんさんよくお出なんしたね。お雪どんどうした。（ト茶やの女のかたへとりつく。跡よりしあんにあがるふりそで夏いろ來る。）〔えん〕此子達二人はむしやうに美しくなつたよ。〔玉夕〕あいさ、いつそいろけづきんしたよ。禮日もふり袖の跡おさへは、ぬしたちふたりさ。〔えん〕早くつき出しになつた所

○おす川が座敷の好み云々　『傾城鏡』瀬川の條に「書―安親門人。茶―遠州。哥學―二條家。香、琴―いづれもげいのどうぐ也」とあるのは參考にならう。

○圍の常釜　圍（茶室）に常に風爐にかけてある釜。

○ゆかう　いかう（衣桁）の訛。室内に据ゑて衣服を懸ける爲めの具。

○はりつけ　紙に繪を書いて、壁や襖に張付けるもの。

○朱簾　珠簾であらうか。たますだれ。

○沈金彫　漆器に、模様などの毛彫りをなし、その刻目に金粉を込めたもの。

○義之　王義之。支那晉代の人。古今獨歩の書家。

○湖月萬葉　『源氏物語湖月抄』、『萬葉集』。

○龍のくびなる玉　「つばくらめの子やす貝」と共に『竹取物語』にある得難き珍寶。

○懸盤　晴の儀式などに用ひる膳。昔は足と折敷と別々で、四本足の臺上に折敷を載せるやうになつてゐるが、後世には足を作り附けにしてある。足には銀杏足である。

を見たい。其時は知らぬかほだらうの。夏いろさんの初日は、大方をしやうがするだらう。〔しあん〕アイサその時になると着物のあんじがござりやす。上衣はまぐろの瀧のぼり、むくは牡丹餅のちらしさ。〔夏いろ〕よしておくんなんし、ばからしい。〔玉夕〕お雪どん、一ツのまつせえナ。〔夏[illegible]〕どれおれがついでやらうよ。〔茶女〕イヽエこゝへおくんなさりまし。〔夏いろ〕一ツ呑まつせえ。〔喜の〕おいらんはどけえ行かしつた。今までゐさしつた様だが、もうどけえか見えなくなつた。ほとゝぎすのやうだ。〔[illegible]〕松田屋のけいせいも、だらふそくを見るやうに、折ふしたちぎえがするて、あやまるよ。〔玉夕〕わつちらんは今一生の客人の所へ、あいさつに、下タざしきへお出でなんしたよ。琴のや呼び申て來や。川波さん、煙草を出しておくんなんし。〔川波〕此引だしかえ、おつせんよ。〔玉夕〕エヽじれつてえ、そこにあるからお見なんし。〔しあん〕ききやう刈萱をみなへしと聞えるはえ。でえぶ地口が御上達だ。〔玉夕〕それでもじれつたうおすアナ。トいふ所へ、するがやの男、おくり物もち來る。朱の沈金の丸盆。あらい朱のかくひらはたまごほり。さんぎての丼には、はづけに生醤油をかけたやつ。これでちやづれといはぬばかり。けいせいへのてんとり、ちや屋が通なり。〔茶や男〕えんさんに七右衛門申します、こんばんはようお出なされました。只今玉やのお客人を納ましてそれへ參ります。まつぴら御めんなす

○家名は松をもつてし云々　家名に松田屋、[illegible]、[illegible]、[illegible]代々[illegible]を用ふる例であつたといふ。（『傾城籬』五八三頁參照）
○階子へ札をはる　紙花の札を[illegible]である。
○休日の湯屋　乾いてはしやぐの洒落。
○みせ三味線の一　揚屋の店頭で彈いて居る三味線の一の糸が出す太い音。遣手に呼ばれて鳴り立てられるのである。
○禮日　紋日。
○ふり袖の跡おさへ　振袖新造の後援者。
○着物のあんじ　衣裳の考案。
○まぐろの瀧のぼり云々　鯉の瀧上り、牡丹のちらしを擬えていつたもの。
○ほとゝぎすのやう　「時鳥寐まきさくまに影もなし」（杉風）などは此の趣きがある。
○だらふそく　下等の蠟燭。
○わつちらん　私の花魁。おす川を指す。
○一生の客人　客人は旦那、パトロンといふ意味。
○あらい朱のかくひら　ざつとした朱塗りをした四角なお平。
○たまごほり　不詳。
○さんぎて　不詳。
○けいせいへのてんとり　傾城の格を評價する材料。俳諧の點取に擬す。

○しのぶわげ　上に髷を作り、その両側にきれ髮を下げて、白元結で括つたもの。
○みすのはな紙　御簾紙。簾中で用ひる紙の意。薄く透間のあるやうに漉いた紙ともいふ。大和吉野産であるが美濃産が良いといふ。
○ぢやあおつせんかえ　おつせんは、ござりませんの松葉屋言葉。
○ぢやあねえかの、蚊はねえか　蛇はないか、蚊はないか。
○大晉寺めえのたう　大晉寺前の黨即ち仲間の義であらう。大晉寺前に露店を出す商人仲間が、「買はないか〳〵」と云ふのを、玉夕が「ぢやあ」と云つたところから「蛇はないか、蚊はないか」に引きかけて地口つたものらしい。
○ぶんきやう　本書の序文を書いた文橋であらうか。
○せいひつむしくひ　不詳。
○二つき　二の膳つき。
○ちよくばかりは……つけ目にて　「ちよく」は猪口の形をした大きい陶器で、菜を盛る器物。ちよくだけは松田屋のめごとも云ふべき獨特

つて下さりましたと、申付けました。そして玉やで小紫さんが、あなたへ宜しくと、おつしやりました。（トもち〳〵してかへる所へ、表ざしきのおいらん髪はしのぶわげ、さゝりんだうのへりとりむくばかり、うちかけにして來る。）【こめ山】えんさんよくお出なんしたね。【えん】イヤアとめ山さん、どうなさりやした。はなしがあるからちよつとこゝへお出でなせえ。【こめ山】マアちよつといつて後に參りいせう。（トかたのあたりでちよいといろけをみせ、おく二かいの方へゆく。入れちがつておす川みすのはな紙で胸をあふぎながら來る。）【おす川】もうなんだかわからぬ事のきゝてになつてまゐりした。【宮のしあん】おいらんこれはどうでござりやす。【玉夕】これ〳〵はまゐりしたかえ。【おす川】きいした〳〵。【玉夕】ぢやあおつせんかえ。【おす川】あいさ。【しあん】おめえがたは、ぢやあねえかの、蚊はねえかのと、大晉寺めえのたうぢやあああめえし。（トみな〳〵笑ふ。）【おす川】もしえ下夕でめりやすの本を貰つて參りした。長崎屋でぶんきやうさんが、おひろめなんしたのでおす。いつそあだでようすよ。【玉夕】ヲヤお見せなんし。すがほとやらいふめりやすかえ。早く覺えたうすねえ。【おす川】まあのちにお見なんし。（ト此のうちぜん出る。きうるしのわん、せいひつむしくひのくわいせきぜんにて、二つき松田屋ゆゑ食物は美なり。こん立はこゝに略す。ちよくばかりは松田屋のつけ目にて、れんこんのらん切なり。はしは箱根からとりよせる萩の先をけづつたのなり。これもこゝの流儀なり。みな〳〵はらはよき故、茶びんとともにならべたばかり、ぜんはざしきの捨小舟となる。こゝへ女げいしや八百吉、おしづ、たいこもち五町萬里、するがやていしゆ七右衞門來り、大さわぎになる。此の所のしやれ、あまりさう〳〵しくて、きゝとれぬゆゑこゝにりやく〳〵す。さうかうするうちひけをうつゆゑ、えん二郎がとこをさめ、喜の介しあんも、それ〳〵のざしきへ行き、けいしやたいこ持みな〳〵かへる。おす川が次の間をたてきり、てふあしのぜんをとりまき、しんざうども、げびざうをはじめる。すゞりぶたの上にくわへの丸煮は、こはふかのいしやのあたまの如く、しひたけのうまには手習雙紙を引きさいたるに似たり。ようらくでのふた茶碗のなかは、ふるなすのつけたのにきじやうゆをかけたやつ。）

のもので。
○ひけ　引け四ツの拍子木。
○げびざう　下卑たこと。いがきたた。
○くわへ　慈姑。
○こはふかのいしや　古法家の醫者。頭に慈姑の取手のやうな髻を乘せてゐること。
○ようらくでのふた茶碗　不詳。
○雨ざし　雨方の簪。禿は普通花簪をさしてゐる。
○れうし　料紙箱。
○かみあらひ日　廿七日の定休。『傾城買』(五八三頁)參照。

川波　しあんさんはどうなんした。夏いろ　いつそもう醉ひきつてねてしまひいした。いつそすかねえ近眼坊主でおすよ。すかねえぞよウ引。川波　おやばからしい。何もたべるものがおつせんよウ引。夏いろ　となりへ梅づけをとりにやれば、ようしたねえ。これ〳〵その子は誰だ。此の土びんへ茶を一ッもつて來てくりや。いゝ子だぞよウ引。ト いひながら、はしのかはりにした松ばのかんざしを、あんどうへつつさして、ふいてさす。おす川がかぶろは雨ざしをぬいてれうしのふたへ入レてちがひだなへおき、ねまきを帶へはさみ、おいらんのくしかうがいをしまひ、火を入レて來り、そこらをかたづける。玉夕　もういつてねや。また長火鉢へあたつてべん〳〵と起きて居ゐえよ。長火鉢といふは總もつとも下にあり。禿のあたるひばち、禿こゝの　さやうならお休みなんし。くろもじのやうじをくひながら 島浦　玉夕さん〳〵。ちよつと顏をお出しなんし。玉夕　何ンでおすえ。島うら　あのね〳〵、これ〳〵がさつき見せへ參りしてね、明後日來ようと申しいしたよ。主にも、よく言つてくれと申して、おしやべりをだしきつて參りした。主にも、とんだ恨みがある言のはの、と言つて參りした。喜んでおくんなんし。玉夕　わつちといへば、かたつきし主の來なんすのを待ち切つてをりいさアなア。此中の文を屆けてくんなんしたと仰せえしたかえ。文さんもあんまりすかねえ不人情だよ。島浦　腹をお立ちなんすな。主が、つれ申して來いすとさ。明後日はしまつてゐろとつて參りした。玉夕　主といへば嬉しがりきつてゐるの。島浦　それでも嬉しうおさな。玉夕　それはさうと川波さん。さつき山崎の人に、ひな形をやつておくんなんしたか。川波　持つて參りしたよ。玉夕　今日は二十六日だね。嬉しうおす。あしたはかみあらひ日で※

おすよ。ト云ふ所へしんざういつてふ、癪をおさへながらきたる。〔いつこふ〕玉夕さんえ。ごしやうでおすから、なんぞ薬をおくんなんし。いつそもう、しやくが痛くつてなりんせん。トかほをしかめていふ。〔玉夕〕わつちらんの所にきおう丸がおすから、まあざしきへお出でなんし。〔玉夕〕わしの客人は、おかへんなんしたおやあねえかえ。〔いつこふ〕松さんはかへりしたが、太兵衛どんが逆りにしてやらうから、出ろとつて、夏花さんと民の戸さんと一座でおすよ。〔玉夕〕ム、はつか。〔いつこふ〕あいさ。さとうの坊主で、さけをよくのみいすよ。さつしておくんなんし、わつちといへば、なぜこねえに病身になりいしたらうねえ。〔嶋浦〕ゐいじんさんに、見てお貰ひなんしたかえ。〔いつこふ〕やつぱり、癪だとおつせえしたよ。それでも、餘り引込むと腰元にするとおつせえすから、けふも無理に、みせへでえした。〔玉夕〕しま浦さん、こゝの次の間へしのびをおこめなんせんか。〔嶋うら〕よしいせうよ。ト話すうち時はうつり、八ツもすぎて倉まはりのひやうし木かつちつちと打ツて廻れば、皆々いづくへかなくなつてしまひ、小便所のきはには、かけばんと茶だい、おくり物のから山のごとく、水だいのかめつんとしてうしろをむき、江戸丁二丁目相生屋御ぜんめんるゐ所と書いた、そばのせいろう、れんじにさみしく、二ちやうつゞみごばん人形の騒ぎもいつしかしづまり、おくざしきにてことのねきえわたる。きくじどうは、なつんどかつま香ト、今までしやれたる座敷もたまりの天神、いびきのおとはかいるのなき聲にまぎれ、火の用心のかなぼう、あんまのこゑもしづまり、草も木もけいせいもねて、ばけものとほとゝぎすとねこばかりおきてゐるところ、夜はしんしんとふけわたる。折よしとしんざうがあひづにけいせいのうしろ姿、きたり喜之介が屏風の内へはいる。此所の妙意作者しばらくあづかるなり。此本をみる人、たいてい御すゐさつあれかし。むかふざしきは死ね死ならといふ中とみえ、廻しびやうぶのたいこうぼうもよだれを流すばかりのむつ言。ぼつちぼつちのはなしごゑ。〔玉夕〕それお見なんし、ふとんの外へおちなんすな。マアこつちらをお向なんしなんし。〔一座〕おやまつ

○きおう丸　奇應丸。
○逆りにする　[illegible]
○はつ　初會。
○腰元にする　内所の小間使にする。
○しのびをおこめなんせんか　「しのびをこめる」はひそかにの義の[illegible]
○[illegible]　[illegible]火の番か。
○水だいのかめ　[illegible]
○れんじ　[illegible]
○二ちやうつゞみ　大鼓と小鼓と。

○ごばん人形　[illegible]る技。
○きくじどう　[illegible]
○たまりの天神　[illegible]神。天神は松の位の次の遊女である。

但し京大阪にて用ふ。

○たいこうばう　屏風にある太公望の圖。

○むかせられるは恩ならず　河東節「矢よ丞蔵の疊夜着」に「すゑてやるのは恩ならず、すゑさせるのを恩にして、男心の憎いのも嬉しき程の野暮となり」。

○京町のねこ　其角の句。「京町の猫通ひけり揚屋町」。

○招んで　こゝは身請けする意であらう。

○のろい　まいつ、情に溺れた。

たら、ふしようながら向てやらう。※むかせられるは恩ならず、向てやるのを恩にしてだ。女郎 男心のにくいのも、嬉しきほどのやぼとなりいしたのさ。サア誤りいすからお向なんし。さみしうおさアナ。ぬしにきゝ申しいす事がおすにえ。ゆうべどけえお出でなんした京町かえ。客 フウおつな事をいふの。※京町のねこがあげや町へ通つたうはさは聞たが、おれが京町へいつた沙汰はまだ聞かなんだ。女郎 よしておくんなんし。とめ川さんが、中の町で見かけたと、仰せえした。サア本當に仰せえし〳〵。おいひなんせんと、くすぐりいすにえ。客 これさ、よさねえか、ぶちのめすぞよ。女郎 そりやあうそでおすが、ほんに主ア、わつちを※招んでおくんなんす氣かえ。客 此比はでえぶ、ぐちになつたぜ。女郎 それでも若し、ぬしのとつさんやかゝさんが、ふしようちな時は、どうしんせうねえ。それを思ふと、死にたうおすよ。客 それよりまだ先が丸二年三月と云ふ物だから、其中にはそつちに、とんだ事ができるだらう。女郎 よくつもつてお見なんし。五年このかたわつちがみのためにもわるし、ぬしのためにも悪いと、たび〳〵あきらめて見ても、思ひ切れんせんものを、ほんにおく縁でおつせうよ。ぬしもさう思つておくんなんし。あれさ又ねなんす。はなへこよりを入れんすにえ。客 これさ、あやまつたよ。こんやはむしやうにねむい。たばこを吸付てくりや。てめえおれが事ばかりそんなに云ふが、おれが顔の立たねえやうな事をするなよ。こんな※のろい何を出すやうになつちやあ、たまらねえ。女郎 まだ其の

やうにおうたがひなんすなら、此の上へ指の二本や三本はいとひいせん。〔客〕てめえに指を切つて貰つたとて黒燒にして、むしぐすりにはなるめえし、しほをつけて燒いても食はれねえ。〔女郎〕そんならどうすればようす。じれつたうすにえ。〔客〕何かあおにえきもねえ事をいひ出した。少し腹がきたはえ。さつきそこにあつたのはなんだ。〔女郎〕仕切場でおすよ。仕切場とは鶯もちのことなり。〔客〕そいつはあやまる。れいの小梅のかり〳〵するので、ちやづりにしよう。〔女郎〕これ〳〵、太兵衛どん〳〵。これさ、後生になるからの、茶づけせんを一せんこさへて來て下せえ。かゝるせかいに引きかへてとなりざしきは大かんしやく。〔女郎〕あれさ、およしなんし。しやくがいたうすよ。〔客〕そんならどうさはつてもおくんなんすな。けがれんす。ぬしやあわりいしやれだよ。〔女郎〕それが氣にいらねえで、ぬしがお出でなんせしても、あの客をきれる事はならねえな。〔女郎〕それが氣にいらねえで、ぬしがお出でなんせんでも、切れる事はなりいせん。わつちや正直ぬしの推量のとほり、あの客人にほれてゐんすはな。〔客〕でえぶてめえは白ラばけに、がうてきを云ふな。それぢやあもう料簡がならねえはえ。〔女郎〕料簡とは、兩方の手に劍をもたせる事かえ。あぶなうおす。およしなんし。〔客〕何ンだこいつア、いゝかと思やあがつて、おれがかう云ふ句を出ス日になつちやあ、かくごうしろ。まづでえ一チこの枕の紋所も氣にくはねえ。此きものの裾もやうのあたりも白狀仕てしまへ。〔女郎〕これさ、それえに足げにしなんすな。大事の色男の紋でおさアナ。〔客〕かうすりやアどうする。これえ菖蒲刀の身を見るやうに、白イこばかりぬつて、つらばかりうつく

○指の二本や三本は云々　傾城などが契を變へない證として、小指を刃で切つて相手に示すことが行はれたのでかくいふ。
○腹がきた　腹が空いて來た。
○ちやづり　茶漬。
○白ラばけ　しらばくれ。そらとぼけ。
○がうてき　偉さうなこと。
○菖蒲刀　五月五日の節句に飾った木刀。

しくつても、※いきしにのねえ女郎は嫌えだ。此女郎は此位なやつ、こいつは此位な奴と、てえげえ女郎のねうちをしてつきやつてやれば、いゝかと思つて、をかへあがつた河童を見るやうに、ぐにや／＼する女郎はこつちから、おさらばだはえ。［女郎］サア／＼それを聞かうばつかりでおす。そんな氣に入らぬ女郎なら、早くおさらばをして、おかへんなんし。［客］けえらうがけえるめえが、うつちやつておきやあがれ、おれがゐちやあ、それえに怖いか。だうりでぶる／＼ふるへるな。これえ、中の町の何屋のうちにやあ、せつちんが何軒あつて、何やの裏にやあ、はきだめがいくつあると、※四ッ手にわかざりのかゝつてゐる時分から、※きつねのまひ込む時分まで、三ッぶとんの上におしづまつてゐりやあ、どけえいつても色男一疋の役はしてくる男だあ。手前の顔をふむには手間隙は入らねえ。跡で※かまるめえぞよ。［女郎］ぬしやあ紙屑拾かえ。よく※閑所やはきだめを知つてお出でなんす。男一疋と云ひなんすからは但し犬の生まれがはりかえ。ヲヤ氣味の悪い※じゆずかけとやら、なべかぶりとやらぢやおつせんかえ。もういひなんす事がなかアゆるりつとお休なんし。

トいひながらまくらとはながみをもち出て行く。客ははらがたつてならねども、せんかたなく、ねるにもねられず、あんどうのむだ書をよんでまじ／＼してゐるうち、七ツのひやうし木もなりて時うつり、※田中の方の寺々にては、※ぢやん／＼のはんしよう、思はれるのもあきられぬのも、つまるところはみな遊びのもやう。えん二郎はよひより京丁のわけにて、おす川とおほくぜつ。それもおす川しやうとくえん二郎をすかぬゆゑ、いさゝかな事を手にしてねるつもりの、みな狂言にて、※うちのまへの松かざりを見るやうに、うしろ合はせの白川よぶね、夜はさらりとあけて、れんじのすきまからさしこむあかりに、長持のほこりきらめく※かはたれどき、下ではど

○いきしにのねえ　生死のない。はりのない。

○四ッ手にわかざり　四手駕籠に輪飾をつける。卽ち正月の初。

○きつねのまひ込む　十二月大晦日の夜、狐の面を被つた大神樂が來る。

○かまるめえ　「かまふめえ」にて「構ふまい」。後で構ふなよといふ意。

○閑所　厠の異名。濯所の音轉か。手に水を灌ぐ所の義。

○じゆずかけとやら、なべかぶりとやら　「じゆずかけ」は數珠掛鳩（白子鳩）か。後頭に黒の半輪環あり。「なべかぶり」は頭上の黑色なる「鍋被」と稱する鳥のことか。

○田中　地名。今の淺草田中町の邊。

○ぢやん／＼のはんしよう　晨朝の鐘

○うちのまへの松かざり　背中合せの松飾。

○かはたれどき　まだ夜のあけきらぬ薄暗い時刻

○ねず　不寢番。
○泉岳寺の石塔　四十七士の墓。
○もやして置く　萌やす。溫め培養する。
○板はなに文がならべてあり　階段を下りた板の端に手紙が並べてある。客から遊女などへ送つて來た手紙。
○あふり　障泥「あふり」烏賊。烏賊の一種。胴が楕圓で、二三尺のものもある。淡紫色で、紺色の細點がある。味がよい。馬具の障泥の形に似てゐる故いふ。
○だれかれんつに　誰彼一つにて、こみの意。
○生むぎ　神奈川の生麥でとれた。
○はねだ　羽田。

つし〳〵と米をつくおと、※ねずの男はあんどうをひきにくる。いれかはつて、〔茶や男〕えんさん、お迎ひに參りました。〔えん〕フウア、もうその時分かの。〔茶や男〕おつしやつたよりは少しおそいくらゐでござります。〔えん〕喜のやしあんはどうした。〔茶男〕喜のさんは只今、おしたくをなすつてお出なされます。ト云ふ所へしあんがあひかたの夏いろ、ざしきへ置た羽織をとりにくる。跡よりしあんおきてくる。喜の介もみすのかみにてかほをふきながらおきてくる。夏濱もあとよりきたる。〔えん〕さあすぐにかへらう。〔夏色〕羽織のえりがをれんせん。お待なんし。〔しあん〕おいらんはでえぶおつかれの。トいへどもおす川はたわいなし。みな〳〵らうかへ出る。ねずは二かい中の紙くずをはきあつめ、あんどうは※泉岳寺の石塔のやうに、ならべてある。〔喜の〕此の紙屑を※もやして置くと、おぎやア〳〵といふ奴が出來やす。〔しあん〕かう紙屑をはき集めた所は、羊のへどといふもんだ。〔えん〕いゝ〳〵。トはしごをおりる。※板はなに文がならべてあり、はしごの下にはおくり物のからつみかさねてある。茶屋男ざうりをなほす。〔茶男〕おまへさんのは、此の二重ばな緒でござりますかね。〔夏〇、夏色〕此間にお出なんしえ。くどりをがら〳〵とんとみな〳〵出る。〔えん〕おほきにおそくなつた。かごはいつてゐるか。〔茶男〕いれて置きました。〔□□〕とんだわるい心持、二日ゑひになりやした。玉やにてはもう大戸をあけ、格子をきれいにあらひて、しきゐに鹽を盛つてある。料理番肴をかつてゐる。〔れうりはん〕此いかは※あふりぢやあねえか。〔□□〕なに眞いかさ、かな川だア見なさえ。此あつい事を。あふりやするめいかだと安いはな。〔れうりはん〕※だれかれんつに、したがいゝ。〔□〕何さ、とんだ事をいひなさらア。此のちくしやうめしつ〳〵。此あぢやアどうだえ。いゝ魚だア見なさえ。※生むぎだあ。※はねだでもかういふ丈長はねえはな。トいふをよそにきゝ、三人はするがやのまへまで來る。〔えん〕こしのものを出してくりや。〔茶男〕マアちつとおよりなされまし。〔喜の、しあん〕すぐがよう

ござえせう。　えん　さうさ〳〵。　米明　さやうなら。　ト くゞりより内へはいり、三人のこしの物を出してわたす。むかふのひやうご屋なぞにては、もうみせをひらき、わかいものあげえんを拭き、のうれんをかける。竹村の前には名札をはがした跡のあるせいろうつんである。かしのきやく八ツを打つて上るてやひ、伏見町のかたより二人づれにてかへる。一人はきりやのよこての小便所、むかふのはめへ、小べんで、のの字をかきながら、　鬼揃　コウ鐵えまてえ。いつ所にえゝべえ。ゆうべわが女が來てな、云ふにやアナ、きいてくんなさえ。鐵さんと云ふものはわからねえものでござえやす。こんだうさよじさんに一本ンかりてたて引キをしてあげてやつたに、今夜も知らん顔をしてゐやす。あんまり押がつええ。八ツを打てあがる客はみんなあの位なもんだ。なんのかのと云やアがつたからな。おれがナいゝかげんに戸尻を合せておいたせ。あいつアたうもろこしを、よこぐはへにしようといふつらだナア。　伏見町河岸は八ツにみせを引くゆゑ、八ツを打つてあがると、す一本にてすむ。これこみつなきやくのする事なり。　鐵　ほんにさういつたか。とんだきまぐれぢやあねえか。こんだうは二朱銀をはふり出して、酒肴付けてあすんできたア。あいつが云ふなア五年ほど跡のこつたあ。こん中もナ、きらずにあみをいれていつた奴で、ほぞを七八へえつけやあがつた。あすこのやてえぼねは、大方あいつがくらひつぶしてしまふだらう。あのづうてえを見やな。まとひ持にすればいゝせ。エヽくさびをそぎたくなつた。　ト云ふはせついんへ行くことなり。　[illegible]　なんでもばんにやあ虎やへあがるべえざえ。こいつア思ひつきだつけな〳〵。エヽ引。　ト行過ぎる。大門の口番人の火をたいてあたつてゐる。てすりによりかゝつて、こぶまきのにこどりといふしんざう、しもげたやうなかぶろ、きやくをつけてゐる。これまじりみせ以下の、女郎と見えるなり。　新造　おつなてうしのこゑにて、　ヲヤ喜のさん

○竹村　五六七頁參照。
○かしのきやく　新吉原西河岸の連中。
○八ツ　こゝでは午後二時。
○一本ン　貫緡一本にて一貫文である。一兩の四分の一に當る。
○たうもろこしをよこぐはへ　口の廣く大きい事を云へるか。
○伏見町河岸　伏見町はおはぐろどぶに添ひしより河岸と言ふ。
○す一本　素一本か。ほんとの一本。全くの貫緡一本。
○こみつなきやく　こみつなは、細かい、しみつたれたといふ意。
○二朱銀　昔の銀貨の名。二銖に當る。卽ち銀一分の二分の一。八枚を以て金一兩に代へる。
○きらず　豆腐のから。
○あみ　小さな蝦の幼蟲見たいな動物。あみえび、ぬかえびなどと云ふ。
○ほぞ　臍。
○やてえぼね　屋體骨。家の身上の意。
○しもげたやうな　しもげるは寒氣でいたむこと。
○まじりみせ　店にゐても毛氈に坐ることが出來ぬ安女郎。

どうなんしたえ。[喜の] お久しいの。何今時分までうか〳〵してゐる客があるものか。いゝかげんにしてけえりねえ。とんだねむさうな目だ。みづのえさんによくいつてくんねえ。

[新造] おさらばえ。えん二郎、しあん、喜の介三人は江戸ぶしをうなりながら、大門を出る。[客男] かづさやア引。[かご] アイこゝでござりやす。白玉やのたな下のあたりにて、へんじをする。[ゑん] なぜこつからのせねえ。[客男] 高札が出來てから、大門のきはへ駕籠がなりません。むかふより梟やの娘下女をつれ、朝參りよりかへる。[ゑん] お夕さん、でえぶお早いお出の。[ゆふ] ヲヤえんさんどう成されました。けさは山谷のしやうぼふじのびしやもんさまへ參りました。[ゑん] こゐんさんによく云つてくんなせえ。[ゆふ] さやうならおしづかに。[かご] サア召しまし。[客男] おはき物はついたか。さやうなら此の間に。[ゑん] よく云つてくりや。[かご] こつちらのだんな、お羽おりをもちつとおいれ成されまし。[かご] ぼうぐみよしか、どつことな。トかご三ちやうともにあぐる。

〽おくられて行くちやうちんと、わかれ路にきくかねとは、かたげて見ればつりあはぬ。大じん客にこいとらう、おくるけいせい道心者、ものもらひ同士朝咄し、口よりけむの出る比、立つや今戸のかはらけむ。すわる四ツ手に三人は、にほん堤を一ツさんに、いそがせてこそ三重引へ行く空の。

山東京傳戲作

○江戸ぶし　前出。五六頁參照。

○しやうぼふじ　正法寺。

○ぼうぐみ　棒組。駕籠を一緒にかつぐ相手。あひぼう。

○おくられて行くちやうちん云々　提燈に吊鐘といふ文句から。

○こいとらう　[illegible]

○口よりけむの出る比云々　早朝の寒さに吐く白い息をけむといひ、それから今戸の土器をやく煙に言ひかけた。今戸は淺草にあり、土器を産する。

○四ツ手　四手駕籠。竹を四隅の柱とし、竹で編んだ駕籠。以下四、三、二、一と數を讀み込んでゐる。

◇挿絵

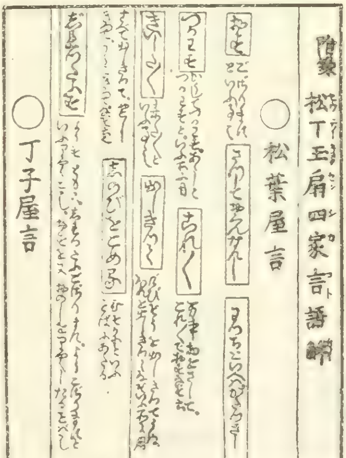
（上）松葉屋瀬川。

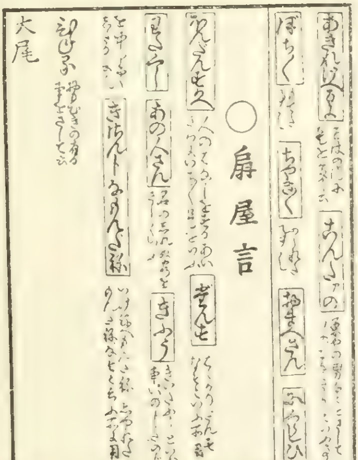
（下）扇屋花扇。

（参考）傾城鑑

◇挿 繪

（上ノ右）丁字屋名山。
（上ノ左）鶴屋菅原。
（下ノ右）松葉屋言。
（下ノ左）扇屋言。

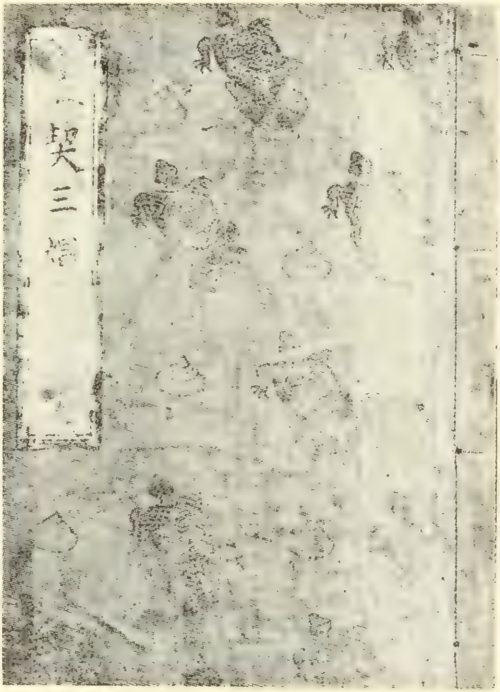




○潮光　浪速の枕詞。
○浪速の葦は伊勢の濱荻　「物の名も所によりて變りけり、難波の蘆は伊勢の濱荻」といふ歌がある。それを引用したものである。
○てらす　降るの反對に照らす。兩者ともに振る（客を）の義である。
○朝草　淺草海苔。多く品川大森附近より採る。
○みつの女肆　吉原、深川、品川。
○中、吉、品　深川（仲町）、吉原、品川。此篇にあるお仲、およし、お品がそれである。
○これを知るものは云々　（論語「雍也篇」「子曰、知之者不如好之者、好之者不如樂之者」とあるによる。
○竹邑　新吉原にあり。菓子屋の名。（前出五六七頁）

古契三娼

山東京傳作



自敍

潮光や、浪速の葦は伊勢の濱荻、北廓にふるといふ言あれば、河東にてらすといふ言あり。所かはれば南驛育の蓮も、朝草の名によぶ。さりやみつの女肆、言風俗各異にして、人情亦異なり。今、中、吉、品の人ン物をこしらへて、楚の人情をかたらしむ。これを知るものは、これを好むものには如かず。これをこのむ者は、これをたのしむものにはしかず。我未樂、何ぞ竹

邑が上膃ん饗ひ、※白菓梅家が黄鰻を喰ひ、※大木戸の餺飥餅の大イなることをしらんや。誠にしかり。こや古契の三ン娼にあらで、※こけの殘笑とも見たまへかし。ときに天明※七つやの※ひどくめん、※紙花喰ふひつじの年、※通人の羽織長き春の日、花川戸羅月が別業、松風亭に毫をとる。

作者　京傳誌 ㊞

○白菓梅家　『嬉遊笑覧』巻十上に「深川鰻名産なり。……深川には安永頃いてうやといへるが高名なり」。
○大木戸　四谷大木戸。『江戸名所図会』に「甲州及び青梅への街道なり。……こゝの番屋は、町の持なれども、突棒・指叉・錑等を飾り置けり。是往古関のありし時の遺風ならん」。
○こけ　馬鹿もの。
○七つや　質屋。天明七年刊をも含めてゐる。
○ひどくめん　並々ならぬ工面。
○紙花　紙纏頭にて、遊所などで祝儀を與へる際に、金錢を以てせず目録の心で包紙のみを與へる。後に現金に引替へるのである。
○通人の羽織長き　羽織の長いのを着るは通人とされてゐた。それに日長の春を言ひ掛く。

○ゆうべけ　昨夜の疲勞。
○大纏　火消鳶人足の言ふ言葉に倣ふ。また纏を振るに年を經るをかけてゐる。
○竹ばしご　同じく火消の用具。
○あぎと　頸。あぎとをならすとは大笑ひすること。
○ぼんくら　ぼんやりしたもの。
○たなだいのはし　棚臺の端。店さきの臺の先端。

序

京傳きはめて三つの色町にあかるく、今一册子を著す。是をひらけば、ゆうべけ※の晝寐の貌のおほひとなり、これをたゝめば、傾城の酒あたゝむるあふぎともなれり。されど大纏※ふりにし代より、竹ばしご※くだれる今も、人の口に戸ざしなければ、何某是をうれひざらんや。我はな鳶町抱への身のさちなれ。もしあぎと※をならすぼんくら※あらば、腕づくをもて是をふせがん。そのこゝろざしを、此書の鼻のさきにむすぶてふ、たなだい※のはしにしかいふ。

山王町鳶のもの
あふさか市事
かふ峨白書㊞

〔吉原〕

北方有二佳人一

※新鄭※江都地、※青樓多二美人一。珊瑚翡翠枕、※錦綉※鴛鴦茵、懸二思※武藏鐙一、續二情※常陸紳一。朝々雲雨契、夜々換二良親一。

○新鄭江都地云々　新鄭江都ノ地、青樓美人多シ。珊瑚翡翠ノ枕、錦綉鴛鴦ノ茵、思ヲ武藏鐙ニ懸ケ、情ヲ常陸紳ニ續ル。朝々雲雨ノ契、夜々良親ヲ換フ。

○新鄭　支那河南省にある地名にて、周の宣王の弟桓公が封ぜられた所。その子武公の時、新邑といふ意味で、新鄭と稱した。江戸に新鄭の字を當らしたのも、恐らく新しい都といふ意味であらう。

○江都　江戸。

○青樓　遊廓。

○錦綉　綉は繡に同じ。にしきとぬひとり。

○鴛鴦の茵　夫婦の契りをする茵。

○武藏鐙　昇馬に用ひた一種の鐙。その特殊の金具に鐙摺鐵「みづをがね」あり。之を「さすが」といひ、鐙につくりつける。よつて古來「武藏鐙さすがにかけて」など歌にもよまれてゐる。此處も思ひをかけると云はゞ鐙に引出したもので、さらに武藏の人を思ふの意をも兼ねてゐる。

○常陸紳　紳は帶。常陸國鹿島の神の正月十四日の祭禮に、男女が夫々自分の想ふ相手の名を帶に記して神前に供へ、婚の成否などを占ふ。此處に此

の常陸帶に思ひを籠つてといふので、前者と同じく常陸の人、即ち近國近在の人といふことをも含めてゐる。

○謝安　東晋の名臣で、陽夏の人。安石と號す。

〔深川〕

晋謝安携レ妓遊二東土一

おむかひといちどに聞やほとゝぎす

「品川」

家交二江河南北岸一　心通二上下往來船一

たそやたそたれかはけふのつまならん
あだしうき世にあだし身なれば

北尾政演畫

鐘ひとつうれぬ日はなし江戸の春。されば御江戸の繁榮を申すは、大引の手赤の助言をするにひとしかるべし。誠に土一升金一升と申せば、塵塚を穿ても、金のなる木の實生はあるぞかし。わきて遊里の全盛はいふもさらなり。大門の仕置場たえて、堤に飛びかふ螢も、刑鞭の朽ちたるなるかと思はれ、櫓下の火の見櫓に、風見の烏おどろかず、馬を四ッ谷の新宿につなぎ、牛を高輪の南にはなつ。かゝる江戸にすみては、夕に笛をふいて、朝に紫の衣を著し、昨日まで櫻飴あきなひし番太郎も、けふは地主の花をさかするぞかし。通町のほかに横町あれば、横町のほかに新道をひらき、八百八町は、深川本所の中にもかぞへたらず。町鑑にもれ、江戸繪圖に書きつくしがたき、小路々々又すくなからず。稻荷新道に白虎湯の看板かけしは、所の名にめでし間違なるべく、下踏新道と聞いては、燒鮪のにほひなつかしく、樂屋新道を通りては、見たきものといへる清女のことのはを思ひあたる。藥師新道も壺のえんによらば、朝鮮の弘慶子が住むべく、不動新道に縄暖簾

○鐘ひとつうれぬ日はなし江戸の春　榎本其角の句。

○大引　大引は夜九ツの拍子木を合圖に各樓皆大戸を卸して全く見世を鎖すことをいふ。

○大門の仕置場たえて　大門を入つて右手、制札の立つてゐる番小屋の後はもと刑場であつた。今はその跡も無くなつてゐるので刑鞭の朽ちたるといつたのである。こゝは次の語と共に天下泰平で犯罪もなければ火災も起らないといふ事を譬喩でいつたまでである。刑鞭は罪人をたゝきこらすのに用ひる鞭。

○馬を……につなぎ　『史記』周本紀「縱二馬於華山之陽一、放二牛於桃林之虛一。偃二干戈一、振レ兵釋レ旅、示三天下不二復用一也」とあるに據る。

○夕に笛をふいて　按摩針いと呼び歩く盲人。

○紫の衣　檢校になること。

○番太郎　辻番小屋の番人。

○地主の花　地主になること。

○八百八町　江戸市街の概數をいつの時代か斯く云ひならはす。

○町鑑　『江戸町鑑』一卷。關所、町奉行・與力・同心の氏名、兩國橋の火消し、江戸方角・坂・堀、その他の地名など詳細に記載し、且つ日本橋から諸地方へ至る道程をも示してある。

○白虎湯云々　白虎と白狐の誤を指して云ふ。

○燒鮪　鮪の下踏燒。

○見たきものといへる清女のことのは　清少納言の『枕草紙』を指してゐるのであるが、「見たきもの」といふ條はない。「見るものは」といふのがあるが、それは路次の行粧の中で、見て興味あるものを言つてゐる。寧ろこゝは「なほ世にめでたきもの」の條などが當るのではあるまいか。

○壺のえん　藥師如來の像は通常、左手に藥壺を持つてゐる。また弘慶子も壺を持つて行商したのである。

○弘慶子　明和の頃、朝鮮の藥賣弘慶子といふもの、柿色の筒袖にて竹の子笠の先の尖りたるを被りて市中を行商した。

○不動新道に縄暖簾かけしは　不動明王は左手に羂索を執れるより言ふ。

○ばくもの屋　ばくは遊女のよねに對する妾の意で宿屋の下女をいふ。こゝは一膳飯屋ででもあらうか。
○鯰　瓢箪に鯰。
○有難の影向や　謠曲『高砂』の句。
○勸學院の雀　勸學院の雀は蒙求を囀る。「門前の小僧習はぬ經を讀む」の類である。
○金吾中納言　小早川秀秋。豐臣秀吉の母北政所の甥に當り、初め秀吉の養子となつたが、後秀頼生れて、小早川隆景の養子となる。關ケ原の役に東軍に内應して勝敗を決せしめた。
○主馬の小金吾　名は武里。平重盛の遺臣にて、年齒弱冠に滿たざる青年武士。維盛の子六代御前に從つて紀州高野山に赴く、途中大和街道上市村にて追手の大將猪熊大之進と組打して戰死す。（傑作淨瑠璃集上、下、一四八頁參照）
○圍ものゝ多くある故に　「きんご」は鹿戀（圍、十五女郎）をいふ。「色道大鏡」卷九によつて音相通する所から圍者の意にとつたのである。
○らうのすげかへ　煙管の羅宇のすげかへ屋。
○祭文　歌祭文の略、俗謠の一種でもと山伏の唱へたものであつたが、後

かけしは、ばくもの屋の門口ならん。猫屋新道に鰹ぶし屋はなけれど、厩新道にみごと厩はあり。瓢箪新道に鰻屋はあれども、鯰のなきこそ殘念なれ。觀世新道の童は、有難の影向や。と謠ひ、狩野新道の藏の壁に馬を書きしは、勸學院の雀なるべし。かかる名高き新道にもあらず、爰にきんご新道といへるは、金吾中納言の住み給ひぬる古跡にもあらず、主馬の小金吾が所縁もなけれど、圍ものの多くある故に、かく名づけしも尤ぞかし。人通りは常にたえず、らうのすげかへ世帶のやにを通し、鏡とぎは俤の日々にかはるを悲しみ、祭文となふ山ぶしの、こゝに哀れをとゞむれば、長々の浪人來りて、御子孫も御繁昌と祝す。ちやらつく雪踏の音は、日なしかしの步行ぶり、駒下踏の虛無僧は、藏のむだ書よりぬけ出たるかとあやまたる。川越極樂寺本堂建立、たがアノ＼。かし本屋の風呂敷包は片々へかしぎ、鍋釜いかけのへな土入は、そばやのうどん箱なり。鷄は砂水に羽蟲を拾ひ、日間のぺん＼草は、犬の屎をつらぬいてはゆ。己とふるき軒のつりしのぶ、やれたる竹すだれかけしえんさきに、將棊さしてゐたるが、お手にはと問へば、金銀二枚に墨のすりかけ一ツ。とこたへしは、步のたらざるなり。勝手よりそばやのかつぎよびかけて、ぶつかけ二ツ。と誂ふるに、女房が盛にし給へ。とすゝめしは、殘りたるしやうゆを、ひや飯へかけてくはんのぞみなるべし。大屋どのの娘子が寒彈に目を覺し、向ふの親父が看經にねむけを催す。つねに日の目さへ見ぬ新道の住ひも、園生に植てかくれな

き、くれなゐとよばれて、きのふまで※川竹をつとめしも、其身の果報とて、さる大盡にうけられ、けふは※おのじの名をつけて、よしとあらためさせ、ゆく〳〵は内の首尾とゝのへて、※御新造さまともよばせん心ざしなれど、しばらく爰に圍となりけるに、およしははや歩行ぶりにも、※八文字の癖をかくして、急に※白地めかすれど、まだ※里言葉の折ふし雜るもをかしかりき。男女に小僧までつけおかれ、一日のわざとては、芝居咄と飼猫のせわやかるゝのみ。はち植の※まんりやうは愛せど、己が身をうけられし代金の事ははやわすれ、淺草の※梅ぼりに人仕事して、その日をくらすは母、文づかひの間には、※紋附持てあるきし兄も、※泥龜がおとし米見つけし如く、一度にうかみ出、※日なしの七口をかたみに殘し、去年世をさりし親父まで、草葉の陰にかた肌ぬいで、鮪のさしみ引寄て、茶碗酒あふ

には小唄に作り合はせて、三味線に添へて唄ふ樣になつた。「こゝに哀れをとゞむる」は祭文の常用句。

○御子孫も御繁昌　嘉なりたつて門付をする浪人が用ひたる言葉。

○日なしかし　烏金と稱する高利貸。朝に金を貸して夕刻取りに歩く。

○藏のむだ書　藏の壁に書いた落書。

○川越極樂寺本堂建立云々　かく呼び歩いて寄附金を集めるものもあれば、籠屋の呼聲もする。

○へな土　埴で黒くして粘りある土。水底などよりほるもの。へなと

○日間　廂間。家と家の間の狹い所。

○ぺん〳〵草　薺のこと。野生して白色の小花を開き倒三角形の、三味線の撥の如き實を結ぶ。

○やれたる　やぶれたる。

○墨のすりかけ　ふち斑、模樣が足らぬといふ洒落。

○ぶつかけ　所謂かけそば。

○寒彈　三味線の寒ざらひ。

○園生に植てかくれなき　「竇にや紅は園生に植ゑてもかくれなし」。(謠曲『安宅』の句)

○川竹　遊女の異名。川竹の流れの身などいふ。昔、淀川にそふ江口、神崎の遊女が、小舟に乘つて客船に行つたのによるといふ。

○おのじ　およしと、おをつけること。卽ち素人になること、

○御新造　妻。新宅を造つて入れる意からといふ。

○八文字の癖　吉原の遊女は道中に外八文字に歩く故にいふ。

○白地　素人。

○里言葉　廓言葉。專ら遊女がつかふ言葉で、遊女は諸國から集る故に、吉原にて特別な言葉にて生國を隱したものといふ。

○まんりやう　萬兩。やぶかうじ科に屬し、高さ一尺許り。革質の厚い葉と光澤あり、夏に小白花を開き、圓い實を結ぶ。冬、春に紅く熟して美し。

○梅ぼり　埋堀。

○紋附　紙の中央を空地にして、その周圍に俳優の紋所を多數刷りおき、その紋の中の一個又は數個と同じ紋を別に作りて中央の空地へ隱して入れる。そして一紋當てに何錢とさだめ、各自その紋と思ふ紋に印を施さしめ、やがて開き見て、中りたる人には景物を與ふるもの。

○泥龜がおとし米見つけし如く　池などにゐる龜に上から米を投げ與へること、一度に續々と下から水面に浮び上つてくるさま。

○日なし　毎日拂ふ其日の借金。

る身とはなりぬ。日の本は姫氏國とやらんきけど、からもやまともとかく女の世の中にこそ。此の園の向ふは、表に藍にて古文字書たる障子を立て、大山石尊の御札にならべて打たる宿札に、女中御かみゆひ仲と筆ぶとに記しは、もと深川下木場の川並鳶の娘にて、をさなき時は、まさきの葉で拵た、ぴい／＼を吹、雛草で島田わげこしらへて遊び、ぎし／＼なるあしだはいて、船蟲のはふうどんやの汁つぎ持て、醬油買に行し身の、おやはらからのためとて、十七のとし新子となりて土橋へ出てより、あたまのうへは日々にふえ、藍上田の光も夜々あきらかになりて、呉服屋の屋敷通ひをつけのぼせにさせ、新川の澁染を宿あづけにさする程の全盛。其の後じまへとなり仲町へ出てより、藝者衆とよばるるも所の習ひなり。光陰は三間堂の通し矢よりも早く、はや中ウどしまと云ふもふるくなれば、又かしをかへて表櫓へ出、はを白くして新造と化てより、額に小じわができ、ばばあお仲とあだ名され、ばゝあ／＼とよばるれば、己がこととて返事するも、うきつとめぞかし。ゑちご縮のめききするにはあらねど、たゞかすりへのみまはりて、情なしと云はれしも、さすがまきのそげにもあらぬかして、わぐらといふ所に下モ三ンの何某とて、句拾ひしたりうかしのはなつばりして渡世を送り、あだ名で幕の通つたる男と夫婦の約束して、去年の春より務をひき、此の新道の住ひ、昔は人に結せし身の、今は人の髪に憂世をむすぶ世渡り、九尺二間の借家に疊四疊敷いて、のこりの二疊はうすべりにてくろめ、越

○姫氏國　東海姫氏國
○大山石尊　石尊參り（七二頁）參照。
○宿札　家のしるしにかゝげる札。門札。
○川並鳶　材木の揚げおろしをする鳶人足。
○まさき　正木。高さ七尺、葉は楕圓形で、革質であり、夏に淡緑色をした小花をつける。春夏の間より枝を分けて花をつけ、秋南天の樣な圓い實を結ぶ。此の葉を卷いてならすとピイ／＼といふ。
○雛草　「めひじは」であらうか。「めひじは」は夏、旱地に生ずる雜草にて、「すまふとりぐさ、ちからぐさ」等の名があり、葉は粟の葉に似て小さく、秋に芒の如くして小さい穗を出す。此の穗を以て島田髷の形など作つたのであらう。
○船蟲　船の底などにつく黑色の甲殼類の虫。長さ一二寸で、長い鬚を有し、疾く走る。
○新子　吉原で言へば突出しに當る。
○土橋　深川の土橋。深川七場所の一。
○あたまのうへ　遊客の頭
○藍上田　上田は上田縞の略稱。信濃上田より産する縞織の絹の縞。藍染

の上田紬のこと。
○吳服屋の屋敷通ひを云々　吳服屋の手代などにて屋敷へ出入りするやうな、外出によい者をして熱中させる。
○新川の澁染　新川は『江戸名所圖會』卷之二に「(四日市町)此所を俗間に、新川と唱ふ。酒問屋多くありて繁昌の地なり」とある。澁染とは、酒屋の奉公人に、澁染柿色の着物を着る習はしになつてゐたから云ふので、要するに新川邊の酒屋の奉公人共の意である。
○宿あづけ　江戸時代、訴訟のため江戸に出府したものに私曲のあることは、その旅宿にあづけて逃亡を防いだ。こゝは放蕩のために親元の宿へあづけたのであらう。
○じまへ　自分で獨立して業をなすこと。
○仲町　洲崎の仲町なり。
○藝者衆　所謂深川の羽織藝者
○三間堂　三十三間堂、深川にある。『嬉遊笑覽』卷之七に「同所(富岡八幡宮)二丁ばかり東の方にあり」。
○かすり　かすりを取ること。物の上前をはねるを云ふ。
○まきのそげ　薪の木片。
○わぐら　和倉町。十間川の南岸にあり、此邊一帶を木場といふ。
○下モ三ンの何某　不詳。
○句拾ひしたりうかしのはなつぱりして　不詳。
○幕の通つたる男　界隈に名の通つてゐる男。
○くろめ　胡麻化し。
○三庄太夫の淨瑠璃本　三庄太夫は三莊太夫また山椒太夫にて、強慾非道の長者。嘗て安壽姬を捕へて酷使死に至らしめた。淨瑠璃本には『三莊太夫五人孃』(紀海音作)、『三莊太夫五人孃』(むすめ)竹田出雲、『由良湊千軒長者』(竹田小出雲等作)がある。此處の淨瑠璃本は恐らく小出雲等作のものであらう。

張は※三庄太夫の淨瑠璃本にてはり、さる程に哀れなり。かべ一重鄰は、丸竹のぶつつけ格子、張物の戸板に隱れて見えねど、相州箱根御藥湯、一度入※二十四銅、四五度入四十八銅、一※ト廻り六十四銅としるせし看板をかけ、四百四病のなほるしかけも、ひんの病は請合れず。信濃の一※ト季奉公人相手にして夫婦暮し。亭主は※金川在で名にふれた、長屋門づくりの、大百姓の獨息子にて、※蕉風の面白くなき誹諧も少しはやり、碁も下手といはるる程にはうちて、江戸の流行唄も、先づ此の人がさきへ聞出し、稻毛厚木の作左衞門、天王丸の五郎介なぞは直下に見くだせしかな川での通りもの。女房お品は伊豆の大島の生まれ、新島村といふ所に、島薪あきなふ者の娘なりしが、何故にや十一の年かな川の宿へ賣られ、いづみやといふ家へ抱られ、實の入ッたたうもろこしの毛みる樣な髮をそつて坊主

○二十四銅　銅錢二十四文。
○一ト廻り　『俚言集覽』に「七日を一廻りといふ」とある。但しこゝは七回。
○一ト季奉公人　當時三月と九月の二期に奉公人が交代した。一ト季奉公とは、長年勤續するのではなくて、短期間即ち半年ばかりの奉公である。信濃からはさうした奉公人が多かつたと見える。
○金川　神奈川。
○蕉風　芭蕉調。

にされ、ひろ袖の布子にこんのたびはいて、ひぜんかきながら小ぢよくつとめしも、いつしか爰のうちの通り名をついで、お職となりしが、ふと今の亭主となじみてより、燒蟹喰ひ合ふ中となり、榎堂で取れたなまこのけて置いて、おまする程の眞實に、外心はなかりき。あるとし品川宿の夏坂屋の亭主、湯治の歸りがけ、此女郎に見所ありてより、相談極めて品川へのくらがへ、品川の水にみがきあげてから、掘りだしものとよろこび、野風、すゞし野、村芝がれつにならべて、名も袖うらとあらためられ、九曜の星の合印付らるゝ身となりければ、今の亭主ことさら此袖浦が事わすれ兼、神奈川より馬で通ひ、鳥はものかは馬のいなゝくに、そのわかれをしみしがかうじてより、五百石の田地を質入レして出來秋の勘定合はねば、おやぢ今はたまりかね、庄屋宿老の耳へ入レて勘當し、在所を追はらはれければ、袖浦も薩摩の何がし山のたれさんに、うけらるべき場所をはづして、まことをたて、其年のくれ年ン明て、南ばんばに海苔をとつて渡世する、伯父をおやぶんにして、此新ン道の借家も、今は袖うらのおく口したる住居なり。女郎のじみたるはくせとて、むしやうにしはきものなれど、さすが座敷持のはてとて、世たいのくりまはしよく、風呂の薪にふすぼりて、いつしか家のすみ／＼もくろみ、棚のはしの蜘も住家をかゆれば、夫婦もはや江戸なれて見ゆれど、女房は古郷忘じがたきや、一チばん鹽、二ばん鹽とて、島干物の目利と、日和見る事の上手なるもをかしかりき。貝寄の吹く春の日より、鰯雲の

○小ぢよく　子供。小女。こゝは娼家の禿をいふ。
○通り名　一般に知られてゐる名。遊女屋でその家を代表してゐる遊女の名。
○お職　お職女郎をいふ。遊女屋に於ける遊女の首座をなすものである。
○榎堂　神奈川の町外れの南に榎堂といふのがあつた。(『江戸名所圖會』卷之二。)それをいへるか。
○のけて置いて、おまする　取除けておいて參らす、差上げる。
○夏坂屋　於坂屋か。『婦美車紫鹿子』に「またいつきなんすと、通ひくるは夜桜、菊や、七夕はけ、十夜、なう／、大みや」とあり。
○くらがへ　住みかへ。
○野風、すゞし野、村芝　何れも有名な女郎であらう。野風のことは本篇後半（六〇六頁）に出づ。
○れつ　列。仲間。同列。
○九曜の星の合印　九曜星を合印とす。高位の女郎は、その抱主の定紋の外に、合印として各〻自分の紋を持つてゐたのである。
○鳥　曉を告げる鷄。
○出來秋　秋の稻の刈入れどき。
○庄屋宿老　町の長や村の取締を

する長老達。

○南ばんば　南番場。品川の天龍寺附近。

○おやぶん　親元。

○座敷持　自分の專用の座敷を持つてゐる上位の女郎。

○古郷　大島。

○島干物の目利　これは一番鹽だとか、二番鹽だとかいふ大島名産の干物の良否を目利する。

○貝寄　貝を海濱に吹き寄せる風。昔は陰曆二月二十日前後に攝津の住吉浦で吹いた風を賴かしたのである。

○鰯雲　魚の群がつたやうに點々と相連つて空一面に擴つてゐる雲。

○出雲の云々　緣組は出雲の神樣達が寄り集つて定めるといふことよりいふ。

○心なしにはやとはれな　日が長いからむやみに使はれる勿れとの意味。

○岡雨に　たより無いにの意であらう。かげぼふしと訓ましたのは、元來此の字は影の傍に生ずる薄い影をいふのであるからである。

○ぜいをつかす　贅を盡す、奢澤をいふ。

雨催す秋のゆふべまで、貧乏とおつかけくらのみするぞ、やるせなきせたいなり。されば人のゆくへと水のながれ程さだめなきはなく、ことさら川竹の身は、なくと笑とに一トとせをおくり、まつとわかるゝとに一日をすごして、いづこいかなる人に身をまかせんも知れず。たゞ出雲の衆議評にまかする事ぞかし。孝行にうられ不孝にうけ出さるも、えんのあるのが實なるべし。此の三ン人のふじん、所はかはれど、おなじ川竹の末葉とて、合借家同士の心安さ、折ふしはうしと見し流れの昔をかたり合ひて暮ぬ。頃は卯月の半、心なしにはやとはれなと、心有人のいひ置しも尤も。圍れのおよしは、あまり樂すぎて一チ日を暮かね、近所のをさな子かりよせても、人みしりして、こはく丹後の藍縞に、小便を置き土産してかへれば、せんかたなく岡雨に、ゆげのたつ手焙引きよせて、富士のすそ野見るやうに灰をならしながら、旦那にねだるべき下タ心、袷小袖の模樣の案じにぜいをつかし、木地ろいろの用だんすに、たてかけし三絃とつて、禿だちへ人の末水のながれと身のゆくへ。禿だちから廓に住めば、たゞいつとなくあけくれて、暦くり出す品さだめ。けふはかねつけ袖とめの、もん日〳〵をかぞへておかす里の花、とのご待夜はひさしうて、

○ろいろ　つや消し。

○禿だち　禿時代。

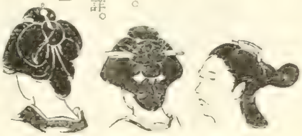
○品さだめ　人の批評。

○かねつけ　鐵漿をつける。

○袖とめの　やゝ年長けたものは振袖でなく留袖を着せる、之を留袖新造といふ。

首尾のなるよふじかさよ。ふかう成程なれこその心。おもひにそはでおもはぬに、そふも縁なりやせう事がないぞえ。といふ、するみの文句は、旦那へきこえてもすこしゐんりよゆゑ、口のうちにてうたひ居る折ふし、むかふの女かみゆひお仲、※きしじまのあぶらでよごれたる袷、かたはだぬいで、はうちでもゐるすだから、父はなさうだやアねえかね。トかべごしにいふ。【お仲】モシお品さん、けふは、となりのくすりゆの女房は、青茶のいろあげ、つたのもんの付たぬ※の子のたすきはづして、長らうのきせるくはへぎせるにして、たち出て、【お品】ムヽわつちも今ちつとはなさうと思て居たのよ。マア見ねえ、此のながい日に、一チ日臺所もとにかゝつて居るはな。喰物ごしらへほど、うるさいものはねえよノウ。【お仲】ぜんてえおめえは奇麗ずきだからよ。そしておしなどんが、氣がきゝすぎて居ると云ふもんだから、おめえがてえ〳〵ぢやアねえよ。モシおむかふのおよしさん、ちつとお咄なせえせんか。トお仲は三人のうちでのおしやべりゆゑ、はう〳〵をよび出す。およしはきき付て、三味せんを下におき、からしの所へたち出て、【およし】わたしもけふは退屈して、身にもちあつかつてをりいす。けふはさんをば、梅堀へつかはしいしたから、小僧と久介ばかりさ。トいふ所へ、小僧たばこぼんへ火を入れてもちきたる。此の子をごらうじいし。ゆうべねぼけてながしへおちて、此樣に疵をつけいした。【お仲】オヤ〳〵あぶねえ。小僧どん、きのふの事を、いつつけまをさうか。小ぞう舌を出しながらひつこむ。【およし】けふはお休かえ。【お仲】けさいつそ、しやくがいたうござりやしたから、休みやした。おめえさんもおすはおいひなさえし。ぜんてえおめえさんには、※しのぶが、しのぶとは髪のふうの名なり。よく〳〵お似合なさえすよ。【およし】みんながさうおつせえすが、わたしはあつちにゐいす時から、※手がらが、これもよしはらのかみのふうなり。すきさ。【お品】お仲さんは、よく廓の風を呑みこんだよ。品川なんぞぢやア、むすび

○きしじま　不詳。
○ぬの子　綿の入つた木綿の衣服であるが、こゝは[illegible]に言つた。
○さん　女中の名。
○しのぶ　しのぶ髷。(前出五七四頁)
○手がら　てがらを用ひて結ふ丸髷で勝山の變形したものをいふ。てがらは髪に用ゐる布帛。
○兵庫　[illegible]
○まへど　毎度。
○くら田　藏田。
「七匁五分、十匁。」[illegible]からし、大ぜせ」。[illegible]
○しの字　挿繪中。
○こしかけ　不詳。
○京ぐる　髷の一種。(前出五六六頁)
○天神　挿繪左。
○まをとこ本ン多　不詳。
○扇屋　江戸町一丁目、扇屋宇右衛門。著名なる妓樓であつた。
○道中雙六　昔の雙六の一種、江戸から始まり東海道五十三次の渦狀に書き、中央の京都をさし、骰子を振つて、一驛から一驛へと進んで行き、早く京都へ達した者を勝とする。



兵庫がはやつたよ。まへどくら田のひめづるといつた女郎しゆがすきでいつたつけ。〔お仲〕としまの風には、しの字わげ、こしかけ、京ぐる、なぞがいいふうさ。深川でまへどはやつた、天神むすび、まをとこ本ン多は、きざな髪よ。〔およし〕稻城むすびは、扇屋のおかねさんがいひはじめた風ウさ。〔お品〕およしさんなぞは、品川といふ所は、おしんなさるめえね。〔およし〕ぞんじいせんよ。道中ウ雙六で見たばかりさ。それでも湯治から歸つた客人に聞イしたが、氣色のいい處だとねえ。〔お品〕先づ高輪の茶屋からして、新かとく、中かとく、一チ力、七チ力なぞと、他所にない家名がござりやす。〔およし〕石橋萬とやらは、留守居しゆゥ咄で聞イした。〔お品〕そして女郎しゆの名に、三ン字名の中に、おの字名がござりやす。六七年跡は、いい女郎しゆがそろつてござりやした。さど屋でつき出しのたいそうであつたは榮山ンさ。藏田でひな菊、りよ。松坂にはいい女郎が揃てをりやした。柏屋で、なには、花まち、つの國で、豐山、なほえ。げいしやでは、新内で鶴賀がはやりやした。河東は秀彌といふのひとりさ。歌に荻江惣介といふがありやした。高輪には壽樂さんが座本でをどり子がだいぶござりやした。義太夫で春治と云ふがいい淨るりさ。せんてえ宿のげい者は高輪へゆかず、高輪のげいしやは宿へ來ぬといふが法さ。げいしやをよぶと、新造がひとりづつつきやす。男げいしやは、明朝座料をとりにまはりやす。引ケを取られるもんだから、錢でうけとるのさ。それだからどんすやびろうどで、いきなさいふをこしらへ

○湯治　箱根温泉。
○留守居しゆ　江戸に於ける諸藩の留守居役衆。
○さど屋　「七匁五分、十匁。かうし、大みせ」。（二婦美車紫鹿子）
○つき出しのたいそう　初めて店へ出る時に澤山の費用をかけた。
○松坂　七匁五分、十匁。かうし、大みせ。
○柏屋　七匁五分、十匁。かうし、大みせ。
○つの國　津の國。七匁五分、十匁。かうし、大みせ。
○鶴賀　新内節の一派。宮古路豐後の高弟宮古路加賀太夫富士松と改め一富士松薩摩掾と稱す。其門人に宮古路敦賀太夫あり、鶴賀若狹掾と稱し、鶴賀節を樹つ。薩摩掾の門人鶴賀新内別派を樹てゝ新内節と稱した。いづれも同流。こゝでは鶴賀の名取りの業。
○荻江　長唄の別派。荻江露友の創めたもの。
○宿　品川の本宿。
○座料　お座敷料。座敷で勤めた料金。
○引ケを取られる　上前をはねられる。
○どんす　純子

て、自身にとりにまはりやす。人にとりにやつてもよささうなものだが、さうするとしさいらしいなぞといつて、やかましい所さ。女郎も今はうつりかはりやした。今では新松坂の、此春、其君。佐渡屋で町づる、あやぎぬ。村田でその歌、ましてる。大松坂で其朝、野の芝、新叶で三つ花、鳰瀧。ときは屋ノから歌、梅崎、なぞがききものさ。はやる女郎は、初くわいにうらやくそくをさせやす、新造がふたり付て晝夜さ。もの日もさうさ。わきとちがつて若者の祝儀も三ンくわい目さ。そしてたれ樣御仕廻誰と、下タへ、その女らうの名を書て、かげみせへはりやす。それを仕廻札といひやす。みせをおもてみせといひやす。どこのうちもみな三人づつさだまりでみせへ出やす。それをみせばんと云やす。五つにかはるのさ。此ことを正めんをはるともいひやす。みせばんでないものは、みな内みせにをりやす。お見たてといふと、みんなかげ見せへならびやす。よしはらは中カ座といつて、まん中に居るがいい女郎しゆださうだが、品川ぢやア兩方のはしへすわるがいい女郎さ。見とほしの事を濱と云ひやす。穴ぐらの樣に下タにある座敷を、下タ家といひやす。天王のじぶんがにぎやかさ。六月の七日から十九日までござりやす。そして燈籠が出やす。二十六夜は大もの日さ。妙國寺の仁王さん、岸行寺のじふやなぞは、べつしてにぎやかさ。惠美子講をはでにする所さ。大見せの若イ者は、橋向へあそびに行やす。よしはらなら、川岸へ行クといふものさ。【お仲】つる吉といつた新内のげい者は、どこに今はをりやす

○しさいらしい　殊に特別の取扱ひ見たいなこと。
○村田　村田屋。七匁五分、十匁。かうし、大みせ。
○大松坂　七匁五分、十匁。かうし、大みせ。
○新叶　七匁五分、七印。小みせ。
○ききもの　手利き。腕のある女。はゞのきく女。
○うら　再會。
○晝夜　晝と夜との玉代がつくこと。
○もの日　紋日に同じ。
○三ンくわい日　三度目即ち馴染になつて初めて若者に祝儀を出す。「わきとちがつて」と言つてゐるが、吉原に於ても同じく、三會目に花を出すのが普通である。
○御仕廻　約束済の意。
○かげみせ　表見せの後の部屋にて、遊女の溜りといつたやうなもの。登樓の客は此處にて敵方を選ぶ。内みせも同じ。
○五つ　午後八時。
○お見たて　女郎を客が選擇すること。
○見とほし　見通し座敷。引付座敷。

え。〔お品〕やつぱり村田屋のむかふに居やす。モシそして旦那やかみさんの居るところを、お部家と申やす。〔およし〕オヤ吉原ぢやア、ないしようといひすよ。〔お品〕ほかに客のあるのをまはしといひやす。〔およし〕それもよしはらぢやア、名代のきやく人ンといひすよ。〔お仲〕深川なんぞぢやア、そんな手おもい事はねえが、よひどまりを付けた客の來る間に、ぬすみといふをうりやす。〔お品〕ムヽはてね。品川の法でなじみの客が、外へかくれて行くのをしると、その先キの女郎の所へ臺の物を送りやす。〔およし〕よしはらぢや、さういふときは、つけとゞけのふみと云をやりいすヨ。〔お仲〕深川ぢやア、なじみ茶屋へかくして外の茶やへ行てその事をけどられると、ぢきにその茶屋から先へしらせやす。さうするとくわしなぞを、女がうちの娘がもつてくるのさ。さうすると跡がむつかしうござりやす。またいろ客があつて、子どもやから、茶屋へ、あの客へはだされぬ。なぞといつてやかましいと、そのきやくが名をかへて、外のちや屋であふ事がありやす。知れると大かぶりさ。〔お品〕品川はおとまりの有ときがなんぎさ。今ぢやアはう〴〵の亭主たちが、茶をする事がはやる

○天王のじぶん　牛頭天王の祭禮頃。牛頭天王社は東海寺の外、左の山にある。

○二十六夜　二十六夜待。陰暦七月二十六日の夜。

○妙國寺の仁王　二王門の左右に密迹・那羅延の二金剛の像を安置する。

○じふや　十夜念佛。淨土宗の法要で、陰暦の十月六日より同十五日まで。

○橋向　品川にかけた橋の向ふ。即ち南品川。「婦美車紫鹿子」に品川本宿のことを記して「此淨土は大てい吉原を學ぶ。しかし及ばざることは、外八文字、客を一人り寢させる事、茶屋を御亭さんといはざることゝ、人がら尤次なり。其外なんす、りんすの言葉づかひは、大かたちがはず。八つ山に大門をたてたし」とあるに對して、南品川に就いては「此淨土は、髮のふう、衣裳着こなし、大がい本宿新宿を眞似、はりつよし。しかし人がら不及。なんす、りんすの言葉づかひちがはず。但し橋手前は甚だよし。向ふは少し次なり」とある。其の向ふを云つたのである。

○よひどまりを付ける　宵の中から行つて一晩泊る約束をする。

○ぬすみといふをうる　既に約束の客があるのに、その客の來る迄の時間を盗んで他の客の爲に商賣をする。

○臺の物　料理。

○子どもや　深川にては藝妓屋を稱す。子どもとは、遊廓にて抱への藝娼妓をいふ。

○大かぶり　大騒ぎ。

○おとまり　大名が參勤交代で道中の時、宿泊することをいふ。

さうさ。〔およし〕まへど美月さんや萬千さん、賀達さんなんぞが、※くら前をおつき合なんす時分は、よく吉原へ來なんしたよ。〔お品〕そのじぶんは、品川も、さかりさ。〔お仲〕ふか川ぢやア、かゝへをしてやるといふが、客のはでさ。※廓でいはば新造を出スといふやうなものさ。そして※しかけやなにかのさみしいことを、黄楊だのといひやす。是れは都合のわるいとき、あたまのものもみんな※まげてしまつて、つげの櫛をちよいとさしてゐたり、何かするから、それが※通りになつて、つぶりのものでもわるいか、しかけがさみしいと、此の頃は、とんだつげさ。などといひやす。きやくが茶屋のをんなに、まへだれなどを出しやす。しん子をだすにも、もん所や名をそめたまへだれをくばりやす。春子ども屋から抱へにわたすしかけは、小袖二つづつさ、襦袢を付てわたすうちもござりやす。そのあとはみんなてん〴〵の※きりやうさ。これだからはたらきのねえ子は、下帯なんぞも下々のはうばかり三尺、あたらしいのをとりかへて、※きざなことなんぞもするのさ。※山びらきは三月二十一日から二十七日までさ。※八幡さまの祭は、八月の十四日、十五日さ。十四日は舟まつりといつて、木場を舟で御輿がわたりやす。それはなぜといふに、木場は橋がせまいから、御輿がとほらぬのさ。※一ノ鳥居は代々木場からをさまりやす。まへど木場より槻家臺と云※まつりが出やした。わつちらが子どものじぶんは、※えびすのみやのこつちらに、そばきり稲荷といふがはやりやした。そのじぶんはしほはまが※はつかうしやした。今はすさき

○くら前　江戸淺草の藏前に幕府の倉庫があつた。こゝではその米穀出納を管理し、諸役人に切米を交付する庫役人を指してゐる。寛永十三年に始めて三人をおき、その役次第に增員され、貞享四年に七人となり、享保元文年中には組頭が置かれた。職掌がら、甚だ裕福であつた。

○くら前をおつき合ひする　藏前の役人のおつき合ひをする。

○廓（ちやう）　吉原。「かゝへをしてやる」は所謂新子を出すことで、吉原で云へば、「突出し」に同じいといふ意。

○しかけ　裲襠。

○まげて　質に入れる。

○通り　通行。

○きりやう　縹緻。

○きざ　嫌〔いや〕らしい。

○山びらき　「毎年三月廿一日弘法大師の御影供を修行す。此日より同廿八日まで、當社（富岡八幡宮）別當永代寺の林泉をひらきて諸人に見物をゆるす。俗に山開きとなへて、大いに群集す」。（『江戸名所圖會』卷之七）

○八幡さまの祭　富岡八幡宮の祭禮。『江戸名所圖會』卷之七に「隔年八月十五日に執行す。此日神輿三基、本所一の橋の南、藏舟浦〔オフナグラ〕

のざるそばも名ばかりさ。ふぢ棚の石やき豆腐は、お鷹じやうと岡釣のたて場になりやした。いまぢやア升屋がはつかうさ。いまの惣介さんがりかうものさ。かみさんはおさち、むすめはおふつといひやす。〔およし〕祝あみさんは、いんきよしやしたかえ。一ト節ぎりとやら云笛をふきなんすネエ。〔お仲〕土ばしのげいしやぢやア、春吉、小吉、三喜藏、おみきなぞがうつたものさ。をとこげいしやでは、千蝶がふるいものさ。新次、五介、清二、喜六なぞもとほつたものさ。ふた見やといふ子ども屋から、どれもいい子が出やす。〔およし〕ひなまつとやらも、そこから出たぢやアねえかね。〔お仲〕土ばしの子ども屋は、みんないゑきと云ふところにをりやす。仲町の梅むら、生松、山本が、いいふしんに出來やした。をり〲よく家名のかはる所さ。梅もとのていしゆは、あたま七といつていろしさ。おもてやぐらにも地がござりやしたつけ。今居る所もてまへの地めんさ。今で口ききは、子ども屋のうちで、きた屋七右衞門、六十ッたんといふかし元、白ロ舟の清七なんぞさ。仲町のはおりは、大きち、八十吉、今きち。乙吉は廓へいきやした。仲きち、だん子、ぢんす。

の前なる行祠〔オタビショ〕へ神幸、同日歸輿す。この祭禮は寛永二十年癸未八月十五日初めて執行ありけるより連綿たるよし、『江戸名所記』に見えたり」。

○一ノ鳥居は代々木場から云々　八幡宮門前の一ノ鳥居は代々木場から寄進するの意。

○まつり　「祭が渡る」などと用ふる場合の「まつり」で、祭禮の練物の意。

○えびすのみや　『江戸名所圖會』巻之七に「蛭子宮（宮川町の川端にあり」。

○はつから　流行。

○石やき豆腐　焼豆腐を二寸角ほどに切り、多量の煮出汁にて、鹽氣にかけて煮込み、次に醤油を加へて、又十分に煮込んで、其煮汁と共に椀に盛り、生姜の搾汁を注ぎて作る。もと石を焼きその上に油を塗つて焼いた故その名が残るといふ。

○お鷹じやう　鷹匠。

○岡釣　陸釣。舟で沖へ出てする沖釣に對し、陸に居て魚を釣るを云ふ。

○たて場　立場。宿場間の小驛。車夫、人夫などの暫時休息するところ。此處では休場所位の意。

○祝あみ　升屋の主人。

○一ト節ぎり　一節切。尺八に似て細く短き樂器で、長さ曲尺にて一尺八分、竹の節一つ籠めて切るからその名とす。

○をとこげいしや　幇間。

○いゑき　『辰巳之園』解題中『寛天見聞記』の中には、「ゐいき横町の子供屋より呼出し、土橋にあそぶ云々」とある。

○あたま七　渾名。頭の大きかつた七と云ふところからであらう。

○いろし　色師。濡事師。

○地　自分の地所。

○六十ッたんといふかし元　六十反の網の貸元。

○はおり　羽織藝者。

○えびすから　五六一頁参照。
○介六　助六。揚巻との情話を主題とする戯曲で、いろ〳〵あるが、こゝでは歌舞伎十八番中の「花川戸の助六」であらう。
○ほめことば　芝居で揚巻助六の狂言をする時には、総見をしてゐる魚河岸連中などのうちから花道へ出て賞讃の言をなすことが例がある。こゝではそれに倣つて一読がしたといふこと。
○路考かめ　かめといふ女が大の路考贔負であつたところから、かう云ふ渾名を得たのであらう。
○はまむら屋　二代目瀬川路考。
○さかひ丁　今の日本橋芳町の辺。
○半四郎　四代目岩井半四郎。
○がうてき　強敵の字をあてるか。非常に、甚だ、すてきの意だが、何角、がうてきによいの意である。
○三ンやぐら　表櫓、裏櫓、若緑櫓の三ケ所。（若美の常盤に深川表櫓　昼夜四ツ切、七匁五分、白拍子—此浄土、髪の風衣裳着こなし、大かいは仲町を眞似る。しかし人がらおよはず。客ぎよくさわぎは、大がい仲町におなじ。同裏櫓（右同断、白拍子）—此浄土、大てい表やぐらのごとし。その外さわぎ同断。同若緑　右同断、白

太夫で八重太夫、三吉、伊八、千てふ、長治、せん次、喜三、つる太夫、なんぞさ。【ねよし】磯八はよしはらへまゐりやしたね。去年ンのえびすからに、長七いせ屋の筒井さんの、客人の思ひつきで、介六を磯八がしいしたつけ。そのときうちのむすめが、ほめことばをしいしたっ。【二仲】おもてやぐらへ出た路考かめが、はまむら屋はゐかるいものさ。さかひ丁の安五郎が、半四郎と、ひこべいなんぞでやると、がうてきさ。ひこべいとは、かけあひの事なり。こはいろのとほりく也。三ンやぐらでも、ばゝアおたきなンぞがとほつたものさ。ふる石ぢやア今は豊倉がはやりやす。いい子どもがあるからさ。あすこはふせ玉さ。はやる子は四ッあけにいつちやアござりやせん。新石場ぢやア、金子屋がにぎやかさ。げいしやは奴島八、さみせんが文てふ。歌で五郎治、三味せんが宇八。はおりでさよ吉、むめ吉さ。佃四けんも又できたさうさ。まへど仲丁へおくめといつて出た子が、やく年シで廓へいつて、大かな屋とやらの、糸川とやらいひやしたが、およしさんしつてお出でなるかえ。【ねよし】その女郎しゆは、たしか二丁めの新見世のきつかう屋にをりいすよ。わつちもちつとよしはらのはなしをしたうすが、ことし総籬といふしやれ本に書盡しいしたから、いふはむだでおすよ。このぢう旦那がもつてきておきいしたから、よんで見いしたが、すつぱり松葉屋せかいさ、女郎衆のくせまでかきいした。【品】品川で宿のうちへ出る、かごかきは、横目をするがやくさ。かごかきにもいろ〳〵ふてふがあるさうさ。またげん、正六、なんぞと云ふがありやす。【ねよし】よしはら

のかごやにも、ふてふがおすよ。茶屋なぞへいつてきいてをりいすに、ふりまし、おもたまし、みちまし、あぶれ、なぞといひす。五とくといふは、夜かごの三ちやうならんで行ときいふてふさ。（仲）気をつけてごらうじやし。深川通はよしはらきやくとちがつて、ちよきに乗りやうがちがひやす。ともの方をむいて、さかさまにのりやす。これは船頭とはなしをするに、勝手がいいからさ。いそぐ時はふたりせんどうにするのさ。深川にも三十年ほどまへは、米蝶、べんてんおかん、木綿屋おきちなぞと云名とりの床げいしやがあつて。その時分はおしなべて、仲丁のことを八まん丁といつたさうさ。ふるい深川通はしつてゐる事さ。（品）お仲さん、もじ五郎はどうしたねえ。（仲）きつねが付てから死やした。深川ぢやアをとこげいしやがわり合で、八まんさまへ護摩經をあげやす。仲丁や土橋の子どもは、山からかよひ帳で喰物を取りよせるのさ。地めえの子どもは、十二もんめのうちを、茶屋へ六もんめとられて、子ども屋へ腮を、あごとはざふ用の事なり。三百二十四文とられやす。そして人をだました事を、たうがらしをくはせてやつたと申やす。又もののけつちやくせぬ

拍子）—此浄土、裏やぐらより少し次なり」とある。

○ふる石　古石場。深川七場所の一。

○ふせ玉　茶屋が無くて、妓樓にて酒食饗應するを云ふ。

○四ツあけ　午後十時早々。

○新石場　深川七場所の一。

○げいしや　男藝者。

○佃　深川七場所の一。局見世もあり。深川でも下品とされてゐたところ。『婦美車紫鹿子』に「深川佃（晝夜四ツ切、引ハリ、琴頭内拍子—此浄土よ、三橋にならぶ　かみの結ふう衣裳の着こなしよはすこし其うへ座敷にて時花歌をうたふ。人がらはよくなし」。

○やく年　厄ごし。

○總籬　京傳作の『通言總籬』。

○松葉屋せかいさ　松葉屋の世界を書いたものさ。

○やく　役德。

○ふりまし　ふり・風體により賃銀を増すこと。

○おもたまし　體重によつて増す。

○みちまし　道の良否によつて増す。

○あぶれ　仕事がないこと。

○ちよき　猪牙舟。小舟の名。細長くて舳尖つてゐる。往時專ら江戸、山谷通に用ひた。進むこと至つて早いが、甚しく動搖した。外に櫓の二挺立、三挺立があつたが、共に正德三年に禁じられた。

○床げいしや　床專門の藝者。

○わり合　負擔の分割。

○護摩經をあげる　僧侶に依賴して護摩をたき經を讀誦して貰ふこと。護摩とは眞言宗で修する行法で、多くは不動尊を本尊として、その前に護摩壇を設け、長短二種の護木をたき、供物を捧げて修法する。

○山　永代寺門前を云へるか。

○地めえ　自前。

○けつちやく　結着にて、つゞくまり、解決、落着の意。

○櫛のめきき　ふは鼈甲の斑のこと。故に鼈甲の櫛の鑑定から出た言葉の義。

○堤側　本所回向院前をいふ。「婦美車紫鹿子」に「回向院前、チヨンノ間引ハリ、白拍子。但し上手がはと云此浄土、人がら袈裟衣裳のきこなし、一ツ目におはず。尤きわぎならず。但し世人此類「ひとつめ」を呼んで、ヤマネコと云」。

○六軒　深川區内六間堀町か。竪川と小名木川の間の六間堀の邊。

○やく　役。出番。

○手のある　腕のいゝ。

○おもひれ　思入れ。十分に。

○てらす　照らすは降るをわざと正反對に云つたもので、降るは振るに通じるから、結局客の申出を振ることである。

○野風が著物へぐつつり酒をかけ　此の所の趣向は『好色一代男』の「匂はかづけ物」の條に似てゐる。「爰に吉原の名物吉田といへる口舌の上手あり。……手は野風ほど書いて……大臣態と酔狂して、四邊暴く蹴み立て、間鍋より穢立つて、いと見苦しく、小兵衛鼻紙にて塞げども止らず、吉田が上替の褄まで流れ寄る時、禿の小林

事を、ふがきれねえ、といひやす。こいらは櫛のめききから出たことばさ。今だそア堤側や六軒でもいふさうさ。八まんの鐘は、茶屋から、やくでかはりばんにつきに出やす。「一本品」品川でまつざか屋の野風といつた女郎しゆが、わかつたものさ。そのじぶん芝に介といつて、怪しからず手のある客があつて、その人の友だちが、まつざか屋へなじんできやしたが、その介といふ人は、さのみいろをとこでもねえが、どこへいつて一チ座しても、とかくひとりもてるさうさ。それだから折ふしは、かうまんもいふさうさ。それを友だちがにくがつて、どうぞ一チ度たれぞにふらせて、此の末かうまんをいはせぬやうにしてやりたいといふ咄を、野風が聞いてゐて、わたしがとこへつれてきなせえし。おもひれふつて見せやせうと、ふとうけやつたから、さいはひにして、二三人です〻めてつれてきたのさ。先さかづきがひととほりすむと、そのきやくがつね〴〵はげこださうだが、どう云氣か、茶わんでさけをはじめて、野風にさしたのさ。野かぜもかねてたくんで居る事だからたべやせん。といつたばかり、うけつけねえでてらしたのを、むりにしひるとつて、ついそのきやくが銚子をひつくりかへして、野風が著物へぐつつり酒をかけたのさ。きりたての八丈のむくもうちかけも、黒びろうどの帶も、さけだらけになつたが、さすが野風だから、へい氣でずつとたつて、又きらびやかにきかへて來て、さうかうするうち、床もをさまつて、一チ座のきやくはいよ〳〵こんやは、とんだめにあふだらうと、となりのまは

し座敷に、聞てゐると、思ひの外野風が大ぼれにほれたやうすで、とんだもてるから、一チざの客があつくなつて野風をよび出して、やくそくがちがつた。とうらみをいつたのさ。野かぜが云にやア、成程あの客人は、女郎かひに妙をえた、人でござりやす。おまへがたのさそひやうで、さとつたかして、さつきざしきでさけをわたしにかけたのは、そさうのふりでしたきやうげんでござりやす。それはなぜと云に、こんやわたしに振れても、あの女郎はとんだけちな女郎だ。おれがそさうでかけたから、そのいしゆにふつたのだ。酒をかけねえとふられやアしねえと、ぬけ句にするつもりでござりやす。わたしもまた此宿では、まつざかのたれと、とほり名を付られたふしやうには、名がだいじだから、手だとしりながら、どうも今夜はふられやせん。それだからこんやは、ぐつとほれたかほで、うらやくそくをしてかへしやす。さうしてうらにきたとき、おもしろくふつてみせやせうといつたから、みんな野風がはつめいをかんしんして、そのあさはかへつたのさ。それからやくそくの日に、その介といふきやくのところへ、そのいちざがいつて、けふはぜひあゆびやれとすゝめたから、そのときその人のいふには、こんやうらに行と、あの女郎はたしかにふるから行まい。と、見ぬいたやうにいつたとさ。そのことを野かぜが聞て、その手にほんとうにほれてきて、たび／＼ふみをやつて、よびたがりやしたが、とんとそののちはきやしなんだ。〔中略〕深川に黒さんと云ふきやくがあつたがね、とんだじやう

我が脱ぎ置きし黒茶字の着物に一嗅らす浸み、かいやり捨てける」云々」。(『西鶴名作集』第一五八頁)

○むく　無垢。表裏ともに無地の同色の帛で作つた衣服。多くは白いものにいふ。

○あつくなつて　激昂して。

○ぬけ句　言ひ抜けの文句。

○ふしやう　不祥。さう云ふ名をつけられた因果には。

○うらやくそく　再會の約束。

○はつめい　發明。りこう。怜悧。

○あゆびやれ　歩行せよ。行けよ。

○じやうなし　情無し。薄情者。

○ぢはえふたう　[illegible]、前出六六二頁。
○うつくしく　奇麗に。
○しばり　縛り。自由を缺く。
○きめる　きめつける。
○きざ　気障な事。いやなもの。

なしで、そのくせぶ男さ。仇名※びはえふたうとも能のゐんとも云ひやした。あんまり情なしがとほつて、だれもとりとゐて出たものがねえのさ。ふつとお鵬といふ子が、わつちがよんで見せようといつて、黒さんに出たものさ。さうするとお雛といふ子も、よんで見せようといつて出たのさ。それをおたかが聞て、ぐつと知らぬ顔で、おてふにいふにやア、モシわつちやおてふさんおゐえと、きやうでえぶんになりたうごせえすと、いひ出したものさ。おてふがいふにやア、わつちやアどうもおゐえと、きやうでえぶんになる、わけはござえせんとはねたのさ。又おたかがいふにやア、そのわけといふは、黒さんの事でごせえやす。ぬしは私がせんでごせえやす。それを※うつくしくおゐえに、黒さんをかしておくから、見事によびとげねえ。さうするには、兄弟ぶんのよしみがなくつちやア、かす事もならねえから、さつきのやうにいふのさ。と、おたかもさるものだから、おてふを※しばりにかけて、たか見でけんぶつをしようといふあくしんさ。それからおてふは、黒さんをよんで、いふにやア、おゐえといふものア、わからねえものでごせえす。わつちやアおたかさんを、よびなつた事はしりやしねえが、どうもかうなつた日にやア、此の上おたかさんをよびなつちやア、わつちがたちやしねえから、おたかさんをきれなせえし。と※きめたのさ。黒さんがいふにやア、どうもてゐえにやア、忠といふ※きざがついて居るから、いやだといふから、なるほど忠さんと云きやくもごせえすさ。ごせえすがそれが氣にくはざア、

忠さんをきれやせうといふうち、八まんさんのおひだしがなるから、ぐつとせきこんで、なんでもあさなほしにして居なせえし。このかたをつけて見せやせうといつて、その忠と云きやくのところへ手がみをやつて、けふはなしてえことがちつと有るから、こいといつてやつたから、忠がきたといふやつさ。それから忠は、はおりを二三ンめえかつたり、何かしてさわいで居ると、おてふが、しやくがいたいとかなんとかいつてたつたものだから、忠がぐつとかんしやくで、これえ、なんのこつたえ。用があるのしまつてゐるのと、よびによこしやアがつておいて、しやくがいてえの、米がたけえのと、とんだやつぢやアねえかと云と、おてふはこゝがかみすりといふものだから、モシ忠さん、あんまりてえそうな、こわいろをつけえなさんな。いんばぬまぢやアねえが、あとでうまるめえによ。とつよみをいふ。忠はなほ／＼熱くなつて、ムゝそんなら埋まるめえとは、きれると云事か。これえわれときれたと云つてな、他所いきにきせるをもたれえほども、ふじようぢやアねえはえ。と、いひつのつたから、おてふはさいはひにして、つきだしてしまつたのさ。それが忠はいろをとこ、黒さんはぶをとこだが、おたかがめえの、たてひきばつかりで、さうしたのさ。それだから深川といふ所は、客人のあすびに、でえぶあんばいのある所さ。いろ男にかへても金にかへても、子どもどうしのたてひきを、おもにする所さ。

[およし] よしはらでも、今はとほり名を付て、たいそうにして居る女郎衆が、みんな子ども

○おひだし　追出し。明けの鐘が鳴る。

○あさなほし　居續け。

○しまつてゐる　座敷をしまつて置いた。

○かみすり　切れるところ。

○いんばぬま　下總の印旛沼。水淺く、埋立し易きを云ふ。

○ふじよう　不自由。

○たてひき　義理を立つることと、いぢばることとの二様の意味があるが、こゝは後の意である。

○あんばい　斟酌。

さ。そしておしよくの女郎と、※二まいめの女郎とは、どこのうちでも中カの惡いものさ。今ではんじやうなのは※ひなづるさん、きしやうのいいのは※すがはらさんさ。まへど手をとつた女郎衆は、松賀屋のはつ島さんさ。いろきやくがくら前からまゐりしたが、あるときくら前のきやくのやくそくのばんに、かねてためになるさる大盡の客がまゐりしたのさ。くら前のはうへは心やすだてをして、その大盡をざしきへ入レたものさ。河東ぶしなぞでしやれて居る所へ、くら前のが來て見た所が、やくそくだに座敷にきやくがあるから、ぐつと大がんしやくで、ざしきへふンごんで、その大じんをさんざ／＼あくこうしたのさ。大じんもやくそくで居た事をいはずに、ざしきへ入レられたものだから、※まはしかたや、やり手をよんで、おほさうどうになりいしたが、はつ島さんはぐつとへい氣で、その大じんのまへへいつて、モシイ、こんやはせんてえ、くら前のきやく人のやくそくでをりいしたが、くるまでもまづざしきにおきまをさうとおもひして、ざしきへ入レまをしいしたが、やくそくの事をいひしないのは、わつちがわるうおした。ぬしもあのきやく人にあくこうされなんしては、たちいすまいから、これでぬしのかほをたつておくんなんしと、※ゆびをきりいしたのさ。そのひやうしに、ゆびがどこへかとんで、見えなくなつたのさ。これではきがすみいせん。と、又ひだりのゆびをきらうとする所を、しんざうや、たいこもちがよつて、もうそれで心ン中ウは見えやした。と、やう／＼とめいしたのさ。それでその大

○二まいめ　前の二つ目を云ふ語。お職女郎（既出）が第一番で、その次ぎが二まいめである。

○ひなづる　丁子屋雛鶴。『傾城鑑』に「客人の約束も五日十日前より云入ますれば會ふ事あたはず」とあり。

○すがはら　鶴屋菅原。『傾城鑑』に「一躰寛闊なる氣性にて……弱きを助け強きを挫き、はり強く一寸もあとへ引かぬ氣なり。……温而厲威而不猛恭而安、よく此語にかなへり。全く應こ也」。

○まはしかた　廻しの女をいふ。（前出二二七頁）

○ゆびをきる　男女の間に於ける眞實の心を具體的に現はすために指切り、髪切り、入ぼくろなどをするのである。（二〇三頁參照）

じんもとくしんして、さかんになつてまゐりしたが、それではくら前のきやくが、はらをたつてきさうもないものだに、是もやつぱりそのまへよりも、けつくしげ〳〵にきいして、それほどのさうどうも、しづまつたのさ。どつちかひとりはしくじるばだが、なるほど手のある女郎しゆだ。大じんのきげんのなほつたはきこえたが、くら前のがよくだまつてくると、ひやうばんしいした。あとできけば、ゆびを切たとき、なくなつたふりで、しんざうといひ合て、そのゆびをかくして藏前のきやくの所へ、もたせてやりいしたとさ。はつ島さんがうけられていきなんすとき、ぬしのくちから、はじめてあかしておはなしなんした。それでわかつたのさ。オヤさんか、はやかつたの。下女〔さん〕たゞ今かへりました。お仲　ホンニもう※あぶら屋がきた。もう日がくれるさうだ。〔お品〕わたしどものうちでも、もうかへるだらう。※およながのしたくでもしやせう。○女といへる文字を三つ書て、姦とよむもむべなるかな。予ひととせ※池魚のわざはひにあひて、此新道にかり居せしとき、此三人の物がたりヲききはべりしを、今そのまゝにこゝにしるしぬ。

作者　山東京傳

閲　同けいこう

○あぶら屋　菜種油、胡麻油などを賣る商家、又はその油を行商する者。

○およなが　御夜長。禁中にて、大床子の御膳のおろしを女中が夜食として食つたのに起る。夜食の女房語。

○池魚のわざはひ　東魏の杜弼の檄梁文に「楚國亡レ猿、禍延二林木一、城門失レ火、殃及二池魚一」によるといふ。思ひがけないわざはひ、類燒に云ふ。

きゞすなくのべがねのきせるは、はひ吹をたゝいて、かんしやくのつけびやうしとなり、おもひにはどうしたはなのさくらばりも、くびをながくして、名代のきやくのごとし。合　今はりわけし三つのさと、すひつけたばこのすゐなるも、あげぎせるのやにこきも、とほるととほらざるたがひは、たゞくわんぜよりの一すぢに、たのむはほかにないぞえ。テツンシヤン。

きやう傳みづから

ばつす

○きゞすなくのべがね　雉子の啼く野邊にひきかけて、延金の枕詞としたのである。

○おもひにはどうしたはなの　思ひにはどうした花の咲く事と云々」のもじり。「路銀にはどうした穴の云云」の頭註（一五九頁）參照。

○さくらばり　櫻張で、京都から製出する一種の煙管の張方をいふ。「嬉遊笑覽」卷之一に「今、櫻ばりといふきせるは、この櫻屋が元祖の製りたるなるべし。煙草、初て長崎櫻の馬場に植られば、此櫻により家名ならん」。

○今はりわけし三つのさと　煙管張りにちなんで張別けしと云つたのである。今區別をして見た三つの遊里。

○すひつけたばこ　例へば女郎などが煙草の火を自分で吸ひつけて、それを客に與へるのである。

○くわんぜより　觀世捻から觀世音に引きかけ、唯一心に願ひ奉るより外になし。

○テツンシヤン　此跋文は歌にしてあるから最後に三味線の手をつけたのである。

手段詰物娼妓絹籭

山東京傳作

自序

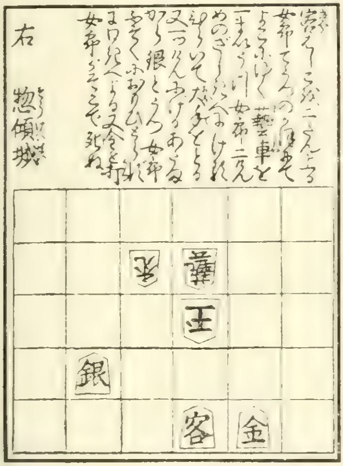
煙花を將棊の局面に設、娼妓の駒下踏の往來を觀るに、茶店に客を待棊子あり、籬で私夫に間棊子あり、大通直うして飛車先の如く、素痴曲て角道に似たり。初會の席上に初王手あり、馴染の閨中に入王あり。色は金銀に有て思案になし。堅き心の石田も崩れ、櫓に閨とも忽破る。可恐、巧計のために都逼とならんことを。桂馬は誇て歩兵の餌となり、香車の慮なきは謬自、或は飛車手王手の義理に纒られ、或は後王手の借金に苦。手のなき時は端の歩をつくゞ苦にする茶店の借。臨期二歩をつかひ、留主を使ふといへども、借金乞のために逃道を失ひ、遂に雪隠逼と成あり。嫖客と將棋閨は一手先はみえざるべし。即娼妓絹籭を作る。予がへぼ象戯の及ばざる所は、段將棊の助言を乞而已。

于時寛政三年辛亥解凍日題於菊花亭

山東京傳 ㊞

○娼妓絹籭　「將棋絹篩」をもぢっていつたもの。「將棋絹篩」は文化年間に發行された將棋の駒組と定跡の本として有名。福島順喜の編著。
○籬　廓で店と入口との間の格子戸。中戸といふに同し。
○大通直うして　唐の儲光羲の「洛陽道」に「大道直如髮」とある。眞の通人はことさらに奇行をなさず、自然率直である。
○初王手　初會には目的を遂行出來ぬことが多くあつた。
○入王　將棋で王將が敵の陣地に入込むこと。
○石田　石田檢校が考案した駒組これを石心とかけて持つて來た。
○櫓　櫓の形に駒組すること。
○都逼　盤の眞中で王を詰めること。
○桂馬は誇て歩兵の餌　「桂馬の高あがり、歩の餌食」といふに同じい。餘り進み過ぎ退くことならずして、自から斃れることをいふ。
○飛車手王手　飛車取り王手といふに同じ。
○後王手　自分の駒を動かさうとすると敵から王手をつけられる。
○雪隱逼　將棋で王將を隅に追込んで詰めること。

○死ぬ　ころされる。客にまゐる。



客はしごを二だん上る。女郎てうづのかほにてよこにゆく。藝車を一まいうつ。女郎二けんめのざしきへにげる。ひらいて大手をとる。

又一ッけんにげる。あたまから銀とうつ。女郎ふそくにおもひ、とらずにわきへよる。又金と打つ。女郎がそこで死ぬ。

右　惣傾城

目録

第一回

義理と情の二タ道には間夫子もならぬ梅川が飛車手王手

第二回

つかひはたして二歩残る亀屋忠兵衛は歩三びやうでもつまらぬ身の上

第三回

金銀をつかふ客にもかまはず横にゆくは女郎の實と卵の角道

第一回

義理と情の二タ道には間莱手ならぬ梅川が飛車手王手

□砂糖屋の丁兒甘きをきらひ、鰻鱺屋の猫兒芯を好まず。李白一斗詩百篇といはれし底ぬけも、劍菱で居風呂をたてて三日ばかり入れておいたら、まつぴら御免と云ふは知れた事。花の下にて死にたいと云うた西行も、飛鳥山に居つゞけをさせたらば、かならず欠伸をするなるべし。されば久米仙人も女湯の番人にしたら、素脛に通をも失ふまじく、弓削巣とても女護島へ流したら忽ちおいとま申べし。どれ程に美麗でも、朝夕眼前にぶらついて居ては、このましからず。女郎買も命から二番目の大切な金銀を出し、其のくせゆきにくきところを都合と工面で饅茹にした首尾をもとめ、主親の四つの眼をはじめとして、人目をしのびて通へばこそ、おもしろくもあつたもの、一升買の足るを知らず、心のままに樽酒の樂しみせんと、女郎の脇ぐらに家藏をうちこんで贖身をし、渾家にしたところが三日もたたず鼻につくは、世間にいくらもあるかたなり。雙ケ岡のしれものが、花はさかりに月はくまなきをのみ見るものかはと云ひしも、まことに如在なき法師なり。こゝをもつて推ば女色の迷ひもはれぬべし。嗚呼さうぢやとひとり悟顔に口ひろきことはいふものの、捨がたきはとかく此のままよひの一ツにて、上ミは——よりして下モは萬人講の講

○李白一斗詩百篇　杜甫の『飲中八仙歌』中の句。
○劍菱　銘酒の名。
○花の下にて死にたい　西行法師の歌「ねがはくは花の下にてわれ死なんそのきさらぎの望月の頃」。
○飛鳥山　江戸の花の名所。
○久米仙人　女の脛の白きを見て通を失ひて下界に落ちし仙人。一九二頁「通を失ふ通を知らず」
○弓削巣　弓削道鏡こ。
○饅茹　胡魔化す、誤りたくる。
○一升買　少しづつ酒を買ふこと。
○贖身　押客が金を以て遊女を購ひ、自由の身となすこと。
○雙ケ岡のしれもの　兼好法師のこと。しれものは馬鹿者と云はんよりも、仕方なきもの、若くは手に合はぬものゝ義。
○花はさかりに……見るものかは　兼好法師の『徒然草』の句。
○萬人講　多人數が組合を作つて、神社、佛閣に參詣したり、或は堂塔の建立修理などに寄進したりする講中。
○ボツトセの髷　芝居の鬘の一。
○天作　てんつく〳〵と云つて躍り出す老爺。芝居の語。

頭、兎の毛のボツトセの髭に天作で出ようといふ者夫さへも、むかし思へば信田の森の、うらの朽家でちよろまかした徒にて、かの川柳が選に、母の名は親父の腕にしなびて居、とは頗る穿ちなりこ　わつちやかういふかなしいことがおざんすと酸鼻めば、酒呑童子と腕おしもしかねまじき丈夫の、涅槃像の二王みるやうに己に似合はずうちしをれて、ともに涙をこぼすを見れば、實に女色は斷骨の斧、迷心の毒にきはまりたり。佛祖三經に浮屠子の曰く、愛欲は色よりはなはだしきはなしと。宋の景之元が美色の爲に命を歿するを以て見れば、忠に死なんこと甚だ輕しとかたく出かけしも理なり。賢を賢として色にかへよとは則ち此の場所ぞかし。又媚は比封狐、機は深穽虎などと明人も云うて置きたれば、女郎に身を謬つこと中華の人情もたがふことなく、夏の溫石と女郎の心はつめたいがちの者なれば、いづれゆだんはなるべからず。其又戀といふ川上をたづぬれば、僅か方寸に足らざる――なれど、むかしから此の――へ國を陷し城をおとし家をおとし身をおとす者、倭漢にかぞへつくしがたく、周室を陷したる褒姒が――も、波錢一ぽんおとしたる烏

○信田の森のうらの朽家　朽家は葛の葉をまつつたもの。葛の葉は安倍の晴明の母といはれてゐる狐の名。晴明三歳のとき、大恩を蒙つた主家を去るに臨み、戀しくば尋ね來て見よ和泉なるしのだの森のうらみ葛の葉といふ和歌を殘して、行方知れずになつたといふ傳說。なほ竹田出雲作の淨瑠璃に「蘆屋道滿大内鑑」がある。

○母の名は云々　入墨。昔、此の二人が相思の仲となつた頃に、女の名を腕に刻つたのである。

○酒呑童子　昔丹波の大江山に棲んでゐたといふ鬼神。源頼光に討たる。

○涅槃像の二王　釋尊入寂の時には仁王もしをれてゐる。

○斷骨の斧　「美婦は命を斷つの斧」と云ふ古句を取つたもの。

○佛祖三經に云々　『彌陀三部經』といへるかと。『淨土の三部經』ともいひ、『佛說無量壽經』二卷、『佛說觀無量壽經』一卷、『佛說阿彌陀經』一卷である。

○景之元　『野人寒語』の著者景煥のことか。

○賢を賢として　『論語』の文句。學而篇に、子夏曰、賢賢易色、事父母能竭其力云々と。

○封狐　大きな狐。

○溫石　或種の石を方形に切り、火に燒き、綿などに包み、冬日用ひて體を溫むるもの。夏の溫石は用がないから溫めないので、冷たい。

○周室を陷したる褒姒　褒姒は周の幽王の寵姫で、幽王はその笑顏を見ん爲の手段として屢々諸侯を招いたので、遂には諸侯の來應するものが無くなり、申侯が攻め來るも諸侯の援護がなくして遂に殺された。

○波錢　寛永錢の、明和五年に眞鍮にて改鑄したもの。寛永錢より形稍大きく一枚四文に當る。當四錢、又四文錢と云ひ、色から青錢、裏に波紋あれば波錢とも云ふ。

○烏焼河岸　新吉原にて最も下等の遊女を鐵砲と云ひ、河岸店にゐた。揚代は夜四つより錢四百文であつた。

焼河岸の　も、つひに塡つたうはさを聞かず。清の曼翁が※碧海の迷津ぢやと云うたも嘘ばなし。※昔混沌未分のとき、耳か鼻からか子をうませ、※社稷宗廟をつがせ、こんな——をばあけぬ相談にきはめたら、かう云ふ惑ひもあるまいもの、何につけても邪魔な厚口、怖ろしの——、あやしむべく恐るべきの妖洞なり。

○こゝにむかし大坂新町の廓ちかきにいと閑なる所あり。世を捨人のかくれ笠、地名を※箕輪とよびなれしも、蓑にとなへの通ずれば、※ぬれのちかきにあるゆゑならん。箕輪の※寮とて人も知り、四方に目だちし一トかまへは、新町の女郎屋槌屋治右衛門が別業なり。抱への女郎梅川といふおいらんぶら／＼と煩ひければ、保養のためにはしづかなる此の別荘がしかるべしと、※番頭新造の梅春も看病のためもろともに、しばらくこゝに遷居る。ころしも秋の露さむく、菊は※たばこにむしられて、尾花は炭の俵につくられ、庭の草木もうつろひて、いとほそく啼くすゞ蟲の、音をきくにさへ苦海の身は、※夜みせしらする鈴の音かと、耳おどろかすも理なり。をりからそぼふる霧しぐれ、遠寺の鐘の音もしめり、いとゞ哀れの秉燭ごろ、梅川はかの福清がいつしにひとしく、幽霊の濱かぜに逢うたるやうにおとろへて臥具に其身をもたれゐる。そばには新ざうむめ春が氣をなぐさめの本よみさし、モシおいらんのところえ、心もちはどうでおざんすえ。アイけふはいつそようおざんす。ヲヽそれではモウだん／＼とよくおなんなんすでおざりいせう。風のあたらぬやうになさり

○碧海の迷津　孟浩然の詩にも「桃源何處是、遊子正迷レ津」といふのがある。

○混沌未分　天地開闢の始めに、世の事物が未だ分明ならざるさま。

○社稷　國家に同じ。社は土の神を祀るところ。稷は穀の神を祀るところ。

○箕輪　江戸吉原に近き地。大坂とは云ふが吉原を描いたのである。

○ぬれ　濡事。色事。

○寮　別莊。遊女屋の別莊。

○番頭新造　遊女の參謀格の新造。

○たばこ　菊の花のしをれたのを煙草に混へるので、むしられたとの義。

○夜みせしらする鈴の音　夜見世を張るときに合圖として神棚の鈴を振るを例とする。

○炙するゑ　河東節の『炙するゑ巖の疊夜着』の文句「二人寝の夢はかりなる春の夜の、短き年「ねん」をうらやみて、世話になるのを姉といひ、憂きを語るを、妹と名を呼び交はす世界なり」。

○かけ　支拂ふべき債務。

○內證　遊女屋の主人　帳場。

○二階　二階にある遊女の自分持の部屋をいふ。

○結城縞　茨城縣結城町より產する紬・木綿の縞織物。

んし。ドレ、藥をあたゝめて上げ申ンせう。と尻輕に、とし下なれど姉とよぶおいらん大事の心根は、妹女郎のかゞみなり。梅川は淚ぐみ、ホンニ何から何まで心づけ、しんみもおよばぬぬしの介抱、死でもわすれはいたしんせんにえ。なんのマアばからしうおざりいす。炙するゑの文句のとほり、世話になるのをあねといひ憂を語るを妹と、名を呼びかはす流れの身は、せわになつたり又したり、互のことでおざりんすもの、そんなことに心づかひをなさりんすな。サアくすりをおあがんなんしえ。と藥ぢやわんをさし出せば、むめ川は手にうけて、それにつけても苦勞になるは、忠兵衞さんの事でおざんす。ヲヽそれも苦勞になさりいすな。お前さんの病氣さへよくなれば、わたしがどうとも都合して、かけもすまして上げ申、內證の手まへもとりつくろひ二階のあくやうにして上げ申しンす。緣と云ふものは味なもの、忠兵衞さんの初に來なんしたは、去々年の三月、さくらの初日でおざんしたね。アイぬしはよく覺えておいでなんす。アイサわたくしは、其時のこと忘れはいたしいせん。しかも其の晩忠兵衞さんの形は羽織も小袖も黑八丈。ヲヽそれ／＼下著は對の結城縞。もちものや何やかやも、いつそ意氣でおざんした。わたしも其の晩まんざらでないと思ひンしたから、床へも早くゆき、なんぞ云ひたいと思つても、モシエほれた男にや、ものの云ひにくいものでおざんすねえ。それは誰しもさうでおざんす。其の夜はしかもわたくしが次の間に寝てゐんして、よく聞いてをりんした。忠兵衞さんのいひなんすニハ、

○初名代　名代は代りの女郎が出ること。初會の晩に敵方の女郎が居ます、その名代に會ふ。
○おつな手　奇計。
○こかして　轉じて。

梅さん初から此のやうな事いふでもねえが、此間中からお前を仕廻によこしても、御全盛と云ふもので、つひによいばんがなく、初名代で來るも何か口惚らしいから、じれつたく思つてゐやしたが、今夜かうしてお目にかゝるといふは、わつちやア夢かと思ひやす。トまづおつな手を出しなんした。ホンニ忠兵衞さんの癖が、いつそ主は上手だよ。それからわたしがかう云ひした。わたしらがやうなはかない女郎でも、マア嘘にもそんなことをいつておくんなんすは、嬉しうおざんすと、よくいふものでおざりいすが、わたしやマアうれしくおざんせん。まんざらでないと思ふ心から、ひよつとさうおつせえすをほんにして、とやかう思ひしても、これぎりでお出でなんせん時は、大たいつみぢやおざんせんにえ。それよりはやつぱり正直に、おれはわきに馴染があるが、今夜はそこがわるいゆゑ、せうことなく夜をあかすまでに來たのだから、必ずとやかうおもうても、むだだほどに思ひ切れと言つておくんなんすが、わたくしは嬉しうおざんす。トわたしが申ンした。アイサそれから又忠兵衞さんが云ひなんすには、フウおめえはむごいことをいふものだ。此のごろうち茶屋からたび〳〵聞によこした事も、てえげえ知つてもゐるだらうに、それを脇へこかして、そんなことをいふのは、フウ聞えた、思ひきれといふ謎だらう。こがれ死をするまでもさういはれては是非がねえ。と一ッすねなんした。ホンニさうでおざんした。それからわたしも面白なつて來て、ヲヤじれつてえ、どうせうのう。さう思ひんすくらゐな

○初の裏の　初會だの、再會だの。

○つもられる　考へられる、推し量られる。

○しやつつら　顏。唯顏と云ふ語を意味を強めて云ふ。「しやつつらを拜み奉れ」など助六の狂言にもある。

○のりが來て　勢がついて。

○迷子の／＼久太郎ヤイ　迷子を探ねるために、鉦や太鼓で呼び歩く風習があつた。

ら、こんなに氣はもみんせん。何をいふのも、フウ初會だといふのか。こつちは久しくとやかうと思つて居た心からは※初の裏のと思ひはしねえ。したがこつちばかりさう思つて、こんな嫌らしい事いふも、※つもられる所が恥かしい。モウ何もいひやすめえ。トあちら向いて寢なんしたゆゑ、やう／＼あやまつてこつちを向かせ、モシマア聞ておくんなんし。お前さんも人に知られたお方なれば、今までお近付でこそなけれ、茶屋でもたび／＼お見かけ申、とうから知つてをりんすもの、初會の心ぢやおざんせん。おまへさんさへほんに來ておくんなんすなら、わたしやシツかくごをしてよびとげ申心でおざんす。ハテおれもさうなれば浮氣をのけて眞ンの事。ソリヤほんにかえ。ヲヽしれた事こんな美しい※しやつつらを、なんの持たずともいいことに、こんなにおれを迷はせる。ト煙管でたゝくまねをしなんした。はづかしいが其のときは眞に嬉しくおもひんした。それがやつぱり惡緣でおざんした。とほれた男は噂にしても、ふさぐが女郎の習ひにて、梅川は梅春とかけ合の此のはなしに※のりが來て、すぎこし方を思ひ出し、我身にかゝる夜具を出れば、梅春はそばから氣をつけ引かくる。程なく四ツの鐘なれば、氣くたびれてか梅川は、其のまゝそこにすや／＼と寐いりつけば、むめはるが夜具かいつくろひ、屛風ひきよせ見かけておきし淨瑠璃本一枚あくれば、秋のかぜ障子のひまより、方燈の火をさつと吹き消す。折から封壃のあたりと思はれて、※迷子の／＼久太郎ヤイ、トヽトンチヤン／＼。廂へおとす雨の

音サラ〳〵〳〵〳〵。

第二回

つかひはたして二歩のこる龜屋忠兵衛は歩三ン兵でもつまらぬ身の上

□潮光也浪速の色をせきとめて、黄金でかけし木擁は、ながれの里の浮きしづみ、贖身あれば梳籠あり、日に新たにして日々にあらたなる、町の夜みせのにぎはひは、雨がはにてひきたつるよみせのすがゝき、チャンラ〳〵ゴシ〳〵〳〵〳〵。〔宅まより〕さいもん小ぐり清水のだんへいたはしやてるての姫とあるところへ立ちよりて、口說きごとこそ哀れなり。づれレン〳〵。○いめえましい、下踏のはなをふんぎつた。コレ鐵や、これから西河岸をそゝるべえ。氣を付けろ、まがりつとにみづツたまりがあるせえ。まだ乾きやアしめえ。〔かぶろ〕からしへかほをおつつけ、山本屋エイ人ウ〳〵。こなたにはすけんの徒〔里町〕からしをのぞき見コウ見さつせえ。アノ如意輪觀音が箔しろのこんりふに出たといふ身で、ほうづゑをして居る女郎は、扇風が一度かつて揮られた女郎だ。〔花曉〕フウ、何たるひつてんらしい女郎だのう。茶づけ店のならづけといふうすい櫛に、水膠を見るやうな笄をさしてゐるせえ。ふめねえあたまだ。コウあけぼのへわきざしも一しよに預けてくりやアよかつたのう。がうせえじやまになる。ト、からしのしたにねてゐた、犬、尾をふまれて、へきやん〳〵。〔花〕おきやアがれ、とんだ氣のきかねえ犬だ。〔里〕犬をふんだも今道心ぢやアねえか。〔花〕わり

○つかひはたして二歩のこる　前出「一日はなりに二十兩」の條參照。（八三頁）
○潮光　おしてるは浪速の枕詞。
○木擁　柵。水の中へ立てゝ流れて來るものをせきとめるもの。
○贖身　既出。
○梳籠　遊女を初めて店へ出すこと。
○日に新にして日々にあらたなる　湯盤銘の辭句。「大學」にある。「湯之盤銘曰、苟日新、日日新、又日新」。
○夜みせ　夜の張見世。遊女が店先に居並ぶこと。
○地まはり　廓内を素見して歩く常連。
○さいもん　祭文節。
○小ぐり清水のだん　小栗判官清水寺の段。
○てるての姫　照手姫。小栗判官の愛人。
○西河岸　京町一丁目の河岸。元吉原の時、其周圍は堀があつたから、其堀際を河岸と呼んだ。新吉原になつても此稱が繼承されたのである。
○そゝる　ぞめきあるく。

○すけんの徒　素見の徒、ひやかし輩。
○如意輪觀音　日々三時に此觀音を念誦すれば、罪障消滅し、大智慧を得、二世成就して本尊が現前するといふ。此の觀音は趺坐して頰杖をついてゐるので下の洒落が出るのである。
○箭しろのこんりふ　箭代い寄進。
○ひつてんらしい　貧乏らしい。
○茶づけ店のならづけ　茶漬店の奈良漬は薄く切つてある。
○水膠を見るやうな笄　安物のべつかふの笄をさしてといふこと。
○ふめねえ　高く買ふことの出來ない。
○犬をふんだも云々　昨日剃つたも今道心と云ふ苅萱道心の言をもぢつた駄洒落。「苅萱桑門筑紫𨏍」並木宗輔、同丈助作、第五に「申し御出家樣、この御山に今道心のましまさば、致へてたべとありければ、コハ興がる少人かな、九百九十の寺々、毎日入り來る初發心、昨日剃つたも今道心、一昨日剃つたも今道心、左樣に尋ね給ひては知れ難し。俗の時の名を言うて尋ねられよと身の上の事とも、知らず仰せある」。
○初だけのさび　青色がかつた。

い〳〵。[甲] こつちらの初だけのさびといふ色の着ものを着て、何かふさいで居る女郎は、にげそくなつて判人の所へさがつたと云ふつらだ。[花] うさアねえ。アレあくびをすらア、大キな口だぜ。[甲] かけ硯にもたれかゝつてゐる女郎は、素人繪の濱むら屋だ。ト、花曉は早、となりのからしをのぞいてゐるとも知らず、やつぱりそばにゐると思ひ、むしやうにしやれる。こつちらの再興めえの二王の腕といふ色の著物を着てゐるしんは、茄子のさしみをこせえるとつて、鍋のふたでおつぺしたと云ふつらだのう。トいへども、あいさつなきゆゑふりむいてみればしらぬ人。ホイこいつア大笑ひだ。ト、ゆきすぐる。[□] 自註に曰く、此の里丁花曉はいづれも助六がまたぐらをくゞらうといふともがらなり、これを唐音にて間走といふ。長崎丸山にて十年ぶりといふ。實はすでをふつてもどるゆゑ素手振りといふあやまりなるよし。往古吉原にてはとりんばらと云ひ今は素見といふ。そこで女郎はすかんといふか。

○投此のむかふより來る二人の客はやかたものと見え、[侍客] 見なえ、どれもうつくしいものでござるの。[今一人] なる程きれいなものだや。かう見た所は御年始に奥へ出たやうでござる。[客] いかさま、アノまん中に柏の定紋を付けてをる女郎は、よい器量ではござらぬか。金田氏の內室に少しにてをる。[客] 成程イヤこちらの黒い衣裳もよくござる。[客] モノ是れは何屋といふのぢや。

○にげそくなつて云々　廓を脱け出して身元保證人の所へ下げられた。
○うさアねえ　うそはない。違はない。
○かけ硯　懸子「かけご」のある硯箱。
○濱むら屋　瀨川路考。
○再興めえの二王の腕といふ色　再建前の二王の色あせた腕に譬へたものか。淺草觀音の再建は元祿年間。
○助六がまたぐらをくゞらうといふともがら　助六の狂言で風吹烏の侍や半可の通人が、助六の股ぐらをくゞる場面がある。此では素見連中の義に用ひてゐる。
○とりんばら　通りん坊。
○やかたもの　屋形者で侍屋敷に住んでゐるもの、即ち侍。
○奥へ云々　大名の大奥へ年賀に出るとき女中どもの盛粧を見るを云ふ。

〔茶屋男〕つきそでのうちからかんばんぢやうちんをさげて、あとのはうにゐたるが、ハイこれは此の新町で一二をあらそふ槌屋と申すのでございます。なんならこゝにおきめなされませ。さうから致すうち、そろ／＼よい女郎衆はあがります。〔客〕イヤもそつと他を見物いたさう。トこいつは甚だ氣がおほし、またすがゝきの音、チヤンラ／＼／＼。かゝる折しも表のかた、そりやけんくわよと立ちさわぐ。かのむめ川とふかきなじみの龜屋忠兵衛、地まはりにけんくわをしかけられたるなり。〔忠兵衛〕むなぐらを取られた手をとつて、コリヤアどうするのだ。トふりはなす。〔きほひ定〕あんまりうぬがつらが大きいから、此の定さまがむしががつてんしねえわえ。〔同類〕うぬがやうな野郎が、此の土地へへえりこまるから、おいらが格子へ立つても、すのこんにやくのとやかましい。崑崙兒の灸點を見るやうに、しろイつらをはりまげてやるべえ。むねつくそのわるい猿唐人ぢやアねえか。〔定〕へたに鹵箱をならしやアがるとかうだぞ。ト、大黒のつらへ白毫を入れたやうに、しんちうのびやうをうつたくろぬりの丸げたをぬいでふりあぐる。〔忠〕その手をしつかと取りて、コリヤアわいらア誰にか頼まれたなア。〽コロリンシヤン。たそや此の夜中にさいたる門をたゝくは、たゝくともよもあけじ、宵のやくそくなければ。ト、むかふの二かいの琴きこゆる。〔忠〕すきをみて〔同類〕にぶつて蒐る。〔同類〕はずみにて天水桶へころびかゝる。すかさず〔定〕又ぶつて蒐る。〔忠〕開いて横にはらふ。〔定〕よろ／＼としてどぶへかたあしふみこむ。琴〽七尺の屏風もをどらばなどか越えざらん。〔定・同類〕南方より一度にむなぐらをむずととる。琴〽羅綾のたもともひかばなどかきれざらん。所へ人々出合ひ引きわくる。ちやうど二かいの琴きれる。〇さてこゝのつちやの樓上には、おもてざしきのおいらんむめ川、きやく人あつて最早ほん間にとこをさまつてゐる。次の間には番頭新ざうむめ春しかみ火ばちへどびんをかけわる紙であふいでゐる。〔梅春〕じれつてえ火だのう、なぜおこらねえのう。ト、折から廊下にて新造、〔番頭〕ほんにかへはりさけすね。ト何かいひながらかけて此のざしきへ來り、むめはるさんえ。御つぎのものをおあんなんしたか。

〇つきそで　手を袖の中に突き入れて、前方へ張り出すこと。

〇かんばんぢやうちん　略してかんばんとも云ふ。其家の紋をつけた提燈。

〇きほひ　俠客。

〇鹵箱　口を云ふ。喋舌ること。

〇大黒のつらへ白毫　大黒天の黒い像に光つた白毫を入れる義。黒いところへ白い光つたものを入れてあること。

〇たそや此の夜中に　組唄の最初なる菜蕗「ふき」組の一曲。菜蕗組は七曲ある。

一、菜蕗といふも草の名、茗荷といふも草の名、富貴自在あれこ、冥加あらせたまへや。

二、春の花の琴歯、花風楽に柳花苑、りうくわゑんの聲はおなじ曲をさへづる。

三、月の前のしらべは、夜寒を告ぐる秋風、雲井の雁が音は、琴柱に落つる聲々。

四、長生殿の裡には、春秋を富めり、不老門のまへには、月のかげ遅し。

五、弘徽殿の細殿に、たゝずむは誰其、おぼろ月夜の尚侍「ないし」の督、光源氏の大將。

〔梅〕ウヽ※おかたじけ、後に喰うと思つてしまつておいたよ。客人はおめえどうした。〔浮〕あいサ聞いておくんなんしえ。にくくつてなりいせん。あれからたうとうかけだして參りした。茶屋からも人をよこしいしたけれども、わたくしやアかまひせん。久しいもんでおざりいさアな。〔梅〕おめえもほんにあれ程ほれられたがつてゐるものを、モウちつとほれてやればいい。〔浮〕おめえさんさうおつせえすけれども、わたくしだつてもそねえにやアほれられんせんものを。此のざしきのふりしん、〔[illegible]〕あの人さんもばからしい。よくおかけ出しなんすねえ。〔浮〕ホンニいつでもせわをやかせる客人でおざりイすよ。トいひながら、長もちのふちをなでてゐる。〔梅〕コレ戀路や、今いひ付けたことを※きりきりしねえか。何をして居るのだ。〔禿〕アイ今こゝに。〔梅〕久しいもんだ早くいかねえか。トいふ折ふし本ン間のびやうぶのうちにて手をたゝく。〔梅〕アレ呼ばつしやる。マアあすこへゆきや。〔禿〕アイ。ト此の用をたす。廊下にふりしんのこゑで、浮なみさん浮なみさん、一寸お出でなんしッサ、おいらんですサ。〔浮〕アイいままゐりイせう。トたつ所へ來る客、下著の儘帶をじだらくに結び今床から出たといふなり、懐手してはいり口から、〔柳〕浮なみさん、でえぶそはそはするの、格子へ※地いろでも來たか。〔浮〕よしておくんなんし。わたくしらア色と土用干はつひにしたことがおつせん。いろと云ふものはどんなものだえ、どこの井戸からわきんすねえ。〔柳〕井戸からはわかねえが、へその下からわく蟲よ。こいつにひよつとたかられると、女郎衆もしめえだ。まづ二朱一歩の小金から喰ひ始めて、櫛笄から著物をくひ、それから髮をくひきり、小指をくひ、だんだん臟腑へくひこんで、いろ

六、誰ぞや、この夜中に、さいたる門を敲くは、たゞくさもよもあけじ、宵の約束なければは。

七、七尺の屏風も、跳らはなどか超えざらん、羅綾の袂も引かばなどかきれざらん。

○さいたる　鎖した。

○七尺の屏風　咸陽宮の故事で、秦の始皇帝が刺客荊軻に刺されんとした時に、寵妃が琴を弾いて「七尺の屏風云々」と歌ふを聞いて、その如くにして身を脱したといふ傳說。

○しかみ火ばち　つぼの廣い金屬製の圓火鉢、脚に獅子の面などを附けたるもの。

○わる紙　すきかへしのこと。

○ほんにかへはりさけすね　ほんとに歸つてしまひたくなるのだ。

○おあんなんしたか　おあがりなさいましたか。

○おかたじけ　かたじけない。

○きりきり　さつさと。

○地いろ　素人の情人。

いろいな氣をださせ、たうとう命をとりをはんぬ。※何ぼう恐ろしき物がたりにて候。さこれをなづけて※死々心中の蟲と云ふわな。こいつをよけるにやア鍋屋のうは氣うせぐすりといふがある。おめえがたもちつと用心にしめなせえ。〔梅〕ぬしも女郎しゆにほれられなんすから、其の蟲の部だね。〔柳〕おきやアがれ。〔みな〕オホヽヽヽヽヽ。トわらふ。〔丞〕たんどおしやべんなんし。ト出てゆく。〔梅〕ぬしやアなぜそねえに※廊下鳶をしなんすえ。色でも出來なんしたかえ。今おつせえした蟲にでもなる氣かえ。〔柳〕爰の二階ひろしといへど。〔梅〕ぬしたちの相手になるやうな、手のある女郎衆はねえと云ひなんすのかえ。〔柳〕あるといふことさ。マア茶ア一ツくんねえ。〔梅〕ぬしやア口果報があんなんすよ。今丁ど茶を入れいした。〔柳〕くふ物なら口ぐわはうだが、こりやア飲む物だから咽ぐわはうだ。〔梅〕わりいしやれだね。コレ小夜舟さんついであげ申シな。〔舟〕アイ。ト、火ばちのかげにあつたちやわんをとり、なかにはいつてゐたしひのみのからを、あんどうのだいへすて、ちやをついで出す。〔柳〕こいつアいい茶だ。コウそこの紙につゝんだ物はなんだ。ト、あけてみれば、火ばちの灰のかたまりをひろひ出しておいたの。おきやアがれ。おらア又※豆こりんかと思つた。〔舟〕わらひながら きつい※げびざうなこつたね。ト、いふ所へ※かぶろ來たり、〔園〕山本屋ぢやア、十二せんのは切れたと申シイすから、わきでとつて參りした。ト、※のり入六枚つぎのまきがみを出す。〔梅〕馬鹿らしい。この子ア柳嫖さんだからいいけれども、あんまりゐんりよがねえぞよ。ちつと氣をつけや。〔柳〕氣をつけずともいいぞよ。やつぱりこんだからおいらんの客人のめえでもかまはず、此の笄は二百は貸しイせん。生づけのかう〳〵は、

○何ぼう恐ろしき云々　謡曲風の言ひ方である。

○死々心中の蟲　獅子身中の蟲のもぢり。

○廊下鳶　廊下をうろつくものを云ふ。

○豆こりん　豆を入れた菓子の名。

○げびざう　いぢ汚な。

○のり入　紙の名。

○おぶしやれ　惡い戲談。

○げび　下等なこと。

○みすがみ　御簾紙。大和國、吉野に産する上等の鼻紙を云ふ。又、一説に薄く透間のある様に、漉きたせる紙ともいふ。小菊と共に上品なもの。

○いたじめ　紫色の板締絞（後出六四一頁參照）

○べちやアねえ　外でもない。手

たつた二ツはうつてよこしいせんと正直にいやヨ。〔梅〕馬鹿らしうおざりいすわな。おぶしやれなんすな。わたくしらアそんなげびはしいせん。〔柳〕それでもいろ男の所へさつまいものむしんをいつてやつたさうだ。〔梅〕うそうおつきなんし。だがさう申しいした。ト、いふ所へ来るへやもち女郎、左の袖で口をかくし、右の手にみすがみをもちそへて褄をとる。なりは紫のいたじめのむくに、ひわちやちりめんのしごき、べちやアねえすみざいしきのにしき系といふいしやうづけ、かたあたりを一ツふるはせる。〔まぜがき〕ヲヽつめてえ。ヲヤ柳嫖さん、でえぶましておざんすね。ト、火ばちのそばへつくばひしが、おや氣味のわりい。たれぞすわつてをりイしたかえ。〔梅〕なぜえ。〔まぜ〕いつそたゝみがあつたけえよ。トつめで二ツ三ツはじいてすわる。〔柳〕まぜがきさん。かう云つちやアそれ鏡らしいが、がうせえにきれいだぜ。そしてあいきやうがこぼれるやうだ。必ずそこらへこぼしてくんなさんな。ひよつとふんづけると氣がもめらア。お前の紋はおつなもんだの、枝巴か、きつい者をえだつきにしたの。雷の鉢植ぢやアあるめえし。えだがしは、えだききやうなどにならひて、誤りてまゝえだたかのは、枝きつかふ、えだ七ぱうなどを紋に付けるなり。こゝが色里の情なるべし。〔柳〕むくのすそもやうもこいつアあんじだ。あやすきに二葉葵か。べちやアねえ、芝居の木戸が蓮池へ身をなげたといふもやうだ。〔まぜ〕そんなにわる口をおつせえすと、くらアしんすにえ。ト、はごいたの茶はうじをふり上げる。〔柳〕コウあやまつた。おりよヲば野郎の毬だと思ふさうだ、おつとまちげえ、羽根だと思ふさうだ。〔梅〕オホヽヽヽ。トたばこをすひ付けて出し、ぬしやア今夜はたれさんだえ。松さんかえ。〔まぜ〕いゝえ、なに此のぢうの松屋からまゐり

ツ取早く云へば。

○すみざいしきのにしき系　筆で彩色した版畫。丹繪のこと。

○まして　「増す」にて酒が大分腹に入つてゐること。

○それ鏡　逸れ鏡にて、それたこと、餘計な事の意か。

○枝巴　『傾城觿』鶴屋菅原の合印、梅をり枝の寫眞（五八四頁）參考されたし。

○雷の鉢植　雷の繪は三つ巴の太鼓で表す。依つて巴を枝につけた樣は丁度雷（太鼓）の鉢植とでもいひたい所である。

○あんじ　工夫。

○あやすき　人といふ字の如き形をつらねてつけたる模樣の稱。

○二葉葵　葉柄のある二枚の葵の葉をとりあはせた紋所の名。

○芝居の木戸が蓮池へ云々　芝居の木戸は鼠木戸ともいひ、無料で秘かに入るを防ぐため幅を狹くし、極めて小さい潛戸を設けた。此小さい潛戸の枠を水に浮かして、その眞中に二葉葵を入れたといふやうな恰好であるといふのである。

○くらアしんすにえ　なぐるぞえ。

したらうさ。梅 いろをとこぢやアねえかえ。ませ 後生でおざりイす。甘露梅のすくなつたといふいろのぢいさんでおざりイすよ。柳 イヤがうせいにむづかしくたとへるぜ。晦日ばきの鼠いらずぢやアあるめえし、コウト、もちつと何ぞわるくいひてえもんだ。（ト、そこらをみまはし、）梅さん、此のびやうぶの虎は女郎衆の座しきにやア目出たくねえぜ。梅 なぜえ。それでもとらは千里もちつとのうちにあるくと申しンすから、待人がさう早く來るとようおざんす。梅 それはさうだが又千里もどるといふからわりい。梅 あんまりかへらねえとうちをしくじりんすわ。柳 成程こいつアさうだの。したが此の虎のつくばつてかたをいからして居る所は、なんの事はねえたばこやの賃粉切といふ身だ。（此のむだはけいせいにはおちぬゆゑたれもわらはず。）梅さん、笄をちつとかしな。梅（ぬいてかす。）柳 おめえもいい年をして、酒中花をからみつけておくこともねえおとなげねえ。（ト、耳のあかを取る。）梅 馬鹿らしい。まだとしがいきんせんわ。柳 としがいかねえも氣がつええ。おめえことしで三ど許り琉球人に逢ふだらう。梅 どうしんしたとえ。（ト是れも餘りおちがこず。）柳 これさ、ませがきさん、觸んなさんな、耳があぶねえ。（ト、此の中あんどうのつきにふりしんさよ舟ゐねむつてゐる。）柳 みねえ小夜舟さんがはじめた。ソレごらうじろ釜ひつくりかへつてたことかはる。傘ひつくりかへつて介六とかはる。八文〳〵。ませ、梅 オホヽヽヽ。（此のこゑで目をさまし目をこする。）柳 さよ舟さん、どうだ氣がついたか。（ト、いふところへ朝々とり上げられるしきせのふり袖をきたしんざう、柳嫖らうかをかけて來て、）モシエ。柳嫖さんに、はなが出來たから、おいらんが來てお飯をおあんなんしツサ。ヲヽせつねえ。

○後生でおざりイす　勘辨してくれ。

○甘露梅のすくなつたといふいろ　甘露梅は、青梅の實を紫蘇の葉にて包んで、砂糖づけにしたもの。新吉原の引手茶屋にて、夏の中に製し、年始の贈物としたものが有名である。それが酸つぱくなつたといふ情人の老人の意で一種の感じが出てゐる。

○晦日ばきの鼠いらず　鼠いらずを三十日に掃除するとき、中から甘露梅の酸つぱくなつたのが出たと云ふ意。

○とらは千里も云々　「虎は一日に千里行く」といふ俗說からいつた。

○賃粉切　賃錢をもらつて煙草を刻む工人。

○おちぬゆゑ　女郎には不通。

○酒中花　山吹の莖のずゐにて花鳥其外種々の形など作り、酒に浮ぶれば開くやうにしたもの、その脹れて開くを見て酒興とす。

○琉球人に逢ふ　當時は將軍の代替りや其他の慶賀の際に、琉球から使を派遣する例であつた。

○あんどうのつき　つきは机などの意にて、あんどんの臺をいふ。

○釜ひつくりかへつて云々　これは乘んだりはねたりといへる玩具で、章魚の上に釜、助六の上に傘が被せてある。それが引ね返ると、釜が飛

トためいきをつく。柳 がうせえに鼻息のあらい子だぜ。※箔屋のうちへはおかれねえ。なんぞうめえものがあるか。初 ※いけえことおざんす。柳 先へいきねえ。今いかう。初 サア早く御出でなんし。そしてね、百代さんがね、此の文をごらうじいし、とサ。トしん造のふみとみえ、わるがみへ書いたあく筆のふみをいだす。※これ夜みせのたいくつのまゝのわざくれなり。柳 とつてひらいて見て、フウ何だ、○一寸申し上げ〱、※りうへうづらにこんやはよく来た。なぜ御やくそくの※まげいはへのきれをもつてこねえ、にくいやつだ。御恨みにぞんじ〱。○※ぶしやれな文句だ、サアよめねえ。※沈金ぼりの※唐草をみるやうな字のふみだ。初 マアあつちへいつておよみなんし。トむりに引きずつてゆく。此のきやくべしてほれられる氣もなく、※又きいた風のともがらにもあらず、たゞむだ口をきいて二かいおちうで心やすだてをされ、所々のざしきへあそびにゆくをたのしみに来る客なり。此の風の客まゝあるものなり。ませ 柳嫖さんのむだがをかしくつてあすびすぎんした。まゐりせう。梅 モウ一ッぷくおあんなんしな。ませ 又いつてまゐりせう。ト出てゆく。あとには、梅 さよ舟さん硯箱を出してくんな。ト、ふみを書く。かかる折からひけ四ツのひやらし木をうつ。ららかにて、かぶろまはし 子ども衆寝なさえよ〱〱。ト、二階中ふれる。○これなかゐのやくにてかぶろ一しきのせわをやく。これをかぶろまはしといふなり。○下には簾をおろす音の聞え夜鄽ひければ※お茶を挽いた妓は、大赦にあうた罪人を見るやうなこゝちにて、欠をし伸びをしながら梯ばた〱二かいへ上り、わが局々へ散亂する。※かつかちめえておまんまを喰ふ雛姫は、恰も餓ゑたる虎の如く、器にのこりし魚の骨は※化野に異ならず。とやかくするうち音もなく右も左もしづまりて、此所に※海誓山盟あれば、彼

んで章魚が出、傘が飛んで助六が出る趣向。
○八文々々 一つ八文ぢや〱と商人の聲色。
○朝々とり上げられるしきせ 主人から仕着せの振袖が出て夕刻よりそれを着て出るが、朝になると取上られる、新造中での最も格式の惡いもの。
○はな 煮花。茶がはいつたこと。
○おあんなんし おあがんなさい。
○箔屋 金箔銀箔を扱ふ店。鼻息で箔が飛んでしまふ義。
○いけえこと 澤山。
○夜みせのたいくつ 張店をして倦怠してゐるから、ひまつぶしのいたづら。
○りうへうづら 柳嫖とでも言ふべく、づらは人を卑め、又親密な心を含めていふ時に用ひる。
○まげいはへのきれ 髷を結ぶ絹布。
○ぶしやれな 下手な洒落
○沈金ぼり 漆器に、唐紋様を毛彫にして、刻目に金粉を込めたるもの。
○唐草 唐草模様。
○きいた風 知つたか振。
○お茶を挽いた妓 客のない妓
○かつかちめえて 急いで詰込む。

○化野 山城國嵯峨野にある茶毘所。
○海誓山盟 次頁の顛鸞倒鳳と共に閨中の形容。

所に顚鸞倒鳳ありて、襄王が夢を結ぶ時なりけり。〔龜屋忠兵衛は梅川と深くなじみて、金にはつまれど身はつまらず、あげ代がたゝまりて此の二階がとまつてゐれば、ばんとう梅春がはたらきにて、ねずの番に金をやり、こよひやり手部屋のひくるを合圖に下ざしきへかくしおく。忠兵衛は下座敷のくらいところにつめたいよぎふとんの中へはいり身をしのびゐる。〕をりから梅川はざしきの客をねごかして、てうづのかほでこゝへ來り、梅川 さぞきうくつでおざりイせう。モシふみはとゞきいしたかえ。忠兵衛 きのふとゞいてくはしく見た。手前もいよ／＼懷妊にちがひなく、近々にひつこみ、寮へいつて脱すとのこと、昔の身なら相談のしやうもあれど、何を云ふも金がさきだつ。知つての通り勘當の今の身の上、昔忘れぬ朋友のよしみにて、少々づつの合力でかすかの暮し、はなしにならぬけちなしぎ。梅川 初めにお目にかゝつたは忘れもしんせん去々年の三月、それから一夜が二夜と度重なり、じれつたいと逢ひたいと云ふ、癖を心につけてからとやかくとするうちに。忠 コレサ愚癡な。今さらそんなことを云つたとつて借金の云ひわけにもなるめえ。耳をだしや。ト何かさゝやく。梅川 わたしもとうから其のれうけん、引込んで寮へゆけば、ぬしには逢はれず、文のたよりもし憎くなりんす。それにまだ聞くさへ怖いおろし藥とやら、ひよつと死ぬまいものでもおざんせん。よしや身にけがもなく出勤をしてからが、傍輩衆に顔見らるゝも、恥かしうおざんす。それに知つてお出でなんす通り、お前をせいて客衆もきれ、おもだつた馴染もなく、あの八右衛門づらの外は此のごろのきやくしゆはみな初許り、それにつけてはだん／＼たゝまる呉服屋の借り、所々のかけとてもつまらぬわけなれば。忠 そんなら逃げる料簡か。梅川 あたりに氣をつけうなづく。忠 その料簡なり

○襄王が夢　宋玉の高唐の賦に、楚の襄王が夢に巫山の神女と相會したといふ故事から出て、男女相會して情交を結ぶことをいふ。巫山の雲雨ともいふ。高唐賦序に「昔者先王嘗遊二高唐一、怠而晝寢、夢見二一婦人一曰、妾巫山之女也。爲二高唐之客一、聞君遊二高唐一、願薦二枕席一。王因幸レ之。去而辭曰、妾在二巫山之陽、高丘之阻一。旦爲二朝雲一、暮爲二行雨一、朝朝暮暮、陽臺之下。旦朝視レ之、如レ言一。」

○かほ　風。容子。即ち便所へ立つふりをして。

○けちなしぎ　話しにもならぬ貧弱な有様。

○じれつたい　逢へないので煩悶する。

○お前をせいて　お前との仲を遮ぎつて。

○初　初見の客。

○しまつて　仕舞つてにて、一日揚げづめにすること。
○魞　魚を飼つて置くところ。六二三頁に「魞の二階」とあるのを見ると、魞のある料理屋の中での特定の家を指すのであらう。
○ふける　逃げてしまふ。
○二の口村　新口村、忠兵衛の里。大坂在なのを此に轉用したのだ。
○戀しり　戀愛の情を解すること。男女のなさけのよくわかる人だとの意味。
○夜具もしなほす　所謂三つ布團を新調することであらう。
○內證　前出。
○新造出し　新に振袖新造となる時は姉女郎が費用其他一切を負擔する。其日は平生懇意の茶屋船宿へ蒸菱を配り、知人の許へは赤飯を贈る。格子前から往來の眞中まで蒸籠を積み重ね、其上に縮緬、緞子、綿などを盛つた臺を飾りつけ、出入のもの、幇間、茶屋男等に祝儀を與へ、七日間は日々盛裝し一仲の町を引連れ步行する。
○切れはなれ　金の切り離れ、出しつぷり。祝儀を氣前よくやること。
○あんじ　工夫。

やしやうがある。實はむめ春が此の智慧をつけてくれた。聞けばあしたアノ八右衛門めが※しまつて下の※魞へ手めえをつれていくさうだ。俺をせき、てめえに氣をもませたかはり、あいつがおちどになるやうにいけすから※ふけるがいい。宵に地まはりめらが俺にけんくわをしかけたが、あれも八右衛門めが賴んだに違ひはねえ。何かにつけて憎いやつだ。折よくあすは宵闇なれば、たんぼへ出る庭のうら口、おれはさきへまはつてゐよう。逃げさへすればこつちのものだ。折もなく今まではなしもせぬが、こゝからは四里半わきの田舍※二の口村といふ所に、おれが實のおやご孫右衛門どのと云ふのがある。おちつき所はまづそこサ。梅川 そんならアノ梅春さんもしようちで。忠 にがしてくれる註文で、あの子が胸にをさめてゐる。あすの手はずもあの子に聞きや。梅川 ホンニ梅はるさんは※戀しりでおざんすよ。つき出しからぬしがせわについてくんなんしてから、わたしが苦勞を身に引きうけて、同じときに突きだしに出た女郎衆より、※夜具も早くしなほしてまた※內證のせわも早くはなれ、※新造出しもはなやかにしてしまひ、つねぐ\も客衆のもめ其のほかにちつとも人にひけをとらせず、たいこ持や何やかやにも※切れはなれがよいとひやうばんされ、著ものの模樣の※あんじまで人にこれはとほめられるも、みんなぬしのせわゆゑでおざんす。わたしが逃げたらばてつきりあとで、ぬしにうたがひがかゝりんせう。そればつかりがわたしや苦勞でおざんす。ト思ひがけなき次の間より、おいらんえ。トいはれてびつくり、梅春 さつきにからあすこで始終

聞きいした。跡のことはわたしが呑込んでをりいすから、必ずお案じなんすな。一まづここを立ちのいて、身二ツになつてから、忠兵衛さんも勘當のおわびをしなんして、おもて向きから、おいらんの身うけをし、日かげのお身にならぬやう目出たく女夫におなんなんし。わたくしもかげで祈つてをりんすにえ。トいふ折からねずのばん、八ツのひやうし木をうつてまはる。ちやうちんかた手に茶屋のをとこがさきへ立、早がへりの客はしごをおりる。此のきやくは風流の人と見え、はしごをおりながら※即興を口ずさむ。

鷄鳴曲

青樓擊柝唱鷄鳴　夢裡陽臺雲雨清
唐突佳人彈枕起　無情亦復是多情

客　駕ははいつてゐるか。

茶屋男　とうにはいつてをります。

第三回

金銀をつかふ客にもかまはず※横に行くは女郎の眞と卵の角道

□※世の中は道こそなけれ思ひ入る山の奥にも鹿ぞ鳴くなる。とはとつと昔、淺草に鹿茶屋のなき時代の歌なりけり。今繁華の時なれば※鑑鷜も寂しきことを知らず、※熊谷の堤で小判をかぞへても氣づかひなし、されば人の心もおのづから豁達にて、煙花のにぎはひなどは

○即興　即吟。その場で口ずさむをいふ。

○横に行くは女郎の眞云々　「横に行く」といふのは、女郎が私かに情夫に逢ふことゝ。金銀は下の角と相對應させてゐる。金を湯水のやうに使ふ客をふりすててまで、まぶに逢ふのも誠があるからだとの義である。「卵の角道」といつたのは、「卵の四角と女郎の誠」といふ文句を利かせたもの。梅川は中の島の八右衛門をふりすてて忠兵衛と逃げる、これを題にしたのである。

○世の中は道こそなけれ思ひ入る云々　『千載和歌集』皇后宮大夫俊成「世の中よ」とある。「山の奥」は淺草の奥山を利かせたもの。

○鑑鷜も寂しきことを云々　「うき我を寂しがらせよ閑古鳥」。（芭蕉『猿蓑』）

○熊谷の堤　熊谷土手は寂しいところ、追剥人殺しの出沒を以て名高い。

○水戸尻　水道尻と書く。元吉原の

云ふもさらなり、やぼにはあらぬ水戸尻、色と戀との鯉の二かい、水のそこなる鯉までもうかれうきたつおほさわぎは、むめ川がけふの客中の島の八右衛門といふは、金銀まんまんの金貸にて女郎の憎がる憎體面、正めんに大あぐら。〔八右衛門〕コウかれ野をみはらしたところはどうもいへぬではねえか。たいこもち、〔團五〕左樣でござります。〔茶屋てい主〕こゝは二かいの眺望は妙さ。ふり袖新ざう〔きよ川〕モシおいらんのとこへお富士さんが見えんすわ。〔梅川〕ほんにノウ。女げいしやトふさいでゐる。〔里吉〕觀音さんの塔も見えます。〔八〕なんだかおもしろくねえ日だ。〔團〕なぜでごぜえます。御酒がしみますめえ。サアこれではじめませう。〔八〕いんや、猩々が出ばんにでやアしめえし、酒ばかりもはじまらねえ。〔茶屋てい主〕先づおいらんがうかねえ。ちつとうかし申さうぢやアねえか。〔梅川〕ちつと心もちがわるうおざりいす。番とうしんざう、〔梅春〕モシおいらんえ。ちつとうき〳〵しなんしな。こゝがしらけんすにえ。トむめ川にさとられるなとめくばせする。たいこもち、〔團〕モシひとツおとしばなしがござります。ト、えもんをちよいとつくり、袖をひざの上へのせ、花櫚胴に紫檀棹の三絃が、會所の棚にゐて朋友の象牙の撥に云ふにやア、聞けば三河島に湯治が出來たさうだ、芝居の三みせんなんざア土用休みの内いつたと云ふこつたが、ナントおいらもいつて見ようぢやアねえか、と話す側に、食客の樫棹犬皮の見世ざみせんが聞いてゐて、モシ湯治をなさるならわたくしもお供をいたしたうござります。三ツ星の膏藥でもとかく直りません。といふから、紫檀棹が、どうした、よこねでも出來たか、といへば、鄽三味

時、江戸町二丁目と二丁目の境より、角町の角、及京町一丁目二丁目の境、中通りに二ヶ所の井戸ありて大さ六尺四方、厚板にて圍ひ、四寸角の緣を作り、小桶に杉丸太の柄をつけ、兩杓四本をつけ置いた。即ち玉川水道にて地底一丈二尺餘の深さに掘り、石にて樋を伏せ、長谷川町より江戸町の辻へ廻り、角町、京町の辻へ水を曳く、是れを水道尻と稱す。それは新吉原にありても、京町一丁目二丁目の境より廓内の末端に出るところを水道尻と呼んだ。但し此說には異說のないでもない。

○お富士さん　富士淺間社のこと、（前出五四五頁）

○しらけんす　座が白けます。

○花櫚　薔薇科の落葉喬木。庭園に栽培され、幹は直立し高さ三四丈に及ぶ。春、淡紅色の花を開く。木材は微赤色、木理こまやかにて、紫檀に類し、諸種の器具を作るに賞用されてゐる。

○會所　見番。

○湯治　溫泉

○樫棹犬皮　下等な三絃。

○三ツ星の膏藥　三味線の皮の破れを繕つてゐること。三ツ星は藥屋の稱號。

○よこね　橫痃

○竿　三味線の竿を男性のものに引つかけての地口。

○しをり戸　木の枝ををりかけて作つた粗末な戸。

○とつつおいつ　心が落着かずとやかくと思ひ惑ふさま。

○蔦の唐丸　書肆耕書堂蔦屋重三郎の狂名。

線が、ハイちとかの※竿を痛めましたが。此奴アどうでござります。〔若い者〕おきアがれ。ト、ほどなく日もくれ、燭臺など出し、皆々八右衛門がきげんをなほさんと、うかしたて、さと吉がめりやす、やみ子がをかし身ぶりをどりなどあつてやゝ時うつる。〔梅春〕ばからしいねえ。〔みなく〕オホヽヽヽヽヽ。○かくてむめ川は、忠兵衛がさぞ待ち遠ならんと心せき、座敷のやうすうかゞひて、外して出る庭の面、幸ひ宵闇折よしと、心は先へ飛石づたひ、番頭女郎梅春は、萬事に心築山の、うしろにしばし立ちどまり、〔梅春〕小ごゑにて、モシおいらん、そのうちかけは人目だつ。わたしが下著の此の小袖を上へ著て御出でなんし。〔梅川〕ホンニ逃げる今になつてまで此のおせわ、死んでも忘れはいたしいせん。〔梅春〕ナンノお禮におよびんせう。二の口村へ落着いたら、やうすを詳しく。〔梅川〕ふみの便りで。〔梅春〕必ず待つてをりいすにえ。あれ〳〵おまへさんを呼ぶのはたしか八右衛門づらがこゑでおざんす。みつけられては一大事。と梅川が手をとつて足ばやに走りゆき、庭の※しをり戸押開けばさぐりよつて、〔忠兵衛〕梅川か。〔梅川〕忠兵衛さんか。トむめ川がおもはず聲を發すれば、そばに本を讀み居たる梅はるが、モシおいらん何を獨り言おつせえす。と氣をつけられて氣のつくは、夢野の鹿の夢にはあらで、やはり箕輪の別莊に寐そびれしまゝ梅川が、※とつつおいつの胸算用、思ひに迫る此の時節、モシかうして逃げたらばいかゞあらんと心のうちに思ひしは、定めてかくもあるべしと推量したる其の始終、筆のゆくまゝ書きつゞり、色情に終身を誤るともがらの、少しは戒めともならんかと、※蔦の唐丸が求めに任せ、

紙くづかごより拾ひ出し、そこらこゝらをつゞり合はせてつひに小册となし侍りぬ。

青樓の晝の世界 錦之裏

山東京傳作

自序

一日書肆蔦唐丸來て曰く、例の小冊の案じはありやなしやと。予答て曰、まだあるまだあると、素癡な道念みる樣に、安請合にうけがひて、ト筆を執た所が、無ものは錢金とよい思案なり。蓋し宏作の茶表紙も、年々歳々穴相似て、歳々年々趣向新しからざれば、一つぐつと捻つてみた、青樓の晝の世界。夜の景色の花美とはうつて縫つた案じの小冊、此奴は一つ新織ならめと、其の儘錦の裏と題す而已。

觀三琉球人入二江戸一日

山東
菊　京傳撰　㊞

倡門至ㇾ晝　亭午之圖

錦之裏口繪

○素癡な道念　道念は道念節の略。貞享の頃、京都の道念山三郎の始めた小唄。その文句が「落つるは／＼落つるのつる、／＼／＼」の如く同字を多く用ふる所からかく言つたのであらう。素癡は虚假にて、心のうつけた、間の抜けたの意。

○年々歳々穴相似て云々　劉廷芝の詩「年年歳歳花相似、歳歳年年人不ㇾ同」のもぢり。

附言

宋玉は好色の賦を作りて色情を戒め、紫氏は五十四帖に艶言を述て色欲を戒む。是皆佛の譬喩方便と異なることなし。予屢妄の著述をなし、淫蕩を傳ふるに似たれども、必其戒を忘れず、喜怒哀樂の人情を述て勸善懲惡の微意あり。邇く諭をとらば幼童を賺し戒るに、錫を以し、灸を以てするがごとし。則錫は譬喩方便なり、灸は仁義五常なり。然れば此小冊に教訓の二字を冠しむること、所以なきといふべからざる乎。視人宜察也。

五更烏　ガア／＼／＼／＼／＼。晨鐘　ボヲウン／＼／＼／＼。紙砧の音コト／＼／＼／＼。

商人の聲油あげ／＼／＼。夫神靈矢口渡道行の文句曰、ならうことなら夜の明ぬ、國に生れていつまでもと云々。是れ戀々の常情をよく云ひかなへし妙言なり。浦島が珠匣硝子の梳皿にはあらねど、明けて口惜しききぬ／＼の、其の情あひは昔から、詩歌連誹、淨瑠璃小唄、談義說法、夜講釋、川施餓鬼でなければ、廬船へ乘た事なき老仁、日蓮記でなければ、操芝居も見た事なき姥にいたるまで、唐の和の千萬人、口のすくなる程いひつくして、今更いふも愚癡なれど、花炮家と娼家とは、晝といふもの世の中に、絕てし

○宋玉　支那戰國楚の郢の人。屈原の弟子。懷王に仕へて楚の大夫となつた。『漢書』藝文志に宋玉賦十六篇とあり。好色の賦は巫山の夢をうたつた宋玉の高唐の賦のもぢりである。巫山の夢は六三〇頁「宋玉が夢」を參照。

○五十四帖　『源氏物語』桐壺以下五十四帖。

○譬喩方便　『翻譯名義集』五、「譬喩篇に譬者比況也、喩者曉訓也」。また『淨名經疏』に「用二謡法一隨レ機利レ物、故云二方便一」。

○五常　仁、義、禮、智、信。

○紙砧　紙衣を打つ砧。砧はきぬいたにて、布帛をうつに用ひる具。

○神靈矢口渡　福内鬼外（平賀源内）の作。第四「道行比翼の袖」に「猶打解けてひつたりと、抱きしめたる睦言に、かはいゝ／＼の明烏、憎き烏につく鐘の、ならう事なら夜のあけぬ國に生れて、いつ迄も、抱かれてねやの隙白く、起き別れても移香の殘る思ひの、十寸鏡」。

○硝子の梳皿　玉手箱から引つかけて硝子の梳皿と云つたもの。

○きぬ／＼　衣々で、各自が着物を取分けて着ること、轉じて、男女同衾して朝相別るゝこと。後朝。

○連誹　連歌と俳諧。

○談義說法　江戶の町寺などにて行つた布敎をいふ。
○夜講釋　當時寺内にて四十八夜說法など行はれた。
○川施餓鬼　溺死人などを供養するため、川の上で法會を營み、その供物を川水に流すこと。
○廬船　屋形のある遊山船。
○日蓮記　日蓮上人の傳記物語及びそれによつて書かれた戯曲類。近松門左衞門の『日蓮上人記』などその一。
○爰昔後一條御宇攝州云々　之等は起筆を讀本らしく見せようとした、その當時の取締に對する用意であつた。
○懸盤　食器を載せる臺。昔は四本足の臺に折敷をのせたものであつたが、後世では、上下作りつけにし、外にそつた足のある上品な膳を稱するやうになつた。(前出、五七二頁參照
○居合ぬき　氣合によつて長刀を居ながらに拔く技術を見せ、齒磨を賣り廣める藝人。淺草寺奥山、兩國橋詰等の盛り場で行つた。
○月に霞はどでどんす　乳柑を月に、杉箸を霞に見立てた此の思ひつきはどうでござる。
○物日の浴室の三方　物日には浴客が錢を紙に包みて湯屋の二階に置くのみ云ふ。
○嘔吐　吐逆。一旦食つたものをはき出すこと。

なくもすむものなり。

※爰昔後一條御宇、攝州河邊郡神崎之廓、吉田屋喜左衛門云有二妓家一。

それが二階の朝景色、杯盤狼藉、廊下には※懸盤に杯臺、茶臺の上に茶椀をのせ、さも※居合ぬきの踏臺の如く、傍には輪切の乳柑の皮の下に杉箸の折二本、※月に霞はどでごんすといふかたちにすてて有、紙くづは※物日の浴室の三方の如く重ね、上草履は女護の島の入口にひとしくならべ、小便所の※嘔吐は、落花のごとく散り、假臥室の火鉢は、螢火ほどに消え殘り、梯の下には※文をならべ、門口に鹽を盛、雛妓の※鬢差逆に翻り、丫鬟の前髪横にみだれ、長く寝短

○文　遊女屋に來る馴染客などの手紙。
○鬢差　女の髪結ふ時、鬢の内に入れて、左右に張出させる用具。

○西施　美人。拾遺記「西施越女、苧羅西子也、有二絕世之美一、越王句踐、獻二之吳王夫差一」。
○無鹽　醜女。『劉向新序』雜事篇「齊有二婦人一、極醜無雙、號曰二無鹽女一」。
○あくるわびしきかつらきの　云々　拾遺和歌集　卷十八、雜賀部に「岩橋の夜の契も絶えぬべし、明くる佗しきかつらぎの神」。又謠曲『葛城』に「明くるわびしき葛城の、……神がくれにぞなりにける」。葛城山の神が、役小角の命で吉野山と葛城山の間に路を作らうとされたが、形の醜いのを恥ぢて、夜の間のみ工事に從つたといふ故事。これに薄毛のかづらをかけて云つた。
○お座のさめたる　興の醒めた。
○お職　首席遊女。
○∧・（よびだし）　よびだしは揚屋茶屋にて遊女屋から遊女を招くことであるが、ここは呼び出し女郎のことを言つてゐる。人山形に一つ星は、細見に見える金三分、新造附の女郎。即ち揚代が晝夜にて三分の呼出し女郎の印である。（二つ星は晝夜金三分にて揚詰は一兩二分となる）
○夜光珠　支那の昔、暗夜でも光るといひ傳へられた寶珠。

く臥し、昨夜の※西施は今朝の※無鹽、鼻のうす疱瘡、首筋の疵、※あくるわびしきかつらきの、髮の毛の薄きまであらはに見え、※お座のさめたるその中にも、此の吉田屋の※お職にて、※∧・のおいらん夕霧と聞えしは、神崎一の全盛にて、木地から磨いた面屋の木偶、※夜光珠の晝見ても、光りのうせぬすがたなり。朝がへりの客を茶屋まで送てかへりしと見え、

[夕ぎり] ヲヽつめた。 トはしごを上る跡より、振袖新造 こちね 寒さうなりにて、あたまのしらがもとゆひのさき、雨はうを紙にていはへ、おいらんの中をりの駒下駄と、自分のげたとさげて來る。 ※ヲヤもうさうちがきたさうだ。いつそ匂ふよ。 廊下にはねずのばん多くの行燈をならべ掃除してゐる。 [夕] 起介どん、ソレ足から血が出るよ、どうした。 [ねずの] 臺の物の松の釘で、ふみぬきを致しました。 [夕] ヲヤあぶねえ。 ト座敷へはいり、しかみの火鉢にかけてありし、あかゞね臭いさゆを一口呑んで見てこぼし、火鉢の中をかきさがして、 コレこちねさん。下にお※きが出來たらう。ちつと持つて來な。 [こちね] アイ。 ト下へ行く。[夕]あたりを見廻し、次の間の戸棚の戸を、四五寸あけて、顏さしいれ、 さぞ氣づまりでおざりんせう。 トいふ所へ、やりての聲する故、びつくり戸棚の戸をぴつしやり、ほどなく來る、 [やり手] おいらん、お早うござります。 [夕]は、戸棚に身をよせかけて、さあらぬ體。 見なんし、いい天氣でおざんすねえ。 [やり] なにさ、曇つてをりますもの。昨日はモウ大にくたびれましたよ。 [夕]やう／＼おちつき、 ホンニ※堀の内さんは、賑かでおざんしたかえ。 [やり] アイ※納手拭は、すぐに懸させて參りましたよ [夕] ソリヤアもうおかたじけなうおざんした。モシエ、寸間見なんし、夜舟さんの寐たなりを。 [やり] ホンニねえ。 トこなたを見れば、番頭女郎[川竹]かゞみぶとんの※七つ過ぎを、※柏餅にして寐てゐる。其わきにふ[やり]此りしんの[とふね]同じく[さりかの]たゝみの上へじかに寐て、ふとん冠り枕をはづして、死人の如し。

の子たちもなりばかり大きくつて、客人に出ろと云へば嫌がるし、困つたものでござります。[夕]さつきからわからぬ寝言を云つてゐいすはな。[やり]馬鹿らしいねえ。ト云ふ所へ、[そらね]は、火入へ火を入れて持來る○折から廊下はかまびすしく、新だち大勢客をつかまへてきたる。[客]静かにしてくれ、げえぶんが悪い。留袖の新[なべづる]氣が違つたさうさ。てんぐ\がわりい事をしなんして、人の知つた事のやうに。[客]きのぼせがするはえ。ふりしん[うで鑑]わたしらは主のお蔭で、暗いうちから、冷えかたまりいしたは。

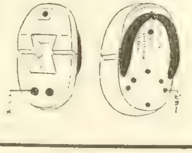
[戀かせ]いいむしだア。ぬしが初めなんしたらう。

トロ々にわめきて廊下を引て行く、新だちはこれなぐさみ半分なり。客はくもの巣にかゝつた蜻蛉のやうに、大きななりをして、智慧もなく、頭巾はよこつちよにおちかゝり、のろきなりにて奥二階、[くら里]がざしきへ入れられる。この時中の間の〔五ツ時〕かくて仕著せのふるいふり袖をきせ、ふくろふに小鳥のたかつたやうに、新造とりまきむだをいつてちやうす。

[うで]煙草もなりんせん。[なべ]今に坊さんにしておあげアンス。[戀]ぬしを坊さんにしたら、どんなだらうノウ。[うで]しうしうだの坊さんに似て來なんすだらう。[なべ]どうかもう氣のせえか、坊さんじみて來さしつたよ。[戀うで]ホンニねえ。[うで]茶やもにくうおざんす。こんぢうのれんをはづして來た時。[なべ]あんなに口廣い事を云つてノウ。[illegible]マア此の町をとめてやりイすがいいのサ。[なべ]戀かせさん、竹村のめえへ、ひき

○中をりの駒下駄　眞中で折れる下駄。
○さうぢ　不淨掃除人。
○松の釘　松村製の釘。
○しかみの火鉢　獅嚙火鉢。脚に獅子の面をつけた金屬の火鉢。
○おき　薪の燃えて炭となつたもの。
○堀の内　お祖師様を祀つてあるところ。『江戸名所圖會』巻之四に「堀の内村(今、東京市杉並區)にあり、日蓮宗一致派にして、頗る盛大の寺院たり。宗祖日蓮大士の靈像は世に除厄の御影と稱す。日朗上人の作にして、其先は碑文谷の妙法華寺にありしを、元祿の頃、故ありて法華寺を天台宗に改められし頃、此靈像をば當寺に移しまゐらすといへり」。
○納手拭　神社佛閣に奉納する手拭。
○かどみぶとん　裏の布を折返して表の縁とした蒲團。
○七つ過ぎ　七つは四時。此では午後四時で、色の褪せたことを云ふ。
○柏餅　柏餅のやうに布團を半分に折つて其中にくるまつて寝てゐる姿。
○新だち　新造達の略語。
○てんぐ\　てんでてんでで各自めいめい。
○いいむしだア　いゝ料簡だ。自分勝手な事をいつてらア。
○ちやらす　うちたゝく。打擲す。此處では言葉でいぢめるの意であらう。馴染客が敵方の遊女を差置いて、他の店へ登樓するのを見付けられると特殊の制裁を加へられる、此の邊はその客の捕へられた光景であらう。
○なりんせん　なりません。吸つてはいけない。

○しうしうだの坊さん　不詳。
○こんぢう　此の間中。せんだつて、
○のれんをはづす　暖簾をはづすのは看板をはづすと同じくその店の營業を妨げる意である。
○町をとめる　此の町への出入りをとめる。
○ひきずり　下駄の名。(下圖)



ずりをぬぎ捨てて來たから、とつて來なんしよ。むだ夕さんはどうしたの。〔車〕あの子は、二丁めの溝へふんごみんして、下で足を洗つて居なんすヨ。ぬしはわたくしをひつかきなんした。ちよつと見なんし、血がでんすは。〔うて〕わたくしが袖をばおやぶんなんすし、又お針衆に小言を云はれんすは。トすきなことをいつてゐる。客は多勢に無勢、だんまりでゐる所へ、威儀堂々としておいらん〔くる井〕來り、馬鹿らしい。おめえがたア靜かになんしえ。どうで呼び申さねえ客人だから、こつちのりやうけんの通りにするまでは、ぶしつけが有つちやわるうおざんす。ト是よりむつかしくなる。茶屋もいろいろ手を入る。こいつもとゞ高くて夜具、安くて着物ぐらゐがいたみと見えるなり。此となりの部屋持の女郎、今起きたと見え、かゞみに向つておがひつかつて居る所へ、かぶろ〔つなぢ〕下よりおきて來る。仕著せ布子のよごれて黑光りにひかるやつに、板メののろまいろになつた細帶をしめ、目をこすり〳〵、寐ぼけた樣な面なり。〔車井〕つなじか。〔つな〕アイ。〔車〕いい處へ來た。たばこを吸付てくりや。〔つな〕アイ。トまだ此の座敷には火がなきゆゑ、やりて部屋から吸付て來ていだす。〔車〕エヽモベら棒らしい。火がきえたは。ト煙管でたたく所へ、〔茶屋男〕いそぎきたり、モシおいらん、蛙聲さまがおたばこ入をお忘れなすつたさうでござります。〔車〕床の中にあるか、見ていつてくだせえ。〔男〕ハイ。トさがして、こゝにござりました。〔車〕まだこんたの内に居さつしやるか。〔男〕左樣でござります。トまた急ぎゆく所へ、また〔茶屋女〕來り、モシおいらん、御文をお出しなされまし。〔車〕けふは人がいくか。〔女〕遣はします。〔車〕そんならちつと待つて下せえナ。コレこんたのとこの、いつもの瓜の香々はもうねえか。〔女〕まだござります。上げませうか。〔車〕そんなら文を書うち持て來てくだせえ。後生だヨ。ト樓下には、地を柿にして文字を藍にて、吉田屋と筆太にそめ出した

○二丁め　江戸町か、京町か。
○下　樓下。溝に落ちて汚れた足を樓下で洗つてゐる。
○お針衆　女郎に附いて女郎のものなどを裁縫するもの。
○呼び申さねえ客人　公に呼んで登樓させた客人でない。
○とゞ　とゞのつまり。結局。
○高くて夜具、安くて着物　罰として女郎に買はされるのである。
○おがひ　うがひ（含嗽）の訛。
○板メ　即ち夾纈で、板にて布帛を挟んで染む。即ち薄板に模樣を雕りぬき、其板二枚を以て、固く布帛を挟みて、雕りたる所より染汁を注ぎ、善く染まりたる時、板を解けば、模樣あらはる。
○のろまいろ　鈍色で、うすぼんやりになつた色、褪せた色。
○こんたの　こなたの。
○柿　柿色。代赭色の濃きもの。赤黒き色。
○牛臺　牛は妓夫。女郎屋にて見世と暖簾との際に、三尺四方の臺を壁にしてあつて、こゝに妓夫がをり、客と折衝する。
○きんかんのほうづき　金柑

るのうれんを半分まき上ゲてあり。こちらの牛臺には、かぶろが、おちさうに腰をかけ、きんかんのほうづきを、もちあそびにしながら、髪をいつてもらつてゐる。（）もつともかぶろのかみは、男の髪結がゆふなり。［かみゆひ吉平］コレじつとして居ねえか。手めえのやうに動くものはねえ。そばにまつて居る［かぶろ］吉平どん、おれうはモウ奴島田はよして、針うちにいつてくだせえ、おいらんがさう云はしつた。今一人の［かぶろ］あのつぎはおれだよ。今一人の［かぶろ］あつかましい。何きさまなものか。おれが先へ來たは。［吉］此の子どもいらア、ようめえ朝〳〵いがみやふ。ちつと靜かにしねえか。又こちらの庭には、山の宿からくる出入の肴屋、はん臺を持ちこみならべ、そばにはうは料理番の文介かるさんをはき立つて居る。下料理番の［源七］もゐる。大黒ばしらのきは、上りはなには亭主［喜右衛門］煙管の先でさしづしてゐる。

［さかなや］コリヤお前さん。いい鯵でござります。生麥でなくツちやア、こんな丈長はとれません。［喜］文助、吸物肴はそれでいいか。［文］ハイ、此生貝はみんな女貝だノウ。此奴アいい地鮃だ。［さかな］いい魚でござります。［源］旦那さん、生海鼠も些とお取んなさりまし。［さかな］此の海鼠は榎堂でござります。［文］車をもちつと入レさつせえ。［喜］なぜ魚がありながら、そねえに高いノウ。［さかな］しけのあげくでござりますから、安くござりません。かくて

四時

二階［夕ぎり］が座敷には、新造みな〳〵起きる。ばんとう［川竹］は、紫の中がた小もんの七ツ半頭の小袖を着、黒ごはくの平ぐけ、黒縮のあづま模様の、こいつも少しきたつた小袖をうちかけ、あたまには、けさ起きて髪の亂れをかきあげたまゝ、すぐにさしたとみえる、つげの櫛をちよいとおつこちさうにさしてゐる。これはこゝの二階の新ざう頭にて、よほどさばくかたちなり。しかし年〻の明くるもちかければ、骸骨のすて所

の實を出して其皮を醱酵にしたもの。
○奴島田　高島田の一種。處女の髪であるが遊廓にても用ひられた。
○針うち　婦人の髪飾の一。花形などに製し、根掛けとして、主に唐人髷、天神髷などに用ひる。
○山の宿　淺草花川戸から山谷堀今戸橋方面に至る途中にある。
○うは料理番　上料理番。料理人の頭立つたもの。
○かるさん　ズボンの裾の狹きもの。後には踏込の袴の如く仕立てゝ裾を細くほめて作り、大工、髪結、呉服店の下男など立働く者が、衣服の裾の開くを防ぐ爲に、綿布製で用ひた。もんぺの如きもの。カルサンは葡語である。
○生麥　川崎と神奈川の間の宿で立場である。鶴見川河口の右岸を占め、現在は横濱市鶴見區内。
○地鮃　本場の平目。外の場所で取れたものでない意味。
○榎堂　榎戸湊であらう。（前出五九六頁）
○車　車えびの略稱。
○七ツ半頭の小袖　前出「七つ過ぎ」（六四一頁）參照。
○黑ごはく　黑の琥珀織をいふ。
○平ぐけ　ひらたく、くけた帶。丸紐に對す。
○きたつた　いたんだ。よわつた。
○つげ　黄楊、黄楊科の常綠大木。暖地の山地に自生して高さ三丈位に達する。材は堅くして白く、櫛などを製する材料となる。
○さばく　捌く。分別がある。手腕がある。
○骸骨のすて所　職を辭するを骸骨を乞ふといふよりいへるか。

にまごつかぬやうにしなトいひたき風の女郎なり。ふり袖〔おしかの〕一〔よふね〕皆あゐびろうどの、油やの雑巾のやうなぬのこ細帯、えりはまつくろ、白粉所々に雪のきえ殘りたるが如し。〔夕ぎり〕は無心をいつてやつた客のところから來た返事の文をよんでゐる。〔下竹〕自身掃除をしかけ、はうきを持てうしろからのぞいて居る。〔此の所の二人がすがた、さも女郎の寒山拾得のごとし。〕〔よふね〕ゆうべ見えなんだ哥がるたが、夜著の袖から出んしたよ。〔夕〕それ見なんし。〔四〕おめえがたア、きり〳〵湯へはいつて來て、床の間やれんじをふきなよ。何もかもごみだらけになつて居るは。いつでもあすこらが、くさらしいよ。ト、いひながら、しかみの灰のかたまりを拾ひ出し、文殻を引きさき、火鉢のふちをふいて居る所へ、かぶろ〔雪の〕來る。〔四〕雪のや、湯にだれが居る。見てきや。〔雪〕今見てめえりイしたが、そとの人は誰もをりイせん。〔四〕おいらん、お出でなんせんかえ。〔夕〕わたしはもちつとして參ンじよう。ちつと今、考へて居ることがおざんす。〔四〕コレあしかのさん、わつちが湯へいつて來るうち、おいらん膳も、わつちが膳もしておかうし、お茶もわかしておかうし、それからアノ、まあ〳〵それをきり〳〵しなんしえ。雪のや、糠を入れて浴衣を持つておゆびや。そしてからアノ、はうばうへいつて、書付をとつて來や。早くしやヨ。埒があかねえと聞かねえヨ。おいらんが餘り氣をよくさつしやるから、みんなずるくつてなるもんぢやアねえ。〔（頭註）かき付けといふ事のわけは、前編四十八手にくはし。よつてここに註を書かず〕ト いひすてゝ湯へゆく。○湯へゆく時、つとの所へつげの櫛をさかさにさすは、髮の癖をなほすためなり。○そのあとへ小まもの屋、あたまへかんざしを二三本さし、荷をかたにかけて來り、座敷をのぞき見て、〔小間物〕あたまへさしてゐた、つたのつくりもののかんざしをぬいて、 おいらんえ、此の笄はこんだ挽せやしたが、とんだ甲がいいから、取ておきなされませんか。ト見せる。〔夕〕とつて日にすかし見て、 ホンニこりアいいよ。

○油やの雑巾　油じみて汚れたのを形容して云ふ。
○寒山拾得　支那の唐代、天台縣の天台山國清寺に居たる二人の散聖の名。二人は極めて親睦に相交つたといふ。
○きり〳〵　とくとく、はやはやの意。
○れんじ　櫺子。窓に設けたる格子。
○くさらしい　物臭らしい。そこをいゝ加減に雑にするらしいよ。
○しかみ　獅噛火鉢のこと。（前出）
○文殻　讀み終つた手紙。不用となつた書簡。ふみほご。
○糠を入れて　浴するとき糠を小袋に入れて糠袋をつくり、それで膚を洗ふ。
○あゆび　歩みに同じ。
○つと　髮の後と左右とへ張り出したる所。
○つたのつくりもの　蔦の細工のかんざし。
○甲　鼈甲。

死ぬほどほしいが、今はちつと相談が出來んせんから、あしたまで賣れずに居たら、持てお出なんし。[小間物] アイ、左樣なら、もし今日中に賣れずば、あしたもつて參りませう。おめえさんの氣にいらねえとおつしやつた方のしのぎ※を、こつちへ遣はさると、やすく上げられます。[夕] ソリヤアどうともしんせう。トいふ所へ、湯からかへる。[川] わたしが此ぢうのかうがい子、※うきがでんした。[小間物] なほして上げませう。所へ奥二階より、部屋持の女郎來り、[あだ崎] モシエ、此櫛をついで來ておくんなんしな。どうぞ早くお賴ん申しイすよ。[小間物] かしこまりました。トいふは、こいつゆうべ色男と口說して、折られた櫛の死骸とみえるなり。所へまた、[ふりしん]來り、指の輪はまだできんせんかえ。[小間物] あすは出來ます。紋所は（紋）と（紋）を※ひよくだつけね。[しん] これさ、靜に云ておくんなんしナ。馬鹿らしい。ト、はづかしがるも、しんざうのせい一杯の樂みならん。[小間物] ちよつと浮里さんの所へいかねばならぬ。[しん] 浮さとさんのとこには、たしか居つゞけが有るよ。[小間物] ホイ。トおくの方へゆく、○[夕]がざしきには此のうちふりしん、箸箱と蒔繪の※八寸を出し、茶漬茶わんをならべる。火鉢にかゝりし土瓶の湯はチン〳〵とわく。そばには※湖月集の本の上へ、茶をのせておき、煙草盆の引出しを引出しておき、たばこいれにしておく。[川] コレゆきのや、おれがくし箱の鎖のおりる引出シに金があるから、二朱持ていつて、※おあしをかつてきや。鍵は用だんすの引出しにあるぞよ。[富] アイ。ト用だんすの引出しへ指をたてつけ、あいたゝ。ト指をなめ〳〵 ここにやア鍵はおざりイせんよ。[川] ヲ、※うそ〳〵しめえヨ。手めえゆうべ入れたぢやアねえか。トかぶろがとつてきた、かのきのじや※のかきつけを見て、氣に入たものへしるしをつけ、とりにやる。夜舟さん、茶だんすに※じやせん豆と、たう

○しのぎ　背峰の高い先。

○うき　しみ。

○ひよく　比翼紋。二つの紋を竝べてつけること。

○八寸　足付の高さ八寸の膳。

○湖月集　『源氏物語湖月抄』のこと。六十卷。北村季吟著の『源氏物語』註釋書。延寶元年開板。

○おあしをかふ　小錢と兩替することか。

○たてつけ　挾み入れる。

○うそ〳〵　虛誕。

○きのじや　臺の物屋。

○じやぜん豆　坐禪豆。黑大豆をゆでて砂糖、醬油で甘く煮染めたもの。「煮しめたる豆を坐禪豆といふも、坐禪納豆より出で、ふるき名なり」（『嬉遊笑覽』卷之十）

がらしがあつたらう。こゝへ出しな。〔夕〕貝のはしらを取にやつて、帆立貝で煮ようぢやアおざんせんか。〔川〕とりにやりんせう。〔夕〕※行平鍋はどうしたノウ。〔川〕誰か、とうに破つてしまひンした。あしかのさん、今朝の惣菜はなんだ。〔あい〕たしか芋に油揚でござりイすよ。〔川〕おそれるね。〔夕〕あやまりいす。トいろ／＼食好みをして、やう／＼朝おまんまを食べてしまひ、夕はわる長くうがひをつかひ、煙草二三ぶく呑んで、すぐに湯へゆく。かぶろは浴衣を持ちついて行く。そのあとへ田まちの〔ごふく〕や來り、昨日の※雛形は、お氣に入りましたか。〔川〕いつそようおざりイす。あれにきめんせう。〔ごふく〕むくはやつぱり。〔川〕※ともむくにしておくんなんし。そしてこんどは、着物の丈をもちつと長くしておくんなんしえ。〔ごふく〕かしこまりました。とゆく。〔川〕アヽモシ／＼。とよびかへし、序にわつちが※はきかけ〔（頭註）はきかけとはすそまはしの事、此の里に限りし言葉なり。〕にするきれを、何ぞ見つくろつておくんなんし。※コウト、そして紫鹿子のえりを、一トかけよこしておくんなんし。〔ごふく〕かしこまりました。トいふ所へ〔かぶろ〕一人きたり、八十兵衞さんえ、おいらんがちよつとお出なんしツサ。〔ごふく〕手めえはどこの子だ。〔川〕車井さんの所の子サ。ト、呉服やは奥へゆく。〔夕〕はほどなく湯から上り、浴衣で耳をふき／＼來る。聞きなんしたかえ。ぐち里さんの客人は、つかまつて來なんしたさうだね。〔川〕さうでござりイすとさ。※ちやツたアすみんすめえ。夜舟さん。身ごしれえをするやうに、何かを出しなんし。〔夕〕あしかのさん。髮ゆひのお吉さんが、二階へ來ちやアゐねえか、見て來てくんなんし。お針部屋も見て來なんしよ。若しまだ來ざア、下タの中郎〔中郎と言は、内しようの小づかひをする下男の事なり。是も此の里にかぎりたる言葉なり。〕の人をたのんで、呼にやつてくんなんし。〔川〕雪のや、

○行平鍋　陶製の平鍋。略してゆきひらともいふ。

○雛形　衣裳の模様や形などを見せる爲に作つた一種のカタログ。

○ともむく　上着下着の表裏とも同じ色の無地にすること。

○はきかけ　今、はつかけと云ひて、普通に使用される。

○コウト　云ひかけて考へる態。

○ちやツたアすみんすめえ　一寸では濟みますまい。一寸ぐらゐでは許されまい。

○板　板締であらう。（前出）

○くこ　くこの油。

○すき　梳油。胡麻の油一合に生蠟六匁を和して、これに香料などを交ぜて煉る。

○わる紙　粗製の紙。落し紙。

おはぐろをとつて來て、それから楓屋のかよひをもつていつて、※板を一本とゑりつけと、※くこと、※すきと、黑元結を取て來や。ついでにわる※紙とたばこもとつてきや。夜舟さん、筆楊枝を出しな。ト、いひつける。筆楊枝とは、おはぐろ筆の事なり。夕ふねは夕と川が鏡臺をならべ、くし、※たゝう、※はんざふなど取揃へる。ほどなく客はおはぐろを買つてきて火鉢へのせてお く。夕川はんざふを膝の上へのせ、まづ筆やうじを火ばちの※じようの中にてかきまはし、鏡にむかひかねをつける。○むかふ座敷には、床の間の上に、杯を※下〆でしばつてのせてある。これまち人の願なるべし。とめ袖のしん、かんざしで※火入の火をはさみ、火鉢へ入れながら、花哥 モシヱどうしてやりんせうねえ。腹が立つて口惜くつてはりさけイす。おいらん板琴めしつぶだらけなすゞり箱ひきよせ、本にとぢた文を一心にかいて居ながら、それだつてもおめえ、※手しやうも見ねえ事が、なんといはれるものか。胸でをさゐてゐて氣をつけなんしな。花 何でもわつちが推量にちがひおざんせん。ゆうべのやうすが、さうでおざりイすもの。ト、いふは、客が外の女郎とのいろ事を、けどつたと見えるなり。ところへふりしん、※總高架へいつてかへり、ふり袖をはたきながら來り、花がのんでおいた煙管の、まださめぬやけ煙管のうへへ、うつかりト手をつき、けび川 ヲヽアツヽアツヽ。花 そゝつかしい子だヨ。けび わたくしは※月水虫がかぶつてなりイせん。モシヱ、今身のうへを見てもらひんしたがね、悪い星にあたつてをりイすツサ。どうせうノウ。いつそ苦勞だよ。花 おめえ、かゝさんがさつき逢ひにきたぢやアねえか。けび もう歸りんした。琴は一心に文を書いてゐる所へ、まはしかたの牛吉來り、お茶を一ツくださりまし。ト、茶をくみ、兩の手をかけてもち、茶わんで手をあたゝめながら、熱いやつをすすり/\、いめえましい。中の町へいつて來たが、さつぱりかけがよらねえ。これぢやア此の※ものめえは、※蜜柑でこせえた猿をみるやうに、首でもくゝらにやアならねえ。※かけびまの

○たゝう 厚紙に澁や漆などを塗つて折目をつけ、四つにたゝみ、その中へ結髪の道具、其他種々なるものを入れるもの。
○はんざふ 半挿。㮶。おはぐろをつける時に用ひる小さな盥。みゝだらひ。
○じよう 尉。炭が燃え切つて灰となつたもの。
○下〆 下締にて腰紐のこと。
○火入 煙草を吸ふ炭火を入れる小さい器。火箱、火盆。
○手しやう 手性にて手先の使ひぶりの巧拙、手すぢの意であるが、こゝはやり方、仕ぶりの義に用ひたのであらう。
○總高架 雪隱。
○月水虫がかぶる 「虫がかぶる」とは陣痛を催すこと。こゝは月經で腹が痛むこと。
○ものめえ 物前。紋日前。
○蜜柑でこせえた猿 みかんの身を一つづつ取つて糸で括り、猿のやうな恰好にする。それから首をくゝるに引かけた。
○かけびまのでる 掛取りの旨く行かないこと。

でたも、かつかうのわりいもんだ。〔けび〕みんなさう申したつけ。〔牛〕人の氣も知らねえでしやれるよ。なんぼしやれても、まだ※焼場の道で、いきものはとほらねえ。おれが水あげをしてやらうといふに。〔けび〕象牙まきゑの櫛で、鬢をなでつけながら、しつたか。蟲がいいは。〔牛〕何蟲がいい。※なまびのむしがいいが、聞いてあきれらア。〔けび〕わりイ酒だ。よつたら供部屋へいつて寢さつせえナ。〔琴〕げび川さん。※ふうじ紙をもつて來てくんな。そしてたんすの金物もちつと磨いてくんなんしョ。〔牛〕ホンニ、ちつとみがきなせえ。賣藥店と女郎衆のざしきは、簞笥が光らねえとしんかうがうすい。〔琴〕ぎう吉ツどん。男の手でなくつちやア、惡イことがあるから、のちに文の上書を一ツしてくだせえ。そして田町へいくものがあるなら知らせてくだせえ。※治丹坊の三百丸を買つて貰ひてえ。〔牛〕大かただれぞのえりませう。と行く。〔琴〕わつちや豹郎さんのとけえ、淋病の藥をこせえてやりてえが、けふはまにあひンせん。淋病のくすりを手製にする事は、どこの二階でもよくする事なり。予さるおいらんよりこの祕法を傳はる。あまりたはけなればこゝにしるす。○※黄蓮、※甘草、※丁子、※山梔子、隈篠、燈心、梅干黒燒、※阿膠、松子、――三スヂ黒ヤキ、以上十味等分ニ合煎ジ用ユ。三すぢだけが大笑ひなり。〔琴〕そりやアさうと、けふは幾日だのウ。〔花〕いつかでおざんすか。〔けび〕わつちも知りイしなイ。折から表には、いろいろの商人通り、さまざまのよび聲きこえる。▲※さんばそう〳〵、※なんきんあやつり。▲※鏡磨々々。▲さくら草〳〵〳〵。▲針がね〳〵。〔けび〕モシエ、あれはりがね〳〵が來いしたから、※十二日でおざんせう。ヲヤ※こもそうが來たよ。花哥さんごらうじいし。ちよつと立

○焼場云々　死んでからも處女では幅が利かない。
○なまびのむし　「むし」は「みそ」を言ふ。味噌を製して後、幾日かを醸しておくのであるが、その醸しておく日數の足らざるなまのを言ふのである。
○ふうじ紙　手紙などを封ずるに用ひる紙。
○治丹坊の三百丸　治丹坊といふ藥屋で製した三百丸といふ藥。
○黄蓮　毛莨「きんぽうげ」科の多年生草本。我國北部の山地に生ず。高さ數寸乃至一尺。根は藥用に供せらる。
○甘草　前出。五四三頁。
○丁子　前出。五四二頁。
○山梔子　茜草「あかね」科の常綠灌木。暖地に自生し、多く庭園に栽培せらる。高さ六七尺。果實は熟すれば黄褐色を呈す。採りて藥用又は染料に供せらる。
○阿膠　桑科の常綠喬木。我國にては亞熱帶地方に産す。高さ四五丈に達し、氣根を有す。
○さんばそう〳〵　南京あやつりのやうに、糸で人形を舞はす行商人があやつり三番叟を使ふ。それを觸れ歩くのである。

○なんきんあやつり　『嬉遊笑覽』卷之六に「南京あやつりとて、人形に糸を多く付て、上よりつりてつかふもの有り。『竹豐故事』に南京糸操は寛文延寶の頃よりつかひ初めし由、京都山本角太夫芝居に專らつかひしなり。江戸には兩國橋廣小路に天明九年の頃始てあり」風來が『放屁論』に「兩國橋みせ物のことをいふ處」大魚出れば大蛇骨出、硝石細工、弄糸傀儡「ナンキンアヤツリ」古きを以て新らしく田舍道者の目を悅ばしむなどいへり。此操りいつも國性爺の淨るりなどをして有しが文化十三年に絕たり」。

○鏡磨　菱川師宣作『和國諸職繪盡』にその圖あり。

○十二日　當時、針金の行商人が毎月十二日に吉原へ廻つて來たのである。北尾政美の『近世職人繪詞』にある針金賣の畫の詞書にも「今月は十二日なれは山谷の廓へ參らう」といふ語がある。

○こもそう　薦僧。虛無僧「こむそう」、普化僧などもいひ、普化宗の宗徒である。尺八をふきつゝ門々を流して米錢を乞ふ。但し普化僧でなく乞食僧のものもある。

○勸化　寄附。

○一トすぢ　錢一筋。一貫文を貫ぬいた貫緡一本。

ぱなこもそうざんす。囮 どれ。ト立て見るうちにはや、しもの方へゆきすぎる故、そばにある姿見をとつて、おもての格子へうつしてみてゐる所へ、下より中郞來り、賴まれましたが、此の勸化をちつとおつきなすつて下さりまし。ト、勸化帳を見せる。琴 いくら程やるのだよ。中 一トすぢばかりおつきなさりまし。琴 ウヽ、今だしておかう。ト云ふ所へ來る 中居 げび川さん、こつちの御座敷に皿が一ツ來てをりやせう。見ておくんなせえ。はひ おざりいせん。中居 おめえがたは、※めえよう、そんな事をいひなさる。此のぢうも、こつちに※平の蓋がござりやした。わたしらが預りだから、なくなつちやア迷惑でござりやす。馬鹿らしい。ト、小言をいひ〱ゆく。はひ しつたかしらねえは。と※はぐらかす折ふし、廊下にて座敷持の女郎うはき木少し心わるいと見え、白ねりの鉢卷、おはぐろおとして白歯は、すごきかたち。禿に耳こすり。うは コレあのの、あきんどやへいつて、すぐの香箱との、下モの生藥屋へいつて、血どめと銀箔を買つて來や。そしてかへりにお針部屋で綿をちつと貰つて來や。ちつと氣をきかせやヨ。ト、こいつぱんの支度とみえるなり。〇折から洗ひはりやは三輪から來り、かし本やはなくした本をせがみ、茶わんばちやは代ロものを見せ、文づかひは所書をうけとり、炭屋はすみのはねてやけどした尻をくらふところへ、もはや、あはた 湯をしまひます〱。と二階中をふれる。こなたの夕ぎりが座敷には、女髪結お吉來り、髪を結ふ。夕はかな付の※唐詩選をよみながらいはせて居る。※大道直如レ髪、春日佳氣多。ヲヤばからしい。此子

○めえよう　毎度。いつも。

○平　平椀の略。淺くて平たい椀をいふ。

○はぐらかす　ごまかす。言ひまぎらす。

○唐詩選　七卷。明の李攀龍の編と稱するが、實は攀龍の名を假りて編した詩集。世に大いに行はれ、我國にても、詩學入門の書として尊重された。

○大道直如レ髪、春日佳氣多　『唐詩選』卷之六、儲光羲の詩「洛陽道」の起承兩句。

はよくすひつけてくりや。〔書〕おいらん、まだ鹽だちをなされますかえ。ト夕をとつひで日ぎりがきれんした。〔書〕そりやようござります。トいふところへちや屋の〔下女〕もみのきれで目をふきながら來り、モシおいらんえ、此の間の扇をかいてくださりましたか。たび／＼客人の方からとりに參ります。〔夕〕なんぞ好みがあるかノウ。〔女〕おまへさんのお名さへあれば。〔夕〕なんでもいいかねえ。書ておきんせう。〔女〕おたのん申シます。トかへる。〔固〕ぜんてえ、おめえさんにやア、てがらよりしのぶがよく似合ます。〔夕〕それでもしのぶに結ふと、いつでもお茶を挽ンすから、緣起が惡うおざんす。ト、このうち〔川竹〕たばこつけて〔書〕にやる。あぶら手ゆゑ、紙でもちそへてのむ。〔川〕雪野や、これをこぼしてきや。ト、はんざふをつき出す。一はんざふの中には、おはぐろの唾が八ぶんめほどあつて、まんなかに紅のつばきがふたちよぼあり。わる紙とみす紙のくづ、ふきゑがら五ツ六ツあり〔衣桁〕には小そでかけてほしてあり。所々紅のつきたるさらしの手ぬぐひの、あらひ物くさきやつも干してあり。○程なく髮もゆひしまひ、〔書〕は外へゆき、〔川〕は手水にゆき、あとには〔夕〕ひとり火鉢のまへにしよんぼりと、襟にかほ半ぶん埋めて物案じ姿にて居る。杉ばしを火箸にしたやつ、燃しさりてけぶる。此のとき中の間の

〔夕〕はあたりへ氣をつけ立たんとするところへ、〔若者ノ男〕來り、モシおいらん、晝狐さんがお出でなされましたよ。〔夕〕ホンニか。今だきさまいくから、マア雪野を先へつれていつて下せえ。〔男〕ハイおはやうお出なされまし。ト、いひすて行。〔川〕來る。〔夕〕モシエ。〔川〕かててくはへて馬鹿らしいねえ。〔夕〕どうしんせうねえ。〔川〕わたくしが胸におざんすから、氣づかひせずといつて御出なんし。夜舟さん、著物をだして上げまをしな。〔夕〕はせんかたなく著物きかへる。○上著は白なゝこに紫のふきゑおとしの源氏雲の中に、四季の草花を極彩色の筆しあげ、もん所は藤の丸、むらさきのより絲にて縫ひ、むくは緋どんすの胴に、へりは鳶色のむぢ八丈に、同じ模樣を色絲にてすがぬひ、こび茶どんすに緋縮緬の裏をつけしごきをしめ、ト姿見にむかつてえもんをなほした所は、どんな

○鹽だち　神佛などに祈願をかけてその誓として鹽氣のある食物を食はないこと。
○もみのきれ　紅色に染めた絹の布。
○はんざふ　前出。
○みす紙　上等な鼻紙で遊女などの用ひたもの。
○ふきゑ　吹繪。一種の戯畫、卽ち、種々たる切拔の型を、地紙の上にあて、これに墨汁、又は繪具を含ませたる筆を吹きかけて、色々の形を現はすもの。
○源氏雲　金箔を洲濱形に置いたもの。『嬉遊笑覽』によれは、さうした模樣が『源氏物語』の繪にのみあるさ考へて名付けたのであらうといふ。
○すがぬひ　縒らぬ生絲を縒り合せた、すが絲を以て縫ふをいふ。

こけな判人に見せても、七十五匁とみえるおいらんなり。〔夕〕ゆきのや、となりの浮里さんのところに、居つゞけがあるぢやアねえか。〔甼〕おざりイすヨ。〔夕〕おれがさう云ふとつて、おめえのところの子供をかして、銚子を一ツけえさしておくんなんしと云つて來や。モシエ、おたのん申しンすにえ。〔何〕きづかひなさりイすな。〔夕〕必ずえ。と云ふ所へ、銚子を持つて來る、〔夕〕は茶碗でぐつと一ツのみ、其の勢で本帳へうつしてゐる。○かんばん板と云ふは、女郎の賣つたかずを、かりに拵へておくぬり札のことなり。出る。中の間には、〔亭主喜右衛門〕ゐろりのそばに、かんばん板を〔三分の印は三、一分二朱は一、これなり。〕〔夕〕を見て、おいらんおはやいの。ト聲をかけるゆゑ〔夕〕そばへゆき、旦那さん、ゆうべはお有難うおざりイした。〔喜〕好だときいたから、持たしてやつた。けふは何か店の衆の出番か。〔夕〕イヽエ、洋屋の客衆でおざりイす。〔喜〕フウ。ちよつと後を向いてみせな。ヲヽ、でえぶ髮の風が人がらがよくなつた。サア〳〵客人が待つてゐよう。はやくいきな。〔夕〕いつてまゐりイせう。ト、しんを同道して茶屋へ行く。〔喜〕〔夕〕がうしろ姿を見おくり、夕霧も頃日はひれがでえぶついたノウ。〔女房〕左やうサ。だん〳〵よくなります。

扨臺所のけしきは、料理番のしこみの最中。かまぼこをたゝく音、井戸の車のまはる音、どんぶりのわれた音、米をつく音かしましく、かぶろは大ぜい長ばんだいをとりまいて、晝飯をくひ、火入をもつて來るふりそでしんざうあれば、茶のきふじするひつこみかぶろあり。庭には臺のものの花をもちこみ、かたへには酒樽の口を立るあり。いりざけのにほひ鼻をつらぬき、湯氣はきりのふかきがごとし。內證へあそびにきて居る男、

〔酒好〕三河島の湯へお出でなすつたか。〔喜〕此の間めえりやした。〔酒〕おへえけえはえ。〔喜〕ゆうべ茶屋のてやひをよんで、一妓點をいたしやした。「突出しの白鞘ものをとりたてゝ、と云ふ句をしたが、どうだらうね。〔酒〕ウヽ、句づくりがおもしれえ。こいつアいきやせう。

○判人　遊女身賣の請人。
○七十五匁　太夫格。
○本帳　本當の、正式の帳面。
○ひれ　格。又俗に人の肥えて横幅あること。「傾城島原蛙合戰」享保、近松作、「四十許りの鰭ある男云々」。
○ひつこみかぶろ　禿の上、新造の下に位し、言はゞ禿上りの新造候補といふやうなもの。名もこれ等はお梅お松など普通の名を用ひ、源氏名を呼ばせぬ慣例となつてゐた。
○いりざけ　煮酒。酒に醬油・鰹節・鹽などを加へて煎じ出した汁。膾・刺身などに用ひる。
○おへえけえ　お俳諧。
○一妓點　笠附の一種。
○いきやせう　入選だらう。

ト、はなしの所へ、病氣で親のもとへあづけておくとみえる女郎のおや來る。〔客〕ヲヽござつたか、どうだのう。ちつともいいかの。〔おや〕とかく※どうへんでござりまして。〔客〕ソリヤアこまつたもんだ。早くよくしてえもんだのウ。〔おや〕ハイ。〔客〕マア飯でもくつていかつせえ。折から暖簾の内へ、まじ〳〵の物貰ひ入る。〔天台道心〕南無薩婆咆哆伽多嚩盧枳帝唵三摩囉三摩囉吽。〔客〕あの子や、そこへ進ぜろ。ト一文なげ出す、そのあとへ、〔こつじき〕※四ツ竹、※すまふヲヽとりイヽにイヽてしらアふぢイヽげんウヽだアチヨコチヨ。〔らう人〕※江口※クセ へ※するちやうこうけいに枕をならべしいもせもいつのまにかはへだアつらん。〔客〕アヽうるせえ。ト、又やる所へ、〔やりて〕月花さんのかぶろがござりません。どうぞひとりお貸なすつてくださりまし。〔女房〕このぢう隣からかりた子はどうしたの。〔やり〕※ひつで歸しました。〔女〕こなたの知つた所にやとふかぶろはあるめえかの。〔やり〕きふに心あたりがござりません。〔客〕どうでけふの間には合ふまい。トみせの格子には、〔かぶろ〕貸場やヽイ、人ウ引〳〵。五色の糸とやうじを持つて來さつせえ。ト、いふは、※こうか神へ願をかける女郎のつかひなるべし。扨又二階にはおくの方にて、〔女郎〕澤邊やア〳〵。〔かぶろ〕アイ〳〵。〔女郎〕コレヨ、楓屋へいつての、その二朱と百のたばこ箱を、紙で包んで水引でいはへてもらつてきや。又※大神樂を見てゐめえよ。こいつ三兩ぐらゐの、※とこ花のかへしとみえるなり。〔女郎〕は廊下中をふいてゐるところへ、〔ふりしん〕ゆうべの三味せん番は、だれだノウ。撥が見えねえとつて、こし元衆がこごとをいふよ。ト、いふ所へ、〔夕〕息をきつてかへり、〔川〕が耳へ口をつけ、モシエ、けふは内の首尾がわりいとつて、すぐにけえりイしたよ。ヲヽせつねえ。

○どうへん　同様。
○四ツ竹　四竹節。四ツ竹に合せて歌ふ小唄。長崎の人、一平次が創めたものと傳へらる。
○すまふヲヽとりイヽ云々　相撲取りに白藤源太。
○江口　謠曲の名。
○クセ　謠の中に調子をあげて謠ふ一句。
○するちやうこうけいに云々　謠曲「江口」に「紅花の春の朝、紅錦繍の山、粧ひをなすと見えしも夕の風に誘はれ、紅葉の秋の夕、黄纐纈の林、色を含むといへども朝の霜に衰ふ、松風蘿月に言葉をかはす賓客も去つて來ることなし、翠帳紅閨に枕を並べし妹背も、いつの間にか隔つらん」とある。本文に引用された文句の意味は、みどりの帳、くれなゐの閨に枕を並べていもせを契るといへども、それとてもかりそめのことであつて、いつの間にか互に隔り終るといふこと。
○ひつ　濕「しつ」の訛。疥癬。
○こうか　雪隠場の神。
○大神樂　「大神樂」に伊勢に大々神樂といふ事あれば、それによりて名付たる歟。また代神樂とも書るは代参

[皿]客帳をつけてゐたりしが、そりやアよかつたねえ。[夕]今まで水戸尻の簗にをりイしすよ。[皿]眉をひそめ、モシ、ばんには、かへツて人目がおほくなりんすから、きふに癪のおこつた顔で、本ン間へはいつておやすみなんし。[夕]さうしてもようざんせうかねえ。[皿]わたくしがいいやうに計ひンす。ト、人をうかゞひ、かの戸棚へ隠しおきし色男を出し、とう〳〵品玉をつかひおほせて、屏風の中へ入る。

○そも〳〵この色男といつぱ、ふぢ屋のひとりむすこ[伊左衛門]といふものなり。[夕ぎり]とあひぼれの、それがからじて不首尾となり、かんだうの身とならのはや、このてがしはのうら店に、[夕ぎり]がなさけにてかくまひおきしが、ゆうべ人目をうかゞひて、二階へ上げ、戸だなへかくせしが、折わるく出そびれて、けふ一日しのばせおきたるなり。[伊左衛門]屏風の中へ這入るひやうし、筆のかさをぴつしやりふんで、びつくりせしも脛にきず持つ人心なり。[夕]小聲にて、さぞ退屈しなんしたでおざりイせう。わたくしが自身にしては、目にたちんすから、いひ付てはおきんしたが、ひもじうはおざんせなんだかえ。[伊]イヤ、川たけがをり〳〵氣をつけてくれたから、ひもじくはなかつた。それに小便も氣をきかせて、楾へ蒲團の綿をむしつて入レ、音のせぬやうにしてくれたから、何から何まで困つたことはなかつた。トいふ顔[夕]つくづくみて、ホンニおまへさんを、かういふはかない身にしたも、みんなわたくしが咎でおざんす。堪忍しておくんなんしえ。ト抱きつきたるきり〳〵す、泣くよりほかのことぞなき。[伊]愚癡な事を云ふものだ。あまねく世の中の女郎買、金の澤山ある中は、女郎の眞實はあらはれぬ。かういふ身になつた所を、みついでくれるがまことの心てい。

り、代垢離などの意にやあらむ。『昔々物語』に……近年享保なり大神樂といふは、人柄千萬狂氣に見え、大白衣、大廣袖、木綿布子、巾廣の帯をして、大白鉢巻に大脇差をさし、尤大太鼓、小太鼓、笛を吹ざも唄歌の節に合せて吹、獅子頭は持て是をかぶりて、さま〴〵好色の興に小歌狂言のみにて、獅子を馬にして、悪所通ひの狂言などに移し、若き男女の氣をそゝり立る様にごうけ、下女下男に面白がらするのみ」。『嬉遊笑覧』卷九 図に「青樓年中行事」に繪が載つてゐる。

○とこ花　遊客が床に入つてから女郎にやる祝儀。

○水戸尻　水道尻。新吉原京町二丁目一丁目の境よりその突當り、秋葉常燈明の所までをいふ。前出六三二頁。

○簗　顔のある茶屋。前出「娼妓絹籭」に「魞」とあり。

○本ン間　客を通さぬ自分の座敷。

○品玉　玉を投げたり受けたりして巧に弄ぶ曲藝の一種。たまとりともいふ。こゝで品玉をつかひとは、品玉のやうに曲藝をやつて位の意味であらう。

○いつぱ　いふはの急呼。『俚言集覽』に「言ふはと云ふを、いつはと云ふ」。

○伊左衛門　『夕霧阿波鳴渡』『傾城阿波の鳴門』等にその名出づ。

○ならのはや云々　「奈良山の兒手柏のふたおもて」などいふ古歌をとる。

○筆のかさ　筆のさや。

○楾　小さな盥。

○中あふみ流　由近江流、江戸の流儀。

○こゝろにもあらでうき世に　『後拾遺和歌集』第十五に「例ならずおはしまして位などさらむと覺しめしける頃月のあかかりけるを御覽じて　三條院御製」の前書あり。

○あらざらん此の世の外の　『後拾遺集』第十三に「心地例ならず侍りけるころ人のもとにつかはしける」と前書してある。

○君がため惜しからざりし　『後拾遺集』第十二に「女の許より歸りて遣はしける　少將藤原義孝」とあり。

○まんがち　短氣な、早急なこと。

○右近　『拾遺和歌集』第十四「わすらるゝ」の歌の作者名「右近」の下に「少將季縄女」とある。

ト、この時　 　もはやひるみせ出て、中あふみ流の本調子　○折からこの間、〔うき里〕が次の間には、新造
○中の間の　のすがゝきをひく。　二階は静かになる。　〔江戸まち〕〔なには〕〔みやこ〕哥がるたをとつてゐる。

〔夕〕その心はとゞいても、届きんせんはわたくしが願ひ、人目があるから、人なみに笑ひ顔もしてゐんすが、お前さんの事を思ひ出しんすと、いつそ死たくなりイす。〔えご〕三條院、こゝろにもあらでうき世にながらへば。〔みやこ〕戀しかるべき夜半の月かな。〔なには〕ヲツト、こゝにおざりイした。〔みやこ〕散らさぬやうにおとんなんしえ。〔えご〕和泉式部、あらざらん此の世の外の思ひでに。〔伊〕今一たび勘當のわびもすみ、此二階へも、はれて來て、あはるるやうになりたいものだや。〔夕〕ホンニまいばん逢はれんした時は、たくさんさうに思ひいしたが、此頃は此やうなはかないことさへ、大ていの心づかひぢやおざんせん。〔伊〕さうさのう。〔えご〕うしとみし世ぞ今は戀しき。〔みやこ〕たしかこゝらにおざりイしたよ。〔えご〕そこにある、取つておくんなんし。藤原義孝、君がため惜しからざりし命さへ。〔夕〕思ひなほしてたまさかにお目にかゝりイすを樂みに、ながらへてをりんす。〔伊〕ハテ死んで花實が。〔夕〕咲もしんすめえ。〔伊〕命あつての物だねサ。〔なには〕ながくもがなと思ひけるかな。〔えご〕コレ、※まんがちにしなんすなえ。〔夕〕とは思ひすが、まだ丸で八年と云ふ年なれば。〔みやこ〕いかに久しきものとかは知る。〔夕〕もしそれまでにひよつとマア。〔えご〕※右近、わすらるゝ身をば思はずちかひてし。〔夕〕それを思ふと、しんに悲しくなりんす。〔伊〕ハテ、たとへ此のうへどのやうに。〔なには〕身をつくしても逢はんとぞ思ふ。〔夕〕そりやほんでおざんすかえ。〔伊〕これさ、

〇たかしのはまのあだなみは　「古今集」第八にあり、一宮紀伊の作「音にきく高師の浦の仇波は」云々。

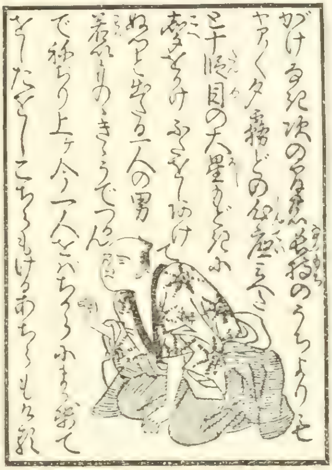
〇しだら　ありさま。ていたらく。始末。

〇たぶさ　もとゞりに同じ。男髷の頂に束ねてある所。

〇十段目の大星もどきに　「假名手本忠臣藏」第十「我子をもぎ取り、子に絆されぬ性根を見よと、締殺すべき其きつさう、ヤレ聊爾せまい義平殿、暫し〳〵と長持より、大星由良ノ助義金、立出る體見て恟り、捕手の人々一時に、十手・捕繩打棄てゝはるか、下つて座をしむる。威儀を正して由良ノ助義平に對ひ手を支へ、扨々驚き入つたる御心底、泥中の蓮、砂の中の金とは貴公の御事」（傑作淨瑠璃集、下第三二二頁）。

聲が。[えご] ※たかしのはまのあだなみは。[みやこ] かけじや袖のぬれもこそすれ。」かかるところへやり手のおよく、「やうすは殘らず見とゞけた。」と、聲かけて屏風引きあけ、「一頭目うちあやしいと思うたが、今朝程ちらと見つけておいて、戸棚のうちとぼけた顏で氣をつけたが、あんにたがはず此の※しだら、わたしが顏をふみつけて、なんで役儀がたつものぞ、此の通り内證へゆき、旦那さんに申しンす。これ若衆や、此の男めを引ずり出したがよいはいの。」とわめくを聞つけ、若い者、われも〳〵とかけ來たり、にぎりこぶしの雨霰、むざんや伊左衛門があたまの上にふりかゝる。夕霧なみだもろともに、中をへだてて身をしまず、伊左衛門が身をかこひ、「こりやむごらしいどうぞいの。皆の衆待たしやんせ、伊左衛門さんにとがはない。この人さんをぶつならば、まづわたしから先へぶちころしてしまはんせ。聞きいれなくば是かう。」と、そばにありあふ鏡臺の、かみそり箱に手をかくる。やりてはあわてておしとゞめ、「是夕霧さん、大事の代物、おまへにけがさせてなるものか。」と、もぎとる其間に大勢寄り、伊左衛門が※たぶさつかんで引出す。かかる折から思ひがけなき、次の間の長持の内よりも、「ヤア〳〵夕霧どの心底見えた。」と、※十段目の大星もどきに聲をかけ、ふたおしあけて、ぬつと出たる一人の男、若いものの利腕つかんでねぢり上ゲ、今一人をば力にまかせておし倒し、こちらも蹴る、あちらもける。ける〳〵と蹴散らかしてぞ立たるは、心地よくこそ見えにける。やりてはそれと見るより

も、「ヤアお前さんは、浮里さんのお客人。いつの間にどうしてマア其中に。」と云ふにもかまはず、此の男伊左衛門が前に手をつかへ、「いまだ顔をばお見知りなきゆゑ、御不審



に思召しませうが、わたくし事は京都の出店に居り、番頭を仕る算右衛門と申すものでござります。此度用事あつて此地へ出、大旦那にお目にかゝり、うけたまはれば、あなたさまは御かんだうとの事、これはしたりお若い事なれば、一ツたんの御あやまちは仕方なし。御心底もなほしならば、御勘當のおわびも申し、二ツには是なる夕霧殿に、左程まで御執心なさるゝも、是赤縄※のむすびしならん。心さへたゞしければ、遊女とても苦しかるまじ、夕ぎりどのの心底、虚か實をとつくりと、正した上にて根引※をし、目出度祝言させ申さンと、扨こそあとの月より、鄰ざしきの浮里が客となり、律義といふかへ名を呼ゝ入りこみしが、猶も實否をたゞさんと、今日わざと居續けをし、先ほど茶屋

○赤繩　夫婦の縁を結ぶ赤き繩。
○根引　藝妓・娼妓などを身請けすること。

○一ぱいまし　「縞の財布に五十両」、忠臣蔵五段目の十倍であらう。

に申シふくめ、かへりしていにもてなして、人なき折をさいはひに、是なる長持に身をしのび、屏風のうちのむつまじごとを聞きとゞけ、夕ぎりどののまことの心を見ぬいたうへは、今日中に亭主吉田屋喜左衛門に逢ひ、身請の埒を明け申さん。其の手附金は則ちこゝに。」と、懐中よりさいふとり出し、伊左衛門が手に渡す。受取て中をみれば、縞の財布の※一ぱいまし、是れは錦のさいふだけ、耳をそろへし五百両、金にそへたる一ツ通あり。いぶかしと開き見れば、何々、其方儀、心ていなほり候よしきこえ候間、今日より勘當ゆるし候ものなり、と書しはたしかに親の手跡。「アヽかたじけなし、ありがたし。」と、伊左衛門夕ぎりも、もろともに、手を合はせてふしをがむ。

折からちやうど中の間の

前路日将レ斜。

是れより錦の表とへんず。夜の景色のはなやかは、今まで多くあり來りの小冊で御らうじろ。

後叙

夫熟大門視ば、實に鬼貫が句の如く、骸骨のうへを粧うて、花の郭の喜怒哀樂、迷へば眼中西施を出し、悟ば鼻中臭氣をいだす。迷ふも悟るも、有漏路より、無漏路へ迯る、茶屋が提燈、人間わづかナソレ五十間道、一切の衆生身の用心、さつしやいませう。

時寛政三年辛亥春正月

京傳自跋

○夫熟大門視ば　それつら〳〵おもんみればの洒落。
○鬼貫　上島鬼貫、伊丹風の俳人。
○骸骨　「骸骨の上を粧ふ花見かな」。
○有漏路　娑婆。
○無漏路　涅槃。
○五十間道　吉原の入口。「人間僅か五十年」をもぢる。
○身の用心　火の用心の洒落。「火の用心さつしやいませう」と、火の番がふれ歩いたものである。

辰巳婦言

式亭三馬作

序

※二上りのいたこに曰く、手鍋さげうと口にはいへど、實は乘たや※玉の輿とは、貴酌女の言ならんや。其の手鍋提るが、※ふせ玉の輿にも勝る心意氣を、すつぱりかいたる作意の妙。河奈川の※豐倉を見通す。※什麽生、達磨も※古石に三年。※子曰、君子も中島町の小徑によらん。嗚呼三河樓の料理番が廿口も、大津樓の水の鹹も、味ふる者、此本に口をかけよと、序の※一丁點す事爾り。

關東米誌

※鷺の印

○いたこ　潮來節。下總國潮來から流行し始めたもの。
○玉の輿　富貴な身分、玉の輿に乘るは氏なくして富貴な家に嫁すを云ふ。
○ふせ玉　前出。（六〇五頁參照）
○豐倉　古石場の妓樓の名。
○什麽生　支那宋代の俗語である。いかに。何事ぞ。さあ、どうぢや。
○古石　古石場。深川七場所の一。こゝは禪宗達磨の意味も含ませて、面壁九年といふ達磨と、古石場に三年身を沈ませるといふことをかけて持つて來たもの。
○子曰く、君子云々　『論語』雍也篇「子游爲武城宰、子曰女得人焉爾乎、曰有澹臺滅明者、行不由徑、非公事未嘗至於偃之室也」とあるによる。
○點す　校す。裏表二頁を一丁といふ、それと蠟燭などの一丁とを兩股にかけてゐる。
○鷺の印　鷺は矢張り當時の深川妓樓の名である。

自序

色好ざらんはといへる、日本の放蕩家、傾國とそゝなかす、漢土の狂費家。貴妃が淫婦、無鹽女が醜女、薄情愚意心實も、悉皆皮一枚の戯ならずや。蓋義理一遍の通情は、結句心のもめる種。割て見せたき女郎の腸。呑込姿の江戸ッ子の根性骨を、醉道の眞水に晒して、一寸南鐐一篇の書を著はし、金の鯱簡版打たる、諸君子の覽に呈す。元來戯謔の書と雖、聊か悟道の捷徑ならん。ハテ足下人間一生魯生が夢、樂しみ僅か二十年。ナソレおちかい内と云爾。

于時戊午春初仕舞翌日
於三河樓見通

式亭三馬採筆　印

○色好ざらんは　兼好法師の著「徒然草」第三段「よろづにいみじくとも、色このまざらん男は、いとさうぐ＼しく、玉の巵（さかづき）の當（そこ）なき心地ぞすべき」。

○傾國とそゝなかす云々　白居易「長恨歌」に「漢皇重色思傾國」。傾國は楊貴妃を指すのである。

○狂費家　わざと、「酒落」支那音らしく讀んだのであらう。

○無鹽女　醜女をいふ。前出。（六四頁參照）

○皮一枚の戯　皮一枚は皮一重とも云ひ、美醜は皮一重の上の形だけの事で、一皮剝けば美醜も擇ぶ所なしといふこと。

○醉道　勿論、水道とかけてある。

○南鐐一篇　南鐐は一兩の八分の一に當るもの、卽ち二朱銀。こゝは一片に一篇をかけた。この書の價二朱であつたのであらう。

○金の鯱簡版打たる　金の鯱のある江戸城近く生れて、江戸ッ子の看板をかざした諸君子。但し金の鯱は實在せず。

○魯生が夢　魯生正しくは盧生。人の一生の榮枯盛衰も、夢の如く短かくしてはかなしといふ意の語。邯鄲夢枕、又黄粱一炊の夢とも云ふ。

○おちかい内　後朝に客を送り出す時、遊女や妓樓のもの達が云ふ言葉。

○初仕舞　揚代金を揃つて女郎を一日中買切にすることを仕舞ふといふ。依つて新年始めての買切をいふ。

○見通　見通座敷のこと。

凡例述意

○先に雷名の諸先生、東妓南品、北廓西娼の遊里小説を著述し、滑稽妙文普く海内に震ふ。其穴を穿つ事高くは高慢の鼻、虚空无天に至り、低くは麹町の井戸を淺しとして、混底那落閻羅王の天窗に屆く。於レ之短才の小子等、書せんとする筆頭に文およばず。依て今諸君子の非言を不レ顧、名家の糟粕を嘗て、予が分に應じたる新市場の世界を著す。文くだ〳〵しく符合せざるは、覽者の增校言を希ふ而已。

○此書の趣、女郎一人に三客の意味を穿ち、嘘と實の迷悟を示す。然と雖、東曲通の覽に呈すとにはあらず。

○廓通の目より見ば外國夷狄の如くなれば、言語も〔おす／ざんす〕に變て〔はんな／せえし〕と耳立ば其の鄙俚を改めず。舟宿衆、我等の類ひ、其儘に出して、片言の誤りを正さず、唯有容になして三太郎權七に與ふる而已。

已上　㖿囉哩樓主人戲著

○東妓南品、北廓西娼　東妓は深川、南品は品川、北廓は吉原、西娼は新宿。

○虚空无天　虚空は大空をいふ。无天は非雲天の積りであらうか。无雲天は虚空と同様最も高い空をいふ。

○麹町の井戸　麹町は高臺なるを以て井戸はみな深かつたが、それをも尙淺いとしたといふ洒落である。

○混底那落　混底は根柢か。那落は梵語で、地獄に譯す。閻羅王を「えんす」と訓んだのは「えんさん」くらゐの心持である。

○新市場　深川新石場をもぢつたもの。但しこゝは古石場の誤であらう。

○增校言　增補校訂の謂か。

○東曲通　江戸節、これに通じてゐるのは所謂通人であつたわけであらう。

○三太郎、權七　三太郎は丁稚の別稱、權七は奴などの通稱。

○㖿囉哩樓　謠曲『翁』に「とうとうたらりたらりら」とあり、笛の譜をいへるものといふ。それをもぢつたものか。式亭三馬の別號。

○戀別の後朝　[illegible]同意の重言である。
○鳥が啼吾妻　[illegible]六に「萬葉集」卷三[illegible]、こは、鷄は夜の明時に鳴く故に、明「あかつき」と言ひかけたる也」。
○辰巳の里に舟はあれど云々　『萬葉集』卷十一に「山科の木幡の山を馬はあれど、歩ゆ[illegible]」。また、『萬葉集』卷[illegible]、「[illegible]の里に[illegible]君を思へば」。
○ぶら提灯　弓張提灯に對して、提灯が柄に下りて、ぶら〳〵するもの。
○お座鋪子供衆　遊女のこと。遊女を妓樓でこどもと云つた。
○戸橋赤町　土橋、仲町。
○裾櫓　[illegible]、表櫓、裏櫓。
○古石新石　古石場、新石場。
○平代橋　永代橋。
○長々し夜を　足曳の山鳥の尾のしだり尾のなが〳〵し夜をひとりかもねむ（拾遺集、卷十三、人麿）。
○一ト切遊び　一切線香をきめて情けの切賣をした。一切遊びには[illegible]間のみ出すなどいふ種のものもあつた。
○純通　眞通かに大通に對し、生半可通を揶揄して云つたものか。

發語

戀別の後朝、ハイお迎ひに別の鐘、間夫と女郎に惡まるゝ、鳥が啼吾妻なる、辰巳の里に舟はあれど、君をおもへば歩行よりぞ、行くも歸りも心から、俤の目先にちらつく、ぶら提灯の火と共に、おさき眞闇行當りばつたりと、お座鋪子供衆の斷に、一身のねぐらに迷ふも、おのがさま〴〵氣風にやありなん。爰に一場の唱家あり。所謂戸橋赤町裾櫓、おの〳〵列國を分つが中にも、古石新石の繁昌、此の里惣別客品有り。平代橋と共に長々し夜を、一ト切遊びのいと短きに、遊子純通、サッサ押せ〳〵の猪牙舟に乘じて、闇雲たる有頂天へ昇り詰、終には違ねえの眞中を取り外し、トッチリとんと身を落せば、食客の權八さんとなる事、是則水道の醉は、身を喰ふ喩の如く、夕に千金の角座鋪、朝に◆男山の重ね著するも、通と不

朝に◆男山の重著さするも通と不通の訳合なり。亀角世界は井内近江が積細工のごとし。宛然郡素る遊人は中通は下れ人物なく。機留青梅の店藤八屋鋪通ひの初川楽なり。年に二ツの出替[illegible]は。節二星の契りにや比べん。彼放蕩者是を古今豪の西施ともてチヨン〳〵幕の楽をとつくハおのし未至通の負君子。

○猪牙舟　細長い形の軽快な舟。四人一具。
○有頂天　佛語で、九天の中の最も高いところをいふ。
○トツチリとんと　三味線を彈き出すときの音。とんと身を落すに掛けた。
○水道の醉は、身を喰ふ　「粹は身を喰ふ」といふ諺にひつかけた。
○角座鋪　角屋敷にて、地價の高い所。
○◆◆(けんびし)　劍菱、銘酒の名。攝津伊丹に産す。最上酒。
○男山　もと攝津國の池田にて釀造した銘酒。
○竹田近江　人形づかひ師。寛文二年道頓堀に竹田芝居を建て、もつぱら機巧を興行した。近江の後竹田は二家に分れたが、共に寶暦の頃までを全盛を續けた。
○積細工　工夫を凝らした細工。
○棧留青梅　唐棧木綿を着る連中。
○屋舗通ひの初馴染　商家の店員が屋敷に出入りするやうになると、外出が比較的自由になる。そこで初馴染なども出來るわけ。
○年に二ツの出番　盆と正月の宿入りを言ふ。

通の譯合ならず、兎角世界は竹田近江が積細工のごとし。爰に群れ來る遊人は、中通以下の人物にて、棧留青梅の店者は、屋舗通ひの初馴染より、年に二ツの出番を誓ふは、聊か二星の契りにや比すべき。彼の放蕩家の呉王、姑蘇臺に西施をして、チヨン〳〵幕の樂も、かくやあらじと未至通の貧君子、價安きをもて喜見城の思ひをなし、適〳〵兩三個の妓藝を揚れば、晉の謝安が東山に新狂言も是れにはしかじと、脂下りに高ぶり、自ら錢湯の湯氣に上ツて、黄色な潮來に湯番を恐れさせるの徒、潮來を以て、克くビハヨウトウを度し。新手を以てよくスソツパリを殺す。此の世界の風土といへるは、長鬢羽織の細身指、黒縮首のぱつち尻はしよりといへる、きん〳〵姿の青樓風を廢し、或は晒の手拭を肩にかけ、花色繻子の帶、貝の口に結び、或は前垂腰にまとふ、丸額

○二星の契り　年に一度、七月七日の夜のみ牽牛、織女の二星が交會するといふ傳説があるので、こゝへ引いた。
○呉王　夫差。
○姑蘇臺　呉王夫差の樓臺。
○西施　春秋時代、越國の美人。越王勾踐が呉の爲、會稽に破れて復讐を計るや、勾踐の臣范蠡は西施を呉王夫差に獻じてその甘心を求めたと傳へられる。
○チヨン〳〵幕の樂　歌舞伎にてチヨン〳〵の木で幕になる、その幕の閉つた後の、内部に於ける樂しみを言ふ意か。
○貧君子　「ひつてん」は「ひでり」（旱）にて錢の無い意。文なしの客。
○喜見城　佛教に忉利天の主、帝釋天の居城で四つの門があり、一つの門毎に前に大きな園があつて、天人遊戲の處とする。善見城ともいふ。
○晉の謝安　晉の宰相。曾て妓を携へて東山に遊ぶの風流をなす。

○脂下り　得意の體。
○黄色な　黄色な聲。
○ビハヨウトウ　枇杷葉湯。枇杷の葉を乾して煎じて飲むもの。暑氣拂ひの妙藥で、本家は京都の烏丸であつたが、江戸にては多くの藥店で暑中店先に釜を据ゑて煎じ、通行人に自由に飲ませ、又行商もしたものである。
○スソツパリ　自序に淫婦の字を當つ。下等の娼妓をもいふ。
○長鬢羽織　頭の刷毛先を長く、羽織も長くする。細身の大小と共に通人の好みである。
○黒縮首　黒縮緬の首卷きをする。
○ぱつち　絹にて仕立てた股引。朝鮮語。
○貝の口　角帶の結び方の名。

の大銀杏。客人か、將船頭か。船頭とも見え、また客ともみえ、大きに賓主の禮を亂して、二上りの騷唄。夕しごげんの程もなう、又ぞや內の御首尾の程と、文のさき目の口紅粉は、萬客嘗となめられて、行客の詠めは絕えずして、しかも元の客にあらず。流に浮ぶ川竹の、且切れ、且睦びてと長明が、方丈の文にはあらねど、實にや賑ふ繁花の地。爰も名におふ鎌倉の、大磯小磯化粧阪、わけて名高き手越の宿、戀の船著、情の湊。新地の端に漕寄る、一艘の棚なし小船、新市場の橋の下、洲へ當らじとする處へ、遙か古市場の方より來る、贈り舟の潮來洒落、互に摺合ふ舟と船、客と客とが見合す顏。胸にぎつくり、ばつたり落すぶら燈灯、「今のは慥かに。」ト胸と胸。「ムそれよ。チヨン〳〵〳〵。折から時も［四ツ明の拍子木］船は別てチリチツツテテレ　チン、チツトン。跡白波に音而已聞ゆる。

○大銀杏　武家の髮風の一で、髮を太く束ねてごつしりと頭の上にのせ、尻を後頭より外へ出し、中央高く兩端が低い。下に元結をかけ、上へも元結をかけたもので、小鬢が縱に剃る。

○騷唄　小唄の一種。聲高に陽氣に歌つたもの。略してさわぎともいふ。

○夕しごげん　夕し御見。晩に逢ふこと。

○文のさき目の口紅粉は、萬客嘗　『圓機活法』に「二八佳人巧樣粧、洞房夜夜換新郎、一雙玉手千人枕、半點朱脣萬客嘗、云々」とある。文などを切るに脣を以てするからである。

○行客の詠めは云々　『方丈記』の文をもぢる。その發端に「ゆく川のながれは絕えずしてしかももとの水にあらず。よどみにうかぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて　久しくとゞまることなし云々」。

○長明　鴨長明。『方丈記』の作者。

○大磯、小磯・化粧阪　何れも昔の遊里として有名なので、持つて來たまでのこと。

○手越の宿　深川を假託す。手越は鎌倉の遊里。

○新地　深川の岡場所の一。大新地と小新地とがある。

○棚なし小船　船棚のない小舟。船棚とは、兩舷に渡した板で、此處で棹を操つたり、櫓を漕いだりする。

○新市場　新石場。古市場も同じく古石場を指す。

○贈り舟　送り舟であらう。

○胸にぎつくり　此の處、歌舞伎風の言ひ廻しを用ひた。

○跡白波　上の船の緣としていつたもの。白［しら］を知らぬに言ひ寄せて、後知れずになりにけりといふ意味。謠曲「船辨慶」に「なほ怨靈に慕ひ來るを、追ツはらひ祈りのけ、又引く汐に搖られ流れて、跡白波とぞなりにける」。

四ツ明の部

品　目

〽手ごはくかゝれる段

〽うまくかゝれる段

〽しんにもてる段

附リ、あくてん遊び三人一座の段

〽女郎ひとりに客三人手くだの智慧競

○棧橋の笄　川に突き出たる棧橋にかゝつて向ふ岸の船宿を呼ぶ語である。
○船頭の魂云々　船頭の魂とは、櫓か櫂の事。それを妓樓の廊下に掛けてあつたのであらう。
○柿鮓　魚肉を薄片として、飯の上に覆ひ製するもの。寝てゐる様を云ふ。
○熟柿臭き　酒氣の匂ひをいふ。
○莨盆　食物を盛る器。もとはかはらけの下にわげものの臺をつけたものであつたが、後世のは木で臺を作付けに造り、黒塗の漆器などにした。
○風鈴蕎麦　夜そば賣の一種。街を行燈にて、風鈴をならしながら呼んで賣り歩くもの。『狂詩諺解』に風鈴そは、夜たかそばに似て非なるものなり。大平にもり上おきあり、といへり」。（『嬉遊笑覧』巻十）
○廻部屋　本部屋でなく、客に接する部屋。
○お針　裁縫女。
○麻苧桶　古くは麻笥「をけ」。糸にした麻を入れておく器。
○米相場の迷ひ子　米の相場も知らずに遊びに夢中になつてゐるものの意であらうか。
○稲村ケ崎新川　霊巌島新川　五九九頁に「酒問屋多し。」

半夜鐘　ボヲン／＼。夜番拍子木　カチリ／＼につれて、バタ／＼トン／＼たる料理番の俎板も、良音なくして、※棧橋の聲何屋々々アイ、ゝ引の返詞。階子ばた／＼も盡て、※船頭の魂廊下に納て、勤番部屋の刀掛の如く、お客だよヲの美音、忽ちに鼾眠とかはつて※柿鮓の如し。傍に※熟柿臭き船頭の酣酔あれば、恰も※莨盆硯蓋に等しく、臺所に算を亂し、鼠天井に踊つて料理場を馬場と競ひ、遠く望めば波風見通に寒く、高調子の乙唱歌も※風鈴蕎麦の音に淋敷、寝言の掛合を視合て、舟宿の兄さん色事の※廻部屋へ這ひ込、不寝番の※お針※麻苧桶を片寄せ、醴を温て呑む時分、遥に※米相場の迷ひ子、火の用心さつしやいませうの鐵棒に響て、爰に聞ゆるはへたしか

鎌倉古市場二川屋の二階と見えて、客と娼妓の差向ひ、寂寞とした手管の意説

客人藤兵衛　※稲村ケ崎新川あたりの酒問屋の伴頭と見えて、年は三十五六。少し※さびのあるでつぷりとした人物。衣裳付ケ藍御納戸の羽織をたゝんで、まくら元へ置き、同じ仕立の上著をぬいで夜著の上へはふりあげ、中著もつむぎの※鼠返しに※うきす小もんまがひ、八丈の※がく小袖の下著、二ツながら黒のはんえり、※らせんしぼりのちりめん半袖、襦袢に※おなんど七子の帯ぐる／＼と前で結び、※越川仕入れたかおりのたばこ入れ、尤も中へは丸角仕出しの※縮緬紙引を入れ、こしらへは惣白鐵さび※そぎつぎの銀ぎせるで、※うす舞をくゆらせ、ぐつと上ゲあぐらで居る。

女郎おとま　爰の内の板元なり。但し※子供やによりて、板がしらといふ家も有り、青樓ならおしよくといふもの、併し是れはいはずと御ぞんじならんが念の爲已上。中どしま、せいすらりとして少々り

きみのある姿、あゐうへだの三すぢ立のこり〳〵するやつ。下著はしまちりめんのせいらつ、襦袢はひぢりめんに、白ねりのはんえり、尤もえりはゞひろく鼠の二重どんすの帯をしめて、あんどうのそばにすわり、片手ついて片手はまへがみのぶらさがるを、ばらしかんざしでさしこんでゐる。

〔藤兵衛〕コウわけをいひな、なにもふさぎのすぢやァねえ。なんのこつた、庖丁を引ッたくられたちんこ切りか、すみ繪の虎ぢやァあんめえし、口上書を出して藏前へすわつてゐやな。ア丶おもしろくもねえ。〔おとま〕おめえも又あんまりでごぜえす。かぼちや畑へ凧をおつことした様に、おつにからんだ事をいひなえゝす。サウ又穴の穴までほつて聞たくば、わけを話してきかせやせう。〔藤〕しれた事よ。穴を掘るのほられねエのと、水場の施主か擂拔井戸の地主が、聞てあきれらア、ふさぐ〳〵しい。〔と〕何がふさぐ〳〵しいか、譯も聞ねエで腹を立なはるが、ねッから氣がしれねえ。〔藤〕よしてくれ。くそ落付におやなしかけるな、面白くもねえ。かういつちやアごてえそうな噺だが。 ト、少し聲高に成てしやべりだそうとする處へ、廻し方の女、南部縞の綿入に

○さびのある　意氣な。小粋な。
○鼠返し　鼠返しは土藏の入口に仕掛ける、板に作つた桟（しかけ）で、鼠の入るを防ぐ。その繪が書いてあるのであらうか。
○うきす小もん　模様に「浮巣崩（うきすくづし）」と稱するのがある。それを小さくちりばめたものか。
○がく小袖　額銀（天保一分銀をいふ）をがくといふから、額銀を模様とした小袖ではあるまいか。
○らせんしぼり　前出。（五五五頁）
○おなんど七子の帯　納戸色鼠色をおびた藍青色の、斜子「ななこ」の帯。斜子は絹織物の一で、生絲と練絲とがあり、今埼玉縣入間郡を主産地とする。
○越川・丸角　袋物屋の名。
○縮緬蠟引　縮緬に蠟を塗つて光澤を出したもの。
○そぎつぎ　羅字を斜にそいで繼ぎ合せたもの。
○うす舞　當時上等な煙草の一つ。
○子供や　妓女の置屋。
○三すぢ立　經の糸を三本にして綫つたものか。
○せいらつ　せいらつ縞の略。『俚言集覽』に「今、江戸、横縱のしまをせいらつしまなりといふ」。
○ばらしかんざし　帽子簪。
○ちんこ切り　賃粉切。賃錢にて烟草を刻むを業とするもの。「庖丁を引ったくられたちんこ切り」とは商賣道具の庖丁をとられてぼんやりしてゐる貌を形容したのである。
○すみ繪の虎　能がない。
○口上書を出して藏前へすわる　店の商品を入れた藏の所に「お得意様」といつた様な口上書を刷り出して、その前へ坐つてすましこんでゐる、といふのであらう。
○水場　墓場の沮洳地。
○ふさぐ〳〵しい　あつかましい、鐵面皮なこと。
○あやなす　程好くあしらふ。巧みにあつかふ。
○廻し方の女　遊女の監督をし、その座敷の世話をするもの。鴇母と同じ。（既出一一七頁）
○南部縞　縞の絹織物の一。もと甲斐國、睦澤村南部より織り出されたものであつたが、後に甲斐の南部氏、陸中南部（今の盛岡）に轉じてから、其地から産出するやうになつた。

黑と鼠のくぢら帶をしめ、前だれは淺黄色にすそへ貝盡しをちらし、つまさきへとまといふ字を白ぬきに染出したるは、此の男の揃ひと見えて、少し酒じみのかゝりしむらさき縮緬ひらぐけのひも、右の方へだらりと結びさげ、あたまは天神結びのすこびんちよびと白のかんざし、さはつたら落さうにさし、銀むねのつげの櫛横つちようへひねり、鄰座鋪のてうし盃をさげて、廊下をとび〳〵に來り、〔お八重〕エヽ、ぞんぜえな、廊下を酒だらけにした。誰だかおそれるせ。ヲヤおとまさんエ、藤さんのお聲が致しますね。〔藤〕コウお八重坊〳〵、一寸來さつし。〔ミ〕お八重どんか、ちつと咄て行きねえ。〔や〕何で有りますネ、ちつと面白い事でもお聞せなはいまし。ト、障子を明けてはいる。〔藤〕ぬしやアさつきどけえいつた。〔ミ〕雪の下の箱崎で見かけたつけ。〔や〕ハイ今日は汐留から西川岸の方へ掛取に參りました。〔藤〕よくあるくせ。しかし爰の内のばアさんと藝者の目ツかち樽治が、此の土地ぢやア古いもんだ。〔や〕烏のなかぬ日はあれどかね。藤さん此間はいつそお遠々しうごせえますネ。定めて何方にか。〔ミ〕大有りとみえるわな。それにこつちの仕打がわるいから、どうでお氣にやアいらねえはずさ。ト、引ツからんであてる。藤はむつとすれどもそらさず。〔藤〕コウ一つ呑ねエか、爰に硯蓋がある。サア〳〵のまつし〳〵。〔や〕イエモウ有がたうごせえますが、こよひはいつそ過ましたから。〔藤〕ハテすぎてもいゝわな。モウねるぢやアねエか。ト、一ぱい呑でさす。〔ミ〕てうしをとる。ト、一つうけ、半分のんで下へ置く。その内に藤兵衞鼻紙袋より、一角とり出して紙にひねり、サアといつて出す。〔や〕ハイ是は。ト、いたゞいて懷の紙ちよいとはさむ。是は此の女が藤兵衞へのむしんなれども、流石ぢかづけにはいはれぬことゆゑ、おとまにいひかけたるとみえたり。〔や〕モウ〳〵此間は、とんと御酒がよわりました。ナンニうそぢやアごせえません。モウ是で御免なはいまし。ト、かほをしかめて盃をしたみ、もとのところへなほす。〔ミ〕マアいゝわな、モツト咄て行きねエ。

○くぢら帶　女帶の片側は黑天鵞絨、片側は白繻子を縫ひ合はせたもの、一名晝夜帶

○天神結びのすこびん　天神髷は十五歳から二十歳くらゐ迄の一般の人も結つたものであつた。（五九八頁挿繪參照）すこびんは鬢を一寸はり出すこと。

○箱崎　箱崎町

○汐富　汐留。

○西川岸　日本橋の南側西方の河岸。

○烏のなかぬ日はあれど　烏は毎朝啼くが、其烏が啼かない日はあつても君の來ない日はない。

○一角　額銀一つ。

○したみ　盃の酒を一滴殘さず飲み下す。

○大智屋の傳　大智屋のときと同じ行きかた。

○あぢに廻す　へんに氣をまはす。

○しがねえ野郎　けちな野郎、くだらぬ奴だ位の意。

○貫引　他の客の買つてゐる女郎を自分の方へ讓り受けること。

○おちやつぴい　主として小娘などの出すぎておしやべりするものを嘲りて云ふ。

○富澤町の朝市　日本橋富澤町に古着類の大市（朝市と稱す）があり、魚市（日本橋）菜市（多町）と共に有名であつた。
○天道干　大道にて商品を並べて商ふ店。ほしみせともいふ。大道店、露店である。
○嵐　俳優二世嵐雛助をいへるか。彼は珉子と號し、石川五右衞門、石田局などを得意とした。寛政十三年歿。
○立　立役。
○平つたくあらはせろ　すつかり表してしまへ。
○やりてが目たく玉と……緒〆に付ケ　この文句は目を配り、口やかましくして、化の皮を引つ剝ぐことを平常の心掛けとして、といふ意味。
○目たく玉　ぎよろ〳〵とした眼。
○視眼嗅鼻　閻魔の像の傍にすゑた善惡二者の人頭で、亡者の生前の善惡を見分けるといはれるもの。それで、人のことを注意深く視察してゐることに使はれる。
○附木板のへぎ殘り　檜、杉等を薄片にそいで、その先に硫黃を塗り、燃火、炭火から火を移して他の焚物などを燃やすを附木板といふ。その削いだ後のへぎ殘りの分といふ意である。

〔や〕イエモウみんな臥せりました。藤さん是は。おとまさんよろしう。ト、いつてたつ。〔藤〕そんなら休な。コウあしたはいつもの通り早いぜえ。〔や〕ハイ〳〵いづれ承知のまくでございます。ハイごきげんよう。ト、ららかをばた〳〵。あとにはふたりなにかつまらぬかたちにて居たりしが、〔藤〕コレさつき富貴岡の廻しが來て、手めえを階子の下へ呼出して、何か隱密に咄しやつて行たのは、なんでもいつかの※大智屋の傳に違ねえ。〔や〕おめえが※あぢに廻すだけわかいわな。何もかまつたこつちやアごぜえせん。〔藤〕ムンニヤ其譯はとつくに御存だ。ありやアおほかた鳥居町から乘つて來る喜之とかいふ野郎が來て、お定りをやらかすのだ。あいつも又※しがねえ野郎だ。ナゼ男らしく※貰引にわたられねエ。外の茶やから名ざしてくれば、といふ潮來文句もいめえましい。忝くも藤さんのおよびなすつたあまつちよを、盜とかゝられちやア面白くねえ。なんぼ手めえも枕だこの入たもんで如在ねえつらアしても、サウうまくは化されめえ。そりやねエ※おちやつぴいだ。※富澤町の朝市から、ぼろ壹〆五百に買つて※天道干へぶらさげる樣な、古革羽織でも、かう又おれが天眼鏡で、待エゝと一番怪られては、何がなんとといふ場もなく、成程かう〳〵いふ理窟の狂言でごぜえすと、※嵐が※立をする樣に、※平つたくあらはせろ。御勿體ねエこつたが、おいらア※やりてが※目たく玉と姑ばゝアの胸ツ屎を根付にして、※視眼嗅鼻を緒〆に付ケ、化の皮を引つぱいで、提げ煙草入にこせえて、浮世をぐつと薄色に呑込んでゐるしやうがには、なにはどうだ角はかうだ、※附木板のへぎ殘りはちや、ちんころの舞臺に

なる。拂扇筥が菖蒲刀に化るの、料理場の鮑ッ貝は、屋臺店の出來合卓朴。しかも料理番のほまちになると、こいらアちよつくり、むくおきのうがちだ。ナント世界はあかるいもんだらう。サアどうだ返詞をしやな。只うつむいて何にもいはずのお半きどりもモウるせエ。そんなしうちは切落へ落るとも、棧敷連のジャ〱はこねえ、よしてくれ。そつくりと犬のくそのねえ處へ置にしろ。たとへ左交と五瓶が近松以來の新手をかいて、千手觀音が化身して働かうが、びく〱ともくふ男ぢやアねえぞ。何のこつた、あきれが宙返りをして、葺屋町川岸へ輕わざを出さア、ばか〱しい。

ト、まき舌をまじへて、りき身をならべた處が、すこししやべりあきたと見えて暫くとぎれてなんのこつたアヽ、つがもねえ、面白くもねえ、などとたばこを呑ながら、小音であくたいのねじめをして居る。おとまは先刻よりちよびり〱とあつくなる樣な水を向ケ、段々と圖にのらせる工めんにて、何ともいはずあんどうのぶゆをかんざしでおつかけたり、べん〱ぐさのかげぼふしを勘定したり、むだ書のいたこ節をなどりちらして居たりしが、さてこそこんたんの時刻到來と、そろ〱ころし文句を考へ、芝居の魂すゞ紙で張つた月といふもんで、上げたり下げたり、井戸がへのつるべときめかける。

囯成程おめえのいひなはることを聞きやしちやア、一々御尤もさ。けれど又わたいがいふわけをちつとは聞き分けてくんなせえし。そりやアおめえあんまりお情ねエといふもんでごぜえす。わけも聞かずに腹を立なはるから。圖おきやアがれ。いたこをぢかに燒なほすな。わけもへちまもモウきかねエ。囯ハテそんなに叱らずに聞なせえし、なんぼしがねえわたいらが樣なもんだつて相應に蟲といふ物は持て居やす。ヨシカエ、今おめえのいひなはる、喜之さんといふ客人は、めど橋の大こくやの源さ

○拂扇筥　扇筥は杉、桐等にて製し、扇子を入れて贈物とするに用ひる。年始の際などには、それが多數に贈るので、此の空筥を買摺ふのである。此處はその空筥が菖蒲刀と形を變へて再び世に出されるといふのであらう。菖蒲刀は五月の端午に男子が腰に帶びて遊ぶ木刀。
○卓朴　蕎麥切に初茸、松茸、蒲鉾、栗などを加へて煮たもの。初は大平に盛つたので、鮑貝を出來合の大平代用としたるか。
○ほまち　利得。
○むくおきのうがち　突然考へ出した名案。
○お半　お半長右衞門劇のお半。おぼこであるから無言が多い。
○切落　芝居の追込場。
○ジャ〱　喝采。
○犬のくそのねえ處へ置にしろ　そんな仕打は犬の糞のないやうな所へそつとおいてしまへといふのである。
○左交　狂言堂左交、卽ち櫻田治助。
○五瓶　並木五瓶、狂言作者。
○近松　巣林子。
○あきれが宙返りをする　あ

きれ返るといふ駄洒落。

○葭屋町川岸へ輕わざを出す 「元祿開板の『江戸鹿子』に、堺町葭屋町の二町は、古へより操見せ物、又は狂言盡、あるひは放下の品玉、綱切の曲を業とする者ども寄りあつまり、終日觀樂をなす地なりとあり」。(『江戸名所圖會』卷之一)

○あくたいのねじめ 惡態の音締。惡態は惡口雜言である。音締は琴・三味線などで、絃を糸卷に卷き締めて、音色を出すこと。調子を調へるのである。惡態の合の手をつゞけてゐるといふのである。

○ぶゆ 蚋。小さな蟲で、人畜を螫す。

○ぺん〳〵ぐさ なづな(薺)をいふ。その莢が三味線の撥に似てゐる。

○芝居の魂、すゞ紙で張つた月 芝居の小道具で、人魂や月など、遠く棹の先や上から絲などでつり、上げたり下げたりする故に云ふ。

○いたこをぢかに云々 潮來節の文句をそのまゝ改める。

○めど橋 江戸橋。

○初仕舞 前出。

○者 藝者。

○出居衆 自前の娼妓を云ふ。『正寶事錄』に寛文五年十一月九日の觸を載せて云ふ、「元吉原町、湯島六町分五町家主借家店借之者共、方々出居衆と名付、徒者數多抱置、人請出入、其外事出來仕候間、出居衆一人も差置申間敷候、若出居衆置候はゞ、家主方へ出居衆方より直に店請手形を取置、店衆同前に仕、差置可申事」。爲永春水の『梅暦』に「おれがお蔭で身扱をして、斯うして自前出居衆になつてゐて」。新内節の『蘭蝶』に「あの蘭蝶どのと夫婦の成立、話せば長い高輪で、一つ内にてたがひにでゐしゆ」とある。

んが連て來て、初の時からしてちつと譯のあるこつて、船宿衆とも噺合に、いつそ義理だらけで馴染になりやした。それだつておめえと是程の中だから、何も外の客人へは、是程も實を盡した事はごぜえせん。マアそりやアうつちやつて置て、此※初仕舞をたのむにも、しつてゐなはる通り手も足もねえ身分だから客人はさつぱりなし、誰といつて相談してくれるお方もねエ。といつておめえに。圖なんだおれに相談しかけても、所詮できねえと、見くびつてしたやりくりか。ほんのこつたが古市から新石切て、※者が幾人、子供が何人、その内よび出し、是々がふせ玉、※出居衆がどれ〳〵、あすこの内の娘分や妾のお針は扨おいて、どこの内ぢやア火入炭團がいくつゐる、蠟燭油はどれ程つかふと、※しがく所の穴の穴までしつてゐる。朝は※大島町のむきみ賣の出端を切ツかけ、日が暮れば※白魚の篝と一所に一年三百六十日、内にねる夜を遊びと心得、夜著の半えりの天鵞絨ずれに首筋をいため、尻の先へ猪牙舟だこのいつた男だ。是程につき合ても心いきは呑込ねえか。こんなに安く

○しがく所 隱所の顚倒。便所。

○大島町の云々 大島町は深川の町名。こゝから剝身賣が出て來るときにの意。

○白魚の篝 佃島の白魚は當時賞美され、附近の漁夫はこれを捕つて毎々幕府に獻じた。『江戸名所圖會』卷之一、佃島にも「……此地は殊更白魚に名あり。故に冬月の間毎夜漁舟に篝火を燒き、四手網を以て是を漁れり。都下おしなべて是を賞せり云々」。

見られちやア、猶此の腹がおすわんなさらねえ。ト、ちつとすれば腹をたつて、※太平をならべる。一體此の男は酒によふといつでもしやべり出し、さめての後は常のごとくなれば、おとまもふだんのことと承知して、さのみおどろきもせず、機にのぞみ變に應じて、意味無量の※かき文句をあらはす。此のあくたいすなはち女郎の腹よりなせる事にて、大詰ともなればつひに一つのおとし穴へ落入る、はなはだおそろしきやつなり。困おめえのやうに※ばんいちにあつくなんなすつちやアどうもわからねえ。ぬしの心いきはどうかうといはねエでも、如在ねえといふこたア、知り切て居やさア。それだつて又こつちの心も、些とは酌んでくんなせえし。こりやアわたいが遊ばれたのかはしらねえが、新市場の氏田屋とやらに、わかつた子供衆が有て、お前を深く呼び申スときゝやした。それを聞ちやア、なんぼはかねえ身だつても、ホンニしみ／＼と腹も立。くやしく思ツても諸事苦界といふもんだから、※道柴の露程もおめえを恨む心はごせえせん。よもやさういふ譯合ぢやア、こんな手もねエ女に乘て、嘶てくんなはる心も有めえと思へば、いつそじれつたく、ナゼこんなしみツたれに生レて來たかと、心でわたいを恨んでをりやす。ト、なき聲でもたれかゝる。團も、しんめりとしてなにか茫然となり、目をむしやうにぱち／＼しながら、ムヽそんな事ア覺えねえ。また有たにもしろサ、手めえは※がうぎときれいな事ばつかりならべたてるが、ナゼそんなら喜之助が名を腕へほつた、イヤサどういふ譯合でおれを出し者にする。モウ／＼是れをいやア胸つばらしが澤山ある。うでをほるともかじるとも、勝手にしろエ、※もんがアめ。困そりやアおめえでもねえいひぶんさ。此ほり物のわけもよんどころねえ義理にからんで彫やしたが、是だつて※根をたんでえて見りやア、みんなおめえにつくす心で

○太平　太平樂。もと雅樂の曲の名であるが、此處では出たらめ、出放題の意である。

○かき文句　かきゝ文句。

○ばんいち　一番の反對語。ひどく。

○道柴の露　道端の雜木に於ける露。

○がうぎと　豪儀と。えらく。大そう。

○もゝんがアめ　むさゝび（鼯鼠）。獸物めと云ふ義。

○根をたんでえて見る　根を尋ねて見るの訛。

○年ンを書入れる　契約の年限を延長する。

○たて引にも　意気地を張り合ふ上からも。

○ゑつぼ　餌壺。

ごぜえすわな。喜ソリヤアなぜ。国ハテ初仕舞ふ頼むツても外と違つて人も多けりやア、つい六両と七両はいることなり、それに又いつかちよつくり咄した、とつざんの病氣が今にやつぱりむづかしくツて、人参の代ヤ何角八両程入用だから、※年ンを書入れてなりと工面してくれといつて來やした。ソレにおめえの方へは來年行うと約束はするし、どうもかうも思案につきて、金故こんな不義理をするも。とつさんやおめえへの働きばかりさ。ホンニわたいがちつとは不便だと思ひなはるなら、腹を立たずと堪忍してくんなせえし。ト、物思ひにうつむく。喜もさすがに岩木ならねば、この一言にたぢろくなり、喜おれだツても、すゐ始終蛙をひり合ふといふ中だから、腹をたつでもねえが、彫物のことはどうもくいめえましくツてならねえからいふ事よ。一體又鳥居町から來るやらうが、きつぱりと氣に喰ねえ。よしさう云ふ理窟なら、十兩が十五兩でもたて引にもおれが出す。その代にやア喜之助をすつぱりと突出して見せてくれ、壹年早くこつちへとりやア十兩だしても氣持がいゝ。ト、段々りくつにのぼせてくればおとまはうぬが※ゑつぼへもち込み、こゝろの内では舌を出してゐる。国さういひなはる程、どうも其金はもらはれやせん。喜其はずよ。金ヲ遣はせねえつらで、やつぱり引込のがいやでもあるし、又喜之助が方へのつらも立つめえ。国そりやアおめえ愚癡ツぽい。今も咄た譯合だから、どうも心がすみやせん。喜すまぬ心の内にもしばしだ、何でもすつぱりつき出すといふ證據を見せやな。国證據といふはマア此の彫物をけして仕舞はう。喜笑ひをかくして、そりやアどうとも勝手にしろ。しかしそいつを消す

〇ろせを [illegible]
[illegible]
〇切艾 [illegible]
[illegible]
〇どんす [illegible]にし
[illegible]の一つ。
〇鐵砲しぼり　芥子玉絞りのことや。
〇びんぎり　[illegible]ものゝはつかれるのである。
〇がつくり返し　島田髷の根がゆ[illegible]
〇文がら　手紙の反古[illegible]ぶのは粋とされてゐた。

にはろせをでもかけずば行[illegible]え。国きついしやれさ、さういはれて消しかねるものか。ト、かねて用意の枕の引出しより切艾をとりいだし、色と恋とに縁切もぐさ、あつきは女郎のつらのかは、切火はえん[illegible]と立のぼるに、おとまは逃も合ゐると、目の内には泪、名ならで、十兩々々ととなへながら、すつぱりとすゑけしてしまふ。国ヲヽ、あつかつた、サアよく見なせえし。ト前へさし出す。[illegible]ム、よし〳〵違ねエの眞中だ。夫れですつぱりとわかつたが、ついでにそつちの腕を見せや。国うでをまくり、しらきちやうのんだヨ。よく[illegible]てみなせえ。ト、はなのさきへつき出す。藤兵衛はとつくとあらため、枕もとの紙入より違棚どんすの金ネ入をとり出して、小判五兩なげ出して、[illegible]ソレまあ是をとつて置がいゝ、あとは明後日持ツて来よう。もしまだ用が有ならば、卅宿までいつてよこせ。ソシテ内へも大事にしろと云てやりや。国なんにもいはず只いたゞいて紙入へはさみ涙ヲふいゝまねをしてゐる。[illegible]モシおつゝと[illegible]なはんねえか。[illegible]ム、モウがうてきに夜がふけた、サアねようねよう。ト、よぎをまくつてはいる折から、[illegible]の座敷より女達女郎、[illegible]ねじまり八丈に鐵砲しぼりのじはばん、白[illegible]縮のしごきヲだらりとぶらさげ、匂ひ袋をいれた鼻紙をたてにはさみ、前髪とびんぎりはひたひ[illegible]、おびかゝり、おほ島田のがつくり返しに文がらはモウふるいとかで、平ラ元結のじみにしばり、ねまきのすそをぐるりと[illegible]くつて両手でかゝへ、廊下をつまだつてひよい〳〵。いたこへしやかやあみだやをちをば二た親の意見でも、ほれたお前がどうまあ思ひ切られよか、そりやむりだや。ト、字餘りの二上りを[illegible]ひながら、[illegible]おとまさん、あけてもよしか。国おかゝさんか這入ねえな。角障子を明けんとすれども、がたびし〳〵とつかへる。エヽじれツてえ。ナゼこんなにあかねエ、いけづう〳〵しい障子だぞヨウ。ト、ばたアリあけて這入り、ヲヤ藤さん、ナゼだんまりでお出なはるエ、恨でごぜえますよ。ト、[illegible]子でひざからさきへばたアリとすわり、ぶる[illegible]としてしやがんでゐる。其内おとまはきせるを出し、藤兵衛は[illegible]草をついで、あんどうの魚油は[illegible]、ちり〳〵ともやして出す。お角は一二ふく〳〵は

へてすひ、あんどうの臺へはたく。此の内藤兵衛はだんまりのいびきゴウ〳〵。〔藤〕ム、ム、ムウだれだ。〔角〕誰だもすさまじい、とつぴんちやんさ。〔藤〕ム、奴か。〔角〕いやだのう奴とはなんだえ、大部屋ぢやアねえヨ。〔藤〕そんなら大ぼやか。〔角〕きついしやれさ。ト、きせるでたゝくまねをする。〔藤〕夫でも※平代團子よりは※はらぶとがいゝと、掛取に賴んだぢやアねえか。〔角〕ヲヤはづかしい、いろんな事を云なはるねエ。※きついお豆だ。うつちやつて置なはいましヨ。ト舌を出す。〔藤〕ヲ、ながい舌だ、※只今舌の上へ長刀のやうな客人をのせて、水車のごとく、おしやべりを出します。コリヤ娘ヨ、アイ、といひな、氣味の悪い。化され客が、まじ〳〵して待ツて居るだらう。〔三〕エ、モウやかましい、とせなかを兩方からこそぐる。〔藤〕アヽあチツト相談が有からだまんなせえし。やかましくツてならねえ。※あやまりあやまり、おやまつたのかんざらしだ。モウねるよ〳〵。トキニお角さん今夜の客人は初か。〔角〕イヽエ〔藤〕裏か。〔角〕ムンニエ。〔藤〕なんのこつた※天川やの伊吾か大薩摩の朝比名と來てゐる。〔三人〕ハヽヽヽヽ、ハヽヽヽヽ、ヲホヽヽヽ。〔三〕鄰の部屋は誰だのう、とんだやかましい。〔角〕アリヤアお百さんの客人さ、三人一座で、くせとして、廊下鳶だから、いつそいやがつてゐるヨ。〔三〕なんだかおそろしくしやべるのう。ト、杉戸のすきより三人のぞきみるに、曰く。

後堂貧客三個交席段

中座舗三人※割床にて床納つて、未だ女郎の來らぬ體。眞中の屏風の内に坊主天窗をくび

○平代團子　永代團子。

○はらぶと　[illegible]　十に「皮うすくして、餡は赤小豆に鹽のみ入一砂糖けたく、嘴大に作りたるものなり。大ふく餅ともいふ。後其形を小く作り、餡もこし粉に砂糖を加へたるを專ら大福餅と呼、はらぶと餅は近頃迄もありしが今は絶たり」。

○きついお豆だ　大そうな口達者だ。或は豆藏よりよくしやべる意とせるか。

○只今舌の上へ云々　見世物の口上の眞似である。

○あやまつたのかんざらし　寒中の外氣に晒すこと。あやまつたの云々といつたのは語呂の上の戯れに過ぎぬ。

○天川やの伊吾か云々　天川やの伊吾は假名手本忠臣藏第十、天河屋義平の丁稚伊五の事で阿呆者である。大薩摩の朝比奈も同様で、藤兵衞が初會か裏かと問いてゐるのに「イヽエ」「ムンニエ」となまくらな返事をしてゐるので阿呆のやうだと云つたのである。

○貧　客　前出（六六三頁）に貧客とあり。

○割床　妓樓にて一部屋を屏風などで分割して、床をとること。

ツ切り夜具へつつこんで、やに下りにふんぞり返り、壁のらくがきをよんで居るは、醫者の内弟子ト見えて、口には張仲景が聲色をつかつて、内證は醫療手引草、傷寒論國字解などをそらんじ、何事もよく差出たがる性にて、切り拔き覺えの蘭言唐音學語などを、しッたかぶりにならべたがるくせあり。

片達　黑八丈の七ツ時分な羽織に、上着は松葉色の山まへぶとり、同じく七ツ頃茶返し小紋のふとりの下着に、花色はかたの帶をメ、まだ寢所へすわつたまゝで居る。

吐逆　こつちらの屛風をひんめくつて、大あぐらで居る、人物田舍廻りの太夫か、人形遣ヒか、但しは茶飯巳下の上るりでもうなりさうにて、まきびんの大たぶさなるいてふ、三日ごろのあたま、めんちりせいらつじまの羽織はまはしの女にあづけず、是れおさとのしれやすき故なり。太織の丁子茶の上着をぬいで、すその方へ置き、お納戶返し小紋の下着に眞岡の鳴海しぼりの繻ばん不殘黑七子の半えり、黑八丈の帶ヲメて、何だかつまみ喰ひをしてゐる。こいつに樂屋方言のセンボをつかふくせ有り。

東吉　醫者さまの玄關取次と見えて、黑繻繻の上着、定めてやうかん色なるべし。下着はとんだふつり合にて、さんとめの三すぢだち少しぼろのさがるやつに、黑とはくの帶、ところ／＼はらわたのぶらさがり有り、むしやうにみる物ヲつらまへて、おもたいくちのしやれ、ぢぐちなどをやらかしたがる風なり。

片達　鄰屋の雨雅人娼婦未至。是何の謂ぞやだ。嗚呼可嘆、腹中大いに北山の豐心丹だ。吐逆　トキニモシちつと古いせりふだが、「やん」はどういふもんだの。埒のあかねエ。「につてん」が幽靈になるまでまだ來ねえとは、あんまり、ばか／＼しい。東　たつた今廻しの「おゆき」の聲がしたッけ。呼付ケのいざならべはどうだの。東　とゞ大詰の、

○張仲景　古名醫。
○醫療手引草　七卷。加藤謙齋著。[illegible]の作。
○傷寒論國字解　「傷寒論」は後漢時代における醫術の根本を説いた書で、張仲景の編著に成る。これを和解したもの。
○切り拔き覺え　そこここ部分的に覺えてゐるので、組織立つておぼえたものでないこと。
○七ツ時分　色の褪せて、大分古くなつたのを云ふ。（前出六四一頁）
○山まへぶとり　山繭の繭から採つた絹糸で織つた太織をいふ。ふとりはふとおりの約。
○茶飯巳下　拙劣なのを云ふ。
○大たぶさなるいてふ　いてふは銀杏頭の略で、野郎頭の髷の刷毛先を銀杏葉の如く末を廣く扇にしたもの。「一色道大鏡」に「六法衲をの醫者の好む所」の一つだと言つてゐる。その髷のもとどりが更に普通よりも大きいのである。
○三日ごろ　結つてから三日も經てゐる。
○めんちり　ちりめんであらう。
○丁子　丁字染。丁子の煎汁で染めたもの。黄に赤みのあるもの。

○鳴海しぼり 鳴海のしぼり染の一種。尾張國鳴海驛に[illegible]。本名有松しぼり。
○センボ 『俚言集覽』に「かくし詞也 夜盗りよう、目をこつはり云々」とあり。
○さんとめ 棧留織。織物の縞柄、竪縞にして、赤又は淺黄のまじつたもの。
○北山の豐心丹 空腹。空腹のことを北山時雨と云ふところから北山と云つたのである。豐心丹のこと、五一九頁、有[illegible]山のほうらん〳〵參照。
○とゞ 結局。
○うさアねエ うそは無い その通りだ。
○如斯不利ときは巴豆を配剤 「けつする」は便秘する、詰づまりする。「巴豆」は巴豆油のことで、巴豆といふ木の實から採つた油で、下痢として用ひる。即ち、上文に大詰、即ちつまるといふ言葉があるので、結局て、けつするとか、巴豆の配剤とかいふ語を持つて來た。
○雁首ですくつて吞むが居候 煙草の最後に粉になつた奴を煙管の雁首ですくつて吸ふ、といふ譯であらう。なほ居候たばことといふ字をわけてのみ」といふのもある。

「そり出さう」は「がんだう」めくやつだぜ。〔田〕うさアねエ。※如斯不利ときは巴豆を配剤といふ場だ。〔中〕ちきに手めえしやれだネ。〔中〕モシちつと「孫右衛門」を「孫三」としてえ。「せめ」※「孫右衛門入レ」此の通りだ。〔田〕ム、い、〳〵きび〳〵。※雁首ですくつて吞むが居候川柳々々。ト、ふるいことをいひながらたばこいれを出し、サア「てうけい」は有りか。〔東〕有りやす。ト、一ぷくすひ、いめえましい、所詮此がら〳〵ぢやア咄合がわからねエ。ト、※廻しまくらをつらまへて、われるほどきせるをはたく。〔田〕コウ片達さん、ちつとこつちへ来なせえ。片達は廻し枕の四角ではあたまがいたむ故、ふとんの下へ入れて、其の上へふとんヲのせて枕とし、坊主あたまは妥が妙だなどと、ひとりねてゐたりしが、むつくりとおきてこちらの屏風へ来り、ハ、ア此の屏風はなんだ、妙々〳〵※宋紫石、※沈南蘋はだしといふ筆だ。こいつア※くじどりにさせる繪だわい。和漢まぜこぜ※ちくらが沖だ、節分の晩にやアチト恐れるス。トキニ、「せいざ」を「やつかい」に吃したせゐか、スコ「しぶたら」と出てえが、所詮モウ※幕は切めえ。ト、きいろな聲にて、あたりをきよろ〳〵と見まはし、ヲツト有り〳〵、こいつアいい、奇々妙々絶類な鹽梅だ。ト、硯ぶたのわきに引のこして置たる、※麦の茶碗ものの※ひやつこくなつたやつを、むしやうとするつてゐる。〔東〕何だ〳〵、

○廻しまくら 廻部屋で用ひる枕
○宋紫石 氏は楠本、通稱幸八郎、江戸の人。長崎に遊びて熊斐に師事す。寫生畫家。
○沈南蘋 名は銓、字は衡齋、清の呉興の人。長崎に來りて我邦に寫生畫風を傳ふ。其門人に熊斐がある。
○くじどり 籤取、籤引。

○ちくらが沖 節分の厄拂の詞。「ちくらが沖へさらり」。
○幕は切めえ 芝居の幕切れを云ふ、滿足には幕を上げられまいの意に用ひたのである
○麦 麦はさくべい（索餅）のこと。麥粉と米の粉とを煉つて、縄の如くにねぢたるものの言葉に基す。むぎなはともいふ
○ひやつこく 冷つこく。つめたく。

ちと※いき山としよう。沙汰なしは、大キにうらみだ。〔丗〕がうぎと「のせ」かけるもんだの、夫ぢやア「かくやつかい」と見えるわい。〔片〕こつちの畑にやアねえこつたの。そこらはぐつとナ、ソレ俗物とかなんとか別世界にして、諸事色情は離たもんさ。ソリヤアさうと此妓婦はどうだ、根ツから氣がしれねえ。足下は※不佞が婦人を、とくと熟覧したか。おそらく醜女、彼の俗に云ふしみツたれだらう。東デモ彼奴ア※ざらまんでもねエが、わつちがのは首ツつきが妙だ。吐逆さんおめえ見たか。〔片〕大キにサ、飴細工の鳥が南風をくらつたといふ首だ。〔片〕ム、いゝ／＼妙言々々。コレ此枕を見さつし、（ト、吐逆が女郎は廻しでなき故、ぬりまくらの古いのを出してある。）〔丗〕廻し枕の名代に、馴染の客へ恩に着せて、出さうといふやつだ。〔片〕ム、いゝ／＼妙言妙言甚滑稽い大いなる。實に當世可恐だ。東爰の※比翼紋を見ねエ、少し氣障だの、金箔の古へも今斯なつちやア霜枯の藥罐天窗、※焼原場所附といふ見えだ。〔片〕ム、いゝ／＼妙言妙言。〔丗〕ドレうさアねえ。變ちきな紋だ。※べちやアねエ、※どぶ漬きうりの輪切へ、※どらやきをくツつけたやうだ。東是でもなき殺した狂言だらうネ。しかしアノつらで「こだれ」ちやア、掃溜の地震、雪隠へおつこちた雷といふつらだらう。何分恐れる。〔片〕ム、いゝ／＼妙言妙言、何でもソレ方便を用ひて、あいつが懸河の辯をふるつちやア、どんなやつでもひたひへ※江戸繪圖の川といふ筋を出して、一ばん捻ツて見るのサ。恰も※竪板へ詰り小便をするが如しだらう。〔片〕大笑ひだ、横板へ泥もあきれらア。〔片〕コウ爰の内も、※めんがまぶな子

○いき山　こちらも存まう。
○とぼしもがうぎ　のせは喰と乘ところに通じ、從つて「とぼしもがうぎ」は性的關係も非常と云ふ意であらう。
○不佞　下才などに同じ。自ら才智のないものとしての卑稱。
○ざらまん　まんざらの倒語。
○比翼紋　情人の紋所と自分の紋所とを組合はせて造つた紋。
○焼原場所附　焼野原の在場所を點々と圖上に示したもの。
○べちやアねエ　前出六二六頁。
○どぶ漬　糠を少くして、鹽を加へ液汁を多くして、野菜類を漬けたもの、ぬかづけに同じ。
○どらやき　菓子の名。饂飩粉を練り、焼いて中に餡を包んだもの。
○江戸繪圖の川といふ筋　青筋といふ駄洒落。繪圖の川は青い筋で表してある。
○竪板へ云々　「立板に水」といふのをわざと、逆に詰り小便と罵つたのであらう。「横板へ泥」も、「立板に水」の逆口。
○めんがまぶな　面が滿足な。

供はねえゼエ。そしてだし物がいゝなぞといふやつもあるが、おいらにやアさつぱり解せねえ。疊の酒じみと、※茶のしほッぱやいと、壁の落書を見ちやア、晝遊びのあいそづかしだ。コウいかねエこつたが、此頃の世界をりしまさねえか。（是れはしらぬかといふこと。）〔丑〕イヽエまだりしやせん。又おめえ「與太郎」ぢやアねえか。〔東〕チト承りてえネ。〔丑〕話說する所は五六日以前のことさ、兩三個の社友と、去る學館の歸りから、ぐつと※北方へ飛ばせやした。そこで※おつりきなことがあるもんだ、わつちが※盃をトさしたやつはモシ※がうてきさ。〔丑〕ムヽありがてえ、定てサありが〳〵。〔大〕聞きなせえ、床の内は初會にしては、おそらく妙手、なか〳〵、※九目もおかねえぢやアうてやせん。そのくせ※國色尤物、イヤモ至ッての佳人さ。〔丑〕ムヽ有がてえ〳〵。〔大〕（大きにのりが來てむしやうと首をふり廻し黄いろなこわいろが段々と高うしになる。）此内東吉は一向※てればうにて、何ともいはず、片達がくびをふるかたち屛風へうつるを見て、をかしけれど一寸もわらひをかくし、足をばた〳〵してゐる。〔大〕そこで兩座面につらなる歌妓幇間、こいつまた噓誕を交てトント、ナソレ二階中が引ッくり返りの大どん〳〵。流石の大廈高堂※土佐の大仕掛を見るがごとく、イヤモ愚僕大酩酊、諸事夢のごとくで閨房へ入やした。〔丑〕ムヽそこでおめえの名句確論がありやしたらう。（トヽしつたかぶりにあいさつはすれども、何かさつぱりわからず、さすがだんまりでも居られぬゆゑ、ムヽありがてえ〳〵妙だ、ムヽいゝ〳〵トばかり※合はせかゞみでゐる。東吉は初會先刻より大てればうにて、日の内でいたこをうたつてゐたりしが）〔東〕その世界もいゝが、今宵はどうだ、モウたいくつの筋だ。〔丑〕初會廻しはとらねえ所を、むりにあがつたから、こいつは覺悟の

○茶のしほッぱやい　鹽辛い茶。
○北方　吉原。
○おつりきな　乙な。あぢのある。奇妙な。
○盃をトさしたやつ　數人打連れて登樓する時、自分の敵方とすべき遊女に盃をさして、名指しの代りとする風習があつた。
○がうてき　前出。五五六頁參照。
○九目　碁でせいもくを置くこと。相手が遙かに強くて上手。
○國色尤物　非常な美人。「三國志」吳志、周瑜傳、「採喬公兩女、皆國色也」。「故事成語考」「女貌嬌嬈、謂之尤物」。
○てればう　てれてゐる。
○土佐の大仕掛　操芝居の大からくり。人形淨瑠璃は土佐國から起つたからかく言ふ。
○合はせかゞみでゐる　合せてゐるといふだけのこと。合はせと言つたので、合せ鏡と出したのである。

えだ。おほかた女部屋か、あんどんべやへ、おッかたまつて、出しッこのおでんしら莇、そばイノ\で、しやれてるだらう。〔五〕但シハなめかたでも初めたらう。〔南〕ヲヽさむい〱、マア一ト――――ふり出してえ物だが、コウとてもかうなつちやアナ、彼の、ナソレ。〔五〕ムム何かゝよし〱片公「さくら」を出しな。トヽさゝやく。〔五〕こりやアおそろだ、そんならこいつから先へ。〔南〕シイこりや。〔三人〕口をふさいで見えあり。チヽテン〱〱ぐわアん。〔五〕此所黒幕忍び三重。〔南〕大臣柱に松の立木有り。〔南〕蛙の啼く、音寝鳥の笛チヽチヽ〱カタリ。〔五〕モットー「七兵衛」を高く〱まくりねえ、しかし一「番」を取ッて眞裸もいゝ。こいつア「はちや」へーかゝーたくせが、悪角うせねエ。はちやへかゝるとは賽の事なり。夫れでも此の頃は「ごうま」だから、チト「けまん」をうめるつもりだ。どうまトハくめんのよき事、けまんとは損をしたこと也。〔五〕こいつアふり「どつしん」面白し〱。トヽ、このうち丸二だかにたおて、そこのあたりとりちらしたるだしの引残りを、ちらかへ引すりだし、夜具をたゝんでうかつかゝきんたなかへつみ上げ、その上へ屏風をのせて障子をはづし、東吉がかゝるわざのまねをしてどし〱〱はね廻れば、片道は坊主天窗をふり廻して、ちやるめらの大さわぎ。呼道は口上の半八大際館を述び、皆さんさよおやや見ておくれなどと、さま〲のあくデヤリあれどもくはしくはこゝに略す。

○一體此里にてはわるじやれ遊びの人物多く、此くらゐのことたび〱なれば、内所にてもさいみかまはず。されども餘りにさう〲しきゆゑ、三人の女郎もかけ來り、ヲヤ何でごせえますエ、とんだお客だヨ、きついしやれさ。などゝちやらかしても、一向聞き

○出しッこ　お互に金を出し合つて、みんなで酒や肴などを食ふことであらう。

○なめかた　『俚言集覧』に「小児の博戯なり」とある。

○口をふさいで見えあり　以下芝居の仕草を現してゐる。

○見え　役者が演劇中主要の部分に達した時、[illegible]姿を定めてする形、殊に荒事などをなすこと。「極る」ともいふ。

○黒幕　黒幕は芝居の舞台で、場面を覆ひ隠す時に用ひる。

○忍び三重　浄瑠璃の三味線の手の一。忍び音に強くひく。

○大臣柱　能又は芝居の舞台に向つて右の側にある太い柱。[illegible]ここは舞台の右の端に松の立木がある心といふ、舞臺面の説明。

○寐鳥の笛　ねぐら鳥の啼聲の擬音を出す笛をいふ。

○ふりどつしん　眞つ裸になること。

○坊主天窗　天窗はつむり、あたま。

○ちやるめら　南蛮笛、大平簫。楽器の名。支那人、朝鮮人などの行列に用ひたもの。今の喇叭に似て、七つの

孔あり。こゝは河岸の禮わざの眞似をしたのであらうか。
○口上の半八　口上使ひの半八。
○あくヂヤリ　惡ざれ。惡洒落。
○おひねエ權七さん　おひねエは負へないで、手に負へない、仕様がないの意。權七は船頭の權七といふところで一つの通り名。
○齒もはえねエ　未だ齒も生えぬ幼稚な者だから、[illegible]といふ意ではあるまいか。
○宵泊　宵から契約をしてその晩泊る。

つけずに、をどり騒ぐゆゑ、いびきさいちうの廻し方、若い者など、目をこすり／＼出て來り、お定りに女郎を叱りて、むりむたいねかし付る。そちこちする内、夜もはや明方にちかづけば、こちらの座舖にとり紛れ、いかゞなりしや跡はしらず。

（ト、ゆりおこされて目をひらき、のびをしながら、）〔おとま〕コウ藤さん／＼。モシ、モシ。モウおきなせえしナ、よくねなはるのう。（ト、いひながら、たばこを吸ひつけて出し、）サア。ムヽムヽ、アヽ、一ト息に、やつつけた。モウいゝ時分か。〔[illegible]〕まだ。（[illegible]取て一ぷく吞み、はひふきへはたきこ、）サア／＼モウ歸らう／＼。〔巳〕マアいゝわな。モツトしづかにしなせえ。（折ふし廊下を釼しにお八重通る。）誰だコウ。〔[illegible]〕ハイ私。〔[illegible]〕藤さんモウかえ。まだおめえさんお早うごせえますよ。ホウンニヤ早くもねえ。下へ行たら船頭をおこしてくんねエ。〔[illegible]〕ハイ／＼。（ト、はしごをばた／＼おりながら下をのぞき、）お八どん／＼。（だまつてゐるゆゑ大きなこゑで、）はアちイどヲ、ん。エヽづう／＼しいぞ。おめえはいつでもせわがやける。おひねエ權七さんだ。（[illegible]おきて來り、）なんだやかましい。かんにんしねえ。まだ齒もはえねエ。（ト、目をおさへていふは此頃のはやりなり。其[illegible]は作者にも不詳。）ハイお用がよろしうございます。（ト、屏風をのぞいて、）おとまさんバアヽ引。（ト、したをべろり。）〔巳〕何だすかねエ。（其の内藤兵衛もしたくして屏風を片よせ、）サア行かう／＼。コレそんなら夕のことをわすれめえヨ。〔巳〕吞こんで居やすから。わるくはしやせん。そしておめえいつ來なはる。〔[illegible]〕コウトあしたは何だによつて、へエ。（ト、しばらくかんがへ、）ムヽ、あさつての晩來よう。〔巳〕そんなら宵泊を付てまつて居るヨ。〔[illegible]〕エヽいらぬ世話だわ。（ト、つめる。）〔四〕アイタヽヽ。まだ齒

○かしあげ　河岸揚げ。河岸で舟の[illegible]

○月落烏啼て云々　張繼の楓橋夜泊の詩に「月落烏啼霜滿天、江楓漁火對愁眠」

○首尾を苦にする七ツ立　家の首尾を氣にして夜明けに立つこと。七ツは午前四時頃。

○バカ〳〵馬鹿の至り　馬鹿貝の剥身賣の呼聲を云ひかけたもの。[illegible]

○惡や可愛や裏表　裏表は深川の裏櫓と表櫓とをいつたもの。又遊里で、後日の登樓を[illegible]といふので之をも言ひかけしものか。

○かゝれる　だまされる。欺かれる。

○跡幕　あとの狂言。あとのしぐさ。

○惡點　惡評。惡口。點は俳諧の點取りなどの點で、批評する、判斷するの意である。

○寒夜に衣をぬいで　延喜の御代、醍醐天皇は御仁慈にわたらせられ、寒夜御衣を脱がれ、民の寒苦を忍ばれ給うた。延喜の治と稱し、世の中無事泰平であつた。

○あくる日髪床たゞみそ　妓樓に遊んだ翌日、髪床にゆき、そこで

もはえねエ。ト、また口をふさぐ。□エ、よしなといふに。ト、ふりむいて、おまえはんとうかえ。[illegible]そかましい、どうともしろエ。ト、はしごばた〳〵、若イ者はきものヲなほし、くゞり戸をあける。三 おさらばエ。廻し ハイおちかい内。ト、くゞりぐわら〳〵、舟宿[illegible]もやひときてぐへずいのり、かしあげの、んとつきだし、ハイごきげんよう。喜 アイ。ト、ばかり[illegible]のゴヲンと共に寺々の鐘、※月落烏啼て霜橋に白く滿。宵の口舌に朝直あれば、※首尾を苦にする七ツ立あり。醉も不醉も悉皆是、朝河岸を漕ぐ〳〵船の賣聲。※バカ〳〵馬鹿の至りにして其傾城の心の内、明の烏も鷄も。※惡や可愛や裏表。

扨前席の客心は只おのれ獨り呑込すがたに、しりもせぬ穴を探り、傾城をかゝアにしこなし、おらア遊びに行ても女郎を遊ばせてやるのだなどと高慢をはきたがる風なり。是等の類ひかく〳〵として己が※かゝれる物なり。よく〳〵此※跡幕をこゝろみ給へ、ナントもし恐ろしいやつだネ。

[illegible]後座に進べたる三人一座は何となくむだヲならべ、しツたり自慢に氣性高く、唯通人の口まねをして、※惡點をのみ樂しみとなし、※寒夜に衣をぬいで延喜帝の如しなどとふざける、是れ※あくる日髪床のだみそにあるべし。

晝遊の部

喜之助　しつかりとした商人のひとりむすこ、まだ部屋住のことなれば、金の都合はチトわるけれど、隨分小利口に立ちまはり、餘りやすき遊びヲきらひ、いつも藝者の二三組も揚げ、諸事きれいづくし、

いやみなしにむつくりとした風にして、女郎の持てくる客なり。けふは寺参りとこじつけ、今床の迴つた體。衣裝付、上田の小袖にりうもんの合著、黑手八丈の下著、淺黃縮緬黑なゝこの半えりのかゝつた襦ばん、花色の唐こはくの帶を、ちやんと猫じやらしに結び、金唐皮にりうきん金物の前さげ、花色らしやの文魚形の鼻紙袋、さのみ懷大きからず。たつた今小便所から見通しへ上り、網舟を詠めながら馴染のげいしやに出合ひ、二ツ三ツすてぜりふあつて、廊下をとん／＼とはこばせて、ふとんの上へふわりとすわる。〔客〕どうか雪でもふりさうな景色だの。ト、いひながら、上田の羽織ヲぬいで船頭へわたすかたはらに、船やどのむすこ、〔喜〕棧留關東縞の綿入、花色繻子の帶、しりツこけにさらしの手拭を腰にはさみ、紅革いぼ結びのたばこ入れ、角つなぎの金物ヲうつたるをさげ、天窗ははすがけのさきをたまきにちらし、見さん／＼と客人よりもてる、尤此里のならひなり。いつも喜之助と合口とて、けふものせて來り、羽織を疊みながら、どうらの畫賛を見て、モシこりやア女郎でごぜえやすね。〔客〕ム、宗理に書て貰つたから、華溪に澤庵の賛をたのんだ。〔喜〕どうぞお讀なすつてお聞かせなせえ。〔客〕ム、かうさ佛は法を賣、祖師は佛を賣、末世の僧は祖師を賣る。汝は五尺のからだを賣て一切衆生の煩惱を安んず。柳は緑花は紅の色々か。歌に「水の面によな／＼月は通へども心も留ず影ものこさず。ナント妙だらう。おらアよつ程よく出來たと思ふ。すこし考へて〔喜〕こいつア面白い。ム、なる程違ごぜえやせん。是れはどうか、道理先生とやらの、いひさうな、せりふでごぜえす。モシさつき摩利支天河岸のこつちらで、物ヲおつしやッたのは、わつちもどうか見申したやうで。〔客〕ム、ありやア友達だが、一ト頃

昨晩はたゞ二階手に手前味噌をならべる、との意。
○りうもん　龍紋。白絹の織物の名。地、厚く強く、緯絲が多くて、織目が斜に高く光澤はない。
○猫じやらし　掛と垂と同じ長さに二度結んで垂れたもの。
○金唐皮　金泥で種々の模様を打出した薄いなめしがは。昔、和蘭から渡來したものであるといふ。
○りうきん金物の前さげ　りうきんは琉金にて眞鍮のこと。前さげは前巾着ともいひ、巾着の上に紐通しを附け、帶革を以て腰の前部に下げたものである。
○文魚　大和屋文魚。藏前の札差にて、十八大通の隨一。
○棧留　前出。六七七頁參照。
○關東縞　間道縞。竪縞。
○紅革いぼ結び　紅革は紅色のなめし革。いぼ結びは繩・紐の端を中に出し、その周を絡み、引を通して結ぶもの。
○角つなぎの金物　角張つた金物を連繫したもの。
○はすがけ　蓮懸本多の略。髷を左右何れか一方へ倒したもの。歌舞伎俳優の一部に流行した。こゝでは左に倒してゐる。
○どううらの畫賛　羽織の胴裏に繪が書いて、それに賛がついてゐる。
○宗理　葛飾北齋。
○澤庵　東海寺の名僧澤庵和尚。
○柳は緑花は紅　柳緑花紅。物の天然のまゝにして少しも人工を加へざるにいふ。禪家にてはさとりを開きし形容。
○道理先生　心學の講義をする先生。中澤道二翁などを指す。
○摩利支天河岸　摩利支天は「深川永代寺門前仲町の南にあり」（江戸名所圖會）、その附近の河岸を云ふのである。

小橋へつき合た事もあるが、此頃は河岸をかへて町へ行きやうだ。あんまりさえねエやつさ。（ト、はなしの折から、使しの女来りてお定まりごとすみ、燈も紺打場とはづして、跡は喜之助一人り、火鉢ノかゝへ、灰の中へ五言絶句を火箸で書きちらし居たりしが、かたへに有ル枕の引出しの明き掛りてありければ、引出し見るに玉帳あり。開けて見ようとするせつ、おとまはやうじノつかひながら来り、此の帳を見て、）〔とま〕ヲヤ喜之さんなんでごせえす、おつたに見ろもんだやアねえ。アレマアこつちへおよこし。〔喜〕いゝわな、見せねえ。ナンダがうぎにいそがしいの。是れだやア病気ヲ付けるも尤だ。〔とま〕よしなせえ。きついしやれさ。（ト、玉帳ヲ引つたくるひやうしに、間より文一通を落す。喜之助手早くとらうとするを、おとまはよしなせえとたがひにうばひ合ふとたんに、中よりやぶれる。）〔喜〕ヲツト妙々、文がらの三の切れが残ッた。（ト、手に残たる文のはしをさし上げてよまんとする。よまれてはチトむづかしきすぢなれば、いろ／＼ごまかしかけども、喜之助に両手をしかれて、はたらかれず、）〔喜〕なんだかをかしくかくすだけ気がしれねえ。（ト、わらひながらおしひらき、）たゞ／＼さてはその折から、くれ／＼申しかたのたゞ／＼鳥居町の喜之助様必ず／＼まちがへなうつきだしの狂言になされ下されかし。くれ／＼も。（トよみ下す内、色青ざめ、くわつとせきくる胸撫でおろし、おとまを見つめて身をふるはし、しばらく言葉もなかりしが、何思ひけん物やはらか、）〔喜〕コレおとまさん。（しばらくして声のふるへを隠しながら、）エおとまさん。（おとまは詞なく、たゞうつむいて云分けを考へてゐる。）コウ是れにやア大かたふかい道理の有こつたらうが、モウかういふしぎになつちやア、どうかうの訳も聞たくねエ。ガ浮世といふものは面白いやうな、悲しいやうな、はかねえ物トハいひながら、おれが料簡もこんなだやア有ルめえと思つたが、けふの今で愛想がつきた。モウ／＼ふつつり思ひ切る。コレすつぱりと手ぎれいに、船宿前でつき出しねエ。ダガ去年中たがひにほつた此の片腕。ホンニ餘りのろい文句だが。蚊が喰ても字のあたりは撫さすつて辛抱

○小橋　土橋のことか。
○町　吉原。
○紺打場　深川遊廓の一つで、やゝ劣れるところ。
○玉帳　玉代を記入する帳面。
○病気ヲ付ける　病気と偽つて自ら休みをつけること。
○三の切れ　三の切りをもじる。三の切りとは義太夫浄瑠璃にて、三段目の最後の場をいひ、全篇中最も重要なる場面で、最も哀婉なるものである。
○つきだし　こゝは客に愛想盡しをして擯斥すること。

○出雲　出雲の大社。結びの神。

○松　松は太夫の異稱。

する。夫に引きかへ此の頃はそつちの腕の彫物は、とつくに消たと友達の噂。よもやとは思つても、やぼツたく改められもせず、ひよつとたき付られたのぢやア。見くびられるもしがねエから、だんまりで今日まですましたこ。モウかうなつちや、逆ねエ。縦へまんざくで有にしろ、こつちから定消すべエ。ト、そばに有り合ふ火鉢の中より、黒煙たつかた炭をはさみ出し、うで引きまくりてやきけさんとする。おとまはおどろき、兩手にすがりて、〔と〕コレ申喜之さん、そりやアあんまり短氣でごせえす。こつちの心もしらねエやうに。マアとつくりと氣を靜めて、わたいがいふ事を聞なせえし。〔喜〕やかましい。短氣もせんきも發らねエでどうするもんだエ。ト、うつむいて口をし涙。折から二階に大一座の廻りいたこ。〽わたしや出雲にとり殘されて男冥利につきたのか。〔と〕ホンニモウわたい程苦勞性な者はねえ。其の手紙の入譯も委しく咄せば、おめえの腹立も休まるこつたけれど、こんなに又物事が行違になつちやア跡のまつり。定めてお前は、わたいが憎くつて成りやすめエ。〔喜〕しれた事だア。〔と〕それだつて、お。〔喜〕やかましいわい。〇二上り〽譯も聞かずに腹立てさんす、夫はいちづぢやだまらんせ。〽松といふ字は木偏に公ヨ、きみに離てきが殘る。〔と〕今更おめえヲ何しに突だすの引のといふことがあるもんでごせえすか　おめえばつかりを頼にして、くるしい世辭をつかつたり、つらい苦界をおくツて居やす。又影物の事も、サウいひなはるを聞ちやア尤もとも何ともいはれやせん。一圖に思ひたすつちやア腹もたつから、とつくりとマア聞なせえし。成程つれ衆のいひなはる通り、よんどころねエ事があつて。ト、いひかねて只もぢ／＼。

おめえに、けふいはうか、今云はうかと、思ひ出してもどうもあんまりしがねえこつたから、つい一日々々とおくつて、今更云ひだし悪いこつたが、その彫物はけしやした。ト、聞くよりそばなる枕押取り、おとまがたぶさを引つつかんで、つゞけ打にぶちのめす。△此の内始終兩人だんまり。二上リ へぶたれたゝかれ※あへられもまれ、よごしにされて又つきだされては、何處で立ましよわしが身は。㊂ア、是もやつぱりおれが※こけから發たことだ。※むせえきたねエ古狸め、雨が降らうが槍が降らうが、内の首尾をば小女に賴んで、そんじよどこそこと拵へごとして出てくるのを、お袋は内に居てあんじ、※おひえもたんと下々へ著て、風引かぬやう頭巾ヲかぶつてゆきやれの何のと、お慈悲におまえてつき上り、只夢の間も通ひたく、是程までにのろく見られちやア、よつぽどおれもうはきなもんだ。ホンニ思ひだしやア、いつぞや※新市場の橋の下で行き違つた舟の内は、※新川邊の客だといふこと、しかも手前の處へくるさうだ。アあいつも※えり元はひかるやうだが。ト、少しとぎれて、ムヽ是れもいつたつてつまらねエ、兎角不孝の罰だと思ツて、つきだされてあきらめよう。ト、きれい盡しのせりふにて、※あくたいもなく、よほど色仕掛のしらちにて、かんしやくの思入ればかり、兩方うつむいてゐる。○ 二上リ へつらい勤めもおまへを便り、夫れに邪慳なことばかり。㊂ひそ〳〵聲にて、喜之さん、マアかういふ譯ヲ一ツ聞きねえ。たとへどんな目にあつても、わたやア一言もごせえせん。ト、耳へくちをよせれども一向ふりむかず。○ 二上リ へ心がらとはわしや云ひながら、ひよんな苦勞をするわいな。むりに喜之助が耳もとをとらへて、こんたんをさゝやく。按ずるに先段に述べたる、新川藤兵衞があらましを、面しろをかしくはなし、義理ゆゑつらいほりものをけしたること、親とおまへへ心づくし、み

○あへられる　あへるとは、料理で食品に加味品を混和することである。そして出來たものが「よごし」である。
○こけ　愚かなること。白痴。
○むせえ　穢（むさ）いの訛。
○おひえ　おひえ（御冷）。「つめた」とも云ひ、麻布の綿入の着物である。
○新市場　新石場であらう。
○新川邊の客　新川は酒問屋の群居せる所。
○えり元はひかる　垢で光つた衣服を着てゐる、貧客。
○あくたい　あくたれぐちの悪罵。

んな金からおこつたしぎ、わたいも大抵くらうだヨと、定めてさま／＼のこもり句有るべし。此の内こつそりのさし向ひなれば、鄰のまはりいたこにまぎれて、作者にもわからず、但し此の密談は諸通子の御すゐもじにあらんか。

〇へおまへばかりに苦勞をさせて、わしは苦勞をせぬかいナ。へ鳥にうたはれ鐘にはせかれ、夜著にもたれし思案顏。へつらやはかなや勤めの身なりや。心ない事うたがはれ。囯アレ鄰でうたふいたこの文句を聞きな、みんなわたいが心いきだヨ。囯おきやアがれ、しれたもんだ。藤兵衞が方から金を取つて、おれが名當で仕舞札を下げさせ、其上であいつヲつきだして見せようトハ。なんぼおれでも心もちが面白くねエ。人の寶の十兩で、仕舞つたつらも何のたのしみ。お爲ごかしのしよにんもいやだ。モウ／＼何にもいつてくれるな。其のかき文句もおそまきだア。〇二上リへかくのだますといはんすけれど、わしにかかれるぬしぢやない。囯ハテさう、疑りなはるならば、おめえへの面ばれに、藤兵衞さんをすつぱりとつきだすから、跡でわたいをつきだすとも、どうともしなせエ。さうしたら腹の立つこともごせえすめえ。どうで又おめえにつきだされちやア、とてもあきた浮世だから、生きてゐる氣ぢやアごせえせん。〇二上リへちゑもきりやうもない私ゆゑに、心つくせどあだになる。囯べら坊な事をいへ。その狂言の跡のでる内、金も命も寂滅だわ。けふ有つて明日ねえ命、去年の彫物も今年の燒原。どうのかうのと一ツ寸先は闇の浮世だ。

ト、すこしヅツあたり文句はいへども、先刻のみゝこすりにて、やうすはわかり、段々と心のうちで料簡してみれば、なる程といふ氣もつき、よもやといふ迷ひも出で、又かはゆいといふ情はかゝる深きなじみなれば、いふ

〇こもり句　色々と思ひのたけを籠めた文句

〇御すゐもじ　御推文字。御推察の女房詞。

〇鳥にうたはれ云々　曉方の鳥の聲や晨朝の鐘の音にせき立てられるきぬぎぬのやるせなさ。

〇仕舞札　紋日などに揚代金を拂つて女郎を一日買切にするとき、西の内の緘紙に「御仕舞」と書いて、内所又は引手茶屋の長押に張出す。これを仕舞札といふ。

〇しよにん　奴〔やつ〕といふやうな卑語

〇かき文句　欺き、たばかりの文句。

〇面ばれ　面目を晴らす。顏を立てる。

〇寂滅　佛語で生滅共になくなつて無爲寂靜になること。こゝに一切滅びてなくなつてしまふことの義。

〇みゝこすり　耳打ち。

○かべ紙　壁紙。小形の杉原紙。縦七寸横九寸許りのもので、鼻紙に用ひられた。
○小指をいはへてすゞの香宮　女郎が客に誠を示すため、小指をゆはへて剃刀で切落すことが行はれた。その切落した小指をすゞの香箱に入れたのでかういふのである。
○淺黄裏　無骨な田舎武士のことをいふ。
○うすば　薄刃庖丁。
○比與　卑怯の宛字。

もさらなり。されども中直りの切り小口もなければ、たゞやんはり、いとあしらつてゐる。〽三味の糸さへ三筋に分る、なぜにわからぬぬしの氣は。国は、縛りしあんを極め、かべ紙にて小よりをこしらへ、小ゆびをはへてかけ出さうとするすそをとらへて、コレどこへ行クのだ。国チツトあすこまで。圕あすこも爰も一寸でもやる事アならねエ。小指をいはへてすゞの香宮。むかしのこつた、よしにしろ。淺黄裏とは違だらう。ト、さきをくゞられて猶つまらず、そろそろ袂もとへすりいだし、胖風のかげ、くすね置きたる料紙場のうすばをもつて鼠のほどのし髪とり上ゲ、かきなでる間にふつつり切りて、何気なくふところへすわり、国ア、大脅かかゆい。ト、首をばらばらとふれば切髪ばつたりおちる。サアどうぞ堪忍して是を取てくんねエ。圕横目でじろり黙つて居る。国お心にやア叶ふめえが、折角わたいが胸はらしを、どうぞ納めてくんなせえ。圕いやだ。国なぜナ。圕なぜでも。国そりやア近頃比與でごぜえす　圕比與でも何でもいやだからいやだわい。ト、横の方を向き眼もとにつこり、国いらざアうつちやつて仕舞ふ。そんなにむきなことばつかり云ひなはるから解りやせん。圕うつちやる位のものだから、惜げなく切て見せたか。国エ、モおめえもしちツくどい。モウ是ほどあやまつたら、堪忍してくんなせえし。何の因果かこんねエに、ぶたれてもどうしても、しんそこおめえが。ト、喜之助が顔を覗きこんでつくづくながめ、エ、いつそじれツてえ。見ればみる程此のかほがにくいぞヨウ。ト、しつかり ——。折ふし鄰の二たりも仕舞ひと見えて、二たりへぶつもたゝくもしかるもおまへ、情かけるもぬしばかり。圕ア、こんなに愚痴に迷つたも、此のうつくしいしやつつらから。チヨツいめえましい。ト、引きよせて——此うつくしいしやつらとは、さすがにかはゆい情にして、ナント有がたき所ならずや。かく

の如きあだなるかたちに、魂天外にとばすもむりならず。若き心にないしようの辛苦までくみわけんとしては、ひくに引かれぬたて引きにて、おやぢの日玉ヲぬすみ、お袋のへそくりを引だしても、初仕舞の札ヲさげさせて見たく、また藤兵衛といふじやま者もあれば、どうぞしてつき出させんと、工面にかゝるも尤ぞかし。〔三〕ヲヤ〳〵いつそつめてえ――、――――、――――。アレあつかましいこりやアなんだエ。ト、喜之助が、――――、定てどこもかしこも――――、――なるべし。此ときに至ッて、〔唯兩人〕ヲヽさむい。の聲ばかりして混沌たる――うち。〔ぬれ六つの鐘〕ボヲン。〔作者〕もこいつはヘエヘン。

宵立の部

〔若イ者〕夜具包を肩にかけ、片手に蠟燭を二三挺持、コウお澤どん。〔女〕ふり返って、ヲヤなんだ。〔若〕お虎さんとおしづさんと口をかけてやんな、一チ座の衆がお出でなすッた。〔女〕フムかうと、今夜は二人りながら出て居なはるヨ、廻しでもよくば、舟宿衆しでえだ。〔若〕お馴染だからいゝわな。奥座敷で手の音、チヨン〳〵。〔女若〕アイ〳〵引。〔娘分〕しよく臺ヲおもさうに引さげて、吉兵衛どん見通しはあいたか。〔若〕イヽエふさがりでごぜえす。お初會のお三人は、中の八疊へいれ申なせえ。〔娘〕ソレお手がなるよ。〔大ぜい〕アイ〳〵引ハイ〳〵引。はるか見通しの鄰座敷には、客〔長五郎〕としは二十七八、中さび※の色男、めんうへだのやはらか裏に、太織さいとうじまの下著、黒の半えりはゞ廣なるに、花色繻子の帯ヲメ、くすべがは※の半くつに、花色もんぱ※の下タ足袋ヲはき、なめしがはの三日月形のたばこ入れに、くりから※の金物を打チ、鼠や張りの煙管をひねくり、大あぐらでゐる。人柄は、仕事師のかしらと見えて、月代中チばえニ當世はやりの丸びたひ、細いてふのさき※ヲ平ラなでにした處はどこの丁場でもぐつと口チのきけさうな風なり。かゝへげいしや〔つる吉〕めりやすへ云

○ぬれ六つ　くれ六つ（午后六時）に、ぬれ（色事）を掛けたもの。

○中さび　いゝかげんに粋な。

○くすべがは　松葉の煙に燻べて模様を白く置いた革。

○もんぱ　紋羽裏。けばが多くて柔かい綿布を以て足袋の裏としたもの。

○くりから　梵語。黒龍と譯す。岩の上に立てたる劍を、黒龍の卷きめぐりて、其切先を呑まんとし、其背に、火焰の燃えあがる象を描いたもの。

○細いてふのさき　細いいでふわけの刷毛先。（前出六七六頁）

ひたき心がず〳〵の、胸にせまるを云ひ殘す※めいき〳〵ゆらすそのふしに、わすれぬ君を※たたみざん。〔大ぜい〕ヤンヤア。〔長〕サア一ツのみな。〔つる〕とんだ口早に、チトお押へ。〔長〕マア〳〵。ト、盃をなげる。〔二〕猪牙で來なさい、※にたりはおそい。ヲヤふさつても鯛といふ古い洒落かネ。こりや※ふさりました、ハヽヽヽヽ。男げいしや但シめつかちの、ナ、ソレ〔たる次〕何レも御存じならんか。是はどうだいよ〳〵お取上げといふ處かネ。そこで一ツ※ちぐりをお肴。エヽお取上げ〳〵お取上げ名代。〔二〕ソリヤアなんだ。〔二〕千鳥糖名代ス。〔二〕ヲヤ〳〵ホヽヽヽ。大ぜい笑ふ。〔二〕そんならお取上げの駄賃か。ソレ、ナ、カノ戻りがけの駄賃、ナント新らしからう。〔皆々〕ハヽヽヽハヽヽヽヽ。〔長〕こいつアつらい。ト、盃ヲとり上げる。〔二〕つぐ。〔二〕呑みほして胸をたゝきながら、アヽモウのめねえ〳〵。〔二〕さやうなら※のめんの蒙りまして、一ツいたゞきませう。ト、三みせんを抱へてゐながら杯をうける。〔二〕ドレ〳〵おしやく。〔二〕コリヤアおそれやす。〔二〕ナニサぬしとおれが中だ物を、ネエだんな。ト、妙な顔をする。〔長〕違えねへまん中だ。〔二〕併し目ツかちぢやアあやまりますねエ。〔二〕ヲヤ此子は大それた事をいんなんちやからか、とつぴんちやん。〔長〕又※おかぶの唐人か。〔二〕ヲツト夫れは※いはずかたらず、ナ。〔二〕へわが心チヽチン〳〵チかね。〔二〕コウたか公ぬしやア湯島の時分からみるのに、いつも變らねエの。その身振は※二丁町にも有るめえ。〔二〕イヤ是は恐れます。此内盃事にてげいしやのむだ口さま〴〵、あれども、お定まりなれば爰に略す。△とゞつる吉は※つぎざをはづして、三絃箱へ入れ、廊下へつき出し、〔二人〕さやうなら御機嫌よう。〔つる〕モシおとまさんは廻しでごせえますかエ。〔二〕ム、又※から〳〵だ。〔二〕へエそりやおさみしうごせえませう。

○めいき〳〵ゆらす　名木（香木）薫ゆらすにて、名香を焼き薫ゆらすのである。
○たゝみざん　盃を畳の上に伏せ、その落ちた所から、畳の端まで編目を數へ、その丁半の數によつて占ひ事をするのである。
○にたり　荷足舟。
○ふさる　盃が下へ伏さる。因にふさつても鯛は「腐つても鯛」の洒落。
○ちぐり　ちぐるを名詞に扱つたもの。ちぐるは地口を強ひて動詞としたものである。
○のめんの蒙りまして　御免を蒙りまして。前の、のめねえ〳〵を受けての地口。
○おかぶの唐人か　お得意の唐人言葉か。
○いはずかたらずわが心　長唄「京鹿子娘道成寺」の詞。
○二丁町　堺町、葺屋町に二芝居小屋のあつた所。
○つぎざを　三味線の棹の繼いであるのを云ふ。
○から〳〵　廻しから車の廻る音を持ち出し、空「から」に通ぜしめた。

○せく　はゞむ。邪魔にする。
○ひとめんく　一工面。
○おたいこ　取卷き。
○いりあひ　入相の鐘。
○かはらねえ　往來の舟がうまく行違ふことが出來ない。
○はりこのしめ繩　張子でしめ繩の形にこしらへたもの。
○おつれまをしな　御案内なさい。
○いやナ　言やあなにて、云ひなさい。
○癇癪で靑る　癇癪を起して靑筋を立てること、酒をあふることの兩方。
○きぜん　氣前〔きまへ〕の音讀。
○さがらねえわ　さがるは樓に登るに對して家へ歸るのをいふ。
○裾研　裾繼。深川七場所の一。
○かな棒ひいた　みんなことを吹聽したか。
○くらげえ　鞍替へ。仕込みの家を替へる。

[巨]モシとかく女は氣がつきますネ。　ト、すてぜりふにて障子をたて、皆々歸る。　[長]みんな休みねえ。　▲此の客一體工面はわるけれども、此の頃は子供やまでせく噂あるゆゑ、女郎おとまがやせがまんにて、ひとめんくのげいしやをかひ、或はほうばい女郎をおたいこに買せなどして、内の日をくろめる。是れ皆おとまひとりのやりくりなり。

（　）かくて八幡のいりあひに、こぎよする舟。もどる舟「ヲイかはらねえ〳〵の聲、くゞり戸の音と共にかまびすく、神棚の十二燈はりこのしめ繩にかゞやき、ふせだまの子供、帳場のわきに居ならびて、耳ツこすりをすれば、口のかゝる藝者はしごの下タにしやがんで、音〆ヲ合はせ、娘分のおつれまをしなは、簪と褄とを、内中に引きずるも、早よひどまりの床納て五ツのひやうし木カチ〳〵。

[長九郎]酒はねエか。[illegible]よしねえ。[長]ナゼ。ひさしいもんだ。[巨]毒だといふのに。[長]ばかアいやナ、好きな酒をばやめろぢやないが、茶碗酒をばやめさんせといふ潮來があらア。夫だからおらアぐい呑はしねえ。てめえこそ時々癇癪で靑るぢやアねエか。[巨]エヽきついしやれさ。[長]まだ歯もはえねエ。[巨]よしねえ、いゝきぜんな。[長]ナンダあんまりしかるなエ、此頃は久しく、さがらねえわ。[巨]しれたことサ。誰がさがりを承知する物か。コレよくこんちう裾研へ行つたの。[長]フウ、ウンニヤしらねえ。[巨]ナニしらねエ事が有ルもんか。隱なはんな、よくしつてゐるヨ。ト、こそぐりかゝる。[長]アヽあやまつた〳〵、ムヽありやアなんだア。エエなによ、友達のつき合で、せうことなしに上島へ行たのだ。だがかな棒ひいた。[巨]誰でもサ、ほんにむだアのけて、此頃も子供屋のをばさんがしみ〴〵と異見したよ。夫だつて又、人の異見を恐がる位なら、こんなにはだかにまでなつて、是までおめえを呼とげる事はならねえわな。どうするもんか、かうなつちやアわたいも意地づくだから、たとへくら

げえされるツても、はなれやアしねエ。いつぞやも何やかや、あんまり考へたらば、いつそ氣色が悪くなつたから、※用事を付て引込で居やした。さうするとモウ爰の内を始め、なんのかのとやかましく云ふし、モウ〳〵何の事も思はねえ。なぜこんなにはかねエやら、何角に付ても此頃は、一日も早く行きたくツてならねえ。まだも便になるのはお卷さんばかりだアな。ホンニモウあの子は兄弟分とは云ながら、いつそ情があるよ。ト、しんのはなし、〔長〕は始終ふさいで、だん〳〵まりなりしが、〔長〕たばこを吸ひ付ながら、愚癡なことヲいやな、てめえらしくもねえ、どうするもんだ。よしんば又※えこぢな事をぬかすがさいご、※やてえ骨をたゝませて、ばつた、こほろぎの寢處にして、女郎の有ッた古跡には、ぺん〳〵草に※かやつり草、※角力取草、※女郎花の花の盛りを見せてやるべエ。〔三〕アレサ大きな聲をしなさんな。ト、しかられて少し小聲になり、〔長〕何をいふも借だらけだから初らねえ。そりやアさうと、こんぢう頼んだ事をどうしてくれる。いつか中の櫛と※しのぎも、色々面工して見たが、※てつこにおひねエから、漸々※利上げでくゝり付た。アヽ何にしろ今年は初中※ひつてんだから、さつぱり出入りはできねえ。〔三〕其事もわたいが呑込で居るヨ。それについてはなしがあつたつけ。おめえもしつてる、ソレ新川の客人の。〔長〕だれ。〔三〕ソレ藤印さ。〔長〕ムヽあいつがどうした。〔三〕此のごろ内度々くるからいろいろと※つうくつしてノ、マア耳をだしな。ト、さゝやく、〔三〕ノ。〔長〕ムヽ〳〵といふ聲ばかり、しばらくして、〔三〕といふかたちだから漸々五兩トソシテ外に壹兩貳分もらつたが、此頃は金八どんが居ねえから、おめえのく

○用事を付て　休業して。
○えこぢ　強情。
○やてえ骨を云々　此家の屋體骨、身上を衰微させて、野原にしてしまふぞ。
○かやつり草　高さ一二尺の草で、莖が三稜形をなし、小兒はこれを裂き廣げて、蚊帳をつる眞似をして遊ぶ。はますげに似て夏に花を開く。
○角力取草　前出「雑草」參照。〔六九四頁〕
○女郎花　秋の七草の一。以上野生の雑草を出して荒れたる様を表す。
○しのぎ　笄。
○てつこにおひねエ　手にあはない。
○利上げ　質物・借錢の期限が滿ちた時、利息のみ拂つて、更に期限を延ばすこと。又利率を高くするをもいふ。
○ひつてん　貧乏。
○つうくつ　痛屈にて、心痛する意であらう。

○あげさげ　代りの品物を入質して皮羽織を下ろして來るないへるか。

○よい〳〵　ふら〳〵してゐる。體がしつかりしないこと。

○建前　家屋の建築で、柱、梁などを組立てること。

るのを待てゐたヨ。是でどうぞ借方をちつとづつもなすやうにしねえ。さうしねえきやア此の末おめえの所え行くツても、猶つまらねえぢやアねエか。〔長〕ム丶、其奴ア、面黒い。そいつが有りヤア餘程い丶。實にモウ此恩はわすれねえ。〔こ〕恩も何もいらねえ、こりやアする筈のこつた物ヲ。しかしおめえ早呑込だから氣になるヨ。夫を又むだ遣ひニしなはんな、命から二番目と云ふ金だによ。〔長〕べらぼういふな、うはきらしい。コウトあいつが所え是と、ム丶、かうだから、此たらず前は、又こつちに、さんだんがあらア。い丶〳〵。（少し考へて、）是からト、※あげさげをして皮羽織を引ださにやアならねえ。〔こ〕おめえ有ルぢやアねえか。〔長〕アリヤアふだん着だ。〔こ〕そしてまだ鳥居丁から來る客人にも、チツトばかりあてておいたが、コリヤアどうも初仕舞の客だから、ちつとしにくい。〔長〕でえぶい丶鳥がか丶つたナ、何か喜之とやらか。畜生めエ金持にやア何がなる。〔こ〕貧乏人にやア何がなるだ。ホンニおめえか丶さんの病氣は此頃はどうだえ。〔長〕まだよい〳〵※だア。わりい時にお袋の病氣だから、一チベえ鹽梅しきがわりい。〔こ〕おまんまは能くあがんなはるかエ。〔長〕ム丶、ちつとづつ喰るさうだ。〔こ〕さうだぢやアねえ、おめえもちつと氣をつけなせえ。内には誰を付ておきなはる。〔長〕ム丶やとひば丶アをしてもおんなじこつたから、丁場へ出た跡にやア瘡をかいてる野郎共や、※建前からおツこちた居候や、何かにあてがつて置くから、どうでろくな事はしねえのさ。〔こ〕夫ぢやアさつぱり氣が付くめえのう。〔長〕ナニ氣がつくもんか。

○こつぱ喧嘩　こつぱは木端で、小さな、つまらない喧嘩の事、大工などから殊にさういふのである。

○しがく　仕覺。才覺。

○ふさぎの蟲　くさぎの蟲の洒落。「くさぎの蟲や赤蛙」と呼び歩いて子供の癇の藥を賣つたものだ。

○日なし　日になし崩しをする借金。

こつは喧嘩をしちやア酒を喰ふことばつかり考えてらア。国それについても、早くおめえの所へ行きてえヨ。こんな時が女房の役だのに、何をいつても金にかはれた身の上だから、しがくの仕様もねえ。正直わたやア、實のかゝさんのわづらふよりは、氣になつてならねエ。あつちこつちを思つて見ても、おめえもチツトおとなしくなんなはらねえきやアすまねえよ。園ム、おれも禁酒でもしよう。国アレさういへばそんな堅いことを云ひなはる、何も夫程にせずともいゝわな。園ておめえがそんなにあんじて異るに、おらアよつ程不孝もんだ。けふ此頃は己が氣でもつまらねえやうだ。ア、いつそ早く死ぬがましだらう。ト、うつむいて大きにふさぐ。国かうしていろんなことを思ふせるか、常不斷おめえの所え行た夢を見るヨ。ト是れもふさぎて、しばらくとぎれる。園ア、ふさいだ〱、ふさぎの蟲や赤蛙だ。おれもモウお袋が承知だから、はやく引こませて見てえ。国きげんをなほし、さうしたら、いろんな人が來て、けん〱わばつかり有だらうの。国何ンのきつい事が有もんか。喧嘩を怖がつて、おいらがかゝアになれるもんか。眉間へ三寸とびぐちをぶつ込んだの、出刃庖丁で、どてつ腹をゑぐるといふことは、馴れツこになつちやア屁とも思はねえ。ア、モウねよう。国ホンニ頭になるのも附合のうるせえもんだネ。つかねえこつたが、お前日なしの口はどうかたづけた。園だまつてゐる。国顔をのぞいて見て、ヲヤおめえねなはるか、起きなせえし。ト、せなかをつめり上げる。園よせエ〱、ゆんべ親分が所で、子方のやつらが中直りをしたから、よつぴてえねねエ。国いやだヨ情

のねえ。まだ咄が有ルから、ねかしやアしねえ。ト、ゆすぶれどもしやア〳〵としてゐる。はなヲつまんだり、わきの下ヲこそぐりたり、いろ〳〵して横にねかさぬじやまヲする。〔長〕コレ、※をがまア〳〵、ちつとねかしてくれ。今夜はなほさア。〔三〕※直す工面があるか。※又こつちかぶりだらう。〔長〕しれたこつた。〔三〕夫だから、猶ねかさねえ。〔長〕そんならどうとも勝手にしろ。ト、うしろを向いて春中合はせ、ちわをする間もはや四ツの鐘。〔船頭〕ハイお迎ひでございます。

朝直の部
宵泊の部

追而後編ニ奉入御覧候

趣向は出來あれども丁數餘れるをいとひこゝに不レ著。

作者曰　予おとまが出所をかんがみるに、定めて本所邊の片外れに、御目印青紙の と刷毛書の水油有りの障子ヲ立たる、九尺店のろじ口、本道外科と割りて書いたる醫者の表札、※さんげの梵典と共に、雨晒となり、屑屋葺の棟割に蛇の這出る流し元、大やさん鐵棒を引きずり、火の用心ト觸れば、鄰の飴賣向ふの神道者に雇はれ、※はつち坊主の木魚、花賣の火打筥と朝飯を爭ひ、神儒佛もみ込みの大長屋に住む親仁といへるは、屑ワイ〳〵にその日を送り、夜はよもすがらおでん※白菊鹽梅よしも、内の工面は鹽梅わるく、母親の賃仕事も、お花荒神松のりやの間を見合はせ、いとけなき時は※めけたらたん切大ころばしを口にほうばり、うどんやの汁つぎをもつて、醬油を六文、壹文の糠袋、ふすま磨きの小娘

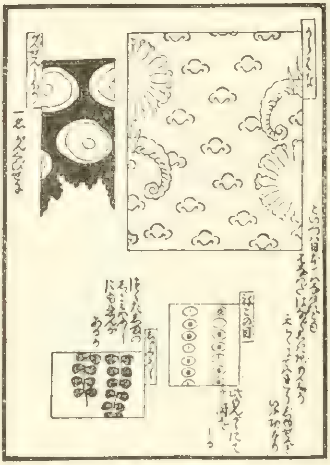
○をがまア　拜む。
○なほす　玉代をつゞけてつける。
○こつちかぶり　こちらに持たせる。
○本道外科　内科外科といふに同じ。
○さんげ〳〵の梵典　梵典は梵字の經典であるが、此處に梵天の意にて、さんげさんげさいつてお祓をする幣束を言へるか。
○はつち坊主　鉢坊主。托鉢する乞食僧の俗稱。
○白菊　酒の名。
○めけたらたん切大ころばし　飴。

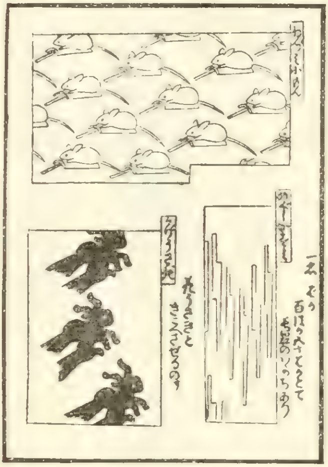
○縮緬の二布　女郎は紺縮緬の腰卷をしてゐたのでかういつた。

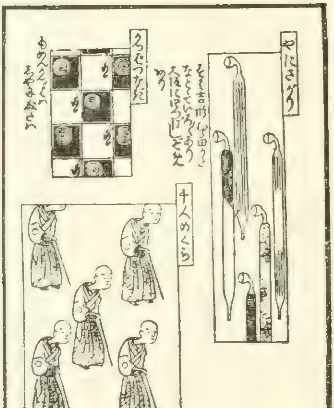
なりしも、十五といへる春のころ、親仁が中風の爲に、終には金にかへられ、そも成長りてびろうどの半えり、縮緬の二布錦々たるといへども、心は生來をうしなはず、先に著はしたる新川の件頭、鳥居町の息子株を廢して、かゝる貧窮の俠客に實情を盡す。是なるか、非なるか、嗚呼是非もねえ。實や、色は思案の外とはいへど、迷ふといふも、悟るといふも、色道の識不識に可依か。世界の通君子、ソレさつしておみなんし。

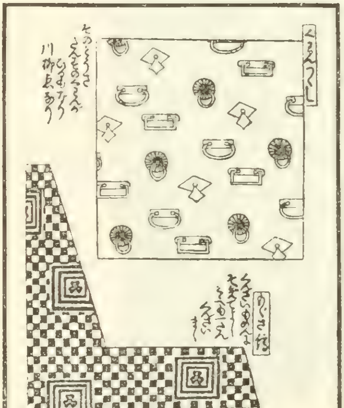
（参考）

小紋雅話



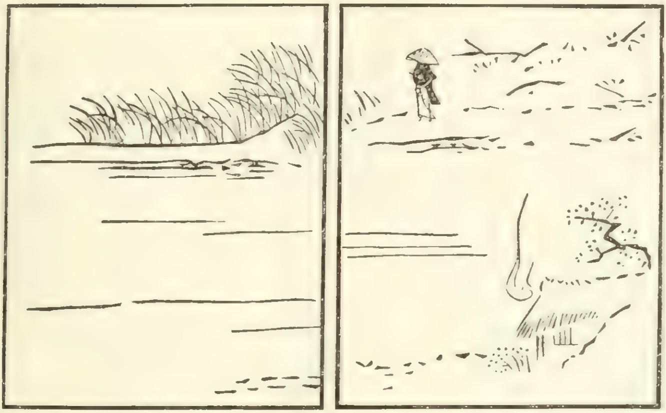


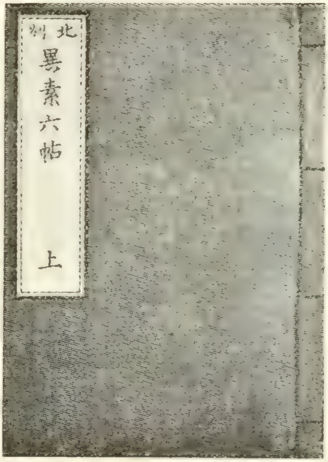


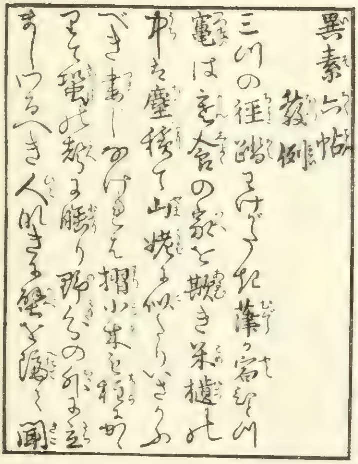


（參考）

異素六帖






異素六帖
發例

（參考）

客衆肝照子

人情本

人情本概説

江戸小説の最後として、人情本を度外するわけにはゆかない。しかも人情本は明治小説への連鎖の役をつとめてゐるから、よし傑作は甚だ少いにせよ、これを無視することは出來ない。赤本、黒本から黄表紙に進んだ草雙紙は、遂に合卷物となつたと同じく、人情本も洒落本の延長と見るべきであらう。洒落本の生命は通にあり、穿ちにあり、寫實的描寫にあつたが、洒落本と云はれる通りに洒落た、小意氣な本で、片々たる小冊子に過ぎない。或事件を取扱つたにしても、長い時期の移り易りを描いたものではない。多くは一夜の、夕暮れから更け行く夜、東雲の曉の體たらくを寫すとか、よし事件の推移を寫すことがあつても、其の場面々々を描くに過ぎない。特に其の天地は花明柳暗の巷であるから、折花攀柳の蕩兒には歡迎されても、決して一般向きではなかつた。寛政十年板の梅暮里谷峨の『傾城買二筋道』は翌年後編として、『廓の癖』を出し、翌々年に三編『宵の程』を出し、同じ作者の『五甲任俠甲子夜話』（享和元年板）が翌年後編として、『啞意処思』を出し、又『傾城買中夢盜汗』（享和元年板）の後編として翌年『妓情返夢解』を出し、『契情買言告鳥』及後編『廓の櫻』を享和元年に出し、十返舍一九が享和二年に『起承轉合』及後編『遊冶郎』を出し『吉原談語』

『梅暦發端　惠之花　前編表紙』

（享和二年版）後編『夜廓行燈』（出板年月不詳）を出したやうに、洒落本も一冊だけでは足らずして、二編三編を續出すること

『梅曆發端惠之花』後編口繪

となつて來た。此傾向と花柳界以外の人情風俗をも取扱ひ、義理と人情との衝突を主題としようとする趨勢は、遂に人情本の興起を來すに至つた。人情本の描くところは深刻でなく、おしなべて淺薄で、又千篇一律の嫌ひがないではない。京傳や三馬のやうな觀察の奇警な、筆鋒の犀利なものは當時なかつたので、人情本として傑れた作が出なかつたのも當然である。然し洒落本が人情本に轉向して來たのは、一の進歩であつたし、之に依りて我等は幕末の江戸風俗を覗ふことも出來る。一概に人情本をけなしつけるのは蓋し苛酷である。

文政二年、十返舍一九は『清談峰の初花』を著はしたが、人情本としては初期のものに屬する。これよりして一筆庵可候卽ち溪齋英泉、鼻山人、志滿山人、二世楚滿人卽ち爲永春水、玉川亭調布、瀨川路考等相ついで人情本を公けにしたが、取立てゝ云ふべきものはない。文政十二年、曲山人は司馬山人の號を以て、『其儘人情女大學』前編、翌天保元年、其の後編を公けにしたが、翌々天保二年、曲山人の名を以て、『金五郎小さん假名文章娘節用』初二編、同五年三編を著はしたが、此書一たび出でて世間の好評を博したので、天保三年、爲永春水は『春色梅兒與美』初二編を著はし、これ亦世の喝采を得た。斯くて人情本は民衆向きの讀物として流行を來し、爲永春水は學問もなく、文

才も乏しく、作者としての良心も缺けてゐたが、人情本界に於ける寵兒となり、「狂訓亭曰く」と註して道德の美名の下に、教訓がましきことを言ひながら、風俗上忌はしきことを盛んに記述して、肉感的挑發を敢てしてゐたので、遂に天保十三年、老中水野越前守忠邦の改革に際し、春水は手鎖の刑を受け、版元七名は所得金を沒收せられ、各々過料五貫文づつを課せられ、板木は取上げられて削られ、書物は燒き捨てられるの極刑に處せられた。寛政年度の洒落本の禁止と同樣で、是れよりして後は、一々檢閲を受けることゝなり、人情本は頓に凋落することゝなつた。春水の門人松亭金水は此間に於て多くの人情本を著はしてゐるが、特に推稱すべき作物はない。

此には人情本の代表作として、『小さん金五郎假名文章娘節用』を擧げた。

解題

小さん金五郎假名文章娘節用

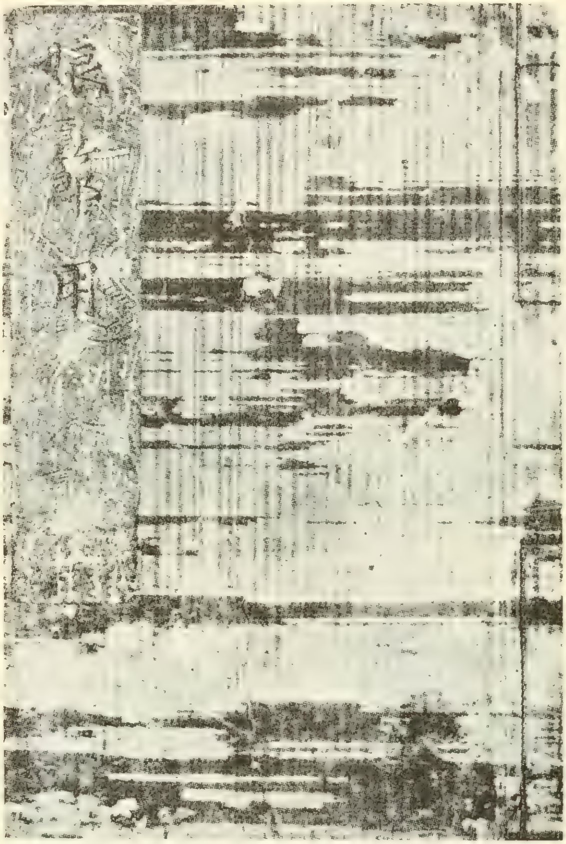
此書は曲山人の作である。曲山人の作中では本書が最も有名で、末は目出たし〳〵に終つてゐるにせよ、一つの悲戀情話である。しかしこれとても隨分無理な節がある。小さんの父母も、金五郎の母も早く歿してゐるが、それは善いとしても、お鶴お龜の姉妹が一人は遊女として、一人は藝妓として同じ廓に身を沈め、金五郎にめぐり合ふなど餘りにこしらへ過ぎて、不自然である。但し小さん自殺後の悲話は惻々として卒讀するに忍びない。

一體小さん金五郎の情話は上方種で、元祿十四年九月、島の内綿屋の遊女（島の内では風呂屋女、卽ち呂州）小さんが角の芝居加茂川のしほ座の抱へ役者金屋金五郎と情死を遂げた。此心中一件を取扱つたものには、宇治加賀掾の『難波役者評判』があり、地唄に『金五郎』がある。

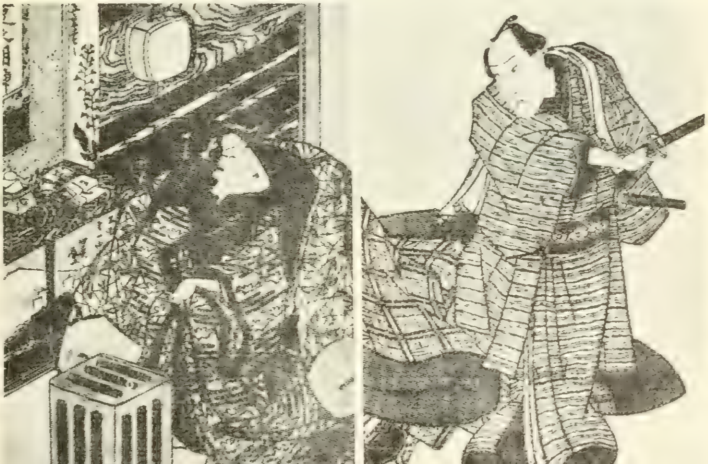
これが江戸に書き替へられて『東都名物錦繪始』となり、文化八年春中村座で上演された。本書は此高名な心中男女の名を取りて別殊の趣向を立てたのである。作者曲山人は司馬山人とも云ひ、筑波仙橘、三文舍自樂などの別號がある。文も書畫も善くしたが、惜い事に蚤世したと云ふ。『人情共儘女大學』『娘太平記操早引』初編、『小さん金五郎假名文章娘節用』の續編として、『清談若緑』などの著作がある。

小さん
金五郎

假名文章娘節用



曲山人補綴



○出雲の御社　俗說に出雲の大社に神々が集つて男女の赤繩を結ぶといふことが言ひならはしてある。然し出雲の大社と緣結に關係はない。同國にある八重垣神社は素戔嗚尊と奇稻田媛を祀つてあるから、これこそ緣結びの神である。

○相模出生　江戸時代では相模は多く下女を輸出してゐる。故に川柳では相模は下女の代名詞として用ひられ、「かぶり縦にふる相模の女」といふやうな俗諺さへもある。

○芋田樂　親子刺し。

○損者　尊者に通ず。

○びんづる　賓頭盧尊者。禿頭の義に用ふ。

○むしろやぶり　勝手次第。放縱。また老人にて精力絕倫なるを云ふ。

○帶屋の長右衛門　一桂川連理柵一の淨瑠璃にて有名であるが、實は狂言綺語に過ぎない。實說は長右衛門が少女お半を賴まれて大阪へ連れて行かうとしたが時刻を誤り、一刻早く京を出發したので夜がまだ明けず、途にて强盜に出逢ひ、慘殺せられて、遺骸を桂川に投げこまれたのである。

○櫻木　櫻の木へ板下を彫むから、こゝでは出版することを云ふ。

そも〳〵男女のなからひは、八百萬の神達の、※出雲の御社に群れ集ひて、結ぶえにしに様々なる竈の前の三介が、※相模出生のおさん殿と、物置の出合の國訛、片言交りの口說事、寡婦と養子の※芋田樂、喰はぬは※損者の※びんづる隱居が、※むしろやぶりの女狂ひ、あるは※帶屋の長右衛門が、老實をして笥入の、お半の壺へくらひ込み、浮名を桂川に流せしも、皆こと〴〵く緣なるべし。こゝにあらはす一部の冊子は、いかなる人の筆に稿りけん、小三金五郎が一期の奇譚を、いと長々しく綴りたるを、書肆のもて來て、補ひてよと、需めにしたがひ、をこがましくも、いさゝかこれに筆を加へて、※櫻木に壽くこととはなりぬ。

文政拾四年辛卯孟陽

江戸　文盲短齋　しるす

○大山石尊　相模國中郡にある大山阿夫利神社、もと大山寺がありて別當をした。眞言宗修驗道に屬し、不動堂あり、前堂と奥院とがある。神體は石であるから石尊と稱し、諸人の崇敬するところとなり、太刀を奉納するを例とした。（「石尊參り」七二頁）
○長刀　草履の緒に紙を卷かないのを冷飯草履と云ふ。其の穿きくづれて長くのびたのを長刀草履と云ふ。
○矢場　揚弓場。
○御側　主君のそばに仕ふる人。腰元。そばめ（側女）。
○密話　さゝめきごと。ひそ／＼はなし。ないしようごと。
○皇都　京都。
○三筋町　京都島原の傾城町をいふ。「雍州府志」に「方二町餘、其内有三條街衢、故謂三筋町」とある。

小さん金五郎　假名文章娘節用　前編上卷

ほつたん

太刀は大山石尊の、さゝげ物に納まれば、長刀は冷飯の、草履に其の名を止めたり。弓は矢場のあねさんが、活業の助となれる靜けき御代の事になん。斯波家の藩中に、假名家文字之進といへる者あり。二人の男子ありけるが、兄は文之丞と云ひ、弟は文次郎と喚びなして、兩人ともに文武の道を、常に勵みて勤めしが、兄文之丞はいつしかに、奥勤めの御側玉章と云へる、容貌よき女と人知れず、契りをこめて語らひしが、日にまし互に思ひ慕りて、忍び／＼の密話に、玉章はいつか只ならぬ、懷妊の身となりけるにぞ、この事今にも現はれなば、とても添ふ事なり難しと、思へば二人密かに語らひ、ある夜館を忍び出で、少しのしるべを便りにして、難波をさして上りつゝ、彼地此方をさまよひて、思はしからぬ日を送れば、この地にをりても要なき事と、それより皇都へ赴きて、三筋町のほとりに、さゝやかなる家を借りて、學文劍法の指南をしつゝ、月日をこゝにおくりしが、もとよりその技に勝れたれば、わづかのうちに、弟子のあまた付いて繁昌しければ、おのづか

ら金銀の融通もよければ、些※とづつの金を人に貸しなどして、その利を取りて不足なく、暮す程に月滿ちて、妻はやす〳〵と玉の如き、男子を產み出しければ、名を金五郎とよびなして、蝶よ花よと育つるうち、滿つれば缺くる世のならひ、妻は產後肥立たぬ上に、あしき風を引きそへて、醫療手を盡すといへども、その驗※更になく、つひに無※常の風にさそはれ、冥途の旅に赴きぬ。文之丞はたよりに思ふ妻に別れて、今更に悲しみやる方なしといへども、いかんともすべきやうなければ、泣く〳〵野※邊の送りをなして、跡ねんごろに弔ひけり。斯かりしほどに幼兒を、乳なくては育てがたしと、乳母をかゝへ養育させ、只金五郎を手の中※の玉の如くにいとほしみて、光※陰の過つをかぞへけり。こゝに又珠※數屋町に、古鐵買ひの六兵衛とて、夫婦かすかに暮す者あり。年ごろ子の無かりしかば、つねに是れを深くなげき、神佛に祈りし故、その信心の通じたりけん、妻は今年四十歲にあまりて、初めて女子を儲けしかば、夫婦の喜び大かたならず、名さへいはうてお鶴と號び、いつくしみ育つるうち、妻はふたゝび妊身になりて、次の年また女子を產みぬ。しかるに今度は養生の惡しかりしにや、四十の上の年※子の事故、おのづから血※心おとろへ循環せざるにや、惡血さへもおりかねて、あと※腹のしきりにかぶ※り、そのなやみの堪へ難きと、心の疲れに養生かなはず、つひに空しくなりにけり。こゝにおいて六兵衛は、子なきを神や佛に祈り、二人まで子をまうけしに、今はた思ひがけもなく、妻は子を捨て亡靈の、數に入り

○驗　しるし。功驗。
○無常　梵語 Anitya の譯語。世上一切の事物が絕えず生滅輪廻して常住することなきをいふ。
○野邊の送り　葬送。
○手の中の玉　子供を愛することを掌中の珠の如きの意。支那唐の詩人杜甫の句に「掌中探見一珠新」とある。
○光陰　光は日、陰は月。支那唐の李白の「春夜宴二桃李園一序」に「光陰者百代之過客」とあり、『顏氏家訓』に「光陰惜むべし、これを逝く水に譬ふ」とある。
○珠數屋町　京都市下京區正面通油小路西入ル。今の京都驛に近く、その東北方。
○年子　去年生れて又今年生れるを云ふ。
○血心　血液心臟。
○あと腹　產後の腹。
○かぶる　催す。

○はぐくむ　育てる。
○あぢきなき　面白くない。

たる身の當惑に、歎くより外なかりしを、近所の者にいさめられ、まづ亡骸は取り納めても、納まりかねし胸のうちに、とやかく思ひつゞければ、貧しき暮しに男の手一つ、いかにして二人の子をば、育てやうもなかりし故、心を鬼とも蛇ともなし、藪へなと子を捨てんかと、思ふまでに苦しみて、一日々々と暮しけり。さるを假名家文之丞は傳へ聞きて、おのが身に引きくらべては、捨て置きがたく、今不自由なく暮す故、當歳の子を親知らずに、貰ひうけて育てなば、その親の手も少しは輕くなりもやせんと、人づてにこの事を云ひ入れて、妹娘を貰ひうけ、名をお龜となづけ、また幾許の金を六兵衛に送り、姉なる娘をはぐくみたまへと情ある深切に、六兵衛はいたく喜び、娘が行末ふかく憑み、これより後、惠まれし金を少々お鶴に添へて、さる家へ里につかはし、あぢきなき世を送りけり。さればまた吾妻なる、假名家が家には文之丞が、不義なして家出せしかば、文字之進は怒りつ悔みつ、憎からぬ倅といへども、世間のおもはく上への聞え、親の名を出す不孝の罪、打捨てもおかれねば、これ等の趣主君へ達し、文之丞を勘當なし、弟文次郎に家督を譲り、嫁を迎へて是れに娶合はせ、その身は隱居し、名を白翁と改めて暮すうち、文次郎夫婦の中に、一人の女兒を儲けけり。是れにつけても文字之進は、文之丞の事をりふしは、何かにつけてうち案じ、思ひ出しつゝほのかに聞くに、今は花洛に住み馴れて、男子持ちて不足なく、暮すと人の風便ゆゑ、案じの胸も安まりて、ゆく〳〵は文之丞が子

を文次郎が娘に娶合はせ、家をゆづらば血すぢも絶えずと、心に思ひゐたりけり。

第一回

されば月日に關守なくて、文之丞が一子金五郎は、今年十七歳、お龜は十五の春となりしが、二人ともに天性の美男美女にして、華洛廣しといへども、たぐひ稀なる容顔は、梅と櫻の婀娜くらべ、劣らずまさらぬ風情なり。文之丞はこのとしごろ、古郷を離れ遠き都に、世を送るそのうちも、二人まで子をまうけ、何不足なき身のうへにも、十年あまり過ぎしころ、※鎌倉の家をぬけ出でて、父のところへ便りさへ、ならねばいとゞなつかしく、子を持つて知る親の恩、報じがたきを口惜しく、思ふものから考へ見れば、主家の掟を破りつゝ、妻と不義して出奔せしかど、今にも詫びの叶ひなば、再び主家へ立歸る、事もあらんと行末を、かれ是れ思ひ合はすにぞ、早くより金五郎には、文學武術を教へしに、もとよりさかしきうまれ故、一を聞いて萬を知る、文武の才に長けたれば、幾程もなく上達して、今ははや金五郎は、武士の道くらからず、殊に和歌、※連俳、茶の湯、挿花のたぐひまで、人なみなみより勝れたる、よき壯士とはなりにけり。お龜もまた世に珍らしき、發明の生まれにて、文よみ歌よみ手習ふ道は更なり、物たち縫針の技藝に勝れ、琴三味せんの調べさへ、いと美しく何にまれ、女子の道にくらからず、その生立も頼もしく、人もうら

○鎌倉　江戸時代の小說では、わざと江戸の名稱を避けて、鎌倉と云ふならはしがあつた。此書の初に斯波家とあるのも、足利氏の三管領の一なる斯波氏の名を用ひたのである。

○連俳　連歌俳諧。

○おぼこ育ち　世なれず初ひ〳〵しく育つた事。

やむばかりなれば、文之丞は何とぞして、古郷の父に勘當わびて、子どもの顔を見せまほしと、人を頼みてつど〳〵に、父白翁にわびたりける。鎌倉には白翁も、總領の文之丞が、身のいたづらから家出して、今は花洛に相應に、文學武藝を師範しつ、不自由なく暮す上に、孫まで出來しと聞きつるが、いかなるさまに生ひ立つや、尋ねまほしと思ふ折から、人づてにて文之丞より、わび言を云ひ入れければ、白翁は、嬉しさひとかたならねど、いつたん主君へ勘當と、披露せし身をたやすくは、許す事もならざれば、その中首尾を見つくろひ、君へねがひて出入をさせん、文通のみは苦しからず、又孫の金五郎は、罪なき身ゆゑ幸ひに、文次郎に男子なければ、迎へをつかはしこなたへ引取り、ゆく〳〵は假名家の家名を相續さすほどに、支度をとゝのへ待つべしと、返事に委細を聞くよりも、文之丞は大いに喜び、わが身の出入は叶はずとも、倅を本家へ遣はすは、この上もなき事なりと、金五郎を近くまねき、鎌倉の事くはしく語り、日あらず迎への來るをまちて、鎌倉表へくだるべし、と聞いて金五郎は今更に、思ひがけなく本家を繼ぐは、身の本まうと云ひながら、一人の親をのこしおき、そのうへ子どもの時よりして、行末をたがひに夫婦ぞと、胸に思ひしお龜にも、別れん事の心憂く、いまだ枕はかはさねど、何かに心おくそこも、なくうちとけて憎からぬ、中なるものを打捨てて、行く事にやとさすがまた、※おぼこ育ちの心には、當惑するも理なり。お龜もこの事聞きしより、心細さの案じごと、とやせんかくやと思

ふうち、鎌倉より金五郎を、迎への人の著きしかば、今は別れとなりけるかと、人目の關の忍び泣き、ふさぐは女子の常ながら、いとゞに胸も結ぼほれ、部屋に屛風を立てまはし、衣引被ぎ打臥して、涙のひまもなくばかり。折から障子引きあけて、立て廻した屛風のはしを、折り返してはいる金五郎「おかめ、けふはどうだ、やつぱり氣色が惡いのか。トいふ聲におかめは目を見開き、にっこり笑ひまくらをあげ、「ハイ、いろ〳〵の事を案じますと、心ぼそくて氣がふさいで、いつそ頭痛が致します。トほろりと落すひとしづく、金五郎は見てとりて、「おほかた今度東の本家へ、おいらが別れて行くものだから、それでふさぐと云ふのだらう。マア〳〵何はともかくも、けふは南であつたかいに、こんなに立てこめたり引被つては、猶のぼせて惡いから、ちつと庭でもながめな。トびやうぶを片よせ夜著とりのけ、丸まどのしやうじをあける。おかめはやう〳〵おき直り、あたまをおさへてさしうつむく。金「コウおかめ、つよく頭痛がするなら、なんぞ藥でもやらうか。おかめ「ハイありがたうござります。あんまり氣がふさいで、頭が重くてなりませんから、今しがた實母散をのみましたヨ。金「さうか、あんまりつまらぬ事をくよくよ思つて、ほんたうの病氣が出るとわりいから、今日はちやうど天氣はよし、芝居でも行つて見ればいい。おかめ「いゝえ、わたくしは、芝居も見たくはござりません。金「ハテ困つたものだ。行つて見ればいいがのう。團藏だの璃寛だの、國太郎なんぞが大ひやうばんで、それに東からのぼつて來てゐる、路考の門弟の路之助が、又新作のはやりうたを舞臺でうたつて、三絃の手があるが、いつ見てもまことに

○南　南風が吹く。

○實母散　女子血の道の藥。今もあり。

○團藏　五世市川團藏　弘化二年歿。

○璃寛　嵐璃寛。二代目。小柄にして、巨眼であつたので、「目德」「大目璃寛」などゝ綽名された。天保八年歿。

○國太郎　河原崎國太郎。

○路考　瀨川菊之丞。

○濱芝居　大阪にて小芝居のことを云ふ。
○源之助　三世澤村源之助。文化八年上京、天保五年七月江戸森田座に歸る。嘉永五年に歿。此の源は、濱芝居の時代を勤めて名を高め、文化七年には上上吉となる。文久三年歿。
○苅萱の狂言　淨瑠璃に苅萱桑門筑紫轢の狂言。苅萱道心・石童丸。
○べたいちめん　總體。どこもかしこも。
○おひやる　ひやかす。からかふ。

妙だヨ。おかめ「さやうでございますとネ。アノいつぞやあなたと御一緒に、浪花へ参りましたとき、濱芝居で見ました評判のよい、紀伊國屋はどう致しましたネ。金「源之助か。今は東都へ歸つての、ます／＼評判がよくつて、去年の春向町の芝居で、苅萱の狂言をしたさうだが、近年にねえ大あたりで、それからなんでも當りつゞけて、町も屋しきも紀の紀のと、べたいちめんに女子供が、ひいきすると上方まで、もつぱらの評判よ。おかめ「そのひいきの多い紀の國屋にも、まさつたお方がまた東へお下り遊ばしたら、マアどんなでござりませう。金「紀の國屋よりいい男とは、そりやアどこの人だ。おかめ「どこのお人か御存じでありながら。目もとから口元まで、音羽やに紀の國屋を、一ツにしたよりよい御容貌と、學文のけいこにお出でなさる、みなさんが常不斷、さういつておほめなさいますよ。金「なんのこつたかさつぱり解せねえ。おかめ「わかりませんかえ、あなたの事さ。ト につこり笑ひ、顔をかくす。金「何をいふかと思つたら、おいらが顔の棚おろしか、いいかげんにおひやるものだ。おかめ「アレ本當でござりますよ。それだから私は一倍苦勞になりまして、いろ／＼な事を案じますと、胸がいつぱいになりますよ。金「なんのこつたな、をかしくもねえ。戯談はじやうだんだが、ほんにあんまり案じなさんな。迎へと一緒にあしたの朝、鎌倉に立つて行つても、落ちついたら早速に、お前を迎へによこすから、ちつとの中だ、待つてゐな。しかし末始終は、親父がおめえとおいらをば、夫婦にすると豫ての料

○河竹　河邊に生ずる竹の、水に浸されて浮沈定りなきを云ふ。遊女の身の上。

○老少不定　佛敎の語。人の命數は、定まりなきものにて、老いたるも、若きも、死期ははかり難しといふ義。

○宿世　さきの世の緣。前世の約束、むくい。

簡、なれど今までつひしかに、親の目を忍んだり、なまめいた事もしねえから、そこがおめえの料簡一ツで、もしおいらに遠ざかつて、呼びによこすが待遠なら、緣づくともどうなりと、それはマア勝手次第。大かたモウ東へ行くから、いやになつた時分だらう。のうおかめ、いやか。　おかめ「いゝえ、なんのいやでござりませう。心にもない事ばつかり。たとへどの樣な所でも、あなたが呼んで下さいますなら、私は嬉しうございますが、あなたは東へお出であそばしたら、あづまの女中は上人品で、まことに意氣だと申しますに、私の樣なものは、とてもモウ、お捨てなさるは知れてをりますもの、末々の事を考へますと、寝ても夜の目もあひませず、そのうへ實の父さんは、お顔さへ見ぬその中に、三年あとにお果てなされ、跡に殘るは姉さん一人、里に行つてお出でなされば、いつぞや逢うて名告りあひ、便りになつたりなられたり、致しませうと存じましたに、そのかひもなく里親に、だまされて身を河竹に、お沈めなさりしといふ事ゆゑ、今は杖にも柱にも、力に思ふはおとつさんばかり。末を頼みしあなたにまで、思ひがけないこん度のお別れ、心細い身になりました。　トいひつゝなみだをそでにのごへば、金五郎もそのこゝろねを思ひやりつゝ、むねなでおろし、　「なんのこつたな。そんなに末の末までを、案じるから氣がふさぐ。なるほど兩親に早く別れ、姉さんにも生き別れでは、心細いもつともだが、人間は老少不定、定めないのが世の習ひ、命ばかりは神佛の、力づくにもゆかぬのは、みな定まれる身の宿世、それをくよ／＼氣にしても、役にも

○お宿　自分の家。此處では兩人等がゐるその家をさして云ふ。

○つもる　もと豫め思ひはかる、豫め考ふ、の意であるが、當時は單に考へる位の意に轉じて來てゐた。

たたぬ事ぢやアねえか。又たとへ別れ／＼に、遠く隔つて行けばとて、おめえに此の家をゆづりでもすると、ぜひ壻をとらねばならぬが、さういふ時は、マアどうする心だ。おかめ「そりやモウあなたがおつしやらずとも、海より山より御恩の深い、おとつさんのおつしやる事を、背く心はござりませんが、この事ばかりは背きます。たとひ妹脊のお許しをうけずとも、あなたをのけて餘の人に、添ひます心はござりません。あなたが東へお下り遊ばして、問ひ音信もござりませんと、わたくしはその時は、とても生きては居りません。死ぬる心でござります。金「馬鹿な事を云ひな。それはほんの短氣といふもの、死ぬくれえなら何も苦勞をするには當らず、添ひたいと思へばこそ、いろいろに氣をもむぢやアねえか。ほんに悪い事はいはねえから、少しのうち辛抱して、便りをするのを待つてるな。コレサおかめ、なぜそんなに泣きなさる、子供かなんぞの樣に。別れて一生あはぬといふ事ぢやアなし、ちつと氣をしつかりもちな。ト いはるゝほどなほお龜は、うれしさかなしさやるせなく、「あなたがそんなに事をわけて、優しくおつしやつて下さるほど、猶悲しくなりまする。考へて見れば見ます程、しきりに心細くなりまして、あなたがお宿にお出で遊ばすうち、いつそ死んでしまひたくなりました。ト 金五郎のひざにとりつき、なげく心をくみとりて、金「エヽおめえもマア心のよわい。なんぞといふと死ぬ／＼と、譯もないその繰言。マアよく物をつもつて見な。こんな事をいふと年寄めくが、今世の中が靜かだからよけれ、昔の亂世の時で見な。なんぼおいらの樣な

※ちよろつかな者でも、武士の種だから、軍のところへ是非出なけりやアならぬわ。よしか、出れば敵の首を取るやら、こつちの首を取らるゝやら、二ツに一ツ命がけ、親を捨て子を捨てて、戰場へ出るは武士のならひよ。昔と今と比べて見な、まことに樂なこの世の中、そんな危い狂言もなく、武士の身に取つては本意ぢやなけれど、實に今は極樂世界。こゝの道理を考へると、三年や五年遠ざかつても、苦にする程のこともねえが、そこがやつぱり自己勝手で、十分でも不足に思ふは、人情のあたりめえさの。それだから必ずとも、くさ〳〵思はず時節を俟ちなよ。短氣を出したそのあとでは、後悔してもはじまらねえから、心を大きく持つがいいよ。トとしわかなれど金五郎、さかしき言葉に事をわけて、さとすをりから下女來り、「若旦那さまえ、旦那さまがちよつと入らつしやいましと。トいふに金五郎は、「オイ〳〵。トおかめの部屋を出でてゆく。父文之丞は一間の内に、煙草くゆらし文よみ居る。金五郎はしとやかに、父の傍にかしこまる。文「オ、金五郎か。さてモウ鎌倉へ下るのも明日なれば、※旅の調度を、落ちなく用意するがよいぞや。それにつけてもくど〳〵と、いひきかすまでもなけれど、※獅子はわが子を谷へ投げ、其の生立を見て安堵して手ばなすと。※燒野の雉子夜の鶴、子故に迷ふは親の常、鳥獸でさへその樣なるを、況いて人間は猶さらに、子を見る事親に如かず、たとひ高貴※搢紳を始め、稲刈り漁る下ざままで、子を思ふのは同じ事。もはやそちも十八なれば、案じる程の事はないが、かういうては異なものなれど、人なみ〳〵文武の道も、す

○ちよろつかな者　粗末なもの。

○旅の調度　旅中に要るいろ〳〵の品。

○獅子はわが子を云々　謠曲『楠露』にも「獅子の子を生みて、三日を經る時は數千丈の巖より、これを投げて試る。その子獅子の氣力あれば、教へざるに宙より、はね返りて死せずといへり」。

○燒野の雉子夜の鶴　雉子が燒野の雛を救はんとして己れも遂に燒け死ぬやうに、又鶴が子を戀ひ思うて籠中に夜をなき明かすやうに、親の子を思ふ情の切なることを。謠曲『唐船』「例へば、親の子を思ふ事、人倫にかぎらず、燒野の雉子、夜の鶴、梁の燕も、皆子ゆゑこそ物思へ」。

○搢紳　貴族、搢はさしはさむ、紳は帶。式の時に笏を帶にさしはさむより高位高官の人を云ふ。

○うちば　内端。物事を控へ目にすること。
○傾城傾國　『漢書』外戚傳に「一顧傾二人城一、再顧傾二人國一」とある。美人を稱して、其の危險なるを云ふ。既出
○恥をいはねば理が知れぬ　自分の缺點した恥を云はねば、相手に自分の説く道理が呑込ませられぬ。

ぐれたといふではないが、マアどのやうな人中へ、出してもまんざら恥かしくもなし、というておのが智にほこり、藝に慢じて多くの人を、眼下に見くだしてはならぬぞや。又一ツには祖父さまを大事にかけ、われにかはりて孝行してくれ。二ツには弟文次郎は、養父といへども其方が爲には、いはずと知れた血すぢの叔父ゆゑ、ずゐぶんともに心にそむかず、これまた孝行せにやならぬぞ。また鎌倉は繁華の土地ゆゑ、人氣が都と違ふから、よく風俗をのみこめよ。仲間のつきあひその外も、仕儀によつてはのつぴきならねど、物事萬うちばにして、花にさそはれ月に浮れて女郎買なども三度に一度は、外されなけりや行くがよいわさ。さりながら傾城傾國の譬へもあれば、かならず深くはまらぬやう、心にこゝろを亂しちやならぬぞ。只忠孝に心を勵まば、その身の末もあしからねど、兎角に酒色は染まりやすく、昔より名將勇士も、色に迷ひ酒に溺れて、大切の身を亡ぼす例も、ままある事ゆゑ、この道は深く耽らずつゝしめよ。こゝが常言の、恥をいはねば理が知れぬといふ通り、早い例はこの己が、若氣の至りといひながら、無分別な心から、親を捨て故鄕を離れ、家出なして暫しが中は、住居もさだめずさ迷ひしが、親の身では不孝な子でも、憎し罰あたれとは思はぬにや、こゝに住ひを定めてから、仕合と不自由なく、暑さ寒さの難儀もせず人なみ／＼に世をおくる、今この暮しも浪々の、日かげ者の望みはなけれど、不孝の罪なりやどのやうに、今更悔んでもあとへはかへらず。サこゝの道理をよく辨

○つ　つばきに同じ。「かたづをのむ」のつである。

○それはかくべつ　「それは格別結構だ」などの意。

へて、女色その外わしき事には、遠ざかるやうにするがよい。今度そちが、わが本家へ貰はれ行きて御主君へ事ふる事はいとめでたく、我が身の喜びこの上なし。又お龜は小さい時より、そちにこの家を讓りなば、娶合はして夫婦にしようと、おもうては居たれども、本家へ行かば何として、わが手で育てし娘でも、氏素性といひ弟の手まへ、卑しい娘は妻にはなるまい。殊にかための杯を、させたといふ中ではなし、そちを彼の地へ下した上、おかめには聟取つて、この家をゆづらば我は又、外に樂しみ望みもなければ、必ずともに今の教訓、忘れてはならぬぞや。ト　わが身のことと世の事を、まじへてさとす言の葉の、はじめ終りを金五郎、つぶさに聞きて胸にたゝみ、ありがたなみだと別れの涙、目に浮めて※つをのみこみ、金「だん／＼と事をわけて、お心深き御教訓、きつと骨身にこたへまして、ありがたうござります。もとより愚かな私なれど、心の及びますだけは、忠孝二ッを勵みます。あなたもずゐぶんお身の上を、御大切に御養生なされ、おすこやかにお暮しなされて下さりまし。ト　しとやかなるあいさつに、文「イヤ※それはかくべつ。おかめもそちと同じやうに、小さい時から共に育ちて、兄弟同樣に暮したから、今別るゝも悲しかろが、これも定まる約束事、無分別の出ぬやうに、よく暇乞したがよい。トすいもあまいも嚙みわけた言葉をしほに金五郎は、父の前を退きて、おのが部屋へ入り、翌日出立の事なれば、何くれ彼くれそれ／＼に、旅の準備を落ちもなく、とゝのへて夕餉をしまひ、楊枝を使ひながらおかめの部屋へそつと來り、金「どうだお龜、ち

○うしろむきで唾　後を向いて唾をはく。私かに輕蔑する貌。
○業平　在原業平。平城天皇の皇子阿保親王の第五子。容貌秀麗、美男の代表とされ、世に在五中將といふ。

つとは氣色が直つたかの。 おかめ「ハイなんだかどうも鬱塞ぎつゞけで、やつぱり頭痛が致します。アノあなたはどうでもあしたの朝、お立ち遊ばすのでござりますかえ。 金「さうさ、モウ迎へが來て居るから、どうも延されもしねえのさ。それだからおめえの顔を、見るのも今夜限りゆゑ、忘れぬため見納めに、能く見て置かうと思つて來たよ。ト笑ひながら顔を見れば、おかめは恥かしげに顔をあかめ、 おかめ「又そんな譃ばつかり、それはほんの氣やすめでござりませう。金「さうさ、いづれおいらの言ふことは譃さのう。どうでモウ明日から、居ねえのだから、本當にやアしねえ筈だ。さつきおとつさんが言ひなすつた事を、おめえも大かた聞いたらうが、おいらが行つたその跡では、おかめに才子をとつてやつて、この家を讓るとおつしやつたヨ。もしその婿が色男なら、首つたけはまりこんで、おいらのやうな者は、うしろむきで唾だらう。 おかめ「なんのマアもつたいない、夢にもそんな心は持ちません。たとひ業平さんが生れかはつて參りましても、私はあなたに見かへる心は、爪の垢程もござりませんヨ。 金「いいかげんな事をいふ、見かへる心は富士の山ほどあるだらう。 おかめ「モウ〳〵あなたはなぜそのやうに、わたくしが申す事を、お疑ひ遊ばしますえ。 金「うたぐりやアしねえけれど、譃らしい言ひやうだから。それが信實まことなら、必ず短氣を出さねえで、たよりをするのを俟つてゐなよ。ト背をさすればお龜は嬉しく、 おかめ「私はどのやうにも、俟つてをる氣でござりますから、どうぞ

○憂也靄　兩人胸中の憂悶と姿が次第に不分明になり行く様を言つた。うやもやはうやむやにて、ありやなしや、不分明なることをいふ。

きつとお便りを、早くなすつて下さりまし。ト互につきぬ名殘の涙、いとしかはいもまだ知らぬ、明けのからすの泣く〳〵も、お龜は金五郎が支度する、かたへに持ちものなど取り揃へるうち、用意こと〴〵く整ひしかば、いざ出立とさゞめくを、金五郎は流石にも、跡に心の殘れども、せんかたなければ氣をとり直し、父とおかめに別れをつげて、迎への者ともろ共に、心づよくも旅立つを、今が名殘と文之丞、おかめも共に門邊まで、送り出でつゝ金五郎の、影見ゆるまで見送れば、あなたも見かへる別れの泪、互に胸の憂也靄に、かくれて姿はみえずなりぬ。

○あだに　空しく。
○彌生　陰暦三月。
○ひとしほに　一層。
○ほのかに　かすかに。遠くから。
○なか〳〵に　結局は。
○さら〳〵　少しも。
○日頃の樂しみのかひさへ泣いて　日頃の樂しみの甲斐さへなしといふのと、泣くといふのとかけていつたもの。
○千々に　色々樣々に。
○うつら〳〵と　うと〳〵と。
○床病　病みて床に臥す。
○あぢきなき　つまらない。面白くない。
○うちかこち　嘆く。

小さん金五郎　假名文章娘節用　前編中卷

第二回

任然程に、おかめは金五郎が鎌倉へ下りし後は、いとゞ心も結ぼれて、兎角浮き立つ事もなく、今日や便りのありもやせん、あすや音信あらんかと、あだに過つ日を指をり算へ、一日〳〵と暮すうち、早くも半年あまりも過ちて、彌生の末になりにけり。されどもいかなる事にやありけん、金五郎の方より音信の、文さへ來ねばひとしほに、おかめは思ひいやまして、ほのかに聞けば鎌倉には、お雪といへる娘ありて、ゆく〳〵は金五郎に、娶合はする約束なる由、きいて猶さら胸つぶれ、さうとは知らずうか〳〵と、便りの文を樂しみに、待ちし心の愚かさよ、殊に妹伕のかたらひも、せぬ中なればなか〳〵に、いつの世にかは添ふ事ならず、というて今更よそほかの、男持つ氣はさら〳〵なし、今は日頃の樂しみの、かひさへ泣いてくらすのかと、思へば千々に胸苦しく、あるにもあられぬせつなさを、父文之丞にもかたられず、ひとり心をいためしが、唯その事のみ思ふものから、うつら〳〵と床病の、朝な夕なの食事さへ、ろく〳〵すゝまずうち臥しぬれば、もとより妬む心なければ、あぢきなき世とうちかこち、一日二日と送れども、夜の月もあはさで案じ

事、行末こしかたおもうてみれば、よくよく幸なきうまれにて、親にはおくれ姉にはわかれ、たよりさへなき身の因果、心の願ひもかなはねば、生ながらへても樂からず、いつそ淵川へ身をしづめて、果てなん事こそましならめと、戀に心もみだれ髮、なであぐる氣もなかなかに、泣きしづみたる閨の戸を、更けゆく夜半の風ならで、ほと／＼とうち敲き、おかめ／＼とよぶ聲に、驚かされて立ちあがり、そつと戸をあけうかゞへど、人もあらねばさてはわが、心のまよひに風の音を、もしや戀しきその人の、來たまひしとや思ひしゆゑ、あな淺ましき心かなと、わが身のほどをかへりみて、又うち臥すにふたゝび三たび、おかめおかめといふ聲の、耳に入るこそいぶかしく、もしやとまどひて出て見れば、影さへもなしうち臥せば、またよぶ聲のする故に、おかめは夢歟うつゝかと、そのまどひさへ解けがたく、心亂れて立つたり居たり。こはながらへても添はれねば、思ひあきらめ死ねかしと父母の呼びたまふならん。オヽそれ／＼と娘氣の、よしなきまよひにひかされて、死する覺悟に裾はしより、幸ひ誰も見しらぬ樣子、と裏口より脫け出でて、いづくともなく急ぎ行きぬ。其の明けの朝お龜の居ざるを、見つけて驚く文之丞、家内の男女もおどろきて、其處此處と搜せども、その行方知れざりければ、文之丞はつく／＼思ふに、日頃より金五郞を、夫の如く思ひ思はれ、互に憎からぬ中なりしを、いつぞや別れしその日より、唯うつらうつらとして、東の空のみ打眺め、娘心に添はれぬ事と、思ひ餘りの胸に絕えず

○こしかた　過去。
○いぶかしく　不審。不思議。
○うつゝ　現。
○ながらへても　生存してゐても。
○よしなき　つまらない。

○定業　前生より定つた因縁
○忌日　命日。
○七日々々の訪ひとむらひ　佛教では命日から七日目々々に七度即ち四十九日の忌日まで法要を營む、それをいつたもの。
○せん方なく　しやうがなく。
○さすがにて　さうは思ふもののそれもならないで。
○なま中　なまじ。
○愛敬づく　かはゆらしく見ゆる、人づきのよきこと。
○手活けの花　自分で花瓶へ挿した花。自分のものにすることを云ふ。

や、夜もをりをりうなされては、淵川へなど身を沈めんと、うつゝの如くにいひけるが、さては入水やなしたりけんと、猟人を出し水邊を、落ちなく尋ね探しけれど、その死骸さへ知れざれば、今は文之丞も定業ならんと、やうやくあきらめ、家出せし日を忌日として、七日〳〵の訪ひとむらひもねんごろに、涙ながらにいとなみつ、文之丞はこの事を、くはしく状にしたゝめて、鎌倉の金五郎かたへ、人を下して知らせけり。されば又金五郎は、本家の叔父文次郎の家に、養子にもらはれ來りけるが、思ひきやお菊というて、容貌のうるはしき、娘のあるに驚きしが、今更にせん方なく、父の教へに從ひて、養父母に孝をつくし、暮すうちも都に殘せし、おかめの事のみ氣にかゝり、末は女夫と約束して、別れて此の地に落ち著きしなら、便りをなして呼び迎へんと、思ひし事もくひ違ひ、お菊のあれば此方の父に、おかめの事をうちあけて、迎へたしとも言ひがたく、殊に實父文之丞が、おかめは素性もいやしければ、本家の嫁にはなりがたしと、云ひたる言のかれこれを、思ひ合はせばゆく〳〵は、とてもお龜と添ふことならず、一旦約束したれども、かゝる譯ゆゑ思ひきれと、言ひ送らんもさすがにて、又遠ざかりゐる事なれば、なま中たよりをするならば、思ひのたねをいやます道理、音信せぬこそ互のため、いつか忘るゝ事もあらんと、あきらめては見るものの、愛敬づきて憎からぬ、お龜を今さら餘の人の、手活けの花になす事も、いと口惜しき事なりと、日々に胸のみ苦しめけり。かかるところに實父の方より、し

か〴〵の事により、おかめが家出し行方知れずと、いひこしければ金五郎は、駭くこと大かたならず、※掌中の玉をうしなひし、心地にあきれ※胸つぶれ、氣ぬけするまでまどひしが、さすが男の事なれば、やうやくに心取直し、つく〴〵思へば縁なきむかしと、あきらめては見るものの、もしやおかめの心かはり、我のみ深く思ひゐるのも、知らずに男をこしらへて、家出せしにはあらざるか、又は狹き心から、添はれぬ事を苦に病みて、入水などせしにやと、さま〴〵に思ひとりて、心に※廻向したりけり。是れより後は金五郎も、おかめが死せしと思ふものから、家の娘お春の姿も、十人なみには勝れたれど、見かへる心もなき故に、世に樂しき事もなく、面白からぬ日を過すうち、夏去り秋も※文月の、中旬にいたれど暑さはさらず。ある日金五郎は、醉狂といふ友達にさそはれて、※大磯の燈籠を見物せんと、打連れてたそがれより、廓へいたりなじみの茶屋、守多屋へゆきて酒宴をまうけ、歌妓牽頭なんど相手にして、さゞめきわたつて大騒ぎ。たいこもち へぼ吉「コウ〳〵おたこさん〳〵、コレサおたこばう、ちよつとこちらを向き給へ。ト げいしやの袖をむしやうに引つぱる、おたこ「アレ厭だヨ、よしておくれ。そんなに引つぱると著物がきれるわネ。すかねえのう。へぼ吉「オヤ氣がつかねえ、堪忍しておくれようツ。コウおたこさん、いい子だからちよつと※うしろを彈いておくれ。無類飛切大極上、※せり賣り卸し仕らずといふ聲色をつかふから。おたこ「オヤ〳〵おつな※藥のいひ立てだねえ。

○掌中の玉　最も鍾愛するもの。いとかはゆがるもの。杜甫の詩に「掌中探見一珠新」とある。
○胸つぶれ　悲嘆にくれる。心悲しみに充つ。
○廻向　佛事を修めて死者の冥福を祈ること。
○文月　陰曆七月。
○大磯　江戸時代の小說では多く江戸を鎌倉と云ひ、吉原を大磯といふ例になつてゐる。こゝでも吉原の盆燈籠見物を云つたものである。
○うしろ　芝居の舞臺で、役者が所作をする間、三絃を彈き唄ふもの。
○せり賣り卸し仕らず云々　せり賣りや卸賣りはしない極上等の聲色だといふので、藥賣りの口上をまねていつたもの
○藥のいひ立て　藥の効能を述べ立てる藥賣の口上。

○とうり 東籬。支那晋の陶淵明の句に「採菊東籬下、悠然見南山」。
○けいしう 傾衆。傾城衆のこと。
○小間物見せ 嘔吐をすること。
○三十らう 俳優、三代目關三十郎。五代目幸四郎に似て俗に「鼻の三十郎」と呼ばれ、實惡を得意とし、所作事にも秀でてゐた。功[illegible]、明治三年、六十六歳にて歿す。
○緒〆 煙草入・印籠などにつけたる、二條の緒の、ゆるまぬやうに互に締め合はするもの。珠、石、角、象牙などにて造る。
○再來 生れかはり。
○獅子 獅子つ鼻。
○むくれて 露出して。
○ざくろ口 江戸時代の錢湯では湯に入る所に上から半分の戸のやうなものがあつて、腰を屈んで中にはいる。これをざくろ口と云ふ。
○流し男 湯屋の三助。
○てんでんむきむきの寄合世帶 亂杭齒の形容。てんでんむきむきはデンデンムシムシの地口。
○棚おろし 商家にて現存せる商品を調査すること、又之を安く見積つて賣ることなどをも云ふ。あらひざら

うた へ菊はとうりのもとよりも、けいしうの袖やかをるらん。
へぼ「まねまするは、エヘン〳〵、エヘンノ、エヘン〳〵、エヘ〳〵エヘンノ、エヘンエヘン〳〵。 目八「なんだ〳〵、コレどうしたのだ、そこへ小間物見せを出しちやア眞平だぜ。 へぼ「なぜ〳〵、こりやア聲色だ。 目八「エヘン〳〵、エヘンノヘンツ、なんのこつた。 へぼ「ハテやぼな事を聞き給ふな。よく考へて御覧じろ。卽ち咳が三十らうサの。 醉狂「おきやアがれ。アハ、、、、、。 目八「モシ日那、妙な事がごぜえます。誠にどうも、どうも誠に、實に妙々々でごぜえす。 醉「なんだやかましい、何をいふのだ。 目八「イエサ貴方がまことにどうも。 醉「おれがどうした。女が惚れるでうらやましいか。 目八「いかなこつても御挨拶。オホ、、ツ。モシ、おめえさんはお目が二ツあつてよく見えますネ。實にうら目しいたアこのこつた。 醉「ハ、、、何をいふかと思つたら、足下は目が一ツだつけの。をしい男だが、あつたら玉に疵だのう。 へぼ吉「さやうさねえ。モシ日那、よく御覧じまし。顏の丸みあんばい肉合なんどは、てもなく珊瑚珠の緒〆の再來、モシ鼻筋が横の方へぐつと通つて、眉毛がによつくりと蛞蝓の樣で、鼻は獅子でもねえが赤くむくれて、口は錢湯のざくろ口だが、流し男の給金が安いかして、齒一向に磨き上げず、匂ひのあしき事いはん方なし。譬へていはゞてんでんむきむきの、寄合世帶といふ顏がまへサ。ア、なげかはしいが愛敬のねえ、女緣のなさそうな御面相だ

ぞ。目八「こう〳〵貴さまは、何の遺恨があつて、おれが顔の棚おろしをするのだ。鄰の寶をかぞへるやうに、人の疝氣を頭痛に病むとは、よつぽどおめえも苦勞性だぜ。アゝとかく男のいいものは、そねまれるのでうるせえぞ。オホン〳〵。へぼ「ヘン、おつうとまりたがる奴だの。コウ戯談はおどけだが、足下幇間をさらけやめねえ。いい金まうけの筋があるぜ、九月になると。目八「なぜ〳〵。へぼ「よく考へて見さつし。容貌といひ口前といひ。目八「ハテナ、富でもとるといふ事かノ。へぼ「ヘン押しの強え、神明の祭だからよ。目八「ナニ〳〵、神明のまつり、フウめつかち生姜か。ヤいま〳〵しい事をぬかしやアがる。コレそんなに難非を付けて惡くいつても、是れでも女にやア憎がられねえ男だよ。へぼ「そのかはりかはいがられた事もあるめえ、その顔ぢやア。目八「そねめ〳〵。顔にやまよはぬ姿にやほれぬと。へぼ「フウたつたひとつの目に惚れるか。フハゝゝゝハ。おたこ「オヤ〳〵目八さん、今日はまことに閉口だねえ。目八「ナニサ〳〵、こんな理も非も辨へねえ、田夫野人と論は無益だ。へぼ「ナニ、己が田夫野人なら、足下は牛蒡にんじんだ。みな〳〵「ハゝゝゝ。目八「ときにモシ、金さんとおつしやいましたネ、ちよいと一ツけんじ天皇あきの田のといたしませう。金五郎「こりやア一ツ押えだ。目八「ナアル、そこもあれば蓋もあるか。モシ旦那、實に妙といふことがござえますトいふ來歷

ひ擧げて云ふ義に轉用す。

○人の疝氣を頭痛に病む　いらないおせつかひをする譬。

○さらけやめねえ　やめろといふのを強めていつたもの。さらけは、さらけ出すより出で、悉皆さらひ出すの意を含めてゐる。

○富　富籤。催主ありて富札を人々に賣り、期を定めて買主を集め番號札を入れた箱を上から突き刺して、其の刺された札の番號と同一の記號を有するものを當籤者と定む。

○神明の祭　芝大神宮の祭禮である。

○めつかち生姜　神明祭の名物。初めめつかちが賣出してより此名稱があるといふ。神明の祭で有名なのは千木「ちぎ」箱と此生姜とであつた。千木箱とは飯櫃形の曲物で、其表に丹、緑、青にて藤の花を畫き、其内に切飴や粗末な菓子を入れる。杉の板にて製する。初め神社の千木の餘材を用ひたので此名がある。

○そねむ　嫉む。

○けんじ天皇　献盃の洒落。天智天皇の御製「秋の田のかりほの庵の苫をあらみわが衣手は露にぬれつゝ」。後撰和歌集。

○押へ　もう一つ相手に飲ませること。

は、モシ、千年屋のか丶八の子で、この頃まで引込んでをりましたのが、けふ突き出しの眞名鶴といつてぶつつけ（よびだし）のお職さネ。その容貌といつぱ、天人は羽衣をかぶり、辨天さまは冠を落し、拙者がお宿の山の神も、尻をまくつて逃げ出すばかり。へぼ一「ヘンがうぎに山の神を、あがめたの。目八「大きにス。エ丶とまづこの天杯は、そちらの旦那へささげて置きのト。そこでモシ旦那、今にモウこ丶へ眞名鶴さんがめえりますから、よくお拜みなせえ。實にびつくりおいたちこ、ねずみこつこは癡話の初まり、とけつこつこは鷄よ、はとつぽつぽにや豆をやれ、すてつぱうには油斷をするな、ふてえ奴なら打ちのめせ、じたい我らは都のうまれ、色にそやされ、こんな幇間になられたア。ハアどんどこどん、どんどこどんッ。ア丶せつねえ、いきがはずむ。アツハツハ丶丶丶丶。醉狂「エ丶やかましい、よくしやべるぞ。そんなにどなると、天井の煤が神事舞をして、疊の芥がをどり出すだらう。目八「違えごぜせん。酒呑猪口がきやりをいつて銚子の引物を引き出すと、吸物膳の箸が突立つて、硯ぶたの慈姑をおつちらかしやせう。とんだ化物屋しきのやうだ。アハ丶丶丶丶。旦那おどけはのけて、モシ、噂をすれば影ぢやあねえ、正眞正銘本家元祖、まじりなし、外八文字でしよなり／＼。アレ／＼、あの提灯がそでごぜえます。醉「ほんにのう、金さんおめえもよく目利をして、もし無疵で氣に入つたら、今夜の花にしなさるがいい。金五郎「ちげえねえ、なんならお前ともやひにしませう。ト　おどけをいふちゝ千とせやの

○突き出し　遊女の初めて店に出るを云ふ。
○（よびだし）のお職　太夫の上等の地位。揚代金一晝夜一兩二分を定めとする。お職は筆頭。
○いつぱ　言ふはの急呼。
○山の神　女房。
○がうぎに　えらく。たいへんに。
○びつくりおいたちこ　びつくりいたすの洒落。いたちこつこは子供の遊戯で、二人で互に手の甲をつまみあひ、順々に重ねて行くしぐさ。
○ねずみこつこ　こそ／＼蔭で内密遊びをすること。
○すてつぱう　空鐵砲。
○そやされ　そゝのかされ。おだてられ。
○神事舞　お祭の舞。
○きやり　もとは材木を運ぶ時にうたふ俗謠。木遣唄。
○硯ぶた　口取肴を盛つた蓋ぶた、又其の口取肴をも云ふ。
○まじりなし　雜物を混へない。
○外八文字　外方に向つて八文字に踏み出す遊女の歩き方。
○しよなり　しとやか。しやなしやな。

○目利　鑑定。
○無疵　處女。
○もやひ　共同。
○地者　素人。
○さそふ水あらば　『古今和歌集』小野小町「侘ぬれば身をうき草の根を絶えてさそふ水あらばいなんとぞ思ふ」。
○藍御納戸　染色の名。藍の鼠色を帶びたもの。
○唐縮緬　メリンス。
○光琳　此では光琳風の意味。
○つゐたけ　同じ寸尺。
○紋天　紋天鵞絨。
○ごろふくりん　又ごろふくれん（呉絽服連）、ごろ（呉絽）、ごろうとも云ふ。蘭語。西洋舶來の毛織物の名。駱駝の毛を用ひ、今多くは、羊毛、又は綿絲の糸などを雜へて織る。
○腹あはせの帶　晝夜帶。

つき出し女郎まな鶴は、新造かぶろをひきつれていう〳〵ぜんとあゆみくるを、金五郎はひとみをさだめて、みれば不思議やゆくへの知れぬお龜の姿にいきうつし。もしやそれかとつく〴〵見れば、劣りはせねどどこやらが、違ふ樣には思はれても、目もと口もと愛敬ある、品かたちのよく似たれば、胸とゞろきて心まどひ、わが身の迷ひか、醉うたる故かと、しばし見とれて詞なきを、見てとる幇間醉狂も（金五郎の肩をたゝいて笑ひながら、）醉「コウ金さん、おまへは此のごろひどく物案じな樣子だから、いろ〳〵にすゝめても、女郎もげいしやも地者もいやだと、だゝつ子がすねるやうに、いやだ〳〵といひなすつたが、なんと今の花魁はどうだエ。金「さうさネ、なか〳〵美しいネ。醉「よつぽどさそふ水あらばだネ。金「ナニ、さういふ理窟でもねえけれど。醉「けれどがをかしい。あながち氣がないでもあるめえ。金「ハヽヽヽ、マアなんでもいゝから、わたしやアあの子にきめよう。醉「それがいゝ〳〵。そんならおれも行つて、誰ぞ見立てよう。（トふたりはたいこげいしやをひきつれ、ちとせやへをどりこみ、醉狂もあひかたをさだめ、）お定まりの杯事も、ほどよくきりあげ床へまはれば、藝者牽頭は、「御機嫌よう。（トみな〳〵どやどやしたにゆく。）金五郎は初會の事ゆゑ、羽織は枕元にぬぎ捨てて、横になつて寢てゐる處へ、相方の眞名鶴は、藍御納戸の唐縮緬、裾に光琳の鶴の染め出し、緋ぢりめんの裏襟つきし、ひとへものにつゐたけの襦袢、黑の紋天に緋のごろふくりんの、腹あはせの帶をだらしなく結び、鼻紙を持ち添て褄をとり、（いそ〳〵しながら金五郎のそばへ來り、顏をさしのぞいてよりかゝり、）眞名鶴「もしえ、モウおやすみなんしたかえ。なぜ起きてゐておくんなんせぬえ。サア目をお覺しなん

し。トゆりおこせば、金五郎は、わざと目のさめたふりにて、　金「オヤおいらん、いつの間にマア來なすつた。くるなら來ると前びろに、鳥渡人でもよこしなされぱいい。出しぬけに起されちやア※蟲が動じるから。　まなづる「オヤ／＼いやでおすよ。　金「さうだらうネ。いづれ私のやうな※へうたんは、可愛がられねえのはあたりめえさ。　まなづる「アレさうぢやアおざりいせん。お氣にさはつたらおゆるしなんし。　ト煙草をすひつけていだす。金五郎は※ひとひきひいて、　金「これは御馳走。　トまなづるにわたし、顏をしげ／＼見てゐる。　金「オヤなんざんすえ。ぬしやアなぜそんなに顏ばかり見なんすえ。主にそんなに見られえすと、恥かしくなりいすヨ。　トにつこりわらふ。　金「まことに不思議。どうも生きうつし。こんなにもよく似るものか。　トわれを忘れてほつといき。　まなづる「オヤなんでおすえ。似いしたとは、そりやアたれさんに似いしたえ。　トにつこりわらふ顏をつくらひ、　金「ソレ、その笑ふ顏つきから、物ごし恰好、似たとはおろか、瓜を二ツにわらずとその儘。　まなづる「オホヽヽヽ、ばからしうおすヨ。似た／＼と仰せえすが、誰に似申したのか、話してお聞かせなんしな。　金「話しませう／＼。その似たといふ仔細は、マア聞いておくれ、かういふ譯さ。わたしが幼さい時分から、行末かけて云ひ交し、女房にせうと思つた女にサ。ほんに野暮な野郎だと、笑つてくんなさんな。　まな鶴「なんのマア笑ひんせう。そんならモウぬしは御新造さんがおざりますネ。　金「ナニサその女はモウとつくに死んでしまつたのサ。　鶴「うそ／＼。そんなにお隱しなんせずとよいぢやアおつせんかえ。　金「譃ぢやアなしサ、實に死んでしまつた

○蟲が動じる　蟲が起る。立腹する意。

○へうたん　顏容が瓢簞の恰好をしたもの。

○ひとひきひいて　煙草を喫して、煙をスーツと一息に口へ引入れるのである。

○七里けつぱい　七里結界の訛。もとは七里四方に結界を作ること、轉じて忌み嫌ひて寄せつけぬことに用ふ。
○都合しても　身錢を切つても。
○一河の流れ云々　佛敎の語、偶然と相遇ふも、前生より多少の因緣ありといふ義。
○突き出す　愛想盡しをして排斥すること。

よ。鶴「ほんざんすかえ、ソリヤアマアさぞお力がお落ちなんしたらうネ。たとひまた譃いつはりにも、主に思はれてお出でなんした、そのお方に似たと思つておくんなんすりや、わたくしが身に取りいしちやア、眞實嬉しうおざりいすヨ。金「なんの、うれしい事はありやすめえ。そりやアほんの勤めの手くだ、實は※七里けつぱいだらう。鶴「オヤ勿體ない、なんでいつはりを申しいせう。初會からこんな事を申しいしたら、おさげすみなんせうが、ぬしのためなら※都合しても、呼び申したうおざりいすが、ぬしやア大かた通り一遍で、もうお出でなんすこつちやアおざりいすめえ。金「そりやアみんなこつちで言ふ事、※一河の流れ一樹の陰、他生の緣があればこそ、かうしてわざわざ來るといふもの。おめえがさういふ心なら、わたしも根限り通ふ氣だが、いい時分に※突き出しちやア恨みだよ。鶴「どうしてマア、ぬしを突き出しいしたら、それこそ罸があたりイせう。金「それはさうと、たとへにも、他人の空似といふけれど、どうも他人とは思はれねえが、お前はマアいつたい何處の生まれか、なじみがひに話して聞かせな。鶴「そりやアぬしの事ざんすから、おはなし申しも致しいせうが、身の上をあかしいしたら、ぬしに愛想をつかされいせう。金「さう思ふも尤もだが、いづれこの廓へ身を沈めるには、仕合がよくつて來た者はねえから、なに恥といふではなし、はなして聞かせてもいいぢやアねえか。鶴「ほんにそれもさうでおすネ、そんならお話し申しいせう。アノ私はまことに〳〵遠くの國でおざ

りいすよ。金「ハテネ、それぢやア蝦夷松前か、紅毛の果てからでも來たのかえ。鶴「オホヽヽ、ばからしうおすヨ。アノ上方でおざりいすからさ。金「フウ、アノ上方、ハテナ本當にか。鶴「アイ、それだから遠くだと申しいすのさ。金「何の上方の生まれなら、遠くな事があるものか。ハテ緣といふものはおつなものだネ。わたしもやつぱり上方ぜえろくさ。鶴「オヤ譃をおつきなんし、なんのマアぬしなんぞが、上方だとおつせえしても、上方にやアぬしのやうな、いきなお方はおざりませんよ。金「さうさ、わたしの樣な不意氣な野郎は、どこの國にあるものか。そしておめえは上方の、もし珠數屋町の邊ぢやアねえかえ。鶴「エ、ほんにさうでおざりいすヨ。よく主は知つてお出でなんすネ。その珠數屋町の六兵衞と申しいすまづしい者のむすめ。金「ヤ、そんならアノ珠數屋町の、古鐵買の六兵衞どのの、娘であつたか、アノおめえが。ト あきれて暫しことばなし。眞名鶴は何かは知らねば、わが身の上は幼き時より、母にわかれ家まづしき故、さるかたへ里にゆきて、やうやう成人なしたる處、里親にだまされて、過ぎし年この大磯の苦界に沈み、父六兵衞は夫れより先に、亡靈の數に入り、たつた一人の妹は、藁の上から情ある、お方に貰はれ育つと聞けど、つひに一度逢ひもせず、便りなき身はつね〴〵から、妹ばかりがゆく〳〵の、力と思へどかひなきつとめ、まめで居るやらどうしたやらと、案じるのみと身の素性を、語るをきいて金五郎は、驚く事ひとかたならず、我こそそなたが妹の親の、文之丞が男子なるが、幼き時

○蝦夷　北海道をいふ。えぞがしま。

○松前　北海道渡島支廳福山町の舊稱。松前藩の舊城下町。舊名まとまい。函館開港以前、本島の關門であつた。

○おつな　變な。妙な。奇妙な。

○上方ぜえろく　上方才六（かみがたざいろく）。京阪地方の人を罵りていふ語。ぜえろくは關東の語である。此處ではわざと自らを卑下していつたのである。

○藁の上から　古は產褥に藁を布いたものである。依つて生れ落ちるとすぐにの意とする。

○まめ　眞實（まみ）から轉じて勤勉の意になり、三轉して、身體手足健やかなること、ぢやうぶ。

より妹おかめは、我が身と共に人と成りて、いまだ枕はかはさねども、行くすゑ女夫の約束して、仲よく暮すその中に、われは此の地の叔父の家へ、貰はれ來りしその後にて、おかめは家出し果てたるにや、行方の知れぬその處に、今また思ひがけなくも、姉のおん身にめぐりめぐりて、今宵名のりあふといふも、やつぱりつながる血すぢの絲、あやしき緣なりけりと、いちぶしじうを物語れば、ます〳〵駭く眞名鶴は、便りにせんと樂しみ俟ちし、唯一人の妹まで、世になき人と聞くからに、悲しさいとゞいやまさり、しばし涙にくれにけり。かかるえにしの淺からぬ、中なれば猶さま〴〵に、身の上の事かたり明しぬ。されども互に一ツに寢ねず、一旦金五郎も妹お龜に、女夫の約束せし事なれば、今更その血すぢの姉が、流れの身とても枕かはすは、さすがにうしろめたく思へば、眞名鶴もまたその心ゆゑ、すいた男と憎からねど、帶紐解いては死したる妹の、供養にならずと心に愼み、いやらしきことさへ言はず。さりながら金五郎は、この儘にもふり捨てられねば、是れより常の客の如く、をり〳〵眞名鶴の處へ通へど、決して枕をかはす事なく、酒等のみては憂さを語りぬ。かくてその月もくれ、八月の初めになりけるに、例の如く思ひ〳〵の、俄狂言をどりなど、さま〴〵あるその中に、額俵屋といふ茶屋の、今度かゝへの藝者の小三、品かたちといひとりなりまで、五町にまれなる容貌ゆゑ、淺間のをどりにこの小さんを、傾城奥州に仕立て、衣裝著つけも美をつくし、淨瑠璃は登見本阿輪太夫にて、人

○いちぶしじう　物事の始めから終りまで。顚末。

○うしろめたく　氣にかかつて安からず。うしろぐらく。

○俄狂言　八月一日より晴天三十日間遊女の歌舞に長けたものに俄踊をさせた。明和四年眞崎天神へ奉納のために舉行したのを初めとする。其後遊女の俄踊衰へて女藝者幇間の催しとなつた。

○五町　五丁町の略、江戸新吉原町の稱。江戸町一丁目二丁目、京町一丁目二丁目、角町の五丁である。又、町「ちやう」とのみも云ふ。

○淺間　元祿十一年正月中村七三郎が自作の『傾城淺間嶽』を京都の山下半左衞門座にて上演したのを初めとする。一中節に「夕霞淺間嶽」「傾城淺間嶽」があり、富本節に「其俤淺間嶽」清元節に「初霞淺間嶽」などがある。こゝのは富本の淺間である。

○登見本阿輪太夫　富本阿波太夫であらうか。

の耳目をおどろかす踊ゆゑ、廓中での大評判、をりふし金五郎は、待宵の月をながめつゝ、俄を見物なすべしと、例の如く守多屋の二階にて、眞名鶴と共に酒くみかはし、今や來ると待ち居るところへ、程なく來る淺間の踊、節おもしろき太夫の淨瑠璃、

あさい心とし絲の、染めてくやしきなれ衣、ありしながらの一ツまへ、小づま揃へてしどけなく、風に柳の吹くまゝに、まかせるはずのつとめぢやとても、いやな客にも比翼ござ、思ふ男の山鳥の、

トかたる文句につれて踊る小さんを、金五郎は、何心なく、見ればふしぎやすぎし頃、家出して死したるおかめに、寸分違はぬ顏かたち、これは不思議とまたゝきもせず、見れば見る程違はねば、是れもわが身の迷ひかと、思ひ直して見るものの、外の女と思はれねば、もしや浮氣な心をいだし、男をこしらへこの廓へ、逃げて來てゐる事にやと、まはり氣すれば腹立たしく、さりとて人に問ふも異なもの、とつくり樣子を見極めんと、そしらぬふりにて見てゐれば、幇間のへぼ吉見とれつゝ、へぼ「イヨイヨ、濱の本店、小さん大明神さま〳〵、外には決してごぜえせん、三千世界にたつた一人。日八「イヤ有りがたし、妙でごぜえす。濱むらや丸むき、額俵屋の大黑柱、有り難いの天上め、咲耶姫の再來か、三國一の無類〳〵。金「たいそうほめるのう、賄賂でも貰やアしねえか。日八「モシだんな、賄賂處か、けふもきのふも昨日も今日も、文玉章の數々は、ヤモシ、あんなうつつい

○待宵の月　十四夜の月。
○なれ衣　ふだん着。
○一ツまへ　二枚の着物の前を一つに合せたるを云ふ。
○比翼ござ　枕を並べるむしろ。
◇「山鳥の」以下――「おろの鏡のかげをだに、見ぬ目にくもる薄月夜、ねやの障子に俤もれて、もれてうき名の流れては、ついのなる瀨の淚枕、かはるまいぞや、かはらじと、筆にちかひの神かけて、すみと硯のこいの中を、たが水さして濡れ衣の、なき名を立てむりな事、ゆふべの夾の夜すがらに、せなかそむけてものいはぬ、しゞまのかねの煙草盆、煙管に告のあるかいな。こちらむかんせと寄添へば、ぴんとふりきる、袖の香は、たれさねて來た移り香と、しらべのいさのむなづくし、鷄の鳴くまで口說して、つめりしあさがこれこゝに紫式部が筆のあや、女のうへのしなさだめも、りんきは下ぼん、下しやうぞや、いたらぬ〳〵」。（下略）
○濱　濱村屋、二世瀨川菊之丞（路考）のことであらう。
○三千世界　佛敎で、廣漠たる一切の世界をいふ語。
○濱むらや　二世瀨川菊之丞。

美婦人が、つけ文をするのでのぼせやすのさ。女げいしやおとわ「オヤ日八さんきついこつたネ。※十九文やの店さきのやうに、※うぬぼれ鏡が澤山だヨ。オホヽヽヽ。日八「ヘンやつかましい、妬くな妬くな。おとわぼうは氣めえはいいが、とかく妬くので恐れるのツ。おとわ「オヤよしておくれ、お前のおかみさんとはちつと違ふによ。モシ日那え、アノ小三さんはネ、上がたから此の頃まゐりましたさうでございますが、よく早く呑み込みましたぢやアございませんか。金「さうか、とんだ遠くから賣られて來たの。大かた男と驅落でもして、其の男に賣られたのだらう。日八「日那※きついもの、お前さんの判斷のとほり、男とはるばるにげて來たが、その男にたぶらかされて、泥水へしづんだのでごぜえますツサ。まなづる「オヤオヤアノ子がかえ、どうもさういふやうすには見えいせんねえ。もしえ、さうぢやアおつせんかえ。金「おいらんはさういふけれど、そこが譬への※小袋と小娘、油斷のならねえ世の中さの。へぼ吉「ナニナニ日那、さういふ譯ぢやアごせえせんツサ。わたくしがこのあひだ額重へめえつた時、よく氣をつけて見ましたが、それはそれ起居ふるまひの物しづやかさ、音聲はさわやかにして鶯のさへづる如く、多辯でなく、※はすはでなく、意氣でしやんとして程がよく、鴨川の水を産湯にあびて、京おしろいを糠袋に入れて、みがきあげた眞の美女さネ。ト話す處へあるじ庄吉いできたりて、庄「モシだんな、額重の小さんをごらうじましたか。金「フウ何だかろくろく見なんだが、よつぽど美婦人ださうだの。

○有り難いの天上め　この上もなく有難いといふ意味。天上はこの上もなく、極まり至れること。
○咲耶姫　木花咲耶姫。瓊々杵尊の妃神にて容色婉美。
○文玉章　戀文をいふ。
○十九文や　店頭の品物いづれも十九文といふ安店。
○うぬぼれ鏡　ビイドロ鏡ともいひ、玻璃の裏に水銀を塗って鏡としたもの。勿論自惚といはん爲の洒落。
○きついもの　共通り。
○小袋と小娘　小袋と小娘はいつのまにやら綻びるといふ諺。
○はすは　浮氣、蓮葉などと書く。

○大門　遊廓の入口にある門。

○氣障　心に快からず歯の浮くやうに感ずること。いやに思ふこと。いやみ。

庄「さやうでございます。まづ此の頃での藝者だと申します。いゝ金箱をかゝへました。トとり〴〵ひやうばんのそのうちも、金五郎はむねに手をおき、アノ小さんこそ面ざしといひ、上方から來たといへば、おかめによも相違はあるまじ。眞名鶴にもうち明けて、樣子を聞かんと思ひしが、なま中あからさまに語りても、健であゝしてゐるからは、心かはりて男のために、身を沈めしもはかりがたしと、さま〴〵に思案して、今宵は去りがたき用ありとて、そこそこに座敷をきりあげ、眞名鶴に別れて大門を出でしが、忽ち又取つて返し、私かに額俵屋重兵衞の處へゆき、彼の小さんに口をかけて、二階へあがり酒のみながら、今や來ると待つところに、程なく小さんは俄をしまひ、うかぬ顏にて何氣なく、二階のはしごをとんとんと、上り來りて金五郎の側へ立寄り顏見合はせ、ハッとばかりに驚きあわて、立たんとするを金五郎はすそをとらへて目をつりあげ、「コウ小さんさんとやら、なぜ逃げる。氣障な客だから氣に入らねえか。きざならきざでいいけれど、物も云はずにそしらぬふりは、見忘れたのか見くびつたか。よもや忘れはしめえがの。未練が殘つて來たのぢやねえ、聞く事があるから下にゐろ。トいはれて小さんはむねにくぎ、なんといらへんことばもなく、めんぼくなげにひれふして、只さめ〴〵となきゐたり。金五郎はなほこゑあらゝげ、「コレ、あいさつしねえは面目ねえのか。エヽそのざまはマア誰ゆゑだ。定めしかはいい男のために、心がらのこの勤め歟。よく物をつもつて見ろよ。犬猫でもそれ相應に、恩といふことは知つてゐるぞ。それになんだ、己の顏を蹈みつけにするは愚かな事、わらの上から育てられた、產みの親より恩の深

い、養ひ親の情を忘れ、恩を仇の犬畜生、義理ある親の名を汚し、恥をはぢとも思はぬ狸め。よくマア面をかぶらずに、のけ〳〵と出てうせたナ。いかに遠路をへだつるとも、多くの人のいりこむ廓、この鎌倉にもおれが親父の、文武の弟子はいくらもあれば、この街へもみないりこむわ。それに面を合はして、恥ぢやァあるゆゑ恥でもなからう。さういふ事とはつゆ知らず、親父は直な心から、神かくしにでもなつたのか、又は身をなげて死んだかと、心を盡して尋ねさせ、うらなひ八卦御鬮にも、生死の程も分らぬから、家出した日を忌日として、佛事供養も懇にすると、くはしい書狀が來たゆゑに、子供の時より一つに育ちし、馴染がひに朝な夕な、念佛申してやらうと思へど、今は養子の身の上なれば、兩親の前へも遠慮がちで、心には任せねど、合間を見ては廻向して、抹香くさい佛いぢりも、萬一たつしやで居るならば、身の祈禱にもならうかと、心づくしに引きかへて、性根のくさつた恩知らず、大切な親をふり捨てて、この土地へ來て泥水活業。オオ貞女だ、節義ものだ。髮のかざりの櫛笄、はでな衣裝に浮氣なとりなり、長唄豐後はやり唄や、一中ぶしをうなつたり、是れ見よがしに踊を踊つて、客の機嫌をとる事ゆゑ、人も迷はう惚れもしよう。惡性ものの天上め。モウモウ愛想のつかし納めだ。顏を見るのもいまいましい。ものをいふのも是れぎりだから、勝手次第に浮氣をしをれ。ト いひすてて立たんとするを、小さんはしじらいひわけなさに、たゞなきしづみゐたりしが、こゝぞ大事とあわててとりつき、小三「サ、、、みな御尤もでござりますが、マア〳〵待つ

○直な　正直な。率直な。

○神かくし　急に姿を消すことを昔は神かくしといふ。神靈にさらはれたと考へたのである。

○八卦　易の占の算木の面に現れる八つの兆象、卽ち乾、兌、離、震、巽、坎、艮、坤をいふ。轉じてうらなひの意とする。

○とりなり　なりふり。すがた。容子。

○豐後　宮古路豐後掾の創めた淨瑠璃。

○一中ぶし　都一中が創めた淨瑠璃。

○惡性ものの天上め　浮氣者、いたづらものの此上なき奴。

て下さいまし。くはしい樣子を御ぞんじないから、お腹をお立ち遊ばすも、少しも御無理はござりませんが、是れにはいろ／＼深い譯が。金「オオ譯もあらうし義理もあらう。けれどもそりやア聞く耳やもたねえ。エヽいけふざけた、はなさねえか。小三「いゝえ放しはいたしません。言ひがひのない心から、思ひもよらぬおうたがひ、死なうと覺悟極めしは、今日の今まで日にいくたび、やつぱり死なれぬ身の因果、どうなりとして今一度、あなたのお顏を見たうへにと、あまたの人の入りこむこの花街、そればつかりを樂しみに、つらい※苦界に身を沈めて、恥や人めに氣もつかず。金「エヽやかましい、よしにしろ。※どどいつの文句めいた、そんなせりふはをかしくねえ。流行言に道理をつけたり、間に合ひの※口ぼこでも、モウその手ぢやアばかされねえわ。小三「左樣ではござりませうが、どうぞ情と思召して、たつた一言申すことを、お聞きなすつて下さいまし。その上にてはともかくも、殺してなりとお腹いせ、御勝手しだいになされまし。ト身をなげかけてすがりとめ、涙ながらにわびるにぞ、金五郎もさすがまた、心強くは云ふものの、憎からぬ小三の事ゆゑ、すげなく立つても歸られねば、袖ふり拂ひ身をそむけ、銚子の酒を手酌にして、茶椀にうけてぐいと呑み、手まくらをして寢ころびゐる。

○苦界　もと佛教の語で、苦の絶えざる世界、卽ち娑婆の意から、轉じて遊女の境界。
○どどいつ　都々逸坊扇歌の唄ひ出した唄。
○口ぼこ　口錺にて口ぶり、言葉つきの意。

○お文さへないて慕して　無いと泣いてとをかけて言つたもの。

○いとゞしく　いよ〳〵甚しく。

小さん
金五郎
假名文章娘節用　前編下卷

第三回

當下小三は胸なでおろし、泪を袖にぬぐひつゝ、金五郎の側へさしより、小三「今さら實を申しましても、一旦お疑ひを受ましたれば、誠とは思召すまいが、あなたにお別れ申してより、一日片時忘れませず、泣いては明し哭いては暮し、もう〳〵悲しい日を送るも、やがて東へ落ちついたら、呼びによこすとおつしやつた、そのおことばを力にして、今日か明日かと指をりて、まてば一日も十日の思ひ、明けても暮れてもお便りなく、一月たち二月過ぎ、三月四月と日は立てども、風のたよりのお文さへ、ないて慕して居るうちに、この春の彌生の頃、日さへ忘れはいたしません。上の八日の夜もふけて、みな家内は寢しづまつても、わたくしばかり目も合はず、こしかた行くすゑどうかうと、思ひまはせばいとゞしく、便りなき身をあなたにまで、捨てられては世に賴みなく、いつそ死なうか果てようかと、案じすごして居ります折から、閨の戸とん〳〵うちたゝき、お龜〳〵とあなたのお聲、さてはと嬉しく戸をあけて、見ればなんにも眞の闇、これも心の迷ひかと、また寢ますると又とんとん、おかめ〳〵とよぶ聲の、三度四たびと聞ゆるゆゑ、また出て見れ

ば物もなし。我とわが身で合點もゆかず、途方にくるれば寺々に、ひゞく夜中の鐘の音の、あはれ無常を告げるかと、ながらへ難く胸せまり、物うき月日を送りますのも、心苦しく※苦患になり、いつそ死んだがましであらうと、思へばしきりにぞく／＼と、首すぢもとから身の毛だち、死ねよ／＼と死神の、ついて死ぬのを勸めますのか、立つても居ても落ちつかず、我を忘れてふら／＼と、家をぬけ出で走りましたが、その後の事はさつぱり知らず、どうして身を投げしやら、賀茂河へ流れ着いたを、近所の者に引き上げられ、息ふき返して見ましたところが、顏も見知らぬこはい男が、※ぜげんとやら人買とやらいふ男と二人で、いろ／＼な、※あだいやらしい事をいうて、抱かれて寢るか言ふ事聞くかと、いはれて怖さ恐ろしさ、いろ／＼にわび言しても、こはい目ばかり致しまして、聞き入れのない無理非道、というて身を汚すくらゐなら、舌を喰つてなと果てませうと存じましたが、身を投げてさへ助かるものを、まだ命の盡きぬ事なら、どうぞして東へ下り、あなたのお顏をもう一度、見ましたうへで死にたいものと、思うた心の通じましたか、その惡棍が、いふことをきかずば、遠い大磯へ※賣りこかし、金にするとやら申します故、とても運惡く死におくれ、惡者の手に捕へられては、おとつさんのところへ直ぐすなほには、返す事もありますまいし、どうで憂き目を見る位なら、大磯の廓は朝暮に、人の入りこむ處といへば、そこへ身を沈めたなら、あなたにめぐり逢はれうかと、※はかない事を便りにして、御恩の

○苦患になり　くるしみなやんで。

○ぜげん　遊女賣込みを渡世とするもの。

○あだ　「あた」にていけづう／＼しいのいけなどと同じく嫌ひ憎む意の接頭語。

○賣りこかし　賣り飛ばす。

○はかない事　確かならぬこと。

○不調法　つたなきこと。あやまち。しくじり。

○泥水に身をしづめても云々　『維摩經』に「譬如下高原陸地、不レ生二蓮花一、卑濕淤泥、乃生中此華上」。又、『四十二章經』に「吾爲二沙門一、居二于濁世一、如二蓮華不一レ爲二泥所一レ汚」とある。泥水は藝者稼業をいつてゐる。

○ちがね　持前。

○指添　脇差。

深いおとつさんを、お見棄て申す心はなけれど、心一ッにせんかたなく、とう〳〵この額俵屋へ、歌妓に賣られて參りましたが、思ひもよらずたつた今、あなたにお目にかゝりまして、あまりの事の嬉しさに、ものさへいはずに立ちましたは、私が前後の考へなく、※不調法でござりますから、お許しなされて下さりまし。殊にあなたに逢ひたいばかりに、覺悟いたしてこの苦界へ、身を沉めは沉めましたが、今さらお目にかゝりますと、まことに身の程が恥かしく、消えてなくなりたうござります。どうぞ大切のおとつさんを捨て、道ならぬことに身を墮し、御苦勞かけてあなたには、御憎しみをうけたこの身、いつまでながらへ居られませう。どうぞこの世の思ひ出には、今までのお疑ひを、おはらしなされて下さりまし。　ト しじらなみだのうるみ聲に人のきこえをはゞかりて、詫びることばのせつなるに、聞けばさすがに金五郎も、いつたん腹はたちけれども、　かくまでわが身を深くおもうて、この※泥水に身をしづめても、蓮に似たる心の潔白、苦勞さするも我ゆゑか、不便のものやと心には、おもへど男の事なれば、そのまゝ心をれかねて、返事もせずに空睡り。　小さんはなほもすりよつて、顏さしのぞき〳〵、「もしあなた、これほどまで申しますのに、お疑ひがはれませぬか。エ、エ、金五郎さんえ、どうぞ御堪忍あそばして、お心を直してくださりまし。もしお疑ひが晴れましたら、たつた一言いつものやうに、堪忍するとやさしいお詞、お聞かせなすつて下さりまし。よ、よ。　ト ※ちがねあらはすむすめ氣の、金五郎に取付きて、しばし涙にくれけるが、　心づきて涙をはらひ、あたり見まはし金五郎の、側に置きたる※指添を、音せぬやうに、そろりと拔くを、見

ゐより金五郎ははねおきて、その手をしつかりおさへつけ、金「コレ何をする、あぶねえわ。人おどしの※刃物三昧か。トいふ顔つくゞ見て涙ほろり、小さん「エヽお情ないそのお言葉。女子だてらに人おどしの、こはい刃物が持たれませうか。そりやあんまりでござります。なんぼあなたが男でも、お情ない※おどうよくでござりませう。是れほど事をわけまして、お詫言を申しますに、たつた一言のおへんじもなく、しばらくお目にかゝらぬとて、そんなにマアわたくしが、憎くておいやになりましたか。そりやあなたでもござりませぬ。たとひ女夫のかためはせずとも、一旦あなたのお口から、戯談におつしやつたかは存じませぬが、行くすゑかけて女房にするの、二年や三年遠ざかつても、變る心はない事の、短氣を出さずに便りを待てのと、人ばつかりを嬉しがらせて、わづか半年あまりのあひだに、さうお心の變りますは、あんまり聞えぬあなたのお心、どうでそのやうにおきらひなされば、何を樂しみ今日が日から、むだに命をながらへませう。わたくしがなきあとで、せめて一遍の御廻向をと、申した處がおいやの私、とてもそれも叶ひますまい。これもみんな約束事、いたし方もござりませぬ。トゆだんを見すましまたぬきかけるを、金五郎は指添もぎとり、金「はやまつた事して後悔するな。それ程に深く思つてゐるなら、生きながらへて後の世まで、人の物笑ひにならぬ樣に、※にごりの名をもすゝぎあげ、生きわかれた※眞身の姉に、めぐりあうて名告りあひ、古郷に殘したわが親父に、孝行せうとは思はぬか。殊にそなたの身のうへは、此家へ賣られて來たことゆゑ、わがものならぬ

○刃物三昧　ともするこ刄物の方に向ひやすき。
○おどうよく　貪慾の音便であるが、此處では非道なるこご、無情、苛酷の意。
○にごりの名　汚辱の名。汚名。
○眞身　親身であらう。肉親の意。

○死は一旦にして云々　諺に「生は難く死は易し」。

○御入内云々　花魁の未だ座敷に來らざるを洒落ていつたもの。

主人の體、なりや今こゝで死んで見ると、主人も難儀このおれも、のがれぬ中で難儀をするわ。※死は一旦にしてなし易く、生はかたしといふところへ、心づかぬか、コレ小さん。

小三「エヽそんならあなたお疑ひが、晴れましたと申しますのか。そりや本當でござりますかえ。金「ウンヨ、なに譃をつくものか。小三「エヽ嬉しうござります。それでちつと氣が落ち付きました。トたがひに心はとけながら、金五郎も男のいぢ、なんとやはらぐことばもなければ、又酒肴を、いひつけて、唄妓幇間を呼びにやると、程なく皆々どや／＼と來る。たいこ日八「ヘイ旦那、其の後は一別以來、とんと見參つかまつりませぬ。金「ほんに日八公、さつき逢つたまんまだつけの。げいしやおとわ「オヤ旦那、お歸んなすつたと存じましたら、またこゝの穴へお這入りなさいましたネ。オホホヽヽ。オヤ、小三さん、是れはおはやう。さぞおくたびれなすつたらう。トあいさつするに、小さんはけどられじとなみだをかくし、小三「アイ、やうやう今しまひましたヨ。まことに／＼暑くつて、びつちより汗になりましたよ。トいひまぎらせど、とかくに胸のどうきのをさまらねば、さしうつむいてふさぎゐる。もく藏「ときにおいらんはまだ※御入内がごぜえませんね。モシ旦那、やつがれがちよと、敕使に立ちませうか。トいふに金五郎笑ひながら、「ナアニ、足下の足を勞すまでもなしさ。ちつと見かけた山があるから、おいらんの處へ敕使もたてず御内意もしねえのよ。おとわ「オヤ／＼旦那はおいらんに、かたい約束をなすつたぢやアありませんかえ。それにマアそんな事を。金「ナニサ、今に樣子がわかりせえすりやア、眞名鶴も呼びにやるのす。まア／＼そんな事は扨置きとして、諸事

○はやことくぜり　早口に云ふ流行唄の義であらう。

○上がたうた　地唄。

○成田屋　市川團十郎。役者をほめる詞。

○ぴんしやんぴん　跳ねあがるさま。活動のきびきびしてゐるさま。こゝはすねるの意か。

○のつぺらぼん　のつぺらぼう。變化のない面白くないもの。

酒だ、唄へ唄へ。トぎよいにしたがふげいしやの長唄、

へさうした黄菊としらぎくの、おなじつとめのその中に、外の客しゆは捨小船。トうたひはやして賑はしく、しだいに銚子の數もかはれば、※はやことくぜりのはやり唄、※上がたうたで騷ぎ立つれど、とかく小三はうきうきせず。目八は小三の肩をたゝき、目八「コレ女房ども、なぜマアそのよに鬱塞いでをる、ちつと浮々しやいのう。イヨ※成田屋ア。小三「アレモウ嫌だヨ。おふざけでない。目八「コレサなぜそんなに、※ぴんしやんぴんぴんするのだ。人目が多くて恥かしいか。さうかさうか。ハテさて初心な子ではあるぞ。おまへとわたしのその中は、知らねえものは、ネエもし旦那。金「大きにサの、左右この子は男が嫌えださうで、なんぼ馴染のねえおれでも、ちつとかそつとは何とか彼とか、のうおとわ。とわ「さやうさねえ、今日はどうかおしださうで。まことにふさいでお出でなさるが、こりやア何か譯がありませう。トけどつた樣子の口うらに、金五郎はわざとまぎらし、金「さうヨ、大かた色男が、來つてゐるのをこつちへ呼んだで、それできつく鬱塞ぐだらう。どうで己が樣な※のつぺらぼんは、女にやア緣遠いから、兄弟分になるつもりだ。ちひせえもんだやア面倒だから、サアサア是れへついでくんな。ト大きなゆのみへ酒をつがせ、のみに懸ると小さんはおさへて、小三「モシあなた、それではあんまり過ぎますぞえ。金「なぜ、酒がすぎちやアわるいのか。小三「わるいと申すぢやござりませんが、あんまりあがるとお身の毒、わたしがすけてあげませう。是れもやつぱり勤めの一ツ、みなさん笑つておくん

なさんなよ。ト ぐつとのみほし、ほつとひといき、 もく藏「イヨ濱濱、ありがたし。玉藻前の再來め。これらが
ほんの、よしこの〳〵。 日八「モシ旦那、わたくしが目の惡いせえか、小三さんはどうも、
おいらんに似てゐなさるぢやアごぜえませんか。 ト いはれてふたりは胸にぎつくり、金五郎はわざとそらとぼけ、 金「ナニ小
三がカ、どれどれ。 ト 笑ひながら、 小三の顏をさしのぞけば、小三はうれしさ恥かしさに、はながみ
でかほをかくす。 金「ほんにのう、足下の目のせえでもねえ、己にもさう見えるやつヨ。他人の空
似とやらだ。のう小三。 ト いはるゝたびにむねどき〳〵、 小三「どうでございますか、私なんぞが。 金「ア
アなんだかひどく醉ひがまはつた。ゲエイ引。コウ小三、水を一杯もつて來てくんな。
ト そのまゝそこへうちふすに、小三は下へおりてゆく。 もく「旦那もし、モウたぬきでお逃げなさるネ。そりやア近ご
ろあなたでも御ぜえません。モウ一ツ獻じませう。モシだんな、およつちやアいけません。
モシ旦那。これはしたり、モウおよつたさうな。 日八「そんならもうそろ〳〵軍勢は、こ
の陣を退かう。のうおとわさん。 おとわ「さうさねえ。 ト いふところへ、小三は茶わんに水をくみきたり、 小三「オヤ、
だんなはおよつたかえ。 日八「さやうさ、あんまりあがりつゞけだから、ちつとおよるが
ようごぜえやせう。そんなら小三さんおゆるりと。 もく藏「しかし旦那と小三さんとさし
むかひぢやア、猫に鰹節、泣く子に乳で、ちつとあぶねえものだテネ。 小三「オヤいや
よ。わたしも今に下へ行くがネ。アノおとわさん、はゞかりながら、枕と掻卷をちよつと
下へさういつておくんなさいな。 おとわ「アイ〳〵合點でございますヨ。 ト みな〳〵下へゆく。 引

○濱濱 濱村屋を縮めて云つた詞。瀨川路考に似てゐるからであらう。
○玉藻前 三國を渡り歩いたといふ金毛九尾の狐の化身と云はれた女性。支那・印度を渡り、我が國に來て鳥羽天皇の御代、宮中の女官となり、安倍の泰親に退治されて那須の原に逃げ殺生石と化したと傳へられてゐる。支那古代の妖姫妲妃もこの妖狐の化身であるといふ。この傳說は謠曲、劇、講談等に脚色されて人口に膾炙されてゐる。
○よしこの 關東では都々逸、上方ではよしこのと云ふ。
○たぬき 狸寢入。
○猫に鰹節、泣く子に乳 共に同意の諺。

きちがへて下女、かいまきと枕を持ち來り、下女「モシ枕をおさせ申しませうかえ。トいふ時金五郎は、小三の膝をそつとつく。小三は心を呑み込んで、小三「ナニ私が今、お起し申して上げるから、そこへ置いていつておくれ。下女「ハイハイかしこまりました。ト枕をおいて下へ行く。金五郎は目を開いて、あたり見廻し、まくらを取つて又ねころび、金「※七段目の由良といふ計略だ。サアもつとこつちへよんな。ト小三の手をとり引きよせる。小三「また誰か參りますよ。金「なんのこつたな、そんな野暮な者が居るものか。但しはいやか、嬉しくねえか。小三「あなたのお心がとけまして、嬉しい事はうれしいと、思ふにつけてまた一ツ、心がかりが出來ました。金「そりやアマア何か、やつぱり誰にか義理だて歟。小三「人の事より貴方のこと。聞けば千年屋の眞名鶴さんと、深い中とおつしやること。眞名鶴さんは情を賣るが、勤めのならひに引きかへて、わたくしは又座敷ばかりの、はかない歌妓の身のうへ故、たとひどのやうな譯あつても、彈妓は抱への女郎衆には、勝たれぬが廓のならはし。それ故なま中お目にかゝつても、今日より末はどのやうな、つらい憂目を見ませうか。知らねば知らぬで心はすめど、あなたと眞名鶴さんとの譯もあれば、やつぱり※焰をもやすたね。悋氣は女子の嗜みなれど、流石女の淺はかに、よい貌ばかりしては居られず、どのよな事であなたのお名まで、出るやうな事でもありませうかと、今からそれがさきだつ苦勞、思へば悲しうござります。金「なんのこつたな、こりやアをかしい。そんな苦勞を今からする

○七段目　『忠臣藏』の七段目茶屋の場。由良は大星由良之助。

○焰をもやす　嫉妬のほのほをもやす。

○立　法則。掟。

○心中立てる　男女の契を立て貫く。誓約を守り通す。

○都　京都をいふ。

と、天井で鼠が笑ふによ。この廓の立だといつても、思ひ込んだが男の意氣地、廓の掟をやぶつて見せう。といふはまことの意氣張づく、だが眞名鶴とおれが中も、深い馴染であらうかと、一寸聞いても腹が立つ筈。牽頭歌妓もくはしい事は、互に顔に出さぬから、惚れて通ふと思つてゐれど、これにやア深い様子があるのヨ。といふ譯は外でもねえが、おめえが家出をした事を、知らせの狀にがつかりして、この世に望みも絶えたから、ながらへて居ようとも思はなんだが、父よく／＼考へて見ると、實に死んだか壯健でゐるか、又は外に云ひかはした、男があつて逃げたのか、取りとめた事も分らぬのに、己ばかり心中立てるも、あんまり愚癡な穿鑿で、末代人の物笑ひ、殊に上方の親父をはじめ、此の地の養父や養母に、苦勞をかけるは大不孝と、心で心を取直しても、おめえの事が忘られねえから、他の女にや心もうつらず、一日々々と暮すうち、友達にさそはれて、いや／＼燈籠を見物に、來た日が丁度眞名鶴の、突き出しの日でとりどりに、美しいと評判するゆゑ、もしや少しも似てゐるかと、見れば迷ひかそなたにその儘、ハテ似た者もあるものと、客になつてよそながら、聞けばやつぱり都といふから、心ゆかしく懷かしく、初會の晩から打解けて、互に身の上明した處、似たのも道理、お鶴といつて、里にやられた六兵衛殿の、總領娘と聞いてびつくり、妹のお龜は斯う／＼と、話せばお鶴も共に驚き、泣きつかこちつ哀れな話で、一ッに寢るは扨おいて、妹のそなたに心中立て、帶紐とかぬさすがの氣

性、おれとても又おめえの生死が、知れぬからとてその姉の、眞名鶴を抱いても寢られず、というて見捨てるも本意でねえから、妹のよしみに客になつて、末ながく力にならうと、約束をして通ふゆゑ、深い樣子のある事を、誰一人知る者もなく、今日まで義理で遊びに來たのヨ。ところが今度額重で、かゝへの藝者の小三といふが、淺間の踊を踊るといふが、廓中での隨一と、とりどりに評判するを、守多屋の二階で眞名鶴と共に、見ればそなたに逢はねば、どういふ事でこの廓へ、遠路を隔てて來てゐるかと、不審に思へば幇間共が、男のために身を賣つたの、男と逃げたのなんの彼のと、いふを聞いてはこの胸が、はりさくばかりに腹が立つて、心の腐つた女の事、ふりむいて見るもいま／＼しいと、あきらめて見ても凡夫のこと故、やつぱり迷ふ心の愚癡から、なんでも實否を糺したうへ、ともかくもしようと思つて、みんなに知らせず歸つたふりで、取つてかへしてこゝへ來て、見ればそなたに逢ひはねえが、顏を見るより物をも云はずに、逃げるから猶腹が立つて、今の樣にいつたのも、なんと無理ぢやアあるめえがの。かう心がとけるからは、眞名鶴を爰へ呼んで、姉妹の名のりをさせてやるぜ。トきいて小三は大きにおどろき、「エ、そんならアノ眞名鶴さんは、わたくしの姉さんでござりましたかえ。アノ姉さんで。 金「さうヨ、正眞正銘のお前の姉よ。 小三「エ、そりやマア嬉しうござります。さうとは微塵もぞんじませんで、淺い女の心から、いろ／＼愚癡な恨みごとは、もつたいないとも、恥かしいとも、又嬉しいもや

まゝ／＼なれど、なんの因果でこのやうに、姉妹ふたりが揃ひもそろつて、つらい勤めの流れの身、はかないなりで名のりあひ、つもるはなしのうき事も、亡き兩親が草葉のかげから、御聞きなすつたら、うかばれますまい。同じ勤めのその中でも、騙されしとは云ひながら、眞名鶴さんは親のため、苦界に沈むも恥でもない。それに引きかへわたくしは、※いたづら事の心から、御恩の深いおとつさんを、都に殘して此の勤め、我が身でわが身の愛想もこそもつき果てて恥かしい、面目もない身でござります。金「なる程夫れももつともだが、ハテ何事もみんな約束、どうするものか、仕方がねえわな。そんな事を苦にやまねえで、久しぶりだから浮き浮きして、ちつとにつこりして見せな。一體のろけるやうだが、眞名鶴とお前と、よく似てゐるが、ならべて見たら又いちだん、おめえの方が美しからう。小三「オホヽヽヽ、そんな事をおつしやるけれど、姉さんとおまへさんは、どうも知れませんヨ。（トにつこりわらつてよりかゝる。）金「こいつアをかしい。姉さんとおれがどうしたと。小三「オホヽヽヽ、どうもなさりはしますまいが、私はどうも。金「なんのこつた、寢たらうといふことか。小三「ハイ。金「ハテお前も疑ひぶかい。今もくどく云ふ通り、小さい時からひとつに育つて、あんまりかはいがられもしなんだが、憎がられもしねえ中だに、おめえをすてて眞名鶴に、見かへる心があるものか。小三「それでも戀は思案の外、※をとこの心は秋の空とやら、お疑ひまをすではございませんが、アノ芝居でもいたします、

○いたづら事　みだらな仕業。淫奔な所業。

○約束　物事の自から成り行くべき定まり。前の世の約束、前の世の約束事などともいふ。

○をとこの心は秋の空　また「變り易いは男心と秋の空」などといふ。

※お半長右衛門を見るやうに、思案の外の不義いたづら、長右衛門は年といひ、お絹といふおかみさんのある身分で、ひとり娘のおはんをば、身おもにさせたいたづら者。金「コウコウなにをいふ、そりやアほんの狂言だ。よし又實說の事にもしろ、なんのおれが水くさい、そんな心をもつものかな。※朱にまじはれば赤くなると、おめえも僅かな間泥水を呑んだら、たいそう※手も見え足もはえたい。モウいい加減にやきもちをやいて、久しぶりだから、もつとこつちらへ寄んねえヨ。ト――。小三「私はモウ、餘り嬉しくつて、夢ぢやアないかと思ひますヨ。金「ヘン、夢なら大方、はやく覺めればいいと思ふだらう。小三「又そんな憎いことを。夢ならどうぞ、いつまでも覺めずにをれば、ようございます。金「うそ〳〵。そしてモシ夢ならどうする氣だ。小三「どうもいたしませんが、お側にゐて。金「それから。小三「オホヽヽヽヽ、いやでございますヨ。金「――がいやか。小三「どうだか存じません。ト顔をあかくしてうつむく。金「ナニ知らねえ事があるものか、御存じだらう。――。ト――心もうちとけて、※契りそめたる湯帷子、――――。かくて是れより金五郎は、千年屋へ人を走らせ、眞名鶴を招き寄せて、小三に對面させしかば、眞名鶴も頻りにおどろき、生まれて初めて姉妹の、まめで逢うたるよろこびに、嬉しさあまる悲しさは、身儘にならぬ勤めと勤め、あぢきなき世と打ちかこち、泣きつ笑ひつ夜とともに、※かたみに憂さを語りける。かくまで小三と金五郎

○お半長右衛門　菅專助作の淨瑠璃『桂川連理柵』に仕組まれてゐる。

○朱にまじはれば赤くなる　諺。傅休奕、「太子少傅箴」に「近墨必緇、近朱必赤」。

○手も見え足もはえた　世間が善く分つて來た。

○契りそめたる湯帷子　湯帷子は今、略してゆかた（浴衣）といふ。契り初めたると、染めたる湯帷子との掛詞。

○かたみに　互に。

○不便　憫むべきこと。いとほしきこと。
○契りを込めし　夫婦の交りをする。
○師走　陰暦十二月。
○堀　山谷堀。
○通ひくるわの大門　通ひ來ると廓の大門とをかけた。演劇の常套にある臺詞。
○めつぽふ　佛教で欲世界の空しきを悟り、苦を滅ぼすを滅といひ、その滅の法を悟り得たといふこと。法外に、甚しくの義に用ひられてゐる。
○しんねこ　他に誰もゐないで、差向ひに男女のしめやかに睦じくしてゐること。

は、おさからぬ中なるゆゑ、眞名鶴は小三のこと、いふまではなけれども、千世も八千世も末かけて、不便と思ひあはれみて、お情かけて下されかしと、いとねんごろに賴みける。さても金五郎は、小三と契りを込めしより、互につのる戀中に、一日逢はねば氣に懸り、二日も顏を見ぬ時は、心もすまず苦になるまで、一とせ餘り通ひけり。頃しも師走の半ばにて、雪は木ずゑの花とちり、寒さいとはぬ若い同士、雪見の船を堀へつけ、連れをはづして金五郎は、ほろよひ機嫌に唯ひとり、額俵屋へ入り來れば、それと見るより若い者、「これは旦那、だいぶお遲う。この大雪に、よい御機嫌で。　金「雪のふる夜も雨の夜も、通ひくるわの大門をか。ハヽヽヽ。めつぽふ寒くつてげん氣なしヨ。十公いつものとほり飮み込んだらうの。　十吉「オツト合點承知之助、モシ今夜らはしつかりおあつたまんなせいまし。サアお二階へ。　ト案内に金五郎は、はしごとん〳〵、奧の小座しきへうちとほれば、　娘分のおきく、茶煙草ぼんをもちきたりて、「オヤ金さん、よくいらつしやいました。お珍らしいものが澤山ふりましたねえ。　金「さうサ、それだから一ばい寒いの。　おきく「よくこのマアお寒いに、貴方もよつぽど小三さんにやア御信仰でございますネ。　金「御推察の通りス。しかしおめえなんぞも容貌はよし、氣めえといひ、しん心をする男が多からう。　おきく「オヤよろしく申しておくんなさい。なんの私のやうな者を、つめつてくれる人もございませんヨ。　金「うまくいふぜ。しつぽりと、しんねこではまぐりのお吸物をしめてる人が、のうお菊さん。　おきく「オ

ホヽヽヽ、あんな、憎らしい事を、小さんさんにいつつけますよ。金「ハヽヽ、コウお菊さん、お前に獻上しようと思つて、持つて來た物があつたつけ。ト※ふところから、本べつかふのくわんぎくのくしを出してやる。おきく「オヤ／＼およしなされはよいに、毎度どうもお氣の毒さまで。金「なんの、マアだまつて取つて置きなナ。お前のすきな、※紀の國やのだから。きく「誠に有り難うござります。ほんに鈨菊がた、源之助のでござりますネ。どうも誠に※風といひ、※甲と云ひ、いつそ、好いた形でござりますヨ。金「コウときに、小三は都合は能いかの。どこぞ、座敷へ出てゐるのかえ。きく「イヽエ、なんでございますヨ、方々から口がかかりましたが、なんだか氣色が惡いとやらで、みんなお座敷を斷つて、引きこんでゐなさいますよ。金「さうか、どうしたの。又れいの癪だらう。きく「ナニ癪ではありますまいが、大かた此の雪に、あたんなすつたので、ありませう。小三さんの氣色のわるいは、おまへさんの、お藥が、※いつち、よくききますから、早く知らせて參りませう。金「何のかんのと、嬉しがらせるのか。おめえもよつぽどさるものだヨ。ト煙管でしりをちよいとたゝく。きく「オホヽヽヽ有りがたうござります。トおきくは立つて下へ行く。程なく小三はしづ／＼と、梯子をあがつて出で來るすがたは、何かなやましげに顏色さへも常ならず、あらひ髮なる島田髷、鬢のおくれ毛寢みだれしを、※黄楊の小櫛にかきあげつゝ、重き顏にもにつこりと、笑ひを含むあいきやうは、俗に所謂いのち取り、男ごろしといふべけれ。金五郎は、行火へあたり、寢ころびてゐる側へ、小三はより

○くわんぎく　鈨菊。紋所の名。菊の花の形を崩さし、これに蕊を添へたもの。
○紀の國や　澤村源之助の屋號。
○風　風態。恰好。
○甲　背の所。
○いつち　逸「いち」の急呼。いと。もつとも。
○黄楊の小櫛　黄楊は黄楊科の常綠大木。材質が白く堅いので、古くから櫛などに用ひられた。小櫛の小は接頭語で、小櫛でくしのこと。『萬葉集』九、二十七に「君なくは、なぞ身かざらむ、櫛筒なる、つげの小櫛も、取らむとも思はず」とある。

○わつさり　極輕く、ほんの少々、簡單などの意

そひ、さしうつむくを、差覗きつゝ、金「どうした、ひどくふさぐのう。雪の寒さにあたつたか、風でも引きアしねえかの。小三「風もちつとは引きましたが、そればかりではありません。金「フウ、夫れぢやアいつもの持病の癪か。小三「持病や酒の二日酔なら、ふさいでゐてもあなたのお顔、見れば直るは常の事、そんなことではござりません。金「ハテおつなことをいふもんだの。さうしてマアどういふことだ。小三「なんだかいつそ苦になつて、人にも言はれぬ心の苦勞。金「ナニ、人にはいはれぬ苦勞が出來た。ハテナ、ハヽア、それぢやア大かた、なじみの客が身うけをするといふ事か。小三「なんのマア、そんなことが。アノなんでございます。金「なんだとは。小三「アノ、是れでございます。トはらへゆびをさして恥かしさうにかほをかくす。金「ハヽアそんなら、とまつたのか。アノ夜食のかたまりが出來たといふのか。小三「ハイ、それだからモウ、まことに苦勞でなりません。金「なんの事かと思つたに、どうでかういふなかだもの、子の出來るのは覺悟のうへ、なにも苦にする事はねえ。さうしてとまつたのは、いつからだ。小三「モウ三月程になりますヨ。金「そりやア大そうはやかつたの。しかし身重になるからは、いつまで勤めもなるめえから、追付け春になつたらどうなりと、重兵衛に懸け合つて、つがふして勤めをひかせるから、必ずあんじることはねえヨ。マアマア何はともかくも、實をむすぶ目出たいことだ。心祝ひにこれからわつさり※、みんなをよんで酒とせう。小三「とは言ふもののこれからは、一ばい

あなたに御苦勞を、かけませうかとそれが今から。金「苦勞になるとは金ばかりの苦勞、つまらぬ事を案じ立てして、煩つてくれちやア、いかねえぜ。サア〳〵酒だ。トこれよりいつもの幇間藝者、大ぜいあげて大騷ぎ、酒筵にときをやうつしけん。

いろは引の節用集は、日用の御重寶にて、士農工商が朝暮の、引書、乾坤時候草木器財、何でも選採十三門、部分に四聲の畫引入らず、和かいのが當世と、おもひついたる假名まじり、娘節用とこじつけしを、俗でいいとか實意だとか、茶かして稱める脊的の、洒落を版元實と心得、二編は今些色氣澤山、戀といふ字の趣意を、穿て／＼の立催促、初編の緣にひかされて、いやといはれぬ義理と犢鼻褌、書かれぬものは新趣向、變らぬ口舌の魂膽も、おもしろ狸の腹合はせ、帶の眞實解き盡せし、小三金五郎が偕老の、その約言のひそひそと、枕に殘る仇言は、こんなものでもあらうかと、書肆の携せし稿本へ、ちよつぴり加へた補書の、序に朱墨を摺り流して、口繪の前を汚すといふ。

江戸　三文舍主人戲題

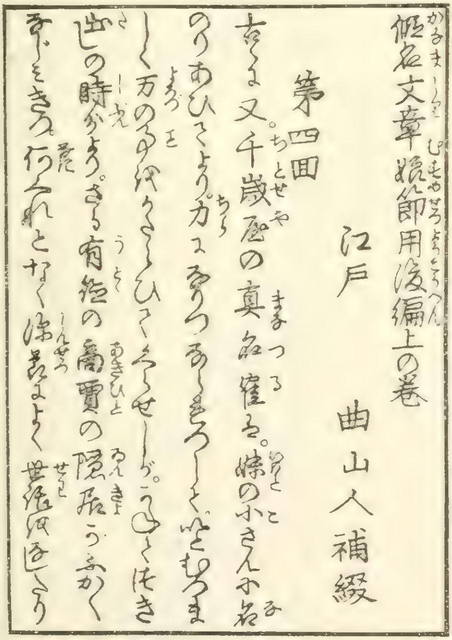
○節用集　明應五年、饅頭屋林宗二の著はすところ。天地、時候、人倫、人名、官名、支體、財貨、食服、草木、畜類、光粉、言語、數量等の十三門に分ち、日用の熟語諸文字を列擧して、之に註釋を加へたもの。
○四聲　平上去入。
○畫引　字畫の數に依りて引く字引。
○實意　本心、本性。
○穿て／＼　深く機微を穿ち發け。
○書かれぬものは　上に義理と犢鼻褌とある。これ等の缺かされぬと新趣向の書かれぬとをかけていつた。
○おもしろ狸の云々　「狸の腹つづみ」をもぢり、「腹合せ」と出し、これに連關して帶を持つて來たもの。「解き盡す」も帶と眞實の双方へかゝる。
○偕老の約言　偕老同穴。卽ち夫婦の契り。
○三文舍　曲山人の別號。

○有徳　富み榮ゆること。富裕。富貴。ぶげん。

小さん
金五郎　假名文章娘節用　後編上の巻

第四囘

こゝに又、千歳屋の眞名鶴は、妹の小さんに名のりあひてより、力になりつなられつして、いとむつまじく萬の事を語らひて暮せしが、かねてつき出しの時分より、さる有徳の商賈の、隱居が深くなじみ來つ、何くれとなく深切に、よく世話をなしたりしが、其の年の暮眞名鶴は、かの隱居に請け出され、向島の邊に樂々と、世をおくる身となりにける。されば月日の過つこと速かにて、明くる二月のころには、小さんははや五月になりしかば、座敷へ出れば夜も更ける、又は無理なる酒も呑む故、身のためにあしかるべしと、金五郎は額俵屋のあるじにかけ合ひ、


假名文章娘節用後編上の巻　江戸　曲山人補綴
第四回
こゝに又千歳屋の真名鶴ハ。妹の小さんに名のりあひてより力になりつなられつしていとむつまじく万の事をかたらひてくらせしが。かねてつき出しの時分より。さる有徳の商賈の隠居がふかくなじみ来り何くれとなく深切によく世話して

○三條の小鍛冶宗近　謠曲『小鍛冶』の中に出て來る。一條天皇の御劍を打たうとする時、稻荷明神現はれて相槌を打ち、表に小鍛冶宗近、裏に小狐と銘を打つといふ筋。
○大小　太刀と脇差。
○燒刃　刀身に現はれた文様。
○わざもの　名工の鍛へ作つた切味の鋭いきれもの。
○一包　金百兩。
○祕藏なる　可愛がつてゐる。即ち祕藏子の意味。
○爲替　爲替の事は、元和、寛永の頃より始つたと云ふ。江戸時代には爲替屋、今日の銀行の如きものがあつた。

ちとの手付の金を遣はして、近きうちには請け出す程に、夜の座敷へ出さぬやうにと、たのみにあるじ重兵衞も、さすがはすゐな男ゆゑ、早速に承知して、いと深切にいたはりけり。かくて金五郎は、小さんを身請の金とゝのへんと、さま〴〵に思案したりしが、もとより大金の事なれば、養父文次郎へ、うち明けていふべきやうもなかりし故、いかにやせんと左や右に、ひとり胸のみ苦しめしが、やう〳〵に思案をめぐらして、京師の父文之丞かたへ、ひそかに言ひ送りけるは、この程三條の小鍛冶宗近の銘作にて、大小の拂ひものあり、殊に燒刃世にすぐれし、わざものにて其の價は、一包との事なるが、もとより兩刀は武士のたしなみ、何とぞ是れを手に入れたきまゝ、内内にて右の金子、御かし被下候やうにと、ひたすらに懇望の文面ゆゑ、文之丞もいと祕藏なる、一人の子の望みなれば、いつはりなりとは露しらず、まことゝ思へばわが子ながら、よき心がけ末賴もしく、本家を繼げども、兩親のあるゆゑ萬事身まゝにもならで、心に任せぬがち、さこそあらんと子を思ふ、なさけある親心に、故なく百金の金をとゝのへ、爲替にて、ひそかに金五郎のかたへ送りけり。扨も金五郎はげいしやの小さんが、唯ならぬ身となりしより、猶さらに可愛さいやまし、はやく勤めをひかせんと、思へど身請の金とゝのはねば、是非なくみやこの父のかたへ、刀もとむる金なりと、いつはりて書狀を送りしかど、かの地で金とゝのふや、それさへ侍にならざれば、とにかくに心安からず、みやこの便りを俟つうちに、しだいし

○まめだつ　まめに立ち働く。

○おのし　御主（おぬし）の訛。お前におなじ。やゝ目下なる人に對して用ひる。

○おつなもの　變つたもの。

だいに月かさなりて、小さんははやこの月が臨月になりしかば、額傳屋夫婦も、深切なる心から、慾をはなれて、小さんをいたはり、殊に金五郎の親もとも、豊かなること知るゆゑに、手付の金を取りしのみにて、殘りの金はうけ取らねど、さらに危むこともなく、產の手當を何くれと、のこる方なくまめだちて、安產をこそ祈りける。金五郎はかくまでも、額重夫婦の深切の、ひとかたならねば少しもはやく、身請の金を渡したく、思へどそれも自由ならず、ひとり胸をぞ苦しめける。はや月みちて小さんは、玉のやうなる男子を產みしかば、金五郎はさらなり、額重夫婦も、喜ぶこと大方ならず、その名を金之助と名づけしが、兩親に似て美しければ、金五郎は日ごろにまして、小三金之助の愛にひかされ、とかくそは／＼氣もおちつかず、內に居ることはまれにして、額重へのみ行くものから、白翁は總領の、文之丞が不身持にて、大かたならぬ苦勞をしつれば、秘藏孫の金五郎、いたづら者になりもやせんかと、はら／＼思ひゐたりしに、近きころは外を內、內を外と居つかぬも、はじめの程は若ものの、ならひとさのみ咎めもせず、打捨てておきけるに、漸々につのるゆゑ、かくては身の爲惡しかるべしと、思うてある日わが居間に、孫娘のお雪に琴を彈かせ、煙草くゆらし聞きゐたるが、きせるをはたいておゆきにむかひ、「コリヤお雪よ。モウ琴もよいにしやれ。この頃は大ぶん上達したが、ずゐぶん身にしみてならうたがよい。わしもおのしが琴をきいて、大きにうさをはらしました。年がよるとおつなもので、外に何も樂しみ

○一統　おしなべて。一般に。

がないから、お念佛でも申したり、おのしが琴や三味線を聞くのが、何よりよい慰みぢや。イヤそれはさうと、アノ金五郎は内にゐるかの。ト問はれてお雪は琴のつめをはづしながらにこやかに、「ハイお兄さんは、お部屋にお出であそばしました。なんぞ御用でござりますか。白「オヽ、さしたる用もなけれど、私が今茶を入れるから、ちと話しに來いと呼んで來やれ。ゆき「ハイハイかしこまりました。お呼び申して參りませう。ト琴をかたよせ出でて行く。引きちがへて金五郎は、ちゝの白翁が居間に來れば、「オヽ金五郎か。サアサアもつとこつちへ來て、茶が出來たからひとつ佇みやれ。茶菓子はさいはひ御前から頂戴したのをとつてある。トいつにかはらぬまめまめしさに、金五郎も茶を飲みつゝよもやまのはなしのついで、白「コレ金五郎、おぬしも今が血氣のさかり、老人のいふことは面白うあるまいが、マアよう聞きやれ。おつなもので、子を思ふは親の常で、貴い賤しいの差別はないもの。さきだつていつの頃でかあつたか、上方から狀が來た時、あちらは※一統風がはやると、さういうてよこしたも、やつぱりおぬしを案じるゆゑ、氣をつけてくれとの事であらう。もとよりおぬしもひとりの親、父兄弟とても外にはなし、もちろん文之丞始めおぬしまでも、隱してはゐるなれど、お龜とやらいふ容貌よき娘を、親知らずに貰うて育てあげ、互に兄弟のやうにして、憎からぬ中であつたとやら。そのお龜でも側にゐたら、またまぎれにもならうけれど、それとても行方知れず、生死の程もわからぬと、サ、ちらりとおりや聞いたぞや。何をいうてもこちらのお雪は、まだ一向の子どもなり、内にゐても面白くあるまいが、今で

は文之丞もおぬしをば、こちらへ貰ひうけてからは、お錢も居ぬゆゑ樂しみに、思ふはコレ、そちばかりぢやから、わるい耳を聞かせぬやうに、せにやならぬが若いうちは、利發な者でも些とづつは、身にあやまりの出來るもの。もつともはや遊びなどは、めん／＼の得手勝手ゆゑ、暑さ寒さも何とも思ふまいが、また内ではさうはない。アこの寒いに出てゆきをつたが、風でもひきそへねばよいが。夜が更けてかへらねば、寢てゐてもろく／＼ねられず、人の足音のするたび／＼に、歸つたか／＼、門をしめたで這入られぬのかと、引立耳をして聽いてゐるぞや。ずゐぶん折節は付きあひなどで、遊びにも行くがよしサ。若いうちの事なれば、なんでもするなでは無いけれど、此の頃はあまりに高じたぞや。それがつのると、はて／＼は、モウどうなつてもまゝの川と、身の納まりもつかぬやうに、なるものだからたま／＼は、内にゐてみんなの氣も、ちつとは休めるやうにしやれ。このくらゐな事はいはずとも、承知してゐるであらうが、募らぬやうにしたがよい。トかたいやうでもどこやらにかどのとれたる丸あたま、撫でつゝことばやはらかき意見に金五郎は一言半句の、かへす言葉もなかりしが、金一だん／＼の御意見心魂に徹しまして、申し上げることばも御座りません。これまで種々に御苦勞を、かけましたは、重々身のあやまり、お許しなされてくださりまし。トあやまり入りたるをりからに、おゆきはまたも出で來たり、ゆき「モシ、おあにいさまえ、アノ上方からお使がまゐりましたヨ。ト聞くより金五郎は俟ちかねたる、たよりにとびたつ嬉しさを、知られじと胸におしかくし、

○耳　聞。
○めん／＼　面々。各人めい／＼
○引立耳　耳を欹てゝ聞くこと。
○まゝの川　勝手にする。

○いそ〳〵　悦び勇む樣子を云ふ。

○内端　萬事控目の意であるが、此處では内氣位の意。

金「ナニ上がたから人が來たかえ。ト聞き耳たて、いふに白翁も「オヽなんぢや、上がたから便りがあるか。今も今とてうはさをした處、早う金五郎行つて見やれ。トすゝむることばに金五郎はいそいそとして玄關に立ち出で、使に逢うて狀うけ取り、ひらきて見れば、刀をもとむる金一包は、使の者に、持たせつかはし候へば、あらためてうけ取り申すべしと、こま〴〵といひ送りつ、猶其の書狀の封じの奧より、隱居白翁への書簡も出でしかば、その狀は白翁のところへ差出し、かの一封の金をうけ取り、おのが部屋に入りて返書をしたゝめ、使の者はかへしけり。金五郎はかの一封の金を得しかば、飛びたつばかりに喜びて、すぐに懷中し、立ち出でんとして、中の間をみれば、お雪は一人一心に、人形の着物を縫ひ居るすがたは、今年十四になりけれど、よろづ内端にしてあどけなく、容貌かたちも美しく、心だてさへ優しけれど、小さんに比べては劣るなるべし。金「コウお雪坊、それはこのあひだの人形に、著せる著物か。ト問はれておゆきはゑみを含み、ゆき「ハイ、あなたに頂きました。人形のでござります。金「それはいいがの、おれは今出て行くから、おぢいさんやおつかさんがお聞きなすつたら、今仲間から呼びに來て、參りましたと、いい子だからさういつてくんなよ。トいへばお雪は笑ひながら、「ハイハイかしこまりました。金「なぜそんなに笑ふのだ。ゆき「それでもお仲間へお出であそばしたと申しましても、おかへりがお遲いと、うそだとお思ひ遊ばしませう。金「なにさ、あとで又どうでも、言ひやうがあるからいいわな。案じずにさういひな

○ねゝ樣いぢり　ねゝは赤ん坊。こゝは人形いぢりをいつたもの。

○空はなく　空おそろし、上の空、等と同じく空は此處ではこゝろといふほどの意。心持はなく、氣はなく、である。

○氣の毒さうに　困つたやうに。

○あばひ　かばふ。庇護する。

○岡燒もち　自分に關係のないのに他人を嫉妬すること。

よ。ゆき「ハイ、さやうならお早く、お歸り遊ばしまし。トいふに金五郎は出でてゆく。引違へてお峯の乳母は立ち出でて うば「おぢやうさん、何を遊ばします。ゆき「これかえ、これは此のあひだおあにいさんに、いたゞいた、人形の著物だよ。うば「もういいかげんに、※ねゝ樣いぢりも遊ばしまし。いつまでもそのやうに、ねゝ樣ばかりかはいがつて、どうしたものでございます。今に若旦那さまの奥さまに、おなりあそばすお年でからに。ゆき「オヤ、乳母はいやな事をお云ひだよ。あれはおあにいさんだものを、そんな事はなりません。さうしてもう何處にか、奥さまがお出でだよ。うば「それだからあのやうに、お内にとては片時も、お出であそばす空はなく、それといふもおまへさまが、もうちつとおとならしく遊ばせばよいに、ほんのねゝさまで、若旦那の女狂ひを遊ばすを、知らぬ顔でお出で遊ばすから、私はもうじれつたくつてなりません。ト云はれてお雪は氣の毒さうに顔をあかめて猶あばひ、ゆき「それでもアノおあにいさんは、おぢいさんや皆さんに、まことにお心づかひを遊ばすから、おかはいさうだものを、ちつとは御保養のお遊びをあそばしてもよいではないかえ。うば「それは又知れた事。あなたはお家のお娘さま、若旦那さまはお血すぢでも、御養子でござりますもの、お心づかひも遊ばす筈を。トお主思ひの岡燒もち、おゆきはにこ〳〵笑ひながら、「オヤオヤ、そんな事をいふと叱られるよ。上がたの伯父さんの、まことのお宿は爰だから、おとつさんよりお兄さんが、大切だとつねづねから、おつかさんがおつしやつた

よゝ子ども心にも金五郎を、大事にするぞいぢらしし。さても金五郎は、件の金をたづさへて、飛ぶが如くに額佽屋へ至りて、あるじ重兵衞に逢うて、小さんの身の代をわたして、これまでひとかたならず、世話になりしを厚く報い、夫れよりたゞちに青柳橋のほとりなる、条川といふ、料理屋の裏に家を求め、造作までも綺麗にして、この家に小さん金之助をひきとり、乳母をかゝへ婢女をおきて住まはせけるに、小さんは故なく、産後すらすら肥立つものから、小さんはつく〴〵行くすゑを、考へ見れば金五郎も、養子の身にて、この身をはじめ、金之助や乳母下女まで、はぐくまんこと大ていならず、所詮わが身はおちぶれて、一旦廓の藝者して、人にも顔を見知られたれば、今さら斯うして暮すとも、誰知らぬものもなければ、女の手業にはか〴〵しき事も出來ねば、またもとの藝者となれば馴れし事ゆゑ、さのみに氣ぼねもをれぬわざ、三筋の絲の世わたりも、藝は身を助くるとたとへのふしも金五郎が、せめては心やすめなりと、思へば金五郎へ我が胸を、うちあけてものがたれば、今更一旦うけ出せし小さんをふたゝび客へ出さんは、人の思はく世のそしりも、口惜しくは思へども、萬事心に任せぬゆゑ、詮方なくて承け引きければ、小三は是れより又もとの、かへり花さく唄妓となりて、客の相手に出でしかば、容貌もすぐれ、座もちなれば、引く手あまたにいよ〳〵はやり、内に居る間はなかりけり。頃しも霜月の末つかた、小さんは金之助をかき抱き、その身もこたつへ横になり、出もせぬ乳をふくま

○青柳橋　柳橋の假名。
○条川　梅川の作り替へ。
○造作　家の建具。
○故なく　故障なく。さはりなく。
○はか〴〵しき事　埒の明く事。はかどる事。
○三筋の絲の世わたり　三筋の絲は三味線のことで、藝者稼業をいふこ
○藝は身を助く　諺。
○承け引きければ　承知したから。
○座もち　一座のとりもち上手。一座の氣分を引き立てる座興が上手である。
○引くて　引く人。誘ふ人。此處はひいき位の意。
○霜月　陰暦十一月。

せて、ねんころ〳〵と鼻唄を、うたうて寢かしつけてゐる。そのかたはらに乳母のおちゝは、火鉢に煮花をこしらへながら、金之助の頭巾を縫つてゐる。かゝるところへ金五郎は、しやうじをあけて入りきたるを、小さんは見て顏をあげ、「オヤ入らつしやいましたか、さぞお寒うござりましたらう。」金「さうよ、なんだかひどく冷えるのう。ばうずめは又ひる寢か。トいひながらはおりを脱ぎすて、火燵へあたりて寢ころべば、小さんは片手にて煙草をすひつけ、金五郎に出しながら、小三「もしおまへさんエ、アノ廓から、最中のもらつたのがありますが、アノお雪さんにあげましては惡うございますかえ。金「ナニ惡くもねえが、あんな大きな者にやるよりは、取つておいて坊にやるがいい。小三「それでもこの子には、あんまり甘くつて惡うございます。ほんに甘露梅もありましたから一緒にして、おぢいさんの處へでもあげませうか。金「ばかアいひねえ。石部金吉鐵かぶとといふ堅い内へ、花街から貰つた物が出されるものかな。トいはれて小さんは心づき、小三「オホヽヽ、ほんにさうでありましたね。それはさうとアノ、お雪さんは、さぞお美しくおなりなさいましたらうね。金「さうさ、まんざらではねえけれど、まだ一向のねゝさまなり、どこかの人と比べては、とても及ばねえ論なしよ。トゆびの先で小さんの顏をちよいと突く。小さんは笑ひながら、小三「またそんな憎らしい事を、それでもモウ女といふものは、子持になると色氣もなくなり、つまらぬものでありますねえ。金「違えねえ。色氣がなくつても、汁氣があれば澤山だ。のうばゝア。ト聲をかくればうばもふきだし、うば「オホヽヽヽ、ほんに左樣でございます。私の樣になつてはい

○煮花　茶の出花。

○甘露梅　青梅の實を紫蘇の葉に包みて砂糖漬にしたるもの。新吉原の引手茶屋にて夏の中に製し、年始の贈物としたるもの、名ありき。

○石部金吉鐵かぶと　堅きものにて氏名を作れる諺、物堅き人、謹直なる人を云ふ。鐵かぶとも亦堅固なもの。つゞけて諺の如くなつてゐる。

○花街　五町まちを略して云ふ詞

けませんが、御新造さんなどはこれからが肝心でございます。小「オヤいやよ。それでもおつなもので、子供にかまけると、いくぢなくぢゝむさくつて、わが身ながら婆アじみたと思ふやうだよ。それだから座敷へ出ても、お客がみんなわたしの事を、子もち山姥だなんのといふから、わたしもそれをやつぱり通して、かういふ唄をうたつてやるよ

わかい時は二度はない、有頂天までのぼりつめて、親に苦勞をかけるはばかよ。子をもつて知る親の恩ほど深いものはないわいな。

たとへ金銀で、富士の山つむとも、子にや易へられぬ。ほんに世の中に、子ほどかはゆいものはない。

と唄ふゆゑ、中にはむねきなお客は、てめえのやうな者にやア、ろくな子は出來やアしめえ。子といふものは屁をひつても、できるのなんのと、じらす人があるから、わたしもまたまけぬ氣で、味噌をあげるぢやアないけれど、かはいい人と大骨を折つて拵へた子だから、出來合ひの子とはちつと違ひますといひますから、色氣がなくつていいといつて、呼んでくださるからをかしいのサ。金「ヘンとんだからくりの云ひたてだ。ほんに此の頃ぢやア、めつさう口が達者になつたよ。道理で己も言ひまくられる。ト いひつゝ寢てゐる金之助が、耳をひき鼻をつまむ故、金之助顔をしかめながら目をさます。小三「アレまたそんな惡戯ばつかり。とうとう起して、おしまひなすつた。せつかくよく寐かしつけましたものを。金「いいわな、あんまりひる寐をすると、夜

○御新造　人の妻の敬稱。御奥様。
○おつな　變つた。妙な。
○かまけると　かゝはると。
○子もち山姥　昔、相模の足柄山に棲んで坂田の公時を生んだと傳へられる山姥。近松の淨瑠璃「こもち」山姥」は此の傳說を脚色したもの。
○有頂天までのぼりつめて　有頂天は佛語で、九天のうちで最も高い所。快樂の極點まで熱中するの義。
○むねきな　陽氣だにて猫にさはるの意。
○味噌をあげる　手前味噌を云ふこと。手前味噌は自分のことのみをほむること、じまん。
○出來合ひの子　出來合は誂に對して、すでに作つてあるもので品が下るのである。出來合を私通して夫婦になつた意と解するのは此處では當るまい。
○からくりの云ひたて　覗きからくりにて說明する言葉。
○めつさう　大變に。甚だ。法外に。

になつて目をさますから、やかましくつて寐られねえ。小三「おまへさんではあるまいし。金「ナゼ〳〵。小三「なぜもよくできました。あなたはいつでも午時までづつおよつてはお起きなすつて、宵ツぱりをなさるものを。金「ナンノ、むりに起しても、もう寐あきた時分だから、アレ機嫌のいい事を見な。己が顔を見ちやア、にこ〳〵笑ふぜ。いい子か〳〵、いい坊ちやんだぞ。ト金之助の顔を撫でて、「こりや、おつかアのやうに、うは氣になつちやアいかねえぞ。小三「オヤ、けしからねえ。私より貴方に似たら、親に世話ばかりやかせませう。トいひながらだいどころのかたを向いて、「お竹や、何をしてゐるか。坊が起きたから、ちつと抱いておくれよ。下女「ハイ〳〵。サア〳〵坊さんお出でなさいまし。アノお乳母どん、わたしやア今お坊さんをつれ申して、惠迦院へ行つて遊ばせ申すから、アノ歯入屋が來たら、ながしの下駄の歯を入れさせておくんなさいよ。うば「アイアイ。それはいいが、お泣きなすつたら早くお歸りよ。お怪我をさせ申さねえ樣におしよ。下女「アイ。そんなら行つて參りませう。トお竹はそとへ出でて行く。ひき違へて女かみゆひ、洗ひがみのおたぼが來るを見て、小三「オヤおたぼさん、丁度よい間だよ。サアおあがり。坊を今あそびに出したから、この間にちよつと結つておくれな。たぼ「それは丁度ようございますね。オヤ、旦那お出でなさいまし。この間は間ちがひまして、さつぱりお目にかゝりません。金「ほんにサウサ。なんだか急に寒くなつたね。モウこんなに火燵と首つぴきをする樣になつちやアいけねえのサ。たぼ「オヤおまへさん、そんなこ

○惠迦院　回向院。

○間ちがひまして　間が悪くつて。行違ひになつて。

○人の鼻をこするやうな　あてつけのやうな。

○いちやつく　男女互にふざけふ。

○氣障　いやに思ふこと。嫌惡を感ずること。

○酉の町　毎年十一月の酉の日に淺草田圃にある鷲神社のほとりに市を設け、熊手、やつがしらなどを賣りて、人群集する。吉原にては西河岸より廓外に通ずる門を開き、桟橋を架して遊客を入れる。

○おやき　嫉妬。

○生簀　魚を生きたまゝ飼養するところ。

○あかえ　鱝のこと。

○はつほ　初穗。最初のもの。おはつは其略。

とをおつしやるが、こたつといふものは能いもので、些の間のたのしみがありますよ。ねえ小三さん。　小三「なんだねおたぼさん、おつなことをお云ひでない、※人の鼻をこするやうな。私らアそんな事はきらひサ。　金「コウおたぼさん、お前も餘程好物家だね。成程鳥渡※いちやつくには、まんざら惡くねえやつさ。冬の――は火燵で出來るやつがいくらもあるものさ。　小三「もし、をかしくもない、そんナはなしはもうおよしなさい、※氣障でありますわね。サアおたぼさん、今に煮花ができるから、その中結つておくれなねえ。　ト　これより　おたぼは、小三の髪をゆひながら、　たぼ「小三さん、昨日はアノ、どこへお出でなすつたえ。　小三「きのふかえ、昨日は舟で※酉の町へ行つたわね。夫れだからいつもより髪がだいなしになつたのサ。　金「ナニ、昨日は舟へ行つたから髪がこはれたと。そいつはちつと怪しい。　おたぼ「オヤ／＼、旦那が何かおつしやるよ。　小三「又※おやきがはじまりさ。珍らしくもございません。　金「これがやけねえでどうするものか。番人のねえ※生簀だもの、どんな人が釣るか、知れやアしねえ。　小三「オヤ、とんだ寃をうけるもんだ。たとひどんな釣人があつて、餌をどん／＼まけばとて、曲つた針にやアかかりませんよ。憚りながらわたくしは。　金「ヘン、とんだ所で力むやつよ。※あかえが芝居をするやうに。　ト　からかつてゐるうち　かみをゆひしまひ、　小三「ばアやア、お茶はまだ出來ぬかえ。　うば「ハイ、やう／＼できました。　小三「そんなら一ツあげよう。　ト金五郎の※はつほをとりて、おたぼにもついで出す。　たぼ「是れははゞかりさま。モウおかまひなさいますな。

○顔みせ　顔見世狂言　毎年十一月に各座にて演ずる。

○お留守居衆　各藩の留守居役。

○お店の衆　町人達。

ほんに旦那え、このごろに顔みせはどうでござります。金「わたしも此の間からさう言つてゐるのサ。小三も見てえといふから、一緒にお出でな、四五日のうちに。たぼ「それはありがたうございます。樂しみにいたして居りますよ。トいふところへくめ川のわかいもの入り來り、「モシ小三さんえ、このぢうのお留守居衆が、夕方行くから口をかけて置いてくれろ、といつてめえりましたよ。小三「オヤさうかえ。けふはお店の衆のやくそくもあるが、こつちは夜が更けるから斷つて、おまへの方へ參らうよ。わかいもの「そんならのちほど、御案内を致しませう。トわかいものはたちかへる。たぼ「どれ、わたくしも參りませう。さやうなら、小三さん、又明日。トあいさつして、髪ゆひおたぼは歸りけり。

小さん
金五郎

假名文章娘節用　後編中の巻

第五回

小三は粂川より口がかゝりし故、鏡臺取り出し身じまひの、紅粉おしろいも深くはせず、ちよつと化粧ひて櫛笄、※前ざし一本うしろへは、※銀の細打ばかりさして、いきな粧飾のいやみなし。金五郎は手枕して、火燵にあたり寐いりし樣子に、小さんは戸棚よりかいまきを出しそつとかけて、枕をあてがひ、そこらをかたづけ金五郎の、羽織をたゝんで戸棚へしまひ、火鉢のそばへすわり、煙草を一ぷくのみ、そばにある淨るり本を手にとりあげ、讀みながら乳母とはなし、小三「コウばアやよ、こんな事を言つたらまた、つまらぬ事と笑ふだらうがの、水のながれと人の行末程、定めないものはないよ。この淨るり本の※三勝を見るやうなわたしの身のうへ、よく似てゐるが若しひよつと、浮世の義理にからめられ、どんな別れにならうも知れず。マアさうなつたらどうしようと、外に苦勞はないけれど、そればつかりが案じられて、人の知らぬ胸をいためるよ。ト身の行末をくりかへし、ほろりとおとす一しづく。乳母はそばから うば「アレ、またしても〳〵、そんな役にも立たぬ事を、おつしやるものではございません。その三かつの身のうへは、それはほんの戲作もの、今時緣切だのなんのか

○前ざし　前刺簪。簪の前髪と髷との間にさすもので、多くは鼈甲を用ひる。

○うしろへは　後刺の簪にはの意。

○銀の細打　銀の簪の細いもの。

○三勝　三勝半七の茜屋三勝。三勝は女舞の藝人であつたが、茜屋半七と馴染み、愛兒お通を殘して、元祿八年十二月六日の夜、大阪千日寺の墓所附近で、半七と情死した。竹本三郎兵衞作の淨瑠璃「艷容女舞衣」は此の實說を脚色したもので、人口に膾炙されてゐる。

のと、芝居かしやれ本ではあるまいし、どうしてそんな事がありますものか。たわいもない事ばつかり。ト いひまぎらせど共涙、小さんも胸をなでおろし、一ほんにさう言へばそんなもの、作り物とは知りつつも、身につまされて繰言いふも、やつぱり女の淺はかゆゑ。金坊といふ子まであるものを、御本妻にはなられずとも、末のすゑまで添ひとげようと、思はないでなんとせう。もしもの事があつたらば、それはまたその時のこと。もう〳〵案じまい案じまい。ト はなしのなかばへ条川より、むかひの人がきたるにぞ、一夫れならばアやア、行つて來るから氣をつけておくれよ。ト 出かゝりしが、ほんにアノ坊が歸つて、私が居なかつたら、又おとつさんをいびるだらうから、アノ、蠅帳にうづら焼があるから、あれをやつてだましておくれ、わたしが又かへりに、何ぞお土産を買つて來るから。そして若旦那がお目がさめたら、大方お茶漬を上らうから、鍋焼でも取つてあげておくれ。ト 萬事に氣くばりぬけ目なき、女房かたぎぞあらはれける。かくまで夫やわが子をば、大事にかける心から、座しきへ出てもとにかくに、内の事のみ案じらるれど、勤めといふ字は是非なくも、いやな客にも機げんとる、心の中ぞつらからめ。かくて小さん金五郎は、たゞ金之助の愛におぼれ、他事なく暮すその年も、くれて又來る春がすみ、たなびく空もうらゝかな、彌生なかばの事なるが、金五郎は仲間の者にさそはれて、向が岡の花見もどりのほろ酔に、みな〳〵舟にうちのりて、青柳橋まで來りしが、こゝより上りて金五郎は、人々にわかれて、可助といふ供の男を引きつれて、条川の前へ來れば、乳母は金之助をいだきつ

○繰言　同じことを幾度も繰り返して云ふ、愚痴。

○いびる　ねだる。

○うづら焼　菓子の名「嬉遊笑覧」巻十上に「咄園物語」……中にはまづきをつゝみ、上にうすやうほど餅をはりつけたり……鶉やきは、うす皮の十字のたぐひならん」とある。

○鍋焼　鍋で物を煮ながら食ふもの。『俚言集覧』に「鳧雁などの切身に芹、くわゐ、麸、かまぼこ、蓮の根などやうのものを入て、醬油の汁にて薄鍋にて煮たるものをしかいふ。又芹焼とも いふ」とある。

○向が岡　向島の替名。

つ、かくと見るより遠くから、うば「オヤ／＼おばうさん、アレ、お父さんが入らつしやいましたよ。金「オヽ坊か、ばゞアにだつこしていいのう。おつかアは内にかえ。うば「ハイ、お宿でございます。サアおばうさん、おとつさんにおじぎはえ。へイ御機げんようと。オホヽ、イエイエ、おとつさんにだつこはなりません。もうまつくになりますから、お寐んねがようございます。金「金坊や、おとつさんはおつかさんのとこへ行つてお乳をのむよ。あば／＼だよ。トいふに金之助「おとつちやん、いや／＼。おつかちやんのち、いや／＼。うば「オヽさやうさやう、おつかさんのお乳はお坊さんの。お父さんのではござりませんねえ。お父さんは御きげん故、おじらしなすつていけません。金「ハヽヽヽヽ坊やのばかやばかや。トからかひながら内へゆき、見れば小さんは、今座敷より歸りしまゝ、三味線筥によりかゝり、物思はしげなる顔つきに、金五郎はそばより「小さん、どうぞしたのか、おつな顔をしてゐるのう。トいはれてにつこり笑ひながら、小三「いゝえ、どうもいたしませんが、今座敷から歸りましたのサ。そしてあなたは、どこのお歸りでございますえ。金「ナニ己か、拙者めは今日仲間の者の付きあひにて、よんどころなく向島へ御遊覧と出かけて、鯛じへおしかけた處が、女子どもが大勢出て、ソレお手をとれ足を取れと、めつたむしやうにそやしたて、それからなんでも大ざかもり、さいつおさへつ唄へや彈けや、

じれて迷うて、まようてじれて、くせつも癡話も屏風の外へ、はふり出したる一ツ夜著。

○まつく　眞つ闇。

○おつな顔　變な顔。奇怪な面色。

○向島　前に向が岡とあつたが、此では誤つて本音を吐いてゐる。

○そやしたて　强ひて勸める。

○さいつおさへつ　さいつはさしつの音便。おさへつは押さへつで、盃をさすのを相手が押へてもう一杯飲ませること。

はやし　さつさおせ／＼堀までつけろ。あとは野となれ山となれ。床とつたら寢てかへろ。雨ふつたら居つゞけだ。などと唄ふからたまらぬて。小三「道理こそ、マアきつい御機嫌。それはさうと、あなたは京を御立ちの時、おとつさんのおつしやつた事を、覺えて御出で遊ばしますかえ。金「是れはまた改まつたお尋ね、親父の教へを守ればこそ、外の女に目もふらず、たつた一人を守つてゐるから、何もハヤお案じなさる事はござなく候サ。

小三「オホヽヽヽ、その思召しなら嬉しいけれど、今では日かげのこの身ゆゑ、おぢいさんや皆さんが、このやうな事とは御存じなく、只あなたがわがまゝで、放蕩を遊ばす事と、思召すでござりませうから、お宿のお首尾がおだいじゆゑ、あんまり御酒をあがりますと、あなたのお爲になりますまいかと、それが苦勞でなりません。ト思ひにあまるしんみのいけん、心に憎しと思はねど、一杯きげんの金五郎、「ア、百も承知二百もがつてん、お爲ごかしのその意見、聞きたくもねえ、耳がけがれる。酒をあんまりあがりますと、あなたのお爲になりますまいッ。ヘン酒を呑まうがのむまいが、己が口だから勝手だによ。大キにお世話お茶でもあがれッ。そんな理くつらしい意見をいふのは、おほかた外におつりきな、面白えはなしでもあるからだらう。小三「オヤ、久しいものでありますよ。金「ナニ、久しいなじみがあると。それだからなんのかのといつて、早く歸さうと思ふのだな。よし／＼、そんなに邪魔になるなら、歸つてやらう、とめるな。トじれるかんしやくはひふきへ、きせるとん／＼八ツあたり。小三はいつもの事と

○堀までつけろ　堀は三谷堀をいふ。隅田川から吉原へ行くには、今戸から三谷堀へ入り、陸へ上つて土手八丁へかゝるといふ順であつた。

○居つゞけ　妓樓などで連日續けて遊興すること。流連とも書く。

○日かげ　表向きになれない妾の身を云ふ。

○お爲ごかし　表面のみは人のためになる様にいひなしても、その實、本心ではない。

○おつりき　洒落た。

○久しいもの　いつも同じことを云ふ義。

思へば、わざとそしらぬ顔をして、「お腹が立つならどうでもなさい。たま〳〵はお早くお歸りなさるも、御孝行でございませう。オヤ、何だか風が變つたやうだ。ア、雨が降らねばよいが。トさからはぬゆゑ金五郎は煙管をしまひ立ちあがり、金「ナニ、御孝行でございませう。お香々でお茶づけが聞いてあきれらア。雨が降らうが降るまいが、歸るに四も五もいるものか。トむりなくぜつも酒のわざ、我儘氣まゝをいひちらし、じれつゝうちへ歸りけり。乳母はこの時金之助をつれて、歸りかゝれど、金五郎が不機嫌ゆゑに、次の間にてあそばせて居たりしが、やう〳〵此方へ出で來り、うば「御新造さまえ、今日はおとつさまの御機げんが、お惡うございましたねえ。なんのお腹だちでおのやうに、お怒りなすつたのでございますえ。トいへば小さんはわらひながら、「ナニサ、いつでもあゝだわな。御酒をあがるとなんだの彼だのと、わたしに無理ばつかりおつしやるのサ。たまには早くお歸し申さないと、あなたもいろ〳〵譯あるお身ゆゑ、おやどの御首尾が大事だからさ。お内では心づかひもなさるだらうし、私にはわがまゝの、いひどころだとお思ひなすつて、いつでも〳〵あの通り。それに此のごろでは日にまして、だんだん御酒が上るから、まことに苦勞でならないよ。わたしは何と云はれても、つねから御氣性を知つてゐる故、御酒をあがつて御きげんの時は、その氣でゐるからよいけれど、やつぱりお雪さんにもあの通りに、無理ばつかりおつしやるかと、陰ながらそれが案じられるよ。わたしも女の情だもの、いとしと思ふお方をば、つれなく言ひておかへし申すも、浮

○四も五も　もと博奕の語で、一か八かといふ類。かれこれ、とやかくの義。「四の五の言はずに」云々などとよく用ひられる。

○くぜつ　口說と書けど、實は口舌にて、いさかひ、物言ひ。

○あなた　彼方で、此處では金五郎をさす。

○御酒が上る　のむ酒の量が多くなる。

○ひろぶた　廣蓋は元來、衣服を藏する唐櫃、衣箱などの蓋の稱であつたが、後にその蓋の形を器に作り、專ら客に供する物等を盛つた。

○ホイ　驚いたときに發する歎聲。

○くめん十めんして　くめんは工面で、都合を覺し、くを九といつたから十めんとつゞけたのである。

○一口もの　ちよつとした食物をいふ。

○鉢のもの　鉢に盛つた肴。

○お遠々しう　遠々しは疎遠、久闊の義。お久しぶりでといふ意味。

世の義理や二つには、お身のためを思ふゆゑ、心にもない事などを、いひ出すまでの胸の切なさ、すゐりやうして。ト涙ぐむ。うばもさこそと目をしばたゝき、うば「御尤もでございます。譬へにもいふ通り、一ツ叶へば又二ツと、何をいうても任せぬ浮世、十分な事はございませぬもの。いろ／＼御苦勞あそばすも、因緣とやらでございませう。トしめりがちなるはなしなかばへ、くめ川のれうりばんおもてより、「オイお竹殿、ちよつと爰をあけてくんな。下女「アイ／＼、佐介殿かえ。トしやうじあければ、佐介はひろぶたへいろいろ酒のさかなをのせ、持ちこみて、「モシ旦那はどうなさいました。小三「オヤ、佐介どん、旦那はもうお歸りだよ。佐介「ホイ、そいつは大しくじり。けふはなぜ早くお歸んなすつたネ。さつきお出でなすつたのを見とゞけたから、せつかく、くめん十めんして、旦那のお好きな一口ものを、仕込んで持つてめえつたのに。小三「オヤ、さうかえ、それはマアよく忙がしいのに、氣をつけておくれだ。嬉しいネ。佐「なんにしても旦那がお出でなさらねえぢやアはじまらねえ。そんなら此の鉢のものや何かは、旦那へのこゝろざしだから、置いて參りませう。ト肴を置いてでてゆく。さても金五郎は、酒がいはする癇癪の、腹立ち紛れとがもなき、小三に辛くあたりちらして歸りしが、根もなきくぜつの事なれば、又あはねば氣になるゆゑ、四五日たちて晝すぐるころ、小三のもとへいたりしに、小三は留守にて乳母ばかり、針仕事をしてゐたりしが、「オヤ若旦那さま、此のごろはまことに／＼お遠々しうございます。金「さうサ、此の間はちつと用が多くつて、さつぱり出られねえやつよ。うば「アノ、あなたがい

○鮫清　亀清の替名。

つそこのおひだ、お腹をお立ち遊ばして、お歸りなすつたから御新造さまが、まことにお案じなすつてお出でなさります。金「ハ、、、、さうだつたかの。おれはさつぱり知らなんだ。アノ、今日はどこぞへ行つたか。うば「ハイ、今日は鮫清に、なんとやらの會がござりまして。金「フゥ、坊はどうした。うば「お坊さんは今、お竹がどこへかおつれ申してまゐりました。金「さうか。おれを忘れはしねえかのう。うば「オヤ、とんだ事をおつしやいましな。三日や四日お出でなさらぬとて、おわすれなさるものでございませうか。今朝なども、いつそおとつちやん〳〵と、あなたの事をおつしやいました。金「ハ、ア、子供といふものは、どうも憎くねえものだの。アノ、この間來たとき、ちつと頭にふき出がしたやうだつけが、そんなに殖えもしねえかえ。うば「ハイ、お頭のでござりますかえ。そのやうに殖えもなさりません。それはさうと若旦那さまえ、こんな事は申すまでもござりませんが、御新造さまが明けても暮れても、あなたの事のみお案じなすつて、それは〳〵御苦勞のやすまる間とてはござりませんから、その御心根を思ひやつて、あなたもどうぞ、あんまりお氣をおもませ遊ばさぬやうに、なすつて下さりまし。金「イヤ、モウおれとても、憎しと思ふ小三ではなし、殊に子まで出來たのに、少しはおれの手だすけと、いやな座敷の勤めをするのは、なみ大ていの女などは、なか〳〵及ばぬ心だてと思へば、一日片時も勤めをさせる氣はねえが、足らはぬがちゆゑ是非もなく、苦勞をさせるが

可愛さうだ。ト ほろりとおとす男泣き、うばも涙にくれにけり。折から粂川のわかいもの清介、料理ばん佐介うちつれて入り來り、兩人「ヘイ御めんなせえ。ト ふたりながらそばへ來り、清「もし旦那、此の間はねから入らつしやいませんね。きついお見かぎり。又外に何か、おもしろい世界でも出來ましたか。金「とんだ事をいふ。おもしろい世界どころか、いつも眞面目でさえねえやつよ。ちつと面白い世界へ、案内して貰ひてえのう。清「是れはまた迷惑千萬。ハヽヽヽ。佐介「旦那、この間ネ、あなたがお出でなすつたのを見とゞけまして、ちよつぴり趣向してめえりましたら、もうあとのお祭で、大きに鼻をあきましたのさ。金「ハヽアさうだつたか。そいつア殘念だつけの。しかしその心意氣がありがてえ。そんなら今から初めよう。ト 是れより、色々肴を取り寄せ、大酒もりとなるまゝに、互にさいつおさへつして、いと賑はしくなりにけり。金五郎はとこの間の柱に寄りかゝりて、金「なんと清公や佐介公なんぞは、いつも〳〵忙がしいから、女の所へ行くひまはあるめえのう。清「サア、そこがもし、おつなもので、是れでもずゐぶん女ゆゑにやア、相應に謀計もいたしますのサ。まづ女に逢はうといふ晩にやア、内を都合してはやくきりあげ、おたしなみの藏衣裳を引つかけの、親方の目をしのび足、こそ〳〵とぬけがけの、逸足出して阿多氣へおしかけ、ろち四ツ限も目にかけず、たゝきおこして上りの天神。サアそれからが口說のこんたん、おもしろ狸の腹つゞみ。ト のりちではなす其のところへ、座敷をしまひ歸り來る、小さんのあ

○ねから 又ねつからといふ。一向にの意の俗語。
○きつい 大層な。ひどい。
○さえねえやつよ 冴えない奴よ。
○趣向して 工夫して、卽ち料理を少し許り見繕つての意。
○鼻をあく 鼻をあかすを自動詞的に用ふ。だしぬかれた、がつかりさせられたの意。
○おたしなみの 用意の。
○藏衣裳 昔、芝居の樂屋に衣裳藏といふものがあつて、その内に置く衣裳を藏衣裳といつた。上級の役者は自分所持の衣裳を着用したが、下級のものには座から藏衣裳を貸して着用させた。此處は單に借衣の意か。
○親方の目をしのび足 「目を忍ぶ」と忍足とをかけて、忍足を下文のこそ〳〵と續けた。
○逸足出して 大急ぎで歩いて。逸足はいそぎあし。
○阿多氣 安宅。
○四ツ限 四ツ限は午後十二時の見世仕舞をいふ。
○上りの天神 登樓して天神を買ふの意。天神は京阪では太夫に次ぐも

とより箱まはしの仁介、三味せん箱を背負ひ、ちやうちんを片手に引つさげ、供をして來る。小三は上へあがりながら、「仁介どん、大きに御苦勞。そんならまた明日來ておくれ。トおびにはさみし金を出し、紙にちよいとひねつて、「サア是れで一つ呑んでお寐よ。ト渡せば箱まはしはいたゞきて、仁介「ヘイ、これは有り難うございます。さやうなら明日。ヘイお休みなさいまし。ト三味線箱をおき、歸り行く。小三は金五郎のそばへすわり、小三「オヤ、よくお出でなすつて下さいました。此の間はなぜ、さつぱりお出でなさいませんえ。ト顏を見て嬉しさうに笑ふ。金「ヘン、あんまりよくも來ねえのよ。來るなといふから來ずに居れば、又恨むのか、呆れるのう。四五日おれが來なかつたら、煩くなくつて好かつたらう。あんまり邪魔にされるから、呼びによこすまでふつつりとも、來めえと思つてあきらめて居たが、逢はずに行んではぢやアなくつて、逢はずに居ると氣になるから、顏が見たさについうかうかと、やつぱり迷つて又こゝへ。小三「オヤばからしい、なんでありますえ。清どんや佐介どんが聞いてゐるのに、そんな事を。金「ハテ、人が聞いても大事ないての。コウ小三、こんな馬鹿にやア誰がしたらう。おれも生まれつき是れ程の、阿房ではなかつたつけのう、佐介公。楊貴妃や玉もの前の例もあるから、さのみ恥かしいとも思はねえの。佐介「こりやア、旦那のが御尤もだ。惚れてもりきむのは野暮の至りサ。小三さんはやつぱりおぼこ氣がぬけませんね。金「なんの／＼、おぼこ處か、ぼらが變じて古狸とはなりにけりだ。ア、化かされる／＼と、知りつゝ、やつぱり化かされる

ぬの稱であつた。揚代が二十五匁であつた故天神様の緣日に因んでいつた洒落である。江戸吉原でいへば、太夫の次で後に部屋持といはれた格子女郎にあたる。

○のりぢで　のりぢは物事が調子に乗つて氣の進むこと。卽ち、調子づいて乗地になつて話を進めるの意。

○箱まはし　箱屋に同じ。藝者に從つて三味線などを持ち運ぶ男。

○おびにはさみし金云々　紙捻りにして纏頭を與へたのである。

○ふつつり　これぎり。斷然。

○楊貴妃や玉もの前　楊貴妃は白樂天の「長恨歌」にうたはれてゐる唐の玄宗の寵妃。玉藻前は前出、七四七頁を見よ。

○おぼこ氣　初々しい娘氣。未だ世馴れのしないうぶな氣分。

○ぼらが變じて古狸とはなりにけり　「桑田變じて滄海となる」といふ句などをもぢつて、初ぶなものが急變して世故に長けて來たことをいつたもの。特に「ぼら」といつたのは、前におぼことあるからで、なほぼらは幼魚を「おぼこ」といひ、成長するに從つて、洲走「すばしり」、いな、ぼら、とゞと名稱が變るので持つて來たか。

は、おれが一生のあやまりだ。小三「オヤ、よろしく申しておくんなさい。貴方こそわたしを、お化かしなすつたのでございます。金「そりやア又なぜだ。小三「それでも、唄にもうたふ通り、心がらとて古郷をはなれ、知らぬ此の地で苦勞するとは、よくわたしの身の上に、かなつた唄でございますよ。清介「モシ、ト小聲でうた。

苦勞するのもおまはんをたより、

それに邪見な事ばかり。

モシ旦那、小三さんの心は、此のうたの文句のとほりでございますよ。ねえ小三さん。一ツ※心意氣が承りてえもんでございます。小三「何だね、をかしくもない。娘子供ぢやアあるまいし、心意氣なんぞはいやだわね。佐介「そんな事をお云ひなさらずと、ちよつと一ツおやんなせえ。ソレ、どゝいつどい／＼、※なだべこ、ちやら／＼、どんぶり鉢アういた／＼。金「ア、やかましい、何をいふのだ。佐介「ハア、、サア／＼小三さん、サア一ツ。トいはれて小三は詮かたなく、床の間にある三味せん手にとり、

うた　なまじなま中ほれたが恨み、ほれさ苦勞もせまいもの。

清「ハ、妙だ／＼／＼。小三「モウ是れでかんにんしておくれ。金「コウ、おつなもので の、おれも實は上がたぜえろくだが、都といへば聞えがいいが、上がたぜえろく、上がた猿といはれては、一句もねえのす。佐介「その上がたにも、お前さんの樣な通人があ

○心意氣が承りてえ　何か一つ自分の氣持を表したやうな歌を歌つて聞かせて下されとの意。

○なだべこ　鍋を節面白く云つたのであらう。

○東ッ子　東の人。關東の人。
○程　やうす。調子。
○色　情人。戀人。
○一ッ提げ　煙草入れか。

りやすから、東ッ子は一句も出ません。全體は旦那が惡いのさ。お前さんがあんまり程がいゝから、やぼなら斯うしたうき目はせまいと、小三さんがこれ〳〵で、氣がもめるでごぜえませう。ト ひたひに角のはえるまねをする。 金「そんな口說は昔の事よ。コウ、それよりやア清公、今の阿多氣の物語の二段目狂言を話されえか。後學のために聞きてえのう。 清「ナニもう跡は話しますめえ。 金「なぜ。 清「小三樣に叱られます。 小三「清どん何だえ、面白い話かえ。 清「なアに、わつちが色の戀話さ。ト 云ふところへ、糸川の小女、「清介どん、佐介どん、お客があるよウ。 佐介「オイ〳〵、そいつは斯うしては居られねえ。 金「小三、そこにある紙入を清公にやつてくんな。そして此の一ッ提げは、佐介、貴公に讓つてやらう。ト 二人に投げてやる 兩人「ヘイ、是れは有り難うございます。ト 戴きながら、出でて行く。 金「アゝ醉つた〳〵、今日はどうしたか誠に醉つた。ト その儘そこへ打臥して、ぜんごも知らぬおほ鼾。 小三「お竹や、もうこゝを片づけておくれよ。 下女「ハイ〳〵、もう宜しうございますかえ。 小三「アゝいゝのさ。乳母や。今夜は若旦那は、よつ程あがつたかえ。 うば「いゝえ、そんなにお過し遊ばした樣子でもござりませんが、いつたい御酒がお弱いから。 小三「さうサ、全體あがりはなさらなんだが、近頃はよくあがるよ。 うば「さやうでござります。若旦那さまもお宿では、萬事思召すやうにもいかず、お心づかひも遊ばしますから、ちつとづつ御酒をあがらずば、お氣の晴れやうがございますまい。ほんにお坊さんもよくおよつたから、若旦那のお床をのべませうか。

小三「そんなら其の子を、わたしが抱いて居ようから、お床をとつて上ゲておくれ。ト金之助を抱きあぐるにぞ、乳母はこの内、六疊の座しきへ、床をとり夜著を出して、うば「モシ、若旦那さまえ、サアおよりまし。トゆりおこされて、金「オイオイ。アヽいい心もちだぞ。ト立上りて上著をぬぎ、下著ばかりになりて、床へ入り金「サア、おつかアも寢ねえか、坊主はおれが抱いて寐よう。小三「あなたが抱いておよつたら、それこそ潰しておしまひなさるだらう。金「いいわな、潰しても己の子だから、だれも何ともいひ人はねえ。萬一おれが潰したら又いいのをこしらへるわ。ト金之助の手をとり引張る。小三「すきな事をおつしやるよ。アレ、およしなさい、そんなに引張ると目を覺します。起しちやア惡うござります。金「ナニ起しやアしねえ。ちよつと貸してくれ。トむりに金之助をだきとりて金「エヽよく寐る坊主だぞ。コレ、ちつと目をさまして遊ばねえか。こちよ／＼こちよこちよ。トくすぐりさうにする。小三「アレ、およしなさいと云ふのに。寐る先へ立つて起しちやアいけませんよ。金「ハヽヽヽヽ、そんなら乳母の處へ行つて寐ろ。いま目をさまして泣き出すと、おつかアの邪魔になるさうだ。ト寢たまゝうばの手へわたせば、乳母は金之助をかき抱きて、次の間へ入りてうち臥しける。

假名文章娘節用 後編下の巻

第六回

小さん
金五郎

小三は乳母や下女を臥さしめ、行燈の側につくねんと、ひとり何やら物案じの、顔うち眺めながら金五郎、「コウ小三、何をしてゐるのだ。なぜ寝ねえ。又持病でも發つたか。ト問はれて小三「イ、エ、持病ではありませんが、つくづく思ひましますと、あなたのこ とはほつと息、とが苦勞になつて。金「なぜ、おれがどうした。小三「もとより御好きでなかつた御酒を、此の頃のやうにあがりますから、しみ〴〵夫れがわたくしは。金「フウ、分つた。おれがあんまり酒を呑んだり、身もちが惡いから、行末こしかたを思ひまはすと、つまらねえものだと愛想がつきて、それが苦勞になるのだらう。ウヽさうだらうさうだらう。厭になつたら厭だといへ。おれも男だ、切れてやるわ。小三「アレ、そんな無理をおつしやるから、それが苦勞で片時も、氣の休む間はございません。大かたお宿のお雪さんにも、やつぱり御無理をおつしやりませうが、それでは惡うございます。金「なんの事た、をかしくもねえ。そんなつまらねえ事を案じずと、サアもう寝ねえか。寝るがいい。ト手をのばしてひきよせる。小三「アレ、まだ著ものを著かへませんよ。金「いいわな、着ものはそれでも大事ねえ。

トいひつゝ小さんの帶をとけば、嬉しげに上着をぬぎ、――のまゝに寄り添うて、顏みあはせて互につこり、金「コレ小三、そなたもかねて知る通り、心にそまぬお雪の事、とやかく内で云ふ故に、のつぴきならぬ義理づめで、しぶしぶ請けはうけたれど、松に櫻は見かへられず、そなたに勝つた花があらうか。必ずそれを苦にしねえがいい。しかし親を捨て、※兩刀を捨てて、矢立をさして町人にならうとおもへば、一も二もねえ心やすい世界だのう。小三「サア、それがいやさに苦勞になります。只あなたが※全うに、お宿のお首尾のよいやうに、お雪さんともお中よく、皆さまに御安堵させて、わたくしをも見捨てさへ下さらねば、どのやうな切ない暮しをしても、少しもいとひは致しません。ト眞實見えし女のみさを、金五郎もおもひやりて、金「おれもその實心を見ぬいたゆゑ世間はれて、内へ入れてえと思ふけれど、なにをいつても養子のかなしさ。むかしの身ならい※さくさなしに、※おつけえはれて夫婦だが、かへつて今の身の上が、思ひ廻せばつまらねえ。ト愚癡なくりごと、くりかへせしが、「アヽおれとした事が、つい胸に思つてゐるゆゑ、女のやうな愚癡ばつかり、儘になるのもならぬのも、みんな※約束、しかたがねえ、これも浮世だ、どうなるものか。のう小三、床へ這入つて、又いい夢でも結ばう。トぐつと引寄せ、いかなる事や契るらん。任斯程に、隱居白翁は、金五郎が日にまし放蕩募りて、家にとては居らざる故、養父文次郎はじめ家内のものに、一ぱい氣がねを爲たりしが、お雪もはや、十五にもなりたれば、金五郎と婚姻を結ばんには、少しは足も止らん

○兩刀を捨てて云々　大小をさした士をやめ、矢立を腰にさして商人になる。

○全うに　眞直に。一途に。

○いさくさ　ごた〳〵。いざこざ。

○おつけえはれて　公「おほやけ」晴れての略訛か又は押揺「おしか」き晴れての音便か。おもてむきに、おほやけに、公然と世に憚る所なくなどの義。

○約束　前世からの約束。

○手のなきおぼこ氣　手は手だて、手段、技巧である。技巧のない子供つぽい氣持。

○名所　姓名と、住所と。

○文月　舊曆七月。

○卒爾ながら　突然なことですが。

と、頻りに是れをすゝめしかば、金五郎は心ならずも、婚禮はしつれども、お雪はまだ年もゆかず。殊に手のなきおぼこ氣なれば、とにかく面白からぬ故、さま〴〵こしらへ騙しては、小さんが許へのみ通ふものから、早くも二とせばかり立てども、猶不身持の止まざりけり。隱居白翁は是れを愁へ、文次郎夫婦もお雪の仕かたの、惡しきゆゑに金五郎が、內に居つかぬと口にはいへど、心には眞實わが子の可愛さに、金五郎に愛想やつきん。我あるうちは善し惡しとも、金五郎の爲を思へども、いくほどもなく吾が齡、はてにし後やいかならんと、老いの心を痛めつゝ、思ひ餘りて、手を廻し、小さんの名所聞きたゞし、心の中をさぐりしうへ、理を說きて緣切らせ、事に由らば金を出し、支度して何方へなりとも、片付けやらんと思案しつ、金五郎が當番にて、詰所へ出でて留守の日に、小三が許へぞ尋ね行きぬ。頃しも文月上旬、小三ははでな中形の、ゆかたに藤色の裏えりかけ、黑繻子の帶しごけなくしめ、洗ひ髪をうしろへさげ、緣側へ出て金之助の、腹がけを縫うて居たりける。折から表に人ありて、賴む賴むと案内を乞ふに、小三は「ハイ。といらへつゝ、立ち出づれば隱居白翁が、「卒爾ながら小三どの、お宿は爰でございますかな。小三「ハイ、その小三は私でございますが、あなたはつひに見なれぬお方。どちらからお出でなされました。白翁「ハア。そんなら此方さまが小三どのか。わしはこなさまに、ちと內々話があつて、わざ〳〵來ました。ゆるさつしやれ。ト上へあがれば、いぶかしながら、小三「何はともあれそこは端

○物ごし　立居ふるまひ。
○取りまはし　とりなし。處置。

おか、マア〳〵こちらへお通りなさいまし。ト奥へ通せば座になほりて、白「扨こなさまの名はかねてより、聞いては居れど逢ふは初めて。わしは金五郎の祖父白翁といふものでござるが、今日わざ〳〵來ましたのも、外の事ではござらぬが、アノ、孫の金五郎めが事。イヤもう、見るかげもないあの樣な者を、ようマア可愛がつてやつて下さる。眞身にとつては嬉しいとも、かたじけないとも、禮は詞に盡きませぬ。その深切な心を見込んで、ちと頼みたい事がござる。ト聞くより小三は胸に釘、はつと心に當惑し、いかゞはせんと思ひしが、今さらおどろく事にもあらず、かねての覺悟はこゝぞと思ひ、胸なでおろし氣をとり直し、茶煙草盆を出しつゝ、しとやかに手をつかへ、小三「ほんにわたくしも、若旦那さまのお話にて、つねづねから、御噂は承りましたあなたの事。お目にかゝりますは始めてでござりますけれど、眞身の親に訪はれた心。お嬉しうござります。ようマアお出であそばしました。トいふかほつく〴〵打ちまもり、白翁「イヤ、あまりよくも參らぬて。アヽ物ごしといひ取りまはし、容貌まで高位の、奥方とても恥かしからぬ、人に勝れた生まれつき、いかなる人の身の果てか、見れば見る程美しい。アヽ若い者の迷ふは尤もかい。こなさんを内へ入れたなら、孫めが尻も落ちつくであらうけれど、上への聞え世間のおもはく、義理と人目の詮かたなさ、頼みといふは茲の事、知つてるかは知らねども、金五郎はわしがためには、總領むすこの一人孫、世が世であるなら、無理わがまゝも爲次第だが、だん〳〵深い樣子があつて、あれが

親は家出なし、其の弟が今での家督、その養子となりし金五郎、※あかの他人といふではなけれど、養子と名のつく悲しさは、思ふに任せぬ世間の人目、家の娘のお雪といへるを、娶合はせねばならぬ故、金五郎もふしよう〳〵、やうやく此のごろ婚禮しても、お雪はまだ子供同然で、面白くないから片時も、内に居つかぬはもつともかい。わしが孫でいふではないが、世間の人にほめられて、それ程の事わきまへぬやうな氣性でもなかつたが、今に夜ごまりはなほ止まず、女房はほんの※すもり同樣、それは誰故こなさんゆゑ、わしが命のあるうちは、内外の者もわしにめんじて、金五郎が惡いとは言はねども、見らるる通りわしも老人、今をも知れぬ身のうへゆゑ、我がなき後は金五郎の、身のためにならぬ事もあらうかと、案じ過せば夜の間も寐られず、苦勞で壽命も縮まるやうだや。こんな事いうたら、鬼とも蛇とも、慈悲なさけのない心と思はつしやらうが、眞實あれが憎くもなくば、内の嫁のお雪の中に、子ごもの一人も出來るまで、遠ざかつてもらひたい。さすれば世間の思はくもよし、又子ごもでも出來てからは、こなさんを内へ入れても大事ない。今金五郎が義理のある身で、こなたを内へ呼ぶときは、※部屋住みの事ゆゑ世間へすまず。こゝをとつくり合點して、暫しの内を辛抱して、思ひきつて見て下され。もしその内が待遠なら、こなさんの心にかなふやうな、身の爲によい所を見たて、この爺が支度して、緣付けて進ぜませう。さうすりや此方の身も落ちつき、多くの人の※きげんきづまをと

○あかの他人　全然緣のないもの。

○すもり　巣守。留守番。

○部屋住み　一戸を持つた主人でないのを云ふ。

○きげんきづまをとる　氣嫌をとるに同じ。氣褄とは褄をとるの緣語として用ひたのである。

○いたづら　女のみだらなること。私奔。

○老いの身に後生は願はず　自分は先の短い老の身であるが、縁切などといふ罪つくりな事をしたので、來世の安樂など願ふべくもないとの意味。

るにも及ばず。せめてはわしが禮心、氣樂にして進ぜたい。トもみやはらかに事をわけ、のつぴきならぬ義理づめの、たのみにいやとはいはれねば、いつそわが身のなり行を、うち明けんとは思ひしが、今さら素性を明しなば、見さげられもし殊にまた、金五郎の爲惡しからん トおもひ定めてかほをあげ、小三「だん／＼のおたのみうけたまはり、何とも申さんやうもなく、大事の／＼若旦那さまを、人にわるく言はせたり、あなた方へいろ／＼な、御苦勞をかけましたも、みんな私がいたづらから、つくつた罪でござります。おゆるしなされて下さいまし。それをマア、にくいともおぼしめさず、氣樂にさせてやりたいと、かへつてやさしいそのおことば、もつたいないとも有りがたいとも、申さうやうはござりませぬ。さりながらわたくしは、たとひ外にどのやうな、けつかうな所がござりませうとも、樂しみのぞみはござりませぬ。只若旦那やみなさまの、おためになります事ならば、たとへこがれて死すまでも、ふつつり思ひ切りませう。トいふもなみだのうるみ聲、わつとばかりにせきあげて、正體もなく泣きゐたる、心のうちぞいかならん。白翁もともによろこびなみだ、ーヤレヤレマア、よく思ひ切つて下さつた。かたじけないぞや小三どの、その悲しさを見るがいやさに、今日行つて頼まうか、明日行つていはうかと、一日々々と見合はせても、どうで云ひ出さねば果てしがつかねば、心を鬼にしてわざ／＼來たが、さぞにくからうが是れも身の爲、うき世の義理のせんかたなさ。老いの身に後生は願はず、縁切に來た罪つくり、わしが胸の切なさも、するり

○とくと　よく〳〵。とつくりと。

○苦患　佛語で、死後地獄道に落ちて受けるくるしみ。こゝでは單に苦しみの意味。

やうして下されよ。この事※とく〳〵承知なら、けふあすと云ふでもない。心まかせにいつなりと、こなたの身にも怪我のないやう、手ぎはよくやつてくだされ。ト云ひつゝ立つて出でながら、「金五郎とは緣切つても、わしはやつぱり孫嫁の心、この後なんぞ不自由ならば、必ず〳〵遠慮なう、なんなりともさう言うてよこさつしやれ。こなさんの身の落ち付くまでは、いつまでも私が貢ぎますぞや。ト他人とおもはぬ白翁が、やさしき言葉にうれしさあまり、悲しさやるせなきまゝに、とかくのいらへさへもせず、唯うつ臥して泣き居たる、その心根の不便さを、おもひやりつゝ白翁も、老いのなみだにかきくれしが、心弱くてはかなはじと、思ひ直してかへりける。小三はもとよりお雪の事を、聞いてゐたゆゑ末々は、中を斷かれんは必定なり、もし緣切らるゝ事とならば、生きて居たとてかひなき身の、別れてつらき日を送らんより、死して苦患をまぬかれんと、こゝに覺悟をきはめしも、せまき女子の心から、嗚呼是非もなき事にこそ。かかりしほどに乳母のお乳は、最前よりの一伍一什を、次の間にて聞くものから、小三の胸の切なさを、さこそと思ひやる程に、己も共に胸のうち、はりさくばかりの苦しさを、こらへて忍び泣きゐたるが、今はなか〳〵怺へかねて、わつとばかりに走り出で、小三のそばへ坐りながら、うば「もしあなた、とんだ事になりましたねえ。あのやうにマア美しく、おいそれと、お受合ひなすつたは、どういふお心か合點がまゐりません。おばうさんのあることを、なぜ打明けてかう〳〵だと、おつしやらぬのでござりま

○心を付ける　氣をつける。注意する。

○男の子は緣切らるゝ時云々　離緣のとき、男の子は父親に附け、女の子は母親に附けて母親の實家へ返すのが當時の定めであつた。

す。子までなしたる戀中と、お聞きなすつたらお祖父さまも、無理に切れろとはおつしやるまいに、いま若旦那と御緣を斷つて、どうなさる思しめしでござります。お坊さんが可愛くはござりませんか。あのお子さんの事はお案じなさらぬか。マアどういふお心でござります。ト唯ひとすぢに金之助や小三を、大事と思ふ故、※心を付けることは意見、乳母はかくこそありたけれ。小三はなみだの顔をあげ、ーほんにそなたのいふ通り、子まである身を析かれる事、切ないとも悲しいとも、胸の中ははりさくやうで、その苦しさは譬へられうか。それゆゑ金ばうのある事を、うち明けようと思うたが、※男の子は緣切らるゝ時、男親に附くがならひ、なま中な事云ひ出して、あの子まであちらへ引きとられては、若旦那も今までよりは、なほなほ御苦勞が增すであらうし、二つには又わたしも、あの子を手ばなしては樂しみもなく、さぞ日にまし寂しからうと、未練らしいが云ひ出さぬも、やつぱり互の爲ばかり。又若旦那と緣切つても、わたしや外にどのやうな、男があらうと二人とは、馴染をかさぬる氣はないから、いつがいつまでも今の通りに、斯うして暮す心ゆゑ、そなたもやつぱり今までの通りに、金坊の世話をしておくれよ。トいふもなみだの、あとやさき、乳母も目をこすりながら、うばーまことにあなたのお心の中を、推量致せば致すほど、わたくしの胸もはりさくやう。なる程おばうさんのある事を、おかくしなすつたは深いお心、たとひ今日が日御緣がきれても、一生別れきりといふではなし、ほんの人目や浮世の義理と、お祖父さまの先刻のおことば、少

○せつぱつまる　せつぱは刀の鍔の中央にある孔に挾む薄き金物を云ふ。せつぱつまるは、窮して通ぜざることで、いよ＼／どうとも出來ない場合。

○もや＼／　煩悶で氣の腐つたこと。

しの御辛抱でござりませう。又お坊さんの事はおつしやるまでもなく、ばゝアノ＼とお馴染みなすつたもの、なんで他人と思ひませう。もつたいないが私が、産み申したお子だと存じますもの。たとひどのやうな苦勞をいたしても、お育て申す氣でござりますから、ちつともお案じなさいますな。しかし是れから若旦那の、お手がきれたら猶あなたは、いろ＼／御苦勞遊ばすだらうと、それがおいたはしうござります。トほろりとおとすなみだ。小三も浴衣の袖を目にあて、小三「わたしも今度の緣切が、一生の身の大事だから、只何事も神任せ、惡い工みをしたのぢやアなし、天道さまも見とほし故、今日はけふ、明日はあすと、その日の風に任するばかり。※せつぱつまつたその時は、又外に思案もあらうから、それを案じてくんなさんな。今にも若旦那がお出でなすつても、必ずわるい顏をしないで、今お祖父さんのお出でなすつた事も、お知らせ申しちやアわるいよ。うば「それは呑みこんで居りますが、なんぼお祖父さまのお頼みで、お家の爲や若旦那の、お爲とは申しながら、常にかはつてあなたの氣づよさ、お思ひきりのよさといふものは、あんまり見事でござりますから、どうも合點が參りませぬ。トいはれて小三はけつと當惑。死する覺悟をさとられじと、わざとまぎらすおびやうの癪。小三「アイタ、、、今の※もや＼／で持病の癪が、どうやら頭痛もするやうな。トまくらを取つてよこになる。乳母はせん方なくなくも、次の間へ立つて行きて、金之助の浴帷子を、縫ふもなみだではかどらじ。小三はしばし氣をやすめんと、横に寢ねても眠られず、只胸さきの

○つとめあがりの女　商賣人あがりの女、くろ水稼業をしてゐた女のこと。

○婦多川　深川。

○大ふでかし　大不出來「かし」しか。出來がわるいこと。

○から　とても。

みとゞろきて、とやせんかくやとさま〳〵に、思ひなやみし折からに、鄰れる家にて若者ども、二三人にて聲高に、浮世ばなしのいろいろなる、中に一人がいひけるは、●「コウ八さん、おめえ、己がむかふにゐた、つとめあがりの女を見たか。▲「フウ見た〳〵。二十三四のいい女だつけ。あれがどうした、文でもよこしたか。■「ばかアいひねえ、アノ女で此の間大騷動があつたアな。△「ハテノ、又逃げでもしたのか。■「どうして〳〵、逃げたくらゐならばいいけれど、首をくゝつて往生したアな。△「エヽ縊つたか。ヤレ〳〵とんだ事をやらかしたの。そりやアマアどういふ譯だ。■「聞きねえ。アノ女はの、婦多川の女郎だがの、さる所の息子に惚れて惚れてほれぬいて、互に心を明し合つて、末は女夫だ、夫婦にならうと約束をしたが、聞きねえ、その息子がおめえ、内にやアの、いい嫁があるんだアな。それを何でも深くかくして、まだ女房は持たねえから、請け出す請け出すとだましたが、大ふでかしよ。それからお前、相應に金まはりもいいもんだから、親父の金をひん盜んで、身請をして己が長屋へ連れて來て、圍つて置いての、女房はたゝき出しの、からてにおへねえから、親父はおほおこりで、上がたへやるの、田舍へやるのと、大もんちやくよ。した處があの女は、女郎に似合はぬよく出來た者で、嫁が出されたり、親父がおこつたのを聞くと、サア氣をもんで〳〵、息子が不埒とはいふものの、嫁を出したり内がもめるも、みんな私があやまりと、ひどく嫁に氣がねをして、生きてゐちやア、四方八

方、丸くいかねえと思つたさうで、たうとう書置をして、首をくゝつて死んでしまつたから、嫁も歸るし、息子もそれから、しかたがねえから穩順しくなつたが、なんとその女郎は、よつぽど氣めえもので胸がいゝに、第一、貞女といふ女だ。▲「ほんに女のかゞみだのう。水滸傳一百八人の中に、どうかありさうな豪傑の女だの。なる程女は魔のもので、外面如菩薩内心如夜叉とかなんとか、佛さまがいはしつた通り、顏は美しくつても、肝魂の恐ろしいのがあるものだ。しかしあの女もその息子の、一日恩になつたから、男の爲や何かを思つて、死んだのはあつぱれ名が殘るが、をしいかな首をくゝつたからおしゐえだ。とても死ぬならいさぎよく、身を投げるもちうだから、剃刀で咽をぐつとやると、鏡山の尾上ときて、がうぎに利いてゐるせ。■「さうよのう。そこがやつぱり氣がよわいから、剃刀でやつたら痛からうと思つて、縊つたのだらうが、見つともなかつた。▲「さうだらう〳〵。それぢやアやつぱりその息子の、面よごしでわらはれ草だの。ほんに死ぬのもよつぽどあんべえものだ。何にしても恐ろしや〳〵。トはなすを小三は聞きすまし、つく〴〵思ふひとりごと、「ハテ、世の中にも似た事があればあるもの、今の話のやうすでは、此の身に似たのも辻占か。あきもあかれもせぬ中を、心に思はぬ愛想づかしが、どうマア、なんと言はれよう。死ぬる今際に若日那に、お腹をお立たせ申しては、後の世までの心がかり、ひとつ蓮もおぼつかなし。ア、なんとせう彼とせう。トひとり胸のみ苦しめける。金之助は婢女のお竹と、いづかたへ行つて

○氣めえもの　氣前ものの訛。氣だてのよいもの。
○胸がいゝ　心がよい、度胸がよい。
○水滸傳　支那の小說。此小說中に現はれる豪傑は百八人ある。
○外面如菩薩内心如夜叉　外面は慈悲深き菩薩の如く、内心は猛惡なる夜叉の如し。容貌は溫和にして心は邪惡なる人の形容。
○ちう　中。上中下の中。
○鏡山　狂言の名。『加賀見山舊錦繪』。人間家の中老尾上が局の岩藤に辱められ、草履にてさん〴〵打擲されたので、己が部屋に歸つて剃刀にて自殺する。
○利いてゐる　氣が利いてゐる、立派くらゐの意。
○あんべえもの　按排ものゝ訛。此處では考へてやるべきもの位の意。
○辻占　偶然に遭遇した物事や人の無心の言語を聞いて、事の吉凶を占ふこと。
○ひとつ蓮　一蓮托生。未來で一つ蓮華の上に坐る。

○土ほぜり　土ほじりの訛。土いぢりである。いまいふ砂あそび。

○そらさぬ顏　人をして機嫌を損はせぬやうにする顏付、平氣をよそうた顏。

○矢劔堀　未研究。

遊びゐたるか、疊に白翁が立ち歸るとき、すれ違ひて歸り來しが、子ども心にも小三や乳母が、なにやら歎くやうすゆゑ、褒美さへもねだらずして、又門口に立ち出でて、土ほせりして居る折から、金五郎が來るを見て、よろこびて內にかけこみ、金之助「おつかアちやん、おとつちやんがお出でだよ。おつかアちやん〳〵。ト出たりはいつたりするうちに、金五郎は入り來るゆゑ、小三は顏をしかめつゝ、起きあがりて右の手にて、むなさきをきつくおさへながら、小三「お出でなさいまし。ト言つたばかりさしうつむいて詞なし。金五郎「どうしたをかしな顏つきだの、氣色でも惡いのか。トついにかはらぬやさしき詞に、小三はいとゞ胸さきの、さけるばかりにさし込む癪を、おさへても猶をさまらぬ、心一ツに白翁が、云ひたる事をいかにせん、なま中な事を云ひ出さば、賴まれしかひもなし、又金五郎に胸のうちをさとられじと、わざとなにげなく、小三「けふ髮をあらひましたら、まことに頭痛がつよくして、ふさいでならぬに、いろいろな事を考へますと心細くて、それでつい顏色も。トせつなさ隱しに笑ひがほ、金之助はさしのぞきて、「おつかアちやん、もう氣色なほつたかエ。トいはれてなみだをほろりとおとし、小三「アイ、もういいよ。金五郎「なんの、氣色がわるさうなら、髮をあらはなけりやアいいに。金之助「おとつちやん、今ね、よしよのおぢいしやん來て、坊こはかつたよ。金五郎「ナニ、おぢいさんが來た。そりや何處のおぢいさんだ。ト問はれて小三ははつとばかり胸とゞろくをそらさぬ顏で、小三「ナニサ、なんでござりますよ、矢劔堀の御隱居さんが、御出でなすつたのでござりますが、この子は見るとこはが

○アイチヤウ　あいしよ、あいよの兒語か。
○せたげる　せたぐ。いそがす。
○隔てる　わけへだてをする。うとみ遠ざける。
○うつ〳〵として　鬱々として。ふさいで。
○何くれかくれ　なにがしくれがし。なにやかや。
○番　勤務の番。

つて、どうもなりません。オホヽヽヽ。トわらひにまぎらす心の中、さこそ辛くも悲しかるべし。

金之助「おとつちやん、お土産あるかえ。金五郎「ホイ、しまつた、ツイ今日は忘れて來た。その代りばゝアと行つて、何ぞいい物をとつて來な。金之助「アイチヤウ、ばゝア行かうよう。トせたげる故に次の間より立ち出づる乳母もなみだ顔、らば「サア、お坊さん、參りませう。ト金之助をいだき、出てゆくそぶりをつく〴〵と見てふしん顔、金「なんだ、てん〴〵にをかしな顔をして、どうもおれにやア合點がいかねえ。なんぞ苦勞な事でも出來たか。コレなぜおれをば隔てるのだ。そりやア分らねえと言ふものだぜ。小三「エヽ、何も込み入つた事もございませんから、あなたを隔ては致しませんが、餘りうつ〳〵として居りましたから、つい色々な事を案じ過して、互にこしかた行末を話して、果ては涙をこぼし、ふさいでなりませぬからとろ〳〵と、少し氣を休めたのでございます。が、わたくしよりはあなたのお顔、いつにないお色の惡さ。お心持でもお惡くはございませぬか。金「ナアニ、おれのはこりやア持前だから、時々ふさぐが直になほるよ。ト口にはいへど心には、何くれかくれさま〴〵の苦勞あれども、男氣の、それと知らさぬ胸の中、言はぬはいふに彌增して、猶さら辛きものぞかし。小三「あなたちつとお氣晴しに、御酒でもおあがんなさいませんかエ。金「いやいや酒よりはマア、ちつと寢よう。全體けふは番だから、どうも來られねえ處だつけが、昨日もをとゝひも來ねえから、又案じるだらうと、氣になつて、それでやう〳〵ぬけて來たのよ。ひと寐入りやつたら直るだらう。ト小三のまくらを引き寄せて寢轉びながら

「のう小三、實に人のいつ生は、どうなるものか知れねえものだの。今頃斯うして暮さうとは、おらア夢にも氣がつかねえよ。末々かけて夫婦だと、互に思ひ思はれたに、お雪といふ惡魔が這入つて、苦勞をさせる切なさ辛さ。それ故にこそ祖父さんや兩親へ、一倍氣がねをするといふも、アヽうるせえ世の中だのう。小三「其の樣にマア、お雪さんの事を兎や角とおつしやるが、お雪さんは大事の大事の、お家のお娘でござりますから、可愛がつてあげて下さいまし。どうで私は日陰の身故、どうなつても宜しうござりますから、そんなにあちこちお氣をつかつて、必ず煩うて下さいますな。それが私は苦勞で〳〵なりません。と、暫し淚にくれ六つの、鐘の鳴るまではまどろまんと、金五郎はこゝに打臥しける。是れより小三、金五郎に、愛想づかしをいふや否や、そは三編を見て知り給ふべし。

○くれ六つ　午後六時。

○愛想づかし　人をもてなすに、情愛をすてて、すげなくすること。俗語。

○ひねつた　常人と異る、

○誤說　說き誤り。話の間違ひ。

○評判よし野の花云々　評判の良き事吉野の櫻より名高く

○部數は春の山ほどに　部數は張り、膨大となつて、春の張の山ほど高く積んで。

○忌敵　互に忌みあつて敵とすること。仇敵。此處では忌み難きにかけてゐる。

○夕河岸　夕刻河岸へあがる魚類を夕河岸と云つて、市中を賣歩く。

○おこして　寄こして。遣して。

○調市　小僧。丁稚。

○孟春　陰暦正月の異稱。

器の古きを愛づるのは、※ひねつた茶人の一癖にして、旨き物を食したがるは、小兒と意地のきたな連中、婦人を視て目のなきは、放蕩家の病なるべし。觀所と趣向のあたらしきを、妙で※誤說の咎めもなく、ヤンヤと蘭語で贊言は、戲作通の香的、※評判よし野の花より高く、※部數は春の山ほどに、賣らん事を欲するは、言はねどしるき發客の慾情、梓業原より※忌敵、速いが勝の新版は、※夕河岸の魚を競ふに齊し。近頃娘節用の、刻成つて發市は、近きにあれば序文でも、口上なりと出たらめに、はやく／＼と書肆より、使を※おこして居催促、机の下に居眠りし、※調市の鼾を聽きながら、筆を採りて斯くばかり、有りの儘に記すになん。

甲午の※孟春

三文舍主人

小さん
金五郎　假名文章娘節用　三編上の巻

第七回

生者必滅會者定離は、浮世のならひと悟つたる、言も今は身の上に、思ひあたりし憂き事と、小三は胸にこたへたる、人にしられぬ心勞も、かねての覺悟と云ひながら、さすが女のやるせなく、浮氣を捨て眞實に、二世を三世と契りたる、かはらぬ中の金五郎の、爲とは云へど今更に、義理といふ字にせめられて、縁を切らんはなか／＼に、身を裂かるるより苦しくて、とやせんかくと案じれば、案じるほど猶物思ひまさる苦勞を胸の中に、置きどころさへ泣きのたね、心を鬼に持つとても、道に缺けたる愛想づかしは、いふにいはれぬ恩愛と、執着の絆斷ち難く、ふつふつ思ひ惱みしが、左にも右にも末かけて、添はれぬあだな縁ゆゑ、なまじひな事いひ出して、臨終に憎しみ受けんには、女子は罪の深き身に、罪重なりていつの世に、罪滅ぼさん樣はなし、うすき縁は前の世の、因果とおもひ定めなば、人をうらみ身をうらむ、よしなき罪はなきものをと、あぢきなき世を悟れども、心細さのいとゞしく、生ひさきのある子を捨てて、いとしい男のためながら、暗き冥土へ旅立たんは、よく／＼業の深き身と、又くりかへす迷ひの闇に、ひとり胸のみ苦しめ

○生者必滅會者定離　生の始あるものは、必ず終に死滅あり、相會せしものは、必ず離散することは必然の理なりといふ意。「大涅槃經」中の有名な句なり。「平家物語」十、「生者必滅會者定離は浮世の習にて候なり」。
○やるせなく　心のやり所なく。
○二世を三世と契りたる　「親子は一世、夫婦は二世」といつて、夫婦は二世、即ち現世と來世とに縁が連がるといはれてゐる。これを尚、強めて二世を三世といつたである。
○泣きのたね　泣きと無きをかけてある。
○あだな縁　はかなき縁。かりそめなる縁。
○女子は罪の深き身　女人は罪業深く、五つの障がある爲に、梵天王、帝釋天、魔王、轉輪聖王、佛身と成ることを得ないといふ。
○いとゞしく　甚しく。
○生ひさきのある　行くすゑの長い、長い將來のある。
○暗き冥土へ旅立たん　死ぬること。「よみぢ」は「よみ(夜見)」にて、暗き處の意。依つて暗き冥土といふ。
○業の深き身　業は梵語 Karma の譯。吾人の身、口、意によりてなす善惡の所行で、未來に善惡の果を感ずべき因となるものをいふ。即ち往よ罪業の深い我が身だといふのである。

○ことわりせめて　道理が迫つて。誠にそれも無理のないことで。

○持ちあそび　玩具。

○立てつけて　續けざまに。「立てつけ三杯」など云ふ。

○ねつから　根自「ねから」の音便。一向に、全くの義。

つ、年ごろ日頃の辛勞が、つもり〳〵てこの頃は、うき立たぬ氣の結ぼれて、食事も日々に細るものから、面もかたちもやせがれて、うつらうつらと氣を病むも、ことわりせめて哀れなり。かかりし程に金五郎は、案じる事大方ならず、藥よ醫者よとさま〴〵に、心を配り氣をつけて、いたはり優しくさるゝにつけ、小三はいとゞその情の、あつきと恩の深かるを、おもひつゞけ考ふれば、いかに義理でも操でも、いとし可愛の夫と子を、捨てて死すべきやうもなく、いつその事に白翁が、緣きつてくれと賴みたる、事をうちあけ金五郎に、はなして談合したならば、どうかかうかとさまざまに、心もみだれ氣をもみて、病はますます重るゆゑ、寢ても起きてものぼせるのみ、頭痛とゆるぐ齒のいたみに、胸のやすまるひまぞなき。金五郎は勤めの身ながら、案じる事ひとかたならず日毎々々に訪ひ來るが、今日しも例のごとく入りきたりて、奧へとほれば小三のそばに金之助は、持ちあそびを、ところせましとならべたて、餘念もなくあそびゐる。

金五郎「どうだ小三、けふはちつとも快い方かの。トゝ問はれて小三はくるしき中にも、金五郎のかほを見るより、なやめる顏ににつこりわらひ、

小三「ハイ、やつぱりけふも同じことで、どうもふさいでなりません。金五郎「さうか、まことにどうも困つたものだ。藥は毎日精出してのむか。ばゝア立てつけて吞ましてくんなヨ。トうしろを向けば、うばは火鉢へ炭をつぎながら、「ハイ、なるたけ精出してお吞ませ申して、はやくお快くしてあげたいと存じますが、今度のお醫者のお藥は、まことに上りにくいさうで、ねつからどうもはかどりません。金五郎「そりやアわるいのう。どうで藥は吞にくいから、誰しも

○お巧者　巧みな人。上手。

すゝんでのむものはねえが、そんなに無精ぢやアどうもいかねえ。それにあの醫者にかけてから、ねつからはかばかしく無えそうだから、なんなら醫者を取替えるが宜からう。小三ーナニ あのお醫者樣もお巧者だから、轉へますにもおよびますまい。どうでかういふ病氣といふものは、はかばかしい事はないと申しますから、お氣をもんでくださいますな。私がこのわづらひより、あなたに御苦勞かけます事かと、おもひまはしますと、もう〳〵、いつそこの儘死にました方が、はるかましでございませう。　ト云ひつゝなみだはら〳〵。金五郎ーまたそんな馬鹿な事をいふヨ。なに死ぬのがましなものか。病は氣から發るといふから、氣の持ちやうで早くも直り、重くもなるのに、おめえのやうに些と煩ふと、死ぬはうがましだましだと、氣で氣を病むものだから、ちよつとした病氣も埒があかねえのだ。　小三ーそれでもどうも心がら、氣で氣を病む氣はございませんが、もとより苦勞性な生まれつき故、つまらない事も氣になつて、あんまり深く考へますから。　金五郎ーそれがわりいナ。寐る目もねずに考へて、氣で氣をもんで苦勞をしても、儘になるものかナ。餘計な苦勞で命を削るやうなものだ。勿論平生おれの爲を思つて、人の知らねえ苦勞をして呉れるのは、眞實うれしいは山々だが、こんなに煩つてくれちやア、實にどうも困りきるぜ。是れからは考へ事はさらりとやめて、苦勞は地獄へでも捨ててしまふがいい。小三ーあなたはさう一口におつしやいますが、とても女は罪が深いから、苦勞は一生はな

○ぐわんぜもなく　聞きわけもなく。理解もなく。

れません。苦勞より此の體が、さきへ地獄へ參りませう。ト あはれな事をいひ出すにぞ、金五郎もむねふさがりて、 金「その氣の小せえのが病の原だ。老人かなんぞぢやアあるめえし、是れしきな病氣で死ぬものかな。ちつと氣をきりけえて、向島の姉御の所へ、保養にでも行つて見るがいい。小三「わたくしも向島の姉さんに、ひさしく逢ひませんから、この間からどうぞして、參りたいと存じてをりました。老少不定は世のならひ、盛りの花も散るは常、定めなき世と申しますから、あすをも知れぬわたくしが身のうへ、もしもの事があつたらば。ト あと言ひさして胸せまり、金五郎のかほと金之助のかほを見つめる目になみだ、袖にあふれて膝のうへに、雫と落つるを子心に、ふしんに思ふ金之助は、のびあがりて小三の顏を、つくづくと 見て膝にとりつき、 金之助「おつかちやん、なに泣くのだエ。おとつちやんお呵いか。坊おやまゆから堪忍ちておくえよゥ。ト いはれて小三はたまりかね、こゑをしのびて泣きむせび、金之助を抱き上げて、 可愛さ餘りて切なさは、胸もはりさくばかりなる。金五郎も男心に、口にはさまざま言ひ紛らせど、小三の胸をおしはかり、せまき女の心から、よしなき苦勞に取りつめて、もしものこともあらんかと、思ひ過して胸せまれど、さとられじとて鼻紙に、涙つゝむぞ無理ならず。乳母のお乳もかたはらに、二人が心を推量して、共になみだにむせびける。小三はやうやうなみだをぬぐひ、 「この子のまだぐわんぜもなく、わたしが愚癡な心から、つまらぬ事を案じ立てして、あんまり悲しくなつた故、つい涙をこぼしたのを、旦那に呵られる事かとおもひ、おやまるこゝろのしほらしさ。なぜ子どもといふものは、こ

んなにもマア可愛からう。この子の成人するにつけ、慾に限りは無い故に、いつまでもたつしやでゐる氣でも、壽命がなければそれもかなはず。もしあすが日に目をねむつたら、さぞマア後で泣くだらうと、それが今から見らるゝやうで、死ぬ氣はさらさらないけれど、とても長命のできないわたくし、遺言ではござりませんが、ひよつとマアさかさまごとで、この儘死にでもいたしましたら、たより少ないこの子の身の上、他人の手にかけないやうに、どうぞ向島の姉さんのところへ、お預けなすつてくださいまし。とても日陰で育つたこの子、末始終あなたの御家督を、つぎます事もなりますまいから、養子にやらねばならぬ生ひさき、今からあんまり他人の中で、いぢめられたり苦勞をさせたら、根がひよわい生まれ故、蟲もちにでもなりませうから、外へやつて下さいますな。御如才もござりますまいが、六ツか七ツにもなりましたら、手習や讀書も、教へてやつて下さいまし。また二ツにはお雪さんと、御夫婦中よくお暮しなすつて、御祖父さんはじめ御兩親へも、御苦勞をかけ申さぬやうに、御孝行になすつて下さいますれば、わたくしはモウどのやうな、佛事供養をして下さるより、思ひ殘す事もなく、うかみます。あなたには子どもい時からおなじみ申して、ひとかたならぬ御恩をうけましたが、この世の縁が薄いかして、この子ができても末かけて、添ふにそはれぬ身の因果、何のむくいでこのやうに、後生のわるい生まれかと、いくたびおもひかへしても、かへらぬ事でござりますが、これもやつぱ

○さかさまごと　逆事。年若いものが年とつた人に先立つて死ぬこと。此處では小三が東五郎に先立つことをいふ。

○たより少ない　よるべのない。

○日陰で育つたこの子　小三が公然とは世間へ出られない日陰者の身分なので、その子金之助も日陰で育つた子といつた

○ひよわい　脆く弱い。かよわい。

○蟲もち　むしは蛔蟲から轉じて、小兒の種々の病をいふ。その蟲氣があること。病身。

○如才がない　ぬけめがない。氣がきいてゐる

○うかむ　佛説にいふ、亡者の靈、輪廻を脱して、往生すること。解脱と同じ意。

り女の愚癡、この上のお情には、わたくしのからだは、あなたのお寺へ、どうぞやつて下さいまし。さうしたならあの世へ行つて、お側に居られませうかと、はかないやうでございますが、今の身にてはそれがたのしみ、お察しなすつて下さいまし。ト又もなみだともろともに、繰りかへしてぞ歎きける。金五郎「まだそんなつまらねえことを云ふよ。あんまりくよ〳〵思ふから、ちつと取りのぼせたのだやア無えかノ。この一日二日は、なんでもおれの顔さへ見ると、あはれつぽい事ばつかりいふから、おれまでどうか氣色が惡くなるやうだ、ぐちなことを考へ立てして、氣でも狂ふといかねえから、ほんに氣をしつかり持つがいいぜ。お雪にひどく氣がねをするから、それでこんな病氣が發るのだらう。あの子お雪の事と祝言したのは、知つてゐる通り、祖父さんや親父の氣やすめの爲だから、何も今更おめえを捨てる心もなし、又金坊ができたから、※榮耀榮花こそさせられねえが、そんなに不自由もさせめえし、日かげ者でもなんでも、共に心さへ變らねえけりやアいいぢやアねえか。儘にならぬのが浮世だとは、唄にさへうたふから、其處を承知して、なにも時節だと、氣を大きく持つて※往生してゐなけりやア、苦の世界が渡られるものかな。ほんに往生するといつちやア氣がかりだつけ。アヽ※鶴龜々々。ト小三のこゝろをなぐさむる、ことばのはしにも※いまはしき、ことのみ言ひて氣にかけるも、蟲の知らするゆゑなるべし。この日は金五郎も何となく、小三の身が案じられて、歸る心もなかりしかば、看病がてらこゝに泊りて、夜もすがら沉りがちなる事のみ話して、夜更けてみな〳〵打臥しける。あくる朝金五郎は、

○榮耀榮花　奢りを極むること。驕奢である。

○往生　佛教の語で、現世を去つて極樂淨土へ往つて生れる事、即ち死ぬことをいふ。但しこゝでは我慢をする、諦めるの意に用ひた。その爲「往生するといつちやア氣がかり」の詞が出たのである。

○鶴龜々々　不吉を拂ふ呪の言葉。

○いまはしき　忌むべき。不吉な。

○ひよんな事　意外な事。變な、妙な事といふ意味。
○きい/\がわりい　體の工合、氣分が惡いの小兒の語。

はやく起き出で仕への身なれば、立ち歸らんと身じたくするに、小三は心のつかれにや、まだ目覺さぬこなたには、金之助があさおきにて、うばを相手にあそびゐる、そばへ來りてあやしながら、金五郎「ばゝアや、子供と云ふものは、まことに朝おきなものだのう。坊やのしやべる聲で、おらア目を覺したやつよ。うば「さやうで御座いますかエ。どういたしてもお坊さんは、お晝寢をなさいますから、朝がお早うございますのさ。ほんにおつかさんはまだ、お目覺がござりませんネ。旦那さんエ、あなたはさぞモウ御苦勞でございませうが、まことにお困んなすつた事でございますネエ。金「さうよ、じつに苦勞でならねえ。それになんだか氣にかゝる事ばつかりいふから、どうも案じられて安心ならねえヨ。おれは勤めの身のことゆゑ、每日附きどほしに附いても居られず、なんでも手前ひとりが賴みだから、ずゐぶん氣をつけてやつてくんな。女といふものは心の狹えものだから、※ひよんな事でもしめえかと、夫れが一倍心配だ。トいひながら金之助のあたまをおさへて、「こりや金ばうヤ、おつかアは※きい/\がわりいからの、あんまり世話をやかせずに、おとなしくして居るのだヨ。又明日來るときに、お土産をたんと買つて來てやりませう。トいへば嬉しさうにひざにとりつき、金之「おとつちやん、坊おとなちくするかや、うまい物お呉えよ。明日おつかちやんきい/\まだわゆいかヤ、坊おとなちくすゆ　ヨ。金五郎「オヽ、さうだ/\。坊は利口者だからおとなしくするのう。そんならおとつさんはマア歸りませう。おつかアはまだ目を覺さねえから、しづかにしなよ。トいふ聲聞きつけ小三は起きいで、

小三「オヤモウあなたお歸りなさいますかエ。今日は御番でありますかエ。金五郎「フウ、モウ※四ツだから歸らざアなるめえ。なんぞ用でもあるのか。小三「さやうさねえ、用と申すのでもございませんが、なんだか今朝は御歸し申すのが。ト なごり惜しげなやうす故、金「またそんなことを言つて、とめるのか、けふは顏ツつきがでえぶいいやうだぜ。なんにしても歸つて又出直して來よう。主人へつとめの間をかかぬも、親父や祖父さんへの心やすめだ。マアなんでも精出して藥を呑むがいいぜ。小三「それでもあなた、今夜はお出でなさりやアしますまいネ。金「大抵なら繰り合はして來る氣だが、あんまり遲ければ、明日のあさは是非來るヨ。それとも用でもあるなら、さういつておきねえ。小三「ほんにそれそれ、金ばうの背中の※灸がまがつてをりましたから、どうぞ直してやつて下さいまし。そしてまだ※疱瘡前でございますから、觀音さまの二王さまの股を潛らせて下さいましヨ。此の頃はあつちこつちに、だいぶ疱瘡がありますさうだから。それにアノ、モウ獨り行きをいたして、浮雲くつてなりませんから、※轉ばずの玉子守と、※水天宮さまのお守を懸けさせてやつて下さいまし。爰らは近所に川が多うございますから、水が怖くつてなりません。ト 萬事につけて子を案じる心のうちぞふびんなり。金五郎「なんだな、そんな事はいつでも言はれるものを。あんまりいろいろな事をいふから、おれも歸るのがをかしいやうだ。マア、モウ一ぷく吞んでから歸る事とせう。ト 男心にも氣にかゝれば、別れのつらさも無理ならず。小三はたばこを吸ひ付けて出しながら、小三「※袖引たばこであなたのお足を、無理に

○四ツ　十時。こゝは朝だから午前十時。

○灸がまがつてゐる　灸穴即ち灸點すべき箇所に外れてゐるといふ意味。

○疱瘡前で云々　淺草觀音の仁王尊の股をくゞると疱瘡にかゝらぬとされてゐた。

○轉ばずの玉子守　轉はないお守。

○水天宮　水を守る神。現東京市日本橋區蠣殼町にあつて、安德天皇、高倉平中宮、二位時子を祀る。文政元年久留米の水天宮を勸請分社したもの。

○袖引たばこ　ひきとめるために、火を吸附けて差出す煙草。

○身まゝ　身の自由を得ること。即ち、こゝは身請されて自由なからだになること。

○色事後生樂　後生樂は五常樂といふ言葉の秀句に因つた語。五常樂は唐の太宗が、宮、商、角、徴、羽の五音に仁、義、禮、智、信の五常を配して作つた樂だといふ。轉じて、何事も氣にかけず萬事を樂觀することをいふ。即ちこゝでは、色事三昧に入つてのん氣に日を送つてゐることにいつた。

○爺じみた言ひぐさ　年寄り臭い言ひ方。

○じゆつくわい　述懐。

○信州の戸隠　歯を病むものは戸隠山の神に願をかけて梨子を断つ。戸隠山には國幣小社戸隠神社があり、天手力男神を祀る。

○いびる　いぢめる。

とゞめた歌妓の時分は、眞の苦勞も苦にならず、はやく身まゝになりたいと、樂しみ盡きて悲しい今の身、思へば夢のやうでございますねえ。金五郎「さうよ、この子のできねえ時分が、ほんの色事後生樂、無理な口説にすねたり妬いたり、つらいと思ふは逢はねえ晩、ゆうべの恨みは今夜の手くだ、面白い事も樂しみも、かんげえて見ると昔のやうだ。爺じみた言ひぐさだが、アヽ年はなんでも重らねえこつた。あの時分のやうな身のうへに、もう一度なつて見てえものだ。ト　じゆつくわいめきたるくりごとに、ふさぐ心を子は知らで、金之助はあそびにあきけん、金之助「おつかアちやん、坊、ばゝアと遊ぶの、モウいや／＼だよ。何じよ旨いものおくえよう。小三「アイアイ、モウお遊びはいや／＼かエ。そんならばゝアや、お菓子でもやつておくれヨ。うば「ハイ／＼。お坊さん、サア落鴈をあげませうねエ。金之助「乳母、坊、落鴈いや／＼だヨ。梨子食べたいよ。おつかちやん、佛ちやんの梨子おくえよう。小三「ナニ佛さんの梨子かエ。坊はこのあひだ、お歯が痛々だつたから、信州の戸隠さんに御願ひ申したから、梨子は食べられないからお菓子におしよ。いい子だネエ坊は。金之助「お菓子いやいやだもの。佛ちやんにあんがちて居る、梨子おくえよウ。ト少し泣聲になる。金五郎「坊や、なぜそんなにだゝをいふ。梨子は毒だから惡い／＼。だゝをいつていびるから、おつかアの病氣が惡くなるのだ。おとなしくしてお菓子をたべな、赤いうまいのがあるから。コレ坊ヤ、なぜそんなに似指をいぢるのだ。似指をいぢると手へ灸すゑるよ。金之助「灸いや／＼、御め

○兩國のお橋　『江戸名所圖會』兩國橋の項に「淺草川の末、吉川町と本所元町の間に架す。長九十六間。云云」とある。

○四苦八苦　佛教の語で、生、老、病、死を四苦といひ、これに愛別離苦、怨憎會苦、求不得苦、五陰盛苦を合して八苦とする。そこで非常な苦しみを四苦八苦といふ。

○せたげられて　急き立てられて。

○めんえう　面妖。怪體なこと。

んだよウ。おとつちやん似指々ぢやないかヤ、何じよ買つておくえよう。金五郎「オヽ、さうおとなしくするなら、旨い物を買つてやりませう。おとつさんはお屋敷へ歸るから、お竹に抱つこして、※兩國のお橋の方へ一緒に來な。お菓子と、手遊と、そして何を買つてやらうのう。金之助「アノウお菓子とおもちやと、そイかヤ、アノウ佛ちやん上げる、花花買つておくえよウ。トいはれて小三はむねにぎつくり、金五郎も氣にかゝれば、金五郎「エヽこの坊主は、妙な子だのう。なんぞといふと佛さんへ買つて上げよう上げようといふが、氣になる事をいふ坊主だぞ。マア何でもいいから一緒に來い／＼。そんなら小三大事にしな。婆ア氣を付けてくんなよ。トいひつゝおりてざうりをはけば、金之助はお竹にいだかれ、さきへおもてへ出てゐる。小三は金五郎のうしろより、著物のえりをなほしながら、小三「さやうなら御機嫌よう。オヤあなた、ちよつとこちらを向いてお見せなさいまし。ト暇乞ひにもわかれを惜しめば、金五郎はふり返りて、金「ナゼ、己がどうぞしたか。小三「ハイお頭上に何やら芥が。トとる手もふるへ聲曇り、これがこの世の見納めかと、思へば心も消え／＼に、ぢつと見つめる目に涙、せきくる胸の切なさを、咳にまぎらす顔に袖、あてて泣く目をかくすなる、心の中の※四苦八苦、思ひやるさへ哀れなり。金之助はわけもなく、金之助「おとつちやん早くお出でよう、坊背負ちて待居るヨ。ト※せたげられて金五郎も、詮かたなさに格子戸を、跨ぐはずみに門口の、石につまづきよろ／＼よろ、小三「オヤどうなさいましたエ。金五郎「ナニ、鼻緒を踏み切つたのヨ。ハテ※めんえうな。昨日買つた雪踏だから、切れる筈はねえけれど、どうも不思議ぢやアねえかのう。ト又氣に

かけて思案がほ、小三「そんならアノ、きのふお買ひなすつた、お雪蹈の鼻緒が、アノ切れましたかエ」金「フウ、こいつアどうも氣がかりだ」小三「エヽ」ト胸にこたへてほつといき、「あのそんなら、お雪蹈をお竹に持たせて、直しの所へおやんなさいましな。」金「なアニ、二本鼻緒が一本切れたのだから、履いて行つて※橋臺で直させよう。サア金ばう、一緒に來な」ト心ならずも出で行きける。小三は金五郎の後影、見ゆるまで見おくりて、名殘の淚やるせなく、止めかねしをかくては果てじと、思ひかへして食事をば、やう〳〵に食べしまひ、楊枝をつかひながら、氣のぬけし如く、考へて居たりしが、うばにむかひ、小三「ばゝア、けふは旦那もいろ〳〵御用があるさうだから、モウ出なほしてお出でなさりもしまいし、わたしも氣分が大きによいから、保養がてら今ツから、向島へ行かうと思ふよ。それに此の節はモウ、※花屋敷の七草もさかりだらうし、天氣はよし、金ばうをつれて、ぶら〳〵と出かけようよ」うば「それは宜しうございますが、おあんばいの惡いのに、遠道をお歩きなすつたら、又あとがお惡うございませうヨ」小三「ナニ、爰からはそんなに遠くもないものを、ぶら〳〵と出かけたら、氣が晴れて却つてよからうヨ。向島の姉さんも、金坊が成人したのを見たがつて連れて來い〳〵と、お文をたび〳〵およこしだから、マア何にしても出かけようヨ」ト是より小三は身支度して下女のお竹を内にのこし、乳母に金之助をおぶはせて、向島へと出で行きける。小三の姉眞名鶴は、富家の隱居に愛せられて、向島の※洲崎村なる、※秋葉の社のほとり近くの、別莊に住居して、月雪花を友としつゝ、いと樂々と暮し

○橋臺　橋際にある下駄を修理するもの。

○花屋敷　今の百花園。もと幕府旗下の士多賀氏の邸であつたのを、文化六年北野屋鞠塢が手に入れて庭園となし、當時の文人墨客風流の士の出入するところとなつた。龜田鵬齋、石川雅望、大田南畝、酒井抱一、大窪詩佛、谷文晁、村田春海、加藤千蔭等は其の常連であつた。花屋敷の額は大田南畝即ち蜀山人の書する所、門の左右にある「春夏秋冬花不斷、東西南北客爭到」の聯は大窪詩佛の手に成つてゐる。向島七福神の一たる福祿壽を園中の小堂に祀つてある。

○洲崎村　向島須崎

○秋葉の社　『江戸名所圖會』の秋葉大權現社の部に、「同所（須崎）三丁あまり東の請地村にあり。遠州秋葉權現を勸請し、稻荷の相殿とす。……境內林泉幽邃にして、四時遊觀の地なり。門前酒肆、食店多く、各生洲を構へて、鯉魚を畜ふ」とある。

○榮耀　さかえかゞやく、はでやかなどの意から、贅澤、おごり、我がまゝなどの意に轉用されてゐる。こゝの文は贅澤な暮しを望む心もないとの意。

○百萬遍　佛名を百萬度繰り返して唱ふること。多くは數人輪をなして坐りながら大數珠をくりて念佛を唱ふ。

○行ひすます　心を澄して行「ぎやう」を修する。

○庭面に　元來、庭も狹くなる程にといふ意味であるが、誤られて庭の面にといふ義に用ひられる。

居けるが、この春隱居は世を去りて、なき人の數に入りしかば、本家の主人も眞名鶴の、便りなき身を哀み思ひ、殊に壯年の事なれば、いづかたへなりとも支度して、嫁入らせやらんと深切に、情厚く云ひけれども、眞名鶴は今更緣付きて、※榮耀を望む心もなく、勤めの身にて年久しく、つらい苦勞も爲あきたれば、たとひ不自由の暮しをするとも、世を物靜やかに送らんこそ、上もなき樂しみなれば、あはれ尼となり佛門に入りて、隱居をはじめ亡親の、後の世をも弔はんこと、生涯の願ひなりとて、ひたすらに望みける故、本家の主もその心操の、淸らかなるを深く感じて、望みに任せて、別莊を眞名鶴にゆづり、その庭の中に庵を造らせ、念佛庵といふ號をつけて、佛事をいとなむ補助とし、日々の雜費は月毎におくり、不自由なく暮させければ、眞名鶴は日ごろの望みも叶ひ、その恩義の厚きを喜び、浮世をのがれし心地にて、髮を切り尼となり、名を紫雲とあらため、月々に彼の庵にて、※百萬遍をいとなみつ、佛に仕ふるを身の業とし、※行ひすまして暮しけるは、いと〳〵殊勝の事なりけり。頃しも秋の中ばなれば、※庭面に桔梗、女郎花、なでし子、藤ばかまなど、さま〴〵秋草の咲きみちたるまゝ、紫雲は御佛に參らせんと、庭下駄をはき下りたちて、花を手折りて居る折から、枝折戸の外に人音する故、ふりかへりてひとめ見るより、紫「オヤ〳〵、青柳橋の姉さんだネ。よくマアお出でだねえ。サア〳〵こつちへお上りナ。ヤレ〳〵よくお出でだ。ト流石にしんみのきやうだいゆゑ、喜ぶこと大方ならず。小三も姉の無事な顏を、見て嬉しさの

○手まへにかまけて　自分の用に追はれて。或は自分勝手で。

○生　生寫し。其まゝ。

限りなく、乳母の背中に負はれゐる、金之助を抱きおろし、手をひきて座敷へ通り、おさだまりの挨拶すみて、みやげ物などいだすとき、紫ーヤレ／＼まことに久しぶりだネ。オヤ御無用におしなさればよいに、遠方だのにお土産まで　ほんにこのあひだ人をあげた時、おまへがちつと氣色が惡いと、お返事に書いておよこしだから、どういふ樣子かと、いつそモウ案じ／＼して、ちよつと見舞に參らうと思つてゐたが、あいにく私も時候にあたつて、つい／＼けふまで出かねてゐたよ。まだおまへも顔の色も惡いが、氣分はだん／＼よい方かエ。そして舟でもお出でのかエ。小三ーイヽエ、あるいて參りましたよ。見かけ程心もちは惡くもございませんが、唯ふさぐばかりで御座いますのさ。私はモウ手まへにかまけて、御無沙汰ばかり致しますから、あなたのおあんばいのお惡かつたのを、存じませんでお尋ね申しもいたしません。紫ーナニサ、私のはほんの當分の事、モウさつぱりと快いヨ。ほんに金ばうよくお出でだネ。ちつと見ない中に大きくお成りだぞ。目つきや口もとがおとつさんに生だねえ。小三ー金ばうや、手をついてをばさんに、ハイ御機げんようとお辭儀をしなよ。紫ーアイアイ、よくお辭儀ができますぞ、りこうものだ。サア／＼をばさんに抱つこをおし、うまい物を御馳走するから。オヽよく言ふことをお肯きだぞ。可愛いいねえ。・ト金之助をひざの上に、抱きあげながら乳母にむかひ、紫ー乳母アお出でかエ。ハイしばらく。おたつしやでよいネ。うばーヘイありがたうございます。まことに御無沙汰樣を致します。へヽヽヽ。オヤお坊さん、お嬉し

うございますかエ。お抱つこでようございますネエ。紫「この子もお前の丹精で、まことにおとなしく成人したネエ。ほんに※氏より育てがらとやら、この末ともどうぞ面倒見てやつておくれ。うば「イエモウ、お利口なお生まれつきで御座いますから、※目からお口へぬけますやうで、よその子供衆より御合點がよく參りますのさ。紫「ほんにさうだらうネエ。金ばうや、おとつさんは御機嫌よいかエ。金「アイ。おとつちやんお屋敷に、お竹内に居ゆヨ。紫「オヽお竹は内におるす番で。おとつさんはお屋敷かエ。よくわかるねえ。お常や、お煮花を早くこしらへて、ソシテ今さういつた物を取りにやつておくれカエ。下女「ハイ〳〵、唯今お煮花もできますヨ。アノお菓子も、三松どんが取つて參じました。紫「そんなら早く爰へ持つて來て、金坊に上げておくれ。そしての、鯛七へさう言つてやつて、金坊ヤおつかさんのお好きな、うまい魚を取つておくれヨ。下女「ハイ〳〵、かしこまりました。トにばなと菓子をもちはこぶ。小三「オヤモウおかまひなさいますな。今日は御馳走をいたゞきますより、久しぶりでゆつくりと、むかし話や、※うさばなしで、氣をはらすのが何より御馳走。紫「ほんにさうさねえ。女といふものは久しぶりで逢つても、身の上ばなしかなんぞより、外に話は無いものさ。マアお茶ができたからお菓子をおあがり。サア金ばう、好きならたんとおあがりヨ。小三「ハイありがたう。左樣なら坊やいたゞきな。オヤオヤお珍らしい、お牡丹餅でございますかエ。紫「アイ、※富貴牡丹といふ※道明寺のおはぎ

○氏より育てがら　氏より育ちといふ。

○目からお口　目から鼻といふ諺はあるが、目から口は珍しい。

○煮花　茶のでばな

○うさばなし　心配話

○富貴牡丹　郁島（次頁）と共に今は無い。いつ頃まであつたのか不詳。作者が一種の宣傳と見える。

○道明寺のおはぎ　外側を道明寺糒（ほしひ）で作つたおはぎ

○酒（ひだり）　「ひだりきゝ」などと言つて、酒を飲むことを俗に「ひだり」といふ。
○梅屋敷　「江戸名所花暦」に「本所亀戸天満宮より三丁程ひがしのかた、清香庵喜右衛門が庭中に臥竜梅と唱ふる名木あり。……園中梅樹多しといへども、殊に勝れたり」。
○蓮華寺　寺島にある。清遠山と號す。眞言宗。北條時頼の子頼助、寺島を領するに及び、弘安三年の秋鎌倉の蓮華寺を此に移し、自ら開山となると傳ふ。

サ。そちらにあるのは都鳥といふお菓子で、兩方ながら向島の名物だから食べて御覽。小三「ほんにさやうでございますかエ。サア坊、いたゞいておたべ。ばゝアにもお相伴させませう。金「おつかちやん。牡丹餅おいちいヨ。坊たんと食べゆヨ。小三「ほんに誠においしう御座いますネエ。乳母とんだよいお菓子だのう。うば「さやうで御座います。此の様なお菓子を、向島で賣りますのを、さつぱり存じませんネエ。小三「さうさ、モシお姉さんエ、これは御近所で初めましたかエ。紫「アイ、直この秋葉さまの裏門の通りで、土手へ出る道サ。松花園といふ家で、ちかごろ賣り初めたが、とんだ好くするネエ。小三「左様で御座います。實に美味しうございますから、坊が大悦びで、たんといたゞきます。紫「それはよかつたネエ。金坊、たんとおたべヨ。乳母は※酒の方だから、いまにお肴がくると、一口あげるヨ。うば「イエ、御酒よりか又、このおはぎと都鳥は、結構でございます。そして手綺麗でございますから、おつかひ物やお土産などには、よろしう御座いますネエ。これは今にはやり出しませう。紫「さうサ。わたしの所の本店なぞでも、人をつかはさる度毎に、いつでも買つて來いとおつしやるさうさ。何處でも評判がよいからはやつて來るのサ。小三「ほんに向島も、今ぢやア都になりましたネエ。紫「此の節はおまへ、※梅屋敷の七草が盛りだから、たいそう見物の人が出るヨ。それに※蓮華寺の大師様のお庭がよく出來たから、だん／＼此方も賑やかになるネ。小三「左樣でございますネエ。

○前厄　二十四歲。

○後生願ひ　佛に歸依して、偏へに、來世の安樂ならんことを願ふこと。

私も些と休みましたら、坊を連れて、梅屋敷の七草から、蓮華寺の大師様へお參り申しませう。今年は旦那も※前厄でございますから、お身のうへに何事もないやうに、金ばうの行末やわたくしの、後の世の助かるやうに、よく祈つて參りませう。ト ほろりと淚こぼすにぞ、紫雲もなんとやらあはれになり、紫「ほんにおまへもわたしに似て、※後生願ひだと見えるねえ。金ばうは退屈だらうから、三松と一緒に、お庭の池の緋鯉に、お菓子でもやつてお遊び。ト いはれて金之助はいそ〳〵よろこび、うばに手をひかれて庭におりたち、丁稚の三松を相手にして、池のほとりをめぐり歩き、緋鯉龜の子などおひまはし、餘念もなくぞ遊びゐる。

○罪障　往生の障りとなる罪業。

○僻事　理に中らぬ事。間違つた事。

○發明な　俗語で、さかしく、利口なのをいふ。

○菩提の爲　菩提は梵語 Bodhi の譯で、佛果を得て淨土に往生すること。「菩提の爲」とは、菩提を弔ふため、卽ち冥福を祈るためといふ意味。

○草葉の陰から　墓所の地下から。

小さん金五郎　假名文章娘節用　三編中の卷

第八回

その時紫雲は長羅宇の、煙管に多葉粉を吸ひつけて、小三に出せば手にとりながら、小三「ほんにお羨ましいはあなたのお身、うるさい世事の御苦勞もなく、朝夕こんな靜かなところに、憂世を捨てての樂なお暮し、わたくしもどうぞ三日なりとも、佛につかへて死にたいと、心に願つて居りますが、身の罪障が深いかして、それさへかなはぬ憂き苦勞、何の因果でござりませう。ト始終淚にむせびがち、紫雲も何となく胸せまり、紫「なんのわたしの身の上が、羨ましいとはおまへの僻事、世に在りてこそ人は花、金ばうといふ實を結んで、苦勞はあらうが又樂しみ、旦那も人におすぐれなすつた、發明なお方ゆゑ、行末はそれこそ安樂だわネ。面白い事もをかしい事も、樂しみも悲しみも、知らぬこの世の世捨人が、なんの本意であるものかネ。是れも定まる因緣と、思つて居てこそ又安樂、姉妹二人が同じやうに、浮世を捨てては亡き親たちの、菩提の爲と思はれようが、却つてそれでは不孝の罪、せめてお前は人なみに、世を過ぎてこそ兩親が、草葉の陰からお喜び、必ず〳〵わしが身を、うらやまないで金ばうや、旦那を朝暮大切に、うき苦勞をもしんばうして、末の榮えをたのしみに、時節を待つのが樂

○きなく／＼　氣苦しく。

○血の道　婦人病

○心のつかれ　心づかれ。氣疲れ。

○ひが目　みあやまり。みちがひ。

○思案に落ちない事　胸に落ちない事　合點が行かない事

○ろくな事　「ろく」は「まろく」のかいろくで滿足なことなどの意。

○膝とも云々　自分の膝でも相談相手になる。つまらないものにでも相談する。

○からす啼き　からすの啼聲で凶事が知れる。

○後生を願ふ　來世の安樂を願ふ。

○凡夫　佛語で、未だ佛教上の覺りに達せざる人をいふ。

の種、すこしのことをきなく／＼思つて、あんまり苦勞ばつかりおしだと、大わづらひにでもならうも知れず、氣をきりかへて私にも、苦勞をさせておくれでない。（トしんみのことば身にしみて、うれしさあまるかなしさの、）涙を袖に包みかね、袂をぬらし暫時は、詞さへ泣くばかりなり。紫雲はこれを案じわび、もしや金五郎が小三を見かぎり、お雪にこゝろを移せし故、胸を苦しめ氣をつかひて、このわづらひの出でしかと、（おもひすごしてひざすりよせ、）紫「おまへのふさぐを見るにつけ、やまひの根が知れないから、どうもわたしは案じられるよ。癪や血の道でふさぐのなら、案じる程の事もないが、何やらひどく氣をいため、心のつかれのわづらひかと、見たはひが目か知らないが、思案に落ちない事でもあつて、一人で心勞してゐると、ろくな事は考へ付かず、苦勞にくらうを增すやうな、つまらぬ事を考へ出すから、だん／＼病氣は重るとも、快氣方はすくないものさ。他人は格別親身のわたし、世を捨てし身と云ひながら、苦勞な事があるならば、お前の胸を隱さずに、はなして聞かせておくれなら、女の智慧の淺はかでも、そこは膝とも談合づく、へだてぬでこそ實の姉妹。からす啼きがわるいにつけ、夢見の惡いや何かにつけ、おまへの事が氣にかゝり、後生を願ふ妨げと、おもへど凡夫の悲しさに、浮世を捨ててもやつぱり苦勞、心の休まる間はないわネ。（ト誠をあらはす言葉の中に、なさけと涙をふくみたる、）姉の意見のありがたさに、小三は始終なみだにくれ、胸もはりさくばかりにて、顏もえあげず居たりしが、（やう／＼袖になみだをはらひ、）小三「眞實親身の妹と思召して下さればこそ、お案

○段々のおことば　それからそれへと話される御言葉。諄々ときかせて下さる御言葉。
○因果者　不幸な人。因果は佛教の教へで、善を行へば善き報あり、惡を行へば惡しき報ありといふこと。こゝではわるい意味で、ふしあはせ、不運
○附會しらぬ　世間との交際を知らぬ、世間とは沒交渉な。
○日陰に咲きし徒花　日陰者の境遇。妾の身の上といふ意味
○撫子　我が子のこと。
○蟲氣　子供の身體が弱つて神經の衰弱すること。
○折檻　過ちを懲さんため責めさいなむこと。

じなすつての※段々のおことば、うれしいにつけ悲しいにつけ、なんであなたを隔てませう。この世に杖とも柱とも、力に思ふはあなたおひとり、浮世に人は澤山あれど、考へて見るとおまへさんや、わたくし程な※因果者は、あんまり外にはありますまい。生まれ落ちると親にはなれ、姉妹二人揃ひも揃つて、故郷をよそにはる〴〵と、知らぬ東へさ迷ひ來て、うき川竹の流れに沈み、苦勞にくらうを爲ぬいたあげくに、あなたは行末たよりのお人に、早くお別れなすつた故、お若い身そらに世を捨てて、※附會しらぬ佛の道、それにひきかへ私は、恩と情を捨てかねし、浮世の義理にせめられて、※日陰に咲きし徒花の、散りてゆく身はいとはねど、まだ※撫子も芽生えにて、そだてあげぬが一ツの氣がかり。紫「その撫子が氣がかりとはエ。ト とがめられて こゝろづき、小三「サア、その氣がかりとは金ばうが事、とかく蟲持で病身ゆゑ、明けても暮れても苦勞になり、どうぞ丈夫に育てたいと、思ひましても子供の事、何が食べたい彼が食べたいと、それはそれは日がな一日、見る程の物たべたがり、ねだり事も三度に一度は、食べ過ぎぬやうに氣をつけて、騙し賺せばぐわんぜもなく、いやいやをして泣きますから、ツイ可愛さにひかされて、灸でおどすより早手廻しと、ねだるお菓子をあてがひますと、又食べすぎてはお腹が痛い、痛い〳〵の食傷の度毎に、※蟲氣でいつもちよつとは直らず。一體ひよわい生まれだのに、わたくしの乳で育てぬから、猶病身になりますると、思へば不便がいやまして、よその丈夫の子供のやうに、※折檻

もしず、つよくもしからず、わんぱく育ちが増長して。※手にのらぬ程のいたづら者にな
りましたせゐかして、ちとづつ丈夫に育つやうだと思へば、旦那は又行儀が悪いの、育て
がらが悪いからのと、あの子の身の爲を思つて、小言をおつしやるも無理ではないが、まだ
やう〳〵丸三歳に、なるかならぬの※ふところ育ち、生まれ落ちからちやほや言つて、餘り
大事に爲すぎた故、わがまゝ氣まゝに育つ筈、今更急にせつかんしたり、泣く時あたまをは
つたりして、嚴しくしたらわが儘も、すこしづつは直りませうが、唯でさへひよわい子が、
それこそ※驚風の蟲でも引出し、ほんたうの病身になりますだらう。可愛いいにつけ不便に
つけ、苦勞のやすまる隙もなく、氣で氣をつかひます故に、今の病氣もおこりましたの。
是れもわたくしの氣が小さいから、せずとよい苦勞を餘計にいたして、壽命をちゞめます
も心から、とても長生はできませんが思へばまことに世の中ほど、うるさいものはござり
ません。それゆゑにこそあなたのお身が、お羨ましうございます。ト涙ながらの※かこち言、聞くも涙の目をしばたゝき、寒がる胸をなでおろしつゝ、紫一ほんにさう言へばさうでもあらう、けれどもそれはほんの※一隨で、はや
したとへが世の中に、子寶とさへ言ふものを、大切な金錢よりも、※子ほどまさつた寶はな
いと、たれしも知つた世の諺、子を持つた身に苦勞の絶えぬは、お前ばかりではあるま
いし、みんな世間のならひだわネ。高貴でも下賤でも、子にひかさるゝは親の常、マア見
るかげもない橋の上へ、むしろ蒲團に世をおくる、食ふや食はずの乞食でさへ、子を大切

○手にのらぬ　手にをへぬと同じ。もてあますこと。
○ふところ育ち　懐へ入れて外の風にもあてない様に育てる、甚だ大事にして育てること。
○驚風の蟲　ひきつけること。
○かこち言　愚痴。我身の不幸をかこつこと。
○一隨　一筋に思ふこと。
○子ほどまさつた云々　「萬葉集」巻五山上憶良「しろ金も黄金も玉も何せむにまされる寶子にしかめやも」

○方圖　境界。限り。

○身すぎ世すぎ　なりはひ、よわたり。何れも生活の意。

○機げん氣づま　前出。（七八七頁參照）

に可愛がり、寐る目も寐ずに育てあげても、出世の出來ぬ乞食は乞食、上を見れば方圖がないから、貧しいものを思ひやれば、さむい目もせず不自由なく、暮してゐるは安樂さネ。慾に限りのない世の中ゆゑ、十分なことも不足に思ふは、人情だから仕方もないが、おまへなんぞも日かげの身で、儘にならぬを苦におしだが、滿つれば缺けるといふ通り、十分すぎた事はないもの。人のほしがる金銀が、有り餘るほどの大家には、子が欲しがる程子が出來ず、貧乏人の子澤山を、うらやむといふことだから、金錢づくにも換へられぬは、金坊といふアノ大事の子寶、よし病身の生まれつきで、人の知らない苦勞をするも、親となり子となるほどの、因縁づくだとあきらめて、面倒を見て育てなくつては、親の役目がすまぬといふもの。サアそれだから少しのことを、くよ／＼案じて煩つては、おまへの身にも壽命の毒、彼の子の爲にもなるまいから、氣を引立てて、煩はぬ樣に、身を厭ふのが肝心さ。世に樂しみも何にもない、わたしが身をうらやますと、金ばうの行末を神佛に祈つて、成人させるがおまへの手柄、女の道の缺けぬといふもの。しかし子もちの身でありながら、旦那の爲の手助けに、身すぎ世すぎといふものの、人の機げん氣づまを取る、今の身での座しき活業は、アヽさぞいやだらうつらからうと、わたしがむかしの身を思つても、おまへの心が悟られて、もうもう胸がはりさくやう、何かにつけて苦が絶えぬから、ふさいで病氣のおこる筈。とはいふもののわたしと違ひ、おまへは身ひとつといふではな

○願　神佛への祈願。

○入相　日が山の端に入る頃。たそがれ。

し、幾度もくどく言ふやうなれど、あんまり苦勞に苦勞をかさねて、今のわづらひが大病になると、もしものことがありもしまいが、さういふ時にはわたしはもとより、金ばうも便りがなくなるから、どうぞこの末は願でもかけて、煩はぬやうに爲ておくれ。トさすが姉だけ理をわけて、妹を憐むしんせつは、かくぞありたきものぞかし。　小三「その御意見につきまして、まをすやうではございますが、人の命はけふが今日、明日があすとて定まらぬ、世のならひゆゑわたくしが、けふが日もしもの事があらうや、知れぬ生身のことなれば、逆さまながら御廻向を、受けますこともあらうも知れず、達者で居つてもなき後でも、親身はあなたおひとりゆゑ、何彼につけて金ばうが事を、どうぞおねがひ申しますから、わるいことはどの樣にも、お叱りなすつて下さいまし。ト子にまよふ故ひたすらに、たのむ言葉ぞあはれなり。　紫「なんだエ、モウそんな哀れつぽいことはいつておくれでない。姉となり妹と生まれて來たからは、力になつたりなられたりするのは、そりやア言はないでも知れたこと。もう／＼そんな愚癡はやめて、金坊をつれて梅屋敷へでも行つて、ちつと氣ばらしをしてお出で。トなぐさめる折から金之助も、庭のあそびにあきたるにや、乳母にいだかれ座敷へ來れば、紫雲は抱きつあやしつして、わが子の如くに可愛み、是れよりみなみなもろともに、梅別莊へゆかんとて、内には下女と下男を、殘して小三と紫雲は連立、花屋敷より蓮華寺の、大師へ詣でに出で行きしが、程なくして立ち歸り、紫雲は種々の美味をとゝのへ、みな／＼に夕餉を進むる、馳走に時を移しければ、秋の日のはや西にかたぶき、入

○手重　めんだう。

相近くなりしかば、小三は家にかへらんと、きせるなどしまひながら、小三「ヤレヤレ今日は久しぶりで、つひになくゆるゆると、身の上ばなしに鬱を晴らし、まことに保養いたしました。日の暮れるにも氣がつかず、盡きぬはなしをくりかへして、大きに遲くなりました。乳母おまへも支度がよいなら、モウそろ〳〵歸らうぢやアないか。紫「マアおまへ、よいわネ。それに今日は遲くもなるし、内にさしたる用がなくば、またかういふよい首尾はないから、今夜ひと晩泊つてお出でな。病氣がよくなつて、座敷へ出るやうになると、又出るといふが手重になつて、いつ來られるか知れないから、寐物がたりにゆつくりと、身の上ばなしの跡をついで、ふさぐ胸をはらしてお出でよ。小三「私もたま〳〵ではございますし、盡きぬお名殘だからどうぞして、泊つて參りたいと存じますが、今夜わたくしが留守のあとへ、ひよつと旦那がお出でなさると惡うございますから、どうも歸らずばなりますまい。紫「ほんにさうさねえ、旦那の御機げんをそこねても惡し、ひと晩でも儘にならないことだねえ。そんなら舟でお歸りな、しかし搖れて惡からうから、駕籠の方がよからうか。小三「ナニ、それにも及びません。ずゐぶん歩いてまゐられますから。紫「それでもお前氣色が惡いに、往還ではくたびれるヨ。小三「いゝエ、却つてすこしづつ頭痛のいたす時は、歩くはうが勝手でございます。紫「さうかネ、そんなら金ばうばかりも泊めてお出でな。のう金坊、おまへは、乳母と爰へおとまりよ。トいだきあぐればうれしさうに、金「アイ、坊、をばちやんとこへ、

○かへるそら　かへらうとの心。
○あんど　安堵。安心。
○おくめん　臆面。
○あやかり者　仕合せもの
○後生樂　前出八〇六頁。

寝ちて、お池の龜ン子つやまいゆよ。ト　おなかめづらしき子心に、※かへるそらのなかりしかば、小三も心に※あんどして、小三「オヤ、そんなら坊はおとなしくして、おとまりヨ。ばゝアのいふことをよくきいて、だゝを言つてすねるではないヨ。アノ内に居るやうにおこるとの、をばさんが、泊めて下さらないヨ。あなたが可愛がつてくださるから、直に泊らうと申シまして、※おくめんが無くつてこまります。紫「それだからまことに可愛いのサ。人見しりをする子供は、愛想をしても泣き出すから、うつかり口もきけないが、この子のやうなにこやかな、可愛らしい子はありません。小三「坊はまことに仕合者だよ。こんな野廣いところへ泊めていたゞいて、おつかアより※あやかり者だの、そしてアノ坊や、おつかアがゐなくなつても、たづねて泣くのではないよ。泣くとの、直灸だよ。をばさんの所には灸がたんとありますから、おとウなしくしてお出でよ。金「アイ、坊おとなチくすゆが、おつかちやんどこイお出でだ。小三「おつかさんはの、アノ内が遠ウいから、歸らないとおとつさんに叱られるよ。ト　いひつゝ金之助をいだきあげ、かはいいこの子のかほ見るも、是れがなごりか悲しやと、いはねど胸にせきあげて、顔を見つめる目に涙、しばし言葉もなかりしが、疑はれんかと心づき、泣く目をかくし笑ひがほ、小三「ほんに子供といふものは、何を云つても無我夢中、※後生樂なことでありますねえ。ト　おもひきつて下へおろし、帯び直す顔つきも、常にかはりし様子ゆゑ、紫雲も乳母も何となく、小三の身のうへ案じられ、かへしがたさに顔見あはせ、紫「どうもわたしは今ッから、お前を獨りかへすのが、心にかゝつて落ち付かぬから、

今夜は泊つて明日の朝、はやく歸つたらよささうなものだ。のうばゝア。うば「さやうさ。旦那だとて一晩ばかりの事、譯をお話し申しましたら、お腹立もありますまいから、是非今夜はお泊んなさいましな。ト とめる言葉も聞きいれず、 小三「さうだけれど、けふこなたへ來ることを、旦那におはなし申さなんだから、泊つてはどうも濟まないよ。それに是非、おはなし申さねばならぬこともあるから、三松どんでもお借り申して、ちつともはやく歸らうよ。

うば「さやうならおばうさんも、お歸りがようございます。小僧どんばかりでは、おかへし申されません。わたくしもお供いたして、鎚ン子は又明日、見に參りませう、ねエお坊さん。金「フウ、ばゝア、坊歸ゆの、厭々だよ。鎚ン子の所へ泊ようヨウ。うば「あゝだもの、どうも困りきつた事だ。どう致したら可からうやら。紫「そんなら斯うしませう。坊と乳母はお泊りと極めて、おつかさんには三松に久助を附けて上げようよ。それでは案じる事もあるまい。うば「然樣ならどうぞさうなすつて下さいまし。ヤレ／＼それで落ちつきました。 みな／＼あんどする故に、 小三は紫雲と金之助に、名殘のことばが置土産と、なみだを袖にかくしつゝ、

小三「さやうならあなた御機げんよう。御厄介でもございませうが、金ばうが事をお願ひ申シます。ばゝア、そんならたのんだよ。金ばうヤ、おつかアはモウ行くから、おとなしくして機げんよくお遊びヨ。あばよ／＼だよ、おさらばよ。ト 殘るかたなくつど／＼に、いとまごひして立ち出づれど、 輪廻の絆にひかされて、盡きぬ名殘のやるせなく、紫雲も乳母ともろともに、金之助の手をひ

○つど／＼に　一つ／＼に。それぞれその樣に。

○輪廻　輪廻は梵語の Saṃsāra. 衆生が三界・六道の生死を重ねること。車輪の轉じて窮りなきに似てゐるところからかく名づける。

○尊き法の道　佛の道、佛法をいふ。
○入相　入相の鐘、即ちたそがれに撞く鐘の聲をいふ。
○夜詰の番　夜間の詰番、宿直。
○案じわぶ　心配する。きづかふ。

き門口まで、別れを惜み送る身より、送らるゝ身はこの世から、くらき冥途の旅の空へ、消えゆくものと悟りしも、さすがは尊き法の道を、受けたる身ゆゑ御佛の、親身の姉に導きを、させて給はるものにやと、ふり歸りては目に涙、哭音を忍ぶ親鳥の、雛にわかるゝ思ひにて、氣も絶え〴〵になる鐘の、無常の風にひゞき來て、耳をつらぬく入相に、おどろかされて氣を取りなほし、心弱くてかなはじと、別れてこそは歸りける。さる程に金五郎は、今朝小三に別るゝ時、常にかはりて名殘がをしまれ、歸る心のつらかりしが、主人持身の儘ならねば、言葉を契りて別れしかど、その夜は夜詰の番にあたりて、出づる事さへならざるゆゑ、心ならずもとやかくと、案じわびてもせんかたなく、明くる夜遲しと待ちかねて、御殿より内へ歸りても、胸さわぎの常ならねば、食事さへせず著物を著かへ、青柳橋まで急ぎ來る、足も空に飛ぶが如く、小三の許へ來りしは、やう〳〵日の出る頃なるべし。まだ入口の戸も開けねば、さては何事もなかりきと、少しは心も落ち付きながら、戸口をとん〳〵と打叩き、金「オイお竹、起きねえか。モウ日があたつてゐるぜ。お竹〳〵。ト うち叩かれて下女はおどろき、お竹「ハイ〳〵、旦那さまでございますか。オヤ〳〵、おほきに寐すぐしました。ト かけ金はづして戸を開くれば、金五郎は内へとびこんで、金「坊主はどうした、まだ起きねえか。小三の病氣が惡かァなかつたか。お竹「ハイ、昨日は大きにおこゝろよいとつて、お坊さんをお連れなすつて、向島へいらつしやいましたが、お坊さんは、乳母どんと御一所に御逗留で、お獨りあちらの男衆に、送られて昨夜お歸りなさいました。

○尻居　尻もちをつく。
○白無垢　裏から下着まで、表裏とも白無地の品で作った衣服。
○自害　自らそこなふこと。己れを傷つけて死ぬること。自刃。
○こと切れる　命が絶える。死ぬ。
○辨きかねて　辨別しかねて。判つきりしがたくて。

金「ナニ、きのふ金ばうを連れて、向島へ行つたか。よく歸つて來たのう。それぢやアくたびれて、まだ起きねえのだらう。トいひつゝ小三のねやへ行き、からかみあけてひとめ見るより、「ヤヽヽヽ。トびつくりきやうてん、尻居に倒る丶、物音に、下女のお竹も何事にやと、かけ來りて樣子を見れば、小三は白無垢を身にまとひ、いつの間にやら自害なしけん、朱に染みて死したる體に、同じくわつと駭きて、倒れてわな／＼ふるへ居る。金五郎は狂氣のごとく、金「小三、ナゼ死んだ。どうしたのだ。氣が狂つたか。コレ小三。小三々々。トだきおこし、呼べどこたへもこと切れて、顏の色つやあをざめて、蟲の息さへなきゆゑに、さすが男の心もみだれ、泣聲くもらせなみだとともに、金「コレお竹、てめえが内に一所に寢ながら、小三が斯ういふ樣子があつたら、ちつとは知れさうなものだのに、知らずに殺してしまつたか、情ねえ事をしてくれた。トぐちをいふのもことわりなり。この時粂川の若い者、清介佐介もかけ來りて、驚くこと大方ならず、何はともあれ向島へ知らせんとて、佐介を紫雲のところへ走らせければ、紫雲も乳母も仰天して、金之助を連れ駕籠にうちのり、飛ぶが如くに馳せ來りて、小三のすがたを見るよりも、あまりの事の悲しさに、夢か實か辨きかねて、涙にむせぶばかりなり。紫雲は顏に袖おしあて、聲くもらせつゝ金五郎に、小三がきのふの樣子を語り、金之助の行末までを、とにかく憑みて別れ路に、名殘の涙の書きざりしも、斯ういふ覺悟をきはめしゆゑか、情なや悲しやと、歎くかたへに書置の、ありしを乳母はとりあげて、うば「コレマア御覽じまし、遺書までこんなになすつて、お果てなさるはよくよくな事。とは申し

○あんまり聞えぬおどうよく　あんまりわからぬ非道さだ。

○さかしき　かしこき。

○水の泡　水泡に歸した。

○ゑから　回向。死者の冥福を祈ること。

ながら、いとし盛りの、お坊さんをこの世へ捨てゝ、あとのなげきを思召さぬは、あんまり聞えぬおどうよく、おせまい心でござりました。ト しじらなみだに、咽び居る。金五郎は男子ながら、共に心も消えぐ〳〵に、歎きに沈みうつとりと、夢現ともわかぬまで、惜しさやるかたなかりしが、流石さかしき生まれ故、武士の身でかへらぬ事を、くりかへして歎くこそ、人の思はくも面目なしと、やう〳〵思ひあきらめて、かの遺書を手にとりあげ、ひらきて見ればこま〴〵と、わが身の爲と家のためを、思ひつめての覺悟の文體、讀めばよむほど後悔の、身を切らるゝより切なさに、あきらめてもまた涙ぐむ、ト 目をしばたゝき胸をなで、 金一老少不定は世のならひ、あすをも知れぬ身の上だと、きのふ小三が言つたのが、思へば紀念の言となつたか。浮世の義理とおれがためを、思ひなやみて先だつ不便さ。亡き跡の事まで苦勞にして、意見まじりのこの書置、よむ身にならうとは氣がつかなんだ。いつか世に出し人なみの、樂な暮しをさせてえと、思つた事も水の泡、子供の時からけふが日まで、可愛や一日樂もせず、日影の身にて苦勞をし死。死んだ苦勞の原はといへば、おれが片時内に居ぬゆゑ、親に不孝といはせじと、その身を捨てしこゝろねは、眞實過て恨めしい。たとへ一人で死んだとて、わが手にかけしも同じ事、死なずとしやうはあらうのに、短氣をしたからみんなの歎き。呼なんだか夢のやうで、かへらぬ事だが不便でならねえ。南無あみだ佛南無あみだ佛。ト ゑからするかほ金之助は、つく〴〵と見てふしんに思ひ、 一おとつちやん、ナニ泣くのだえ。おつかち

○約束　前世からの約束事。
○涙に疊も浮くばかり　誇張して云つたのである。
○野邊の送り　葬送。はうむり。
○日がら立ちて　日數が立つて。

やん佛ちやんになつたかエ。乳母、なぜ泣くよウ。をばちやんもお泣きかエ。坊、おつかちやんこはいよウ。ト共になきだすあどけなさ、紫雲もわつと泣き出し、紫「ほんにこの子のかしこい事、誰教へねどおつかアが、佛さんになつたかとは情ない。こんな悲しいことを見るのを、蟲が知らせたせゐかして、きのふ歸すが氣にかゝり、乳母と二人でとゞめたが、あのとき歸さずばなんのマア、あつたら命を捨てさせよう。歸すも約束歸る身も、みんな定まる因縁ながら、薄命な妹が身の果てや。トくり返しては さめ〴〵と、みな〳〵歎きかなしみて、涙に疊も浮くばかり、哀れと云ふもおろかなり。斯くては果てじなき人の、爲にならじと金五郎は、男心を取り直して、紫雲をいさめ乳母をはげまし、野邊の送りもねんごろに、七日〳〵の訪ひとむらひも、手厚く法會なしにける。かかりし程に金五郎は、をさなき金之助が母に別れて、便りなき身となりしを案じ、かねて小三が存生より、紫雲の許へ預けくれよと、頼みし言葉もあるゆゑに、日がら立ちて金之助を、乳母もろともに向島へあづけ、青柳橋の家は取りかたづけ、殘るかたなく心を配り、をり〳〵紫雲の庵を訪らひ、金之助を愛しながらも、只小三の事忘れかね、家に在る時は部屋にのみ籠り、お寺にだにこれ等の始末を、祕しかくして語る事なく、氣のひき立たぬも理なり。白翁はじめ家内の者も、金五郎がこの頃にては、急にうつて變りし如く、夜あそびにも出でざるゆゑ、さては身持の直りしかと、喜ぶもののいつとても、何か心に案じ顏、屈託らしくふさぐのを、見るにつけ又白翁は、老いの身の

思ひ過しに、倘金五郎が短氣から、小三に怪我をさせしも知れず、それゆゑにこそふさぐのか、小三の身の上おぼつかなし、いかなることかたづねゆき、樣子を聞きて安堵せんと、ひとりひそかに兩國の、小三が家へぞいたりける。

○時雨月　陰暦十月の異稱。
○草の戸　いぶせき住居。
○音信ふは水鶏にあらぬ云云　水鶏は水鳥の名で、鳴聲が戸を叩くやうであるので「音信ふ」の縁語として持つて來た。
○聞きわけの泣いては　「泣く」は「無し」にかけてある。
○栴檀はふた葉　栴檀は二葉より芳し。栴檀は、佛經にて南天竺に生ずる香木の名とする。（觀佛三昧經）に「栴檀根芽、漸漸生長、纔欲成樹、香氣昌盛」とあり。英雄偉人は、幼時より既に凡人に勝れたる所のあるをいふ。
○いたいけざかり　いたいたしい、あはれなる年配。
○後生のさはり　極樂往生の障り。來世の安樂に入るのに障りとなる。

小さん
金五郎　假名文章娘節用　三編下の巻

第九回

朝夕に木々の落葉を雨と見つ、冬をば告ぐる寂しさに、心も空も時雨月、訪ふ人もなき草の戸へ、友さそひ來て音信ふは、水鶏にあらぬ小雀の、ちゝよはゝよと啼く聲を、聞くにつけても哀れ添ふ、紫雲は小三の亡き後を、弔ふひまに金之助を、慰めてもまだ聞きわけの、泣いては母を尋ぬるゆゑ、不便の増して可愛さに、涙のかわくひまもなし。母におくれし金之助は、紫雲や金五郎ともろともに、七日々々の寺まゐりに、小三のはかへ花をたむけ、念佛となへてをがむをば、見やう見まねの子心に、内にかへりて遊ぶにも、さすが血筋といひながら、菊の花など折りて來つゝ、庭に立てたる石どうろうへ、たむけて小さき手をあはせ、金「なんまい／＼、のゝちやんなんまい／＼、ばゝ、アこゝへ來て、なんまい／＼仕なよ。をばちやんもお出でよウ。トわけわからねどをがむをば見るにつけ聞くにつけ、乳母も紫雲も倶なみだ。金之助をいだきあげ、紫「これ金ばうや、またそんな事をして、をばさんを泣かせるのかエ。アヽ栴檀はふた葉とやら、やがて成人したならば、孝行者にならうのに、いたいけざかりのこの子を捨てて、死んだ小三が心の中、マアどの様につらかつたらう。思ひやるほど後生のさはり。アヽ南無あみだ佛あみだ佛。トつまぐる數珠もしめりがち、うばもなみだの目をぬぐひ、うば「とても返らぬ繰言、と思ひ直し氣を取りなほしましても、お可愛さうな事を致しました。トかた

○ぐわんぜもない　がんぜもないの訛。聞き分けのない、是非善惡の分別のない。

○座敷活業　藝者などのやうに客の座敷へ招かれて遊藝などを以て座興を助ける商賣。

○しをり戸　木の枝を折りかけて作つた粗末な戸をいふ。

るもはなすもなみだゆゑ、金之助は退屈して、　金「ばばア、伯母ちやんとこモウいやだヨ。面白くないかヤ、家行かうよウ。おつかちやんへ行かうよウ。うば「又そんな事を仰しやるかよ、お聞きわけの惡い。こゝがお坊さんのお宿でございますから、家へ行かう〳〵とおつしやるものではございません。金「フウ、坊の家爰でないよ。おつかちやんへ行かうよう。をばちやん、ばばアいけないヨ。坊、家へ歸やせないよ。紫「オヽさうかエ〳〵、惡いばゝアだぞ。アヽしかし騙しすかしても、まだ※ぐわんぜもない子供だから、家へ歸らうといふも無理ではない。小三が座敷活業で、なんぼ傍には居ないがちでも、三日と離れた事もないのに、やがてもう五十日餘。にぎやかな所で育つた子が、こんなさむしい所へ來て、緋鯉や鮒の子が相手だから、どうでも遊びにあきるはず。コレ金坊ヤ、お前は利口者だから、をばさんの言ふことをよくお聞き。アノ、おまへのおつかさんはの、それは〳〵遠ウい所へお出でだから、モウうちには誰エもお出ではないよ。それだから家へ行かう〳〵といはずに、をばさんの所にいつまでも居るのだよ。金「坊のおつかちやん死んだから、お寺へ行つちまつたかエ。紫「アイ、さうサ。金「そいだから坊の家無ち〳〵かエ。紫「さうサ、よく分るぞ。それだからこゝが坊やの家だよ。トうばと二人で慰むる。をりから下女がかけ來り、「モシあなたえ、どこのか御隱居樣が、お目にかゝりたいといつて、入らつしやいましたヨ。紫「さうかエ、そんならどなただか、マア庭口からお通し申しな。下女「ハイハイ。ト立つて庭口へまはり、※しをり戸開きこなたへと通せば枝をつきつゝ

○さし合ひ　差支へに同じ。さしさはりある。

○人の思はく　人の思ふこと。他人の想像。

○糠に釘、豆腐にかすがひ　糠に釘、豆腐にかすがひを打付けるやうに、如何に意見するともその甲斐なきことをいつたものである。

○合はせ砥　一種の砥石。質硬く、蛋黄色のもので、研物の仕上げに用ひる。

入り来るは、金五郎がぢゝい白翁なり。白「ヤレヤレよい御住居ぢや。ママ御免くだされ。ト座しきへ通り座になほりて一「さてハヤわしは金五郎めが祖父でござるが、たしかこなさんは、小三どのの姉子といふことゆゑ、聞きたいこと、話したいこと、山々あれば孫めにかくれ、わざ〳〵尋ねて参つたが、※おさし合ひなお客はござらぬか。トいふに紫雲もよろこびながら、なにかやうすもわからねば、唯いんぎんに手をつかへ、一「これは〳〵、どなたさまかと存じましたら、金五郎さんのお祖父さん、ようマアお出で遊ばした。何にも御遠慮なものはをりませんから、何なりともお心おきなく、お話しなさるが宜しうござります。ト優しき言葉に白翁は、老いの目やにをふきながら、紫雲の顔をうちながめ、白「ヤレ〳〵、姉妹とは言ひながら、小三どのに生きうつし。おまへの顔を見るにつけ、涙がモウ、さきだつやうぢや。扨何から申さうやら、心のうちが取込んで、前後するのも老の癖、退屈ながら一通り、話すを聞いて下されや。その仔細といふは、しらしやつた通り、不思議な縁で金五郎と、小三どのと深うなり、たがひに思ひおもはれればこそ、深切づくが苦勞のたね、大概に惚合つてゐたならば、※人の思はく世の義理にも、かゝはらずに樂しみだらうに、あんまり可愛がりいとしほがられたから、孫めもその情にまようて、うちを外の夜泊りばかり。一ツづつ年はとれども、放埒が直らぬゆゑ、とゞのつまりが案じられて、意見はしても※糠に釘、豆腐にかすがひ、きかぬが儘よと、捨てて置いては爲にならず。刃物も折々磨がなければ、錆付いて切れぬ道理。その錆を落すには、普通の世事の※合はせ砥では、とても切れる事ではないと、推量

○むごい　無慈悲な、薄情な。

○利發　利口。怜悧。

○愛想づかし　他に對して愛情を絶ち切つてしまふこと、つれなく扱ふこと。

をして見る時は、わしが心の荒砥にかけても、切らねばならぬ浮世の義理。お雪といふ孫娘と、祝言までさせたから、とても添はれぬ惡緣と、思うたゆゑに孫めにかくれ、アヽいつでかあつたげな、小三どのの家へ尋ねゆき、初めて逢うたその席で、よろこばせもせず孫めが身の上、かう〳〵いふ譯あれば、長うとは言はぬほどに、いやでもあらうが暫時が間、どうぞ緣切つて下されと、無粹なむごい賴みをば、聞いてなみだにむせながら、義理と恩とを聞きわけて、ふつつり思ひ切りましよと、いはれた時の私が胸、嬉しさ餘つて不便なは、小三どのの心の中、さぞつらからう悲しかろと、おし量られて共なみだ。アヽ浮世が儘になるならば、容貌といひ利發といひ、やさしい心の生まれつき、孫めと夫婦にしてやつたら、さぞマアたがひに嬉しがろと、思つたばかりでそれもかなはず、是非も泣く泣く歸つたが、それから後は金五郎めも、そは〳〵する樣子もなく、家にばつかり居る故に、偖は心が直りしかと、家内の者がよろこんで、機嫌をとるほど鬱ぎ顏、じれては部屋にとぢこもり、何か屈託なやうすを見ては、又案じるが親の常、兩親の者もお雪めも、同じやうに苦勞がれば、私もやつぱり氣にかゝり、考へて見るほど合點がゆかず、もし金五郎が若氣の癖で、愛想づかしの腹立ちまぎれ、疵でも付て騷動を、出來したゆゑにふさぐかと、思つて見れば片時も、案じに胸がやすまらず、わざ〳〵青柳橋へ尋ね行きて、見れば思ひもつかぬ人の、栖家となりて勝手口も、變つた事で引越せしかと、あたりの人に尋ねしに、

小三どのの知る人にや、子までなしたる身ながらも、男の爲と義理づくで、身を捨てられたあつぱれ貞女、近所の者までその當座は、皆惜しがつて泣きましたと、涙ながらの物語、聞いて突胸のわしがびつくり、悲しさ不便さやるせなく、その捨てられし子の行先、聞けば親身の姉御のところへ、引取られしといふことなれば、悔みもいひたしやうすも聞きたさ、孫めが顏も、イヤ孫ではない曾孫であつた、見ねば心も落ちつかぬゆゑ、駕籠をとばしてやう〳〵來ました。子まである身としつたなら、何のむごく緣切らせう。なま中包み隱されたが、今となつては却つて恨み、年に不足のないわしが、長命せずばこの樣に、悲しい涙はこぼさぬもの、なんの因果で生き延びたか、思へば年が恨めしい。ト老いのなみだをくり返し、愚癡になるのも道理なり。紫雲もあらまし聞き取るうち、共に涙を催して、紫「ほんに妹が薄命は、約束事とは申しながら、子までなしても日かげ妻、一日半時人なみの、息をもつかぬ苦勞を仕死。わたくしとても親身といふは、天にも地にも小三一人、力におもふ甲斐もなく、杖にはなれし今の悲しみ、忘れ紀念の金之助で、少しは憂さも晴れますが、まだマアまことにぐわんぜもなく、明ても暮れても母をしたひ、泣くにつけ、すねるにつけ、達者で居たならどうかうと、思ひ出しては同じやうに、泣いて涙のかわく間は、ほんに一日もござりません。白翁「イヤモウ、そりやいはるゝまでもない。お前の胸を推量すると、私が胸もはりさくやうで、矢も楯もたまるこつちやない。ママ、それは左もあれ、孫めが悴はどこ

○あつぱれ　あはれの急呼。讚嘆するときに發する聲。

○突胸　むね。こころ。ふところ。「突胸をつく」といへば、びつくりする、驚くといふ意味。こゝは話をきいて思ひ當ることもあつてびつくりしたとの義。

○やるせなく　心のやりどなし。思ひをはらすべきすべなし。

○日かげ妻　妻でありながら人目を避けようとするもの、即ち妾のこと。

○是れはしたり　「是はしまつたり」といふ意味で、しくじつた際に發する聲。これは何としたことか。

○てえてえ　子供が物などを乞ふときに手を重ねること。たい〳〵。

○いたいけ　小兒などのいたく〳〵しくあはれむべき樣。

にをるか、ちよつと逢ひたい逢はせてくだされ。紫「ほんにさやうでございましたネ。金坊は奥においでかエ。乳母一寸連れておいで。トよびたてられて金之助は、うばよりさきへかけ來り、金「をばちやん、坊、おとつちやんお出でだとおもつたヤ、餘所のおぢいちやんだネ。紫「※是れはしたり、よそのお祖父さんではないヨ。是れは坊ヤのお祖父さんだから、手をついてお辭儀をおしよ。白「ヤレ〳〵、おとなしいよい子ぢや。ドレ〳〵、祖父の側へ來やれ。オヽよくいふことをきくぞ。そんならお土産をやりましよ。サア〳〵手を出しやれ。オヽ※てえてえがよく出來たぞ。ヤレ〳〵可愛いい能い子ぢやナア。トやうかん一とさを出しやれば、いたゞいてうれしさうに、金「をばちやん、コレお菓子、お祖父ちやんお呉だ。有難うごじやイまちゆ。紫「オヤ、よいお菓子をおいたゞきだの。よく忘れずにお禮を申たぞ。よいお祖父さんを持つて、坊は仕合せものだぞ。白「ハヽヽヽ、イヤ、この坊ヤを見るにつけ、はじめて逢つたわしでさへ、可愛くつてならぬもの、いくらしつこく意見をしても、金五郎めが聞居らぬも道理かエ。まして小三どのは女の事、このマア※いたいけな子を置いて、飽きもあかれもせぬ中で、男のためと身を捨てられたは、貞女ともあつぱれとも、賞ても是が稱めつくされうか。しかし親身のこなさんが、身に取てはこの爺を、鬼とも蛇とも惡魔とも、さぞマアにくいと思はつしやろガ、そのいひ譯ではなけれども、この子を内へ引取つて、晴れて金五郎が悴と披露し、小三どのの亡跡も、ねんごろに弔はせましよ。せめては夫れをなぐさめに、思ひあき

○過世の因緣　前世からの因緣。因緣は佛語で、物事の成立つための卽ち因と、之れを發生せしむる力卽ち緣とによつて定められたる生滅の關係をいふ。

○二世をちぎりて　二世は佛家の語で、現世と來世とをいふ。我が愛する人と現世から來世にかけて離れざらんことを祈るを二世の願「ぐわん」といふ。それから夫婦の契をすることを二世を契るといふのである。

○かんるゐ　感涙。いたく感じて出る涙。

らめて下され。トなみだふき／＼いひければ、紫雲も嬉しさ限りなく、涙のとめどもなき顏あげて、「だん／＼厚い思召し、何とてお恨み申ませう。みんな※過世の因緣ゆゑ、どうもしかたもござりません。それにつけても姉妹が、身の上のあらましを、おはなし申すもお恥かしいが、わたくしどもが生立は、かやう／＼でござります。ト兄弟二人母なき故、小三が身は生まれ落ちより、文之丞に養育せられ、わが身も共になさけにて、親にかねをさづけられし、その惠みにて里に行きしが、早く父にも死に別れ、里親に騙されて、うき川竹に沈みし事、小三も金五郎と共に育ち、互に末を契りしに、金五郎は本家の養子となれば、小三は便りなき身をかこち、心狂ひて鴨川へ、身を沈めしがふしぎにたすかり、惡者の手にわたりて、つひに同じ花街へ賣られ、唄妓となりてくらすうち、緣ありて金五郎にめぐり逢ひしより、※二世をちぎりてふかくなり、つひに子どもの出來しゆゑ、身請をされて圍はれし事、又その身も同じころに、さる人に請出され、この別莊に養はれしが、便りの人に早くわかれて、頻に佛門の志願おこり、髮を剪り尼となりつゝ、世をのがれてくらすうち、妹が身の薄命から、浮世の義理にせばめられ、添事ならぬを覺悟して、心づよくも身を果せしは、みな男の爲を思ひ、操を立てぬくこゝろざし、妹ながらもあつぱれ貞女、只一すぢの不量見と、おぼしめさずに心の中、推量してやつてくださいまし。トいちぶしじうをつまびらかに、かたれば白翁も※かんるゐをながし、白「さてさて姉妹揃ひもそろひし、貞婦といはうか、義婦といはうか。殊に小三は幼いときから、金五郎と一緒に育ち、家出して死んだと聞いた、養娘のお龜であろとは、夢にもしらぬが大きな

○菩提所　檀那寺、卽ち檀家として所屬する寺をいふ。
○文がら　不用となつた手紙・ふみほご。

あやまり。さういふ譯のある事を、養子の身ゆゑ金五郎も、遠慮して人にも明さず、ひとりで苦勞をしてゐたかと、思へば小三が心の中と、金五郎が胸の中が、不便でどうもなりませぬ。ト思ひやりつゝうちなげくに、紫雲もなみだをせきかねて、ともにないてはものがたり、はなしはなみだではかどらず。うばもつぎの間に、金之助をねかしながらのもらひなき、しやうじふすまのあけたても、なみだでしめるばかりなり。扨も白翁は、泣々紫雲に別れをつげ、家に歸りて金五郎の、兩親はじめお雪にも、小三がなり行紫雲の身のうへ、金之助が事までも、くはしく語りける程に、皆もろともに涙にくれて、小三を惜まぬ者もなし。この上はすこしも早く、忘れ紀念の金之助を、引取つて小三の亡跡、ねんごろに弔らはんとて、金五郎にもこのよしを相譚ふに、喜ぶこと限りなく、それより日をえらみ向島より、金之助を乳母もろともに呼びむかへ、お雪の子となしていつくしみ、小三は世になき數には入れども、あらためて先妻と呼稱し、佛事も手厚く行ひければ、金五郎はいへば更なり、紫雲乳母も上なく喜び、家内の者も朝夕に、金之助を掌中の珠と愛し、唯すこやかに成長するを、指をり數へて暮すほどに、早くも小三が百ヶ日に當りければ、金五郎は寺に詣でんとて、金之助を乳母に抱かせ、供の男を引連れて、菩提所へとて出で行きける。あとにお雪は下女と共に、金五郎の部屋をかたづけなどする時、下女あやまつてたばこぼんを打ちかへしけるはずみに、引出しよりさまざまのほぐの出でしまゝに、取入れんとする中に、女の文がらめきしもの出しかば、下女はこれを手にとりあげ、ちひさなこゑにて、下女「オヤオヤ、御新造さんえ、一寸御覧あそばせ、女中のお文がございましたよ。お雪「ドレお見せ、ほんにねえ。オヤ、常のお文だと思つたら、書置の事としてあるから、こりやア小三さんの書置

だよ。わるい物があつたネエ。モウ是れを見たら、中を讀まないのに、胸がいつぱいになつたヨ。下女「オヤ、お書置でございましたかえ。ほんに思ひ出してもお可愛さうでございますネエ。お雪「さうさ、大かた若旦那の事が、いろ〳〵書いてあるだらうから、見たさも見たいが、涙のたね。それにひよつと知れでもしたら、お腹をお立ちなさると惡いから、マア〳〵、よしにしませう。トしまはんとする處へ母親が出來りて、母「お雪ヤ、モウ今に金五郎も歸るだらうヨ。はやくそこを片付ておしまひ。お雪「ハイ、モウしまひました。アノおつかさん、一寸是れを御覽なさい。まことによい手で御座いますねえ。母「ドレ〳〵、オヽ書置の事、アヽ小三どのの書置かエ。またそんなものを見つけ出して。お雪「それでもお杉が見つけましたもの。開いて見ましてもよろしうございませうかネエ。母「不遠慮なれど、あんまり可愛さうだから、ちつとばかり明けて見なナ。アノ杉ヤ、おまへはの、お煎茶の支度をしておくれヨ。下女「ハイ〳〵、かしこまりました。ト下女は勝手へ立て行く。お雪はとはごはふみをひらけば、その文にいはく、

※逢ふは別れの初めとは、かねてより人の身の、定めなきに引くらべ、覺悟致しをり候ひしに、やうやく唯今思ひあたり候まゝ、この世の御名殘に、一筆書き殘しまゐらせ候。まづとや、※御平らかに御くらし被遊候御こと、此の上もなう御よろこび申し上げまゐらせ候。※さてしもわが身事、いやしき※賤のふせ家に生まれ、草葉の露のはかなき身を、御父君の

○逢ふは別れの初め　「白氏文集」に「合者離之始、樂兮憂所ノ伏」とある。
○御平らかに　御平安に、おんやすらかにと同じ。
○さてしも　さてもに同じ。しは强辭。
○賤のふせ家　賤しい家のこと。ふせ家は屋根を地に打伏せたる如き低い家をいふ。

○空おそろし　何となく、そゞろに恐ろし。

御情にて、やうやう人となり候御恩の程、海とも山とも詞には盡しがたく、夫れのみならず親姉までも命を繫ぎ、御惠みの淺からぬ御事、いつの世にか、むくいまゐらせんやうもなく、あまつさへ一日の御恩もおくらず、かへつて御辛勞のみかけ參らせ候この身の罪のふかき事、申し上べくやうも御座なく候。えにしは神のむすばせ給ふ御事にや、もとよりいやしきわが身ながらも、君の御情にあづかり參らせ候より、ひとかたならぬお氣がねのみ遊ばしさふらふも、みな我が身ゆゑと存じ候へば、身もよもあられず、たゞたゞつたなき身をのみ恨み參らせ候。御祖父さま御はじめお雪さまにも、さぞ〳〵わが身を御にくしみ、御うらみ被遊候はゞ、はて〳〵は君の御ためあしからむと、行末のこと存じつゞけ候へば、ながらへをり候ほど、つみをかさぬる思ひにて、後の世さへも空おそろしく、又このうへにかず〳〵の御苦勞かけ參らせんもはかりがたく、せめてはわが身を果し候はゞ、すゑ〳〵君の御心もやすかるべしと、とくより覺悟はきはめ參らせ候へども、女心の淺ましく、御名殘のみをしまれて、けふまでながらへをり候御事、まことに〳〵御はづかしく存じ參らせ候。たゞ〳〵此のうへは、お雪さまと御中よう、御祖父樣御はじめ御兩親さまへも御孝行のほど、ねがひ上げ參らせ候。二ツには姉事は、御存じの通り、まことにたよりなき身のうへ、これまではおよばずながらも、たがひに便りにいたしをり候へども、末々は猶々たよりなき身にさふらへば、何とぞ御見捨てなう御め

をかけ被下候やうねんじ上げまゐらせ候。また金之助事はぐわんせなきわんぱくものにさふらへば、わが身なきのちは、たづねわび、泣きむづかり候はんかと、今より目に見え候やうにて、みれんながら、ふびんにぞんじまゐらせ候。姉方へも昨日まゐり、よそながら、いとまごひのついでに、金之助の事も、よく／＼賴みおき候へば、あのかたへ御あづけ下され、西東もわかり候やうに成り候はば、母なし子とて、人に笑はれぬやう、手ならひなど、よく／＼御をしへ下されべく、かへす／＼も君の御身もち、唯今までのやうなる御こゝろにては、御ためあしく候まゝ、是れより御心を入れかへ、むりなる御酒を御すごしなされず、御宿にのみ御出であそばし、お雪さまにも無理なる御事御まをしなされぬやう、ねがひ上げまゐらせ候。なほ此のうへの御ねがひには、後の世の御事に御座候。百とせの御よはひ過させ給ひて、未來は一つ蓮のうてなこそ、ひとへに願ひ上げまゐらせ候。まことにをさなき時より御したしみ申しあげ、時の間の御別れだに、心うくぞんじさふらふに、かくながき御別れとなり、さかさまなる御ゑかういたゞき候は、いかなるむくい因果にやと、くりかへし、まことにまことに御名殘をしさいはんかたなく、こゝろもみだれさふらうて、申上度き御事は、濱の眞砂の盡きせねど、明けがた近きかねの音に、死出の山路へ心せき、をしき筆とゞめまゐらせ候　かしく。

道しらぬくらきよみぢへ初旅の

○むづかる　子供が不滿足でじれて泣く。すねて泣く。
○百とせの御よはひ過させ　「百歳の後」といふも同じで、人の死後を婉曲にいつたもの。「詩經」唐風に「冬之夜、夏之日、百歳之後、歸于其室」とあるのがそのもと。
○未來は一つ蓮のうてな　「一蓮托生」とも言ひ、死後、諸共に一つ蓮華の上に生れようといふこと。佛經に極樂往生の人は一つ蓮華の上に生れると說いてあるのから出た言葉である。「觀經」に「……同作一生七寶池中蓮華之内」とある。
○心うし　心の中がつらい、やるせない。
○濱の眞砂の盡きせねど　海濱の砂子のやうに數多く言ひ盡せねど、といふ意味。「濱の眞砂」は「古今集」紀貫之の序に「山した水の絕えず、濱の眞砂のかず多くつもりぬれば、今は飛鳥川の瀨になるうらみも聞えず、さざれ石のいはほとなる喜びのみぞあるべき」とある。
○死出の山路　死出の山は冥土にあつて死人が行き過ぎる險阻な山。「地藏十王經」に「閻魔王國境、死天山南門、

亡人重過、‥死而重死、故曰二死天一、從レ此亡人、向二人死山一」とある。

○手もちなし　手持無沙汰。

身は御佛を力にぞして

と讀み終り、お雪も母もろともに、目を泣きはらして顔見あはせ、なみだをそでにふきながら、母「アアヤレヤレ。よしない文を明けて見たゆゑ、悲しさも悲しし、胸がせまつて、大きに涙をこぼしました。金五郎の迷ひしも尤もな筈、美人だとお祖父さんさへ小三が容貌を、おほめなさるほどな生まれつき、容貌は格別な事だが心だてと云ひこの手蹟まで、美しいとも見事とも。約束事とはいふものの、若死をするゆゑに、人にすぐれて生まれて來たのか。金五郎の爲を思ひ、お前に義理を立て通して、名を汚さない貞女の鑑。ほんにお雪や。必ず仇に思ひなさんなヨ。この書置はおまへの爲には、實によい手本だヨ。此の樣に金五郎を大事にして、道を立るが女のたしなみ。金ぼうも麁略にしてはすまないヨ。お雪「ほんにさやうでございます。わたくしが人なみに、よく氣のつくやうな生れなら、このやうな事にはなりますまいに、因果な事でございました。トおや子二人がくやみなき、なみだに袖をしぼりけり。をりから下女がはせ來り、下女「若旦那さまのお歸り。トつぐるに母は奥へゆく　お雪は手早く文をしまひ、泣顔かくして出で迎へば。金五郎はそのかほ見て、金「お雪、どうぞしたのか。涙ぐんだ顔つきだが、ハヽア大きな形をして、又おつかさんにしかられたの。お雪「イヽエ、そんな事ではございませんが。トあと言ひかねしが、手もちなきゆゑ、「アノ、金坊はどう致しましたエ。金「ばヽアと先へ、奥へ行つた。トきものをきかへおびをしめながら、「アヽヤレヤレくたびれたぞ。ほんにお雪、けふはの、寺參りをして、直に向

○心をおかずと　氣兼をせずに。遠慮なく。

島へ行つたら、紫雲さんのお傳言があつたぜ。おめえに金ばうを連て、ちつと泊りがけに來いとヨ。ト いへどもお雪はうつむいて、ハイといつたばかりゆゑ、金五郎はふしんにおもひ、金「ハテ、どうもおれは、おめえのやうすが分らねエが、なにをそんなにふさぐのだらう。ハヽアきこえた、こりやア何だの、おれが小三の寺參りに行たから、それで癪にさはつたのだの。お雪「どういたしてマアそんな事が。金「心になけりやアどういふ譯だか、※心をおかずと言つてきかせな。一生添はうと思ふには、隔てぬでこそ夫婦といふもの。お雪「そのへだてるといふことは、誰がわたくしに教へましたか。金「なんの事たな。こつちはそんな覺えはねえもの。お雪「外の事はともかくも、小三さんの事ばつかりを。金「へだてたといふ事か。お雪「ハイ、それ故にこそこの悲しみ。先からわたくしに、斯々だと、譯をお聞かせなすつたら、あなたにも御苦勞をかけますまいのに。金「なんだナ、又思ひ出したやうに。モウいくらいつてもはじまらねえ。みれんも大概にやめてくんな。お雪「しつこいやうでございますが、何につけ彼につけ、つね〳〵忘るゝ事もなく、みんなわたくしがおろかゆゑだと、この身を恨んで居りますが、けふは取りわけいつもより。金「百ヶ日だけ氣になるか。お雪「またそんなことばつかり。お疑ひが晴れませぬから、申しますからお腹をお立ちあそばしますなヨ。アノ、あなたの御留守のうち、お煙草盆の引出から、小三さんの遺書が出ましたゆゑ、ツイちよつと。金「見たので氣色にさはつたらう。お雪「なんぼおろかなわたくしでも、

〇善智識　人を敎へ導く名僧。

先から深い譯あることを、知つてをつたら、どうでもいたして、あなたのお側へ小三さんを、呼びますことも出來ましたらうに、なぜかくしては下さいました。金「モウどのやうにいつたとて、とてもかへらぬ繰言だ。小三の事をかくして居たは、おれが一生のあやまりだから、堪忍してくんな。年もいかねえおめえにまで、いろ〳〵苦勞させたのも、みんな因縁約束事。この上はいふまでもねえが、金ばうを可愛がつてやつてくんな。ア、何だかひどく鬱いで來た。お雪、おめえいい子だから、茶椀に一盃酒を持つて來てくんな。その中ちよつくり奥へ行つて、皆の機嫌を取て來よう。トはおりをひつかけ奥へゆく。お雪は酒をもち來れば、金五郎も部屋へかへりて、

「お雪、金坊はの、祖父さんの側に媚び付いてゐて、好きなねだり事をしてゐるぜ。

お雪「さやうでございますかエ。お祖父さんにはよいお合手でございます。ハイあなた、御酒を。ト茶わんをぽんにのせさしいだせば、金「オツト有がたし、御苦勞だつた。ト手にとりあげていきもつかず、ぐつと飲むゆゑ、お雪はびつくり、「オヤあなた召あがるのなら、煖めて參ればよう御座いましたネエ。金「なアに冷でもいい。是れで氣色が直つたやうだ。お雪「ほんにその事もあの書置に、いつそ案じて書いて有ましたヨ。金「さうだつけのう。いつでもこのぐい呑では、小三にひどく氣をもませたが、ア、今思へば是れも後悔、モウ〳〵ふつつり止にする。思へば小三はおれが爲の、※善智識でもあるだらう。ト何かにつけて身のおこなひを、あらためるのも小三の貞心、天に通ぜしゆゑにこそ。あつぱれ賢女といひつべし。是れよりして金五郎は、主君へ忠勤怠る事なく、白翁初め兩親に、孝を盡す事日にまし厚く、お雪とも中

○勘氣　勘當。不興。

○雲水に云々　雲水の往來去留定めなきが如くに。

○諸國行脚　行脚とは僧侶が道心修練のために山河を跋渉遍歴すること。

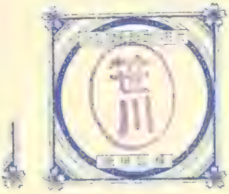
睦ましくして。金之助を愛育し、紫雲の庵りも四季折々に、訪ひ音信れて疎遠せず。忠孝信義全きゆゑに、家内に和順の基をひき、お雪の腹にも子を儲けて、幾千萬代賑はしく、益家富榮ける。かかる目出たき因によりて、金五郎が實の親、文之丞も年來の、勘氣をこの時免されしかば、京師の家には養子をなし、その身は直に東へ下り、親族眷屬に對面して、喜ぶ中に小三の身の果て、聞て悲歎の涙にくれ、頻りに無常を觀ずるものから、終に髮を剃佛門に入りて、身を雲水にまかせつゝ、諸國行脚に出でしとなん。

本書著作權は著者發行者共有

昭和十一年十二月十八日印刷
昭和十一年十二月二十二日發行

評釋江戸文學叢書
洒落本草雙紙集

不許複製



著者 東京市本郷區西片町十番地 笹川種郎

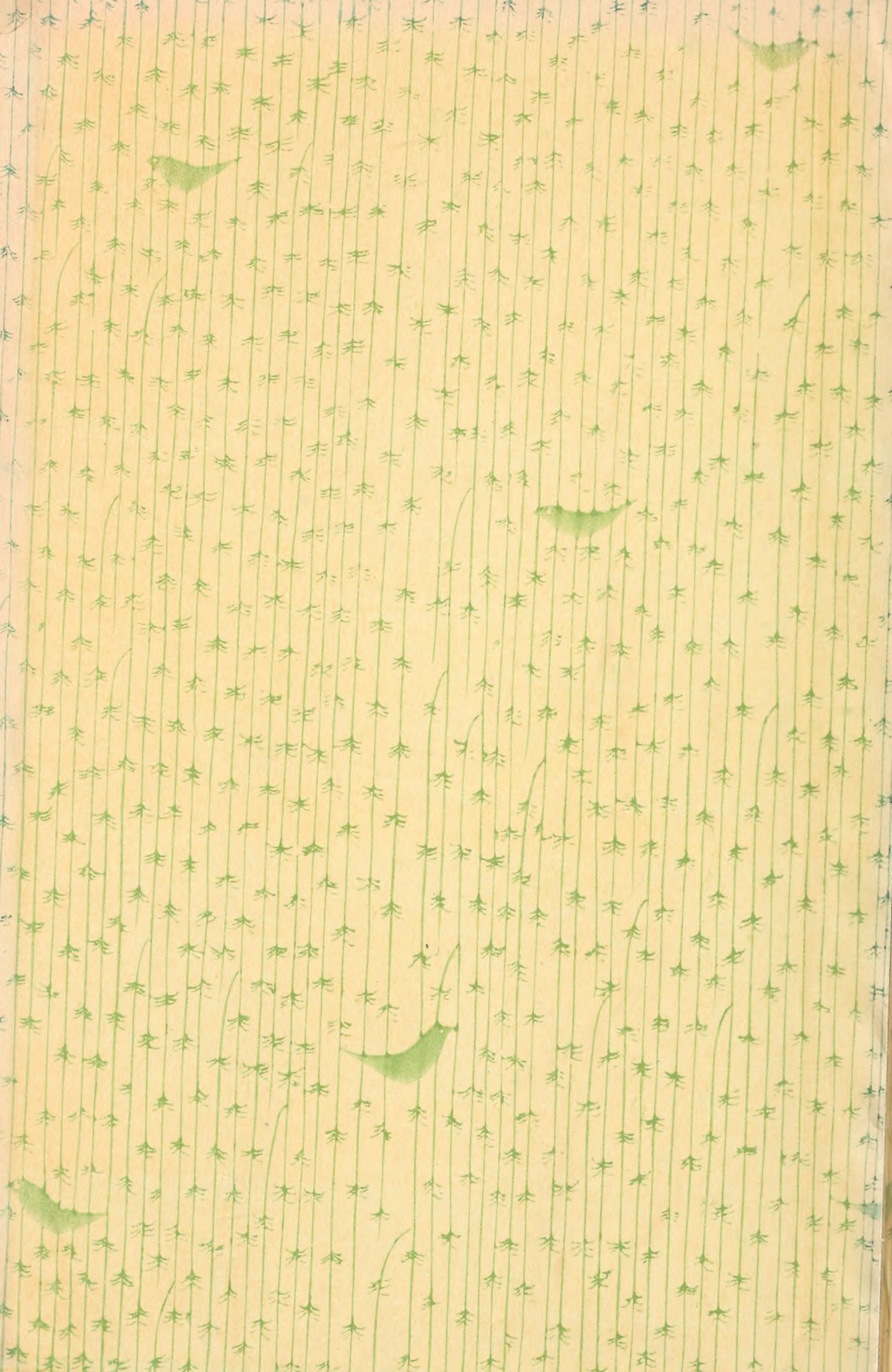
發行者 東京市小石川區音羽町三丁目十九番地 野間清治

印刷者 東京市本所區厩橋一丁目二十七番地ノ二 井上源之丞

印刷所 東京市本所區厩橋一丁目二十七番地ノ二 凸版印刷株式會社本所分工場

發行所 東京市小石川區音羽町三丁目十九番地 大日本雄辯會講談社
（振替東京三九三〇番）
電話牛込(34)代表 五三〇〇番 六一〇〇番 六二〇五番

（天海地製本）



EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02992 0063